

大丈夫だ、問題しかないから。—Blue trajectory— <1st
Season>

白鷺 葵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類に革新者が現れる、4年以上も前のこと。

世界には、自分の記憶や経験を共有させる力を持つ、共有者《コーヴァレンター》と呼ばれる人々がいた。

世界には、自身がまったく見たこと経験したことのない記憶および経験や知識——虚憶《きよおく》と呼ばれるものを持ってしまった人々がいた。

世界には、共有者《コーヴァレンター》の能力と虚憶《きよおく》の両方を持つ存在がいた。

これは、ユニオンに所属するとある軍人——刃金《はがね》空護《くろうご》／クローゴ・ハガネを中心とした群像劇。

果たして、世界の明日はどこにあるのか。

『パンジャンドラムがどの方向に転がるか』を予測できたら、多分見つけられそうである。

Q. こんな話で大丈夫か？

A. 大丈夫だ、この話はガンダム00の二次創作小説だから。

A. 大丈夫だ、この話はオリジナル要素満載のクロスオーバーものだから。

A. 大丈夫だ、この話の原材料は『ノリ・ネタ・勢い』と『好奇心』だから。

A. 大丈夫だ、この話は刹那がTSしているから。

A. 大丈夫だ、この話はグラハムとTS刹那が最終的にくつつくから。

A. 大丈夫だ、この話はギャグ主体だから。

A. 大丈夫だ、この話はキャラ崩壊及びキャラ改変しているから。

A. 大丈夫だ、この話はゲストキャラも多数いるから。

A. 大丈夫だ、この話は本編開始前からスタートしているから。

A. 大丈夫だ、皆まで言わなくていいから。

A. 大丈夫だ、問題しかないから。

こんな話で大丈夫な方は、どうぞよろしくお願いします。

2015. 1. 4 完結。2ndシーズン編である『大丈夫だ、問題しかないから。 — Toward sky—』もよろしくお願いします。

【追記】

・Pixivにて、この作品と世界観およびキャラクターの一部を共有、あるいは登場するという設定のお話を投稿しています。別の名前で投稿していますので、盗作ではありません。

・この面々がCOCをプレイするという仮想卓セッションおよび関連SS、『箱庭と賽子』をハーメルンで連載しています。

2023/7/29 リメイク版始動

<https://syosetu.org/novel/3219>

目次

大丈夫だ、まだ平和だから。

0.	彼の仲間たちとの平穩	1
1.	歌い手はじめました	18
2.	トリオ、プラスワン	39
3.	ビギニング・エンカウントゥその気なし編	58
4.	圧倒的な想像力不足	82
幕間:	チーム・トリニティと田舎生活	107

大丈夫だ、これでも平和だから。

5.	愛すべき喧騒と日常	124
6.	シミュレーター・インフレーション	145
幕間:	リボンズ・アルマークの今昔語	168
7.	確執―きょうだい―	186
8.	前略、清水より	206
9.	幸せな時間	231
10.	前夜祭―よあけまえ―	258

第1回現状確認

【大丈夫だ、まだ平和だから】『0. 彼の仲間たちとの平穩』～【大丈夫だ、これでも平和だから】『10. 前夜祭―よあけまえ―』時点の中心オリキャラまとめ

大丈夫だ、1stシーズンに入ったから。

11.	ビギニング・エンカウントゥ天使降臨編	284
幕間:	刹那・F・セイエイおよびソラン・イブラヒム	311
12.	ビギニング・エンカウントゥブレイクトリガー編	330
13.	ジェネレーション・ブレイク	353

14. 休暇と言う名の戦場

374

15. 空を翔る者たち

395

幕間 絹江・クロスロードのモテ期到来疑惑+α

417

16. 兵どもの大奮闘

435

17. 嵐の前のタイフーン

457

18. 呉越同舟―きょうどうせんせん―

480

19. OPEN A BOX

502

幕間 迷い続ける人々の思い

524

20. 猶予期間―モラトリアム―

547

21. 確信

570

22. 世界は愛に満ちている

593

第2回現状確認

【大丈夫だ、1stシーズンに入ったから】『11. ビギニング・エンカウト〜天使降臨編〜』『22. 世界は愛に満ちている』時点の中心オリキャラまとめ

616

大丈夫だ、1stシーズンの中盤だから。

23. 小康状態

622

幕間 とある喫茶店利用者の雑談

643

24. 流れる星

661

25. 蠢く世界

683

26. BOUNDARIES OF HUMAN

705

27. 帰ってくれ蒼い海

729

28. 焼野原広し

750

29. 悪意と作為、時々善意(?)

773

30. 軍人と天上人と監視者と、星屑の夢を見る者たち

797

3 1. 砂上の楼閣 | 824

3 2. 機械は悪意を抱くか | 845

3 3. 憧憬—あこがれ— | 867

3 4. 楽しい職場です | 887

幕間. 女たちは考える | 907

3 5. 戦場へ | 927

3 6. 大混戦、大量発生、大問題 | 949

第3回現状確認

【大丈夫だ、1stシーズンの中盤だから】『23. 小康状態』〈

『36. 大混戦、大量発生、大問題』時点の中心オリキャラまとめ

972

大丈夫だ、1stシーズンの終盤に突入したから

幕間. ノブレス・アムとアイデア・クピディタース、あるいは混沌地

帯プロトレマイオス | 979

3 7. 一難去ったら | 1001

3 8. 崩壊への序曲 | 1022

3 9. ワールドブレイク | 1046

幕間. ノブレス・アムとチームトリニティ、もしくはテオ・マイヤー

の厄災 | 1069

4 0. 加速する世界と、抗う人と | 1091

4 1. 目覚めの日 | 1113

4 2. 転がるように日々は過ぎて | 1136

幕間. ルイス・ハレヴィ、あるいは絹江・クロスロードの退場

1156

4 3. それぞれの、決意のとき | 1179

4 4. さよならまでの足音

幕間・刹那・F・セイエイたちが見た『永遠《ゆめ》』

幕間・アオミ・ハガネのテコ入れと、それに伴う影響

4 5. 未来に託した祈り

4 6. 明日へ託す約束

第4回現状確認

【大丈夫だ、1stシーズンの終盤に突入したから】『幕間・ノブレス・アムとイデア・クピディタース、あるいは混沌地帯プロレマイオス』〜『46. 明日へ託す約束』時点の中心オリキャラまとめ

1301

大丈夫だ、これで1stシーズンが完結だから。

4 7. 行く者、見送る者、去る者、還る者

4 8. 決戦前夜　〜『還る』ために〜

幕間・名もなき者の戦場、あるいは星屑の夢を見る若者たち

1350

4 9. 決戦直前〜『未来《あした》』のために〜

5 0. 命の色

5 1. 戦場　―しゅらば―

5 2. 想いの行方

5 3. 空の護り手

5 4. This concludes……?　―

1st編 最終確認

【大丈夫だ、これで1stシーズンが完結だから】『47. 行く者、見送る者、去る者、還る者』〜『54. This conclude s……?』までの中心オリキャラまとめ

1506

1199

1221

1242

1260

1282

1309

1309

1309

1309

1309

1309

1309

1309

1309

1309

1309

1309

1309

1309

1309

1309

1309

1309

1309

1309

『大丈夫だ、問題しかないから。』 — Blue trajectory
y | < 1st Season > | における00メイン勢のまとめ

(このお話の主要人物のみ)

1stシーズン編・ラストエピソード

EX | 1. 赤き星の子

EX | 2. 『ゼロ』が齎すモノ

EX | 3. 遠い宇宙の果て

EX | 4. 夜明けの鐘はまだ鳴らない

お知らせ

リメイク版開始のお知らせ

リメイク版・1stシーズン編完結のお知らせ

2ndシーズン編リメイク作品開始のお知らせ

リメイク前の連載地点に到達したお知らせ

1603159415761568

1557154415311520

1514

大丈夫だ、まだ平和だから。
0. 彼の仲間たちとの平穩

巨大な隕石の上で、様々な機体が戦いを繰り広げていた。

「風神の次に、雷神と日輪の使いが続く！ クーゴー！」
「任せろ、グラハム！」

ゼ□□が搭乗するMS——騎士をモチーフにした機体に続き、クーゴとグラハムのMSが攻撃を仕掛けた。グラハムが駆るナイトブルーの可変機体は、相変わらず無茶苦茶な機動力と変形を見せてくれる。クーゴもグラハムを援護し、撃ち漏らしを掃討した。

敵機撃墜およびパイロットの脱出を確認し、新手に挑む。最も、最近の役割は専ら『機体の無力化』や『撃ち漏らしの掃討およびドメ』になりつつある。グラハムと□□スが前線での切り込み隊長役を買って出るためだ。

「秘密機関の風神雷神」を自称するだけあって、□ク□とグラハムはいいコンビネーションだ。共に戦ってきたというのは伊達ではない。クーゴは一時期『彼らと共に、再び戦う未来を手にするため』に袂を分かつていたが、ブランクなんて関係なかった。

ダメージを受けながらも尚、兵たちは撤退しようとしなない。捨て身覚悟でグラハムに突っ込んでくる。

「っ、グラハム下がれ！」

両者に割り込むようにして、自分は愛機を駆った。クーゴのMSは2本のブレードで、蘇芳色の量産機が振り下ろしたサーベルを受け止めた。

敵機体にあるコックピットの場所は把握しているため、あえて関係ない場所を狙う。攻撃を切り払い、即座に突きに転じた。剣道におけ

る二刀流の動きを戦術に組み込んだ近接用のコンバットパターン。手ごたえを感じて離れれば機体は爆発した。きわどかったが、パイロットは脱出できたらしい。それを確認した後、すぐさまグラハムの駆る指揮官機に視線を戻す。彼の機体に損傷はない。ウインドウ越しから感謝の言葉を告げられ、ほつと息を吐いた。

「戦況は？」

「相変わらず混戦状態だ。とくに赤い彗星同士が」

グラハムの問いに答え、クーゴは戦場を見回した。相変わらず、ジ
■軍と■—B■の戦いは続いている。その中でも特にぶつかり合いが激しいのは、2機の赤い機体。

外観は兄弟のように似通っているが、細かいところを見比べるとデザインも性能も違うことが分かる。機体と同じく、搭乗するパイロットの外観もよく似ていた。

片や、世界を救うため、一時的に自分たちの敵になった壮年の男。片や、壮年の男になりきるために生み出され、巨大隕石を落とそうとする仮面の男。

ビームサーベル同士が火花を散らしている。両者とも、パイロットとしての腕前は互角だ。勝利を掴めるか否かは、パイロットの想いや覚悟にかかっている。

これは自分の個人的な意見だが、想いや覚悟は壮年の男のほうが上だ。破界や再世の戦い、あるいは友人や本人が語っていた「それ以前」の戦いで、様々な人々の想いに触れてきたためである。

心の中に虚無を抱える仮面の男に、彼が負けるはずがない。共に戦ってきた仲間ゆえに知っている。だからこそ自分たちは、彼の邪魔をしようとする者すべてを掃討するのみ。

そして勝敗は決した。負けたのは、仮面の男が駆る機体。

奴が搭乗している機体はぼろぼろだ。片足は第一関節から、腕は肩からちぎれ飛んでいる。機体の至るところから火花が散っており、戦闘続行に耐えられないことは明らかだった。

しかし、何を思ったのか、赤い機体は隕石の中心へと飛んでいく。機体が破損しているというのに、流星を思わせる勢いだ。壮年の男も、仮面の男の後を追った。満身創痍の赤い機体は、損傷の少ない赤い彗星に抑え込まれる。

「このままお前は、私と時空修復をやってもらう！」

「私が同意すると思うか、□ヤ□？ 私は人類の未来に対する覚悟がある。そう……この生命を投げ出すだけの」

仮面の男が駆る機体の動きがおかしい。

「奴はまさか……！」

「自爆する気か！」

■——■L■■全体の切り込み役として戦場を飛び回っていた2人の革新者が、はつとしたように叫んだ。

2つの特異点が揃わなければ、時空修復は失敗する。奴はそこまでして、地球を滅ぼしたいのだろうか。

「なんとという執念だ……！」

グラハムが苦々しい表情で赤い機体を睨む。しかしクーゴにとって、あの手の執念は身に覚えがあった。

「仮面をつけてた頃のお前みたいだな」

「こんなときまで手厳しくなくてもいいじゃないか！」

身に覚えのありすぎるグラハムが即座に反応する。巻き添えで、仮面をつけていた時期があったゼ□□は閉口してしまった。

後で□ク□をフォローしておかなくては。ぎゃんぎゃん騒ぐグラハムの声を右から左へ受け流し、クーゴはそんなことを考えた。

「日本人は空気が読めると聞いた！　なのに!!」

「茶番はそこまで。来るぞ」

クーゴがグラハムを制止したのと同じタイミングで、ガ□□□□が現れた。

どうやら、□□アがZ―■■■■を敵に回し巨大隕石を落とすなんて真似に出た理由は、□ド□□□の入れ知恵だったらしい。

いいや、奴が入れ知恵する以前から、シ□□は特異点が2つではないかと薄々感づいていたようだった。流星は■■ユ■■■■といったところか。

双子座の機体を駆る少年と□□アが息巻く。□□ラ□□は心底拍子抜けしたようだが、何やら悪い笑みを浮かべる。

「だったら、ここのうのはどう?」

奴が笑った。次の瞬間、隕石が恐ろしい勢いで加速する。

これが落ちたら、時空修復どころか地球が滅亡してしまう。そこまでして、奴は地球を滅ぼしたいのだろうか。

白い機体を駆る者の中で最年長であるア□□が、■■■■―■■艦長の名を呼んだ。彼は頷き、■■―■■■■Eの全員に連絡する。

「……すまんが、みんなの生命をくれ……!」

重々しく響く艦長の声は何を意味しているか、クーゴはすぐにわかった。□ク□とグラハムらとウィンドウ越しに顔を見合わせ、頷く。

□ミ□□が了解の返事をし、隕石を受け止めるために翔る。彼らの後続き、クーゴたちも隕石の下へと降りた。

自分たち■■―■■L■■■や人類は、決して仮面の男や□□ラ□□の思い通りにならない。隕石の元へ集まる機体の群れを見た□□□□イ□

と仮面の男が息をのむ。

まさか、と奴らの顔が問うていた。

そのまさかだ、と自分たちは返答する。

地球に落下する巨大隕石を、Z―■■■■■■全員で押し返すのだ。

「無駄だ、■■―B■■■■。大特異点は落ちるよ」

「そんなの、やってみなけりやわからないだろー！」

運命の名を冠した白い機体を駆る少年が叫んだ。それを皮切りに、仲間たちは隕石を押し返す。文字通り、魂を燃やす勢いでだ。

力の摩擦を受けた隕石と自分たちの機体が赤く発光する。■■―■■

L■■■■の仲間たちは諦めてなどいない。伊達に、多元歴の地球に攻め込んできた侵略者を撃退してきたわけではないのだ。

しかし、待てど暮らせど時空修復が始まる気配はない。しびれを切らした□ム□が□ヤ□に訊ねるが、まだ準備が進まないようだ。

仮面の男曰く『特異点同士が「時空修復を成したい」という意思がない限り、修復は不可能』だというのだ。このまま隕石が落ちれば自分も死ぬというのに、奴はそんなものなど興味がないと言いきった。

なんて奴だ、とクーゴは思う。姿かたちは確かに人であるのに、男の言動には人間らしさなど皆無だった。無を意味する記号を背負う少年が息を飲む。自由の名を冠した白い機体を駆る青年が怒りを見せるが、仮面の男は歯牙にもかけない。

むしろ、己に与えられた役目を果たすために死ぬつもりでいる。そんなの、あまりにも空しすぎるではないか。仮面の男が時空修復に同意しなければ、万事休すである。

次の瞬間、シ□□が仮面の男の名を呼んだ。強い脳波を感じ取る。確か、彼らのMSには■■■■フレ■■■■が装備されていた。

□ヤ□はサイ■■■■■■■■の共振現象を利用して、仮面の男の意志を押し殺そうとしているのだ。

『聞こえるかい？ ミスター赤い彗星』

□ラ□ア博士からの通信が入る。彼女はシャ□に頼まれ、この日のために準備を進めてきていたというのだ。

『こちら□□ラン・□□だ。私設部隊組織から提供されたドライヴにより粒子の散布は終了した』

『これで各コロニーの間はつながったも同然だよ！』

裏方で準備を進めていた面々からの通信に、皆が驚きの声を上げる。ドライヴの粒子を使って人の意識をつなげるなんて、さすがに無理があった。

提供元に所属するマイスターたちが心配するが、ト□イ□博士笑う。『人の心をつなぐものはない』という言葉に、□ル□がはっとしたように顔を上げた。博士曰く、再世事変で醜態をさらした男に協力させたらしい。

自分たちと同行していたロボットも『博士に脅されて秘蔵品を提供した』と力強いエールを送ってきた。最後の隠し玉として彼女が示したのは、地球を焦土と化す力を持つ火星のZ■E。再世の戦いにおける最終決戦場だ。

集めた意志は、大特異点である隕石へと送られる。ここからが正念場だ。隕石を押し戻しながら、クーゴは仲間たちを見回す。

「□□！」

「わかっている！」

緑の粒子が吹き上がる。人々の意識をつなぐ空間が広がった。

それを皮切りに、□□□が仲間たちへと指示を出す。名前を呼ばれた面々が頷き、次々とシステムが起動されていく。

「バ□ー□、腕に掴まれ！ お前の機体を支える！」

「カ□□ユ君は私の機体につかまって！」

「僕の機体に搭載されているフィールドで壁を作ります！ その間なら移動できるはずですよ！」

「こちらもシステムを起動させる！」

「ビビ□君！」「わかっています！ 全開で行きます！」

「こちらのシステムで状況を分析し、最適なルートを算出する！」

「データをこちらにも回せ。お前の計算と俺の機体のシステムを組み合わせれば、さらに精度が上がるはずだ」

名前を呼ばれなかった面々も、仲間たちを支えるためにシステムを起動させていく。文字通りの総力戦だ。

Z―■■■■の面々に触発されたのか、■才■軍のMSたちも隕石を支えるためにやってくる。今このとき、彼らは理解したのだろう。シ□アが何を成そうとしていたのか。

部下たちの温かな言葉に、□□アは申し訳なさそうに目を伏せる。彼の腹心であり、彼の無茶を止めるのが役目だと自負する青年も力強く笑い返していた。

彼らの姿を見ていると胸が熱くなる。クーゴはコックピットを仰いだ。隕石の表面が視界を占めていたが、視界の切れ目からわずかに宇宙が見える。自分の背中には地球があるのだと考えると、負けていられない。

人々の心が大特異点へと集まっていく。このチャンスを逃すまいとするかのように、□ム□が後輩のニユ■■■■たちに呼びかけた。後輩たちも頷き、サイ■■■■を發揮してシ□アを援護する。

次の瞬間、大特異点である隕石の周囲に緑の光が漂い始めた。光に触れたとき、たくさんの声が耳を打つ。頑張れ、負けるな、未来を、明日を――聞いているだけで力がみなぎってきた。

(これが、すべての人々の意志か)

クーゴは思わず表情を緩めた。光に触れていると、隕石が落ちてく

るかもしれないという恐怖なんて感じない。

むしろ温かくて安心する。同時に、この温かさが様々な奇跡を起こしてきたのだ。

「だが、この温かさを持った人間が感情を制御しきれず、自滅の道を歩んでいる……!」

仮面の男は尚も抵抗する。しかし。

「わかってるよ! だから、世界に人の心を見せなけりやならないんだろ!」

ア□□が語気を強めて叫ぶ。より一層、緑色の光が眩く輝いた気がした。

「感じる。これが人の心の光……未来を望む力だ!」

「ぐっ!!」

「ララア! 私を……世界を導いてくれっ!!」

シャ□の叫びに呼応するように、彼の機体が白い光に包まれる。

まるで、彼の機体の背中に白鳥の羽が生えたかのようだ。

『大佐……』

女性が微笑む気配がしたと思った瞬間、この場は緑色の光に飲み込まれた。



「あああああああああああああうわあああああああああああああああああああああああああ!!」

「これが、人の心の光……!」

「見える、見えるぞ! ササビーの背中に、白鳥の羽がアアアア!!」
「よく頑張った。みんな、よく頑張ったよ……!」

誰も彼も、涙と鼻水でぐちゃぐちゃだ。

歌が終わったカラオケボックス内は、男たちの嗚咽で満たされていた。1回歌っただけでこの有様だと先が思いやられる。

この面々の中に、目的を覚えている人間がどれ程いるだろう。刃金空護——クーゴ・ハガネは、泣きじやくる同僚と部下と友人の顔を見回した。

「……ところで、さっきの歌で見た『ヴィジョン』で分かったことを、忘れないうちにまとめておくんじやなかったのか?」

ヴィジョンとは、あるとき突然、人間の頭に浮かび上がる画像および映像のことを指している。簡単にたとえるならば、とあるゲームに出てくる『視界ジャック』とよく似た現象のようだった。といっても、視界の共有だけでは終わらないのだが。

しかし、『ヴィジョンを見る』という現象を発生させるためには、ヴィジョンを見せる力を持つ者の、ある一定の行動³を介する必要がある。例としては、クーゴの「歌う」³という行為が挙げられる。『ヴィジョン』で見れる具体例は「ヴィジョン発信者の記憶および経験」や「思考回路の内容」⁴であることが多かった。

最近ではヴィジョン現象を使った意志疎通やシンクロ等の研究も行われている。特に、デザインベイビーの分野などで期待されているらしい。ヴィジョンを他者に「見せる」ことができる人間は共有者⁵と呼ばれており、これからもっと増えていくだろう。

コーヴァレンターは2270年代に入って突如現れ始めた。能力が発現する年齢や人種はまちまちで、胎児から90歳を超えた老人までの幅広さを持つ。いつなるとき、誰でも発現しておかしくない能力なのだ。

しかし、この能力を発現する人間の中にも特殊なケースがある。

自身がまったく見たこと経験したことのない記憶および経験や知識を、本人がそうと知らぬまま得てしまうという人間がいる。『身に覚えのない記憶や学んだ覚えのない知識を有するという現象』は虚憶きよおくと呼ばれていた。

虚憶きよおくは、第三者が知覚することはできない。あくまでも、記憶を保持する本人だけが虚憶きよおくの恩恵を受けられるのだ。おまけに、虚憶きよおくの大半が突拍子もないものが多かったため、コーヴァレンター能力が発現される2270年以前に虚憶きよおく関連の話をする人間は『精神障害者』として片付けられていた。

クーゴの虚憶きよおくは、『異世界同士が何らかの出来事で重なってしまい、そこで出会った人々が愛機ロボットを駆り、様々な侵略者から地球を守る』世界のものだった。虚憶きよおくでは『多元世界』と呼ばれるた『そこ』のテクノロジーは、この世界——2300年代の現在より進んでいる。

この虚憶きよおくから情報を引き出すことができれば、自分たちの技術発展に使えるのではないか——そう判断したユニオンの上層部は、クーゴのコーヴァレンター能力と相性が良かったグラハム・エーカーとビリー・カタギリを中心とした人間たちで、『多元世界技術解析および実験チーム』を結成したのである。

といっても、このチームに選ばれた面々はクーゴと付き合いの深い者たちばかりだ。年下の友人であるグラハム、年上の友人であるビリー、かねてから親交のあった部下ハワードやダリルたちで構成されている。コーヴァレンター能力は、発信者が心を許している相手だと鮮明に残りやすい。それは、虚憶きよおくのヴィジョン共有にも当てはまるそうだ。

「あ」

“多元世界技術解析および実験チーム”の面々は、慌てて端末を操作をする。しかしもう手遅れだ。

「あれだ。ジオなんとか帝国の量産型MS！ 名前何だっけ？」

「ヴァルキリーって何のこと指してたんだろう。くそ、この単語以外何も思い出せない……」

「何の共振現象でしたっけ。さ、さい……ああもう！ 何で出てこないんだ!？」

「ララアって誰ですか？」

歌が終わって数十秒。歌っている間中叫び散らしていた連中が、自分が叫んだ言葉の意味についてうんうん唸っている。

大半の面々が、単語や人名の一部を覚えているだけだ。簡潔な説明文を覚えていられれば御の字である。

「赤い彗星、サイコフレーム、世界平和のための秘密組織『プリペーター』、火消しのウインド、日本神話における太陽神の使いが『鳥』、ライトニング……」

単語および簡易説明文の数と正確性では、グラハムの右に出るものはない。

「大特異点、時の流れが止まることで永遠に未来が訪れないという『時の牢獄』、仮面、ブシドー……ぐっ、頭が!」

グラハムが頭を抱えて唸る。どうやら、ヴィジョンを通して見た虚憶きよわくに振り回されている様子だった。

こいつも悩むことがあるんだな、と、クーゴはひっそり失礼なことを考える。本人に知られたら、間違いなくむくれるだろう。

「常人とかけ離れた強い脳波を発する人間のことで、サイコミユ兵器を動かしたり、空間認識能力が高かったり、予知能力なんかが使えたりするやつ。一言で言い表す言葉があったはずなんだけど、何だったかな？」

人によつては『物の名前は覚えていないが、どんなものなのか説明できる』者もいた。この中では、ビリーがそれに該当する。

虚憶きよわくをヴィジョンで共有させる場合、ヴィジョンの内容を正確に覚えていられるのは“コーヴァレンター能力が発動している間”らしい。

時間が経過すればするほど、ヴィジョンで共有した虚憶きよわくの内容が薄れていく。クーゴの虚憶きよわくは、持つて最長10分弱が限界だ。

「ハガネ中尉も、覚えてることがあつたら書きだしてください」

「ああ。多分、俺が一番長く覚えていられる人間だろうからな」

ハワードの言葉に従い、クーゴは椅子に座つて端末を起動した。覚えていた単語や対象物の説明を打ち込んでみる。

虚憶きよわくの持ち主であるクーゴ自身は、コーヴァレンター能力でヴィジョンを共有した第三者よりも長く内容を覚えていられた。と言っても、15分持てばいい方だったが。

あらかたその作業を終えた面々は、互いの端末にその情報を送信し合つて情報を共有する。情報を組み合わせて整理するのは、今回は後回しだ。

「これくらいか。クーゴ、頼むぞ」

「お前、大丈夫なのか？ ブシドーつて言った瞬間、辛そうな顔をしていたが」

「大丈夫だ、問題ない」

グラハムがクーゴを見て頷く。他の面々も端末を打ち込む準備や

録音機材の確認を終えたらしい。「もう一度歌え」と目で合図する。

クーゴは頷き、カラオケ機材に番号を打ち込んだ。落ち着きながらも洒落た感じのイントロが流れ始める。テレビ画面には曲のタイトルが表示された。

歌の出だしに合わせて声を出す。旋律に乗って、歌を歌う。

脳裏に浮かんだのは、巨大な隕石での最終決戦。2つの赤い彗星が対面し、異なる目的のために火花を散らしていた。世界を超えて組織された遊撃部隊の面々は、人類の革新を信じた壮年の男と共に仮面の男へと挑む。

時間の流れが停止した永遠の牢獄などまっぴらごめんだ。自分たちはこんな時獄じじくの中で、永遠にまどろむことなど認められない。その想いは仮面の男の虚無を打ち砕いた。けれども奴は諦めない。いがみ合う双子を宿す侵略者による乱入もあり、隕石は地球めがけて落下する。

遊撃部隊は諦めなかった。彼らを応援する人々も、地球で生きる人々も、明日を手にしたいと願っていた。文字通りの総力戦。人の心の光が満ち溢れ、不可能を可能にしていく。その果てにある奇跡を、人々は目撃するのだ。

「シャア、こんなに綺麗になつて……！ 人類の革新を信じたアンタは、フロントアルなんかに負けるはずがない！」

「せめてハマーンには話しておけよ。こじれにこじれて面倒なことになつてるよ。激おこぶんぶん丸だよ」

「そうだ！ たかが石ころ一つ、押し出してやれ！」

「みんな頑張れ。文字通りの総力戦だ！」

「地上で待つてる人々の想いが伝わってくる……」

「ふふ。……いや、まさかキミと共に戦える日が来るとは。その喜びを、改めて噛みしめていただけたよ。——さあ行くぞ！」

曲が終わった。興奮冷めやらぬ面々が余韻に浸っている。その中で一際目立つのはグラハムだ。

虚憶きよわくのヴィジョンを見ているときのグラハムは、戦場を翔とっているときのようにテンションが高くなる。時折クーゴに指示を出したり、誰かの援護に加わる旨を叫んでいることもあった。まるで、虚憶きよわくの中でも戦っているかのように。

ただ、時折、「人としてその発言はどうなんだ」と首を傾げなくなるようなことを口走ったりする。場合によっては、その相手に対して告白まがいのことを叫ぶのだ。『キミの視線を釘付けにする』だの『乙女座の私には、センチメンタリズムを感じずにはいられない』だのと叫んでいたか。

別な曲を歌ったときは『意中の相手の代わりというわけではないが、私と1曲付き合ってもらおう!』と、ある種の浮気宣言らしきことを口走っていた。狂気と激情に駆られたグラハムを見たのは、このときが初めてである。思わず『アレ』であれば何でもいいのか』と訊ねたくなった。

余韻に浸るのに夢中になった面々は、端末に内容を記録することを忘れている。

かくいう自分も、半ばそれに近い状態だった。

「ところで、メモ取ったか？」

「あ」

クーゴの指摘に、面々は慌あわてて情報をまとめていく。

ダリルが唸り、ハワードが額ぬかに手を当て、他の部下たちが己自身の言葉に首を傾げ、ビリーが端末をいじり、グラハムが「ブシドー」という単語に頭を抱える。

そんな彼らを眺めながら、クーゴは端末に虚憶きよわくで見た情報を覚えていく限り記録していく。これが、軍事以外のささやかな日常光景。他にも穏やかな時間はあるが、クーゴはこの時間を気に入っていた。

(この時間が、長く続けばいいんだがな)

端末をいじりながら、クーゴは口元に微笑を浮かべた。こうしている面々を見ると、この光景がひどく愛おしく感じるのだ。同時に、砂上の楼閣という言葉が脳裏をちらつく。

和やかで平穏な光景だというのに、薄氷の上を歩くような心地になったのはなぜだろう。クーゴが己の心情に首を傾げたとき、頭の奥底に鋭い痛みが走った。

断末魔の悲鳴。仲間の乗った機体が無残に爆ぜる。もがれた翼、割れた眼鏡、血しぶき。

我が物顔で「アレ」が舞う。戦場を蹂躪するのは、天使を思わせるような白のMSだ。

■■■■ファイターとしての矜持も、大切な部下たちも、友人の心も、自分たちが愛した空も、すべて「アレ」が奪っていった。

年下の友は、「アレ」を追いかけるために何もかもを捨ててしまった。その権化が、仮面の武士。

年上の友は、裏切られた悲しみから走り出してしまった。その権化が、殺戮に特化した機械人形オートマトン。

だめだ。そんなのはだめだ。そんなの、絶対にだめだ。だから――

「クーゴ、顔色が悪いぞ」

グラハムに名前を呼ばれ、はっとした。きよとんとした表情を浮かべる金髪碧眼の青年は、妙に子どもっぽい。

「今、虚憶きよおくが見えた。……内容があまりにも凄惨だったから、少し、精神的にキツくてな」

「なんと！ それは一大事だ。今日はここで切り上げた方がよいのではないか？」

「心配するな、大丈夫だから。今見えたのも、覚えてる限り打ち込んでおく。何かの役に立つかもしれないら」

大仰に驚き心配するグラハムを制し、クーゴは端末を操作する。思

い出すのが正直苦痛であるが、断念するわけにはいかない。この虚憶きよおくが、誰かの明日を救うことに繋がるかもしれないのだ。突き動かされるようにクーゴは内容を記録していく。

打ち込めるだけ打ち込んで、クーゴは次の曲を歌うために準備をした。これから更に喉を酷使するのだ、休憩や喉の痛みを抑える処置はしておかなければ。持参してきた自家製コーディアルを炭酸水で割ったものを飲み干す。イギリスから遊びに来た叔母が作り方を教えてくれたものだった。

さっぱりとしたレモンの風味と心地よいエルダーフラワーの香りを楽しんだ後、クーゴは再び番号を打ち込んだ。周囲に目くばせすれば、仲間たちは頷く。マイクを持って立ち上がり、クーゴは再び歌い始める。

そうして今日もまた、日常は過ぎていった。



このときのクーゴ・ハガネはまだ知らなかった。

「私はキミが好きだアアア！ キミが、欲しいイイイイイイ!!」

「貴様は歪んでいる……!!」

「やめないか、グラハム。彼女が困っているだろう」

友人の、突拍子のない恋愛劇に巻き込まれることを。

「貴方、『グラハムフィンガー』の人ですよね？」

「僕は、正義の味方を助ける道しるべになりたかったんです。例えるなら……JUDA社長、あるいは一番隊の隊長みたいな」

自分と同じ《歌によってヴィジョンを共有させる共有者^{コーヴァレンター}》であり、自分とは違う虚憶^{きよおく}を有する人々と出会うことを。

『来るべき対話のときに人の心が荒んでいたら、どうしようもないでしょ？ だから歌なのよ』

『たとえば貴方がうすらハゲになっても、皺くちやになっても、この想いは変わらない』

『——愛しているわ、イオリア』

己の能力に、数百年越しの《願い》が込められていたことを。

クーゴ・ハガネの災難が始まるまで、もう少し時間がかかるようだ。

1. 歌い手はじめました

クーゴとグラハムの愛専用カスタムフラッグ機が、数分間目を離した隙になくなってた。

何を言っているのかわからないと思うが、クーゴたちも何が起こったのか全然わからない。

愕然と佇む自分の背中を叩いたのは、00ク■タと呼ばれる白い機体を操っていた女性だった。『彼女』は、わけのわからぬ世界に放り出されて四面楚歌状態だったクーゴとグラハムを助け、この部隊に迎え入れるよう進言してくれた恩人でもある。

女性の表情も晴れない。何とも言い難い表情を浮かべて、『彼女』はふるふる首を振った。どうやら、『彼女』が駆っていた愛機も被害にあつたらしい。指揮官殿は一体何を考えているのだろう。いくらパイロットがいても、機体がなければ意味がないというのに。

グラハムはぼんやりと格納庫を見上げていたが、変わらぬ現実打ちのめされてしまったようだ。愛機の名前を呼びながら、がつくりと膝をつく。気のせいではなければ、彼の肩がプルプルと震えていた。

「泣いてるのか？」

「泣いてなどいない！」

キツ！ とグラハムはクーゴを睨む。普段は彼を見上げているのだが、彼を見下ろす構図は珍しかった。

言葉とは裏腹に、グラハムは泣きそうなのを耐えている。口はへの字に歪み、新緑の瞳にじわりと涙がにじんできた。

自分が大切にしてきた愛機がなくなってしまったのだ、無理もない。落ち込む気持ちはよくわかる。

クーゴの場合は、諦め半分で達観していた。普段からグラハムに振り回されてきたのだ。多少のことなら動じないでいられる。

ただ、今回はかなり斜めにかつ飛んだ状況に置かれていた。人間、想定外のことに遭遇すると茫然とすることしかできないとは、本当の

ことらしい。

女性はグラハムの肩を叩いた。『彼女』は口数が少ないが、相手を思いやれる優しさを持っている。

「大切な愛機だったんだな。その気持ちはよくわかる」

女性はうんうん頷く。

そして、重々しく息を吐いた。

「よく、やられるんだ。突発的な“シャツフル乗せ換え”をな」

その単語にグラハムとクーゴは顔を見合わせた。首を傾げた自分たちに、女性は訥々と説明を始める。

「どうやらこれは、指揮官によって行われる“お遊び企画”のようなものらしい。戦い詰めである自分たちの気分を紛らわせるためには、このような娯楽が必要なのだという。お茶目と笑えばいいのか、悪質だと非難すればいいのかわからない。」

向う側から悲鳴が聞こえた。喧騒はあちこちに広がっていく。他の部隊も似たような被害にあったようだ。自分たちだけじゃなくてよかつたと安堵すべきか、なんで自分たちがこんな目にと嘆けばいいのか。

自分たちの扉が開き、メカニックたちがやって来た。乗せ換え用の機体を用意できたことを伝えに来たようだ。誰も彼もが苦笑を浮かべている。端末に、今回自分たちが乗ることになる機体の名前が表示された。

クーゴの機体名は『■■■■ア■ト■■イ■■ドフ■■ーム』。遺伝子改造を施されていない人間が使用することを意味した赤い機体であるが、元の持ち主がOSに手を加えたり、疑似人格コンピュータによるバックアップを受けていた。刀を使った接近戦を得意とする機体である。

ただし、空中戦闘は行えないという欠点があった。宇宙空間での戦

闘は可能なのに、空は飛べないのだ。世の中にはそんな機体もあるらしい。クーゴは落胆したが、頭を切り替える。ア■ト■イ・レ■ドフ■ームでどう戦うか、作戦を練らなければ。

何より、グラハムや他の面々との連携についても考えなければならぬだろう。

まずはグラハムの機体がどんなものか、知る必要がある。端末を操作して確認してみる。

機体名は『ゴツ■■■』。名前を聞いた瞬間、何の脈絡もなくぞつとした。恐る恐るグラハムを見れば、目をキラキラ輝かせているではないか。

「クーゴ、□□！ 我々は■■■タイプPの機体で戦えるようだぞー！」

一度、隅々を眺めてみたかったのだと奴は笑う。そもそも■ツド■■■は、自分たちの世界で運用されていた■■■とは違うものだ。勿論、■■炉も搭載されてない。彼が追いかけてやまない。天使“とは似て非なるものだ”というのに、このはしやぎ様。余程■■■が好きなのか。

子どものように大喜びするグラハムに、女性は静かに目を細める。何かを懐かしむような瞳の奥から、深い慈しみと悲しみが滲み出ている。『彼女』の過去に何があったかは知らないが、『彼女』自身が決して語ろうとしないだろう。

『ジ■■ネ■■シ■■ン・システム起動。ステージを再現します』

無機質なシステムアナウンスが響く。戦闘が始まる合図である。

自分たちはメカニックに挨拶し、戦闘準備に入った。パイロットスーツに着替え、指定された機体へ飛び乗る。

『皆さん、出撃してください！——、行きます！』

指揮官の指示が飛んだ。パイロットたちは領き、次々に宇宙へと飛び出していく。

「ウイング■■■■ゼロ。□□・□・□□□□、未来を切り開く！」

「ゴツ■■■■！ グラム・エーカー、出るぞ！」

「■■■■スレイ・■■ドフレ■■。クーゴ・ハガネ、出る！」

□□に続いてグラムが、グラムに続いてクーゴが、宇宙へと飛び出した。

*

「ゴッド・グラハムフィンガー！ ヒート・エンド!!」

奴の拳が黄金に爆ぜる。敵を倒せと轟き叫ぶ。終いには、元の機体の持ち主に無断で技を改名してしまった。

またもに一撃を喰らった機体は、耐えきれずに爆発四散。視覚的にも威力的にも、ゴッドフィンガーはオーバーキル過ぎるのだ。

文字通りの一騎当千である。「もうこいつ一人でいいんじゃないかな」と言いたくなるような光景であった。

これはひどい。とにかくひどい。べらぼうにひどい。

(始末書どころか裁判沙汰だ)

■ツド■■■■の持ち主から、何か言いたげな視線が突き刺さってくる。彼の場合、始末書や裁判よりも■■■■ファイトを所望するの
か。

いずれにしろ、ロクなことになりやしない。胃がキリキリと痛むのを感じながら、クーゴはため息をついたのだった。

◆
(何だ、今の)

クーゴは固まっていた。周囲を見回したが、特に変化はない。変わったことと言えば、今まで聴いていた歌が止んだただけだ。

PCのデスクトップ画面に浮かぶのは、動画サイトの再生プレイヤーである。再生動画が終わったため、画面は真っ暗になっていた。隣で、同じイヤホンをシェアして歌を聞いていたグラハムも微動だにしない。「隣にいるのは、彼を模した蟬人形だ」と言われたら、何の疑いもなく信じられた。

視聴していた動画は『歌い手』のものだ。歌い手とは、Webサイトに動画で曲を歌った映像を投稿している者のことを指す。その中でも特に、最近人気の歌い手が『エトワール』というハンドルネームで動画を投稿している女性であった。まさか、彼女の動画を見てヴィジョンを共有みせられる羽目になるとは。

歌によってヴィジョンを介した虚憶きよわくの共有を可能にするクーゴだが、予め録音されたものであれば虚憶きよわくの共有は発動しない。ただし、『それがリアルタイムの肉声である』ならば、スピーカー越しでも発動してしまうという欠点がある。

「リアルタイムの行動でなければ、コーヴァレンター能力は発動しない」というのが、30年弱の研究で定着した説だ。動画は録画・録音されたもののため、本来ならヴィジョン共有現象は発生しない。だというのに、現に今、それが発生している。

先程共有させられたヴィジョンの虚憶きよわくはクーゴ自身のものだ。何の疑問もなく、その事実がすくと胸に落ちてくる。

この歌声の主も、自分と同じコーヴァレンター能力者であり虚憶持きよわく

ちだ。証拠は一切ないものの、なぜか強い確信があった。

(でも、今まであんな虚憶きよおくは見たことがなかった。どうして、いきなり出てきたんだ？ しかも、本来ならヴィジョンの共有現象なんて起きないはずなのに)

考えてみたものの、その方面に精通していないクーゴには見当もつかなかった。

研究が進められているとは言えど、『まだまだコーヴァレンター能力は未知数な部分が多い』とは研究者たちの談である。

今回のケースが今後の研究に役立てばいいのだが。後で研究員やチームメイトらにも報告しよう、とクーゴが思ったときだった。

瞬きひとつしなかったグラハムが、弾かれたように立ち上がった。その勢いで、彼の耳についていたヘッドフォンの片割れが吹っ飛んで床に落ちる。

「ゴッドフィンガーだ」

グラハムの瞳が輝く。エメラルドを思わせるような緑色には、光で満ち溢れているようだった。

その横顔は、いつ見ても自分と1つ違いだとは思えない。むしろ一回り年が離れているように感じる程だ。笑顔が眩しい。

そういえば、彼が呟いた言葉は聞き覚えがあった。先程見えた、クーゴの『新しい』虚憶きよおく。

「……ゴッドフィンガー？」

「ああ。ゴッドフィンガーだ」

子どもがいる。目の前に、20代後半のでっかい子どもがいる。グラハムは念を押すように、「ゴッドフィンガーだよ、クーゴ」と笑った。嫌な予感がした。最初は漠然としたものだったが、少し離れた

廊下で見かけたビリーの姿に確信が変わる。

案の定、グラハムはわき目も振らずにビリーの元へ駆けだした。ボールを追いかける犬を思わせるような走りっぷり。慌ててクーゴも追いかける。

「カタギリー！ ゴットフィンガー、ゴットフィンガーだ！ 私は是非とも、ゴットフィンガーが打ちたい！」

「ゴットフィンガー？ なんだいそれ？」

グラハムの言葉に、ビリーが首を傾げる。

クーゴは彼の肩に手を置いて、己の頭の中に浮かんだ未来予想図を告げた。

「やめとけビリー。どう考えても、お前が過労死する未来まっろしか見えない」

*

動画編集は、趣味で何度かこなしたことがある。だが、自分の歌を動画にして投稿するのは初めてであった。

機材の使い方はマニュアルを熟読したから何とかかなりそうだ。マイクの準備もばっちりだし、部屋の遮音性は優秀である。研究者と上層部にダメもとで掛け合っただが、世の中はどうかなるらしい。快く許可を出してもらった。

今回もチームメイトたちに集まってもらっている。虚憶きよわくの情報は1つでも多く収集しておきたい。彼らの雑音が入ったとしても、編集でかき消すことは可能だ。身も蓋もない発言だが、『前略、露天風呂の上より』における『どうかなるさ、編集で』のフレーズは伊達ではない。

記録媒体からヴィジョンの共有を可能とする歌い手『エトワール』と関わりを持つ方法を考えた結果、歌い手仲間として接触した方がよいのではないかとクーゴは思い至った。

インターネット上で活躍する人間とリアルで顔を合わせるには、掲示板やコミュニケーションを使い、且つ、その人物と共通の話題を使って関わるのが一番手取り早い。

『エトワール』は歌い手であること以外、目ぼしい情報は手に入らなかった。そこで、クーゴは閃いたのだ。「自分も歌い手として活動すれば、『エトワール』と関わりが持てるのではないか」と。

突拍子のない賭けだとは自覚している。しかし、どんなにIPアドレスやサーバーを追いかけても『エトワール』にたどり着けなかった。

終いには、『エトワール』を追いかけてくれたサイバー捜査員の精鋭たちが、身に覚えのない濡れ衣を着せられ、責任を取るような形で職を辞す羽目になった。

痴漢、汚職、不倫、盗撮、盗聴、不当こう留、備品横流し等々、軍部や軍人のイメージを失墜させるような容疑ばかり。肉体的被害はないが、精神および社会的な抹殺にかかっている。

『このままいったら、我がユニオンの精鋭たちが別な意味で壊滅してしまう。これ以上人材を失うのも、軍部のイメージダウンに拍車がかかるのも困るんだ』

上司が頭を抱えていた姿がよぎる。ここ数週間で、彼はすっかり寝れてしまった。方々に弁明するため、駆け回っていたからだ。

『エトワール』には“情報を自由自在に操れる後ろ盾”^{パトロン}がついているらしい。うかつに手を出せば、社会的な死は免れない。

こうなれば“歌い手仲間として接点を持ち、近づいていく”以外に、安全で確実な方法が見つからない。今回は、そのための動画投稿なのだ。

「で、どの曲を歌うんですか？」

「これ」

ダリルの問いに、クーゴは迷わず曲名を指さす。音源の準備は完璧だ。音声だけを消すくらい、なんてこともない。

多元世界の虚憶きよわくを集めるために、何度も歌ってきた曲の1つなのだ。その中でもこの曲は、とても思い出深いものだった。

「おお、この曲か！」

「僕らの『はじまり』の曲だね。最初の活動で、一番初めにクーゴが歌ったのがこの曲だった」

グラハムとビリーが目を輝かせた。他の面々も懐かしそうに微笑む。

思えば、『多元世界技術解析および実験チーム』の面々とも長い付き合いになったものだ。

「準備はいいな？」

「ばっちりです！」

「うむ、いつでもいいぞ！」

頷いた彼らを見て頷き返した。機会を操作すれば、イントロが流れ始める。クーゴは息を吸い、旋律を紡いだ。

空を愛した男がいた。男は、空を飛ぶために様々なものを捨ててきた。それでも男の手の中には、かけがえのないものが輝いていた。大切な友人、大切な仲間たち、尊敬できる人々。

ある日あるとき、男は偶然にも、『天使』が降り立つ瞬間に居合わせた。その瞬間、男は恋に落ちた。男は天使を追いかける。「これは運命だ」と笑いながら、『天使』を捕まえるために空を駆けた。

『天使』を愛し、『天使』に焦がれた男。その代償として、男は尊敬できる人を奪われた。仲間たちを奪われた。ついには空まで奪われた。手の中にあつたものが零れ落ちていく度に、男は『天使』に恋

をする。『天使』への愛が深まっていく。

積りに積もった愛は、ついに憎しみに転じた。男は歪んだジレンマを抱えて、なおも『天使』を追い続ける。

追いかけて、追いかけて、追いかけて、追いかけて——最後に男は、どうなった？

「愛って何だろうな」

「あれも一つの愛の形なんだろう」

「愛の末路、か。愛と憎しみは紙一重だっというからね」

「日本でもありましたよね。確か、巷で噂の『やんでれ』とかなんとか」
「恋の病があそこまで悪化するパターンも珍しいよ」

面々は、何とも複雑そうに顔をしかめる。その気持ちは、クーゴにもわからなくない。

だがしかし。この場で唯一、違う反応を示している男がいた。グラハムである。

緑の瞳は虚空を見上げ、口元には柔らかな笑みを浮かべていた。何かに見とれているのか、うっとりとしている。その眼差しはどこか熱っぽい。

普段通り「記録しないのか」と仲間たちに問えば、弾かれたようにビリーやワードたちは動き出す。それに対して、グラハムは一切反応しなかった。この曲を歌うときはいつもそうである。

最初のうちは、皆がグラハムを心配して声をかけたものだ。しかし、グラハム本人の「大丈夫だ」宣言もあって、今では皆虚憶きよおくの整理に集中するようになった。

正直に言おう。彼のこんな姿は、何度見ても慣れない。

記録を終えて、クーゴはグラハムの方を向き直った。彼の眼差しは相変わらず虚空に向けられている。口元には、幸せそうに緩んだ笑み。まるで、情人に愛を語らうかのような佇まいだ。奴に恋人はいないけれど、恋人がいたらこんな感じかとクーゴは思う。

次もまた、同じ曲を歌う。今度はバックコーラスを録音した。バッ

クコーラスからも虚憶きよおくのヴィジョンは共有できるようで、皆がまた複雑そうに眉をひそめる。やはり、グラハムだけは笑っていた。

「どれだけの『天使』が現れようと、私の心を射止めたのはキミ……。美しき光と共に、我が眼前に降り立ったキミだ」

甘ったるい声で、グラハムは囁く。ここにはいない『誰か』へと。

「誰が何を言おうとも、キミは確かに私の『運命の相手』だよ。……過去も、今も、そしてきつと——これから未来も」

どこまでも真摯な眼差しで。／痛々しいほどの笑顔で。／歯に浮くような台詞で。／一切の冗談などない響きで。

グラハムは、確かに『天使』への愛を語っていた。

◇

「会いたかった……！ 会いたかったぞ、■■■■ウウウ!!」

ユニオンに所属するフ■■ツ■の中で、一際異様なテンションを纏う機体が1つある。おそらく、敵機パイロットの名前は『彼』のはずだ。名前を呼ばれた機体名のパイロットたちが険しい表情を浮かべる。特に、ソ□□タ□□ー□ング式■■■■の001に搭乗する『彼女』が。

自分たちが『彼』と出会った当初から、『彼』は■■■■タイプの機体にご執心だった。『彼』らの部下が困った様子で顔を見合わせる程度には。

一途といえは聞こえがいいが、その一途さがたいへんなことになっ

ている。

理由は簡単。

この場に■■■■と名の付くものは、この場に『いくらでも』いたからだ。

□レ□□ルビ□□□のマイスターが駆る機体^の、□□ニーの面々が駆る機体^の、□ーデイ□ータ□たちの駆る機体^の等、様々だ。『彼』は■■■と名の付く機体なら、大喜びで突っ込んでくる。『彼』の歪んだ笑みが、見たくもないのに見えてしまう。

この多元世界には様々なロボットたちが集っている。世界には■■■と名の付く機体は沢山あった。■■■■という名前に執着を持っている『彼』には、色々と思うところがあるらしい。

「■■■■がこんなにも！ ああ、目移りしてしまうなあ!!」

『彼』は今日も単騎フルブラスト。三大国家陣営における主力の一角を担っている。

「私の邪魔をする者は故事にのっとり、馬に蹴られるものと思え！ うおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「た、隊長ー!?!」

「自分で陣形乱してどうするんですかー!?!」

■■■ツグファイターを束ねる隊長でありながら、自ら率先して突っ込んでいく。後方のフ■■■に乗っていたパイロットが茫然と口を開けていた。他の部下たちも反応に困っているらしい。

しかし、迷うことなく『彼』のフォローに飛んだ機体があった。その後ろ姿に我を取り戻したらしく、■■■ツ■■■ファイターズたちも動き出す。相変わらず、あのパイロットは優秀な“副官”だ。敵ながら惚れ惚れとしてしまう。

『彼』が焦がれる■■■■だらけの戦場で、『彼』はどの相手と踊るのだろう。翼を持つ天使か、あるいは自由の名を冠した天使か、運命

の名を冠した天使か。

ある程度の候補を立ててみたが、予想は全て裏切られた。翼を持つ天使は騎士と、自由の名を冠した天使や運命の名を冠した天使は別の相手と戦っているではないか。

慌てて黒い機体を追えば、『彼』は迷いもためらいもなく一点を指す。□□スタ□□ー□ン□式■ ■ ■ ■の001番機——■ク■アへと。

「いたか、我が愛しの■ ■ ■ ■よ！」

「またお前か……！」

嬉々とした『彼』とは対照的に、『彼女』は苛立ちを露わにした。いつも通り、『彼』は『彼女』を口説き始める。

「どれだけの『天使』が現れようと、私の心を射止めたのはキミ……。美しき光と共に、我が眼前に降り立ったキミだ!! あの日の甘美なきめきが今の私の胸にある……。そう……。それこそが、私をこうも突き動かす!!」

猛烈なアピールだ。友人が教えてくれた『告白シーン』のひとつが脳裏を駆ける。

『彼』なら、それを一字一句再現してくれそうだ。「愛を語るには叫ぶ必要がある」を地で行く『彼』ならば。

しかし、『彼女』はそれを切って捨てる。即座に迎撃体制へ移行し、白い機体と黒い機体がぶつかり合った。

「この想い、今日こそキミに！」

「目標を駆逐する！」

火花を散らし合う両機を視界の端に捉えつつ、自分も敵機を撃墜していく。随分と不誠実な男だと思っていたが、自称一途も嘘ではなさ

そうだ。

『彼』が『彼女』に対する想いは本物らしい。『彼女』も大変だと苦笑する。ここまで想われて幸せだと言えればいいのか、不幸だと言えればいいのか。

そうこうしていたら、こちらのほうにも■■■■グが接近してくる。あの“副官”だ。彼は日本の剣道を思わせるような構えを取り、攻めるチャンスをうかがっているようだった。

最初の遭遇では射撃による援護を主体にしていたため、■■ユ■■ス同様スナイパータイプかと思っていたのだ。しかし、ブレードの構えからして接近戦もこなせるらしい。

黒い機体がぼんやりと発光する。パイロットも、周囲で戦う仲間たちも、きつとこの事態に気づいてない。パイロットもまた、“目覚め”が近いのだろう。惜しむべきところは、彼と同じ部隊で立つ機会は『まだ先』であることくらいか。

操縦桿を握り締めつつ、自分の持っている『力』を機体へと送る。青い光が輝いていることを、この場にいる誰が気づいているだろうか。フ■■ツ■■のパイロットが息をのんだ。違和感を感じ取ったのか、眉間にしわが寄る。

しかし、彼はすぐにこちらに向き直った。彼の瞳をまっすぐに見返す。

「本気で行くぞー！」

「迎撃しますー！」

こちらも戦いも、火蓋が切って落とされた。

*

——そして、黒の機体は次々と落とされていく。

自分と彼は、お互い満身創痍に等しかった。あと一撃で勝負が決まるだろう。

そのとき、視界の端で何かが爆ぜる音が響く。見れば、『彼』と『彼女』の決着がついたらしい。

『彼』の機体が悲鳴を上げている。軍配は『彼女』に挙がった。

「それでこそ、私が命を懸けて恋い焦がれるだけの相手だ！」

『彼』は相変わらずの様子だった。むしろ、更にノリノリになっている気がする。

その様子に、副官は萎むように息を吐いた。脱力して肩を落とす。

「現在進行形で、墜とされかけている側が言う台詞ではないだろう」

「む。キミは無粋だな。今いいところなのに」

「どこがだ。愛の言葉はいいから、撤退するぞ」

「相変わらずひどいぞ」

軽口をたたき合う2人は、とても仲がよさそうだ。ただの上司と部下、および隊長と副官とは思えない。

自分と鏢迫り合いを演じていた黒い機体が離れる。本格的に撤退するつもりのようなのだ。

無抵抗の相手を追い打ちする趣味はないので、あえて迎撃態勢を取らなかった。向うもその意図を察したようで、肩をすくませる。

「どうやら見逃してくれるらしい。気が変わる前に撤退するぞ。……ほら、□□□□」

隊長機は相変わらず■クシ■の方を名残惜しそうに眺めている。勿論、搭乗している『彼』も、『彼女』に眼差しを向けていた。まるで、買ってもらえなかったおもちゃを見つめる子どものようなのだ。

しかし、最後は諦めて撤退することにしたらしい。引き上げの態勢に入る。が、去り際に黒い機体をエ■■アのほうへと向いた。『彼』の眼差しはまっすぐに『彼女』の方を見ていた。

互いの顔なんてわからないはずなのに、2人が対面しているような錯覚に駆られていたときだ。『彼』から自分たちへ、大音量の通信が入る。

「また会おう！　それまで誰の手にも落ちるなよ、我が愛しの君」たち「よ！」

言い残し、隊長機が撤退した。副官機の動きが止まる。

いつの間にか、撤退を促していた副官機と立場が入れ替わっていた。

終いには、副官機に「どうした、撤退しないのか？」と訊ねる始末だ。はつとした副官も、少し慌てた様子で随伴した。

副官は首をひねっている。「」たち」つてなんだ。まさか、ハーレム……？」としきりにブツブツ呟いていた。その姿も見えなくなる。

■■■■の名を持つ機体のパイロットたちが居たたまれなさそうにしている。先程、迷わず『彼女』の元へと突撃していった一途さはどこへ行ったのだろうか。

へんたいだ。たいへんなへんたいだ。マニアの末路に近い廃人臭がする。

一途であるが故の迷走。しかも、本人は真面目にやっているから尚タチが悪い。

だからこそ、前言撤回だ。『彼』の『彼女』に対する件は、まだまだ疑うべき部分がある。

■■■■タイプであれば誰でもいいだなんて、まるで『女であれば誰でもいい』と同義ではないか。不誠実にも程があるだろう。

その怒りを抱きながらも、冷静に状況を分析しなす。自分の愛機はぼろぼろだ。近くには■■■■マイオ■がある。補給と修理のためにも、一端引いた方がいい。

□メラ□に帰投の旨を伝え、プ■レ■イ■スへ戻る。ソ■タル■ーイングのメカニックたちが、大急ぎで機体へと駆け寄った。

戦場は予断を許さない。三大国家戦力と自分たちの遊撃部隊では

規模が違いすぎる。物量で押され続けたら、ひとたまりもないのだ。

「修理完了だ！」

「ありがとうございます。行きます！」

カタパルトから再び飛び立ち、戦場へと舞い戻っていった。まだ戦いは、終わらない。



今のヴィジョンは、なんだろう。

女性はびたりと手を止めた。周囲を見回したが、特に変化はない。変わったことと言えば、今まで聴いていた歌が止んだだけだ。

PCのデスクトップ画面に浮かぶのは、動画サイトの再生プレイヤーである。再生動画が終わったため、画面は真っ暗になっていた。

(この音楽を聴いて見えたヴィジョンは、私の知っている虚憶きよわくと全然違う。でも……この虚憶きよわくは、私のものだ)

女性の持つ虚憶きよわくは、『世界管理システムにエラーが発生したため、世界と立場を超えたMS連合艦隊を率いてプログラム修正のために戦った』というものだ。自分は指揮官兼MSパイロットとして戦場を駆けるオーバーワークに励んでいた。

確かに自分の虚憶きよわくには、やたらと“ある機体”にこだわる人が出てきた。こだわりをこじらせすぎて、方向性を見失ってしまっていたが。根が真面目であるだけに、かえってタチが悪かったことが忘れられない。

その人物は、自分の指摘に対して「失礼だ」と心外そうにむくれる

か、年齢に見合わぬ童顔できよとんどこちらを見返すかの二択である。『彼』の横で、『彼』の副官が申し訳なきそうにしているのが常であった。

「あ、そうだ。記録しないと」

そこまで考えて、女性はハツとして目を閉じた。先程見た自分の虚憶きよわくは、後学のためにまともしておく必要がある。

誰もパソコンに触れてないにもかかわらず、勝手にパソコン画面が勢いでウィンドウを開いていく。常人が見ると、わけのわからない画面がチカチカしているようにしか思えないだろう。

先程、女性の脳裏に浮かんだ光景が、ドラマのワンシーンのように展開していった。

個人的なことだが、自分の虚憶きよわくは一般流通しているハリウッド映画よりもぶっ飛んでいると思っっている。

試しに、自分が普段見ている虚憶きよわくをマイスターたちに“共有み”してみたことがあった。皆、開始数分で発狂してしまつて大変だったことは記憶に新しい。しかも全員、反応が違つていた。

「ぼ、僕は、俺は、私は！ う、うわああああ!!」と叫びながら頭を抱えて脅えだしたり、「どうしてお前が“ここ”にいるんだ、ライルウウウウ!!」と叫びながら艦内を駆け回つたり、暗い顔をして「ハブられた」と落ち込んだり、「俺もお前もガンダムだ。そうだ、皆ガンダムだ！ 俺たちはわかりあえる!!」と絶叫したり。

もちろん、マイスターたちの記憶からは綺麗さっぱり忘れ去られてしまった。虚憶きよわくの特性と、計画始動の準備で大忙しだったからだ。時折、PTSDや薬物中毒によるフラッシュバック現象のような反応を示すことがあったが、マイスター間はおおむね平穏であった。

画面いっぱいに展開していたウィンドウ画面が閉じる。残されたのは、再生が終わつたメディアプレーヤーのみ。

女性には見当がついていた。この歌を歌つた人物が、自分と『同じ』であることも。この歌が、彼の仕掛けたトラップであることも。

(彼こそ、〃私たち〃が探し続けた『力』の持ち主。しかも、かなり強い潜在能力を秘めている)

そう考えただけで、自然と口元が緩む。

「……ええそうね。〃私たち〃は、貴方のような人を探していたの」

女性は迷うことなく投稿者の名前をクリックした。メッセージ欄を開き、文字を打ち込んでいく。そして、送信ボタンを押したのだった。



このときのクーゴ・ハガネはまだ知らなかった。

「わんっ！」

「ダーリン！ お前ロリコンじゃったのか!？」

「フッフ…ハハハハハハハハ！ アハハハハハハハハ!! アヒヤヒヤ！ ヒヤーハッハッハッハッハ！」

「レーベン…ああ…レーベン!!」

「僕はね…ぶつのも、ぶたれるのも、大好きなんだよ！」

「カイメラ隊はー?」

「病気ー!!」

クーゴの歌ってみた動画を視聴したとあるアイドルが、そこから見た虚憶きよおくから〃とある虚憶きよおく〃を連想し、電波ソングをリリースすること

を。

「運命だ……」

「は？」

「彼女こそ、私の運命だ！ 間違いない!!」

「何を言っているんだ、お前は」

クーゴに同行していたグラハムが、『彼女』と運命の出会いを果たすことを。

「大佐ああああ！ 俺と石破ラブラブ天驚拳を一緒に打ちませんかーっ!!」

「ルイス！ 僕と一緒に……」

「沙慈！ 私と一緒に、石破ラブラブ天驚拳を打ってほしいの！」

「ルイス……!」

「大丈夫よ、私たちならできるわ!!」

「少女よ！ 私と一緒に、石破ラブラブ天驚拳を」

「俺に触るな!!」

何故か巷で『石破ラブラブ天驚拳』が流行語になることを。

「あれ？ どうしたんですか、ハガネ少佐」

「いや、俺の目の錯覚かな。『空に咲いた花』に、何か刻まれているよ
うな………相合傘？」

「下に名前が書いてあるぞ」

「何々？ 『□□』と……」

「その隣には、少佐の名前が書かれていますね」

「なあっ!!?」「なんと!」

クーゴの虚憶きよおくで、世界三大告白シーンの1つが再現されたものが出てくることを。

クーゴ・ハガネの災難が始まるまで、もう少し時間がかかるようだ。

2. トリオ、プラスワン

ビリー・カタギリの研究室に足を運ぶとき、クーゴはいつも差し入れを持っていく。

今日の差し入れは肉じゃがメインだ。付け合わせとして、秋刀魚の胡麻焼き、しらすと三つ葉の梅和え、シークアーサーを使ったトマトの砂糖漬けを用意した。肉じゃがの味付けが濃い目なので、さっぱりとしたものを中心に取り揃えた。

秋刀魚の胡麻焼きは大根おろしと一緒に食べる。しらすと三つ葉の梅和えは、醤油ではなくポン酢醤油を少量かけた。トマトの砂糖漬けはレモンを使おうと思っていたのだが、部下のアキラ・タケイからシークアーサーのおすそ分けを頂いたため、レモンの代用品として使ったものだ。

研究室に缶詰状態がデフォルトとなっているビリーのことを考えると、まともな食べ物食べてなさそうである。

親戚に研究者をやっている人がいるが、その人物も「三度の飯より研究が好き」なタイプで、食事を抜くなんて当たり前らしい。

「ところでビリー。今朝は何を食べたんだ？」

「ドーナッツだよ」

「昨日の晩御飯は？」

「ドーナッツだね」

「昨日の昼御飯は」

「ドーナッツだけど」

「お前ドーナッツ大好きだな。太るぞ」

「キミは時々失礼なことを言うね」

案の定。見事なテンプレート回答である。思わずぼやいたクーゴに、ビリーはむっとした顔でこちらを見上げた。

血糖値やメタボリックで引っかけかきりそうな食事内容だ。よくよく観察してみると、前より腹部がたるんでいるような、いないような。

クーゴの思考回路を目ざとく読み取ったようで、ビリーの眉間の皺が数割増しになった。ジト目で見られ続けるのは居心地が悪い。さっさと本題に入る。

「まともなもの食べてなさそうだと思つてな。差し入れだ」

「わあ、ありがとう！ 今日豪勢だね！ おいしそうだなあ」

ビリーが嬉しそうに目を輝かせた。持つてきていた割り箸を彼に手渡し、来客用のテーブルの上に差し入れを並べる。予め多めに作ってきたため、あと数人分余っていた。

保温性に優れた容器のため、開けた途端に湯気が漂う。肉じゃがの甘じよっぱい香りに、ビリーが頬を緩ませた。どうやら見た目は合格点のようだ。問題は味である。ビリーは鼻歌を歌いながら、小皿におかずを取り分ける。

処刑台に立たされたような気分でビリーの横顔を見ていたクーゴだが、それは杞憂だったらしい。肉じゃがを一口食べたビリーは早いペースで食べ進めていく。うん、うん、と頷きながら、彼は小皿に取り分けた料理すべてを完食した。

「おいしかった。ごちそうさま」

「いい匂いがすると思つたのだが、やはりそうだったか。相変わらずうまそうな差し入れだね」

満足げに箸をおいたビリーと入れ替わるように、研究室の扉が開いた。やって来たのは、白髪が目立つ老紳士だ。

彼はレイフ・エイフマン。ユニオンフラッグの開発者であり、MS開発や機械工学の権威である。教授としても名高く、優秀な教え子を多く輩出していた。ビリーも彼の教え子の1人であり、MS開発に取り組む仲間でもあった。

エイフマンは朗らかに笑い割り箸へと手を伸ばす。ぱきん、と気持ちいい音を響かせて、割り箸が真っ二つに割れた。今日はきれいに割

れたと満足げに頷き、迷うことなく肉じゃがへと箸を進めた。皿にとりわけ、ぱくりと一口。ほふ、と息が漏れた。

ほくほくに煮えたじやがいもの味を楽しみつつ、エイフマンは箸を進めていく。時折付け合わせの品に箸を伸ばしては、目を細めて頷いた。

「年寄りには少々味付けが濃すぎると思ったが、付け合わせがさっぱりとした味付けのものだからかな。思った以上に箸が進むよ」

「それはよかった。おかわりは充分あるので、どうぞ」

クーゴはほつと息を吐き、肉じゃがの入ったお弁当箱を指し示した。

刹那、ちようどいいタイミングで、また研究室の扉が開く。

「カタギリー！ グラハムフィンガーはどうなった？ 打てそうか？」

扉を吹き飛ばしかねない勢いでやってきたのは、我らがグラハム・エーカー中尉である。彼はビリーのほうへ突っ込んでいこうとし、エイフマンの姿を確認してぱつと表情を輝かせる。

「プロフェッサー！ 来ていたのですか」と笑うグラハムを見ると、なんとも微笑ましい気分になった。この男は、『男の子』という言葉で地に行くような所がある。子どもがそのまま大人になったような、不釣り合いな姿。彼の若さはここからきているのかもしれない。

彼はしきりに『グラハムフィンガー』を連呼する。この前見た虚憶きよおくに深い感銘を受けたらしく、技術者連中に『グラハムフィンガーが打ちたい。だから、それを打てるようにMSを改良してほしい』と方々に掛け合っていた。

この『グラハムフィンガー』、出典元があつたはずなのに、いつの間にか周囲からは『グラハムが見つけた新技』という扱いを受けている。

先日の虚憶きよおくはすっかり忘れてしまったため、技の正式名称が思い出せない。

虚憶きよおくをなくす前に、その場に居合わせたビリーへ『本当の技名』を告げていたらしいのだが、それが正式名称かと問われると答えられなかった。どうしてあのとき記録しておかなかったのか。悔やんでも後の祭りであった。

このままでは始末書どころの騒ぎではない。下手すれば裁判になる。

いいや、あの『持ち主』のことだ。MSを用いた戦いで公正な決着をつけようとするだろう。

グラハムも、勝負の申し出を大喜びで受けて立ちそうだ。考えるだけで胃が重くなってきた。

(そういうえば、AEUのほうでMSファイトが行われたらしいな)

クーゴはふと、数日前の出来事を思い出す。身内が酔っ払いながら連絡してきたことだ。

数日前のニュースで見た『日本発祥のMSファイトが、現在AEU内で大人気のスポーツになっている』という話題と関連している。

MSファイトとは、専用のスタジアムで行われるMS同士の戦いのことだ。『頭部を破壊されたら失格』、『相手のコックピットを攻撃してはならない』などの特別なルールに従い、トーナメント形式で試合が進められていく。決勝戦はバトルロワイヤル方式になるそうだ。試合前に「MSファイト、レディーゴー！」という掛け声をかけ合ってから試合を開始するのが一般的だ。

大手民間企業のMS開発者と会社から選出されたテストパイロットが奮闘する一般部門、軍に所属するMSパイロットの試金石を兼ねたプロ部門に分かれており、優勝すると様々な恩恵が受けられる。一般部門で入賞した企業であれば取引が増えるだろうし、プロ部門で好成績を残したパイロットの場合は未来のエース候補として注目されるといった具合にだ。

身内にA E Uの大手商社に勤める人間がいるが、彼女の勤める会社がMSファイトの一般部門に出場したそう。結果は文句なしの優勝。「遠距離からのバラ撃ちと零距离射撃による肉薄で意表を突く戦い方が云々」と語っていたか。確か、テストパイロットを買って出たのは（身内曰く）イケメンの営業マンだったという。

そういえば、いつぞや行われたプロ部門の大会では、パトリック・コーラサワーというパイロットが圧勝したらしい。インターネットでヒーローインタビューを見たのだが、終始『俺はA E Uの、超ウルトラスーパーなエースパイロット、パトリック・コーラサワー様だ！』云々と叫び散らしていた。彼がエースで大丈夫なんだろうか、と、A E Uを本気で心配したのはここだけの話である。

閑話休題。

「……そうか。まだ、実装には至らないか……」

グラハムが肩を落す。ビリーとレイフマンから懇切丁寧に「無理だ（意訳）」と説明を受けたためだろう。

落ち込んでいたグラハムであるが、クーゴが持ってきていた差し入れを視界に入れた途端に顔色が変わった。

「おお！ 今日には和食なのだな!! ええと……」

「いただきます、だ」

「それだ。イタダキマス」

グラハムは満面の笑みを浮かべ、手を合わせた。割り箸と皿へ手を伸ばした。べきよ、という嫌な音がした。

きれいに割れたエイフマンとは違い、グラハムの割り箸はいびつな割れ方をしていた。彼はむっとした顔で割り箸を睨む。

クーゴは苦笑しながら別の割り箸を差し出した。再びグラハムが割り箸を割る。べきよ。やっぱりいびつな形に割れていた。

むすつとしたグラハムに、クーゴは持ってきていたすべての割り箸

を差し出した。

それを受け取ったグラハムは、再び割り箸を割り始める。

べきよ、べきよ、べきよ、べきよ、べきよ、べきよ、べきよ、べきよ……。

グラハムが割り箸と格闘する音をBGMにしつつ、クーゴは端末をいじった。

インターネットのコミュニティサイトにアクセスし、メッセージに目を通す。

新着メッセージが届いていた。送り主は『エトワール』。リアルタイムの媒体でないにもかかわらず、ヴィジョン共有現象を起こすことができるコーヴァレンター能力者。

彼女と接触するため、クーゴは『夜鷹』というハンドルネームで動画を投稿している。『エトワール』との交友は、インターネットと歌声越しであるが、進んでいた。

メールの文面から察するに、彼女は積極的に『夜鷹』であるクーゴに話しかけようとしていた。まるで、『エトワール』がクーゴと接触しようとしているかのよう。

最初は動画を一本投稿した後、彼女にメッセージを送ろうと思ってた。『貴女に憧れて歌い手になりました。よろしくお願ひします』という内容で。しかし、それよりも、彼女がこちらにメッセージを送って来る方が早かった。

『貴方の歌声、とても素敵です。もう少し低音を丁寧に歌い上げると、もっと良くなりますよ。これからも頑張ってください。応援しています』

思い描いていたシナリオとは違ったが、彼女と接点を持つという目標は達成できた。なんとも好調な滑り出しである。

おまけに、『エトワール』は何を思ったのか、『夜鷹』に歌い方のレクチャーをしてくれたり、『夜鷹』の動画を宣伝し始めたりした。

おかげで『夜鷹』の動画は注目を浴びるようになり、ネットユーザー

から支持を得るようになった。結果、『夜鷹』は『エトワール』に次ぐ人気の歌い手へと成長してしまったのである。

(……コレジャナイ感が満載だが、仕方ないか)

べきよ。

最後の割り箸が割れる音がした。

視界の端で、グラハムががっくりと肩を落とす。しかし、彼は諦めない。

「この程度の道理、私の無理でこじ開け「やめんか」

何かしようとしたグラハムをたしなめる。彼が道理をこじ開けようとした場合、何が起こるかわからないからだ。それは、どんな些細なことでも当てはまる。今回は、運よく未遂で済んだらしい。

萎れた花のように俯いた友人に、クーゴは菜箸を差し出した。エイフマンは既に肉じゃがと付け合わせを食べ終えているし、クーゴも昼ご飯を食べ終えている。だから、このお弁当に入っているのは、実質的にグラハムの分になるのだ。

グラハムは眉間にしわを寄せて菜箸を凝視したが、諦めることにしたようだ。渋々といった調子で菜箸を受け取り、ややおぼつかない手つきで肉じゃがへと箸を伸ばす。じゃがいもが真っ二つに割れた。もう一度箸で掴もうとしたグラハムであるが、じゃがいもは4分の1サイズになっただけだった。

じゃがいもはどんどん細かくなっていく。これ以上は埒が明かない。

クーゴは苦笑した後、持ってきていた使い捨てスプーンを差し出す。

「撤退も兵法の一つだぞ、グラハム」

「私もまだまだ未熟。修行が足りないか……」

グラハムは恨めしそうにため息をついた。そのままスプーンで肉じゃがを口に運ぶ。そのしかめっ面は、あっという間に笑顔に変わった。

彼は恐ろしい勢いでおかずにスプーンを伸ばし、料理を口に運ぶ。料理があっという間に消えていくのは、見ていてとても気持ち良かった。

クーゴはそれを横目に、再び端末を確認する。『エトワール』からのメッセージがディスプレイに表示されていた。

『貴方の動画、拝見しました。どんどん上手になっていきますね。貴方の歌を聴いていると元気が出ます。これからも頑張ってください、応援しています』

そんな風に言ってもらえるなんて。思わず表情が緩む。が、クーゴはゆるゆる首を振った。いつの間にか、本来の目的を忘れそうになっている。

余程、自分は『エトワール』との接触到に心躍らせていたのだろう。気を引き締める。トラップに引つかからないよう、細心の注意を払わなければならぬ。

クーゴは睨みつけるようにして端末を凝視する。気を緩めてはいけない。薄氷を履むが如く、慎重に進まなくては。クーゴは自分自身に言い聞かせた

「ところで、『エトワール』とのコンタクトは進んでいるのかい？」

ベリーの問いに、クーゴは曖昧に笑った。

「ぼちぼちな。この調子で交流を重ねていけば、『コラボ企画』と称してオフで会うチャンスが得られるかもしれん」

端末にメッセージを打ち込みながら答える。思えば、メッセージ1つ考えるのに長い時間をかけるようになった。

サイバー捜査官や上司に内容についてのアドバイスを仰ぎ、何度も本文を推敲し、送信ボタンを押すまで若干躊躇いを覚える。後者2つを零したら、周囲の眼差しが生暖かくなってきた。理由はよくわからない。誰に訊ねても曖昧に笑うのみであった。

このことについて一度、グラハムが何かを言いかけたことがある。しかし、彼はその場に居合わせたビリーとエイフマンに拉致されてしまった。しばらくして戻ってきたのだが、グラハムは『やはりそれは、キミがキミ自身で考え、答えを出すべきことだ』と心底意地の悪い笑顔を浮かべていた。やけに爽やかだったのが印象に残っている。

クーゴはちらりとグラハムを見た。彼はスプーンを置き、両手を合わせて頭を下げる。テーブルの上には空っぽになった弁当箱が鎮座していた。

「ご、ご、ゴツ……違う。ええと、ご、ゴチ……ゴチソウ、サマ？　クーゴ、これで合っているのか？」

「ああ。正解」

拙い発音であったが、グラハムは確かにそう言いきった。真顔で頷けば、奴は嬉々と笑った。自慢げに、何度も復唱する。

この男、以前から日本の風習に興味があったようだ。グラハムを日本かぶれにしてしまった戦犯を挙げるとしたら、間違いなくクーゴとビリーがダントツだろう。次点でホーマー・カタギリ氏か。

ビリーやホーマー氏の日本文化像は、外国人から見た脚色が多分に含まれていた。日本人であるクーゴが眉間にしわを寄せて「それは違うぞ」と苦言を呈する程に。

思い込んだら突っ切ってしまいがちなグラハムに、偏った知識ほど危険なものはない。ホーマー氏の影響を多分に受けたアレンジ武士道やなんちゃって日本文化に適宜テコ入れをするのもクーゴの役割であった。

最も、クーゴが自国の歴史を見直すようになったきっかけは、グラハムのアレンジ武士道となんちゃって日本文化の内容に度肝を抜かれたからである。おかげで随分と日本神話や日本の歴史に関する本を読み漁った。

グラハムに偏った知識を提供してしまわぬよう、様々な文献を読み込んだものだ。ときには、彼に書籍を紹介したこともある。自他ともに我慢弱いと認められたグラハムに根気よく説明するのは、本当に骨が折れた。

現在進行形で、クーゴのテコ入れは続いている。

しかし、彼の日本関係の知識は、以前よりも大分マシになったとクーゴは思う。

「二度、きちんと言ってみたかつたんだ。『イタダキマス』や『ゴチソウサマ』は、食材に宿っていた生命いのちに対する、最大限の敬意を表す言葉だからな」

綺麗に発音できるぞ！ と、グラハムは自慢げに胸を張った。ビリーとレイフマンは、そんな彼を見て目を細める。

こういうところがグラハム・エーカーの魅力なのだろう。クーゴは緩やかな笑みを浮かべ、頷いたのであった。



今、自分たちの前に立ちはだかつているのは亡霊だ。同じ日本人として、けれども生きた時代の違う者として、クーゴは強くそう思う。オーラ力を原動力にする機体の中で、オウカ■■は一際異彩を放っている。ハウジョウ兵の■■デンより、サイズも機体性能も圧倒的に上だ。

「あのオーラ、憎しみに染まっている……」

「それでも、私は絶対に引かない！ 私たちの帰る場所を守る！」

聖戦士の力を有するオーラバトラーたちが戦慄した。バイストン・ウエル帰りの翔□も、ほんの一瞬だがたじろぐ。彼女はすぐに屹然とした眼差しで、核を爆発させようとするサコ□□王を睨みつけた。

「いや、□子だけではない。竜宮島の子どもたち全員が、自身の故郷を守るために戦っている。故郷を守るためには『憎い』『あん畜生』も一緒に守らねばならない』というのが癪だが、それでも彼らは引くつもりがないようだった。

クーゴはちらりと戦艦を見る。竜宮島程度の島なら簡単に吹き飛ばせる核兵器が搭載された艦だ。島にいる者だけでなく、この場にいる者も無事では済まないだろう。核兵器を爆発させることなく『あん畜生』だけを粛清できたらいいのに。

クーゴのぼやきが漏れてしまったのか、グラハムのため息が聞こえた。

彼もまた、『あん畜生』のせいで空を飛べなかったことがある。しかし、グラハムはそんなこと関係なしに、戦艦を守るため尽力していた。

「余計なことを考えると、キミらしくないぞ！」

「お前にだけは言われなくなかったな。さつきからチラチラとア■

■イスの方ばかり見てるようだが!？」

ちなみにこれは、ハウジョウ兵をサーベル／ブレードで切り捨てながらの会話である。

どこもかしこも戦場だ。その中でも一騎当千の活躍を見せるのは、
ファ■■を駆る竜宮島の子どもたち。彼らの間を縫うようにして、
エイ□□プの駆るナ■ジンと□ユ□スの駆るギム・■■ンが、□コミ
□王の元へと飛び出していく。

しかし、■■カオーは彼らに一切の興味を示さず、核兵器と『あん

畜生”が乗る戦艦へと突っ込んでいった。周囲の敵の撃退に追われていたアルティメット・■■■スの面々は反応が遅れてしまう。□□ミズ王を止めようとした者たちも、他の兵士たちに阻まれた。

クーゴとグラハムの前にも兵士たちが突っ込んでくる。通信機越しに顔を見合わせた2人は、即座に操縦桿を動かした。コックピットにGがかかるが、初期のカスタムフラッグと比較すればまだマシな方だ。ホウジョウ軍の追撃を難なく躲し、機体を変形させる。そのまま、戦艦の前へと躍り出た。

自分たちの機体は、高機動戦闘を得意とする設計となっていた。似たような機体では、アル□のデュ□□ダルが挙げられるだろう。

このまま突破口を切り開く。王の足止めも兼ねてだ。クーゴとグラハムの機体は、互いに背を向け合った状態でGNビームライフルを撃ち放った。

複数の敵が巻き込まれ、なぎ倒されていく。しかし、サコ□□王は真正面から砲撃を受けたにもかかわらず平然としていた。

「何っ!？」

嘘だろおい。

クーゴがその言葉を紡ぐよりも早く、オ□カオーが肉薄する。

「どけ、この売国奴がアァー！」

太刀が振り下ろされた。防御の構えを取る間もなく、肩に一撃喰らってしまう。風圧で地面へと叩きつけられそうになったが、寸でのところで立て直した。

DENGERの赤い文字が点滅し、けたたましい警告音が鳴り響く。どこかで火花が散る音がした。グラハムや仲間たちが名前を呼ぶ声に、どうにか返事を返す。

視界の端に見えたのは、戦艦へと肉薄する■ウカ■ーの姿。□□サツ□の駆る■ナ■■が王の機体を追うが、もう間に合わない。

戦艦に、容赦なく刀が振り下ろされる。その一撃は、飛び出してきた『盾』によって阻まれた。

突然の乱入者に、サ□ミズ王は大きく目を見開く。自分の攻撃を防がれたことと、それをやってのけたのがまだ10代後半の子どもだという事実が原因だった。

特攻隊に志願した兵士たちの年齢は、10代後半から20代ごろが多かったと言われている。もしかしたら□□ミズ王は、少年兵が飛び立つ現場に居合わせたことがあったのかもしれない。

「ダ、ダメなんだ……！ あの中の核兵器が爆発したら、島までなくなっちゃう！」

ゴウバインの仮面を外した少年の声は、みつともないほど震えている。

しかし、彼は決して逃げなかった。王の大義と妄執に、全身全霊を持って立ち向かう。

「あそこには、僕の……！」

刀と盾が激しくぶつかり合い、火花が散る。

「僕の大切な友達がいるんだッ!!」

少年の悲痛な叫びに、サ□□ズ王は躊躇うように呻いた。子どもとやり合うのは本意でないらしい。王は少年を、切り払いで弾き飛ばす。

王の激昂は“あん畜生”へと向けられる。少年を盾にして逃げようと画策したことは、確かに許しがたいことだ。だが、核兵器を爆発させる理由にはならない。

“あん畜生”の弱弱い声が聞こえた。オウカ■■が戦艦に肉薄する。怒りによってオーラを纏った太刀が、容赦なく振り下ろされ

る。阻むものは、今度こそ何も無い。

“あん畜生”が悲鳴を上げた。最悪の末路が脳裏をよぎる。しかし、王は寸でのところで太刀を止めた。

「誰だ……私に呼びかける者は!?!」

サ□ミズ王が問いかける。答えたのは、二度と声を聞けないと思っていた人物。昏睡状態に陥っていた『彼女』。

グラハムが笑う。こうなることを予め予測していたかのように。

ああ、だから奴はしきりに■■ヴイスを見ていたのか。理由さえわかれば、あまりにもわかりやすい行動だった。

愛おしげに目を細めた視線の先に、青い機体が降り立つ。我慢強い男は耐えきれなくなったのだろう。

「随分と遅いお目覚めだな、少女!」

待ちくたびれたという気持ちを前面に押し出して、奴はいつものテンションで叫んだのだった。



『で、どう思う?』

「バリバリですねー」

端末を片手に、青年は真顔で答えた。

「潜在能力はおそらく青。その中でも、虚憶保持数や共有および感応能力は、青の中でも上位に入るかと思われまます」

現在、青年が視聴しているのは、『夜鷹』が投稿した動画である。彼が投稿した動画は、今回で15本目だ。

青年もまた、共有者コイヴァレンターであった。特に、『同胞』を見分けたり、『同胞』の能力を正確に把握することに長けている。

「彼は『エトワール』の投稿動画を見ただけで『同胞』だと勘付いたんですよね？」

『ええ』

「歌を聞く限り、『夜鷹』氏は無自覚に能力を発現させているみたいです。『同胞』だからこそわかります」

青年はもう一度動画を再生した。

特攻隊、桜花王、オーラバトラー、あん畜生、竜宮島、ファフナー、ゴウバイン。断片的に見えた虚憶きよわくを確認し、もう一度記録する。

『夜鷹』氏の能力は、確実に開花しつつあった。完全覚醒まで時間ばかりそうだが、彼の能力は最高値の青。目覚めれば、最強の一角を担う者になるだろう。

そして彼こそが、自分たちの計画に欠かせない人物。自分たちが必死に探している人材だ。まさか、その人物の立場が『ユニオンの軍人』だとは思わなかったが。

ふと、時計を見る。もうすぐスポンサーが顔を出す時間だ。

奴の思念も近づいてくる。青年は舌打ちした。

「後で連絡します」

『わかった。コンサート、頑張つてね』

連絡を終えて端末をしまう。それと入れ替わるように、扉がノックされた。

現れたのは、スーツ姿の中年男性。ブラウンの長い髪を束ねた彼は、紳士を思わせるような微笑を浮かべて声をかけてくる。

青年は営業スマイルで答えた。中年男性に付き従う緑色の髪の青年に会釈し、他愛もない雑談に興じる。

中年男性の名前はアレハンドロ・コーナー。彼に付き従う青年は、リボンズ・アルマーク。

2人とも、青年の歌手活動をバックアップしてくれる大切なスポンサーだ。

「テオさん、そろそろです。準備の方をお願いします」

「はい。今行きます」

休憩時間は終わりだ。青年——テオ・マイヤーは立ち上がった。煌びやかなステージ衣装を身にまとい、ステージへと出陣する。

スポンサーのアレハンドロには仮面の笑みを、奴に付き従うリボンズには悪戯っぽい笑みを送り、テオは控室を後にした。

ステージに出る。スポットライトと歓声が、惜しみなくテオに向けられた。

音楽が鳴り響く。ざわめく声はヒートアップし、たくさんのペンライトが激しく揺れた。

そのすべてに答えるため、テオは満面の笑みを浮かべて腕を突き上げた。

「カイメラ隊はー?」

「病気ー!!」



リボンズ・アルマークは、特等席に座っていた。

はっぴにうちわとペンライト。どこからどう見ても完全装備だ。

「あんな偶像もの何がいいんだか」

隣に座らせられてしまったアレハンドロ・コーナーの愚痴が聞こえた。リボنزはあえて無視する。

他の面々は戦争に負け、一番遠い席か安い席に座っていた。脳量子波を通じて、『見えない』『見にくい』『前の奴が邪魔』『双眼鏡』等、苛立ちの声が響いてくる。

しかし、ステージが始まった瞬間、面々の声はぴたりと止んだ。脳量子波を通じて、音楽と歌詞が流れてくる。振り付けの内容もだ。

アレハンドロがうっとおしげにステージを眺める横で、リボنزは一心不乱に声援を送った。隣の奴はどうでもいい。

「所詮は俗物か」

忌々しげな声が出た。さりげなく、リボنزはペンライトでアレハンドロの頭をはたく。流れるように自然な動作で、だ。

アレハンドロがこちらを見上げたが、リボنزはそ知らぬ顔で踊り続けた。踊り狂うリボنزを見たアレハンドロはがっくりと肩を落とす。

どうやら諦めたようだ。リボنزは鼻で笑い、ステージへと視線を向ける。

「まあいい。使えるものは使わせてもらおう」

その言葉、そっくりそのまま返してやる。

リボنزは心の中でそう呟き、今度は奴の足を思いっきり踏んづけてやったのだった。



このときのクーゴ・ハガネはまだ知らなかった。

「お前、ボロクソに言いすぎだぞ。あのときはデザイン以外何も言わなかったじゃないか」

「当然だ。AEU、ひいてはOZに所属するゼクス・マーキス特尉がいる前で、流石にうかつなことなど言えんだろう」

「えっ? ……グラハム、OZって何だい? ゼクス特尉って……そんな人AEUにいなかったはずじゃ」

「ああ、彼は私の友だ。プリペンター・ウィンドを名乗っていてな」

「……………む? 私は何を言っているんだ?」

友人に、何やら変化が起こっていることを。

『不死身』……」

「へ?」

「いや、君の二つ名ではなかったかな、と……」

『不死身のコーラサワー』……なんか、かつこいいな! エースパイロットの俺様にこそ相応しいっ!!」

「だな。自爆してもちゃんと帰ってきたんだし、傍にいた人間すら不死身にしたんだし」

「えっ」

「えっ」

噂のA E Uエースパイロットと、長い付き合いになることを。

「僕はね、ずっと楽しみにしていたんですよ。貴方を堂々と叩き潰せる、この瞬間を！」

「はじめましてこんにちわ。……そして、永遠にさようなら」

真の監視者が、ずっと監視を続けていたことを。

「アタシは好きに生きるの。楽しいことをするのに、大義名分なんて必要ないでしょ？」

「アタシはね、楽しければいいの。アタシが一番になれるなら、なんだっていいの。だって、世界はアタシのために存在するんだから」

「こんの、ド外道がアアアアアアツ!!」

世の中には、どこにでも『あん畜生』と同じ人種が存在していることを。

クーゴ・ハガネの災難が始まるまで、もう少し時間がかかるようだ。

3. ビギニング・エンカウント〜その気なし編〜

ユニオンは、今日も小康状態だ。

どこかでは戦いが行われているのだろうが、自分たちが所属する部隊は平和そのものである。

「AEUヘリオンの後継機開発、か」

小さく呟き、クーゴはコーヒーを飲み干す。クーゴにとって、新聞とインターネットが主な情報入手先であった。

ただ、親戚たちのコネクションがべらぼうに凄まじいため、そこからも情報が入ってくる。喜ばしいことであるが、素直に喜べなかつた。

今回の情報も、AEUでモバイルスーツ開発に勤しむ親戚が自慢してきたことだ。親戚はフラッグに対抗心を燃やしており、見返すつもりでいるらしい。

「ああ、リアルドの猿真似の」

クーゴの呟きを拾ったビリーが、ほぼ反射と言っていい速さで、連想した単語を口にする。

事実ではある。ヘリオンはリアルドが生み出された後に誕生した機体だ。大きな違いは運用目的とデザインぐらいで、性能はこれでもかというくらいリアルドと酷似していた。というより、リアルドを参考にしたのだから当然といえる。

リアルドが長距離の高速移動に適した変形機体であるなら、ヘリオンは用途に応じて対応する機体だ。実際、様々なバリエーションが発表されており、機体の種類に運用目的が反映されている。機体の運用次第では、リアルド以上の使い勝手の良さや成績をたたき出すこともあった。

「後継機はさしずめ、フラッグの猿真似になるんだろうね」
「手厳しいな」

クーゴは苦笑した。これを親戚に聞かせたら卒倒すること間違いなしだろう。

だが、親戚の中に燃えている炎に油を注ぎ、その結果、後継機が化ける危険性も孕んでいる。

(この場に親戚がいなくてよかった)

クーゴは心の底から思った。技術屋の戦争については、よく知っている。AEUのMS開発者たちは今頃、入手したフラッグを分解^{バラ}しているのだろうか。愛機が分解^{バラ}されているような気分になり、クーゴはこめかみを抑えた。

敵MSを出し抜く技術を得るためには、そのMSの性能や武器をきちんと知っていなければならぬ。他国の企業で働く技術者が『技術開発』を名目に、妻および夫や親戚名義でMSを入手して分解するなんてよくあることだ。

MS分野だけではない。どの企業でも行われている戦いである。職業や専門が違うだけで、戦争の次元や方向性は全く違う。親戚たちが多方面で活躍するクーゴには、それはよく理解していた。

刃金の家は昔から男児に恵まれず、男児が生まれたとしても早逝しやすい家系だった。そのため、女性が婿養子を貰って血筋を守ってきたという。

しかしそれだけでは飽き足らなかったようで、嫁入りした刃金の女が嫁ぎ先を(事実上)乗っ取り、嫁ぎ先や本家の繁栄に貢献してきたらしい。その立役者たちには「乗っ取るつもりが微塵もなかった」というのが恐ろしいところだ。

現在、刃金家は(事実上の乗っ取りによって派生した)分家が日本全土に存在してる。日本制覇はクーゴが生まれる以前から成し遂げられていたそう。そのうち世界制覇もしてしまいそうで怖い。刃

金の血管が世界制覇を成し遂げるかどうかは、自分含んだ海外組の行動にかかっていた。実にどうでもいいが。

A E UでMS開発に勤しむ親戚の情熱を思うと、ビリーの発言は身も蓋もない。親戚を援護するつもりはないけれど、黙って見過ごせる気にもなれなかった。

「お前、ボロクソに言いすぎだぞ。あのときはデザイン以外何も言わなかったじゃないか」

クーゴがいさめるようにして声をかけた。

間髪入れず、隣に座っていたグラハムが頷く。

「当然だ。A E U、ひいてはO Zに所属するゼクス・マーキス特尉がいる前で、流石にうかつなことなど言えんだろう」

グラハムの発言に、ビリーは首を傾げる。

「えっ? ……グラハム、O Zって何だい? ゼクス特尉って……そんな人A E Uにいなかったはずじゃ」

彼の言葉通りだ。A E Uには『O Z』という名前の組織はない。特尉という階級に『ゼクス・マーキス』という名前の人物もいなかったはずだ。

でも、なぜだろう。クーゴには、『O Z』という単語も『ゼクス・マーキス』という人物名にも覚えがある。もしかして、虚憶きよおくに関係しているのだろうか。

グラハムはクーゴの虚憶きよおくによる影響を受けているのだろうか。しかし、彼がそんな発言をするのは、クーゴがコーヴァレンター能力を発動させているときだけだ。

今、クーゴはコーヴァレンター能力を発現させていない。

だから、ヴィジョンを通した虚憶きよおくの共有現象は起こっていないはず

なのだ。

にもかかわらず、グラハムはぺらぺらと話し始める。

「ああ、彼は私の友だ。プリペンター・ウインドを名乗っていな」

プリペンター・ウインド。いつぞやの虚憶きよおくで、彼が拾い上げてくれた情報の1つだ。プリペンターと言う秘密組織ひそくしゅうしに所属する、誰かのコードネームらしい。

彼は同じ組織に所属するライトニングとコンビを組んでおり、組織内では『風神と雷神』で通っていたという。このコンビの補佐役としても1人同行していたようだが、彼のコードネームはわからなかったらしい。グラハム曰く「その人物のコードネームの由来は、『日輪の使いは鳥』だというが。

何かちぐはぐだ。理由はわからないけれど、『グラハムの話は時系列がバラバラである』と、クーゴは本能的に悟る。そのことをグラハムに指摘しようとしたときだった。立て板に水の如く喋っていた彼が、ぴたりと話を止めてしまう。

「……………む？ 私は何を言っているんだ？」

グラハムはそう言って、首を傾げた。自分が何を言っていたのか、何を言おうとしたのか、そのすべてを忘れてしまったようだ。

知っている。この現象には覚えがあった。虚憶きよおくを持つ人間に見られる、典型的な言動。

クーゴが虚憶きよおく所持者としての能力を開花したときも、最初は彼と同じ言動をしたものだ。

「グラハム。キミは……………」

ビリーもクーゴと同じことを悟ったのだろう。驚きに目を見開いている。

ヴィジョンを介して虚憶きよわくを共有していた人間が、虚憶きよわくを有するようになるだなんて。

そんなケースは初めてだ。研究員たちが色めき立つ姿が見えるような気がして、クーゴは内心苦笑する。

当の本人はきよとんとした顔で目を瞬かせていた。が、クーゴたちの表情を見て何かを察したようで、顎に手を当てた。

考え込むように唸ったあと、彼は肩をすくませる。

「成程な。気を抜くと、記憶と虚憶きよわくの境目がわからなくなりそうだ。キミの苦勞が目に浮かぶようだよ」

「どうせなら虚憶きよわくのことだけじゃなくて、普段の訓練やら何やらのときの俺の苦勞を察してくれたらいいのにな」

「む……」

身に覚えのありすぎたグラハムが閉口する。バツが悪そうにしてくれるだけマシだ。

グラハムの実力は折り紙付きだし、多少の無茶や道理ならば文字通りこじ開けてしまえる。ただ、他者にも己と同じレベルを『無自覚に』要求している節があった。

自分にそんな実力があるとは思わないが、どうやらクーゴはグラハムの要求するレベルに応える力があるらしい。もっばら、彼のフオーに走ることが多かったが。

そんなことを考えていたら、端末が鳴った。宛名を確認する。差出人は『エトワール』。

自然と端末をいじる速さが上がる。メッセージを開けば、数日前に投稿した動画の感想であった。クーゴの頬が自然と緩んだ。

本文を読み進め、クーゴは思わず手を止める。書いてある文章を何度も読み返しては、何度も確認しなおす。

『今度、コラボレーション企画をやりませんか？ その際、是非ともオフで顔と声を合わせてみたいのですが』

来た。クーゴは思わず、端末を握り締めて小さくガッツポーズを取った。

クーゴの様子に何か気づいたグラハムとビリーが端末を覗き込む。文面を理解した2人は顔を見合わせ、クーゴの方を覗き込んだ。

「ほう、デートのお誘いか。これはしつかり作戦プランを練る必要があるな。我々も協力しよう！」

「そうだね。僕たちにできることがあつたら言ってくれよ！」

我がことのように喜ぶ親友2人。しかしこのチームには、悲しい弱点があつた。

「……そう言うお前らは、女性をエスコートした経験があるのか？」

「あ」

「む」

ビリー・カタギリは、『好きな人がいるけれど告白したことのない』男である。年齢はそのまま『彼女いない歴』に換算できた。

グラハム・エーカーは、『空を飛ぶために縁談を蹴った』男である。もちろん、彼の年齢も、そのまま『彼女いない歴』に換算できた。

クーゴ・ハガネは、『そもそも恋愛する状況にない』を地で行った男である。当然、己の年齢はそのまま『彼女いない歴』に換算できた。

この中で一番モテるのは誰かと言われたら、クーゴは迷いなくグラハムを挙げる。

だが、上司の縁談を断った一件や空に対する情熱に負けて、最終的に女性の方が諦めてしまうのだ。

たとえ女性側が諦めなかったとしても、最後はグラハム自らが引導を渡す。女性を不快にさせずにあしろう技術は称賛に価した。

社交界に顔は出すものの、グラハムは常にマイペースだ。気分を害せばすぐに去っていくし、気分が乗れば延々と語り続ける。戦闘での

引き際なら察せるのに、その他に関する引き際にはやや疎かった。彼が女性を熱心に口説く凶など想像できない。むしろ、女性が勝手にわらわらと群がってくる方だった。社交界の光景を思い出し、クーゴは天を仰いだ。できればあそこに近づくことなく人生を生きていきたいのだが、階級には責任と束縛が付き物であった。

「……はあ」

前途は多難である。

まずは、『エトワール』に返信する文面を考えるとところから始めなくては。

オフ会のプランを練るのは、その後からだ。



女性はくすくすと笑っていた。端末に映し出されるのは、先程『夜鷹』から送られてきたメッセージである。

頬が緩むのを止められない。妙に浮ついた気分になる。鼻歌を歌いながら、女性は艦の廊下をスキップしていた。

もの鬱気に宇宙を眺めていたのは、眼鏡をかけた青年だ。彼は女性に気づくと、訝しげにこちらへ視線を向けてきた。十数分後、彼はヴェエダからの緊急ミッションを受領するだろう。困惑しながらも、粛々と準備手続きをしてくれるに違いない。

シミュレーターを終えた色男は、ピンクの髪の少女と何やら話していたようだった。女性が通り過ぎたことに気づき、2人は首を傾げる。あと数十分後に、彼らは自分の姿を見て仰天したメカニックに

「あれ見た!?!」と絡まれることになる。

反対側からやって来た浅黒い色の青年が女性とすれ違った。あと数秒後に、『もう一人の彼』と「あの様子だと男関係だ。察しろや」「ええええええええ!?!」と会話を交わし、反対側からやって来たハ口から『ヒトリシバイ、ヒトリシバイ』と言われてしまうのだ。

女性はシミュレーター室へと直行する。今日は『彼女』と一緒に、フォーメーションの確認をするという予定があった。

数分後に『彼女』がシミュレーター室へとやってくるだろう。

浮足立っている自分の姿を見た『彼女』は、いつもと変わらぬ仏頂面でいるに違いない。

お互いのプライベートには言及しない。それが、クルーたちの暗黙の了解だ。

しかし、シミュレーション終了後、『彼女』は眼鏡の青年から「ヴェーダからのミツシヨン」を言い渡されることになる。

それが女性の護衛だと知った『彼女』は、表情一つ変えず、2つ返事で引き受けるのだ。そして、ヴェーダが提示した案に眉をひそめる。

「楽しみだなあ」

女性はほう、と息を吐いた。腰まで伸びた薄緑の髪がさらりと揺れる。

もうすぐだ。もうすぐ『夜鷹』に出会える。顔を合わせ、声を聞き、言葉を交わすことができるのだ。

彼が歌った曲を聞きながら、女性は「未来」へと思いを馳せた。

黒髪黒目の小柄な東洋人。日本生まれの日本育ちだが、「空へと行かなくてはならない」という使命感に駆られてユニオンの軍人になった男性。本名は刃金はがね 空護くうご。名前の通り、ユニオンにおける「空の護り手」として活躍している。

彼は『エトワール』と接触するために動画を投稿し始めた。『エトワール』も彼と接触するため、積極的にコンタクトを取った。『夜鷹』

も『エトワール』も、客観的に見れば“お互いにお互いの計画に沿って動いた”だけにすぎない。打算が前面に出ていることは確かだった。

それでも、女性は胸を張って言える。「“自分”は確かに、“彼”の歌を通して知った“彼”自身に惹かれたのだ」と。歌い手としての『自分』も、かりそめの名である《自分》も、もう二度と表舞台に出ることのないであろう“自分”も、『夜鷹』および刃金 空護／クーゴ・ハガネに魅せられた。

『死ぬのが怖くて、恋ができるか』か」

『夜鷹』の歌を聞いて以来、女性は新たな虚憶きよわくを見るようになった。その中で、とある女性が零していた言葉だ。

世界への反逆者として生きる自分たちに、人並みの平穏や普通の人生など、到底約束されない。そんなものを望むこと自体が、己の破滅へと繋がりがねないからだ。

だけど、と女性は声高らかに叫びたい。自分たちだって人間だ。誰かを嫌いになったり、好きになったりするの^は当然のことである。それができなきや、真の平和は訪れない。

ただ、許し合えれば。互いがそこにおいて、生きていくことを許し合えるならば。その当たり前を、「当たり前なのだ」と言うことができれば。それが、平和である証ではないのか。

女性は知っている。そう願いながらも、世界を管理する機械そんざいから否定されたために、踏みにじられた命があったことを。

管理された社会。完璧な箱庭。誰も気づこうとしないけれど、小さな綻びは存在しているのだ。そこに気づかなければ、そこを直そうとしなければ、世界は変わらない。

「アイデア・クピディターズ」

「ああ、刹那」

後ろから聞こえた声に、女性——イデア・クピディターズは振り返る。この艦で自分は、ラテン語で『理想への憧れ』という意味のコードネームで呼ばれていた。

シミュレーターでコンバットパターンの練習をする相手が、目の前にいる少女——刹那・F・セイエイだ。勿論、彼女の名前もコードネームである。

中東出身の特徴である浅黒い小麦色の肌に、砂漠を思わせるような赤銅色の瞳。艶やかな黒髪は、少年と見間違えう程短くまとめられている。

「今日のシミュレーションレーター、更新されたみたい」

「聞いている。始めるぞ」

「了解。よろしくね」

挨拶を交わし、シミュレーターに乗り込む。

刹那の愛機はガンダム01、エクシア。格闘戦を得意とするタイプであり、MS全般だけでなく、対ガンダム戦も想定して作られた機体だ。

いや、対GNフィールド用のMSともいえる。エクシアの武装は、GNフィールドを切断できる仕様になっているからだ。

ガンダムタイプとの戦闘を予測した機体というのは、世間に太陽炉やガンダム系の情報が流出するという懸念に対応しているのだろう。

イデアの愛機はガンダムESP—Psyonタイプモデル03、スターゲイザー。イデアの持つ虚憶きよおくとイオリア計画、および『自分たちの計画』の技術で生み出された機体だ。元になった機体は、C・Eコスミック・イラと呼ばれる年代に開発された、同名の無人・自立運用展開教導機の宇宙探査用MSである。ぶつちやけると、非戦闘用MSだ。

そのため、刹那や他のマイスターたちのガンダムとルーツが違う。最初はそのことで面倒なことになりかけたが、イデアの能力とヴェーダの采配のおかげでどうにかマイスターになれたのだ。機械によって命を脅かされた存在の末裔としては、機械の采配で命拾いするとは

複雑な気分である。

白と青を基調にしたエクシアの隣に、純白のスターゲイザーが並ぶ。その様は、戦乙女の後ろに佇む天女のようなようだった。

スターゲイザーが背負った巨大なリングが、天女が羽織る羽衣を連想させる。スターゲイザーに搭載されているシステムを稼働させれば、機体周囲に発光現象が発生し、ますます「羽衣を羽織った天女」に近い佇まいとなるのだ。

ミッションスタートを告げる機械音と同時に、エクシアとスターゲイザーが出撃した。緑色の粒子が光の軌跡を刻む中、青緑に輝く光が縦横無尽に残像を刻む。非戦闘MSでありながら、驚異的な機動力を持つダークホース的存在——それが、アイデアの駆る愛機であった。

(タイプアンノウン系で組まれた部隊ね。……新しく追加されたタイプか。あれ、G—ARF型って名前になったのね)

タイプアンノウンとは、アイデアの虚憶きよわくから形成されたデータを基にして再現された機体たちの中で、黒い靄きよわくを纏って表示される機体の総称である。

アイデアの虚憶きよわくは映像で残せるが、それでも不鮮明な部分は存在した。『武装と能力値の再現は可能だが、機体の姿が不鮮明』な場合は、黒い靄を纏った姿で表示される。その仕様から、クルーたちからはタイプアンノウンとして呼ばれるようになった。

G—ARF型は、日本の剣術をベースにしたコンバットパターンを駆使する機体であった。メインウエポンは日本刀を模したようなブレードで、近接戦闘を得意としている。エネルギー消費が少なく、戦艦を真っ二つにしたりビームごと敵機を真っ二つにしたりする程の破壊力を宿していた。

剣の名前は「ガベラストレート」。名刀の名を冠した剣の切れ味には充分注意する必要があった。アイデアは刹那へ視線を向ける。彼女は無表情のまま、G—ARF型に攻撃を仕掛けた。ブレード同士がぶつかり合い、派手に火花を散らしている。

エクシアとG—ARF型のぶつかり合いを見た他のG—ARF型が刹那に攻撃しようとする。それよりも先に、スターゲイザーが武装を展開する方が早かった。ヴォワチュール・リュミエールの稼働により発生した光輪が、G—ARF型を弾き飛ばす。間髪入れず、ビームガンで追い打ちをかけた。直撃を受けた機体が爆散した。

同時に、エクシアがG—ARF型を一刀両断する。ガーベラストレートごと叩き切ったのだ。

やや荒削りな太刀筋であるが、彼女と出会ったときと比べると格段に成長している。イデアは微笑み、G—ARF型を翻弄するように戦場を飛び回った。

その隙について、刹那が次々とG—ARF型を屠っていく。エクシアの背後にいたG—ARF型が、右手にエネルギー弾を生み出して攻撃しようとしていた。間髪入れず、イデアも反撃に転じる。身に纏っていた光輪を飛ばし、G—ARF型を撃破した。

「ミッション、コンプリート」

「これで全機撃破。うん、時間ぴったりね」

刹那の無機質な声が戦いの終わりを告げた。成績を見て、イデアも満足げに頷く。

軽くインターバルを入れ、次のシミュレーションを始める。普段と変わらぬルーチンワーク。何度目かのシミュレーションが終わったとき、部屋の扉が開かれた。

眼鏡をかけた青年が、相変わらず仏頂面で立っていた。紫色の髪が揺れる。ああそうか、ヴェーダからの緊急ミッションを受領したのか。

「2人とも、ヴェーダからの緊急ミッションだ」

予想した通りの状況に、イデアはひっそり悪戯っぽい笑みを浮かべる。それは、青年と刹那が気づかぬ程ささやかなものだった。



格納庫に新しい機体が並んでいた。フラッグとA E U I ■ ■ トの系譜を継いだ、フラッグの究極系とも言える量産機。

機体の色は鮮やかなパールグリーンである。しかし、その中に混じって、青い機体のものがあつた。これは、搭乗者が部隊の指揮官であることを示している。

一般機だろうと指揮官機だろうと、この機体に乗れる人間は限られている。主たる人間の一角として、グラハム・エーカー隊長率いるソ ■ ブレイ ■ ■ ズ隊が挙げられた。

「こうして見ると、感慨深いものがあるなあ」

クーゴはしみじみと息を吐いた。

ブラストの猿真似、フラッグの猿真似。ビリーがヘリオンやイ ■ ク ■ を酷評していたことを考える。まさかフラッグの発展に ■ ナ ■ トの系譜が加わるなんて、誰が予想しただろう。

この2機を掛け合わせた新しい機体が生まれたことこそ、新しい世界の幕開けに相応しい。その一步として、この機体は華々しく空を舞うのだろう。自分もまた、この機体と共に空を舞う。考えただけで、口元が緩んできた。

今なら、グラハムの気持ちがよくわかる。空を愛し、空を翔ることを見望んだ彼の、子どもっぽい表情。きらきらした想いに触れた気がして、あまりの眩しさに目を細めた。今でもグラハムはその気持ちと若々しさを失っていない。

そしてそれは、新たな世代にも受け継がれつつある。クーゴは、新

しく配属された新人のことを思い出した。

ア□エス・□ル□ユと□ン・ス□□サー。彼らは昔からの友人らしく、とても仲が良かった。2人とも、グラハムに憧れる新米軍人である。若いつて素晴らしい。

今年でクーゴも35歳。思考回路もおっさん臭くなつたものだと苦笑する。

「存在自体が年齢詐欺と言われるキミが言う台詞か？」

「お前、その言葉そのままバツトで打ち返してやる」

今年で34歳になったグラハムに、クーゴは笑いながら言い返してやった。相変わらず、この男には「年齢十歳児」という言葉が似合う。現在34歳児の男は、今日も元気であった。

グラハムは先の大戦で顔半分に大きな傷を負っていたが、それでもまだ充分若く見えるレベルである。彼らしさを取り戻し、憑き物がとれたということもあるに違いない。

そこまで至るまでの道は、決して平坦なものではなかった。あまりにも長い道のりを思い出し、また気分が遠くなる。喉元過ぎればなんとやら、だ。

またこうして、くだらない会話で笑いあえる日が来るなんて。

戦いのさなか、ずっと願い続けた日常が目の前にある。それはとても幸せなことだ。

「一般機の中でも、キミのは更に特別性なんだろう？ E ■ P | ■ s

■ onバ ■ ■ トとは、『私設部隊』の技術部も奮発したものだ」

グラハムは笑いながら、クーゴが駆るであろう機体を仰ぐ。一般機とは違い、晴れた空を思わせるような真ま空そら色の機体。

先の戦いで『目覚めた』クーゴの、ひいては今後、現れ／増えているであろうクーゴの『同胞』たちのための、特別なシステムが搭載されている。

クーゴは己が搭乗する機体を仰ぎ見る。先の戦いで共に駆け抜けた愛機を、ほぼフルチューンナップした仕様だ。

これからも、自分はこの子と共に戦っていく。その光景を頭の中に思い浮かべる。

青い空を自由自在に飛び回る、真空色まそらいろの機体。考えるだけで、心躍るものだった。

クーゴの思考回路を中断するかのようになり、端末が鳴り響く。差出人は『エトワール』、もとい、彼女だ。

「ほう、デートのお誘いか」

グラハムが、からかうように目を細めた。

クーゴだつて負けていない。茶化すように彼を小突く。

「お前こそ。『彼女』とはどうなってるんだ？」

「ふふ。あえて言わせてもらおう！ 私と『彼女』は「やっぱりいい。今のでよくわかった」

全力で叫びそうになったグラハムを制する。彼を茶化すとロクなことにならない、典型的な例であった。

思い出したくない苦労が頭に浮かび、クーゴは天井を仰いだ。他人の恋路に巻き込まれた日々は、今でも時折フラッシュバックしてくる。

これ以上この話題にこだわると、クーゴの精神衛生上、辛いものがあった。どうにかして話題を変えよう、とクーゴは決意したときだった。

「グラハム少佐!!」

救いの天使が来た。クーゴは素直にそう思った。新米軍人2人組、□ニエスとジ□である。

グラハムは眩しいものを見るように目を細めた。彼がこの2人に目をかけていることなど、見てすぐにわかった。

ア□エスとジ□が並ぶ光景は、先の大戦以前の自分たちを思い出させてくれた。自分たちには長い戦いと離別があったけど、今、こうして共に歩んでいる。

彼らはどうだろう。自分たちのように、対立して離別するなんて経験はしてほしくない。クーゴとグラハムが肩を並べて戦えるようになったのは、仲間たちが手を貸してくれたおかげだ。

何かがあつても狂つてしまつていたら、クーゴはグラハムを連れもどすことができなかったかもしれない。対立したまま殺し合い、最悪の末路に至つていた可能性もある。考えるだけで恐ろしかった。

グラハムは2人と雑談を始める。その後ろ姿を眺めながら、クーゴはふと考える。

□ニエ□と□ン。この2人は、自分たち以上の偉業を成し遂げるだろう。彼らは互いに互いを高め合い、優秀なパイロットとして大成する。

最高の相棒。この表現がとてもよく似合う。クーゴとグラハムの関係とよく似た、けれども、クーゴとグラハムとは違う形で、彼らは空を翔るのだろう。

「……さて、今のうちに返信返信、つと」

端末を開いて『エトワール』に返信する。文章を推敲し、少しの間躊躇った後で、クーゴは送信ボタンをクリックした。



突如浮かんだ虚憶きよおくを記憶し終えて、クーゴは大きくため息をついた。あの虚憶きよおくは、少しだけ年を食った自分たちがいた。

あれは未来の光景なのだろうか。だとしたら、自分たちに『彼ら』のような後輩ができるということになる。クーゴはもう一度、端末を見直してみた。

「世代交代、かあ。俺らからしてみれば、まだまだ先のことなんだけど」

正直、実感がわかない。

当然だ。まだ自分たちは彼らと出会っていないし、彼らと年齢も近い。

あんな穏やかな眼差しで、若さを羨望するようになるにはまだ早かった。

いつかはあんな風になるのだろうか。……あんな風に、なれるのだろうか。

そこまで考えて、クーゴはふと考えた。「虚憶きよおくの中で笑いあっていたあの2人組は、あの後どうなったのだろうか」と。

「知っている／知らない」。その先を、クーゴは「知っている／知らない」。クーゴ・ハガネはその先を――

「……………命の、名前――」

突然、歌がクーゴの口をついた。再び虚憶きよおくがフラッシュバックする。

(――！)

赤い機体が飛び出した。強大な敵に向かって、青年は容赦なく銃口を向ける。だが、彼の一撃は、敵に一切のダメージを与えられていなかった。

珍しく、グラハムが戦慄する。クーゴの背中にも悪寒が走った。反応が遅れた赤い機体に、敵は容赦なく一撃を振りかざす。青年に待ち受ける運命は、絶対の死。

それはだめだ。そう思ったとき、青い機体が赤い機体の前に躍り出る。もう一人の青年が、赤い機体に乗る青年を守ろうとしているのだ。一撃が迫る。

そこへ割り込んだのは、クーゴが駆るエメラルドグリーン機体だった。グラハムが名を呼ぶ声が、一拍遅れて響く。

次の瞬間、すさまじい衝撃が走った。青い機体共々派手に吹き飛ばされる。爆ぜる音。背後から聞こえたのは、機体の暴走音。

止めなければと思ったとき、自分の機体にも異変が起き始めた。

ばちばちと火花が爆ぜ、警告音ががんがり響く。頭が痛い。自分の機体もまた、青い機体の異変に引かれているのだろう。

まずい。これはまずい。最悪だ。グラハム、と、クーゴは呼びかける。自分が何を言いたいのか理解したらしい。奴は今にも泣き出しそうな顔で、クーゴを見ていた。

それでいい、と、クーゴは笑う。ほら、撃て。お前にだから頼むんだ。撃て、早く。手遅れになる前に、早く。お前は隊長なんだろう。部下が見てるぞ、ばか。

いいや、ばかなのは自分だ。あいつにあんなことさせちゃいけないのに。こんなの、副官失格じゃないか。

そこへ、連邦のものとは違う機体が飛び出してくる。剣がこちらに向けられた。ああ、そうか、止めてくれるのか。

俺はどうでもいいから、後ろの奴は助けてやってほしい。こいつは将来有望な若者なんだ。

その訴えは聞き届けられたのだろうか。わからない。理解する前に、視界が真っ白に染まったからだ。

不意に、脳裏を駆けたのは一人の女性。最後に会ったのは、この戦いが始まる数日前のことだった。

会いたい。会いたいな。

こんなことになるのなら、もっと話しておくべきだった。

もつとよく顔を見ておくべきだった。後悔ばかりが募る。

そういやグラハム、大丈夫だろうか。また、変な方向に突っ走っちゃいけないだろうか。仮面つけたりしてしまうだろうか。最後のはやめてほしい。やっと外してくれたのに、またあんなのになったら困る。

ああ、そうか。俺は死ぬのか。未練と心配をたくさん抱えたまま、死んでいくのか。35年の人生。意外と短かったというか、随分と中途半端というか。20代前に命を落とすことが多い刃金の男にしては、長く生きた方だろう――

「クーゴ!? 大丈夫なのか!? 顔が真っ青だぞ!」

声が出た。見上げる。虚憶きよおくの中で見たときよりも若い、いつも見慣れた、グラハム・エーカーの姿だった。

奴はきよんとした顔でクーゴを見ていた。クーゴも、彼の顔を見ながら何度か瞬きをする。

あまりにも平穏すぎる光景。先程のような、人生クライマックス的な状態とは完全に無縁な状況だ。

必死になる彼の姿を見ていて、失礼だが、クーゴは思わず吹き出してしまった。途端にグラハムが眉間にしわを寄せる。

人が心配しているのに、と、彼は怒りの言葉を漏らした。「ぶんすこ」という擬音がよく似合う怒り方である。

それを見ているだけでほっとする。ふふ、と、クーゴは笑った。クーゴの変化を見たグラハムも、同じように笑った。

「その様子なら大丈夫そうだな。戦場に出る前からあんな状態だとは、不戦敗もいいところだ」
「ひつでえ言い草だな」

軽口をたたき合い、2人は前を向き直った。

周囲を見回し、待ち人を探す。

現在、クーゴとグラハムは『エトワール』と接触するため、待ち合わせをしているところであった。

ユニオンにある大きなショッピングモール街。相談して決めた待ち合わせ場所の目印は、大きなカエデの木と白いベンチだ。現在、クーゴとグラハムがいる場所がそうである。

自分たちは待ち合わせ時刻よりも、わざと早めに来て待機していた。クーゴはベンチに座って、グラハムは少し離れた場所で他人の振りを装いながら。

万が一、クーゴに何かあったときのための護衛役およびサポート役として、グラハム自らが同行を引き受けてくれたのだ。先程のことといい、とても心強い援軍である。

「さんきゅ。俺はもう大丈夫だから、他人のフリに戻ってくれ」

「その旨をよしとする！」

グラハムは大仰に頷いて、所定の位置へと戻ろうとした。が、奴はぴたりと足を止める。何かに取りつかれたかのように微動だにしない。

奴の視線を辿れば、中東出身と思しき少女と、薄緑色の髪を腰まで伸ばした女性がこちらへ近づいてくるところであった。

グラハムの視線は少女へと向けられている。彼女は白を基調にした清楚なワンピースを身にまとっていた。着慣れていないのか、どこか足取りがぎこちない。

「運命だ……」

グラハムが、感慨深そうにそう言った。

「は？」

「彼女こそ、私の運命だ！ 間違いない!!」

「何を言っているんだ、お前は」

意味を理解できなくて、クーゴは思わず眉をしかめた。相変わらず、グラハムは少女をじっと見つめている。

翠緑の瞳はきらきらと輝いている。良い意味でも悪い意味でも、奴はまっすぐであった。

少女は女性としばらく何かを話していたようだ。彼女は頷き、女性と離れようと歩き出す。

次の瞬間、弾丸を思わせるような速さでグラハムが飛び出した。クーゴが止める間もなく、奴は少女の元へと文字通り突撃する。

異常に気付いた少女が逃げようとしたが、それよりも先に、グラハムが少女の手を取る方が圧倒的に早かった。

彼は社交界でも滅多にお目にかかれない爽やかな微笑を浮かべている。しかし、少女も女性も、果てには周囲にいた人々もどん引いていた。

クーゴだって今すぐ他人のフリして逃げ出してしまいたい。しかし、ここで逃げたら誰が奴を止められるのだ。

だというのに、クーゴは動けなかった。目の前で起こっている超現象についていけない。

「貴様、何者だ!？」

グラハムの手を振り払い、少女が奴に問いかけた。

赤銅色の瞳は不審者への敵意に満ち溢れている。

クーゴには、警戒する少女の気持ちがよくわかった。

それを知ってか知らずか、グラハムは満面の笑みを浮かべた。

「私はグラハム・エーカー。キミの存在に、心奪われた男だ!」



このときのクーゴ・ハガネはまだ知らなかった。

「私は諦めたくないんです。人の心の光を、信じているから」

「貴方は、それを人に伝える力を持っている」

「貴方に会えて、本当に良かった」

クーゴの運命が、アイデアとの出会いから始まることを。

「フラッグファイターであるグラハム・エーカーは、既に死んだ」

「ここにいるのは、ただの亡霊だ」

「どうしてこうなったんだよ。お前、こんな奴じゃなかっただろ？」

「……ああ、そうだ。ミスターブシドー、お前に言伝を頼みたい」

「俺の相棒であるフラッグファイター、グラハム・エーカーに伝えてくれ」

「『どんな手を使ってでも、お前をあいつらの元へと連れ帰る』ってな！」

少し先の未来で、かけがえのない相棒と対立することを。

「う、うわああああ！ フラッグが、フラッグがああああ！」
「コイツ、フラッグに擬態した!? しかもメタリックカラーになった！」

「気を付けろ！ コイツに直接触れると同化されるぞ！」
「あ、でもかっこいいかも。カラーバリエーションで、この色を提案してみようかな」

「何だコイツ!? きつしよ！ きつも！ 超ひっでえ!!」

「仲間を取り込んで強くなりやがった！ なんて奴だ、インベーターめ！」

「サイズ差なんて関係ない！ 俺たちにだって、戦いようがある！」
「こんな進化はしたくないなあ。ゲッター線も使いよう、ってことか」
（そういえば、人革の民間企業に努めてる身内から『ゲッター線についての研究始めた』って聞いたけど……うん、まさかな）

「虫だー！」

「人間が、虫の女王と合体したぞー！」

「この突破口を開くのは、『アイモ』だな」

『『アイモ』って、確か、恋の歌だっけ？ あの虫の群れが、別の虫の群れに向けて贈るやつ。数百年に1回歌うか歌わないかの……』

「クーゴ、是非とも歌詞を教えてください!! ちよつと少女宛に歌ってる！」

「機械に支配されてたまるか！」

「人間様を舐めるなよおお！」

「機械仕掛けの神が、なんだってんだー！」

「管理社会、か……」

「未来は自分たちで決めるものだと思うけどな」

『あなたはそこにいますか?』って訊かれたんだけど、どう答えればいいんだ?」

「俺はここだ! ここにいるぞー!!」

「消されてたまるか! 俺がお前を消してやるー!」

「深い質問だよな。『あなたはそこにいますか』って」

ユニオンのシュミレーターが、クーゴの虚憶きよおくの影響を受けて、異種生命体だらけになってしまうことを。

「下半身がサイコロ……」

『気を付けろアレルヤ! ふざけたナリだが、あいつあやばーぞ!!』

「たった一撃でヴァーチエが大破しただど!? あのMS、大きさも威力も化け物か……!?!」

「俺は、ガンダムになれない……。ガンダムは、ハロだったのか……?」

「どうしてこんなMSを出した!? こんな悪魔を出したんだ! 言え、言うんだ!!」

ガンダムマイスターのシュミレーターが、イデアの虚憶きよおくを受けて、地獄絵図に化してしまうことを。

クーゴ・ハガネの災難が始まるまで、あともう少し。

4. 圧倒的な想像力不足

「貴方、『グラハムフィンガー』の人ですよね？」

少女を口説きにかかったグラハムに向けて、女性は何やら恐ろしい爆弾を投下してきた。

いっぞやの虚憶きよおくに感銘を受けたグラハムが、搭載してほしいと強請ねだっていた技だ。ユニオン軍内では有名な話である。

しかし、流石に、一般人には広まっていない。広まっていたらいで、軍の別方面が大惨事になる。フラッグの技術開発陣が過労死しかねない。

少女を口説いていたグラハムが振り返って首を傾げる。グラハムから解放された少女は、猫のように全身を逆立てて彼を睨みつけていた。

「ああ。確かに、私が『グラハムフィンガー』の人だが」

「貴女は、どうしてその技名を知っているんですか？」

生真面目な顔で回答をしたグラハムを遮るようにして、クーゴは女性に問いかけた。彼女の紫苑の瞳が、どこか無機質にこちらを見返している。

女性はぱちくり目を瞬かせ、蕾が花開くような笑みを浮かべた。神経を尖らせるクーゴとは完全に真逆で、自分がバカらしくなってくる。

グラハムを威嚇していた少女が女性の前に立った。相変わらず、けれど対象者をクーゴにかえて威嚇を続けている。

彼女は女性の護衛役としてここにいるのだろう。見た目は確かに可憐な少女であるが、戦場を駆けてきた兵士を思わせるような殺気が漂ってきた。アンバランスな対比である。

しかし次の瞬間、少女は再びグラハムから口説かれていた。切り替えの早さはグラハムのいいところだが、こんなときに発揮しなくてい

いはずだ。

世間には『努力の方向音痴』という言葉があるが、奴の場合は『方向性が方向音痴』と言えるだろう。グラハム自身が真面目にやっているから、尚更タチが悪かった。

「乙女座の私には、キミとの出会いにセンチメンタリズムを感じずにはいられない！」

「はあ!? 貴様は何を言っているんだ!？」

「ところで、キミは何座かな? 先程も言った通り、私は乙女座なんだ」

「俺は、牡羊座だ!」

少女はほぼ反射的に返答した。意外と律儀なのかもしれない。可愛らしい外見とは裏腹に、彼女の一人称は「俺」である。より一層、彼女のアンバランスさが際立っているように思った。

会話のキャッチボール、もといドッジボールが成立したことが嬉しかったのだろう。グラハムはぱつと破顔し、更に少女へ話しかける。ドッチボールは終わらない。剛速球が飛び交っている。

グラハムが口を開けば、少女への熱烈な愛の言葉がぽんぽん飛び出してくる。こいつが女性を口説くときは、ひたすらひたむきにぶつかっていくタイプのようだ。思えば、グラハムは自分の感情をストレートに表現する節があった。

どうしてこうなってしまったのか。クーゴはがっくりと肩を落とした。

先程までは心強い援軍だと思っていた。でも、今となってはトラブルをまき散らす張本人になり下がってしまった。グラハム本人は無自覚だ。本当にどうしてくれよう。

親戚関係以外で、これ程まで他人のフリをしたいを思ったことはない。こんなことになるなら、同行者を別な人間にすればよかった。

「陽気な人なんです。『グラハムフィンガー』の人は」

「……あー、まあ、そうですね」

女性は楽しそうにくすくす笑っている。彼女にとってグラハムは
“『グラハムフィンガー』の人”という認識らしい。

なんだか固有名詞みたいになってる、とクーゴが思ったときだ。女性
性はこてんと首を傾げて、言った。

「ところで、コラボ企画のお話をするんでしたよね？ 『夜鷹』さん」

クーゴは弾かれたように振り返った。女性は無邪気な微笑を浮か
べている。

再びクーゴは身構える。女性は相変わらず微笑んでいた。

すべてを見透かされてしまっているような感覚に、得体のしれない
薄ら寒さが走る。

おまけに敵意は一切感じなかった。それが、余計に薄気味悪さを助
長していた。

「貴女が、『エトワール』さん、ですか？」

「はい。オフでは初めましてですね」

女性——ハンドルネーム『エトワール』は、ふわりと微笑んだ。薄
緑の髪が風に吹かれ、さらりと揺れる。

どこからともなく、爽やかな香りが鼻をかすめる。初夏に咲く花を
思わせるようなそれは、クーゴにとって心地よいものだった。

『エトワール』は屈託のない笑みを浮かべ、クーゴに向けて手を伸ば
した。触れ合う手のひらが、妙に汗ばんでいるように思えたのは気の
せいだろうか。

ハンカチでしっかり拭いていけばよかったと後悔したが、もう遅
い。握手が終わり、互いの手が離れる。どこからどう見てもぎこちな
い動きだ。

何か言わなければ。クーゴはそう思ったのだが、喉につかえてし

まったかのように言葉が出てこない。どうやら『エトワール』も同じらしく、困ったように苦笑する。

「私、目が見えないんですよ。だから、あの子に補助を頼んだんですけど……」

「え……」

クーゴは驚いて息をのんだ。目が見えないと自称するのに、『エトワール』の紫苑の瞳は、まっすぐにクーゴを見つめている。

声で場所を特定しているのだろうか。首を傾げたクーゴを見て、『エトワール』はふわりと笑った。

「でも、わかるんです。貴方がどんな顔をしてるかも、どんな服を着ているのかも、全部わかります」

黒髪黒目の東洋人。紺色のニットカーディガンを着て、インナーは薄緑と白のギンガムチェックのシャツ。

グレーのストレートジーンズを穿き、黒と白のハイカットスニーカーを履いている……。

『エトワール』は、クーゴの姿や格好を的確に言い当てた。本当に目が見えないのかと疑いたくなるほど正確だ。

『エトワール』はじつとクーゴを見上げていたが、悲しそうに目を伏せた。

今にも泣き出してしまいそうだ。

「すみません、気持ち悪いですよね」

「いや、そんなことはない。……すごいな、と思つて」

素直に感想を述べれば、『エトワール』はきよとんとクーゴを見返した。クーゴの言葉の意味を考えているようだ。

そのすべてを理解し、彼女は安堵したように微笑んだ。春の陽気を

思わせるような笑みに、クーゴもつられて微笑を浮かべる。

後ろから、少女とグラハムのやり取りが聞こえた。声は鮮明なのに、何を言っているのか全然理解できない。

風が吹いている。とても心地よい。空は快晴で、人々の行きかう声が賑やかに響いてきた。今日もこの街は今日も平和だ。

自分は一体何を考えているのだろう。そう考えて、これは逃避だったと悟る。明らかに、自分の思考内容が無駄だからだ。

「ええと……」

しどろもどろ。クーゴは現在、この単語がよく似合うような醜態をさらしている。こんなことなら、女性の対応について勉強しておくのだった。

頼みの綱になる(?)はずだったグラハムは、少女を口説くので忙しい。いや、頼んだとしても、女性のあしらい方に特化しているタイプだから、アテにならなかつた可能性もある。

『エトワール』は苦笑しながら肩をすくめた後、クーゴと同じようにしどろもどろになりながらも、言った。

「こんなところじゃなんですし、移動しませんか?」

「あ、ああ」

差し伸べられた救いの手に、クーゴは頷いた。確かに、こんな場所で立ち話をし続けるわけにはいかない。

『エトワール』と『夜鷹』は、歌手同士でコラボをするためにここに来たのだ。野外で録音などできるはずはない。遮音性の高い場所に行く必要がある。

それに、クーゴは『エトワール』と接触し、情報を引き出す”という目的もあった。

状況は劣勢だ。先程のグラハムがバカ正直に本名を名乗ったせいで、『エトワール』に奴の情報が漏れてしまっている。

「情報を相手に渡さぬようにしつつ、相手からなるべく多く情報を引き出す」必要があったというのに。

「潔すぎるのも問題だと思う。そこがグラハムの魅力であり、部下たちが惹かれる理由でもあるのだが。」

「こういう奴だからこそ、クーゴも彼を憎めない。」

「たとえば、今まで／＼これからも散々振り回され、苦勞を掛けられようとも。」

「せつかくだし、少し話をしないか？」

「断る！」

連れであるグラハムの方へと向き直る。相変わらず、奴は少女を口説いていた。

「いいや、口説く段階を超えて、デートを始めようとしている。」

「彼がここに来た理由は一体なんだったんだっけ。クーゴは遠い目をしつつ、2人の方へ歩み寄った。」

「クーゴ。お前、何しに来たんだ」

「大きな息子を持った気分だ。少女の手を引いてどこかへ行こうとするグラハムを彼女をひっぱがしながら、クーゴは苦笑した。」

「少女の目が訴えている。明らかに管理不行き届きだ、なんとかしろ、お前はこの男の保護者なんだろ？」と。対して、グラハムは不満そうに口を曲げていた。」

「第三者から見たら、『180cmの金髪イケメンが駄々をこねる子どものような顔をして、生暖かい眼差しを向けてきた169cmの東洋人を見下ろす』光景など、さぞかしシユールだろう。」

「昔から親戚の子どもたちの子守をさせられてきたのだ。駄々っ子の相手には慣れている。」

「グラハムはぶすつとした顔でクーゴを見返す。」

「クー……『夜鷹』。キミは、キミの故郷で有名な故事を知っているだろうか？」

「馬に蹴られる趣味はないが、友人が犯罪者になるのを傍観する趣味もないぞ」

「失礼な。私は『まだ』何もしていない」

「おい」

問題発言である。しかも、奴の目は「そんな道理、私の無理で押し通す！」と盛大に宣言していた。

『エトワール』からの眼差しが痛い。彼女のバックにいる人物が、情報を自由自在に操れる。相手だということを考えると、このままではグラハムも、冤罪で職を辞す。危険性がある。

こいつから空を奪ってしまったら、おそらく何一つ残らないだろう。奴は軍人を天職だと思っている。グラハムと一緒に働くクーゴも、彼の才能を見るたびにそう思うのだ。すべてを奪われた男はどうなってしまうんだか。

そこまで考えたとき、歌が聞こえた。調査隊が結成されたとき、クーゴが一番最初に歌った歌だ。

声の主は女性。見れば、『エトワール』が歌っている。気を付けなければ喧騒にまぎれてしまいそうなくらい、小さな声だった。

どうして急に歌いだしたのだろう。クーゴが彼女に問いかける前に、虚憶きよおくが脳裏を駆けるほうが早かった。

『会いたかった……！ 会いたかったぞ、■■■■ウウウ!!』

聞き覚えのある、男の声。見覚えのある、ユニオンのフラッグ。

『いたか、我が愛しの■■■■よ！』

フラッグは、白と青を基調とした機体に向かって突進する。この場には、他にも■■■■と銘打たれた機体が存在しているのだ。

いや。このフラッグのパイロットにとっては、本当の意味で『愛しの■■■■』と呼べるものは、この機体だけだった。

『どれだけの■■■■が現れようと、私の心を射止めたのはキミ……。美しき光と共に、我が眼前に降り立ったキミだ!!』

あまりにも単純明快な理由。しかし、パイロットにとっては、そこそがすべてである。

同名の機体にふらふらしたのは、愛しの■■■■と呼べるこの青い機体が、彼が駆ける戦場にいなかったからだ。

『彼、メロメロなんですよ』とは誰が言ったのか。聞き覚えのある声だったのに、それが誰なのか見当がつかない。

戦場は変わる。砂漠の中から、大気圏内へと。

異種生命体が牙を剥く。エゴみみれの人間に愛想を尽かし、彼らは侵攻を開始していた。遊撃部隊がそれを倒し、少年と少女の道を切り開こうとしている。

そこへ乱入したのはやはりフラッグだった。■■■■と対抗できるカスタマイズを受けた2機のフラッグが、遊撃部隊に攻撃を仕掛ける。

指揮官機の狙いはただ1機。パイロットである男が恋い焦がれた、

『愛しの■■■■だ。』

そして、パイロットは盛大に宣言する。

彼が■■■■に焦がれた理由を。

ついに理解した、執着の答えを。

『この気持ち、まさしく愛だ!』

『愛……!?!』

『愛イ!?!』

「愛イ!?!」

そんな言葉が飛び出してくるなんて、誰が予想できるか。超展開に

も程がある。

虚憶きよおくの中で絶句したパイロットたちと一緒に、思わずクーゴも叫んでしまった。

味方からもこんな反応をされているというのに、フラッグのパイロットは本気らしい。言葉を続ける。

『だが愛を超越すれば、それは憎しみとなる！ 行き過ぎた信仰が内紛を誘発するように！』

おかしい。もうこの時点で何かがおかしい。何がおかしいのか説明できないが、はつきりとそう断言できた。

『彼』と同じタイプのフラッグを駆るパイロットは、愕然と『彼』の姿を眺めている。ついに恐れていた事態が起きた。

薄々感づいていたのに。『彼』の副官として傍にいたというのに。自分は、その姿を眺めていることしかできなかったのだ。

遊撃部隊とは一時休戦したはずなのに、『彼』は戦いをやめようとは思わなかった。そんな『彼』を心配して、自分はここまで来た。

■■■■を駆る『彼女』たちが問う。もう終わったはずなのに、と。自分もそう考えていた。だが。

『まだ何も終わっていない！ 私とキミとの関係は！』

『奴』はそう叫ぶなり、攻撃態勢に入る。

副官が『彼』の名前を呼んだが、『彼』はもう振り返らなかった。『愛しの■■■■』と『彼女』へ向かって突き進む。

それを間近で目にした少女が身を震わせている。文字通り「ドン引き」していた。少年が少女を励ます。

こちらと同じ気持ちなのだが、少女とは違って励ましてくれる相手などいない。『彼』を止められない、出来損ないの副官には相応しい末路だろう。

しかし、もう1機の乱入者が現れる。それに伴い、『彼』の進軍は止

まった。

そちらは件の少女と少年の関係者のようだ。どうやら、異種生命体と世界滅亡の鍵は少女にあるらしい。

男の誘いを蹴り、男と戦う。愛する少女のために少年は決断した。少年は少女を守り、少女は少年を信じる。若い2人が育む愛に、副官は胸を痛めた。

本当ならば。若者たちと形は違えども、『彼』もそんな風に『彼女』を想うはずだったのに。想っていたはずだったのに。

何を間違ってしまったのか、どうすればいいのかさえ、もうわからない。ハンプティ・ダンプティ。マザーグースの歌が頭を駆ける。

『彼はわかってるよ。愛を超越した憎しみの意味を』

『貴様もエゴに囚われた人間か……！』

噛みしめるように『彼』は言った。『彼女』は険しい表情で『彼』を見返す。

ならばどうする、と、『彼』は問うた。お前を討つ、と、『彼女』は答えた。

それでこそだ、と、『彼』は笑った。それは間違ってる、と、副官は言えなかった。

少年と少女が男と激突する。それとほぼ同じタイミングで、『彼』と『彼女』も戦いを始めた。

『貴様は歪んでいる！』

『そうしたのはキミだ！』 ■■■■■ という存在だ！』

その言葉に、『彼女』はひどく傷ついた顔をした。変わり果ててしまった『彼』の姿に、赤銅色の瞳が悲しげに揺れる。

いつもは（本人曰く）愛の力で『彼女』の変化に目ざとく気付いていたのに、『彼』はもう、彼女の感情など見ようともしなかった。

いいや、違う。変わってしまった『彼』にはもう気づけないのだ。

『彼女』を見ているが故に、『彼女』の心に気づけなくなっている。

『彼』の頭の中にあるのは、『彼女』を倒すという決意と意志。

もう、それだけだ。それだけが、『彼』をこの凶行きようこうに突き動かす。

だから自分は戦うのだ、と、『彼』は叫んだ。お前も世界の一部だろうに、と、『彼女』は問う。

ならばそれは世界の意志だ、と、『彼』は返した。違う、と、『彼女』は『男』の歪みを断じる。

その歪みを『自分』が断ち切る、と、『彼女』は宣言した。よく言った、と、『彼』は笑った。

こんなの間違ってる、と、副官は呟いた。その言葉は、2人のどちらにも届かなかった。

『……なんでだよ』

「……なんでだよ」

やりきれなくて、副官が呟く。クーゴも彼と同じだった。

クーゴの脳裏に、副官の想いがフラッシュバックした。『彼』と『彼女』の恋愛こゝろごとに巻き込まれ、なし崩し的に仲人的な役回りをする羽目になり、走り回っていた日々。

思えば、このときが一番楽しい時間だった。幸せな時間だった。平和の象徴、そのものの光景だった。なのに、どうして、こんな末路が待っているのか。

『俺は、認めないぞ』

副官は操縦桿を握り締める。視線の先では、『彼』と『彼女』が戦っていた。

『こんなの、絶対に認めない……!』

フラッグが赤い粒子をまき散らした。友人がチューンナップして

くれた、特別性のフラッグだ。

これが搭載されているからこそ、自分や『彼』のフラッグは■■■■
■と対等に戦える。この推進性があれば、2人の間に割り込むことも可能だ。

止めなければ。『友人』が間違った道を突き進もうとしているのを、黙って見ていることなんてできない。

やめろ、と、副官は言った。この場で戦う遊撃隊たちや2人には聞こえなかった。

やめろ、と、副官が言った。異種生命体と戦っていた純白の■■■■
■がこちらを向いたが、2人は戦いを続けていた。

やめろ、と、副官が言った。操縦桿を握り締め、文字通り2人の元へと突撃する！

『——やめろって、言ってるだろうがアアアアアアアアアアアア!!』

「——やめろって、言ってるだろうがアアアアアアアアアアアア!!」

クーゴは大声でそう叫ぶと、そのまま2人の方へと突っ込んだ。突然の乱入者に、グラハムと少女がぼかんとクーゴを見返す。

会話のドッジボールは既に止まっていたらしい。だが、クーゴには息を荒くする理由もなければ、体にのしかかってくる疲労感の出所もわからなかった。

もしかしたら、先程見た虚憶きよおくが原因だろうか。そう思ってグラハムを見る。ずきりと頭が痛んだ。また、虚憶きよおくがフラッシュバックする。歪んだ笑みを浮かべた男が見えた。彼の顔は、どんな顔だったか。特徴がはつきりしてきた。金色の髪に、翠緑の瞳。あの姿には見覚えがあった。

目の前でこちらを見るグラハムの姿に、よく似ている。ぱちくりと目を瞬かせるグラハムと目が合った。

彼が、あんな歪んだ笑みを浮かべる？ そんな姿、クーゴには全然想像できない。

『想像しろ』

不意に、誰かの声が耳をかすめた。

『想像できないなら、そこにあるのは死だ』やら『俺も想像力が足りなかったか……』と、立ちはだかる敵兵が言ってきた気がする。

勿論、その組織のトップに立つ男も言っていた。『想像力を失った人類は、滅亡の運命から逃れられない』と。

『想像しろ』と常々語っていた男であったが、彼もまた、後に『俺も想像力が足りなかった』と苦笑することになる。

最も、『あの戦い』では、自分たちの想像力なんて軽く凌駕するこ
とばかり起こったのだが。

考えるだけで気が遠くなってきた。クーゴは大きくため息をつく。

『夜鷹』さん」

ハンドルネームを呼ばれた。振り返れば、『エトワール』がじつとこ
ちらを見上げている。

ああそうだ。自分たちは、場所を移動しようとしていたのだ。すつ
かり忘れていた。

『エトワール』が少女を呼んだ。彼女は頷き、『エトワール』の傍に
控える。その立ち振る舞いは、まるで姫を守る騎士のようだ。

こちらにもそれに倣い、グラハムの名を呼ぶ。彼はぼんやりと自分た
ちを見返していたが、ややあつて、ぼんと手をたたいた。

悩み事に対する答えを見つけた子どものような顔。あれ、と、クー
ゴは思った。なにやら嫌な予感がする。

それは、見事に正解した。

「そうか、そういうことか」と笑いながら、グラハムは再び少女を見
た。少女は反射的に身構える。

「この気持ち……これが、愛……!!」

あかん。

クーゴは反射的にグラハムの首根っこをひつつかんだ。これ以上、こいつに発言させてはいけない。

『エトワール』と少女が、困り果てた顔でクーゴたちを見返す。本当に申し訳なかった。



月に一撃。

監視者という名の支配者どもに、鎮魂歌が贈られた。

「あれは……レクイエムか!？」

それを目視で確認し、クーゴは思わず声を上げた。前大戦で、ギ□バート・デュラン□ル議長が地球に向けて討とうとしていた衛星兵器である。

現在、レクイエムはオー■の所有する兵器となっている。ラク□や□ガリらの意向を考えると、二度と討たれることはないと思っ

た。他の仲間たちも驚きの声を上げる。特に、自分たちに戦いを挑んできた加■機関の面々に至っては、衝撃を隠しきれない。

驚く面々に、□神が真実を話し始める。長い時間をかけて練り上げた、彼とジ■ダの作戦を。

元仲間の□藤や■ルテ■■ツト・クロスをだまし、裏切ったふりをしてまでも組み上げた作戦。すべては、人類を救うためのものだった。

加□が人類の敵になることで世界を救おうとしたのなら、石□は□

藤の敵になることで加□と人類を救おうとしていたのだ。

「いやあく、上手くいって良かった良かった。これで連中は丸裸も同然！」

石□の笑い声が響いた。自分の作戦が成功したことに喜んでいらしい。

日本には『敵を騙すにはまず味方から』という諺があるが、□神はそれを地でいく作戦を展開していた。

「主君を裏切つてまでも、主君の大義を成就させようとするとは……。あれぞ、真の忠義！ 真のサムライスピリッツなのだな！」
「グラハム、ブシドー入ってる」

間違つてはいないけど、TPO的に脱線しかけたグラハムを制す。ピンポイントで痛いところをぶち抜かれた彼は閉口した。何かを察した『彼女』が、ひっそりと通信でフォローを入れる。

ただ、フォローがうまく機能しなかったらしい。ますますグラハムがしよげてしまっていた。

閑話休題。

「だからあのとき、ちゃんとやったじゃないですか。『安心して待つててください』、つてね……」

通信越しから響く、石□の声。悪戯っぽく笑う顔が見えてしまい、クーゴは苦笑した。

茶目つ気たつぷりな男でドツキリが好きそうな人だと思っていたけれど、流石にここまでとは予想外だ。

彼らから言わせてもらえば、クーゴもまた『想像力が足りなかった』ということだろう。

常日頃から『想像力』を語っていた加□にしてみれば、これ程まで

に（いい意味で）皮肉な現状はない。感極まった声で、彼は旧友の名を呼んだ。

□藤の腹心へ戻った石□は、彼へ注意を促した。鎮魂歌を1曲贈ったところで、ヒ■マキナは殲滅できるほど甘くない。

2回目の正直。転送フィールドが展開し、ヒトマキ■が姿を現す。

「な、なんだよ、あれは……!?!」

ロ□クオンが、奴を見て情けない声を上げた。

「め、めっちゃデカイ赤ちゃんやん!」

□ズナが□元をわななかせる。

「どっちかというと、『赤さん』表記の方が相応しそうなナリだな……」
「ああ、まさに外道な方の……」

クーゴがぼやき、□□□も同意した。『赤さん』とは、満面の笑みを浮かべた赤ちやんが「まさに外道」な発言をしている画像を指す。

その答えに「正解!」と宣言するかのように、■トマキナが咆哮した。すさまじいエネルギーが吹き荒れる。

次の瞬間、□ンが率いていた部隊が吹き飛んだ。次々に彼らの断末魔が響き渡る。ジ□の悲痛な叫びが響いた。

なんて破壊力だ。おまけに見た目が赤ん坊のため、人間である自分たちにはとてもやりにくい。それが月に陣取るヒトマ■ナたちの狙いなのだろう。

案の定、仲間たちは躊躇っているようだった。アルテ■メット・ク羅斯の面々を鼓舞するように、JUDAに抑留されていた□ヤツクとレ□ナーが激励を飛ばした。

戦場に現れた彼らの姿に、マ□キが驚きの声を上げる。2人は面々に、□神の真実を告げる。「自分たちの敵は同じだ」と。

□サキのところには、個人回線で通信が入る。

石□曰く、「預けていたものを返してもらおう」とのことらしい。

「僕に……預けていたモノ……？」

マ□キが首を傾げた。次の瞬間、戦場に新たな戦士が降り立つ。

「俺は■藤機関、私設部隊一番隊隊長……石□ □生！——参る……！」

彼の駆る機体は、■トマキナの群れへと突っ込んでいく。文字通りの獅子奮迅。次々とヒトマ■ナをなぎ倒していった。

仲間たちが茫然としている。それもそうか、石□が突然、加■機関の隊長だと名乗ったのだ。

■藤機関は、■ルティメット・クロスの敵である。□神は自分たちの敵になったのか、と、彼らはオロオロしているようだ。

そんなことはない、と。

クーゴが叫ぶよりも先に、仲間たちを一喝した者がいた。

「なに言ってるんだよ！俺たちの本当の敵は、目の前にいるじゃないか！」

浩□の言葉に、仲間たちはハツとした様子で彼を見た。そして、強い決意を宿した眼差しでヒ■マキナを睨みつける。

□藤は動かない。自分がしてきたことの間違いや、彼の恩師の言葉の意味を突きつけられて悩んでいるのだろうか。□一は□藤を叱咤する。

本当に倒すべき敵を見出した加□は、ア■ティメット・クロスの面々を見て頷いた。強い意志を秘めた視線は、寸分の狂いもなくヒ■マキナを射抜いていた。

「加■機関、全隊員に次ぐ！ これより我々は、全力でアルティメツ
■・クロスを援護する！」

王道展開とはこのことを言うのだろう。仲間たちが驚きと喜びに沸く中、クーゴは場違いなことを考えている自覚はあった。

「ナイスな展開じゃないか！」と浩□が笑った。正義の味方に憧れる彼らしい台詞である。その若々しさと熱い思いが、運命を切り開くのだろう。

加■機関の面々が戦術フォーメーションを組む。動いたのは、彼らだけではなかった。その場に居合わせていたジ□とア□ルもまた、ヒト■キナ掃討のために手を貸してくれるらしい。

この場にいる誰もが、戦うべき敵を見つけ出した。しかも、その敵は同じ相手。協力しない手はない。

「みんな、行くぞおおおっ！」

ア二□スの号令に従い、アルティメツト・クロ■の面々が飛び出していく。

『彼女』の後に続いてグラハムが空を翔る。ならば自分は、と、クーゴは振り返った。純白の機体越しに、彼女と顔を合わせて頷く。

飛び出したクーゴのMSに続き、白い機体も空を駆る。システムを起動した彼女の機体の周囲に、美しい光輪が出現した。

大丈夫。もう、自分たちは視線を外すことはない。□藤も石□も、ア二□スとジ□も、確かに同じ場所を見ていた。

操縦桿を握る手に力を込める。グラハムと『彼女』の連携の間を縫うようにして、クーゴも彼女と共に戦場を駆けた。

狙うは人類を監視するヒト■キナたち。これ以上、奴らの好き勝手にさせてたまるものか。

「さあて、奏でてやろうヒト■キナ！ お前たちへの鎮魂歌を!!」
レクイエム

「そして、私たちの勝利をもって、明日への凱歌を歌いましょう！」

「いいなそれ！ 約束だ」

「はい！ 『夜鷹』と『エトワール』のコラボです。張り切っちゃいます」

クーゴと彼女は笑い合い、ヒトマキ■へ攻撃を仕掛けていった。

◇

「……その結果が、これなのかい？」

「そんな目で俺を見ないでくれ、ベリー」

何とも言い難そうにしているベリーに、クーゴはこめかみを抑えて息を吐いた。

「キミとの逢引が無理なら、恋文を贈らせてもらおう！ この想い、メールに乗ってキミに届け！」

グラハムはそう言って、端末のボタンを押した。ピロリン、と、送信を告げる音が響き渡る。

相変わらず大仰なりアクションだ。恋は盲目と言うが、奴の場合は所構わず迷惑をかける方向に走るようだ。

数時間に1回、最低でも1日10通近いメールを送っているらしい。稀に返信が来るようで、その度に大喜びではしゃぐ。

クーゴはため息をついた。この1週間で、何度ため息をついたのか思い出せない。

グラハムの声をなるべく遮断しビリーの声を聞きとるため、クーゴは片耳にのみイヤホンをしている。BGMは、『エトワール』と『夜鷹』がコラボした歌だ。

虚憶きよおくの情報はきちんとまとめてある。彼女と共に歌った動画からは、普段よりもより鮮明に虚憶きよおくの情報を拾い集めることができた。

「俺も想像力が足りなかった」か」

この歌から拾える虚憶きよおくで、一番印象に残っている言葉だ。

認めよう。この事態を想像できなかったクーゴには、想像力が足りなかった。グラハム・エーカーは、常に予想の斜め上をかつ飛んできて男だと知っていたはずなのに。

しつこくてあきらめの悪い男だと、長年の付き合いで熟知していたはずだった。自分はまだ、彼のことを知っているようで知らなかったらしい。

「『エトワール』と一緒に歌を歌った場合、映像媒体からでも虚憶きよおくを見ることができ、かつ、他者にもヴィジョン共有させることができる」となると、上は死に物狂いで彼女を探すんだろうね」

ビリーは苦笑した。クーゴも肩をすくめる。

「そして、何人が〃身に覚えのない犯罪容疑〃で職を辞す羽目になるんだろうな」

「辞職者多数で壊滅する軍なんて前代未聞だよ」

『エトワール』、あるいは彼女についている後ろ盾がやりそうな気がする。上層部もそのことを懸念していた。

最近、やっとなこさ軍のイメージを回復してきたところなのだ。同じことをして、またダメージを喰らうなんて御免こうむる。

クーゴが上層部の人間だったとしても、同じ決断を下すだろう。悩

みに悩みぬいてのことだろうが。

彼女のおかげで、虚憶きよおくから情報を集めやすくなった。研究員たちが嬉しそうにデータをまとめる姿を思い浮かべ、クーゴは微笑む。

端末へと目を落とす。『エトワール』が送ってきたメッセージが表示されていた。『先日は楽しかったです。またコラボしましょう』というものだ。

次はどんな曲と一緒に歌おうか。自然と浮足立ってくる。

ふと顔を上げれば、グラハムとビリーが生暖かい眼差しを向けていた。まるで、保護者が息子の様子を見守っているかのようだ。

ビリーがクーゴにそんな眼差しを向けるなら理解できる。だが、自分より年下で「年齢十歳児」という言葉が似合うグラハムに、そんな眼差しを向けられるのは納得できない。

しかも奴は、つい数分前まで絶叫しながらメールを送っていた男なのだ。なんだか自分が負けたような気がする。クーゴがむっとしたとき、端末が鳴り響いた。

差出人は『エトワール』。途端に、ビリーとグラハムが端末を覗き込んできた。

今度のオフ会に関する相談内容である。どうやら、次のオフ会にも、グラハムが想いを寄せる少女が同行する予定だそうだ。

「おお……！」

グラハムが目を輝かせた。

「運命の女神は、私に味方してくれるようだ！　クーゴ、次のコラボは!? オフ会はいつだ!？」

「お前……！」

クーゴはげんなりと顔をしかませた。またため息が出る。

やれやれ、と、ビリーも肩をすくめた。本当にしょうがない。

「グラハムは、運命の女神さまに愛されているんだねえ」

「俺は貧乏神に好かれてるみたいだけどな。とんだとばっちりだよ」

端末に向き直ってメールを打つグラハムの背中を見つめて、クーゴとビリーは苦笑した。

おそらく、件の少女にメッセージを送るんだろう。彼女も大変だ。こんな変人に好かれてしまうだなんて。

その一端を担ってしまったことに罪悪感を抱えつつも、クーゴにはどうしようもなかった。



このときのクーゴ・ハガネはまだ知らなかった。

「しかし、AEUは豪気だよ。人革の10周年記念式典に、新型の発表をぶつけてくるんだから」

「……なんだ？ あの機体」

(あれは、見覚えがある。……どこで?)

「そうか、きよおく虚憶……!」

「失礼!」

「な、何を……」『失礼』だと言った」

「言えればいいという問題じゃないだろう。ああ、連れが申し訳ありません」

「——ガン、ダム？ あのMSの名前か？」

『はじまり』の日は、刻々と近づいてきていることを。

「キミの親戚が取り扱うキモノはすごいな！ どうだ、似合うか？」

「ああ。意外と派手な色が似合うんだな、お前って」

「意外とは何だ、失礼な」

「この陣羽織なんかいいんじゃないか？」

「うむ、気に入った！ 購入だ！」

(……………でも、この陣羽織、どっかで見たことあるなあ)

「キミの親戚の店で売っていた、この仮面に惹かれてな。つい衝動買いしてしまったよー！」

「へえ。顎まで隠すタイプと目元だけのタイプ、2種類か」

「どちらも精巧な出来だ。惚れ惚れするな……」

(……………あの仮面、どこかで見たことあるんだよなあ)

何かのフラグが着々と立っていることを。

「マクロスシリーズは神。歌で人の心をつなげて銀河を救うんだも

の。異論は認めない」

「だからキミたちは、こんな方向に進化したんだな」

「来るべき対話のために、人を革新させようとする貴方と似たようなものでしょ？」

「はははは。そんなぶつ飛んだ考えを持つキミが好きだよ」

「奇遇ね。私もそんな貴方が大好きよ、イオリア」

「よし。じゃあ、今日も愛を育むことにしようか」

「オーライ！ 出撃準備に取り掛かる！」

「……………お願いだから、騒音対策をきちんとしてほしいんだけど」

「諦めろりボンズ。あの2人、既に自分たちの世界に入ってるぞ」

「キミもそのつもりでいるんだろう？ レイ。キミの妻が部屋でスタンバイしてるのを見かけたよ」

「何を当たり前のことを言っているんだ。当然だろう。じゃあ、妻が待ってるから、これで。——E・A・レイ、いきまーす！」

「……………これが、『リア充爆ぜろ』という感情か」

「腹が立ったから、とりあえず明日は嫌がらせに赤飯を炊こう。そして、『目指せ、実子で野球チーム結成』『あと■人』って垂れ幕垂らしてやるんだ」

「あのバカップル夫婦2組は、どんな顔をするのかな？ 想像するだけで楽しみだよ。…………ふふ、フハハハハ！」

遠い日に、こんなやり取りがあったことを。

『またどこかで出会ったとき、彼女に胸を張れるような人間になる』
のが、目標かな』

「『またどこかで出会ったとき、彼に胸を張れるような人間になる』よう、努力を続けるつもりでいます」

『夜鷹』と『エトワール』は、互いにとって「運命」であったことを。

クーゴ・ハガネの災難は、ここから始まる。

幕間。 チーム・トリニティと田舎生活

ネーナ・トリニティはガクガク震えていた。情けない顔をして、ただ、自分に襲い来る恐怖を見上げていた。

頼りになる兄たちは別の敵と戦っている。今すぐこの場から離脱したいが、ネーナには引けない理由があった。前門の虎後門の狼よろしくな状態だからだ。といっても、後ろにいるのは狼よりも非力な存在であるが。

自分の後ろには、自分よりも明らかに年下の少年少女たちが脅えるようにして身を固めあっている。彼らもネーナと同じように、自分たちの身に迫る恐怖のせいで足がすくんでしまったのだろう。

彼らを守る距離にいるのはネーナだけだ。どうにかできるのもネーナだけだ。だから、何とかしなくちゃいけない。伊達にガンダムマイスターとしての戦闘訓練を受けてきたわけではないのだ。

震える体を叱咤し、ネーナは構えを取る。生身の格闘戦、経験は浅い。

それでも、それでも。

「う………」

震えながらも、ネーナはキツと眦を釣り上げた。瞳には涙がにじんでいる。

数分前までの自分なら「無様だ」と笑うのだろう。自分ならスマートにやり通せる、と。

だが、それがなんだ。

無様でもいい。

どれ程の無様をさらしたって、守りたいものがあるのだ。

「うああああああああああああああああああああああああああああーッ!!」

ネーナは咆哮し、駆け出す。敵もまた、ネーナに標的を定めて突っ込んでくる。

ネーナは強く握りしめた拳を振りかぶる。敵の腹めがけて、思いっきり叩き込んだ！

鈍い衝撃が拳を伝う。手がびりびりとしびれるような感覚に、ネーナは顔をしかめる。敵は、どうなったのだろう。

手ごたえは、おそらく、ある。しかし、敵は微動だにしなかった。この場にいる全員が、固唾を飲んで自分たちを見守っている。

ややあつて。敵の巨体がぐらりと傾いた。そのまま崩れ落ちる。地を揺るがすような音を立てて、敵は倒れた。土ぼこりが舞う。

2メートルはあろうかと思われる程の、イノシシ。それが、敵の正体だ。

ぜー、ぜー、と、ネーナは荒い息を吐きだした。嫌な感触が手に残っている。まだ、体が震えていた。

「ネーナ！」

「ネーナ、無事か!？」

ヨハンとミハエルが駆け寄ってくる。兄たちを見ていたら、ひどく安心した。体から力が抜け、ネーナは地面に尻餅をつく。

後ろにいた子どもたちを見れば、全員が無事だ。もう一度兄たちへ視線を戻す。兄の後ろには、2メートル近い熊が2匹、大地に倒れ伏していた。

兄妹3人が顔を見合わせ、後ろにいた子どもたちへ視線を戻した。彼らは宝石のように輝く笑みを浮かべ、自分たちへと駆け寄ってきた。

「ネーナおねーちゃん、すごいー！」

「ヨハンにーちゃん、かっこいいー！」

「さっすが、ミハエルにーちゃん！」

「ありがとう！ お兄ちゃん達、すごいよー！」

わいわいきやあきやあ。子どもたちの笑い声を聞くと、嬉しさと充実感に胸が満たされていく。

こんな気持ちになったのは、初めてかもしれない。

今まで、自分たちはガンダムマイスターになるために生まれ、訓練を積んできた。訓練の大半も、破壊活動に近いものだった。ずっと戦いばかりさせられてきた。

『自分たちの教官』として送り込まれてきた青年に徹底的に叩きめされた後、「パイロットとしての腕前だけでなく、人間性も磨くべきだ」との一言で、この場所に連れてこられたのだ。

日本の農村を思わせるような街並み。ド田舎と言っても差支えない山の中にある、中規模の孤児院。連れてこられて早々、子どもたちの遊び相手を言い渡されたときはどうしてやろうかと本気で思った。

子どもの相手は確かに疲れた。でも、皆が「おねーちゃん」とネーナを慕ってくれた。「おにーちゃん」と、ヨハンとミハエルを慕ってくれた。職員の人々も、3兄妹に親身に接してくれたのだ。

自分たちが彼らに心を許すまで、時間はかからなかった。

同時に、そんな機会をくれた『教官』に感謝した。

「よかった。キミたちに何かあつたら、我々は『教官』に合わせる顔がないからな」

ヨハンは穏やかな微笑を浮かべ、子どもたちの頭を撫でる。

「よっしやあー！ 今日には熊鍋とボタン鍋だ！」

ミハエルは満面の笑みを浮かべて、熊とイノシシを担ぎ上げる。やや重そうにしているが、子どもたちの前だからと頑張っているのだろう。

それを察したヨハンがミハエルに駆け寄った。どちらがどれを持つかの話し合いをしていたが、最終的にはミハイルがイノシシを、ヨ

ハンが熊2匹を持つことになったようだ。

「ネーナ、よく頑張ったな」

「すごいぞネーナ！ 流石だなー！」

「えへへ……」

兄たちからも褒められた。ネーナは自然と頬が緩むのを感じる。

見上げれば、自分が仕留めたイノシシが白目を剥いていた。今日はご馳走である。

子どもたちと一緒に帰路につく。やや起伏のある山道を歩いて、孤児院へと向かう。その間、兄妹と子どもたちは上機嫌であった。

この村では、熊やイノシシはご馳走である。他にも野生動物が獲れるし、野生種として生息している木の実も豊富だ。

子どもたちだけでなく、孤児院の職員たちも喜んでくれるだろう。うまくいけば、『教官』を驚かせることもできるかもしれない。

顔を仮面（ヘルメットに近い形状なので、正直ヘルメット表記の方がいいのかもしれない）で隠し、あまり表情に変化がない『教官』。彼の表情が変わるときを、是非とも見てみたいものだ。

そう思っていたときだった。

数メートル先の藪がガザガザと音を立てた。全員が思わず身構える。先程の熊やイノシシが現れたときの予兆と同じだからだ。

子どもたちが兄妹の背中に隠れる。彼らを庇いながら、兄妹は藪を睨みつけた。また何か出てくるのだろうか。

「ああ、キミたちか」

藪の中から出てきたのは、（ほぼヘルメットに近い形の）仮面をつけた青年——『教官』だった。一つに束ねたプラチナブロンドの髪が、夕日に照らされ茜色に輝く。白い肌に映えるような出で立ちであった。

面々は、彼の姿に息を飲んだ。彼の佇まいから漂う優雅さだけでなく、彼の状況に。

『教官』の肩には熊、イノシシ、鹿、雉が担がれていた。背負った籠には、溢れんばかりの鮭がぴちぴちと蠢いている。

前の方にぶらさがった籠には、キイチゴやグミなどの木の実がたくさん入っていた。

「あー！ ノブレスおにいちゃん！」

「すっげー！ ノブレスさん、大量だー！」

子どもたちがきやあきやあはしやぐ。それにつられたのか、『教官』——ノブレス・アムの口元が緩む。注意しないとわからないほど、些細な変化だ。

ノブレスを驚かせてやろうと思っていた気持ちは、彼の持ってきた獲物のインパクトに消し飛ばされてしまった。熊2匹とイノシシ1匹なんて、全然大したことない。

ワクワクした気持ちがいぼんでいく。自分たちはまだ、ノブレスには敵いそうにない。

ネーナたちがしよんぼりと肩を落としたとき、子どもたちと戯れていたノブレスが顔を上げた。ヨハンとミハエルの肩に担がれた熊とイノシシを見て、感心したように頷く。

子どもたちが獲物を指差し、「ヨハンにいちゃんが」「ミハエルにいちゃんが」「ネーナおねえちゃんが」と、事の顛末をノブレスに説明した。それらをすべて聞いたノブレスは、口元を綻ばせた。

仮面の向こうには、優しい眼差しがあるのだろう。なんとなくネーナはそう感じた。おそらくは、ヨハンとミハエルも。

「熊とイノシシ、仕留めたんだって？」

「え、あ、う……」

「あー、まあな」

なんだか居心地が悪くて、ネーナとミハエルは返事を濁した。

ヨハンはゆるゆる首を振る。

「貴方が狩ってきた獲物と比較すれば、大したものではありません」
「そんなことはない。キミたちは、子どもたちを守り抜いてくれただろう?」

強い調子で、ノブレスは否定した。

「よく頑張った、偉いよ。……流石だな」

ノブレスは誇らしげに笑った。一般人の手前、詳しいことは言えない。でも、彼の佇まいが確かに語っている。『流石は自分の教え子。ソレスタルビーイングのガンダムマイスターたちだ』と。

嬉しい。ネーナは素直にそう思った。誰かに認めてもらえることが、誰かに存在を肯定されることが、こんなにも胸に響くものだったなんて知らなかった。心がとても温かい。

思えば、ここに連れて来られるまで——あるいはノブレスと出会うまで、まともに扱われたことなんてなかった気がする。ヨハンが感極まったようにノブレスの名前を呼び、ミハエルが照れくさそうに笑った。

さあ帰ろう、と、ノブレスが促す。自分と子どもたちも、彼の背中に続いた。

子どもたちとノブレスは、大きな声で童謡を歌い始めた。「夕方だから、家族が待っている家へ帰ろう」という内容のものだ。

ネーナら兄妹は詳しい歌詞を知らない。だから、歌の変わりにメロディを口ずさんだ。

孤児院が見えてくる。そろそろ夕飯の準備が始まる時間帯だ。調理室の部屋には、淡く明かりが灯っている。

子どもたちが我先にと駆け出した。つられてネーナとミハエルも走り出す。ヨハンとノブレスは、そんな自分たちを優しく見守っていた。

「わんっ！」

「ダーリン！ お前ロリコンじゃったのか!？」

「フフフ…ハハハハハハハハ！ アハハハハハハハハハ!! アヒヤヒヤ！ ヒヤーハッハッハッハッハ！」

「レーベン…ああ…レーベン!!」

「僕はね…ぶつのも、ぶたれるのも、大好きなんだよ！」

「カイメラ隊はー?」

「病気ー!!」

子どもたちが、楽しそうに歌を歌っていた。巷で流行っている『電波ソング』。

この孤児院出身である人気アイドル歌手、テオ・マイヤーの歌だ。テオと同じくらい、ノブレスも孤児院の人気者だった。なんでも、多額の寄付金を贈ったり、子どもたちの遊び相手をしたり、テオとのコネクションを使って彼がここで様々な催し物ができるよう取り計らってくれるためらしい。

ネーナはCDジャケットを眺める。ゆるく跳ねたプラチナブロンドの髪に、透き通るような白い肌。アンバーのアーモンドアイが、どこかミステリアスな雰囲気漂わせていた。

視線を上げる。ノブレスは、じつと子どもたちを見つめていた。仮面のせいで表情はよくわからないが、なんとなく嬉しそうだとネーナは感じた。それを肯定するように、彼の口元が緩む。

気難しくてとっつきにくい相手だと思っていたが、意外と可愛いのかも知れない。

もう一度CDジャケットに視線を落として、ふと、ネーナは気づいた。

CDジャケットに写ったテオの笑い方と、現在進行形で微笑んでいるノブレスの笑い方。

「似てる……」

「何が？」

「うひゃあああ!?!」

ネーナが呟いたとき、ノブレスがいつの間にかこちらに接近していた。振り返ったとき、視界の真ん中、至近距離に彼の顔があり、思わず悲鳴を上げてしまう。

ネーナの悲鳴に兄2人が目ざとく反応した。「何かあったのか!?!」と、2人とも血相を変えて駆け寄ってくる。

ヨハンとミハエルは、『ネーナの顔を覗き込んでいるノブレス』という光景に、何か思うところがあつたようだ。顔が一層険しくなる。

ノブレスは彼らを見て、無言のまま顔を伏せた。そんなつもりはない、とでも言うかのように首を振る。真摯さが伝わってきた。

兄2人はネーナとノブレスを見比べては、なにやら複雑そうに眉をひそめた。彼らは何を悩んでいるのだろう。

悩みたいのはネーナの方だ。ノブレスの「そんなつもりはない」のニュアンスが、どうも気に食わない。

気に入らないことがあつたからといって癩癩を起こしても、現状を変えることなどできやしないのだ。勝利を勝ち取るためには、攻めるだけでなく耐えることも必要である。

ノブレスとシミュレーターを使った訓練をしていると、いつも痛感することだ。特にネーナは「トリニテイの中で一番我慢強い」と太鼓判を押されている。実に不名誉極まりなかった。

流石に「護衛対象が守る側自分たちに対して『自爆して死ぬ』と叫び散らしてくる」や「護衛対象が女性たちに狙われる理由が『女関係がだらしなすぎたため』』という状況でのシミュレーター訓練で、護衛対象を

撃ち殺したのはまずかったと反省している。

「そういや、今日の訓練は？」

ミハエルが、ぎこちなさそうに訊ねてきた。

しよんぼりしている（ように見える）ノブレスの様子に耐えられなくなったからだろう。

「今日の訓練はナシだ。ゆっくり休みなさい」

実にさらっとした答えである。ノブレスは笑った。

「ですが……」

ヨハンが慌てて彼を引き止める。自分たちのデビューはもう少しなのだ。少しでも訓練を積んで、ノブレスに近づきたいのだ。ミハエルとネーナも頷く。

しかし、ノブレスは首を振って語った。「キミたちは今日、充分頑張ったじゃないか」と。そう言つて、奥の部屋に鎮座する毛皮を指出す。2匹の熊と、1匹のイノシシ。トリニテイ3兄妹が獲った獲物だ。

次にノブレスが視線を向けたのは、電波ソングを熱唱する子どもたちだった。トリニテイ3兄妹が熊とイノシシを倒したことで、守りぬけた人々。また、ノブレスの口元が緩む。彼は子どもたちのことを大切に思っているようだ。

「今日のヒーローに鞭を打つほど、僕は鬼になれないよ。……甘い、とは、自他共に認められているがね」

ノブレスは自嘲気味に笑った。

彼はトリニテイ兄妹のあずかり知らぬところで、何かを抱えている

らしい。しかも、それを自分たちに知られぬようにしている。

なんて歯がゆいのだろう。今の自分たちでは明らかに足手まといだ。ノブレスを超えることは最終目標であるけれど、まずは彼と並べる程強くなりたい。

しかし、今日はシミュレーターに触らせてもらえないだろう。ノブレスは、一度言ったことは滅多なことが起きない限り撤回しない。

彼は明らかに、ネーナたちの進路妨害をしている。意地でもシミュレーター訓練をさせないつもりらしい。しょうがない人だ。

今日は素直に引くしかないだろう。3人はアイコンタクトを取り、ノブレスに向き直った。お言葉に甘えて、とヨハンが言えば、ノブレスはふわりと微笑む。

「皆ー！ そろそろ寝る時間だよー!!」

黒髪をお団子に結んだ女性が子どもたちに呼びかける。真夏の空を思わせるような瞳は、きらきらと輝いていた。

とても車いす利用者とは思えない。縦横無尽に車いすで駆け抜ける彼女の姿は、何度見てもハンディなんて感じさせないほどハツラツとしている。

子どもたちの何人かは不満げに口を尖らせたが、女性には敵わないようだった。渋々、自分たちの部屋へと戻っていく。

多くの子どもたちは彼女の言葉通り動いていた。

元気よく「おやすみなさーい！」と挨拶をして、自分たちの部屋へと駆けこんでいった。

『明日も楽しく過ごすためには、今日はきちんと寝なくちゃいけないんだから!』

女性が常々言っていた言葉を思い出し、ネーナは彼女の背中を見つめた。ノブレス曰く、彼女は「自分を助け、育ててくれた恩人」だという。

確かに、底抜けた明るさを見ていると救われたような心地がする。子どもたちが楽しそうに笑っているのも、彼女の明るさによるものなのかもしれない。

よく見るとスタイルも抜群だ。出るところは出て引き締めるべきところはしっかりと引き締まっている。男の理想体型を具現化したようなボディラインに、ネーナはギリギリ歯噛みする。なんだか負けた気がした。

というより、こんなことで敗北感に打ちひしがれる時点で、自分は女性やノブレスに敵わないのだ。尚更それを実感し、ネーナの肩身はますます狭くなる。パイロットとしても人間としても、まだまだ未熟だった。

子どもたち全員が部屋へと戻ったようだ。女性がうんうん頷き、自分たちの方へと向き直る。

「キミたちもありがとう。ゆっくり休んでね」と、彼女は笑った。太陽を連想させるような笑みだった。

「それじゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

「ああ、おやすみ！」

「おやすみなさい！」

ノブレスが淡く微笑む。自分たちも彼らと挨拶を交わし、与えられた部屋へと引き上げた。

ネーナは兄たちと別れて、割り振られた部屋へと戻る。「たとえ兄妹であっても、男女の部屋は別々にすべき」というのが女性の方針だった。

最初は何だと思ったが、プライベートというものを考えると、今ならわかる気がした。何かに浸っていたときとか、誰にも邪魔されたくないときとか。

ネーナは棚からCDを引っ張り出す。テオ・マイヤーが発表した歌だ。

最新作である電波ソングだけでなく、全作品が揃っている。歌詞の内容や歌唱力もルックスも悪くない。むしろストライクゾーンに入っていた。兄たちには及ばないが。

ミーハーで面食いだという自覚はある。ネーナは小さく咳ばらいすると、数世代前のCDプレーヤーにCDをセットした。心地よい音楽と歌声が流れてくる。

窓から空を見上げれば、満天の星空が広がっていた。大都会や宇宙から見る光景とは違い、どこことなく心が弾む。

聴き惚れている曲の影響もあるのかもしれない。ネーナはCDジャケットに写るテオ・マイヤーを見て、悪戯っぽく微笑んだ。

恋に恋する女の子——自分が憧れていた「普通」で「当たり前」の幸福を噛みしめながら、ネーナはくすくす声を漏らした。

『フタマタダ、フタマタダー!』

自分の幸せな時間に冷や水を浴びせてきたのは、紫色の丸いロボ——HAROだった。こいつは元から口が悪い。

聞き捨てならないことを言われ、思わずネーナが食って掛かる。

奴は反省するそぶりなどなさそうだった。

「HAROうっさい! ってか、二股ってどういうことよ!」

『シャアノニノマイ、シャアノニノマイ』

「この前シミュレーターで撃ち殺しちやったヤツと同じにしないでよ!」

「あたし、あそこまで酷くない!」と叫んで、HAROに向かってクッションを投げた。クッションの下から『ヒデー、ヒデー』と、くぐもった声が響く。

せつかくの気分が台無しだ。ネーナはため息をつき、CDプレーヤーを止める。道具とCD一式を片付けて、ベッドに横になった。

途端に、心地よい疲労感と睡魔に飲み込まれる。ネーナの意識が落

ちたのは、そのすぐ後のことだった。



「あの子たちのこと、大切にしてるのね」

「……ああ」

女性の言葉に、ノブレスは頷いた。

「あの子たちは、『アイツ』に使い潰されるために生み出されたと言っても過言じゃない。……僕は、それを認められなかった」
「そっか」

仮面に隠れているため、普通の人間はノブレスがどんな顔をしているかなんてわからないだろう。

しかしこの仮面は、『同胞』以外のすべてを騙すためのもの。『同胞』である彼女に通じるはずがなかった。

「自分と同じような目にあってほしくないのね」

言い当てられて、ノブレスは言葉を詰まらせた。ぐ、と唇を噛む。脳裏に浮かんだのは、一番幸せだった頃の時間だ。次の瞬間、それが崩壊した光景が脳裏にフラッシュバックする。

平穏を壊した相手の顔が鮮明に浮かんでくる。握り締めた手が震えた。感情が爆発してしまいそうになる。

今はまだ、そのときではない。ノブレスは自分に言い聞かせた。

トリニティ兄妹に言い聞かせている言葉を思い出す。勝利を手にするためには、攻めるだけでなく耐えることも必要だ。耐え忍び、策を練る。

そのために、ヤツに近づいた。ヤツの懐に潜り込み、ずっと監視を続けてきたのだ。

「……まあ、スポンサーとしての財力は優秀ですからねー」

つい、素が出た。

もつとも、大丈夫だと確信があるからこそその素なのだが。

女性はふっと目を細める。

「ノブレスの言う通り。おかげで、『ウチ』もウチの孤児院も潤ってるし」

事実を知ったらどんな反応するんだろ、と、女性はあつけらかなと笑った。ノブレスも一緒にくすくす笑う。

自分の私利私欲のために奮発していた財が、自分の首をじりじりと絞める結果になる。そう知ったときのアイツは、どんな顔を見せてくれるのか。

話を聞いていた『同胞』たちが集まってくる。彼らもまた、悪戯っぽく笑っていた。

「そうだ。機体の整備と改良、終わったよ」

女性の言葉に、ノブレスは頷く。そして、ちらりと階段に視線を向けた。

先程、部屋へと戻っていったトリニティ兄妹の後ろ姿が脳裏にちらつく。

「できれば、あの子たちの分もどうにかしたいんですが」

「今現在は難しそうだけど、ゆくゆくは改良する予定だよ。アイツにバレないように、抜け目なくね」

ヤエさん仕込みの大改造ー♪ と、女性は楽しそうに歌い始める。詳しいことは知らないが、彼女にとって『ヤエさん』は師匠らしい。『同胞』の中で彼女と同年代の人たちが、懐かしそうに窓の外を眺める。彼らは星空の向うに宇宙そらを見ているのだろうか。

長き旅を経てこの惑星にたどり着いた『同胞』たち。ノブレスは、この惑星で生まれ育ち、能力を『目覚めさせた』、『同胞』の中でも若い方に入る。

ノブレスは彼らの背中を見つめた。先輩の『同胞』たちは、どんな気持ちで宇宙そらを旅してきたのだろう。

女性はノブレスの方へと向き直る。

すべてを奪われ、茫然としていたノブレスを救い上げてくれたときに見た笑顔を浮かべていた。

「悪いね。『同胞』に『目覚め』を促すためとはいえ、アイツの元で、『ああいうこと』やらせちゃって」

「いいえ、構いません。歌うことは好きですし」

「でも、『こういうこと』もやらせられてるわけだし」

「大丈夫ですよ。懐に飛び込むと決めた以上、覚悟してたことですから」

心配そうにこちらを見上げる女性に、ノブレスは笑って答えた。

「貴女は『彼』と違う道を進んでいますけど、たどり着くべき場所は同じなんじゃない？ なら、それでいいじゃないですか」

ノブレスは、近郊にある格納庫のことを思い浮かべる。

あそこには、トリニティ3兄妹のガンダムスローネアイン・ツヴァイ・ドライと共に、ノブレスの愛機もあった。

ガンダムESSP―Psyonタイプモデル02、レガンダム。『同胞』の持つ虚憶きよわくとイオリア計画、および『自分たちの計画』の技術で生み出された機体だ。元になった機体は、伝説のニュータイプと名高いアムロ・レイが、宿敵との最終決戦の際に搭乗したものと同名のものである。

そういえば、アムロ・レイに異様な執着を見せる友人がいた。彼とテストパイロット争いをした思い出に、ノブレスは苦笑する。最終的に、彼は『伝説のニュータイプ……。僕の“超えるべき相手”として、相応しい存在だ。僕は必ず、奴を超えてみせる』と語って、パイロットを降りてしまったが。

アムロ・レイは「こいつ……動くぞ！」でガンダムを動かし、初陣でザクを倒してしまった男である。ニュータイプ最強の称号は伊達じゃない。ノブレスが持つ虚憶きよわくの1つでは、イオリアが開発したガンダムを平然と乗りこなし、機体に秘匿されていたシステムも何の苦も無く使いこなしていた。

詳しい虚憶内容きよわくは割愛するが、同じ声2つが会話のドツジボールを繰り返していたことが印象的である。

閑話休題。

女性は安心したように笑い、ノブレスの方を見た。『同胞』たちも、ノブレスをまつすぐ見返している。

ノブレスは頷いた。わかってる、大丈夫、やり遂げてみせる――言葉にせずとも伝わったようで、『同胞』たちも頷いた。

「それじゃあ、僕はやすみます」

「うん。おやすみなさい」

明日も早いのだ。彼らの教官として、無様な姿は見せられない。自分の部屋へと戻り、ベッドに横になる。仮面をつけたまま眠るのは、慣れたくないけれど慣れてしまった。いや、慣れざるを得なかったというべきか。

ノブレスは静かに目を閉じた。明日のシミュレーション、どのデー

タを使おうか。彼らの実力も伸びてきたのだから、もう少し難しめのものにトライしてみようか——なんて考えた。

大丈夫だ、これでも平和だから。

5. 愛すべき喧騒と日常

「私はキミが好きだアアア！ キミが、欲しいイイイイイ!!」

「貴様は歪んでいる……!!」

グラハムはわき目もふらず、少女の元へと突っ込んでいく。

少女はその手を振り払い、グラハムを睨みつけた。

『エトワール』とコンタクトを取る度、この2人のやり取りは恒例行事になっていた。

「やめないか、グラハム。彼女が困っているだろう」

クーゴは無理矢理グラハムをひっぺがした。これもまた、自分たちの恒例行事である。

グラハムは全く気にする様子はない。

「今日のキミも可愛い。まるで天使のようだな！」などと彼女を口説いている。

少女はいつも、白を基調としたワンピースやスカートを着ていた。今回も同様で、レースがふんだんに使われた、ふんわりとした印象のワンピースである。最初の頃は動きづらそうにしていたけれど、最近では慣れてきたようだ。今は、動きにくさよりも恥じらいの方が勝っているように思える。

グラハムは七分丈のテーラード風ジャケットを着ていた。上下の色が同じなので、一見するとスーツのような服装である。ただ、インナーはワイシャツではなく、涼しげな七分丈のシャツを着ていた。奴は似たような服の色違いばかり所持している。あとは式典用のスーツくらいだ。

周囲から色めき立った声が聞こえてきた。中には、この光景を指さして、連れの人々に怒られている人もいる。自分たちを指さした赤い

髪の少女が、保護者と思しき青年たちに咎められていた。ヘルメットに近い仮面をした青年は、3人を促して雑踏へと消えていく。

クーゴは不安になった。この2人が結ばれようと結ばれまいと、なんだか嫌な予感がして仕方がない。

自分が巻き込まれる末路だけは変わらない気がするからだ。いつもすみません、と、『エトワール』に視線で謝罪すれば、彼女は楽しそうにクスクス笑った。

腰まで伸びた薄緑の髪が風になびく。紫苑の瞳は、確かにクーゴを見ていた。本当に目が見えないのかと思うくらい、澄んだ眼差し。

親戚にジュエリーショップを経営している者がいるが、彼女が見せてくれる宝石なんかよりもはるか美しい。アメジスト、と、クーゴの脳裏に単語が浮かぶ。

『エトワール』はレース重ねのシフォンブラウスに、足元まで隠れてしまいそうなフレアスカートを穿いていた。空と草原を思わせるような色合いで纏められている。

(……眩しい、な)

クーゴは思った。対して自分はどうかだろうか、と、改めて服装を確認してみる。

青いストライプ柄のシャツをジャケット代わりに着て、七分丈のカットソーをインナー代わりにしている。下は黒いデニムジーンズを穿いていた。

カジュアルめな格好にした方がいいかと迷走した結果がこれである。ファッション誌を参考にしても、わからないものはわからないのだから仕方ない。

「素敵ですよ。とつても」

『エトワール』は静かに目を細めた。まるで、クーゴの思考回路、特に不安な気持ちを読み当てたような発言である。

クーゴは息を飲む。じつと『エトワール』を見ていたが、彼女から敵意や悪意に満ちたものは感じない。警戒する必要はなさそうだった。

彼女といると、なんだかペースを狂わせられっぱなしである。しかし、それは決して不快ではない。むしろ、穏やかで心地よい感じがした。

相変わらず、グラハムは少女を口説いている。少女が拳を突き出したが、彼は軽くその一撃を受け止めた。

「少女よ。今日のキミは、窓辺に佇む令嬢のようだな」

「俺に触るなッ!!」

次の瞬間、無防備となっていたグラハムの鳩尾に一撃が入る。

くぐもったような奇声したが、流石はMSWARDのエースパイロット、グラハム・エーカー中尉。

意地とプライドは一級品で、尚も踏みとどまっていた。少女のカウンターにも屈しない。

クーゴは苦笑し、再びグラハムをひっぺがした。少女には迷惑をかけたばなしである。後で何かおごってやるべきか。いいや、かえって逆効果だろう。

「キミばかりアピールしてずるいぞ!」と、クーゴに当たってくる可能性はある。もしくは、対抗しようと思地になって、少女へのアピールが激化する可能性だってある。

グラハム・エーカーは、クーゴの想像力を斜め上に飛んでいくような男だ。何が起こっても「グラハムなら仕方ない」で片づけられるレベルで済む。

クーゴは頭を抱えてしまいそうになった。進むも地獄、戻るも地獄とはこういうことか。

「ほら、行くぞ」

「こんなところで立ち話してもしょうがないし、ね」

クーゴと『エトワール』は2人を呼び、促す。

グラハムと少女は、慌てたような調子で自分たちに続いた。

『エトワール』との初接触から、もう数か月が過ぎた。クーゴは歌い手仲間の『夜鷹』として、月に何度か『エトワール』とのコラボ企画のために顔を合わせている。

護衛役とは名ばかりのグラハムと『エトワール』の補助兼護衛役の少女が、常に自分たちと同行していた。前者は完璧に下心満載であることは明らかだ。

さもありなん。グラハムが愛を叫ぶ少女は、『エトワール』と共に行動している。少女の連絡先は無理矢理聞き出したようだが、誰でも使えるフリーメールのアドレスだ。

名前やその他の情報は一切教えてもらえなかったらしい。彼女の判断は正しかった。1日10通近くメールを送る熱の入れようである。

正直、ストーカーとして訴えられても庇えないとクーゴは思っていた。

『犯罪には走らないでくれよ、グラハム』

『クーゴも。グラハムのこと、ちゃんと見張っててくれよ』

あつけらかなと笑ったビリーの顔が頭をよぎる。そんな軽い状態ではないのだ、グラハムは。

おそらく本気だ。少女と会う直前のグラハムは、出撃前と同じ表情をしているから。

本気になるとあんな顔するようになるんだなあ、と、クーゴは遠い目をしていた。

シヨップピングモールは相変わらず、人々でごった返していた。どこもかしこも人の話し声が聞こえてくる。行楽シーズンだから当然か。手をつないだカップルとか、仲良さそうな家族連れとか、仲良しの学

生や社会人グループとかが、楽しそうに笑いあっている。

クーゴは眩しさに目を細めた。ユニオン軍に入り、グラハムやビリーたちと出会って、調査隊が結成された後はメンバーたちとも交流を重ねてきた。充実した日々を送っていると、胸を張って言える。自分は果報者だとクーゴは思っていた。

ふと、クーゴは後ろを振り返った。グラハムも少女も、家族連れをぼんやりと見つめている。前者はどことなく羨望の色が混じり、後者はどこか悲しそうな色が見える。そんな2人に共通するのは、何とも言えない寂しさだった。

グラハムは孤児だったと聞く。時折、家族の光景を見ては、もの鬱気にしている彼の姿を見かけた。

彼の気持ちをすべて理解することはできないし、彼自身も触れてほしいとは思わないだろう。

クーゴはあえて、何も言わないことを選んだ。触れられたくない傷は誰にだってある。

『キミはどこにいても、キミと血がつながる『誰か』がいるんだな』

痛々しい笑顔を浮かべて、グラハムはクーゴに言ったことがある。本人にその気はないのだろうが、翠緑の瞳は、確かに『羨望』に満ち溢れていた。

当時のクーゴは返答に窮した。彼の想像する『家族』とクーゴの知る『家族』の姿は、あまりにも違いすぎる。その落差を、グラハムに語る気になれなかった。

「……………どうかしたのか？」

心配そうなグラハムの問いかけに、クーゴはハツとした。いつの間にか、クーゴは面々の最後尾にいたらしい。

「なんでもない。行こう」

クーゴは面々へと駆け寄る。木漏れ日の光が綺麗で、その中で自分を待つ人々の笑顔が愛しくて、静かに目を細めた。

これからもこんな日々が過ぎていくのだろう。クーゴはそれを疑いはしなかった。疑う要素なんて、どこにもなかったからである。



踊り狂っていた議会が、圧倒的な力でまとまっていく。誰も彼もがその案を称賛し、あれよあれよと話が進んでいった。

自分の友人たちがイキイキと計画を練り上げ、上司が満面の笑みを浮かべて親指を立てる。

議会の評決がとられた。鳴りやむことのない、割れんばかりの勢いで響き渡る拍手。

反対派は1票。問答無用で多数決の原理が執行される。議会に響く歓声に、自分だけが取り残されてしまったような気分になった。

いや、実際、クーゴは完璧に置いてけぼり状態である。反対に1票投じたのは、他でもないクーゴだからだ。本当にどうしてこうなってしまったのか。

満面の笑みを浮かべる友人たち（1人以外仮面着用）が、クーゴの肩に手を置いた。「言いだしっぺの法則発動」と、奴らの眼差しが叫んでいる。

「誰か。嘘だと言ってくれ」

クーゴは茫然自失のまま、そう呟くので精いっぱいだった。

*

雨降って地固まるという諺がある。

今回の一件は、(固まり方には難があるが)文字通りの結末だと言えた。

(■■■■■ファイトが議会を通ってしまったときは、どうなることかと思っていたが……)

しかも、その戦犯にして言いだしっぺは、まさかのクーゴ自身である。踊り狂う会議に飽き飽きしてぽつりと零した言葉が、ここまで発展してしまうとは思わなかった。

クーゴの呟きを聞いたブ□ドーが目を輝かせ、□クスが目から鱗を落とし、シヤ□が名案とばかりに頷き、トレー□が大歓喜したときの表情が未だに忘れられない。彼らは参観日に親の前で張り切る小学生の如く手を挙げて、いい笑顔でこの意見を述べたのである。

待ってくれとクーゴが叫んだのだが、議会とキリ□アは満場一致および満面の笑みを浮かべてゴーサインを出した。そのときの絶望感と言ったら、本当でない。仮面の下に決意を固めた代表者たちであったが、決意の方向性が明らかにおかしかった。

ブシド□はともかく、まさかゼ□スやシ□ア、終いにはト□ーズや□リシアまでもが食いつくなんて。誰が予測できるかこんなもの。どこの誰かが『想像しろ』とやたら連呼していた気がするが、クーゴは叫びたい。「お前はこれを想像できたのか」と。

誰かが『こんなもん想像できるか』と匙を投げ、『俺も想像力が足りなかったのか……』と項垂れた姿が見えた。満足した。

言いだしつぺの法則が適用され、コネク■・フォーアの元へ「見届け人」として向かう羽目になったときの気持ちなど、決して貴様にはわかるまい。

つい耐えきれなくなつて、コネクト・フォー■の面々に土下座してしまつた。俺のせいなんだ、と、洗いざらい報告した。ヒ□口と『彼女』がポンと肩を叩き、『エトワール』が飲み物を差し入れてくれた。涙が出た。

仮面3人組による仮面舞踏会につき合わされたア□口、□イロ、『彼女』も災難である。一番の災難は『彼女』であるが、ア□口も大変だつたとクーゴは思った。

彼は全然乗り気じゃなかつたし、『負けたら私の同志になつてもらおう。キミの仮面も手配済みだ』なんて言われてた。よかつた、仮面なんかつかなくて済んで。

「まさか、一緒に戦える日が来るとは思いませんでした」

クーゴを真正面から見上げ、『エトワール』は微笑んだ。

「俺もだ。前の一件以来、この面々が顔を揃えることはないと思つていた」

遠い日を思い出す。あの日、自分たちはお互いの譲れないものをかけて戦つた。

その結果、たくさんのものが失われてしまつた。

歌い手仲間の『夜鷹』と『エトワール』、その付き人であつた『グラハム・エーカー』と『少女』。戦いが始まる前に紡がれていた平穏は、もう戻つてこない。

けれど、すべてがなくなつたわけではなかつた。『夜鷹』はクーゴ・ハガネに、『エトワール』は□□□□・□□□□□□□□□□に、『グラハム・エーカー』は□スター・□シドーに、『少女』は□□□□・□□□□□□□□□□になり、形は違えどコネクト・■オーアに集つてゐる。

ここからもう一度、笑いあうことはできるだろうか。前と同じにはなれなくとも、前と同じように笑いあう日々を築きたい。クーゴは心からそう思う。□□を見れば、彼女も頷き返してくれた。薄緑の髪がさらりと揺れる。紫の瞳は、いつ見ても宝石のように美しい。

前の方に視線を戻す。仮面2人組がライバルたちと打ち解けあっている姿があった。ちなみに、もう1人は「機体を返しに行つたつきり帰ってこない」と見せかけて、もう1つの姿を使ってクルー内に溶け込んでいる。ア□□とセイシロ□□が何も言わなければ／気づかなければ、あとは問題なさそうだった。

「これで、人々も戦いの愚かさに気づいてくれればいいのだが」

うむ、と、クワト□が頷いた。相変わらず大きなグラサンだ。

事情を知る人間からしてみれば、「いけしゃあしゃあと」としか言いようがなかったりする。

もつとも、クーゴも似たようなことをやった経験があるため、あまりクワ□□のことを悪く言えないのだが。

「まあ、世界中へ向けた放送だからな。皆、わかつてくれるはずさ」「そうだな。これは、地球にも宇宙にも放映されている」

□ワトロの言葉に□クスが頷いた。その言葉に、クーゴはハツとする。

まずい。これは本当にまずい。

慌てて『彼女』の方を見れば、顔を真っ赤にしてわなわなと震えていた。今にも湯気が出てしまいそうである。気のせいか、瞳が金色になっっている気がした。

対して、ブ□ドーは『この戦いが全国放送されていた』ことを今更思い出したようで、「ああそうだったな」と笑った。清々しい、爽やかな笑みを浮かべている。

見えて可哀想なくらい羞恥に震える□□が、湧き上がる感情に任

せて□シドーへと突つかかった。対して、ブシ□ーは誇らしげに胸を張る。自分には何の後ろめたいこともないと言い放った。不敵で不遜な所は『グラハム・エーカー』の頃から何も変わらない。

『彼女』はますます顔を赤らめてしまう。本当に湯気が漂ってきた気がした。そこは、『彼女』が『少女』であった頃と何も変わっていない。おそらく、この後に待ち受ける出来事も、あの頃と同じものなのだろう。クーゴには見当がついた。

聡い者たちは頭を抱え、朴念仁どもが首を傾げ、おちやらけ担当どもが茶々を入れる。次の瞬間、ブシド□の体が宙を舞い、床に思いつきり叩きつけられていた。柔道の投げ技である。しかしブシ□ー、寸でのところで受け身を取ったらしくピンピンしていた。

「いきなり何をするのだ、少女！ 私はただ、キミに、全力で愛を語るうとしただけではないか！」

「人のプライドやその他諸々を叩き折っておいて何を言うんだお前はアアアア!!」

□シドーが、今度ははるか彼方へと吹っ飛んだ。運悪く近場に居合わせたア□口とク□トロを巻き込み、彼ら共々壁に激突する。

他の面々が慌てて止めに入るが、先程の「全国放送」で人一倍恥ずかしい思いをしたのは□□なのだ。『彼女』を止めつつ、さりげなくブ□ドーをとつちめる者が続出した。

「そんな大人、修正してやる！」やら「アンタって人はアアアア！」やら「任務了解。ターゲット、ミスター・ブ□ドー」やら「誰か警察を……ああそうか、自分が警察だった」やら、様々な声が聞こえたような気がする。

幼い子どもたちには、良識ある大人たちが対応してくれていた。彼らの目と耳をふさぎ、教育上に悪い情報すべてをシャットアウトする。さりげなく、□□□もそれに協力してくれたようだった。年齢制限は大事である。

■■■■ファイトは終わったはずなのに、新しい争いの火種(……

火種?)は身近に転がっていたらしい。また□シドーが宙を舞い、近くにいたケロ□軍曹と甲□を巻き添えにした。そろそろ收拾がつかなくなりそうだった。

「いい加減にしないか」

クーゴはため息をつき、ブシ□の首根っこをひっ掴む。

「俺の相棒がすみませんでした」

参事になりかけているクルー全員に対して、クーゴは深々と頭を下げた。

いつかと変わらない、いつもの出来事だった。



「最近、中尉の虚憶きよおくが、前より鮮明に見えるようになった気がするな」

虚憶きよおくのデータをまとめ終えたワードが、考え込むように顎に手を当ててそう言った。

以前よりも多くの情報が集まるようになったのと、調査部隊の面々が収集できる情報量が圧倒的に増えたのも、ここ数カ月のデータが証明している。

『エトワール』と接触し、彼女と歌を歌う等の交流を重ねたことが原因だろうと皆が言っていた。実際、クーゴのコーヴァレンター能力におけるヴィジョン共有の精度は増してきている。ついでに、虚憶きよおくが残

る時間も長くなってきた。

ただ、虚憶主であるクーゴ——おそらくは、その虚憶を実際の記憶および経験として体験したであろう『クーゴ』の感情をもろに受けるようになったとも言えた。

「虚憶の『クーゴ』さん、苦勞してますね……。ついでに、ブシドーさんがすっごくめんどくさいっす」

「むしろ、仮面3人組が面倒だった気がするぞ」

アキラが苦笑し、ダリルが遠い目をした。その気持ちはクーゴもよくわかる。この虚憶は、見るだけで疲れ果ててしまうからだ。

あの仮面舞踏会（と言う名の茶番劇）は、「人の心の光を人々に指し示す」という大義名分がある。しかしその実情は、仮面3人組の私念を払拭する襖と言った方が正しかった。

「『犯罪には走るな』って、常々言い聞かせてたのに……。……あれ、誰に対してそう思ったんだっけ？」

ビリーは深々とため息をついた。が、彼はすぐに首を傾げる。虚憶が以前より長く残るようになったとはいえ、それでも時間制限があることには変わらない。

もちろん、ヴィジョン共有した虚憶自体が穴あきで不鮮明な部分があるから仕方がなかった。『エトワール』と交流を続けければ、虚憶も鮮明になるだろう。

一通りの記録を終えた面々は、早速、今回の虚憶についての感想を述べていく。調査隊の面々との交流も兼ねており、この時間はクーゴにとって楽しい時間であった。

「でも、よかったよね。アムロくん。仮面舞踏会の仲間入りしなくて「だよなー」

「珍しく、ジオンがまともな判断下したな」

「あれも『まとも』と言えるかどうか……」

「ジオンの上層部が脳筋であることが発覚したって感じっすね」

「クワトロ・バジーナ。奴は何アズナブルなんだ……」

「あいつのいけしゃあしゃあっぷりには、もう笑いしか出ないよ」

「シヤアだけに？」

「やめろ、寒い！」

「しかもくだらない！」

わいわいがやがや。カラオケボックス内が団欒の声で埋まる。

ふと、クーゴは違和感を感じた。普段は団欒に加わっているはずの声がひとつ足りない。見れば、件の人物は隅に座って頭を抱えていた。

グラハムの顔が青い。青いが、どうしてか、クーゴはその理由を察していた。察してしまえる時点で、虚憶きよおくの影響が出ている証拠かもしれない。

「大丈夫か？」

「ああ、問題ない」

グラハムは息を吐き、眼差しを遠い場所へ向けた。黒歴史を抱えながらも、その中にある美しいものを集めて慈しんでいるかのようだ。

後悔なんてしない、と、翠緑の瞳が語っている。揺るぎない眼差しは、何を見ているのか。疑問には思ったが、今のクーゴにはそれを知る術はなかった。

ブシドー、と、グラハムは噛みしめるように呟く。いつもはその言葉に苦い表情を浮かべるのだが、今はどこか清々しきを感じるような微笑を浮かべていた。

ああ開き直れるのなら、迷走している真っ最中の『彼』でも許せるのかもしれない。それもまた、ひとつの答えの形なのだから。

何かを吹っ切ることができたのだろう。グラハムは、団欒の中に飛び込んでいった。彼の横顔には、先程までの苦さはない。

クーゴは微笑を浮かべ、持ち込んでいたエルダーフラワーのコーディアルを飲んだ。今日はこれで最後である。喉をしつかり休ませておきたい。

「あのカエル軍曹も白々しかつたな。フォローのつもりだったのだろうが」

「それが、かえってクワトロのいけしやあしやあつぷりを助長してるんですぜ」

「言いだしつぺの法則で巻き添えを喰らった『クーゴ』氏には、本当に同情するよ」

「誰があんなことになるなんて予想できるんですか。んなモン想像できませんよ」

いつもの光景が帰ってきた。それを眺めて、クーゴは目を細める。彼らの会話から、思い出したことがあった。

「そうだな。いつぞや体験した、『マグロ解体用の包丁で強盗団を制圧する』羽目になったときより酷かったかもしれん」
「え」

クーゴは目を閉じて頷いた。全員が弾かれたようにこちらを見る。そして、何か合点が言ったように「あ」と声をそろえた。

5年程前、日本で起こった事件。デパートに強盗団が押し入ってきたが、その場に居合わせていたマグロ解体士(?)がたった一人で強盗団を一網打尽にしたというものだ。彼は何も言わずに去ってしまった、以後も名乗り出なかったという。

丁度そのとき、クーゴは休暇を取って日本へ戻っていた。休暇を楽しんでいたとき、親戚から「マグロ解体のプロが突然来れなくなった。資格持ってるお前にピンチヒッターを頼みたい」と応援要請が入ったのである。

断る理由がなくて受けたが、まさかその先で強盗団とエンカウント

する羽目になるとは誰が予想できたか。そして、それをマグロ解体用の包丁で撃退する羽目になるとも。クーゴはため息をつき、肩をすくめる。

ユニオン内で一時期話題になった事件である。そして、同時期からユニオンの基地で『マグロ解体ショー』と寿司パーティーが行われるようになった。

その解体ショーの最中、クーゴは観客席にいない。会場には確かにいるが、解体ショーを間近で見ることにはなかった。寿司パーティーでマグロを食べている現場なら、グラハムたちは目撃している。

つまり何が言いたいかと。マグロ解体ショーの間、壇上でマグロを解体している職人は、紛れもないクーゴ・ハガネその人なのである。空色のツナギに黒いエプロンとバンダナをして、マグロ解体用の包丁を片手にマグロをばっさばっさ解体していく男。

『マグロ解体用の包丁は、まるで刀のようだな!』

解体ショーを見終えたグラハムは、寿司をほおびりながらそう言っていた。

ショーの最中、奴の歓声が一際うるさかったことは今でも記憶に残っている。

「そっか! だからハガネ中尉、解体ショーにいなかったんだ!!」

アキラがぼんと手を叩いた。

「イベントでの危機を救った代わりに、払ってもらった対価だよ。俺が解体するって約束でな」

「いつの間にそんな資格持ってたのか……」

「相変わらず、油断ならないお人ですぜ……」

ダリルとハワードが笑うが、口の端が引きつっていた。

自覚はある、と、クーゴも苦笑する。

親戚が資格を取る際に巻き込まれ、なぜか一緒に試験を受け、親戚よりも先に試験をパスし、親戚よりも早く資格を取ってしまったことは今でも覚えていた。

それと似たようなパターンで、クーゴは様々な資格を取得している。大半が宝の持ち腐れに等しかったが、こういうことに使えるならそれでいいと思う。

ちなみに、現在でも役に立っている資格があるとするなら、二刀流の剣道や居合、十手や鎖鎌くらいだろうか。主に、機体開発やコンバットパターンに活かすための資料としてだ。

特に十手は「日本武術の絶滅危惧種」と名高いレアモノである。使えるかどうかはわからないが、史料価値は高かった。

「そういうえば！ クーゴのおかげで、例の試作品が完成しそうなんだよ。エネルギーコストの低い新武器」

そう言って、ビリーが端末を操作した。

映し出されるのは、日本刀を思わせるようなブレード。

「菊一文字則宗、か」

「上は『ガーベラストレート』って呼んでるけどね」

無理矢理な訳し方だ。ビリーは苦笑する。確かに、「キクイチモンジノリムネ」より「ガーベラストレート」の方が言い易いだろう。

「ガーベラと菊じゃ、全然違うんだけどな」

クーゴは端末を動かした。ガーベラの写真と菊の写真を並べてみる。

一応、菊でありガーベラとも呼ばれる花があることは事実だ。しかし、やっぱり、似つかない。

「あ、俺、飛行機の関係があるんで戻ります」

「我々も、そろそろ戻らなくては」

アキラたちが時計を見て立ち上がった。

時間も押しているし、任務に支障をきたすわけにはいかない。実験チームと銘打たれてはいるが、皆、所属はバラバラだ。時間を見つけては、集まれる面々で集まって情報収集をしているにすぎない。そのまま解散し、面々は帰路についた。クーゴはグラハムやビリーと共に道を行く。

せっかく虚憶きよおくの調査も進んできたというのに、「メンバー全員に、自由に招集がかけられない」というのは地味にネックである。正式な調査隊として認められればいいのだが、不確かなものが多くてうまくいかないのだ。

今回の『ガーベラストレート』は、実験チームが集めた情報で生まれた新武装だ。これが認められれば、調査隊の成果になるだろう。『ガーベラストレート』は、調査隊が正式に結成できるかの試金石でもある。

クーゴは『ガーベラストレート』の凶面を確認する。
宇宙を漂う隕石に含まれる特殊金属を使った、日本刀を模したブレード。

原料である特殊金属は、とある会社が提供してくれるそうだ。ただ、少々気になることがあるとするなら。

「経営者は余程の酔狂なんだろうな」

「会社名が『悪の組織』とは、随分と個性的じゃないか」

クーゴの言葉をグラハムが引き継いだ。

とある会社——『悪の組織』は、『何でも屋』の色合いが強い技術者集団であり、有名なボランティア集団でもある。会社名および団体名とは裏腹に、彼らの存在は人々の生活を支えていた。

会社員は皆「世界征服をもくろんで行動しているが、それはいつも、ただの善意にしかならない」という設定を忠実に再現しつつ、会社経営およびボランティア活動を行っている。彼らのノリにさえついていければ、最高のパートナーになると言われていた。

具体的には、『街に凶悪なモンスターを放ってやった』と言って、有名なマスコットキャラクターを模したラジコンを街に放ち、老若男女問わず笑顔にするような連中である。彼らにとって最高の褒め言葉とは、『くそそう、悪の組織め！ 人を笑顔にするとは、なんてことをしてくれたんだ!!』だそうだ。

どうやら、技術班はその「設定」について行けたらしい。

「面白い集団だったよ」とは、ビリーの談である。

「クーゴは確か、二刀流だよ。もう1本のブレードも制作中だよ。大小サイズあるから、実質的には2本だけど」

ビリーはそう言って、凶面を提示する。

「長曾禰虎徹」、上層部は『タイガー・ピラス』と呼んでいるブレードだ。

脇差タイプのもと、『ガーベラストレート』同様の打刀タイプのものである。

打刀と脇差、打刀2本。剣道ではどちらの型も使いこなせるクーゴであるが、実際の戦闘ではどちらが使い勝手のいいかはまだわからない。

パイロットの技量も関係してくるだろう。どちらをメインにするか、悩ましいところだ。

「頑張ってくれよ。『ガーベラストレート』と『タイガー・ピラス』のテスト役はキミなんだから」

「はは、重いなそれは」

ビリーに期待され、クーゴは苦笑する。対して、グラハムは目を輝

かせながら凶面を見ていた。

日本かぶれである彼からしてみれば、刀なんて飛びつきたい代物だろう。本当は、彼自身が使ってみたかったに違いない。しかし、彼は日本武術のコンバットパターンにはあまり精通していなかった。

精通者と非精通者。テスト役にしたいのは、精通している方だ。師範代の免許を有するクーゴが選ばれたのは当然の結果と言える。でも、グラハムならば、意地と根性でコンバットパターンをマスターしそうな気がした。

次の瞬間、脳裏に見たことのない光景が走る。それが虚憶きよおくだと気づいたのは、すべての光景が駆け抜けた後だった。

黒い機体。近接戦闘に特化した、フラッグの究極系。益荒雄。佐之男。妄執。愛。憎しみ。仮面の男。……ミスター、ブシドー。

クーゴは思わずグラハムを見た。凶面に気を取られたグラハムも、クーゴの眼差しに気づいて顔を上げる。彼はきよとんと首を傾げた。まさか、そんなまさか。

「どうした？」と声をかけられ、クーゴは「なんでもない」と答えた。そうやって、自分たち3人は並んで帰路につく。今日もまた、平穏だった。



このときのクーゴ・ハガネはまだ知らなかった。

「フハハハハハ！ 『悪の組織』第1幹部、リボンス・アルマークとは、

僕のことさー！」

「わー、おにいちゃんすごーい！」

「何も無いところからお花が出てきたー！」

「コップもないのに水が出てきたぞ！」

「紙袋からうさぎがー！　かわいい！」

「……どうしてか、僕たちは子どもに親しまれてしまうんだ。なぜだろうね？」

「なんでだろーねー」

「ボクたちは、世界征服を目指してるのにねー」

「今回のマジックはうまくいったな」

「次は大掛かりなものに挑戦しよう。資料の収集に」

「ブリング、デヴァイン！　そういう『設定をぶち壊しにする』会話禁止!!」

「どうかしましたか？　アレハンドロ様」

「……い、いや。相変わらず、面白いなと思って」

『悪の組織』の徹底っぷりを。

「それ、『彼』の……」

『彼』の想いを継いで、私は空を飛ばう」

「そのためにも、私は——!!」

「……あいつら！　俺のコンバットパターン、覚えた上に組み込んだのか……!!」

クーゴの予想が、悲しい形で的中してしまうことを。

「……あれ？ このメンバーつて、大半が〃多元世界技術解析および実験チーム〃のメンバーだよな」

「あ」

「こんな偶然、あるんですねー！」

「まさか、こんな形で隊が組まれるなんて思いませんでしたよー！」

「なんて僥倖！ これで、おおっぴらに虚憶調査ができるな!!」

「新技術の解析もやり放題だね」

「あ、俺、『人の心の光／＼』が見たいです」

「『HEAVEN AND EARTH／UX』もお願いしますぜ！」

「『殴り合い、宇宙／OE』！ 『殴り合い、宇宙／OE』がいい！」

「私は『桜花嵐／UX』を所望するぞ、クーゴ！」

「あーはいはい。暇な時間があつたら歌うから、な？」

「なんだ？ このアウエー感……」

〃多元世界技術解析および実験チーム〃の面々が、オーバーフラツクス隊に選出されることを。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

6. シミュレーター・インフレーション

軽快な着信メロディが鳴り響く。アイデアぱつと表情を輝かせ、端末を開いた。

『夜鷹』から、またコラボ企画およびオフ会の相談事だ。メッセージを読み込むうちに、ふと目を留める。

「オフ会予定日が、友人の誕生日に近いんだ……」

『夜鷹』の友人とは、ユニオンの軍人、グラハム・エーカーのことだ。MSWAの精鋭であり、フラッグファイターとしての実力も高い。乙女座のA型で、刹那に運命を感じており、彼女に熱烈なアタックを繰り返している。彼のおかげ(?)で、刹那にも情緒が芽生えてきたように思う。

姉貴分としてそれは嬉しい限りだ。こういう件に鋭い方々は、なんやかんやと苦言を呈しながらも、「あの子に春が来た」と喜んでいる。事情は知っていた。自分たちは、世界に矢を引く者。どう考えても、普通の幸福なんて望めそうにない。だからこそ、彼女のささやかな幸福に対して、複雑な色を見せるのだろう。

心配なのはわかるけど、自分たちだって人間だ。誰かを大切に思うことを、誰かに文句を言われる筋合いなんてない。たとえ明日に死が待っていても、人を想うことを止められるはずがないのだ。

最近、グラハムからのメールに返信する刹那の姿をよく見かける。時折、顔を赤らめて照れるような素振りも見せるのだ。

少しづつではあるが、グラハムに絆されているのだろう。普段、彼に口説かれて殴り返すのは、照れ隠しなのかもしれない。

刹那は言葉足らずであり、同時に言葉そのものを惜しむタイプだ。言葉にすれば薄っぺらくなってしまうとでも感じているためだろう。

「下半身がサイコロ……」

『気を付けろアレルヤ！ ふぎけたナリだが、あいつあヤベーぞ!!』

「こんな機体、ヴェーダのデータには存在していない……!」

シミュレーターの方から声がした。現在、アレルヤ／ハレルヤとテイエリアが利用している。

対戦相手の機体はタイプアンノウン、G—D i c e型。その言葉通り、頭部はガンダムタイプでありながら、下半身がサイコロのような機体である。

到底、まともに動くとは思えないデザイン。どこからどう見ても、誰もが「なんだこれ、ふざけてんのか?」とツツコミを入れたくなる姿をしていた。

アレルヤが困惑から顔をしかめ、テイエリアが一抹の不安を抱えたまま機体を駆る。彼らは未知の敵へと挑みかかった。

この中で状況判断に長けていたのは、アレルヤと会話していたハレルヤである。彼の直感は正解だ。G—D i c e型は、外見こそふざけているものの、機体性能数値は異常なのだ。

2人はもうすぐ、地獄に直面するだろう。正直、虚記きよわくでこの機体の情報を手にしたアイデアでさえ、奴と戦ったら確実に撃墜され戦死する。賭けてもいい。

戦闘が始まった。次の瞬間、四角い死神が牙を剥く。

G—D i c e型が出してきたサイコロの目は6。次の瞬間、穴から巨大ミサイルが発射された。

キュリオスが機動力を活かして躲し、ヴァーチエとの連携で5発は叩き落とすことに成功した。残りの1発を、防御と超火力に特化したヴァーチエが受けに回る。

轟音。爆音。けたたましい警戒音が鳴り響き、テイエリアのシミュレーターにDENGERマークが点滅した。あまりの状況に、彼の焦った声が響く。

「たった一撃でヴァーチエが大破しただと!? ああMS、大きさも威力も化け物か……!?!」

愕然としたテイエリアを逃すほど、死神は優しくない。

間髪入れずに爆発音が響き、テイエリアのシミュレーターが止まった。大きく出た『撃墜』の文字。出撃からわずか数分足らずのことだった。

彼の『撃墜までの最短記録』更新である。テイエリアは、己のキャパシティを軽く超える現象に耐えきれず、ぼんやりと画面を眺めていた。

「くそっ！ よくもこんなMSを」

ハレルヤの言葉は、最後まで続くことはなかった。

G—Dice型が出してきたサイコロの目は1。次の瞬間、穴から拡散メガ粒子砲が放たれた。慌てて回避しようとしたキュリオスであったが、間もなく光に飲み込まれた。

轟音。間髪入れずに爆発音が響き、アレルヤのシミュレーターが止まった。画面に大きく出た『撃墜』の文字。彼もまた、『撃墜までの最短記録』更新である。

あつけにとられる男2人の背中はシユールであった。しばしの沈黙。彼らは茫然自失のまま、交代時間まで座っていた。

何も知らない刹那とロックオンがシミュレーター室に入ってきた。それを察知したアレルヤとテイエリアが、燃え尽きたような表情を浮かべて立ち上がる。そのまま、2人はふらふらとシミュレーター室を出ていった。

刹那とロックオンは首を傾げて2人を見送る。2人はこれから地獄へと踏み出すのだ。イデアは生暖かい眼差しで、刹那とロックオンの背中を見守っていた。2人がシミュレーターを起動させる。エクシアとデユナメスが出撃した。

「相手は……—!!?」

「な、なんだこりゃあ!」

2人の相手として出てきた機体は、H A R O—86型。どこからどう見てもハロだ。艦内でよく見かける、ソレスタルビーイングの愛くるしいクルーにしてマスコットたち。ただし、自分たちの知っているサイズよりはるかに大きい。

物々しい起動音とともに、普段はしまわれている足と手のアームが伸びる。「こいつ、動くぞ!？」と、ロックオンが戦慄する声が聞こえた。刹那なんて、驚きすぎてコメントできないでいるようだった。丸い悪魔が立ち上がる。H A R O—86型の目が不気味に光った。

マスコットが巨大化したという印象が強いH A R O—86型だが、可愛らしい外見とは裏腹に、G—D i c e型とタメ張れるほどの能力を持っている。機体能力値も搭載された武装もとんでもないものばかりだ。これを開発してしまったら、世界のパワーバランスは大崩壊するだろう。

単純な戦闘力で言えば、ガンダムなんて殲滅できる。「当たらなければどうということもない」で回避し続けることも可能だろうが、それはもう人間の域を超えなければ不可能だろう。ニュータイプでも連れてこない。いや、ニュータイプでも辛いかもしれない。

次の瞬間、H A R O—86型は耳(?)のカバーを開けた。そこから放たれるハロの雨あられは、ふざけてるとしか言いようがない。だが侮るなかれ。一撃でも喰らえば、先程のティエリアやアレルヤ／ハレルヤと同じ末路を辿るのだ。真面目にやる方が損する世の中だ。

エクシアが必死に回避し、デユナメスが攻撃を射撃で相殺しつつ回避する。間髪入れず、ハロの雨あられが降り注いできた。H A R O—86型の弱点は『武装がマルチロックに対応していない』ことだが、それがどうしたと言わんばかりにH A R O—86型は攻撃を続ける。

シユミレーター室は阿鼻叫喚。刹那の焦る声とロックオンの悲鳴が、見事な二重奏を奏でていた。

「何がハロ・ビットだ！ まんまハロじゃねえか！」

「くっ！ あまりにも量が多すぎる！」

次の瞬間、ビットではなく大量の泡が飛んできた。エクシアの移動範囲がグツと狭まる。デュナメスが射撃で泡を壊すが、間に合わない。

そのタイミングを待っていたかのように、H A R O—86型はまた大量のハロを放つ。泡で逃走範囲を潰されていたエクシアは、あつという間に飲み込まれた。

轟音。間髪入れずに爆発音が響き、刹那のシミュレーターが止まった。画面に大きく出た『撃墜』の文字。彼女もまた、『撃墜までの最短記録』更新である。

「刹——!?!」

ロックオンは、刹那の名を呼ぶことができなかった。H A R O—86型が、デュナメスに向かって猛スピードで突っ込んできたためである。慌てて防御体制に移ったが、H A R O—86型のタックルは難なくデュナメスの装甲をぶち抜いた。

轟音。間髪入れずに爆発音が響き、ロックオンのシミュレーターが止まった。画面に大きく出た『撃墜』の文字。彼もまた、『撃墜までの最短記録』更新である。接近戦対応用としての剣を使う間もない終わりだった。

2人もまた、アレルヤ／ハレルヤとティエリアと同じように、無言のままシミュレーター画面を見つめる。刹那とロックオンの口元が戦慄わなないた。気持ちはよくわかる。理不尽にも程がある『蹂躪』だ。

ややあつて。

ようやく2人が口を開く。

「俺は、ガンダムになれない……。ガンダムは、ハロだったのか……？」

刹那は愕然とした表情でそう言った。アイデンティティが崩壊してしまいそうな顔だった。

「どうしてこんなMSを出した!? こんな悪魔を出したんだ! 言え、言うんだ!!」

「この前も色々アレだったけど、今回は輪をかけて酷いな!」と叫んでシミュレーターを責めるロックオンは、先日のシミュレーターで出てきた敵を思い出しているようだった。

ちなみに、先日に見れた機体はタイプアンノウン、G-D e v i l型シリーズ。本体と一緒に、本体が子飼いにしていると思しき機体が大量に現れた光景は（悪い意味で）壮観である。

頭部はガンダム、下は触手のようなものが地面を割って屹立するその姿は、「こいつ本当にガンダムなの?」と首を傾げたくなるような出で立ちであった。勿論、それを見た刹那は「お前はガンダムではない」と否定していた。

シミュレーション結果は、全員が連携してどうにか撃破できたシロモノだ。G-D e v i l本体さえいれば、全自動でG-D e v i l型シリーズがセットになって登場する。

今度はプロトレマイオスも交えてシミュレーターを試してみたい。おそらく、スメラギやクルーたちは絶叫するだろう。

アイデアは端末に視線を戻した。
今の刹那では、オフ会の話し合いをするのは無理だろう。もうしばらく時間を置く必要があるそうだ。

端末を操作して『夜鷹』へのメッセージを打つ。『あの子ともよく話し合ってみます』というメールを送り、アイデアは端末を閉じた。

しかし、アイデアは知っている。数時間後、刹那にこの話題を振り『誕生日をお祝いしてあげようか』と提案すると、彼女は満更でもなさそうにすることを。

何度かのやり取りの後で、次のオフ会が『3泊4日の日本・京都巡り』に決定し、コラボ企画と共にグラハム・エーカーの誕生日を祝うことが決まることを。

アイデアは笑みを深くした。『夜鷹』から了解のメールが帰ってくる。

端末を閉じ、そろりとシミュレーター室を後にする。あの地獄絵図を見て、単騎出撃する気にはならなかった。

出たとしても、開始早々撃墜がオチだ。メンバー中、アイデアの『撃墜までの最短記録』がTOPになるだけである。

テイエリアが鼻で笑う図が見えていたが、今回のシミュレーター結果がそれを捻じ曲げていた。

「その気持ちはよくわかる」と深刻そうな顔で、肩を叩いてくれるだろう。

(でも、その励ましは、あの子たちにしてあげてほしいな)

でなければ、アイデアが知っている数時間後に繋がらない。だから、シミュレーター室の外にある休憩室で項垂れていたアレルヤとテイエリアに声をかけた。

「シミュレーター、大変なことになってたね」

「なんであんなもの受信しちゃったの」

ぐったりした表情で、アレルヤが訊ねてきた。そんなこと言われても、視えてしまったのだから仕方がない。

アイデアは遠い目をした。自分の表情から、アレルヤとテイエリアも何かを察したらしい。深刻そうな顔をして、ぽんと肩を叩いてくれた。

「どういうことは、あの2人も?」

「ええ。出てきたのはこれよ」

テイエリアに端末を見せる。表示されたのは、先程のシミュレーターの戦闘結果である。

H A R R O—86型、と2人が機体名を呼んだ刹那、展開する地獄絵図。圧倒的な戦闘力に、アレルヤとテイエリアは顔を青くした。

こんなのが三大国家やテロリストに流通していなくて本当に良かった。自軍が開発できれば儲けものだが、敵に開発されたらもう目も当てられない。

シユミレーター室の扉が開く。刹那とロックオンがふらふらとした足取りで廊下を進んでいった。燃え尽きた顔をしている。つい先程のアレルヤとティエリアと同じだ。

アレルヤとティエリアはしばし顔を見合わせた後、刹那とロックオンの肩にぽんと手を置いた。

その気持ちはよくわかる、という言葉の代わりに頷いて見せる。それだけで、4人は通じ合ったようだった。



「ねえ、俺も質問していい?」

淡い栗色の髪を揺らして、少年は無邪気な笑みを浮かべる。

「空が綺麗だっと思ってしたことある?」

問われた壮年の男性は、戸惑いながらも「是」と答えた。少年は嬉しそうに表情をほころばす。

どこからどう見ても、彼は『人』と同じだった。この少年がフェスト■ムだなんて信じられない。

空について語る少年の姿は、いつぞやの友人のことを思い出させてくれる。クーゴはちらりとグラハムを見た。

グラハムも嬉しそうだ。奴は空を愛し、空を自由に翔けたくて、空

軍に入った男である。空を愛したきっかけは、空の美しさへの憧れだった。

クーゴも同じような、けれど少しずれた理由で、空軍に入った。その根底には、『空が綺麗だ』と思ったから』もある。

(『空が綺麗』か……)

こんなにも単純な共通認識。共有できる感情。『目覚めた』クーゴだからこそ、胸に響くものがあつた。

*

紆余曲折あつたが、■エストウムの少年はアルティメット・クロスに同行するという。

彼は自分のミ■ルの代わりに、人類がどのような答えを出すかを見守るつもりだ。その顛末によっては、彼はミー■の判断に従って敵対することもありうる。

その証拠が、竜宮島の空だった。彼が無邪気に思いを馳せた空は、赤いオーラに覆われている。それが、竜宮島のコアを殺すのだ。

『人の心を理解するのは難しいよ。でも、『空は綺麗だ』って思っていて嬉しー！』

出撃前、少年が言っていたことを思い出した。あのときは何も言えなかつたけれど、「俺もだ」と頷きたくて堪らなかつた。

仲間たちのブリーフィングは終わっており、皆は竜宮島での自由時間を過ごしている。わずかな休息期間だ、今のうちにゆっくり休んで欲しい。

クーゴはゆっくりと背伸びし、立ち上がる。少し離れた場所では、

道□寺が司馬□に教えを乞うていた。互いの情報交換は捗っているらしく、熱を帯びた会話が続けている。

グラハムは相変わらず、□□にちよっかいをかけては宙を舞っていた。受け身の態勢が様になっており、何度倒されてもすぐに立ち上がる。

彼女の顔は真っ赤だ。照れ隠しでやっているのと知っているからこそ、グラハムは積極的にスキンシップを取りたがる。『彼女』のリアクションに一喜一憂したいようだった。

周囲に集う人々は、恒例行事だと言って静観している。茶化す者もいるが、馬に蹴られたくないので、深く追及するものはいなかった。それを見て首を傾げる少年の元へ、クーゴは歩み寄った。こちらに気づいた少年が、きよとんと見返してきた。

敵意がないことを示すように、クーゴはふつと頬を緩める。どうやらそれが伝わったらしく、彼も無邪気に笑い返した。

「キミは確か、クーゴ・ハガネだね。名前に『空』が入ってる」

「ああ。『空』を『護る』と書いて、クーゴなんだ」

読心術が発動していたようで、少年はクーゴの名前を言い当てた。補足してやれば、彼はより一層表情を輝かせる。

「いい名前だね」

「友達にも言われたよ」

「あそこで□□に蹴り飛ばされた人？」

「……………ああ」

少年が指をさす。その先で、グラハムが吹っ飛んだ。巻き添えで□一が下敷きになり、それを助けようとした美□と絵□が睨み合う。

軍配は、真っ先に浩□に駆け寄った□島に拳がった。漁夫の利。少女2人が彼の背中を射抜かんばかりの勢いで睨みつけている。文字通り目が光っていた。

グラハムはまた立ち上がった。満面の笑みを浮かべて□□にまたちよつかいをかける。流石、しつこくて人に嫌われるタイプと自他ともに認められた男だ。

正直、これを「友人だ」と言いたくない。実際に友人なんだけど、他人のフリをしたくてたまらなかった。

「貴方も、空が綺麗だって思ったことがある？」

「あるよ。そんな空が大好きだ。……だから、今の竜宮島の空を見ると、とても悲しい」

クーゴはそう言って、竜宮島の空に思いを馳せる。

コアの代替えとして乙□のサポートへ向かった少女が、「青い空が見たい」と叫んでいた姿を思い出した。

少年も悲しそうに目を伏せる。「俺だって、こんなことしたくない」と、憔悴しきった声で呟いた。

だが、自分たちは彼の■ールの提案に従うつもりにはなれなかった。その先にあるのは、竜宮島の終わりである。

竜宮島の子どもたち、およびアルティメット・クロスは、第3の道を模索している。未だ、答えを探している最中だ。

「じゃあ、島の機能は？」

「完全には言えないけど、各機能の安全稼働が確認できたわ」

山□の問いに、レ□チエルが報告する。代替えの効果が出ているという証拠だ。

しかし、□イチエルは表情を曇らせた。コアの代替えには限界があり、数週間を過ぎると、代替えの人物の命が危なくなるといふ。

仲間たちの表情も晴れない。タイムリミットは刻々と近づいてきている。仲間と共に話を聞いていた□□□も、心配そうに眉を下げた。

「だからさあ、早く降伏すればいいんだよ。そうすれば、キミたちはみんな助かる」

クーゴの隣に座っていた少年が立ち上がり、不満そうに仲間たちに言った。だが、彼のミルに従うことだけはどうしてもできない。それは、アルティメット・クロス全員の見解である。

□ズナが眦を吊り上げた。「『伝えろ』と言った、一□の言葉を忘れたんか!？」と、彼女はいきり立つ。少年は首を傾げた。これ以上何を伝えればいいのかと問いかける彼の目は、どこまでも純粹だった。

「戦いたくないという意志は伝えたのか」——□騎の問いに、少年はますます眉をひそめた。

「無理だよ……。■ールは俺にとって、キミたちで言う『神様』なんだ。神様には逆らえないでしょ?」

「それは、お前が思い込んでいるだけだ」

少年の言葉をやんわりと制したのは、グラハムを押しつけた□□だった。『彼女』はかつて、神のための聖戦だと信じ兵士として戦っていたことがあったらしい。

悲痛な表情で『神などいない』と断じた少女は、今では静かな目をした女性へと成長した。その背中を見つめ、グラハムは愛おしげに目を細める。

『彼女』の言葉を皮切りに、張□や孫□香が少年に促す。「神様は超えることができる」「神様に意見を言ってみろ」と。少年はますます困り果ててしまった。

「話さなければ何もわからないよ。相手の気持ちも、自分の気持ちも」

真□の言葉に、少年は首を振った。自分は指だから、神様を変えることなど不可能だと。

「キミたちだって、相手が自分の話を聞いてくれなきゃ、いつか諦めちゃおうでしょ?」

「いや、俺は諦めない」

少年の後ろ向きな言葉を遮るように、浩□が立ち上がった。

「たとえば話が通じない相手だろうと、何度だって諦めずわかりあおうとしてみせる。□□さんがそうだったようにさ」

□一は力強く笑った後、『彼女』へ向き直る。ロック□ンも笑い、茶化しながら頷く。

未知なる金属生命体の大群に後先考えず突っ込んだことを引き合いにだしてだ。

「そこが『彼女』のいいところだよ」

「可能性が1%でもあるなら、諦める理由なんてないわ」

「だな。可能性が0じゃないなら、それだけで充分試す価値がある」

グラハムと□□□も、『彼女』に優しい眼差しを向けながら頷いた。その通りだとクーゴも思う。

『彼女』は表情を緩めた。可能性が残っているのなら、チャンスを捨てるべきではない。

それを聞いた少年は押し黙る。一□が少年を諭したが、彼は固く目を閉じて首を振った。

世界を敵に回し、すべてを滅ぼす戦いに身を投じてしまえば、アルティメット・クロスの面々は『自分自身ではなくなってしまう』だろう。

だけど、件の少年も同じだった。アルティメット・クロスの助言に従い、ミー■を裏切るような真似をすれば、彼も『自分自身ではなくなってしまう』。

『空が綺麗』だと笑った少年。『自分と同じように、『空が綺麗』だと

思ってくれて嬉しい』と笑った少年。

同じだと笑いあえたはずなのに、どうしてこうもうまくいかないだろう。

世の中は本当に世知辛い。世界は、思った以上に難しいようだ。



「う、うわあああああ！ フラッグが、フラッグがあああああ！」

「コイツ、フラッグに擬態した!? しかもメタリックカラーになった！」

「気を付けろ！ コイツに直接接触すると同化されるぞ！」

本日、ユニオンのシミュレーターは満員御礼。おまけに阿鼻叫喚であつた。

向うにいる者たちが相手取っているのは、未知なる金属生命体だ。件の金属生命体は、直接機体に取りつくことで同化し、同化した機体と同じ姿・同スペックの能力を持つ存在へと変貌してしまう。

取りつかれて同化された場合、待ち受けるのは「死」一直線。「当たらなければどうということはない」を地でいく戦術を求められる。いかに敵の攻撃を躲し、相手を撃墜できるかにかかっていた。

この金属生命体のデータは、クーゴの虚憶きよおくを再現したものだ。同時に、〃多元世界技術解析および実験チーム〃が正式な調査隊になれるかどうかの試金石でもある。

クーゴの虚憶きよおくから再現されたデータは、この金属生命体だけではない。他にも多くの異種生命体のデータが集まっている。こんなに集

めてどうするんだという勢いで。

データの持ち腐れになるのは実にもつたいなかつたため、上層部に掛け合ってシミュレーターに導入してもらった。期間限定配信ではあるが、対人戦とはまた違った技術が求められる。

対異種生命体の訓練と銘打たれてはいるが、その戦い方は対人戦にも充分応用できるだろう。

「対人戦とは一味違ったスリルがある」という反響をいただいた。好評なら、また配信できるよう上層部に掛け合ってみるつもりである。

「あ、でもかつこいいかも。カラーバリエーションで、この色を提案してみようかな」

金属生命体がフラッグに擬態した画像を見ながら、ベリーのんびりと言った。

「やめておけ。見分けがつかなくなったら困る」

クーゴは強い調子でベリーを止めた。思った以上に棘がある口調に、クーゴは自分自身で驚いてしまった。ベリーも目を見張る。

しばし目を瞬かせた後、ベリーは肩をすくめた。冗談だと彼が口にして、クーゴはやっと安心できた。現実になったら大変なことになる。

見分けがつかないというのは戦場で一番危惧すべきことだ。下手をすれば同士討ちという痛ましい事故が起きる可能性だってあるのだ。

そういえば、いつぞやAEUの軍事演習で同士討ちが起きたそう。情報共有不足が原因の、痛ましい事故だったという。

確か、そのときの指揮官の1人がリーサ・クジョウ。その人物こそ、ベリーが想いを寄せる高嶺の花であった。

彼女はその事件がもとで軍を辞めたと聞いた。事件で恋人を失っ

たショックから抜け出せず、アルコールに逃げているという。

ビリーがいつも心配しているから、気づいたらクーゴも見ず知らずの女性のことを暗唱できるようになってしまった。

あまり嬉しくない副産物である。クーゴは肩をすくめて、別な方向を向いた。あちらでは別の敵と戦うシミュレーター利用者たちがいた。

「何だコイツ!? きつしよ! きつも! 超ひつでえ!!」

「仲間を取り込んで強くなりやがった! なんて奴だ、インベーターめ!」

「サイズ差なんて関係ない! 俺たちにだって、戦いようがある!」

彼らが対峙しているのは、インベーターという宇宙生命体だ。『ゲッター線』と呼ばれる特殊な光を浴びた生き物たちが進化を進めた結果、たどり着くと思われる種である。

ゲッター線は、コーヴァレンター能力や虚憶きよわくの研究が進んでいくうちに見つかった情報でもある。特に、人革のゲッター線研究は三国の中で一番進んでいた。

といつても、『ゲッター線』関係の研究は黒い噂が漂っている。『危険性を知りながら、禁断の領域に足をつ込んで』なんて話も上がるくらいだ。火のないところに煙は立たぬ。

研究者たちは「正しい進化をすれば、あんなものにはならない」と主張している。しかし、クーゴには嫌な予感しかしなかった。

アレはだめだと本能が叫ぶ。アレに手を出せばロクなことにならないと、確証を持って言える。根拠が説明できないのが痛い。

「こんな進化はしたくないなあ。ゲッター線も使いよう、つてことか」
「人のように喋るタイプもいるのだろう? しかも、データを分析すると、元は人間だった可能性が高いと聞いたが……」

ビリーとグラハムが複雑そうに画像を見た。確かに、インベーター

を取り込んでいる特異体は、人を思わせるような部分がいくつかある。

インベーターは言葉を話す種類はその特異体だけである。人間にゲッター線を浴びせたら、あれと同じものになってしまうのだろうか。

(そういえば、人革の民間企業に努めてる身内から『ゲッター線についての研究始めた』って聞いたけど……うん、まさかな)

クーゴはまた別な方向を向いた。

「虫だー!」

「人間が、虫の女王と合体したぞー!」

あちらのシミュレーターでは、虫のような外見の異種生命体だった。彼らは女王の作り出すネットワークにより、思考を共有し統一されている。

しかし、クーゴの虚憶きよおくから組み上げられた虫たちは状況が違った。女王が人間の介入を受けたため、こちらに攻撃を仕掛けてくるというものになっている。

思考回路を1つにすることができれば、確かに便利かもしれない。しかし、女王を乗っ取り攻撃を仕掛ける人間は、虫を兵隊のようにしか思っていないかった。

対異種生命体戦でありながら、野望に燃える人間の悪意をくじく戦いでもある。そんなシチュエーションが受けたのか、これは意外と人気がたりする。

虫の特徴は、ネットワークを構成する脳のような器官が、頭ではなく腹にあるという点だ。特殊な音波でコミュニケーションを取るという。

中には、人間の歌に反応を示す場合もあるそうだ。

虫の研究を進めていくうちに、人類が虫の歌を解読したものもある。

る。

それが後に、この事態の突破口を開くカギになるのだ。

「この突破口を開くのは、『アイモ』だな」

そう言つて、クーゴは首を傾げた。『アイモ』が何か、説明できなかったからだ。

きよわく虚憶に引つ張られているのだろう。

助け舟を出してくれたのはビリーだった。彼は端末をいじりながら、たどたどしく補足する。

「『アイモ』つて、確か、恋の歌だっけ？ あの虫の群れが、別の虫の群れに向けて贈るやつ。数百年に1回歌うか歌わないかの……」

そこへ、間髪入れずグラハムが食いつく。

「クーゴ、是非とも歌詞を教えてください!! ちょっと少女宛に歌つてくるー!」

「やめんか」

グラハムに『アイモ』を教えることは、ゲッター線の研究と同じくらいロクなことにならない。クーゴはそう直感した。

むくれるグラハムを尻目に、クーゴは別のシミュレーターで戦っている人々を見た。

「機械に支配されてたまるか!」

「人間様を舐めるなよおお!」

「機械仕掛けの神が、なんだってんだー!」

彼らが戦っているのは、マキナと呼ばれる機械兵である。本来は人類をサポートするために生み出された機械だったのだが、人類滅亡後

に紆余曲折あつて、再び生まれた人類を監視するようになった。

マキナたちは自らの力で進化し、人間の赤ん坊と似たような姿になったものもあつた。「想像しろ」と、常日頃語る男が恐れた敵。後輩の部下を一瞬で葬り去つた、恐ろしい敵だ。奴らは今も、世界を監視しているのだろうか。

最終決戦で崩壊する世界に取り残された機械仕掛けの神は、あの後どうなったのだろう。少しは「人間も捨てたものではない」とわかつてくれたらいいのだが。

マキナたちの一部は、地球と月を繋ぐワープホールを開くカギとして、自分の同胞を送り込む。

裏切り者は最良の共犯者を得て、人類の運命に挑んだ。

運命を変える力を持つものを救うため、未来を予知し、それを掴みとつて見せた。

彼らの希望の名前は、何だったか。点と点をつないで、飛ぶ。その機体名を、何と言つたか。

人類すら超えてやると叫んだ少年は、その言葉通りの奇跡を起こし、正義の味方となつたのだ。

「管理社会、か……」

ビリーが悩むように呟いた。人類は監視された方が平和に発展できるのではないか、なんて、思考を巡らせているのだろうか？

「未来は自分たちで決めるものだと思うけどな」

クーゴは思う。箱庭は、作る側にとってのみ都合がいいのだ。

押し込められる側にとつてはたまつたものではない。

「『あなたはそこにいますか？』って訊かれたんだけど、どう答えればいいんだ？」

「俺はここにだ！ここにいてるぞー!!」

「消されてたまるか！ 俺がお前を消してやるー！」

なにやら懐かしい単語が聞こえてきて、クーゴは振り返った。

彼らが戦っているのは、フェストウムと呼ばれる生命体だ。彼らは命そのもの——人間でいうところの『神』の命令に従い動くため、個という概念がほとんどない。

生態は金属生命体に似通ってはいるものの、体の構成物質はシリコンに近かった。金ぴかのくせに、と誰かが不満そうにしていたことを思い出す。彼は万年金欠だった。

フェストウムは常に問いかける。『あなたはそこにいますか』と。これに気を取られると、存在ごと消しにかかってくるため注意が必要である。

存在そのものを消し去る攻撃。それを喰らえば、何も残らない。

やはり、金属生命体同様、「当たらなければ（以下略）」の戦術が求められる。

「深い質問だよな。『あなたはそこにいますか』って」

クーゴはうんうん頷いた。隣にいたグラハムが、ふと思いついたように顔を上げた。

翠緑の瞳は、窓辺の向うにある空を見ている。彼はふっと笑みを浮かべ、噛みしめるように呟く。

「……矛盾の肯定。愛や憎しみ、そして痛みを知ったからこそ、勇気を得たか」

「どうしたんだグラハム。何か悟ったような顔をしているけど」

「何って……何だったんだ？ 思い出せん」

「キミの虚憶きよおくも穴だらけだね。『エトワール』と接触してもわかりそうにないの？..」

ビリーとグラハムが軽口の叩き合いを始めたとき、丁度いいタイミ

ングで端末が鳴った。連絡の主は『エトワール』。

見れば、今度のオフ会とコラボ企画についてのものだ。「せっかくなのでグラハムの誕生日も祝いたい」というクーゴの話に、彼女は乗ってくれた。

どうやら、グラハムが熱を上げる少女も協力してくれるらしい。そのため、今回は3泊4日の小旅行という予定になっている。

行先は京都。グラハムが日本に行きたいと言っていたので、古都の面影を残す京都を案内しようと思ったのだ。首都の東京はビルしかない。

奴はどんな反応を示すだろうか。満面の笑みを浮かべてくれればいいな、と、クーゴは笑みを深くする。

ビリーと漫才に近いやり取りを続けるグラハムを呼べば、奴は端末をいじるクーゴの姿を見て察したらしい。「次はいつ、どこでだ?」と、目を輝かせて近寄ってくる。

悪戯を計画する子どものようにワクワクする心を隠しながら、クーゴはグラハムに詳細を告げたのだった。



このときのクーゴ・ハガネはまだ知らなかった。

「ゲッター線の研究してた軍事施設や企業が、根こそぎソレスタル

ビーイングの攻撃対象になったらしいね」

「他のところも、施設が壊滅した直後、施設周辺に異形の生き物が現れたって話だよ」

「……………あれ、こいつらどこかで見たことあるな」

「奇遇だな。私もこれと同じものを見たことがある」

『ユニオンのXXXに怪物が出現！ 至急迎撃に当たれ!!』

「ガンダムのパイロットよ、聞こえるか？」

「ここは共闘した方が得策だと思うが、どうする？」

「——了解した。目標を駆逐する！」

「——ええ、お願い！ 援護は任せるわ」

フラッグファイターとガンダムマイスターが、一時的に共闘関係を結ぶことを。

「ハロ、サイコハロ、サイコロガンダム、マスターガンダム、デビルガンダム、金属生命体フリーブラ…………」

「マークニヒトが2体、ヴァーダント、プリテンダー、飛影、零影、オウカオー、ナナジン…………」

「…………どうやら、俺たちはシュミレーターに嫌われているようだな」

「ふぎけんのもいい加減にしろよ!? こんなモン、狙い撃つなんて無茶だっつー!」

「あらら。今日は奮発しましたねー」

「うおおおおおおお!! 忍者早え！ こつちくんなあああ!!」

「怖くなんか…………怖くなんか、ないんだから！ こ、怖くなんかあああ

「うわああああん!!」

「ネーナ、ミハエル! 最後まで泣くんじやない!!」

シミュレーターの難易度が、ムリゲーレベルまで跳ね上がることを。

「誕生日おめでとう、グラハム」

「おめでとうございます、グラハムさん」

「……誕生日、おめでとう」

「——ありがとう。今日は最高の誕生日だ!」

そうやって、乙女座の男が幸せそうに笑うことを。

「アタシは、絶対にアンタを許さない」

「アンタが大人しく死んでいれば、アタシはこんな人生を歩まなくて済んだのに!」

「そうだ。この力が、あれば——!」

「アタシは虚憶保持者のアンタなんかと違うのよ」

「最強の『■■■■』であるアタシに、敵うと思ってるの?」

悪意の種が、残酷なまでに美しく咲き誇ることを。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

幕間・リボンズ・アルマークの今昔語

「マクロスシリーズは神。歌で人の心をつなげて銀河を救うんだもの。異論は認めない」

黒髪をお団子に束ねた女性は、力強くそう宣言した。青い瞳はきらきらと輝いている。

「だからキミたちは、こんな方向に進化したんだな」

女性の言葉を聞いた黒髪の男性は、そう言って微笑んだ。

眼鏡の奥にある黒い瞳は、彼女を慈しむように細められる。

女性は彼を見て、悪戯っぽく笑った。

「来るべき対話のために、人を革新させようとする貴方と似たようなものでしょ?」

一本取ったり。女性の表情は、明確にそう語っている。男性も楽しそうに笑い返した。

「ははははは。そんなぶっ飛んだ考えを持つキミが好きだよ」

「奇遇ね。私もそんな貴方が大好きよ、イオリア」

女性と男性——イオリア・シュヘンベルグは顔を見合わせ、はにかんだように笑いあう。

熟年夫婦と新婚夫婦の両面を強く押し出したような2人の姿は、いつ見ても『常世の春』という言葉が似合っていた。

2人はひとしきりじゃれあっていたのだが、何やら物足りなくなってきたらしい。お互いの瞳をじっと見つめ合う。

そして、何やら重大な決断を下したように、厳かに頷いた。

「よし。じゃあ、今日も愛を育むことにしようか」
「オーライ！ 出撃準備に取り掛かる！」

女性の元気な返事により、夜戦開始の狼煙が上がった。イオリアは女性を軽く抱え上げ、研究室から私室へと向かう。

うふふあははと笑い声が響いた。周囲には花が大量に飛び散っている。それが現実には起きた現象なら、廊下は花まみれになっていたことだろう。

私室の扉が乱暴に閉められた。そこから響くのは、夜戦最中の騒音である。

扉の向こうから大量のハートが飛んできたような錯覚が見えた。おそれく疲れているのだろう。そろそろ休んだ方がいいのかもしれない。

でも、夜戦の騒音が響いてくる場所では、ゆっくり休めるはずがないのだ。今夜も寝不足決定か。全然嬉しくなかった。

「……………お願いだから、騒音対策をきちんとしてほしいんだけど」
「諦めろりボンズ。あの2人、既に自分たちの世界に入ってるぞ」

りボンズ・アルマークのぼやきに答えたのは、自分と瓜二つの姿をした男だった。

別に、りボンズと男性は兄弟でも何でもない。男性の遺伝子によってりボンズが生まれたという点では、一種の親子関係とも言えるだろう。

しかしりボンズにとって『母』と呼べる人は、先程夜戦に突入した女性の方だった。まあ、彼や彼の妻にも可愛がってもらってはいるけれど。

りボンズはジト目で男性を睨む。

「キミもそのつもりでいるんだろう？ レイ。キミの妻が部屋でスタンバイしてるのを見かけたよ」

「何を当たり前のことを言っているんだ。当然だろう。じゃあ、妻が待ってるから、これで。——E・A・レイ、いきまーす！」

どこぞのニュータイプがたった1回だけ言った名台詞を残し、男性——E・A・レイは自分の私室へと突撃した。こちらも夜戦開始である。

乱暴に扉が閉まった。やはり響く夜戦の騒音。あっちもこっちも変わりはない。リボنزは疲れ果てた気分になった。

今晩は、2組の夫婦による夜戦騒音のせいで眠れそうにない。おちおち休むこともできないだろう。これで寝不足は確定した。

そう考えたとき、ふと、リボنزの中に込み上げてきたものがあった。

感情の出どころを冷静に分析すれば、おのずと答えは見えてくる。

「……………これが、『リア充爆ぜろ』という感情か」

眩いた途端、リボنزの頭の中が急速にクリアになったような気がした。

入れ替わるように、頭の中がぐらぐらと煮えていく。自分でもよくわからない衝動に突き動かされるような形で、リボنزは立ち上がった。

自分は今、あのバカップル2組に対して強い感情を抱いている。発散の仕方が見つからない。それでも、全力で考えてみた。結果、至つたのは。

「腹が立ったから、とりあえず明日は嫌がらせに赤飯を炊こう。そして、『目指せ、実子で野球チーム結成』『あと■人』って垂れ幕垂らしてやるんだ」

注記しておく。ここ数日、リボنزは寝不足であった。目の下には、黒々とクマが浮かんでいるほどに。

時間帯が深夜であることもあって、何やら変な方向にはじけ飛んでしまったらしい。平時のリボンズなら、そんなこと考え付かなかった。

今のリボンズは、深夜のテンションと寝不足による判断力の低下により、何をするかわからない爆弾のような存在でしかない。

「あのバカツプル夫婦2組は、どんな顔をするのかな？ 想像するだけで楽しみだよ。……ふふ、フハハハハハ！」

この場にもし誰かがいたら、リボンズの目が死んだ魚みたいになっていたことに危機感を感じ、リボンズを止めていたのかもしれない。

しかし、残念ながら、ここにはリボンズのストツパーなんて誰もいなかった。だから、リボンズの行動を阻む要素は存在しなかった。

おぼつかない足取りで、リボンズはごそごそと準備を始める。

バカツプル2組の夜戦騒音とタメを張れるほどの騒音をまき散らしながら、リボンズは一心不乱に作戦を遂行していた。

垂れ幕に使えるような布を持ってきて、アクリル絵の具と大きな筆で文字を書く。『目指せ、実子で野球チーム結成』『あと■人』。

それを終えたリボンズは、よろよろとダイニングへ足を踏み入れた。戸棚からは米ともち米と食紅と胡麻塩を、冷蔵庫から小豆を引っ張り出す。

蛇口をひねって水を出して米をとぐ。とぎ終えた米を炊飯器にセットし、小豆と食紅を適量加えてスイッチを入れた。胡麻塩は最後に振りかけるものだ。

リボンズは持つてきていた垂れ幕を、ダイニングの入り口に飾り付けた。足取りと思惑回路がおぼつかないせいにか、随分時間がかかった気がする。

飾りつけを終えたとき、ふと窓を見れば、もう明るくなっていた。今晚も完全に徹夜してしまったらしい。

丁度、炊飯器の音が鳴った。自分が計画した通り、きちんと炊き上がったようだ。ミツシヨンコンプリートである。

『ごはんが炊き上がりました。保温を始めます』

それを最後に、リボンズの意識もまた、ぶつんと途切れてしまったのだった。

*

結局、あの夫婦にできた実子の人数は、『2組の夫婦の子どもを足して、ドッジボールのチームが(控えなしで)1つ結成できる』程度だった。

「お互いの家族で試合しようよ」と話していたバカップル2組の姿は、今でもリボンズは覚えている。

随分と懐かしい光景だ。感傷に浸っていたらしい。今は、それに浸っている暇はないのだ。

リボンズは鏡を見返した。今の自分はどこからどう見ても、絵本等に出てくる『悪の魔法使い』そのものだった。

「よし、行こうか」

気合を入れるように声に出し、頷く。

そして、リボンズは出撃したのだった。



「フハハハハハ！ 『悪の組織』第1幹部、リボンズ・アルマークとは、僕のことさ！」

リボンズは高らかに宣言し、作戦を決行した。

魔法使いのローブを思わせるような黒いマントをはためかせ、無邪気で可愛らしい子どもたちに対して、凶悪な魔法をお見舞いする。

爆発音が響く。白い煙と一緒に、色とりどりの花がこの場に降り注いだ。それを合図に、『悪の組織』に所属するリボンズ直轄の部下たちも動き出した。

無作為に選んだ子どもに新聞紙や袋を押し付け、それに杖を突きつけて怪しく呪文を唱えてみせる。鋭い発砲音が鳴り響いた。

新聞紙から水が噴き出す。袋からうさぎが飛び出し、子どもたちの周囲を跳ねまわった。

1カ月以上の時間をかけて編み出し、習得した魔法が実を結んだ瞬間である。

「わー、おにいちゃんすごーい！」

「何もないところからお花が出てきたー！」

「コップもないのに水が出てきたぞ！」

「紙袋からうさぎがー！ かわいい！」

子どもたちは目を輝かせて、惜しみなく拍手を送ってくる。そうだが、その顔が見たかった。

リボンズは口元を吊り上げて、自慢の呪文を次々と討ち放つ。ひっきりなしに笑い声が響いた。

今日の襲撃結果も上々だ。脳量子波で部下たちに「そろそろ最強魔法を使う」旨を伝える。全員から『了解！』『オツケー！』等の返事が返ってきた。

リボンズの目くばせに従い、部下たちが彼の元へと終結する。『悪の組織』に所属する魔法使い全員の力で発動する、最強魔法。色とりどりの光が瞬き、大きな爆発音が響いた。

白い煙が周囲を包む。煙が晴れたとき、魔法使いたちの前に沢山の籠が出現した。子どもたちが好きそうなお菓子や玩具、欲しがっていた勉強用具が山のように積み上げられている。

子どもたちの歓声が響いた。自分たちの侵略活動は成功である。そう思ったとき、リボンスたちはいつの間にか子どもたちに取り囲まれてしまっていた。子どもたちは皆笑顔で、「ありがとう、悪の組織の幹部さん！」と感謝の言葉をくれる。

孤児院の職員たちも、惜しみなく拍手をくれた。ありがとう、ありがとう、と、この場一体から感謝の言葉や想いが飛び交っている。

楽しい時間はあっという間に過ぎ去って、リボンスたちが撤収する時間が来てしまった。

いかないで、またきてね、たのしかったよ。子どもの声がひっきりなしに響く。

『『悪の組織』の侵略活動は、まだまだ続くよ。また来るかもね』

悪役らしくシニカルな笑みを浮かべ、リボンスは杖を振るった。真っ白な煙が漂う。

煙はすぐに晴れた。遠くの屋根に自分たちの姿を見つけた子どもたちが、こちらに向けて手を振ってきた。

『『悪の組織』の姿が消えるまで、彼らはこちらに手を振り続けるのだろう。』

リボンスは脳量子波で合図を出した。仲間たちもそれに従い、屋根から飛び降りる。これで、今日の侵略活動の一切が完了した。

少し離れたところで待機していたスポンサーと合流し、彼と共に帰路につく。金持ちであることを誇示するような縦長の高級車に乗り込んだ。

車内はちよつとしたバーのような内装になっている。飲み物やフルーツをつまみながら、面々は作戦成功の充実感に浸っていた。

「……どうしてか、僕たちは子どもに親しまれてしまうんだ。なぜだ

ろうね?」

「なんでだろーねー」

「ボクたちは、世界征服を目指してるのにねー」

リボنزの呟きに、ヒリングとリヴァイヴが答える。しかし、2人はその理由を分かっていて言っていた。

彼らは皆、設定に準じた言動をしているに過ぎない。わざとらしい棒読みに、仲間たちはくすくすと笑いを漏らした。

「今回のマジックはうまくいったな」

「次は大掛かりなものに挑戦しよう。資料の収集に」

「ブリング、デヴァイン! そういう『設定をぶち壊しにする』会話禁止!!」

つい地を出してしまったブリングとデヴァインに、リヴァイヴの叱責が飛んだ。

叱られた2人は肩を落としながらも、マジックの種になりそうな情報を収集する手は休めない。何やら面白そうなものを見つけたようで、ヒリングらに指し示してきた。

動画は超有名な世界的マジシャンのものだ。そこからヒントを見つけたらしく、ブリングとデヴァインが説明を始める。そこに、リジエネやリヴァイヴが加わって話し合いを始める。

わいわいがやがや。そんな擬音が似合いそうな勢いだ。リボنزは彼らの会話を脳量子波越しに聞きながら、『悪の組織の幹部』らしく、優雅にワインをあおった。今飲んでいるのは、『悪の組織』代表取締役が好んで飲むロゼワインである。

彼女は今日も、車いすで孤児院を高速移動しているのか。あるいは、拠点で仕事に追われているのか。もしくは――。

(最後の3つ目は、今のところないだろう)

リボنزは小さく首を振った。そうなれば、自分たちにもその旨の連絡が来るからだ。現在は、友人が単独で活動を行っている。

彼とは、ガンダムの特ストパイロット争いをしていたが、あるとき偶然にも視てしまった虚憶きよおくの光景から、リボنزはガンダムのパイロットを辞した。

当時のリボنزは、自分の優位性を証明しようと思死だった。そのときに、伝説のニュータイプ、アムロ・レイの存在を知った。『伝説のニュータイプが操った機体乗りこなすことこそが、伝説のニュータイプを超えること』であり、自分の優位性を証明する方法だと思っていた。

しかしそれは、リボنزが見た虚憶きよおくの光景によって打ち砕かれた。伝説のニュータイプであるアムロ・レイは、イオリア計画で生み出されたガンダムを平然と使いこなしていた。無意識に脳量子波を制御し、1000体以上の機体を切り捨てながらも、「まだ、このMSの性能を十分に引き出せてはいない」と語っていた。イオリアが生きていたら、きっと大喜びしそうな結果だった。

終いには、イオリア計画だけでなく、リボنزが開発を進めている機体まで乗りこなしていたのである。当然、奴は無意識に脳量子波を制御し、1000体以上の機体を切り捨てながらも、「まだ、このMSの性能を十分に引き出せてはいない」と語っていた。終いには、その機体で、リボنزが想定していた以上の数値を叩き出したのである。

それを見て、リボنزは決意したのだ。伝説のニュータイプを超えるなくては、革新者の名を語ることなどできやしない。機体のスペックを上昇させるのも当然だが、その性能をフルに引き出せるよう、自身が成熟しなければならぬのだと。それこそが、自分の優位性を証明することにつながるのだと。

虚憶きよおくのデータベースを参照して、リボنزはアムロ・レイの研究に没頭した。

奴が最強のニュータイプであることは事実だろう。しかし、その力の出どころは不明だ。

どうしてアムロ・レイは、戦場で爆発的な力を発揮することができ

たのか。

『なら、人間と言う生き物について、もつと詳しく調べてみたらいいんじゃないの？ 特に、心理面について』

『くだらないことに全力投球できるのが人間なんだよ。だからこそ、いざというときに力を発揮できるんじゃないかな』

『一番手っ取り早いのは、バカになることだよ。バカだなんて笑っている相手と同じことをする。そうすれば、ヒントくらいは掴めるんじゃない？』

『悪の組織』代表取締役であり、自分にとって『母』のような存在の人がそう言つて笑つたからこそ。

紆余曲折を得て、リボンズ・アルマークはここにいる。『悪の組織』第1幹部として、多くの部下兼家族たちを率いて侵略活動ボランティヤを行っているのだ。

まだ答えは見つからないけれど、『人間』についてなら、なんとなく答えを掴めそうな気がする。

リボンズが答えについて思いを馳せていたとき、珍獣でも見るかのような視線を感じた。辿つた先にいたのは、件のスポンサー、アレハンドロ・コーナーである。

たくさんの人間を見てきたけれど、奴の浅ましさと腹黒さは目を見張るものがあった。それ以外は凡庸すぎて退屈極まりないのだが、天は人に二物を与えずという。仕方がない。

……もつとも。その浅ましい欲望のために、友人をボロ雑巾のように利用しようとする姿勢だけは、どうしても許容できそうにないのだが。

昔の自分だったら、すべてを駒のように扱っていたのだろう。

件の友人のことも、部下兼家族たちのことも。

今となつては想像でしかない自分の後ろ姿を思考の端に追いやつて、リボンズは首を傾げてみせた。

「どうかしましたか？ アレハンドロ様」

「……い、いや。相変わらず、面白いなと思って」

うそをつけ。リボンは心の中で呟いた。

自分たちから目を逸らしたアレハンドロの瞳は、「こいつら頭おかしい」と主張している。

「ところで、彼は元気ですか？ ……教官としての腕前は どうですか？」

リボンはロゼワインをグラスに注ぎながら問いかけた。アレハンドロは胡散臭げに微笑む。

「ああ、あそこまで優秀なMS乗りはそうそういないよ。トリニティ兄妹との仲もいいしね。……ただ、あまりにも安泰すぎるところが逆に怖いな」

「どうしてですか？」

「彼は人間としても優秀すぎるんだ。このままいくと、トリニティ兄妹に与えた役割が機能しなくなる可能性がある」

アレハンドロの憂いは正解だ。奴の計画では、『自分がソレスタルビーイングを倒す中核的存在となり、その功績からのし上がることで世界を統一』し、『自分がそのTOPにおさまる』手はずになっている。

トリニティ兄妹は、世間に対して「ガンダムは悪である」という見方を植え付けるために生み出されたガンダムマイスター。つまりは駒でしかない。ガンダムに「世界の悪」としての価値を付加し終えた後は、適当に処分するつもりだったのだろう。

遅かれ早かれ、ソレスタルビーイングとガンダムは世界によって「悪」とされ、断罪される運命にある。アレハンドロはそれを利用し、ソレスタルビーイング壊滅のタイミングを、奴自身の都合に合わせてようとしていた。流石はコーナー家。数世代かけて準備されてきた野心は伊達じゃない。

コーナー一族は『己の野心が露呈するのを防ぐため』、『邪魔者をなくし、計画をスムーズに進ませるため』、監視者の一族をじっくり時間をかけて謀殺している。

アレハンドロの代に入って、ようやくコーナー家以外の監視者一族が全滅した。あとはもう、コーナー一族の独壇場。奴もそう信じて疑わないのだろう。

幸せな男だ。アレハンドロの面を見てみると、リボンズはつくづくそう思う。

その野心が、他ならぬ自分や友人たちの手によって打ち砕かれたとき、この男はどんな顔をするのだろうか。

そのとき、自分は『人間』についての答えに触れることができるだろうか。できたら儲けものだと思っているが、今のところは望み薄である。

(似たような思考回路で物事に挑んでいる連中は、他にもいるけどね)

例えば、ソレスタルビーイングのスポンサーをしている名門資産家、王家当主・王留美^{ワンリユーミン}。

彼女は戦争根絶のためより、世界を変化させることに重点を置いている。そのくせ、現状を壊した先に何を求めるのかについては不鮮明だ。ただ壊し続けることだけを望んでいる印象を受けた。現状の打破だけが、彼女の生きるすべてだとも言わんばかりに。

そのためなら、彼女はソレスタルビーイングへの援助も惜しまないだろう。その横で、アレハンドロにも媚を売るだろうし、軍部にも情報を横流しするくらいやってのけそうだ。古い話で鳥と動物が戦っているものがあつたが、それに登場した蝙蝠を思い出した。

あるときは鳥を名乗り、あるときは動物を名乗り、蝙蝠は世の中を渡り歩こうとした。しかし、最終的に、蝙蝠は鳥からも動物からも嫌われ、裏切り者扱いされ、追われてしまう。留美もまた、蝙蝠と同じ末路を辿るのか。あるいは、蝙蝠とは違い栄光をつかむことになるのか。現時点では不明である。

現状の打破といえば、最近ソレスタルビーイングやアレハンドロの援助者になった女性がいた。その女性もまた、留美と同じく現状打破に精を出す人間だと聞く。

彼女はあくまでも当主候補であり、その中でも冷遇されている。厚遇されているのは男性の方だが、彼は家を出て違う道に進んでいるそうだ。

だが、家の人間たちは彼に家を継いでほしいと願っており、女性はそのあおりを受けているのだという。彼女は、自身の優位性を証明しようとして躍起になっているらしい。

(優位性の証明、か)

自分と同じ悩みを抱えて迷走する人間。リボンズは女性に興味を持っていて。彼女はどんな判断を下し、どんな道を行くのだろう。

彼女の末路を見届けたとき、自分は『人間』についての答えに触れることができるだろうか。アレハンドロよりは期待できそうだが、果たして。

「まあ、いざというときは、別な方法もあるが」

アレハンドロが笑みを深める。こういうときのこの男は、ロクなことを考えていない。

「別な方法？」

「ああ。彼らを世界の悪に仕立て上げる方法はいくらでもある。トリニティ兄妹が機能しなくなった場合の協力者もいるからな」

そうやって、アレハンドロは資料を指示した。そこには、件の女性の名前が記載されていた。黒髪黒目の東洋人。名前も日本人だ。しかも、古くから続く名門の家の名前。女性が婿を迎えることで発展し、嫁に行った者が(事実上)相手の家に乗っ取り本家と嫁ぎ先を繁

榮させることで、各地にコネクションを持つ家だった。

資料を読む限り、『女』という生き物の恐ろしさが前面に出ているように思う。真昼のドラマのようなドロドロした空気を感じ取り、リボンは思わず眉をひそめる。その手の展開も、リボンスにとつては理解しにくいものだからだ。『代表取締役』にその愚痴を零した際、遠い目をされた。

「あれは大衆が面白いと思うものを提供するものだから、突飛な展開にしないと見てもらえないんだ」と彼女は言った。彼女はそれよりも生々しい現実を生きてきたから、その手のドラマはジャンクフードと同じようなものらしい。彼女はあまり語らないけれど、リボンスには薄らとわかっていた。

外を見る。もう夕日が沈みかけていた。

今頃、孤児院では夕飯の準備に大忙しだろう。

リボンスたちは自分たちの拠点に戻り、今回の侵略結果についての報告書をまとめるつもりでいる。

『代表取締役』が嬉しそうに笑う顔が浮かぶ。リボンスも、ふっと笑みを浮かべた。それは脳量子波に乗って伝わってしまったようで、仲間たちもくすくす笑いながらこつちを見ていた。

リボンスはむっとした目で面々を見返した。自分たちは皆、同じ穴の貉である。面々も悪戯っぽく笑い返し、再び話し合いに没頭する。アレハンドロはこちらへの興味をなくしたようで、書類と睨めっこしながら策を練っていた。

「『世界は、思った通りに動かないから面白い』か」

『代表取締役』の言葉を思い出しながら、リボンスはロゼワインをあおった。

この世界は、これからもっと面白い方向に進んでいくだろう。

願わくば、その先に、自分や友人と『代表取締役』の望む世界があるように。



「皆さん、お帰りなさい！」

「ただいまアニューー！ 留守番お疲れ様ー！」

事務作業をしていたアニューーが、ぱたぱたと足音を立てて自分たちを迎えてくれた。

彼女は自分たちの中で一番年下である。特にヒリングは、彼女を妹のように可愛がっていた。

「……あれ、靴が1つ多い？」

妹分をハグし、その抱き心地を堪能していたヒリングが止まる。彼女の視線は、玄関の靴に釘付けになっていた。

拠点に残っていた職員の数はアニューー含んで5人。しかしここには、6足の靴がある。おまけに、余分な1足は男物だ。

靴底がすり減っているあたり、この靴の主はおそらく営業マンだろう。そういえば最近、AEUの大手企業が『悪の組織』と取引がしたいと言ってきた。

担当者の名前は何だったか。彼の名刺を大切に抱えるアニューーの姿を思い出したとき、件の営業マンが背広を抱えて帰ろうとしていたところだった。

少々ウエーブのかかった茶髪に青い目をした色男。いつぞやAEUで行われたMSファイト一般部門に出場した企業の紹介で、優勝トロフィーを抱えて笑っていた男とよく似ている。

彼はアニューーに笑いかけると、アニューーや自分たちに短い挨拶をして去っていった。アニューーは彼の背中を熱っぽく見つめている。

「ははーん。あれが、アニューの王子さまってわけ？」
「う……」

ヒリングの指摘に、アニューが顔を真っ赤にして視線をさまよわせる。他の面々も、生暖かい視線を向けた。

どうやらアニューは、企業間の打ち合わせと一緒に、彼とのささやかな逢瀬を楽しんでいたらしい。

リボンズには恋愛なんてよくわからないが、アニューの様子を見ている限り、悪いものではなさそうだ。

あんな形もあるのか、と、リボンズは人知れず納得する。少なくとも、アニューのようなパターンを見たのは初めてだった。

試しに、今まで自分が見てきた光景を思い出してみた。
リア充爆ぜろと叫びたくなるような光景ばかりだった。

「よし。今日の仕事が終わったら、アニューの取り調べを始めようか」
「リボンズさん、やめてくださいー！」

リボンズが笑みを深くすれば、アニューは更に顔を赤くして悲鳴を上げた。羞恥に悶絶する彼女を面白がって、仲間たちも笑う。

「さんせーい！ どこまで進んだかとか気になるしね！」

「いいねいいね！ 『悪の組織』第1幹部とその配下たち全員を挙げて、アニューの恋愛が成就するように応援しよう！」

真っ先に手を挙げたのは、ヒリングとリヴァイヴだ。

2人の言葉を受けて、ブリングとデヴァインが端末をいじり始める。

「となると、参考になる資料は……」

「口説き文句とファッションの研究も……」

「だから2人ともやめてください!!」

真顔の男2人が一心不乱に情報収集に入る様子は、はたから見れば異様であった。内容も光景もだ。

アニユールの顔が赤から青に変わったように見えたのは気のせいではなさそうである。

「よし。今日の晩御飯は赤飯だ」

「炊飯器なんてどこから持ってきたんですか!？」

アニユールがツツコミを入れた。

リジエネはどこからともなく炊飯器を持ってきていた。他にもお祝いの席で食べるものはあるはずなのだが、赤飯が真っ先に挙がる時点で『代表取締役』の影響を受けている。

ちなみにリボンズも人のことは言えないし、今晚は赤飯にしようと思っていたところだ。リジエネの行動は、かえって都合がよかった。アニユールの恋路は、自分たちにとってはアレハンドロの秘蔵ワインを空にしてもいいくらいの大事件である。それくらいしても足りないかもしれない。

今から連絡しても、アレハンドロは来れないだろう。こういうときこそスポンサーの力が必要なのに、と、リボンズは小さく舌打ちした。リムジンバスに積まれていたフルーツを持ち帰っていればよかった。後悔してももう遅い。何か、代わりになるようなつまみでも買いに行こうか。

こういうとき、日本のコンビニが恋しくなる。あそこは24時間営業が当然だ。しかしここは日本ではない。近場のデリも、6時を過ぎれば店じまいである。

「冷蔵庫、まだ何か入ってたかい？」

「ああ、それなら昼間に買い足しておきました」

顔を真っ赤にしてわたわたしていたアニューが弾かれたように答えた。彼女は本当に気の利く職員だ。

玄関でのやり取りを聞いていた別の職員たちが、生暖かい目で自分たちを見守っている。そろそろ室内に入って仕事をしなければ、アニューの尋問をする時間は取れないだろう。

リボンは脳量子波でそれをアニュー以外の全員に通達する。面々は元氣よく了承し、慌ただしく室内へと足を踏み入れた。自分たちの座る机へ向かい、報告書作成を進める。

今日も『悪の組織』はフル活動中。

世界征服計画は、着々と進んでいた。

7. 確執—きようだい—

「だーかーらー！　どうしてお前は無駄撃ちばかりするんだ!?　もう少し考えて攻撃しろよ！」

「兄さんこそ！　俺は大丈夫だって言ってるのに、どうしていつも庇おうとするんだよ!?!」

隣の部隊に所属する初代と2代目ストラト□兄弟は、今日も喧嘩で忙しい。

同部隊に所属するトリニ□イ3兄妹や□ロスト兄弟とはえらい違いである。

傍から見れば、□トラトス兄弟はミラーコントをしているように見えるだろう。さもありません、2人は一卵性^双双生^子児である。彼らは両名とも射撃を得意とするパイロットだが、戦術の方向性は全く違っていた。

兄の初代ス□ラトスが一撃必中の精密射撃を得意とするなら、弟の2代目ストラ□スは手数で翻弄する早打ちやバラ撃ちを主体にした戦いを得意としている。指揮官の□□□がときたま乗せ換え企画で2人の乗る機体を入れ替えるのだが、お互いの機体の違いに戸惑う姿を見かけた。

性格の違いも大きい。兄が□口とピンクの髪の少女が大好きで立派な兄貴分なら、弟は薄紫の髪の女性が大好きで煙草を嗜む色男だ。両名に共通しているのは、ブラザーコンプレックスをいい感じにこじらせているという点だろう。現在進行形で、だ。

なんてことはない、単純なことだ。

兄は弟が心配だから口出しするし、弟は兄に認めてほしいと思っっているから反発する。

弟は兄が心配だから口出しするし、兄は弟を守れるような存在であろうとするから無理をする。

スト□トス兄弟のミラーコントを眺めていたクーゴは、互いを思いあうが故にすれ違う双子を見つめていた。

グラハムと『彼女』の色恋沙汰から逃げてきた先でこんな光景を見ることがなるとは。クーゴにとっては、複雑な光景である。

そこへ近づいてくる足音。振り返れば、そこにいたのはフロス□兄弟だった。

「お互いにとってお互いが、大切な存在なのにね。こんなにも簡単なことなのに、どうして彼らは仲が悪いのかな？ 兄さん」

「それがなかなか難しいところなんだろうよ、オル□。あの2人は素直になれないだけなのさ」

そう言いながら、彼らは生温かい眼差しでス□ラトス兄弟を見つめていた。フロ□ト兄弟は□トラトス兄弟とは違い、素直に互いへの思いを表現している。

「……いいな」

彼らの後ろ姿を見つめながら、クーゴはぼつりと呟いた。

自分もストラト□兄弟のように、感情をぶつけられたらよかったのに。自分も□ロスト兄弟のように、仲良くできたらよかったのに。

もしかしたら、存在したかもしれない可能性へと思いを馳せる。どこにでもある家族の、どこにでもいるような『きょうだい』の姿を。無意味だと知っていながらも尚、想像せずにはいられない。考えれば考えるほど、心に陰りが出てきそうだ。

「俺もあんな風に、喧嘩したり、仲良くしてみたかったな」

自分の傷に触れると知っていても、呟かずにはいられなかった。

兄弟たちの背中がやけに遠い。元々別の部隊に所属しているというのもあるけれど。

ここにいと、かえって気分が重くなってきそうだ。グラハムと『彼女』の色恋を見ている方が、よっぽど元気になれそうな気がする。

2人が繰り広げるバイオレンスなやり取りを思い出し、ひどく恋しくなる。大人しく自分の部隊に戻った方がよさそうだ。別部隊の人々とシミュレーションや模擬戦をやってみたかったのだが、今はそんな気分になれなかった。

踵を返して元来た道を戻る。仲間たちの行き来は活発で、どこかで誰かが何らかの問題を引き起こしていた。似たような特性を持つ人々が遊びを通して腹の探り合いをしていたり、先の乗り換え企画の感想を述べ合っていたり、艦長に自分の機体をせびっていたりしている。

自分たちの部隊がよく使う休憩室へ戻れば、相変わらずの光景が繰り広げられていた。グラハムが『彼女』にちよっかいをかけ、『彼女』がその手を振り払う。『彼女』の顔は真っ赤だ。それを見たグラハムは、ますます嬉しそうにする。奴は意外と悪趣味なのかもしれない、とクーゴは思った。

グラハム曰く「これが我々の愛」らしい。あながち間違っていないところが怖い。

周囲の面々も、中心となる2人に対して生温かい視線を向けていた。

「羨ましいですか？」

不意に声を掛けられ、振り返る。我らが指揮官が、悪戯っぽさそうに笑っていた。

「難しいな。割を食うのがいつも俺だと考えると」

「それを差し引いたら？」

「ちよっただけ」

クーゴは苦笑し、付け加える。

「でも、いいんだ。俺にだって、そういう相手がいることは知ってるか

ら

自分にも心配したいと思う相手がいる。自分のことを心配してくれる相手がいる。思いの丈をぶつけ合える相手がいる。

そう、心の底から言える相手がいる。だから大丈夫だ、とクーゴは笑った。指揮官はしばらく目を瞬かせた後、嬉しそうに頷く。

彼女は「あ」と間拔けな声を出し、急な思い付きを口走るように言った。

「その相手の中に、私はいますか？」

「……………そんなの、訊くまでもないだろ」

いい言葉が見つかりそうにないので、そうやってごまかした。

もつとも、彼女はすべて察しているのだろう。ぼつが悪くなつて目をそらせば、指揮官がくすくす笑う声が聞こえてきた。

自分たちにはこれくらいがお似合いだろう。クーゴはグラハムたちのほうへ視線を戻す。『彼女』に足を踏まれたグラハムが、くぐもつた悲鳴を上げていた。



クーゴの実家は京都にある。しかし、今回のオフ会では実家の近くには行かないからと安心していた。

というより、慢心していたのだと思う。まさかむこうがそれを察して手を打って来るだなんて、誰が予想できたか。自分もまだまだ甘い

らしい。

クーゴの目の前にいるのは、黒髪黒目の東洋人女性。彼女は、艶やかな花が描かれた薄桃色の着物を着ていた。買い物帰りなのか、手には大量の食材が入ったエコバックが握られている。しかし、あれはカモフラージュだとクーゴは直感した。彼女はずっとここで、クーゴを待ち構えていたに違いない。

女性は品の良い笑みを浮かべている。しかし、その仮ひょうじょう面めんの下には、クーゴに対する憎悪で満ち溢れていた。あの頃から何も変わっていない。彼女がクーゴに向ける感情も、眼差しも、クーゴが家を出る前と同じであった。その気持ちは、わからなくもない。彼女もある意味では「被害者」なのだから。

晴れ渡った京都の空とは裏腹に、この場に暗雲が立ち込めてきそうだ。いや、クーゴと女性の間はもう雷を伴うレベルの暗雲で覆われている。薄く細められた黒の瞳は、相変わらずクーゴを責め続けている。否定する要素もないので、クーゴは甘んじて受け止めるにとどめる。

グラハムや『エトワール』たちは、自分たちに漂う物々しい空気を感じ取っているようだ。

自分と彼女の因縁に巻き込んでしまって、申し訳ないと思う。おまけに、彼女のあの様子では、オフ会の予定も大きく変更しなくてはならないだろう。

災難だ。クーゴはほとほと困り果てていた。グラハムや『エトワール』たちに心配かけたくないので、表面上はポーカーフェイスで通しているものの、限界である。

嫌な汗がこめかみを伝った。先手を打つべきか、彼女の手を待つべきか。無言の駆け引きが続く。

「……久しぶりですね、蒼海あおみ姉さん」

手を打ったのは、クーゴだった。正確には、打たざるを得なかったといった方がいい。

姉——刃金はがね 蒼海あおみは、相変わらず薄ら寒くなるような微笑を浮かべている。

「ええ、久しぶり。叔母さまの命日以来かしら？ 空護クーゴ」

蒼海の目がより一層細くなった。正直、目を逸らして逃げ出したいというのが本音である。それをしないのは、友や『エトワール』らの手前だからだと思う。要は意地の問題だ。昔は何事も諦めてばかりだったのにな、と、心の中で自嘲した。

また嫌な沈黙が周囲を覆い尽くす。蒼海の目は「なんでまだ生きてるの」と雄弁に語っていた。刃金の男児は20代になる前に亡くなるケースが多い。20代後半、しかも30代近くまで生きるケースは少ないという。クーゴはそういう意味でも注目されている。

そのため、刃金の家は女性が婿を迎えて続いていた。跡取りになるのは、大半が長女である。クーゴと蒼海は双子の姉弟であり、現在進行形で跡目争いをしている真つ最中だ。正直な話、クーゴ自身は跡目を継ぐ気もないし、継いだとしても意味はないと思っていた。

ここまでこじれたのは、ひとえに「クーゴがまだ生きている」ということが原因だ。本来なら蒼海が跡取りと決まっているはずなのだが、クーゴがまだ生きているため、未だ彼女は跡取り候補となっている。

「空へ行かねばならない」という思いに突き動かされ、クーゴは家を出てユニオンの軍人になった。だからもう、刃金の家に戻るつもりもなければ後を継げるとも思っていない。自分は刃金の血を引く男であり、軍人だ。職業上いつ死んでもおかしくないし、刃金の男の宿命がいつ発動してもおかしくない。

しかし、家の人間たちはクーゴに跡目を継いでほしがっていた。曰く、『クーゴは蒼海よりも優秀で、当主としての器に相応しい』ためらしい。買い被りすぎだとクーゴは思う。「その気はない」と何度も言っているのに、彼らは一切話を聞こうとしなかった。

(ただ単に、アラサーまで生きた男が珍しいだけじゃないか)

関係者連中のクーゴに対する扱いは、文字通り崇拜レベルだった。昔は「神童だけど、刃金の男児は早逝する。もったいない」「長くはもたないだろう」なんて言ってたくせに。今じゃ丁寧な扱いを受けている。

幼い頃、クーゴはとても病弱な子どもだった。風が吹けば吹き飛んでしまいそうなほど細い体で、いつ死んでもおかしくないような状態だった。しかし、何をどう間違ったのか、クーゴは現在、病気とは無縁の生活を送っている。

身長はどうにもならなかった代わりに、軍人として空を翔ることに何の不自由もしない身体能力を得て、クーゴは今ここにいた。クーゴにとってそれは喜ばしいことなのだが、蒼海にしてみれば最悪極まらない。

「何度顔を合わせても驚くわね。アンタ、ちっちゃい頃はいつ死んでもおかしくない子どもだったのに。今じゃあ立派な軍人さんだもんねえ」

「ええ、まあ」

「階級は、確か中尉だっけ？ 出世したのねー」

「出撃して生きて帰ってを繰り返してたら、勝手に階級が上がっただけですよ」

グラハムの発言を引用する。

後で彼に謝罪しよう、と、クーゴはひっそり心に決めた。

「でも、死と隣り合わせの職業に就いたわけだし、どのみちいつ死んでもおかしくないのは変わらないわよね」

「そうですね。仰る通りですよ」

蒼海の言いたいことはわかる。彼女の気持ちも、よくわかる。

どのみち死ぬから、もう当たるのはやめてくれ。友人の目の前なんだぞ。クーゴはその言葉を飲み込み、代わりに目で訴えた。

それが蒼海に届いたのかどうかはわからない。むしろ、わかっていて握りつぶされた気がしてならなかった。こういうところが苦手である。

蒼海はふと、何かに気づいたように顔を上げた。彼女の視線は、グラハムや『エトワール』たちを捉えている。まずい、と思ったが、もう遅かった。

「貴方たちは、空護クーゴのお友達ですか？」

クーゴは頭を抱えた。いや、本当は、もう少し早いタイミングから頭を抱えたくて仕方なかった。今まで、『エトワール』に情報を漏らさぬようにと必死になっていたのに。その努力と苦労が水の泡である。蒼海は何も知らないから、仕方ないのかもしれないが。

「グラハム・エーカーです。貴女の話は、クーゴ中尉から伺っております」

「あら。お噂はかねがね伺っておりますわ。ウチの愚弟がご迷惑を……」

今までのやり取りから薄暗いものを察していたグラハムであるが、何とか取り繕ったようだった。笑みを浮かべて見せた口元が、微妙にひきつっている。

家族と言う単語に何やら特別な思い入れを持つ彼に、ドロドロした家族関係など見せたくなかったのに。なんだか申し訳なくなった。

蒼海はかねてからグラハムに興味を持っていたようで、彼へ近寄り何やら雑談を始めた。彼女の目を見て悟る。あの目は、社交界でよく見かけた。

グラハムに近寄ろうとする女の眼差し。蒼海の瞳は、獲物に狙いを定めた鷹のような鋭さを秘めていた。

もつとも、そんなもので捕まえられるほど、グラムハムは弱くない。言い寄ろうとする蒼海を、それとなくいなしている。

さりげなく手を振り払うところは称賛に価した。少女と手を組んで「恋人がいます。彼女がそうです」アピールをしようとする部分さえなければ完璧だったのに。

少女はそれから逃れようとしていたようだが、蒼海の露骨な接近に思うところがあるらしい。普段は容赦なくグラムハムを迎撃するのだが、何やら反応が鈍かった。そういえば『エトワール』曰く、「あの子はグラムさんに絆されかけてきている」ようだ。

『エトワール』は蒼海の悪意にやや引きつつも、少女が嫉妬の色を見せていることが嬉しいようだ。素直じゃないのは仕様なのだという。甘酸っぱい恋愛とはこういうことを指すのか、と、クーゴは現実逃避がてら考えていた。もつとも、すぐに現実へと引きもどされたが。

「そちらの方は？」

「……………」

「名前も名乗れないの？ あらいやだ。お里が知れるわね」

少女は沈黙を守り続ける。蒼海は冷やややかな眼差しを彼女へ向けた。

「貴方のような小娘が、彼のような人物に相応しいと思っているの？」と、蒼海の目は語っている。少女はその圧力に屈することなく、まっすぐに彼女の目を見返した。少女も戦場から引くつもりはないらしい。

少女は長らく沈黙していたが、ゆっくりと口を開く。何かの決意を口に出すように。そしてその決意を、己自身に課そうとしているかのように。噛みしめるような響きを持って、少女は短く言葉を紡いだ。

「死ぬのが怖くて、恋ができるものか」

突拍子もない言葉に、蒼海が眉をひそめる。少女の言葉は蒼海の発

言を受けたうえで返答だとしたら、何かずれていた。脈絡がおかしい。

けれど、クーゴにはわかった。正直になれない少女が、精いっぱい
の想いをこめた言葉だ。それが、彼女の出した答えなのだ。

誰かが言っていた台詞の引用だったけれど、彼女が言うのと並々ならぬ
迫力を感じる。「エトワール」が後ろで笑った気配がした。

対して、グラハムは呆気にとられている。急停止した思考回路をフルに
働かせ、必死になって少女の言葉の意味を考えているようだった。

蒼海の顔から表情が消える。目がつ、と細められた。クーゴの経験則が「いかん」と答えを出したコンマ数秒で、蒼海が動く。本当にさりげない動作で、蒼海が少女を突き飛ばしたのだ。

よろける少女を支えるものは何もない。彼女の丁度後ろには、先日
まで降っていた雨のせいでできた水たまりがあった。蒼海は少女が白いワンピースを着ていることを知っていて、そんな暴挙に出た。

次の瞬間、何よりも早く動いた男がいた。思考回路が止まっていた
グラハムだった。彼は間一髪で少女を支えると、まるで王子が姫にやる
ような動作で彼女を立ち上げさせる。流星は空の貴公子。その立ち振る舞いは様になっていた。

「大丈夫か？」

「あ、ああ……」

ひどく切羽詰った顔でグラハムは少女に問うた。

少女は驚いたように目を瞬かせ、顔を伏せた。耳が真っ赤だ。

「あら、ごめんなさい」

悪びれる様子もなく、蒼海は言っただけだ。

気のせいではなければ、小さな舌打ちの音も聞こえた気がする。

グラハムは蒼海なんて眼中になかった。「先程の言葉の意味を詳し

く教えてほしいのだが」「というより、もう一度言ってくれないか!？」と少女に問いかけている。少女は顔を真っ赤にしてそっぽを向いていた。嬉しいのはわかるが、もう少し落ち着いてほしい。

思い通りにならない光景に、蒼海は鼻を鳴らした。次のターゲットとして目を付けたのは『エトワール』。それをいち早く察したクーゴは、『エトワール』を庇うようにして割り込んだ。これ以上、クーゴの関係者を蒼海の毒牙にさらすわけにはいかない。先程動けなかった分、汚名返上といきたいところだ。

クーゴの行動を見た蒼海は何やら面白そうに目を細める。瞳の奥に宿る悪意から、クーゴは決して目を逸らさなかった。少女の強さに做った形ではあるものの、蒼海に屈するつもりは微塵もない。昔から、蒼海は他人——特にクーゴの関係者を見下す節があった。自分は蔑まれても構わないが、友人にまで手を伸ばすのは許せない。

「その貴女は？」

「彼女は友人だよ。インターネットで歌ってみたを投稿してる歌い手で、俺に色々アドバイスしてくれるんだ」

「歌い手？ 軍人のアンタが？ ……ああ、虚憶きよおく調査で、歌ばかり歌ってるんだっけ？ 歌で軍人やってるような奴が、よくもまあ中尉まで出世できたこと」

相変わらず、嫌味がチクチク降ってくる。幼い頃からこんな感じだったから、もう慣れた。

「彼はそんな人じゃありませんよ」

「彼女の言う通りです。クーゴ中尉は、我がユニオンに必要な不可欠な人材です。そして何より、私の大切な戦友だ」

幼い頃と違うのは、庇ってくれる存在が身近にいるということだ。『エトワール』とグラハムが蒼海と対峙する。少女は何も言わないが、彼女もクーゴを庇おうとしているようだった。庇われ慣れていない

おかげで、逆に彼らの行動に面食らってしまった。

自分の情けなさに嘆きたくなる。いい友人を持ったと、クーゴは心の中でそう思った。蒼海とにらみ合って、どれほどの時間が過ぎただろう。現状をどうすべきか、クーゴが考えあぐねていたときだった。

「何をしているの蒼海。買い物が終わったなら、早く……——あら、空護じゃない。こんなところで会うなんて奇遇ね」

「……母さん」

「帰ってくるなら、一言連絡してくればよかったのに。まったく、蒼海ときたら……」

救いの女神か、地獄からの使者か。

白髪交じりの灰銀の髪の女性はクーゴの母、刃金はがね 櫻華おうか。彼女が身に纏う薄紫の着物には、つがいの鶴が羽ばたいていた。

櫻華の姿を見た蒼海は苦々しい表情を浮かべた。入れ替わるように、グラハムや『エトワール』たちが、やや慌てた様子で櫻華へ挨拶する。緊張している雰囲気伝わってきた。

相変わらず、櫻華は蒼海をこき下ろすような発言ばかり繰り返している。クーゴを上げて彼女を下すその語り草が、自分たちの溝をより深くすることに気づいていないのか。

蒼海の眼差しがクーゴに突き刺さってくる。クーゴはそれを淡々と受け止めた。

「どうやら櫻華は地獄からの使者だったらしい。彼女は朗らかな笑みを浮かべて、言った。」

「空護クーゴ。せっかくだから、蒼海を鍛えなおしてちょうだい。胴着と竹刀、用意するから」



胴着を来た男女が、コート内で向かい合う。男の身長は169cm、女性の身長は162cmのため、身長ではそうそう戦力差は見えにくい。

『エトワール』——もといアイデアたちは、コート外から試合を見守っていた。日本武術の1つである剣道を、しかもこんな間近で見たことはない。

『夜鷹』の親友であるグラハムも、場の空気につられていたのだろう。真剣な面持ちで、『夜鷹』と彼の双子の姉を見つめていた。

2人は一礼し、竹刀を構える。姉の竹刀には激情が乗っていた。対して、『夜鷹』はぴんと背を伸ばし、静かに竹刀を構える。明鏡止水という言葉がよく似合っていた。

姉の方は一刀流。対して、『夜鷹』の場合は二刀流だ。今回彼が使っているのは、通常の竹刀と脇差程度の長さの竹刀である。

右手に脇差、左手に通常の長さの竹刀を持ち、独特の構えをしている。惚れ惚れする出で立ちだ。アイデアは素直にそう思う。

刹那も興味深そうに2人を眺めていた。文字通りの真剣勝負。自然と、自分の背中もしゃんとしてくる。

「彼が二刀流で戦っている姿を見たことはあるが、試合現場を見るのは初めてだ。……少女、キミは剣道を見たことがあるか？」

「ない。初めてだ。……変わった構えだな」

「剣道で二刀流使いと言うのは、相当の腕前を持っていることを意味しているらしいぞ」

「成程な。確かに、あれ程の佇まいならば、熟練の戦士であることは間違いない」

いつの間に、刹那はグラハムと会話を成立できるようにになっていたのだろう。妹分の変化に、アイデアは頬が緩む。

しかし、それはすぐに真剣なものに戻った。竹刀と竹刀がぶつかり合う音が響く。音が頬を打つ感覚に、アイデアは思わず身構えた。

攻めの手を打つのは姉の方だった。溢れんばかりの激情を込めて、『夜鷹』へ挑みかかる。まるで八つ当たりみたいだった。

対して、『夜鷹』は防御に回る。勢いと感情任せに挑みかかる姉の剣を、迷うことなく打ち払っていた。そこに余計な雑念はない。

グラハムが感嘆の息を吐き、拳を握りしめる。刹那も険しい表情で戦局を見守っていた。アイデアもごくりと唾を飲み込む。

2人は竹刀で戦っているはずなのに、アイデアには金属同士がぶつかり合う音が聞こえてきたように思う。いつの間にか、2人が振るっている竹刀が本物の日本刀に見えた。

姉と『夜鷹』は派手な鏝迫り合いを演じている。日本の時代劇でよく見る殺陣たてのようだ。ひっきりなしに竹刀同士／刀同士がぶつかる音が聞こえてくる。

隙が少なく連続攻撃に走る姉に対し、『夜鷹』は鏝迫り合いが終わる度に距離を取って構えを直していた。しかし、姉はやや攻めにくさを感じているようで、あと1手が決まらないらしい。

「剣道では、一刀流の方が間合いや攻撃時に有利だと聞く。二刀流の場合、カウンター前提の戦略が定番だから攻めにくいと聞いたな」

「しかし、攻めにくいのは一刀流も同じか。反撃前提の戦術だとわかっていると尚更だ。……ふむ、いけるか」

「何がだ？ 少女」

「なんでもない」

あやうく『戦う者』の一面が出かけてしまったようで、刹那は慌てて取り繕った。グラハムはそれ以上追及しない。ラッキーである。刹那は拠点に戻り次第、エクシアで新しいコンバットパターンを試すつもりでいるようだ。

彼女は食い入るように『夜鷹』とその姉のぶつかり合いを眺める。接近および格闘戦を得意としている彼女だからこそ、この動きは見逃

せないものだと思っただらしい。アイデアもじっくりその動きを見ることにした。

「アタシは、絶対にアンタを許さない」

不意に、そんな声が聞こえた気がして、アイデアは弾かれたように『夜鷹』の姉を見た。

声の主は間違いなく彼女だが、一心不乱に攻撃を仕掛ける彼女が何かを言う余裕はない。

「アンタが大人しく死んでいれば、アタシはこんな人生を歩まなくて済んだのに！」

でも、聞こえる。これは確かに『夜鷹』の姉の声だ。

強い憎悪に満ち溢れた声に、思わずアイデアは身を震わせた。その叫びと共に、『夜鷹』の姉が思い切り竹刀を振り下ろした。『夜鷹』の隙を突く、鋭い一撃。

姉が啜う。グラハムが「お」と声を上げ、刹那がはっと息をのむ。次の瞬間、『夜鷹』が目を見開いて踏み込んだ。獲物に襲い掛かる捕食者のように鋭い瞳は、己の勝利を見据えていたのだろう。

この場を震撼させるような大きな音が響いた。一步遅れてグラハムの「おっ!?!」という声が聞こえた。何かが吹き飛んだような激しい音と一緒に、『夜鷹』の姉が転倒する。姉の一撃を止めたのは、小太刀ではなく太刀の方だった。

『夜鷹』は小太刀で突きを放ったらしい。その一撃は、姉を吹き飛ばして叩き付ける程の圧倒的な打ち込みだった。審判役をしていた『夜鷹』の母親が、彼の勝利を告げた。

グラハムがぱっと表情を輝かせ、刹那が感嘆の息を吐き、アイデアは『夜鷹』へ惜しみない拍手を贈る。姉弟は向かい合って竹刀を戻し、厳かに一礼した。

防具を外した『夜鷹』は汗だくだった。艶やかな黒髪が揺れる。防

具類を外した彼の元へ、イデアたちは駆け寄った。真つ先にグラハムが『夜鷹』の元にたどり着き、先程の戦いを絶賛する。『夜鷹』はふつと笑みを浮かべ、照れくさそうに肩をすくめた。

イデアも同じような言葉しか出てこなくて、それがもどかしかった。彼を讃える言葉が見つからない。ただすごいとしか言いようがない。次に会うときまではボキャブラリーを増やしておこう、と、イデアはひっそりと決意した。

次の瞬間、竹刀を叩き付ける音が響いた。振り返れば、『夜鷹』の姉がこちらに背を向けている。防具越しから見てもすぐにわかるくらい、彼女の手は震えていた。憎しみに歪んだ顔をはつきりと見てしまいい、イデアはびくりと身をすくめる。

「姉さん。道具に当たっても、どうしようもないだろ」

『夜鷹』は静かにそう言った。

「私怨で剣を振るう者は、決して極みに達せない」

その言葉が引き金となったのか、『夜鷹』の姉が崩れ落ちる。そんな彼女を、母親は激しく叱咤した。

姉の背中を寂しそうに見つめていた『夜鷹』であったが、すぐに自分たちの方に向き直った。

「着替えてから行く。待っていてくれ」と言い、母親に「もう家を出る」旨を告げる。母親は『夜鷹』を引き留めたが、彼は首を振った。

母親は残念そうな顔をしたが、2つ返事で頷いた。『夜鷹』も頷き、胴着から普段着に着替えるために道場を後にする。『夜鷹』はもう、姉へと振り返らなかつた。

静かになった道場で、姉の嗚咽が響いてきた。この場にはいけない。それを察し、イデアたちも外へ出た。もうそろそろ、夕方へ移り行こうとする時間である。

「彼はいつも、家族の話題を避けていたんだ」

ぽつり、と、グラハムは呟いた。

「私は一度、彼に言ったことがある。『キミは、どこにいてもキミと血のつながる人間がいるんだな』と」

その瞳は、空へと向けられている。

空の向う側にある「何か」を見ているかのようにだった。

「私は孤児だったからな。クー……『夜鷹』が羨ましかった」

グラハムの言葉に、刹那が大きく目を見開く。何かを言おうとしたのだが、言葉が出てこない様子だった。

「思えば、家族の話題に触れないことが、彼なりの気遣いだったのだろう」

孤児であるなら、家族という言葉に対する憧れは強いだろう。その想いを、『夜鷹』は知っていた。だから、壊したくなかったのだと思う。『夜鷹』自身もまた、家族という言葉は温かいものであってほしいと願っていたのではないだろうか。

アイデアは目を伏せる。自分の手でそれを壊してしまった刹那もまた、やるせなさそうにしていた。嫌な沈黙が場を支配する。グラハムは小さく咳ばらいすると、「私も女々しいな。そういうのを見ると、ほとほと呆れてしまう性質なのだ」と苦笑した。

そこへ、着替えを終えた『夜鷹』がやってくる。時間を確認した後、彼は憂鬱そうにため息をついた。

この時間帯だと、今日はもう、どこも回れそうにない。まっすぐ旅館にチェックインする以外なさそうだった。

すまん、と彼は頭を下げる。グラハムはぶんぶん首を振り、満面の

笑みを浮かべて見せた。剣道の試合で充分帳消しにできる、と。

刹那もうんうん頷いていた。アイデアも、首が吹き飛ぶんではなからうかという勢いで頷いた。

それを見た『夜鷹』は安心したのだろう。ふつと表情を緩め、歩き始める。彼の背に続いて、自分たちも歩き出した。



このときのクローゴ・ハガネはまだ知らなかった。

「そちらのクルーの中に、アニュー・リターナーを泣かせたライル・デイランデイはいらっしゃいませんか!？」

「僕らの妹分を恋人にしておきながら、不貞行為を働いたライル・デイランデイはいらっしゃいませんか!？」

『悪の組織』第1幹部とその配下の者たちが、処刑準備を万端にしてお待ちしております」

「ライル・デイランデイ、そこにいるなら今すぐ出て来い。一瞬で済ませる」

「安心していいよ。塵どころか、DNAの一遍すら残さず消してあげるから」

「完全に殺す気満々じゃないですか! 誤解だって説明したのに、ああもう……!」

「は、はは。アニューは愛されてるんだなあ……」

(今にも死にそうな顔をしてる……)

この世には、とても仲が良い『家族』が存在していることを。

「あの後俺たちはアロウズに招集されて、皆バラバラになっちゃったんです」

「今の軍はまともではない！ 非人道的な行為を繰り返している！ しかも、その事実を国民たちに黙っているんだ！」

「俺、嫌です。こんなの嫌ですよ！ 隊長はおかしくなっちゃうし、技術顧問のカタギリさんもおかしくなっちゃうし、アロウズの動きもおかしいし、下される命令は虐殺まがいのことばかりだし！」

「アンタ、あの『グラハム・エーカー』上級大尉殿の副官なんだから!? だったら早く仕事しろよ！ 上級大尉殿あの暴走を止めるのがアンタの役目だろうが!!」

「俺たちじゃ、どうしようもないんでさあ……」

「もう、飛べないんです。自由に飛べないんです」

「お願いします。あの人たちを助けてください！」

「頼むから、帰ってきてくださいよ……!!」

愛すべき仲間たちの翼が、渦巻く陰謀によってがんじがらめになっ
てしまうことを。

「前にも言いましたよね。『私怨で剣を振るう者は、決して極みに達せない』って」

「それが貴女の至った極みだというなら、俺がその妄執を断ち切る。

私怨を糧にした暴力なんて超えてやる！」

「俺たちが生きた過去きとう、俺たちが生きるであろう未来あした！」

「それらにつながる『今』この瞬間を、俺は全力で駆け抜ける！ そのために剣を振るうんだ!!」

クーゴの剣が、世界の明日を切り開く刃の1つとなることを。

『『彼ら』はどうなるんだろうな』

「さあ、わからん。だが、また何かあったら顔を合わせることになるだろう。対立するにしろ、共闘するにしろ」

「少なくとも、同じ空を飛んでいるんだ。それでいいじゃないか」

「歩いている道が違ってても、今このとき見ているものが違ってても……
辿り着きたいと願うべき場所は、同じだからな」

そう言っつて、戦友たちに思いを馳せる日が来ることを。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

8. 前略、清水より

男は、今日の日付を確認した。

9月10日。なんてことはない、普通の1日。

何も変わらない。何も変わることのない、普通の日だ。

(ああでも、特別なことが現在進行形で『起きている』な)

思いを馳せる。大義名分は違うが、確かに今日は特別な日だ。月に数回ある、友人の護衛役／少女との逢瀬。その延長線で、男は日本の京都にいた。

憧れの地に、大切な友人／想いを寄せる少女らと共にいる。これだけでも充分、男にとっては特別なことであった。たとえその理由が、
“男にとつての”9月10日と違っていても。

氷塊のような感情を飲み込んで、男は朝風呂の準備を始めた。“男にとつての”9月10日なんかよりも、普段より少しだけ“特別な”9月10日を過ごすことの方が心躍る。

そのことだけを考えて、楽しみたい。

旅館にある露天風呂に浸かれれば、少しはマシになるだろう。

こんな気持ちを抱いたままでは、暗い影を見せてしまいそうだった。

友人は自分より先に起きて、朝風呂へ向かっていたようだ。隣の布団はもう既にもぬけの殻となっている。相変わらず早起きだ。

風呂の時間は、圧倒的に友人の方が長い。だが、そろそろこちらに戻ってきそうな気配がする。行き違いになりそうだと男は思った。

「あれ？ お前、今から風呂か？」

案の定。廊下に出て少し歩いたら、朝風呂を終えた友人がやって来た。露天風呂の脱衣所で着替えも済ませてきたようで、旅館の浴衣ではなく普段着を着ていた。わざと痛ませたデニム生地シャツを羽

織り、長袖の白いインナーを着て、ミリタリーデザインのカーゴパンツを穿いている。

『歌い手仲間』の女性と会う日は、特に気合を入れた格好をしていた。彼女との逢瀬の日が近づくと、彼はうんうん唸りながら男性用のファッション誌を読み漁る。そんな友人の姿を見ると、男はつくづく思うのだ。「彼も自分も、あるとき『運命の相手』に出会った」と。

友人はこのことを自覚していない。知っているのは男とその周辺だけだろうし、男はこれからも教えてやるつもりもない。自力で気づいてこそ、価値のあるものだ。もし、友人がその事実己の力でたどり着くことができたなら——それはきつと、何よりも尊いものになる。今の男にとっての少女のように、あるいは男にとっての友人のように。

「ああ。この旅館の露天風呂は本当に最高だ。しかも、朝にも入れるとは！ これは是非とも堪能すべきだな!!」

「だからといって、昨日みたいに『打たせ湯で滝行』すんなよ。血行が良くなるだけだから」

生温かく笑った友人は、男の地雷を容赦なくぶち抜いた。

昨日、自分を眺めていた旅行者と同じ目をしている。居たたまれなくなるからやめてほしい。

「キミは、人の黒歴史をネチネチと……」

「お前にそういう指摘をできるの、俺やあいつぐらいなもんだろ。お前に振り回される被害者筆頭として、これからも指摘してやるから覚悟しておけ」

「『京都の女はねちっこい』という噂は聞いていたが、キミも相当だな！」

「残念。俺程度で根を上げるならまだまだだな。おふくろや姉貴のような女に粘着されたら、お前の胃にどでかい風穴が開くだろうよ」

友人は笑っていた。だが、その笑い方に影を感じて思わず息をのむ。彼とその家族のやり取りを考えれば、冗談でも話題に出すのは精神的に辛いだろう。

彼に自分と同じ氷塊を味あわせるつもりはなかったのだ。男は慌てて謝罪しようとしたが、彼がぽんと手を叩く方が早かった。

「いや、あの子に粘着してるお前の方が酷いよな」

彼は至極真面目な顔で頷いた。いきなりの話題転換。

場の空気を和ませようとしたのではない。彼は素で、その話を持ち出したのだ。

友人は山羊座のB型だ。一般的には、『粘り強さと野心に満ち溢れており、大器晩成型の傾向が強い』、『乙女座同様、自他に対して厳しい傾向がある』、『山羊座の中で、B型は比較的友人が多い』、『努力家で信念があり、努力でどんな職業もこなせてしまう』という話を聞く。少なくとも、『他人の揚げ足を取る』や『切り替えが早い』、『素で人の地雷をぶち抜く』や『ねちっこい』なんて特性はなかったはずだ。そう言ったら男も似たようなものである。乙女座のA型には『道理を無理で押し通す(件の友人談)』や『努力の方向性が方向音痴(件の友人談：その2)』なんて記述はない。

純粹、潔癖、気が強い。乙女座のA型の特徴には、男の三拍子が揃っている。生真面目も合わせれば四拍子か。ついでに、少女の星座である牡羊座とは壊滅的なほど相性が悪かった。だからといって『運命の相手』を諦めるつもりなど毛頭ないのだが。こういうときこそ、友人の言う『道理を無理で押し通す』を体現するときだ。

男の意地と努力が実を結んだのか、星座相性占いの結果は崩れつつあった。少女の態度が軟化したこと、昨日少女が口にした一言がその証明である。

ちなみに、友人の『運命の相手』は蠍座のO型。星座相性占いの結果は上々だ。断じて悔しくなんかない。

どうしてこんなに詳しいのかって？ 答えは単純。もう1人の友人や付き合いのある部下たちの協力も得つつ、情報収集と戦況分析を行った結果だ。

閑話休題。

「それじゃ、ゆっくり浸かってこいよ。のぼせない程度にな」
「わかっているさ」

友人と別れ、男は露天風呂へと向かった。脱衣所で服を脱ぎ、風呂場へ足を踏み入れる。早朝であるが、朝ぶろを楽しむ客がぼつぼつといた。

体を清め、外へつながら扉を開ける。風呂場のむっとした空気が一瞬で吹き払われ、少し肌寒い空気が頬を掠めた。それがひどく心地よい。

外気の影響を受けているせいか、露天風呂の温度は少しぬるめだった。昨日、そうと知らずに滝行していた打たせ湯や、室内風呂の方が熱かった。

湯船にすっかりつかりながら、男は大きく息を吐いた。

朝の始まりに露天風呂とは、*“特別な”* 9月10日の始まりに相応しい贅沢だ。

今日はどんな1日になるのだろうか。楽しみで楽しみで、たまらなかった。



「機械に世界の管理を任せると、ロクなことにならない」

愕然とする人々の心情をよそに響いたのは、『エトワール』——□□

□の声だった。

「前から思ってたけど、それを地でいくようなヤツね」

「あー成程。納得です」

加■機関唯一のライセンスである青年もまた、□□□に同調する。

そういえば、彼女は言っていた。「自分は、機械によって迫害されていた、古き『同胞』の血を引く末裔なのだ」と。

クーゴや彼女の『同胞』は血筋で増えるのではなく、***の要因で目覚めるものだ。しかもそのきっかけは、機械による**検査である。

『同胞』の**は**検査で目覚めるのだが、大抵の『同胞』は**をパスできずに死んでしまうのだ。むしろ、それ自体が『同胞』の排除を目的としている。

終いには、『同胞』との共存と支配の打倒を選んだ人類に対し、機械は「人類の排除こそが最良の方法である」という答えに行きつき、人類を滅ぼそうとしてきた。

人類と地球を守るために生み出されたというのに、機械は目的を外れて支配者／管理者へと進化したためだ。

絶対的な力を持つ機械。

その支配を打ち破ったのは、あまりにもちっぽけで無力な人間たちだった。

「クーゴさんは、知ってますよね？」

「まあな。ただ……」

クーゴは周囲を見回す。先程告げられた「滅びの託宣」が尾を引いているらしく、仲間たちの動きが鈍い。平和にするために戦い続けてきたのに、それが滅びへ向かうカウントダウンだったなんて言われて、平然としていられる人間は滅多にいないだろう。

アルティメット・■ロスの面々は「自分たちは人類と地球の平和のために戦ってきた」という矜持を持っていた。それを支えにしていたからこそ、「あん畜生」の策略とはいえども）世界から「テロリスト」の烙印を押されても戦ってこれたのだ。

平然としているのは、地獄公務員や□□□とライセンスサーくらいだろう。クーゴも、正直少し動揺してる。

そんな■ルティメット・クロスに追い打ちをかけるように、機械の神は問いかける。「それ程までの力を持ちながら、どうして人間は人間のままでいられないのか」と。「与えられた楽園を、どうして享受することができないのか」と。

死を想像するからこそ人は生きていける、死ぬことこそが命のはじまり。奴の言い方は何かの核心をついているように思う。命のこたえを得たことで真の力を発揮したサ□であるが、それだけでは答えが足りないのだろうか。

思考回路を別なところにめぐらせていたとき、機械神の攻撃が繰りだされた。躲しきれない。慌てて防御機能を作動させたが、機体に凄まじい衝撃が走る。爆発音に呼応するように、仲間たちの悲鳴が響いた。息が詰まる。やっと動けるようになったとき、周囲から黒煙が立ち上っていた。

死にたくない。そんな声が、周囲から響く。

クーゴがそれに気づいたのと、機械神が厳かに語ったのは同時だった。

「生きたいか？　死ぬのが恐ろしいか？　それが想像だ。それが命だ」

呼応するように、マキナたちが姿を現す。奴らは現れるなり、間髪入れず攻撃を繰り出す。

まるで雨あられだ。あちこちから悲鳴と黒煙が上がる。

「もうやめて！　彼らの存在を消さないで!!」

エルシャ■クの通信越しに、フェストウムの少年が悲鳴を上げた。

「こんな痛みが……こんな苦しみが、命だっというの!？」

彼は、彼の創造主の命を受け、『いのち』について学んでいる最中だ。おそらく彼は、フェストウムの能力である読心術で、その痛みや苦しみを感じたのだろう。

フェストウムは痛みや苦しみに慣れていない。数か月前の戦いで、半ば強引に総□を取り込んだイド□ンが痛みに耐えきれず、「自分を消せ」と叫んでいたことを思い出す。

かつて、□騎の母親は、フェストウムを愛^祝を教^福えた。

マーク■ヒトのパイロットをしていた道□と弓□の同級生は、フェストウムを憎^祝しみを教^福えた。

□士はフェストウムたちを痛^祝みを教^福えた。その結果、ミー■が生み出したのが、この少年。

彼は人一倍、痛みを嫌っていた。苦しみを嫌っていた。それらすべてから、逃れようとあがいている。

「こんな辛い思いをしてまで、なんで神様に逆らわなくちゃいけないんだよ!？」

「黙れよ!」「だからよ」

それを遮ったのは、浩□と□□□だ。

「何が……与えられた楽園だ! 死の恐怖に怯えて、絶えず戦って、地にはいつくばって……! そんな世界の、どこが楽園だっというんだよ!？」

「だ、だけど……」

神に逆らい痛みと苦しみを与えられるか、かりそめの楽園を教授す

るか。

フェストウムの少年は悩んでいるようだった。その言葉を引き継ぐように、□□□が厳しい口調で告げる。

「その楽園が、人間から人間らしさを奪うの。人の心を壊すの。そして、人を滅ぼすのよ！」

ライセンスサーも、蔑むようにため息を吐いた。

「貴方のようなレベルならば、『母親』の方がまだ良心的だったかもしれませんねー。〃人間同士で戦争を起こさず、平和的に〃〃という点では、ですが」

「**の『母親』か」

機械の神は、ライセンスサーの言葉からすぐに対応する存在を割り出した。□□□とライセンスサーが驚いたように目を見張る。クーゴも息を飲んだ。

このことは前対戦に関わった、ごくわずかな人間しか知らないはずだ。……だが、地球を監視し続けてきたこの神なら、掴んでいてもおかしくないかもしれない。

「彼女は失敗だった。真綿で首を締めるような管理方法では、生ぬるかったのだ。だから私はその失敗を活かし、この管理方法を選んだ」

神は思いを馳せるように目を閉じる。嘗て存在し、人間を管理していた同業者に、何やら思うところがあるようだった。

だが、やはり、人間らしさを潰すようなやり方をしている時点で、こいつは件の『母親』と大差ない。クーゴは小さく舌打ちした。

操縦桿を握り締める。自分の力が発揮されたことを意味する青い光が、ゆらゆらと湧き上がってきた。

「管理まるでモノを扱うをするようなニュアンスで言われるのは、随分と癪なんだがなあッ！」

「これだから、機械に世界の管理は任せられないのよ！」

『母親』の末路をご存知なら、貴方みたいな機械が最後にどうなるのか、ご存知ですよねっ!？」

クーゴの機体だけではない。□□□とライセンサーの機体も青く輝き始める。

「そうだ、俺たちは人形じゃない！ 人間なんだっ!!」

そう叫んだシヨ□も機体からもまた、光が湧き上がる。平和であつてほしいと願う戦士の思いが、オーラ力を増幅させているのだ。

クーゴの持つ力と聖戦士のオーラ力を見た機械が興味深そうに力を分析する。片や人類の進化の可能性のひとつ、片や人の理念が為せる業。

「死にたくないって思うことが命なら、平和にしたいと思うことだつて命でしょう!?! だったら□ヨウには……人間には、その思いをカタチにする力があるんだから！」

すると、ほんの一瞬、機械の神が考えを巡らせるように目を伏せる。

その隙を逃すほど、自分たちは甘くない。シ□ウと共に、機械の神めがけて攻撃を仕掛ける。

次の瞬間、凄まじいエネルギー波が発生し、自分たちの一撃は呆気なく相殺されてしまう。

「なっ!?!」

逆にこちらが驚いた。その隙をつかれ、弾き飛ばされてしまう。

仲間たちが息を飲む。自分たちはおろか、シヨ□のようなオーラバ

トラーでさえ太刀打ちできないとは。機械神の力は□一の機体と同じ、圧縮転送フィールドを使っているらしい。

彼のライバルである元黒騎士も動揺していた。誰もが諦めかけていたとき、浩□が叫ぶ。この少年は、諦めるとい言葉知らない。正義の味方は決して諦めない——その言葉を体現するような子だ。

浩□の作戦は、地獄公務員や石□が試みようとしていた対消滅とよく似た原理である。彼の機体に搭載された圧縮転送フィールドの力をぶつければ、鉄壁を誇る機械神の防御を突破出来るかもしれない。その、一瞬のスキを突く。成功率は天文学的に低いし、成功したとしても機械の神にダメージを与えられるかもわからないのだ。

歌姫が不安げに問う。聖戦士と正義の味方は間髪入れずに頷いた。負けることばかり考えれば、本当に負けてしまう。

「できるかどうかじゃない！ 必ずやり遂げてみせるんだアアアアアアツ!!」

□一の機体から、白い光があふれ始める。

「うおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

□ヨウのオーラ力が爆発する。

「その賭け、乗った！」

「人は機械を超える！ 人間の力、ちゃんと見ておきなさいよ！」

「人間を舐めないでください！」

自分たちの力を、一気に発現させる。

浩□の機体が先陣を切った。機械神と正義の味方のエネルギーがぶつかり合う。拮抗したエネルギーが弾け、その一瞬のスキをついて、自分たちが攻撃を仕掛けた！

響く轟音。確かな手ごたえを感じ取ったと思ったとき、爆ぜるよう

な音がした。機械神は驚愕に満ちた顔で自分たちを見返していた。

無敵だと思われていた機械の神を、自分たちは怯ませた。それは仲間たちにとって、最高の起爆剤になったようだ。仲間たちが次々と普段の調子を戻していく。

何のために自分たちが戦ってきたのか、その意味を思い出せたのだろう。誰かの命を守りたいから、人が人として生きる世界を守りたいから、ここまで戦ってこれた。

「恐れるな、悲しむな！ 信じる心が、正義になるんだアアツ!!」

シヨ□の言葉を皮切りに、仲間たちが反撃の狼煙を上げた。

それを見た機械の神が戦慄する。

「これが、ニンゲンの力……！ これが、人間の可能性……！」

怯んだ神とは対照的に、今度は浩□が託宣する。

「教えてやるぞ、機械仕掛けの神！ 正義は、必ず勝つてことを！」

仲間たちが次々とマキナを撃破していく。防戦一方だった戦いが嘘みたいだ。さすがにマキナたちも焦り出したのか、増援が次々と現れる。

今の□一なら、機械の神など襲るるに足らず。クーゴは『同胞』に視線を向け、次に空を見上げた。

曇天を切り裂くように空を翔るのは、白と青を基調にした天使と青い閃光。『彼女』とグラハムである。

この2人も漏れなく動揺していたのだが、今はもう迷いはない。いつもと変わらぬ戦術を駆使し、最高のコンビネーションを披露して、マキナたちを屠っていく。

あれならもう、何も心配することはない。□□□に合図をすれば、彼女は自分の力とヴォワチュール・リュミエールを駆使してマキナた

ちを翻弄した。

その隙をつくような形で、クーゴとライセンスサーがマキナたちを倒していく。星屑の渦を突き抜けるような勢いで、アルティメット・ロスの面々は奮戦した。■

人の心が持つ強さを、機械仕掛けの神に示すかのように。



京都の空は、秋晴れと称するにふさわしい天気となった。今日は洛北を中心に見て回る予定となっている。

現在、クーゴたちは清水寺を訪れていた。京都の観光地であり、『清水の舞台から飛び降りる』という諺のもとになった有名な場所でもある。

「意外と高くないのだな」

舞台の手摺から身を乗り出して、下を眺めていたグラハムが不満そうに呟いた。

「当然だろう。俺たちは普段から、もっと高い場所から下を見てるんだから」

クーゴは苦笑した。今、改めて下をのぞき込むと、彼の言葉通りに思える。

幼い頃、ここを覗き込んだときは恐怖で足がすくんだものだ。隣で蒼海が楽しそうに笑いながら、手摺から身を乗り出していたことは昨日のことにように思い出せる。

ふと隣を見れば、『エトワール』が景色を眺めているところだった。目が見えないという自己申告は嘘ではないらしく、時折目を閉じて、聴覚やその他感覚を駆使して景色の雄大さを感じ取ろうと試みていた。

紅葉シーズンより早い時期のため、葉の色はまだ綺麗に色づいていない。見ごろは10月から11月頃だ。

一応12月でも見れるが、朽ちかけていると行っていいザマになっている。もちろん、綺麗ではない。

京都に修学旅行に来た東北在住の親戚が「もう帰りたい」と嘆いた話が忘れられなかった。

少女は何も言わず、古都の趣を眺めていた。先日的一件事があったためか、グラハムとの距離がやや近い気がする。

それが嬉しいのだろう。グラハムも機嫌が良さそうだ。

今朝はどこなく暗い影が漂っていたことを除けば、グラハムは至って普通であった。『普通に振る舞おうとしていた』。

(ばればれなんだよ、ばーか)

今日が何の日か。わかっていたからこそ、クーゴはこの旅行を計画した。『エトワール』や少女に頼み込んで、だ。

全貌を知ったら、グラハムはどんな顔をするだろうか。考えるだけでワクワクする。そのためにも、このプランは全力で秘匿しなくては。

「それじゃ、そろそろ次へ行こうか」

「そうですね。お店巡り、楽しみです」

クーゴに促され、『エトワール』が頷いた。計画のこともあってか、足取りがいつもよりも軽やかな気がする。今にも踊り出してしまいそう。

少女は計画を隠し通そうとしているせいで、何やら動きがぎこちな

い気がする。グラハムもなんとなく察したようで、彼は数割増しで少女に話しかけていた。

彼の気を逸らすために、クーゴはわざとグラハムの首根っこをひつつかんでは苦言を呈した。勿論、律儀なグラハムはクーゴに対し、不満げな眼差しを向ける。

地図を開いて目的地を確認しつつ、クーゴはグラハムの不満を受け流していた。その隙に、『エトワール』が少女のフォローに回る。これで何とかごまかせるだろう。

不意に、グラハムが地図をひったくった。何事かと思えば、奴の目はある一点に釘付けである。グラハムは端末をいじりながら、地図と端末画面を交互に見比べていた。

端末の説明に出てきたのは、古くから縁結びの神様を祀っている神社だ。クーゴが首を傾げたとき、彼は興味深そうに商品名を眺めている。縁結びのお守りだ。

『夜鷹』。カタギリ司令がおっしやっていたのだが、『日本の恋人は、つがいの縁結びのお守りを交換し、持ち歩く』と聞いた」

「すべてというわけじゃないぞ。清水寺のすぐ隣にある神社にその類のお守りが売ってるが……行きたいのか？」

「是非！」

グラハムが満面の笑みを浮かべて頷いた。おそらく、奴は縁結びのお守りに目を付けたのだろう。

その神社には、恋人同士の中を深めるといってお守りを販売している。お守りはつがいになっており、カップルがそれぞれ1つずつ持つと愛がより深まると言われていた。

日本は宗教観が薄いと言われるが、実際は「沢山の神々が当たり前のように傍にいた」ために、「神様＝絶対の存在」という西欧圏とは違うものを持っている。

閑話休題。

恋人同士が愛を深めるお守りを買おうと言っているが、グラハムと少

女は恋人ですらない。

クーゴが言及しようとしたが、奴が次手を打つほうが早かった。

「そういえば、『真の愛で結ばれた日本のカップルは、石破ラブラブ天驚拳を放てる』と司令が」

「それはない」

クーゴは胸を張って言った。グラハムの表情がきらきら輝いており、それを切り捨てるとなると些か胸が痛む。

だが、間違っているのは事実だ。指摘してやらないと、奴は『真面目に取り組んだ結果』として暴走してしまう。

「というか、そもそもお前と彼女は」——その先は、グラハムが視線を向けた先から聞こえた声によって遮られた。

「お義父さん、ルイスを僕にください！」

「私のお婿さんは沙慈以外考えられないの！ だからお願い、パパ！」
「貴様のようなヤツに、娘を渡すことなどできん！ どうしてもというなら、我々を超えてみせろ！」

数世代前の日本のドラマを思わせるようなやり取りが聞こえた。誰もがその一点に注目する。

「ルイス！ 僕と一緒に……」

「沙慈！ 私と一緒に、石破ラブラブ天驚拳を打ってほしいの！」

「ルイス……！！」

「大丈夫よ、私たちならできるわ!!」

金髪碧眼の気が強そうな少女と、どこか苦労していそうな東洋系の少年が見つめ合う。クーゴの目がおかしくなければ、何やら変なオーラが漂ってきた気がした。

少年少女は手を取り合う。彼らの目には一切の迷いが無い。2人

の手が真つ赤に燃える。幸せ掴むと轟き唸る。恋人たちは同じ場所を見て、同じ未来を見ているのだ。

それを見た少女の両親も負けていない。

「貴方！ 私たちも！」

「当然だ。我々の真の愛の力は、若気の至りなどに負けやしない！」

郷に入りては郷に従う……日本文化の作法に乗っ取り、真の愛を思い知らせてやろう！」

「ルイス、見せてあげるわ。私たちの石破ラブラブ天驚拳を！」

こちらに変なオーラが漂い始める。2人の手が真つ赤に燃える。真の愛を示して見せようと轟き唸る。

けれど同時に、夫婦は思っているらしい。2人が真の愛ならば、きっと己を超えていく。そのときは、2人の背中を押してやろう、と。鴛鴦夫婦と若き恋人たちのオーラがぶつかり合うのが見えた。この場にいる人間たちは固唾を飲んで見守っている。

だから、日本にはそんな風習もなければ作法もない。痛いくらいに突き刺さるグラハムの眼差しに、クーゴはモノを申したくて仕方なかった。

『エトワール』は固唾を飲んで見守っている。少女は割って入ろうとしていたようだが、圧倒されてしまったようだった。

「ふたりのこの手が真つ赤に燃える！」

「幸せ掴めと轟き叫ぶ！」

「せきいっ！」「はっ！」

「ラアアアッブラブウウツ！ 天っ驚おおお拳つつっ!!」

清水寺一帯を覆い尽くすような勢いで、色とりどりの光が爆ぜた。吹きすさぶ突風に、思わずクーゴは目を覆った。

煙が晴れる。立っていたのは若い恋人たちだった。少女の両親は膝をついている。心なしか、夫婦と恋人たちは傷だらけだ。

コンマ数秒間に何があったのだろう。カップルと夫婦は互いを讃えあうように、ぐつと手を組んだ。

「見事だ。キミこそ、ルイスの婿に相応しい」

「お義父さん……！」「パパ……！」

「沙慈くん、ルイスをよろしくね」

「はい、お義母さん……！」「ママ……！」

「見合い相手には、私から断りを入れておこう。何人たりとも、2人の幸せを邪魔させない！」

なにやらしい話で纏まったらしい。ひとしきり話を終えて満足したカップルと夫婦は、肩を並べて清水寺から去っていく。清々しい秋の風が吹いた。

クーゴがツツコミを入れる前に、大嵐は過ぎてしまった。心が宙ぶらりんになったような錯覚を覚える。しばらくこの場は静かだったのだが、弾かれたようにざわめきもどった。

長らく日本で生活してきたし、日本の親戚からも情報を仕入れている。日本文化研究の権威と呼ばれる教授も親戚にいる。だが、日本文化にあんなものがあるなんて聞いてない。

新興文化だろうか。だとしたら、独り身の男性には厳しい世の中になりそうだ。

逃避をしても仕方がない。諦めて現実と向き合わなくては、とクーゴが決意したときだった。

グラハムが少女の手を取り、藪から棒に言った。

「少女よ！ 私と一緒に、石破ラブラブ天驚拳を」

「俺に触るな!!」

少女は顔を真っ赤にして、グラハムの手を思い切り振り払ったのだった。

*

現在、自分たちは清水寺境内にある神社に來ている。グラハムの強い希望に引つ張られたような形となった。

境内もまた、人々でごった返していた。参拝客やお守りを買う客など、目的は様々だろう。

自分たちは現在、2手に分かれて境内を散策している。今回、クーゴは少女と行動を共にしていた。

理由は簡単。グラハムが普段にも増してしつこかったからだ。少女が何かを隠していることを敏感に感じ取ったためだろう。

少女の方もまた、隠していること——サブライズを隠し通せなくなりつつあった。そこで『エトワール』と相談した結果、一端2人を引き離すことにしたのだ。

グラハムが不満そうにクーゴを見ていたことを思い出し、苦笑する。意中の相手が違う男と一緒にいるというのは、耐えがたいことだろう。後が怖い。

「日本の宗教観は、わからない」

少女は真顔で呟いた。隣にいたクーゴは思わず苦笑いしてしまう。彼女は中東系だから、神という単語には深い思い入れがあるのだろう。

「確かに。中東での唯一教から見れば、日本の『どこにでも、何にでも神様が宿る』って考え方は難しいか？」

「他宗教の祭りを取り入れているのに信仰心が見当たらなかつたり、モノリスが神になってしまつたり、神の中に『貧乏神』や『トイレの神様』なんてのもいたりするところが、特に」

「なかなかマニアックな例を挙げるな……」

モノリス大明神なんて、21世紀初頭の出来事ではないか。確かに、一時期「日本人の宗教観」を調査するのにうってつけな例だと話題になったが。

『トイレの神様』も同様である。作曲者にして歌手の女性が、生前の祖母から言われていた民間伝承が入っている。元々は祖母と暮らしだ日々のことを歌っていたものだ。

蛇足ではあるが、日本文化研究の権威となったクーゴの親戚は、この歌を聞いて日本文化研究を志したという。世の中、何がきっかけになるかなんてわかったものではない。

「最初の1つは、単に『日本人がお祭り好きである』だけだろうな。自分たちが盛り上がりつつ楽しんでるなら、宗教なんて関係ないんだよ。2つ目のモノリス大明神は、アニミズム的な精霊崇拝と非常に近い。モノリスのオブジェが親しまれるうちに、些細なこと……たとえば『名刺に願い事を書いてオブジェに置くと願いが叶う』あたりの噂話をきっかけにして、そのまま神格化されたんだろ」

俺は詳しくないが、と前置きし、少女に説明する。こんなことならもう少し、きちんと調べておけばよかったと後悔した。

少女はクーゴの話に耳を傾けていた。しかし、説明内容の違和感に気づいたらしい。少しだけ、首が傾いた。

クーゴにとって、日本の宗教観を一番如実に表すのは、少女の3番目の疑問だと思っている。

「3つめは、必要ない存在がいなくてことじゃないかな。貧乏神は取りついた相手を貧乏にしてしまうけど、貧乏だからこそ『ものや人を大切にする』、『質素に、慎ましやかに暮らしていく』ことは大切だ。『ってことを教えてくれる。トイレの神様の逸話は……』」

「耳にしたことはある。『徳が高く見目麗しい女神が、自ら不浄を司る神として名乗りを上げた』と」

「そうだな。誰もが使う場所で、絶対に必要な存在で、でも汚いから誰

もやりたがらない。自らそこに名乗りを上げ、実際に神様としての役目を果たしているんだ。凄いことだと俺は思う」

「汚いから誰もやりたがらないけれど、絶対に必要な存在……」

少女は何か思うところがあつたらしく、はつと息を飲んだ。噛みしめるように呟く。

「日本の神様は、必死になつて頑張る人を助けようとするんだよ。そうとはわからない程度に、そつと背中を押してくれるんだ。『想いと祈りを届けよう』、『大丈夫だから、自信を持って』って感じでな」

日本人にとつての神は「世の中捨てたものではない」ことを示してくれる『燈火』みたいなものだ。もしくは、困つたときに力を貸してくれる『正義のヒーロー』、大切なことを気づかせてくれる『先生』とも言えそうだと、クーゴは思っている。

神様に守つてもらふという話はよく聞いた。病弱な子ども時代、両親はクーゴが健康になるように、と、しょつちゆうお参りしてくれていた。苦しいときの神頼みとはよく言うが、神様はあくまでも背中を押してくれるだけで、あとは当人次第ではないだろうか。それを成し遂げたご褒美として、ささやかでかけがえのない幸福をくれる。

そこまで語った後、クーゴは笑った。何かに似ているだろうか？と。

「人間と同じだ。『自分のことを、きちんと見てくれる』相手は、誰にだってちゃんという。それに気づけたとき、嬉しいって思ったり、救われたような気持ちになつたりするだろ？」

「……………」

「日本人にとつて、神は隣人以上に身近だった。身近すぎたんだ。その反動で、宗教観が非常に薄くなつたって言われてる」

「そうか」

少女は淡々と返答した。ここまでが一般論だ、と、クーゴは付け加える

「俺個人としても、神様はどこにでもいる説を推す。ただし、神社仏閣その他諸々より、『人の心』や『良心』と答えるがな」

「『人の心』？」

「ああ。夢とか、希望とか、信条とか、正義とか、道徳とか、優しさとか、好奇心とか、わかり合おうとする気持ちとか、誰かを大切に思う気持ちとか、誰かを守ろうとする気持ちとか。人の心の底から湧き上がる、そういうものを信じたいよ」

クーゴはそう言つて、空を見上げた。あそこへ行きたくて、なんとしても行かねばならなくて、自分は努力を続けてきた。

実家に渦巻くしがらみや憎しみとは無縁で、美しく雄大な空。あそこに辿り着かねばならないという思いに突き動かされて、ユニオンの軍人になった。

しかしながら、どうして『ユニオンの軍人』になろうとしたのかは、クーゴ自身でもわからない。本能によく似た、漠然とした衝動だった。

だけど、それに従つてよかつたと思う。おかげで、グラハムやビリー、エイフマンや調査隊の皆と出会うことができた。『エトワール』や少女とだって出会えた。

憎しみや悲しみがなかつたわけじゃない。けれどそれ以上に、思いを共有できる人たちがいた。夢や希望を語り合える、大切な人たちがいた。

彼らに何度救われただろう。何度助けられただろう。彼らのおかげで、尚更、人の心を信じたいと強く思えるようになった。思い出し、クーゴは目を細める。

「……成程。お前の神は、そこにいるんだな」

不意に聞こえた声に振り返れば、少女もゆるく目を細めていた。そして、考え込むようにして俯く。やはり難しかったのだろうか。心配になって問いかければ、彼女は首を振った。相変わらずクールな横顔で、「いいや、充分参考になった」と礼を述べる。端末をいじり、何やら色々と見始めた。『神頼み』に挑戦してみるか、と、赤銅色の瞳は語っている。

手が止まる。その異変に気づいてクーゴが端末を覗き込めば、つがいになった縁結びのお守りがあった。一般的な袋のようなものではなく、キーホルダー形式のものだ。アクセサリーと見間違え、シンブルなハート型。少女は、金色と銀色に輝くお守りに狙いを定めたようだ。それともう一つ、厄除けのものも買うつもりらしい。

何かに気づいたように少女がこちらを振り向いた。クーゴは端末から視線を逸らし、そ知らぬ顔で通す。安心したかのように、少女はまた端末へ目を戻した。しばらく端末を見ていた後で、意を決したように顔を上げる。視線の先には、お守りを撃っている売店。

少女はそこへ向かい、狙いを定めたものを購入して戻ってきた。そこへ、境内を散策し終えたグラハムと『エトワール』もやってくる。

「少女！ 手を出してくれないか？」

グラハムは息を切らせて少女の元へ駆け寄った。子どもみたくにはしゃぐグラハムに気圧されつつ、少女は首を傾げながら手を出す。少女の掌に乗ったのは、赤いお守り。グラハムが狙いを定めていた、縁結びのお守りである。彼の手には、青いお守りが握りしめられていた。

「お揃いだな！」

「!!」

満面の笑みを浮かべるグラハムの言葉を理解し、少女が鉄仮面のよ

うな顔を崩した。困惑と羞恥が混ざり合った表情で、体全体をわななかせる。

途端に始まる普段のやり取り。この数カ月間、日常的に見てきたものだ。もう何も語るまい。クーゴはふつと笑みを浮かべ、友人とその想い人に生温かい視線を向けた。

そのとき、服の裾を引つ張られた。振り返れば、『エトワール』が、じつとこちらを見上げていた。どうしたのだろうか。

『夜鷹』さん、手を出していただけですか？」

「あ、ああ」

差し出されたのは、少女が購入したお守りと同じものだった。クーゴの掌に乗せられたのは、銀色のハート。思わず『エトワール』を見れば、彼女は悪戯っぽく笑う。彼女の手の中には、金色のハートが握られていた。

『エトワール』は鼻歌を歌いながら、軽やかな足取りで離れていく。グラハムの影響に毒されてしまったのだろうか。クーゴは何とも言えない不安を覚え、『エトワール』を見る。彼女は2人の間に入って、仲裁していた。

もう一度、お守りへと視線を下す。銀色のハートが、太陽に照らされて輝いた。あまりにも眩くて、クーゴは思わず目を細める。胸が温かくなるような感覚に頬を緩めた。向けられた好意を無下にすることもはない。

これは大事に持っていよう、と、クーゴはひっそりと思った。



このときのクーゴ・ハガネはまだ知らなかった。

「えーと、教官は蟹座のO型だから……………」

「……………星座占いが何よ。血液占いが何よ。そんなもの、絶対信じない！　ぜったいぜったい、諦めないんだからっ!!」

「ふ、ふふふ、ふふふふふ。あははははははははははーっ!!!」

「ネーナが！　ネーナが壊れた!!　どうする!?　ってかどうすればいい!?」

「……………わからん。ただ、前途が多難であることだけは確かだ」

「――!?!」

「どうしたんだい?」

「今、ものすごい悪寒が…………!?!」

相性占いに風穴をぶち明けることを選んだ者が、グラハム以外にも存在することを。

「この運命がどんな顛末に至ろうとも、私は決して後悔しないよ」

「それはキミも同じだろう?　クーゴ」

「だな。俺も、この運命を否定しない。だけど、諦めて受け入れるのは別問題だと思っている」

「それは同感だな。あえて言わせてもらうが、私は諦めていないぞ!」
「知ってる。散々見せつけられて疲れた」

「痛いものを見るような目でこちらを眺めるのはやめてくれないか!?!」
「そして、じりじり間合いを開けるのもだ!」

「散るにしても生き残るにしても、『彼女』に恥じぬ生き様を貫きたいものだ」

「縁起悪いことを言うな、ばか。必ずここに帰るんだ。忘れるなよ?」

神様以上に悪趣味な運命に立ち向かうという、長い戦いへと身を投じることを。

「か、可憐だ……」

「ああ、沙慈ー! 遅ーい!」

「ごめんよルイス。色々あって……」

「許さなーい! 本当に申し訳ないと思ってるなら、今すぐ私にちゅーしれー!」

「ちよつと待ってよルイス! ここ、人がいっぱい、その……」

「うふふ、そういうところがかわいいのよねー。からかうの楽しいー」
「る、ルイスっ! ……ば、僕だつて、僕だつて男なんだからね」

「!」

「……………」

「……………」

「……………失恋した」

「アンドレイ……。……強くなれ、息子よ……!」

「どうかしたんですか? 大佐」

誰かの恋が、開始数秒じんせいさいたんで終わってしまうことを。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

9. 幸せな時間

名前を呼ばれて、顔を上げる。『彼女』が柔らかな微笑を浮かべていた。

『彼女』は感情を表に出さない人間だと言われることが多い。元来より不器用なところも相まって、無口で不愛想だと思われがちであった。

事実そうではあるが、『彼女』は世間一般が思う以上に直情的な性格だ。ただ、その表現方法が少し不器用なだけである。そんなところがいじらしい。

込み上げる感情のまま、男は女性に手招きした。大きく手を広げて、『彼女』を迎え入れる。華奢な体はすっぽりと腕の中に納まった。今、女性と“こう”していられる。その“事実”の尊さに、男はますます笑みを深くした。うまく説明できないが、あの戦い以来、今の瞬間が奇跡のように思える。

「苦しい」と『彼女』は身じろぎした。耳と頬が淡く染まるのは、照れている証拠だ。今頃、男の顔はだらしなく緩み切っているだろう。

「今日は、お前の誕生日だろう」

『彼女』の言葉に、男は硬直する。どうも、この言葉を聞くと反射的に身構えてしまうらしい。

おまけに、無意識的に「誕生日である」という思考回路を排除しようとする癖があった。

穏やかな時間を過ごせる相手と出会っても尚、男の癖は治らないようだ。男は苦笑する。

「地球の共通時間ではな。ここは外宇宙だから、そんなことは関係ないだろう」

「それを言ったら、俺の誕生日を盛大に祝ったのはどう説明するんだ」
「キミの生まれた日を祝わないわけがないだろう。私は君に会えたことを、何よりもの幸いだと思っっているからな！」

男はえっへんと胸を張った。

女性も微笑む。

「それと同じだ。俺も、お前に出会えてよかったと思ってる」

男は思わず、『彼女』の名を呼んだ。女性は静かに目を細めると、とても優しい声で、言った。

「誕生日おめでとう。お前が生まれてきてくれて、お前と出会うことができて、嬉しい」

「っ、——！」

感極まって女性の名前を呼んで、思いつきり抱きしめた。『彼女』が何か言った気がしたが、男は構わず頬を摺り寄せる。

そのまま接吻せんばかりの勢いで顔を近づけたら、丁度いいタイミングで扉が開いた。げ、と、茶髪の色男が顔を顰める。

彼の後ろには、旅の仲間たち。色めき立った面々を抑えるのは、男の友人である黒髪黒目の東洋人であった。

何をしに来たのかと問えば、彼らは笑う。「今日はお前の誕生日だと聞いた」——そう言っつて、面々は『彼女』の方を見た。

主役を呼びに行つたつきり帰つてこなかったから気になった、というとか。『彼女』は苦笑した後、男の手を引く。

食堂は綺麗な飾りつけが施されており、机の上にはたくさん日本料理が並んでいる。殆ど、友人が作ったものらしい。

「キミの日本料理は、いつみても美味しそうだな」
「まあな」

褒められて悪い気はしないのだろう。友人は穏やかに微笑んだ。料理を見たクルーたちが次々に感想を漏らす。

「日本料理を食べるのは初めてだな」

「綺麗に盛り付けられたもんだ。でも、米に酢か……」

「地球にいたときに食べたことがあるけど、そのときは海苔で巻いていた気がしたね」

「□ラ准将、それは手巻き寿司の方です」

わいわいがやがや。誰も彼もが楽しそうに談笑している。その様子が眩しくて、優しく、男の視界がじわりと歪んだ。

それを悟られたくなくて、男は小さくかぶりを振った。「彼女」はなんとなくそれを察したようで、ちらりと男の方を見る。

男は苦笑った。幸せすぎて苦しいのだと、小声で自己申告する。女性には安心したように表情を緩めた。そして、男を主役席へと案内する。

「ハッピーバースデー、――……。――少佐！」

「35歳の誕生日、おめでとう！」

食堂内に、拍手とクラツカーの音が鳴り響いた。

◆

男は目を瞬かせた。

広がる光景は旅館の大広間。おかしい。自分は今、とても幸せな場所
所にいたはずだったのに。

そこまで考えて、男は「自分が虚憶きよわくを視ていた」ことに思い至った。
今日は9月10日。『男にとつて』特別な意味を持つ日だ。それ
の俗称を言うのは、男にとつて憚られるべきことである。言葉にして
しまったら最後、胸につかえる氷塊に耐えられなくなってしまったため
だ。

虚憶きよわくの光景があつという間におぼろげになってしまふ。消えない
でくれと思つたが、もう何も思い出せなかつた。幸いなことは、「とて
も幸せな光景だつた」という余韻だけは消え去らないということだろ
う。

生きていると、思うようにいかないことだらけだ。今まで「道理を
無理でこじ開けてきた」男であるが、男にも「こじ開けられない」こ
とはいくらかでもあつた。虚憶きよわく持ちの友人も、同じように悩んでいたに
違いない。

よりにもよつて、こんなときに。

こんな、残酷な虚憶こうけいを見なくてはならないとは。

「どうかしたのか？」

「いや、なんでもないよ」

隣にいた少女が、じつとこちらを見つめている。赤銅色の瞳の奥底
には、男のことを心配する感情が揺らめいていた。

平時の男だつたら「少女が自分に声をかけてくれた」事実じじつに狂喜す
るのだが、あいにくそんな余裕はなかつた。

「これ、頼まれてたやつ」

「ありがとうございます、叔父さん」

「いいっていいって。お前はお得意様だからな」

ふと見れば、友人が彼の叔父から何かを受け取っているところだつ

た。先日、期せずして遭遇した彼の実姉と実母によって、大幅に予定が狂ってしまったことを思い出す。

友人が今受け取ったものは、本来なら先日に立ち寄るはずだった場所ので受け取るものだったのだろう。帰っていく叔父の背中を見送った彼は、こちらに戻ってきた。

待たせてすまないと謝る友人に、歌い手の女性は首を振った。男も頷く。それを見た友人は、ほっとしたように笑う。彼を先頭にして、自分たちは食堂へ向かった。

「今晚の夕食も豪勢だな！」

食堂のふすまを開けた男は、思わず声を上げた。

並んでいるのは懐石料理。煮物と焼き物と中心にした昨日も豪勢だったが、今日は豪勢さに拍車をかけているように思う。

鯛の刺身は尾頭付きだし、しゃぶしゃぶ用の肉は霜降りである。天ぷらはオーソドックスなものだけでなく、今朝採れたであろう山菜も加わっていた。

テンションが鰻登りになるのを抑えきれない。男はワクワクした気持ちで席に座る。一番乗りになった男に続き、苦笑交じりで友人が続く。全員が席に着いた。

ふと、友人が歌い手と少女に目で何かを合図した。彼女たちも頷き返す。歌い手は悪戯っぽく笑い、少女は酷く緊張した面持ちを見せた。

どうしたのだろう。男は思わず問いかけたが、友人たちは何も語ろうとしない。そういえば3人とも、今朝からどこか様子がおかしかった。特に少女が。

『大丈夫ですよ。あの子や『夜鷹』さんは、貴方が思っている以上に、貴方のことを大切に想っていますから』

昼間、期せずして一緒に行動することになった歌い手が言っていた

ことだ。問いかけても曖昧にはぐらかされてしまったけれど。

友人と行動していた少女が何をしていたのか、男は知らない。友人を疑うわけではないが、男は思わず彼をジト目で見てしまった。

途端に友人が不満そうにジト目で見返してくる。しばし睨み合ううちに、なんとなく言い負かされたような気がして、男は先に根を上げた。

肩をすくめて俯く。必死になって飲み下していた氷塊が、喉に痞えているような錯覚を覚えた。

しつこいくらい言うが、今日は9月10日。普通の日より、ほんの少しだけ「特別な」日。

「男にとっての」9月10日とは少し違うけれど、確かに「特別な」日だった。

だけれども。

「釈然としないな」

男が思わずそう零せば、真正面に座っていた少女が顔を上げた。友人や歌い手もこちらを注目する。

「何がだ？」

「今日は、何やら私だけ除け者にされている気がする」

友人の問いかけに即答し、男は恨めしそうに彼を見下ろした。身長180cmの男から見下ろされても、169cmの友人は微動だにしない。

外見は彼の方が若作りだが、彼の年齢は男より1つ年上だ。ユニオン内では「存在自体が年齢詐欺」だと言われている。

正直、彼が「高校生だ」と自己申告すれば、充分通用するレベルだと男は思う。何をやっても年齢提示を求められるのがネックだと友人は苦笑していた。

「お前、もしかして拗ねてる？」

「はーん、と、友人は悪い笑みを浮かべた。黒髪黒目の若作り顔――外見年齢高校生程度からは想像できない、嫌な笑い方だ。」

彼の星座は厳格な山羊座であるが、こういうときの顔を見ると、悪ガキな射手座の方が正しいんじゃないかと思ってしまう。

「そういえば、母曰く、『陣痛が来た日に生まれれば射手座だったが、難産だったため日付を跨ぐことになり、結果的に山羊座になった』』という話を聞いた。」

もしかしたら、その名残がこういうときに出てくるのではないか。

男はそんなことを考えたが、はつとして友人を睨みつけた。このまま流されるわけにはいかない。

「拗ねてなどいない！ 話を逸らさないでくれないか!？」

「そう怒らないでください。ね？」

「いいから落ち着け」

年甲斐もなく声を荒げた男を宥めたのは歌い手だった。少女も歌い手に同調するかのように頷く。

そんな風に言われてしまったら、立つ瀬がなくなるではないか。男は釈然としない気持ちを押し殺し、先の言葉を飲み込んだ。

食堂に入ったときの高揚感、今ではもう鳴りを潜めてしまった。どこか薄暗い気持ちで夕飯のテーブルについたのは久しぶりである。

必要最低限のものしか置かれていない自室。立てかけたカレンダーの日付は9月10日だ。帰り道に見かけた親子連れが「誕生日のお祝いで夕食する」という話をしていた光景を思い出した。薄暗い部屋で1人で食べた、作り置きのお夕飯。「また1つ」と、口について出さなくなった言葉を、飲み物で強引に流し込む。

胸の内に居座っていた氷塊が、ひととき大きくなった気がする。冷気と圧迫感に押しつぶされてしまいそうだ。男は心の中で頭を抱える。どうして今、そんなことを思い出したのか。今日ははじめから、

「男にとつての」9月10日を連想しないよう努めてきたというのに。

まさか、内心はずつと「男にとつての」9月10日を望んでいたとでもいうのだろうか。それはない、と男は心の中で断言する。男は他者や自分の扱うモノに対して注文や要求はすれど、我儘よわねだけは絶対に吐かない主義であつた。たとえそれが、どんなにささやかなものであろうとも。

気を抜くと、余計に醜態をさらしてしまいそうだ。男にだつて意地と矜持がある。

好意を寄せる相手の目の前では、大人として振る舞いたい。実際、自分の方が大人なのだし。

「失礼いたします。グラハム・エーカー様宛です」

ふすまを開けて入ってきた中居が、何かを抱えて男——グラハムの元へとやってきた。

鮮やかな黄色の包みでラッピングされた、色とりどりの花束。付属のカードには、筆記体の英語で『Happy Birthday to Graham』とある。

グラハムが思わず顔を上げれば、満面の笑みを浮かべた友人と歌い手がいた。少女は笑ってこそいなかったものの、普段よりも表情が柔らかい。

「誕生日おめでとう、グラハム」

友人——クーゴが差し出したのは、藍色基調でラッピングされた細長い箱であつた。

先程、彼が彼の叔父から受け取っていたものだ。グラハムはすぐに気づいた。

「おめでとうございます、グラハムさん」

歌い手——『エトワール』が差し出したのは、白基調でラッピングされた中くらいの箱だった。

気のせいではなければ、中でかちやかちやと音が鳴る。おそらく陶器だろう。

「……誕生日、おめでとう」

少女が差し出したのは、空色基調でラッピングされた細長い包みと、神社の名前が入った小さな紙袋であった。

彼女はどうかやら、グラハムへのプレゼントを別々の場所で買ったらしい。

しかも、神社は昼間に行った場所だ。グラハムと別行動を取ったときに購入していたのだろう。

(これを隠すために……。だから、彼らは、どこかよそよそしかったのか)

そう考えると、今朝から様子がおかしかったことに合点がいく。突発的に考えていたのだろうか？

いや、彼らの表情を見る限り、最初からこのサプライズを計画していたに違いない。むしろ、そのために、この旅行を計画したのだろう。

先程まで拗ねていた自分がばかしくなってきた。『エトワール』が言っていた言葉の意味を理解し、グラハムは思わず笑みをこぼす。

胸につかえていた氷塊はない。けれど、それ以上に、熱いものが込み上げてきた。

何もしいままだと飲み込まれてしまいそうだ。グラハムはそれをごまかすようにして、包みを開けてもいいかと3人に問うた。

彼らは満場一致で頷く。それに従い、1つずつ包み紙を開けてい

く。まずはクーゴからの贈り物を開けた。

「キミのは、箸か」

「ああ。初日、洛西を回るときに受け取ろうと思ってたんだ。発注は以前済ませてたからな」

クーゴはそう言って、次に、申し訳なきように苦笑した。

「本当は箸箱も同じ材質で作ってもらいたかったんだが、青黒檀の箸箱は材質の都合上作れないんだ。代わりに、黒柿・孔雀杳の箸箱にしたんだが……」

「いいや、充分だ。ありがとう」

光沢がある青緑色の箸と、黒の上に黄金色を帯びた孔雀の羽模様が幾重にも重なる美しい箸箱。

グラハムが練習用に使っている箸なんか比べ物にならない。早く箸使いを上達させ、この箸を使って何かを食べてみたいものだ。

次に手を伸ばしたのは、『エトワール』からの贈り物だ。包みを開けていく。

「……すごいな。これは、焼き物のコーヒーカップとソーサーか」

「ええ。清水焼って言うらしいですよ。日本の伝統工芸品と洋食器の組み合わせって、素敵ですよ」

『エトワール』はうっとりとした口調で呟く。彼女は友人のお土産として、様々なものを買って込んだ。特に伝統工芸品には目があったように思う。

「グラハムさんは、あの子と仲良くしてくれていますよね？ そのお礼です」

「その笑い方を見るに、それだけではなさそうだが」

彼女の微笑に何かを感じ取り、グラハムは問うた。

夜に浮かぶ桜の花をイメージさせるような、青基調の陶器。

どんな技法が使われているのだろう。相当な価値がありそうだ。

そんなことを考えていたとき、『エトワール』が悪戯っぽく笑って、グラハムに耳打ちした。

「正解。これからも、あの子のことをよろしくお願いしますね」

「望むところだと言わせてもらおう！」

小声で、けれども勢いよくグラハムは答えた。『エトワール』は満足げに微笑むと、元の席へと戻る。

彼女は少女と何か話しているようだった。途端に少女の顔が真っ赤になる。責められても尚、『エトワール』は余裕綽々であった。

それを横目に、グラハムは少女からの贈り物を開けていく。

神社の名前が書かれた紙袋の中には、厄除けのお守りが入っていた。海を思わせるような深い青に、金色の糸で文字が刺繍されている。無病息災を祈るそれに、グラハムは胸が熱くなった。『エトワール』の言葉が頭の中で反響する。

次の包みには何が入っているのだろう。開けてみると、扇と扇袋のセットが入っていた。こちらは空を思わせるような蒼色。触れてみると、絹のような手触りを感じた。和紙が丈夫な素材だとは知っていたが、紙にしてはかなりの強度がある。

グラハムは息を吐き、慈しむように扇を撫でた。少女はどんな気持ちでこの品物を探していたのだろう。想像するだけで、どうしようもなく心が弾む。感謝の言葉を述べれば、少女は安堵したように表情を緩めた。もしかして、不安だったのだろうか？

「それから、これも」

少女は懐から何かを取り出した。手渡されたのは、ハートを象った

銀色のストラップ。しかし、これは見覚えがあった。

神社で売っていた「愛を深める」お守りは2種類ある。グラハムが選んだのは、日本一般で言うデザインのお守りだった。

少女が手渡してきたのもまた、「愛を深める」縁結びのお守りである。現代の若者に受けが良さそうな、シンプルだけれど可愛いデザインのもの。

つがいのお守りの片割れを手渡してきた。それが何を意味しているのか、グラハムは知っている。自分もまた、同じ気持ちでつがいの片割れを手渡したのだから。

少女は無言のまま、片割れを示す。金色のハート。彼女はそれをすぐにしまい込むと、顔を赤らめながらそっぽを向き、俯いてしまった。素直になれないところもいじらしい。

口元が震える。視界がにじんだような気がするが、気のせいだ。たとえそれが気のせいではなかったとしても、口に出せそうにない。

なんて幸せなのだろう。そのとき、グラハムは漠然としたデジャヴを覚えた。

似ている。同じ光景を、知っている。いつ、どこでその光景を見たのか。

(そうだ。先程の虚憶きよわくの光景だ)

もう何も思い出せないけれど、幸せだったことだけは心の刻まれている。

グラハムは幸福をしっかりと噛みしめ、満面の笑みを浮かべながら、かけがえのない人々へと告げた。

「——ありがとう。今日は最高の誕生日だ！」



変な奴らがいる。

何度見直しても、変な奴しかいない。

(通報しよ)

男たちを見たクーゴが真っ先に思ったことは、それだった。

仮面が1人、2人、3人。金髪碧眼、仮面を取ったらイケメンと思しき男が3人、椅子に座って並んでいる。

その中の1人は見覚えがあった。見覚えのある男が、見覚えのある仮面と陣羽織を身に纏っている。

彼がそれを買う現場にいたクーゴからしてみれば、何とも言えない気分になるのは当然であった。

先程顔を合わせたキリ□ア・ザ□の目元から下を覆うタイプの仮面もアレだったが、これも相当である。ジオンでは仮面が流行^{はや}っているのだろうか。ついていきたいとは思わない。

誰か褒めてほしい。この状況で、大声で「変な奴がいるぞ！ この国は皆こうなのか!？」と叫んでトレー□の元へ駆け込まなかったことを。

誰か褒めてほしい。この状況で、『服装その他諸々に見覚えのある男』に対して暴挙に出なかつたことを。

前回のゴタゴタ以来、クーゴと彼が音信不通であったことは事実だ。その間に、彼に何があったかなんてクーゴは知らない。

だけど。

でも。

これは。

流星にひどすぎるのではないだろうか。

(なんだ、この、『子どもから目を離したらいつの間にかはぐれてて、探

し回ってようやく再開したと思つたら、子どもがヤンキーになつていたのを目の当たりにした親』のような心境は)

クーゴの口元が引きつる。半ば脱力してしまいそうになつたが、どうにか踏ん張つた。

目元を覆うタイプの白い仮面をつけた男は何かを察知したようで、陣羽織を羽織る仮面の男とクーゴを何度か凝視する。

彼は最後にクーゴへ向き直ると、これまた何とも言えない表情を浮かべてこちらを見ていた。

無言であるが、おそらく、彼に台詞を付けるとしたらこうだ。『ご愁傷様。キミも苦勞しているのだね』と。

「少し見ないうちに変わりすぎじゃないのか、『グラハム』」

『グラハム・エーカー』は既に死んだ。嘗ての名前も、階級も、全ては過去のものだ」

そう言った男は、酷く尖つた雰囲気を身に纏っていた。

空を愛して翔けていたフラッグファイターの面影など見当たらない。

目の前にいるのは侍だ。クーゴはすぐにそう思ったが、同時に嫌な予感も感じていた。彼の愛する侍——もとい日本文化の知識は、9割が思い込みと勘違いで構成されている。

口を開けばあらびつくり。元日本人の自分が全力でツツコミを入れるような、斜めにかっ飛んだ話をしてくれる。修正すること幾星霜。その努力は、どうやら水泡に帰したらしい。

特に、『真の愛で結ばれた日本のカップルは、石破ラブラブ天驚拳を放てる』なんて話をされたときはどうしてやろうかと本気で考えた。今でも悩んでいる。

クーゴが目を離さなければ、こんなことにはならなかつたのだろうか。考えてみても、もはや後の祭りであつた。

閑話休題。

「じゃあお前、なんて名乗ってるんだ。名前がなきゃ不便だろう」
「人は私をミスター・□シドーと呼ぶ。兵士たちが自分を遠巻きにし
ながら、そう□にしていた」

ふんぞり返った『グラハム・エーカー』——他称、コイドネーム □スター・ブ
シドーは堂々と名乗った。

そりゃあそうだろうよ。クーゴは心の中で眩き、脱力してしまっ
た。この空間にいと、ものすごく疲れる。

クーゴは仮面の男たちから距離を取る。部屋の外、むしろジオンの
外に逃げた方が得策かもしれない。それに、ここにはクーゴの相棒で
ある『グラハム・エーカー』はいないのだ。ならばもう、ここにいる
意味など存在しない。

「帰ります。俺は、『グラハム・エーカー』と話をしに来ただけですの
で。彼がいらないなら、これ以上の話など無意味だ」

「待ちたまえ、*****の客員MS乗り。今は亡きグ
ラハム・エーカーから、キミへの言伝を預かっている。……いいや、遺
言と言うべきかな？」

ブシド□の言葉に、クーゴは思わず足を止めた。ドアノブにかけよ
うとした手を戻し、振り返る。ブ□ドーの瞳はまっすぐにクーゴを捉
えていた。

揺るぎない眼差しはグラハムなのに、彼は自ら「そうではない」と
主張する。なんて矛盾に満ちた男なのだろう。

ただ、はつきりとわかることが一つある。『奴』が『奴』である限り、
クーゴはずっと『奴』に振り回され続けるのだ。

「平和工作を目的とした特務部隊・■ルトロス隊に入隊し、連邦との平
和路線打ちだし、および人類の脅威を討つ戦いに参加してほしい。こ
の部隊には、キミのような人物と、キミが持つ力が必要不可欠なんだ」

ああ、やはりこいつはグラハムだ。

外見が変わろうと、佇まいが変わろうと、雰囲気が変わろうと、根っこは何も変わっていない。

クーゴはふっと笑みを浮かべた。そして、ある確証を得るために問いかけてみる。

「ひとつ、訊ねたいことがある」

「何だ？」

「お前、□□・□□・□□□□という女性のこと、どう思ってる？」

それを聞いたブシ□ーは、間髪入れずに返答した。

「愚問だな！ 『彼女』は私の運め」「うん、わかったもういい。やっぱりお前は『グラハム・エーカー』だ」

「『グラハム・エーカー』は既に死んだと言った！」

「わかった、わかったから」

ぶんすことという擬音がよく似合うような怒り方である。そこも全然変わっていないくて、クーゴは目を細めた。

目元のみを覆うタイプの仮面をした男は苦笑していた。自分たちのやり取りに、何とも言えない気持ちになってしまったのだと思う。対して、ヘルメットタイプの仮面をした男は懐かしそうに微笑んでいた。

ヘルメット仮面の笑い方は見覚えがある。連邦軍時代の戦友にして、年の離れた友人でもあった男だ。自分たちのやり取りを見ていた彼が、柔らかな笑みを浮かべていたことを思い出す。こんな形で3人が揃うなんて、誰が思うか。

「協力する、『グラハム』」

「だから、『グラハム』は既に死んだと……っ、本当か!？」

「ああ。只今より、クーゴ・ハガネは、オルト■ス隊に入隊、行動を共にする」

ブシ□ーはぽつと表情を輝かせた。奴だけではなく仮面2人組も嬉しそうに笑う。面倒なのが倍に増えるなんて、最初から分かっていた。もう諦めの境地である。この際、グラハム級の問題児が何人増えようと同じことだ。

クーゴが同意の返事をしたのと同じタイミングで、□リシアとトレー□が部屋の中に足を踏み入れてきた。2人は嬉々とした様子で「歓迎しよう。準備をする」と言い残して部屋を出る。もしかして、最初から会話を聞いていたのだろうか。

協力すると言って数分しか経過していないが、もう後悔し始める自分に気づく。今からでも協力を撤回できないだろうかと考えて、クーゴは心の中で首を振った。そんな外道は『あの人』だけで充分である。現在進行形で、『あの人』は暗躍を続けていた。

ミュー■スを始めとした人類の脅威どもが湧いているというのに、人類は内輪もめで手一杯だ。ジオンはジオンでガツタガタだし、連邦は連邦で汚職まみれである。こんな人類で大丈夫か？ 大丈夫じゃない、問題だ。むしろ問題しかない。

今こそ、派閥やら何やらを超えた集団が必要だ。キシ□や□レーズが内密で援助及び協力体制を結んでバックアップしている組織――コネクト・■オースのように。『目覚めた』クーゴだからこそ、その重要性はひしひしと痛感している。

■ルトロス隊の和平工作の中には、コネ■ト・フォースのバックアップも含まれているという。とんでもない多重スパイだ。

(世界だけではなく、獅子身中の虫も騙さなくちゃいけない、か)

クーゴは思考回路を別方面にフル回転させる。そのとき、机の上にかざされたのは、何か置かれた。

並べられたのは仮面、仮面、仮面。フルフェイスタイプのものから

目元のみを覆うタイプのものまで、様々な種類の仮面が並んでいる。嫌な予感がしたクーゴは、仮面3人組を見上げた。奴らは無邪気な瞳でクーゴを見つめている。子どもみたいに輝く瞳には、強い期待の色が見て取れた。

ブシド□とゼ□スが同意するかのように頷く。金髪碧眼イケメン仮面3人組を代表して、シャ□・□ズナブルが厳かに言った。

「見ての通り、今日から同志となるキミの仮面は手配済みだ。好きなものを選ぶといい」



「いや、いらねーよ!？」

「どうしたんだ、クー…… 『夜鷹』。いきなり叫び出して」

グラハムの声によって、クーゴは現実に戻された。どうやら自分きよわくは虚憶きよわくを見ていたらしい。虚憶保持者きよわくは、『自分が見たいと望む虚憶きよわくを好きなきに見る』ことはできない。ある種、発作とも言えるようなものだった。

グラハムもクーゴの様子から察したようだ。だが、奴は「その気持ちはよくわかる」と言いながら頷いた。普段は「大変だな」と笑い飛ばすのに、何やらしおらしい印象を受ける。グラハムの方こそ何かあったのだろうか。訊ねようと思ったが、やめた。奴はあまり触れてほしくなさそうに首を振ったからである。

例えるならそれは、『9月10日グラハム自身の誕生日を話題にしようとしなとき』の顔だ。クーゴにだって、グラハムの誕生日同様、触れてほしくない場所がある。今回の一件では、見事に地雷家族の溝をぶち抜かれてしまった。

そこまで考えて、クーゴは首を振った。

今は、『エトワール』や少女へのお礼を考えなくては。

2人は「グラハム・エーカーの誕生日旅行計画」に協力してくれた立役者たちだ。お礼の一つできなくてどうする。

(しかし、難しいな)

良さそうな商品を探しているが、なかなか見つからない。そもそもクーゴは、女性への贈り物を選んだ経験など皆無である。

いくつかピックアップはしているものの、なかなか決まらなかった。問題はそれだけではない。我らがグラハム・エーカーである。

彼は先日の余波をまともに受けているようで、やたらとテンションが高かった。嬉しいのはわかるが、奴の相手で消耗しそうな勢いだ。

「キミの親戚が取り扱うキモノはすごいな！ どうだ、似合うか？」

真っ赤な紋付き袴を試着したグラハムが、クーゴに問いかけた。

「ああ。意外と派手な色が似合うんだな、お前って」

「意外とは何だ、失礼な」

グラハムはそう言って、試着室へと引っ込む。

彼の着付けを見ていた少女が、別の棚に飾ってあった陣羽織に視線を向けた。

臙脂に近い、やや渋めの赤を基調にした陣羽織。グラハムが試着した紋付き袴と比べれば質素で暗めの色合いであるが、太陽を思わせるような金髪や若葉を連想させるような翠緑の瞳がよく栄える。

少女が何か言いたそうにしているのを察したグラハムが、少女に問いかける。

彼女は迷うことなく、件の陣羽織を指さした。

「この陣羽織なんかいいんじゃないか？」

「うむ、気に入った！ 購入だ！」

グラハムは即決し、カード片手に店員の元へと突っ込んでいく。それを見た親戚は、嬉しそうに会計を進めた。

クーゴは苦笑する。正直、あの陣羽織はそんなに高いものではない。主にコスプレ用に作られた、安価なものだ。

特定のキャラクターに仮装するためのものではなく、あくまでも和風の格好をしたとき用の品であった。

「手軽に着れる和服という路線でも売れるはずだ」と目論んだ親戚は、このシリーズの商品を試験的に売り出している。そのため、この店で取り扱っている他の着物より安価だ。おまけに品質も高い。おかげで売り上げは安定しているらしい。

会計を終えたグラハムは、どこか上機嫌に袋を抱えて戻ってきた。少女はそんな彼の背中を静かな目で眺めている。『エトワール』も少女の様子を見守りつつ、京都のお土産を買いあさっているようだった。

(……………でも、この陣羽織、どっかで見たことあるなあ)

クーゴは首をひねった。しかし、どこで見たのか思い出せない。

悩みつつも、クーゴたちは店を出た。

次の店へと向かう。

「キミの親戚の店で売っていた、この仮面に惹かれてな。つい衝動買いでしてしまったよー！」

グラハムはそう言って、お土産せんりひんを示す。修羅を思わせるようなデザインの仮面だ。

「へえ。顎まで隠すタイプと目元だけのタイプ、2種類か」

「どちらも精巧な出来だ。惚れ惚れするな……」

2つの仮面を見比べながら、グラハムはうんうん頷いた。余程気に入ったと見える。

クーゴもその仮面を鑑賞してみる。流石は職人、細部まで細かく作り上げられていた。

「この仮面は2つとも1点ものなんだ」と、頼んでもいないけれどグラハムは説明してくれた。職人技が光るものには、二度と同じものを作れない場合も存在する。この仮面もそれにあたるものらしい。しかし。

(……………あの仮面、どこかで見たことあるんだよなあ)

クーゴは首をかしげた。しかしどこで見かけたのかわからない。もしかしたら虚憶きよおくと関連しているのだろうか。しかも、かなり重大なレベルで。

何も思い出せないのが歯がゆい。悩んでもどうしようもないので、クーゴは首を振った。

グラハムも、袋の中に仮面をしまう。次の店へと足を踏み入れた。

「……………ん？」

そうやって、何件の店を回ったのだろう。

ふと漂ってきた香りに気づく。匂いの出どころは、練り香水を扱っているコーナーからだった。

練り香水は、普通の香水よりも上品で柔らかな香りが特徴だ。特に、京都の練り香水は有名で、舞子さんも使用している。

どんな匂いがいいだろう。クーゴはじつと商品を吟味してみる。匂いに目を留めた先にあったのは、砂糖菓子を思わせるような優しい色合いの陶器に入った練り香水だ。

気分が晴れやかになるような、爽やかな香り。薄緑色の小袋とセツ

トになった、ペールグリーンペールグリーンの陶器に手を伸ばす。香りの名前は天竺葵だった。これは『エトワール』に買おう。

あとは少女の分だ。どれを買おう。クーゴは考える。

すつきりとして落ち着いた感じの香りにするか、華やかで優しい香りにするか、それとも姉貴分「エトワール」とお揃いにしてあげようか。

「どうかしたのか？」

不意に聞こえた声に振り返れば、グラハムが興味深そうにクーゴと商品棚を眺めていた。

「何を吟味しているんだ？」

「練り香水。今回の件で、2人に協力してもらっただろ？ そのお礼だよ」

クーゴは『エトワール』に買ったものを示す。

グラハムは感心したような顔をして、同じ商品に手を伸ばした。匂いを確認し、ふっと目を細める。

「控えめだが、いい香りだな。パーティーで嗅ぐような香水は強すぎる。これくらいが丁度いい」

グラハムの言うとおりで。特に、社交界はそれが顕著である。彼に近づいてくる女どもは皆、けばけばしい服と香りを身に纏っていた。

欧米という香水では出せないだろう。香りにまつわる文化はどちらにも共通しているが、日本の場合はお香のように控えめな香りが好まれがちだ。

といっても、つけすぎれば周囲の迷惑になるのは変わらない。適量を考えて使う必要があるのは、両者に共通することであった。

「今、あの子のお土産を選んだところなんだ」

クーゴが少女に視線を向けると、奴は目の色を変えた。どうやら、こいつもこいつでお礼の品物を探していたらしい。

その割には脱線が多かった気がした（一例：仮面）が、黙っておくことにする。

「クーゴ。カタギリ司令が仰っていたのだが、『日本では、香りで愛を伝える文化がある』と聞いた」

「平安時代には盛んだっただけらしいぞ。手紙に香の匂いを付けたりとか、部屋に香を焚いたりとか」

補足してやれば、グラハムは真剣な面持ちで練り香水を睨みつけた。この中から選ぶのだろう。視線で問えば、奴もまた視線で答えた。

そうして、商品を手にとって匂いを嗅ぎ始める。どれもいい香りで甲乙つけがたいらしく、様々な商品をキープしては棚に戻してを繰り返す。

『エトワール』は少女と一緒にあって商品を選んでいた。こちらの様子に気づいていないらしい。それはそれで都合だ。

「ふむ。彼女には、この香りが似合いそうだ」

悩みに悩んだ後、グラハムは薄い青紫色の小袋とセットになった淡い藤色の陶器を手を取った。穏やかで上品な香り。香りの名前は白檀だった。

『エトワール』たちに知られぬうちに会計を終えた。グラハムはまっすぐ少女の元へ向かう。

クーゴも『エトワール』の方へ向かって歩き出した。彼女はクーゴが名前を呼ぶよりも先に振り返る。

「どうしたんです？」

「大したことじゃない。今回の計画に協力してくれたお礼だよ」

クーゴは練り香水の入った袋を手渡した。

練り香水の説明と、薄緑の小袋が『エトワール』、薄い青紫の小袋が少女のものだと伝える。彼女は嬉しそうに微笑んだ。

早速使ってみることにしたらしい。『エトワール』の白い指が、陶器から練り香水をすくい上げる。試すように匂いを嗅いで、うっとりとした心地で頷く。

「ありがとうございます。いい香り」

「そうか、よかった」

気に入ってもらえてよかった。クーゴはほっと胸を撫でおろした。

「せっかくだから、ほかの人たちのお土産に買っていきますよ！」

『エトワール』はそう言うなり、練り香水のコーナーへと突撃する。まるで、陣羽織を即決で買ったグラハムみたいだ。そう思ったとき、彼女は大量の練り香水を抱えてレジの前に立っていた。

接客対応に追われる店員の後ろで、別の店員が商品の補充へと向かう。「ひー」という悲鳴が聞こえた。どうやら、『エトワール』によって商品の大半が持っていかれたらしい。彼女は「自分が気に入った品物」に対して、惜しみなく散財する性格のようだ。

女性陣の皆に配るのだと彼女は笑う。好きなものを選んでもらい、余ったものは自分で使うつもりのようなだ。だから商品棚を空っぽにする程買い込んだのだろう。思い切ったら全力投球とはこのことだろうか。

『エトワール』の会計が終わり、全員の買い物が終わる。

それは即ち、この京都旅行が終わることを意味していた。

解散場所は京都駅だ。旅行の終わりを惜しみながら、クーゴたちは道に行く。

空を見る。地上の光と暗い雲にかき消されたせいも、星は一つも見えなかった。ざわめく喧騒は遠く、周囲は行きかう人々で埋め尽くされていた。

次、この4人が揃う機会があったら。今度は北海道や沖縄あたりに足を延ばしてみようか。それとも、日本ではなく別の場所にするべきか。

クーゴはそんなことを考えていた。そんなことを考えられるくらい、平和な時間だった。穏やかな時間だった。楽しい時間だった。充実した時間だった。

——幸せな、時間だった。



このときのクーゴ・ハガネはまだ知らなかった。

『あの機体……ユニオンのフラッグか!?!』

「はじめましてだなあ、ガンダム!」

『何者だ!?!』

「私はグラハム・エーカー。キミの存在に、心奪われた男だ!」

「踊りましょう? 空の護り手さん。私は一途でしてね、貴方以外の男は眼中にないんです」

「熱烈なアプローチをどうもありがとうございます、レディ。ご期待に添えるか

どうかはわからんが、精いっぱいエスコートさせてもらうとしよう。
——そこを、動くな！」

この4人が、戦場で相見えることを。

「うわああ!?!」

「っ、すまん！ 大丈夫……え？」

「これ、『特攻隊』関係の本じゃないか」

「な、なんだっていいだろ!?! 俺が何を讀んだって自由じゃないか！」

「……か、勘違いするなよ。べつに、アンタの歌を介して見た虚憶きよおくの『桜花嵐』や『HEAVEN AND EARTH』の影響を受けたわけじゃないんだからなあああっ!!」

「おーい、ジョシユアー。1冊忘れてるぞー」

「あいつ、意外と可愛いところあるんだな」

「後で、奴の部屋の前で『桜花嵐』と『HEAVEN AND EARTH』の虚憶きよおくが視える歌、熱唱してやりましょうぜ」

「よしきた。ダリル、ハワード。音源の準備を頼む」

部下の1人が、とある点から日本に興味を持つようになることを。

「この香り……クリスが近くにいます！ やっぱ、俺の格好大丈夫かな？ ねえイデア、俺おかしくないっすか？」

「そうねえ。これでも嗅いで落ち着いたらいいんじゃないかしら？ ついでに体に塗ってみるとか」

「ぎゃあああああああ！ クリスの香りとお揃いにイイイイ!?!」

「……おかしいわね。リヒティが発狂しちゃった」

「ラベンダーの香りなのには？」

「ラベンダーの香りなのに」

「お、フェルトの匂いだ」

「何とも言えない臭いがするわ。ロックオンから」

「え？ 俺、何もつけてないぞ？」

「そりやあもうポンポン。練り香水どころかどぎつい香水でも消せない程の、犯罪の臭いが」

「ちよっと待て！」

「練り香水っていい匂いね」

「種類も豊富だし、外見もかわいいですしね」

「ねー」

「ねー」

「ねー」

「そんなマリイがかわいい」

「そんなアニューがかわいい」

「……お前ら」

プトレマイオスの女性陣クルー内で練り香水が流行し、男性陣に余波が直撃することを。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

10. 前夜祭―よあけまえ―

一機のフラッグが悠々と空を舞っていた。
勢いそのまま、次々と目標を屠っていく。

(流石は新武装。なかなかの切れ味だ)

クーゴの手に、じわりと汗がにじむ。機械越しとはいえ、標的を切り裂く感覚は生々しさを伴っていた。

今回は、先日完成した新兵器のテストである。いつぞやビリーが言っていた、特殊な金属を使って生み出されたブレードだ。

その名は『菊一文字則宗』と『長曾禰虎徹』。

日本刀を模した2本のブレードが、易々と金属装甲を切り裂いた。まるで紙を切っていくような光景である。同じようにして、ビーム弾も切り裂く。鍛え抜かれた鋼の切れ味を考えると、『日本文化をネタにしたアニメで、刀が様々なものを真つ二つにしていくシーン』は、あながち間違いではない。

一番有名なのは『日本刀対銃』だろう。地面に固定された日本刀の刃が、銃から放たれた弾丸を真つ二つにした映像だ。文字通りの一刀両断。寸分の引つ掛かりもなく、綺麗に切れていた。流石にマシンガンには勝てなかったようだが、負けても尚、凜とした在り様は、マシンガンを提供した対戦相手をも唸らせたほどである。

最後の標的を文字通り「斬り捨てる」と、クーゴは操縦桿を動かした。空を翔けていたフラッグは大地に降り立つ。コックピットのハッチを開けて、クーゴも地上へと降り立った。ヘルメットを外す。吹き抜けるそよ風が心地よい。

服を着替えて室内へと戻れば、箸を片手にビリーとグラハムが大きく手を振り、紅茶を啜っていたエイフマンが目細める。

「新しい武器の使い心地はどうだい？」

「いい感じだ。あとは課題を見つけ次第、フラッグ共々適宜改良、つて

ところか」

クーゴの元へ駆け寄ったビリーは満足げに頷いた。技術者として、自分たちが開発した武装が日の目を浴びることが何よりも嬉しいのだろう。

ビリーの心配事はこれで片付いた。今度はクーゴの心配事の方である。目線を弁当箱へ向ければ、中身は空っぽになっていた。

「こちらも文句なしだよ。ご馳走様でした！」

「今回ののは、ささみフライが一番おいしかったぞ！ 2種類のチーズとバジルがおいしい味を出していたな」

親友2人は満面の笑みを浮かべて、綺麗な弁当を箸で指し示す。グラハムの持った光沢ある青緑色の箸が、太陽の光を浴びて艶やかに煌めいていた。

誕生日祝いに送った箸は、随分と彼のお気に召したらしい。この箸を使うに相応しくなるため、沢山練習を重ねたのだそうだ。

その甲斐あって、箸使いはみるみる上達した。今ではクーゴと遜色ない程の箸使いをする。根性と粘り強さが成し遂げた奇跡だ。

「それはよかった。ただ、箸で人を指すのは行儀が悪いぞ」

「む。すまない」「あ、ごめん」

「はっはっはっは！ 友とほいいものだ。キミたちを見てみると、尚更そう思うよ」

ビリーとグラハムは素直に謝り、箸を箸箱に戻した。そんな2人を見て、エイフマンは楽しそうに笑う。

しかし、エイフマンはどこか寂しそうに空を見上げる。届かない時間を追いかけているかのよう。

「私の友人は皆、鬼籍に入ってしまったからな。もう、昔を語らう友人^{あいて}

はいない」

「プロフェッサー……」 「教授……」

老紳士の言葉の重みを感じ取り、思わず自分たちは声をかける。しかし、彼はすぐに穏やかに微笑んだ。

「だからこそ、友人は大切にしなさい。たとえ進む道を違えたとしても、今見ている景色ものがバラバラになってしまっても、どんな形であっても、友との交流は心を豊かにしてくれる。互いの道が、互いにとつての指針になる。そして、高みへと至るための力となるからな」

遠くを見つめるエイフマンも、そうやって友人と切磋琢磨してきたのだろう。弟子や教え子を多く抱える彼であるが、友人という存在はやはり別格だったに違いない。

老紳士の切実な教訓に、クーゴたちは思わず顔を見合わせた。クーゴ、グラハム、ビリー。自分たち3人は、気づいたら親友と呼べる間柄となっていた。

仲良くなつたきつかけは思い出せない。しかし、自分たちは他人のままだった可能性が非常に高かった。人生、何がきつかけになるかわかったものではない。

生まれも育ちも家庭環境も性格も、何もかもがバラバラな自分たち。だけれど今、3人はユニオンの軍部に集い、同じ景色を見上げている。奇跡のような光景だ。その価値がどれ程尊いものなのかは自覚している。

だから、3人は迷うことなく返答した。「はい、教授」「勿論です、プロフェッサー」「そのお言葉、この身に刻みます」と、返事も3者3様。「よろしい」とエイフマンは満足げに頷いた。こうしていると、教師と生徒に見えなくもない。

『カイメラ隊はー?』

『病氣ー!』

向う側から流れたのは、場違いな音楽。確か、売れっ子の歌手がリリースした電波ソングである。音の出どころは、談話スペースにある大型テレビからだった。

女性士官たちが黄色い声を上げ、男性士官が何とも言い難い表情を浮かべている。大画面にアップで映ったのは、件の人気歌手——テオ・マイヤー。

ゆるく跳ねたプラチナブロンドの髪に、透き通るような白い肌。アンバーのアーモンドアイが、どこかミステリアスな雰囲気を漂わせていた。

(巷ではあんなのが流行っているのか)

「……………」

クーゴがそんなことを考えながらエイフマンの方を向き直ると、彼は険しい顔でテレビを睨みつけていた。

まるで、亡霊を見てしまったかのような表情かおをしている。クーゴが見ていることに気づくと、エイフマンは取り繕うように苦笑した。

彼の変化に気づいたグラハムとベリーも首を傾げる。逃げられなさと踏んだのだろう。エイフマンは大きく息を吐いて、ぽつりと呟いた。

「幼い頃、私にこの道を進むきっかけを与えてくれた人によく似ているんだよ。生き写しと言ってもいいくらいだ。……亡くなってもう、60年ほど経過したがね」

痛ましい事件だった、と、エイフマンは俯いた。

箱から宝物を取り出すような響きを伴いながら、言葉を続ける。

「彼は私より7つ年上でな。よく、私の勉強に付き合ってくれたよ。面倒見のいいお兄さんだった。……両親の後を継いで技術者の道を

進むか、音楽——特に歌の道に進むか、真剣に悩んでいたな。勉強の合間に『息抜き』と称して歌を披露してくれたりもしたよ」

エイフマンの眼差しは、テレビの中に映るテオへ注がれていた。

「大火事で家は全焼。彼を含んだ家族全員が亡くなった。しかも事件は未解決。様々な憶測が飛び交ったが、もう誰も事件のことを調べようと思う者はいない」

沈黙が辺りを包む。テレビから流れる電波ソングがやけに遠い。言葉は、喉につかえたように出てこなかった。

グラハムとビリーもクーゴと同じで、口を開いて閉じてを繰り返す。エイフマンはふっと笑うと、話題を転換するように明るい声を出した。

「最近、MSWADのエースコンビが恋路を突き進んでいるという話を聞いたのだが、戦果は？」

「長く口説き続けたのが功を成したのか、最近は色々な顔を見せてくれるようになりました！」

エイフマンの問いかけに即答したのはやっぱりグラハム・エーカーである。奴の場合は手口が強引過ぎるのだ。今までの出来事を思い出し、クーゴは反射的に目を逸らす。

「犯罪にだけは走らないでくれたまえ。優秀なパイロットを失うのは惜しいからな」なんてエイフマンは笑っているが、忠告程度で踏みとどまってくれるとは思えない。

おそらくこれからもこのスタンスは変わらないだろうし、もつと悪化する危険性が高かった。『グラハムの安全装置』的な役割に徹する日々も続くだろう。心労はかさむ一方だ。

最近は、『少女の誕生日プレゼント選びを手伝え』と協力を仰がれている。といっても、彼女の誕生日についてわかっていることは、4月

生まれの牡羊座”ということだけだ。

4月のいつなのかまでは話してもらえなかったらしい。ちなみに、『エトワール』は11月11日生まれのお座、クーゴは12月22日生まれのお座である。彼女の誕生日には、桜の花を模した銀簪を贈った。

それ以後のオフ会では、彼女は簪をつけてやって来るようになった。綺麗な薄緑色の髪をハーフトップに束ねた『エトワール』は、髪を束ねていないときよりも色っぽいとクーゴは思う。

お返しに、と、クーゴの誕生日に彼女から贈られたのは、翼が描かれた懐中時計であった。クォーツとソーラーのハイブリット電池を使う電波時計である。何らかの影響で電波もクォーツも使えない場合は、ネジを巻いて使用するという徹底した機能付きだ。

「クーゴの二つ名—— “空の護り手” に相応しいデザインを探すうちに、このデザインに行きついた」とは『エトワール』の談である。機能も技巧も素晴らしい懐中時計だった。もちろん肌身離さず持ち歩いているし、重宝している。

閑話休題。

「それで、誕生日プレゼントのリサーチは進んでいるのかい？」
「全然だよ！ まったく見当がつかなくてなあ」

ビリーの問いに、グラハムは満面の笑みを浮かべて頭を掻いた。表情と正反対の言葉に、思わずビリーとエイフマンがずると体勢を崩す。クーゴは天を仰いだ。

グラハムのやろうとしていることは、『ノーヒントで自分の専門外のクイズ問題に挑戦する』ような暴挙である。正解できる可能性は限りなく低い。むしろ0に近い。それと同じく、奴の贈り物が少女に気にいられる可能性だって低いのだ。

クーゴが『エトワール』たちと一緒にグラハムへの誕生日祝いを企画したときは、念入りにリサーチしたからこそその結果であった。でなければ、日本の京都旅行なんて考えようとは思わない。グラハムはそ

こを理解しているのだろうか。

いや、多分、努力は続けているのだと思う。もしかしたら、クーゴが思っている以上に、少女のガードが堅いのかもかもしれない。顔を合わせれば高速漫才ボコリ合い（というより、グラハムが一方的に突っ込み、少女が撃退するというもの）だし、メールの文面も大体似たような感じである。

ここは、『エトワール』に協力を仰ぐべきだろうか。クーゴはちらりと端末に目をやる。ストラップ代わりに結んでいた銀のハートがきらりと光った。

最近届いたメッセージにカーソルを合わせれば、『友人の間で練り香水が流行っている』という内容のものが出てきた。自然と頬が緩む。

「ところでキミはどうなんだい？　クーゴ」

「何が？」

「『エトワール』だよ。あの後も何度かコラボしてるみたいじゃないか。縁結びのお守りの片割れまでもらったんだろう？」

ビリーはニマニマと笑みを浮かべる。グラハムも生温かい眼差しを向けてきた。

なんだろう、この空気は非常にマズイ。クーゴの勘が大音量で叫んでいる。同時に、効果的な打破方法が浮かんだ。

「ビリーが、グリーサ・クジヨウとどこまで進んだか」を先に話してくれるなら、言ってもいい」

沈黙。

痛々しいまでの沈黙。

そしてそのまま崩れ落ちるビリー・カタギリ。

「キミは鬼か」

「教授程ではありません」

苦笑するエイフマンであるが、この方法を伝授してくれたのは他ならぬエイフマン本人である。

なんでも、昔は『似たようなことをしつこく尋ねられたので、似たような方法で相手を撃退した』らしい。彼も相当な鬼であった。

エイフマンは再びテレビへ視線を向け、懐かしそうにテオ・マイヤーを眺める。ブラウン管越しに重ね合わせるのは、遠い日に亡くなった『お兄さんの存在』の面影だろうか。

クーゴは一端エイフマンから視線を外し、(自らの蒔いた種とはいえ)ビリーのフォローに入った。どうやらビリー、なかなか高嶺の花と連絡が取れないようだ。逢瀬の時間も作れないのだという。「一目合えればそれだけで幸せ」という彼であるが、もしかしたらそれがうまくいかない原因ではなからうか。

「他人には積極的になるようにとアドバイスするヤツに限って奥手」という噂を聞く。グラハムの暴走を肯定気味だった背景には、彼とは対照的に積極的な行動に走れないというビリーの面が出ていた結果なのかもしれない。お前は乙女か、というツツコミを入れたくなったが、クーゴはぐつと耐えた。

最近、何かにつけて耐え忍んではかりいるような気がする。昔から耐え忍ぶことは多かったけれど、ここところは輪をかけてひどくなった。そういえば、星占いの雑誌を読み漁っていたハワードとダリルも「ハガネ中尉はすべてにおいて苦労性」と言っていたか。全く嬉しくない。

鬱々としたビリーをグラハムに押し付け、クーゴは端末を動かす。『「エトワール」に協力を仰ぐ』と言えば、奴は2つ返事でビリーのフォローを引き受けてくれた。

その旨をメッセージで送れば、しばらくの間において返事が帰ってきた。『最近、彼女はアクセサリー収集が急務になっているので、そこを攻めればいい』らしい。

(あの子も大変だな)

常々クールだった少女の姿を思い出し、クーゴは苦笑した。京都旅行時も、アクセサリー系統にはあまり関心がなかったような気がする。

そんな少女がアクセサリー収集に励まなくてはならないとは、彼女の周りで一体何が起きているのだろう。女性の問題はよくわからない。

己の道を貫いていきそうな少女であるが、我を曲げなければいけない問題にぶち当たってしまったのか。でも、これで少しは勝機が見えた気がした。

なんとか回復したビリーは、エイフマンと何かを話し始めていた。おそらく現実逃避という名の話題転換だろう。内容を聞く限り、今度発表されるAEUの新型の話らしい。

クーゴはグラハムに手招きし、端末を見せる。思ってもいない援軍に驚いていたグラハムであるが、すぐに端末を取り出して検索を始めた。

ストラップ代わりの青いお守り2つと銀のハートが揺れた。グラハムはそのお守りだけでなく、少女がプレゼントした扇子も肌身離さず持ち歩いている。

「これはいいものだ……!」

グラハムはそう言って、端末に表示された商品を眺めていた。シエルカメオのペンダントブローチには、大きな翼をたたんで塔の上に座る大天使が刻まれている。

天使は目をつむっているが、眠っているようにも取れる表情だ。心なしか、口元には微笑が浮かんでいるように見える。天使の周りには、鳩が舞うようにして飛んでいた。

グラハムは迷うことなく端末を操作した。オンラインショップピングとは本当に便利である。あと数日したら、商品はグラハムの住む部

屋に届くだろう。次のオフ会までには、充分間に合う。

生温かな視線に振り返れば、ビリーとエイフマンがこちらを眺めていた。「どちらも順風満帆のようだな」と微笑んだのはエイフマンであり、「羨ましいいな」と羨望の声を上げたのはビリーであった。

何とも言えなくなり、クーゴは苦笑する。どうしてか、ひどく照れくさい。入れ替わるように、グラハムは満面の笑みを浮かべた。太陽を思わせるようなそれに、自分たちはゆるく目を細める。ユニオンの昼下がりには、穏やかに過ぎ去っていった。



「ふう……」

病院での訪問ライブを終えて、テオは一息ついていた。この病院は長期入院している患者が多い。特に、重篤な症状を抱える人や余命幾何もない人が中心であった。

中には意識不明や植物状態、および脳死であるが遺族の意向で生かされている患者もいる。中庭のベンチから窓を見上げ、テオはじつとその病室を見つめていた。

病室の番号は207号室。入院患者の名前はエイミー・テイランデイ。彼女は自爆テロに巻き込まれてから、ずっと意識不明のままなのだそう。しかも、テロに巻き込まれた当時の外見のままを保っているという。

普通の人間からすれば不可思議な現象であり、様々な研究機関が喉から手が出るほど欲しがらう。最も、兄2人がそれを許すはずがないし、病院側の患者およびスタッフも全力で抵抗することは明白だった。

病室にいるのは双子の兄の方だ。彼からダダ漏れの思念と周囲の人々の話を総合するに、彼が来る数時間前に弟が病室を訪ねていたという。見事な入れ違いだ。この双子が意図してやっていることだから、本人たちの問題である。

兄の思念が病室から遠ざかる。テオは窓から目を離すことなく、スポーツドリンクで喉を潤した。

しばらく時間を潰すうちに、兄は帰宅したようだ。『彼ら』が動き出すのはもう少し先であり、わずかな休息期間を得たエイミーの兄は、それを利用してここに来た。そして、しばらく——下手したら二度と——彼女に会いに来れないだろう。

テオは立ち上がり、207号室へと向かう。病院に来る度、患者と交流するのは日課のようなものでもある。特にこの207号室にいる少女とは、結構長い付き合いだ。慣れた様子で扉を開けば、いつも通りの光景が広がる。

「エイミー、遊びに来ましたよ」

テオの問いかけに、少女は何も答えない。当然だ、彼女は昏々と眠り続けているのだから。

「今日は、お兄さんたちと何を話したんですか？ ……へー、そうですかあー！」

しかし、テオは構わず話を続けた／相槌を打った。

「お義姉さんが2人、増えるかもしれないですね？ ウエディングドレスの話もしたんですかー。女の子の憧れですもんねえ」

「僕も、結婚式でお嫁さんに着てもらいたいです」と、テオも笑う。が、すぐに表情が苦いものに変わった。

幾何かの間をおいて、テオは噛みしめるように言葉を紡ぐ。

「……いや、昔、知り合いの子にも同じようなこと言われましたね。まずは相手が必要だってことは理解しているんですけども……無理そうですね」

テオは肩をすくめる。大きくため息をついた。

諸事情により、『結婚は諦めた方がいい』と自覚していたためである。

「それじゃあ、話題を変えましょう。……いや、大人の都合とかじゃないですから。本当ですってば！ 女をホイホイ釣り上げるとか、ないですから！ 誰がそんなこと教えたんですか!? ……そこは忘れてあげましょうよ。お兄ちゃんがお兄ちゃんに肅清されちゃいます」

眠り続ける少女に弁明し、ひとしきり脱線した後、テオは世間話をつづける。

「お義姉さんが増えたら、どんなことがしてみたいですか？ ……ほう、料理ですか。何作るんですか？ ……へえ、それは美味しそうですねー」

そうやって、どれくらい話し込んだだろう。気づけば時計の針が2周していた。そろそろ戻らないと、スポンサー（成金の方）がうるさくてかなわない。

奴の道化つぷりを見続けることより、エイミーに語り掛けるほうが有意義だとテオは思う。名残惜しい気がしたが、今回はこれまで。次はいつになるだろう。

おそらくは月数回の慰問ライブやボランティアライブもできなくなるだろう。自分もまた、（方向性は違うが）彼女の兄と『同じ』ようなものだからだ。

しばらく来れなくなると告げて、すぐにテオは眉を下げた。すみません、と小さく謝罪し、頭を下げる。短い挨拶をし、テオは病室を後にした。

病院を出て、端末を取り出す。連絡相手は成金スポンサー——アレハンドロ・コーナーだ。事務的な連絡を済ませる。

「……了解」

端末を切り、テオは空を見上げた。

茜色に染まった空は落日への暗示か、夜明けのための幕引きか。変革の瞬間は近い。

それが革新と未来へつながるかは、自分たちの手にかかっている。



そろそろだ。『彼』の計画が本格始動し、人類の未来を賭ける壮大な戦いが始まるのは。

女性は無言のまま、真っ青な空を見つめていた。優しい風が吹き抜ける。門出に相応しい天気だ。

長かった。女性は素直にそう思う。この時間を、女性は女性なりに準備してきた。その方向性はおふぎけ極まりないと人は言うだろう。でも、自分たちにとってはいつだって大真面目なことである。

車椅子の方向を変えて、女性は室内へ戻った。子どもたちは楽しそうに遊びまわっている。

その笑顔を見ることが、女性や職員たちにとって何よりも喜びだ。

願わくば、彼らが安心して羽ばたける世界になってほしい。そのた

めに、女性は『天上人』たちとは違う目線で、けれど同じ願いを目指して戦う。『戦い』と一口で言うけれど、その方法だっていくらでもある。

武器を使った武力の戦い、技術開発における頭脳の戦い、主義主張や願いを賭けた心の戦い。勝利条件だけでなく、戦術だって様々だ。それでいいのだと女は思う。それが、誰もが思う『当たり前』であり、誰もが認められない『当たり前』であり、誰もが心から思う『当たり前』なのだから。

「人が人らしく生きられて、それが『当たり前』だと言えるようになって、その『当たり前』が『当たり前』として誰もが認め、通じ合い、わかり合える世界。……そうなるためにも、人の心をつなぐ存在として、私たちが頑張らなくちゃいけない」

噛みしめるように呟き、女性は端末をいじった。映し出されたのは、1枚の写真。

黒髪黒目の男性研究者と彼に寄り添う黒髪青目の女性、緑髪紫目の男性研究者とそれに寄り添う銀髪の女性、黒髪の青年が笑っている。

女性は、黒髪黒目の男性研究者を愛しげに眺めた。もう戻れない時間を懐かしむように、慈しむように、静かに目を細める。

もうすぐだ。もうすぐ、愛する『男』の遺志を継いだ天使たちが降り立つ。天使たちは世界を変革するため、世界の悪／世界の敵として戦い続けるのだ。『彼ら』に安息が訪れることはないだろう。苛烈で過酷な運命が待ち受けているのも事実。

だけれども、だからといって、『彼ら』が不幸にならなければいけないとは思わない。自分たちもまた、すべてを救えるとは思わない。それでも守りたいものがあつて、笑ってほしい人がいて、幸せになつてほしい人がいる。それだけで、きっと充分なのだ。

パンドラの箱を開けるのが『彼ら』の役目ならば、自分たちは『彼ら』と共に、『彼ら』とは違うやり方で、『彼ら』と同じ願いのために、希望を紡いでいきたい。未来へとつながる明日のために、今を守り抜

かねばならないのだから。

(まあ、当面は喧嘩相手になりそうだけどね)

自分たちがしていることを考えて、女性は頭を抱えた。

女性の活動の一部は、一歩間違えると「死の商人」と呼ばれても仕方がない。所属に関係なく、自分たちが「協力してもいい」と思った相手に対して技術開発の提供をしているためだ。取引相手同士がドンパチしても、自分たちはそこに一切関知しない。

実際、ユニオン・A E U・人類革命軍・『彼ら』含んだ私兵部隊等々、取引先は様々だ。『彼ら』の理念を考えると、『彼ら』にとって自分たちは「取引相手」にして「最終的には倒すべき敵」という厄介な位置づけになっているだろう。

お互いがお互いにとって、抑止力にして目の上のタンコブ的な存在であり続ける。

元々そのコンセプトで立ち上がった女性であったが、いざ実際に対峙するとなると、やっぱり頭が痛くなってきた。

自分よりも大変な思いをする「子どもたち」がいるのだ。これしきのことで、悩んでなどいられない。

「グラン・マ？」

「大丈夫？ 何か、辛いことでもあったの？」

孤児院の子どもたちが、心配そうに女性を見上げる。女性はすぐに笑みを浮かべてみせた。

「大丈夫だよ、アニエス。ジンも、心配してくれてありがとう」

茶髪の少年と紫の髪の少年の頭を撫でる。2人は安心したように微笑み、黒髪と金髪の姉妹を連れて森へと出かけて行った。それを見ている茶髪の男性と金髪の女性が、愛おしい光景を見守るように目を

細める。

そうだ、そうでなくてはならない。孤児院の元・院長（隠居済み）として、『悪の組織』の代表取締役として、もうひとつの顔を持つものとして、うじうじ悩んでいる暇などない。気合を入れるように頬を叩けば、彼と彼女もこちらに気づいたようだ。真剣な面持ちで頷いた。

2人は時計を見やり、孤児院の入り口を見た。誰も来ない。

「そういえば、そろそろだと思ったのだけど」

「あー。あのジイさん、今頃議会の老害どもに振り回されてんだろうなあ。……いや、逆か？」

「どっちでも変わらないわよ」

彼と彼女の会話を遮り、女性は大きくため息をついた。丁度そのとき、1台の車が孤児院の門の前に止まる。待ち人來たりだ。

現れたのは壮年の男性だった。生え際が後退し、黒髪は白髪交じりである。落ち着いているようでエキセントリック且つ激情家な男だ、原因はそこにあるのだろう。

「今、失礼なことを考えなかつたか」

「別に。『彼』の方が、禿げ方綺麗だつたと思つただけ」

男の表情が引きつった。

「……相変わらず、『彼』にぞつこんなんだな」

「当たり前でしょ。『彼』と私は」「もういい。充分すぎるほど聞いた。お願いだからもうやめろ。やめてください頼むから」

「何よ。私と『彼』の惚気話が聞けないって言うの？」

「自覚してたのか……」

男はこめかみを抑えて俯く。女性は言いたいことすべてを遮られたため、フグのように頬を膨らませた。

自分たちのやり取りを見ていた茶髪の男性と金髪の女性も、なぜか揃って明後日の方向を向く。本当にどうしてだろうか。

「本題に入る。場所を移そう」と言い、男は車椅子を押ししてくれた。女性は頷き、2人にも促す。4人全員が車に乗り込んだのを確認し、男は車を走らせる。

「この世界は、多元歴に突入しなかった」

男は自分の虚憶きよわくが外れたことについて、ただ短く事実のみを言った。

金髪の女性と茶髪の男性も頷く。

「でも、この世界には、多元世界や前世ループの地球光景が魂に刻まれた人間たちが多数存在しているわ」

「それが吉と出るか、凶と出るかはわからないがな」

「人の心を信じましょう。今も昔もこれからも、そうやって、奇跡を起こしてきた『実例』があるじゃない」

女性の言葉に、3人は頷く。

集った可能性が紡いだ未来がどんなものか、自分たちは『知っている』。だからこそ、人類に対して『賭けて』いるのだ。これでダメだったら、あとは地球共々人類が減ぶしかない。

この世界は、正直に言つて、多元世界やループ世界と比較すればかなり楽な方だ。しかし、その分「戦力が少ない」という弱点がある。そこをどうカバーできるかも問題点の1つであった。

頑張ってくれる人たちがいる。だからこそ、自分たちも精いっぱいのことをしなくてはならない。

「もうすぐだよ、イオリア。私も頑張るから」

女性は『彼』——イオリアの名前を呼んだ。その名前に、3人は真

剣な面持ちになる。

夜明けの鐘が鳴るまで、あと少し。

車は、AEUの軍事演習所へと向かっていた。



アイデアはふと、パイロットスーツに着替えた刹那の胸元に目を留めた。そして、悪戯っぽく笑う。

「グラハムさんから貰ったペンダント、つけてるのね」

刹那はぎくりと身をすくませる。件のシエルカメオはパイロットスーツの下に隠れているため、普通の人間は気づかない。しかし、アイデアには『見えて』いた。

飛翔する天使が刻まれた、繊細で美しいペンダントブローチ。「変装に使えるからアクセサリーを集めろ」と刹那を言いくるめ、グラハムに「アクセサリーがいいよ」と教えた成果が出ていた。

変装するわけでもないのに身に着けているのは、刹那本人が気に入っているからに他ならない。要らないものはその場に放置したり、整理整頓したとしても肥やしにしてしまったりするのだから。

「だから何だ」

刹那はぶっきらぼうに答えたが、耳元が真っ赤である。その変化を見ることができただけで、アイデアには充分だ。妹分の成長をクリスマスに報告しなくては。ウキウキ気分でコックピットに乗り込む。

「人のこと言えないくせに」という悪態は聞き流した。アイデアの髪には、『夜鷹』から貰った桜の銀簪が煌めいている。髪がヘルメットの邪魔にならないように、今回の髪型はお団子型にまとめていた。

仲間たちもコクピットに乗り込んだようだ。出撃準備は万全である。

システム、オールグリーン。

スターゲイザー、デユナメス、エクシアはプロレマイオスより飛び出し、目標地点へと向かった。

今回自分たちに与えられたミッションは、AEUの新型——イナクトをコテンパンに叩きのめし、AEUを牽制することだ。悪役プロレスラーみたいな仕事内容とは程遠い、少女と女性と色男、および機体外見だとアイデアは苦笑する。

ソレスタルビーイングの機体名は天使を由来としている。そう考えると、グラハムがあのシエルカメオを刹那に贈ったのは、偶然ではないのかもしれない。アイデアはくすりと笑みを深めながら、AEUの軍事演習所指定ポイントへと向かった。

スターゲイザーとデユナメスは一時待機。目的はエクシアの支援だ。増援が発生した場合の保険である。刹那の腕なら大丈夫だとは思うのだが、ヴェーダは保険がお好きらしい。製作者の顔が見てみたいと思っただが、それを口に出すと厄介なことになるのでやめた。

下手したら、通信機越しから3日3晩で惚気話を聞かされ続ける危険性がある。それをクルーの誰かに聞かれてもしたら、文字通り大変なことになるだろう。

(……グラン・マ。私、頑張るよ)

たとえばそれが、大切な『仲間たち』を危機にさらすことと同義であっても。

目的も果たして、『仲間たち』だって守り抜いてみせよう。アイデアも、ひとり孤独ではないのだから。

「ノブレスくんも、頑張ってるんだから。そして、後に出会うであろう、彼も」

——クーゴ・ハガネも。

この先起きる戦いで、守るべきもののため／失ったものを取り戻すため／過去と未来につながる今を守り抜くために、空の護り手は駆け抜ける。

出来事の詳細すべてを拾い上げることが不可能だけれど、アイデアには『見える』。そして、『わかる』。

夜明けの鐘がなるまで、あと少し。天使たちが降臨し、世界は変革の刻を迎えるのだ。

アイデアは操縦桿を握り締めた。天使たちと共に、星を見守る天女もまた戦場を翔る。その先にある未来を求めて。



このときのクーゴ・ハガネはまだ知らなかった。

「……………あの、どこかでお会いしませんでしたっけ？」

「いや、ないな。人違いだろう。……………キミこそ、私とどこかで会わなかったか？」

「今、ご自身で否定したばかりですよね!？」

虚憶きよおくの中に出てきた人物のそっくりさんが、この世界にはたくさん存在していることを。

「ひゃ、150mだって!? こんなもの振り回せるはずがない! 重
力が少ない宇宙圏ならいざ知らず、地上で振り回したら腕が折れてし
まうー!」

「それじゃあ、この話はなかったことにするさ。お宅にはもう、技術提
供をしない。交渉決裂つてところかな」

「……わかった。引き受けよう」

「無茶言うな! こんなもの振り回したら、敵どころか味方までぶつ
た切りそうな勢いなんだが!」

「す、すごい……!」

「ビームごと、戦艦を真つ二つにした……」

「こんなのアリなんスか!」

ガーベラストレートが、後にトンデモ武装へ進化していくことを。

「ツインサテライトキャノンとツインバスターライフルを合体させ
て、『ツインサテライトバスターキャノン』作ってみたいなあ」

「それを作るんだったら、デストロイを設計開発する方が早くて実用
的だと思うが」

「バカね。浪漫が足りないじゃない。浪漫を追う人間だったら、サテ
キヤとバスターは誰しもが憧れるわ!」

「浪漫溢れすぎても困るぞ」

「そんなことないわよ。心躍らせるような熱い浪漫がなきや、人間は
人間で居続けられないんだから。だから毛根も意地汚く残ってるの
よ」

「私の精神とHPは既にゼロだ。カウント不能な程オーバーキルされ

ている」

「だから何？ 遠まわしに言わず、さっさと言いなさい」

「……………お願いだから、やめろ。……………やめてください……………」

「どの武装を追加するか、本当に悩むよねー。ビットやノルンもつきたいし、クロッシングも追加したいし、オーラコンバーターも載せたいし、ドリルもつきたいし、ドルイドシステムや月光蝶も搭載したい。ツインサテライトキャノンとかツインバスターライフルも欲しい。無限拳も欲しい。てか全部やりたい」

「そんな無茶苦茶な……………」

「お前は何を作るつもりなんだ……………」

「……………貴女らしいよ、マザー」

この世には、浪漫に燃える技術者がいることを。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

第1回現状確認

【大丈夫だ、まだ平和だから】『0・彼の仲間たちとの
平穩』〜【大丈夫だ、これでも平和だから】『10・前
夜祭―よあけまえ―』時点の中心オリキャラまとめ

名前：クーゴ・ハガネ／刃金はがね 空護くうご

性別：男性

年齢：グラハム・エーカーの年齢＋1歳

誕生日：12月22日（山羊座）

身長：169cm

体重：??kg

血液型：B型

所属：ユニオン軍

搭乗機体：ユニオンフラッグ

主に交流のある人物：グラハム・エーカー、ビリー・カタギリ他

特筆事項

・元々の国籍は日本。しかし、ユニオン軍に所属するために国籍を
変更した。

・家族構成は母・櫻華おうか、双子の姉・蒼海あのみ。その他、親戚多数。

・MSWADの精鋭で、階級は中尉。グラハム・エーカーの相棒お

よび副官と言える人物。

・共有者能力持ちで虚憶保持者きよおく。

・歌い手として活動中。ハンドルネームは『夜鷹』。

蛇足

・イメージCV・私市淳

名前：イデア・クピディターズ
性別：女性

年齢：20代

誕生日：11月11日（蠍座）

身長：?? cm

体重：?? kg

血液型：O型

所属：ソレストアルビーイング

搭乗機体：ガンダムESP—Psyonタイプモデル03—スター

ゲイザー

主に交流のある人物：刹那・F・セイエイ他

特筆事項

・コードネームの由来は『理想への憧れ』（ラテン語）。現時点では本名不詳。

・盲目。しかし、視界に不自由はしていない様子。

・特殊能力保持の疑いあり。現時点での詳細は不明。

・共有者能力持ちで虚憶きよおく保持者。

・歌い手として活動中。ハンドルネームは『エトワール』。

蛇足

・イメージCV・桑島法子

名前：テオ・マイヤー

性別：男性

年齢：20代

誕生日：??

身長：?? cm

体重：?? kg

血液型：?型

所属：一般人(?)

主に交流のある人物：リボンズ・アルマーク、アレハンドロ・コーナー他

特筆事項

- ・大人気の歌手。最新作は『カイメラ隊は病気』。
- ・特殊能力保持の疑いあり。現時点での詳細は不明。感知能力に特化？

- ・共有者能力持ちで虚憶保持者。コウヴァレンター きよおく

- ・レイフ・エイフマン曰く、「亡くなった恩人の生き写しに等しい」容姿らしい。

- ・結婚願望はあるが、諸事情で諦めている。詳細不明。

蛇足

- ・イメージCV：置鮎龍太郎

名前：ノブレス・アム

性別：男性

年齢：20代

誕生日：?? (蟹座)

身長：?? cm

体重：?? kg

血液型：O型

所属：ソレスタルビーイング(?)

搭乗機体：ガンダムESP | Psyonタイプモデル02 || ヲガン

ダム

主に交流のある人物：チーム・トリニティ他

特筆事項

- ・チーム・トリニティの教官。彼らを大切に想っている。
- ・仮面着用。素顔は不明。

- ・生身の戦闘能力は高いと思われる。
- ・どうやら口調を変えている様子。

蛇足

- ・イメージCV・置鮎龍太郎

名前：???

性別：女性

年齢：20代後半

誕生日：??

身長：?? cm

体重：?? kg

血液型：?型

所属：『悪の組織』

主に交流のある人物：イオリア・シユヘンベルグ、E・A・レイ、リボンス・アルマーク他

特筆事項

『悪の組織』代表取締役にして、孤児院の元・院長。現在は隠居しているが、子どもや職員たちから好かれている。

- ・車椅子使用。しかし、それでも精力的に動き回っている。
- ・ネーナ曰く、ナイスバディ。
- ・夫に先立たれた未亡人。
- ・何やら崇高な目的がある様子。
- ・愛称は『グラン・マ（おばあちゃん）』。

蛇足

- ・イメージCV・神田沙也加

大丈夫だ、1stシーズンに入ったから。
11. ビギニング・エンカウント〜天使降臨編〜

「なあ、グラハム。俺たちが鹵獲しようとしてた機体って、どんな姿を
してたか覚えてるか？」

「ああ、覚えているとも！ あの機体とは運命的な出会いをしたから
な！」

クーゴの指摘に、グラハムは曇りなき笑みを浮かべて返答した。不
敵な横顔は闘争心に燃えている。

「その機体の機体数と、特徴は？」

「近接戦闘を得意とした機体^{タイプ}、射撃を特異とした機体^{タイプ}、機動力に特化し
た機体^{タイプ}、超攻撃と防御に特化した機体^{タイプ}、攻防が一体化した機体^{タイプ}の5体
だ。……クーゴ、キミはボケたのか？」

「お前、失礼なことを言うんじゃないよ」

MSに乗っていないなかったら、グラハムの脳天に手刀の一発でも叩き
込んでいるところだ。しかし、そんなツツコミをできる状態ではない
ので、言葉だけでとどめておく。

ガーベラストレートでツツコめないわけではないが、ツツコミを入
れると同時にフラッグが真っ二つになってしまいうだろう。峰打ちで
も中破は確実である。

ため息をつき、クーゴは機体を見直してみる。機体の分類名は同じ
で、現在この場にいる機体数も5体ぴったりだ。でも、違う。明らか
に何かがおかしい。

天使を思わせるような翼が生えた青い機体、死神を思わせるような
風貌の黒い機体、両手にカトラスのようなブレードを装備した灰色の
機体、龍のように威風堂々とした緑の機体、超火力に特化した重装備
の赤い機体。

(その違和感に目を凝らせ。その違和感を見逃すな)

クーゴはぶつぶつ唱えながら、必死になって思い出そうとする。自分たちが追いかけていた機体は、どんな姿をしていた？

翼は生えてない。

死神ではない。

カトラスのようなブレードもついてない。

龍の名前なんてついてない。

重装備の機体の色は赤ではない。

確かに、自分たちが最初に目撃した機体は天使のようだった。でも、翼はなかった。あの機体は、ツインバスターライフルなんて装備していなかった。得意なのは殲滅戦ではなく、接近戦だったはずだ。いいや。そもそも、自分たちがいる場所はどこだ。レーダーやマップを頼りに場所を特定してみたが、『地上・スペースコロニー』としか表示されない。というより、自分たちは宇宙へ進出した覚えなどない。コロニーにフラッグを運び込んだ？ そんなバカなこと、あつてたまるか。

クーゴやグラハムが悩むうちに、コロニーにいた応戦部隊が5機のMSに圧倒され、倒されていく。オーバーフラッグス部隊の面々は、指揮官と副隊長のやり取りを聞いて何か思うところがあつたのだろう。それぞれ考えを巡らせる。ここはおかしい。いや、『この世界』がおかしいのだ。

「そうか。そういうことか!」

何かに納得したように、グラハムが顔を上げた。不敵な笑みを浮かべていたはずの横顔には、溶岩のような激情が煮えたぎっている。

「何故だ。何故、今まで忘れていた!? 何故今まで気づけなかった!?

何故、何故、私は……っ!」

「た、隊長?」

「どうしたんですか!」

「お、おいおい!? 一体なんだっていうんだ!」

「落ち着いてくださいっす、隊長!」

自分で自分自身を殺しかねない勢いで叫んだグラハムの様子に、慌てた様子で仲間たちが呼びかける。クーゴも、叫び散らすグラハムの気持ち（わかりたくないのに）わかってしまった。

あの5機は、自分たちが追いかけていた機体ではない。同名ではあるが、全くの別物だ。何故自分たちは、これらの機体を「自分たちが鹵獲しようとしていた機体」だと認識し、追いかけて続けたのだろうか。

「……最悪の極みだな」

通信機越しで、奴は力なく笑った。

「『愛しの君』を見間違えた挙句、全くの別人べつものに対して現を抜かしていたとは。これでは示しがつかんよ」

「ボケてたのはお前の方だったな」

「悪かったからもう言わないでくれ」

ボケたと言われて嬉しい奴はいない。仕返ししてもバチは当たらないだろう。

クーゴはグラハムの傷に塩を塗りこめつつ、もう一度この場を確認してみる。

5機の機体は、コロニー内で戦闘を繰り広げている。OZの部隊が彼らの迎撃に当たっているようだが、あつという間になぎ倒されていった。エースパイロットであるゼクス・マーキも押され気味であった。

そこまで考えて気づく。OZとは何だ。ゼクス・マーキとは誰

だ。何故自分は、それを「知っている」ような思考回路でいたのだろうか。これこそが、違和感の正体。クーゴは弾かれたように仲間たちを見た。

彼らも違和感の正体を掴んだようで、険しい顔をして画面と戦場を見返していた。戦況は相変わらず、5機の機体が有利である。自分たちの部隊がどちらにつくかで、このパワーバランスはひっくり返るだろう。

ただ。

どちらに協力しても、面倒なことにはかならない。
それだけは確実だった。

「でも、どうします？ 上層部の言う機体は、どこからどう考えても『こいつら』ですぜ？」
「交戦しますか？」

ハワードとダリルが、グラハムに問いかけたときだった。

「!? な、何だあ!? 巨大な機体が接近してきたぞ！」

藪から棒に、ジョ□ユアが悲鳴に近い声を上げる。

慌てて彼の視線の先を向けば、某光の巨人に出てくる敵役怪獣——大きな一つ目の怪獣。名前は思い出せない——を思わせるようなMSがこちらに突っ込んでくる。大きさは、自分たちの数倍はあるだろう。

アプサラス、と、クーゴの口からその単語が零れた。何を意味するのかは分からない。しかし、あの巨大なMSを見たとき、クーゴの頭の中に浮かんだのはその言葉だった。もしかして、これがあの機体名の名前なのだろうか？

5機の機体のパイロットたちも、OZのMSのパイロットたちも、□クス・□ーキスも、弾かれたように空を見た。ジオン軍の兵器だ、と誰かが叫んだ気がする。

目玉の中心を思わせるような部分がギョロリと動いた。エネルギーがその一点に充填されていく。あれは砲口のようなのだ。

あんなものを、真正面から喰らったら。末路を思い至る前に、体は反射的に動き出していった。

「っ、避けるー！」

叫ぶなり、クーゴは操縦桿を目いっぱい動かした。弾かれたように、仲間たちが慌てて動き出す。

しかし、放たれた砲撃は容赦なく仲間たちに襲い掛かった！

「う、うわあああああーっ！」

ハウードの。ダリルの。アキラの。□ヨシユアの。

同じ部隊に所属する仲間たちの通信が、悲鳴を残して断線する。

次の瞬間、視界が真っ白に染まる。

強い衝撃が機体を襲い、あちこちから爆発音がこだました。

D E N G E R の文字が赤く点滅する。体中が軋んだような痛みに見舞われていた。

「……ワー……、……リル、……シユ……、ア……、……クーゴツ!!」
「っ……。グラ、ハム……?」

雑音交じりの通信が届く。グラハムのものだ。仲間たちの名前を一心不乱に叫ぶ彼に、どうにか返事を返した。

ノイズまみれのモニターが映し出したグラハムの姿は、文字通りボロボロの中のようなだった。ヘルメットはひび割れ、頭からは血を流している。吐血したような形跡もあった。

クーゴもグラハムといい勝負である。勝っても負けても嬉しくなければ、そんなことで競う趣味もない。むしろ、地獄絵図の中でそんなことに興じる気分にもなれなかった。

あちこちから黒い煙が立ち上っていた。木々はへし折れ、地面や機体等々、ありとあらゆるものが破壊し尽くされている。クーゴのフラッグも、グラハムのフラッグも、翼をへし折られた鳥のような状態であった。手足はちぎれ、推進力源からは黒煙が漂う。

ノイズがまた聞こえる。グラハムとの通信とは違うものだ。偶然、他機の通信を拾ってしまったらしい。雑音の向こう側から聞こえたのは、男の笑い声である。辛うじて聞き取れたのは、『サハリ□家の悲願』という発言であった。

ひとしきり高笑いをしていた男の通信が拾えなくなった。それほど同じタイミングで、MSは再びエネルギーを充填していく。MSは気まぐれからか、別な方向を向いて砲撃を放った。白い光が何もかもを焼き尽くしていく。思わずクーゴは目を閉じた。

激しい音と衝撃が伝わってきた。耳をつんざくような轟音、誰かの悲鳴、何かが壊れていく音、爆発音、頭をかち割らんばかりに響くノイズ。

光が晴れたのを、瞼の裏越しから感じ取る。目を開き、クーゴは息をのんだ。通信越しから、グラハムの掠れた息が響く。

OとIで創り上げられた空間に、自分たちは放り投げられていた。先程まではコロニーの地上面にいたはずなのに、どうして。

周囲を見回す。いつの間にか、自分たちは取り囲まれていた。OZの連中や5機の機体とは違う、緑の量産機。

『さあ行けアプサラス、すべてを破壊しつくせ！』

男の声がした。ぎよつとして顔を上げれば、大きな一つ目を思わせるようなMSが自分たちの頭上に降臨した。ご丁寧に、砲撃の照準は自分たちにぴったり合わかさっている。エネルギーは既に充填されていた。

体の痛み能耐えながらも操縦桿を握り締めたが、フラッグはうんともすんとも言わなかった。グラハムも、クーゴと同じような状況らしい。わけのわからぬまま、わけのわからぬ場所で死ねと言うのだろうか

か。

(何もわからぬまま、成す術もなく死ぬのはゴメンだ！)

クーゴは心の中で叫ぶ。それもまた、無駄なあがきになりそうだった。

白い光が自分たちに降り注ぐ——ことはなく。

何の前触れもなく巨体が弾き飛ばされ、その衝撃で、白い光は明後日の方向へと飛んでいった。

「——!？」

息を飲む。青緑色の光を纏った白が、深緑色の巨人に強烈な体当たりを見舞ったのだ。あれこそが白い機体の攻撃であり、白い機体の防御でもある。

まるで天女を思わせるような機体だ。そこまで見て、クーゴの口元が緩む。あの白い機体は、クーゴたちが鹵獲しようとした機体と同じものだ。デザインは若干変化してしまったものの、輪を背負ったような白い機体には見覚えがあった。

次の瞬間、美しい紫の光を纏った巨大な刃が、巨大MSを一刀両断した。耳をつんざくような男の悲鳴がガンガン響いてくる。通信は開いていないはずなのに、やけにはつきりと聞き取れた。爆発音と共に断末魔は途切れ、沈黙が残った。

0と1で組み上げられた空間は、緑青に輝く幻想的な光に包まれている。青と白を基調にした機体が、光の中心に降臨した。

背中から推進源が煌めきを放つ。2つの0が並んだような形の軌跡に、クーゴはかすれた戸息を漏らした。隣にいるグラハムもまた、じっとその機体を見上げている。

例えるなら、それは『天使の降臨』。

天使と天女が大地に降り立つ。翼の折れた戦士を労わり、迎え入れようとするかのように。

けたたましいノイズを響かせながら、通信のモニターが起動する。

「そのユニオンフラッグ、無事か!？」

「大丈夫ですか!？」

2人の女性が、自分たちの生存を確認する通信を入れてきた。



空が眩しい。クーゴは思わず目をすばませた。足を止めている間に、先導するグラハムの背中はずっと遠くなっていく。

クーゴはのろのろと首を動かした後、体を引きずるようにして彼の背中に続いた。軍事演習上の観客席は、AEUの新型兵器を見に来た人々でごったがえしている。

その中に、見知った後ろ姿を見つけた。茶髪の髪をポニーテールに結び、白衣を身にまとった技術者。紛れもないビリー・カタギリの後ろ姿だった。

「MSイナクト。AEU初の太陽エネルギー対応型か」

派手に飛び回るAEUイナクトを見上げて、ビリーは眩いていた。そこへ、グラハムは迷うことなく歩み寄る。

「AEUは起動エレベーターの開発で後れを取っているからな。せめてMSだけでも、どうにかしたいのだろう」

グラハムはそう言って、イナクトを見上げた。不敵な笑みを浮かべ

る相方の背中を追いかけながら、クーゴはよろよろと足を進める。

4 徹の体に階段はきつい。足元がおぼつかないし、頭の中に痛みが反響していた。正直、もう横になって寝たい。

「いいのかい？ MSWADのエースコンビがこんな場所で油を売ってて」

「よくはない」

「いいと思っっている奴の神経が知れない」

じゃれあいのような会話をし始めたビリーとグラハムの言葉を切って捨てながら、クーゴは虚ろな目で空を見上げた。イナクトは自由自在に空を翔けぬけ、次々と標的を屠っていく。フラッグと同等の機動性だが、『イナクトがフラッグの脅威となりえるか』と問われれば返答に窮するだろう。

どうしてクーゴがこんな場所にいるかというところ、「AEUIナクトのお披露目会を見に行く。乙女座の勘が、ここにいけば運命に会える」と叫んでいる(要約)と言い出したグラハムのフォローに走り回った挙句、4 徹でふらふら状態にもかかわらず「山羊座のキミにも、運命の出会いが(以下省略)」と引きずり出されたためだ。

空が青い。こういう状態の空を蒼穹と呼ぶ。そういえば、蒼穹作戦という戦いに参加したことがあった。空を取り戻し、明日を手にするための戦い。竜宮島の子どもたちとファフ■ーは、『あれ』からどうなったのだろうか。そこまで考えて気づいた。蒼穹作戦、竜宮島、ファフ■ーとは何だ？ そもそもクーゴは何を言っているのだろうか。

「ねえグラハム。キミはクーゴに何をしたの」

「今回、このお披露目会に参加するために、色々と手を回してもらった」

「あれは完全に振り切れた目をしてるよ!? 死んだ魚の目だ! ……彼に何させたの?」

「……徹夜」

「何徹させたの？」

「4 徹」

「ダメだよ!! 徹夜とアルコールが絡んだクーゴは『仕事以外は危険物』だって何度経験すればわかるんだい!？」

「本当に、申し訳なかったと思っっている」

「あーもう、どうしてこうなるまで放っておいたんだ!？」

「……返す言葉もない」

ビリーとグラハムが、2人並んでひそひそ何かを話し合っていた。果てしなくどうでもいい。

クーゴは2人から目を逸らし、ぼんやりと空を見上げた。相変わらず目に染みる青さだ。

「しかし、AEUは豪気だよ。人革の10周年記念式典に、新型の発表をぶつけてくるんだから」

クーゴが黙ったのをいいことに、ビリーがイナクトを見上げながら呟いた。

「こういうのは、国同士の思惑や威信等々が深く絡みついている。

現在の自分の頭では、詳しく考えることはできない。ただ、漠然と、
「どいつもこいつも面倒だ」ということだけは察していた。

グラハムはイナクトへ鋭い眼差しを向けたまま、ビリーに問いかける。

「どう見る？ あの機体を」

「どうもこうも、ウチのフラッグの猿真似だよ。ブラストのときもそうだったけど、独創的なのはデザインだけだね」

『そこ、聞こえてるぞー!』

ビリーが肩をすくめて笑った直後、イナクトのパイロットががなり立てた。コックピットが開き、緑の角ばったパイロットスーツに身を

包んだ男が観客席を見返す。ピンポイントでビリーたちの方を向き、彼はまた怒鳴りつけた。

今回、この最新MSに登場しているのはパトリック・コーラサワー。姓が炭酸飲料のようだ。いつぞやのMSファイトで優勝を治めて以来、彼はめきめきと頭角を現したらしい。触れこみは「模擬戦2000回無敗の男」だったか。真面目に計算して考えれば、確実に矛盾が発生する数字である。どこからどう見ても盛っていることは明らかだ。

犯人は軍部か、本人か、それとも両方か。十中八九本人だろう。破■事変や■世の戦い、時の■獄やアルテ■メット・クロス加入時もそんな感じだった。人は彼を「不死身のコーラサワー」と称する。これでもかというくらいの帰還率を誇っていたからだ。

そこまで考えて、クーゴは首を傾げた。変な用語が頭の中を飛び交っていたような気がしたからだ。もう何も思い出せない。

コーラサワーの売り出し文句は「不死身」ではない。では、なぜ「不死身のコーラサワー」という言葉が浮かんだのだろう。

「集音性は高いようだな」

「みたいだね」

グラハムは笑い、ビリーが苦笑する。クーゴは首を振った。

「違う。あれはパイロットだ。パイロットが色々と凄すぎるからだ」

「……ねえクーゴ。キミは一体、どこを見て、誰と話してるの？」

ビリーのいるほうからではなく、クーゴが「ビリーがいる」と認識している場所の反対側から声がした。今日はいいい天気である。空が真っ青だ。

しばし空を眺めていたとき、少し離れた場所から会話が聞こえてきた。目をゆつくりと動かし、会話の主たちに視線を向ける。

通路の手すりに身をかがめる壮年の男性の隣には、車椅子に乗った

女性が並んでいる。2人の後ろには、茶髪の男性と金髪の女性が佇んでいた。

「ツインサテライトキャノンとツインバスターライフルを合体させて、『ツインサテライトバスターキャノン』作ってみたなあ」

「それを作るんだったら、デストロイを設計開発する方が早くて実用的だと思うが」

「バカね。浪漫が足りないじゃない。浪漫を追う人間だったら、サテキャとバスターは誰しもが憧れるわ!」

車椅子に乗った女性は、壮年の男性を切って捨てた。会話内容を聞く限り、AEUIナクトなんて関係ないらしい。

技術屋は皆、浪漫を追いかける生き物らしい。いや、全人類が浪漫を追って生きていると言えるのか？

「浪漫溢れすぎても困るぞ」

「そんなことないわよ。心躍らせるような熱い浪漫がなきゃ、人間は人間で居続けられないんだから。だから毛根も意地汚く残ってるのよ」

車椅子の女性は吐き捨てるように言い放つ。壮年の男性は、目頭を覆って天を仰いだ。

「私の精神とHPは既にゼロだ。カウント不能な程オーバーキルされている」

「だから何？ 遠まわしに言わず、さっさと言いなさい」

「……………お願いだから、やめろ。……………やめてください……………」

今度は俯いて、涙声で懇願し始めた。茶髪の男性と金髪の女性が、入れ替わるように天を仰ぐ。

クーゴも一緒になって空を見上げた。やはり、目に染みるほど空が

青い。

浪漫という単語でふと思いついたことがある。クーゴが虚憶きよおくやコーヴァレンター能力に目覚める以前は、星を見ることが好きだった。青空よりも星空に浪漫および魅力を感じていた。将来は宇宙飛行士になり、外宇宙探索に乗り出したいと考えていた。もれなく蒼海に鼻で笑われたが。

日本の人工衛星の名前や役割を暗唱したり、星の名前を暗唱したり、星図を見たりしながら、宇宙へと思いを馳せたものだ。そちらの道に進んでいたら、どんな出会いと別れがあったのだろう。今となつては「IF」でしかない。時々ふと気になることはあるけれど、それ以上に、今この瞬間ときが充実している。

我ながら珍しい思考回路だ。どうしてこんな方面に浸っているのだろう。寝不足の影響だろうか。もう寝たい。うとうととまどろんでいたら、向うから叱責が飛んできた。『そこ、寝るんじゃない!』――声のした方へ目を向ければ、角ばったパイロットスーツに身を包んだコーラサワーの姿が。今、無性に炭酸飲料が飲みたくなった。

(そうだ、炭酸飲料を買いに行こう)

クーゴはのろのろと体を起こして立ち上がり、石のような足を引きずりながら歩き出したときだった。

空の向う側から、MSがやって来る。

イナクトのような角ばった機体ではなく、白と青基調の美しい機体。

緑色の粒子がキラキラ輝き、デモンストレーションを終えたイナクトへと近づいていく。

「……なんだ? あの機体」

炭酸飲料を買いに行こうとした体が止まる。雲一つない空の向う側に、クーゴの視線は釘付けだった。

(あれは、見覚えがある。……どこで?)

頭の奥底から浮かんできたのは、アレと同じ機体の姿。緑の狙撃手や黒い死神、銀色の天秤等の機体の中で、一際鮮明だった2機のうちの、ひとつ。

A E Uのイナクトお披露目会。そうだ、この場にはもう1人いた。A E U、ひいてはO Zの軍人で、特務大尉——ゼクス・マーキス。この件での出会いをきっかけに、自分たちは長い付き合いとなった。多元世界を共に駆け抜ける、大切な友人となったのだ。そこまで考えて、気づく。

A E UにはO Zなんてないし、特務大尉ゼクス・マーキスという人物もいない。

では、『これ』の出どころは。思い当たるのは、1つしかない。

「そうか、きよわく虚憶……!」

クーゴははっとして、ビリーとグラハムたちの方を向いた。2人も、あのM Sに釘付けである。

特にグラハムは、舞い降りた乱入者を凝視していた。

「あの、光……」

魅了されたかのように、どこか熱っぽい響きを宿したグラハムの声がする。

不意に周囲がざわめきだした。イナクトのパイロット、コーラサワーを呼びかけるA E Uのお偉いさんが頭を抱える。他の人々も通信しようとしていたが、この場には通信不良——もとい、電波不良が起きているらしい。

A E Uの軍人が慌てた様子で避難誘導を始める。どうやらあのM Sは味方ではないらしい。一体全体、この場で何が起きているのだ

ろう。寝不足で鈍かった頭が、急激に回転し始める。乱入者は静かにイナクトと向き合う。その静けさは、どこかで『見た』ことがあった。コーワサワーは突然の乱入者を歓迎しているようだった。確かに、この乱入者を撃退すれば、イナクトと彼に箔がつく。しかし、しかしだ。どうしてか、嫌な予感しかしない。むしろ、コーラサワーが勝てた姿が思い浮かばない。撃墜される様子が何度も何度も頭の中にリフレインする。

イナクトが、動く。

土足で乱入した機体に向けて、格闘戦を仕掛けるために。

ブレードを展開したとき、高周波が周囲に飛んだ。あのブレードは、高周波によって対象物を切り裂くものだ。

だが。

「だめだ！ 引け、パトリック！」

それは、もはや反射であった。クーゴは観客席から大声で叫んでいた。

通信不良で上司の声が届いていないのだから、一般観客の声がパイロットに届くはずもない。

こんなこと、無意味な行動でしかなかったのに。

『——え？ 誰だお前？』

何とも間の抜けた返事が聞こえ、機体と腕が後ろへ下がる。

パイロットスーツのヘルメット、およびイナクトのコックピットの窓越しから。

目が、合った。

次の瞬間、乱入者の機体の腕が変形し、ブレードが展開する！ その刃は、高周波ブレードの柄の部分で、文字通り一刀両断した。

刃が空を舞い、地面に突き刺さる。あと少しだけイナクトが前に踏み出していたら、イナクトの手首は真っ二つにされていただろう。

しかし、これでもう、イナクトの接近戦用武装は失われた。残った武装は遠距離用のリニアライフルのみ。

「なんとー！」

グラハムが身を乗り出す。この場に沈黙が広がった。

幾何かの沈黙の後、イナクトがリニアライフルを打ち放つ。だが、乱入者はそれを易々と躲し、イナクトの両腕を切り裂き、吹き飛ばし、叩きのめした。

無様に倒れ伏すAEUの新型。誰もが愕然とした表情で、乱入者を見上げていた。お披露目は散々な結果になったようだ。こんな醜態を晒したのだから、末代までの恥だろう。

「失礼！」

グラハムはそう言うなり、前に座っていた男性から双眼鏡をひったくった。

「な、何を……」「『失礼』だと言った」

「言えばいいという問題じゃないだろう。ああ、連れが申し訳ありません」

夢中で白い機体を見上げる彼を横目に、クーゴは男性に謝罪の言葉を述べる。謝られた男性はぽかんとしたあと、渋い顔をした。

キミも苦勞しているんだね、という眼差し。クーゴは曖昧に笑いながら、グラハムの方を向いたときだった。

「——ガン、ダム？ ああMSの名前か？」

「ガン、ダム……？」

双眼鏡越しから機体名を確認したグラハムが呟いた。それを受け

て、ビリーが機体名を復唱する。

クーゴも舞い降りた天使を見上げた。ガンダム。どこかで聞いたことのある言葉だ。何度も何度も聞いた言葉だ。とても身近な言葉だ。だが、いつ、どこでそれを。

そうだ。自分の虚憶きよわくの中で何度も対峙し／共闘した、白い機体。あの機体の名前は、確かに『ガンダム』だった。靄きよが晴れたような心地になる。

ガンダムはしばしボロ雑巾と化したイナクトを見つめていた。そこへ、別の機体が舞い降りてくる。大きな輪を背負い、青緑の光輪を身に纏った純白の機体だ。

あれもガンダムだ、とクーゴが直感したのと、グラハムが「あれもガンダムか!?’と叫んだのはほぼ同時であった。

先程の白と青のガンダムが「天使」ならば、今やって来たガンダムは、さしずめ「天女」と称するべきか。あの輪や光輪は、天女が身に纏う羽衣とよく似ている。

天使は天女を見上げた。2つの機体の佇まいは、厳かで神聖な雰囲気きよわくを漂わせている。けれど、あの機体の間に漂う雰囲気きよわくに、クーゴはどうも覚えがあった。

それを手繰り寄せようとしていたとき、天女がじつと観客席を見つめていたのに気付く。しかも、どうやら、クーゴとグラハムに視線を向けているようだった。

(なんなんだ、一体)

不意に、誰かが微笑んだような気配がした。クーゴは思わず天女を見上げる。

機体越しに目が合った。それを確認するや否や、天女がゆつくりと腕を広げた。

青白い光が舞い上がる。誰かに何かを呼びかけるような、そんなシグナルがこの場に発せられた。

歌が聞こえる。／マントを羽織った2人の指導者が視える。

歌が聞こえる。／宇宙を流浪する白い船が視える。
歌が聞こえる。／安住の地となるはずだった赤い星が視える。
歌が聞こえる。／赤黒く染まった死の星が視える。
歌が聞こえる。／散り逝く者たちの姿が視える。
歌が聞こえる。／自分が見知った、美しい青い星が視える。
——歌が止んだ。／もう何も、視えなくなった。

「……今のは、ヴィジョンの共有?」

「まさか、共有者か!？」

クーゴが呟き、グラハムがはっとした表情で天女を見上げる。しかし、奴はすぐに天使へと視線を向けた。やはり、奴の視線を奪うのはあの天使なのだろう。

天使と天女はしばし見つめ合っていたが、天使がゆっくりと空へ向かった。天女もまた、天使の後に続く。2機のガンダムは並びながら、空の向うへと飛んでいった。

「また、あの光」とグラハムが呟く。「推進力もなしにどうして」と、ビリーが疑問を口にした。また、この場に沈黙が残る。

ややあつて、乱暴な音がした。無様に倒れ伏したイナクトの方からだ。コックピットから這い出してきたのはコーラサワーである。

撃墜されたというのに、彼は撃墜以前と何も変わってはいない。自身も態度も、がなり立てている内容すらほぼ同じであった。

「成程。最新兵器イナクト、パイロットの安全性は確かなようだ」
「違う。あれはパイロットだ。パイロットが色々と凄すぎるからだ。賭けてもいい」

グラハムの言葉を遮り、クーゴは強く断言した。クーゴの強気な発言に、グラハムは一瞬目を見張る。

しかし、今はそんなことどうでもいい。

「それより、きつきの天女……後からやって来た方のガンダムが、何かシグナルを発したよな。あのとき、何か視たか？」

「ああ。マントを来た指導者、白い船、赤い星、死の星、散り逝く者たち、青い星……」

「ビンゴー！ お前も俺と同じものを『視た』んだな、グラハム」

クーゴとグラハムが頷き合っていたときだった。控えめに、ビリーがおそろおそろ手を上げる。

「2人して盛り上がっているところ悪いんだけど、僕には何も『視え』なかったよ」

「え」

「おそらく、この場にいる人は、何も『視えて』いないんじゃないかな」

「あのとき、虚空を見ていたのはキミたちだけだったし」と、ビリーは付け加えて周囲を見渡す。

近くにいる人々の「こいつら何を言ってるの？」という視線が痛い。グラハムはこほんと咳ばらいし、逃げるように話題を変えた。

「しかし、あのMS。軍備増強路線をいくAEUへの牽制……いや、警告と取るべきか？ ……だとしても、ここまでされてAEUが黙っているわけがない」

グラハムの言うとおりである。軍事演習場からは、けたたましいサイレン音が鳴り響く。

スクランブル。次々とイナクトやヘリオンが飛び出し、ガンダムたちの迎撃へ向かう。

戦場は空。しかし、機体の性能差は歴然だ。歴然過ぎた。

あっという間にイナクトやヘリオンが倒されていく。ある機体は腕を吹き飛ばされ、ある機体は動力源を潰され、ある機体は体当たりで弾き飛ばされ、ある機体はブレードで叩き切られた。機体の数は残

り数機。だが、機動エレベーターの上空から何かが近づいてきた。

新手のイナクトやヘリオンである。A E Uは機動エレベーターのピラー内部に戦力を隠し持っていたのだろう。機動エレベーター内に戦力を有するのは条約違反だ。あの2機を倒せたとしても、国際非難は免れまい。悲しいがな、囲まれて（言論による）総攻撃の様子が容易に想像できた。

しかしながら、ガンダムたちにとってはそんなこと関係なかったようだ。純白の天女が縦横無尽に飛び回り、イナクトやヘリオンを体当たりで弾き飛ばし、身に纏っていた光輪を打ち放ち、体勢が崩れた敵をビームガンで追い打ちする。その傍らで、白と青の天使がブレードで攻撃を弾きつつ、牽制射撃を繰り返しながら、敵を叩き切っていく。

ナイスコンビネーション。所属不明なので敵なのか味方なのか不明であるが、天晴あっぱれな戦術である。阿吽の呼吸と言うべきか。クーゴは素直に感心しながら、天使と天女による舞踏を見つめていた。そこへ華を添えるように、真下からの援護射撃。緑色のガンダムだ。

「何をしているんだ。早く非難しなさい」

不意に聞こえた声に振り返れば、壮年の男性がいた。先程、車椅子の女性に言論でボコボコにされていた人物である。

彼の顔を見たビリーが、あつと声を上げた。

「エルガン・ローディック代表!?!」

彼の言葉を引き金に、A E Uの要人たちは顔面蒼白になった。

エルガン・ローディックは、国連平和維持理事会の代表だ。実権は大きくないものの、コネクションの広さと情報力が群を抜いているため、「影の指揮者」と呼ばれる人物である。彼のカリスマ性は各国の代表が称賛するほどであった。

国連に所属する人間に条約違反の現場を見られたのだ。もはや言い逃れはできまい。エルガンはA E Uの要人たちに鋭い眼差しを向

けた。A E Uが国際的視点から総攻撃の憂き目にあい、厳しく糾弾されることは確定事項である。

なんだかA E Uの人々が可哀想だ。クーゴが同情の眼差しを彼らに向けたとき、エルガンがこちらを見ていたことに気づいた。目が合う。物腰穏やかで聡明な瞳の奥底に、恐ろしいほどまでも激情が揺れている。その目がゆつくりと細められた。

いつだろう。何かを託すような眼差しを、彼から向けられたことがあったはずだ。それを受け取った者の中に、自分もいたはずだ。

くろのえいち。未来への災厄に立ち向かう力を。そのために集められ結成された、世界の守護者たち。彼の言葉を受け継いで生まれた、青の名を冠した遊撃隊。

『私は……君達と、未来……を、……信じて、いる……』

満足げに笑った男が息絶える。長い戦いを終えた彼は、どこか安堵の表情を浮かべていた。

孤軍奮闘し続けた彼は、どんな気持ちだったんだろう。□□□から聞いた、彼の『駒と思つたことは一度もない』という発言は、嘘ではなかったのだ。

その想い、そして意志は受け継がれ、新たなる仲間たちと共に、新たな戦いの幕が開く。■の牢獄を破壊するための、長い戦いが。

「……………あの、どこかでお会いしませんでしたっけ？」

クーゴの問いに、エルガンは首を振った。

「いや、ないな。人違いだろう。……………キミこそ、私とどこかで会わなかったか？」

「今、ご自身で否定したばかりですよね!？」

質問を文字通り打ち返され、クーゴは思わずツツコミを入れる。

エルガンは考え込むように手を顎に当て、首をひねる。そして、すぐに合点が言ったように手を叩いた。

「私の虚憶きよわくに、キミとよく似た人物がいたんだ。そのせいだろうか」

彼もまた、虚憶きよわく持ちだというのか。意外な共通点に面食らっていたとき、向うから誰かが彼を呼んだらしい。「ジイさん」という親しそうな響きを宿した男性の声と、「代表」という凛とした女性の声と、「エルガン」というやや棘のある女性の声。

エルガンは短く返事をした後、こちらに軽く会釈した。そのまま、避難誘導に従って去っていく。自分たちも行かなくては。クーゴたちも避難誘導に従い、AEUの軍事演習場を後にしたのであった。



「ねえねえティエリア。ちょっとヴェーダで『天女』を検索してほしいんだけど」

アイデアの唐突な申し出に、端末越しのティエリアはむっと眉をひそめた。

『キミはヴェーダを何だと思っているんだ』
「大きなコンピューター。だから、情報もいっぱい入っているんじゃないかなって」

「仮面泥棒の居場所を探すのに使われるのと、目が見えない人の情

報検索に使われるのと。どっちがヴェーダにとって嬉しいかな」なんて言えば、ますますティエリアがげんなりしてしまった。ある種の「究極の二択」だからだろう。

目が見えない、と強調すれば、ティエリアはため息をついた。同時に、何かに気づいたように顔を上げる。しばしの沈黙ののち、彼は渋々情報検索を始めた。どんな理不尽で意味不明であろうとも、生みの親の言うことには逆らえないらしい。

『検索結果を端末に送信した。あとは、端末の読み上げソフトを使うといい』

「ありがとうティエリアー！」

彼に感謝の言葉を告げて通信を切り、イデアはスキップしながら刹那とロックオンの元へと戻った。ロックオンがあきれた表情でこっちを見ている。

世界に喧嘩を売ったのに、と言いたげだ。「わかってるよ」と言えば、彼はぞつとしたように息をのんだ。まだ言葉にしていけないのに、どうしてわかったんだ、と。

「わかってるよ」と付け加えれば、ロックオンは余計に何とも言い難そうにしていた。刹那はイデアに背を向けたまま、何も語らない。

イデアは岩に座り、早速端末に送られてきた情報を聞き取る。

天女とは、天に住むとされる女性のことを指しており、特に、天の支配者に仕えているとされる女官の総称でもある。彼女たちは羽衣と呼ばれる特別な衣服を持っており、それを使って空を飛ぶとされた。地上へは水浴びなどの用事のために訪れるのみで、普段は天で暮らしているという。中には大事な羽衣を無くしてしまった——正確には奪われてしまったため、空に帰れなくなり、地上の男性と婚姻する話なども伝えられている。

もともと、その話では、『羽衣を見つけたために空へ帰ったが、愛する人のことを忘れられなかったので、彼を天へと連れて行った。しかし、天女の両親が悪知恵を働かせたため、2人の間に大きな川ができ

て分断されてしまう。川の水が引く月の7日なら会えると天女が伝えたが、男はそれを「7月7日なら会える」と聞き間違えたため、7月7日にやってきた。そのためこの夫婦は、年に1度だけの逢瀬を重ねている』という結末を迎えるのだ。

他にも、天女と呼べるような存在とそれに関わるような民話および人物は多々いる。弁財天や吉祥天、先程の話で挙げた話に出てくる織姫などが挙げられた。一般的な比喻表現としては、優しさと美しさを兼ね備えた女性を「天女」と称することがあるという。

スターゲイザーが天女と呼ばれたのは、背中の輪や身に纏った光輪が羽衣を纏っているように見えたのだろう。他の連中がスターゲイザーを「輪つか付き」と酷い呼称を付ける中で、『夜鷹』——クーゴ・ハガネだけが「天女」という素敵な呼称を付けてくれる。

それはとても嬉しいことだ。イデアは端末を抱きしめるように手で包んだ。端末に結んだ金のハートが揺れた。優しい鈴の音色に耳を傾ける。この音色を聞いたたびに、心が弾むのだ。

「さて、頑張らなきゃ。ね、2人とも？」

「……ああ」「そうだな」

刹那とロックオンに声をかけ、イデアは自分の機体を見上げた。

3機のガンダム——スターゲイザー、エクシア、デュナメスが、夜闇の中で静かに佇んでいる。

賽は投げられた。世界は、ここから変わっていく。



後ろを振り返ってはいけない。

グラハムとビリーの、暗黙の了解である。

バックミラーを見れば、鏡越しからゾンビとご対面だ。だから、極力視線を向けないようにする。

ラジオから繰り返し流れるのは、ソレスタルビーイングという集団の声明文。戦争根絶のために武力介入を行うという彼らは、存在自体が矛盾している。なかなかエキセントリックな集団ではないか。もしかしたら、件の少女も、この話題を目に／耳にしているのかもしれない。

運転を終えたら少女にメールを送ろう、と、グラハムは考えた。また一つ、『彼女』と何かを共有できる。なんて素晴らしいことなのだろう。グラハムは上機嫌でハンドルを切った。ゾンビがバックミラーを横切ったのは気のせいだと思う。

『あのガンダムを見たとき、無性にキミに会いたくなった』とメールを送ったら、どんな返事が返ってくるのだろうか。グラハムはちらりと懐に視線を向けた。彼女がくれた蒼の扇子が目に入った。頬が緩む。

(次に会えるのは、いつだろうか)

そう考えたグラハムは、つい、見てしまった。バックミラーに映る、ゾンビを。

クーゴ・ハガネ。徹夜明け5日目を迎えそうな状態の彼は、虚ろな目でこちらを見ていた。がくん、と車体が揺れるたび、恨めし気な表情を浮かべる。

眠い、寝たい、眠れない、寝たい、眠れない、車が揺れる、揺らさないで、眠い、寝たい。鏡越しからの眼差しが訴えている。とんだジャパニーズホラーだ。

しかし、舗装されていない道路をジープで走るのでから車体は揺れる。当然、クーゴは眠れない。なんて悪循環なのだろう。早く休んでもらわないと大変なことになる。

「ああああああ」なんて唸り始めたらアウトだ。どこぞの呪いそのものと化してしまう。

夏場は（別の意味で）重宝するけれど、やっぱり怖いものは怖い。

「グラハム、早く目的地につかないかな。怖いんだよ。本当に怖いんだよ。今にも唸りだしそうでー！」

「心得た！　ただし、安全運転のため、法定速度を遵守する！」

グラハムは小声で宣言し、ハンドルを握り締めた。徹夜明けだが仕事モード（カタギリ命名）が切れたクーゴは、元の徹夜明け状態もといゾンビに戻ってしまう。

避難誘導が終わり、車内での話し合いが終わった後、彼はあつという間にゾンビへと戻ってしまった。それ以後ずっとこのままである。早く目的地へ向かい、クーゴに睡眠を取ってもらわねば。こんな恐怖体験、二度としたくない（不可抗力で、何度も体験する羽目になっているが）。

次の瞬間。

「ああああああああああああああああああああ」

「う、うわああああああああああああああああー!!　唸り出したー！」

「うおおあああああああ!?　カタギリ、危ないぞー！」

恐れていた事態に発展し、真っ青になったビリーが運転席へと手を伸ばした。グラハムも慌ててハンドルを切る。

ゾンビが斜め右に倒れたと思った刹那、左の扉にぶつかって、なぜか運転席の方へやって来た。怖い。本当に怖い。

「わあああ！　グラハム、前、前ー！」

「ぬおおお!?!」

「あああああああああああああああああー……」

「うわあああああああああああああこつち来たー!!」

「だから、危ないと——おおおおおおおおお!?」

迷走するジープが、悪路でがたがたと揺れていた。目的地は、未だ見えず。

帰還まで、しばらくかかりそうだった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

幕間。刹那・F・セイエイおよびソラン・イブラヒム

瓦礫の山がいくつも積み上げられた戦場には、沢山の死体が転がっていた。

夕焼けの向うには、先程少女を救い上げたMS。

少女の手から機関銃が落ちる。彼女の身の丈ほどもある銃は、乾いた音を立てて地面に転がった。

美しいフォルムの『神』はゆっくりと大地に降り立った。胸のハッチが開き、中から人間が飛び出してくる。数メートルの高さから躊躇いなくジャンプした人間であったが、上手く着地することができなかったらしい。若干バランスを崩しながら、転がるような形で地面にぶつかった。

嫌な沈黙がこの場を支配する。まさか、今の衝撃で死んでしまったのではなからうか。少女は恐る恐る人間へと近づく。刹那、人間はむくりと体を起こした。「失敗した。恥ずかしい。しかし、これもまた、人間の感情なのか……」などと呟き鼻血をぬぐいながらも、何事もなかったかのように立ち上がる。

緑色の髪は短く切りそろえられていた。紫苑の瞳は静かに少女を見つめる。男とも女とも思えるような中世的な顔立ちをした人間は、少女に見られていることに気づくと居心地悪そうに視線を彷徨させた。人間の様子に台詞を入れるとしたら『流星にまずいな、どうしよう』あたりだろうか。

その人物は取り繕いながらも周囲を警戒していた。といっても、この場にいるのは少女と彼（彼女？）だけなのだが。

安全であることを確かめた彼（わからないから、今後はこの表記でいく。間違いがあったら修正しよう）は、ふつと穏やかな笑みを浮かべた。

「キミは……ソラン・イブラヒムだね？」

初対面の相手に名前を言い当てられ、少女——ソラン・イブラヒム

は動揺した。

彼は一体何者なのだろう。何故、兵士である自分の名前を知っているのだろうか。まさか、敵？

ソランは慌てて機関銃へと手を伸ばす。しかし、彼が機関銃を蹴り飛ばす方が早かった。

「僕は、キミの敵じゃない」

わかってくれ、と彼は乞う。跪き、腕を掴まれた。どこまでも真剣な眼差しに気圧され、ソランはおずおずと構えを解く。

「ありがとう。いい子だ」

彼は安堵したように笑い、ソランの頭を撫でた。そうされたのは久しぶりで、思わず情けない表情になる。いつも頭を撫でてくれた温かい手を殺したのは、他ならぬソラン自身だったからだ。

洗脳されていたとはいえども、両親を殺したことは赦されていないはずがない。生きるためだったとしても、友人たちを見殺しにしたり手をかけたことは赦されていいはずがない。だから、涙を流す資格はないのだ。

それなのに。もう出るはずのないものが、瞳の奥からぼろぼろと零れはじめる。それを見た彼は静かに頷き、「大丈夫だよ」と言いながらソランを抱きしめてくれた。こんなに泣いたのはいつぶりだろうか。両親を殺したときは、涙なんて出なかったのに。

「おーい、こっちは終わったよー！」

「ったく。どこの誰よ、アプサラスのデータなんて流した奴は！ 技術的に100%再現はできなかったみたいだけど、後が怖いわ……」
「この前はクシャトリアのデータが流れていましたね。誰が、何のため……」

「アニニューはもう休んでなよ。あとはアプロディアやフェニックスた

ちに任せよう。データの消去と工場潰しも頼まなきや」

「さつき、ノブレスから連絡があった。あちらの方も片付いたそうだ」
「エルガン代表も大変だな。国連は今日も大荒れだ」

後ろの方から、どやどやと人々がやって来た。誰も彼も、皆同じ制服を着ている。

水色基調のシンプルでゆったりとした服の胸元には、綺麗なブローチが留められている。金の翼の真ん中に、赤い宝石が煌めいた。

彼らは一体何者だろうか。それを問おうとしたら、青年に手を引かれた。そのままコックピットに乗せられる。

「俺をどうするつもりだ!?!」

「さつきも言ったよ。僕は、キミの敵じゃない」

「話になってない!」

逃れようともがいている間にハッチが閉まった。『神』はゆつくりと飛翔する。コックピットから見える景色の美しさに、ソランは思わず息をのんだ。

赤い大地と茜色の空がどこまでも広がっている。ここが、自分が必死になって走り回っていた場所？ 生きるために人を殺し続けた戦場だというのか。

「キミの世界が変わるのは、こんなにも簡単だ」

青年は、独り言のように呟いた。

「それと同じように、誰かの世界を変えるのも簡単なことなんだよ。ソラン」

「僕は、今のところ、変わってしまったものを見極めるので精一杯だけれどね」と、青年は笑う。彼は前を向き、『神』の操縦に専念した。

コックピット越しの景色が目まぐるしく変わる。赤く乾いた大地は、いつの間にか鬱蒼とした緑色へ、銀色の大都会へ、果てしなく広い海原へと変化を繰り返す。

クルジスの景色しか知らないソランには、何もかもが新鮮な光景だった。青年はそんなソランの様子を見つめながら、操縦桿を動かす。また、景色が変わった。

しばらくして、また赤い大地が見えてきた。どうやらクルジス——あの戦場ばしよへと戻ってきたらしい。しかし、『神』は進路を変えた。戦場を通り過ぎ、何もない荒野を選んで降り立つ。

青年はソランの手を引いた。乾いた大地に降り立った2人に続いて、別のMSたちもやって来る。彼は優しい目でMSたちを——否、MSに乗っているであろうパイロットを見ていた。彼らも青年を見返していたが、すぐに前を向いた。視線の先には、街が見える。

行け、ということだろうか。生きろ、ということなのだろうか。だとしたら、どうしてソランなのだろう。あの戦場には他にも人間がいただろうに。何故、ソランが選ばれたのだろうか。それがわからなくて、首を傾げる。青年は困ったように苦笑いした。

「なぜ、俺なんだ」

「……すまない。僕自身にも、いい例えが見つからないんだ。あえて言うなら、『気まぐれ』かな」
「っ—」

「でも、どうしてだろう。キミを一目見たとき、『キミを死なせてはいけない』と思っただんだ。……キミと似たようなものさ。まだ、『答え』が見つからないでいる」

紫の瞳が言っている。「その行動の先にある、『答え』を見届けなければならぬ」と。

「未だに僕は何もわからないけれど、この選択に後悔はない。そして……キミなら、その『答え』を、確かな形で指し示してくれると信じ

ている」

そこまで言って満足げに頷いた後、青年は自分の言葉に違和感を持ったようだ。あれ、と首を傾げて、真剣な顔で悩み始める。

しばし唸った後、彼は何か思い至ることがあつたらしい。「ああそうか」と噛みしめるように言った。

「これが、マザーの言っていた『可能性に賭ける』ということか。これでもたひとつ、『答え』に近づけたよ。ありがとう、ソラン」

「俺は何もしていない」

「そんなことはない。キミは僕に可能性を指し示した。僕が知りたいと思っていた『答え』の1つをくれた。感謝してもし足りないよ」

青年はそう言い、ソランの頭を撫でてくれた。その手つきが両親のものによく似ていて、また泣き出してしまいそうになる。ソランは押しどめするようにして俯いた。

青年はしばらく何かを考えていたが、いいことを思いついたらしい。

彼は静かに目を閉じる。しばらくした後、彼はソランを向き直った。

「可能性の種を蒔いた。この種をどう花咲かせるかは、キミ次第だ。……だから、そのためにも。今は生きてほしい」

「可能性の、種……」

さあ、行くんだ。青年の目が静かに告げる。荒野に一陣の風が吹いた。ソランは頷き、彼に背を向けて歩き出す。

ちらりとソランは振り返る。青年は穏やかに微笑んでいた。彼と同じように、MSやMSに乗るパイロットたちも、自分を送り出してくれているかのようにだった。

壊すことしかできない自分の手に与えられた、可能性の種。どう

やって育てればいいのかは何もわからない。けれど、それは枯らしてはいけないものだ。

これから自分は、地図のない道を歩んでいかねばならない。手渡されたものを抱えて、長い道のりを行かねばならない。

ソランは顔を上げた。茜色の空と、赤く乾いた大地が続いている。一歩、一歩、踏みしめるようにして歩き始めた。



幸せになる資格なんて、刹那・F・セイエイにはないと思っていた。幸せというものに、刹那は縁がないと思っていた。

『私はグラハム・エーカー。キミの存在に、心奪われた男だ！』

そこへいきなり現れたのが、この男——グラハム・エーカーである。金髪碧眼の米国人で、ユニオン軍の精鋭MSWAD（MSWADはMSWADの略称で、ここではMSWADに所属する軍人として扱われている）に所属する軍人。階級は中尉であり、ユニオンの軍人にして虚憶持（虚憶持は虚憶持の略称で、ここでは虚憶持共所有者として扱われている）共所有者『夜鷹』——クーゴ・ハガネの護衛役として同行していた男だ。そんなグラハムが、なぜか刹那に好意を向けてくるようになったのである。

ヴェエダからのミッションを受けた刹那は、イデアの護衛役として彼女に同行した。その際、『白基調の女性らしい服装をしろ』という指示が入ったという。ミッションを受領したティエリアや、これを聞いた他の面々も頭に疑問符を浮かべた程だ。

それがミッションならばと従った結果が『グラハム・エーカーからの熱烈なアタック』である。どうしてこうなってしまったのか。この話をしたら全員が愕然としていた。特にティエリアは「こんなヴェエダの情報にない」と頭を抱えていた。

頭を抱えたいのは刹那のほうである。オフ会と称してコンタクトを取る度に「キミが好きだ」だの「愛している」だのと真正面から向かってくるのだ。どこまでもまっすぐな翠緑の瞳は、ぶれることなく刹那だけを見つめている。

そんな風に言われたって、正直、どう反応していいのかわからない。普通、真正面から好意を向けられたら「嬉しい」と思うのだろう。しかし、刹那は自分が幸せになってはいけなそうと思っっている。幸せになる資格なんて、あつていいはずがない。

それを願うには、奪ったものが多すぎた。壊したものが多すぎた。この手は、血で汚れすぎたのだ。

刹那は深くため息をつき、端末を見る。グラハム・エーカーからのメッセージだ。今日でもう8通目である。メッセージの内容は、本当にとりよめのない出来事の報告か、あるいはどこまでも真摯な愛の言葉であった。

何度見直しても、刹那からイデアおよびソレスタルビーイングについての情報を引き出すとする意図は一切ない。それが逆に、刹那を追いつめているのだ。愛だの恋だの幸せだのという方面で。

(どうしろというんだ……)

周囲に相談しても、大半の面々は(困惑した後)生温かく笑うだけだ。

特に、ガンダムマイスターたちは参考にしづらかった。

『マリー……』

ハレルヤは思いを馳せはじめて話にならない。

『恋愛だなんて、僕にはそんなもの………あ』

テイエリアは愕然とした表情で虚空を見上げたつきりのため、こち

らも無理だ。

『すべてが終わった後に、女としての幸せを手にするべき。お前さんは若いんだから』

ロックオンはそう言って微笑むのみ。

「刹那？」

名前を呼ばれたことに気づいて顔を上げれば、イデアが目の前にいた。彼女は気遣うようにこちらを覗き込んでいる。

メールが来ていることに気づいた彼女は、嬉しそうにニコニコ笑っていた。

「グラハムさんからのメールね。最近、返信頻度が上がっているようにだけ」

「そういうお前は、クーゴ・ハガネのメッセージに対して頻繁に返信しているようだが」

「やだー見られてたー」

照れ照れした様子で、イデアは頬を薔薇色に染める。あまりにも場違いな彼女の様子に、刹那は遠くを見たくなった。

彼女は一体何を考えているのだろう。自分たちはソレスタルビーイング、世界に弓を引く者たちだ。

こんな自分たちが、世界に使える軍人に現を上げたらロクなことにならない。ヴェーダに頼らなくても明白だ。

しかし、イデアは止まろうとしない。その先にあるのが破滅であろうとも、イデアにとって、些細なことにもならないようだった。

『素敵な名言だよね。死ぬのが怖くて、恋ができるものか！』って』

クーゴ・ハガネとの接触後、イデアは新しい虚憶きよわくを視るようになった。なんでも、その虚憶きよわくは『多元世界に襲い来る侵略者たちを、ロボットたちが撃退する』世界のものだという。虚憶きよわくの中で見つけたという名言を、彼女は口癖のように唱えている。

イデア・クピディターズという『女性』にとって、クーゴ・ハガネへの恋慕も、ソレスタルビーイングの使命と同等だと考えているようだ。滅私奉公を地でいく私設部隊に所属しながらも、彼女は己を捨て去りはしない。その強さが、刹那には眩しく思っていた。

「刹那は、どうして手を伸ばそうとしないの?」

イデアは唐突に、刹那へと問いかけてきた。刹那は首を振り、淡々と答える。

「恋愛そんなものなど、俺にとっては無意味だ。ミッションに支障が出るだけで、何のメリットもない」

「怖い?」

「!?」

唐突だった。

まだ何も言っていないのに、何も言うつもりなどないのに、イデアは刹那の奥底に触れてきた。

刹那は思わず身構える。イデアはニコニコ笑いながら、ゆつくりと刹那の手を包む。

「自分が幸せになるのが、怖いよね?」

ぞくりと背中が震えた。自分の心が見透かされているようで、なんともいえない恐怖を感じる。離れなければと思ったが、体はぴくりとも動かなかつた。困惑する刹那を横に、イデアは静かに言葉を紡ぐ。

「幸せになることが許されないことだっと思って思うなら、自分が誰かを幸せにしてあげればいいんじゃないかな」

「……は？」

発想の転換。あまりにも単純なことだった。

アイデアは楽しそうに笑って、端末を指差した。

画面に表示されているのはグラハムからのメッセージだ。添付された写真は、真つ青に晴れたユニオンの空。『これから空を飛んでくる。キミも、この空の下にいるのかな？ 是非とも会いたいよ』というものだった。

そういえば、ユニオン領の基地でスクランブル発進が起こったというニュースが入った。ソレスタルビーイングが本格活動した暁には、刹那とグラハムは合間見えることになるだろう。丁度、このメールの直後あたりに。

流石に、正体不明の相手にほいほいと機密情報を提示できないらしい。不自然にトリミングされた形跡がある。おそらく、切り取られた部分には国家機密——フラッグあたりが写っているのだろう。そこは抜かりなかった。流石は軍人である。

「少なくとも、刹那は1人、幸せにしてあげられる人がいるでしょう？」

アイデアはそう言って、自分の端末を指し示す。そこに示されていたのは、クーゴ・ハガネ——『夜鷹』からのメッセージ。なんでも、もうすぐ9月10日——グラハム・エーカーの誕生日なのだという。

『彼の誕生日を祝いたいのので、今回のオフ会は2泊3日の京都小旅行にしたい。件の少女にも協力してもらえないだろうか』というものだ。端末からアイデアへと顔を向ければ、彼女は満面の笑みを浮かべる。

刹那はグラハムの顔を思い浮かべた。年齢の割には、子どもみたい

に屈託のない笑みを浮かべる男。刹那に熱烈かつ真剣な眼差しで愛を伝える彼の様子に、いつの間にか絆されていた。

『あの子に祝ってもらえたら、グラハムはきつと喜ぶと思う』という『夜鷹』のメッセージを読んだ刹那の頭の中に、イデアの言葉が反響する。壊すことしかできない自分にも、何か、違うことができるのだろうか。何かを成すことができるのだろうか。

脳裏にフラッシュバックしたのは、あの日あるとき、クルジスに光臨したガンダム。ガンダムを操縦していたパイロットの青年が言った『自分／誰かの世界を変えることは、とても簡単である』という言葉だ。なぜ、今になってその言葉を思い出したのかはわからない。

もしかして、イデアはすべてを覚悟した上で、「死ぬのが怖くて、恋ができるものか！」という言ったのだろうか。思わずイデアのほうへ向き直れば、彼女はうんうん頷いていた。悪戯っぽく微笑むイデアに、刹那はなんともいえない心地になる。

どんな状況であっても己を貫けること。自分の想いを大切にできること。それが、イデアの強さであり武器なのだ。

ヴェーダが彼女を選んだ理由が、今ならなんとなくわかる気がする。テイエリアに言ったら、間違いなく卒倒しそうであるが。

「……………」

刹那はイデアの瞳を見返した。光のない無機質な紫苑は、曇りなく刹那の姿を映し出している。丁寧に磨かれた鏡のようだ。

そこには、真摯な表情を浮かべた刹那がいた。

グラハムの真剣な眼差しと、何も変わらない。

『少女！』

満面の笑みを浮かべたグラハムが見えた。刹那の答えなんて、とうに決まっている。——とても簡単なものだった。

*

「この香り……クリスが近くにいます！ やっぱ、俺の格好大丈夫かな？ ねえイデア、俺おかしくないっスか？」

「そうねえ。これでも嗅いで落ち着いたらいいんじゃないかしら？ ついでに体に塗ってみるとか」

「ぎやああああああ！ クリスの香りとお揃いにイイイイ!?」

遠くの方から、イデアとリヒテンダールの声が聞こえてくる。会話を聞く限り、クリステイナが使っている練り香水（イデアが京都旅行で購入したお土産だ）をリヒテンダールにも使用したらしい。心なしか、ラベンダーの香りが漂ってきた。

リヒテンダールがクリステイナに好意を抱いていることに気づいたのは、刹那がグラハムからの熱烈な告白を受けてからだ。あんなにもわかりやすいというのに、どうしてクリステイナは気づかないのか。不思議な現象である。

隠し通せていると思っているのはリヒテンダールだけだし、気づいていないのはクリステイナとティエリアぐらいだと刹那は睨んでいる。昔の刹那だったら、クリステイナやティエリアのようにスルーしていたに違いない。刹那はひょっこり廊下を覗き見る。

「いけない！ クリスが使ってるやつを持ってきちやつたわ！」と、イデアはわざとらしく声を上げた。

結果、リヒテンダールは余計に追い込まれてしまったらしい。顔を手で覆い、顔を真っ赤にしてプルプル震えている。

そこへ、何も知らないクリステイナがやって来た。イデアは即座に練り香水の入れ物を彼女のポケットへと戻す。そして、素知らぬふりを貫きながら、同じ練り香水の入れ物を指示しつつ首を傾げてみせた。

「……おかしいわね。リヒティが発狂しちゃった」

「ラベンダーの香りなのには？」

「ラベンダーの香りなのに」

いっぱいいっぱいになったリヒテンダーを見たクリステイナは、しばらく彼の様子を見守っていた。が、最終的にはスルーすることにしたらしい。「変なのー」と言いながら、さっさと廊下を進んで言ってしまった。

彼女が去っていったのと入れ替わりに、リヒテンダーが崩れ落ちる。気のせいではなければすすり泣くような声も聞こえた。間接キスならぬ間接練り香水で上がっていた色々なものは、クリステイナの「変なの」発言で瓦解してしまったようだ。

「まあ、しばらく匂いは残るから、お揃いよね」

「え!?! ええ!?! えええ!?!」

その言葉に、またリヒテンダーが飛びあがった。おろおろする彼を放置して、イデアはさっさと廊下を進んでいく。

お揃い、という言葉をやたらと言い続けるリヒテンダー。彼の眼差しは、あらぬところをさ迷い続けている。こうなっては本当にどうしようもないので、刹那もイデアを見習うことにした。彼女と唯一違うところがあるとするなら、彼の肩をぽんぽん叩いたことくらいか。落ち着けという意図が伝わってくればいいのだが。

廊下を進みながら、制服のポケットに手をつ突っ込んだ。取り出したのは薄い青紫色の布小袋。この中には、淡い藤色の陶器に入った練り香水が入っている。グラハムが自分にくれたものの1つであり、誕生日を祝ってくれたお礼という形で貰ったものだ。袋から陶器を取り出し、ふたを開ける。心が穏やかになるような白檀の香りが漂ってきた。

『俺個人としても、神様はどこにでもいる説を推す。ただし、神社仏閣

その他諸々より、『人の心』や『良心』と答えるがな』

『人の心』?』

『ああ。夢とか、希望とか、信条とか、正義とか、道徳とか、優しさとか、好奇心とか、わかり合おうとする気持ちとか、誰かを大切に思う気持ちとか、誰かを守ろうとする気持ちとか。人の心の底から湧き上がる、そういうものを信じたいよ』

不意に脳裏を翔けたのは、クーゴ・ハガネの話であった。彼の信じる『神』のこと。

誰もが信じたいと願いながら、誰もが裏切られ、あるいは救われたもの。その言葉が、刹那の背中を押したのだ。

『私はキミが好きだアアア! キミが、欲しいイイイイイ!!』

『今日のキミも可愛らしい。まるで天使のようだな!』

『キミと私は、運命の赤い糸で繋がっている。素敵なことではないか!』

『友人が、数百年に一度だけしか歌われない“愛の歌”があると聞いていた。しかし、結局歌詞を教えてもらうことはできなかつたよ。是非ともキミに贈りたかつたのだが……』

『先程の言葉の意味を詳しく教えてほしいのだが。というより、もう一度言ってくれないか!』

『少女よ! 私と一緒に、石破ラブラブ天驚拳を』

目を閉じれば、グラハムの言葉が脳裏を駆ける。グラハムの表情が鮮明に浮かぶ。これはもう重傷だ。

そんなグラハムだから、信じてみたいと思ったのかもしれない。彼が刹那を想うその心を。刹那が彼に惹かれてこの心を。たとえその末路が破滅しなかつたとしても、後悔なんかしない。そう思ったことは、間違いではないのだから。

刹那は練り香水を肌に軽く塗り、ポケットの中に戻した。ちやり、と、金属音が響く。胸元のシエルカメオが音の出どころである。先週

のオフ会は刹那の誕生日であり、このシエルカメオはグラハムからの誕生日プレゼントであった。

空へ飛翔しようとする大天使が描かれたそれは、繊細かつ美しい技巧が施されている。正直、刹那には勿体ない。しかしグラハムは、『これはキミにこそ相応しいものだ』と言って聞かなかった。刹那を見て天使を連想するあたり、あちらも重傷だ。

見目麗しい天使のシエルカメオを手にする刹那は、世界に刃を向ける者。世界に疎まれる存在だ。天使の降臨のように、人々から感謝されることはないだろう。

けれど、世界には、ソレスタルビーイングのような存在が必要だ。無益な争いを続ける世界を、自分たちが変えなければならぬ。

もしかしたら、日本神話で『不浄を司る者に名乗りを上げた女神』も同じ気持ちだったのかもしれない。『必要な役割でありながら、誰もやろうとしなかった役割』を自ら引き受けたのだから。

「お、フェルトの匂いだ」

「何とも言えない臭いがするわ。ロックオンから」

「え？ 俺、何もつけてないぞ？」

「そりやあもうポンポン。練り香水どころかどぎつい香水でも消せない程の、犯罪の臭いが」

「ちよっと待て！」

向かい側の廊下から話し声が聞こえてきた。途端に、どたどたと足音が響く。20代女性と25歳男性の追いかけてこた。何て珍妙な光景だろう。

その数泊後に、きよとんと首を傾げるフェルトとすれ違った。

「……なんだか、楽しそう」

フェルトは不満げにロックオンの背中を見つめた。刹那はぶんぶん首を横に振り、否定する。

「フェルトと話しているときの方が、ロックオンは活き活きしているぞ」

「本当に？」

「ああ」

「……………ふふっ」

フェルトは反対側の廊下へと消えていった。心なしか、彼女の足取りが軽やかだった気がする。

そのとき、端末の音が鳴り響いた。ソレスタルビーイングで使っているものではなく、ダミーのものだ。

案の定、メールの主はグラハム・エーカー。むしろこの端末は、彼との連絡用として使うためのものだと言っても過言ではない。最近では多忙で返信が遅れていたし、グラハムも忙しいようで、メールの頻度は以前より少なくなっていた。

メールの内容は、『友人が料理を作った。美味しかった(要約)』というものだった。2種類のチーズとバジルを挟んで揚げた鶏肉の写真が添付されている。クーゴ・ハガネが彼に贈った誕生日プレゼント——青黒檀の箸が映りこんでいた。

写真越しからでもわかる。これは本当に美味しそうだ。そういえば数日前、クーゴ・ハガネからメールを貰ったアイデアが突然、『トレミーのクルーで料理番付やろうよ』と言いだしてちよつとした参事になったか。ちなみに、優勝者はロックオンだった。

刹那は端末を操作し、グラハムのメールに返信する。『友人たちと料理番付をしたことを思い出した。自分も料理を作ったが、優勝者には遠く及ばない』と文面を打ち、自分が作った料理の写真を添付した。故郷、クルジスの料理である。

ひよこ豆のコロッケ・フアラフェル、中東のサンドイッチと呼ばれるシシタフ、中東の菓子・クナーファ。まだ刹那がソランだった頃、母と一緒に作った料理だ。

刹那はメールを送信した。端末にぶら下げられた銀のハートが揺

れる。端末をポケットに入れて廊下を歩き、自分の部屋への扉を開けた。

そのタイミングで端末が鳴る。開けば、やはりグラムからのメッセージ。

『これはキミの手料理なのか？ 美味しそうだな。是非ともご馳走になりたいよ』

刹那はふつと笑みを浮かべ、返信する。
その機会があればいい、と願いながら。

◇

恐れていた日が来た。

グラハムのメールを見た刹那は、強くそう感じた。
端末を握り締める手が震えたのは、きつと気のせいではない。

『あの機体を見たとき、無性にキミに会いたくなった。どうしてだろうな』

AEUの軍事演習場に、グラム・エーカーやクーゴ・ハガネは居合わせていた。そして、刹那とエクシアの初陣を間近に見ていたのだ。アイデアの奇行も、おそらくそれが原因だろう。テイエリアから「ヴェーダの予測から離れて勝手なことをした」とぶちぶち文句を言われていたのと同様がありそうだ。

刹那は大きいため息をついた。アイデアは相変わらず、ガンダムマイスター内で浮世離れした雰囲気を漂わしている。『夜鷹』からメール

が来た』と、現在進行形ではしゃいでいる真つ最中だ。ロックオンは額に手を当てて重々しく息を吐いている。そのとき、刹那の端末が着信を告げた。

開く。見る。凍り付く。そして、刹那は悲鳴を上げて端末を放り投げた。宙を舞ったそれは、ロックオンの足元へ落ちた。何事だと問いながら、ロックオンが端末を拾う。次の瞬間、彼も刹那と同じ行動を取っていた。また空を舞う刹那の端末。それは、王留美の足元に落ちた。

王留美と紅龍も悲鳴を上げ、端末を投げる。空を舞う端末は、しばらくロックオンや留美、および紅龍の頭上を何度も飛び交っていた。押し付け合いとも言えよう。

その端末は、最後にアイデアの手の中に落ちた。アイデアはじつと端末を見ていたが、周囲に花が舞っているかのような明るい笑みを浮かべて刹那を見た。

「ねえ、この写真もらつていい？ 待ち受けにする！」

「それはやめろ！」「やめなさい！」「おやめください！」

「というか、そんな恐怖画像、まじまじと見せるんじゃない！」

端末に表示された画像を一言で表すとするならば、ゾンビという表記が相応しい。虚ろな目をした黒髪黒目の東洋人が、じつとこちらを見返している。これはどこのホラーだ。

その恐怖画像を欲しがるのは、恋は盲目である。このゾンビの名前はクーゴ・ハガネ。徹夜明けとアルコール摂取後は危険だというヴェーダのデータが、こんな形で出てくるだなんて誰が予想できるか。アイデアはきやあきやあ言いながら端末の画像を眺めている。

グラハムのメッセージも『友人に無理をさせた代償として、恐怖体験をした。ユニオン夏の風物詩だが、正直怖い』とあった。話題の共有に躍起になっていた節があったけれど、流星にこれはないだろう。刹那はアイデアから端末を回収し、画像を彼女の端末に送った後、即座に恐怖画像を消去した。

「で、だ。アンタたちが来たってことは、次のミッションだな？」

なんとか落ち着いたロックオンは、留美に問いかける。彼女は頷いた。

詳しい話は、プトレマイオスからの通信で話すらしい。

「本格的な介入が始まるのね」

アイデアはのんびりとした表情で言った。本当に、彼女は戦場に立てるのだろうか。

そう考えて、刹那は首を振る。戦場で、イナクトたちを吹き飛ばしたアイデアは容赦しなかった。

朗らかに笑いながら、そのくせ、どこまでも冷たい眼差しで敵を屠っていく。

刹那もよくアンバランスだと言われるが、アイデアも刹那以上にアンバランスである。

「そうだな」

先陣を切るロックオンとアイデアに続き、刹那も歩き出す。

次の戦場は、どこになるだろうか。その詳細は、プトレマイオスの通信で明らかになるだろう。

世界を変える者としての戦いは、まだ始まったばかり。

12. ビギニング・エンカウント〜ブレイクトリガー編

茜色に染まった空は、青空と違って、どこか神秘的な雰囲気を感じている。

光に目を細めながら、クーゴは風景を眺めていた。

現在、クーゴたちは軍からの帰還命令に従い、移動している真っ最中だ。といつても、ジープで揺られて帰還するわけではない。ユニオンの輸送船に間借りする形となっているようだった。輸送船にはクーゴとグラハムの愛機が積まれていた。

クーゴが5徹近い状態から解放された——眠っていた間に話をつけていたようで、目が覚めたときには既に船内であった。グラハムとカタギリが額に手を当てながら明後日の方向を向いているあたり、相当酷いものを見た／体験したらしい。何があったかは不明である。

睡眠がとれるというのは素晴らしいことだ。クーゴはしみじみそれを噛みしめる。頭の中もはつきりしているし、体も軽やかに動かすことができた。もう、グラハムに振り回された挙句に連続で徹夜するという地獄はこりこりである。

そう考えつつ、クーゴはちらりとグラハムを伺い見た。彼は端末を見ては一喜一憂している。連絡先は件の少女だろう。グラハムの嬉しそうな横顔に、クーゴは毒気を抜かれてしまった。

(だから、結局、断れないんだよなあ)

己の甘さ加減にため息が出る。クーゴは苦笑した。

気を紛らわすために、視線を別方向へと移す。相変わらず空が綺麗だ。

丁度いいタイミングで、端末が鳴り響く。『エトワール』からの連絡ではなく、軍部からの情報だ。

ソレスタルビーイングのガンダムが行動を開始したらしい。A E

Uの軍事演習場でイナクトを派手に撃破したガンダムや、人革の機動エレベーター10周年記念式典で起こったテロを鎮静した別のガンダムらが、セイロン島へ向かって移動しているという。

旧スリランカのセイロン島は、20世紀初頭から多数派のシンハラ人と少数民族派のタミル人がいみ合いを繰り返していた。人革連の領地となって以後、人革連軍の介入もあって、その争いは泥沼化している。現在、あの島は事実上の無政府状態だ。

人革連は少数派のタミル人に肩入れしている。その理由は多数あるが、1番は『島の地下を通る太陽エネルギーの安全確保』という点だ。セイロン島の勢力図は、少数派のタミル人が有利である。少数派が多数派を圧倒するための戦術は、大半がゲリラ戦であった。

「人革連の介入によって、セイロン島は無政府状態にまで陥ってしまった」

状況整理は、グラハムの静かな言葉によって締めくくられた。そうして、彼は窓から視線を逸らしてフラッグを見つめる。クーゴは彼の背中を見つめていた。

ソレスタルビーイング。戦争根絶のために武力行使を行う、矛盾した私設部隊。巷は彼らの話題で持ち切りである。

創始者であるイオリア・シュヘンベルクの演説も聞いたが、何やら胡散臭い集団だ。彼らは世界の警察でも自称するつもりでいるのだろうか。

「ソレスタルビーイングについて思ったことがあるんだ。虚憶きよおくで見たけど、『異星人の来襲等が起きたとき、武力がなければ対応できない』みたいな話になってたよ。……そう考えると、奴らの掲げる『武力の根絶』は限りなく不可能に近いはずだ。むしろ、やったら人類が危ないことになる」

クーゴの言葉に、グラハムとビリーが目を瞬かせた。

「確かに。キミや私の見た虚憶きよわくでは、異種生命体が来襲きよわくしていたな。金属生命体とか、インベーターとか、虫とか、機械とか、フェストウムとか、イマーージュとか、宇宙怪獣とか……挙げるだけで気が遠くなるようだよ」

「巷のSF小説もびつくりな光景だったよね。そんな脅威が現れたとき、武力を失った、あるいは捨てた人類は、どうやって対応するんだろう……」

2人も、クーゴと同じように考え込む。あくまでも虚憶内きよわくの出来事なので何とも言えないのだが、未知との遭遇は考えられないわけではない。

各国の代表陣営は皆、宇宙開発および進出にも意欲的だ。その下準備の開発戦争も水面下で行われているという。もしかしたら、そういう生き物と遭遇する可能性だってある。

言葉が通じるのか、友好的かどうか、気になることは沢山あった。人類は宇宙生命体と、どんな関係を築いていくのだろう。浪漫溢れる話ではないか。

とりとめのない話を終えて、また静かな時間が帰ってきた。幾何かして、グラハムは何かを思いついたらしい。通信を開く。

「キミ。キャプテンに言って、進路を変更してもらえないか。あと、フラッグの整備も頼む」

グラハムの言葉に、クーゴとビリーは息をのんだ。彼が言わんとしている言葉の意味を理解したためである。

グラハムはあのガンダムに戦いを挑むつもりでいる。彼が戦いたいと願う相手は、AEUの軍事演習場に降臨したあの「天使」だ。イナクトを叩きのめし、その強さを派手に披露した青と白基調の機体。

つい先日さきに開発された新型ですら倒されたのだ。イナクトよりも早い段階で開発されたフラッグが、ガンダムと戦えるかと言われれば

「ノー」と答えが返ってくるだろう。ガラスに映り込むグラハムの瞳は本気であった。

「正気かい!? 無茶だよそれは!」

「熟知している」

慌てて止めに入ったビリーに、グラハムは諭すように笑いかけた。明鏡止水を連想するような静かな瞳に、クーゴは苦笑する。

クーゴは昔から、そういう瞳めにどうしても弱くても弱い。夢を追うその横顔を見ていると、しょうがないなという心持になってしまう。

グラハムの目がこちらを捉えた。「キミも来るだろう?」と言いたげな翠緑の瞳に、クーゴもゆるりと目を細めて頷いた。

狼狽しだすビリーに対し、自分たちの心境は凧いだ水面のように静かな面持ちであった。しかし、その水面の底では溶岩が燃えたぎっている。相棒と顔を見合わせれば、互いに闘志は充分だ。入れ替わりに、これみよがしなため息が響く。出どころはビリーであった。

「まったく、この2人は」——と、彼の双瞼は雄弁に語っている。わかっていて一緒にいるくせに、と、クーゴとグラハムもニヤリと笑ってみせた。ビリーは苦笑いしたが、期待するような眼差しを向けてくれた。頑張って来い、ということだろう。

そうと決まれば出撃準備だ。部屋へと戻り、パイロットスーツに身を包む。余計な装飾のない、シンプルな白いものだ。ヘルメットをかぶり、フラッグへと向かう。丁度整備も終わったようだ。調子は上々。クーゴとグラハムはコックピットに乗り込む。

『いきました! ガンダムです!』

船長の言葉に外を見る。AEUの軍事演習場で見た、白と青の機体と純白の機体だ。

「クーゴ、準備は?」

「大丈夫だ、問題ない！」

発進準備は万全だ。カタパルトが開く。

「グラハム・エーカー、出るぞー！」

「クーゴ・ハガネ、出る！」

2機のフラッグが空へと飛び立つ。大気を切り裂く勢いで、自分たちはガンダムへ向かった。

特にグラハムはぶれない。まっすぐに、白と青基調の機体へと突っ込んでいく。必然的に、クーゴはフォローに回る。

『あの機体……ユニオンのフラッグか!？』

通信越しから声がした。少しだけ低い、やや中性的な声だった。

緑の粒子が飛び交っていたというのに、今回は通信不良が起きていないらしい。それはそれでラッキーだ、とクーゴは笑った。しかし、恐ろしい勢いで突っ込んでいくグラハムに気づいて、慌てて操縦桿を動かした。状況によってテンション著しく高くなるところが、一定の相手からめんどくさがられる理由でもある。

次の瞬間、グラハムのフラッグは空中で変形した。通常、フラッグを空中で変形させると相当のGがかかる。並大抵のパイロットがやれば耐えきれない。しかし、グラハムはそれを初めてやった男である。その技は人呼んで、グラハムスペシャル。命名はビリー・カタギリである。技誕生の瞬間、ビリーの言葉を聞いて吹き出したクーゴは悪くないはずだ。

敵はそれに驚いたらしい。反応が鈍った青と白基調のガンダムに対し、グラハムは一気に距離を詰め、プラズマソードで切りかかる！ 敵パイロットの判断は早い。ガンダムも即座に応戦した。装備されていたブレードが展開し、刃と刃がぶつかりあう。派手な火花が散った。

「はじめましてだなあ、ガンダム！」

通信機越しから聞こえたグラハムの声は、いつぞやの声とよく似ていた。

脳裏をかけたのは、クーゴが『エトワール』と／＼グラハムが少女と出会ったときのことだ。

いや、グラハムは少女に話しかけるときは、いつもこんな感じだったとクーゴは思い出す。

なんだろう。

なにか、ものすごく嫌な予感がする。

クーゴの予感は、次の瞬間に的中した。

『何者だ!?!』

「私はグラハム・エーカー。キミの存在に、心奪われた男だ！」

通信から聞こえたのは、いつぞやの再現である。

クーゴの気が遠くなった。もちろん気苦労再現的な意味でだ。

「まさか、よもやこんな所でキミに出会えるとは。乙女座の私には、センチメンタリズムを感じずにはいられない。……それとも、光の粒子を出していなかったから見つけられたのか？ おそらくは、後者だ！」

一人でぶつぶつ話し込むグラハムであるが、現在進行形でガンダムと鏝迫り合いを行っている最中だ。実力はほぼ互角、いや、グラハムの方が有利だとクーゴは思う。言動は色々とあれだが、伊達にMS WADのエースをやっているわけではない。

しかし、次の瞬間、クーゴの予想は覆された。鏝迫り合いに勝利したのはガンダムだ。プラズマソードが宙を舞う。体勢が崩れたグラハムのフラッグに、ガンダムは追い打ちしようと刃を振りかざす。

クーゴは即座に射撃でグラハムのサポートへ入った。

ガンダムに当たれば儲けものだが、別に当てる必要はない。時間にしてコンマ数秒、相手の進路を妨害すればいいだけだ。そのコンマ数秒さえあれば、グラハムはすぐに体制を整えることができる。果たして、クーゴの意図通り、グラハムは態勢を整えた。

敵がブレードを振りかざす。クーゴとグラハムが不敵に笑う。即座に操縦桿を動かした。2機のフラッグはガンダムの攻撃を易々と躲した。

その隙を突く形で、グラハムのフラッグが肉薄する。伸ばした手は、ガンダムの装甲を掴んだ。

(あれ、この構図はどっかで見たぞ)

脳裏に浮かんだのは、『エトワール』とのオフ会。少女を口説こうとするグラハムと、その手を払いのけた少女の姿だった。

何故、そんな光景が浮かんだのかはわからない。
気を抜いてはいけないというのに。

「!?」

次の瞬間、レーダーがけたたましく反応音を出した。空の彼方から純白の機体が飛来する。AEUの軍事演習場で見かけた純白のガンダムだ。背中に大きな輪を背負った機体。それは寸分の狂いもなく、クーゴのフラッグに突っ込んできた。

慌てて操縦桿を動かし、寸でのところで突撃を躲す。あと少し遅かったら、クーゴのフラッグは弾き飛ばされ、海面に叩き付けられていただろう。クーゴは突っ込んできた天女を見返す。天女は即座にガンダムの援護へ向かおうとした。

いくらグラハムでも2対1は分が悪い。クーゴはリニアライフルの照準を天女に合わせた。先程グラハムを援護したのと同じように、この攻撃は別に当たらなくても問題ない。あの天女を足止めするこ

とさえできればいいのだから。

案の定、天女は軽やかに弾丸を躲していく。その動きが、何故か『エトワール』とよく似ているように思った。

機嫌がいい彼女は、ステップを踏むような足取りでいたからだ。

クーゴが天女を足止めしている間に、グラハムのフラッグは、ガンダム of 装甲をもぎ取ろうとしていた。

「手土産に、破片の1つをいただいでいく！」

『——俺に、触るな！』

次の瞬間、フラッグはガンダムに、思いっきり振り払われた。

やはり、この光景はいつぞやのオフ会、もといグラハムと少女のやり取りとよく似ている。——いや、そうではなくて。

「グラハム！」

「ちい！」

クーゴの呼びかけに答えるかのように、グラハムのフラッグがリニアライフルを撃つ。

クーゴもそれに続いてリニアライフルを撃った。ガンダム2機は易々それを躲した。

青い方のガンダムが盾を捨て、懐から何かを取り出す。グラハムもそれに気づいたが、もう遅い。紫の光が爆ぜる。ガンダムは肉薄し、ビームサーベルを振るった。リニアライフルとビームサーベルがぶつかり合う。

本来の用途とはかけ離れた使われ方をしたりニアライフルが、近接武装に耐えられるはずがない。あつという間に弾き飛ばされてしまった。これで、グラハムのフラッグに搭載された武装は、牽制用の実弾しかなくなった。

丸腰／無防備と言っても過言ではないグラハムを庇うようにして、クーゴのフラッグが躍り出る。もしもあの2機が追撃なんてしてき

たら、間違いなくグラハムは墜おとされてしまうだろう。

撤退戦。殿。戦いにおいて一番難しい戦術、および役割である。気が重くなるような言葉であるが、今は仕方がない。

腰の鞘からガーベラストレートとタイガー・ピアスを引き抜き、二刀流の構えを取る。

「クーゴ!？」

グラハムに名前を呼ばれたが、答える余裕なんてない。相手の出方を伺う。天使が追撃しようとしていたものの、天女に引き留められていた。

しばし待つ。天使と天女は動かない。

両者に、追撃の意思はなさそうである。

(それは余裕か、それとも気まぐれか。……どちらにしても、俺たちの完全敗北だ)

クーゴは深々とため息をつく。それと呼応するかのように、2機のガンダムは高度を上げた。そのまま、空の彼方へと飛んでいく。

天女がちらりとクーゴを見たような気がする。対して、天使はグラハムの方を見ていた気がする。2機の姿は遠く、遠く、地平線の向うへと消えてしまった。

その後ろ姿は、やはりどこかで見覚えがあった。似ている。『エトワール』と少女が並んで歩く様子とそっくりだ。でも、どうしてそんなことを連想したのだろう？

「2人とも、大丈夫かい!？」

ガンダムたちの姿が見えなくなって、どれくらい時間が経過したのだろう。ビリーから入った通信に、自分たちはようやく我を取り戻した。空は既に薄闇に包まれ、星が瞬き始めていた。

クーゴとグラハムは返事を返し、輸送船へと進路を変えた。戦果は最悪、けれども命は持ったままだ。生きてさえいれば、リベンジチャンスはいくらでもある。そう言い聞かせないと、なんだかやっていられなかった。



「いやはや、本当に予測不能なコンビだよ。キミたちは」

ビリーがパソコンをいじりながら、クーゴとグラハムに生暖かい眼差しを向けてきた。まるで、近隣に住む悪ガキを見守る人みたいな口調だ。少々不服だが致し方ない。

「ライフとプラズマソードを失った。始末書ものだな」

グラハムは深々とため息をつく。誰も、好き好んで始末書を書きたがる人間はいない。

クーゴだって始末書は御免である。始末書関係の大半は、グラハムの余波を喰らうことが多かった。

「その心配はないよ。今回の戦闘で得られたガンダムのデータは、フラッグ1機を失ったとしてもおつりがくる」

「待てビリー。その言い草だと『データさえ得られれば、パイロットは死んでもOK』ってことになるぞ。ユニオン軍はいつからブラック企業になったんだ？」

「手厳しいなあ。そんなつもりで言ったんじゃないけど」

クーゴのツツコミに、ビリーは苦笑いした。笑いごとではないとクーゴは思う。人員に関して、軍はブラック企業とよく似た側面があるからだ。志願者さえいれば、事実上、供給は無限にできる。多少パイロットが使い物にならなくなったとて、代用品はいくらでもいるのだ。

世の中は世知辛い。いくらグラハムがエースパイロットであろうとも、彼と同等の人間は存在している。グラハムと同程度の実力者で、且つ、MSWADの座を狙う者もまた、(自薦他薦、および本人や周囲の主張の有無に関わらず) 掃いて捨てる程いた。

グラハム1人が抜けても、その痛手は軍にとつては「多少」のことではない。補充要員は「掃いて捨てる」程の中から選り出せばいいだけだ。もちろん、それはクーゴやビリーにだって当てはまる。一時期日本で『社畜』という言葉が流行^{はや}ったが、さしずめこちらは軍畜と言えそう。

しばし雑談に興じた後、グラハムは物思いにふけるようにフラッグを見た。

「それにしても若かったな。ソレスタルビーイングのパイロットは」
「話したのかい？」

「まさか。MSの動きに、感情が乗っていたのさ」

グラハムはそう言ったが、ふと、何か思い至ったらしい。
顎に手を当てて、付け加えた。

「……ただ、名前を訊かれたような気がしたんだ。パイロットに」
「ああ、それで名乗ったのか。だから会話が成立してたように見えたんだな。通信が聞こえてたから、てつきり会話してたんだと思ってた」

クーゴの言葉に、グラハムとビリーは驚いたように目を見開いた。
グラハムは考え込むように俯き、ビリーが慌てたようにして「待つ

てくれ」とクローゴに詰め寄る。

「あそこ周辺は、粒子の影響で通信機器は使えなかったはずだ。実際、データを分析しても、キミとグラハムの通信回路は異常が発生して、まともに機能していないんだよ?。」

「え」

なんだ、そのホラー。

凍り付いたクローゴに、ビリーはデータを示して見せる。それを見る限り、確かに、通信はまともに機能していなかった。しかし、機体の中にある記録から自分たちの発言を拾って、自分が聞いた通信内容と組み合わせる限り、間違いなく会話が成立しているではないか。

何がどうなっているのだろうか。通じていないはずの通信、それでも聞き取れた会話の内容、かみ合っているようで実はかみ合っていないかったグラハムとガンダムパイロットのやり取り、会話内容すべてを聞いてしまったクローゴの耳。恐怖体験にも程がある。

「冗談じゃない。俺は霊媒体質になった覚えはないぞ!」

「僕だって怖いさ! オカルトは専門外だし! 連日徹夜明けのクローゴと同じくらい怖い!」

「俺の徹夜明けがなんだって?」

「なんでもないよ!」

「……もしかして、ニュータイプと似たようなものか?」

慌てる男2人に対して、グラハムは何かを思い至ったように顔を上げてこちらを見る。その単語に、ビリーはハツとしたように手を叩いた。確かに、それなら充分、化学および科学でも説明できることだ。

ニュータイプはこの世界で言う「超能力者」に近い。主な能力は未来予知である。しかし、中には、『通信を通さず、他者の会話や心情を聞き取ったり感じ取ったり、話しかける』ことができる者もいるらしい。

もしかしたら、クーゴにもその「ケ」があるのだろうか。信じられないことではあるが、言われてみれば「そう」と言えるような体験をしていないわけではない。例えば、イナクトお披露目時におけるコーラサワーとのコンタクトとかだ。

ケースが少ないため何とも言えないけれど、そこも視野に入れておくべきだろうか。

きよおく 虚憶保持者にして共有者でありながら、更にニュータイプの「ケ」があるなんて。

軍部はますます、クーゴの持つ能力を解析しよう／クーゴの持つ能力を使おうと躍起になるだろう。これは身動きが取れなくなりそうだ。そもそも、クーゴという存在は、最後にどこへ行きつこうとしているのか。

グラハムや仲間たちと一緒に空を飛べるなら、多少の窮屈は我慢できる。この日常が続くなら、きつと、自分はどんな状況にも耐えてみせよう。

今の所は、(何故か)上司に気にいられているのと、仲間たち——主にグラハムとビリーが頑張ってくれたため、クーゴの『人並みの権利』は守られている。

しかし、いつ状況が逆転するかわからないのだ。そうなった場合、クーゴは一体どうなってしまうのだろう。考えるだけで気が遠くなりそうだ。

(俺、近々人間を卒業する可能性が出てきそうだ)

クーゴが深々とため息をついて頭を抱えたとき、不意に両肩を叩かれた。見上げれば、力強く笑う親友2人。

「何を考えているのかは知らないが、そんなに悲観することはないぞ。私はいつだってキミの親友だからな」

「そうだよ。キミが何になっても、僕たちは最後まで親友だよ」

「お前ら……」

不覚だ。および不意打ちだ。クーゴは思わず、泣きそうになるのを堪える。

代わりに、クーゴは笑い返す。それを見た2人もまた、嬉しそうに笑った。

そこへ、丁度いいタイミングで通信が響く。

『ガンダム、ロストしました』
「フラれたな」

グラハムが肩をすくめて苦笑いした。自分たちも一緒になって、でも、別の意味で苦笑した。恋愛面で振り切れているときの彼のリアクションと同じだったためである。人の次はメカに恋するのか。

次の瞬間、グラハムは端末を操作し始めていた。彼は件の少女と話題を共有するため、話題探しに必死になっている節がある。ちよつとした出来事から愛の言葉まで、メール内容の種類は様々だ。

クーゴ自身の行方も心配であるが、グラハムの恋路も心配である。彼は一体どこへ行きつくつもりなのだろうか。大体の『たどり着きたい場所』はわかるが、方向性があれであった。つき合わされる少女のことも心配である。

というか、少女の次はガンダムを狙うのか。

こいつの恋愛観は一体どうなっているのだろうか。

「グラハム。日本の諺には、『二兎追う者は一兎も得ず』って言葉があっただな」

「そんな道理、私の無理で押し通す！ どちらもこの手にしてみせるさ」

メールの送信ボタンを押しながら、グラハムは不敵に笑い返した。これはもう重傷である。

ビリーは羨ましそうにグラハムを見上げていた。クーゴは息を吐いて窓へ視線を移す。

空は闇に包まれていた。眼下には、街の明かりがぼつぼつと瞬いている。まるで地上の星のようだ。

いつもと変わらない景色。だけれど、世界は動き始めている。どんな方向にまとまるかは知らないが、ソレスタルビーイング、およびガンダムの出現により、確実に何かが変わろうとしていた。

明日はどんな景色が広がっているのだろう。一步方向が変われば、この景色が荒野になっているかもしれない。もしくは砂漠か、あるいは世紀末よろしくな無法地帯か。クーゴは空へと視線を動かす。

街の明かりにかき消されたせい、星の姿はない。月も叢雲に隠されてしまい、姿を伺うことはできなかつた。闇だけがぼつかりと口を開けている。果てもなければ道しるべもない空を、クーゴは厳しい眼差しで見つめていた。



この世界に生きる誰もが、ソレスタルビーイングについてのことを調べ始めている。しかし、ガンダムの情報はヴェーダによってブロックされているため、並大抵の人間やハッカーでは得られないだろう。

特に、創設者であるイオリア・シュヘンベルクについては皆無に等しい。21世紀のセキュリティおよびデータベースは、24世紀の技術から見れば「在って無い」ようなものだ。というか、正直、24世紀のシステムも「在って無い」ようなものである。

抜け穴なんてすぐに見つけられるし、いくらでも誤魔化すことは可能だ。自分たちが所有するコンピュータ、およびプログラムだつてヴェーダと同クラスである。情報をいじるのはお茶の子さいさいだ。

何せ、自分たちはソレスタルビーイングと対をなす存在。

彼らと対抗できる力を有しているのは当然である。

彼らの情報秘匿に協力するだけでなく、自分たちの秘匿にも精を出さねば。今日も状況をチェックする。サポートAIである女性はしばし情報を検索していたが、ややあつて、穏やかに微笑んだ。

『今のところは問題ないでしょう。イオリアの関係者は皆死亡していることになっています。一応、貴女に関する情報も薄ら残っています。が、たどり着ける可能性は皆無だと思われます』

「うん。ありがとう、アプロディア。……最近休んでないでしょう？今日はもう休みなよ」

自分の言葉に、画面に映っていたサポートAIの女性——アプロディアはルビーレッドの瞳をぱちぱち瞬かせた。

透き通った白い肌。カナリアイエローからスカイブルーまでのグラデーションを持つ髪がさらりと揺れる。

彼女はふわりと微笑み返した。自分は大丈夫だ、と返すかのよう

に。『ふふ。お気づかい感謝します、マザー。そのお言葉に従い、この作業が終わり次第、今日はスリープモードへ移行します』
「そうしてくれると、私も嬉しいな」

女性がにっと笑ったとき、アプロディアも情報をまとめ終わったらしい。

『イオリア・シユヘンベルク、およびソレスタルビーイングについて調査をしている団体および個人の特定が完了しました』

「ありがとう」

アプロディアから転送されてきたデータリストを見て、女性はふと

目を留めた。その名前と存在に、酷く惹かれるものがあつたからである。

職業はジャーナリスト。国籍は日本。性別は女性。家族は弟が1人。経歴を見る限り、職業が天職と言えるような生き方をしている。無銘ではあるけれど、見所があつた。

住所を見る。日本の東京にある、中流階級レベルのマンションであつた。そこは『ソレスタルビーイングのガンダムマイスター2人が拠点として使うために間借りする予定』の部屋がある場所であり、『自分たちの仲間が拠点として使っている』部屋があるマンションでもある。

間違いなく両陣営のダブルブッキングが起こる。片方は自分たちの存在など知らないから別に問題はなさそうだが、片方にとっては顔なじみとの再会になるのだ。彼女ならたぶん大丈夫だとは思うが、果たしてどうなることやら。一応、連絡を入れておくべきか。

女性は端末を操作した。連絡先は、件のマンションを拠点としている『同胞』たちへ。キーボードを叩く音が軽やかに響いた。文章を打ち終わった女性は、アプロディアにメッセージの転送とセキュリティブロックを頼む。アプロディアは2つ返事で頷き、直ちに実行してくれた。

あとは、女性の動向を見守らなくては。ジャーナリストということでは、世界の行く末を左右するような大物に突っ込んでいくこともある。

自分の『同胞』の中から、職業柄ジャーナリストと関わりそうな面々を挙げていく。彼らにもメッセージを転送した。即座に既読のマークが点灯し、了承の返事が転送されてきた。

アプロディアは何か懸念要素を発見したようで、『誠に勝手ですが』と付け加えてデータを指示した。そこに出てきた人間の名前を見て、思わず女性は顔を顰めた。

「アレハンドロ・コーナーと、その派閥に属する連中ね」

『ええ。彼らなら、何をやってもおかしくないと思われれます』

「そっちはノブレスとリボンズたちを引っ付かせてるから、多少は止められると思うけど……最後は、手を下す必要が出てきそうね」

派手なことは好きであるが、状況的にそんなことはできないだろう。そこが難しいところなのだ。

女性はアプロディアに挨拶した。アプロディアも微笑み、挨拶を返す。画面の光がふっと消えて、あとは静寂だけが残った。

さて、そろそろ自分も休むべきだろう。外を見れば、綺麗な星々が瞬いている。時計の針は深夜を指示していた。

「でも、誰も、気づかないだろうなあ。そもそも、考え付くはずないよね……。あの頃の関係者が――」

星を見ながら、女性は呟く。

遠い空の向う側にある何かをなぞりながら。

いつかの想いを胸に抱えて、女性は星屑の夢を追い続ける。



「ふんふんふん♪ ふふん、ふんふん♪」

アイデアの気分は最高潮だった。まるでダンスのステップを踏むかのように、軽やかな足取りで機動エレベーターへと向かっていった。

対して、刹那は俯いたまま、黙々と歩いている。どことなく思いつめたような横顔に、アイデアは足を止めて振り返る。

彼女の気持ちはわからなくない。ミッション終了後に対峙したあのフラッグは、グラハム・エーカーとクローゴ・ハガネが搭乗していた

機体であった。立場上、覚悟していたとはいえ、やはり現実は厳しく重たい。

刹那是不愛想であるが、その心根はとても責任感が強い子だ。自分の犯した過ちを、自分で延々と責め続けている。そのためか、自己評価はやや低い傾向があった。自分は幸せになつてはいけないと思つている。

もし、自分たち——ソレスタルビーイングが世界に裁かれるときが来たら、彼女は抵抗せずにその断罪を受け入れるだろう。どのような責め苦に合おうとも、仕方がないと片付けてしまえばいい。

でも、『仕方がない』なんて言葉で片付けていいのだろうか。アイデアは古の『記憶』をなぞりながら考える。人とは違うからという理由で、生きる権利を奪われていい／諦めるしかないとは思えない。

「刹那」「お前は」

アイデアが言葉を紡いだのと、刹那が言葉を紡いだタイミングは同じだった。アイデアは言葉を押しとどめ、刹那の発言を待つ。

「……どうして、〴〵そうやって〴〵いられるんだ」

砂漠の大地を思わせるような眼差しに、アイデアは緩やかに笑った。

「好きだからよ」

「好き？」

「ええ。クーゴ・ハガネも、彼を好きになった自分も、そんな人に出会わせてくれたこの世界も、この運命すらも、この運命を選び取った自分自身も。それらすべてが愛おしい。むしろ誇らしいくらいだわ」

アイデアは空へと目をやった。そう、そんな世界に、自分は生きていく。古の『同胞』たちが望んでも手に入れられなかった、この世界で。『同胞』たちが夢見た場所とは違うかもしれない。ここは戦いと陰

謀に包まれた場所だ。人々は憎み合い、殺し合い、争いを続けている。けれど、この惑星^{ほし}じゃなければ、イデアはクーゴに出会わなかった。なんて素敵なことだろう。誰かと出会い、誰かを好きになれるだなんて。

誰かを好きになることの素晴らしさや美しさを、イデアは知っている。それに触れられる幸せを、イデアは知っている。だから、それを自らの意志で手にすることができた自分が、何よりも誇らしい。

イデアは自分の髪についた簪に触れた。これに触れるだけで、『クーゴがどんな気持ちで桜の簪を選んだのか』が伝わってくる。相手に喜んでほしい、相手によく似あうものをあげたい、と、どこまでもひたむきで真摯な想いだ。実物を見て、手にとって、妥協することなく選んでくれた。

それは、グラハムが刹那に贈ったシエルカメオにだって言えることだ。オンラインショッピングで購入したとはいえ、『刹那に似合うだろう』、『刹那に喜んでほしい』という気持ちが強く強く伝わってきた。その想いに触れた人間が照れてしまうくらい、愛に満ち溢れている。触れてないのに伝わってくるあたり、相当惚れ込んでいることは明らかだ。

「嬉しいね。誰かが自分を想ってくれるのって。そんな人と出会わせてくれた世界が、より良い方向に変わっていくのって。そして、そんな——世界を変えられる力を、私たちが持っているって」

歌うように言っつて、イデアは刹那の手を取った。刹那の困惑した感情が、掌から伝わってくる。

どうか、選び取ってほしい。自分が幸せになる／『彼』を幸せにすることを、決して諦めないでほしい。

刹那の首元へ手を伸ばす。金の鎖に触れた。それをゆっくりと前に出せば、件のシエルカメオが服の中から顔を見せた。天使は穏やかな微笑を浮かべている。まるで、すべてを赦すかのように。

「わからない」

「『これ』でよかったのか、わからない——刹那は、弱々しく呟く。悲痛な横顔から浮かぶのは、『手にしたものを失いたくない』という想いだった。

大丈夫だとイデアは笑った。ただ静かに、刹那を見つめる。大丈夫。『彼』とこの子は、絶対に大丈夫だ。どんな痛みや悲しみが阻もうとも、乗り越えられる。

2人が笑いあう光景を知っている。そこに至る道筋はわからないけれど、この2人なら。イデアは静かに頷く。刹那は目を伏せていたが、ややあつて、小さく頷いた。

彼女が頷くまで、長い葛藤があつた。本当は逃げ出したいに違いない。でも、刹那は前を向く。絶対に、眼差しを逸らすことはない。

そう、それでいい。イデアはふわりと微笑み、頷いた。刹那の決意は間違っていないのだと肯定するように、しっかりと。

今日は本当に嬉しいことが続く。イデアは再び、鼻歌を歌いながら歩き出した。合流ポイントである人革連の機動エレベーターは目前だ。

自動ドアが開く。ロックオン、テイエリア、アレルヤはすぐに見つかった。そのまま合流する。

テーブルの上にはコーヒーが2つとノンアルコールビールが1本。どうやら、この3人が待ち時間を潰すために注文したもののようだ。

「おう、遅かったなお2人さん」

ロックオンが笑いながら手を挙げる。

「死んだかと思っただぞ」

テイエリアは冷やややかな眼差しでそう言い放った。仲間に対し、あまりにもひどい言葉ではないか。

アイデアはぶうと頬を膨らませた。が、すぐに今日の出来事を思い出し、破顔する。

「テイエリア、ひどーい。でも、今日はいいことがあって機嫌がいいから、全部許しちゃうー！」

「……僕には理解不能だ」

「はは。今日は一段と増して楽しそうだね、アイデア」

テイエリアとアイデアのやり取りを聞いたアレルヤが苦笑する。アイデアも悪戯っぽく笑い返した。

「そうよ。女の子は、恋や愛を知って、綺麗になるんだから。楽しかったなあ、一時の逢瀬は」

「え」

「あ。アレルヤ、もしかして、誰か好きな子がいるの？」

『おい、どうする。完全に狙われてるぞ!? ……俺は退散するぜ。じゃあな!』

「ちよ、ハレルヤ!? 待って! ラスボスの真ん前に置いていかないで!!」

ハレルヤに見捨てられてしまったアレルヤの脳内は、絶賛大パニック中だ。彼の頭の中に浮かぶのは、美しく長い銀髪の少女。

成程、これがアレルヤの初恋の子か。アイデアがニマニマ笑っていることに気づいたアレルヤは、更に慌ててしまったらしい。

「ま、マリーはとても優しい女の子で……」

「落ち着け! 誰が意中の子を話せと言った!? アイデアに恋バナは危険だろうが!」

「あ」

自らも被害者であるロックオンがストップをかけて、ようやくアレ

ルヤは止まった。顔は真っ赤である。お願い追及しないで、と、灰色の瞳は悲鳴を上げていた。さて、どうしようか。後で根掘り葉掘りしてやろう。アイデアはそう決めた。

テイエリアは相変わらず冷たい眼差しをこちらに向けてくる。理解不能だ、と、彼はまた同じことを言った。テイエリアに春はまだ来そうにない。あと数年待たなければならぬか。早く来ればいいのに。

そんなことを考えていたら、テイエリアは刹那と話していた。と言つても、事務的な内容であるが。テイエリアは刹那が合流時刻に遅れた理由を問い、刹那はヴェーダにレポートを提出したことを報告する。

そこへ、ボーイがやって来た。配膳の上には、牛乳とオレンジジュース。どうやらロックオンの奢りらしい。

飲み物を受け取り、アイデアはストローを啜えた。新鮮なオレンジの、素朴だけれど爽やかな味が口の中に広がる。

雑談もそこそこに、自分たちはそれぞれ動き出す。次のミッションが始まるまでの、短いインターバル期間だ。テイエリアは宇宙へ戻り、アイデアや刹那たちは地上で待機である。

リニアに乗ったテイエリアを見送り、待機場所へ向かう。

世界を変える戦いは、まだ始まったばかり。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

13. ジェネレーション・ブレイク

ユニオンのMSWAD本部についたとき、空は曇天に覆われていた。地上の光が眩く見える。

クーゴ、グラハム、ビリーの3人は廊下を突き進み、上司の部屋で立ち止まった。ノックをして部屋に入り、上司に何があったかを報告する。

上司は自分たちの話を聞いていた。その傍ら、さらさらと書類に何かを書きこんでいく。

「AEU新兵器の視察のはずが、とんでもないことになってしまったな」

そう言つて、上司はふとクーゴに視線を向けた。

何か、クーゴの調子を伺うかのような眼差しである。

クーゴには何も覚えがない。思わず首を傾げた。

「どうかしましたか？」

「いいや。……あのとき、キミは徹夜明けだったから、心配だな」

「大丈夫です。あの後、休む時間は確保できました」

「そうか。……それは、本当に良かった」

クーゴの返答を聞いた上司は、あからさまにホツとした。心の底から安堵した顔をしている。何か恐怖体験をしたかのように、彼は天井へと視線を向けた。

出発前に自分たちは上司と話したが、徹夜明けの影響か、内容をよく覚えていない。ただ、遠くから悲鳴みたいな声が響いていたような気がしたが、何だったのだろうか。

やたらとゾンビゾンビ言っていた気がする。すれ違う人間が怯えていたような気もする。中には逃げ惑った挙句、階段から転がり落ちていった奴がいたような、いなかっただような。ふと見れば、上司のこめ

かみにテーピングがされていた。

思い返すと、A E Uの軍事演習場でガンダムが来襲した直後のことは鮮明に覚えているが、来襲以前のことはよく覚えていない。空が青かったことや、グラハムとビリーが何かを話し込んでいたことや、技術者が浪漫あふれる存在であることや、炭酸飲料が飲みたかったことくらいだ。

帰りは狭い空間でがたがた揺られていた気がする。遠くから、悲鳴を上げる男2人の声がひっきりなしに響いていた。聞き覚えのある声だったが、誰の声だろう。思い出せそうな気がしたのだが、霞がかかってしまったように記憶はぼやけていた。

上司の言葉に何かを連想したビリーとグラハムが視線を逸らす。前者は天を仰ぎ、後者は俯いて額に手を当てていた。こめかみに青筋と冷や汗が浮かんだように見えたのは気のせいだろうか？

「あのような機体が存在するとは、想像もしていませんでした」

閑話休題と言わんばかりに、グラハムが上司の言葉を引き継いだ。ガンダムという機体のスペックの高さを考えると、奴と対峙して自分たちが帰還できたことは奇跡だと言えよう。

現在、ユニオン——および世界各国の軍の技術では、あのスペックを再現する方法は皆無に等しい。

「研究する価値があると思いますが」

「上もそう思っているようだ」

ビリーの言葉に、上司はファイルを取り出した。クーゴたちは手を伸ばしてファイルを開く。

「ガンダムを目撃したキミたち3人に、転属命令が出た」

「対、ガンダム、調査隊……ですか？」

ファイルにかかれた言葉を、グラハムがたどたどしく読み上げる。やっぱり、と、クーゴは思った。

どこの国も、あの機体のことを調べようと躍起になっている。敵として恐ろしいということとは、こちらにその技術が手に入れば優位に立つことは明らかだ。3国のどこかがあの技術を手にしたら、世界のパワーバランスはひっくり返るだろう。

この『ガンダム調査隊』、ガンダムの出現によって新設された部隊のようだ。正式名称はまだ決まっていないが、決まり次第、司令部が報告してくれるだろう。その人事で異動になった人間たちの名前を確認する。クーゴ、グラハム、ビリーの名前があった。

しかし、それだけではない。自分たち以外に拳がった名前には、見覚えがあった。

「レイフ・エイフマン教授……技術主任を担当するんですか？」

「技術界の重鎮を持ちだしてくるとは……」

クーゴとビリーが息をのむ。

「上はそれだけ、事態を重く見ているということだ。早急に対応しろ」「はっ」

上司の言葉を受けて、3人はファイルを閉じて敬礼した。

ぴりぴりとした空気に、自然と背筋が伸びる。

「クーゴ・ハガネ中尉、グラハム・エーカー中尉、ビリー・カタギリ技術顧問」

「対ガンダム調査隊への転属、受領いたしました」

クーゴの言葉を引き継ぐような形で、グラハムが宣言した。自分たちの宣言を聞いた上司は厳かに頷く。

それから少し軽い話し合いを終えたのち、自分たちは部屋を後にし

た。全員、足取りが意気揚々としているように思う。

廊下を歩きながら、クーゴたちは雑談を始める。火蓋を切ったのはビリーだった。

「驚いたな。キミはこうなると予見していたのかい？」

「私もそこまで万能ではないよ」

ビリーの言葉に、グラハムは首を振った。

そこで何を思ったのか、グラハムはクーゴに視線を向ける。

「クーゴ、キミの場合はどうだ？」

「まさか。俺だって、こんなことになるだなんて予想できるか」

「でも、因縁めいたものを感じてはいるんだろう？」

「……あー」

グラハムがゆるりと目を細めた。否定する要素はないが、肯定するには些か自信がない。クーゴは困ったように苦い笑みを浮かべて、答えを濁した。日本人独特のアルカイックスマイルをどう受け取ったかは知らないが、グラハムはプラス的な意味だと取ったようだ。満足げに頷く。

運命かと問われれば、正直疑問だ。クーゴは意図してガンダムと出会ったつもりはないし、関わることを選んだのは自分自身の判断だと思っている。誰かに言われたのではなく、クーゴ自らが選択したことなのだ。その結末はまだわからない。ただ、選んだことを誰かの責任にするつもりはなかった。

クーゴはちらりとグラハムの横顔を伺い見る。自信と強さに満ち溢れた不敵な笑み。いつもと変わらない表情の1つだ。そして、クーゴが見慣れた日常光景の1つでもある。これからも続いていく、いつもの光景。しかし、どうしてだろう。何故か、険しい顔をして歩く金髪の男がダブって見えるのだ。

どこかで見たような仮面では隠しきれないほど、大きな傷。火傷の

跡だろうか。孤高で誇り高い佇まいは、まるで武士のようだ。

いや、違う。彼は武士ではない。彼の剣は、彼の望む場所へ到達することは不可能である。私怨で振るわれているためだ。

言い表せない苛立ちを、悲しみを、怒りを、そして——歪みを。ただひとつ／＼ひとりに対して、強く激しく向けている。

『そうしたのはキミだ！ ガンダムという存在だ！』

私怨に満ちた空の戦士が叫ぶ。

『一方的と笑うか？ だが、最初に武力介入を行ったのはガンダムだということをお忘れな!!』

激情を宿した似非侍が吼える。

そうじゃないだろう。確かに最初に介入したのはガンダムだったかもしれない。でも、選んだのは他ならぬ『彼』じゃないか。『彼女』らの元へと飛び込んだのは、『彼』じゃないか。『彼』はそれを忘れてしまったのだ。

失ったものは沢山あった。しかし、手にしたものがあっただろう。それを、『彼』は大切にしていたではないか。愛していたではないか。見ているこちらが辟易してしまうくらい愛して、見ているこちらが微笑ましいと思うくらい愛されていたではないか。

どうしてだ、と問う。それに気づいた『彼』がこちらを向いた。どこか困ったように苦笑しながら、ぽつりと呟く。『これが最善だと思っただよ』——どこをどう見ても最善ではないのだが、今にも泣き出してしまいそうな顔をされると、どうすればいいのかわからなくなる。

迷って、迷って、それでも『彼』は『彼』でありたかったんだろう。でも、歪んでいることも自覚していた。

歪みの原因をガンダムに求め、ガンダムを責め／＼憎み続けなければ、自分を保っていられなかったなんて。

その奥底にある想いは、何も変わっていないのに。どうしてそれを、見ようとしないのである。

『そうじゃない』

「そうじゃない」

クーゴは、思わずそう言った。

虚憶きよおくの中で、似非武士の言葉に対して異を唱えた男性と同じように。

『そうじゃないだろう』

「そうじゃないだろう」

「……クーゴ？」

グラハムの声が出た。彼の方を見る。いつもと変わらない、グラハム・エーカー中尉が首を傾げている。

「因縁とか、運命とか、宿命とか。……他者依存のものじゃないだろう、これは」

クーゴは噛みしめるように言葉を紡ぐ。

「俺たちが、俺たち自身の意志で、そうすることを選んだんじゃないか」

確認するようにグラハムを見返せば、奴は面食らったように瞬きした。

翠緑の瞳は大きく見開かれる。そこに映り込んだクーゴの表情は、やけに切迫していた。

自分たちは人間だ。他者や己自身を責めたいと感じたり、責めてしまったこともある。でも、忘れてはいけない。その選択で失っ

たものを。それ以上に、その選択で得たものを。その選択をした人間が、他ならぬ自分であったことを。

選択した先に、何もなかったわけではないだろう。辛く悲しいことだけが、いがみ憎むことだけが、選択した道の全てだったわけではないだろう。クーゴは無意識に、『エトワール』から貰った懐中時計を握り締めていた。

彼女がどんな意図でクーゴのコンタクトに乗ってきたのかはわからない。でも、この先何があったって、一緒に過ごした日々が無に帰すわけではない。空の色が褪せないのと同じように、鮮明に残り続ける。

つい数時間前、グラハムとビリーが『クーゴが何になっても親友だ』と言いきったのと同じなのだ。

クーゴはじっと親友たちを見つめた。自分の考えが伝わったかどうかはわからない。

けれど、グラハムとビリーは力強く笑い、頷いてくれた。ただ、それだけで充分だった。

「そうだな。己の意志で選び取り、つかみ取ったものだ」

自分たちは前を向く。長い道の向う側に、何があるかはわからない。けれど、突き進む。

隣を見れば、大切な仲間がいる。だから怖くなんかない。

混迷する世界でも、道しるべを失わず、飛んでいける。



アレハンドロ・コーナーと王留美が楽しそうに談笑している。それ

を横目に見ながら、テオはウオツカを呷った。痺れるような感覚が喉を伝う。

しかし、それだけだ。普通なら酩酊状態になってもおかしくない。しかもこのウオツカは辛口のものだ。酒初心者や飲めないし、中級および上級者でも辟易するレベルである。

『いつみても心配になる飲みっぷりだね。大丈夫かい？』

『ええ、大丈夫です。僕にとってはこんなもの、味もその諸々も水と同レベルです』

脳量子派および能力を駆使して、テオはリボンズと会話をしていった。傍から見れば、2人は無言のまま酒を呷っているようにしか見えないだろう。無言のまま酒を飲む中世的な青年と、彼の隣でウオツカを水のように飲み進めるアイドル(変装済み)。客観的に考えると、些か珍妙な構図である。

『むしろ、バーは飲み物メインで助かります。キミがいないときに高級レストランへ連れ込まれてステーキなんて出されたときは、嫌がらせにも程があると思いましたね』

先日の会食は酷かった、と、テオは苦々しい顔で息を吐いた。出されたステーキは何とか食べきったけれど、もう二度とあんなもの食べたくない。

テオにとつて、食事は苦行であった。特に、分厚く弾力性のある食べ物——主にステーキ等——は最難関である。

普段はリボンズのサポートがあつて食事をこなすテオにとつて、『リボンズの不在』は本当に痛い。

『……………愁傷様』

『リボンズは悪くないです。アレハンドロの味覚を乗っ取ってコピーすればよかつたんですけど。…………よかつたんですけど』

『二度も言わなくていいさ。嫌いな奴の味覚をコピーするくらいなら、苦行に挑むことを選ぶような性格だったね。キミは』

リボonzの言葉に、テオは苦笑いして肩をすくめた。

『ところで、味覚なしでステーキを食べるとどんな感じになるんだい？』

『ゴム』

嫌な沈黙が周囲を支配した。

ややあつて、リボonzが首を傾げる。

『え？』

『ひったすら、ゴム食べてるような感じになります』

想像してみたのだろう。リボonzの表情が引きつった。彼にそれを体感させることも可能だが、せつかくいい気分でワインを呷っているのだ。邪魔はしたくない。

邪な嫌がらせを考えたお詫びに、テオはリボonzへつまみを奢ることにした。バーテンは了承し、カウンター奥の棚をあさり始める。

ふと見ると、留美の従者・紅龍がじつと彼女とアレハンドロを見つめているところだった。誰も知らないが、この男、王家の長男坊である。つまり留美の兄だ。一般的に考えると、普段は長子——特に長兄が跡取りとして選ばれるのが普通である。しかし、紅龍は無能の烙印を押されてしまい、跡取りから追われてしまった。

その代わりに白羽の矢が立ったのは、妹の留美だった。本来だったらお嬢様として、でも、どこにでもいる普通の少女としての幸せを謳歌するはずだった彼女は、跡取りとしての厳しい教育を受けた。普通の幸せなど望めず、すべてが先代当主の意のままになるよう教育されたらしい。だから、彼女は恨む。世界のすべてを。

だから、留美は変えようとする。自分の幸せを踏みにじりながら

も、平穩に進むこの世界を憎んでいるから。大きな本流によって歪められ、打ち砕かれてしまった青春時代を取り戻そう／作り出そうとするかのように、留美は世界の変革を望む。そのために力を使う。そして紅龍は、そんな妹の傍に居続けるのだ。彼女の未来を歪めた贖罪のために。

「覗きかい?」

「え」

リボンズが、紅龍に話しかける。いつものようなアルカイックスマイルだ。突然話題を振られた紅龍は、驚いたように目を瞬かせていた。



誰が殺した? 駒鳥を。

アイデアの脳裏に浮かんだのは、有名な童謡であった。

現状を言い表すとしたら、『誰が殺した? 護り手を』になる。

「あ……い……」

「ああ……い……」

愕然とした声が、通信機越しから響いた。刹那と『彼』のものが、掠れた二重奏を奏でる。華を添えるかのように、紫電の爆ぜる音が断続的に聞こえてきた。

刹那のエクシアと『彼』のフラッグの間に割って入ったのは、クーゴのフラッグだった。右肩はエクシアのブレードが、左肩はフラッグ

のビームサーベルが貫通している。

この場にいた誰もが、状況を理解できずにいる。遊撃隊の面々からしてみれば、刹那と『彼』の戦いに、クーゴが特攻に等しい割り込みをしてきたようにしか見えないだろう。

アイデアは思わず顔の前で手を組んだ。ヘルメット着用でなければ、両手で口元を覆っていたところだ。

雑音交じりの回線からうめき声が響いた。動力源からは黒煙が上がる。

「……ったく。ようやく止まったか」

弱々しい声が出た。普段のやり取りを繰り返す刹那と『彼』を見て、苦笑いしているときと同じ顔をしている。平時との違いを挙げるとするなら、パイロットスーツやヘルメットの損傷が激しく、クーゴ自身も吐血していることだろうか。

「何故、キミが……」

「知るかよ」

『彼』の言葉を切って捨てるクーゴだが、その表情は優しい。

「どうして俺が……こんな、面倒なことを」

紡がれる言葉は疑問の意味である。けれど、クーゴは既に理由を自覚しているようだった。それでも、どうしても言葉にせずにはいられなかったらしい。

彼は被害者筆頭でありながら、この2人の行く末を放っておけなかった。アイデアと同じ、所謂お人よしの部類に入る。

「……しようがない、よな。ずっと、近くで、……見てきた、から」

クーゴの心に触れる。彼が巻き込まれた出来事——刹那と『彼』が繰り広げたやり取り——が、浮かんでは消えてを繰り返していた。どうやら、『彼』はクーゴだけではなく、他の人々にも相当の迷惑をかけていたらしい。

OZのゼクスとノ□ン、AEUのマ□キンとコーラ□ワー、人革の□ルゲイやピ□リス、□レーズやシユナ□ゼル等々。クーゴの回想を辿るだけでも、軍人から政府要人の重鎮クラスまで、幅広い方々に余波を喰らわせていた。

その都度尻拭的な方向に駆け回っていたのはクーゴである。何度も頭を下げながら、それでも生温かい眼差しで友人を見守るその姿を、誰もが苦い笑みを浮かべつつ見守っていた。敵味方問わず、皆が。クーゴはゆっくりと、ノイズだらけの通信画面へと手を伸ばす。砂嵐と歪んだ友人の顔が点滅するそこへ向かって、まるで『彼』本人が目の前にいるかのように。

いや、実際、クーゴの心は『彼』の心と対面している状況にあった。本人は無自覚であるが、確かに能力を発動させている。

クーゴは『彼』の肩を叩いた。『彼』が困惑したような眼差しを向ける。クーゴはそれを見返して、気さくに笑いかけていた。

「大切、だったんだろ？ ……『自分のすべてを、賭けていい』……そう、思えるくらいに」
「——っ」

『彼』はひゅつと息をのんだ。自分の心を言い当てられて、反応に困っているようにも見える。

クーゴにとって、『彼』の反応はとても珍しいものだったようだ。「お前も、そんな反応するんだな」と、楽しそうに笑った。

しかし、すぐにそれは苦笑いへと変わる。『彼』を諭すように、クーゴは言葉を続けていた。

イデアはそれを見守ることしかできなかつた。クーゴ自身は自覚していないだろうが、彼の発言した力によって、他者が介入できない

状態が作り出されてしまっている。

ニュータイプの能力を持つ人々は、クーゴが何か力を使っていることに気づいている様子だった。しかし、それはニュータイプの持つ能力と方向性は違う。

古の『同胞』が有していた力そのものだ。イデアやイデアの『同胞』たちが選んだ進化と同じであるが、どちらかというところ、原初の『同胞』が有していたものに近い。

クーゴが『彼』をまっすぐ見つめ、言葉をつづける。

「今だって。大切に、愛しくて、でも辛くて、悲しくて……苦しくて。どうしたらいいのか、わからないんだろ？」

「それは……」

「その根底にあるものは、何だ？」

空の護り手の問いに、空の貴公子は言葉を詰まらせる。『彼』は先程、「愛が憎しみに変わった」と言った。それが、『彼』の持ちうる答えなのだろう。

頑なな『彼』の心の底から、クーゴは余計なものを取り払っていく。『彼』やクーゴ以外の人間が写った部分にひびが入った写真立て、見るも無残に破壊されたフラッグのミニチュア、靴跡だらけのユニオン国旗、ズタズタに引き裂かれたユニオン軍の制服およびMSWARDの精鋭であることを示す証明書等々。

クーゴの整理整頓は少々手間取っていたが、目当ての品を見つけたことができたようだった。傷つけられたもの、壊されてしまったものが無くなったとき、残っていたのは——縦に細長い布袋——扇子とペンダントブローチだった。前者は『彼』の誕生日に刹那が贈ったものであり、後者は『彼』が刹那の誕生日に贈ったものだ。

『彼』は心の奥底にそれをしまい込んでいたらしい。驚いたままの『彼』の手に、クーゴは2つを握らせた。大丈夫だと示すように、彼は空の貴公子へと笑いかける。恐る恐る顔を上げた『彼』を見返して、クーゴは力強く頷いて見せた。濡れ羽色の瞳は優しく細められる。

いつも通りでいい、と、彼の眼差しは告げていた。

ふと、何かに気づいたクーゴが振り返る。視線の先には、茫然と佇む刹那の心があった。

困惑する刹那を呼んで、彼は空の貴公子を指示した。右手で刹那の手を、左手で『彼』の手を引いて、重ね合わせる。

「忘れないでくれ。積み重ねてきた日々に……想いの根底に、『何』があったのかを」

クーゴの言葉に呼応するかのようになり、『彼』の左手には青い扇とつがいのお守りが握られていた。

「忘れないでくれ。その運命を選び取ったのは……『自分自身』だったことを」

クーゴの言葉に呼応するかのようになり、刹那の左手には天使が刻まれたシエルカメオとつがいのお守りが握られていた。

「忘れないでくれ。失ったものだけじゃなく……『手にしたもの』があったことを」

クーゴは念を押すように「忘れるなよ、絶対に」と付け加えた。そうして満足げに笑うと、2人の手から自分の手を離す。がくん、と、彼の体が水底へ沈むように落ちていく。

それと同じタイミングで、彼が発動させていた能力は終わりを迎えた。コンマ数秒後、クーゴのフラッグに積まれていたGNドライブが、爆発音と共に黒煙を上げる。

フラッグが傾き、そのまま、まっさかさまに墜ちていく。アイデアは慌てて彼の名前を呼んだが、零れ落ちていくクーゴの心を救い上げることが叶わなかった。

ZEX ■ Sの面々は茫然とそれを見つめることしかできなかった。

『彼』が悲鳴に近い声を上げて、クーゴの名前を呼ぶ。返事は返ってこなかった。
ややあつて。

「……クーゴ。私は……」

抜け殻になってしまったかのように弱々しい声を残し、『彼』のGNフラッグは撤退していく。

戦意だけでなく、それ以上に大切なものを失ってしまったかのようにだった。

誰が殺した？ 護り手を。

それは、私。

震える声で、貴公子が答えた。

それは、俺。

震える声で、天使が答えた。

——それらに『こたえる』声は、まだ聞こえない。



「どうした？ イデア」

名前を呼ばれ、イデアは顔を上げた。通信画面には、いつもの仲間たちが映し出されている。

ロックオンが真面目な眼差しでこちらを見つめ、刹那は異常を感じ取ったのか神妙な顔つきをしている。アレルヤは心配そうに眉をひそめ、ティエリアは恐ろしい光景を目の当たりにしたような顔をしていた。

しばし瞬きをした後、気づく。今は、サードミッションの開始直前だ。『遊撃隊の一員として、少年と少女の護衛をしている』最中ではない。クーゴ・ハガネはここにいないし、刹那と『彼』の攻撃を喰らって撃墜されてもいない。

先程見ていた光景は虚憶きよわくのものだ。それに気づいたとき、イデアは安堵の息を吐いていた。誰が好き好んで、想いを寄せる相手の死にざまを見なくてはならないのか。……いや、実際にはちよつと違うのだが、同じようなものか。

「ちよつと、虚憶きよわくを視ちやったものだから」

「またかい？　ここのところ、頻繁だね」

「大丈夫かい？」と、アレルヤは声をかけてきた。イデアは微笑み、頷く。

ティエリアがこれ見よがしにため息をつく音を、通信機ははつきりと拾い上げていた。

普段は数倍にして言い返してやろうと思うのだが、先程見てしまったものがアレなので、返答する気にもならず苦笑する。そのまま俯き、イデアは先程の虚憶きよわくを保存した。もちろん映像で、だ。

正直、残しておくことすら辛い。でも、もしかしたら、この虚憶きよわくの中に、未来これからの役に立つヒントが紛れ込んでいるかもしれないのだ。

泣きたくなるのを堪えて、なんとか虚憶きよわくを保存する。その引き金となった曲は、つい先程まで聴いていた『夜鷹』の『歌ってみた』動画のものだった。

クーゴ本人は、おそらくこのことに気づいている。自分が歌った歌で、自分がとんでもない目に合う虚憶きよわくを見ているはずだ。その周囲にいる面々だっと思って見たと思う。

それを、彼らはどう思ったのだろう。『虚憶きよおくの中の出来事だから』と流したのか、それとも気に留めているのか。

アイデアは後者であってほしいと思うのだが、果たして。

「……………」

「? どうしたの、テイエリア」

通信機越しから唸るような息遣いが聞こえた気がした。出どころはテイエリアのものである。

普段は端正な顔立ちが、不安要素を見つけたかのように歪んでいる。何があったのだろうか。

「…………いや。貴様は普段、僕が何かを言うのと、すぐに言い返してくるだろう。それがないから、気になった」

「もしかして、心配してくれてる?」

「別に。問題がないのならそれでいい」

テイエリアはそっぽを向く。

あら、とアイデアが微笑めば、ロックオンも楽しそうに目を細める。刹那もわずかに口元を緩め、アレルヤも苦笑した。

そのタイミングで、サードミッション開始を告げるアラーム音が鳴り響いた。マイスターたちは全員、思考回路を切り替える。

世界の変革は、まだ始まったばかり。



満身創痍状態のフラッグを分析していたビリーの話を総合すると、

ガンダムの推進力はフラッグの6倍あるという。それを可能にしているのが、あの緑の光なのだそうだ。

「よく生きていられたね」とビリーは朗らかに笑っているが、正直笑いごとではない。一歩間違っていれば、クーゴとグラハムは今、ここに存在していなかった可能性もある。

気まぐれで生かされたというのは正直癪なのだが、命あつての物種だ。死んでしまったらリターンマッチどころではない。この雪辱は次で晴らす。クーゴは己に言い聞かせた。

ガンダムの推進力になつているエネルギーは、現在の技術よりも遠い場所にあるようだ。エイフマンが太鼓判を押し、「恐ろしい男」と称したイオリア・シユヘンベルクとはどういう人物だったのだろうか。エピソードが何一つ残されていないというのも、ミステリアスさを助長している。

「できれば捕獲してみたいものだな。ガンダムという機体を」「同感です」

エイフマンがしみじみと言い、グラハムが頷く。彼の眼差しはフラッグに注がれていた。

「そのためにも、この機体をチューンして頂きたい」

「パイロットへの負担は？」

「無視して頂いて結構。但し、期限は1週間をお願いしたい」

「ほう、無茶を言う男じゃ」

グラハムの言葉に、クーゴは思わず目を剥いた。彼の言葉を簡略化すると、技術班に対して『過労死しろ』と言っているようなものだ。

慌ててエイフマンを見れば、彼は不敵な笑みを浮かべていた。青緑の瞳は熱意に満ちている。戦場に出る戦士の眼差しだ。最も、技術屋の戦場はここだろうが。

「多少強引でなければ、ガンダムは口説けません」
「彼、メロメロなんですよ」

グラハムの強気な笑みを見て、ビリーが楽しそうに茶化す。彼の言葉に、グラハムは照れたように苦笑いした。

クーゴは大きいため息をつく。グラハムのそれは、完全に、少女を口説き倒している戦術と同じだ。

正攻法が好きなのはわかるけれど、どちらも同じ戦法で戦い抜けるとは思えない。

「あの子の次はガンダムか。お前は意外と恋多き男なんだな、グラハム」

「む。キミは私が不誠実な男だと言いたいのか」

「いや。前も言ったけど、二兎追う者は」

「ガンダムも少女のことも諦めるつもりはないよ。前にも言っただろう？ 『道理が通らないなら、押し通す』までだ」

クーゴは額に手を当てた。これはもう、梃子でも自分の発言を覆すつもりはない。

グラハムは妥協しない人間だ。長年の付き合いで知っていたけれど、愛や恋に対してその傾向が顕著であることを思い知ったのはここ最近である。しかも、件の少女だけでなく、MSにも適用されるなんて知らなかった。

そんなことを考えていたら、グラハムはむつとしたように眉をひそめる。「今、キミは失礼なことを考えていないか？」とでも言いたげな眼差しだ。確かにクーゴが今考えていることは、ある意味『失礼なこと』に当たるだろう。クーゴは肩をすくめ、それ以上の言及をやめることにした。

「さて、副官殿はどうする？」

エイフマンはクーゴに視線を向ける。「キミも同じだろう?」と、目をキラキラさせていた。その眼差しにはどうしても弱い。

それに、クーゴにだって意地があつた。負けっぱなしのまま、何もしないでなどいられない。黙っていいときと、黙ってはいけないときの違いはわかつているつもりだ。

思い浮かべるのは、自分たちを見逃した2機のガンダム／天女と天使。気のせいではなければ、天女に乗っていたパイロットが笑っていたような気がした。

嘲笑ではない。もつと違う笑い方。

それが何を意味しているのかは、わからないけれど。

だったらそれを知るために、あの天女を追いかければいい。空で対峙し続けられ、おそらく掴めるかもしれない。

「……お願いします。ただ、相棒のフラッグと技術班の体調を優先してやってください」

「キミは優しいな。そこがキミのいい所であり、悪い所だ。もう少し我儘になっていいんじゃないかね」

「技術者や職人は宝ですから」

クーゴの言葉に、エイフマンは嬉しそうに目を細めた。

「最高の褒め言葉だな。そうまで言われているにもかかわらず、キミの愛機に妥協したら、信頼を踏みにじることになるじゃろうて。……全力でやらせてもらおうぞ」

「ありがとうございます」

クーゴがエイフマンに深々と頭を下げたときだった。グラハムの端末が鳴り響く。告げられたのは、ガンダムの出現であった。

場所は2か所。南アフリカとタリビアだ。タリビアならば、ここからでも充分間に合う。そうクーゴが思ったとき、グラハムがヘルメットを片手にフラッグへ向かっていた。

「やめておけ」

意外なことを言ったのはエイフマン教授だった。驚いたのはクーゴやビリーもだ。

勿論グラハムは食い掛かった。

しかし、エイフマンは更に予想外のことを告げる。

「ワシは麻薬というものが心底嫌いだな。焼き払ってくれるというなら、ガンダムを支持したい」

エイフマンは憎々しげに言った。彼の過去に何があつたかは知らないし、知ることもできない。

ただ、エイフマンにとって麻薬は憎むべき敵のようだ。それを撲滅するためなら、なりふり構ってられないほどの。

彼の瞳は、どこか遠くを見つめている。その先に、どんな光景が広がっているのだろう。察することは不可能だった。

「奴らは、紛争の原因を断ち切る気じゃ」

彼の言葉が、やけに重々しく響く。

クーゴたち3人は、それを受け止めることしかできなかつた。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

14. 休暇と言う名の戦場

ユニオンの昼下がり。

「こんにちわ」

「邪魔するぞ」

扉を開ければ、ビリーとエイフマンが何やら話し合いをしている真っ最中だった。彼らは図面を指示し、あれやこれやと討論を続けている。おそらく図面はフラッグ。チューンナップ作業の最中である。

廊下からバタバタと誰かが走る音が聞こえてくる。技術班の中でも機体整備に関わっている人々のものだろう。グラハムが示した期限まで時間がない。技術者たちは不眠不休で戦い続けていた。

見ていると、訳なさが込み上げてくる。持ってきた差し入れは、ビリーとエイフマンの分しかない。今度は技術者陣でも食べられるようなお菓子などを持って来よう。クーゴは心の中でそう決めた。

「ああ、2人とも。どうかしたのかい？」

クーゴとグラハムに気づいたビリーが顔を上げる。エイフマンも作業の手を止めてこちらを見た。

「新型が待ちきれなくて。つい、来てしまったよ」

「俺は2人へ差し入れ。期限通りにチューンナップを終えるのも大事だけど、休息も大事だし」

照れたように笑うグラハムは、まるで子どものようなようだ。彼の様子を見たビリーとエイフマンがゆるりと目を細める。

クーゴが差し入れの包み——重箱クラスの大きさのものを示せば、今度はビリーとエイフマンが表情をほころばせる番だった。

「味は私が保証しよう。つい先程、味見役を任されてね」

「ずるいよグラハム！」

「そう言うなカタギリ。味見役で食べた分、私の分はもうないのだよ……」

ビリーに責められたグラハムは、至極残念そうに差し入れの入った包みを見つめる。許可が出たらすぐにでも、自前の箸でかつ浚ってしまいたそうだった。彼が持っていた黒柿・孔雀空の箸箱が、出番を今か今かと待ちわびているように見える。

「それは妥当な判断だね」なんて言いながら、ビリーは包みの結び目を解いていった。心なしか、ビリーとエイフマンの表情が『宝箱を目の前にした探検者』を連想させるような表情をしているように思う。目がきらきら輝いていた。

黒塗りの重箱がお目見えし、ビリーはゆっくりと蓋に手をかける。どこか重い響きを持って、蓋が開いた。ごくりと鳴った喉はビリーやエイフマンのものだったのか、それともグラハムのもだったか、はたまたクーゴのものだったのかはわからない。

お目見えたのは、カリカリの衣を纏った若鳥の唐揚げ、ふんわりと焼き上げられたオムレツ、ズッキーニとじゃがいものシンプルな炒め物、ゆでたブロッコリーと味噌ドレッシングの和え物、雑穀米のおにぎりだ。弁当箱の保温性が優れているため、まだうっすらと湯気が漂っている。

「うわー、今回のお弁当もおいしそうだね！」

「キミはパイロットよりも料理人の方が向いているのかもしれないのう」

そう言いながら、2人はいそいそとテーブルを片付けた。少し遅めの昼食準備に取り掛かる。クーゴとグラハムもそれを手伝った。

ビリーとエイフマンは割り箸を割り、早速おかずへと箸を伸ばす。グラハムはじつとそれを眺めていた。

若鳥の唐揚げは塩麴を使っているため、鶏肉はジューシーな味わいになっている。オムレツの中身はチーズだけでなくナツメグも入っており、味にアクセントをつけていた。ズッキーニとじゃがいもは親戚からの貰い物であり、どちらも鮮度がいい。ブロツコリーも同様だ。

先程グラハムに味見を頼んだとき、彼は絶賛しながら食べ進めていた。しかも、あわやビリーとエイフマンの分がなくなるかという勢いでだ。慌てて止めなかったら、また材料をそろえて作り直しになっていたことだろう。お昼に間に合わない危険性もあった。

今回作った料理は写真撮影し、『エトワール』に送信している。話題提供も親しくなるために必要なことだ。最近、互いに忙しくてコラボ企画の時間が取れそうにないという部分もある。こういう所で地道に積み重ねておかないと、自然消滅と可能性も無きにしも非ずだ。

丁度いいタイミングで端末が鳴る。見れば、『エトワール』からの連絡だった。

『お料理、おいしそうですね。是非食べてみたいです。普通は、女性が男性に作るものなのかもしれませんけど……』——あ、なんか困ってる。クーゴはなんとなくそう直感した。

一般論として、料理は女性が作るものだというのが浸透している。料理上手な男性と付き合う女性は肩身が狭いという話も聞いたことがあった。1人身が当たり前のクーゴには、何と言えいいのかかわらない。

『おいしいごはんは心と体を元気にしてくれる』——クーゴがひっそりと座右の銘にしている格言のひとつだ。といっても、誰がそう言っていたかは覚えていない。大方、テレビ番組等で聞きかじったことを真面目に実行していたんだろう。料理を始めたのは家を出てからだが、その頃にはもう、色々とこだわっていたように思う。

(こういうとき、どうフォローすればいいんだろう)

端末の文面と睨めっこしながら、クーゴは考える。

『エトワール』は目が見えないから、料理を作るのにも不自由するはずだ。

こんな状態で『エトワール』の料理が食べたい」なんて言ってみろ。彼女には辛い言葉であることは間違いない。傷口に塩を塗りこめるようなものだ。

でも、自分の料理の腕を自慢するのも何か違う気がする。それだって、料理ができないことを気に病む文面を送ってきた『エトワール』の傷に塩を塗ることだ。

何かいい案はないかと悩んでいたときだった。それは唐突に、まるで天啓がひらめいたかのように頭に浮かんだ。思い浮かびさえすれば、単純なことだった。

「そうだ。一緒に作ればいいんだ」

なんて名案。その思いに突き動かされるように、クーゴは端末にメッセージを打ち込んだ。そのまま送信ボタンを押す。

しかし、送信した後で、何とも言えない緊張感が漂ってくる。「対応を間違ってしまった」感が否めない。今更心臓がばくばく激しい音を立てはじめた。

背後から食べ物の咀嚼音が聞こえていたはずなのに、いつの間にか静かになった気がする。談笑の声もなくなった。心臓の音だけが、クーゴの耳を打つ。

端末が鳴った。端末を開く。『エトワール』からのメッセージだ。文面を目で読み上げる。『それは楽しそうですね。今度のオフ会はその方向にしましょうか』——緊張から解放され、クーゴは大きく息を吐いた。どうやら、彼女の地雷をぶち抜かずに済んだらしい。

しかし、文面はそれだけではなかった。『やつと休暇が取れそうですね。それも短い間ですけど。『夜鷹』さんの都合が合えば、どうでしょうか？ コラボ企画をする時間は取れないかもしれませんが、それでも宜しければ……』という文面に、思わず内容をもう一度読み直してしまっただけだ。

ふと違和感を感じて振り返る。ビリーとエイフマンが獲物を見つけたかのようにクーゴを見ていた。グラハムに至っては、周囲に花が舞っているのではと思う勢いで笑っている。何とも言えない予感に、クーゴは視線を逸らしたくてたまらなくなった。

「クーゴ。キミはグラハムの行動力に物申すことが多いけど、キミも相当斜め上の行動力を持つてると思うよ」

「そうだな。普通だったら、一緒に料理を作る前に、お弁当の持ちよりとかが最初ではないのかな？」

ビリーの指摘に何か思うところがあつたグラハムが、ニヤリと笑う。クーゴは言葉に詰まった。

こんなときこそ何とかしないと。しかし、先程と違って名案が出てこない。

クーゴの脳内が崖っぷちに陥っていたときだった。

『ラジオネーム・『となりのレイフ』さんのリクエスト、テオ・マイヤーの『恋愛少年団』。リリースされたばかりの最新曲ですね。どうぞお聴きください』

脇に置いてたラジオがそう告げたとき、エイフマンが驚いたようにラジオオへと視線を向ける。曲が流れ始めたのを確認し、彼は嬉しそうに口元を緩めた。

意外な光景に、思わず自分たち3人は目を点にした。エイフマンが現役歌手に興味を持つたなんて、行動も理由も想像できなかつたためだ。

目を瞬かせるクーゴたち3人の様子がおかしかったのだろう。エイフマンは笑みをこぼしながら、遠い日の憧憬を追いかけるように目を細める。

「以前、亡くなったお兄さんの話をしただろう？ ……この歌

手を見ていると、彼が帰ってきたような気がしてのお」

「思い切ってその話を本人にしてみたら、大変喜んでくれてな。それ以来、よくメールのやり取りをしているんじゃない」と、エイフマンは笑った。彼の口ぶりから見ると、テオ・マイヤーという歌手／エイフマンのいう『兄のような人』は聡明な人物だったのだろう。

明るく力強い、爽やかでみずみずしい歌詞と音楽が流れる。恋する少女少女を応援する歌だ。聞いているだけで、元気が湧いてくるような曲だった。作詞作曲もテオ・マイヤーがやったものらしい。

エイフマンは頬杖をつきながら聞き入っていた。思わずクーゴたちは顔を見合わせる。幼い頃、エイフマンはこんな表情を浮かべて、お兄さんの存在の歌に聞き入っていたのだろうか。タイムスリップしないとわからないけれど。

(でも、所々オーバーな部分があるよな。この歌詞)

例えば、『世界中の人に僕のココロが筒抜けならば、声に出して宣言するのもまた一興。とくと聞け、僕の想いを』とか。

例えば、『僕は君を守り抜こう。月光の下、そう誓った。だから何度だって声に出すんだ。僕が君を守ってやるから、って』とか。

例えば、『そうさ。キミと、この想いと。2つを乗せてどこまでも飛ばう。僕とキミの名前を書いた相合傘を、月に刻みつけるような勢いで』とか。

何か視えそうな気がするけれど、霞がかかったようにぼやけてしまう。もう少し、あと少しなのに。そうやって、眉をひそめていたとき。

「……ところで、『エトワール』からのメッセージに何て返答するの?」
「あ」

ビリーの指摘に、クーゴは現実に戻され、慌てて端末を見た。結構な時間放置してしまった気がする。

クーゴはちらりとグラハムを見た。彼は不敵な笑みを浮かべている。行く気満々だ。

「丁度休みなんだし、行ってみたらいいんじゃない？」

「それなら、作業のペースを少し緩めても問題なさそうじゃのう」

茶化すようにしてビリーとエイフマンが言った。思わず自分たちも苦笑する。

ここの所忙しかったわけだし、しばらく休むのも悪くはない。クーゴは端末を取り出し、メッセージを送る。

待ち合わせ場所に、日本の東京都内にあるとある公園の名前が提示されたのは、それから数時間後のことであった。



「あれ？ 新しくここに引越してきた人？」

不意にかけられた声に顔を上げれば、どこか見覚えのある少年が部屋に入ろうとしているところだった。

「あ」「あ」

「え？」

この少年は、京都で石破ラブラブ天驚拳を撃っていた恋人の片割れだ。

向うは、それを見ていた自分たちのことに気づいていなかったらしい。

「貴方、石破ラブラブ天驚拳を撃ってましたよね？ 京都で」

「京都……あのとき!? み、見てたんですか!? ……あ、その、ルイスと僕は……」

アイデアが指摘してやれば、少年はかあつと顔を真っ赤にした。照れ照れした少年は、しどろもどろになりながら恋人の話を始める。それを見た刹那は「ああ……ご愁傷様」と言わんばかりの表情を浮かべた。恋愛話は大好きだ。話を聞いているだけでウズウズしてくる。介入せずにはいられない。アイデアはもつともつと根掘り葉掘りしようと、少年の話に耳を傾けては促した。彼は自ら話題を提供してくれる。

しかし、それも長くは続かなかつた。この少年は素直で謙虚な性格らしく、自分が「自己紹介もせず、相手を長話につき合せている」ということに気づいてしまった。すみません、と彼はぺこぺこ頭を下げる。正直惜しかった。

彼の名前は沙慈・クロスロード。姉と一緒に、刹那とアイデアの隣の部屋に住んでいる学生だ。こちらも自己紹介をし返す。

沙慈は挨拶と一緒にぺこりと頭を下げた。しかし、刹那は無感動な目で彼を見返すのみ。

あまりにも不愛想な態度に、沙慈は困ったように眉をひそめる。アイデアは慌てて刹那をフォローした。

「ごめんなさい。刹那は不愛想だけど、根はとても優しい子なんです」

そう言って、アイデアは紙袋からクナーファアを取り出した。こんなこともあろうかと、彼女に頼んで多めに作ってもらったものだ。ここでクナーファアが出てくるとは思っていなかったらしく、刹那はぎよつと目を剥く。

「よかったら、これどうぞ。クナーファアといって、中東のお菓子なんです」

「あ、わざわざご丁寧にありがとうございます」

「このお菓子、刹那が作ったんですよ」

「へえ！ 凄いな……」

イデアの言葉に、沙慈は感嘆の声を上げた。早速沙慈は切り分けられたクナーファを一口、齧る。彼の表情がぱあつと輝いた。おいしい、と、沙慈はクナーファを絶賛する。あまりにもべた褒めされるので、刹那は照れたようにそっぽを向いた。

沙慈は不愛想な刹那がおいしいお菓子を作る図を想像したのだろう。人はギャップというものに弱い。沙慈が刹那に対する評価を上方修正したのを感じ取り、イデアはほっと息を吐いた。リカバリとフオローは得意分野である。

「……姉が、いるんだろう。一緒に食べればいい」

「うん、ありがとう！ お礼に、今度は何かおすそ分けするよ」

刹那がぶつきらぼうに言うのと、沙慈は嬉しそうに笑って頷いた。それじゃあ、と挨拶を交わし、彼が部屋へ入ろうとしたときだった。

エレベーターが同じフロアに着いたベルが鳴る。ぱたぱたと足音が近づいてきた。久しく聞いていなかったが、懐かしい友人のものとすぐにわかった。

おそらく、『同胞』同士のコネクションを通じて、彼らの元にも連絡はされているはずだ。あとは、刹那や沙慈らにばれないよう、初対面を演じるのみ。

「こんばんわ、沙慈さん！ 今帰ってきたんですか？」

帰ってきたのは少年だった。夏の木々を思わせるような深緑の髪と瞳が特徴で、空へ羽ばたく鷹を思わせるような鋭さとしなやかさを秘めている。相変わらず、元氣そうでなによりだ。

「ああ、一鷹^{いちたか}くん。今帰ってきたの？」
「はい。図書館での調べ物も終わったんで」

沙慈の問いに、少年——南雲^{なぐも} 一鷹^{いちたか}は元気よく答えた。一鷹は挨拶もそこそこに、部屋へ戻ろうとして足を止める。

一鷹の部屋はアイデアたちの左隣だ。必然的に、アイデアと刹那の部屋の前を通ることになる。だから、見慣れぬ新参者に気づくのも当然であった。

もつとも、一鷹とアイデアは初対面ではない。彼もまた、アイデアの『同胞』の1人だ。ソレスタルビーイングとは無関係であるため、刹那は何も知らないが。一般人の沙慈はもつと何も知らないと言えよう。

表面では初対面のフリをしつつ、脳内では『久しぶり、一鷹くん。元気だった？』『はい！アイデアさんも元気そうで何よりです』等々、和やかに会話を繰り広げる。アイデアと一鷹の——『同胞』同士が持つ能力が成せる技だ。思い出話が始まってしまいそうな勢いである。

そのとき、一鷹が住んでいる部屋の扉が開いた。出てきたのは、水色の髪と瞳を持つ少女。彼女は一鷹を見つけると、「おかえりなさい！」と笑いかけた。そこまでは問題ない。だが、彼女はアイデアを見て「あっ！」と声を上げた。慌てて能力を使い、『それ以上突っ込まないで！』と頼む。

彼女はしばらく目を瞬かせておろしていたが、沙慈に指摘されて即座に「問題ありません！」と宣言した。危うかった。あと一歩間違えば、「問題ありません」どころか「問題しかありません」になっていただろう。まあ、彼女にとっては「問題ありません」が口癖のようなものだが。

「初めまして！ 私はAL-3。家政婦用アンドロイドです。気軽にアリスとお呼びください」

少女——AL-3、愛称アリスの自己紹介に、刹那は驚いたように目を瞬かせた。どうやら、沙慈も初見でアリスと対面したとき、あま

りの人間らしさに驚いたらしい。「グライフ教授はすごいよね」と、うんうん納得している。

アリスの開発者であるクラール・グライフ氏は、沙慈の通う学校で教鞭を振るう教授の1人であり、一鷹の養父でもあった。ちなみに、グライフ氏にはもう1人孫がいるが、彼も若くして技術者として活躍していた。今日はまだ家にいないあたり、頑張っているらしい。

「む、新参者か？」

アリスの後ろから現れたのは、赤い髪の女性だった。アリスの二の舞になるのを防ぐため、今回は彼女に『表面上は他人のフリをしてくれ』と、能力を使って先回りする。女性はすぐに把握できたようで、初対面の相手に対する態度を取ってくれた。

「はじめましてだなあ、新しいお隣さん！ 迎撃する!!」

「ダメー！ そんな挨拶の仕方じゃ怖がられますし、何より迎撃しちゃダメですよ!!」

明らかに機能不全気味な女性は、突如スタンガン片手に迎撃宣言を出した。もちろん、アリスからダメ出しが飛んできた。このやり取りも変わっていない。

女性の行動に、刹那は反射的に拳銃を抜こうとしていた。アイデアは慌ててそれを制した。周囲を伺うが、刹那が拳銃を所持していることは露呈しなかったようだ。

『はは、ハルノも元気そうだなにより』

アイデアが能力越しに再開を祝えば、女性——HL—O、愛称ハルノも軽く会釈した。相変わらず家政婦AIが機能不全を引き起こしているようだ。以前よりも悪化したような気がするのは何故だろう。グライフ博士は適宜改良中と言っていたのに。

『僕るときは』ここに引越してきた者だ。迎撃する』って言われたなあ』という沙慈の思考が流れ込んできた。やっぱり変わっていない。いや、まだこっちのほうがよかったんじゃないだろうか。声の質量とノリのな方面は落ち着いていたのに、どうしてこうなった。

とりあえずこの場を収集させ、3人にも刹那作のクナーファをおすそ分けする。一鷹たちは大喜びで部屋へ引き上げていった。沙慈も自分の部屋に戻る。彼らはこれから、家族同士で団欒を楽しむのだろう。イデアは目を細めて彼らを見送った。

「さて、軽く話し合ったらゆっくり休もうか」
「そうだな」

刹那を促し、共に家へ入る。ここに来たばかりのため、部屋の中はまだ殺風景だ。いつか部屋を引き払うときまで、ここはイデアと刹那の拠点であり、生活スペースになる。

明日は必要な家具類を買い揃えに行かなければ。そのことを刹那と軽く話し合った後、テレビをつける。北アイルランドの民族紛争が、事実上停戦状態になったという話題だった。

世界はゆつくりと、けれど確実に変わり始めている。

劇薬による急激な変化を望んでいるかと言われれば、イデアはN.Oと答える方だ。人類が変革するのには長い時間が必要である。それを生きているうちに見届けられれば御の字だろう。イオリア・シユヘンベルクやその協力者たちも、同じようにして構えていたのかもしれない。

誰も彼もが結論を急ぎすぎるのだ。世界も、ソレスタルビーイングのクルーたちも、ガンダムマスターたちも。それは、『人類の寿命が著しく短い』という点もあるのだと思う。自分が生きている間に答えを見たいと焦るから、余計に迷走してしまう。なんて悪循環。

そんなことを言うと、イデアとその『同胞』たちは「暢気すぎる」と言われるだろうか。そこが自分たちの難しいところだ。いくら寿命が長いとはいえ、『同胞』たちにだって「堪忍袋の緒が切れる」ことは

ある。古の『同胞』を束ねた2代目の戦士がいい例であった。

(安住の地となるはずだった惑星^{ほし}を破壊され、仲間やかかけがえのない恩師の死を目の当たりにして、戦士は決意した。優しさだけでは運命に抗えないと)

人が死ぬ。昨日まで笑っていた仲間が、次の瞬間には息絶えている。生存者を探す。惑星^{ほし}の命と共に殉じることを選んだ者がいた。戦士の慟哭が脳裏に響いた。

何やら寂しくなつて、イデアはふと歌を口ずさんだ。『同胞』たちの中で伝わる、『同胞』の辿った歴史を語り継ぐ歌だ。イデアが一番好きな歌でもある。

受け継がれてきたバトンを手にとつて、自分たちはここにいる。イデアはゆっくり瞳を閉じた。刹那が動く気配はない。イデアが歌うのを容認しているらしかった。

「あ」

イデアの歌が止まったのは、端末が鳴り響いたからだ。ソレスタルビーイングの定期連絡や緊急ミッションではない。見れば、クーゴ・ハガネ——『夜鷹』からのメッセージである。おいしそうなお弁当の写真が添付されてきた。

カリカリの衣を纏った若鳥の唐揚げ、ふんわりと焼き上げられたオムレツ、ズッキーニとじゃがいものシンプルな炒め物、ゆでたブロッコリーと味噌ドレッシングの和え物、雑穀米のおにぎり。思わずイデアは喉を鳴らす。刹那も興味深そうに端末を覗き込んでいた。

写真越しだというのに、出来立ての料理の香りが漂ってきそうだ。今日の晩御飯をホットドックで済ませたのがいけなかったようで、イデアのお腹が悲鳴を上げる。しかし、響いたのはイデアのものだけではない。音の出どころを辿れば、刹那は反射的に目を逸らした。

イデアはニマニマ笑いながらメッセージを返信する。男性でここ

までおいしそうな料理を作るなんて——そこまで考えたら、何やら気が重くなつた。絶対、アイデアの作る料理よりもおいしそうだ。いや、実際においしいのだと思う。おいしくないはずがあるろうか。

その気持ちがメールの文面にも反映されていたことに気づいたのは、メッセージを送信した直後だった。流星にこれはまずい。オロオロしている間に、また端末が鳴った。『夜鷹』からのメッセージである。アイデアは慌ててそれを開いてみた。

『なら、一緒に作りませんか?』——開いた瞬間、反射的に立ち上がったアイデアは悪くないはずだ。その反動で、刹那がベッドの上にひっくり返る。

「……ねえ、刹那」

「な、何だ?」

「次のミッション開始まで、まだ時間あるわよね」

「事実上の休暇よね」と言えば、刹那が何かを察したようで目を剥いた。ちよつと待て、と彼女が鬼気迫る顔でアイデアの腕をつかむ。

さあ、彼女をどうやって籠絡しようか。ついでに、ソレスタルビーイングのクルーたちも論破しないといけないだろう。特にテイエリアは強敵だ。

俄然やる気が出てきた。そうと決まれば、と、アイデアは大急ぎで頭の中にプランを立てていく。

あまたの敵や困難を打ち破り、今度のオフ会に『夜鷹』の手作り晩御飯による晩餐』を勝ち取ったのは、その数時間後のことであった。



今日も今日とて、アレハンドロの腰巾着ごっこが幕を開ける。正直、こいつにつき合わされるのは面倒極まりない。

それをアレハンドロに言ったら、「キミのアイドルごっこにつき合わされているのはこちらの方だ」と文句を吐き捨てるのだろう。テオは心の中で盛大に舌打ちした。

『ソレスタルビーイング、およびイオリア・シユヘンベルクについて調べ回っているジャーナリストの話、聞いたかい？』

アレハンドロの長話につき合わされていたリボンズが、能力を駆使してテオに語り掛けてきた。テオも同じようにして、2つ返事で頷く。

『流石、グラン・マが気に入った逸材ですよ。食いついたらすっぽんの如く逃がさない。そうやって、スクープを追い続ける』

『マザーは、彼女が真相にたどり着くと踏んでいるらしい。そして、来るべき刻^{とき}、真実を語り継ぐに相応しい存在であるとも睨んでいる』

リボンズがちらりとこちらを見た。端末を見ろ、と目で合図する。それに従い、テオは端末を開いて情報を確認してみた。

対象者の名前と、対象が今まで手掛けてきた番組や記事についてのデータが添付されている。どれも鋭い切り口で、大胆に書きだされていた。

最近のジャーナリストは気骨がないと思っていたけれど、女だてらによくやる人だ。『強い女性像』の典型的な性格をしているのだろう。しかし、真相に触れるということとは、粛清対象者にされるといふこともさしている。いずれ、彼女はアレハンドロ・コーナーやそれに関係する一派に近づくだろう。自分の野望のために監視者一族を全滅させたアレハンドロだ。ぱつとあらわれた女性ジャーナリストの口を封じるなんて容易に想像できた。

ジャーナリストだけならまだ御の字かもしれない。ヘタすれば、彼女の関係者——主に家族や恋人——も粛清対象にされる危険性もある。奴らの一族は、実際、そうやって監視者一族を潰してきた。その

証拠も、闇に葬り去ってきた。葬り去られた真実を白日の下にさらすのは容易ではない。

一応、アレハンドロ日本人には自分たちが張り付いているものの、奴はいくらでも手駒を有している。

『彼女の家族やその周辺は、グライフ一家が見守ってるみたいだけだね』

『ああ、ラッシュユバードとストレイバードを開発した。あんなに優秀な発明家なのに、どうして世界に認められないんでしょうね』

『認められるために発明をしているわけじゃないからね。それに、そういう所が『悪の組織』や『同胞』たちにとつて都合がいいんだろう。本人も理解しているというところが、また……』

難儀なものだ。世界に人を見る目がないのか、『悪の組織』が彼の功績の大半を隠ぺいしているからか、本人に『一山当てる』という気がないからか。あるいは、全てが複雑に絡み合った結果なのか。惜しいことだとテオは思う。

逆に、今をときめくレイフ・エイフマンのように、功績が認められるのを繰り返すという方が奇跡なのかもしれない。彼は技術者としての腕前も確かであるが、それ以上に、チャンスをつかむ才能も秘めていたのだろう。

『……先輩後輩コンビは、件のジャーナリストに接触できたのかな』

リボンズは、ぽつりと呟いた。勿論脳内で、だ。

『先輩は少々意地悪なところがありますがからね。後輩くん——ぶっちゃけ僕から見れば2人とも先輩なわけですが——も、気苦労絶えないでしょう』

『そうだね。僕から見ても、後輩くんは先輩だけだね』

そう言いながら、テオはくすりと笑みを浮かべた。横目でリボンズの様子を盗み見る。彼は相変わらず、アレハンドロの長話につき合わされている様子だった。

どうしてこの場に留美と紅龍がいないのだろうか。彼女がいるだけでも、アレハンドロの長話で被害は大幅に減るといえるのに。

愛想笑いを浮かべるリボンズの口元が引きつっている。流石の彼も限界が近いようだ。テオは成す術がないので、「ご愁傷様」としか言えそうにない。

そんな状況を打破するかのように、部屋の扉が控えめにノックされた。「入りたまえ」と、アレハンドロが優雅な声で許可を出す。

がちやり、と扉が開いた。入ってきたのは、綺麗な着物に身を包んだ東洋人女性。そういえば、アレハンドロがいつぞや言っていた気がする。新しいスポンサーが増えたらしいが、この来訪者——彼女のことを指しているのだろうか。

見る限り『腹に一物抱えていそう』な女だ。表面上は何ともないが、深層心理を探ろうとすると、どす黒い悪意に飲み込まれそうになる。アレハンドロ以上の大物だろう。愛想笑いするので手一杯になりそうだ。

アレハンドロが女性の隣に立つ。彼女を自分たちに紹介するためだろう。

正直、彼女とはあまり近づきたくない。それは、リボンズも同じ気持ちのようだった。

顔の筋肉をフルに使った愛想笑いをするなんて久しぶりである。明日は顔面筋肉痛か。

そんなテオの心など知ったこっちゃないアレハンドロは、胡散臭い笑みを浮かべながら、言った。

「ああ、キミたちにはまだ紹介していなかったね。彼女は我々の同士だ。名前は——」

「ごちそうさまでした」
「ゴチソウサマでした」

ぼん、と、手を合わせて挨拶する。少女や『エトワール』もクーゴとグラハムの見様見真似ではあるが、日本の食文化およびマナーを守ってくれた。ちよつとだけ、なんだか嬉しい。和やかな雰囲気のまま、クーゴたちは片づけを始める。

2人が住んでいるマンションに呼ばれて、そこで夕飯をふるまうことになるとは思わなかった。よくもまあ、クーゴの斜めに舞い上がった発言を許してくれたものだ。クーゴはしみじみ考えながら、皿洗いに精を出す。グラハムが皿を拭き、『エトワール』と少女が手渡された皿を棚に戻していった。

言いだしっぺとしての役割は、これできちんと果たした。内心、ほつと息を吐く。

『夜鷹』さんのつくったご飯、おいしかったです!」

「よかった。それは何よりだ。『おいしい』ごはんは心と体を元気にしてくれる』からな」

嬉しそうに語る『エトワール』の笑顔に、自然と頬が緩んだ。クーゴの格言に何か思うところがあつた『エトワール』は、首振り人形のようにぶんぶん首を縦に振る。

「そうですね。やっぱり、おいしい料理が一番ですよね」と、噛みしめるようにして頷いていた。それを聞いた少女が居心地悪そうに目を逸らす。

確か、少女は『手早く食べられる方がいい』派だったか。屋台のホットドックや固形および液体タイプの栄養食品を中心に食べている、と

自己申告してくれた。

ちらりと少女に視線を向ける。どうだった？ と尋ねれば、彼女はふいっと目を逸らしながら、蚊の鳴くような声で呟く。「おいしかった」と、口が動いていた。クーゴはふっと頬を緩める。刹那、グラハムが頷きながら少女へ近づいていく。

次の瞬間には、いつも通りのやり取りが繰り広げられていた。グラハムがちよっかいを出し、少女が思いつきり手を振り払う。彼女の顔は真っ赤だ。

それが、グラハムにとって嬉しいことらしい。好きになった相手の、いろんな表情が見たいということだろうか。

(食事をしているときは、グラハムもあの子も穏やかな雰囲気だったんだけどなあ)

むしろ、穏やかな顔をしているときの方がいいと思うのだが。少女も、そういうグラハムを見ているときは素直にしていたような印象を受ける。

彼女は『強くぶつかられると頑なになってしまう』タイプらしい。駆け引きよりも真っ向勝負が好きで、これからは難儀なことになりそうである。

クーゴの思考回路を引きもどしたのは、『エトワール』の言葉であった。

『おいしいごはんは心と体を元気にしてくれる』かあ。素敵な格言ですよね」

「ああ。誰から聞いたのかは覚えてないけど」

「でも、ちゃんと覚えていたってことは、とても大切な人が教えてくれたことだったんですよね？」

「……そうだな」

『エトワール』の問いに、クーゴは頷く。彼女の言葉通り、この格言

はとても大切な人が教えてくれたものだった。

今となつては、その相手が誰だったのかすら思い出せないけれど――どうして、思い出せないのだろう。ずきり、と、クーゴの頭が鈍く痛んだ。

何か忘れている。とても、とても大切なことだったはずだ。思い出さない。いや、だめだ。思い出してはいけない。思い出す価値なんてない。

クーゴが首をひねったとき、クーゴとグラハムの端末が鳴り響いた。

連絡の主はエイフマンだった。

後ろからビリーの声がするため、ビリーはグラハムに連絡しているのだろう。

『フラッグのチューンが終わった。至急、戻ってきてもらいたい』

「はい、わかりました。今すぐ戻ります」

端末を服のポケットに戻す。丁度、グラハムもビリーと話し終わったらしい。目と目で合図を送りあい、『エトワール』と少女に礼を言い、慌ただしく帰還の準備を始める。

「おい」

そのとき、少女がグラハムの服の袖を引いた。グラハムは目を瞬かせながら首を傾げる。少し待て、と手で合図をした少女は、冷蔵庫を開けて何かを取り出した。

紙製の箱の中には、淡いきつね色のライスプディングが、可愛らしい陶器の中に入っていた。ほんのりと甘い香りが鼻をくすぐる。少女はその箱を、グラハムへ突き出した。

いつぞや、グラハムが「あの子の料理だ」と言って端末の画像を見せつけてきたことがあった。是非とも味わってみたいと言っていたが、もしかして、彼女はそれを覚えていたのだろうか。

くれる、らしい。グラハムはしばし呆気にとられていたけれど、差し出された紙箱をおずおず受け取った。少女はどこか申し訳なさそうに目を伏せる。

「……口に合うかどうかは、わからないが」

「いいや、そんなことはないよ。ありがとう」

グラハムは満面の笑みを浮かべた。手放してなるものかと言わんばかりに、ライスプディングが入った箱を抱え込む。足取りも軽やかだ。

「それじゃあ、また、次のオフ会で」「楽しみにしてます」と、クーゴと『エトワール』は挨拶を交わした。そのまま解散し、帰路を急ぐ。空を見上げる。綺麗な満月が浮かんでいた。そこに、うつすらと暗雲が漂い始めている。今にも覆い隠されてしまいそうだった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

15. 空を翔る者たち

「バックパックと各関節の強化、機体表面の耐ビームコーティング。武装は、アイリス社が開発した新型ライフルを取り寄せた」
「壮観です、プロフェッサー」

エイフマンの厳かな声が響いた。新たな力を得たフラッグは、以前よりも凛々しくなったように思う。

黒光りする機体を見上げ、グラハムが感嘆の声を上げた。クーゴも小さく頷き同意する。

「喜んでる」

「ん？」

「嬉しそうなんです。俺とグラハムのフラッグが」

クーゴは愛機を見上げながら、ゆるく目を細めた。エイフマンは何を言っているのかわからなかったようで、しばし目を瞬かせていた。「ツクモ・ゴッドです」と補足すればわかってくれたようで、ぽんと手を叩く。エイフマンは納得したようにうなずいてくれた。

日本の民間伝承には『付喪神』というものがある。本来は『長く使った物や長く生きた生き物に神が宿る』という伝承のことを指す。他にも、『人の強い思いを受けた、あるいは長い期間人間に大切に扱われてきた物が、使い手に答えてくれる』という話も伝わっていた。

その影響か、日本では『物は大切に使いなさい』という教えが徹底しているように思うし、物を人に見立てると言う『擬人化』に抵抗はない。むしろ、サブカルチャーとしての『擬人化』が闊歩しているようだ。特に20世紀の終盤以降、『擬人化』は爆発的な勢いで世界に広まっていった。

物と人に関わる話は沢山あるけれど、閑話休題だ。

「ただし」と、ビリーが補足する。

「耐Gシステムを稼働させても、全速旋回時には12Gもかかるけどね」

「望むところだと言わせてもらおう」

ビリーの言葉に、グラハムが即座に切り返した。

翠緑の瞳には一切の迷いが無い。

揺らがないところがグラハムのいいところだ。

武装面がよくなったからといって、すべてがパワーアップしたとは言えない。何事にも代償は付き物だ。

しかし、リスクを恐れていては勝利を得られない。ときには自ら茨の道を分け入る勇気だつて必要である。

所属部隊を超えた戦友であるゼクス・マーキスだつて、そうやつてトールギスを駆っていたではないか。

「たかだか12Gぐらい、何の問題もない。トールギスなんて15Gだぞ？ おまけにパイロットスーツなんてなかったし」

「なんと！ 流石は我が友、ゼクス・マーキスだ。我々も負けてもらえないな」

クーゴとグラハムはうんうん頷き合う。自分たちより7、8歳年下のパイロットが15Gに耐え抜き、戦い抜いたのだ。負けるつもりはないし、負けてもらえない。

「トールギス？」と、ビリーとエイフマンが首を傾げる。しかし、ビリーは即座に虚憶きよおくの話だと合点がいったようで、「ああ、あの機体か！」と、すぐに手を叩いた。

「トールギスといえば、あのビーム兵器！ 僕たちの技術では見かけない奴だったよね。何とか転用しようとしたけど、上手くいかなかったっけ」

多元世界の弊害だ、とビリーは嘆いた。時空振動で多くの次元が重なって誕生した多元世界は、元々あった技術も世界によってバラバラ／まちまちであった。そのため、『ある世界にとっては奇跡に等しいレベルの技術を、他の世界が日常レベルで有していた』なんてことは珍しくない。

例えば、可変式の戦艦が存在していたり、機体のサイズが20メートルを超えるものであったり、敵味方問わず広範囲を殲滅する兵器武装を有していたり、スイッチ一つで殲滅兵器を放つ大要塞が存在していたり、主を不老不死にしてしまう機体があったり、ドリルでいろんなものをぶち抜いてしまう機体があったり。

中にはフラッグよりも高い機動性を有する可変機もあった。2人の歌姫を守るために、空を飛んだ男の横顔が浮かぶ。元女形の歌舞伎役者で、女装させると美人になってたような気がした。刹那、『出た、アル□の早乙□スペシャル!』と叫んだスナイパーのことを思い出します。今日もどこかで、彼の眼鏡が割れているのだろうか。

「他にも興味深い技術があったなあ。ドラグーン・システムとか、サイコフレームとか、光子力エネルギーとか、ブレイズ・ルミナスとか」
「個人的には、ガンダニューム合金を機体の装甲に使ってほしかったのだが……」

「無茶だろグラハム。あの金属、コスト高いし。俺たちの世界の技術じゃ再現不可能だって言われてるじゃないか」

「……虚憶きよわくにおける多元世界の技術は、どれもこれも我々の技術では追いつけないものばかりじゃな。わしが生きている間に実用化されるかどうか」

エイフマンが悔しそうな声で呟いた。研究というものは1世1代で完成しない場合の方が多い。後継者に思いを託していった技術者や、志半ばで挫折したり無念な結果に終わった先人の想いを受け継いで立ち上がる者もいるのだ。でもやはり、『自分の目で、技術の完成および実用化を見たい』というのが人間の性だろう。

レイフ・エイフマン、73歳。友人が皆鬼籍に入ってしまった彼は、自分の残り時間が少ないことを自覚しているのかもしれない。プロフェツサー、と、グラハムが彼を呼んだ声は、ひどく震えていた。ビリーも悲しそうな表情でエイフマンを見つめる。若者たちの暗い思いを察したエイフマンは、お茶目に微笑んだ。

青緑の瞳には、見果てぬ夢を追いかける者が宿す力強さに満ち溢れている。まだ死ぬつもりはない、と、高らかに宣言しているかのようだった。あれならまだまだ現役でいられそうだ。クーゴたちは安心して表情を緩めた。再び、チューンされたフラッグを見上げる。

飛びたい。2機の機体は、そう叫んでいるように思う。

よろしく、と、クーゴは自分の愛機に語り掛けた。頭部の窓に光が反射して煌めく。まるで、フラッグもクーゴを主と定めたかのようだ。

試作型も兼ねているため付き合いは短いかもしれないが、それでも大切な愛機だ。自分もその機体に恥じぬパイロットでありたい。

クーゴが決意を新たにしたときだった。

「おお、これが中尉の乗るフラッグですか！」

聞き覚えのある声に振り返る。見覚えのある仲間が2人、そこにいた。

彼らは厳かな表情で、自分たちに敬礼した。

「ハワード・メイスン中尉、ダリル・ダツジ曹長。グラハム・エーカー中尉の要請により、対ガンダム調査隊に着任しました」

「来たな。歓迎しよう、フラッグファイター」

「久しぶりだな、2人とも」

2人に対し、クーゴとグラハムも敬礼を返す。彼らと顔を合わせるのは久しぶりだ。

最近が多忙のため、きよわく虚憶のヴィジョン共有を使う。多元世界技術解

析および実験チーム”はあまり身動きが取れなかった。何せ、クーゴとグラハムたちが隊ガンダム調査隊に任命され、多忙の真つただ中にいたためである。ガンダムの調査のため、他の部隊にいる面々も色々あったのだ。

その中からグラハムは彼らを引き抜いてきた。ハワードとダリルも、”多元世界技術解析および実験チーム”に属するチームメイトであり、クーゴのコーヴァレンター能力と相性がいい人間でもあった。彼らがピンポイントで引き抜かれ、調査隊にやって来た——意図された采配に、クーゴはグラハムを見やる。彼は悪戯っぽく目を細めた。

配属されてきた2人も察していたようで、子どもが悪戯を成功させたような笑みを浮かべる。クーゴは思わず苦笑いした。上層部にばれたら、違う方面で問題になるだろう。

このことを知った”多元世界技術解析および実験チーム”の面々が、ハワードたちにブーイングを浴びせる姿が容易に想像できる。特にアキラあたりはふて腐れそうだ。

どんな建前で2人を引き抜いたのかは知らないが、ハワードとダリルは実力もあるし人柄もいい。信頼できる相手であることは間違いないし、グラハムの人事は正しいといえよう。

布石は万全、といったところか。落ち着きがないように見えて、案外抜け目のない男だ。

クーゴがそんなことを考えたとき、グラハムの眉がぴくりと動いた。「今、失礼なことを考えなかったか？」とでも言いたげな眼差しである。

「いいや何も」と目で伝えて流す。我ながら、いけしやあしやあとしている。クーゴは心の中で苦笑いした。

「ガンダムを追いかけける傍ら、虚憶きよわくの調査をする部隊の出来上がりつてわけか」

「もしかしたら、虚憶きよわくの中に『ガンダムに対抗できるヒント』があるかもしれないって、上も判断したんじゃないかな」

クーゴの言葉に、ベリーも楽しそうに笑った。エイフマンも「多元世界技術解析および実験チーム」からもたらされる情報には興味があったようで、ゆるく目を細める。

これからが本番だ。クーゴは再びフラッグを見上げる。虚空の向う側に浮かぶのは、自分たちを見逃した片割れ——大きな輪の付いた白いガンダム。

リターンマッチは近い。クーゴはなんとなく、そんな予感を覚えていた。



女性はじつとテレビを眺めていた。映し出されるのは、コメンテーターとジャーナリストの討論会である。……といっても、いらぬ発言をしたコメンテーターがジャーナリストにやりこめられている状態のため、討論が成り立っているかと訊かれると微妙であるが。

ちなみに、この場面に至る数分前、コメンテーターは『ソレスタルビーイングを国際警察にすればいい。維持費もいらぬし一石二鳥だ』と発言していた。その発言に弾かれたように反論の口火を切ったジャーナリストは、コメンテーターの発言を追及し始めたのである。穏やかな物腰の奥には、どこまでも苛烈で攻撃的な意志がある。世間の片隅に生じた綻びに目を留め、そこを見逃して世界を運営しているこうとする人間たちを痛烈に批判する青年に、女性は友人のことを思い出した。流石はエルガン・ローディックの秘蔵っ子だ。激情家である所まで似ている。

今頃、国連でも同じような意見を言った相手を、エルガンが（言論によって）一網打尽にしているのだろう。

その光景が、異様に鮮明に思い浮かんだ。まるで、生中継されてい

るかのように。——否、女性にはその光景が『視えて』いた。

「本来なら、我々が成し遂げなければならなかったことだ。それらすべてを彼らに丸投げする？　なんて浅はかな」

物腰は柔らかいものの、エルガンが纏う覇気は天地を揺るがしかねない強さがあつた。

上が上なら、下も下か。女性は苦笑し、『同胞』たちの活躍を見守る。彼らだって、やりたいことや進みたい道があつただろうに、女性の理想と約束のために協力してくれていた。感謝してもしきれない。

やりこめられた議員／コメンテーターが小さく縮こまっていた。完全論破を成し遂げたエルガン／青年は、淡々とした様子で椅子に座る。何事もなかったかのように、エルガン／青年は司会役として話を進行させた。

血縁関係があるわけでもないのに、2人の癖や性格はとてもよく似ている。まるで親子みたいだ、と女性は思った。特に、大人しそうに見える反骨精神が強いところや、各方面——特に技術系に関する知識を有しているくせに、愛読書はファンタジー小説や童話だということころは。

青年が好きな話は『ピーターパン』で、両親がプレゼントした絵本を大切に持ち歩いている。大人になった今でも、良くも悪くも純粋な眼差しと夢見る心を忘れていない。

彼の眼差しは、多くの大人たちが見過ごす／見ようとしない世界の矛盾を見つめていた。澄み切った夜闇色の瞳は、都合の悪いものから決して目を逸らさなかった。そこがいい。

「グラン・マ」

ふと、声をかけられた。振り返る。突き出されたのは、青を帯びた灰色の毛をしたナキネズミ（ここでは「架空の生き物」）の人形だ。顔を上げる。緊張した面持ちの子どもが2人、こつちを見返してい

た。ちら、と、互いにアイコンタクトで合図を送りあっている。

片や、宇宙を思わせるような藍墨色の髪と蒼い瞳を持つ少年。片や、太陽を思わせるような金色の髪に若葉色の瞳を持つ少年。

彼らは何をしようとしているのだろうか。能力を駆使しようとする前に、彼らが動くほうが早かった。

「げんきで、ちゅー、か」

たどたどしく紡がれたのは、生来の少年を知っている人間から見れば、らしくない言葉使いであった。

人形の首が、ぎこちなく動いた。もう一度、少年は「げんきで、ちゅー、か」と、念を押すように言う。

少年2人はじつところらを見つめていた。緊張した面持ちで、夏でもないのに汗をかいて、ごくりと生唾を飲み干している。

『全然反応しないぞ』

『だ、大丈夫だよ！ 練習ではうまくいったし、アニエスたちだって『おもしろい』って言ってたじゃないか！』

『まさか、全然元気にならなかつたか？ むしろ怒らせたか？』
『う、うわあああああ！ グラン・マ、何でもいから早く何か言つて！ 無反応が一番こたえるんだよー！』

『難しいな。どこをどうすればいいんだ……』

流れてくる思念は大パニックそのものだった。補足するが、この2人は一切会話していない。目でちらちら合図し合っていただけだ。

やっていることを考えていることと表情の落差に、女性は思わず噴き出した。それを見た少年2人は、安堵したように表情を緩ませる。彼らの表情は、そこからすぐに、花が咲いたかのような笑顔へと変わった。顔を見合わせ、即座に女性へ向き直る。

「元気が出たよ。ありがとう」と礼を言えば、少年2人は嬉しそうに頷く。そしてすぐに、彼らはハイタッチした。

女性が元気になったと思つた少年2人は、楽しそうに談笑しながら外へと駆けだして行つた。女性は2人の背中を見送る。

いつかの日、彼らと同じ姿と名前を持つた指導者たちを見送つたときのように。けれど、あのときとは違い、傍に誰もいない状態で。女性**は**ぼろぼろと涙をこぼした。

口元を抑えて嗚咽を堪える。いかないで。いかないで。死なないで。いなくなつちやいやだよ。いつか聞いた／叫んだ声が、頭の中に反響した。それにつられてしまったせいで、涙が止まってくれない。

腕で涙をぬぐい、テレビを消す。画面に映つた自分の顔はとても情けなかつた。大きく深呼吸して、頬を叩く。思い出と感傷に浸るのはここまです。自分も頑張らなくては。前を向く。

——さあ、行こうか。

「グラン・パ。私、今日も頑張つてるよ」

だから心配しないでいいよ。これからも見守つていてね。
彼の持つていた能力と同じ色の空を見上げて、女性は微笑んだ。



AEU特務部隊OZとフリニア・ユニオン

二一 大 国 家のガンダム追っかけが率いる部隊。

今回の作戦メンバーを考えると、その言葉がしつくりきしてしまうのは何故だろうか。

操縦桿を握り締めながら、クーゴはそんなことを考えた。

AEU特務部隊OZから派遣された部隊の総大将は、ライトニングバロンと名高いゼクス・マーキスである。彼の副官として配属されたルクレツィア・ノインは、ゼクスとは旧知の仲で、所謂ツーカーの間

柄らしい。ただし、彼らはグラハムと少女のような恋愛関係ではないようだった。

グラハムが生温かな眼差しを向け「キミも頑張れ（超要約と意識）」と言っていたけれど、そのアドバイスは見当違いだったのではなからうか。ゼクスとノインは意味を理解していないようで、顔を見合わせて首を傾げていた。息ぴったりでお似合いだとは思いますが、本人たちにその気がないなら仕方ないだろう。

話が大幅に逸れてしまったが、自分たちは現在、テロリスト狩りに来ていた遊撃隊の裏部隊を襲撃するため現場に急行している。ゼクスとノインが率いる部隊とは、現地で落ち合う予定となっていた。合流ポイント到着まで、あと数分。ガンダムたちとの戦いも近い。

（しかし、よく考えると、ガンダムっていつぱいいるよな）

コロニー製のガンダムが4機、ソレスタルビーイング製のガンダムが5機。確認されているだけでも、世界には9機のガンダムが存在していることになる。他にも脅威となりうる機体は沢山いるが、自分たちが中心に追いかけているのはガンダムであった。

しかし、なぜだろう。何とも言えない嫌な予感がする。もしもこの先、万が一、ガンダムという機体の数が増えるようなことが起きたら、確実にゲシュタルト崩壊しそうな人間が部隊みうちにいた。……誰かって？ 今回ブ■タニア・ユニオン軍を率いているグラハム・エーカー中尉その人である。

AEUの軍事演習場でガンダムの降臨／蹂躪を目の当たりにしてから、彼はあの機体に魅入られてしまっていた。その結果が現在の有様である。

普段はまだいい。戦闘中がまずかった。すさんだ心に武器は危険だと言われているが、『グラハムに意中の少女』もしくは『グラハムにガンダム』も充分危険な組み合わせだとクーゴは考えている。居合わせた人間の気苦勞的な意味で、だ。

クーゴの頭と胃に鈍い痛みを感じたのは、緊張しているからという

理由だけではなさそうだ。出どころはわかっている。精神的なものだ。これからストレスフルの戦場に飛び込むのだから、気を引き締めなければやっていられなかった。

自分たちの後ろにダリルとハワードが続く。その少し後ろには、ブリタニアが派兵した機体が続いていた。現場に到着する。ゼクスたちの部隊とほぼ同じタイミングで、遊撃隊たちの前に現れた。両勇共に準備は万全であった。通信は良好とは言い難いものの、作戦のすり合わせはとうに終えている。

あとは、作戦を始めるだけだ。

偶然を装って、遊撃部隊もろともガンダムたちを撃破するのみ。

「まさか、我々がAEUと合同で作戦に当たるとはな」

「今回の任務は特命だ。複雑な事情があるのだろう」

意外な展開に、ダリルが感慨深そうに呟いた。ハワードは任務の裏にキナ臭さを感じたようだが、そこについては言及しないことを選んだらしい。

対して、グラハムは色々な意味でテンションが高かった。目を爛々と輝かせ、僚友と敵部隊を確認する。

「僚友はライトニングバロン、敵はガンダム……。心躍るな」

「ただし、黒の■士団や■ツターロボ、天秤座の機体、レッドシヨルダー等にも注意すること。要は気を抜いたり、むやみな単騎突撃は控えろってことだ」

「わかっていると言ったー！」

クーゴの指摘を本当に理解しているのかわからないが、グラハムは不敵な笑みを浮かべて返答する。翠緑の瞳には一切の迷いはない。あの日、AEUの演習場で降臨した青と白基調のガンダムへ向けられていた。

AEUとの協力作戦を通してしまっただけでなく、作戦とはいえブ

リタニア・ユニオンの領土であるエリアー1——旧国名・日本への『侵入』までもを許可させたトレーズ・クリシュナーダの手腕は驚嘆に値する。

ゼクス曰く、『トレーズは魔法を使った』らしい。クーゴもそれに同意見である。見返りとして払ったカードは何だったのだろうか。詳しいことはゼクスでも知らないようだし、トレーズ本人も黙して語らなかった。

「すべては仕組まれた計略……」

クーゴはふっと笑みを浮かべた。他人から見たら、これ以上ない悪い笑みだったろう。

時代劇で私腹を肥やしていた悪代官も、こんな気持ちだったのだろうか。

そんなクーゴに触発されたのか、グラハムとゼクスも頷き返した。不敵な笑みを更に深くして、言葉を紡ぐ。

「だが、これはあくまでも偶然の遭遇戦」

「エリアー1内での特別演習に参加したA E U特務部隊O Zと哨戒任務中のブリ■ニア・ユニオン軍は、偶然にもテロリストの一団を発見」

「——よって、それぞれに賊を殲滅すべく、部隊を展開させたという筋書きだ」

改めてグラハムとゼクスの言葉から考えると、悪意に満ちたシナリオだ。エレガントを地でいくトレーズからは想像できない展開である。

いいや。案外、彼は彼なりにはじめと覚悟を背負って、この脚本を描いていたのかもしれない。もしくは、誰かからこの脚本を譲り受けたか。

だが、敵はそれを看破したようだ。即座に

A E U特務部隊O Zとブリタニア・ユニオン軍を迎撃する体制を整える。指揮官が優れていることもあり、遊撃部隊の反応は早かった。トレーズもそこは見越しているだろう。だったら話は早い。クーゴが操縦桿を握り締めたとき、敵部隊の会話を拾い上げた。

「どうやら、彼らは己を囷にして（主に軍事力を有する陣営に対する）敵味方の判別をしていたようだ。釣られてくれた、と、彼らは不敵に笑っている。」

そんなことはこちらも承知だ。互いが互いにとっての釣り餌であり、獲物である。釣ったのはどちらか、釣られたのはどちらか。

「確かめさせてもらうぞ、Z ■ X I S I！」

ゼクスが搭乗する機体——獅子座の名を冠するMSが唸りを上げる。

「キミたちが私の想いを受け止めるに足る存在であるかどうかを！」

グラハムが搭乗するユニオンフラッグが空を舞う。クーゴの注意などなんのその、彼は迷わず白と青基調のガンダムへ向かって突撃した。

「わかってない……！」と頭を抱えなくなったクーゴは何も悪くないはずだ。通信の向うで、誰かが苦笑いした気配がする。

あちらには平和そうだから、珍妙な光景に見えるのかもしれない。それはそれで羨ましいことだ。まあ、話は完全に別次元になってしまったが。

クーゴは腰の鞘からガーベラストレートとタイガー・ピアスを抜き、構える。敵も味方も大混戦。一瞬でも気を抜けば、待ち受けるものは『死』一択だ。気は抜けない。

■の騎士団も、ゲツ ■ーロボも、■ンクーガも、天秤座の機体も、そして——ガンダムも、機体性能差から考えると強敵だ。だが、相棒たちとフラッグで、どこまで戦い抜けるか。

まずは、グラハムの援護に回らなくては。クーゴは操縦桿を握り締め、暴走気味な相棒の元へと駆けつけたのであった。



「ソレスタルビーイングは世界を試した。だからこそ、今、世界に試されていると言っても過言じゃない」

悪意に満ちたシナリオの虚憶きよおくをまとめ終えて、クーゴはぼつりと呟いた。出勤要請に備えていた調査隊の面々が、納得したように映像画面を見やる。クーゴもそれに続いて画面を見た。

テレビ画面には、ユニオンの傘下から離れてエネルギー権の主張をしたタリビアの大統領が演説していた。ユニオン軍は反逆者である彼らを鎮圧するため、グラハムやクーゴらを含んだ部隊を派兵する。この時点で、ユニオンもタリビアも予想しているのだ。ソレスタルビーイングの来襲を。

問題は、『ソレスタルビーイングがどちらにつくか』という点だ。もしも彼らがタリビアにつけば、その強硬姿勢を容認してしまうことになる。対してユニオンの武力鎮圧を静観すれば、「戦争根絶のために介入する」という彼らの理念そのものが瓦解してしまう。

文字通りの八方塞がり。流石のソレスタルビーイングも万事休すだろう——それが、大方の意見だ。タリビア大統領もユニオン代表も、嫌な笑みを浮かべながら戦況の流れを見守っているに違いない。政治とは常に駆け引きの世界にある。

もつとも、ソレスタルビーイングが自らの理念を貫き通すために取りうる選択肢は他にもある。イオリア・シユヘンベルクの声明をよく聞いていれば、なんとなく思い浮かぶ結論だ。『武力を持ちうるもの

すべてが攻撃対象になり、争いを起こそうとするものも含まれる」という言葉に、答えはあった。

「俺がソレスタルビーイングだったら、タリビアとユニオンの両方を潰す。それだって、方向性は違うけど『中立』であることには変わらない」

クーゴの発言に、グラハムが納得したように頷いた。

「成程。『喧嘩両成敗』のようなものか」

「文字通り、茨の道だろうがな」

クーゴは険しさを隠すことなく眉間にしわを寄せた。虚憶きよおくで自分たちが乗った作戦も充分『闇討ち』と言えるレベルだが、政治家の考えていることは恐ろしい。何を選んでも、ソレスタルビーイングの存在価値に影を落とすことになるだろう。

どちらのシナリオがいいかと問われたら、クーゴは迷わず「トレーズ・クリシユナーダがいい」と答える。ソレスタルビーイングの存在意義にダメージは与えられないけれど、兵士として参戦して——言い方は悪いが——気持ちよく戦えるのは、彼の考えた作戦だからだ。用は心の問題である。

流石は優雅で気高き敗者しょうしや。トレーズは彼自身が「勝利条件」と定めた条件すべてを満たし、己の敗北という形で事実上の勝利者となった。『ZEX■Sとの最終決戦』に勝つことより、『人類に人の心を示す戦い』に勝つことを選んだ結果である。

何を勝利とするかは人それぞれだ。相手を打ち負かすことだったり、自分がより多くの利益を得ることだったり、損失を最小限にとどめることだったり、他者により多くの損害を与えることだったり、相手に時間を浪費させることだったり、挙げると本当にきりが無い。

そんなことを考えていたとき、連絡が入った。ソレスタルビーイングのガンダムたちが動き出したらしい。行先はタリビアだ。クーゴ

も立ち上がり、自分の愛機に飛び乗る。今回がカスタムフラッグの本格的な初戦闘である。

カタパルトが開く。先陣を切って飛び出したのはグラハムのカスタムフラッグであった。クーゴも彼の後に続き、空へと飛び出す。振り返れば、ダリルとハウードのユニオンフラッグが随伴してくれていた。

「ついにガンダムとご対面ですか。楽しみですよ、中尉」

通信越しからのハウードの声は、やや浮き足立っているように思う。理由はわからなくはない。

「私もだ」

グラハムも闘志に満ちている。彼の想いを代弁するかのようには、チューンされた彼の愛機がスピードを上げたような気がした。クーゴは苦笑いしつつ、それに続く。

新たな力を得たフラッグが、どれだけガンダムに迫ることができているのか。自分たちのために頑張ってくれた技術者たちの想いを背負っているのだ。前回のような敗北は許されぬ。

空を切り裂くようにして、4機のフラッグが翔け抜ける。目的地であるタリビアは、もうすぐそこだ。クーゴは操縦桿を強く握りしめる。

戦況はユニオン軍が制空権を手にし、タリビアは地上MS部隊を主要3都市に展開している。一触即発と称しても過言ではない。ソレスタルビーイングがどんな行動をとるかで、MS部隊の動きは一変するだろう。はてさて、状況はどう転ぶのか。

自分たちが向かう都市は、一番東側にある都市だ。どのガンダムが現れるかは不明だが、目標通り『一戦交える』ことは可能だろう。そこで撃墜あるいは鹵獲できれば御の字で、敗北しそうな場合は生きて撤退すればデータが手に入る。それを活かせば、撃破や鹵獲だって夢

じゃない。

飛行形態のフラッグ4機は目的地に到着した。既にガンダムは武力介入を行っていたようで、AEUの軍事演習場に降臨した天使と天女が一騎当千の活躍をしていた。天使の左腕に装備されていたブレードが、タリビアの地上MS部隊を薙ぎ払っていく。天女は機動力を活かしつつ、体当たりでMSを弾き飛ばす。瞬く間に部隊は全滅した。

どうやら、ソレスタルビーイングはタリビアを紛争幫助国と断定したらしい。今頃、タリビアの大統領はどんな顔をしているのだろうか。

ソレスタルビーイングがどんな判断を下そうと、政治家は即座に作戦を変えていくだろう。己の政治生命、ひいては国民のために。

「これで俺たちユニオン軍は、大手を振ってガンダムに仕掛けることができる、……ってわけか」

クーゴはぼそりと呟いた。自分の声がやけに暗いことに気づき、ため息をつく。人の心に絶望した人々は、『薄汚い世界から目を逸らすまいとして、そればかりを見るようになってしまった』からではなからうか。なんとなくだが、そんな気がした。

空に展開していたユニオンフラッグが、丸腰となったタリビア防衛のために動き始めた。しかし、どのフラッグもガンダムに追いつがることは敵わない。ガンダム2機は悠々と撤退していく。クーゴは操縦桿を操作し、一気に加速した。グラハムも同じ思考回路だったように、2機のカスタムフラッグが弾丸のように飛び出した。

体に凄まじいGがかかる。クーゴはわずかにうめき声をあげたが、それでも必死に追いつがった。負けられない。負けたくない。その意志をもってして、体にかかるGを耐え抜く。恐ろしいまでもの加速を得たフラッグは、ガンダムとの距離をぐんぐん縮めていく。これなら充分、クーゴたちの射程圏だ。

「これでガンダムと戦える……！ 見事な対応だ、プレジデント！」

仕掛けたのは、グラハムのフラッグだった。飛行形態のまま、新型ライフルによる威嚇射撃を行う。天使はそれを躲したが、その隙をつくような形でフラッグが回り込む。射撃は四、本命は逃走経路を潰すことだ。そのまま即座に空中変形。相変わらず、グラハムの腕前には惚れ惚れする。戦闘中の言動はあれだが。

クーゴも天女の前に躍り出た。グラハムが操縦するフラッグの機動性に動揺していた天使のパイロットとは違って、天女のパイロットは落ち着いているように見える。むしろ、クーゴがここに来ることを予感していたかのような佇まいだった。まるでステップを踏むかのような、軽やかな動き。

脳裏に浮かんだのはオフ会の光景だった。『エトワール』が楽しそうに笑いながら、くるくるとステップを踏む姿である。機体の動きはそれとよく似ていた。

「踊りましょう？ 空の護り手さん。私は一途でしてね、貴方以外の男は眼中にないんです」

不意に、声がした。女性のものだった。通信、だろうか。クーゴは顔を上げる。天女は相変わらず、ただ静かにそこにいた。

随伴しているハワードとダリルなど眼中にない。むしろ、他の何かが近づくことさえ許さない。厳かで神々しい空気が漂っていた。

ハワードとダリルは動かない。いや、動けないのだ。彼らは毛色の違う空気に気圧されてしまっているようだ。

クーゴは操縦桿を握り締める。天女はクーゴとクーゴの駆るカスラムフラッグを御所望のようだ。

今なら、グラハムとやり合っているガンダムのパイロットの気持ちかわかるような気がした。

天使のパイロットはグラハムがなぜガンダムに——しかも己の機体に執着するのかわからないだろう。おそらく、軍事演習場の観客席

など眼中になかったはずだ。

初めての介入場所に、偶然グラハムが居合わせた。彼にとってそれが運命の出会いであっても、ガンダムのパイロットにとってはそうだとは限らないだろう。可哀想に、と、クーゴはグラハムに迫られる天使の方をちらりと見た。

何度見ても、見直しても、どうしても『グラハムと少女のやりとり』を連想してしまう。Gのせいで頭に影響が出てきたのだろうか。いや、もしかしたらストレスのせいかもしれない。とりあえず、浮かんだ光景を片付けて前に向き直る。

天女は相変わらずそこにいた。じっと、静かに、クーゴの動きを待っている。ハワードとダリルに対しては、「貴方たちはお呼びびやないんです。邪魔しないでくださいお願いします」と言いたげな殺気(?)を放っていた。

どうします? と、2機のフラッグが心配そうにこちらを見た。

そんなことは決まっている。クーゴは不敵な笑みを浮かべた。

「熱烈なアプローチをどうもありがとう、レディ。ご期待に添えるかどうかはわからんが、精いっぱいエスコートさせてもらうとしよう。

——そこを、動くな！」

クーゴはそう言うなり、即座にライフルを撃ち放った。動くなど言われて動かないでいる奴なんていない。ガンダムは何の苦も無くライフルを躲した。もちろん、そこは想定内だ。

射撃に気を取られている間に、回り込む。しかし、そこは向うも想定していたようで、ガンダムはステップを踏むようにして回避した。勢いをそのままに、今度はガンダムが体当たりを仕掛けてきた。全速旋回で躲し、再び遠距離射撃を行えば、ガンダムは特徴的なステップを踏んで回避した。

今度は相手が攻める番のようで、攻撃方法は体当たりではない。展開していた光輪を、フラッグに向けて討ち放ってきた。1つ、2つ、3つ、4つ。次から次に光の輪が飛んでくる。複雑な軌跡を描くそれ

は、巻き込む範囲が広い。何発も放たれると、流石のフラッグも身動きしづらくなる。相手はそれを狙っているのだろう。

そのうちの1つが、クーゴの眼前に迫った。躲しきれない。クーゴは反射的に、鞘からガーベラストレートを引き抜いていた。

居合切り。ガーベラストレートの光の輪を真つ二つに切り裂いた。居合で『飛んできたもの』を切った経験は何度もあるが、今回はぶっつけ本番である。

「あ、危なかった……！」

失敗してたら直撃だ。確実に墜とされていただろう。こめかみを汗が伝った。次の瞬間、今度はレーザーガンが打ち放たれる。クーゴは再びガーベラストレートを振るった。

レーザー弾はテスト通りに真つ二つになる。切って、切って、切り裂いて、クーゴはガンダムと距離を詰めた。その勢いのまま、ガーベラストレートを振りかぶる。

しかし、ガーベラストレートのガンダムを一刀両断することは叶わなかった。濃い緑と薄い緑の粒子とぶつかり合い、バチバチと火花を散らしている。

「シールド!? あの粒子か!」

ばちん、と、火花が爆ぜる。ガンダムとフラッグは互いに弾き飛ばされたが、すぐに体制を整えた。

そうしてまた、2機は空を翔る。ぶつかり合う。躲しては攻撃し、攻撃しては躲し、切っては結び、切手は結びを繰り返した。

心が躍る。こんな気持ちになったのは、随分と久しぶりな気がした。

このままいつまで踊っていられたら——なんて、バカなことが頭の片隅に浮かんだときだった。何かが水に落ちるような音がした。視界の端に水しぶきが舞う。

青と白基調のガンダムは海中へと沈んでしまった。グラハムが墜したのか。いや、違う。彼は天使を逃がしてしまったことを惜しく思っているようだった。

クーゴは天女の方へと振り返る。ガンダムはじつところちらを見ていたが、ややあつて、寂しそうな声が響いた。

「ごめんなさい。行かなくちゃ」

緑の粒子が舞う。深緑の光がきらきらと瞬いた。そこに混じって、蒼が煌めく。

「……では、また今度」

次の瞬間、ガンダムは恐ろしい勢いで空の向うへと飛んでいく。あつという間に、白い機体は見えなくなってしまった。

クーゴたちは啞然とするしかない。ガンダムの速度は、摩擦熱でオーバーロードを起こし、自己崩壊してもおかしくない速さだったからだ。

沈黙。これまた見事な敗北だ。クーゴは深々と息を吐き、コックピットにもたれかかった。通信が入る。モニターには覇気のないグラハムの顔が映し出された。

「逃げられたな……」

「なんでもありかよ。すげーな、ガンダムって」

顔を見合わせて大きくため息をつく。カスタムフラッグでどうか追いつがることはできたが、やはり、撃破も鹵獲もまだまだ遠いようだ。

水中対応、オーバーロード必須の速度。ガンダムという機体は、適応性が高いようだ。残念ながら、チューンされたフラッグにも水中にまで適応していない。

このデータが出たら、エイフマンとビリーおよび技術班はてんやわんやになるだろう。水中対応から耐久速度の底上げ……分野違いのクーゴでさえ、考えるだけで気が遠くなる。

クーゴが深々と息を吐いたとき、不意に笑い声が響いた。声の主はグラハムである。

不敵な笑みが徐々に崩れて、相手を慈しむような笑みに変わる。彼は誰に／何に思いを馳せているのだろうか。

「また会おう、ガンダム。会えない時間が、我々の間の想いを育てると信じて」

「……お前は本当にぶれないんだな」

クーゴは額に手を当てた。俯くと余計に気が重くなるので、あえて天を仰ぐ。

タリビアの空は快晴。

泣きたくなるくらい真っ青な、美しい色をしていた。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

幕間。 絹江・クロスロードのモテ期到来疑惑＋α

沙慈・クロスロードは悩んでいた。

悩みの種は、学業でもなければルイスとの交際がうまくいかないとかでもない。両方とも順風満帆と言える。特に後者は、ルイスの両親からお墨付きをいただいていた。

というか、沙慈の悩みは沙慈自身のことに関係するものではなかった。沙慈の姉——絹江・クロスロードに関係することである。

「はあ……」

沙慈・クロスロードはため息をついた。

姉の絹江・クロスロードは、4つ年上の社会人だ。職業はフリーのジャーナリストで、最近はソレスタルビーイングについての調査を行っている。

亡くなった父の遺志を継いでジャーナリストとなった彼女は、父譲りの正義感と粘り強さで「真実」をひたむきに追い続けていた。無銘ではあるものの、業界では中堅クラスらしい。

絹江と沙慈の父は有名なジャーナリストであったが、ある事件を追いかけていた際、事故に巻き込まれて亡くなった。絹江は「父は真実に近づいたために殺された」と言っており、そこからジャーナリストへの道を進んだという。

仕事一筋で多忙な絹江だが、沙慈の面倒をきちんと見てくれた。そのことにはとても感謝している。

しかし、家族と仕事に忙殺された絹江を見ると、思うのだ。姉の幸福は大丈夫だろうか、と。

「はあ……」

沙慈・クロスロードは深々とため息をついた。

絹江は「彼氏いない歴〃年齢」を地でいく。本人も「結婚？ 考え

たこともないわね」と、あつけらかな態度を貫いていた。そんな余裕もないし、仕事に集中したいのだ、と。

ルイスにそこを攻められた絹江が、ルイスを見送った後に、「ふぎけんあの（以下略、および自主規制）」と激昂して手が付けられなくなった一件は忘れられない。結婚願望はあるようだ。

彼女のPC履歴を確認すると、たまにだが、有名な掲示板の——特に、嫁姑小姑問題に関するスレッドが紛れ込んでいる。沙慈もこっそりそこを覗いてみたのだが、悪口やら仕返しやらの話題で盛り上がっていた。その中に「弟の恋人がひどい」という話題がちよくちよく出てきた。

内容も、どこことなく沙慈とルイスのやり取りとよく似ている。終いには、「弟の恋人に『お姉さまは結婚しないんですか?』と尋ねられた。ふぎけんあの（以下略、および自主規制）」という書き込みがあった。絹江が激昂したときに言っていたことそのままだった。

最近はその発言も少しづつ和らいできたようで、「腹立つときもあるけど、でも、嫌いにはなれない。根はいい子みたいだから」という書き込みを見かけるようになった。この間引つ越してきたお隣さん——イデア・クピディターのアドバイスが効いているのかもしれない。

「はー……」

沙慈・クロスロードは憂鬱であった。

「どうしたのよ沙慈。さつきから、ため息ばかりついちゃって」「珍しいな。お前がそんな風に悩むなんて」

そんな自分に声をかけてきたのは、金髪碧眼の少女——結婚を前提に交際を続ける恋人・ルイスと、茶髪の青年——沙慈の先輩でありグライフ教授の孫・悠風^{ゆうなぎ}だった。

沙慈とルイスは、先輩である悠風から勉強を教えてもらっている。

今は、今日の勉強会が終わり、雑談をしていた真つ最中だ。何もなきときは、どうしても気になって仕方がない。

近々沙慈は、奨学金で行ける研修旅行に参加する。宇宙に浮かぶ機動エレベーターおよびステーションを見に行くのだ。沙慈の夢は宇宙技師になることだ。未来の仕事を見学および体験できる希少なチャンスである。

その間に、姉に何かあったらどうしよう。問題はかなり切迫している。絹江は「沙慈がルイスに何かやってしまう」ことを心配しているようだが、沙慈は逆に「姉が何かして／やられてしまう」のではないかと気が気でないのだ。

沙慈はゆつくりと顔を上げる。ルイスと悠風が心配そうにこちらを見返していた。「心配事があるなら相談してくれ」という眼差しに、沙慈は意を決して話すことにした。「姉さんのことなんだけど」と言つて、沙慈は言葉を切る。ごくり、と、2人が唾を飲んだ。

幾何の沈黙を得て、沙慈はゆつくりと言葉を紡いだ。

「……近々、僕に、お義兄さんができるかもしれない」

「え」

「え」

「しかも、そのお義兄さん候補、2人もいるんだ……!」

「ええええええええええええ!?!」

「お義姉さまが、三角関係の中心に!?!」

学校のカフェテラスが、ルイスと悠風の悲鳴によつて埋め尽くされた。



「はつくしよん！　うう、風邪かしら……」

絹江・クロスロードは、言葉にできない薄ら寒さを感じて腕をさすった。

絹江のデスクは、イオリア・シュヘンベルクおよびソレスタルビーイングの資料が無造作に積み上げられている。

今日も帰りは遅くなりそうだ。徹夜も確実である。

「先輩、体調管理はきちんとしてくださいよ。寝込んでいる間にスクープを逃すかもしれないんですから」

不意に、どこか棘のある、生意気な声が聞こえてきた。差し出されたのは、はちみつとレモンが使われた温かいジュース。見上げれば、藍墨色の髪と瞳を持つ白人の青年がため息をついていた。彼は性格と態度にやや難があるが、夢や理想、およびそれを追いかける人を大事にする。

棘だらけの言葉とは裏腹に差し出されたジュースは、明らかに絹江の体調を気遣うものだ。ありがとう、と礼を述べれば、彼は照れくさいところがあるのか、すぐに愛用のビデオカメラを取り出して映像をチェックしていた。持つべきものは、同じ目標しんじつを追う仲間であり戦友である。

絹江はジュースのふたを開け、飲む。レモンの酸味とはちみつの甘さが絶妙にマッチしていた。ほう、と息を吐けば、後から温かさがじんわりと胸の中に広がっていく。疲れと緊張が解けていくかのようだ。その様子を心配そうに見守っていた青年と目が合う。彼は即座にそつぽを向いた。

相変わらず、ソレスタルビーイングの行動は不明な点が多い。イオリア・シュヘンベルクの経歴についても、組織に関する情報も少ない。

それでも、絹江個人で調べていたときより、同じものを追っていた青年が共同戦線を持ちかけてくれたおかげで、多少はやりやすくなっ

たと思う。

かねてからイオリア・シユヘンベルクの研究をしていたという後輩にまで協力を仰ぎ、(やや強引にだが)了承させてくれたときは本当に感謝した。後輩も後輩で、本当は断ることだってできただろう。でも、彼も、最後は自らの意志で「絹江に協力する」と言ってくれたのだ。感謝してもしきれない。

(後輩くんも大変ね)

『気弱なドジっ子』を地でいく、もう1人の仲間のことを考える。病的なまでに白い肌と、月光を思わせるような白銀の髪。常にオドオドしていて挙動不審な、小動物的な草食系男子だった。沙慈をもつと臆病にすればあんな感じになっていたのかもしれない。

最近には彼にも無理をさせてしまっている。この前会ったときは、目の下に大きなクマをこしらえて、足取りがふらふらとしていた。それでも後輩は「大丈夫です。力になりたいんです」と健気に笑い返してくれた。流石に、絹江も青年と協力して無理矢理休ませた。

その翌日、「熱が出て倒れた」というメールが来て、ああやっぱりと脱力したものである。

メールが届いてから3日程経過したが、彼は元気になっただろうか。

「無理させておいて何を」と言われるかもしれないけれど、心配である。

「そういえば、後輩のことなんですけど」

絹江の思考を読み取ったかののように、青年が言った。絹江は思わず青年へ視線を向けたが、彼は相変わらずそっぽを向いたままだった。

「元気になったみたいですよ。『近々合流します』って言っていました」「わかったわ」

それなら安心だ。絹江はジュースのキャップを閉めて、端末の画面とにらみ合う。イオリア・シユヘンベルクの情報やソレスタルビーイングの行動を今までまとめたものだ。最近の動向はタリビアに対する武力介入である。ユニオンとタリビアに利用された形となったが、彼らは彼らの理念を通しただけである。声明の内容を考えれば妥当な行動と言えよう。

声明内容のこと細かく覚えている人間が少ないというのもある。彼らは確かに、『戦争を引き起こすことを手助けする国や団体も武力介入の対象とする』と宣言していた。戦争幫助国も対象だと、きちんと明言していた。ソレスタルビーイングを擁護するつもりはないけれど、今回政治家たちがとったやり方は汚い。

『……汚い奴らめ』

この知らせを聞いたとき、隣にいた青年が吐き捨てた言葉だ。

おそらく彼は、全てを察していたのだと思う。ユニオンとタリビアの駆け引きも、政治家たちが張り巡らせた罫も、民衆の心がどう動くかも。

苛立ち紛れに舌打ちを繰り返していた彼は、その勢いのままテレビ番組へと出演。平時と同じように、けれど苛烈に、コメンテーターを論破していた。

『僕はソレスタルビーイングを擁護するつもりはありません。ただ、彼らを利用し私腹を肥やそうとする奴らや、そういう奴らを隠ぺいしようとする奴らが許せない』

『ソレスタルビーイングの出現を利用し、今まで行ってきた不正をなあなたにしようとしている奴らがいることは事実です』

『世間が、ソレスタルビーイングに夢中になっている。こと自体に、僕は警笛を鳴らしたい。他にも、見るべき問題や語るべき問題があるのではないですか？ 例えば――』

ソレスタルビーイングを追う傍ら、青年は他にも様々な問題を並行して追いかけている。それでも体調を崩さず、ほぼ不眠不休に近い形で活動を続けているのだ。ジャーナリスト歴は絹江の方が先輩とはいえ、そのガッツは見習うべきところである。

もともと、彼は紆余曲折(本人談)あつてからジャーナリストになったため、年齢的には彼の方が年上であった。しかし、彼は絹江のことを「先輩」と呼び、自分のことは呼び捨てにしていると言ってきた。変わっているとは思ったが、本人の希望であった。

絹江はちらりと青年の姿を伺い見る。彼は端末と睨めっこしながら、ぶつぶつ独り言を零していた。絹江はデスクの中を漁る。出てきたのはチョコレートだ。難しい顔をしている青年に声をかけて、絹江はそれを手渡した。

青年はむっとしたように絹江を見たが、結局は受け取ることを選んだらしい。「僕は子どもじゃないんですけどね」と言いながら、チョコレートとの包み紙を開けた。

そのまま黙々と食べ進める。彼の口元が幸せそうに緩んだところを絹江は見逃さなかった。青年は隠しているようだが、実はかなりの甘党である。

こういうのを、人は「ギャップ萌え」という。

「僕で萌えても楽しくないですよ。むしろ不快に近いです」

「あ、ごめんなさい」

冷たい眼差しが絹江を射抜いた。

絹江はタジタジになりながら謝罪する。青年は肩をすくめた。

「今日はそろそろ、家に戻られてはどうですか？」

「でも、もう少し……」

「先程の一件もありますからね。今日は送っていきます」

有無を言わさぬ強い調子に、絹江は内心深々とため息をついた。青年は頑固だから、テコでも意見を変えようとしないうらう。

絹江は苦笑して、頷いた。彼は満足げに頷き、絹江の手を引く。紳士が淑女にやるような、所謂『お手をどうぞ、レディ』的なアレだ。

正直、彼のこれには未だ慣れない。お姫様扱いされた経験が殆どないというもの理由である。絹江は困惑しながらも、彼のエスコートに従った。

駐車場へ移動する。バイクに跨った青年に続き、絹江はバイクの後部座席に跨った。「バイクはむき出しのため寒いから」と手渡された上着を着て黒いフルフェイスのヘルメットを被り、青年の背中にしがみつく。程なくしてバイクのエンジンが起動した。

青年から貸してもらった上着のおかげで、あまり寒くない。バイクは運転者を遮るものが何もないため、走っているときは風の影響もろろに受ける。そのため、夏でも肌寒いし冬だと寒さがかなりのものになるそうだ。青年の気遣いに感謝である。

思えば人生22年、絹江は青春まつしぐらなこととは縁がなかった気がする。自転車はおろか、バイクで2人乗りなんて初めてのことだ。青年はそのことも察しているらしく、交通の便を妨げず、けれど絹江が不安にならない程度の速度を保って走行していた。

(態度には難があるんだけど、気配りは紳士レベルなのよね……)

だから、社内の女子がほいほいとつられていくのである。同僚の男子がいらだった目を向けていることに、この青年は気づいているのだろうか。

気づいていようといまいと、おそろく態度は変わらない気がした。どのみち「僻みですね。恥ずかしくないんですか？ そんなことをやっているなら(以下延々と続く)」と反撃して、相手を反論不能にまで陥れてしまおうだろう。彼なら絶対やりかねない。

そうこうしている間に、絹江のマンションに到着した。普通はここで別れるのだろうが、青年は絹江を自宅前まで送っていく。徹底した

エスコートだ。おかげで沙慈から物々しい視線を向けられるのだが、絹江にはどうすることもできないでいる。

「では、また」

「ええ。また明日」

玄関の前で別れて、絹江は部屋へ、青年はエレベーターへ向かって歩き出す。

扉を開けたら、丁度沙慈とルイス、悠凧と一鷹、最近引っ越してきた隣人の片割れ——アイデアが部屋の中で何かを話していたところだった。

こちらを見た彼らの視線は、絹江が後ろ手で閉めた扉の向うに向けられていた。もしや、立ち去っていく青年の姿が見えたのだろうか。

沙慈が戦慄き、ルイスが爛々と目を輝かせた。

悠凧は一鷹やアイデアと目を合わせ、何とも言えなさそうに苦い表情を浮かべていた。

状況が理解できずに困惑する絹江へ、ルイスが爆弾発言を落とす。

「あの人が、お義姉さまの恋人候補ですか!?!」

「はあ!?!」

絹江は思わず素っ頓狂な声を上げた。沙慈ががばっと顔を上げる。

「そうなの？ 彼が僕のお義兄さんになる人なの？」

弟の目には光がない。一体どうしてしまったのか。

周囲の眼差しが突き刺さってくる。やり切れない上にとんでもない誤解だ。

絹江は誤解を解くため、否定する。

「彼は仕事仲間よ。私と一緒に、ソレスタルビーイングに関すること

を調べているの」

しかし、ルイスが食いついた。

「またまたご謙遜を！……もしかして、本命はもう1人の方ですか？」

「だから、違うって言うてるでしょう！」

ルイスはニヤニヤ笑いながら、根掘り葉掘りしようとは話題を吹っかけてくる。それに比例するかのようには、沙慈の目から光が消え、どんどんドス黒くなっていくではないか。

それを見た悠風や一鷹が怯えはじめた。イデアは困惑した表情を浮かべ、おろおろしている。ルイスは沙慈の変化に気づかず、目を輝かせていた。

絹江は深々とため息をつく。それもこれも、あの青年が自分の我を通して絹江を自宅の玄関前まで送るからだ。後で絶対文句を言つてやろう、と、絹江は心に決めた。

たとえば、いけしやあしやあとした態度で流されてしまおうとも。



状況が悪化した。

絹江は今すぐ頭を抱えて項垂れたかった。

凶らずとも元凶になってしまった2人を連れて、さっさと逃げてしまいたかった。

「すみません。姉とあなた方は、どのようなご関係なんですか？ ど

ちらかが、僕の、未来のお義兄さんになるんですか?」

「やめなさい沙慈! この2人はそういう関係じゃないの!!」

死んだ魚を思わせるような濁った瞳が、ただひとつのことを問い詰めるために向けられている。声はとても平坦なのに、やけにドスが利いているのではないか。こんな沙慈を見たのは人生で初めてのことだった。

青年が引きつった笑みを浮かべて後ずさりし、後輩は「ひっ!?」と悲鳴を上げて青年の後ろに隠れた。ぴるぴると怯える姿は本当に小動物みたいだ。そこが母性本能をくすぐるのだろう。「守ってあげたい系」男子である。

しかし、青年よりも後輩の方が身長が高い。青年が170近くだとするなら、後輩の身長は170後半、むしろ180近くだ。後輩が青年の後ろに隠れて身を縮こませているのはシュールな光景だった。これは、もう、何と言えればいいんだろう。

人革連の機動エレベーター・リニアトレイン発着ロビーは、文字通りカオスな空気に満ち溢れていた。主に、青年と後輩を根掘り葉掘りするルイスと、能面のような顔で機関銃の如く同じ質問を繰り返す沙慈のせいだ。

近くを通りかかった人革軍の軍人2人がこの場を見ていたが、何もしないことを選んだようだ。いや、何もできなかったのだと思う。諦めたように額を抑えて立ち去る上官の男性と、不快感をあらわにしつつも無視することを選び去っていく女性の後ろ姿が人波に飲まれて消えていった。

「でも、お義姉さまは、有名な人とお知り合いなんですね。そっちの方はテレビで見ました。カツコよかったですよー」

「あ、ありがとう」

ルイスに褒められた青年は、彼女の隣に立つ沙慈の眼差しに腰を引きつつも、褒められたことに対する感謝は忘れなかった。

ぺこりと頭を下げた彼の佇まいは、誰が見ても惚れ惚れとする一礼だ。とても綺麗な姿勢である。

日本で暮らした期間が長いだけあって、彼が知っている日本文化やマナーは日本人と同レベルと言えた。

「すみません。姉とあなた方は、どのようなご関係なんですか？ どちらかが、僕の、未来のお義兄さんになるんですか？」

「あ、あの、僕……僕は……」

「はつきり、正直に答えてください。姉とあなた方は、どのようなご関係なんですか？ どちらかが、僕の、未来のお義兄さんになるんですか？」

「うう……！」

後輩がびるびる震えながらも、必死になって弁明の言葉を紡ごうとしていた。が、やっぱり怖くて怖くて仕方がないのだろう。正直言って、絹江も怖くて仕方がない。

可愛いけれど手間がかかる弟は、『義兄候補と認定した相手いびりをする小舅』という一面を發揮するなんて誰が思うだろう。

絹江のことを案じているのはわかるが、流石にこれはやりすぎだ。しかも絹江ですら律することができないとは。

手の打ちようがなくてほとほと困り果てたときだった。リニアの案内が響き渡る。沙慈とルイスが乗る便が出るのはもうすぐだ。時間だから早く行けと急かすと、ようやく沙慈は追及することを諦めたらしい。

「帰ってきてから話はじっくり聞かせてもらおうから。姉さん、変なことやったりしないようにね。その2人もだよ！」と言い残し、ルイスと共に駆け出していった。若者2人の背中を見送り、絹江と2人は大きく脱力する。

疲れた。本当に疲れた。ここの支社に用があったのと、沙慈とルイスの見送りをすると、復活した後輩との合流場所として訪れた人革連の機動エレベーター・リニアトレイン発着ロビーであるが、まさか

こんなことになるだなんて。

「ごめんなさい。弟が」

絹江はがつくりと肩を落とした。青年と後輩は首を振る。

「弟くんの気持ち、わかります。大切なお姉さんの一生を左右することだから……。いい家族を持って、絹江さんは幸せですよ」

後輩は余波を引きずりながらも、柔らかに微笑んだ。擬音で表すとするなら、「へにやつ」とか「ふにやつ」とかがぴったりだろう。見ていて和む笑顔だ。

青年もうんうん頷く。彼もなんとなくわかる気がするらしい。脱力状態の体に入力を入れて、彼は背筋を伸ばした。相変わらず姿勢がいい。

なんとか気持ちを切り替え、絹江たち3人は支社へ出向くことにした。外に出てタクシーを拾い、社内へ乗り込む。

「絹江さん。頼まれてた資料、持ってきました。今送信します」

後輩はそう言って、わたわたしながら端末を起動させた。落ち着きがないというか、常に怯えているというか、難儀な人だと絹江は思う。送信してもらったデータを確認する。後輩は、やっぱりわたわたしながら情報を解説してくれた。

「イオリア・シユヘンベルクは21世紀末に現れた発明王で、太陽光発電システム基礎理論や機動エレベーター設計の基礎技術等を提唱した人物です。功績は残っていますが、私生活は一切公にならず、そのすべてが謎に包まれています。また、交流関係は少なく、記録から辿れる人物は、彼の親友で共同論文を発表したE・A・レイとE・L・エイデルⅡボートマン、E・A・レイの助手であり妻だった女性と、

彼の妻であり技術者であった女性だけのようです。『子どもがいたのでは』という情報もありましたが、データが残されていないため、確証には至っていません」

「女性たちの名前は？」

「ええと、E・A・レイの妻が“イニー”、イオリア・シユヘンベルクの妻は“ベル”だそうです。ただ、2人とも仇名みたいで……すみません」

後輩はしよんぼり肩を落とし、ぴるぴる震えはじめた。心なしか、満月のような金色の瞳には薄い涙の幕が張っている。絹江は微笑み、後輩の肩をぽんと叩いた。

「謝ることはないわ。イオリア・シユヘンベルクの情報以外に、彼と関わりのある人たちのことも調べてくれたでしょ？　それで充分よ」

絹江1人だったら、決して手に入らない情報だった。やはり、持つべきものは仲間である。絹江の表情を見た後輩は、安心したように微笑んだ。

彼は絹江の左隣に座る青年に視線を向ける。青年は小生意気な笑みを浮かべ、「上出来です」と力強い声で言った。彼は本当に素直じゃない。

イオリア・シユヘンベルクの交友関係は殆ど不明とされていたから、関係者が見つかったことは奇跡である。おまけに、イオリアの妻の名前——本名が一番望ましかったのだが——がわかったことも大きな一歩であった。

彼に妻がいたということは、『彼の代で血縁者は死に絶えた』という情報が隠ぺい工作されたものである可能性が出てきた。もつと詳しく調査を進めれば、彼の子孫（直系および分家筋問わず）にたどり着ける可能性もある。

誰も注目しなかった発明王とその周辺をかねてから調査していたという後輩だが、彼の研究は時代よりも先に行きすぎていたのだ。こ

こでようやく、時代が後輩に追いついた。彼の研究内容を認めたのだ。

窓から見える景色は、いつの間にか支社の入り口へと変わっていた。タクシーを降り、中へ入る。

絹江の右には後輩が、左には青年が並ぶ。結成したばかりで日が浅い凸凹チームであるが、このメンバーなら何だってできそうな気がする。

空は快晴。何かを始めるには丁度いい。絹江は彼らと目を合わせた。生意気だが強い意志を宿す藍墨色の瞳と、オドオドしているが立ち向かうことを選んだ金色がこちらを見返す。

「さあ、行きましょう。先輩」

『真実を求め繋ぎ合わせれば、そこに真実がある』ですよね」

「ええー。その通りよ。シロエ、マツカ！」

青年——セキ・レイ・シロエと後輩——ジヨナ・マツカと共に、絹江は一步踏み出したのだった。



『セキ・レイ・シロエです。シロエと呼んでください』

『ピーター！ 約束通り、迎えに来てくれたんだね!?!』

『僕は自由だ！ この空を、自由に飛び続けるんだ!』

反体制の異端児は、ネバーランドの夢を見た。

『ジヨナ・マツカです』

『僕が、貴方を死なせない』

『……悲しんで、くれた……』

人類の中に紛れた異端者は、主のために殉じた。

『彼ら』と同じ名を持つ者たちは、真実を追い求める女性と共に。争いとエゴにまみれた世界を駆け抜ける。

「頑張りたまえ、若造」

そう言つて、車椅子の女性はニヤリと笑みを浮かべる。隣にいたエルガンが、深々とため息をついた。

「お前のその口調、どうにかならないのか。オッサンくさいぞ」

「黙んなさい。リアルオッサンに文句言われる筋合いはない」

「……はあ。どうして、私は……」

エルガンは俯いて額を抑える。肩がかすかに震えているような気がしたが、まさか、泣いているだなんてことはあるまい。

昔からよく泣いていたような気がしなくもない。だが、流石にこの程度で泣くはずがないのだ、この男は。すんすんとか聞こえるのは気のせいだろう。

そのとき、端末が鳴り響いた。女性は即座に端末を起動させる。

事故の知らせだった。人革の宇宙ステーションの重力ブロックの3区画が、何者かの攻撃を受けたことが原因でワイヤーが切れ、漂流してしまつたらしい。要救助者は300名近くで、このままだと地球の重力に引き込まれて墜落、全員死亡は確実とのことだ。

『近隣では、人革軍が新型MSおよび超兵1号と呼ばれる強化人間の駆動実験を行っていました。もしかしたら、MSおよびパイロットに異常が発生したために起こったものだと思われます』——アプロディアが険しい顔で状況を説明する。最悪の極みだった。

エルガンがちらりとこちらを見た。奴は女性が何をするか知って

いるし、本当はそれについて文句の1つや2つ言いたいんだと思う。だが、それで止まるような女性ではないことを痛感している。しばし彼は苦い顔をしていたが、肩をすくめて首を振った。

女性は満足し、頷く。

即座にアプロディアに指示を飛ばした。

「緊急コード発動。『星屑の夢を見る者』。秘密結社『悪の組織』かぶしきがいしやは、これより、私設遊撃部隊『スターダスト・トレイマー』としての活動を再開する！」

その言葉を皮切りに、女性はてきぱきと指示を飛ばした。

「今回の任務は人命救助。重力ブロック区画に閉じ込められ漂流している人々を助けるの。但し、今回はメディア出演に関しては気にしないで結構。派手にやっちゃって！……ソレビ？ ああ、今回は共闘関係ってことにしているから！」

即座に、端末へ帰ってくる「了解」の返事。エルガンは苦笑交じりに遠い目をした。

「些か早すぎるのではないかと？ もう少し、『スターダスト・トレイマー』については秘匿しておくべきなのでは……」

「いいじゃない、どのみちバラす予定だったんだから。それにヴェーダもプラン変更を余儀なくされるでしょうし。……何より、放浪者がどんな思いをするかなんて、私たちが一番よく知ってるじゃない」

女性はあつけらかなと言いつつ放った。しかし、言い終えた後で、どこか寂しそうに空を見上げる。

エルガンは合点がいったらしく、苦しそうに眉をひそめた。

「……ベル」

「さあ、括目しなさい。これが、A・D・2307年における『スターダスト・トレイマー』の初陣よ！」
「……………無視、か」

女性は満面の笑みを浮かべて空を——否、宇宙そらを見上げる。蒼い瞳には、奮闘する2羽の鳥と仲良しコンビ、およびとある一家の姿が鮮明に映し出されていた。

もちろん、エルガンなど視界の端にも映っていない。これから起きる／起こすであろう新たな波を見届ける——その思いに燃えていた。

16. 兵どもの大奮闘

「今度のオフ会は、あの子にお返しをしたいんだ」

グラハム・エーカー、御年27歳。彼女持ち？（本人の了承が取れたかどうかはよくわからないため、疑問符付き）の乙女座男性は、照れ照れした様子でそう言った。

「隊長！　ってことは、また一歩進展したんですね!？」

「おめでとうございます、隊長！　この調子で頑張りましょう!」

「よかったねえ、グラハム」

ハワードとダリルが諸手を挙げてグラハムを祝福した。ビリーも乾いた拍手を贈っている。彼の場合は、自分が意中の相手——リサ・クジヨウとうまくいかないことの悲しみも入っているのかもしれない。

進展したとか言っているけど、グラハムは彼女から手作りの菓子——ライスプディングを貰っただけである。まあ、「手料理をふるまってもらう」というのも確かに「進展した」と言えるだろう。

正直順序が色々おかしいような気がしたが、『クーゴもグラハムのことを言えない』ことが発覚したばかりだ。何かを言う資格はなさそうである。そう思ったクーゴは、沈黙を貫くことにした。

先日少女から貰ったライスプディングは、グラハムが帰りの機内および車内でおいしくいただいた。『幸せそうに頬を緩ませながらプディングを咀嚼するアラサー男性』という珍妙な図を見たけれど、グラハムのそんな表情を拝みたがる者（主に奴を狙う女ども）はいくらでもいる。

耳と顔を真っ赤にし、口元をマフラーにうずめつつ、視線を逸らしながらも、ぶつきらばうな手つきで紙袋を手渡した少女の姿が頭に浮かぶ。彼女は多分、『これを食べたグラハムが笑ってくれたらいい』と

願いながら作ったに違いない。あまりにも珍しい表情だったので、本人の許可を得て撮影した。

写真を見て「あの子もきつと、お前が喜ぶ顔を見たかったんだろうな」と言ったら、「写真をメッセージに添付したいから、データをくれないか」と頼まれた。断る理由はなかつたためデータを送ったが、メッセージを打つ彼の横顔が輝いていたのが印象的である。

そうしたら、『エトワール』からメッセージと一緒に、嬉しそうな微笑を浮かべて端末を眺める少女の写真が添付されてきた。

反対側に座っていたグラハムが、それに気づかないはずがなく。データを送って欲しいと土下座されたのは記憶に新しい。

現在、奴の端末の待ち受けは、クーゴに土下座してまで頼み込んだ写真である。自分の端末を眺めながら、嬉しそうな微笑を浮かべた少女のものだ。

閑話休題。

「それで、何を返すつもりなんだ？」

クーゴの問いかけに、グラハムは満面の笑みを浮かべる。

「手作り菓子を」

「おお、いいですね！」

「目には目を、歯には歯をついていいですからね！」

ハワードとダリルが諸手を挙げて賛成した。ビリーもうんうん頷く。

そんな彼らに対して、クーゴは思わず眉をひそめた。懸念材料が鎌首をもたげたためである。

「グラハム、一つ訊きたい」

「む？」

「お前の作れる料理のレパートリー、どんなのだっけ？」

「マッシュポテトとか、カレーとか、クラムチャウダーとか……主に、混ぜてグチャグチャに潰したものかな。演習で習ったものは一通り作れるぞ」

誇らしげに胸を張るグラハム・エーカー、御年27歳。

アラサーには見えない童顔と、27歳児と言っても過言ではない落ち着きのなさが、余計に彼を若々しく見せている。

この時点で嫌な予感がした。戦慄く心を抑えつけながら、クーゴは更に問いかけを続ける。

「お前、菓子作った経験、あったっけ？」

「……………残念ながら」

冷や汗を流しながら、グラハムはふいっと目を逸らした。居た堪れなさそうに俯く。予想通りの展開だ。

クーゴは深々とため息をつく。そして、ちらりと仲間たちを見た。彼らも何か察したようで、グラハムと同じように俯いてしまう。

悲しいがな、この部隊はむさ苦しい男所帯だ。料理——特に菓子関係——に秀でている人間などごくわずかである。

ついでに、この部隊の中で、胸を張って「彼女持ち」だと言えるのは、我らが隊長グラハム・エーカー中尉しかないのだ。

どこから見ても問題しかない布陣である。クーゴは額に手を当てた。もう一度、クーゴは問いかける。

「手作り菓子って言ったけど、何を作るつもりだったんだ？」

「……………『手軽で簡単に食べれる上に、腹持ちする食べ物がいい』と聞いたから、パウンドケーキを」

「なんとかならないか」と翠緑の瞳が訴える。

料理をし慣れているクーゴからすれば、パウンドケーキくらい造作もない。最近は米粉やおから、豆乳などを使ってみたり、紅茶や抹茶、

オレンジピールなどを混ぜて味を変えてみたりしている。まだ試験的なものだが、結果はそれなりに好評であった。試食した人間の大半が男性だったが。

ハワードやダリルたちも、「なんとかしてあげてください」とでも言いたげな視線を向けてきた。この2人はグラハムに心酔している節がある。尊敬する相手の手伝いがしたいと思うのは当然のことだろう。切実な眼差しを向けられると、どうしてか、放置することができなくなる。自分の甘さに苦笑しながら、クーゴは肩をすくめた。

「行くぞグラハム」

「行くってどこへだ？」

「決まってるだろ。買い出しだよ」

クーゴの言葉を聞いたグラハムが、ぱっと目を輝かせた。

周囲に花が飛んでるんじゃないかなろうかと思うほど、感極まった笑顔。

「よかったですね隊長！ 俺たちも協力します！」

「副隊長が監修するとあれば、絶対うまくいきますよ！」

「それじゃあ、僕も手伝おうかな」

ハワードとダリルも諸手を挙げて大喜びしている。彼らはビリー共々、協力者として名乗りを上げた。

クーゴはこちらを眺めていたエイフマンに視線を向けた。彼は微笑ましそうに目を細める。

「わしは、自分で言うのもなんだが、味にはうるさいほうじゃかな」
「……把握しています、教授」

ガンダム調査隊が何をしているんだ、というツツコミが周囲から飛んできそうである。

休日なんだからいいじゃないか、と、クーゴは誰に対するわけでもなく言い訳した。もちろん心の中である。休日はどう過ごすかと、本人たちの勝手だろう。悪いことをしているわけではないのだから、堂々として問題ない。

日課であるトレーニングは既に終わらせたし、シミュレーターの目標値はクリア済みだし、1日のノルマだつて達成していた。今は非番で、ガンダムの出現に備えつつ体を休めている。勤めはきちんと果たしたではないか。うしろめたさを感じる理由はない、はずだ。

釈然としない自分の心をどうにか説き伏せ、クーゴは頭の中からレシピを引っ張り出す。必要な材料はどうかを考えるためだ。今回はオーソドックスな感じにするべきか、それともグラハム——もとい少女の要望である『腹持ちする』ように材料を変更するべきか。悩みどころだ。

必要となる材料をメモに取りつつ、クーゴはどうするのかグラハムを確認する。グラハムはしばし悩んだ後、「少女の要望にできるだけ応えたい」と言った。

となれば、米粉やおからを材料に追加しなければ。さて、店を何件梯子することになるだろうか。ここは割り振りした方が効率が良さそうだ。

「味の好みやアレルギーに関する情報はあるか？」

「ああ。特に好みはなく、アレルギーもないらしい」

「成程。なら、味は何でもいいってことか。オーソドックスなのでいいかな」

クーゴはグラハムと話をしながら、端末を操作する。おそらくグラハムは本人から直接聞きだしたに違いない。直球が好きな男だから、やりそうなことだ。

万が一の可能性を考慮し——せっかくなので『エトワール』の分も作って手渡そうという下心もあって——クーゴは彼女へメッセージを送る。

少女はグラハムの持つ情報と一致しているが、新たに『エトワール』の好みも入手する。紅茶にやたらと食いついてきたことから、紅茶味のものを作ることにした。

ここまで決まれば、あとは買い出しへ行くのみである。

行きつけの食品店とそこで購入すべきリストを作成し、誰がどの店で何を買うかを割り振る。

端末に映し出されたリストを見たハワード、ダリル、ビリー、グラハムは2つ返事で頷いた。

それぞれが割り振られた材料を買うために行動を始めた。エイフマンはニコニコしながら背中を見送る。クーゴも彼に会釈をし、買い出しのために外へ出た。

今日の天気は曇り。青空は、分厚い雲の向こう側に隠されてしまっている。グラハムは残念そうに空を見ていたが、すぐに車に乗り込んで出発した。他の面々も出発していく。

クーゴも車に乗り込み、エンジンをかけた。周囲を確認しようとし、ふと、目を留める。ほんの一瞬、綺麗な群青あおが煌めいたように見えたからだ。

他にも、赤や黄色、緑の光が、分厚い雲の向う側へと消えていった。

(……何だ？ あの光)

クーゴはその光が消えた先を追うように、曇天の空を見上げた。

空の向うの、宇宙そらの向う——その先に、何があるのだろう。

刹那、何かが『視えた』。

白い機体が飛んでいる。空を超えて、宇宙そらを割いて、ただまっすぐに飛んでいく。

青い光と緑の光が混ざり合い、凄まじい摩擦熱によって赤い光を帯びながら、どこまでもどこまでも飛んでいく。

あれは、天女だ。自分が追いかけているガンダムだ。クーゴがそう理解したとき、意識は一気に現実へと引きもどされた。

グラハムたちはもういない。それぞれ、割り振られたものを買いに

出かけてしまったようだ。駐車場に残っているのはクーゴのみである。完全に出遅れてしまった。

先程の光景も気になるが、今は買い出しに集中しなければ。クーゴはサイドブレーキを解除し、ギアを動かす。アクセルをゆっくりと踏みながら、車を発進させた。



空の向うの、宇宙^{そら}へ。

アイデアは操縦桿を動かした。スターゲイザーは、空へ飛び込むかのような勢いで飛んでいく。摩擦熱とGN粒子、そしてアイデアの能力が発現していることを示す光が混じって、鮮やかな色を放っていた。青色は次第に黒く塗りつぶされ、星が瞬き始める。

速く、もつと速く。急がなければ間に合わない。スメラギやヴェーダからのミッションプランを待ってられるほど、アイデアは大人しくしていられなかった。後でテイエリアから文句を言われようと、今のアイデアにとっては些細^こごと^ごに過ぎなかった。

『貴女にはわからないさ。宇宙を漂流する者の気持ちなんて』

独断専行で人命救助を選んだアレルヤだけれど。この言葉は、彼を制止した留美に対する言葉だったけれど。

それは、アイデアの心を強く揺さぶった。アイデアとスターゲイザーを突き動かすに足るトリガーとなったのだ。

通信なんか開いていなくても、どれだけの距離が離れていようとも、アイデアはそれをはつきりと『聞き取る』ことができた。

それだけ、アレルヤの想いは強かった。漂流している人々を放つて

おけない——それは、アイデアも同じだ。

脳裏に浮かんだのは、古の『同胞』たちが辿ってきた歴史。人類から迫害され、行き場をなくした『同胞』の旅路。

(ここにも、同じ悲しみを知ってるヒトがいたよ。同じ悲しみを止めようとしているヒトがいるよ)

アイデアの中に受け継がれてきた古の『同胞』たちの心に、語り掛ける。

『同胞』たちの心は複雑そうに揺れている。

「あのとき、彼のような人がいてくれたなら」と、古の『同胞』の誰かが言った。

まったくもってその通りだとアイデアは思う。

旅の始まりは、『同胞』たちを被検体として飼い殺す実験場の惑星からだった。度重なる実験／拷問に耐えきれなくなった『同胞』は、人類に和睦と共存を訴えた。結果、『同胞』たちは反逆者とされ、人類は「実験場の惑星ごと『同胞』を殲滅する」ことを選択した。惑星破壊兵器の使用により、多くの『同胞』の命が失われた。

2度目は長い旅の途中。人類側の攻撃を避けて流浪していた『同胞』たちは、銀河系をさまよった後、とある惑星へと流れ着く。疲弊していた彼らは、『目的地にたどり着けないなら、せめて安住の地がほしい』と思い、その惑星を安住の地にすることを選んだ。そのための実験や準備、および新たな試み等の試行錯誤を繰り返した。

ようやく訪れた安息は、「『同胞』が住む惑星を発見した人類による攻撃」という形で終わりを迎える。しかも、人類は『同胞』たちを殲滅するため、また惑星破壊兵器を持ち出した。これにより、安住の地となるはずだった惑星は消滅。ここで生まれた子どもたちは故郷を失い、多くの『同胞』の命が惑星と運命を共にした。

この悲しみを抱えて、『彼ら』は宇宙を漂流してきた。

その苦しみや悲しみを、不安や恐怖を、アイデアは知っている。

眼前に重力ブロックが見えてきた。ブロックを押して加速させて

いるのは、人革連のティエレンとアレルヤのキュリオスだ。

「アイデア！　ってことは、スメラギさんが……！」

期待に満ちたアレルヤの眼差しが痛い。

援軍でここに来たはずなのに、なんだか悪いことをしたような気分になる。

「ごめんアレルヤ！　これは私の独断行動だから！」

「そうなの!？」

『やっぱりな！　他の奴らが動いたにしては、やけに迅速すぎると思ってたんだ!』

アレルヤたちとの会話もそこそこに、アイデアもブロックを押す人員に加わる。

発現していた能力を解除したため、推進力はかなり落ちてしまうが致し方ない。

今はまだ、アイデアの持つ能力を悟られるわけにはいかないのだ。

「状況は!？」

「今、1回目の限界離脱領域からなんとか持ちこたえたけど……このままじゃ、救助隊が来る前に落ちる！　スメラギさんの判断はまだなのか……!？」

やきもきしたようにアレルヤは前を向いた。声からは焦燥の色が見て取れる。人革連のティエレン含んだ自分たちの推進力では、現状維持で手一杯だ。

万事休すか、と思ったときだった。レーダーに、こちらへ高速で向かってくる機体が映る。ガンダムの推進力とほぼ互角の機体たち。

アイデアは思わず振りかえった。何も映さない紫の瞳は、爆ぜるように瞬く群青あおを見た。赤と緑と黄色が瞬く。

機体数は7機。鳥を模した兄弟機——ラツシユバードとストレイバード、格闘戦を得意とするベーシックな機体——ライオット・バトラー、美しい青が特徴の機体——オルフェス、オルフェスに随伴する飛行型の戦闘機——ライラス、射撃戦を得意とするベーシックな機体——ライオット・アーチャー、ライオット・アーチャーに随伴する飛行型の戦闘機——ドラウパだ。

『皆……！』

機体もパイロットも、イデアにとっては見知った人々である。彼らは満面の笑みを浮かべ、頷いた。

「その機体、聞こえるか？　こちら、私設遊撃部隊『スターダスト・トレイマー』」

「俺たちに敵対意志はありません！　人命救助のためにここに来ました！　手伝わせてください！」

オルフェスとラツシユバードからの通信が入った。アレルヤと人革連のパイロットが驚いたように目を見張る。けれど、今はとにかく人手がほしい。

2人はすぐに了承してくれた。それを聞いた7機がブロックを押す人員に加わる。これなら、救助隊が到着するまで持ちこたえることが可能だ。

いや、持ちこたえるだけじゃない。こんなに最高の援軍があるのだ、安定領域まで押し上げることにも充分可能である。イデアは操縦桿を握り締めた。

このミッションが終われば、次のオフ会が待っている。次のオフ会で、『夜鷹』が作った紅茶のパウンドケーキが振る舞われるのだ。彼がイデアのために作ってくれるのだ、おいしくないはずがあるうか。絶対成功させて、生きて帰ってやる。彼との逢瀬を目前としているのに、死んでたまるものか！

(死ぬのが怖くて恋なんかできない！ だから、その恐怖すら飛び越えて、恋と明日をつかみ取る！ ——恋する乙女、舐めるんじゃないわよ!!)

アイデアが決意を固めたときだ。不意に、ティエレンから『白いガンダムのパイロット……乙女だ……!』という声が聞こえてきた。思考回路が漏れてしまっていたらしい。

自重自重、と、アイデアは自分に言い聞かせる。直後、『……ホリー、今度の墓参りにはアレーシユキを持っていくよ。お前も息子も大好きだったな……』と声がした。

どうやら、ティエレンのパイロットの愛する人は故人らしい。ついでに息子とは絶縁状態に近いようだ。アレーシユキはロシアの焼き菓子である。成程、彼はロシア人なのか。彼から伝わってきた感情と一緒に、記憶を読み取ってみる。

茶髪の女性が幸せそうに焼き菓子を食べていた。右目付近に大きな傷のある男性が、照れ照れしながら追加の焼き菓子をふるまう。そこへ息子がやって来た。女性が息子に話を始める。夫婦の馴れ初めは、このアレーシユキがきっかけだったのだ、と。

息子は焼き菓子をほおぼりながら、2人のことを知りたがった。そこからどうやって2人が愛し合い、結婚に至ったのかが気になるらしい。女性は頬を薔薇色に染めながら話を続けた。男性は羞恥に震えながらも、女性を止めることはできなかったようだ。

その光景が壊れたのは、いつだったのか。そこを探ろうとして、アイデアは気づく。もうすぐ、限界離脱領域だ。

(いけない、集中!)

限界離脱領域まであと5秒。4、3、2、1——!

(あーあ、これは荒れるなあ)

敬愛するグラン・マのことを思い浮かべる。彼女は満面の笑みを浮かべてゴーサインを出したのだろう。

考えているようで何も考えていないのか、それともその逆か。どちらにしろ、『彼ら』も後戻りできないことは確かだ。

これから忙しくなるだろう。言いそびれる前に、伝えておくべきことは伝えておかねばなるまい。

イデアは通信を開いた。相手はアレルヤである。通信が来ること自体意外だったのだろう。アレルヤは驚いたように目を瞬かせて、「どうしたの?」と訊いてきた。

「ありがとう。ブロックに残された人を助けてくれて。すごく嬉しかった」

「え? ……あー、えーと……ど、どう、いたしまして?」

反応に困ったためか、彼は苦笑いした。いきなりこんなことを言われても困るのは知っている。でも、イデアはどうしても、アレルヤに伝えておきたかった。

「でも、後が大変だなあ」とアレルヤはぼやく。クルーからの説教という意味でも、クルーたちのてんやわんやな状況という意味でも、その気持ちはよくわかった。

世界はさらなる混乱の波に飲まれるだろう。その波を、どうやって乗り越えていくかだ。

『試している』のは誰か、『試されている』のは誰か。

天上人たちと星屑の夢を見る者たちは、これからどんな道歩んでいくのだろうか。

月を見上げる場所が違って、同じ月を見上げていることは、確かなのだ。



まっしろしろうすけ。

クーゴの現在状況を一言で言い表すとするなら、それが一番適切であろう。

「……………」

「……………すまん」

ホットケーキミックスまみれになったクーゴの恨めし気な眼差しに、グラハムは耐えきれなくなったようだった。申し訳なさそうに肩をすくめる。

「他の話題に気を取られるのはわかるけど、自分が今何をしていたかくらいは把握しとけよ」

粉を払いながら、クーゴは深々とため息をついた。上も下も、手に持っていた端末も粉まみれである。電子画面だけが平時と同じく鮮明な映像を提供していた。

ニュースキヤスターがしきりに状況を説明している。映し出されたのは、人革の機動エレベーターで起こった事故。漂流してしまった重力ブロックだ。

そこに現れたガンダムは機動性に優れた可変機タイプで、人命救助を行っていたという。次に現れたのは純白の機体——クーゴが追いかける天女だった。

しかし、動き出していたのはソレスタルビーイングだけではなかった。彼らの所有するガンダムと同レベルと思しきMSを保持する団体が、もう1つ現れたのだ。

詳しいことは不明。本人たちが名乗った『スターダスト・トレイマー』という団体名のみが、世界が知りうる数少ない情報である。ソ

レストアルビーイングと同じように、彗星のごとく現れた謎の組織として、彼らのことも大々的に取り上げられていた。

ソレストアルビーイングと違ったのは、彼らが武力介入によって鮮烈なデビューを飾ったことに対し、スターダスト・トレイマーが人命救助によって堅実なデビューをしたことだろう。ついでに、彼らからの声明文は何もない。彼らが何者で、何を理念としているかはまだ明らかにならないようだ。

その情報に反応したグラハムが、手に持っていたホットケーキミックスをぶちまけたのである。丁度、クーゴは彼の真正面に居合わせた。

結果、クーゴは大量のホットケーキミックスを頭から被ってしまった。まっしろまっしろすけになってしまったという訳だ。

閑話休題。

「ただでさえ、ソレストアルビーイングやガンダムでてんやわんやしてるってのに……」

「これから世界は、いったいどこへ転がっていくんだか」

ダリルが深々とため息をつき、ハワードが伊達メガネのブリッジを持ち上げた。彼らの表情には憂いの色が濃く見える。

今のところ、ソレストアルビーイングとスターダスト・トレイマーは別組織同士のような。まだ一例しかないと断言はできないもの、今回は一時的に協力関係を結んだだけらしい。

2つの団体が協力し合うのか、それとも対立しあうのか。それだけでも世界の方向は左右される。もしくは、スターダスト・トレイマーが三大国家およびその他のどこに協力するかでも、パワーバランスがひっくり返るだろう。

「それは一端置いといて、だ。ハワード、抹茶の粉入れすぎだぞ。ダリル、生地が型から溢れてる」

「うげっ!?!」

「ああっ!？」

クーゴの指摘に、2人は慌てた様子でリカバリに奮戦する。それを確認しながら、クーゴもミルクティーと茶葉を生地に混ぜ込んだ。茶葉はミルクティーにぴったりな紅茶とされるキャンディだ。煮出した後の茶葉を混ぜることで、口当たりが滑らかになる。

他にもアールグレイやオレンジペコーの味も作ってある。『エトワール』が紅茶の話題に食いついたとき、例として挙げた紅茶の種類の中に提示されていた。他にもフルーツティーが好きらしい。時間と機会があつたら、そちらの方にも挑戦してみようか。

悲しいがな、どんな切迫した状況下にあろうとも、やり慣れていることは普段通りにできてしまうようだ。情報を聞きながら、クーゴはパウンドケーキ作りを着々と進めていく。ときには仲間たちにアドバイスをしつつ、ときには情報をまとめながら手を動かしていた。

グラハムは秤と睨めっこを繰り返したり、生地に混ぜる材料の組み合わせを吟味したりしながら、なんとか自力で作ろうと奮戦している。

ビリーは生地がダメになってしまったらしく、電動ミキサーに頼ることにしたようだ。しかし、うっかり調節を間違えたようで、生地が派手に飛び散っていた。

そんな自分たちの様子を眺めてエイフマンが笑う。だが、味見役としてずっと待っているため、彼は空腹状態のままだ。時折「まだかのう……」と呟いては、寂しそうに眉を落としていた。

「俺のはもう少しで出来上がりますから、そちらでよろしければ」「そうか。なら、ラジオでも聞きながら待つとするかの」

エイフマンはそう言って、ラジオに手をかけた。丁度流れたのは、テオ・マイヤーの歌う『貧乏くじ同盟』。結構前に出た曲だが、一種の哀歌として売れている。

『人の好き』から、しよつちゆう貧乏くじを引かされる。わかってい

ても、仕方がないと苦笑しながら引き受けてしまう——聞けば聞くほど、クーゴも「わかるわかる」と言いたくなるような内容の歌詞だった。

(聴いていると、何とも言えない気持ちになるんだよな……)

クーゴは遠い目をした。Z ■ X I S に合流した直後の事件がきっかけで、自分は『不運な人たちが集まる同盟』に入れられそうになったことがある。

しかし、勧誘してきた死神のパイロットや割られる眼鏡、天秤座の機体を駆る『借金100万Gの男』は、直後に「やっぱお前さんはツイてるよ。貧乏くじを引く確率以上の幸運がな」と言つて去つて行つてしまつたつげ。

そこまで考えて、クーゴは首を傾げた。今、自分は何を考えていたのだろうか。そもそも『不運な人たちが集まる同盟』なんて聞いたこともないし、死神のパイロットや割られる眼鏡、天秤座の機体を駆る『借金100万Gの男』のことにも覚えがない。

オーブンからいい香りが漂ってくる。紅茶のパウンドケーキが完成したようだ。オーブンからケーキを取り出し、粗熱を取る。

パウンドケーキを切つて皿にとりわけ、エイフマンにふるまう。彼は待つてましたと言わんばかりにフォークを伸ばした。そのまま、一口。

しばらくして彼の頬が緩む。満足げに頷いたのを確認し、クーゴはほっと息を吐いた。お墨付きである。

他の面々もどうにか生地を完成させ、型に流し込み終わったようだ。オーブンの温度を確認しつつ、生地を入れていく。

料理初心者であるグラハムたちは、心配そうな面持ちでオーブンの前に集まっていた。街灯に群がる虫を連想させるかのような張り付きっぷりである。なんだか微笑ましくなつて、クーゴは彼らの背中を見つめていた。

世界は切迫しているけれど、その中には確かに穏やかな時間があ

る。ささやかでちっぽけな、けれどもかけがえのないものがある。グラハムたちと過ごす日常や『エトワール』と少女との交流。クーゴにとって、それは何よりも大切なものだった。

この光景が、続いていくのだと信じている。

この光景を、守りたいと思っている。

だから、自分はここにいるのだ。

(――あれ?)

今、自分は何を思ったのだろう。

ここにいる、と、クーゴは小さく口に出してみる。何かあったはずなのに、霞がかかったようにぼやけてしまった。

それを探すように窓を見た。鉛色の雲は退散しつつあり、隠されていた蒼が姿を現す。どこまでも澄み渡る蒼に、クーゴは思わず目を細めた。

「焦げませんように、焦げませんように……!」

「お、膨らんできた!」

「うまく焼きあがってくれるといいのだが……」

「うん、いい匂いだ」

わいわいと語り合う、楽しそうな4つの背中へ眼差しを戻す。なんて微笑ましい光景だろう。そんな風に思ってしまう自分に、クーゴは苦笑いを浮かべた。

世界の流れは刻々と変わる。だけれど、変わらない日常が――失いたくない日常が、ここにあった。



天使によつて、次々に仲間が墜おとされていく。

ある者は撃ち落とされ、ある者は至近距離から砲撃を浴び、ある者は牙で串刺しにされ、ある者は敵に特攻を仕掛けて。見知った姿は次々と、空／宇宙《そら》の藻屑になつていく。手を伸ばしても、掴むことは叶わなかった。

共に空を翔た親友は天使への執着で歪み、自分たちをバックアップしてくれた親友は意中の相手の裏切りによつて歪んでしまった。壊れてしまったものは、元に戻すことはできない。でも、このまま壊れていくのを、ただ見ていることなどできなかった。

手を伸ばせ。失いたくなかったんだ。大切な人たちだったんだ。男の叫び声が響く。

もうなりふり構つていられない。彼らを止めるには、彼らと対を成す人々の力が必要だ。

もう一度、あの空へ。彼らと一緒に、あの空へ。祈るような気持ちで、男は空を翔け抜ける。

だから、男はここにいるのだ。もう何も、失わないようにするために。

思い出してほしい。『どうして自分が空を目指したのか』を。

忘れないでほしい。『どうして自分がここにいたのか』を。

誰かはそう言つて笑つた。わかつている、と、自分は答える。そうして、空を見上げた。

(空が、綺麗だ)

真つ青な空が広がっている。

見ていると、とても気持ちがいい。

気づくと、そこに『誰か』がいた。

金髪碧眼の白人男性が、眩しそうに目を細めて空を見上げている。顔の左側には大きな傷跡が残っていた。彼は青と灰色基調の軍服を着て、水色のネクタイをしていた。どこの軍服だろう。ユニオンで

も、AEUでも、人革軍でもない。そもそも彼は『誰』なのか。

そのとき、美しい青空に綺麗な流星が翔けた。緑色の温かな光と、群青あおく煌めく優しい光。男性は愛おしいものを見つけたかのように表情を輝かせた。彼につられ、思わず空を見る。なんて美しいんだろう。なんて愛おしいのだろう。彼と一緒に、空を眺めた。

不意に肩を叩かれた。振り返れば、男性と同じ軍服を着た人々が力強く笑っていた。眼鏡をかけたオールバックの白人男性、剛毛の特徴的な黒人男性、黒髪黒目の東洋系の男性、金髪で青い目の白人男性がこちらを見返している。後から遅れて、髪をポニーテールに結び白衣を着た男性もやって来た。

後ろの方には、遠巻きだが誰かがいる。女性も一人、そこにいるようだった。

彼らも笑い、こちらの方へと駆け寄ってくる。

「さあ、行こうか。フラッグファイター——いや、■■■■ズ
隊、副隊長」

金髪碧眼の男性が、そう言って自分を促す。え、と首を傾げたとき、草原のど真ん中に機体が佇んでいた。先程までは何もなかった筈なのに。

フラッグの面影を宿した、見知らぬMS。機体の色は鮮やかなペー
ルグリーンである。しかし、その中に混じって、青い機体のものが
あった。これは、搭乗者が部隊の指揮官であることを示している。

その隣に控えるように佇むのは、晴天を思わせるような真空色の機
体だった。あれは自分の機体だ。惹かれるように機体へ歩み寄る。
いつの間にか、傍にいた人々は軍服からパイロットスーツに着替えて
いた。

機体に取り込み、操縦桿を動かす。MSは悠々と空を舞った。仲間
たちの姿がよく見える。ああ、なんて気持ちがいいんだろう。

そこへ、緑の光と群青あおの光が近づいてくる。よく見れば、そのMS
は見覚えのある機体だった。確か、機体名は——そう、ガンダム。

青い機体は、白と青を基調にしたガンダムとじやれあうようにして空を飛んでいた。自分の乗るエメラルドグリーンの機体の傍に、純白の機体が舞い降りる。

ふと空を見上げれば、沢山の機体が空を舞っていた。大型のものから小型のものまで、種類は様々だ。飛行形態のものもあれば、MSによく似たものもいた。翼を持ったものから物々しいデザインの機体もある。よく見れば、巨大な戦艦も空を飛んでいるではないか。

パイロットたちの表情が見えた。皆、笑っている。皆、かけがえない人たちだ。彼らを見てみると、どうしようもなく心が躍る。どんな困難にも打ち勝てるし、どんなに難しいことでもやり遂げることができる。そう、心から思うことができた。

「たとえば、今、お前／貴方／キミの傍にいないとも」

「——それでも、僕／俺／私／あたしたちは『ここ』にいるから」

だから、忘れないで。

彼らの言葉に頷く。そうして、空／宇宙《そら》を翔け抜けた。

*

「……『夜鷹』さん？」

名前を呼ばれた気がして前を見る。『エトワール』が、心配そうにクーゴを見返していた。

オフ会も終わり、そろそろ別れの時間である。そこで、クーゴは手荷物の中に気が付いた。一步遅かったら、これを渡すのを忘れていたかもしれない。

せっかく作ってきたものを渡し忘れるなんて大失態である。クーゴは慌ただしく、『エトワール』に紙袋を差し出した。彼女はわくわくした様子で中身を確認する。

中身を見た『エトワール』は、嬉しそうに目を細めた。第一関門の見た目は合格らしい。もつとも、重要な問題は「味を気に入ってくれるかどうか」なのだ。

後ろの方では、グラハムも目的を果たせたらしい。パウンドケーキの入った紙袋を受け取った少女が、照れたように視線をさまよわせている。それを見たグラハムは静かに頬を緩ませていた。

「それじゃあ、また今度」

「ええ、また今度」

そのまま2人と別れ、帰宅を急ぐ。

グラハムの足取りは軽かった。心なしか、クーゴも歩調を速めていた。

見上げた空はどこまでも青く、どうしてだか酷く懐かしい。

いつか、自分もたどり着けるだろうか。

何の脈絡もなくそう思ったクーゴは、思わず首を傾げる。自分は今、何を考えてそこに至ったのだろう。もう、思い出せなかった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

17. 嵐の前のタイフーン

人の進化の可能性、というものに賭けた人々は大勢いる。

その結果が化け物同然という末路なら、何とも言い難いと言うのが本音であった。

「対話不能の種……」

「あれもまた、進化の形なのね。……到底認められるものではないけど」

『彼女』たちは険しい表情を浮かべて、嘗て人であったはずの化け物を睨みつける。

あれは人間であったとしても、『彼女』の言うような対話は不可能だとクーゴは思う。ミューカ■と同レベルというか、■ユーカーよりも話を通じなさそうだというか、文字通り酷すぎるのだ。人間の中にある「人間を超えたい」という欲望を具現化した果ての姿。『あの人』も最後にはこうなってしまうのだろうか。

コネクト・■オース全体としても、クーゴ・ハガネという個人としても、コー□エンとステインガ□の姿を許容することはできない。それは、『あの人』のやり方を許容することと同義だからだ。奴らは同じインベ■ダーだけでなく、ミュ■カスをも取り込んでパワーアップしようとしている。

これ以上何をする／何になるつもりなのだろう。肥大したエゴと欲望が花開いた／実を結んだ結果だというなら、今すぐそれを駆除および伐採する必要がある。クーゴは周囲に視線を向けた。全員が同じ気持ちのようで、即座に戦闘態勢を整える。先程の戦いで疲弊しながらも、闘志はまだ折れていない。

それが自分たち、コネクト・■オース。

所属部隊や身分や立場を超えて集まった、人類を守る防衛隊だ。

「エゴを貫き通した挙句、文字通り『異形と化した』か……」

「どうした、グラハム」

厳しい顔をした彼の本名を呼べば、ミスター・■シドーがむっとしたように声を荒げた。

「だから、グラハム・エーカーは既に死んだと言った！」

「ああはいはい。で、■シドーは、言いたいことがあったんじゃないのか」

クーゴに言われた、ブ■ドーは何とも言えなさそうに目を伏せる。奴らの姿に思うところがあるかのように、暗い影が落ちていた。

連想したのは、ブシ■ーが迷走に迷走を重ねていたときの様子だ。そこで、クーゴは彼が何に思い悩んでいるのかに合点がいく。

「お前は、こいつらとは違う」

クーゴは強い口調で言った。驚いたように目を見張ったブシド■が、クーゴを見つめていた。

いつの間にか通信を開いていた『彼女』も、力強く頷く。クーゴの言葉に続くように彼女は復唱した。

「クーゴ・ハガネの言う通りだ。お前は、あいつらとは違う」

『彼女』は表情を緩めた。『彼女』のことをよく知る者なら、それが『彼女』が微笑んでいるとすぐに気づけるような表情。

「お前は、ちゃんと気づけたじゃないか。ちゃんと立ち止まれたじゃないか」

「少女……」

「そしてお前は、この道——コ■クト・フォースを選んだ。……だから、お前はあいつらとは違う」

「……そうだな」

ブシド■の声が震えた。仮面越しからでもわかるくらい、感情が表に現れている。泣き笑いに近いような、どこか安堵した顔。

彼は少しの間目を閉じていたが、すぐにインベー■と化した□ーウエンとス□インガーを睨む。口元には不敵な笑み。

ああ、こいつはそうでなければ。クーゴも笑う。そんな自分たちの隣に、ゼクスやクワト□、ヒイ□や□ムロ、カミー□たちが並んだ。

先陣を切ったのは、ゲツ■ーやゲッター■ラゴンを駆る面々だ。彼らはイン■ーダーに深い因縁がある。ここで、全ての決着をつけるつもりのようなのだ。

コー□エンとステ□ンガーを守るかのように、小型のインベー■ーが姿を現す。邪魔者の掃討は自分たちの得意分野だ。言葉にする代わりに、奴らに攻撃を仕掛けることでそれを示す。

戦いの火蓋は切られた。

世界最後の日。

笑うのは一体どちらなのか——それはまだ、誰もわからない。



一定の人間が定期的に集まるといふことは、本当にいいものだ。虚憶きよおくの情報をまとめながら、クーゴはそんなことを考えた。

(どの曲を歌えば、どの虚憶きよおくを『視る』ことができるか……大体見当がついてきたな)

クーゴは端末を開き、まとめられた情報を確認していく。今まで歌った曲と、それに対応して浮かんだ虚憶きよおくの内容が提示されていた。最近さいきんは、この虚憶映像きよおく映像に名前を付けて分類している。

命名は「多元世界技術解析および実験チーム」の話し合いで決まっていた。今回視た虚憶きよおくの名前は『世界最後の日／OE』という題名に決まっている。最後についているアルファベットは、「似たような内容だが、細かい部分に差異が出ている」場合のときにダブってしまわないよう、区別するためのものだ。

『世界最後の日』という題名で差異があるパターンは、OE以外でZがある。OEではジオンの和平工作部隊オルトロス隊として活動後にコネクト・フォースという部隊と合流、および所属してインベーターと戦ったが、Zでは独立部隊として承認されたZEXISの面々と合流し、協力してインベーターと戦っていた。

類似の虚憶内きよおくにある差異は、登場する人物や部隊名などだ。OEのアルファベット表記で出てくる部隊はコネクト・フォース、ZではZEXIS——後にZ—BLUEとして再結成され、UXではアンノウン・エクストラライカーズ——後にアルティメット・クロスに部隊名が変わっている。もしかしたら、他にも出てくるかもしれない。

例外はGgとGgOであり、こちらは多元世界云々とは毛色が違う。確か、『大きなシステムに異常が発生したため、その修正を行うために、所属部隊および敵味方の枠を超えて結成された部隊が駆けつける』という内容の虚憶きよおくだった。『エトワール』の歌を聞いたことにより、見るようになったものだ。

「あいつら、何度見ても悍ましいな」

「流石に、あんな進化はゴメンですぜ……」

ダリルとハワードが苦い表情を浮かべた。

進化という単語には確かに浪漫がある。しかし、あのインベーターに浪漫を感じるかと言われると、嫌悪しか感じない。何度見ても「どうしてこうなった」としか言えない存在だ。最後に2人の人間が文字通り融合してしまった姿は本当に酷かった。

インベーターがゲッター線と深くかかわっていることは、虚憶きよおくの世界で使われている技術を研究したことで明らかになっている。特に、

人革連のゲッター線研究は3大国家陣営の中でも抜きん出ている。その分、黒い噂も絶えないのだが。

人革連は黒い噂の宝庫だと言われている。その噂の先鋒に行くのが、『超兵』と呼ばれる人間兵器らしい。詳しいことはわからないが、人体実験が必須であることは容易に想像がつく。もつとも、『軍部』自体が黒い噂に塗れている」と言われたらお終いである。人のふり見てなんとやら、だ。

ユニオンやAEUでもゲッター線の研究は行われている。軍部だけでなく、民間企業レベルでも盛んであった。

そういう話を聞きたびに、クーゴはいつも薄ら寒さを感じていた。何か嫌な予感がしていた。口には出さなかったが。

(まあ、『インベーターの誕生にゲッター線が関わってる』とくれば、なあ)

虚憶きよわくからの情報を考えると、その理由は明確だ。突き詰めた結果あんなことになるのなら、下手に手出しなどするべきではない。

人間であった頃の面影など感じさせない異形の姿。体に引っ張られるかのように、コーウエンとステインガーらの言動からは、人間だった頃の名残は伺えなかった。インベーターとして目覚めたときにはもう、彼らは人としての死を迎えていたのだろう。

彼らは自身の異変に気づいていたのだろうか。気づいていたとしたら、どうして立ち止まろうと思わなかったのだろうか。科学者だったら、危険性を察知することだってできたはずなのに。——いや、科学者だからこそ、突き進んでしまったのだろうか。

「好奇心は猫をも殺す、って言うからね」

「それは、研究者としての意見か？ ビリー」

クーゴの問いに、ビリーは苦笑した。

「うーん……。分野違いだし賛同はできないけど、未知のものに対する探究心や好奇心はわかるかな。成果が出れば、尚更ね」

成果が爆発的なものであればあるこそ、人はそれに惹かれていくものだ。新しい論文や技術、政治家の手腕、例を挙げればキリがない。しかし、成果が爆発的であるということは劇薬に等しいとも言える。ハイリスク・ハイリターン。世界を文字通りひっくり返してしまおうだろう。

そのとき、ビリーが「そういえば」と手を叩いた。

「ゲッター線の研究してた軍事施設や企業が、根こそぎソレスタルビーイングの攻撃対象になったらうれしいね」

「ああ、声明が上がってたな。今すぐ研究を放棄しろって、全メディアを通じて警告してた」

「それを受けた大半の企業や軍事施設が凍結したみたいだけど、一部はまだ稼働を続けてるみたいだよ」

捨てるに惜しい研究だし、と、ビリーは呟くように言った。

停止したふりをして稼働している所もありそうだ。

そこも漏れなく武力介入の対象にするつもりなのだろう。これでも、世界の変革に拍車がかかる。

(ソレスタルビーイングも、劇薬と言えるよな)

クーゴはひっそり、そんなことを考えた。彼らの武力介入によって、確かに世界は変わり始めてる。「歪みを修正するために戦う」と彼らは言うけれど、彼らの行動理念こそ大きな矛盾ゆがみを抱えていた。

彼らの理念が、彼らを破滅に追い込む要因になりそうな気がする。しかも、その破滅は『世界ごと巻き込んだ規模のものになる』可能性が高い。もし、ソレスタルビーイングが『己の理念で首を絞められる』日が来るとしたら――。

『オペレーション・ディプレイク』

『夜明けの鐘』 作戦。誰かがそう言って笑っていた。金髪碧眼の男

性で、ブリタニア皇族の長男。兄弟対決、チェス、ゼロ、駒、^{ポーン}一手、
チェックメイト。『その』瞬間まで敗北を知らなかった、彼の名前は何
といったか。

そもそもブリタニア帝国とは何か。……そういえば、Zに分類され
た多元世界では、クーゴたちが所属していた部隊は『ブリタニア・ユ
ニオン』と称されていたはずだ。

端末を操作してブリタニアの情報を確認しようとしたとき、通信が
入った。ソレスタルビーイングがまた動き出したらしい。彼らは数
か所に分かれて進軍しているという。

進軍ルートを考慮すると、そこはゲッター線を研究していると噂さ
れている研究機関に行きつく。

「やっぱり、そうほいほいと凍結できなかつたんだな」

ハワードが苦笑した。おそらく、該当場所はゲッター線の研究を放
棄しなかった研究機関なのだろう。ソレスタルビーイングはそれを
目ざとく見つけたのだ。どんな情報網を所持しているのか、本当に気
になるところである。

出動要請が出る。ユニオン内にも、放棄を拒んだ施設があつたらし
い。クーゴたちは着替えるため、部屋を片付けて慌ただしく飛び出し
た。パイロットスーツに着替え、即座に自分の愛機に乗り込む。出撃
準備は万全だ。カタパルトが開く。

そうして、ガンダム調査隊は空へ飛び出した。カスタムフラッグ2
機とユニオンフラッグが空を翔る。仲間たちからの通信が入った。

「こんなに早く、リターンマッチのチャンスがくるとは思いませんで
したよー！」

「隊長！ 副隊長！ 今度こそ、ガンダムにリベンジです！」

「そうだな。我々は本当に運がいい。幸運の女神が微笑んでくれてい
る」

ハワードとダリルの言葉に、グラハムは感慨深そうに頷いた。彼の声も、表情も、お目当てのガンダムに会えるかもしれないという期待に満ち溢れている。

……果たして、笑ったのは本当に「幸運の女神」なのだろうか。クーゴからしてみれば、「貧乏神」と「死神」が不気味な笑みを浮かべているようにしか思えない。

しかし、楽しそうに語るグラハムたちの様子を見ると、口に出すことは憚られた。こういうところが、『貧乏くじ同盟』の歌詞に「わかるわかる」と言ってしまう所以であろう。

元日本人は辛いよ。

そして副官は辛いよ。

だったら辞めりゃあいいじゃん、なんて声が聞こえてきそうだが、それは反対である。この場所を失うのだけはもつと嫌だ。

「副隊長？」と、心配そうな通信が入る。クーゴは苦笑しながら「なんでもない」と返した。

もうすぐガンダムの襲撃地点。気を引き締めるように、と告げて、クーゴは操縦桿を動かした。

既に施設は襲撃を受けた後らしく、遠くから黒煙が漂う。仕事を終えたとでも言うかのように、2機のガンダムが空を飛ぶ。

白とオレンジ基調の可変機型ガンダムと、白と緑基調のスナイパー型ガンダムだ。今回は、グラハムの追いかける天使——白と青基調のガンダムはここに来ていないらしい。

グラハムは落胆したように息を吐いた。が、曇った表情はすぐに不敵な笑みへ変わる。機体が違っても、敵がガンダムであることに喜びを感じているかのようだ。

「たとえこの場にキミがいなくとも。仲間を墜おとし続けければ、キミにたどり着けるだろうか？」

グラハムの言葉に、クーゴは頭を抱えなくなった。ポジティブシン

キングにも程がある。

しかし、グラハムはガンダムという存在そのものに恋をしているらしい。大本命が白と青基調のガンダムだとするなら、その他は「賞賛と好意に値する」存在ということか。

そう考えると、『グラハム・エーカーがハーレムを作ろうとしている』という疑惑が湧き上がってきた。クーゴには弁明の余地がない。弁明できる人間がいるならヘッドハンティングしたいくらいだ。

『任務完了。今回、スターダスト・トレイマーは出てこなかったみたいだね』

『余計な邪魔が入らなかつたんだ。いいことじゃないか。……いや、スターダスト・トレイマーより厄介なのが来たぞ！』

声が出た。若い男の声が、2人。ガンダムのパイロットだと、クーゴはすぐに合点が言った。通信は開いていないはずなのに、どうして声が聞こえるのだろう。

認めたくないのだが、やはり、クーゴにはニュータイプのカウ「ゲ」があるのだろうか。人間卒業までのカウントダウンが聞こえた気がして、首を振ってそれを振り払った。

しかも彼らの声、どこかで聞いたことがある。確か——ブリタニア・ユニオンとAEU特務隊OZの合同作戦で、自分たちは初めて、ソレスタルビーイングの全ガンダムと対峙した。

そうだ、きよわく虚憶。

彼らとは、そこで初めて対峙した。

現実では、この場所で初めて対峙した。

口について歌が零れる。旋律が響く。次の瞬間、クーゴの世界は一変した。



『あのフラッグは危険だ、下がって！』

白と青基調のガンダムを庇うようにして、白とオレンジ基調のガンダムが飛び出した。

若い男の声。パイロットの判断は間違いではない。クーゴ自身も、グラハムが危険だということは十二分に察していた。

だからといって、クーゴがグラハムを『何とかできる』かと言われたらN.Oだ。安全装置のくせにと言われても困る。

車のブレーキだって、元から車のスピードが出たときはうまく作動しないだろう。それと同じなのだ。

誰に言われたわけでもなく、クーゴは心の中で言い訳した。

周囲の攻撃を躲しながら、グラハムの援護に集中する。

「可変型が……！　だが、空中の機動性ならば、このフラッグでも！」

『速い……！　それにこの独特の動き……かなりの腕のパイロットだ！』

「このフラッグは私が育てた機体だ……！　相手がガンダムだろうと、やってみせるさ！」

グラハムのフラッグが、可変機タイプのガンダムに狙いを定める。

ユニオン軍の「空の貴公子」という2つ名は伊達ではない。相変わらずの速さを披露し、相手を翻弄した。

いや、翻弄しているというよりは、速く追い抜いて意中の相手——白と青基調のガンダムと戦いたくて仕方がないのだ。

あの可変機も、スナイパータイプも、超火力集中型の重装備タイプも、攻防一体型も、確かに奴にとっては「賞賛と好意に値」する。

しかし、グラハム・エーカーという男が『愛してやまない』のは、可変型に庇われたガンダムであった。AEUの軍事演習場に降り立つ

た、白と青基調のガンダムだった。

空を飛び回るグラハムのフラッグ。奴から繰り出される攻撃と回避も容赦なくなってきた。グラハムにとってあの可変型タイプは、いつの間にか「賞賛と好意」から「人の恋路を邪魔する奴」という存在になってきたらしい。

「キミのような奴は有名な故事に乗っ取り、馬に蹴られるものと心得てほしいな！　彼女をエスコートするのは、この私だっ!!」

『何言ってるんだこのパイロット!?　って、あれ!?　通信回路は開いてないはずなのに、どうして声が聞こえるんだ……!?』

『言ってることもやってることもアレだが、それ以上にこのパイロットはヤベエぞ！　文字通りイロイロとな!』

クーゴの「ケ」がおかしくなければ、何やら可変型ガンダムのパイロットたちも恐怖体験をしているようだ。しかも会話が成立している。ついでに、グラハムはクーゴの援護も必要なさそうだ。

だが、白と青基調のガンダムを守ろうとする機体は他にもいた。少し下に待機していた白と緑基調のガンダムが、銃口をフラッグに向けたのだ。クーゴは慌ててグラハムの名を呼ぶが、奴はわかっていたようだった。

「スナイパー型のガンダムか！　私の変幻自在、天衣無縫の動きを追いきれるかな!？」

「それ、自分で言うような台詞じゃないぞ」

「細かいことはいいのだよ、クーゴ!」

スナイパー型のパイロットを挑発し、間髪入れず、グラハムのフラッグが飛行形態を取る。グラハム・スペシャルの逆バージョンだ。

これもまた、パイロットにかなりのGがかかる。相変わらず無茶苦茶だが、彼は文字通り『縦横無尽』に飛び回った。

グラハムの言葉と飛びっぷりに闘争心を刺激されたのか、ガンダム

からは強い殺気がにじみ出ていた。

『この野郎、俺の狙いを甘く見るなよ!』

そう言うなり、白と緑基調のガンダムがライフルを構える。

しかし、その動きが止まった。理由は、別な人間からの指摘であった。

『貴方は一体、誰と話しているんだ』

『え? ——嘘だろおい。通信開いてないのに、声がしただと……!?!』

あつちもこつちも怪現象が多発しているようだ。恐怖体験日和らしい。しかも、他人から指摘されなければ気づくことなどなかったというおまけつきだ。

ならば、『通信が開いていないのに、この場の通信内容のすべてを網羅してしまう』クーゴは一体何なのだろう。人間卒業目前なのだろうか。そんなつもりは微塵もないのに。

白と緑基調のガンダムが、次々とライフルを撃ち放つ。グラハムのフラッグはそれをスレスレで回避しながら、一端下がっていた白と青基調のガンダムめがけて突っ込んでいく。

それを白とオレンジ基調のガンダムが阻もうと割り込んだ。さらに、2機のガンダムは互いの持ち味——高速移動と射撃の連携により、グラハムの翔るフラッグを阻もうと試みる。

クーゴは即座に、グラハムとスナイパータイプの間に割り込んだ。そのままガーベラストレートとタイガー・ピアスを振るう。

放たれた砲撃を文字通り一刀両断。日本文化や日本刀はまだまだ現役、銃弾だって真つ二つにできる。

『何?! サムライ・ソードだと!?!』

まさか、自分の攻撃が刀で真つ二つにされるだなんて思わなかった

のだろう。

パイロットが驚愕の声を上げる。クーゴはニヤリと笑みを深めた。

「知っているか？ スナイパー。……21世紀の初頭、どこぞの物好きが『日本刀と銃、戦わせたらどちらが勝つのか』という疑問を持つたことがあつたそうだ」

『は？』

「ルールは至つてシンプルだ。日本刀の刃を立てて、そこへ向かつて銃を撃つ。銃弾が真つ二つになれば日本刀の勝ち、日本刀が真つ二つに折れれば銃の勝ち。——さて、勝つたのはどちらだと思う？」

パイロットは沈黙する。

ややあつて、彼は『もちろん、銃だろ』と、自信満々に言いきつた。成程、銃に対する信頼と愛着は強いらしい。

流石はスナイパー。この人物は、スナイパーとしての腕前だけでなく、他の部分——特に心構えだつて優れているのだろう。

だが、クーゴだつて負けぢやない。友人が開発してくれた2振りの刀を信頼しているし、愛着だつて持っている。

「残念。正解は——」

クーゴはそう言つて、操縦桿を握り締めた。フラッグを一気に加速させる。不意打ちに近い突撃に、パイロットが慌てて銃の照準を合わせたのが見えた。

砲撃が放たれる。それを、2振りの刀で叩き切る。また攻撃が放たれる。刀で真つ二つに切り裂く。それを繰り返して6回。——距離が、迫る！

クーゴのフラッグは一気に肉薄した。

「日本刀だ！」

◆

「私は彼女が好きだ！　彼女が、欲しいイイイイイイ！！」

『お父さんは！　お父さんは赦しません！　こんなの絶対に認めないいいいいいい！！』

『う、うわああああああー！　ロックオンが、ロックオンが壊れたああああ！！』

『はははははははははは！　こりや酷えや！　あつははははははははははほっごほっ』

『ハ、ハレルヤ!?　大変だ、ハレルヤが呼吸困難に！』

「……アレー？　ドコカデミキキシタコトノアルジヨウキヨウダナー」

クーゴが思わず呟いた声は、抑揚のない棒読みであった。見覚え／聞き覚えがありすぎて、なんと言っているのかさっぱりわからない。

虚憶きよわくのフラッシュバックから我に返ったときにはもう、虚憶きよわくの終盤の光景が再現されていた。逆に、こうなってしまふに至ったプロセスが思い出せなくなっている。それでも戦闘を行い撃墜されなかったのだから恐ろしい。ガンダムと交戦し始めてから、あまり時間は経過していない様子だった。

ちなみに、ハワードとダリルにはこの混沌めいた会話は聞こえていない。全体の動きを読み取りながら、グラハムやクーゴの援護に奮戦している。彼らはきつと、こんな会話が繰り返されていることなど夢にも思っていないだろう。このまま永遠に気づかないでいてほしいくらいだ。ささやかな願いだが、果たしてどうなることやら。

『通信が開いていないのに、この場の通信内容のすべてを網羅してしまう』クーゴにしてみれば、この状況は本当にカオスである。

今回の任務は『ガンダム鹵獲およびデータ収集』のはずなのに、『白と青基調のガンダムおよびそのパイロットをどうこうする』話になっているように感じるのは気のせいか。

実際、スナイパー型のパイロットとグラハムの会話は『娘を嫁に出したくない父親VS恋人との結婚を望む男』の縮図に見えなくもない。

そして被害を受ける第三者2名、可変型のパイロットたちとクーゴ。何も知らない幸運な第三者2人、ハワードとダリル。

「グラハムー、いろんな意味で戻ってこーい」

堪えきれなくなつて、クーゴはグラハムに呼びかけた。

しかし返事は返つてこない。その代わりに、盛大なやり取りが聞こえてきた。

「何人たりとも、私の愛を阻むことはできない！ 阻むものがあるなら、そんなもの、私の無茶で押し通す！」

『年の差その他諸々考えろ、この変態が!!』

「キミにそれを言える資格はないな！ キミは私と同類と見た！」

『天地がひっくり返ったとて、お前さんだけでは一緒にされたくないね！ こっちは頑張ってお兄さんやってるんだからな！』

「そうやって、キミは愛するものが他人にかっさらわれていくのを、手をこまねいて静観すると？ そんなこと、私はお断りだ！」

「グラハアアアアム!!」

クーゴの声は、グラハムには届いていない様子だった。彼は今、スナイパータイプのパイロットと会話するので忙しい。追記として、スナイパータイプのパイロットとグラハムの通信回路は開いていないのだ。それでも会話のデッドボールが成り立っている。おまけに、2人とも、この事実気づかず、自然に会話を行っているではないか。戦いは激化していく。銃撃を受けて被弾しても、グラハムのフラッ

グはスナイパー型のガンダムへと向かった。

その一撃を「肘鉄ごと引き下がる私ではないよ!」と言ってしまふあたり、もう色々とアレである。

随分とリーチの長い肘鉄だ。ガンダムの持つ銃の銃身で殴打されたなら、かろうじて肘鉄と言えそうだとクーゴは思うのだが。

『俺は人殺し、いつかは裁きを受ける身だ。幸福を手にする権利なんか存在しない。あんただってそうだろう? 軍人さん。——その覚悟は、とうにできてるんだよ!』

「ああそうだな! 敵を撃ち、部下や上官を死なせ、屍の山を築いていく……そんな人間がたどり着く場所くらい、私も心得ているさ! していないはずは、私もそこに墜ちるのだと!」

『だったら!』

「だからこそだ!」

グラハムのフラッグが、一気にガンダムへと肉薄する! 間一髪、白と緑基調のガンダムはビームサーベルで攻撃を受け止めた。派手な火花が飛び散る。

スナイパータイプのパイロットの表情が『視えた』。虚憶きよおくの中で見た、屈辱と激情に燃えた青年。やっぱり彼はビームサーベルに頼りたくないらしい。

「だからこそ、好いた相手を——心から愛した女性ひとを! せめて、他ならぬ己自身の手で、幸せにしたいと願うのだよ——!!」

フラッグとガンダムが鏝迫り合いを演じる。『通信が開いていないのに、この場の通信内容のすべてを網羅してしまう』クーゴは、2人が真面目に戦っていることが痛いほど伝わってきた。

但し、本来の目的をすっかり忘れているという点から視ているせいか、ひたすら異常な光景としか認識できない。

そんな自分が悪いのか、場違いなことをやっている2人が悪いの

か、いくら考えても判断が下せそうになかった。

可変型はなんとかして目的——戦場からの離脱を試みているが、ハワードやダリルたちが追いつがっているため叶わないでいる。もつとも、離脱できない要因の1つであるスナイパー型のガンダムは、グラハムと激しい戦闘を繰り返していた。

事実上の硬直状態。打破する手が見つからないのは、自分たちガンダム調査隊やガンダムのパイロットたちも同じらしい。あと一手。それさえあれば、この戦況をひっくり返すことができるのに。鹵獲の可能性が目の前にある以上、諦めたくなかった。

しかし、クーゴの思考回路はレーダーの反応音によって中断させられた。自分たちの機体の背後に、すさまじいエネルギーが集まっている。思わずクーゴがフラッグごと振り返ったとき、大地をと轟かすような音が響き渡り、瓦礫と化していた施設の一部が崩れ始めた。

何か、いる。

途方もない大きさの「何か」が、ゆっくりと蠢いていた。

姿は確認できないが、廃墟の中には「何か」がいる。いてはいけな
い、「何か」が。

「——下から来るぞ、気を付けろ！」

『何っ!?!』

『何だ!?!』

『うおっ!?!』

『なんと!?!』

クーゴの警告に、スナイパー型のパイロット、ハワード、ダリル、グラハムが慌てて回避行動をとった。クーゴもそれに続く。緊急回避のため、体に凄まじいGがかかった。

次の瞬間、自分たちが先程いた場所に、得体のしれない異形が花開いていた。化け物と言ってもいい図体は、自分たちなど歯牙にもかけず、まっすぐ空へと突っ込んでいく。

クーゴの気のせいではなければ、笑い声が聞こえた。人の笑い声。し

かも、1人ではない。複数人の笑い声。老若男女の音がする。辛うじて聞き取れたのは、『シンカ』という単語。

ヒルを思わせるようなフォルムに、人の顔がたくさん浮かんでいる。何かで見たような気が、しないでもない。

異形は猛スピードで、大気圏めがけて飛んでいく。むしろ、宇宙へと向かっているように思った。

どう考えてもフラッグの推進性では間に合わないし、大気圏突入も難しい。

『新しいミッション？——よし、そうと決まれば！』

不意に、スナイパー型のパイロットの声が出た。次の瞬間、2機のガンダムが離脱に入る。

「逃すか！」

「待て！」

「ハワード、ダリル！ 深追いするな！」

追いかけてようとした部下2人をグラハムが制止した。刹那、生き物のうめき声のような音がして、新たな異形が湧いて出た。ハエトリソウとラフレシアを足して、大量の目玉を付けたような姿のものが、十数体。

もし、2人がそのままガンダムを追いかけていたら、下から飛び出してきたアレの餌食になっていただろう。今はガンダムを捨て置き、この異形を何とかしなくては。異形どもが市街地にでも出てしまつたら——考えるだけで恐ろしい。

仲間たちは通信越しに顔を見合わせ、頷いた。

そのまま、異形どもの討伐に奮闘する。リニアライフルで撃ち抜き、プラズマソードで真つ二つに叩き切り、連携を駆使してバケモノたちを屠っていった。

クローゴもガーベラストレートとタイガー・ピアスで異形を切り裂

く。断末魔と血しぶきが飛び交う戦場。援軍はもう少し時間がかかるらしい。

次の瞬間、背後から空を切り割くかのような音が響いた。振り返る。赤紫の残光が、空の中に溶けていく。砲撃だ。その主がスナイパー型のガンダムだと直感する。

直後、2発目が放たれた。

大気圏をぶち抜いて、宇宙まで届く一撃だ。

「大気圏越しのスナイピング!?!」

「本当になんでもありか、ガンダム……!」

クーゴとグラハムが戦慄する。ハワードとダリルも、ごくりと生唾を飲み干した。

直後、通信が入る。異形が現れたという知らせを受けたユニオン軍が、こちらに援軍としてやって来たらしい。

そのまま合流し、異形の掃討を行う。異形が沈黙したのは、それから暫く経過した後だった。



作戦終了後のブリーフィングで。

「ロックオン。貴方、誰と会話してたの?」

「——え」

通信越しからスメラギの指摘を受けたロックオンが、表情を凍らせた。

しかし、ここからが、彼の恐怖体験の本番である。

「通信記録には、誰かと会話したような音声は一切記録されていません。全部、ロックオンの声だけです」

クリステイナがデータを分析する。ロックオンの表情がますます青くなった。イデアは素知らぬふりをする。

「そんなことないぞ！ 確かに俺は、あのフラッグのパイロットたちと会話を——」

往生際悪く食いついたロックオンに対して、仲間たちはデータを示した。1人で叫び散らすロックオンの声だけが、淡々と再生されていく。

ロックオン・ストラトス25歳。彼は今、得体の知れぬ悪寒に体を震わせて、こめかみから大量の汗を流している。似たような経験をした刹那以外、彼の話信じる者はいないだろう。

イデアはそれが真実であると知っているけれど、敢えて知らないふりをした。刹那は空耳および直感だと思っっているため黙っている。後でフォローが入るだろうか。どちらにしろ、この事実はまだ公にすべきではない。

「ロックオン、疲れてる？」

「大丈夫だよ。心配するなって！」

フェルトは憂いに満ちた瞳を向ける。普段から表情は薄いけれど、今はロックオンを心配する気持ちが色濃く表れている。

これ以上フェルトの表情を曇らせたくなかったようで、彼は必死になつて弁明する。心配してくれたことに対する感謝の念が通じたのか、フェルトは表情を緩めた。

そのままお開きになり、仲間たちは次々と通信を切る。イデアは

ロックオンに通信を入れた。まさか、ブリーフィング終了直後に通信が来るとは思っていなかったのだろう。ロックオンが驚いた顔で「どうした？」と首を傾げた。

「今のロックオンにぴったりの曲があるの。聴く？」

「今のお前には悪意しか感じないから、やめておく」

「ごめんなさい、もう手遅れ」

それだけ言い残し、アイデアは即座に通信を切った。今頃、彼は流れしてきた曲を聴いて身につまされている頃だろう。アイデアはちらりと端末画面に目をやる。ロックオンに送信した曲は、テオ・マイヤーの『貧乏くじ同盟』だ。

ロックオンの同胞とも言える男たちの背中が『視える』。その中に無理やり組み込まれかけた者もいるし、新規加入を果たしてしまい落ち込む者の姿も『視えた』。貧乏くじと言いながらも、彼らの表情は笑顔で満ちている。苦笑に近い表情だけれど。

アイデアは端末を閉じる。次のミッションまで時間はあるが、オフ会のできる時間は確保できないだろう。そんな予感がした。ゲッター線の研究施設は潰せたが、突然現れた異形の存在を見過ごすことはできない。あれもまた、争いの火種になる。

稼働し続けた研究所でもアレなのだ。停止した場所であっても、アレが飛び出してくる危険性はありえる。

『同胞』たちも動き出すだろう。まずは政治的な部分から、次は企業として、最後は——遊撃部隊として。

世界はまだ、迷走の途上。

「この1件では、片付かない」

アイデアはぼつりと呟いて、空を見上げる。今日は曇りのためか、星も月も見えなかった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

18. 呉越同舟―きょうどうせんせん―

「あの一件は聞いたよ。大変だったらしいね」

ビリーはクーゴたちを労いながら、コーヒーを淹れてくれた。グラハムのカップは、京都旅行で『エトワール』から貰った誕生日プレゼントのものである。彼はそれも大切に使っているようだった。

湯気の漂うブラックコーヒーを一口。胃に少し重たい一撃が入ったような感覚に見舞われた。まだ終わりじゃない、気を抜くなど言われたような気分になる。クーゴもなんとなくそんな予感がしてならなかった。

クーゴの直感は嫌な形で中した。

「他のところも、施設が壊滅した直後、施設周辺に異形の生き物が現れたって話だよ」

ビリーはそう言って、端末を操作する。提示されたデータ画像に映し出されたのは、人間の顔のようなものがたくさん浮かび上がったヒルのような生き物である。

他にも、人の顔が複数合体したようなものや、ハエトリソウとラフレシアを足して大量の目玉を付けたようなものなどが浮かんでいる。先の研究所で見たものと同じだ。

ふとクーゴは目を留めた。ナメクジを連想させるような体躯に、大きな顔が浮かぶ個体。その上には更に顔がついている。2つの顔立ちは、クーゴの記憶を揺さぶってきた。

「……………あれ、こいつらどこかで見たことがあるな」

「奇遇だな。私もこれと同じものを見たことがある」

写真を覗き込んだグラハムも、クーゴの言葉に同意する。ビリーも頷き、端末を操作した。

虚憶きよおくのデータベースから、『世界最後の日』のOEとZの情報を引き出す。

インベーターと化したコーウエン&ステインガーが描かれた絵と、先程クーゴが目に留めた画像。完全に一致した。

頭の中で「やつぱり」という単語が浮かぶ。ゲッター線と聞く度に感じた嫌な予感、これと似たような事態が起こるのではないかという不安だったのだろう。

昔、2人の研究者が人革連の方へ亡命したという話を聞いたことがある。確か、その人物の名前もコーウエンとステインガーだったような気がしないでもない。

その頃からだ。人革連のゲッター線研究が、3国の中で一番盛んになったのは。——しかし、クーゴの思考はそこで中断させられることになる。

突如、けたたましい音と一緒に、放送が響き渡った。

『ユニオンのXXXに怪物が出現！ 至急迎撃に当たれ!!』

怪物。この単語を聞いて連想されたのは、先程データ画像で見た化け物どもだ。

しかも、指定されたポイントはこの前活動を停止した研究所。そこから数百キロ先には主要都市がある。

奴らがこのまま進軍したら。街中で大暴れしたら。甚大な被害が出ることは明らかだった。

クーゴとグラハムは顔を見合わせ頷いた。ビリーも険しい顔を浮かべ、憂うような眼差しを向けてきた。

言葉の代わりに不敵な笑みを浮かべることで、彼へ返答する。自分たちの笑みを見て安心したのだろう。

「2人とも！ 必ず帰還して、元気な顔を見せること！」

「心得ているさ、カタギリ！」

「約束する！ 行ってくる、ビリー！」

ビリーは表情を緩めて頷いた。そのまま彼と別れ、慌ただしく格納庫へ向かう。パイロットスーツを着たままだったので、すぐに乗り込むことができた。

ハワードとダリルがコックピットに乗り込む姿が見えた。クーゴはそれを確認した後、操縦桿を握り締める。格納庫のハッチが開いた。即座にグラハムが先陣を切る。

それに続いて、クーゴたちも空へと飛び出す。今が緊急事態だなんて思えない程、澄み渡った青空。誰もが「平和だ」と信じて疑わないほど、長閑な晴天日和だった。



「見えた！」

異形どもと戦うフラッグの群れを見つけたグラハムが、その中へと突っ込んでいく。グラハムスペシャルで形態を変えて、ライフルを撃ち放った。

クーゴたちもそれに続いて、それぞれ武器を構えて飛び込んでいく。切つて、撃つて、弾き飛ばして、異形たちを屠っていった。

いつぞやの虚憶きよわくやシュミレーターでも、似たような生き物が出てきたことがある。それを体験していたのが功を奏したのか、インベーターの動きはある程度予測できた。

「この化け物が！」

「ここからいなくなれ！」

ハワードの銃撃を受けて怯んだ化け物へ、ダリルのプラズマソード

による一撃が入る。異形は断末魔の悲鳴を上げて消滅した。

大量の体液が飛び散る。2人はそこで止まらず、すぐさま次の敵を討った。今度はダリルが敵に銃撃を浴びせ、ハワードがプラズマソードで薙ぎ払う。

いいコンビネーションだ。こちらも負けてはいられない。クーゴは即座にグラハムの援護に入る。

ガーベラストレートとタイガー・ピアスを鞘から引き抜き、グラハムの背後に迫った異形を叩き切る。

次の瞬間、グラハムのライフルが唸った。振り返れば、体液をまき散らしながら爆散する異形の姿が視界の端を横切る。

「これで貸し借りなしだな、クーゴ」

「お互いにな、グラハム」

軽口を叩きながら、化け物の掃討に勤しむ。奴らはどこから湧いているのか、全く見当がつかない。

このままでは消耗戦になる。原因を突き止めなければ、力尽きるのは自分たちの方だ。

「隊長、怪物以外に反応が出ました！」

「この反応、ガンダムです！こちらに近づいているみたいですが……」

ハワードとダリルからの通信が入る。レーダーを見れば、2つの反応が出ていた。

視界の端を、緑の光が横切る。あの光は、ガンダムが現れた証拠だ。振り返った先にいたのは、白と青基調のガンダムと純白のガンダム。

あの2機はどこへ武力介入するつもりなのだろう。

そう思考を巡らせたとき、2機のガンダムは何の躊躇いもなく攻撃を仕掛けた。

研究施設やユニオンフラッグおよび空母ではなく、蠢いていた異形たちに向かつて。

「……もしかして、この化け物どもを紛争の原因とみなしたのか？」

クーゴの問いに是と答えるかのように、天使と天女は化け物たちを殲滅していく。ユニオンフラッグや空母には目もくれない。体格の差が何倍もある異形を切り裂き、弾き飛ばし、撃ち抜き、屠っていた。

天使と天女はユニオン軍と協力しているつもりはないらしい。ソレスタルビーイングのパイロットたちは、独自で作戦を遂行している様子だった。緑の粒子をばらまく様子は見られない。むしろ、ばらまかれたらユニオンが大変なことになる。

ソレスタルビーイングなりの気遣いなのだろう。そこには素直に感謝すべきだ。クーゴは彼らを視界の端に捉えつつ、暴れまわる異形を駆逐していく。グラハムも同じらしく、時折フラッグの頭部が白と青基調のガンダムを向いていた。

ガンダムの介入もあってか、異形退治はスムーズに進む。相変わらず、うじやうじや湧いて出てくるところは変わらない。

そのとき、レーダーがけたたましく鳴り響いた。先のガンダム鹵獲作戦で出てきたのと同じように、下からの突撃である。調査隊の面々とガンダムは全力で回避行動に移る。視界の脇で、逃げきれなかったフラッグが弾き飛ばされ爆発した様子が見えた。また、仲間が死んだのだ。怒りが湧き上がってくる。

見上げた先にいたのは、いつぞやの虚憶きよおくで見たインベーター化した人間——コーウエンとステインガーとよく似た異形が姿を現した。奴らは笑いながら、ユニオンフラッグやガンダムたちに攻撃を仕掛けてきた。

『これが、我々の研究成果！』

『人類の、新たな進化の形！』

『とくと思いい知れ！　これが、究極の存在だ!!』

異形の声が響く。

奴らの発言で、ソレスタルビーイングが何故武力介入に至ったのか見当がついた。ガンダムたちのターゲットは『先日の一件で中断に追いつけなかった研究成果を無駄にしたくなって、ゲッター線を使って異形と化した』科学者たちだ。彼らが何を思っただんな研究をしてきたのかなんて、その末路を一目見れば見当がつく。

ソレスタルビーイングでなくても、各国および国連、マスメディア等々が怒り狂うレベルである。自分の研究成果を自分自身で実験するとは、研究者としてはどうなのだろうか。無事に帰れたら、是非ともビリーに訊ねてみたい。そのためにも生き残らなければ。

異形と化した科学者たちが咆哮を上げる。力任せの突撃だ。MSの方が小回りが利くとはいえ、あの巨体をまともに喰らったら生きていけないだろう。余波を喰らうだけでも爆損したフラッグがいたのだ。運が良くて戦闘不能、悪ければ死が待っている。嫌な汗がこめかみを伝った。

「違う」

不意に、声が聞こえた。聞き覚えのある女性の声だった。

強い否定を帯びた声色に、クーゴは驚き目を見張る。

「私たちは、こんな革新シンカを認めない」

怒りに満ちた女性の横顔が見えた気がした。簪で束ねられた緑の髪、紫苑の瞳。誰かに似ている。しかし、詳しい特徴を確認する間もなく、その光景は泡沫に消える。

次の瞬間、異形に対してガンダムたちが攻撃を仕掛けた。遠距離からの射撃攻撃。的が大きいためにすべてが命中し、おびただしい量の体液が飛び散る。異形が呻き、体が傾く。

ガンダムの攻撃が効いているのだ。しかし、異形は触手を展開する。クーゴたちは即座に操縦桿を動かし回避行動に移った。触手が捉えたのは、近くを徘徊していた別の個体だ。

小さい個体が断末魔を残し、触手に取り込まれていく。その中には人の顔らしきものが浮かんでいたものもいて、彼らも断末魔の悲鳴と恨み言を残して取り込まれてしまった。

巨体が蠢いた。先程ガンダムにつけられた傷が、みるみるうちに修復されてしまう。

「嘘だろう!! 仲間を取り込んで傷を治すなんて……」

「なんてこった……!! いつぞやのシユミレーターに出てきたインベーターそのものじゃないか!」

ハワードとダリルが絶句する。だが、それだけでは終わらなかつた。

異形の足元から、新たな異形の個体が形成された。それらはグロテスクな花を咲かせツタを伸ばしながら、フラッグや戦艦に襲い掛かる。何という自給自足だ。言葉は画期的な希望に満ち溢れているというのに、目の前で繰り広げられる自給自足程認めたくないものはない。

自分の尖兵を次から次と生み出し、自分が傷ついたら尖兵を取り込むことで自己回復。そんなことを延々と続けられたら、完全に消耗戦になる。エネルギーや人員その他諸々が限られている自分たちが不利だ。

「ソレスタルビーイングは奴を殲滅対象と認定。これにより、ミッションはプランD-4、セカンドフェイズに移行。作戦を遂行する」「了解! ガンダムマイスターの威信と私のすべてに賭けて、やり遂げてみせる!」

ガンダムのパイロットたちの声がした。セイロン島やタリビアで

聞こえた声より、はつきりと聞こえる。中世的な声だと思っていた方は、まだ若い少女のものだった。こちらもどこかで聞き覚えのある声だ。はて、とクーゴが首を傾げる。

その間に、2機のガンダムは異形に攻撃を仕掛けた。天女が機動力を活かして攪乱し、隙について回り込んだ天使が刃を振り下ろす。それは見事に異形の肉を割いた。間髪入れず、天女が体当たりを繰り返した。体制を崩した異形に、天使と天女が弾丸の雨あられをお見舞いする。

息もつく間もない連続攻撃だ。確かにダメージは与えられている。だが、異形はすぐに触手を伸ばし、尖兵を取り込んでいく。それでも、2人は変わらず連携攻撃を仕掛けていった。やり慣れたコンバットパターンなのだろう。コンビネーションアタックの主導を握っているのは天女であった。

しかし、何故だろう。嫌な予感がして堪らない。このまま放置してはいけないと、クーゴの頭の中で何か警笛を鳴らしている。ほぼ直感に近いものに従い、クーゴは操縦桿を握り締めた。思いつきり動かし。

フラッグが加速し、Gが体にかかってきた。それを振り払うようにして、更に速度を上げる。視界の端に、グラハムの機体が追従してきたのが見えた。どうやら彼も、何かを感じ取ったらしい。

天使と天女の足元から、新しい尖兵が湧き上がってきた。大型の異形に意識を持っていかれていたのか、ほんのわずかにガンダムたちの反応が遅れる。網のように開いた触手が、天使と天女に襲い掛かる！

「させるかあー！」

クーゴがガーベラストレートとタイガー・ピアスで触手の網を切り裂き、グラハムがライフルで触手を撃ち抜く。そのまま、2機のカスタムフラッグはガンダムの背中を守るようにして躍り出た。

ガンダムのパイロットたちは、まさかクーゴとグラハムらが援護攻撃および援護射撃を繰り返すとは思っていなかったのだろう。息を

のむ声が聞こえた。それはハワードたちも同じだったようで、彼らは焦った様子でクーゴとグラハムを呼んだ。

いいのか、と。ハワードとダリルが心配そうな顔でこちらを見返している気がした。

いいんだよ、と。彼らに対して、クーゴは満面の笑みで答える。

始末書が待っているのは承知の上だ。何をすべきか、何をしなければならぬのか、知っている。

「同じ敵を倒すために戦っている者同士だ。少なくとも『今』は、追う者と追われる者でもなければ敵同士でもない」

クーゴはちらりとグラハムを見た。

通信は開いていないけれど、彼が頷き微笑む姿がはつきりと『見える』。

「ガンダムのパイロットよ、聞こえるか？」

グラハムが、ガンダムのパイロットたちに語り掛ける。

「ここは共闘した方が得策だと思うが、どうする？」

パイロットたちの返答が来るまでの数秒間が、妙に長く感じた。永劫のような、一瞬のような、何とも言えぬ体感時間。

実際の時間がどれ程のものかはわからない。けれど、幾何の沈黙の後で。

「——了解した。目標を駆逐する！」

「——ええ、お願い！ 援護は任せるわ」

2機のガンダムからの答えに、クーゴとグラハムは顔を見合わせ笑みを浮かべた。頷き合い、異形に向き直る。

『ナイスな展開じゃないか!』

不意に、少年の声が響いた気がして空を見た。そこには誰もいない。けれど、彼の言葉通りの展開だ。場違いにも、燃え上がる感情の高ぶりは誤魔化せそうになかった。

正義の味方になりたかった少年は、王道展開を好んでいた。今まで死闘を演じてきた敵が味方になったり、ピンチのときに味方が駆けつけてくれたり——例を挙げればキリがない。

彼が大抵その言葉を発するとき、文字通りの光景が広がっていた。例えば、テロリスト呼ばわりされていた自分たちの汚名が晴れ、政府からバックアップを受けたとき等がそれにあたる。

そして、その台詞が出てくるときは、彼が本当の意味で「正義の味方」となったときだ。

示された絶望を打ち砕き、点と点を繋いで、希望までの線を引いた。未来までの線を描き出した。

点を繋いで線を引く。滅びの過去から、人類の未来を救うために降り立った機体。

正義の味方が起こした奇跡を、知っている。虚憶の中で、クーゴはそれを目にしてきた。

機械仕掛けの神に、「人間であり続ける」ことを示した少年の名前は、何とあったか。彼に寄り添っていた少女の名は、何とあったか。彼に寄り添いたいと願った少女2人の修羅場は、どちらに軍配が上ったのか。どれもこれも謎だらけである。

今は後にしよう。クーゴは思考回路を切り替える。

自分たちに随伴するように、ハワードとダリルのフラッグがやって来た。

「これはこれで、心躍る……!」

グラハムが不敵な笑みを浮かべる。他の面々も、顔を見合わせて頷

いた。

「我が愛しの姫君よ、エスコートは任せてくれ！」

「ひ、姫君……!?!」

「ウチのがああなのはご愛嬌だ。隊長やってるから、実力は信頼してやってくれ」

「ええ。重ね重ね、お願いします」

「え、何を？」

「まさか、こんな展開になるなんてな。こういう王道展開、嫌いじゃないですぜ！」

「ああ！　むしろ望むところだ！」

そうして、異形に攻撃を仕掛けるために飛び出していく。

フラッグファイターズとガンダムマイスターによる、前代未聞の共闘が幕を開けた。



ノブレスは端末を眺める。アレハンドロたちと連絡を取るためのものではなく、『同胞』たちと連絡を取るためのものだ。

いくつもの顔を持つノブレスにとって、分別は大事なことであった。足が出る危険性その他諸々の要素を考えた結果である。

(『ユニオン、AEU、人革連のゲッター線関連研究所の一部からインベーターが出現』か)

ソレスタルビーイングはインベーターを『戦乱を呼ぶ元凶』として殲滅対象に認定、武力介入を行っている。その際、各国のエースたちから共闘を持ちかけられたガンダムマイスターたちがそれに乗っか

るという形で戦線を展開していた。

A E Uではパトリック・コーラサワー率いる部隊が、現在ヴァーチエとデユナメスらと共闘中。人革連ではセルゲイ・スミノルフとその部下の超兵1号ソーマ・ピリス率いる部隊が、キュリオスと共闘中。ユニオンではグラハム・エーカーとクーゴ・ハガネらの率いる調査隊が、エクシアとスターゲイザーらと共闘中だ。

『同胞』たちは宇宙圏に飛び立ち、機動エレベーター付近で暴れまわるインベーターを駆逐している。ついでに、その様子も全国配信されるような細工だつて施してあつた。この一件が片付けば、我らが『同胞』のメディア関連部署に属するメンバー勢無双が始まるだろう。

その1人は現在、人革連にある報道局の支社にいる。今頃、後輩と護衛対象らと一緒に現地の研究所に乗り込み、撮影しているに違いない。

悪戯つぼく笑う青年は、世界の理不尽に挑む挑戦者。誰もが楽園と信じた箱の片隅に生じた綻びから、決して目を離さない。

(僕のミッションは、相変わらず『チーム・トリニティとの交流及び強化』『アレハンドロ・コーナーの監視』のままですか。のけ者にされているみたいで寂しいなあ……)

仮面の奥底では、寂しさにまみれた情けない顔をしているに違いない。いくら仮面をしていたとしても、その感情を完封できるとは限らないのだ。ノブレスは自身を叱咤しつつ、端末の情報を確認する。

もう1つの顔である技術提供会社はてんやわんや状態だ。ソレスタルビーイングやユニオンのガンダム調査隊、アザディスタン等に提供する技術および武装の設計開発のために日夜奮闘していた。技術提供交渉役は各自担当場所へ、代表取締役はアザディスタンにいる。

技術部の面々が「150mつて、完全に嫌がらせだよなこれ!」方向性がわからないぞ!」やら「データベースにあつたパールネイルとパールファングの武装を参考にしてみました」やら、「ほら、アザディスタンの王女様いだろ。代表取締役曰く、『口説き落したい女性』の

タイプにドンピシャなんだと」等と零していたか。

ノブレスは深々と息を吐いた。「女性は愛でるべき存在である。夫は愛する存在である。夫以外の男は親友ダチ公である。但し例外有り」という彼女の言葉に、現在進行形で叩きのめされている例外カテゴリーの男がいることを知らない。叩きのめされながらも尚、自分の想いと約束を果たすために戦っている男がいることを。

傍から見ているこちらとしては、寂しいと思う。悲しいとも思う。でも、彼は苦笑しながら言うのだろう。「そういうことだから、仕方がない。それに、こんなことでへし折れるくらいなら、もう止めている」と。報われないことを承知して戦い続ける——それもまた、強さだ。担当部署は違えど、ノブレスは彼を尊敬する。

ノブレスは元々グライフ博士の部署に所属していたため、彼らと行動を共にすることが多かった。しかし、アレハンドロの懐に潜り込むために志願してからは、彼らの日本行も相まって疎遠になりつつある。暇な時間を作れたら、彼らに電子メールを送ってみようか。トイレに立てこもる時間が長くなりそうだ。

「シャアむかつくシャアむかつくシャアむかつくシャアむかつく……！」

「あれを殺やつた方が早い。ネーナは間違っていない。だが、だが……！」

畜生、何度やってもこのジレンマを克服できねえ……！」

「ネーナ、ミハエル。耐えろ、耐えるんだ……！」

トリニティ三兄妹がカチカチ歯を鳴らす音が響く。彼らは現在、虚憶きよおくのデータから再現されたシユミレーターで特訓中だ。

ミツシヨンは護衛任務。ここまでなら、彼らが激しい苛立ちと葛藤を見せる必要はない。問題は、再現されているシチュエーションである。

『皆、落ち着け！ いい加減にしたらどうなんだ!?!』

護衛対象のMSはササビー。地球寒冷化作戦のためにアクシズ落としを企てた、ジオン総帥が駆る機体である。

『世界が自分を中心にして動くと思うな！ どれだけの女が貴方に泣かされたか！』

『思い出というものは、遠くなるから宝になるそうだよ、シヤア。これ以上、私の思い出を汚さないでもらおう！』

『大佐の嘘つき！ この戦いが終わったら、ナナイもララアも忘れるって言ったじゃない！』

それを追うのは、護衛対象と恋愛関係(?)にあつた女たちが駆るMS——パラス・アテネ、キュベレイ、ヤクト・ドーガ。

痴情のもつれによる怒りで能力が底上げされた3機は、困り果てているササビーを文字通り『フルボッコ』にしている。

一応、そんな護衛対象にも味方が1機いた。1機、いたのであるが。

『ナナイ、見ていないで止めてくれ。援護を』

『ふふふ。……大佐、たまには痛い思いでも如何ですか？』

『待て。何故こちらに銃口を向けるんだ!?!』

開始早々これである。速すぎる裏切り宣言だ。

それもそうだろう。レウルーラに搭乗するこのパイロットもまた、護衛対象者と恋愛関係だった女性である。

1対4。女性陣からは、彼の恋愛歴に関する酷い話が飛び交う。何股かけただの、棄てられただの、八方美人な口約束だの。

聞いているだけで怒りが湧き上がる内容だ。彼女たちと一緒にあの護衛対象を粛清する任務はないのかと考えるようになる。

「いつ見ても、いつやっても、これは酷いな」

ノブレスはぽつりと呟いた。刑事ドラマや推理小説等で見かける

「最悪な被害者」と「可哀想な加害者」の縮図そのものだ。むしろ、前者は「なぜ今まで殺されなかった」、後者は「よく今まで耐えてきた」と言いたくなるような状況である。

友人と一緒にこのシユミレーションを初めてやったとき、あまりの展開に、即座にシユミレーターの電源を落としてしまった。顔を真っ青にした友人が「これはどうすべきなんだろう」と、か細い声で言いながら目を潤ませた姿は今でも鮮明に残っている。

話は変わるが、トリニティ兄妹の弱点は『己にとつて都合が悪い方向に戦局が傾くと、連携や攻撃等に乱れが出る』ことだ。いかなる状態下であつても、どんな状況に追いやられても、自分たちの成すべき任務を成し遂げようとする強い意志と諦めない粘り強さ、および集中力が必要となる。

アレハンドロから言われた期限まで、もう時間がない。トリニティ兄妹のスローネシリーズにつける武装にも取り掛からなければ。いざというとき、彼らが奴らに使いつぶされてしまうことのないように。奴らの派閥に悟られないようにするのは中々骨が折れる。

ノブレスは武装を考えつつ、彼らのシユミレーターによる戦果を見つめていた。初めてこれをやったとき、開始早々ネーナが護衛対象を打ち殺すという形でミッションを終えたことを思い出す。それに比べれば、護衛対象を守り抜きながらパラス・アテネとキュベレイを撃退したのは成長だと思う。

相変わらず感情をあらわにしているが、彼らはきちんとミッションをこなしている。ヤクト・ドーガとレウルーラが墮ち、画面全体にはミッション成功の文字が浮かんだ。

「よし、終わった！」

「な、長かった……」

「うむ。ミッション成功だ」

3人はそれぞれ反応が違うけれど、ミッションがひと段落したことに安堵していた。

ノブレスは3人へ惜しみなく拍手を贈る。

「おめでとう、3人とも」

それを聞いたヨハンは微笑を浮かべ、ミハエルは照れたようにはにかみ、ネーナは頬を薔薇色に染めた。ミツシヨン完了までの時間も最短記録更新だ。本当に、よく頑張ってくれたと思う。

今日の晩御飯は外食にしよう。そこで、3人の活躍を祝ってあげよう。ノブレスは頭の中で、そのプランを考えながら脳量子派および能力を使って友人にコンタクトを取る。

この近辺にあるおいしい料理店のリサーチと、彼の味覚を「借りる」ためだ。自分だけ食べ物を食べないというのは、周囲から不信感を持たれるかもしれない。

元々、味覚障害で何を食べても味がしないのだ。そのため、ノブレスにとって食事は苦行でしかない。友人はニヤニヤしていたが、最終的には快く味覚を「貸して」くれた。

「今日はお祝いだな。おいしい店に行こうか」

「やったあー！」

「よっしゃあー！」

「ありがとうございます」

彼らが笑う。その笑顔がこれからも続くか否かは、自分の手にかかっているのだ。ノブレスは決意を新たにす。

トリニティ兄妹らと外へ出た。丁度いいタイミングで端末が鳴り響く。確認すると、インベーターの鎮圧が完了したという情報だった。

AEU、人革連、ユニオンのインベーターも殲滅が終わったらしい。各部隊はソレスタルビーイングに借りができたようで、ガンダムたちの撤退を赦したという。どこもかしこも被害が出たようで、しばらくは失った戦力補充に充てられるだろう。

ソレスタルビーイングも、この件で新型武装の開発が急ピッチで行われるに違いない。こちらの技術部にも話が舞い込んでくるだろう。そのための下準備も進んでいるし、サイオンタイプモデル03専用武装はすべて、自分たちの所属する技術開発提供会社が行っている。

彼らにとつて『同胞』たちは「利用すべき相手」であり「いずれは殲滅すべき相手」という認識だ。はてさて、ノブレスが監督するチームトリニティは、彼らにとつてどんな認識になるのだろう。ノブレス個人としては仲良くしたいのだが、アレハンドロが何をしてくるかという不安もある。

「教官？」

「ああ、今行く」

それはまた、おいおい考えるところでしょう。ノブレスはそう割り切つて、トリニティ兄妹の元へと歩き出した。



断末魔の声でした。

フラッグファイターたちとガンダムマイスターの総攻撃。異形の巨体は腐り落ちるようにして溶けていく。親玉が死んでもザコは好き勝手に動き回っていたが、新手を生み出す存在が息絶えたのだから、殲滅されるのも時間の問題であった。

そのまま、自分たちは掃討に回る。異形どもが完全に殲滅、および鎮圧されたのは、空が茜色に染まった頃のことだった。異形の沈黙を確認した天使と天女は、緑の粒子をまき散らしながら空の向うへ消えていった。

手は、出さない。自分たちと共に戦ってくれた者を背後から襲うなんて、そんな卑怯なマネなどできるはずがなかった。

代わりに、天使と天女に向けて、クーゴは敬礼を送った。それに答えるかのように、緑の粒子が描いた軌跡が青く煌めく。

粒子の軌跡すら見えなくなった後で、ユニオン軍は撤退を始める。グラハムもそれに続くように空を飛んだ。

「今回は、ガンダムを手中にできなかった。だが、彼女たちと共闘したことで、それ相応の戦闘データを手に入れることができたという訳だ」

ウインドウ越しのグラハムは、満足げな微笑を浮かべて厳かに頷いた。

が、それを聞いたクーゴやハワード、ダリルらが「え」と間抜けな声を出す。

「隊長。パイロットの性別、わかったんですか!？」

「ああ。声で見当がついた。あの機体のパイロットは、兩名とも女性だ。……ただ……」

グラハムはそこまで口に出して、言いよどむ。何かに引つ掛かりを感じている様子だった。

ハワードに続いて、ダリルが促すように問いかける。グラハムは険しそうに眉を顰めながら、呟くように言った。

「……白と青のガンダム。あの機体のパイロットは……いや、なんでもない。忘れてくれ」

予感はある。けれど確証はまだつかめていない。グラハムの翠緑は不安げに揺れていた。瞳の奥底に宿る影は、本能的に感じた不安が杞憂であってほしいという願いに満ちている。

彼の表情を見た途端、クーゴは反射的に、戦いの最中に思い浮かんだ女性の姿のことを思い出した。緑の髪、紫苑の瞳。誰かに似ている。髪に何か、飾りがついていた。

髪飾り？ ……いや、簪。その簪は、どこかで見覚えがあった。1月11日、『彼女』の誕生日に贈った簪——銀細工の桜が煌めく。そこまで至って、クーゴは愕然と息をのんだ。

まさか、そんな。

そんなこと、ありえない。

偶然だろう、とクーゴは必死に言い聞かす。しかし、一度吹き上がった疑念は止まってくれない。

(まさか、キミなのか？ —— 『エトワール』)

開けてはいけない、パンドラの箱。開けてしまえば、二度とあの日々に戻ることは叶わない。血塗られた絶望が飛び出してくる。クーゴには強い確証があった。

けれど、真実に目を逸らしていいのだろうか。知らないままだったら知らないままで、大きな悲劇に見舞われることは確かだ。どのみち、悲劇と絶望以外ない。

脳裏に浮かんだのは、はにかむように笑う『エトワール』の姿。腰まである緑の髪を簪でハーフトップにまとめ、目の覚めるような空色のカーディガンと白地に黒い蝶が舞うように描かれたワンピースを着た姿を思い出す。先日のオフ会で見た彼女だった。

彼女は目が見えないと言っていた。でも、彼女はそれでも、クーゴの格好を言い当てた。普通の人と変わらない生活を送っていた。普通なら視えないものまで察知していた節があった。ならば、それを買われてパイロットになつていたとしてもおかしくない。

いや、でも。だって、そんな。頭の中にぐるぐると、そんな言葉が渦を巻く。その度に、『エトワール』の表情が浮かんでは消えていった。怒った顔、笑った顔、むくれた顔、はにかんだ笑み。そこまで考えて、ふと、クーゴは気づいた。自分にとって『エトワール』は、か

けがえのない存在となっていたらしい。

クーゴもまた、グラハムを憂いていられる状態ではなかったのだ。恋愛面で暴走気味な彼に苦言を呈していたクーゴがこの体たらくでは。

「でも隊長。隊長の通信、繋がってなかったと思いますよ？ 隊長の機体がガンダムたちを見て、その直後に2機が頷くような仕草をして、そこから協力体制になったんです」

「通信が繋がったのはそれ以降ですね。連携のためでしょうけど、ガンダム側からの通信は声に加工がされていたようで……性別まで判別することは不可能でした」

ハワードとダリルの言葉によって、クーゴの思考回路に急ブレーキがかかった。

方向転換、のち、急発進および急加速、フル回転。——結論は、ひとつ。

「なあ、グラハム」

「クーゴ。人間卒業間近なのは、キミだけではないらしいぞ」

クーゴが言葉を紡ぐ前に、グラハムが爽やかな笑顔で言い放つほうが早かった。

そこには先程浮かんでいたような影はない。むしろ眩すぎて気が遠くなるレベルだ。

己の人間卒業カウントダウンも問題であるが、友人の人間卒業間近もまた問題である。

確かに自分たちは一緒に行動していた。互いが互いに影響を与え、受けて、今日までやってきた。虚憶きよおく持ちになっってしまったのも、ニュータイプの「ケ」が出たのも一緒だとは、何者かによる作為を感じずにはいられない。

奴は朗らかに笑いながら「まるで運命のようだ」と言うけれど、流

石にそんな言葉で片付けていい問題だとは思えない。自分の行く末だけでもヒイヒイ言っているのに、友人の行く末という新しい憂いが追加されるとは。もう、問題しかないではないか。

己も、友人も、世界も。何もかもが問題だらけだ。明日の方向性すら見失ってしまいそうになる。

「副隊長、大丈夫ですよ。我々もサポートしますから」

「役として不足かもしれませんが、お手伝いさせていただきます」

ダリルとハワードからの通信が入る。力強く微笑む部下たちの姿に、不覚にも涙腺が緩んだ。

今は泣くべきときではないので、どうにか踏みとどまる。

大丈夫だ。たとえ世界や己の行く末が、一寸先がブラックホール並みの状態だったとしても、クーゴは1人ではない。グラハムもいるし、ハワードやダリルもいる。ユニオン基地に戻ればビリーだっているのだ。大切な仲間たちが傍にいてくれる。何を憂う必要があるだろうか。

クーゴは微笑み、操縦桿を握り締める。それを察したかのように、グラハムのフラッグが速度を上げた。自分たちも彼に続く。茜色の空を引き裂くようにして、ガンダム調査隊のフラッグが突き抜けていく。帰るべき場所に向かう4機のフラッグを迎えたのは、基地の明りだった。

下を見れば、ビリーとエイフマンの姿が見えた。自分たちの出迎えるために、外で待っていたらしい。ビリーが年甲斐もなく大きく手を振ってアピールし、エイフマンはじつとこちらを見上げていた。それに応えるように、自分たちも隊列を組む。ビリーは更に手を大きく振った。通じ合ったようだ。

帰ろう。大切な人たちが待つ場所へ。

クーゴはふっと微笑む。

今はただ、この場所に帰ることができた事実を、噛みしめていたかった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

19. OPEN A BOX

真っ青な空が広がっている。
見ていると、とても気持ちがいい。

(空が、綺麗だ)

少年は大きく息を吐いて、澄み渡る空を見上げていた。吹き抜ける風は穏やかで、昼寝やピクニック等には最適な天気だ。

ふと気づく。ここに来るに至るまでの過程が、何一つ思い出せない。どうして自分はこんなところにいるのだろう。そもそも、ここはどこなのだろう。

少年は周囲を見渡した。真っ青な空の下には、大草原が広がっている。所々、大木がぼつぼつと佇んでいた。若葉と土の香りが鼻をくすぐる。遠くのほうには、赤や白、ピンクや黄色、紫や橙色の絨毯が見える。あそこは花畑なのだろうか？ そう思ったとき、どこからか花の香りが漂ってきた。

誰か、自分以外の人間はいないだろうか。何度見回しても、誰もいない。そして何も無い。風の音だけが優しく響いている。

青空の向うに、きらきらと星が輝いていた。白い雲がゆったりと流れていく。どこからか、水の流れる音がした。

(なんて綺麗な場所なんだろう)

草原を進みながら、少年は感嘆していた。行く当てはないため、花畑を目指すことにする。歩いて、歩いて、ようやく花畑にたどり着いた。

色とりどりの花が咲き誇る。空には虹の橋がかかっており、近くには大きな滝が流れていた。こういう所でピクニックとかできたら最高だろう。いい場所を見つけた。少年がそこまで考えて、満足したときだった。

緑色の光が、流れる星のような軌跡を青空に描いた。それはゆつくりと花畑に向かって降りてくる。銀色に輝くMSたちだ。MSは花畑の上にゆつくりと降り立つ。次の瞬間、MSに鮮やかな色の花が咲き乱れた。表面が美しい花々に覆われたのだろうか。

あんなMSを見たのは初めてだ。そもそも、MSに花が咲くなんて現象はあり得ない。少年はぼんやりとその光景を見上げていた。MSの変化が美しく、幻想的で、目を離すことができなかつたのだ。MSたちが続いて現れたのは、銀色に輝く艦である。

その艦もまた、MSたちと同じ現象が起きていた。花が咲き乱れる艦というのもまた、初めて見る光景だつた。

彼らはしばしこの場に留まっていたけれど、ゆつくりと空へと動き始める。彼らは出発するのだろう、帰るべき場所へ。

彼らの姿を見送る。相変わらず、クーゴはぼつんと佇んでいた。相変わらず、周囲は人っ子一人いない。

「空護さん」

名前を呼ばれた。少年——刃金ハガネ 空護クウゴは、声がした方向へ視線を向ける。

花畑の中に、女性が佇んでいた。

腰まで伸びた緑の髪が風に揺れる。どこまでも澄み渡つた紫の瞳。白いレースが編み込まれたハイネックノースリーブの上着と、水色から空色グラデーションのマキシスカートを穿いていた。目に眩しい、と、空護クウゴは心の中でひとりごちる。

よく目を凝らすと、他にもそこに誰かがいた。彼女の隣に佇む少女は、ストライプ柄の刺繍が施された純白のワンピースを着て、透かし柄のニットカーディガンを羽織っていた。黒い髪と赤銅色の瞳が目を引き。静かで穏やかな雰囲気を漂わせていた。

誰だろう。空護クウゴは思わず首を傾げる。その瞬間、一際強い風が吹き抜けた。どこからか、細かい水しぶきが飛んでくる。慌てて空護クウゴは身を庇つた。水の冷たさが酷く身に染みる。やっとな風が収まつたよう

で、空護はゆつくりと身を解いた。

光が眩しい。目を庇いながら、花畑の向うに視線を向ける。いつの間にか、人が増えていた。

空色の軍服を着た人々、白衣を着て眼鏡をかけ髪を束ねた男性、白髪の老紳士、仲が良さそうな青年たちと女性たち——たくさんの人が、花畑に佇んでいる。

その中でも目を惹いたのは、件の女性たちと、1人の男性であった。太陽を思わせるような金色の髪と、翡翠を連想させるような翠緑の瞳。軍服を来た彼は、不適で力強い笑みを浮かべた。

「空護」

「自分はここにいます」と告げるかのように、彼の声は明るく響いた。

しかし、空護は彼らに見覚えはない。会った覚えもない。

だというのに、どうしてこの人たちは自分のことを知っているのだろうか？

「あなたたちは、誰？ 俺を知っているの？」

空護の問いに、誰も何も言わない。ただ、優しい笑みを浮かべているだけだ。

金髪の男性が大仰に頷く。そうしてまた、空護の名を呼んで、言葉を続けた。

「キミが空を目指すなら、我々は必ず相見えるだろう。……空で待っているぞ、我が友よ！」

男性がそう告げた瞬間、青空に美しい光が輝いた。空には多くのM Sが飛んでいる。緑の粒子を出して飛ぶ機体、黄色の粒子を出して飛ぶ機体、赤や黄色や緑の光を纏って飛ぶ機体、青い光を纏いつつ緑や

黄色の粒子を出して飛ぶ機体など、光の種類や機体の外見も様々なものがあつた。

見たことのないMSたちは、そのまま空へ——そうして、その向こう側にある宇宙へと飛んでいく。待って、と、空護は叫んで追いかける。しかし、足元の石ころに引つかかかって転んでしまう。顔を上げたときにはもう、MSたちの姿は宇宙へと消えていた。沢山の人々もまた、こちらに背を向けて歩き始める。

「行く！ 俺、行くよ！ 空へ！」

動けない空護は、大きな声を張り上げた。彼らが足を止めて振り返る。

「だから、待ってて！ 必ず空へ行くから！」

空護の言葉を聞いた彼らは、嬉しそうに微笑んだ。待ってる、という声が帰ってくる。

待ってて、と空護も叫び返した。花畑の周囲に白い靄が漂い始める。彼らの姿が、この場所ごと掻き消えていく。

——世界は、真っ白に染まった。

*

「行かなきゃ」

空護はゆっくりと体を起こした。宇宙関係の本がぎっしり詰まった本棚以外、目立ったものは置いていない。殺風景に近い部屋だった。

丁度、ベッドが置かれた壁際には大きな窓があつた。四角い淵からは、窓枠通りに切り取られた京都の街並みが一望できる。

建物の後ろに広がる空へ向かって、空護^{クウゴ}はゆっくり手を伸ばす。握り締めた拳を、掌いっぱい広げて。

「――空へ」

仰ぎ見た空は、どこまでも澄み渡っていた。



夢を見ていた。

最近寝不足だったから、と一人納得する。そのまま大きく背伸びして、あくびをした。

原因は忙しさではない。おそらく、この前の一件が原因で生じた悩み事だろう。

「大丈夫かい？　……最近、元気がないみたいだったから」

差し出されたのは、チョコレートでコーティングされた上に砂糖をまぶしたドーナツである。テカリ具合からして、含まれている脂肪分も相当なものだろう。

クーゴはゆっくり顔を上げた。声の主は、3食ドーナツ生活が定着しつつあるベリー・カタギリである。そういえば、前よりも胴回りが大きくなったような気がしないでもない。

何センチ増か、本人に無断で目測してみよう。伊達に空軍所属、視力には自信があった。目をすぼめる。次の瞬間、ベリーが眉間にしわを寄せた。どうやら察されたらしい。

クーゴは諦めて、ドーナツへと視線を戻す。

ドーナツの包みは、油で色が変わっていた。

やっぱり脂肪分の塊である。これを主食にしていると、健康診断で

引っかかりそうだ。

「ところでビリー。この前の健康診断、どうだった？」

「……キミは何を思つて、そんな質問をするんだい」

至つて健康だよ、と、ビリーは言った。言葉の響きは刺々しい怒りに満ちている。そこに触れるな、と、鳶色の瞳が訴えていた。

成程、健康診断の結果は黄色および赤信号だったらしい。予想通りだった。ビリーはクーゴを睨んだ後、グラハムへと向き直つた。

「グラハムも、なんだか元気ないよね。何かあつたのかい？」

「ああ……」

ビリーの問いかけに、グラハムはぼんやりと返事を返した。彼は既に仕事を終えており、時間は開いているに等しい。普段なら端末をいじつて、意中の相手——件の少女にメッセージを送信しているところだ。

しかし、彼は端末を開いたつきり、何もしなかつた。時折何かメッセージを送ろうとして、最終的には文面すべてを消してしまふ。

そうして、グラハムは深々と息を吐くのだ。常に不敵な笑みを浮かべる男にしては、珍しい光景である。

「もしかして、件の子と喧嘩でもしたの？」

「……………」

ビリーが茶化すように笑う。グラハムは、返答どころか微動だにすらしなかつた。もの鬱気に天井を仰ぎ、深々とため息をつく。

彼の様子から異常事態を察したビリーが、助けを求めするようにクーゴを見た。クーゴは黙つたまま肩をすくめる。

ビリーは愕然とした表情を浮かべた。余命宣告をされた患者の遺族みたいな顔だな、と、クーゴはぼんやり考える。

ポケットから端末を取り出し、『エトワール』へのメッセージ欄を開いたが、燻る気持ちを文章にする勇氣はなかった。パンドラの箱に手をかけて、開けるか否かを躊躇っている状態だと言えよう。開けても開けなくても、そこには悲劇しかない。

最初はそんな気がする程度だったが、今はもう、確信に近い予感があった。どのみち破滅するとしたら、なるべく被害が少ない方を選びたい。それが人の性である。だが、現時点ではどちらが最良の選択なのかはわからない。

先の異形出現、およびソレスタルビーイングとの共闘。所属組織を越えた団結のおかげで、事態は無事に収集した。

けれど、クーゴは『視て』しまい、グラハムは（おそらくだが）『聞いて』しまった。ガンダムのパイロットに関するもの——および、パイロットの正体に関するものを。

だから、察してしまった。あのガンダムを操るパイロットが『誰』であるかを。もっとも、グラハムの場合は「なんとなく」レベルなのだろうが。

(……『エトワール』)

追う者と、追われる者。

最初は虚憶きよおくに関する情報を集めるために近づいた身であるが、『エトワール』や少女と過ごす日々はクーゴたちにとってかけがえのないものだ。

これからも続いてほしいと願うくらいに。それは、揺るぎない本音だ。偽りのない本心である。

でも、もし、彼女たちが『ソレスタルビーイングと関係を持っていく』というならば——。

(クーゴ・ハガネはどうすればいい？ どうすべきだ？ ——いいや、『どうしたい』?)

問いかける。己自身に、何度も。『すべきこと』と『したいこと』は完全に相反しており、クーゴは板挟み状態にある。

軍人か、それともクーゴという1人の人間か、判断が下せずにはいた。どちらにしろ、後悔や遺恨が残ることなど明白だった。

そういえば、似たような事態に直面した女性がいた。アルティメット・クロスに属する青年を暗殺しようとして、彼の仲間である別の青年に恋をした女性が。今まで心を殺して生きてきたくのいちは、最後は己の想いに順じたのである。

バイストン・ウエルから戻ってきた自分たちにそう話してくれた青年の名前は、なんといったか。彼の隣に寄り添い、幸せそうに微笑んでいた女性の名前は、なんといったか。女性と出会う以前の青年が女湯を覗こうとしたことは、彼女にバレただろうか。

定期的に行っていた生存報告でその話をしたら、「これぞ、まさしく愛！」と叫んでいた。どういうわけか、危うく奴の惚気話を聞かされそうになったため、逃げるようにして「夏祭りの話し合いがあるから」と端末を切ったことを思い出す。

彼は、彼女と月へ行けたのか。そんなことが、酷く気になった。

『ラジオネーム・』となりのレイフ』さんのリクエスト、テオ・マイヤーの『孤独との決別』。どうぞお聴きください』

近くに置いてあったラジオから、音楽が流れ始める。

この歌は、孤独な天才が仲間たちを利用して目的達成をしようと奮闘していたら、いつの間にか仲間たちのことを心の底から信頼するようになり、後に彼の素性を知った仲間たちに受け入れられるまでの過程が綴られた曲である。

説明だけ聞くとシリアスで重苦しいと思われがちだが、『自分の素性を隠すために奇行に走ったら、仲間たちから「おかしな人」「ストレスに悩む人」等とレッテルを張られ、後に一部の面々からそれ関連でとても心配されたので罪悪感に打ちのめされた』等、コミカルなネタも含まれている。

最後は『自分を受け入れ信じてくれた、最高の仲間たちへの感謝』で締めくくられていた。「仲間の大切さ」と「どんな状況下にあっても、自分を信じてくれる人がいる」ということを教えてくれる歌として人気があがる。この曲を聞くと、人間卒業間近の自分を仲間と言ってくれる面々の顔が浮かぶ。

(俺、幸せだよな)

クーゴは心の中でそう呟いた。曲に聞き入るようにして、静かに目を閉じる。

『□□と戦ってきた日々のすべてが嘘だったなんて、俺は認めない！』

不意に、頭の中に声が響く。

気づいたら、クーゴは『孤独への決別』のフレーズを口ずさんでいた。

——世界が、一変する。



ZEXISの戦術指揮官。常に冷静沈着であるが、予想外および突飛なハプニングにめっぼう弱い一面有り。嘘を人一倍嫌う節がある。妹を持つ兄や大切な人を守ろうとしている人々に対して、言葉とは裏腹に優しい態度を見せる——それが、クーゴが知る「ゼロ」である。

アツシユフオード学園に通う学生。聡明な人物であるのだが、ストレスがたまると奇行に走るらしい(□□談)。妹や友人たちのことを大切に想っており、特に妹に対しては並々ならぬ愛情を注いでいる——それが、クーゴの知る「ルルーシユ・ランペルージ」である。

対して、ブリタニア皇族の「ルルーシユ・ヴィ・ブリタニア」のこ

とは、殆ど知らない。それ故に、『ゼロ、ルルーシュ・ランペルージ、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが同一人物である』と言われても、点と点を結んで線を引くことができないでいた。

(点を結んで線を引くと飛べるんだよな。ラインバレル、だっけ?)

どうして今、そんなことを思い至ったのかは一切不明である。落ちて着け、と、クーゴは己に言い聞かせた。

状況は最悪。周囲はゼロ排斥に向かって動き始めていた。自分たちを裏切った最低な人間として、彼をシュナイゼルに引き渡そうとしている。

ゼロを信じる人たちは、口数の少ないものが多い。シュナイゼルの策略に気づいている人たちは、怒りに満ちたZEXISメンバーとシュナイゼルに流されてしまい突破口を見いだせないでいる。

でも、本当にそれでいいのだろうか。

ゼロは本当に、ZEXISを裏切っていたのだろうか。

このままシュナイゼルの策略に乗せられていいのだろうか。

一緒に戦ってきた日々も、結ばれた絆も、すべてが偽りだったのだろうか。

「待ちたまえ!」

「黙れ、□ジャー! お前に、騙されていた俺たちの気持ちができるのかよ!」

「何故、騙されたと決めつける?」

□□ヤーの制止を振り切るように、玉□が怒鳴る。しかし、彼の問いかけには言葉を詰まらせてしまった。

信頼していた仲間裏切られたというショックで放り投げられてしまったが、彼の心は『まだゼロを信じたい』という願いを持っている。

それを指摘したら、彼は全力で否定するだろう。そうなればかえっ

て逆効果だ。意地になって「何故裏切り者の味方をするんだ」と突っかかり、逆にシュナイゼルの策略通りに進んでしまう可能性が高い。

でも、ロジ□ーはそこを踏まえて、的確な問いかけを仲間たちに向ける。流石ネゴシエイター。「隠し事は多かったが、それらすべてが嘘だったと本当に言えるのか」——それを皮切りに、冷静なメンバーが次々と発現し、シュナイゼル優位の状況を崩しにかかった。

『互いの事情については最大限に尊重する』。それが、ZEXISのルールだ。このルールが成立しなかったら、クーゴは今、ZEXISにいない。元々自分はブリタニア・ユニオン軍のフラッグファイター、つまりは元敵陣営に所属していたのだ。友人を連れもどすために彼らの力を利用しようとして、ここにいる。

それでも彼らはクーゴを仲間だと認めてくれるし、クーゴも彼らを大切な仲間だと思っている。それは、揺るがない事実だ。

「■の騎士団にとっては、彼がブリタニア皇子だったこと自体が既に裏切りに等しい行為だったのかもしれない。でも、その皇子が兄を殺してまで祖国と戦った理由を知る必要があるわ」

「ゼロは正義ではない。だが、悪とも言えない。奴が平和の敵となつたなら、俺が止めればいいだけの話だ」

「奴の過去は知ったことではない。だが、俺もお前たちもヤツに借りがあるはずだ」

「アイツを信じられないっていうお前らの気持ちもわかるけどよ。アイツを信じたいって気持ちがあるなら、まず話を聞いてみようぜ」

「アニキが言ってたよ。あいつは命がけの覚悟があるつて。……俺はアイツが何のために戦っているか、本当のことを知りたい。あの覚悟がどこから生まれたのかを」

ス□ラギが、□イロが、キリ□が、クロ□が、シ□ンが、ゼロを擁護する発言をする。彼らは間違ったことを言っていない。だからこそ、黒の■士団の面々は困惑しているのだ。

シュナイゼルの眉がぴくりと震える。ZEXISから引き離そう

という策略を邪魔する人間が現れるとは思っていなかったのだ。予想外の出来事に弱いのは、血筋なのかもしれない。

「なあ、黒の■騎団の皆。本当にこのまま、ゼロを引き渡していいの？」

「シユナイゼル殿下。私、貴方のことも、貴方のやり方も大っ嫌い！」

クーゴの言葉と□□□の言葉が見事に被ってしまった。某お笑いよろしく「どうぞどうぞ」をしばらく繰り返したのち、クーゴが先陣を切るようになった。改めて、言葉が続ける。

「今まで一緒に戦ってきたじゃないか。一緒に苦楽を共にして、絆を築いてきたじゃないか。……本当に、それらすべては偽りだったのか？」

言葉を紡ぎながら、クーゴは思い出していた。後のソレスタルビーイングとガンダム調査隊およびオーバーフラッグス隊という、敵対関係にある4人の人間が、何も知らぬまま絆を築いた日々のことを。

そのとき、クーゴは『夜鷹』という歌い手だった。□□□は『エトワール』という歌い手だった。少女は『エトワール』の護衛役で、グラハムはクーゴの護衛役だった。後者2人は特に、敵同士でありながらも、想いを捨てることはなかった。

確かに、敵対する者同士で互いを想うのは死ぬより苦痛だった。それでも捨てなかったのは、お互いに想いあっていた心は嘘偽りではなかったからだ。心からの本心だったからだ。そしてそれが、互いに対する誓いであり、答えそのものだったからだ。

□□□と『彼女』が、はっとしたようにクーゴを見た。

クーゴはそのまま、言葉が続ける。

「俺だって、似たようなことで悩んだことがあったよ。俺はブリタニア・ユニオンのフラッグファイターで、彼女はソレスタルビーイング

のガンダムマイスターだった」

一部の人間——特にソレスタルビーイングの面々は合点がいったらしい。「コンナトキニ、ノロケナイデモラエマスカー?」「□イル。キモチハワカルガ、スコシオサエテ」という、双子の会話（しかも棒読み）が聞こえた気がした。

「人のこと言えないくせに、『騙された』って勝手に憤って、勝手に怒って、勝手に憎んで、勝手に荒れたよ。……でも、どうしてこんなに憤ったのかな。どうしてこんなにも怒りを感じて、憎しみを感じて、荒れていたのか、自分でも全然わからなかった」

クーゴはそこで言葉を切る。大きく息を吸って、また言葉が続けた。

脳裏に浮かんだのは、グラハムの横顔。自信と決意に満ちた不敵な笑みだった。

今は、ミスター・□シドーとして修羅の道をひた走るために、彼自身が殺してしまったもの。

それを、クーゴは届けに行かねばならない。

「そうこうしてたら、友達がおかしくなっちゃってさ。そのせいで、逆に落ち着いて考えられるようになった」

クーゴの言葉で、クーゴの言う『友達』が誰なのか合点がいったらいい。

シュナイゼルが額を抑えて天を仰いだ。彼もまた、グラハム・エーカーの被害者である。

「簡単なことだったんだ。俺は、彼女を信じたかった。アイツは、『彼女』を心から愛していた。ただ、それだけだった」

『彼女』が息をのむ音がした。クーゴは、黒の騎士■メンバーたちに向き直る。

「なあ、黒の■騎団の皆。どうしてお前らは、ゼロに対して怒りを感じるんだ？ どうして許せないって思うんだ？ ……その根底にある想いは、何だ？」

「どうか、その感情の奥底にある想いから目を逸らさないでほしい」。クーゴはその言葉で締めくくり、■の騎士団の副官を見た。彼は困惑したように眉をひそめている。

クーゴはもう、伝えたいことは伝え終えた。あとは、彼らの判断に委ねる。ちらりと□□□に視線を向ければ、彼女は照れたように笑った後、屹然とした眼差しを仲間たちに向けた。

「ゼロは、確かにいろんなことを隠してたよ。でも、カ□ナさんに友達って言われてちよつと揺れ動いたり、レン□ンのエウレ□を助けたって想いを認めてあげたり、キ□コさんの行動に怒ったり……。嘘だったら、私たちを騙していたなら、そんなことできないわ」

それに、と、彼女は言葉を続ける。

「ルルーシユは、確かに変わった人だよ。残念な人だよ。ストレスが溜まると奇行に走っちゃったりするし、自分のあり方が迷子になって悩んじゃったりしてたけど、友達を守るためにテロリストに立ち向かったじゃない。あれ、絶対嘘じゃないわよ」

□□□の言葉に、一部の仲間たちが納得したように頷いた。拘束されているゼロが強いショックを受けている。どうしてだろう。

『同胞』の青年が斜め右上に視線を向けた。あれは、心の中で大爆笑しているときにするクセである。部下の3兄妹も、何とも言えなさそうに□□□□を見ていた。

□□□はシュナイゼルに向き直る。紫苑の瞳には強い怒りが滲んでいた。対象者であるシュナイゼルを真ん中に捉えている。逃がすつもりはないらしい。

「すべてが貴方の思い通りに動くと思ったら、大間違いなんだから」

シュナイゼルは何度か瞬きを繰り返す。意味を理解していないというか、そんなことはあり得ないと信じて疑っていない様子だった。

□□□は、黒の■士団副司令に視線を向けた。突き抜けるような眼差しに、彼はごくりと生唾を飲み干す。

「……ま、最終的な判断を下すのは貴方ですよ、副司令。『貴方を信じた』ゼロに対する、正当な応えを期待します」

『同胞』の青年が静かな声で言った。やけに、『貴方を信じた』の部分を強調している。「間違った判断を下したらどうなるかわかってるよな？」と、琥珀色の瞳が語っていた。

彼の言葉を皮切りに、各艦の艦長たちが促す。「お前が隣で見ってきた艦長がどんな男だったかを思い出しながら、考えながら、どうするかを決めろ。ZEXISはそれに従う」と。

副司令は俯く。表情には色濃い迷いと葛藤が浮かんでは混ざり合い、振り子のように揺れ動いている。幾何かの間をおいて、副司令は言葉を紡ぐ。

「俺は、ゼロを……」

瞳から、迷いが消えた。そこにあつたのは、彼が出した答え。ゼロへの怒りの感情の下に隠された、ゼロへの本当の想いだ。彼を信じたいと、彼に信じてほしかったという、願いだった。

「ゼロを、信じたい」

黒■騎士団たちが、ざわめきながら副指令に詰め寄る。

「最初にゼロにリーダーを頼んだときから、俺はずっと彼を信じてきたんだ……！」

お前は騙されてる。あのとき見捨てられたじゃないか。仲間たちの言葉に対して、副司令官は眦を釣り上げた。

それでも、と、彼は言葉を続ける。固まった決意を揺るがすものは、もう何も存在しない。

「ゼロと戦ってきた日々のすべてが嘘だったなんて、俺は認めない！ バカだ、お人よしだ、風見鶏だと言いたければ言え！ だが、俺は納得がいくまでゼロと話をする！ それでもゼロが許せないなら、俺がこの手でゼロを倒す!!」

それが、最初に彼を信じた己の務めだ——副司令官は、はつきりと言いきった。反論者は誰もいない。むしろ、皆、凜とした眼差しでシュナイゼルを見返している。

クーゴもまた、微笑を浮かべながらシュナイゼルを睨み返した。ZEXISとルルーシュ／ゼロの、いいや、人の心を引き裂き踏みにする戦術は、彼らの絆によって打ち砕かれたのだ。

シュナイゼルという男は、確実に勝てる戦いしかしない。ブリタニア・ユニオンに所属していた頃に何度か交流はあったが、それを地味くような性格であった。

ZEXISの面々が『ゼロを信じる』とは思っていなかったようで、シュナイゼルの微笑がかすかに歪んだ。彼のプランでは、ZEXISがゼロを引き渡す予定だったのだろう。

□□□がえっへんと胸を張り、『同胞』の青年が満足げに頷く。シュナイゼルは苦虫を噛み潰したように眉間にしわを寄せる。それでも口元は笑っているのだから、鉄仮面っぷりは流石と言えよう。

命をかける意味を、彼は知らない。そんな事態に直面したこともない。心からの信頼と結びつきが起こす奇跡の意味も、おそらくは。

その差がここで出てきた。常に勝者としての道をひた走り、敗北という単語の意味を「無様なもの」としか認識しないシュナイゼル。トレーズは、「彼とは、本当の意味での『盟友』になることは不可能だ」と零していた。彼の中にあつた蟠りの一片に触れた気がして、クーゴは1人納得する。

シュナイゼルはコーネリアを伴い、ZEXISたちに背を向けて撤退していく。「キミたちは、その選択に後悔することになるだろう」と言い残した言葉が、捨て台詞のように思えてならない。ふと流れ込んできた感情に気づく。ルルーシュ／ゼロの心は驚愕に満ちていた。兄が捨て台詞を言った、と。

彼にとつてのシュナイゼルはどんな存在なのか、クーゴは知らない。けれど、ルルーシュ／ゼロの言葉通り、捨て台詞を言うような人間には思えなかった。ということは、シュナイゼルは大きなダメージを受けたということになる。もし、今後の戦いで、彼をやりこめる突破口があるとすれば――。

「積み重ねてきた絆、か」

ZEXISの面々にもみくちやにされるゼロ／ルルーシュの背中を見つめながら、クーゴは小さく呟いた。

思い出すのは、ブリタニア・ユニオンのフラッグファイターズ。大切な仲間たちがいて、帰る場所があつて。そのどれもが、失いたくなくなつたものだ。

彼らと積み重ねてきた絆は、まだ途切れていないだろうか。途切れていたとしても、結び直すことはできるだろうか。いや、直してやる。絶対に。決意を固めて、彼らの背に続いた。



「よく言った、副司令官！」

感極まったクーゴとグラハムは勢いよく立ち上がり、ビリーは紙コップを握りつぶした。中身が入っていた状態だったため、彼はもれなく大惨事になっていたが。

「今までの日々がすべて嘘だったなんて、決して認めない。……そう
だ、そうだよな」

クーゴは今までの出来事を思い出しながら、強く端末を握り締める。『エトワール』と過ごしてきた日々は、確かに楽しかった。彼女を騙して近づいた罪悪感もあったけど、「幸せな時間だ」と心から言えた。

『エトワール』の表情が浮かんでは消えていく。怒った顔、笑った顔、むくれた顔、はにかんだ笑み。紫の瞳は、いつだってクーゴを見つめていた。向けられた感情には嘘なんてなかった。確証を持って、そう言える。

彼女からの贈り物をポケットの中から引っぱり出す。翼が刻まれた、銀色の懐中時計。クーゴの誕生日を祝うために、彼女が真剣に選
び、贈ってくれたものだ。

それと同じだ。クーゴが『エトワール』の誕生日に簪を贈ったのも、打算からではない。ただ純粹に、彼女に喜んでほしかったからだっ
た。こんなにも単純なことを、どうして自分は忘れていたのだろうか。括目するとはこういうことか。

グラハムも「それが、それこそが！ 彼女を愛する私の務めだ!!」と、両手を強く握りしめながらうんうん頷いている。どうやら彼も、
燻っていた心に決着をつけることができたらしい。いつもの不敵な
笑みがそこにあった。

自分たちが復活したことに気づいたビリーも、安堵したように微笑

みながらコーヒーをふき取る。そのまま、彼は新しいコーヒーを淹れていた。箱の中からドーナッツを取り出し、おいしそうに頬ばる。どこことなく、幸せそうさ。

「今の虚憶きよわく、今まで見たことない奴だったよな。名前なまえどうする？」

端末をいじりながらクーゴは問うた。

ビリーが顎に手を当てて考え込む。

「そうだね。ZEXISが出てきたということは、後ろにつくのはZだろうけど……」

「他にも、『黒の騎士団／＼』という単語が多く出てきたような気がするな」

グラハムも頷いた。

「じゃあ、『黒の騎士団／＼』でいいな。これ」

安直だが、名前は決まった。止めていた手を動かし、虚憶内容きよわくをできる範囲でまとめていく。

そのすべてが終わったのと、端末が鳴り響いたのはほぼ同時であった。内容を確認する。ソレスタルビーイングが介入すると思しき場所だ。

モラリア共和国。23年前に建国された、ヨーロッパ沿岸部にある小国だ。人口は18万人と少ないものの、300万を超える外国人労働者が国内に在住している。約4000社近くある民間会社の2割が、PMCと呼ばれる「傭兵の派遣、兵士の育成、兵器輸送および開発、軍隊維持」をビジネスで請け負う民間軍事会社と関係があるという。

PMCはいわば戦争屋。世界に争いが起きるからこそ、彼らの商売は成り立つのだ。恒久平和を目指して武力介入を行うソレスタルビーイングとは、真つ向から対立すると言えよう。そういえば一時

期、どこぞのコメンテーターが『PMCと悪の組織は親戚のようなものではないのか』と発言して、ジャーナリストに言論でボコボコにされていたのを見たことがある。

確か、ジャーナリストの名前はセキ・レイ・シロエ。ソレスタルビーイングの話題に溢れている世界の状況に対して警笛を鳴らす変わり者であり、一部の連中からは『異端児』と呼ばれて恐れられていた。彼が追いかける問題の中には、PMCのような戦争屋に関わる件もあったような気がする。

閑話休題。

モラリアは、誘致してきた軍事会社によって発展してきた国だ。今までソレスタルビーイングの介入対象にならなかったことが不思議なくらいである。

まあ、戦争を生業として栄えてきた国なのだから、戦争が縮小すればそれに比例して仕事は減るだろう。ソレスタルビーイングはそれを狙っていたに違いない。

「でも、ソレスタルビーイングの意図した通りにはならなかった……」
「それで、本格的に介入することにしたってことか」

クーゴの推論に、ビリーが納得したように頷いた。

「モラリアは、ソレスタルビーイングと事を構えるつもりのようなだな」

グラハムはコーヒーの入った紙コップを、機械から受け取りながら言った。

クーゴは彼から手渡されたコーヒーを受け取る。ビリーも、のんびりと笑いながら説明した。

「AEUが後ろ盾になったんだよ。太陽光システムを完成させてコロニー開発に乗り出すためには、民間軍事会社の人材と技術が不可欠だからね」

モラリアとしても、傾いた経済を立て直したいのだろう。たとえ自国が戦場になっても、A E Uの援助が必要不可欠なのだ。

ビリーの補足を聞いているのかいないのか、グラハムはフラッグが格納されている場所を見つめていた。しかし、次に続いたビリーの言葉に、グラハムは振り返る。

「それに、あわよくば、手に入れようと考えているんじゃないかな？

——ガンダムを」

悪戯っぽく笑ったビリーの様子を見て、グラハムは仏頂面のまま目を閉じた。小さく息を吐く。

そして、グラハムはフラッグへと視線を戻した。横顔に浮かんだのは、口惜しさが滲んだ微笑。

「なら、今回は譲るしかないようだな。『A E Uのエース』とやらに」「パトリック・コーラサワーな。……可哀想だから、『とやら』は取ってやれって」

談笑しながら、クーゴたちは席に着く。

その合間に、クーゴは端末を開いた。『エトワール』に欄を合わせる。メッセージ欄を開いたが、やはり、うまく纏まらない。だけれど、伝えたいことがある。

この蟠りの決着をつける決戦場は、次のオフ会だ。悩みに悩んだ後、クーゴが自分自身で決めたことだ。文面を打ち込み、推敲し、消してを何度も繰り返す。

『俺は、キミと過ごした日々のすべてが嘘だったなんて認めない。何があっても、キミを信じている』——最後の文面に付け加えて、クーゴは送信ボタンを押した。

これでもう、戻れない。鍵は解除された。パンドラの箱は開かれる。心なしか、クーゴの手は小刻みに震えていた。

そこから飛び出してくる災厄に、自分は立ち向かえるだろうか。友人たちを巻き込んでしまうかもしれない。

『箱の最後には、希望が残ったんだ』

誰かの言葉が脳裏をよぎる。

その言葉通りになればいいのに。

クーゴは祈るように息を吐いた。持ったままだった紙コップに入ったコーヒーに口をつける。もうすでに、ぬるくなっていた。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

幕間。迷い続ける人々の思い

「では、太陽光システム開発および技術支援等の援助を引き受けていただけるのですかね？」

「はい。秘密結社で宜しければ、是非ともお手伝いさせていただきます」

マリナ・イスマイルの問いに、車椅子の女性は凜とした微笑を浮かべて頷いた。

民間企業の代表取締役が皇女に謁見する——そこまでの苦労を回想し、女性は深々とため息をつく。

企業および団体名が物騒なものだったため、国のお偉いさんから変な目で見られた。おかげで、アポイントを取るのに苦労したのだ。

会社内で頑張って決めた設定を『通訳』する羽目になり、説明し終えた後は生温かい目で見られたのは記憶に新しい。複雑な気分である。

嬉しそうに微笑むマリナと目が合った。女性の中で、マリナは『口説き落したい女性』の殿堂入りを果たしている。写真で見るときはそれだけであったが、実際に対面してみた結果、『憂い顔すら美しい女性』、『笑顔になると更に美しい女性』、『笑顔でいてほしい女性』、『幸せにしてあげたいくなる女性』の殿堂入りを果たした。

女性の中で5冠殿堂入りを達成したことなど知らないマリナは、女性の様子に何か疑問を持ったようで、心配そうに首を傾げる。女性は盛大に悶絶した。勿論、それを表に出すことはない。他者から見ただけは、男前度120%増の状態に見えていることだろう。エルガンあたりは「オッサン度120%増し」と言いそうな気がしたが、奴は関係ない。

（女神や。女神がおるで。……ああでも安心して、これは浮気ではないの。フォーリンラブなのは貴方だけだから。結婚して一緒に年を取って一緒にらぶらぶしながら生きていきたいと思った人生の伴侶

は貴方だけだから！)

不意に、寂しそうな顔をして遠くを見つめる夫の姿が脳裏をよぎった。

女性は必死になって弁明する。これ、も心の中での出来事であった。

確かに、自分は「おっぱいのついたイケメンになる」と(現在進行形且つ本気で)豪語し、自分よりはるかに年上の師匠に「私は貴女と結婚する」とプロポーズしたことがあった。ちなみに当時3歳。それを目の当たりにしたエルガンがびーびー泣きわめいていたことが妙に引つかかっている。

口説いた女性は沢山いた。師匠、航海長、女史、オペレーター、技術者、占い師、幼馴染の女の子たち、友人のお母さん……挙げれば本当にキリがない。特に友人のお母さんを口説いた際に、「人妻を攻略することの背徳感とその他諸々」を、幼馴染の男どもや長老たちに説いたら大惨事になった。ちなみに当時の年齢も3歳である。

ちなみに、口説いた女性たちからは総じて「あと数十年、自分が若く／貴女が大人になり、且つ男性だったらよかったのに」という評価を頂いている。女性にとって、それは最高の褒め言葉および世辞であり、誇らしいことであつた。この話をするとエルガンが両手で顔を覆うのだが、女性は未だに、己の何がいけないのかさっぱり理解できないでいる。

男性で「本気で口説き落したいし、彼に口説き落してもらいたい」と思ったのは夫だけである。結果は『互いが互いに一目惚れし、互いが互いを口説き落そうと尽力し、互いが互いに口説き落とされた』という形で夫婦になった。そういえば、身内だけで行つたささやかな結婚式では、エルガンが涙にまみれたヘタクソな笑みを浮かべていたか。

閑話休題。

『……それにしても、解せないわ』

「シーリンさま。言いたいことがおありのようですが」

マリナの隣に立って話を聞いていた、シーリン・バフティヤールの思念が流れ込む。思わず女性は反応していた。シーリンは驚いたように息をのむ。

当然だ、自分の考えていることを言い当てられて驚かない奴なんかいない。しかも、シーリン本人は鉄仮面の下に隠していたつもりなのだから。

鋭く冷たい眼差しが向けられる。シーリンは女性の心理を探ろうとしているのだろうが、女性は意にも解さなかった。

そのうち、観念したようにシーリンがため息をついた。「貴女には失礼ですが」と前置きし、心の中に渦巻く疑念を吐露する。

「貴女方が、この国に援助をする意図がわからないの。援助の内容だって、どう考えても貴女方にとっては完全に不利な内容よ」

「そのようなことはありません。対価はきちんと払ってもらえます」

「その対価として提示された条件がおかしいのよ」

「何もおかしくありません。我々にとって『それ』は、対価として『太陽光システム開発および技術支援等の援助』を支払うに値するものです」

正直、『太陽光システム開発および技術支援等の援助』では足りない気もする。本当にごめんなさい、と、女性は心の中で詫びた。

マリナとシーリンは顔を見合わせる。シーリンは肩をすくめた。追及を諦めたらしい。唇を結んだ彼女と入れ替わりに、マリナがペコりと頭を下げた。

「感謝します」

「いいえ。微力ながらもお手伝いできれば幸いです。……では、よろしくお願ひしますね」

「はい。約束通り、『どんなことがあっても、平和の歌を歌い続け』ま

す」

マリナは強い決意を宿して頷く。それを見た女性は、安堵して頬を緩めた。

ふと、マリナは何か疑問に思ったらしい。

それを、躊躇いがちに向けてきた。

「どうして、私が音楽関係の道に進みたかったことを知っていたのですか？」

「そんな気がしただけです。そして、貴女にはそれを成す才能がおありです。だから諦めてほしくなかった」

きっぱり言い切った女性の言葉に、マリナは驚いたように目を見開く。自分にそんな才能があるのかと、まだ半信半疑の様子だった。女性には強い自信を持って肯定する。

女性は、マリナの歌が人々の拠り所になることを『知っている』。だからこそその青田買いであり、技術提供及び出資する価値があった。挨拶を終えて、女性は王宮を後にした。

車椅子を手でこぎながら、女性は街の大通りを行く。どこもかしこも活気に満ちてはいた。けれども、どす黒い悪意がひたひたと漂っている。女性は深々と息を吐いた。

端末を開く。どこもかしこも、『ソレスタルビーイングがモラリアに介入(予定)』という話題で持ち切りだった。その話題をひとしきり語り終えたのち、添え物のように『ゲッター線の研究が凍結』という話題が提示される。映像では、エルガンが弁論で無双していた。

チャンネルを切り替えれば、今後はシロエがコメンテーターをやり込めている。こちらは『ゲッター線の研究が凍結』、『PMCトラストが新しい兵器を開発』という話題を出し、ソレスタルビーイングのみに注視している人々へ警笛を鳴らしていた。2人とも、親子以上によく似ている。

女性は端末をしまい、今度はタブレットを取り出した。タッチペン

を駆使し、さらさらと凶面を描き上げていく。

「相変わらず、凶面は綺麗に描けるんだな」

不意に聞こえた声に顔を上げる。そこにいたのは、先程映像で無双していたエルガン・ローディックご本人であった。

女性はむつとした。「凶面は」ってなんだ、「凶面は」って。他はダメだと言いたいのか。

「失礼ね。私にだって絵心はあるわよ」

「人の顔を描けば、大半がジャガイモになる奴のどこに絵心がある？」
「そんなことない！ 見なさい、私の最高傑作！」

女性はタブレットを操作した。出てきた絵に、エルガンは目を剥く。

指示した絵に描かれているのは、愛する夫とその友人——エルガンである。

エルガンはじつと絵を見つめていたが、口元を戦慄かせていた。

「相変わらず、『言いたいことが山ほどありすぎて、何から突っ込んでやろうかわからなくなる』絵だな」

「どこからどう見ても、アンタと私の夫でしょ？ 何もおかしくないじゃない」

「私には、どこからどう見ても『私の面影が辛うじて残ったジャガイモの顔を持つ異形と、10割方美化された凜々しい禿げ爺』にしか見えないんだが」

エルガンは不安そうに絵を指さす。女性はもう一度、自分の描いた絵を確認してみた。何もおかしくなんかない。

女性はジト目でエルガンを睨んだ。彼は諦めたように深々とため息をつく。顔面崩壊、と、彼は力なく呟いていた。

正直言つて心外である。エルガンだつて人のことは言えないだろう。彼の絵心は、古い友人の画力といい勝負だったのだから。

女性が何を言いたいのか察したエルガンが、むつとしたように眉をひそめた。

「私が『画伯』なら、お前とトオニイは『巨匠』だ」

「私がトオニイと同格扱いなのは認めないけど、トオニイが『巨匠』であるのは同意する。大人になつても、画力は3歳児の頃のままだつたからね」

懐かしい名前が出てきた、と、女性はけらけら笑つた。

刹那、「お前らの方が『巨匠』だろ!!」と、懐かしい声が聞こえた気がする。

振り返つたが、声の主——トオニイ・アスカの姿はなかった。

当然だ。自分たちはトオニイたちと別れ、この星に降り立つたのだから。それから長い時間が経過した。

彼は今、どこで何をしているのだろうか。楽園の名を冠した白い艦は、再生した青い星に辿り着けたのだろうか。

人類と『同胞』たちを導く指導者となつたトオニイは、両陣営を結び付ける橋渡し役として、『同胞』側の指導者として頑張つていた。人類側の指導者、セルジュ・スタージユンと手を取り合い、共存への道を切り開いていったのだ。

先代の指導者——『同胞』側の指導者ソルジャーと人類側の指導者が、己の命と引き換えに築き上げた共存への礎は、脈々と受け継がれていた。彼と別れてしまった今となつては、それがどんな道を辿つたかはわからない。

けれど、トオニイが優秀な指導者であつたことは事実である。別れる前も、別れた後も、変わることなく『同胞』たちを率いていることは間違いなかった。先代グラン・パが死の間際に選んだ後継者として、指導者に相応しくなろうと頑張つていたトオニイのことを思い出す。懐かしくて、女性は笑みをこぼした。

図面を保存し、タブレットに絵を描く。思い出すのは、自分たちが生まれてから青い星^{テラ}に至るまでの道のりだ。

赤い土と砂漠が目立つ辺境の星で、女性たちは生まれた。人類が諦めた植民惑星に降り立った『同胞』たちは、その星に『ナスカ』と名付けて定住しようとしていた。赤い大地で育った野菜の味、赤い大地に咲いた桃色の花、同年代の友人たちと駆けまわった砂漠の遊び場を、女性は今でも覚えている。

その星は、もうない。惑星を破壊する兵器によって、跡形もなく消されてしまった。故郷滅亡の瞬間もまた、忘れたくても忘れることのできない光景であった。そこから、本当の意味で2代目指導者^{ソルジャー}となったグラン・パは強硬手段を取るようになる。自分たちを、『同胞』の牙として戦場へと送り込んだのだ。

人類側に所属する人々を殺した。殺して、殺して、先代の——ひいては『同胞』たちの、「青い星へと帰りたい」という願いのために戦った。星へ近づく中で、10人いた幼馴染の3人が殺された。たくさん泣いて、ようやく目的地へとたどり着く。そこは、青い星ではなかった。死の星だった。

こんなもののために、と、悔しそうに叫んだ先代の指導者の後ろ姿を覚えている。トオニイと長老たちを連れて、地球に降りた姿も覚えている。その後、指導者たちは世界を管理する機械に挑み、後継者に未来を託して果てた姿も、鮮明に刻まれていた。彼らから託された想いは、今でも胸の中にある。

「できた。……トオニイ、アルテラ、タージオン、タキオン、コブ、ツエーレン、ペスタチオ！」

どうだ。

女性はエルガンに向き直る。奴はタブレットを眺めた後、懐かしそうに目を細める。口元には、乾いた笑み。

「……………多分、トオニイ、タージオン、タキオン、コブの4人が確實

に泣くぞ」

「どうしてよ？」

「ツラを被ったハニワみたいだからな。アルテラたちは美人に描かれているのに……」

エルガンは遠い目をした。自分の描いた絵はおかしいだろうか？よく描けた方だと思っただが。

そんなことを考えていたとき、端末が鳴り響く。仲間たちからの定期報告だった。

全員の報告レポートを読み終えて、女性は険しい表情で端末を閉じた。

どこもかしこも問題だらけ、常に綱渡り状態だ。彼等は皆、手探りで道を探している。

目的地まではまだ遠い。それでも、たどり着きたい場所がある。女性性は端末をしまった。

「そろそろ戻らないと危ないんじゃないの？ 国連代表。休憩時間はもうすぐ終わりよ？」

「言われなくても帰るさ。それじゃあな」

エルガンは女性に背を向け、ひらひらと手を振った。刹那、彼の姿が消えうせる。彼が立っていたはずの場所には、もう誰もいなかった。

女性も車椅子を自分でこぎながら、静かに目を閉じる。次の瞬間、そこはアザデイスタンではなかった。『悪の組織』本部の社長室。

「さて、仕事仕事」

女性はタブレットを取り出し、図面の続きを描き始める。

今日もまた、忙しい日々が過ぎていく。

◆

ある種の “決着” をつけるときが来た。

イデアは、『夜鷹』からのメッセージを読み返しながら、大きく息を吐いた。

『俺は、キミと過ごした日々のすべてが嘘だったなんて認めない。何があっても、キミを信じている』

彼の文面で、すぐに気づいた。『夜鷹』およびクーゴ・ハガネは、『エトワール』がソレスタルビーイングのガンダムマイスターであることに気づいている。その上で、『エトワール』を、イデアを信じようとして――信じたいと願う文章でメッセージを締めていた。

イデアは手を強く握りしめる。手は小刻みに震えていた。彼への想いを失うことは、イデアにとって死ぬより怖いことだ。でも、彼を想い続けることは、死ぬよりもつらく苦しい痛みと向き合わなければならぬことを意味している。

『死ぬのが怖くて、恋ができるものか』。まったくもってその通りだ、と、イデアは思う。今更ながら、言葉の重みをひしひしと感じてきた。逃げたい。でも、逃げたくない。相反する感情がせめぎ合い、悲鳴を上げていた。

いがみあう双子。相反する感情を持つ者が所有していた、力の名前。

諦めの中にある憤りを、絶望の中にある希望を。その力を持っていた異星人の名前は何だったか。奴からその力を奪い取り、新たな所有者となった青年の名前は何だったか。

今なら、彼らの気持ちがよくわかる。心の中でのたうち燻るこの想いに、今にも押しつぶされてしまいそうだ。それでも、諦めたくない。失いたくない。

(そうだ、私が選んだんだ)

悲しみも苦しみも理解したうえで、茨の道を選んだ。そのことに後悔はない。

だって、イデアは『知っている』。茨の道の先に、自分たちが笑いあえる未来あしたがあると。その未来あしたの光景の愛おしさといったら！

あそこにたどり着けるなら、きつとこの痛みも耐えられる。どんな痛みや苦しみが目の前に立ちはだかっても、超えていけると信じた。それが、己の決意だった。

恋も愛も使命も、諦めない。自分自身で決めたことだ。イデアは気合を入れるように、強く握った右手を左手に打ち付けた。

(死ぬのが怖くて恋なんかできない！ だから、その恐怖すら飛び越えて、恋と明日をつかみ取る！ ……恋する乙女、舐めるんじゃないわよ!!)

恋と愛のため、命を懸けて歌い続けた歌姫たちがいた。『死ぬのが怖くて、恋ができるものか』と叫んで、迫りくる敵を屠った女性軍人がいた。誰かに恋をし、誰かを愛し、戦う女性の美しさと強さを、イデアは『知っている』。

そんな恋に憧れた。そんな愛に憧れた。そんな相手に憧れた。そんな生き方に憧れた。そのすべてが、今のイデアを突き動かす。決意を新たに、イデアは端末にメッセージを打ち込んだ。『すべてを話すことはできません。ですが、私は、『私を信じる』と言ってくれた貴方に応えたい。そう言ってくれた、貴方を信じます』——それが、イデアの精一杯の答え。

「イデア。お前さん、何百面相してるんだ？」

ソレスタルビーイングの技術者であるイアンが、きよとんと首を傾

げた。

隣にいたロックオンも、物珍しそうにアイデアを見ている。

ふと、アイデアはロックオンが握りしめている端末に視線を向ける。そこに映る画像データは、クリステイナによってドレスアップされたフェルトのものだった。私服に対してあまりこだわりのない、むしろ疎いフェルトが、花柄のシフォンミニワンピースを着ていた。

おまけに、顔をほんのりと染めて恥ずかしそうに俯いているではないか。ポーズもアングルも完璧だった。フェルトを買物に連れて行く口実として、クリステイナは「ロックオンも喜ぶ」および「ロックオンもイチコロ」等の発言をしたのだろう。

クリステイナに急かされたフェルトが、困惑しながらも揺れ動く姿が容易に想像できた。写真撮影時も、同じようなことを言ったに違いない。次の瞬間、ロックオンの端末が鳴り響いた。転送されてきたのはフェルトの画像データであるが、服装は全く違うものだ。

先程のワンピースではなく、切り替えのワンピースで、上が白のノースリーブ、下はゴールデンオレンジの透かし生地でできたスカート風のもの。違う服装に着替えたらしい。向うはきつと、ちよつとしたファッションショー状態になっているのだろう。

フリルとギャザーをふんだんに使った白と赤基調のワンピース、花柄のタンクトップとデニムの3分丈ズボン、ワイシャツ型の半そでシャツに黒のフレアスカート、シフォン地のフリルを重ねた薄水色のブラウスと白の7分丈レギンズ。画像が次から次に転送されてきた。

「……………おう」

ロックオンはかすれた声を出して、端末を握っていない方の手で口元を覆う。彼もフェルトと負けず劣らず、照れくさい様子だった。

アイデアがニマニマ笑い始めたのに気付いたロックオンが、慌てて端末を閉じる。「やましいことなんてありませんよ」と言いたげな眼差しをこちらへ向けているが、嘘っぱちであることは明白だ。どう根掘り葉掘りしてやろうか。

フェルトに対して自重気味だったロックオンであるが、最近はずりりと距離を縮めつつある。彼の中で何かの変化を起こしたらしい。おそらくその原因は、ゲッター線研究施設の壊滅作戦だろう。

『何人たりとも、私の愛を阻むことはできない！ 阻むものがあるなら、そんなもの、私の無茶で押し通す！』

『年の差その他諸々考えろ、この変態が!!』

『キミにそれを言える資格はないな！ キミは私と同類と見た!』

『天地がひっくり返ったとて、お前さんとだけは一緒にされたくないね！ こっちは頑張ってお兄さんやってるんだからな!』

『そうやって、キミは愛するものが他人にかっさらわれていくのを、手をこまねいて静観すると？ そんなこと、私はお断りだ!』

『俺は人殺し、いつかは裁きを受ける身だ。幸福を手にする権利なんか存在しない。あんただってそうだろう？ 軍人さん。——その覚悟は、とうにできてるんだよ!』

『ああそうだな！ 敵を撃ち、部下や上官を死なせ、屍の山を築いていく……そんな人間がたどり着く場所くらい、私も心得ているさ！ していないずれば、私もそこに墜ちるのだと!』

『だったら!』

『だからこそだ!』

『だからこそ、好いた相手を——心から愛した女性ひとを！ せめて、他ならぬ己自身の手で、幸せにしたいと願うのだよ——!!』

ロックオン・ストラトスの恐怖体験。あれは恐怖だけでなく、もつと別な方向にも影響を与えたようだ。いい変化だとイデアは思う。イアンは合点がいったらしく、眩しそうに目を細めた。彼もまた、年の差カッパルの1人である。彼の場合は妻に襲われた側で、ロックオンのように手を出そうとした側ではない。

この2人に『イオリア・シュヘンベルクも年の差婚である』ことを話したら、どんな反応を示すだろうか。「互いに互いを襲おうとして失敗を繰り返した挙句、今度は互いに互いを誘いあつたために失敗を

繰り返し、何度も襲いあいと誘いあいを繰り返した」という事実。きつとクルー全体が啞然茫然するだろう。

長々と馴れ初めを話す女性のことを思い出し、イデアはそつと目を逸らした。視線の先には、新装備が取り付けられたエクシアと、機体を見上げる刹那の姿があった。彼女は自分の機体ガンダムであるエクシアにご執心である。白と青基調のガンダムを見上げるその瞳の先には、どんな光景が見えているのだろうか。

浜辺には、新装備を得たガンダムたちが並ぶ。イデアのスターゲイザーは、現在、巨大なコンテナの中で調整中だ。

コンテナには、赤い宝玉に金の片翼が描かれている。悪の組織の口ゴマークであった。

「しかし、徹底した秘密主義だな。悪の組織は」

イアンはぶつくさと文句を言いながら、巨大コンテナを眺める。強力なスポンサーでありながら、最大のライバル。その動向を気にするのは当然と言えよう。

コンテナを覗みつけていたのは彼だけではない。ティエリアは仇敵に対する眼差しを向けている。ヴェーダの采配とはいえ、イデアがガンダムマイスターとしてソレスタルビーイングに見出されたことに強い反感を抱いていたのは事実だからだ。

悪の組織は、自分たちの技術をヴェーダに報告しようとしな。ソレスタルビーイングのクルーおよびメカニックにすら教えていないのだ。そのため、スターゲイザーの機体整備はイデアが行っている。勿論、修理中はクルー全員「部外者のため立ち入り禁止」だ。

「ティエリア、お前さんも気になるのか？」

「っ!?! い、いえ……」

イアンに話しかけられたティエリアが、驚いたように肩をすくめる。驚き以外に別な感情も見え隠れしていた。困惑および何かの予

兆に、どう対応すべきか迷っているかのような。

そういえば以前、無断でトレミーに乗り込んだイアンの娘を見て挙動不審になっていたのを見かけた。丁度、彼が刹那から恋愛相談を持ちかけられた頃の出来事だったと思う。

テイエリアが弄んでいる感情の意味がわかるのは、あと数年後だ。確証を持って言える。早くそんな日が来ればいいのに。そうしたら、盛大に根掘り葉掘りしてやる。

イデアがひっそりと決意を固めた直後、テイエリアが体を震わせて周囲を確認した。嫌な予感を察知したらしい。

しかし、その出どころがイデアであることまでは察せなかったようだ。苛立たしげにコンテナへと視線を向ける。

アレルヤがテイエリアをいさめようとしたのと、コンテナが開いたのはほぼ同時。武装の取り付けを終えた男性と少女が顔を出す。

男性は仮面をつけており、顔立ちはよくわからない。外見年齢は20代前半あたりだろう。南の孤島に赤い長袖の制服とは、なんとも暑苦しい格好だ。本人も汗だくである。せめて違う格好で来ればよかったのに。

少女はオレンジ色の髪をおかっぱにし、大きな赤いリボンをつけていた。外見年齢は10代前半。男性と並ぶと、兄妹というより親子関係に近しく見えるレベルだった。彼女は男性を見て、「余計に暑い」とぼやいていた。

「今回の調整、終わったぞ」

「ありがとう、フェニックス。アメリカスも」

男性——コード・フェニックスに、イデアは礼を述べた。隣にいた少女——コード・アメリカスも、嬉しそうに微笑み返す。役目を終えた2人は、そのまま輸送船に乗り込んで帰還していく。

彼らの背中を見送ったイデアは、チューンナップが終わったスターゲイザーを見上げた。ガンダムたちの中でも、更に女性らしさを追求したようなフォルムだと言えよう。

推進力の役割を果たす後輪の周囲に、宝石の形をした誘導兵器が武装として取り付けられていた。脚部には木星の輪を思わせるようなチャクラムと、チャクラムを装備するためのアームが付けられている。舞ってよし、敵機に向けて投げてもよしの遠近両用武装だ。性能はGNブレイドと同格で、引けを取らない。

参考はパールネイルおよびパールファングで、多元世界を侵略しようとしたインサラウムの部隊に所属していた女性が搭乗していた機体の武装である。後に、パールネイルのパイロットはZEXISの仲間に加わり、元から敵対していた女性パイロットがパールファングに搭乗し、戦いを繰り広げていた。

これで、モラリアへの軍事介入における準備は万全である。あとは、この力を存分に振るうだけだ。全機のガンダムが並ぶ姿は壮観であった。アイデアは大きく息を吐く。モラリア介入は一筋縄ではないかもしれないだろう。軍だけでなく、PMCも新型兵器をテストがてら投入するという噂が飛んでいるためだ。

その兵器の名は、MモビルドールD。パイロットではなく、人工知能によつて機体を制御、および遠隔操作するものだという。

PMCは「ガンダムに対抗する切り札」として売り出そうとしているらしい。これなら、パイロットの命を消費しなくても戦力になる。モラリアやAEUだけでなく、ユニオンや人革軍も喉から手が出るほど欲しいことは明らかだった。

モラリアへの介入に踏み切った理由は、MDの存在も含まれていた。今回の介入ではMDを叩き潰し、ガンダムには通じないということを示すという意味もある。こんなものが実用化されてしまえば、世界の紛争に、積極的に投入されることは明らかだ。

「こつちもあつちも大決戦、か」

アイデアは小さく呟いた。丁度、刹那がグラハム専用端末からメッセージを受け取ったらしい。

彼女はじつと、端末を眺めていた。驚きと悲しみと不安に満ちた、

悲壮な横顔。しかし、それは一瞬のこと。

刹那は首を振り、新たな力を得たエクシアを見上げる。それはまるで、余計な感情を振り払うかのようだ。

成程、刹那も決戦が近いらしい。相手はグラハム・エーカー、刹那の『運命の人』。

どうか、自分や彼女たちの歩く道に、行きつく果てに、幸福があらんことを。

アイデアは、そう願わずにはいられなかった。



「教官、何を書いてるんですか?」

タブレットを覗き込んだヨハンが首を傾げた。彼につられ、ミハエルとネーナも画面を覗き込んでくる。

「これは、何かの図面か?」

「機体と、武器?」

「ああ、ちよつとな」

ノブレスはタブレットに図面を描きこみながら、ミハエルとネーナに答えた。

「今はMSパイロット乗りをやっているが、元々の本業は技術職でね。図面を引くだけでなく、開発も行っていたんだ」

「本当!? 凄い!」

ネーナがぱつと目を輝かせた。他の2人も尊敬の眼差しでこちらを見上げてくる。どうしてだか、酷く照れくさい。ノブレスは苦笑し、図面を描きこんでいく。現在描いているのは、バスターライフルとバスターシールド。元々は、虚憶きよおくのデータベースを再現したものである。

コロニー解放のために戦った5機のガンダムのうち、翼を持つ機体と死神の愛称で知られる機体の武装。トリニティ3兄妹のガンダムスローネシリーズに施す新武装の候補としてピックアップしたものである。他にも候補はあるが、話すと長くなるので割愛させていただく。

虚憶きよおくから使えそうな武装を再現することは、とても楽しい。ノブレスの家計は2270年代以前から虚憶きよおくやヴィジョン、コーヴァレンター能力の研究を行っており、中にはノブレスのように共有者コウウアレンターとして目覚めた者もいた。

今はもう、ノブレスの身内は誰もいない。完全に天涯孤独である。昔のことを思い出したせいか、何とも言えぬもの悲しさを感じた。め息をついた。

「教官、他にはどんな図面があるんだ？」

宝の山を目の前にしたかのように、ミハエルが問いかける。その眼差しの中で煌めく光に、思わずノブレスは頬を緩ませた。

『ねえ、他にはどんな図面があるの？』

隣の家に住んでいた少年も、同じようにして目を輝かせていた。彼は今、MSの権威として名をはせる技術者となっている。教え子を多く輩出し、現在も教え子と共にMS開発に着手しているという。

大成するだろうとは思っていたが、雲の上の存在になるとは思ってもみなかった。持ち前の好奇心と探究心、および粘り強さがいい方向に働いた結果だろう。ただ、最近では、それ自身が彼自身の首を絞め

てしまいそうな気がしてならない。

ノブレスはタブレットを3人に手渡す。見てもいい、という言葉の代わりにだ。

3人は仲良く並んで図面を眺めている。時折気になる機体や武装を見つけては、きやあきやあ黄色い声を上げていた。見ていて微笑ましい光景である。

図面だけ引いてお蔵入りしてしまったもの、現在進行形で開発中のもの、既に開発が終わり改良品が出来上がっているもの等、様々な種類が保存されている。

トリニティ3兄妹およびアレハンドロ一派には極秘で開発を進めている新武装設計開発計画。だが、パイロット本人の希望を叶えてあげたいと思うのが技術者の願いだ。

本人たちの戦術も含めた検討のためでもあるし、本人たちからの希望を秘密裏にリサーチするのも大事な仕事である。

ノブレスは聞き耳を立てながら、一字一句聞き逃さぬよう集中した。

「わあ、この機体可愛い！ 機体名は……ファルシア？ あ、後継機も出てるんだ。こつちも可愛い！」

「ピンポイントバリアか。これ、攻撃にも使えそうじゃねえか？」

「バスターライフルにサテライトキャノン、か。どれも凄まじい破壊力だ」

ネーナは可愛さを前面に出した機体に惹かれ、近接攻撃を好むミハエルが珍しく防御系の技術に興味を示し、ヨハンはライフルやキャノン系の装備を眺めている。

ノブレスは即座に端末を取り出し、彼らが惹かれたもの、興味を持ったものを記録していく。

自分が手掛ける装備が、彼らの明日を守り、切り開くものになるように。ノブレスは、そう願わずにはいられなかった。

◆
悪夢のような虚憶きよわくを見た。

『よかった……』

『討つというのか、同類を！』

『ブリングの仇いいい！』

『た、助けて！ リボンズーツ！』

『う、うわあああーっ！』

いつも一緒にいてくれた家族が、断末魔の悲鳴を残して宇宙へと消えていく。

（アニニュー！ ブリング！ デヴァイン！ ヒリング！ リヴァイヴ！）

リボンズの手は、彼らの手を掴むことすら叶わなかった。命が零れ落ちて、星に還っていく。

しかし、目の前にいる『彼』は、彼らの命が散っていくことに何の感慨もないようだ。振り向くことなく歩き続ける。

（何故だ！ どうして、どうして『自分キミ』は何も思わない!? 家族がいなくなっただぞ!?）

大切な家族だったのに。同じ同胞だったのに。同じ同志だったのに。なのに、どうして『自分かれ』は悲しむそぶりを見せないのだろう。いいや、『自分』は、悲しんですらいない。駒が一つなくなった——『自分かれ』の思考回路は、そこで止まっている。『自分』にとって、あの5人はその程度の存在でしかなかったのだ。

切り捨てて、切り捨てて、『自分』は目的を果たすために突き進んでいた。『世界に己の優位性を証明する』ために、イオリア計画を利用した。沢山の人々の運命を弄んだ。

不意に『自分』が立ち止まる。立ちほだかったのは、「自身が人類を導いてもいいのではないか」と思い至った同胞。紫の髪に眼鏡をかけた青年だった。家族の1人が、『自分』に銃口を向ける。

発砲音。『自分』が崩れ落ちる。青年の歪んだ笑み。

彼があんな風に笑うなんて、リボンズは生まれて初めて知った。

『あ……』

再び響いた発砲音。次に崩れ落ちたのは、『自分』を手にかけたことに優越感を持っていた青年であった。

(リジエネー！)

手を伸ばしたりリボンズとは対照的に、『自分』はまるでゴミでも見るような眼差しで、彼を見下した。

次の瞬間、世界が一変する。そこはかつて、何度も出入りしたヴェーダの内部であった。

リジエネと同じ遺伝子配列を持つイノベイド。名前は確か、ティエリア・アーデ。

『自分』は彼にも銃口を向ける。邪魔者を排除する、ただそれだけのために。嫌な予感がして、リボンズは慌てて手を伸ばす。

ティエリアを庇おうとしたその手は、何も掴めなかった。そんなリボンズの代わりとでもいうように、別の人物がティエリアの間に割り込む。

(エルガン代表！)

胸を撃ち抜かれて倒れたのは、エルガン・ローディックであった。

彼はテイエリアにコードを託す。エルガンを撃った『自分』は舌打ちし、計画を進めるために駆けだした。呻く彼には目もくれず、ZEX ISの邪魔をする。トライアルシステムを無効化させたのだ。

仲間を守るため、テイエリアが『自分』の仕掛けたプロテクトに挑む。無茶だ、と、リボنزは直感した。しかし、『自分』の妨害を跳ね除けるため、もう1人の人物が名乗りを上げる。翼を持つガンダムと、無限の可能性を演算し未来を見せるシステムを駆使する1人の少年。

彼を信じたテイエリアと、テイエリアに信じられた彼が、協力してプロテクトを突破した。情報の奔流に、ただの人間が耐えきれぬはずがない——奇しくも、リボنزと『自分』の見立ては一致する。翼の生えた機体からの返答は、ない。

次の瞬間、驚くべきことが起きた。

『勝手に殺すな』

(生きてた!!)

未来を見た少年は、情報の奔流に耐えきったのだ。

彼はただの人間である。普通の(?)人間である。

啞然としていたら、更に驚くべき事実が明かされた。

イオリアの遺産、ふたつのゼロ、兄弟機、イオリアが見出した“もうひとりの革新者”。

『明日を見ようとしないうちに、ゼロは何も語ってくれない』

イオリアの遺産の継承者が、『自分』に向けてバスターライフルを向ける。

『刹那!』

『わかっている!』

聞こえたのは青年と少年の声。刹那、という名前は、自分が「彼女」に与えたコードネームだった。「彼女」と同じ名を持つ青年と『自分』、およびZEXISたちがぶつかり合う！

勝利者は、青年およびZEXISだった。彼の言葉を『自分』は切り捨て、青い機体に挑みかかる。——敗北したのは、『自分』であった。絶望。『使い潰されるだけの存在でしかない』宿命を覆したくて、自分の優位性を証明したくて、必死になってあがき続けた。自分が一番なのだ、神に等しい存在なのだ、そう信じていないと自分が崩壊してしまいそうだった。

どうして自分は生み出された？ どうして自分は使い潰されなければならぬ？ どうして自分は踏み台にされなければならぬ？ どうして、どうして自分が敗北しなければならない？ どうして、どうして——！！

『自分』の苦悩に触れる。嘗てのリボンズが抱えていたコンプレックスそのものだ。現在では、家族たちや友人たちのおかげで、さほど気にならなくなってきたものだ。『自分』には、それから解き放つてくれる人物はいなかったのだろうか？

『自分』の口からその問いの答えを聞く間もなく。

『僕は……！ 僕はあああああつ！』

断末魔を残して、『自分』は宇宙へと散る。そこで、虚憶が途切れた。

(む、胸糞悪い……！ 文字通りの完全敗北じゃないか、これ)

リボンズは胸を抑えて大きく息を吐いた。アレハンドロの長話につき合わされて、やっと解放されたばかりだというのに。

ストレス発散と定期報告を兼ねて、『悪の組織』の代表取締役に連絡しようとしていた矢先の出来事であった。おかげで余計にストレスがたまる。

「……定期連絡し終えたら、飲もう。飲み明かそう」

そうでもしなければやっていけない。リボンスは心の中で小さく付け加えると、端末を操作する。

やるべきことを終えたリボンスは、夜の街へと繰り出した。

星1つ見えない、地上の光に支配された夜のことだった。

20. 猶予期間―モラトリアム―

ユニオン領の、煌びやかな街の中で。

「ねえ、2人とも。どこかおかしい所はないかな？」

白いタキシードに身を包んだビリーが、心配そうに問いかけてくる。

ビリーとクーゴたちがこのやり取りをしてから、もう10分近く時間が経過していた。

「自信を持って、カタギリ」

「そうそう。今のお前なら、意中のリーサ嬢も一撃だ」

クーゴとグラハムはうんうん頷いて見せる。しかし、ビリーは色々気になるらしい。本当に？ とでも言いたげな視線をこちらに向けてきた。

彼は自分の一張羅を信用できないのだろうか。ならば買い換えればいいのにとクーゴは思う。だが、ビリーのファッションセンスでは似たようなものを購入する可能性がはるかに高いので、貯蓄が無駄に飛んでいくだけになりがちであった。

何度かこのやり取りを繰り返して、ようやくビリーは決心がついたらしい。意気揚々と夜の街へ消えていった。浮足立ちすぎて転びそうになっていたのが気になる。今日のビリーは浮つきすぎではないのか。何やらとんでもないことをしそうで怖い。

クーゴとグラハムは、白いタキシードが人ごみに消えていくのを確認したため息をついた。翼が刻まれた、銀の懐中時計を見る。彼のファッションチェックを始めた時間から、既に時計の長針は半周していた。

「ビリー、本当に大丈夫かな」

クーゴは思わず呟いていた。

グラハムもなんとなく察したのだろう。難しそうな顔をした。

「話を盛り上げようとして、余計なことを言ってしまいそうな気がする」

「やっぱり。お前もそう思うよな、グラハム」

グラハムの言葉に、クーゴも頷く。夜の街は人々でごった返しており、窓に灯った明りが眩く輝いていた。ビリーが消えていった方向に背を向け、2人は大通りを歩く。

月や星のない夜でも負けることのない、煌びやかな通りだった。この街は、富裕層の住民や観光客が多いためか、タキシードやパーティードレスを着た男女が目立つ。

複数人で談笑している人々、艶めかしい雰囲気を漂わせながら寄り添う男女、薄暗い笑みを浮かべて話をするスーツ姿の男性たちおよび女性たち。様々な光と闇が混在する。

昔から、この通りはどろどろした空気が漂っているように思っていた。時折、本当の意味で呼吸が詰まってしまいそうになる。できれば近づきたくないというのが本音だ。

軍や社交界の付き合いで来る以外、この場所に立ち寄ることは稀だ。軍の寄宿舍や基地と反対方向にあるというのも理由の一つである。

クーゴとグラハムは夜の街を歩いていた。タクシーや公共交通機関を使えば早く帰れるけれど、どうもそんな気分になれない。グラハムも同じ気持ちのようだった。

「……………」

両名とも、無言。煌びやかな街並みを横目に、男2人は歩を進める。

クーゴはおもむろに端末を開いた。先日、『エトワール』から届いたメッセージを開く。

『すべてを話すことはできません。ですが、私は、『私を信じる』と言ってくれた貴方に応えたい。そう言ってくれた、貴方を信じます』

それが『エトワール』の精一杯なのだろう。文面を何度も読み返す。『エトワール』の葛藤と苦悩、そして強い決意が伝わってきた。彼女を困らせたり、追いつめたかったわけではなかったのに。クーゴは静かに息を吐く。

隣に視線を向ければ、グラハムも端末を見つめているところだった。狂氣的なまでに澄み渡った翠緑の瞳は、ただまっすぐに画面へと注がれている。どこまでも真摯な眼差しに、クーゴは気圧されていた。仕事と同じくらい、いいや、それ以上に真剣な横顔だった。

決戦間近。彼の顔を見て、クーゴの頭に浮かんだのはこの熟語であった。何故こんな単語が浮かんだのか、なんとなく見当がついてしまった。見られていることに気づいたグラハムが、端末を閉じてクーゴを見返す。お守りにつけていた鈴が、優しい音色を響かせた。

キミも、同じなんだろう？

エメラルドの双瞼が、問いかけるようにクーゴを映し出していた。相棒は伊達じゃない。クーゴは苦笑いを浮かべて端末を閉じる。

「俺は、彼女を信じるよ。……お前はどうする？」

視線で問いかける。グラハムはいつも通りの不敵な笑みを浮かべた。

「言うまでもない。……それが、私の務めだ」

グラハムの言葉にも、眼差しにも迷いはない。ならば安心だ。クーゴは表情を緩ませた後、前へと向き直った。

闇夜に浮かぶ街並みは、いつ見ても地上の星を思わせる。綺麗ではあるが、どこか冷たい輝きを宿していた。

そのとき、クーゴの視界の端に何かが見えた。そこは人々が集まる広場であった。黒に近い緑の葉を茂らせた植込みの陰に、一際淡く明るい色彩がちらつく。ペールグリーン。『エトワール』の髪の色と同じ色だ。よく見ると、植込みの近くに人がうずくまっている。

思わず駆け寄ってみると、鼻を突くようなアルコール臭が漂ってきた。振り返った人物は、顔を真っ赤にして泣き腫らしている。紫の瞳がクーゴを捉えた。この青年は既に酔っぱらっているらしい。何か、嫌なことでもあったのだろうか。

ただならぬ様子に気づいたグラハムも、クーゴに続いて駆け寄る。大丈夫かと声をかけて伸ばした手は、しかし、本人によって振り払われた。自分に構わないでくれ、ということだろう。だが、酔っ払いを放置するとロクなことにならない。

場合によっては、『1人で大丈夫だろうと放置したら、吐瀉物を詰まらせて窒息死してしまった。誰かが傍にいて救急車を呼ぶ、または適切な処置をすれば助かったかもしれない』なんてこともあり得る。

「大丈夫か？」

「うるさいな。僕のこととは放っておいてくれないか」

「いや、無理だよ。どこからどう見ても危ない。落ち着けて」

クーゴの言葉に、青年は嫌々と首を振った。紫の瞳には涙が浮かんでいる。アルコールの影響か、酷く感情的になっているらしい。酒は飲んでも飲まれるな。身内に酒乱を抱えるクーゴからしてみれば、アルコールは必要最低限『たしなむ』程度が丁度いいと思っている。

ヤケ酒なんでもつてのほかだ。ヘタすれば急性アルコール中毒、もしくは飲みすぎが原因で肝臓がやられる危険性が跳ね上がる。命に別条がなくても、社会的な意味での死を迎える可能性だってあるのだ。「酒の席で醜態をさらしてとんでもないことになった」例はいくらでもある。

青年の場合、アルコール中毒もそうだが、社会的な意味での死を迎える危険性が高かった。ぐずる子どものように首を振る彼の姿を見ると、ますますそんな予感がする。感情的になると、後先考えずに行動してしまいがちだ。気持ちが大きくなり、理性がなくなっているのが原因だ。

「離せよ。キミに何がわかるっていうんだ」

「わからないよ。でも、このまま放置したら余計にマズイってことだけはわかってる」

尚も暴れる青年をあやすように、クーゴは言葉が続けた。クーゴ同様、しゃがんで青年の様子を気に掛けるグラハムにアイコンタクトする。

グラハムはクーゴの意図を読み取ってくれたようで、即座に立ち上がり、端末を開いて検索を始めた。この近隣にある安価なホテルを探すためだ。

「落ち着け。大丈夫だから」

背中をさすってやった途端、青年はクーゴを睨んだ。敵を射抜くような鋭い眼差し。紫苑の瞳からはボロボロと涙が零れ落ちていた。

クーゴがぎよっとして息をのんだとき、青年の目が大きく見開かれた。その瞳はもう、クーゴを捉えていない。クーゴの向う側に浮かび上がった何かを『視て』いた。

瞳の焦点が合わない——虚憶きよおくを『視ている』人間の特徵だ。どうやらこの青年も、クーゴと同じ虚憶持きよおくちらしい。

「ふざけるな！ 何様のつもりだ!？」

青年が激高する。

彼は立ち上がり、虚空に向かって吼えた。

その声は怒りに満ち溢れている。

「キミがそうやって立っていられたのは、同志たちやヴェーダの力があってこそだったじゃないか！」

見上げる先に、青年が怒りをぶつける相手がいる。クーゴはすぐにそれを察した。

「何が『純粹種』だ！ 何が『救世主』だ！ いい加減にしなよ、この大馬鹿野郎！ ……ああ、何度でも言ってるさ。キミは馬鹿だ、大馬鹿野郎だ！ この親不孝者め!!」

青年の怒りが、悲しみに転じる。

「『“そう”でなければ、存在する意味がない？』『自分が創られた意味がない？』『踏み台になるために生み出された？』 ……違う。そうじゃない、そうじゃないだろう。使い潰されるために生み出された命なんてないんだ。計画の遂行だけがすべてだったわけじゃない。確かに僕は、僕たちは、“来たるべき刻”のために生み出された。でも——」

そこまで叫んで、青年は止まった。零れた吐息には、驚愕。紫の瞳から、また涙が零れ落ちる。悲しみに満ちた眼差し。

「……………僕とキミを“分けた”のは、“それ”なのかい？ だとしたら……………そんなの、悲しすぎる——」

次の瞬間、青年は口元を抑えた。アルコールで上気した頬とは対照的に、顔色は真っ青だ。

まずい。クーゴがそう直感したときにはもう、何もかもが遅かった。青年は呻き声をあげて、派手に吐瀉物をまき散らかす！

彼の背をさすっていたときのまま——しゃがんだ体制のままだったクーゴに、青年の吐瀉物は容赦なく降り注いだ。

「げぼら」

「おおあああああああああ!?!」

「く、クーゴオオオオオ!?!」

3者3様。男どもの悲鳴が、真夜中の広場に響き渡った。

*

「……本当に、なんとお詫びすればいいのかわかりません」

すみませんでした、と、青年は頭を下げた。今にも自害してしまいそうな空気が漂っている。

広場にあった水飲み場と持っていたハンカチ等で吐瀉物を処理し終えたクーゴは、曖昧な笑みを浮かべておいた。

「今後、こういうことのないように気を付けなければいさ」

「ミスや醜態は、生きている限り挽回可能だからな」

クーゴとグラハムの言葉に安堵したのか、青年は安堵したように頬を緩めた。それでもきちんと頭を下げるあたり、真面目できちんとした性格なのだろう。もしくは、プライドが高く些細なミスも許せないタイプなのか。

どちらにしろ、彼にとって先程の「吐瀉物ばらまき事件」は黒歴史に相当するものであることは明らかだ。今にも死にそうな顔だったのが、今にも自害および殺される覚悟を決めた顔になったときは、正直ハラハラしたのは内緒である。

上着とハンカチ類は彼の持っていたビニール袋の中に入れられている。クーゴ自らクーゴリングに出すつもりでいたのだが、本人の強い希望とミス挽回チャンスがてら、「洗って返してもらおう」ということで託したものだ。

しかし、この青年はどうして吐くほど飲んでいたのでろう。

聡明な様子からして、羽目を外すようには見えない。

「……嫌な虚憶きよわくを見たんです」

青年は、ぽつぽつと囁くように言葉を紡ぐ。

「自分と同じ姿と名前を持った人物が、僕の家族と同じ姿と名前を持つ人々を犠牲にして、挙句の果てには、ぐうの音も出ないほどの完全敗北に泣いた虚憶きよわくでした」

青年の顔は蒼白だ。余程、虚憶きよわくに出てきた『自分そっくりで自分と同じ名前の人物』が取った行動が恐ろしかったのだろう。

家族を犠牲にした挙句、完全敗北した様子も、青年にとってはショッキングな光景だった。それを振り払うために、アルコールに頼つたに違いない。

結果は、「吐瀉物ばらまき事件」が示していた。本人も、自分がそうなるまで飲んだくれたことに驚きと失望を隠せていないらしい。

酔っている最中も虚憶きよわくを『視て』いたらしい。本人曰く、『虚憶きよわくとアルコールが原因で店内で大騒ぎし、店から追い出された後、行く当てなくさまよった挙句に広場にたどり着いた』そうだ。クーゴたちが通りかかったのはその直後だったという。

青年は、ジンやウオツカを中心に、度の高い酒やカクテルを飲み漁っていたそうだ。そこまで強いものを水同然に飲み干し続ければ、誰だつてグロツキーになるだろう。そうまでして忘れたかった光景とは、どんなものだったのだろうか。

(まあ、俺もショックな虚憶きよおくを見たことがあるけど)

心の中でそう呟いて、クーゴは遠い目をした。

端的に言う。『クーゴが駆るフラッグが、白と青基調のガンダムとグラハムが駆るフラッグの攻撃によって墜おとされる』光景だった。愛を憎しみへと転化させたグラハムの歪んだ表情も、ガンダムのパイロットが浮かべた泣きそうな顔も、クーゴを墜おとしたとき2人が浮かべた悲痛な表情も、データを読むたび鮮明に浮かんでくる。

この虚憶きよおくは、警告するかのようにはフラッシュバックするのだ。おまけにこの虚憶きよおく、調査隊の活動では一度も出てきたことがない。調査隊メンバーは『そういう虚憶きよおくがあるということは知っているが、実際、ヴィジョン共有を通して『視た』ことはなかった』りする。

『視えた』ものかものだけに、詳しいことを仲間たちへ言う気にならなかった。特に、自他共に相棒と認め合う仲であるグラハム・エーカー中尉や、フラッグの開発に携わっている年上の友人ビリー・カタギリ技術顧問には。ビリーが開発した機体を操るグラハムが、クーゴを撃墜する光景なんて信じられない。というより、想像できない。

『想像しろ』や『想像力がない奴の末路は死である』と加藤機関が常日頃言っていたけれど、人の想像力を超えるのもまた、人である。

想像を超えた光景を、人は『悪夢』や『奇跡』と呼ぶのだろう。あるいは『幸運』か。クーゴはぼんやりと考える。

「タイプ・ブルー荒ぶる青……う？」

青年はクーゴとグラハムを見て、何かに気づいたようにそう呟いた。

クーゴたちが首を傾げたとき、彼は取り繕うように首を振る。

なんでもない、触れないでほしい——紫の瞳は拒絶するように閉じられた。

「……本当に、すみませんでした」

吐瀉物もろとも嫌なことを吐きだして、青年はようやく精神的に落ち着きを取り戻したようだ。

クーゴは時計を確認する。時刻はそろそろ深夜に突入しようという所であった。戻って休まないと、明日の仕事に響く。

「その様子ならもう大丈夫だな」

「一晩眠れば、気持ちも楽になるだろう。今日は早めに休んだ方がいい」

クーゴとグラハムの言葉を聞いた青年は、かすかな笑みを浮かべて領き返した。送っていかうかと申し出れば、「これ以上迷惑はかけられないし一人で帰れる」と丁重に断られた。

そのまま青年と別れ、クーゴとグラハムは家路を急ぐ。

夜空には、星も月も見えない。どこか冷たい街の明りが、絢爛豪華に輝くだけだった。



「ふざけるな！ 何様のつもりだ!？」

青年は叫びながら、男の胸倉をつかんだ。いきなりのことに驚いたようで、男は茫然とこちらを見返す。眼鏡が落ちる音が響いた。

「僕がいるから、計画が進行してるんじゃないか！ GNDドライブも、ガンダムも、僕が一番うまく使えるんだ！ そのために僕は創られたんだ！ そうだろう!？」

青年の言葉に、男は答えない。青年の言葉を否定／肯定するかのよ

うに、彼は静かに目を伏せた。

黒い瞳に宿る感情は、読み取ることなどできそうにない。凧いだ水面のように澄み渡っている。

だからこそ、青年は苛立ちを募らせた。怒りを募らせた。それを、男性にぶつける。

「なのに僕は、『純粹種を生み出すための踏み台でしかない』っていうのか!？」

それだけの価値しかないというのか!? そのためだけに生み出されたっていうのか!?

青年の問いに、男の瞳が揺れる。悲しみと、寂しさと、諦め。彼の感情が、かえって青年の心を傷つける。

悔しかった。惨めだった。認めたくなかった。

「僕は今まで、何のために生きてきたんだ!? 僕はこれから、何のために生きていくんだ!? 教えてくれよ、イオリア・シュヘンベルク!!」

視界がにじむ。男性——イオリア・シュヘンベルクの顔が、よく見えぬ。彼の胸倉をがくがく揺さぶりながら、青年は何度も問いかけた。何度も、何度も、何度も。

叫んで、叫んで、叫び散らして、青年はイオリアの胸倉を叩いた。憤り、怒り、悲しみ——ごちゃごちゃになった剥き出しの感情を、彼にぶつけるかのように。

イオリアは黙して語らない。いや、語れないのだ。理由はわからなけれど、青年にはなんとなくそんな気がした。だからこそ、青年にとっては許しがたいことだった。

この場にいた人間たちも、困惑したように青年を見つめている。

「彼ら」も同じなのだ。向けられる眼差しからそれを感じ取り、余計に腹立たしくなった。

そう考えた途端、青年の体から力が抜けた。立っていられなくなっ

て、床にへたり込む。

滲んだ視界に映りこんだのは、隙間なく敷き詰められたタイル張りの床だった。ぽたぽたと何かが流れ落ちる。小さな水たまりができていた。

それを見て、青年は『自分が泣いていた』ことに気づく。なんて情けないのだろう。自分は創り出された存在なのに。インベイター革新者なのに。

「リボンズ」

不意に、女性の声がした。棒立ちし続けるイオリアの代わりに、黒髪をお団子に束ねた女性が飛び出してくる。大きく手を広げて、彼女は青年——リボンズを抱きしめた。

思わずリボンズは目を見開く。女性は、静かにリボンズの背中を撫でた。

子どもをあやすかのような、優しい手つきだった。母、という単語が頭によぎる。

女性もまた、母親にこうやってあやされていたのだろう。何となく、そう思った。

「ごめんね」

女性が、謝罪した。その声がひどく震えている。

「ごめんねえ」と、女性が謝罪した。嗚咽混じりの声だった。

「……すまなかった。お前の気持ちに気づいてやれなくて」

イオリアも、女性に続いて謝罪した。弾かれたように見上げれば、黒曜石を思わせる瞳が涙で滲んでいる。

「他でもない私が、お前を追いつめてしまっていたんだな」

彼もしゃがんで、女性共々リボンズを抱きしめる。彼の声は震えていた。憤り、悲しみ、無力さに打ちひしがれた感情が滲んだ声。

自分と女性を包み込む腕は、技術職のせいか、少し筋力が足りないように思う。けれども、それに込められた力は、何よりも強く、優しく、温かかった。

「でも、ひとつだけ言っておきたいことがある」

祈りをこめるかのように力強い声で、イオリアは言葉を続けた。

「私はお前を、『純粹種の模倣品』だとか、『計画のための駒』だとか、『純粹種が誕生したら用済み』だとか……そんな風に思ったことは一度もない」

彼の言葉に嘘はない。リボンズは直感した。

「そうだよ、と、女性がイオリアの言葉を引き継ぐ。

「貴方は、『私たちが望んだ子どもたち』なの。貴方が生まれてきてくれて、私はとつても嬉しかった。嬉しかったんだよ、リボンズ。貴方は私たちの、自慢の『息子』なんだよ……!」

女性の言葉に、リボンズは思わず息をのむ。

「息子……僕が？ ……僕は、望まれて生まれてきた……？」
「そうだよ」

リボンズの問いに、女性は即答した。

涙にぬれた青い瞳が、リボンズの紫の瞳とかち合う。

「使い潰されるために生まれた命なんてない。あっちゃいけないんだよ」

「じゃあ、何故僕は生まれたんだ？ その意味がわからない。わからないんだ」

「なら、その意味を探せばいい」

女性はまっすぐにリボンズを見返す。その眼差しは慈愛と肯定に満ち溢れていた。なんて綺麗な輝きなのだろう。

リボンズはそれに魅せられたかのように、女性から目を逸らせなかった。彼女は自信を持って、言葉が続ける。

その頼もしさといったら！ 自分の元となった存在を束ねる指導者ソルジャーに相応しい風格だった。

「大丈夫だよ。私たちも一緒に探すから。貴方独りで抱え込まなくていいよ。皆ここにいて、貴方の背中を支えるから。——私たちは、大切な家族だもの」

家族。

その言葉が、リボンズの心を強く穿った。傷口から滲んだのは、痛みだけではない。胸を占めるような、ほろ苦い幸福感。

リボンズが孤独に抱え込んできた苦しみや悲しみに、じんわりと染み込んでくる。同時に込み上げてきた衝動に駆られたかのように、また視界が滲んだ。

喉の奥から嗚咽が漏れる。耐えようとしたが、もう無理だった。無様だとわかっていたけれど、格好悪いとわかっていたけれど、叫ばずにはいられなかった。

子どものようにわんわん泣き叫ぶリボンズを、女性は抱きしめてあげてくれた。

そんな女性と自分共々、イオリアは抱きしめてくれた。それだけで救われたような気がした。

*

優位性の証明を諦めたわけではないけれど。

『望まれた子どもの1人』という価値があるのなら、多分自分は立ち上られる。

何度だつて立ち上がつて、歩いて行ける。

リボンズは、ふと、大きなカプセルに入った人々に視線を向けた。

自分と同じ同胞イノベイドであり、先程のイオリアや女性の言葉を借りて言えば『望まれた子どもたち』。

リボンズの、新しい家族。じつとカプセルを見上げていたが、ゆつくりと彼らの元へと歩みよる。

眠っている同胞たちに、静かに語り掛けた。

「はじめまして、僕の『同胞』。僕の、新しい家族。……はやく、キミたちに会いたいな」

気のせい、だろうか。

カプセルの中で眠る同胞たちが、嬉しそうに笑い返してくれたような気がした。



懐かしい光景を思い出した。リボンズは静かに目を細める。

(そういえば、近々リジエネの誕生日だっけ。何で祝おうかな)

去年は『ブルーベリーを連想させるような紫色の着ぐるみを被つて、彼を追い回す』というドッキリサプライズを敢行した。共犯者は家族たち+α。企画はリボンズであるが、成功したのは家族の皆——アニュー、ヒリング、リヴァイヴ、ブリング、デイヴァインのおかげ

である。

結果、リボonzの誕生日では『本部へ戻ると「家族は預かった」という脅迫状と地図が残されており、彼らを助けるために本格的なお化け屋敷に挑むことになった。恐怖体験を乗り越えて家族を助けようとしたところ、最後の最後に、某梨の妖精の着ぐるみを着た家族全員に追い回された』。

散々な目にあっただけで、とても嬉しい誕生日だった。リボonzは回想に耽りながら、橋の欄干に身を乗り出す。普段は無機質な光を放つ街灯であるが、思い出した光景のせいか、人の営みが見えてきた気がして、温かさを感じ取る。リボonzは静かに目を細めた。

家の明りの中には、誰かの誕生日を祝っている家族もいるのだろうか。そう考えると、なんだか微笑ましい気分になる。

ふと、リボonzは袋に入った衣服を見る。吐瀉物まみれにしてしまった、男性のものだ。

荒ぶる青の潜在能力を宿す、女性の『同胞』。リボonzもルーツは違えど、『同胞』にカテゴライズされている。

黒髪黒目の東洋人男性も、金髪碧眼の白人男性も、己の持つ能力がどんなものかを理解していないようだった。

「目覚めの日は近い、か」

特に、東洋人の男性——リボonzが吐瀉物まみれにしてしまった人物の力は、近々花開くだろう。芽生えてから蕾になるまでの時間が長い、美しく咲き誇る。彼の能力は大器晩成型だ。目覚めれば、歴代の荒ぶる青保持者の中でも最高ランクの力を有することは間違いない。

昔のリボonzだったら、きっと、彼の才能に嫉妬しただろう。己の優位性を脅かす存在として、全力で排除していたかもしれない。最近見るようになった虚憶^{きよおく}で、自分とよく似た『自分^{かれ}』が「彼女」と同じ名を持つ青年を排除しようとしたように。

金髪碧眼の白人男性の場合は、何と言っていいのかわからない。目

覚めが近いようでもあるし、でも、目覚めるにはまだ未熟な気もする。例えるならそれは、『弾の装填が終わり、安全装置が外された銃』。引き金を引けばいつでも発射できるのに、手をかけたまま引かないでいるような。

いや、彼にとつては「今はまだ、引く必要がない」のだ。もし、引き金を引く瞬間が来るとするならば——『愛のため』だろう。なんとなく、そんな気がした。

フラツシユバックするのは、寄り添う2人の姿だ。金髪碧眼の白人男性と、黒髪に赤い瞳を持つ中東系の女性。女性には、「彼女」の面影が伺える。

そこへ、別の男女が加わった。黒髪黒目の東洋人と、ペールグリーンパールグリーンの髪に紫の瞳を持つ女性。彼女には見覚えがある。『同胞』だ。

男性は、先程リボンズが起こした「吐瀉物（以下中略）事件」の被害者である。再び、彼から預かった上着類へ視線を向けた。

「……刃金？」
ハガネ

『クーゴ・ハガネ／刃金 空護』。上着とハンカチに刺繍されている名前を見て、リボンズは目を留めた。

言葉にすることが憚られるくらい、嫌な予感がする。連想したのは、アレハンドロが連れてきた、着物を着た東洋人女性。

女性が纏っていたどす黒い感情を思い出した途端、背中に悪寒が走った。わずかに残っていた酔いが吹っ飛んでしまう程の寒さである。

そのとき、端末が鳴り響いた。アレハンドロからの連絡である。内容を一読したりボンスは、月も星も出ていない天を仰ぐ。せつかくの自由時間は、もう終わりのようだ。

アレハンドロから離れて休めると思ったのに。遠のいてしまった自由時間を惜しみながら、のろのろとした足取りで、リボンズは繁華街へと歩き出す。

夜は長くなりそうだった。

◆
「そうか。クジヨウくんと……」

先日、『ベリーがリーサ・クジヨウと飲みに行った』話を聞いたエイフマンが、懐かしそうに呟いた。

リーサ・クジヨウはベリーにとつての高嶺の花であり、エイフマンの教え子の一人だと聞いている。AEU軍の戦術予報士として優秀な人物であったが、情報共有が不完全のために起こった同士討ち事故で恋人を亡くして以来、軍を辞めてアルコール依存症になっているそうだ。

クーゴは件のクジヨウ氏と面識はない。しよっちゅうベリーが語るため、気づいたら空で暗唱できるようになってしまっただけである。あまり嬉しくない副産物だ。ベリーはクジヨウ氏と会った際、思いつきで現状報告をしたという。現状報告という言葉に嫌な予感を感じたのは気のせいだと思いたい。

ふと見れば、グラハムが神妙な面持ちでエイフマンとベリーの話を耳を傾けていた。彼もクジヨウ氏に興味があるのだろうか。それは微妙だとクーゴは思う。グラハムには件の少女とガンダムがいるためだ。ベリーを泣かせる展開はない、はずである。多分。

「ところで、キミたち2人の方はどうだい？」

「えっ」

「えっ」

ベリーの問いに、クーゴとグラハムは弾かれたように彼を見た。順風満帆幸せです、と、ベリーの表情は語っている。ただし、彼の尺度はささやかすぎるもので、あまり参考にならない。奥手な彼のこと

だ。高嶺の花に対して、手を握ることも肩に手を置くこともできなかっただろう。

もしビリーに彼女ができたなら、嬉しすぎたショックでぼっくり逝ってしまうのではなからうか。そんな理由で葬式に参加するのは御免被る。クーゴの考えを呼んだのか、ビリーがむっとしたように眉をひそめた。話を逸らすな、というところだろう。

話、と言われても。

件の『エトワール』に関する疑惑について決着をつける約束をしたばかりだ。ビリーが望むような展開など何一つない。むしろ、この場どころか上層部に報告すべき案件であることは明らかである。

けれど、クーゴだって人の子だ。今の自分は、『エトワール』の事情をくみたいと思う気持ちの方が勝っている。ソレスタルビーイングと彼女の関係性について下手に発言し、周囲を混乱させたり彼女の信頼を裏切ったりしたくない。

ふと感じた視線に気づく。ビリーだけでなく、エイフマンも、ハワードとダリルも、興味深そうに自分たちを見つめていた。彼らが期待するようなものなど、クーゴは何も持っていないのに。それはグラハム限定ではなからうか。

「俺はそういうのじゃない。それはグラハムの方だから、そつちに訊いてくれよ」

お前のせいで俺まで巻き添え食ってるじゃないか、どうしてくれる。
その言葉は、クーゴの口から紡がれることはなかった。先日と同じように、彼は静かな眼差しで端末を見つめている。少女から貰った青い健康祈願のお守りと、つがいの片割れである金のハートと、グラハムが彼女に手渡したつがいの片割れである青いお守りが揺れる。ついていた鈴が、澄んだ音色を奏でた。

戦況を分析するかのような面持ちである。もしくは出撃前の横顔だ。狂氣的なまでに真剣なその様子に、全員が言葉を失ってしまう。

何か発言しようにも、誰一人言葉を発せなかった。グラハムから発せられる何かが、それを押さえつけているかのようだった。

なんだか居心地が悪くなってきた。ハワードとダリルが困った様子で顔を見合わせ、エイフマンが悩ましげにため息をつく。ビリーは困惑した眼差しをクーゴに向けてきた。クーゴは首を振る。グラハムに何があつたかなんて、言えるような状況じゃない。

見当はついている。グラハムも、クーゴと同じなのだと。

けれど、それを言うのは、自分のことを話すこと以上に憚られた。ややあつて、グラハムがこちらに向き直った。普段と変わらない笑みを浮かべている。不気味なくらい、いつも通りだった。

「特筆すべきことはないよ。近々、彼女と顔を合わせる予定があるだけさ」

「そうなんですか。頑張ってくださいね！」

「報告、期待してますよー！」

それを聞いて安心したのか、ハワードとダリルが表情を緩めた。

エイフマンとビリーも安心したように微笑む。

対してクーゴは、全然安心できなかった。

何とも言えない寒気がする。

それは多分、自分も同じなのだろう。

「映像、出ます」

丁度いいタイミングで、情報担当者が声をかけてきた。

モニターが開き、映像が映し出される。

「なんだ？ あの装備は」

「資料に無^ねえぞ」

驚きの声を上げたのはハワードだった。それに触発されたかのよ

うに、ダリルが鋭い眼差しで資料と映像を見比べる。

「もしかして、新武装か？」

「おそろくはな」

クーゴの予想を肯定したのはエイフマンである。彼は食い入るようにしてモニターを睨みつけていた。

ガンダムたちには新たな武装が追加されていた。白と青基調のガンダムには長短のブレード、白と緑基調のガンダムにはスナイパーライフル、純白のガンダムにはアームに装着されたチャクラムが目につく。

そういえば、純白のガンダムが背負う大きな輪のデザインが少し変わったように思う。前に対峙したときは、輪に宝石のようなものをつけていなかったはずだ。もしかして、あれも新しい武装の1つなのか。

「このタイミングで追加したとなると……」

「ソレスタルビーイング。本気と見た」

クーゴの言葉を引き継ぐようにして、グラハムが小さく呟いた。彼の眼差しは、白と青基調のガンダムに注がれている。

無意識か否か、彼の右手は、端末についていたお守りたちを強く握りしめていた。翠緑の瞳は、白と青基調のガンダムから一切目を逸らそうとしない。

グラハムの口が動いた。言葉は吐息に紛れて聞こえなかったけれど、彼は確かに意中の少女を呼んでいた。矛盾を孕んだ祈りがこめられている。

クーゴは純白のガンダムに視線を移した。あのガンダムに、もしかしたら『エトワール』が搭載しているのかもしれない——そう考えると、目を離せなくなる。

もしも『エトワール』がああ機体に乗っているとすれば。この

戦いであの機体に何かが起きたら、ヘタをしたら二度と『エトワール』と顔を合わせることもなくなるのだ。

クーゴは思わず端末を握り締める。彼女から手渡されたつがいのお守り——金色のハートについた鈴が、澄んだ音を鳴らした。音を耳にするたびに、酷く焦燥を感じる。

(『エトワール』……)

決着をつける、約束の日を思い出す。

日付から推察するに、おそらく、ソレスタルビーイングの作戦が終了してしばらくした後を想定したものだろう。あくまでもそれは、『エトワール』がソレスタルビーイングの関係者だった場合の話である。

もしかしたら、ただ単に、丁度その日が大丈夫だからなのかもしれない。クーゴの杞憂だったのかもしれない。あくまでもそれは、『エトワール』がソレスタルビーイングと関係のない一般人だった場合の話だ。

顔が見たい。

声が聞きたい。

話が聞きたい。

『エトワール』に、会いたい。

胸を焼き焦がすような不安に駆られて、クーゴはモニターを凝視する。ガンダムたちはそれぞれ、武力介入を開始した。

ソレスタルビーイングの介入行動はまさしく正確無比。まるで機械のようだ。ガンダムとパイロットたちが歯車として、介入行動を形成している。

焦燥を持って余すように、クーゴはじつと純白のガンダムを見つめていた。舞うように戦うガンダムを、『エトワール』を連想させるようなステップを踏む純白の機体を、ただただ見つめ続けることしかできなかった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

21. 確信

画面を見つめる。

ガンダムたちは、恐ろしく的確に武力介入を行っていた。

グラハムの視線は白と青基調のガンダムに釘付けた。どこかハラハラした様子で、ガンダムの戦いを見守っている。

クーゴはそれを視界の端に留めつつ、純白のガンダムの動きを見つめていた。緑の輪を纏ったガンダムは、縦横無尽に戦場を舞う。

5機のガンダムは各々で戦闘を行っている。1対複数でありながら、ガンダムは圧倒的な性能と新武装で、AEUおよびモラリア軍を圧倒していった。

(まるで、AEUとモラリア……および、PMCの行動を把握してるみたいだ)

正確無比な動きを見て、クーゴは感嘆する。機械のように正確な戦術だ。いつ見ても思うのだが、ソレスタルビーイングには優秀な戦況予報士とバックアップがついているらしい。

そこまで考えてクーゴは気づいた。何故自分は、ソレスタルビーイングの戦い方に『戦況予報士だけではなく、別のバックアップがある』と思ったのだろうか。

脳裏に浮かんだのは、どこかの宇宙だった。大量に出現した虫の群れ、創られた人間を乗せた特攻用兵器、人間に愛想をつかしたイマージュが、こちらへと襲い掛かってくる。

笑い声が出た。その声のする側には、大きな衛星のような物体が見える。衛星のように見えるものの正体は、巨大なコンピューターだ。その名前は、何という名前だったのか。

それこそが、ソレスタルビーイングの『別のバックアップ』を果たす要であった。今は逆に乗っ取られ、敵の支配下にある。特攻兵器を生み出し稼働させ続けている――。

その光景が虚憶きよおくであることに気づいたとき、視界の端に映ったグラ

ハムの横顔に驚愕が見えた。

「——っ!？」

グラハムが大きく目を見開いた。彼の視線を辿る。白と青基調のガンダムが、AEUイナクトに押されていた。

いつぞやの新型お披露目発表会で見た機体^{もの}とは、機体の色や動きが全然違う。

新型発表会で見たイナクトは若草色の機体であったが、今回の機体は紺色に近い緑だ。力押しで派手な動きを好むコーラサワーとは違い、パイロットは手段を問わず確実に相手を追いつめる。正規軍人のようなコンバットパターンではない。戦争を生業とし、それ故に、己の思うがままに暴力を振るっているように思えた。

機体はイナクトのチューンナップ。但し、パイロットは正規軍人ではなく傭兵が乗っている。しかも、そのパイロットは戦いを楽しんでいる節があつた。行動原理は単純、『戦うために生まれ、戦いをまき散らすために力を振るう』といったところか。いつぞやのインベーターと同じ自給自足理論が成り立っている。

特徴的な笑い声があった。戦争だ、戦争だ、と、しきりに叫んでいる。生業だから強いのではない。楽しくて仕方がないから強いのだ。壊すこと、奪うこと、踏みにじること——そのすべてが、イナクトを操るパイロットの存在理由。画面で見ているだけなのに、クーゴにはパイロットの心が『見える』。

だだっ広い焼野原。戦場には死体の山が築かれている。血塗れの斜陽が目痛い。

搭乗機体の色とは完全に正反対だ。緑や青を連想させるような光景なんて存在しない。

穏やかで優しい色とも無縁の人生を送ってきたのだろう。今まで、これからも。

「なんだ、あのMS部隊？ 見たことのない機体だが」

「人は乗っていないようだ。人工知能搭載型の無人機……PMCの新型兵器だったな。確か、M^{モビルドール}Dとかいう」

ハワードとダリルが画面を見ながら首を傾げる。彼らの視線は、純白のガンダムが映し出されている部分に向けられていた。

黒く丸い物体を大量に背負った赤いフォルムの機体と、大きな盾とライフルを背負った青いフォルムの機体がガンダムに攻撃を仕掛けていた。純白のガンダムは攻撃を躲しながら、舞うような戦術スタイルを崩さない。宝石がMDを追尾して攻撃を仕掛け、アームに取り付けられたチャクラムがMDを次々と切断していく。

防御と白兵戦を得意とする赤い機体と、超火力を誇る遠距離攻撃を得意とする青い機体。2種類の機体から繰り出される攻撃を避け、ときには攪乱し、同士討ちを誘発させるように翻弄しながら、天女は戦場を駆け抜ける。その動きが、いつもと違う気がした。

普段の戦闘では軽やかなステップを踏むように動くのに、今回は動きが荒々しい。仇敵と対峙したかのように、天女はMDを屠っていく。パイロットの心が『視えた』気がした。機械の決定により、実験動物扱いされたり処刑されたりする人々の姿。それに対して、パイロットが怒っている。

同じなのだ。あのMDの回路は、『敵と認識したものを問答無用で糺り、最終的には処刑する』ように組まれている。

処刑されているのは人間たちだ。軍人だろうと、民間人だろうと、区別なく殺し尽くす姿が『見える』。

(あれが実用化されたら、あんな風に使われるのか)

浮かんだ光景に、クーゴの背中に悪寒が走った。あのMDは、最初から殺戮専用を開発されたのだろう。対象物は、人間であれば何でも構わないということらしい。

ソレスタルビーイング——特にあの純白のガンダムが、率先して破壊しようとする理由がわかってしまった。MDが『製作者の意図する

用途で』野に放たれたら、大変なことになる。

同情するつもりも肯定するつもりもない。だが、あの使用用途だけは頂けない。今すぐ製作者をここに呼んでほしいと、クーゴが思ったときだった。

「情報が入りました。あのMDは、赤い方がメリクリウスで、青い方がヴァイエイトだそうです」

「学習型の自立型思考回路か。しかも、この自立型思考回路は、別の場所に設置されたコンピュータによって統括および管理されるようじゃな。あのMDたちの回路すべてがリンクされており、常時データを収集し、即座に計測を行い、その結果を他のMDに反映させている……。PMCの技術力も恐ろしいものだ」

MDのデータをざっと読み進めたエイフマンが眉をしかめる。いつぞや、ソレスタルビーニングが麻薬畑を焼き払ったときの横顔と似ていた。

彼の隣で情報を読み進めていたビリーが目を見開いた。彼は、弾かれたようにエイフマンを見る。何かを確認するかのようなビリーの眼差しに、エイフマンは険しい顔で頷く。

「これは、クジヨウくんの卒業論文をベースにして、それを発展させたものだ」

「クジヨウは、このことを？」

「おそらく知らないだろう」

教え子の論文が、（確実に『本人に無断で』）戦争をばらまくために転用および応用された——エイフマンにとって、これ程までに許せないことがあるだろうか。ビリーも憤りを感じているらしく、鋭い眼差しでモニターを睨みつけていた。

「……クジヨウは言ってたんだ。『戦争が止められないのなら、戦術で

早期解決を図る。被害を最小限に抑え、人命を救う』って。……MDは、彼女の願いに対する裏切りじゃないか！」

論文作成者の意図するものと正反対の方向に論文が転用される。技術畑の人間であるビリーにとって、これ程までに悲しいことはない。技術者関係の仕事に進んだ親戚のことを思い出して、クーゴは胸が痛くなった。

最初はある程度のパターンで動いていたMDたちが、複雑な攻撃を繰り返してきた。他機と連携を取るようになったり、己を囿にして別の機体にガンダムを攻撃させたりして、純白のガンダムを徐々に追いつめにかかっている。

画面に映し出されていたMDたちがガンダムを取り囲んでいた。MDからは、高周波のようなものが発せられている。頭をかち割らるばかりの勢いで、それが反響した。

一言で言い表すとするならば、明確な殺意。機械には殺意なんて抱けないけれど、クーゴはMDがガンダム——正確には、ガンダムのパイロット——を処刑および抹殺対象と認定したことに気づいた。

ガンダムの動きが鈍る。どこからか、苦悶の声が聞こえた気がした。聞き覚えのある女性の声だ。そう思ったとき、クーゴは立ち上がっていた。自分の目の前に浮かぶモニターに向かって手を伸ばす。

「——えっ？」

ユニオンの軍事基地が、暗転した。上も下も右も左も、真っ暗な空間。瞬きすると、得体の知れないオブジェのようなものが目の前に浮かび上がっていた。

昔のCMで、たらくを模した着ぐるみに入ったマスコットキャラクターがいた。あれにそっくりなフォルムデザイン。但しそのキャラクターと違い、目の前のオブジェに愛嬌はない。

白い陶器を思わせるような外観。美術品の彫刻を思わせるような、麗しくも無機質な表情を浮かべる顔があった。気のせいか、どこかで

見たことのある顔立ちである。

不意に、世界が真っ赤な光で満たされた。

(人?)

オブジェの真正面に女性が対峙している。パールグリーンの髪を簪でまとめた後ろ姿には、見覚えがあった。

沢山のウィンドウ画面が浮かび上がる。そこには、4人の男女が映っていた。テレビドラマのように、場面が次から次に切り替わっていく。

黒髪に赤い瞳を持つ少女と、金髪碧眼の白人男性がじゃれあっている。といつても、ちよつかいをかけているのは男性の方だ。少女は顔を真っ赤にして反論し、反抗し、男の手を振り払う。少女の行動は、どこからどう見ても、羞恥と照れの裏返しであった。

彼らの姿には見覚えがある。それを思い出そうとしたとき、映像が切り替わった。映し出された人物は、黒髪黒目の東洋人。安堵したような笑み、困ったようにため息をつく様子、ぎこちない苦笑、真面目な眼差し、静かな決意に満ちた横顔——色々な表情が浮かんでは消えていく。

あれは、自分だ。『夜鷹』であり、紛れもない『クローゴ・ハガネ／刃金ハガネ空護』その人だ。クローゴはハツとして、女性の方へ向き直る。そのとき、ウィンドウ画面に紫電が走った。女性が頭を抱えて悲鳴を上げる。ばちばちと派手な音が鳴り響いた。

女性は痛みと戦いながら、キツと眦を吊り上げる。紫の瞳には、揺るがぬ決意が宿っていた。

「消させない」

彼女の周りに、青い光が舞い上がる。

何よりも澄み渡ったそれは、荒ぶるように揺れ動いていた。

「この記憶も、この思いも。あんたなんかには、絶対消させない」

画面が切り替わる。『夜鷹／クーゴ』の隣で、頬を薔薇色に染めて微笑んだ女性が映った。

草原を思わせるようなペールグリーンの髪に、澄みきった紫の瞳。櫻を象った銀細工の黒い簪が見えた。その女性は、紛れもない『エトワール』。

その瞬間、クーゴはすべてを理解した。

自分と彼女には、決して避けられない運命が待っていることを。お互いに譲れないものがあるということ。

それでも、確かに自分たちはわかり合えていたのだと。

(ああ、なんだ。悩む必要なんてなかったんだ)

クーゴは本能的に、『エトワール』に向けて手を伸ばした。

(俺はキミの、その思いを信じる。信じるよ、『エトワール』)

伸ばした手が、彼女の手に触れる。それに気づいた彼女がクーゴを見て、笑みを浮かべた。

目に刺さるような痛みを持つ真実から、もう目を逸らさない。どんなに悲しい運命が待っていても、決して逃げたりしない。クーゴはパンドラの箱に手をかける。

『エトワール』の心は、こんなにも優しく温かい。嘘偽りなんてない、等身大の想いがあった。自分が憧れ、救われ続けて、信じ続けている『人の心の光』そのものだった。

「死ぬのが怖くて、恋ができるものかアアアアアアアアッ！」

『エトワール』が、クーゴの手が重ねられた手を前に突き出した。その掌には光が収束していく。

雲一つない空よりも澄み渡り、どんな海よりも深い群青。
荒ぶる青。

先日出会った、『エトワール』と同じ色を宿す青年が零した言葉の意味は、何だったのか。

次の瞬間、世界が青白い燐光に飲み込まれた。一拍遅れて、どこか離れた場所から爆発音が聞こえる。

「——え」

そこは、ユニオン軍の作戦室だった。目の前には、純白のガンダムの戦闘が映し出されたモニターが展開している。MDに囲まれているガンダムの光景は、いつの間にか、MDが全滅している光景に変わっていた。

クーゴの意識が別の場所にあった間に、戦況は完全に変化していた。緑青のイナクトに押されていた白と青基調のガンダムの様子も変わっていったらしい。緑青のイナクトが、盛大に体制を崩していた。無警戒だったところから一撃を叩きこまれたかのような、間抜けな醜態。

ガンダムのパイロットも、イナクトのパイロットも、何が起こったか理解できていない。だが、ガンダムのパイロットはそれを好機だと思ったのだろう。一気に踏み込む。イナクトのパイロットが経験則で躲そうとしたが、また盛大に体制が崩れた。他者からの介入は一切ない。

隣を見る。グラハムが、クーゴと同じように、彼の前に映し出されている戦闘画面に手を伸ばしていた。

映し出されている映像は、もちろん白と青基調のガンダムだ。彼の眼差しは、画面の向うの向う側——他人には見えない／見えるはずのない場所を『視て』いる。

「グラハム？」

「——はっ!？」

弾かれたようにグラハムがクーゴを見返す。彼はしばらく瞬きを繰り返した後、ようやく現実に戻ってこれたらしい。しばし周囲を見渡した後、再びモニターに視線を向けた。

ガンダムとイナクトの力関係が元に戻り、またガンダムが押され始める。何度も何度も切っては結び、結んでは切りを繰り返した後で、2機の動きが止まった。

コックピットハッチが開き、ガンダムのパイロットが姿を現す。青いパイロットスーツに身を包んだその人物は、まだ幼さが抜けきっていない若者である。

丁度、グラハムが好意を寄せる少女と同じくらいの年齢だろう。グラハムが大きく目を見開き、ひゅつと息を飲んだ。翠緑の瞳には、強い確信が宿っている。

MSでの戦いが、パイロットによるリアルファイトに変わるかと思われたときだった。そこへ、白と緑基調のガンダムが援軍に入る。正確無比な狙い撃ちが、イナクトを追いつめていった。さらに援軍として、MDを殲滅し終えた純白のガンダムも飛来する。

3対1という圧倒的不利な状況に、イナクトは撤退することを選んだようだ。緑青の機体が空の向うへ消えていくのを見送り、3機のガンダムは武力介入を続行すべく動き始める。機械のような行動が崩れたのはそこまでで、それ以降は迅速かつ的確な行動が行われていた。



コックピット内には、自分の荒い呼吸が響いている。イデアの体は疲労感で満たされていた。先程のシステムとの戦いで、思った以上に体力を消費してしまったらしい。

古の『同胞』を殲滅するために作り出されたシステムが、どうして

MDに搭載されているのだろう。あのシステムを使われた場合、大半の『同胞』はシステムに耐えきれず死んでしまう。強靱な精神を持っているても、ダメージを受けることは間違いない。

危うく『処分』されるどころだった。生きているということを実感し、イデアは大きいため息をつく。操縦桿を握り締めている手に視線を向ける。その手に重ねられていたもう一つの手の温もりを思い出し、イデアは口元を結んだ。なんだかとても照れくさい。

気を抜くと歌いだしてしまいそうだ。我慢我慢と己に言い聞かせる。周囲を見れば、MD部隊は跡形なく殲滅し終えてしまったらしい。そこまでの威力を発揮するつもりなんてなかったのだが、『彼』が傍にいたおかげで威力がブーストしてしまったのだろう。

「恋する女は強い」とは、敬愛するグラン・マの格言であった。

MD殲滅を成しえた一番の理由は、彼女の言葉通りのものだと言えよう。

(でも、AEUとモラリアおよびPMC連合軍からしてみれば、『現実離れしすぎた光景や状態を目の当たりにして、自分が実際に見た光景すら信じられないでいる』状態よね)

21世紀初頭のネットスラングにも、これを意味する単語が存在していたはずだ——なんて、現実逃避に走っても意味がない。自分を取り囲んでいたMDを、『能力を発現』させたことにより、一撃で殲滅してしまったのだ。本当は地道に倒していく予定だったのに。

システムを撃退した際の余波とはいえ、『彼』のおかげで威力がブーストされたことは事実である。その結果、イデアのスターゲイザーを取り囲んでいたMDが殲滅されてしまったというのも現実である。起きてしまった出来事を変えることはできない。

「イデア、大丈夫？」

「平気です、スメラギさん。次のプランを——」

スメラギからの問いかけに答えたとき、イデアは直感した。『今すぐに、刹那の元へ向かわねばならない』と。

「すみません、ちよつと単独行動します！」

「ちよつと!?! 待ちなさい！」

余計なものをシャットダウンするかのようには、イデアは操縦桿を動かした。スメラギが何かを言ったようだが、気にしない。スターゲイザーは加速し、刹那のエクシアが戦っているポイントへ急行する。

刹那のエクシアが戦っていたポイントが見えてきた。ロックオンのデユナメスが、緑青のイナクトを追いつめている。相手も馬鹿ではなかったようで、スターゲイザーの飛来を察知したイナクトは撤退していった。

イデアはスターゲイザーを着地させ、刹那とロックオンに声をかける。次の瞬間、スメラギの呆れた声が通信機越しに響いた。これは、戻ったら確実に説教が待っていそうだ。話もそこそこに、3機のガンダムは空へと向かう。

武力介入の再開だ。MDやAEU・モラリア・PMC連合軍を、それぞれがそれぞれのポイントで撃破していく。

『ティエリア。刹那とイデアがまたやらかしたようだよ。後者はちよつと、周囲の人たちも、何が起こったのかよくわからない』けど』

『黙っている。人と話す気分じゃない。……あの女どもはやはり、ガンダムマイスターとしての自覚も足りなければ、そう名乗るに値しない存在だ……!』

別ポイントで戦う、アレルヤとティエリアの声が聞こえた。特にティエリアは、怒りのボルテージが鰻登り状態にあるらしい。確実に説教が待っている。普段は彼の物言いに反論するのだが、かすかな変化を感じてイデアは目を見開いた。

ティエリアの思考回路で、至上に位置するのはヴェーダである。その采配で選ばれたのがガンダムマイスターだ。これまで、アイデアや刹那やアレルヤがミッションプランを多少無視して独断行動を取っているけれど、ヴェーダはそれに関して「クビにすべき」という判断を下していない。

ヴェーダが「コイツはクビにした方がいい」と判断したなら、ティエリアはその人物を容赦なくマイスターから外すように突つかかるだろう。表立ってそうしないのは、ヴェーダが「クビにすべき」というプランを示していないためだ。むしろ、「抱え込め」「手放すな」という方針である。

つまり、ティエリアの『ガンダムマイスターとしてなっていない』という憤りは、彼自身の感情および思考回路に他ならない。ヴェーダの代弁者というあり方を地でいく——しかもそれを至高と想っていた彼が自我を持ち始めている。

方向性はともかくとして、それはいい変化だとイデアは思っていた。最終的に、その自我が、本当の意味での『ティエリア・アーデ』のアイデンティティ形成に繋がってくればいいのだが。

(最初は『システムの申し子』だと思ってたけど、人間らしいところがあるじゃない)

方向性は間違っていると指摘されるかもしれないが、イデアのやり方は間違っていないかったのだ。確信を持ってそう言える。

元々は、別の虚憶きよわくを持つていた少年に見せてもらった内容を再現したものだ。後輩に喧嘩を売られた鉄仮面エリートは、人生で初めて『怒り』と『対抗心』を燃やしたという。感情に任せて、彼は後輩を殴り飛ばしてしまったそうだ。

後に青年は、機械から命令を受けて後輩を手にかけるのだが、その瞳には、生まれて初めての『悲しみ』や『涙』が浮かんでいたという。後輩との一連の出来事が、人類側の指導者となった男が最期に下した判断に大きな影響を与えたことは確かだった。

もちろん、彼の判断に大きな影響を与えた人物は他にもいる。同級の生の親友と、自分の左腕として忠義を果たした異端者の部下。彼らとの心の触れ合いが、男の歩む道を決めたと言っている。未来への礎を築き、わかり合えた戦友と共に地下へ消えた男の一生を思う。

彼は、最期まで自分は独りだと呟いていた。自嘲気味な笑みを浮かべ、寂しそうに。

そんなことはないよ、と、今なら言ってくれる相手がいる。それはとても、幸せなことだ。

「……さて、最終段階。最後まで気を抜かず、頑張らなきゃ」

閑話休題とばかりに、イデアは操縦桿を動かした。このミッションが終われば、短い休暇が入る。

そして、『夜鷹』との——クーゴとの、ある種の決着をつけなくてはならない。そのためにも、生き残らなくては。

銀河の乙女たちが歌っていた歌にも、生き残りたいと強く訴える歌詞があった気がする。その一節を思い出しながら、イデアはスターゲイザーを駆ったのだった。



(介入スタートから戦線制圧まで、2時間弱か)

先程のデータを改めて見直しながら、クーゴは感嘆の息を吐いた。ガンダムの圧倒的性能もだが、戦術を仕切る面々の腕前も相当のものだ。MSだけで戦線は維持できない。兵士には指揮官が必要不可欠である。

勝敗を左右するのは、兵士の数や質だけではない。指揮官や参謀が有能であるか否かもかかっている。特に、中国の三国志における策謀

や兵法がそれを如実に証明していた。この指揮官は、戦いを短時間で終わらせることで犠牲を回避しようとしているのだ。

「終わったようだな」

休憩室にやって来たのはエイフマンである。クーゴ、グラハム、ビリーは顔を上げた。

「A E Uは賭けに負けたようです」

「それはどうかな」

グラハムの言葉に、ビリーは俯きながらそう返した。驚いたようにグラハムはビリーを見る。

投入したMSをほぼ全滅に近い形で失い、多くの犠牲者を出した。そのどこに「勝ち」の要素があるのだろうか。

その答えを続けたのもビリーであった。曰く、今回の一件でモラリアはA E Uからの援助を勝ち取ることができるといふ。

ソレスタルビーイングおよびガンダムに対抗するためにも、軍備増強が必要だ。モラリアは国としての成り立ちや特性上、民間軍事企業と密接な繋がりを持っている。A E U軍にしてみれば、民間軍事会社との繋がりが密接になれば、兵器開発及び機動エレベーター開発も進めることができるだろう。

モラリアはA E Uからの援助を受け取る代わりに、国が築き上げた民間軍事企業のパイプをA E U軍に提供する。なんてことはない、いづぞやのユニオンとタリビアの焼き直しだ。どこの政治家もあくどい方法を考えるものである。どうせ泥臭いなら、トレーズの方がまだ責任能力その他が優れていると思うのだが。

ソレスタルビーイングがどんなに戦おうと、戦争根絶という理念からは遠のいていく。今回の件だって、A E Uを軍備増強に突き動かすきっかけを作っただけでしかない。

本当の意味で、ただの一度も勝利はなく、ただの一つも戦果はない。

ソレスタルビーイングの人々は、何を思っただけで戦い続けているのだろうか。

グラハムが俯く。その表情には陰りが浮かんでいた。憂いや悲しみ、および祈りにも似たそれは、誰に向けられているのだろうか。

それにしても、政治家は常に勝者になろうとする生き物のようだ。例外中の例外であるが、最初から勝者以外考え付かないシユナイゼルと作戦パターンが似通っている。世の中にはもつと悪質な奴もいるが。

「政治家は皆、そういうことにはばかり頭を回す奴ばかりなんじゃないか。あん畜生とかあん畜生とかあん畜生とか」

「あん畜生？」

「はい、あん畜生です。……あれ？」

エイフマンの問いに答えた方がいいが、クーゴは言葉を詰まらせた。

あん畜生の名前が出てこない。奴の所業には、絶対に忘れられないインパクトがあったのに。

「ああ！ 外部独立部隊をテロリスト呼ばわりしたり、地球を侵略しに来た異星人に寝返ったり、作戦のどさくさに紛れて外部独立部隊を核兵器ミサイルで殲滅しようしたり、対話が終わって共存の可能性が開けたフェストウムたちに核爆弾を打ち込むことで事態を悪化させたり、囚人を使った特攻兵器を作ったり、虫をインプラント制御で手駒にしようしたり、終いには地球を見捨てて宇宙圏へ飛び出していった挙句、トビカゲⅡサンとゼロカゲⅡサンによって倒された。彼ら“か！”

「ロクな所業をしとらん。そやつは」

合点が言ったように説明するビリーの言葉に、エイフマンはあからさまに顔を顰めた。ちなみにこの所業、すべて『あん畜生が自分の権力を確立させるため』にやったことだ。エゴまみれにも程がある。

奴のせいでクーゴが身を寄せていた部隊はテロリストとして元友軍から狙い撃ちされるわ、グラハムが苦虫を噛み潰すことになるわ、王様の逆鱗に触れたせいで護衛が大変なことになるわ、思い出すだけで腸が煮えくり返ってくる。

グラハムもそのときのことを思い出したのか、苦々しい表情を浮かべた。しかし、クーゴもグラハムもビリーも、いくら考えてもあん畜生の名前が出てこない。己のエゴを果たすために、文字通りの『人災』を巻き散らかした男の名前は何と言っただろう。

あん畜生死すべき、慈悲はない。好き勝手やって来た男の末路は、もちろん、彼のやって来た所業に比例していた。

そこまで考えて気づく。今までの思考回路は、『“あん畜生”死すべき、慈悲はない／＼』の虚憶がベースになっていたのだと。

政治家のやり方を見て、虚憶を連想したのだ。所業ならいくらでも挙げられるのだが、やはり名前が出てこない。

グラハムやビリーも、それが虚憶の出来事だと気づいたようだ。だが、あまりにもインパクトが強かったようので、話題は切り替わらなかった。

「そういえば、『カタギリ』氏が彼と対談してたな」

「ああ、確かに。相当イライラしていたな、『カタギリ』が。あんなに笑顔が引きつった『カタギリ』を見たのは初めてだった」

『グラハム』の場合は、出撃しなきゃいけない有事に出撃を差し止められたもんね。あんなに悔しそうな『グラハム』を見たのは初めてだったよ」

あん畜生の横暴を思い返し、2人は深々とため息をつく。煮え水を飲まされた者同士、その気持ちはよく分かった。

虚憶のことをよく知らないエイフマンだが、ビリーが挙げた所業を考えて察したのだろう。苦労ようにクーゴたちの肩を叩いた。

閑話休題。

「悲しいな」

エイフマンは静かに呟いた。彼の言葉に惹かれるように、クーゴたちはエイフマンを見上げる。

「どんな華やかな勝利を得ようと、ソレスタルビーイングは世界から除外される運命にある」

「プロフェッサーは、彼らが滅びの道を歩んでいるとお考えですか？」

グラハムは真剣な表情で、エイフマンに問いかける。酷く鬼気迫った眼差しに、クーゴは彼の中に燦る感情が伺えた。

彼の問いかけに、エイフマンは振り返った。緑青の瞳が鋭く光る。

「まるで、それを求めているかのような行動じゃ。少なくとも、わたしはそう見える」

彼の見立てに、ますますソレスタルビーイングの考えがわからなくなる。憎しみを束に集めて、己に背負わせて、彼らは何をしようとしているのだろうか。その果てにあるのは、エイフマンの言葉通り『破滅』だ。

脳裏を翔けたのは、1人の少女。核爆弾のスイッチを押して、罪と憎しみを背負うことを選んだ彼女は、憎しみの象徴になろうとしていた。人々が明日を掴むために、大切な兄のために、自分にできる方法で戦おうとしていた。

それだけではない。人類の業を背負い、それと向き合い、戦おうとした男たちもいた。彼らの名前を、クーゴはよく知っている。トレーズ・クリシュナーダとゼクス・マーキス——ミリアルド・ピースクラフト。

もしかして、彼らが戦おうとしている相手は——人の心に潜む『業』なのか。

業を討つために、業を重ねる。矛盾ではあるが、それが一番有効な

手立てだ。

「彼らが本当に戦っている相手は、人類の業そのものなのかもしれないね。……業と戦い、己の敗北という形で勝利した人とよく似ています」

「トレーズ閣下と、我が友ゼクスか」

クーゴの言葉にグラハムが反応した。どこか沈痛そうな横顔に、クーゴは目を留める。

ソレスタルビーイングに所属する『エトワール』もまた、破滅へと突き進もうとしているのか。

彼女の表情がフラツシユバックする。人類の業なんて、大それたものとは無縁そうな女性なのに。そういえば、時折見せる横顔は強い意志を宿していた。アンバランスなくらい、凜としていた。強い人だと思っていた。

クーゴは懐にしまった端末に視線を向けた。お守りについた鈴が、澄んだ音を鳴らしたような気がする。そのとき、端末が鳴り響いた。メッセージの送り主は、件の『エトワール』。その文面は、たった一文。

『助けてくれてありがとう』

助けた？ はて、自分は何をしたのだろうか。

そこで、クーゴは息をのんだ。MDが殲滅されたときの光景。

変なオブジェが『エトワール』を殺そうとしていたときの光景だ。

あのとき、自分はただ、彼女に手を重ねただけである。青い光が爆ぜて、それで。

タイプ・ブルー 荒ぶる青。頭の中で、その言葉がぐるぐると反響する。たった一度、彼女とよく似た色を持つ青年が言った言葉だ。どうしてその言葉が頭から離れないのだろう。忘れてはいけないと警笛が鳴り響いている。

ふと、クーゴは視線を向けた。グラハムは俯いたまま何も言わな

い。その表情には陰りが浮かんでいた。憂いや悲しみ、および祈りにも似たそれは、『エトワール』同様、破滅へ向かおうと突き進む誰かに向けて贈られたものなのだろう。

「すみません、クーゴ・ハガネさんですよね？」

話しかけられて顔を上げた。そこにいたのは、先日「吐瀉物（中略）事件」の加害者である青年だ。彼の手には、紙袋が握りしめられている。

「先日はどうもすみません。上着とハンカチやタオル類を洗い終えたので、届けに来ました」

「わざわざ届けに来てくれたのか。ありがとう」

青年から紙袋を受け取り、クーゴは礼を述べた。そのとき、エイフマンがひゅつと息をのむ音が響いた。

何事かと振り返る。エイフマンは青年をじっと眺めていたが、平静を保とうと努めるような声で青年に問いかける。

「すまんが、キミの親戚で、ライヒヴァイン家に入りにいた人はいなかったか？」

青年がぴくりと眉の端を動かした。笑みを浮かべた口元が、ほんのわずかだが引きつる。

不自然な間が入った後で、青年は声を固くしながら答えた。

「いいえ。存じ上げませんが」

「そうか。……すまないね。60年程前のことだから、わしの勘違いかもしれない」

青年の返答を聞いたエイフマンは、悲しそうに苦笑する。

以前、彼から『60年前に亡くなったお兄さんの存在』の話を聞いていたクーゴたちはすぐに察しがついた。この青年は、『60年前に亡くなったお兄さんの存在』の人物の関係者にそっくりなのだろう。自分たちの眼差しに気づいたエイフマンは、肯定するように頷いた。その話を聞いた青年は「面白い偶然があるものですね」と笑っていた。しかし、その笑い方に違和感を覚えたのは何故だろう。焦りと罪悪感が滲んだような、どこかぎこちない笑い方だった。エイフマンはそれに気づいていないらしい。

青年はしばし視線を泳がせた後、ふと時計に目をやった。時間を見て苦い表情を浮かべたあたり、他に用事があったことを思い出した様子だった。彼はクーゴにぺこりと頭を下げ、足早に廊下を駆けて行った。その背中を見送る。

何の気なしに、クーゴは窓の外に視線を向けた。

青空の向う側からは、鉛色の曇天が近づきつつあった。



その感情に、名前を付けるとするならば。

(嫉妬ね。それに間違いないわ)

フェルトとクリステイナから貰ったエクシアの戦況データを何度も何度も見直しながら、アイデアはニマニマ微笑んでいた。先程からもう、頬が緩みっぱなしである。画面には、明らかに動きのおかしいA EUIナクトが映し出されていた。緑青の機体は出所不明の攻撃に翻弄されている。

でも、アイデアには合点がいった。淡く光る青が、感情のままに力を発現させている。おそらく、力を発現させている本人ですら無自覚だろう。周囲の人間も、アイデアがMDを殲滅したときと同じ状況にあ

る。この映像を何度見直しても、皆、首を傾げることは間違いない。

犯人はイデアではないし、この場に居合わせたガンダムマイスターでもなければトレミークルーの誰かでもない。むしろ、ソレスタルビーイングの人間ですらないのだ。答えを知っているのはイデアだけだろう。あるいは、この映像を『同胞』の誰かに見せれば一発で看破できる。

犯人にこの映像を見せて、その力の源を教えたら。

その人物はむっとした顔をして、「自分はそこまで女々しくないと
言い放つのか。

もしくは、「これも愛の苦しみさ」と開き直るだろうか。どちらにしろ、教える日が楽しみである。

『ねえ、あれ。……どうしよう?』

『あの顔、新しい獲物を見つけた目だ!!』

『ああ、ぐ愁傷様……』

『興味がない』

ふと聞こえた思念を辿って、イデアはゆつくりと視線を向ける。そこにいたのは、イデアを除くガンダムマイスター——アレルヤ、ロツクオン、刹那、テイエリアであった。顔を見合わせ、アイコンタクトを取っている。

映像の余韻に浸りながら立ち上がると、4人はびくりと肩をすくませた。

イデアが1歩近づくと、4人は3歩ほど後ろに下がる。どうやらイデアに近づいてほしくないらしい。

「ちよつと。なんで皆、私から距離を取るのよ」

「……それは、お前さんが一番よく知ってるんじゃないか?」

イデアが頬を膨らませる。ロツクオンは苦笑しながら、控えめな声でそう言った。

刹那とアレルヤがうんうん頷き、テイエリアは軽蔑の眼差しを向け
てきた。イデアはさらに頬を膨らませ、また一步踏み出す。

しかし、4人はささつとまた後ずさった。そのやり取りを何度も繰
り返す。いつの間にか、4人は波打ち際に追いつめられていた。

『みんな、ナカヨク。みんな、ナカヨク』

そんな自分たちのやり取りを見かねたのか、ハロが飛び出してく
た。自分たちを仲介しようとしているのだろう。

毬のように弾むその姿は、トレミーのマスコットと称される程可愛
らしい。そして、健気な様子が愛嬌と人間らしさを垣間見せている。

しかし、そんなハロに悲劇が降りかかった。

『ア—!』

「ああっ!？」

「ハロ!？」

波打ち際を飛び回っていたハロが、そのまま波に浚われてしまった
のだ。ロックオンが慌てて海に突撃しようと踏み込む。波の音にま
ぎれて、水しぶきが跳ねる音が響いた。

イデアは即座に手を伸ばす。波が浜辺に打ち上げられる勢いに合
わせて、己の力を発現させた。ハロは波の勢いに乗り、ロックオンの
足の間をくぐり抜け、波打ち際に帰還する。

ずぶぬれになったハロに向かって手を広げれば、ハロはイデアの腕
にすっぽりと収まった。防水対策は万全であるが、万が一に備えてお
くに越したことはない。

ロックオンが安堵したように苦笑する。相棒が波に浚われてし
まったら、情報漏えいの危険性があつたのだ。

それを危惧するテイエリアがしかめっ面をしていたが、イデアに見
られていることに気づくとそっぽを向いた。

「リリースキヤッチ」

『カエツテキタ、カエツテキタ』

「うん。おかえりハロ」

『タダイマ、タダイマ。タスカッタ、タスカッタ』

ハロはぱたぱたと耳のカバーを上下させた。そして、イデアの腕から飛び出し、ロックオンの元へと戻っていく。
が。

『アー!』

「またかよ!?!」

ロックオンが波打ち際にいたのが悪かったのか、また波に浚われてしまったのだった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

2.2. 世界は愛に満ちている

決戦の日が来た。端末の日付を見て、クーゴは重々しく息を吐いた。答えは決まっているが、移動中だとそれを考えては不安になってしまう。

時間というものはやっかいで、無ければ無いで大変なのだが、あればあったで困りものだ。人間というものは本当に厄介な生き物である。

答えを出したにも関わらず、時間が経過するとまたウジウジ悩んでしまう。それでも、クーゴは答えを変えるつもりはない。

クーゴが本当の意味で恐れているのは、『今まで』を失うことだ。『エトワール』や少女、およびグラハムと過ごす日々が終わってしまうことだ。

自分やグラハムの出す答えと、『エトワール』や少女が出すであろう答えによつては、その日々は永遠に失われることになるだろう。

日本へ向かう飛行機の中は、空席が見当たらない。日本旅行客や日本へ戻る人々で埋め尽くされている。日本に思いを馳せる者、ビジネス関連のことで端末を操作する者等、様々であった。

「しかし、お前もお前で、決着をつけようとしてたとは思わなかったよ」

「おまけに、同じ日に同じ国の同じ街が待ち合わせ場所に指定されているともな」

クーゴの隣の席に座っていたのは、礼服用の黒いスーツに身を包んだグラハム・エーカーその人であった。AEUイナクトのお披露目会で着ていたスーツとは根本的なもの——主に素材やブランド名——が違う。彼もまた、クーゴと同じ意味の『最終決戦』を迎えようとしている。

そのはずなのだが、クーゴの経験則と色眼鏡のせいか、どこからどう見ても『恋人にプロポーズをしに行く男』にしか見えない。そもそ

も彼は、彼女と恋人関係だったのだろうか？ つがいのお守りを贈りあったり、誕生日プレゼントを贈りあったりしていた点からすれば『事実上』と言えそうではあるが。

今までのやり取りを思い返すが、グラハムが少女にちよっかいをかけるのはいつものことであつた。熱烈なラブコールを贈つていたのは事実であつた。最初のうちは嫌がつていた少女が、顔を真っ赤にして震えながらも、彼の告白に応え始めたのはいつからだつたか。

そこまで考えてクーゴは気づいた。恋人同士という関係性が、グラハムと少女の間に成立してしまつていたことに。

明確な話を聞いたわけでもないし見たわけでもないけれど、でも、成立はしている。2人の間には、確かな絆が存在していた。

おかしいところなんて何も無い。ただ、そのプロセスが色々アレだつただけで、世間一般的に見れば何もおかしくなかつた。

おかしいのは一体何だろう。クーゴは真面目に考えてみたが、答えは出ない。

考えれば考えるほど頭が痛くなつてきた。そのうちクーゴは考えるのを止めて、目を覆う。

「……待機時間や移動時間つて、こんなに苦痛だつたんだな」
「違うない」

クーゴの零した言葉に従うように、グラハムが頷いた。翠緑の瞳は、どこか遠くに向けられている。

青い空の下に広がる雲海をかき分けるようにして、飛行機が着陸態勢を取つた。機内のアナウンスが鳴り響く。

覚悟はできた。前を向いて、かけがえのない人々と向き合いに行く。クーゴはシートベルトを確認しながら、大きく息を吐いた。

*

グラハムと別れて、クーゴは待ち合わせ場所にたどり着いた。日本

の繁華街にある、小さな喫茶店。店の前で佇む女性を見つけ、クーゴは足を速める。

パールグリーンの長い髪を簪でハーフトップに束ねた『エトワール』。彼女は白いレースが編み込まれたハイネックノースリーブの上着を着て、水色から空色グラデーシヨンのマキシスカートを穿いていた。

彼女はクーゴが来たことに気づいたようで、少しだけ固い笑みを浮かべた。何かを覚悟したような横顔。『エトワール』もクーゴと同じように、今回の顔合わせは「決着」をつけることになるかと気づいていたようだった。

「それじゃあ、店内に行きましようか」

「そうだな。立ち話も何だし」

『エトワール』に促され、クーゴは喫茶店へと足を踏み入れた。店内は木材を多く使っているためか、とても暖かい印象を受ける。

お昼より早い時間帯ではあるが、少し早いランチタイムや休憩等で利用している客が多いのだろう。特に今日は休日だ、賑わうのも当然だと言えた。

「よく来たな、俗物め。迎撃する！」

「その言葉使いはダメだって言ってるじゃないですか！ 銃をしまってくださいー！」

次の瞬間、赤い髪の女性店員からいきなり銃を突き付けられた。反射的にクーゴは無手で構えるが、彼女の攻撃は水色の髪の女性店員によって阻まれる。

店員が客に攻撃を仕掛けようとしていたのに、客の反応は薄かった。反応があつたとしても、そこに驚きや困惑はない。皆、いつものことだと流している。

むしろ名物として楽しんでいる節もあつた。客の大半が常連のよ

うで、客同士や店員同士も顔見知りらしい。BGMと相まって、和やかな雰囲気店内に漂っている。

「ハルノは相変わらずだな……」

「大丈夫だハルノ。そういう路線だつて人気がある」

「ありがとうございます、悠さん。この調子で頑張ります」

カウンター席に座っていた緑の髪の少年が遠い目をし、茶髪の青年が赤い髪の女性をフォローしていたのが見えた。

水色の髪の女性が案内してくれた席は、店内でも奥まった場所にあった。壁際の席であることも相まって、一種の個室みたいになっている。

ここなら、話をするのにうつつつけだろう。人に知られたくないことなら、尚更だ。

クーゴと『エトワール』は向かい合うようにして席に座った。お互いがお互いから顔を逸らさない。周囲の明るい話し声やBGMが遠く響く。2人の間には沈黙が広がっていた。

何を言えればいいだろうか。話題の切り出し方が分からない。気づいたら、クーゴの手の平が汗まみれになっていた。もう、本当にどうすればいいだろうか。

ちらりと彼女を伺えば、『エトワール』もクーゴを伺い見ている。互いの身長差は9cmであるが、酷く威圧感と言うか、何と言うか、異様な空気が漂っている。

「……………」

「……………」

沈黙。

覚悟は決めたが、やはり、怖いものは怖い。喉がカラカラになってきたので、振り払うようにしてお冷に手を伸ばした。一気に飲み干す。それでも、焦燥と渴きをやり過ぎることはできなかった。

クーゴは深呼吸した。いつぞやの出来事で『エトワール』の心に触れたことを思い出す。あるとき触れた温かな光は、クーゴが信じ、救われてきた『人の心の光』そのものだ。あの輝きには、一切の嘘偽りはない。

それでも、逃げたいと心が叫んでいる。逃げて、逃げて、逃げて、そのまま逃げ延びてしまいたい。弱い自分が悲鳴を上げていた。

クーゴはもう一度深呼吸する。『エトワール』が持っている心の輝きを信じたい。それを信じると、確かに選んだのだ。

運命に向き合う。運命を受け入れる。だけど決して諦めない——それが、クーゴの出した『答え』であり、『決着』なのだから。

「……俺は、キミを信じるよ」

絞り出すようにして、クーゴは言葉を紡いだ。言ってしまうえば、何てことはない言葉だった。言えなくて悩んでいた自分が馬鹿らしくなる程に。

『エトワール』は大きく目を見開く。祈るように組まれていた彼女の手が、かすかに震える。紫苑の瞳は、まっすぐクーゴに向けられていた。

「いいんですか？」

『エトワール』の問いに、クーゴは頷いた。

「キミがたとえ何であつても変わらない。すべてを知った上で、俺はキミを信じる」

『エトワール』は、震える声でクーゴに問うた。

「私を捕まえないんですか？」

「ここにいるのは、ただの一般人だよ。ユニオン軍所属の中尉でもな

く、ソレスタルビーイングに属するガンダムのパイロットでもない。
……だから、その話は無意味だ」

己の答えを静かに告げて、クーゴは『エトワール』の手に自分の手を重ねた。

彼女の肌は雪のように白いけれど、その手には温もりが通っている。いつぞや手を重ねたときと同じだ。

「キミも、そのつもりでここに来たんだろう？」

「……そうですね。そのつもりで、ここに来ました」

『エトワール』は柔らかく微笑んだ。いつもと変わらない、春を思わせるような笑みだった。彼女の笑顔につられて、クーゴも微笑む。

甘いと言われても、馬鹿にされても、クーゴはこの選択を後悔しないと決めたのだ。『エトワール』と出会ったことも、『エトワール』と笑いあったことも。

いずれ、自分たちは空／宇宙そらで対峙する日が来るだろう。この道を選んだことで、おそらく、幸福を失うことに繋がる可能性だってある。そのとき、自分は。

「貴方のままでいてください。私を信じ、私が信じた、貴方のままで」

『エトワール』は静かに語った。紫の瞳は、まっすぐクーゴを映し出している。その言葉に込められた意味は、『エトワール』から『夜鷹』へ／女性からクーゴへ向けられた想い。

彼女は言っている。歌い手仲間である『夜鷹』として、ユニオン軍に所属するフラッグファイターであるクーゴ・ハガネとして、『エトワール』および女性の前に立っていて欲しい、と。

それが女性の願い。そうして、彼女自身も “そう” あること——それが『エトワール』の決意なのだ。クーゴも、彼女の決意に応える。約束する、と宣言すれば、『エトワール』は嬉しそうに微笑んだ。花

が満開になったような笑みに、心が温かくなった。

自分たちは決着をつけた。その事実を噛みしめた途端、クーゴの胃が大音量で悲鳴を上げた。『エトワール』がゆるりと目を細める。

バツが悪くなり、クーゴは懐から懐中時計を取り出して時間を確認する。丁度お昼だ、腹が減るのは当然だと言えよう。

何か食べるかと『エトワール』に問えば、彼女は嬉しそうに頷いてメニューを確認する。クーゴもそれに続いて自分の食べ物を選んだ。

店員に注文する。お冷のお代わりを継ぎ足して、青い髪の女店員はカウンターへと去っていった。心なしか、彼女も嬉しそうにしていたように思う。

「……なあ。キミは、既に知ってるとは思うんだが」

料理が来るまでの間、手持無沙汰だ。

クーゴは『エトワール』に対して、囁くように言葉を紡ぐ。

「クーゴ。クーゴ・ハガネっていうんだ、俺の名前」

『エトワール』が目を瞬かせる。

「どうしたんですか？ 急に」

「キミに、覚えていて欲しいと思ったんだ」

クーゴの言葉を聞いた『エトワール』は、紫の瞳を大きく見開く。そして、嬉しそうに微笑んでくれた。

彼女は何度もクーゴの名前を復唱する。とても嬉しそうなので、手帳を引つ張り出し、紙に名前を書いて手渡す。

昔、グラハムに名前を教えたとき、漢字でクーゴの名前を書いて意味を説明したら目を輝かせていたことを思い出したからだろう。

刃金ハガネ 空護クーゴ。メモを見て感嘆の息を吐いた『エトワール』に、クーゴは漢字の意味を簡単に説明した。

『エトワール』はきらきら目を輝かせ、愛おしいものを見るようにメモを抱える。彼女の頬が薔薇色に染まっていた。

丁度いいタイミングで料理が運ばれてきた。出来立てのためか、湯気が漂う。

2人で料理を食べ進めていたときだった。

不意に、『エトワール』が口を開く。

「……アイデアです。アイデア・クピディターズ」

ぽつりと、『エトワール』——アイデア・クピディターズは、囁くようにそう言った。

「それが、キミの名前か」

「ええ。貴方に呼んでほしい……いいえ、覚えていて欲しい名前です」

意味深なアイデアの言葉に、名乗った名前が本名でないことを悟る。しかし、それでも充分だとクーゴは思った。

名前を名乗ろうとせず、ハンドルネームで呼び合っていたことから比べると、相当大躍進した方だろう。

アイデアが自らの名を名乗ったことこそ、クーゴを信じている証なのだ。それが嬉しくて、照れくさくて、クーゴはソフトドリンクを呷った。

カウンター席の方が騒がしい。茶髪の少女店員が、店の裏側から飛び出してきた。服装は乱れていて、焦っていたことは目に見えて明らかである。少女は他の店員たちや常連たちに対して、しきりに何かを尋ねた後、安心したように微笑んだ。そこへ黒髪の青年が来店し、面々の様子を見回しては首を傾げる。何を言っているかはわからないが、とても楽しそうだった。

今頃、グラハムはどうなっているだろうか。

彼なら大丈夫だとは思うのだが、だからこそ、気になった。



赤い瞳に揺れるのは、絶望。

歪んだ瞳から零れ落ちた涙が何を意味するのか、グラハムは本能的に気づいてしまった。

女性は俯いたまま、何も言わない。口を真一文字に結んだまま、胸に渦巻く想いを口に出そうとはしなかった。

「キミは……知っているのか？」

グラハムの問いに、女性は肩を震わせた。普段は冷静沈着、年齢以上に大人びていて、凜々しい横顔を見せる『彼女』からは全然連想できない。年半ばも行かぬ少女のような脆さがあった。自分が愛した少女と酷似している。

時空も年代も所属も違う連合集団。グラハムと『彼女』が所属する部隊のことを考えると、「そういうこと」が起こってしかるべきだろう。実際、グラハムたちが所属している部隊の戦艦はシャ□・アズナ□ルを艦長にして、副官にナ□イ・ミゲ□、操舵にララ□・スン、通信に□マーン・カーン、整備にク□ス・パラヤ、ゲストとしてクワ□ロ・バ□ーナというそうそうたる布陣である。

友人に「こんなにも帰投かえりしたくない母艦ぼしよは初めてだ」と言わせた人は伊達じゃない。ことあるごとに副官、操舵、通信、整備の女性4人がキャットファイトを始め、□ヤアと□ワトロが泣きながら「人事を何とかしてくれ」と指揮官に頭を下げていた。現在進行形で「人員不足その他諸々」で取り下げになっているが、未だに手つかずのままだった。

閑話休題。

『彼女』の様子を見て、グラハムは確信した。自分はいつか、少し先の未来で、愛してやまない少女にそんな顔をさせるのだ、と。

グラハムは、ゆつくりと『彼女』の頬へと手を伸ばした。涙をすくい取る度に、『彼女』は悲しそうに目を伏せる。傷つきボロボロになった心に触れたような気がした。

「止めてくれ」

『彼女』は慌てた様子で——けれどもやんわりとした手つきで、グラハムの手を押しつけた。

「俺はあんたに、そうされる資格はない」

悲痛に満ちた赤い瞳は、『彼女』が過去に起こした／少女が未来で起こすであろう出来事を思い出しているかのようだった。『彼女』は瞼と口を閉ざす。閉じた貝のような頑丈さに、語らないことを選んだ『彼女』の強さを感じ取る。

そこに『彼女』と少女の共通点を見つけて、グラハムは苦笑した。感慨深さと、諦めにも似た境地と、湧き上がってくる愛おしさからだった。その強さも、脆さも、優しさも、頑固さも——『彼女』／少女にまつわるすべてを愛したことを、改めて思い出す。

振り払われても尚、グラハムは『彼女』へ手を伸ばした。自分に対する優先順位が低いところは、大人になっても変わらなかつたらしい。『彼女』が世界を想ったように、グラハムが『彼女』を想っていることを気づいてほしかった。未来の『自分』は、その努力を怠つたのだろうか。

そんなことを考えていたら、『彼女』はふるふる首を振った。そうじゃない、と、はつきり否定する。

お前のせいではないんだ、と、『彼女』は言いきった。お前は悪くない、と、語り掛けるような調子で主張する。

「あんたは最後まで、俺を助けてくれた。人類のために、対話のために、『未来への水先案内人』になってくれた。……愛していると、言っ

てくれた」

だからグラハムは悪くないのだ、と『彼女』は言う。大人になっても尚、『彼女』は優しい。

自分の思いの丈をぶつけることより、グラハムを傷つけないことを優先しているようだった。

もう少し、グラハムに八つ当たりしてくれてもいいのに。そういう意味での信頼は低いようだ。

友人から「落ち着きがないから子どもっぽく見られる」とよく言われる。「だから、頼っちゃいけない大人の代表格に堂々殿堂入りしてしまう」のだと。

頼れない相手だと思われるのは心外である。遠慮されてしまうのも悲しいし、『彼女』に対して何もしてやれないという無力感に苛まれる。けれどもタチが悪いことに、『彼女』が他ならぬグラハムのために心を砕いているという光景に、暗い喜びを覚えてしまうのだ。己は変な趣味を持つてしまったらしい。

システムで再現された仮面の男が、少女と対峙して早々「貴様は歪んでいる」と言われたことを思い出した。少女の言葉通りである。それを見ていた『彼女』もまた、遠い目をしながら敵MSを倒していた。グラハムもいつかはああなるのか、とでも言いたげな眼差しであった。正直、ちよつと悩んでいる。

その話題は柵に上げつつ、グラハムは女性を抱き寄せた。かすかな抵抗を感じたが、そのすべてを封じ込めるように力を込める。『彼女』がひゅつと息をのむ音が聞こえた。

驚くことなど何もない。『彼女』がグラハムを気遣い慮ってくれているのと同じように、グラハムも『彼女』に寄り添いたいと考えている。これはひとえに、『愛』なのだ。

「ふいふ」

不謹慎だとは百も承知。しかし、どうしても笑みを堪えることがで

きなかった。

『彼女』が咎めるような眼差しでグラハムを見上げる。失礼、とグラハムは苦笑した。

相手を不快にさせるつもりは微塵もなかった。ただ純粹に、幸せだと思っただけから笑っただけである。

「……幸せだと、思っただ」

嬉しくて仕方ないはずなのに、グラハムの声は情けないくらい震えていた。27歳とは思えない程、頼りない響きである。

「私は後悔していない。おそらく、キミの知る『グラハム』も、後悔なんてしていなかったと思う」

それでも。

それでも、『彼女』に伝えたいことがあった。

「キミと出逢ったことにも、キミを好きになったことも、キミと戦うことになった運命も、宿命も、すべてを受け入れる。前にも言っただろう？ 『キミと私は、運命の赤い糸で繋がっている』と」

「覚えている。あんたの言うことは一々派手だったからな。忘れるはずがない」

「光栄の極みだと言わせてもらおう！」

グラハムは努めて明るい声を出しながら、『彼女』を抱きしめる手を力を込める。

「どれだけのガンダムが現れようと、私の心を射止めたのはキミ……。美しき光と共に、我が眼前に降り立ったキミだ」

グラハムは『彼女』に告げた。

「誰が何を言おうとも、キミは確かに私の『運命の相手』だよ。……
過去も、今も、そしてきつと——これから未来も」

どこまでも真摯な眼差しで／痛々しいほどの笑顔で／齒に浮くような台詞で／一切の冗談などない響きで、グラハムは『彼女』への愛を紡ぐ。

女性はそれを否定しなかった。照れ隠しの暴力も飛んでこない。ただ、グラハムの言葉に応えるように、『彼女』は背中に手を回し、顔を埋めてくれた。

ようやく観念してくれたらしい。『彼女』は声を殺しながら泣いていた。それでいい、とグラハムは笑う。自分もまた、涙で視界が滲んでいることは言えそうになかった。

この祈りが、届けばいいのに。『彼女』をあやすように背中を撫でながら、グラハムは息を吐く。

『彼女』はこんなにも世界を想っているというのに。
世界はどうしても、『彼女』に優しくしてはくれなかった。



「この世界に、神なんていない」

少女はそう言って、ワンピースの裾を握り締めた。少女の華奢な体からは、拒絶と抑圧の感情が漂っている。

かすかに体を戦慄かせ、少女はぼつぼつと言葉を続ける。体の奥底から絞り出すような声だった。

「俺は、知っていたんだ。最初から。……こうなることも、わかっていた」

赤い瞳に揺れるのは、絶望。

歪んだ瞳から零れ落ちた涙が何を意味するのか、グラハムは本能的に気づいてしまった。

少女の頬へと手を伸ばしす。涙をすくい取る度に、少女は悲しそうに目を伏せる。

傷つきボロボロになった心に触れたような気がして、情けないことに言葉が詰まってしまう。

こんなとき、何と言えばいいのだろう。何と言葉をかければ、少女の痛みを楽にしてやれるだろうか。大人のくせに、何も浮かんでこなかった。

グラハムにできることは、ただ、彼女の愛称で呼びかけることだけ。この少女の名前を知っていたら、少しは違ったかもしれない。

「少女」

「止めてくれ」

少女は慌てた様子で——けれどもやんわりとした手つきで、グラハムの手を押しつけた。

「俺は、あんたにそうされる資格はない」

自身に罰を科すように、少女はきつく目を閉じる。ただひたすら己の咎を責め続ける少女の姿は、あまりにも痛々しかった。自分に対する優先順位が低い傾向があるとは思っていたけれど、それがこの少女のあり方に強く関係しているように思えた。

グラハムは彼女を運命の相手だと信じて疑わないし、彼女のことを心から愛している。だけれども、グラハムは、この少女のことを殆ど知らなかった。名前も、過去も、生い立ちも、知らないことが多すぎる。罰が下されるのを待つかのような少女の佇まいに、胸が苦しくなった。

少女は相変わらず、悲鳴を上げる心を抑え込めて、ただ静かに泣いている。自分の思いの丈をぶつけることよりも、グラハムを傷つけないことを優先しているかのようだった。もう少し、グラハムに八つ当たりしてくれてもいいのに。それくらいのア斐性は持っているつもりなのだが——そこまで考えて、グラハムは否定する。

現に、今だって。

グラハムはすべてを知っている。にも関わらず、心が「理解してはいけない、したくない」と駄々をこねていた。

いつぞや固めた決意の安っぽさに——あるいは己の女々しさに反吐が出る。目の前の少女は、その痛みと向き合おうとしているのに。

もはや手遅れだ、と、赤銅の瞳が嘆いていた。

破滅なんて見えていたのに、と、赤銅の瞳が叫んでいた。

こんなにも愛してしまった、と、赤銅の瞳が悲鳴を上げていた。

嘘偽りない心が見える。ボロボロになりながらも尚、手放したくないと願いつづけて、ひっそりと抱えこんでいた想いが。己を破滅に導くと知っても尚、失いたくないと祈り続けていた想いが。

(キミは……)

信じる対象も祈る対象もないと言う少女が、文字通り『勇気を出して』、信じて祈ったもの。

それは、少女に対して惜しみなく好意を手渡す男の心だった。愛している、好きだと、真正面からぶつかってきた男の心だった。

幸せになる資格がないと悩みながらも、それでも、自分に惜しみなく愛を手渡す相手を幸せにしたいと願った少女の心に触れる。

どうしようもなく、泣きたくなった。

「やはり俺には、赦されるはずがなかったんだ。ありきたりの幸せなんて」

ひどく震えた声だった。

けれど、その言葉は確かに、グラハムの耳／心を強く打つ。

「結局この手は、何かを壊すことしかできない。……あんたを幸せにすることなんて、できるはずがなかった」

少女は口を真一文字に結ぶ。それ以上、胸に渦巻く想いを口に出さうとはしなかった。

(強いな、キミは)

痛々しいくらいの強さが眩くて、哀しくて、グラハムは目を伏せる。自分はどこかで、今の彼女と同じ強さを持っていた女性ひとを見たような気がした。

感慨深さと、諦めにも似た境地と、湧き上がってくる愛おしさで心が満ちる。その強さも、脆さも、優しさも、頑固さも——少女にまつわるすべてを愛したことを、思い出す。

この少女は、決して自分自身おのれを赦そうとしないだろう。たとえグラハムがそれを赦しても、彼女の心に落ちる影は延々と罰を科し続ける。そんなこと、グラハムは望まない。

グラハムは少女を抱き寄せた。かすかな抵抗を感じたが、そのすべてを封じ込めるように力を込める。少女がひゅつと息をのむ音が聞こえた。

「ふふ」

不謹慎だとは百も承知。しかし、どうしても笑みを堪えることができなかった。

少女が咎めるような眼差しでグラハムを見上げる。失礼、とグラハムは苦笑した。

「……幸せだと、思ったんだ。キミに、こんなにも想ってもらえている

とは」

嬉しくて仕方ないはずなのに、グラハムの声は情けないくらい震えていた。27歳とは思えない程、頼りない響きである。

「私は後悔していないよ。キミと出逢ったことにも、キミを好きになったことも、キミと戦うであろう運命も、すべてを受け入れる」

先程、いたいけな少女が、真実の痛みと苦しみに真正面から対峙していたのと同じように。

躊躇い続けていた覚悟はようやく、本当の意味で固まった。そうやってしまえば清々しいものである。

グラハムは少女の頭を撫でながら、ゆっくりと言葉を続けた。

「前にも言っただろう？ 『キミと私は、運命の赤い糸で繋がっている』と」

「覚えている。あんたの言うことは一々派手だったからな。忘れるはずがない」

「光栄の極みだと言わせてもらおう！」

グラハムは努めて明るい声を出しながら、少女を抱きしめる手に力を込める。

「誰が何を言おうとも、キミは確かに私の『運命の相手』だよ。……過去も、今も、そしてきつと——これから未来も」

どこまでも真摯な眼差しで／痛々しいほどの笑顔で／齒に浮くような台詞で／一切の冗談などない響きで、グラハムは彼女への愛を紡ぐ。

少女はそれを否定しなかった。照れ隠しの暴力も飛んでこない。ただ、グラハムの言葉に応えるように、少女は背中に手を回し、顔を

埋めてくれた。

ようやく観念してくれたりらしい。少女は声を殺しながら泣いていた。それでいい、とグラハムは笑う。自分もまた、涙で視界が滲んでいることは言えそうになかった。

この祈りが、届けばいいのに。

少女をあやすように背中を撫でながら、グラハムは息を吐く。

キミが好きだ、と。

告げた声は、情けない程震えてしまっていた。

*

空の色が目染みる。

遠くから、人々の笑い声が響いた。公園の向かい側にある大きな広場で、大規模な催し物が行われている。

普段は人で賑わう公園だが、広場の方へ人が流れてしまったためか、あまり人を見かけなかった。

「落ち着いたか？」

「ああ。すまない」

グラハムは少女にハンカチを差し出す。少女はそれを受け取り、そっと目に当てた。泣き腫らしたせいかわ、目元がほんのり赤くなっている。先程の痛々しい表情と比べれば、幾分か柔らかくなったように思う。

いつか、この少女が穏やかに笑える日が来ればいい。願わくば、その笑みを浮かべる相手の中に、グラハムがいてくれたら嬉しいのだが。高望みはしないと決めていたのに、人間とは変わる生き物のようだ。

昔のグラハムだったら、そんな自分を弱いと非難しただろう。自分の弱さを振り払い、忘れようとした結果が今までの無茶だったのかもしれない。そう考えると、友人や他の面々にはかなり苦勞を掛けたと

言えよう。

しかし、おそらく、その無茶は今後も続くことは確定事項だ。

運命を受け入れた上で、それと対峙することを選んだのだから。

グラハムと少女は、近くのベンチに腰掛けた。穏やかな時間が過ぎていく。ふと時計を見れば、ランチタイムに突入しかけていた。

「そろそろランチの時間だな。今日は私が奢ろう。どうする?」

何を食べるのかを少女に尋ねる。

少女は赤い瞳を瞬かせた後、広場の出店に視線を向けた。

ホットドックやクレープ、カルメ焼きやじゃがいもにバターを載せたもの、ステイック状になったワツフルやたこ焼き、タピオカジューズやチョコバナナ、ベビーカーステラや肉巻きおにぎりなど、沢山の種類が並んでいた。催し物の熱気も相まって、どれも美味しそうに見えるてくる。

「お祭りの屋台の料理が美味しいのは、祭りの空気の中で食べるからだ」と、クーゴが強い口調で言っていたことを思い出す。事実、数年前に日本の夏祭りに参加して食べた屋台の料理は本当に美味しかった。少女の赤い瞳は、物珍しそうに出店を見つめていた。

レストランで食べようかと思っていたが、たまにはこういう趣向も悪くない。グラハムは頷き、少女をエスコートするため手を差し伸べた。少女は躊躇うように身を縮ませたが、グラハムの様子を見て、安堵したように表情を緩める。おずおずと手を取ってくれた。

グラハムが少女の手を引いて、一步踏み出そうとしたときだった。

「刹那・F・セイエイ」

囁くような声色で、少女ははっきりとそう言った。

「刹那……それが、キミの名前なのか?」

「ああ」

グラハムの問いかけに少女——刹那・F・セイエイは頷く。おそらく、その名前も偽名なのだろう。グラハムは直感していた。

しかし、先程のことを鑑みるに、その名を告げることさえ勇気が要ったはずだ。グラハムはふつと表情を緩め、微笑む。

刹那、と、少女の名を呼んだ。刹那も表情を緩める。「どんな綴りと字なのか、教えてほしい」と頼んで手帳とペンを差し出せば、刹那はさらさらと字を書く。

『『永遠よりも長い時間の中で切り取られた、一瞬よりも短い時間』』
「え」

「そういう意味、なのだそうだ。俺の名前は」

『刹那・F・セイエイ』と書かれた紙を差し出して、刹那は言った。そうか、と、グラハムも相槌を打つ。それきり会話は途切れてしまったけれど、その沈黙もまた心地よかった。

グラハムは刹那と一緒に、広場へ向かって歩き出した。近づけば近づく程、催し物の熱気が伝わってくる。祭り囃子を思わせるようなメロディが聞こえてきた。

そのときだった。刹那がびくりと肩をすくませる。彼女の視線を辿れば、茶髪の少年と金髪の少女がこちらにやって来たところだった。どうやら、刹那の知り合いらしい。

2人組は、少年の方が沙慈・クロスロードで、少女の方がルイス・ハレヴィという名前だった。刹那とは、所謂お隣さん同士および顔見知りだという。

「この前のムハラビーヤとバスブーサが美味しかった」だの、「お礼に、今度はスペインのお菓子をふるまう」だの、近所づきあいには良好らしい。

照れたように俯く刹那の横顔は、年相応の少女らしさが伺える。知らず知らずのうちに、グラハムは頬を緩ませていた。

しばし談笑した後、沙慈とルイスはグラハムの存在に気づいたららし

い。特にルイスは勘ぐつたらしく、「ははーん」と値踏みするような笑みを浮かべた。

そんなガールフレンドの変化に気づいていないのか、沙慈は能天気
に刹那へ問いかける。「あの人は誰？」という質問に、刹那は更に顔を
赤らめて視線を泳がせ始めた。

質問に答えない刹那に業を煮やしたのか、沙慈はグラハムの方に向
き直った。「失礼ですが」と謙虚に前置きをしてから、グラハムに問い
かけてきた。

「どちらさまですか？ 刹那のお知り合いみたいですが……」

彼の問いかけを聞いたグラハムは、待つてましたと言わんばかりに
満面の笑みを浮かべた。

「私はグラハム・エーカー。彼女を愛してやまない男だ！」

次の瞬間、グラハムの腹に重たい一撃がクリーンヒットした。思わ
ず呻いて身を屈める。何事かと思つて見上げれば、顔を真っ赤にした
刹那が拳を突き出していた。

照れ隠しの行動だろう。やっと彼女も本調子になったということ
か。毛を逆立てた猫みたいだ。そんな顔すら愛おしいと思う時点で、
もう重傷であることは明らかだった。

沙慈が慌てて刹那を羽交い絞めにし、ルイスが目を輝かせて刹那に
問いかける。刹那は羽交い絞めにされながらも、じたばた暴れてい
た。彼女はルイスの質問はすべて切り捨て、沙慈の拘束を振り切つ
て、グラハムを黙らせようとする。やっぱり愛おしかったので、グラ
ハムは頬を緩めたのだった。



刹那・F・セイエイが女であること。

ソレスタルビーイングに、5人目のガンダムマイスターがいること。

5人目のマイスターの名前はイデア・クピディターズであること。

5機目ガンダムの機体名はスターゲイザーであること。

ソレスタルビーイングの仲が比較的和やかであること。

刹那・F・セイエイとグラハム・エーカーが事実上の恋人関係であること。

刹那・F・セイエイのご近所関係が比較的良好であること。

絹江・クロスロードにセキ・レイ・シロエやジヨナ・マツカという調査仲間がいること。

沙慈・クロスロードとルイス・ハレヴィイが結婚を前提とした恋人関係であること。

『悪の組織』という名前の技術提供会社が存在していること。

ソレスタルビーイングと対を成す組織、スターダスト・トレイマーが存在していること。

テオ・マイヤーという名の売れっ子歌手が存在していること。

アレハンドロ・コーナーの部下の人数が、1人多いこと。

チーム・トリニティに教官がいること。

リボンズ・アルマークとイノベイドたちの仲が良好であること。

青年はノブレス・アムという名前であること。

グラハム・エーカーに、年上の友人であり副官がいること。

そのフラッグファイターの名前は、クーゴ・ハガネであること。

「私の知っているものと、違う」

女は、ぽつりと呟いた。

鋭い眼差しの先には、刹那に愛を叫ぶグラハムと、彼を黙らせようと奮闘する刹那の姿があった。沙慈が刹那を止めようとし、ルイスが茶化している。

女は忌まわしいものを見るような目つきで、その景色を睨む。舌打ちし、視線を逸らした。鞆から端末を取り出し、カーソルを合わせる。数コール後、相手が出た。

「こんにちわ、留美。^{リユミン} ご機嫌いかが？」

『ええ。そちらは？』

「最悪よ。最悪の極みだわ。だって——」

女は毒づきながら、電話の相手と世間話に興じたのであった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

第2回現状確認

「大丈夫だ、1stシーズンに入ったから」『11. ビ
ギニング・エンカウント〜天使降臨編〜』『22.
世界は愛に満ちている』時点の中心オリキャラまとめ

名前：クーゴ・ハガネ／刃金はがね 空護くうご

性別：男性

年齢：28歳

誕生日：12月22日（山羊座）

身長：169cm

体重：??kg

血液型：B型

所属：ユニオン軍／ガンダム調査隊

搭乗機体：クーゴ専用カスタムフラッグ

主に交流のある人物：グラハム・エーカー、ビリー・カタギリ他

特筆事項

・元々の国籍は日本。しかし、ユニオン軍に所属するために国籍を
変更した。

・家族構成は母・櫻華おうか、双子の姉・蒼海あのみ。その他、親戚多数。

・MSWADの精鋭で、階級は中尉。グラハム・エーカーの相棒お
よび副官と言える人物。

・共有者能力持ちで虚憶きよおく保持者。

・歌い手として活動中。ハンドルネームは『夜鷹』。

・徹夜明けだとゾンビみたいになるため、ユニオン夏の風物詩とし
て怖がられている。

・ヴェーダ曰く、アルコール摂取後も危険らしい。詳細不明。

・料理上手。ご飯のおかずからお菓子まで幅広い。

・人間卒業間近であることに色々思うところがある。

・友人IIグラハムも人間卒業間近なので心配している。

・空を目指した理由は、虚憶きよおくで出会った人たちから「空を目指せば

会える」と言われたから。

・ひよんなことから出会った青年曰く、タイプ・ブルー荒ぶる青。

蛇足

・イメージCV・私市淳

名前：イデア・クピディタース

性別：女性

年齢：20代

誕生日：11月11日（蠍座）

身長：160cm

体重：??kg

血液型：O型

所属：ソレスタルビーイング（?）

搭乗機体：ガンダムESP—Psyonタイプモデル03Ⅱスター

ゲイザー

主に交流のある人物：刹那・F・セイエイ他

特筆事項

・コードネームの由来は『理想への憧れ』（ラテン語）。現時点では本名不詳。

・特殊能力保持の疑い濃厚。力の威力としては、MDを消し飛ばすレベル。

・MDに搭載されているシステムに対して嫌悪感を抱く。そのシステムが天敵な様子。

・盲目。しかし、視界に不自由はしていない。特殊能力が関係しているらしい。

・共有者能力持ちできよわく虚憶保持者。

・力の発動時は青い光を放つ。

・歌い手として活動中。ハンドルネームは『エトワール』。
・恋愛ごとを見ると、所構わず介入する。
・『同胞』の歴史を知っている。
・『悪の組織』およびスターダスト・トレイマーと何らかの関わりがある。

蛇足

・イメージCV・桑島法子

名前：テオ・マイヤー

性別：男性

年齢：20代

誕生日：??

身長：?? cm

体重：?? kg

血液型：?型

所属：一般人(?)

主に交流のある人物：リボンズ・アルマーク、アレハンドロ・コーナー他

特筆事項

- ・大人気の歌手。最新作は『恋愛少年団』。
- ・特殊能力保持の疑い濃厚。感知能力やテレパス関連。
- ・味覚がない。但し、他人の味覚をコピーすることで代用可能。
コピー ヴァレンタイン
- ・共有者能力持ちで虚憶保持者。
きよおく
- ・エイフマンのお兄さんの存在だった人物にそっくりらしい。それがきっかけで、彼と文通を始めた。
- ・結婚願望はあるが、諸事情で諦めている。詳細不明。

蛇足

・イメージCV・置鮎龍太郎

名前：ノブレス・アム

性別：男性

年齢：20代

誕生日：??（蟹座）

身長：??cm

体重：??kg

血液型：O型

所属：ソレスタルビーイング（?）

搭乗機体：ガンダムESP—Psyonタイプモデル02||レガン

ダム

主に交流のある人物：チーム・トリニティ他

特筆事項

- ・チーム・トリニティの教官。彼らを大切に想っている。
- ・仮面着用。素顔は不明。
- ・生身の戦闘能力は高いと思われる。
- ・どうやら口調を変えている様子。
- ・今はMSパイロット乗りをしているが、本業は技術職。図面を引いたり開発を行ったりしていた。

・彼の家計は2270年代以前から虚憶きよわくやヴィジョン、コーヴァレンター能力の研究を行っていた。

・彼自身も共有者コーヴァレンターで虚憶保持者。どうやら、彼の一族の中には能力に目覚めた者もいたらしい。今は天涯孤独。

・味覚がない。但し、他人の味覚をコピーすることで代用可能。

・隣の家に住んでいた少年のことを気にかけている。彼は現在、MSの権威として名をはせる技術者となっている。

蛇足

・イメージCV・置鮎龍太郎

名前：ベル

性別：女性

年齢：20代後半

誕生日：??

身長：?? cm

体重：?? kg

血液型：?型

所属：『悪の組織』およびスターダスト・トレイマー

主に交流のある人物：イオリア・シユヘンベルグ、E・A・レイ、リボンス・アルマーク他

特筆事項

・『悪の組織』代表取締役にして、孤児院の元・院長。現在は隠居しているが、子どもや職員たちから好かれている。

・車椅子使用。しかし、それでも精力的に動き回っている。

・ネーナ曰く、ナイスバディ。

・夫に先立たれた未亡人。

・何やら崇高な目的がある様子。

・尊敬する相手がいたらしい。その人物の愛称は『グラン・パ』。

・愛称は『グラン・マ（おばあちゃん）』。リボンスからは『マザー』と呼ばれている。

・各方面にコネクションがある。そのすべてが『同胞』。

・マリナ・イスマイルは、彼女の尺度で5冠殿堂入りを果たしている。

・曰く、『女性は愛でるべき存在である。夫は愛する存在である。夫以外の男は親友公^{ダチ}である。但し例外有り』らしい。

・口説いた人間の代表格は、師匠、航海長、女史、オペレーター、技術者、占い師、幼馴染の女の子たち、友人のお母さん等々。当時3歳だった。

・エルガンに対して厳しめなのは、彼が例外にカテゴライズされているため。

・凶面は綺麗に引けるが、絵はヘタクソ（エルガン談）。女性はみんな美人に描ける。男性は、夫以外変な絵になる。夫でさえ美形10割増し。

・ナスカという星の生まれだが、故郷はもう存在していない。惑星を破壊する兵器によって滅亡した。

・宇宙を流浪していた『同胞』から別れて、この地球にやって来た。元々『同胞』たちは青い星^{テラ}を目指して旅をしていたらしい。

・同じ星で生まれた幼馴染は9人いて、名前が分かっているのはトオニイ、アルテラ、タージオン、タキオン、コブ、ツエーレン、ペスタチオ、エルガンの8名。

・トオニイは『同胞』のリーダーをやっていた。『同胞』では、指導者のことを『ソルジャー』という称号で呼ぶ。

・スターダスト・トレイマーのリーダー。

・ベルというのは愛称。本名ではない。

・イオリア・シユヘンベルクの妻の名前もベル（Not本名）。

蛇足

・イメージCV・神田沙也加

大丈夫だ、1stシーズンの中盤だから。

23. 小康状態

夕焼けの空が広がっている。地上がどんなに薄汚れた陰謀が渦巻いていようと、空はいつも美しく雄大だ。

2機のカスタムフラッグと、それに随伴する2機のユニオンフラッグが空を舞う。探し物はたった1つ、隊長、もといグラハムの大好きなガンダムである。

彼曰く、「大本命は白と青基調、好意に価するのがその他のガンダム」らしい。奴はガンダムであれば何でもいいのだろうか。そう思った途端、頭が痛くなった。

ファースト、Z、V、XX、自由、正義、運命、翼、死神、砂岩、剛腕、神龍、一角獣、神——ゴットフィンガー。最後に浮かんだのは、懐かしい響きだった。

東方は赤く燃えている——そう言った青年と、その師の名前は何かと言ったか。

後でビリーに、ようやく思い出せた『グラハムフィンガー』の元ネタのことを伝えておかなくては。

クーゴは端末を取り出して、きよおく虚憶を記録した。もちろん、その間の操縦モードは自動に切り替えている。

きよおく虚憶をまとめるのに時間はかからなかった。

端末をしまい、クーゴは再び操縦モードを手動に切り替えた。操縦桿を動かす。

「隊長。こんなこととしても、敵さんは見つかりませんか？」

左後方を飛ぶハワードが、どこか困った様子でグラハムに声をかけた。彼の言葉は、ご尤もである。

ソレスタルビーイングが活動してから早数か月。世界には、新たな争いの火種がばら撒かれていた。

その名を『憎しみの対象』にするため、無差別テロ団体が行動および暗躍を始めたのだ。テロ団体の目的は、『ソレスタルビーイングの活動停止』である。奴らは既にAEU領のフランスやイタリア、ユニオン領のアメリカや日本、人革領のロシアや中国等でテロ活動を行っていた。ソレスタルビーイングが活動を停止しない限り、これからも非道な真似を繰り返すという。

奴らは正義のためだと大義名分を振りかざすが、やっていることは無差別報復にすぎない。関係ない人々を巻き込んでおいて、その行為の責任をソレスタルビーイングにおつ被せている。虎の威を借りておいて、その威を地に落とすような真似をするとは。借りるだけの狐より悪質だ。

(……)こういうのを、日本では『詰め腹を切らせる』って言うんだよな)

クーゴは深々とため息をつく。テロ集団の行動は、卑怯かつ卑劣なやり方だ。クーゴ自身、ソレスタルビーイングを支持しているわけではない。しかし、テロリストを野放しにするつもりはなかった。

おそらく、ソレスタルビーイングの面々も憤慨しているだろう。自分たちの名前を汚されたのだ。このまま黙っているとは思えない。テロリストたちが動けば、彼ら／彼女たちも武力介入を開始するに違いない。

テロリストいるところに彼らあり。言葉にすると簡単だが、テロリストたちは世界全体を対象にしている。諜報部が調べているが、どこに現れるか予測することは不可能だ。砂漠の中から砂金を探すようなものだろう。非効率的だ。

グラハムは、それをわかって行動している。

わかっていて、でも、納得できないでいるのだ。

「私は我慢弱く、落ち着きのない男なのさ。しかも、姑息な真似をする輩が大の嫌いとききている」

苛立ちと怒りにも似た険しい表情。

通信越しに見たグラハムの顔は、すぐに笑みを浮かべた。

「ナンセンスだが、動かすには無理だ」

彼の瞳は、非道なテロリストへの怒り、愛する少女——刹那・F・セイエイへの想い、恋愛の対象(?)であるガンダムに会えるかもしれないという期待と闘志をこちやませにしたような感情に満ちている。だというのに、狂気的なまでに澄んだ翠緑。口元には、不敵な笑みさえ浮かべていた。

先日、クーゴは『エトワール』——イデア・クピディターズと、グラハムは刹那と、ある種の決着をつけてきた。後者の方はあまり語らないけれど、迷いを吹っ切ることができたらしい。以前の調子が戻ったように思う。いや、むしろ悪化したかもしれない。

その元凶を担ったのはビリィであった。少女の名前を知って嬉しそうなグラハムや喜ぶ周囲の面々に対して、「古来の日本では、『相手に自分の名前を教え、相手が自分に名前を教える』ということが、夫婦の契りだった」なんて入れ知恵をしてしまったからさあ大変。

ダリルとワードが諸手を挙げてクーゴとグラハムを祝福し、「それはいいことだ。ところで、結婚式はいつかね?」とエイフマンがすつとぼけ、それを聞いたグラハムが怒涛の勢いで刹那にメールを送っていた。その横顔が爛々と輝いていたことが忘れられない。

イデア経由で「その文化は、現代日本においては適用されません」とフォローを入れたが、果たして。

最も、刹那・F・セイエイという名前は偽名のため、名前云々が現代日本に残っていたとしてもセーフだと思われる。

閑話休題。

「知ってるよ。お前がそういう奴だっことは」

クーゴは苦笑しながらため息をついた。昔から、グラハムには迷惑

ばかりかけられてきたような気がする。

それでも彼と共にいたのは、彼の人柄に惹かれたからだ。どこまでもまっすぐに空を見つめる横顔に、懐かしさと親しみを感じたからだ。

一番の理由は、「空で待つ」と笑いクーゴを「友」と呼んだ男性が『彼』であると、本能的に察していたためである。本人には伝えていないが。

グラハムのあり方は、多くの人を惹きつける。

同調する者、反感を抱く者、一目置く者。方向性は本当に様々だ。

「本当に、しょうがない。しょうがないから、同行するんだよ。俺は」

クーゴは肩をすくめた。自分は相当、グラハムに毒されてしまったらしい。

その言葉に何を思ったのか、グラハムは眩い笑みを浮かべた。合点がいったとしても言いたそうな表情である。

「成程。日本で言う『ツンデレ』だな、クーゴは」

「ちげーよ。お前が変な方向に暴走しないよう、フォローしてやるってことだ」

「それは心強いな！」

「当たり前だろ」

変な方向にこじれかけた会話を終わらせる。グラハムの嬉しそうな笑みを見ると、どうでもよくなってしまうから不思議だ。

クーゴはふっと笑みを浮かべた。仲間とやり取りをしている時間が、一番楽しくて充実している。幼い頃は、想像すらできなかった光景だった。

そのとき、微笑ましそうに自分たちを見ていたハワードとダリルの顔が『視えた』気がした。そのコンマ数秒後、彼らは頼りがいのある微笑を浮かべる。

「お供しますよ、隊長！」

「サポートは任せてください、副隊長！」

ハワードとダリルが返事をした。

本当に、彼らは頼れる部下たちだ。グラハムの人事は間違っていないかったと言えよう。

ふと一瞬、沖繩に駐屯しているアキラが「俺、のけ者にされた気がする」と呟きながら泡盛を飲んだくれている姿が『視えた』気がした。

「その忠義に感謝する！」

グラハムは笑みを浮かべ、フラッグを加速させる。クーゴもそれに続くため、操縦桿を動かした。ハワードとダリルのフラッグも随伴する。

ユニオンの『空の護り手』たちは加速し、夕焼けの空を切り裂くように飛んでいく。高く、高く、高く——どこまでも。



「テロリストが所有していると思しき車両や船が、日本およびその近郊で、原因不明の事故を起こしてる？」

「どういうことなのでしょう、お嬢様」

「わかるはずないじゃない。……あ、まただわ。今度は、タンカーが突然垂直に傾いた後、数十メートル程浮かんで、海面に叩き付けられたそうよ」

「こちらでも、テロリストが所有すると思しき車が突如潰れたそうです。別の場所では、突然車が発進し、きりもみ回転しながら湖に転落

していったとの情報が入りました。エージェントが捕まえたテロリストたちは、総じて『化け物だ』、『青い光を見た』と口走っていたそうです」

「一体何が起こっているというのかしら……。あ、また？　もう、本当にどうなってるの……!?!」

*

テロリストたちが悲鳴を上げながら後ずさる。イデアはそれを見下ろしながら、奴らの元へと歩み寄った。目撃者はテロリストのみ。留美が放ったエージェントたちは、まだここを嗅ぎ付けてはいない。彼らがここに来る頃には、すべて終わっているだろう。力を具現させながら、イデアは屹然とした眼差しでテロリストたちを睨みつける。少し前まで戦う気満々だったのが嘘みたいだ。今では皆、怯えの感情に満ちている。

奴らが放った銃弾は、すべてイデアの目前で止まっている。傍から見れば、壁にめり込んでいられると言われそうな状態だろう。それこそ、イデアが一番得意とする能力の発現方法だった。ロケット弾を撃ち込まれようと、ミサイルをぶち込まれようと、耐え抜ける強度と自信はある。

但し、それはあくまでも「普通の実弾およびビーム・レーザー兵器」であればの話だが。

ここでは見かけないが、『同胞』を殺すことに特化した兵器に対しては、防御力は劣ってしまう。

(それに関する対策も練ってはいるけど、後手に回りがちなんだよなあ。MDの件も考えると、流出および開発されてそうで怖い……)

そんなことを考えつつも、イデアは表情を崩さない。

青い光が揺らめく度に、テロリストたちは情けない声を上げる。

声明文でソレスタルビーイングに噛みついてるのが嘘みたいだ。

荒ぶる青。『同胞』の持つ能力の中で、最強と謳われる能力。その発現者はあまり多くないものの、(古の『同胞』の場合は)たった1人で艦隊を殲滅する力を有すると言われている。アイデアもまた、荒ぶる青と呼ばれる能力者の1人であった。

『同胞』の能力は4つある。1つがアイデアの属する荒ぶる青であり、万能型の能力だ。他には防御系に優れる完全なる防壁、攻撃系に優れる過激なる爆撃手、テレパスや感応および読心術に優れる思念増幅師の3つがある。

「死ね、化け物め！」

声が出た方向を向く。男がナイフを振りかざし、飛びかかってきた。アイデアが手をかざして下ろせば、男は地面に叩き付けられ呻き声をあげる。

これくらいなら、『同胞』であるなら、訓練すれば誰でも使えた。基礎中の基礎である。むしろ、この場で発現させた力は『基礎中の基礎』だけだ。

「化け物、ねえ」

アイデアは自嘲する。古の『同胞』たちは、そうやって処分されてきた。人間とは大きな違いがある方と言う理由で、命を、仲間を、家族を、安住の地を奪われてきたのだ。同じヒトから枝分かれしたというのに。

「私にだって感情があるわ。私にだって、心があるわ。私にだって、意志があるわ」

倒れ伏した男の方へ足を進めた。身動きの取れない男は、かすれた声を上げてこちらを見上げている。奴の目が血走っていた。

崇高な意志というお題目で、彼らは沢山の人に危害を加えた。力あ

る者に刃を向けられないと知っているから、無力な人間を狙った。

おまけに、自分がやったことをソレスタルビーイングに押し付けて逃げようとしている。卑怯な上に無責任ときた。

わかりたくもないことだが、機械が最後に「あんな」決断をした理由がわかったような気がする。ヒトがヒトである限り、逃れることのできない業。それがたくさん悲劇を生み出し、命を刈り取っている。学習しても尚、同じことを繰り返す。だから機械は、そんなヒトを「非効率」だと判断したのだろう。

機械を開発した人間からしてみれば、創造主に牙を剥くだなんて想像できるはずがなかった。その証拠に、機械には「どちらかが優劣か」を判断する権限しか与えていなかった。しかし、時が経つにつれ、機械は人を管理するようになった。支配するようになった。次第に機械は拡張を続けていく。

その果てに起きた悲劇と犠牲を、知っている。だけど。だからこそ。

あんな方法は、認められなかった。

ヒトの尊厳を踏みにじり、ヒトという存在そのものを否定した、欠陥だらけの箱庭を。

「貴方たちがすることは、箱庭を作り出すのを助長しているだけよ。あるいは、箱庭の管理者がすることそのものだけわ」

ソレスタルビーイングもまた、箱庭を作り出すための舞台装置ではないのだろう。存在意義という名の定め抗うと決断を下したのも、彼らを守ると決めたのも、他ならぬアイデアだ。その始まりが『託された』ものだったとしても、選んだのは自分自身。

銀色の髪に、緑の瞳を持つ女性の姿が浮かんで消える。彼女の最期の言葉が耳をかすめた。『来るべき日のために、遺志を継ぐ者たちを守り抜いて』『望まれた子どもたちを、お願い』——託されたものの重さを噛みしめて、アイデアはソレスタルビーイングにいる。

「自分の行いに関して、反省も後悔もしない。……そんな貴方たちの方こそ、化け物よ」

イデアの手に青い光が収束する。そして、タイフンブルー荒ぶる青としての力は、躊躇いなく振るわれた。

群青あおが爆ぜる。吹き荒れた風が晴れたとき、そこには気絶したテロリストたちが山を築くようにして倒れていた。

誰も彼もが泡を吹いていた。『化け物だ』だの、『青い光が』だのと、うわ言のように繰り返している。

遠くから響いてきた足音を察知し、イデアは即座に力を使った。薄暗い部屋の一室は、あつという間に岩山へと変わる。そこは、AEU領のスコットランド。刹那のエクシアとイデアのスターゲイザーが隠されている待機場所だ。

今頃、留美のエージェントたちがテロリストのグループを発見していることだろう。パイロットスーツに着替えなくてはと思ったときだった。スメラギから、ミッション開始の通信が入った。同時に、エクシアのステルスモードが解除される。タクシーバイクに乗った刹那の姿が見えた。

中東出身だと一目見てわかる、簡素な民族衣装。しかし、刹那は男物を好んで着る節があった。動きやすいからというのが理由だろう。イデアの護衛任務およびグラハムと会うとき以外は、いつもその格好で過ごしていた。

彼女はタクシーバイクを乗り捨てて、そのままガンダムに搭乗した。イデアもパイロットスーツに着替えることなく、スターゲイザーに乗り込む。

自分たちに割り振られたのはタンカーの襲撃だ。了承の返事をし、空へと飛び立つ。本日の天気は晴天、いい任務日和だ。

(……あ)

不意に、『視えた』。

白い砂浜、青い海。水着姿のスメラギが日光浴に勤しみ、クリステイナとフェルトがシュノーケリングを楽しんでいる。麦わら帽子に半袖半ズボンのイアンは、海に来た人というより農家のおじさんに見えなくもない。

アレルヤが困った顔をした理由がわかる気がする。テイエリアがぶちぶち文句を言っていた理由もわかった気がする。自分たちが頑張っている間に、面々だけバカンスに興じているのだ。ちよつと待てと言いたくなるのは当然だろう。

ロックオンがテロリストの憎悪以外に抱え込んでいた感情は知っていた。フェルトの水着姿に何やら思うところがあつたらしい。そして、そんなことを考える余裕があつた自分に驚愕していた様子だった。その調子で、幸福に関する執着を持つてくれたらいいのに。

(任務が終わった後のことでも考えよう。今日話す内容とか、オフ会の日程とか、任務終了後はバカンスに加わることとか、水着のこととか)

アイデアにだって楽しい時間がほしいと願う心はある。スメラギやクリステイナたちがキャツキャウフフしているように、クーゴともそういう時間がほしい。

自分たちは刹那と違って『そういう』関係ではないけれど、でも、好きな相手と距離を縮めたいと思うことは間違いじゃないはずだ。色々弁えれば、多分。

到達ポイントにたどり着く。アイデアは盛大に脱線させていた思考回路を元に戻し、刹那と共に介入行動を行ったのだった。



ミス・□□□ス。

クーゴたちが所属する部隊で行われた、美女コンテストである。

石□からバカンスへ行こうと誘われたときから、なんとなく嫌な予感がしていた。『悪の組織』の連中が嬉々と同行してきたのを見たときから、愉快犯的な作威を感じていた。□神が理由を説明するときには悪人面なんかするものだから、黒い笑みを浮かべて「真の目的とはミスコンである」と宣言されたとき、反射的に飛び蹴りしたクーゴは悪くないはずである。

渾身の蹴りは石□に避けられ、懐刀のあまりにもあんまりなコメントにずっこけてしまった加□にクリーンヒットしてしまった。そのとき巻き上げた砂の余波を喰らったのは、近くにおいて話し合っていた□二とゼロであった。汗まみれの彼らには酷なことをしてしまった。もちろん、全方位に対して土下座ものである。お詫びにスポーツドリックを差し入れたのが、帳消しになるとは思えない。

クーゴがぐだぐだ考えているうちに、ミスコンはどんどん進んできたので撃退したり、アイドルが水着で出てきて三角関係大炎上したり、無人機が襲撃してきたので撃退したり、アイドルファンが露骨な鼻屑に走ったり、無人機が襲撃してきたので撃退したり。途中で挟まる出来事——無人機の襲撃が、普段の日常と大差ないように思うのは何故だろうか。

ミスコン進行と無人機撃退を繰り返し、やって来た乱入者くろまくも追いついて、休暇なのに休暇じゃないバカンスは過ぎていく。

夏の日差しが眩しい。いや、原因はおそらく、ミスコンで盛り上がる熱気とか、ミスコンで披露されるアレなアレとかだろう。

それに見惚れてパートナーからぶん殴られる男性陣とか、落ち込んで裏方でぐちぐちやってる女性陣とか、悲喜こもごもだ。

「ロ□クオン、最ツ低……!!」

「待ってくれ□エルト！ これは誤解だアアアアアアアア！」

「□イルが、ラ□ルが浮気したアアアアアアアアアア！」

「待ってくれ□ニユー！ これは誤解だアアアアアアアア！」 お前の家

族にも説明させてくれエエエエエ！ 俺死ぬ、確実に殺されるウウウウウ！」

「待てコラ、ライ□・ディランデイイイイイ！」

「可愛い妹分を泣かせやがってええええええええ！」

「貴様の罪を数えろオオオオ！」

「天誅だ！」

「粛清する！」

「DNAを残さないレベルで頑張ってみようか。これは、リ■ンーズキヤノンを使わざるを得ない案件だな」

「眩しいわね、ア□ルヤ」

「そうだね。でも、僕にとって一番眩しいのは□リーだよ」

「アレ□ヤ……」

「マ□ー……」

「アー□さんの馬鹿ー！ 女装で可愛いなんて悔しいですうー！」

「ちよつと待ってくれ！ □下は!? 彼はいいのか!?!」

「私よりも可愛い□ーデさんなんて、ア□デさんなんて……っ！ 大好きですううううわああああん！」

「待ってくれミ□イナ、僕もキミが大好きだアアアアアアア!!」

喧騒が聞こえる。

審査員に抜擢されて壇上に上がり、美女を見てデレデレしていたストラト□兄弟は、お互いの恋人から贔屓を買ったらしい。特に弟は悲惨で、彼の背後には妹分を想う家族が獲物を構えて迫っていた。スイカ、スイカ割り用のバット、氷で作られたジヨツキ、サメの形をした浮き輪、釣竿、ロケット花火等、凶器は様々である。

端の方では、「ミスコンなんてどうでもいい。キミさえいてくれるなら。むしろキミこそがミス・カ□□□だ」を地でいく恋人たちがいた。見るからに、幸せそうで何よりである。クーゴも彼らのように自分の世界へ入り浸ればよかったのだが、性格上、うまく逃げる事ができないでいた。本当にしようがない。

後ろでは、山□の巻き添え+αを喰らって女装したティエ□アを見

たミレイ□が、大泣きしながら走り去っていったところだった。彼女の悲しみもわかる。だって、件の恋人はそこらへんの女性よりも女性らしいのだから。そんな□イエリアも、ミ□イナの後を全力で追いかけていった。

ミスコン進行と無人機襲撃を繰り返し、休暇なのに休暇じゃないバカンスは過ぎていく。

C・Cによって半ば強引に引きずり出されたバニーガールが悲鳴を上げて逃げ去っていった後のことだった。

「何やら、向うが騒がしいな」

悲鳴が聞こえる。引きずり出されたバニーガールと同じ色の悲鳴だ。

「や、やめろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

羞恥心によって憤死してしまいそうな、女性の声。何事かと壇上を見た。

「また飛び入り参戦らしいな」

「いや、無理矢理引きずり出されたの間違いだろ」

隣にいたグラハムは能天気に行った。クーゴは思わずツツコミを入れる。誰がどう聞いても、飛び入り参戦しようとした風には聞こえない。

真夏の太陽が目に刺さる。次の瞬間、かき氷片手に観戦していたグラハムが目を剥いた。クーゴも息をのんで、その光景を凝視する。
白。

太陽の光なんか気にならないほど鮮烈な、白だった。

水着である。まごうことなき水着である。胸元が強調され、きわどいレベルでぎつくりと切込みが入った水着である。フリルもふんだ

んに使われていた。

一言で表すとするならば、花嫁という単語が相応しい。頭につけられたヘアバンドの飾りが、花嫁に被せるようなヴェールのようにも見える。

隣にいたグラハムがかき氷を落とした。砂浜にブルーハワイの青が派手に飛び散る。しかし、奴はもう、かき氷なんて気にしていなかった。

視線はただ、まっすぐに。

純白の水着を身に纏う、刹那・F・セイエイに向けられている。

彼女を引きずり出したアイデアは、真夏の太陽よろしくな笑みを浮かべていた。

空と海の境目を思わせるような、青いグラデーションのビキニ。

目が焼けただれそうなくらいの眩しさを感じる。クーゴは思わず目を逸らす。

その先に、グラハムの横顔があった。

「――天使だ。天使が降臨した」

グラハムの声は、至極真面目な響きを宿していた。言っていることは（経験則上）アレだが。

ギャラリーが大盛り上がりする中で、グラハムは迷うことなく壇上へと向かった。顔を真っ赤にしてぶるぶる震える刹那だが、グラハムが近づいてきたことに気づいて顔を上げる。

至極真面目な顔が、今にも泣き出してしまいそうな顔と向き合う。ギャラリーがどよめいたその瞬間、奴は姫に求婚する貴族よろしく刹那の手を取り跪く。どこまでも澄み渡った翠緑の瞳が、赤銅色の瞳を射抜いた。

「刹那」

「な、なんだ？」

「結婚しよう。今すぐ、ここで」

絶対零度。熱気に燃えていたギャラリーが、ほんの一瞬だけけれど、確かに、文字通り『凍り付いた』。

*

「ご家族の皆さん、刹那を私にくださあああああいつ！」

「誰がやるかコンチクショウ！ お父さんは赦しませんよオオオオ！」

「兄さんが！ 兄さんが壊れたー！」

「いくらなんでも酷すぎる……！」

「ここから先は死守する！ テコでも動かん！」

「ス□ラギさん、指示を！」

「ええ。各自に到達！ 手段は問わないから、グラハム・エーカーを全力で迎撃してー！」

「よっしやああ！ □アン、アレ持ってこい！」

「任せろラツ□！ こんなこともあるかとおオオオ！」

空を彩る花火なんてなんのその。波打ち際で、ぎやあぎやあ叫び声が聞こえる。

さつきまでいいムードだったのに、完全に台無しであった。

「□ツセさんとイ□ンさんが構えてるやつ、バズーカじゃないですか？」

「そうだな」

「どこから持ってきたんだろう、アレ……」

「わからん」

銀□の問いかけに、クーゴは曖昧な笑みを浮かべて見せた。

「あの人たち、生身の人間に対してバズーカ向けてますケド大丈夫な

んですか?」

「多分」

「多分、って……」

浩一の問いかけに、クーゴは曖昧な笑みを浮かべて見せた。

「……止めないのですか?」

「止められると思うか?」

「劣等種にしては、賢明な判断ですね」

連邦初の革新者が、言葉とは裏腹に、労わるような眼差しを向けてきた。

クーゴは曖昧な笑みを浮かべて見せる。ぶっきらぼうに肩を叩かれた。

「結局、最後までしまりませんでしたね」

「そうだな」

取っ組み合うグラハムとソレスタルビーイングクルーたちを眺めながら、アイデアがのほほんと微笑んだ。

クーゴは大きく息を吐く。打ち上げ花火はもうすぐ終わりそうだというのに、彼らの戦いはまだ終わりそうもない。

寄せては返す波の音に紛れて、水しぶきが跳ねる音がひっきりなしに響く。誰かが転んだのか、派手に水が爆ぜた。

でも、とアイデアは言葉を続ける。

「私たちらしくて、いいですよね」

「……そうだな」

クーゴはアイデアの言葉に同意し、喧騒へと視線を向ける。平和な日常が、そこにあった。

◆
「どうしてこうなった」

虚憶きよわくを記憶し終えてソファに座っていたクーゴは、ぽつりと呟つぶやいた。

虚憶きよわくを見て真まっ先に思ったことである。もちろんまとめは終わっていたが、色々とツツコミどころがありすぎて捌はききれなかった。シチュエーションで分類するなら、堂々の迷場面だ。

ミスコンの真まっ最中に、(敵の策略と言えど)無人機来襲きせきしすぎである。そもそもミスコン開始から内容そのものに、多くの問題が多発している。女装男子まで参戦可能さんせんって、どの方向に行くつもりなのか。強制的に壇上へ上げられた人々も可哀想だ。特に『刹那』は公開処刑ものである。いくらなんでもフリーダムすぎやしないか、『グラハム』。終いには『刹那』の家族たちと戦闘を始めてしまった。

本人たちにしてみれば、仁義なき戦いである。

第三者にしてみれば、ただのはた迷惑である。

「でも、今の虚憶きよわくは初めて見るやつだよね」

ビリーの言葉に、ワードとダリルが頷いた。

「UXにもバカンスする虚憶きよわくがありましたけど、今回の奴は違いますね」

「カイルス、でしたっけ？ 今まで聞いたことのない部隊名です」

「ってことは、新しい分類を作らなきゃな。えーと……」

クーゴは考え込む。カイルスとは、ローマ神話で、天空を守護する神の名前だ。スペルは『Caelius』、頭文字はCである。

分類名は部隊の頭文字が基本なのだが、OEの場合は部隊名よりも、『オペレーション・エクステンド』という単語が先に出てきたのである。

スペルは『Operation Extend』。その頭文字を取ってOEだ。今回は『Caelius』なので、頭文字はCということになる。しかし、今回は何故だか腑に落ちなかった。

Cだけでは足りない。Cが2つ必要だ。ただ漠然と、強い意志に引つ張られる。そうでなくてはならないという義務感に突き動かされるような形で、クーゴは口を開いた。

「CCだ。CCじゃないといけない」

「それはまた、どうしてだい?」

ビリーの的確なツツコミに、クーゴは言葉を詰まらせる。

何かいいアイデアはないものか。しばし考え込む。

「……『Chronicle of Caelius』だから?」

「なら、それにしようか」

文字通りのこじつけだった。しかし、周囲の面々にはそれで充分だったらしい。満場一致で、後ろにつくアルファベットはCCに決定した。

その調子で長々と話し合い続け、『カイルスの青い夏／CC』というタイトルが決まった直後のことだった。

端末が派手に鳴り響く。面々は即座に情報を確認する。どうやら自分たちは、ソレスタルビーイングとニアミスしてしまったようだった。

ソレスタルビーイングによってテロリストの根城が襲撃されたそう。彼らの武力介入について、三大国家はそれを黙認および幫助し

ている。

原則的に、国がテロリスト討伐のために他国領へ押し入ることは不可能である。そのため、三大国家は、どこの国に属さない彼らにテロリストを片付けてもらおうとしたのだ。

各国のデータバンクから情報が流され、それがテロリストの潜伏場所確定に繋がったという。今回はWin—Winの関係が成立したからこそできた連携であった。互いが互いを利用した形である。

「政治家とは得てしてそういうものか」

「人災をまき散らかした奴と比較すること自体ナンセンスだが、敢えて言わせてもらおう。こっちの方が数倍かわいい」

グラハムは険しい顔をした。クーゴも深々と息を吐く。

世界の悪意は深く、人の業もまた然り。憎しみの象徴としての道を進まされていたソレスタルビーイングは、ようやく違う形で、目の目を見ることができるようになった——ということだろうか。

そのとき、グラハムの端末が鳴り響いた。端末を開いた彼の表情が、ぱあつと明るく輝く。どうやら、メッセージを送ってきた相手は刹那らしい。小さくガツポーズを取るあたり、また何か進展があったのだろうか？

グラハムの喜び具合に何かを察したビリーたちも、まるで自分のことのように表情を明るくした。何事かと端末を覗き込み、何やら盛り上がり始めている。クーゴの耳がおかしくなければ、『水着』という単語が聞こえた気がした。

水着。つい先程見た『カイルスの青い夏／CC』でも、彼女と同じ名前の女性が水着で引きずり出されていた。

花嫁衣装を思わせるような純白の水着を身に纏っていた『刹那』。それを見て、本能に駆られて行動した『グラハム』。

何故だろう。嫌な予感しかしない。

「まるで花嫁衣裳ですよね、この水着！」

ハワードの言葉で、その予感ほさらに色濃くなってきた。クーゴが恐る恐るグラハムの端末を覗き込もうとしたときを見計らったかのように、今度はクーゴの端末が鳴り響く。

メッセージの送り主はアイデア。『バカンス』というタイトルで送られてきたのは、眩い水着姿の女子2人だった。写っていたのは、他の誰でもない、アイデアと刹那である。

刹那が花嫁衣装にも似た純白の水着を着ていて、アイデアは空と海の境目を思わせるような青いグラデーシヨンの水着を着ている。直視したら目が焼けてしまいそうだ。

いや、もう遅い。脳みその奥が焼けたような痛みを覚えて、クーゴは慌てて視線を逸らす。

先程見た虚憶きよわくと、よく似たデザインの水着だ。刹那の水着が露出控えめになっている以外は。

恐る恐る画像へ視線を戻す。ついでに煩惱も駆逐した。手が勝手に動いて画像を保存してしまったが、仕方ないことだと言い聞かせ

る。水着をなるべく意識しないよう心がけながら、クーゴはアイデアと刹那が並んで写る写真を見つめた。刹那は顔を真っ赤にし、居心地悪そうにしている。対してアイデアは楽しそうだ。バカンスに全力投球しているのがよくわかる。

何度見直しても、2人がソレスタルビーイングに属する人間とは思えない。どこにでもいる、仲の良い友人同士だ。姉妹のようにも見える。どこにでもある平和な光景に、クーゴの口元は知らず知らずのうちに緩んでいた。

（『人の業そのものに戦いを挑み、それらすべてを背負わされる運命にある存在』、か）

ソレスタルビーイングに属するアイデアや刹那たちの行く末を考えると、今回の件も手放して喜べない。

たとえば、いつか自分たちが空／宇宙《そら》で相對峙し、戦う運命にあるということを知っていたとしても。

『人の心の光』を宿す、気高き天上人たちに安らぎが訪れるようにと、クーゴは祈らずにはいられなかった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

幕間・とある喫茶店利用者の雑談

「災難だったな、2人とも」

「はい。テロに居合わせただけで、ケガをしなかったのが不幸中の幸いでしたけど」

沙慈・クロスロードは、自分を労ってくれた先輩——悠風・グライフを見上げ、苦笑した。カウンター席に座った彼は、ダイニング席に座る沙慈とルイス・ハレヴィの方に体を向けている。机の上には教科書や参考書、書きかけと思しきレポートが整然と並べられていた。

喫茶店の内装は木の温もりを前面に活かしたものとなっている。コンクリートジャングルの東京では、文字通り憩いになりうる場所だった。学校帰りや時間潰し、待ち合わせ等でよく利用している。今日はいつもの仲間がここに集まっていた。

「テロに居合わせてから、両親が帰って来いって騒いでるのよ。大げさよね」

ルイスはうつとおしそうにため息をつく。そこには、心配してくれる親への感謝と、自分を信じてほしいという二律背反で揺れていた。

沙慈には両親がいない。母は幼いころに亡くなり、父もまた、取材活動の最中に事故死した。それ以来、姉と2人だけで生きてきた。

自分の両親がもし生きていて、自分がもし外国でテロに巻き込まれたら——きつと、ルイスの両親のように心配したに違いない。

先日起こった無差別報復テロ。沙慈とルイスは、偶然にもその場に居合わせてしまった。自分の目の前で爆弾が爆発した瞬間を、沢山の人が苦しむ様子を目の当たりにし、ようやく世界の在り方について考えるようになったばかりである。

ソレスタルビーイングが活動をしている、彼らの活動に対して世界がどう反応している、沙慈にとっては他人ごとにしかな過ぎなかつ

た。日本では、テロなんて滅多に発生しない。自身が危機に直面して初めて、沙慈は世界を意識した。

オレンジジュースのストローを弄びながら、ルイスは言葉が続ける。

「それに、『婿殿とご家族に何かあったらハレヴィ家の名折れだから、彼らもスペインに来てもらう』って、転入先の学校まで見繕ったのよ」

「沙慈くん凄いい！ 逆玉の輿だねっ！」

そうやって身を乗り出してきたのは、悠風と同じ学年で沙慈の先輩、八重垣ひまりであった。

明るく元気なお転婆さんであるが、英才教育を受けるエリートの人だ。成績は常にトップレベルで、悠風と順位争いをしているほどだという。

普段ひまりは、休日や授業が早く終わった日はこの店でアルバイトをしているが、今日は勉強会に参加するため非番となっていた。

彼女の言葉を聞いたAL-3——愛称アリスは、飲み物を配膳しながら表情を曇らせた。

「でも、沙慈さんたちがいなくなるのは寂しいです」

アリスはそう呟いて、悲しそうに目を伏せた。

ロボットだと言われても信じられないくらい、感情に満ちている。彼女の髪や瞳の色である、澄み渡った空色とは対照的な表情だった。

それを聞いた悠風やひまりも、何とも言い難そうに視線を彷徨わせる。沙慈も俯いた。

宇宙技師になることを夢見て勉学に励んできた。自分で、今通っている学校を志望して、奨学金制度を受けられるように努力して、やっと入学できたのだ。そこで沙慈は、クラーレル・グライフ教授やその孫

悠風、彼の養子である南雲一鷹、彼が開発したアリスやHL—0——愛称ハルノ、先輩のひまりらと出会った。

そこへ、留学生としてやって来たルイスが加わった。彼や彼女たちと過ごす日常が、沙慈にとつて大切なものだった。彼らと一緒にやりたいことがあるし、彼らから教えてもらいたいことが沢山あるのだ。ルイスの両親の好意に甘えてスペインに行ってしまったら、彼らと別れることになる。

「……そうだね。僕も、この国で、ここに住む皆と一緒に、まだまだ沢山、やりたいことがあるんだ」

「沙慈……」

絞り出すように、一言一言噛みしめながら、沙慈は言葉を紡いだ。うまく言葉にできないけれど、沙慈のやりたいことや学びたいことは、スペインの学校ではできないと、直感的に感じ取っている。

沙慈の言葉を聞いたルイスが不安そうにこちらを見た。海を思わせるような青い宝玉は、沙慈の想いを感じ取っているかのようだった。ルイスはオレンジジュースのストローを弄繰り回しながら何か考え込んでいたが、キツと顔を上げた。

決意を宿したサファイアの双瞼。時折見せる横顔は、凜とした強さと美しさに満ち溢れている。恋に落ちるとはこういうことだ。彼女と付き合うようになってから、今までずっと、何度もルイスに恋をしている。

「私も、ここで勉強したい。ここで、沙慈や皆と一緒に、色んなことをしたい」

どこまでも真剣な眼差し。迷いのない瞳に、沙慈の頭の中で、また恋に落ちる音がした。

「……じゃなきゃできないの」と、ルイスは強い口調で言った。どこまでも真っ直ぐな眼差し。それを見た仲間たちが、嬉しそうに笑い返

していた。

沙慈は緩やかに微笑みながら、ルイスの名前を呼ぶ。ルイスも沙慈を見返して、明るい微笑を浮かべた。彼女の笑顔を見ていると、なんだっけでできそうな気がする。

「おお。皆、もう来ていたのか」

自動ドアの方から声がした。そこにいたのは、白衣を着た白髪の老紳士——クラールであった。じいさん、と、悠風が嬉しそうに表情を綻ばせる。アリスがぱつと表情を輝かせ、ハルノが会釈した。ひまりも、普段より2割増しの眩しい笑顔で接客する。

沙慈とルイスが座るテーブルの隣に腰かけ、クラールは微笑む。この店に集まる面々は、彼のゼミを取っていた。その中でも、クラール個人を慕い、彼の話を聞きたいと思っているメンバーで構成されている。学年は違えど、大事な友人であり仲間たちだ。

今日も、沙慈とルイスたちは、クラールの個人授業を受けるために喫茶店で待ち合わせをしていたのである。悠風が机の上のレポート類を片付け、クラールの座る席へと移動した。ひまりも勉強用具一式を持って移動する。沙慈とルイスも、鞆から勉強用具を取り出した。クラールは何か気づいたように周囲を見渡す。

そういえば、一鷹ともう一人はまだ来ていない。

そのとき、自動ドアが開いた。慌ただしく、一鷹と黒髪の青年——草薙征士郎が息を切らせて駆け込んで来た。

征士郎は沙慈たちの先輩であり、学校のOBであり、技術提供や慈善事業を中心にした貿易民間企業『悪の組織』に務める技術者だ。その縁があつて、工学部では『悪の組織』で技術者として働く人々を呼んで講演会を行っていた。彼の母である草薙博士も、『悪の組織』に所属している。

「博士、遅れてすみませんでした！」

「遅くなつて申し訳ありません。外国人の方を案内していたら、約束

の時間を過ぎてしまいました」

「構わんよ。今から始めるところだったからの」

申し訳なさそうに謝る2人を見て、クラールは静かに目を細めた。どこか懐かしそうに、征士郎の胸元に輝く『悪の組織』ロゴマークを眺める。宝玉を抱くようにして、金色の片翼が描かれている。

クラールは『悪の組織』技術開発部の顧問だった。現在は上に『名誉』がついているが、精力的に活動を行っているという。

彼が征士郎の縁を通じて学校へ講演に来た際、講演内容が全校生徒と教師陣の心を掴んだことから、客員教授を引き受けてくれた。全員が着席したのを確認し、アリスとハルノが注文を取る。相変わらず、ハルノはAIが機能不全を起こしているようで、接客対応が物騒だった。

情緒形成およびAIの機能改善のために喫茶店で働いているものの、なかなかうまくいかない様子だ。クラールはそんなハルノを、優しい眼差しで見守っていた。

「それじゃあ、課外授業を始めよう」

「はいー」

沙慈たちは元気良く返事をし、クラールの話を聞きながらノートを取る。この時間が、沙慈の中で一番充実したものなのだ。

スペインに行ったら、もう、この光景とは無縁になってしまうのだろう。それを想像することなんて、今の沙慈にはできない。

課外授業の最中、沙慈の頭の中には、ルイスの両親からの申し出がぐるぐると渦巻いていた。ルイスも同じ気持ちらしく、どこことなく集中できていない。

「2人とも、何か心配事があるのか？」

それに目ざとく気付いた征士郎が声をかけてきた。

ルイスは彼の言葉に食いついて、先日の1件を報告する。

「そうなんですよ！ 実は……」

テロ発生に居合わせたこと、幸い怪我はしなかったこと、そのニュースを聞いたルイスの両親が心配していること、ルイスの両親からクロスロード一家に対して『スペインに来ないか』という申し出があること。

自分たちはここで勉強を続けたい。しかし、元々母は留学に反対していたし、両親は沙慈のことを婿殿と認めているため、とても心配している。おそらく強引にでもスペインへ連れ帰ろう／連れて行こうとするだろう——ルイスはそう締めくくった。

スペインの財閥ハレヴィ家のコネクションはそうそうたるものだ。軍、企業、政治家等、様々なところに太いパイプが繋がっている。ルイス曰く、「渡航規制が出されているけど、両親がコネクションを使えば強引に来日することも可能」だという。

悠風やひまりたちが沈痛な面持ちになる。

クラールや征士郎も、目を伏せつつ、自分たちの話を聞いてくれた。

征士郎は納得したようにうんうん頷いたが、顔を上げた。

「このまま諦めるのか？」

「え」

「ハレヴィ家の人々が言うから諦めるのか？ ……キミたちの道は、他の誰でもないキミたちのものだ」

征士郎は言葉を続ける。

「道を決めるのはキミたちだ。意志はもう定まっているんだろう？ なら、それをハレヴィ家の人々に伝えればいい」

言わなければ何も変わらないし、変えられない。征士郎の瞳はそう

告げている。

説得、と、ルイスが噛みしめるように呟いた。京都での出来事を思い出し、沙慈も表情を引き締める。

以前、ルイスの両親と京都で会ったときのことを思い出した。

学校の秋休みを利用して京都旅行をしていた沙慈とルイスは、偶然京都へ来ていたルイスの両親とばったり居合わせていた。ルイスの両親が京都に来ていたのは、日本にある名家の名家筋からルイスへのお見合い話が持ち上がったためだ。その本家が京都にあったので、観光がてら話をするために訪れたのだという。

その後はルイスと共に彼女の両親と戦い、石破ラブラブ天驚拳の打ち合いの後に和解し、一緒に京都旅行を楽しんだ。彼女の両親は「見合い先に断りを入れてくる」と言って別れた。相手の家の名字はとても珍しいもので、同じ苗字は全国に片手で数えるくらいしかないという。ルイスとは10歳以上、年の離れた相手だったらしい。

後でルイスの両親が見合い予定だった相手に連絡を取ったところ、「そんな話は聞いていない。断ってくれて助かった、本当に感謝している」というお電話を頂いたそうだ。母親や双子の姉が行った暴挙だったらしい。本人の意思と無関係に事が進むなんて、酷い話ではないか。それと同じことに、沙慈たちは直面している。

あの日、沙慈たちは「離れたくない」という意志を貫いた。ぶつかり合いの末、ルイスの両親に認めてもらえた。

もう一度同じことをする。ルイスの両親を説得し、日本に残るために。そう考えた途端、不安が湧き上がってきた。

(説得、できるのかな)

京都のときは『ルイスへの見合い話』という単語で吹っ切れてしまったが、今回は自分の娘と未来の婿殿を想っての行動である。その好意は確かに嬉しい。

だからこそ、断りづらいのだ。優柔不断で意志が弱いと言われているのは伊達じゃない。悔しいが、それは事実なのである。沙慈は沈鬱

な息を吐いた。

そのとき、誰かに肩を叩かれた。叩いたのはひまりである。いつの間にか、悠風も席から移動していたようで、沙慈の肩を叩いてきた。一鷹も頷く。

アリスとハルノも、任せろと言わんばかりの勢いで頷き返した。

一鷹が、アリスが、悠風が、名乗りを上げるように身を乗り出す。

「俺たちも手伝います！」

「私もお手伝いします！ 沙慈さんがいなくなるのは嫌ですから」

「大丈夫だ。お前たちの心を素直に伝えれば、きっとわかってもらえる」

そうだ。ここには、心強い仲間たちがいる。だからこそ、ここに残りたい。

彼らの力強い笑みがトリガーとなって、沙慈の決意を固めてくれた。

彼らがいるなら、きっと大丈夫。沙慈はルイスと顔を見合わせ、頷き合った。



絹江・クロスロードが初めてこの喫茶店に足を踏み入れたのは、セキ・レイ・シロエやジョナ・マツカと行動を共にし始めたときだった。自宅と放送局に近い、弟の先輩がアルバイトをしているという喫茶店ということもあり、以後はここで作戦会議を行っている。

「マスター、いつものをお願いします」

「僕も、いつもので」

「わかった。すぐ用意しよう」

シロエとマツカの注文をツーカーで理解した店長——スオル・ダグラスが微笑んだ。いかつい顔であるが、その笑顔はとても気さくで親しみが持てる。

最近は何が頼むのかを見越して、「コーヒーでいいかい？」と確認してくるようになった。このまま通い続ければ、絹江もシロエたちのように「いつもの」で通じるようになるだろう。

そんなことを考えていたら、コーヒーと一緒にちよつとしたデザートが並んできた。顔を上げれば、お茶目に笑うスオルと目が合う。「今日はいいことがあったんだろう？ そのお祝いだ。サービスだよ」と彼は言った。

顔に出ていたのだろうか。絹江は彼にお礼を言いながら、コーヒーを啜る。

つい数時間前、絹江たちの熱意が実を結んだ瞬間を思い返した。渋る編集長を押し切るような形で、ソレスタルビーイング関係の取材を許可してもらったのである。

期限は1か月後。1時間の特番を組むネタを挙げるのが条件であるが、これで大手を振って行動できるのだ。絹江はデザートと一緒に、その事実を嘔みしめる。

デザートのごきと一緒に、充実感とやる気が体に染みわたっていった。

作戦会議は、店内の一番奥の個室で行われている。床には資料、壁にかけられたサイドボードには情報が書き込まれていた。

サービスのデザートを食べ終えた3人は、追加のドリンクを注文して、会議を開始する。

「まずは情報確認ね」

絹江が端末PCを開きながら、言葉が続けた。

「イオリア・シユヘンベルクは21世紀の発明王で、太陽光発電システム基礎理論や機動エレベーター設計の基礎技術等を提唱した人物。私生活や子孫は一切不明だけど、E・A・レイとE・L・エイデルⅡポートマン、E・A・レイの助手であり妻だった女性と関わりがあった模様。イオリアには妻がおり、彼女もまた優秀な技術者だった。E・A・レイの妻が「イニー」、イオリアの妻は「ベル」という愛称で呼ばれていた……」

マツカに視線を向ければ、彼はこくこくと頷く。絹江にも慣れてきたらしく、怯えるような動作が減ったような気がした。相変わらず、マツカの頑張りや目の目を見ない。イオリア・シユヘンベルクに注目し、彼に関する研究を行っていたのはマツカだけだというのに。

それが不憫で、先程もマツカのことを編集長に話そうとした。だが、それを切り出す前に、事実上の取材許可を頂いたのである。そのため、嬉しくてついついすっかり忘れてしまったのである。自分に協力してくれた若き研究者のためにも、特番のネタを挙げてみせよう。そして、協力者として番組に出演してもらおうのだ。

『イオリア・シユヘンベルク本人の情報が極端に少ないので、彼に関わりを持つ人物たちにも注目してみたいです。そうすれば、イオリアに関連する情報が見つかると思ったので……』

砂の山から1粒の砂金を探すようにして、マツカは研究を続けてきたそうだ。彼の努力を思うと、絹江は涙が出そうになる。

資料の山と対峙し、しよつちゆう資料の山を崩しては整理し直す研究者の背中。くたびれきって哀愁漂う背中だと思っていたことが、遠い昔のように思えた。

JNN特配員として世界中を飛び回って多忙な絹江を、シロエとマツカはサポートしてくれた。自らも多忙で激務にも関わらず、だ。

特にシロエは恐ろしい。彼は絹江と共同戦線を張りつつ、モラリア

紛争で使用されたMDや、ソレスタルビーイング否定派の無差別テロの情報を集めては、テレビで論戦を繰り広げている。

そういえば、喫茶店に向かう道中で「MDのAIに関するネタを入手した。しかし証拠が少ない。ただ、近々ぼろを出しそうなので、そのときを待って暴露する」と語っていたか。その横顔は、心底意地悪そうだった。

セキ・レイ・シロエ。敵に回すとこれほどまでに厄介な相手はいない——彼を敵に回した人々の意見である。でも、味方になってくれれば、これ程まで頼れる相手はいない。絹江は心から感謝する。

閑話休題。

絹江は大きく息を吸い、この会議の口火を切るため口を開いた。

「私はE. L. エイデル||ボートマンのことを調べてみたわ。彼はゲッター線関連の基礎理論や月面からのマイクロウェーブを使った衛星機器、現代技術では再現不可能と断定された『次元科学』と呼ばれる高次研究に関係したもの等、きよわく虚憶絡みの技術をまとめた論文を発表してる。彼の弟子にあたる人物としてはK・グライフ博士やN・デイルン博士などが挙げられるわ。この2人の情報もあまり残っていないみたい。目立った活動や論文が残されていないというのが原因なんだけど……流石はイオリア・シュヘンベルクの関係者。文字通りの天才だわ」

絹江はそう言つて、2人の端末に情報を転送した。彼らは真剣な面持ちで端末の情報を確認する。

ふと、シロエとマツカが顔を見合わせた。どちらが先に情報を言うか、視線で相談しているらしい。

文字通りのツーカーだ。彼らの交友関係は広く、大半の人々が彼らとツーカーの仲である。相当親しいようだ。そんなジャーナリストになれば、父のように、真実を追い続ける立派なジャーナリストになれるだろうか。

次は、シロエが述べる番だった。
彼は普段と変わらぬ朗々とした調子で情報を告げる。

「僕はE・A・レイおよびその妻“イニー”のことを調べました。彼は妻の“イニー”共々遺伝子工学の権威として認められています。また、工学にも精通しており、モビルアーマーM・Aの発展理論にしてMSの基礎理論に繋がるものも手掛けたようです。チェスの腕も確かなようで、大会では常に上位に食い込んでいたらしいですよ。後輩の集めた資料や、その他諸々の情報ソースを調べた結果、彼とその妻“イニー”の間には6人の子どもができたことが分かりました。彼らはその後、独立して分家を立ち上げたようです。子どもたちの名前と、彼らと関わりがあったと思しき人々もピックアップしました」

シロエはそう言って、データを示した。

ずらりと並ぶ人物の名前。6人の子どもたちと、その子どもたちと親交のあった人々。

紙媒体にしたら、『A4用紙2枚分、すべての上から下までびっちり名前だらけ』という状態だ。

これは確実に長期戦になる。

1ヶ月で、どこまで調べられるだろうか。

「6人の子どもたちの名前は、レテイシア・リン、ミラベル・プライア、ヒスキ・ハツカライネン、エリク・チェステイエ、ジノヴィイ・チェン、アステリア・トリス。詳しいことはまだ調べていません。これから、というところですね」

「関係者も沢山いるわね。ハウエル・コーナー、グラント・ハーヴェイ……」

「21世紀末のデータベースを探せば、子どもたち、もしくは関係者の子孫に行き当たるかもしれません。頑張りましょう」

絹江を叱咤激励するように、シロエは肩を叩いてくれた。マツカも

領き、次は彼が情報を発表する。

「僕は『ベル』に関する情報を集めました。彼女は、現代の共有者コトヴァレンターや
ヴィジョン共有能力等の下地になるものを残しています。その基礎
論文は彼女の弟子にあたるライヒヴァイン家に受け継がれ、2246
年にアルヴァーシス・ジス・ライヒヴァインによって基礎理論が完成
されました。後にライヒヴァイン家が火事で一族が全滅すると、研究
は彼の弟子にあたる人々に受け継がれて、2270年代後半に理論が
完成したそうです。丁度、史上初の共有者コトヴァレンターが誕生し、増え始めた頃と
一致しますね」

「2270年以前から共有者コトヴァレンターの研究をしていたというの!? まるで、
彼らの出現を予期していたみたいだわ……」

「案外、絹江さんの予想が正解しているかもしれないですね。すべてに
おいてどんぴしゃりですから」

マツカがほわつと笑みを浮かべた。見ているだけで癒される笑顔
だった。絹江も微笑みながら、コーヒーを啜った。

この数カ月間、自分たちは同じものを追いかける同志として頑張っ
てきたのだ。凸凹ではあるけれど、いい仲間たちだと思っている。

絹江個人で追いかけていたら、ここまでたどり着けなかつただろ
う。絹江はしみじみそれを感じながら、小さく息を吐いた。

父はいつも、1人で真実を追いかけていた。そうして、1人で沢山
の真実を報道し、最期は1人で亡くなった。

孤高に、けれど勇敢に戦った父とは違い、絹江は今、シロエとマツ
カに助けられて真実を追いかけている。

いつかは父のようにになりたいとは思うけれど、今の絹江はまだまだ
未熟者だ。誰かの手を借りないとおぼつかない足取りになっ
てしま
う。

だからこそ、絹江『たち』でやり遂げるのだ。シロエとマツカがい
るなら、きつと大丈夫。

真実を繋ぎ合わせて、真実を見つけることができるだろう。絹江に

は、何とも言い難い確信があった。

(さあ、これからが本番よ。頑張らなくちゃ)

絹江は心の中でそう呟きながら、作戦を練り始めたのであった。

◇

「そういえば先輩のお母さん、次の仕事先はアザデイスタンでしたよね。今、国連の視察団が来てるみたいですけど」

「ああ、アレハンドロ・コーナー氏だな。彼は確か、以前ユニオン軍でパイロットをやっていたと聞いたが……」

ひまりの言葉に、征士郎は相槌を打った。

『悪の組織』に勤める宇宙技師／スターダスト・トレイマーに所属するパイロットの征士郎は、仕事柄上、日本を拠点にしつつ様々な国を飛び回っている。今回は母校からの講演依頼があったのと、その他野暮用のために帰国した次第であった。

帰国前は人類革命軍の方に技師として派遣されていたが、相手側の有積によって契約破棄となった。契約時に凍結するはずだった研究を秘密裏に進めていたことが発覚し、以後もその研究を止めようとしなかったためである。

今でもその研究は続いているという。グラン・マの怒りのボルテージが上がっているため、近々『大介入』が行われる可能性があった。そうなれば、待機命令が出されている征士郎やひまりたちにも声がかかることは間違いない。

「そのことで、グラン・マとエルガンさんが大喧嘩したらしいです。といっても、エルガンさんがグラン・マの一方的なお怒りを食らったっ

て感じてでした。『私のマリナ様のお膝元に、なんて下種野郎を送り込みやがったアアアア!?』って。バーストしすぎて社内の一部が吹き飛びましたよ」

「マリナ・イスマイル王女は、アザデイスタンの人々のものだろう。少なくとも、グラン・マ個人が独占していいものではなかったはずだ」
「惚れ込んでるんでしょうね、グラン・マ。この前なんか、ナスカの花を贈ったみたいですよ」

ひまりは花瓶に生けてある花に視線を向けた。白い花瓶には、桃色の花が活けられている。

釣鐘状の花柄かへいには、朝顔の様なラツパ状の花がたわわに咲き誇っていた。

この花の名前は、ナスカという。今は滅びたグラン・マの故郷で、品種改良その他の苦節を経て、初めて咲いた花だそうだ。

ひまり曰く、「花言葉は『希望溢れる未来』、『安住の地』、『滅亡』、『野に生まれ野に死す』、『さよならをキミに』だそうですね、先輩！」らしい。

複雑な花言葉なのは、グラン・マの故郷である惑星が滅ぼされてしまったためだろう。この花が今ここに存在しているのは、星が滅ぶ間際に種を持ってきていたからだ。

グラン・マは、気に入った相手や信頼を置く相手にはこの花を贈る。彼女の想いの結晶と言える、大切な花であった。

「まあ、エルガン代表は大局的な視点から物事を判断するからな。身内や個人のことを大事にしようとするグラン・マと衝突するのは仕方がないのかもしれない。……でも、グラン・マは彼の作戦や判断力を信頼しているし、エルガン代表もグラン・マの決断を尊重している。いいコンビだと思うが」

「成程！ ツーカーってやつですね！ 羨ましいなあ」

征士郎の見立てに納得したのか、ひまりは合点がいったように手を

叩いた。彼女もグラン・マを尊敬している。どちらかというところ、グラン・マとエルガンの関係性に憧れていると言えそうだ。

だが、それを指摘すると、ひまりはむっとした顔をする。「ジंकウスには負けたくないです!」と大きく握りこぶしを振りかざすのだ。彼女は一体何と戦おうとしているのだろうか。征士郎にはよくわからない。

ひまりは機嫌がいいのか、鼻歌混じりで店の片付けに勤しんでいた。スオルもキッチンの片づけを終えて、店の看板を『Open』から『Close』に変える。それを見計らったかのように、1人の男性が店内へ足を踏み入れてきた。

黒に茶色のメッシュが入った髪をオールバックにし、くすんだ茶色のコートとロングブーツをはいた、鋭い瞳を持つ男。

彼はスオルと征士郎たちに軽く会釈すると、さも当然と言わんばかりの勢いで店内の椅子に腰かけた。

ひまりもスオルも、そこに突っ込みを入れなかった。征士郎も、そこに突っ込みを入れなかった。

スオルは男性へコーヒーを差し出す。男性の好みは把握済みだ。

コーヒーを啜った男性はゆるりと目を細める。今回も好評だったようだ。

「そっちの調子はどうだ?」

「相変わらず、どこもかしこも地獄だよ」

スオルの問いに、男性はくつくつ笑った。苦笑にも見えるし、自嘲にも見えるような笑い方だった。

「人革連の超兵機関は、相変わらず稼働し続けている。この一件が漏れれば、ソレスタルビーイングの介入は確実だ。超兵つてのもまた、戦争に使う兵器に当たるからな」

「それに関する情報は?」

「ガンダム鹵獲作戦終了を待って、機関に流される手はずになってる

よ。ソレスタルビーイングのほうは勝手に介入行動に走るだろう。自分と同じ兵器（せんぎ）が生み出されようとしているのを、黙っ（もく）ていられない人間がいるからな」

スオルと男性はひとしきり雑談を続けた。
男性はちらりと征士郎たちを見る。

「そのときは、俺経由で、お前さんたちにも出動要請が出るだろう。よろしく頼むぜ？ お2人さんよ」

「わかっています。こちらこそ、よろしくお願いします。リチャード少佐」

征士郎は男性——リチャード・クルーガーに向けて一礼した。ひまりもぺこりと頭を下げる。

リチャードは気楽に笑いながら、ひらひらと手を振ってみせた。そして、どこか遠くを見つめながら、深々と息を吐く。

「また、恨みを買っちゃまうな……」

リチャードはそれだけ呟いて、立ち上がった。コーヒーカップは空になっている。カランコロンとベルが鳴り響いた。彼の背中を見送る。

彼の部隊に所属している人々は、公には『流れの傭兵』として情報収集活動を行っていた。『悪の組織』では到底引き受けられないような依頼を引き受け、その依頼を達成する』という名目で、スターダスト・トレイマーが介入行動を行うための方便を作るのだ。

今回の『人革連における超兵施設への大介入』作戦も、『リチャード・クルーガーという傭兵が引き受けた』というお題目を使うつもりなのだ。人革連も一枚岩ではない。超兵機関の存続を望む者がいる一方で、そこを跡形もなく消し飛ばしてほしいと願う者もいる。

証拠隠滅という言葉に魅せられる者は必ずいる。いなければ、『人

類革命連合に所属していた者からのタレコミ』という手を使うことになるだろう。エルガン代表が悪い笑みを浮かべて作戦を練る姿が頭に浮かんだ。本気を出せば世界すら騙せる男——グラン・マの発言が脳裏に浮かんだ。

今頃、彼の秘蔵つ子も準備運動をしている頃だろう。ひまりが「セキさんがアップを始めている姿が『視え』ます！」と、きよろきよろし始めた。

ひまりセンサーは今日も好調のようだ。この調子で、速く立派なパイロットになってほしいものである。

「征士郎、ひまり。いざというときのために、エグザートの整備を万全にしておけ」

「わかりました。早速取り掛かります」

「了解しました！」

征士郎とひまりは敬礼をし、慌ただしい足取りで地下へと向かった。

地下は格納庫となっている。大きな布を取り払えば、白と黒を基調にした機体——エグザートが姿を現した。

亡き父が搭乗していた機体を改良したものであり、父から託された想いと使命の結晶だ。征士郎の思い入れは強い。

同じ使命を受け継いで、別な場所で戦う友人たちがいる。

だからこそ、征士郎は負けていけない。

友の背中を忘れたことは、一度もなかった。

目を閉じる。あのときの出来事は、今でも色褪せない。

『頼んだぞ、征士郎』

『来るべき日のために、希望を守り抜いてくれ——！』

父の言葉を思い出しながら、征士郎は機体へ手を伸ばす。金属の質感を撫でながら、次の任務に想いを馳せたのであった。

24. 流れる星

「新しいシミュレーターの配信、凄かったよな」

「今までのヤツにもストーリーリー性が追加されたから、俄然やる気が出るよ」

「でも、虫の女王戦は切なすぎんだろ。最期に、女王を乗っ取っていた女性がなあ……」

「どうしてマネージャーでいられなかったんだろう。でも、最後に戻れてよかったのかもしれないな」

「この前、『頭に響くんだよオ！ 叫んでばかりでえ!!』って言ってシミュレーター殴って壊した奴がいたんだ。おかげで、しばらく金属生命体関係は配信停止だつてさ」

「以前は違う奴が『ズール皇帝は正義だ!』って喚き出した挙句にボヤ騒ぎ起こしたらしくて、それ関係のやつも配信停止されたんだよな」

「心を読む力を持った敵に、どう対応すればいいんだろうな」

「俺、嫁への愛を語ったら倒せたぞ」

「僕は恋人のことを」

「独身喪男でも勝てる方法はないのかーッ!!」

「俺、自分がいかにモテないかを延々と語り続けたら撤退されたぞ。シミュレーター内外含んで、周囲の奴らもいなくなつてた」

兵士たちの雑談が響く。この場合は、シミュレーターの話題で持ち切りだ。その様子を、クーゴは椅子に座って眺めていた。

つい最近アップデートされたのが原因だろう。これもまた、〃多元世界技術解析および実験チーム〃の功績だ。

内容を聞いていると正直反応に困るが、とりあえず、クーゴは曖昧な笑みを浮かべるに留めておく。

ユニオン軍基地には、特に目立った変化はない。AEUも、特に目立った動きはない。モラリア紛争以後、三大国家のうち2つがソレスタルビーイングを静観している。

唯一公式に徹底抗戦を掲げているのは人類革命連合だ。セイロン

での紛争介入でコテンパンに伸ばされたことが尾を引いているらしい。そういえば、親戚が『セイロンへの武力介入の際、基地にロシアの荒熊を着任させたのは、あわよくばガンダムを鹵獲しようとしていたためだ』なんてことを言っていたか。

軍事関係を追いかけているジャーナリストだ、情報の信憑性は高い。他にも、『亡くなった同僚の娘でジャーナリストの後輩が、頼れる仲間たちと一緒にソレスタルビーイングを追いかけている』という話もしてくれた。

いざというときの情報提供役になってくれと頼まれたが、正直、一介の軍人にすぎないクーゴでは役として力不足ではなからうか。それに、『友人の恋人(?)がソレスタルビーイングの構成員です』だの『俺の友達がソレスタルビーイングの構成員です』なんて言えるはずがない。

不意に、ゼクスの妹である少女——リリーナ・ドーリアンの後ろ姿が浮かんだ。養父は外務次官、実の兄は軍人（後に王から秘密組織のMSパイロット）、信頼するパートナーはテロリスト（後に秘密組織のMSパイロット）。こちらもこちらで、気が遠くなる構成であった。

「どうしたんだ、ぼうっとして」

「いや、なんでもないよ」

紙コップを両手に持ったグラハムが、クーゴの表情を覗き込んだ。クーゴは静かに首を振る。

グラハムから紙コップを受け取った。ブラックコーヒーの水面に自分の顔がぼやけて映る。見事な間抜け面だった。

これではいけない。クーゴは半ば呷るようにしてコーヒーを啜る。

胃に重たい一撃が入ったような錯覚に見舞われた。

鋭い苦みに気圧されるようにして、思考回路を切り替える。

それを確認したグラハムが、真剣な眼差しを向けてきた。

「人革連の様子が不穏なのは知っているか？」

グラハムの言葉に、クーゴは頷く。

「あそこは唯一、ソレスタルビーイングに対して徹底抗戦の構えを示しているからな」

「諜報部曰く、近々大規模な作戦が行われるという。……キミは、どう見る?」

グラハムの翠緑の瞳がじつとクーゴを見つめる。クーゴはコーヒーを飲み干し、自分の考えを述べてみた。

「ユニオンで言うガンダム調査隊の人革連版が『頂武』部隊。その指揮官は、ロシアの荒熊と名高いセルゲイ・スミノルフ中佐。指揮官としてもMSパイロットとしても優秀だ。物量的な面や投じられた予算的な意味合いから見ても、本気の布陣だろうよ。……あわよくば、鹵獲も狙ってるんじゃないか?」

「そうか」

彼はそれきり言っつて、ふいつつ視線を外した。眼差しの先には、分厚い曇天で阻まれた空が広がっている。

グラハムは、あの曇天の向う側に広がる空の、そのまた向う側にある宇宙そらを見ているのだ。

その先にはきつと、いいや確実に、白と青基調のガンダムと意中の少女がいるのだろう。

クーゴは、そんな親友の姿に深々と息を吐いた。翠緑の瞳に滲むのは、明らかな嫉妬の色だ。

西洋圏やアメリカでは、緑は嫉妬深い色だと言われている。今のグラハムにはお似合いだった。

「緑の目を持つ者は嫉妬深い、ねえ」

「どんな意図を持ってそんなことを言うんだ、キミは」

グラハムが非難めいた視線を向けてきた。眉間に皺を寄せて、口がへの字に曲がっている。不機嫌そうな表情は、どこか子どもっぽさを醸し出していた。

その顔のどこが嫉妬じゃないんだよ、と、クーゴは内心苦笑していた。本当にわかりやすい。我慢弱く感情の起伏が激しめな彼らしかつた。

普段は冷静沈着なのに、どうして戦闘時や恋愛関係のことになると振り切れてしまうのか。ストッパー役も楽ではない。だからといって、辞めるつもりもないが。

グラハムはどこかそわそわした様子で、また曇天へと視線を向ける。

何かを察したように、険しい眼差し。その横顔に燦るのは、焦燥。結局は嫉妬じゃないか。クーゴは生温かく微笑んだ。

「……キミは何か勘違いしているようだが」

クーゴの視線に思うところがあるらしく、グラハムはクーゴを咎めるかのように弁明した。

「私のガンダムと刹那天使たちが、他の男に口説かれているのを見ていることしかできない……それが歯がゆいだけだ。彼女は私の、愛しの君なのだからな」

「……………素直に嫉妬していると認めろよ」

「私はそこまで女々しくない!」

「はいはい」

食って掛かってきたグラハムをいなし、クーゴは端末を開いた。人革連の宇宙領域に、大量のレーダー衛星がばら撒かれている。

網羅されたのはその8割強。彼らは、あの粒子が通信障害を引き起こすことを逆手に取ったのだろう。物量も作戦も大規模であった。

魚は網にかかるのか。クーゴは固唾を飲んで画面を見守っていた。グラハムは空を見上げてる。その横顔は、やはり険しい。自分が口説き落すのだと憚らない相手を、他人がかすめ取るような形で口説いているのだ、我慢強い男が耐えきれぬはずがない。

次の瞬間、端末画面に動きがあった。電波障害が発生した宇宙領域に向かつて、戦艦やMSの反応が動き出している。詳しい反応を探ることはできないが、指揮官同士が激しい読み合いを行っていることだけは伝わってきた。グラハムが空から視線を戻し、クーゴの端末を覗き込む。

戦闘画面が表示された。見たことのないデザインの輸送船が映し出される。もしかして、あれがソレスタルビーイングの母艦なのだろうか。たった1隻の輸送船とガンダムで、彼等は世界を変えようとしているのだ。そう考えると、どれ程無謀かがよくわかる。

可変機と重装甲の機体が飛び出していく。何機かが2機のガンダムに追従したが、本体は輸送船の攻撃のために残った。ソレスタルビーイングの指揮官に、セルゲイ・スミノルフが僅差で競り勝ったのだ。

「成程な。あの2機は陽動用か」

「形勢逆転。これで、裏をかかれたソレスタルビーイングが不利だな」
護り手のいなくなった空母は、ほぼ無防備状態だった。白と青基調のガンダムと、白と緑基調のガンダムと、純白のガンダムが迎撃に回る。

その一方で、白とオレンジ基調のガンダムと白と紫基調のガンダムはじりじりと追い詰められていく。ついに、人革連の手が2機のガンダムに伸びた。

あとはそのまま、2機の天使を連れ去るのみだ。

ついに天使が地に落ちたのか——と、クーゴが思ったときだった。

「——え」

次の瞬間、モニター画面に青い光が爆ぜる。

一拍おいて、人革軍の反応を示すマークがごっそり消えた。ガンダムを鹵獲しようとしていた戦艦も、MSも、綺麗さっぱり反応がなくなってしまう。神隠しの類にもよく似ていたが、実際はそれより恐ろしい事態である。

戦艦とMSがコンマ一瞬で殲滅されたのだ。クーゴとグラハムは目を剥いた。一体全体、この宇宙領域で何が起きているのだろうか。しかし、更に、端末画面には信じられないものが映し出された。

「白い、鯨……？ いや、違う。戦艦か!？」

「なんだあのデカさ!?! 1000メートル近い超大型じゃないか!」

クーゴとグラハムは戦慄した。戦艦や輸送艦は、大抵200m〜500m級が普通である。

しかし、画面に映った白い戦艦は、人革連の戦艦やソレスタルビーイングの母艦よりはるかに大きかった。

人革軍のMSや戦艦、ソレスタルビーイングの母艦など歯牙にもかけず。白い鯨は我が物顔で、宇宙という海をゆったりと泳いでいた。

鯨の尾っぽには、何かの紋章が描かれていた。金色の双翼が宝玉を抱き、それらに寄り添うような形で桃色の花が咲いている。釣り鐘状の花だった。

白い鯨は悠々と宇宙を泳ぐ。ソレスタルビーイングや人革軍など、鯨の群れにしか見えないのだろう。気にすらしていなかった。

その混乱に乗じるようにして、ソレスタルビーイングとガンダムの反応が消失した。入れ替わるようにして、白い鯨は宇宙に溶けるようにして消え去る。

獲物を失ってしまった人革軍は撤退する以外にない。彼らの反応は疎らになり、ついに撤退を終えた様子だった。宇宙領域から、全ての反応が消え去る。

クーゴは端末を切る。入れ替わるようにして、今度はグラハムが

深々と息を吐いた。どこか複雑な感情が揺らめいているように思う。

「お前さ」

「何だ？」

「喜びたいのかガツカリしたいのか、どっちなの？」

「どうかな」

グラハムはくつくつ笑った後、再び窓の空へと視線を向ける。曇天の切れ目から、優しい陽光が降り注いでいた。

「……また会うときまで、誰の手にも落ちるなよ。我が愛しの君」

刹那とガンダム
天 使を落とすのは他ならぬ自分なのだ——そう信じて疑わない、澄み渡った翠緑。

狂氣的なまでに綺麗な宝玉に、クーゴは面食らう。

「公私ともに落とすつもりか」

「落としてみせるさ、必ずな」

「公こうでは落とされそうになったところを見逃してもらい、私しでは真っ先に撃墜されたじゃないか」

「キミは的確に地雷を踏みぬいてくれるよ」

グラハムはムツとした表情でクーゴを睨んだ。クーゴはさつと視線を逸らす。

暫くしたら、アイデアにメッセージでも送ってみよう。

現実逃避がてら、クーゴはそんなことを考えた。



例えるならそれは、流星のようだった。

青く透き通った光が縦横無尽に駆け巡る。その軌跡に触れたMSが、反応をする前に爆発してしまった。

いや、MSだけではない。その光は戦艦すらぶち抜き、ときには派手な爆発を引き起こさせて消し飛ばしていく。

爆発。爆発。爆発。爆発。爆発。爆発。パイロットたちの、断末魔の悲鳴が聞こえてきそうだ。

鹵獲用の罫も、あつという間に宇宙の藻屑に変わった。残されたのは、怖いくらいの静寂。

「一体、あれは……」

今、目の前で繰り広げられた光景は、わずか数十秒の出来事である。追い込まれていたヴァーチェとキュリオスは、鹵獲寸前の危機から脱したのであった。

流星は光を放ちながら、宇宙の底へと消えていく。それを、ティエリアとアレルヤは見送ることしかできなかつた。

「やつと通信が繋がった……！ 2人とも、大丈夫!？」

戦術予報士であるスメラギの、焦ったような声が出た。無事を返答すれば、安堵のため息が聞こえる。

帰投の意を伝えようとしたとき、ティエリアとアレルヤは思わず息を飲んだ。

自分は今夢を見ているのではないか——そう錯覚してしまいそうな光景が、眼前に広がったのである。

例えるならそれは、白い鯨だった。

ガンダムを大きさを比較すると、鯨と鰐並みの差がある。

プトレマイオスと比較すると、鯨とシャチ並みの差がある。

「なんだあれ……!?!」

「こんな艦、ヴェーダにはない……!」

鯨は2人の驚きもなんのその、ゆったりと宇宙を泳いでいた。自分たちが何をやっても、あの艦にとつては虫刺されにもなりはしないだろう。

自分たちの生殺与奪を握っているのは、あの艦だ。ティエリアとアレルヤはそう直感し、ごくりと生唾を飲む。鯨は、そんなガンダムマスターの心境など無関心だった。

ゆっくり、ゆったり、悠悠自適に、鯨は宇宙の闇の中へと消えていく。その姿が完全に消えた後で、ティエリアとアレルヤは脱力した。

そこへ、暗号回線を使った通信が入る。

画面には『貴方たちは今、死ぬべき人間じゃない。命を粗末にするな。次やったら、どんな手段を使ってもぶっ生き返す』という文字が点滅していた。

2人の口元は盛大にひきつったが、他の面々からの通信が入ってくる。

「ぶっ生き返すって、どういうことだよ……」

「ぶっ殺すの反対なんじゃないかな」

「意味が分からない」

ロックオンが深々と息を吐き、アレルヤは苦笑した。ティエリアはそれを切り捨てる。

「あの艦、いったい何なの……?」

「兎にも角にもラツキーですね。あの艦が現れなかったら、現状はもっと悪化していたはずだし」

「不思議っすよね。流れ星の次は白鯨みたいな艦か。ファンタジー小説を読んでいる気分だなあ」

スメラギが考え込み、クリステイナがほつと安堵の息を吐いた。リヒテンダールは余韻覚めあらぬと言いたげに声を震わせている。

後ろの方では、イアンが勝手に盛り上がっている声が聞こえた。彼の研究者魂に、あの艦は火をつけて油とグリセリンを撒いたらしい。近くにいた乗組員とその場を転がっていたハ口たちが、彼の説明の巻き添えを喰らってゲツソリしていた。

ソレスタルビーイングのメンバーたちは、どうにか危機を乗り越えたらしい。

「エクシア、これより帰還する」

「スターゲイザー、今から帰ります」

刹那とイデアの声を皮切りに、ガンダムマイスターはプロレマイオスへと帰投したのであった。

*

「あれ？ イデア、焦げ臭くない？」

クリステイナの指摘に、イデアはびくんと肩をすくめた。

「……き、気のせいじゃないかな」

「そうかなー。とりあえず、シャワー浴びてきた方がいいよ。イデア、汗まみれじゃない」

クリステイナはそう言つて、イデアの肩を叩いて去っていく。それを見送った後、イデアはそそくさとシャワールームに直行した。

もう一度匂いを嗅いでみる。やはり、うっすらとだが焦げ臭い。ちよつと無理しただけだったのに、と、イデアはがっくり肩を落とした。

パイロットスーツも新調しなくてはならない。『悪の組織』に専用の生地を融通してもらわなくては。摩擦熱とアイデアの能力に耐えるくらいなの。

よく確認すれば、煤けている部分があった。

原因はもちろん、摩擦熱とアイデアの能力である。

「そう考えると、『同胞』が着ている制服の凄さがよくわかるな。宇宙圏を飛び回っても、摩擦熱で燃え尽きたりしないもの」

アイデアは小声で呟きながら、シャワーの蛇口をひねった。

大量のお湯が流れていく。頭からお湯を被った後、アイデアはシャンプーを泡立てて頭を洗った。泡を流し、もう一度シャンプーで頭を洗い、お湯で流す。次にトリートメントで髪の毛を整え、10分ほど待つてから洗い流した。メはリンスである。全てが終わったとき、甘い蜂蜜の香りがふわっと漂った。

髪を洗い終えた次は、体だ。頭をタオルで包み、ボディソープを泡立てる。爽やかな柑橘系の香りが鼻を満たした。アイデアはそれを楽しみながら、体を清める。シャワーで泡を流してしまえば、摩擦熱で焦げた臭いなど残らなかった。これでもう大丈夫だろう。体を拭いて、普段着の1つである青いワンピースを身に纏った。

風呂上りは本当に気持ちがいい。アイデアが鼻歌混じりで踏み出したとき、アイデアの端末が鳴り響いた。開いてみると、メッセージの送り主はクーゴである。『キミは白い鯨を見たことがあるか？ 宇宙を泳ぐ鯨だ。今しがた、俺はそれを目撃したよ。とても綺麗だった』——アイデアはゆるりと目を細めた。それが何を意味しているか知っていて、尚。

次のメッセージには、『グラハムは本気で、公私ともに刹那を落とすつもりだ。彼女に（いろんな意味で）気を付けるようにと言ってほしい』とある。

もう遅い。アイデアは直感した。廊下をしばらく歩くと、件の刹那が壁に背を預けてへたり込んでいる。口元を手で覆っているが、耳や頬

は真っ赤だった。

「あんたは、本当に、もう……」

ゆつくりと、刹那の口元から手が離れた。口元には、少し震えた微笑。ちよつとだけ泣き笑いに近い横顔だった。

イデアは悟る。どうやら、グラハムが何か言ったらしい。真摯な想いが、刹那の心に少しづつ光を見せてくれている。

とても喜ばしいことだ。この調子で、刹那が『自分の手でも何かを守ったり、作り出したり、幸せにすることができると認められるようになってくれたらいい。

「せーっなっ!」

「!!?」

驚かすようにして声をかければ、刹那はびくつと肩をすくめてイデアを見上げる。威嚇する猫みたいに体中の毛を逆立たせた刹那の様子に、イデアはゆるやかに目を細めた。瞬間、刹那の顔が一気に顔面蒼白になった。

「自分が獲物^{ターゲット}として狙いを定められた」、「逃げられない」——絶望に満ちた感情に触れる。これは根掘り葉掘りしすぎたか、と、イデアは苦笑した。今回は大人しく引き下がるとしよう。

イデアが追及してこないことを察した途端、刹那は露骨に安堵の表情を浮かべた。それはそれでちよつと寂しい。ついでに悔しいので、鎌をかけてみることにした。

「グラハムさん関係で、何かいいことあったの?」

「……………何もない」

「本当に?」

「何もない!」

刹那は顔を真っ赤にして、端末を片手に駆け出してしまった。お守りについた鈴の音色が聞こえる。その音は、刹那の背中と共に遠くなくなっていった。

アイデアはニマニマと笑みを浮かべた。恋と愛は本当にいいものだ、と、心の中で唱える。尊敬するグラン・マがよく言っていたことであつた。

そうして、アイデアはゆっくりと首を動かした。振り返った先には、デバガメよろしくな男3人組——ロックオン、アレルヤ、ティエリアが、廊下の角からこちらを覗き込んでいたところだつた。

アイデアの視線を待つ正面から受け止めた3人がぎよつと肩をすくめる。「気配はきちんと消していたはずなのに」と言わんばかりの表情だ。アイデアがゆるりと笑みを浮かべれば、今度は彼らが絶望に満ちた表情を浮かべる。

真っ先に戦線離脱を図ったティエリアの手を、ロックオンとハレルヤが掴んだ。後者はいつの間にも人格を交代チェンジしていたのだろう。2人とも、どこか悪い笑みを浮かべている。逃げるな、逃がさない——スナイパーと反射代表の目がぎらついた。

『ハレルヤ、ティエリアだけでも逃がしてあげて！ ロックオンもやめたげてよお!!』と叫ぶアレルヤの悲鳴が聞こえる。しかし、その悲鳴はすぐに途切れた。

死を覚悟したような、どこか虚ろな瞳を向ける3人組。ついに、ティエリアとアレルヤも観念したらしい。

アイデアは更に笑みを深くした後、男3人組へと歩み寄つた。彼らのことも、しつかり根掘り葉掘りするため。



「こんにちわ、エイミー。久しぶりですね」

病院の207号室。久々に手にした休暇で、テオはその部屋を訪れた。

エイミーは相変わらず眠り続けている。ベットサイド脇の花瓶には、純白のユリの花と釣り鐘状に咲いたピンクの花が活けてあった。後者はこの近隣で見かけないものだ。そういえば、友人の妹分が「近々、恋人の家族に挨拶しに行く」と言っ、ピンクの花束を手にしていくことを思い出す。

テオには、それが花瓶に活けられた花だとすぐに見当がついた。どちらの花も瑞々しく、前者は花屋で購入、後者は社内の花壇から採ってきたばかりだろう。

「その様子だと、お兄さんたちが来たんですね？」

意識不明の少女が答えられるはずがない。けれどテオは、エイミーの発言を待っているかのようには黙っていた。

幾何かの時間が過ぎて、テオは表情を緩める。そして、ぱあっと表情を輝かせた。

「未来のお義姉さんたちを紹介してもらったんですね！ 2人とも、美人だったんですね」

しかし、テオの表情はすぐに曇った。

何とも言い難そうに視線を彷徨わせる。誰かの感情をなぞる様に、テオは花瓶の花へと視線を向けた。

花瓶の色もまた、ユリと同じ純白である。アクセントとして、くびれた部分に銀色のラインが引かれていた。

まるで、花嫁が持つブーケを思わせるような花瓶である。しばらくテオはそれを眺めていたが、エイミーへ視線を戻した。

「……いつか、貴女もなれますよ。綺麗な花嫁さんに」

どこか悲しそうに、テオは微笑む。
ややあつて、また彼は口を開いた。

「お兄さんたちも、おんなじことを？ ……でしょうねえ。お2人も、エイミーのことが大切ですからねー」

次の瞬間、テオの表情が引きつった。こめかみに青筋が走り、かすかに肩が震える。

少し悩むように視線を右往左往させて、テオは大きいため息をついた。

知り合いたちが今のテオを見たら、「哀愁漂う表情」だの「ゲツソリしてる」だのと言いきそうだ。

テオはしばし黙り続けた。

そうして、弁明するかのように口を開く。

「僕の場合は、相手待ちなんです。あくまでも相手待ちなんです。

……そもそも相手がいない？ 知ってます。知ってますから。——
……やめてください、それ以上僕の傷をえぐらないで!!」

「お願いだから、婚活婚活連呼しないでくださいよ!」と、テオは悲痛な声を上げた。琥珀色の瞳に涙が浮かんでいるように見えるのは、きつと気のせいではない。

しかし、テオの発言が止まった。

ややあつて、テオは再び口を開いた。

「……だと、いいんですけどねえ」

涙を拭い、テオはようやくやく本題に入ることにした。持ってきていたタブレットを引っ張り出して、凶面をエイミーに示す。

もちろん意識不明の患者が反応するはずがない。テオは気にする

様子もなく、彼女に説明を始めた。

説明し続けた後、テオはじつと返答を待つように口を閉じた。白い部屋には静寂が訪れる。

時計の針が動く音がした。それと同時に、テオはふつと表情を緩める。

「満足して頂けたようで何よりです」と言つて、端末を鞆にしまう。

「心配して頂けるのは嬉しいです、エイミー。でも、僕は大丈夫なので。他にも、やるべきことは山積みですからね」

「それにしても」と、テオは言葉を続ける。

『『ホワイトベースを建造してくれ』と頼まれたときは、正直びつくりしましたよ。動力源は4連装熱核ハイブリッド・エンジン・システム2機とミノフスキー・クラフト・システムの代用品として、GN粒子とS・Dから引つ張り出した技術で専用ドライヴを1から作らなきやいけないし、武装の再現および供給目途も立たないし、死ぬかと思っっちゃいました。突貫工事でしたが、間に合いそうです』

テオは苦笑した。そうして、時計を見て立ち上がる。

そろそろ戻らないと面倒なことになる。ぺこりと頭を下げた。

「それじゃあ、また来ます」

テオは207号室から出て、病院の階段を駆け下りる。少しだけ慌ただしく、病院を後にした。



「さて」

ノブレスは、どこまでも悪い笑みを浮かべながら凶面を見ていた。リボنزも、悪戯を企てる子どものような微笑を浮かべている。

「これが、アルヴァアロンとアルヴァトローレの凶面か」

「そうだね。開発は着々と進んでるよ」

ぷくぷくすくす。

2人の笑い方に擬音を付けるとするなら、そんな笑い方がよく似合っていた。

2人は凶面を拡大させた。実は、この凶面には所々欠陥があるのだが、アレハンドロ本人は全く気付いていない様子だった。

嘗てユニオン軍のパイロットとしてリアルドを駆っていたアレハンドロ・コーナーであるが、凄腕という訳ではなかった。

そのくせ、ソレスタルビーイングの最年少パイロットを目の敵にし、自分こそがガンダムに乗るのに相応しい思っている。

機体の外観は、本人の強すぎる希望のおかげで金ぴかになった。放出されるGN粒子やビームの色まで金ぴかに統一されている。黄金趣味に気が遠くなった。

おかげで、もうしばらく金色は見たくない。見るだけで、ちょっと吐き気を催すようになった。リボنزに至っては飽き飽きしてしまったという。

(本来なら、毒々しい金色じゃなかったのに)

ノブレスは深々と息を吐く。

その凶面を初めて見たときのことを回想しながら。

「で、どうするんだい?」

リボンはゆるりと目を細めた。
ノブレスも、にやつと笑う。

「まずは、『モニター画面を叩いたら爆発する』仕掛けでも作ろうか」
「それはいいね！」

そこにいたのは、どこからどう見てもクソガキ2人組。
ノブレスとリボンは楽しそうに笑いながら、くだらない嫌がらせ
を機体に施していくのだった。

◇

爆ぜる。

蒼が爆ぜる。

すべてを破壊する勢いで、星が流れていく。

戦艦が吹き飛んだ。

戦闘機が吹き飛んだ。

戦艦と戦闘機が吹き飛んだ。

藻屑だけが、宇宙に残った。

爆ぜる。

蒼が爆ぜる。

すべてを破壊する勢いで、星が流れていく。

戦艦が吹き飛んだ。

戦闘機が吹き飛んだ。

戦艦と戦闘機が吹き飛んだ。

藻屑だけが、宇宙に残った。

そうやって、何度『牙』として戦ってきただろう。
女性は今までの軌跡を思い出して、大きく息を吐いた。

「もうすぐ、青い星につく」

女性は、宇宙を見上げていた。宇宙に散った命を想い、そこまで自分たちを導いた指導者を想う。

長かった。ここまでたどり着くために、沢山の命が宇宙に散った。父も、母も、友も。『同胞』たちの多くが命を落としたのだ。

「そうしたら、きつと、グラン・パも笑ってくれる」

祈るような気持ちで、女性は手を組んだ。

青い星へ向かう旅路に疲れ果てた『同胞』たちは、逃れの星にたどり着いた。その星は、人類が植民惑星化に失敗して、打ち捨てられた星だった。

『同胞』たちはその星にナスカと名付け、開拓を進めた。ナスカの大地でトマトが育ち、花が咲き、穏やかに暮らしてきた。そこで、女性や友人たちも生を受けた。

開拓が進む度に、グラン・パは嬉しそうに笑っていた。皆が喜んでくれると嬉しいのだと、彼は笑っていたのだ。女性は彼の、太陽のよきな笑顔が大好きだった。

その笑顔が消えてしまったのは、ナスカが消滅した直後だった。名実ともに、彼が指導者となった瞬間からだ。笑ってくれなかった。いくら話しかけても、敵を倒しても、グラン・パは笑ってくれなかった。

「昔みたいに、笑ってくれる。……そのために、頑張ってきたんだから」

女性は宇宙を見上げていた。宇宙に散った命を想い、そこまで自分

たちを導いた指導者ソルジャーを想う。

ナスカが滅んだあと、青い星テラを目指して自分たちは突き進んできた。グラン・パも、わき目も振らず突き進んでいた。

戦闘員をしている『同胞』も、ナスカで生まれた子どもたち——女性の幼馴染3人組——アルテラ、タージオン、コブも、犠牲になった。閃光系の爆弾に飲み込まれたタージオン、機関銃でぶち抜かれたコブ、奇襲に失敗して逆に返り討ちにされたアルテラ。

思い出すだけで、胸が苦しくなる。もうこれ以上、誰かが死んでしまふのは嫌だ。女性は手を強く握りしめる。

「もう誰も、死なないで」

女性は祈る。ただただ、祈り続ける。

旅の終わりはもうすぐだ。もうすぐ、青い星テラへとたどり着く。

『同胞』たちが樂園と信じ、返りたいと願った惑星ぼしよ。

どうか、何事もなく青い星テラに辿り着けるように。

どうか、その先に皆の笑顔があるように。

どうか、その笑顔が欠けることのないように。

*

その祈りは、散々打ち碎かれるのだ。

知っていて、でも、祈らずにはいられない。

たとえばそれが、愚かなことであろうとも。

「最っつっ悪」

いつの間にか、ふて寝してしまっただらしい。手鏡で顔を確認すれば、顔面にはきっちり手の跡が残っていた。

せめてもの抵抗に、と、肌を引っ張ってみたが、気休めにもなりはしなかった。本当に酷い顔である。

「畜生。こんな醜態を晒す羽目になったのは、すべてアレハンドロ・コーナーのせいだッ！」

女性は醜悪な顔で吐き捨てて、拳を平手に打ち付けた。

現在、女性はアザディスタンにいる。先日の技術提供の件で、マリナ・イスマイルと話し合うためだった。

しかし、先約として入っていたアレハンドロ・コーナーとの会談が長引いてしまっているため、ずっと放置されているような状態である。

民間会社の代表取締役と、国連大使。どっちが優先されるかなんて明らかだ。頭では分かっている。だから、自分はずっと待っていた。

応接室で放置されること、3時間。時計の針は進み続ける。

もしかしたら4時間目に突入するかもしれない。

「ああもう。今日は昔の夢を見ちゃうし、アレハンドロのせいで3時間放置プレイだし、マリナ様には会えないし！ とんだ厄日じゃない」

女性は深々と息を吐いた。アザディスタンを救うために強い力を持ち得るのは、民間企業よりも国連大使であることも明らかだ。だから、慣れないながらも必死になって外交をするマリナの気持ちはよくわかる。

だが、女性は知っていた。アレハンドロ・コーナーには、その気など一切ないことを。奴の底から漂う悪意は、本当に反吐が出る。今すぐバーストして吹き飛ばしてしまいたいほどだった。

その気持ちは漏れてしまったせいかわ、自分の脇に置かれていたコップが派手な音を立てて破裂する。昔から、よくこういうことを起こしては、グラン・パや両親を心配させていたか。懐かしい。

落ち着け、と、女性は己に言い聞かせた。

ここでことを荒立てたら、マリナに会えなくなる。

彼女の笑顔を思い浮かべた。それだけで、何時間でも待ちぼうけいられる。

たとえば数世紀放置されることになっても、マリナ・イスマイルの笑顔を見られるなら安いものだ。それこそ、『牙』時代よろしく戦艦を殲滅したり、人間を消し飛ばすことだってやってみせよう。

しかしながら、それを本気でやってしまったが最後、彼女は二度と女性に会ってくれなくなるだろう。それも嫌だ。女性はぶんぶん首を振る。今は、静かに待ち続けるほかない。女性はマリナの横顔を思い浮かべながら、待ちぼうけを続けたのだった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

25. 蠢く世界

ユニオンの空は、今日も青い。

遠くには、飛行するフラッグから発生した飛行機雲が綺麗な尾を描いている。

「隊長。人革さんが、ガンダムとやりあったつてのは本当ですか？」

ハウードの問いかけに、グラハムは頷いた。

「四散しているデブリの状況からして、20機以上のティエレンが大破したらしい」

「ついでに、戦艦や鹵獲用の罫も潰されたそうだ。費やした財産と得た情報の採算が合わなくて焦ってるらしいぞ」

クーゴとグラハムが、ハウードとダリルに端末画面を示した。それを覗き込んだ2人は、一瞬で顔色を変えた。

先程までの笑顔は鳴りを潜め、酷く困惑した表情を浮かべている。2人の気持ちは、クーゴもよくわかる。

鹵獲寸前まで追いやられたとはいえ、やはりガンダムはガンダムである。侮ることはできない。

この作戦が始まる以前のユニオンは、調査の一環でガンダムの鹵獲を検討していた時期がある。人革連が独自に鹵獲を試みた結果が大敗ならば、ユニオンやAEUが独自に鹵獲を試みても、同じ轍を踏むだけだ。予算的な問題で、圧倒的な大敗が見える。

それに、問題はガンダムだけではない。ガンダムを守るかのように出現し、人革軍のMSや戦艦を消し飛ばした青い流星。人革とソレスタルビーイングたちの間を悠々と泳いで行った、白い鯨を思わせるような1000m級の艦。流星は不明だが、艦は明らかにソレスタルビーイングと別組織だ。

だからといって、クーゴたちは諦めるつもりなどない。

仲間たちの瞳には、強い闘志が宿っていた。
ダリルがヒュウ、と口笛を吹く。

「やれやれ。コイツらとやり合うのが空恐ろしくなってきましたよ」
「まったくだ」

彼の言葉を肯定し、ハワードが肩をすくめる。言葉とは裏腹に、ハワードとダリルの瞳もぎらついていた。

それでこそ、フラッグファイターである。クーゴとグラハムも緩やかに目を細めて頷く。

「MSの性能差が勝敗を分かつ絶対条件ではないさ」
「だな。戦い方次第では、ガンダムを追いつめることも可能だ」

グラハムの言葉を引き継ぐようにして、クーゴは言葉を紡ぐ。

「いくら性能が高かったって、奴らも無敵の化け物じゃない。追いつめることが可能なら、勝てる確率も0じゃない」

それは、人革軍との戦いやAEUのカスタムイナクト、および新型カスタムフラッグとの戦闘データで判明している。

虚憶きよおくのデータベースでは、特に、敵の物量や性能差云々をひっくり返して勝利を掴み取ってきた。

例を挙げれば本当にきりががない。『人の心の光』が起こしてきた奇跡の数々を、クーゴたちは知っている。

「あてにしてるぞ、フラッグファイター」

グラハムが不適に微笑んだ。クーゴたちも頷き返す。

そうと決まれば、今日も訓練や情報収集に精を出さねば。もう一度、端末に映し出された情報を確認してみる。

散乱するデブリの破片、ガンダムたちの戦闘様子、人革軍のMSを消し飛ばした青い流星、白い鯨を思わせる巨大な艦――。

(……白い、船)

クーゴの脳裏に、白い船が引つかかった。あの巨大な艦と同じようなものを、どこかで見たことがある。

何度も端末を操作し、白い艦の姿を確認する。その度に、よく似た白い船がフラッシュバックするのだ。

宇宙を泳ぐように進むのは、白い鯨を思わせる船。それは、宇宙を流浪する者たちの、最後の楽園だった。

脳裏を駆けたのは、歌。
どこかで耳にした、歌。

「そうだ、AEUの軍事演習場――」

クーゴはぽんと手を叩いた。何事かと、ハワードとダリルがクーゴを見た。

この場で唯一話を通じるグラハムは、最初は首を傾げたけれど、クーゴの様子から察したらしい。合点がいったというかのように頷いた。

クーゴたちが初めてガンダムを目撃したとき、あの純白のガンダムが発したシグナル。それによって目にした虚憶きよおくの光景を思い出す。

マントを羽織った2人の指導者。

宇宙を流浪する白い船。

安住の地となるはずだった赤い星。

赤黒く染まった死の星。

散り逝く者たちの姿。

自分が見知った、美しい青い星。

その光景の中に出てきた白い船と1000m級の超巨大な艦は、大

きさは違うが、その姿は完全に一致している。

白い鯨を思わせるようなデザインと雄大さ。宇宙を泳ぐように進む船の名前を、クーゴたちはまだ知らない。

「確かに、あるとき見た虚憶きよわくにも、大きさ違いの同じ船が出てきていたな」

「ビンゴー！」

「うむー！」

「た、隊長？！」

「ふ、副隊長？！」

そのままハイタッチし、クーゴとグラハムは互いの手を打ち鳴らす。置いてけぼりのハワードとダリルは相変わらず首を傾げていた。隊長と副隊長だけで盛り上がっていたらしい。クーゴとグラハムはコホンと咳ばらいした。2人にも、詳しいことを話さねばならないだろう。

丁度いいタイミングで時報が鳴った。正午を告げる音であった。ビリーとエイフマンの休憩時間も近いことだし、詳しいことは昼休憩で話すことにする。

昼ご飯のお弁当に関する算段込みで、クーゴとグラハムはアイコンタクトを交わした。

「詳しいことは昼休憩のときに話すよ。ゆつくり弁当でも食べながらさ」

「カタギリとプロフェッサーも、そろそろ休憩の時間だろうからな」

「おおー。 ってことは、副隊長の料理か！」

「毎回楽しみにしてるんですよ！ 今日は何が出るのか……」

クーゴとグラハムの言葉に、ハワードとダリルが目を輝かせた。彼らの表情は、本当に嬉しそうである。

期待されると応えたくなるのが人間の性だ。今回のお弁当も、彼ら

を満足させることができればいいのだが。

処刑台に立つような気持ちを押し殺し、クーゴは仲間たちと談笑しながら、ビリーとエイフマンのいる研究室へと歩き始めたのだった。

*

保冷剤を敷き詰めたクーラーボックスの中から、重箱クラスのお弁当箱と少し大きめのケースを取り出す。ケースの中身は、野菜のテリーヌと塩レモンを使ったプリンが入っていた。

前者は市販されている野菜のパウダーを使って作ったもので、綺麗な3層になっている。赤がにんじん、緑がほうれん草、黄色がかぼちやのパウダーを使った。飾りに切ったプチトマトを乗つけてみた。可愛い感じになったと思う。

後者は、暑い時期にぴったりだと言われる『塩レモン』を、プリンにかけるシロップに使った物だ。白い器に入っているためか、プリンの黄色がよく栄える。アクセントとしてミントとチョコレートの欠片を乗つけてみた。

重箱の中身は、長芋をベーコンで巻いた天ぷら、ハムと野菜を使ったマリネ、ささみとオクラを使ったイタリアン風の南蛮、エビとパプリカを炒めバジルで和えたものだ。うだるような暑さに対抗するため、冷たくても美味しく食べられるものとさっぱりした味のものを中心に取り揃えてみた。

あとは、クリームチーズとカッターチーズを挟んでジャムとマーガリンを塗ったサンドイッチである。こちらもまた、冷やして食べると美味しい品だ。おかずの一覧を見た面々が感嘆の声を上げる。

「見てるだけでも涼しい感じがするね」

「最近、異常気象かと疑いたくなるほど暑いからの。老体には厳しすぎる」

クーラーが効いている部屋に籠りきりなビリーとエイフマンにし

てみれば、外のうだるような暑さには体がついていかないらしい。最近では、日射病で倒れた患者数が、歴史的な最多記録に並んだそう。季節など丸々無視した天気が続いている。

太陽光エネルギー的な意味合いから考えると、晴れの日が続く方が嬉しい。しかし、暑さまでは必要ないだろう。20世紀末頃から地球の大気汚染や異常気象が取りだたされてきたけれど、23世紀になった今でも変わっていない。

いつか、人類が地球を棄^すてていく日が来るのだろうか。それは即ち、人類の宇宙進出が本格化することを意味する。

「この調子でいくと、いずれ人類が地球を棄^すてていかなきゃいけない日が来るのかな」

サンドイッチを片手に、クーゴはぼつりと呟いた。建物内の窓から見上げた空は、どこまでも青く澄み渡っている。

環境破壊や異常気象が続けば、この空も見れなくなってしまうのだろうか。いつの日か、この空も、濁ってしまうときが来るのだろうか。青い空を愛するグラハムや、彼を敬愛するハワードとダリルも、何か思うところがあつたらしい。つられるようにして空を見上げた。

遠くでフラッグが飛んでいる。たなびく飛行機雲が綺麗だ。

平和な空であるが、地上はいつも争いに満ちている。

「……もしかしたら、イオリア・シユヘンベルクも、キミと同じだったのかもしれんな」

「プロフェッサー、それは一体どういうことですか?」

エイフマンの呟きに、ハムと野菜のマリネを食べようとしていたグラハムが手を止めた。緑の目には疑問の色が浮かんでいる。

「地球を棄^すてて宇宙に出たとしても、紛争の火種を抱えたままであれば、また同じことの繰り返しになる。争いによって住むべき場所を失

い、また宇宙を彷徨い……それを繰り返すことになるじやろう
て」

「文字通りの堂々巡りじゃないですか」

「それもまた、人の業ってヤツですかね」

エイフマンの言葉を噛みしめるように、ダリルとハワードが呟いた。前者は山芋のベーコン巻き天ぷらを、後者はエビとパプリカをバジルで和えた炒め物を口に運ぶ。

ビリーも南蛮を咀嚼しながら、興味深そうにエイフマンの話を聞いていた。彼は何かを思い出したようで、「そういえば」と手を叩く。

「最近見に行った映画のストーリーも、今言ってた話がベースになってたんだよ」

ビリーはそう言って、彼の机の中からパンフレットを引っ張り出した。面々の前に、映画のストーリーが書かれているページを示す。

舞台は西暦3000年代後半。新たな年号、スベリオル S・ドミネーション D と改正さ

れてから、581年の時が流れた。地球に住めなくなった人類は、機械による管理の下、植民地惑星で生活をしている。人類の生殖も機械が行い、『無作為に選ばれた精子と卵子を使った試験管ベビーが養父母に託され育てられる』ことが普通になっていた。

そんな中、自分の誕生日に『ミュウ』と呼ばれる新人類として目覚めてしまった少年は、『ミュウ』の長である青年によって次世代の指導者として見出される。『ミュウ』は『サイオン』能力の凄まじさから、人類から迫害されていた。少年は青年から、地球へ帰るといふ悲願を託されるのだ。

彼らは宇宙で旅を続けた。青く美しい惑星に帰るために。しかし、旅を続けるうちに人類側からの度重なる攻撃によって疲弊し、彼らは安住の地を欲するようになった。人類が打ち捨てた惑星に降り立ち、開拓を進めていったのである。新たな赤ん坊たちの誕生等、その数年

間は本当に穏やかな時間であった。

しかし、その安寧も人類の攻撃によって終わる。衛星破壊兵器によって、安住の地は藻屑と消えた。先代指導者として隠居していた青年は、同胞たちを守るために破壊兵器と相打ちになった。悲しみに包まれる同胞たちの前で、今や立派な青年となった嘗ての少年は、本当の意味での指導者として、地球へ帰る決意を強くする。

果たして、彼は地球へたどり着くことができるのか。

『ミュウ』と人類の行く末は——？

パンフレットの煽り文句はそこで終わっている。

「近々、同じ映画の別視点も公開されるみたいだよ。実質的な2部構成だね」

「ほう。メカデザイン担当も相当の腕前だな。ここまで美しい船のデザインを見たのは初めてだ」

パンフレットに描かれた白い船を見て、エイフマンは感嘆の息を吐く。

群青の中に浮かびあがるのは、白い鯨を思わせるようなデザインの船。

——白い、鯨。

AEUの軍事演習場で出会った純白のガンダムが、クーゴとグラハムに『視せた』きよわく虚憶。そこで浮かんだ白い船も、丁度これとよく似たデザインだった。

クーゴとグラハムが目を剥いて、ビリーからパンフレットをひつたくる。何度確認しても同じだ。あの船も、この船も、巨大な艦も、すべてよく似ている。

すべてのページを確認すると、企画とスポンサーの欄に小さく『悪の組織』とあった。2人が同時にそれを読み上げると、ビリーが苦笑を浮かべて頭を掻いた。

「いやー、『これを見なかったら技術提供を打ち切る』って言われ

ちやつたから、仕方なく」

「おいおい……」

「でも、とても興味深い作品だったよ」

なんとという会社だ。ツツコミどころ満載の要求に、クーゴは思わず頭を抱えた。

しかも、それだけではなかったらしい。ちよつと待って、と、ビリーは再び自分のデスクを漁り始めた。

ややあつて、彼は4冊の本を引つ張り出してきた。本のタイトルは『Toward the Terra』で、『ミュウ』視点の上下巻と人類視点の上下巻に分かれている。

今回映画化されたのは、『ミュウ』視点の方だ。人類側も近々公開されるとビリーは言っていたか。考えかけたクーゴへ、ビリーは本を差し出した。

「これをキミに読んでほしいってさ」

「……もしかして、俺が読まないと技術提供打ち切りとか——」

「頼んだよ、クーゴ」

そうして、ビリーは背を向け、何かを思い出したようにグラハムの方を見た。

「あ、いけない。忘れてた。グラハム、キミの分もあつたんだ」

「おいカタギリ。これはまさか、クーゴと同じ——」

「頼んだよ、グラハム」

自分のデスクから同じ本4冊を引つ張り出し、グラハムに手渡す。いきなりの展開に、グラハムも面食らつたようだ。

クーゴは深々とため息をつく。グラハムも同じ気持ちのようで、難しそうな顔つきで本の表紙を眺めていた。

軍学校時代にお世話になつた教科書よりやや厚めだが、内容は物語

だ。なんとかなるだろう。

期限を尋ねると、ベリーは『ゆつくりでいい。1度目を通してほしい』んだって」と苦笑いした。

細かいのやら大雑把なのやら、クーゴはよくわからなかった。

もう一度本の表紙を見る。

『ミュウ』視点の上巻には、青い星、宇宙に浮かぶ白い船、銀の髪に真っ赤な瞳を持つ青年、盲目の占い師、金髪碧眼の少年が描かれていた。

下巻には、青い星、宇宙に浮かぶ白い船、淡い緋色の髪にオレンジの瞳を持つ青年、盲目の占い師、金髪碧眼の青年が描かれている。

『人類』視点の上巻には、青い星、宇宙ステーション、黒に近い藍色の髪を持つ青年、黒髪の女性、黒髪の少年が描かれていた。

下巻には、青い星、太陽の塔を彷彿とさせるような機械、墓標によく似た戦艦、銀髪の青年、黒に近い藍色の髪を持つ青年が描かれている。

「……やるしかない、か」

クーゴはそう呟いて、早速『ミュウ』視点の上巻を開いたのだった。



「スメラギさん、飲んでます?」

「飲まなきややってられないわよ」

足元に散乱するアルコールの瓶をひよいと避けて、イデアはスメラギの元へと歩み寄った。

先程、テイエリアに責められたことを抱え込んでしまっているらしい。

「……本当にごめんね、ダメな指揮官で。ごめんなさい。……ごめんなさいね、イデア。貴女も、私を怒りに来たのよね」

能天気に見えて繊細な人。それが、スメラギ・李・ノリエガという人物だ。繊細すぎるがゆえに、彼女の心は失敗に——厳密に言えば、失敗による犠牲者の発生——に耐えられない。それは、彼女のトラウマと深く関わっている。

一歩近づくと、アルコール臭が鼻に突く。イデア自身、あまりアルコールは好きではない。スメラギは自嘲気味な笑みを浮かべて、小さく謝罪の言葉を述べた。「ごめんね、ダメな指揮官で」と、呟くように繰り返す。己に罰を科すように。

指揮官は常に冷静でなければならない。情に流されれば、更なる被害が発生する。勿論失敗だって許されない。犠牲者は増えるし、有事の際は非難の矢面に立たされる。そのプレッシャーは計り知れない。指揮官は孤高でなければならぬから、尚更。

「スメラギさん」

「なあに？」

こてん、と首を傾げたスメラギを、イデアは静かに抱きしめた。

まるで母親が子どもをあやすかのような動作に、スメラギは目を丸くする。年下だと思っていた相手から、そんな風にされるなんて思ってもみなかったらしい。

イデアは何も言わず、彼女の背を撫でた。嘗てイデアが、母にあやされていたときのように。イデアをあやしていた母も、こんな気持ちだったのかもしれない。

「スメラギさんは、よくやっていますよ。ソレスタルビーイングが誇る、最高の戦術指揮官です」

「でも、今回は」

「そうですね。確かに今回は、スメラギさんに責任があることも事実ですよ。でも、貴女のミスのカバーしきれなかった私たちにだって責任があります」

尚も己を責めようとするスメラギの言葉を遮り、イデアは言葉を続ける。

「どんなに優秀な兵士を集めたって、指揮官がちゃんとしてくれなきゃ実力を発揮することはできません。スメラギさんが指揮をしてくれて、皆がバックアップしてくれるから、ガンダムマイスターである私たちは戦えるんです。もし万が一、私たちがどこかで失敗しても、スメラギさんたちがカバーしてくれるって信じてますから」

「イデア……」

「それと同じなんですよ。指揮官だって失敗します。人間ですもん。今回は、私たちがそれをカバーすることができなかった。貴女の信頼に応えることができませんでした」

ごめんなさい、と、イデアは謝罪の言葉を紡いだ。スメラギは尚も自分を責めようとする。

イデアはそれを封じるように、スメラギを抱きしめる腕に力を込めた。

「お願いです、スメラギさん。そんなに自分自身を苛めないでください。……独りで抱え込まないで、私たちにも一緒に背負わせてください。同じ、ソレスタルビーイングの仲間じゃないですか」

祈るような気持ちで、イデアはスメラギの瞳を見た。驚きに満ちたヘイゼルの瞳が瞬く。

それもそうだろう。ソレスタルビーイングの面々は、優秀だが脛に傷を持つ人間ばかりだ。もしくは、ガンダムを目撃してしまったがために引き入れられた者たち。ガンダムマイスターの過去だけでもと

んでもないことになっている。

兵士として戦争に参加しそこでガンダムを目撃した刹那、テロ被害者故にテロ行為を激しく憎むロックオン、嘗ては『超兵』の被検体だったアレルヤ、ヴェーダの申し子テイエリア、そして——『子どもたち』の守護を託されたアイデア。

秘密を抱えて所属する自分たちの交流は、そんなに多くはない。でも、なんだかんだ言つて、自分たちは苦楽を共にしてきた。一緒に戦い、一緒に騒いで、ここまでやってきたのだ。皆口にはしないけれど、それなりに、メンバーに対する愛着はある。

ロックオンやアレルヤはメンバー全員のことを気にかけているし、テイエリアも文句タラタラであるが不器用なりに心配してくれる。

刹那は何も言わず突拍子のない行動を取るけど、テイエリアと同レベルなだけだ。特に、（今は関係ないけど）グラハムとのやり取りではそれが顕著である。

（ああ、テイエリアが動き出したなあ）

漂う思念を察してアイデアは苦笑した。テイエリアが、ぶちぶち文句を言いながらヴェーダにアクセスしている。検索内容は「スメラギ・李・ノリエガに対する効果的な謝罪方法」だ。本人はくだらないと感じているらしい。

差し入れが効果的だと回答を貰った彼は、アルコールに合うつまみを検索し始めた。しかし、ヴェーダが提示する品は限定品、しかも売り切れ続出の品だ。うんうん唸りながら、彼は品を手に入れようと悪戦苦闘している。

これはこれで良い兆候だ。最終的には、ヴェーダを情報収集用と割り切つて、自分自身の意志で決断を下せるようになってくれればいい。テイエリアは、『機械の代弁者』として生まれたわけではないのだから。

「……ありがとう」

「いいえ。気にしないでください」

「あと、もう1つだけお願いがあるんだけど」

スメラギが、ぼそりと呟くように言った。

「もうちよつとだけ、こうさせて」

「お安いご用です」

スメラギはアイデアの胸に顔をうずめる。本能的に癒しを求めているのだろう。アイデアはぽふぽふとスメラギの頭を撫でた。ぴよこんと跳ねるくせ毛の感触が心地よい。

猫を撫でているような心地になるのは何故だろう。猫は猫でも、毛を逆立てている刹那とは違う。ゴロゴロ喉を鳴らしてすり寄ってくる方の猫だろう。

そのとき、丁度いいタイミングで扉が開く音がした。「え」と、戦慄するような声が響く。アイデアは振り返り、声の主に問いかけた。

「あ、アレルヤ。何か用？」

「へあっ!？」

『おうおう、お取込み中か？ 随分と楽しそうじゃねえか!』

「うん。お取り込み中。混ざる?」

「おおお、お取込み中ツ!」

『そりやあいいや! パーツとやろうぜ!』

「ダメだよハレルヤ! うわあああ、すみません! ででで出直しますうっ!!」

顔を真っ赤にしておろおろするアレルヤに対して、ハレルヤは面白い光景を見つけたと言わんばかりに声を上げた。わざと茶化せば、余計に焦った声を上げる。

「大丈夫よ、アレルヤ。もう終わったから」

「スメラギさんの言う通り。終わったから」

アレルヤは本当に弄び甲斐がある相手だ。イデアとスメラギは顔を見合わせ、くすくす笑う。さっきまで湿ったような空気だったのが嘘のようだ。

スメラギも完全復活したらしい。但し、酔いは全く醒めていない。あと8時間は経過させないと、アルコールは抜けないだろう。

「本当ですか？ ああ、なんだ……」

『ちえ、つまんねーの』

アレルヤが安堵し、ハレルヤが口を尖らせた。このコンビは本当に息ぴったりである。方向性は正反対であるが。

「ところで、何か用？」

「あ、はい」

スメラギに問われ、アレルヤはようやく自分の目的を思い出したらしい。

思春期を思わせるように真っ赤だった顔から、一気に赤みが引いていく。

普段の優男からは想像できないほど、険しい顔をしていた。

「スメラギさんとヴェーダに、進言したい作戦プランがあります」

*

アレルヤの作戦プランはヴェーダのお眼鏡に適ったようだ。彼はテイエリアと一緒に、人革連の研究施設を襲撃するという。

イデアは刹那とロックオンらと一緒に、南アフリカの紛争地域に介入する。こちらはプラン通りで変更はない。喜ばしいのか、悲しむべ

きなのかよくわからなかった。

ちなみに、ティエリアはヴェーダが推奨した謝罪の品をやつと手に入れたらしい。出撃前、そわそわしているティエリアとすれ違つたとき、彼の腕かひなには紙袋が握られていた。

果たして彼は、マトモに手渡すことができるのか。あとはタイミング待ちだろう。ティエリアにはハードルが高いかもしれないが、頑張つてほしい。イデアはそつと微笑んだ。

出撃する順番は、イデアたちが先である。エクシア、デユナメス、スターゲイザーの班と、キュリオス、ヴァーチエ。

ティエリアには時間が残っている。さあ頑張れ若者。イデアはそつと微笑んだ。

「——ガンダムスターゲイザー、出撃します！」

カタパルトからスターゲイザーが飛び出す。白い天女は、天使とスナイパーと共に武力介入へ向かつたのだつた。



「——そう。キュリオスとヴァーチエが動いた、か」

端末を開いた女性は、頬杖をついた。

現在、女性はアザデイスタンのホテルにいる。

アレハンドロが「復興支援より戦争停戦の支援をする」と言い残して去つていったのは、丁度先日のことであつた。

2人の会話を丸々聞いていたが、苛立ちと腹立ちが収まらない。何度、21世紀初頭の問題歌——因みに曲名は『死ねばいいのに』——を熱唱しそうになつただろう。

嫌がらせに、アレハンドロにのみ聞き取れるよう能力を調整して、

その曲のサビ部分を延々と聞かせてあげた。帰り際にイライラしているのを見て溜飲が下りた。

落ち込んでいるマリナの顔もまた美しいものだったが、やはり彼女には笑顔が似合う。アレハンドロに対する罵詈雑言を飲み下し、話し合いをしたのも先日のことだ。

技術提供予定のラインナップと簡単な説明をすると、マリナは嬉しそうに笑ってくれた。もう、それだけで幸せな気分になる。

やっぱりマリナ・イスマイルは女神様であった。マリナ教があったら真っ先に入信する。むしろ教祖になりたい。多分、言ったら困れるので黙っていた。

閑話休題。

「ところでリチャード、準備は万全？」

『ああ。いつでもいいぞ』

連絡してきた相手は、リチャード・クルーガー少佐であった。スターダスト・トレイマーのMSパイロットであり、人呼んで『仕事人班』の隊長でもある。由来はオルフェスとライラスのコンビネーション攻撃が、モロ『必殺仕事人』のアレだからだ。

彼は後継者としてアニエス・ベルジュを指名しているが、何やら嫌な予感を感じているという。「近々愛娘を嫁に出さなければいけない予兆だ」と出かかったが、それを口に出したら失神してしまいそうだったのでやめた。

最近、アニエスの親友であるジン・スペンサーを見ても嫌な予感を感じているという。それもまた、「近々愛娘を嫁に出さなければいけない予兆」だ。これもまた、アニエスの一件と同じ結果になりそうだったのでやめた。

ちなみに彼の妻は、アニエスとジンを「未来の息子たち」と周囲に紹介して回っている。

母娘による策略で外堀は着々と埋まりつつあり、父親はハブられつつあった。知らないのは彼だけである。

『……なあ、大将。お前さん、今何を考えてた？』

「そうだね。婿関連の準備はどうなってるかなって」

『何言ってるんだ。サヤとアユルはまだそんな年じゃない』

むつとした表情を浮かべたりチャード・クルーガーは、どこからどう見ても親馬鹿であった。とても、ハードボイルドな仕事人とは思えない。

彼は、弟子のアニエスが仕事人として覚醒しつつあることに気づいているだろうか。最近MSに搭乗するたびに仕事人モードになるのだ。サヤはそんなアニエスにゾッコンだから、更にタチが悪い。

この前のシユミレーターでは、Wカップルが「どっちの嫁／婿が素敵か」で壮大な大喧嘩を繰り広げたそうさ。勝敗は、シユミレーター、現実共々相打ちである。互いの健闘を讃え合っていた姿が印象的であった。

『こちらの準備も万端じゃ』

『いつでも構わんよ』

通信に割り込んできたのは、クラール・グライフとスオル・ダグラスだ。2人は日本支部の代表者であり、現在は人呼んで『潜伏班』の隊長と副隊長でもある。本来は技術開発と戦闘を兼任している班なのだが、今回の任務名がつけられていた。

今回は彼らの班に所属している征士郎とひまり、一鷹と悠凧も加わる。心強い援軍だ。そういえば、沙慈・クロスロードとルイス・ハレヴィの転校騒ぎは収まったらしい。クラールのゼミの様子を見た母親は、2人の日本残留に同意してくれたという。

しかし、今度は「是非ともスペインに遊びに来てくれ」コールで大変なことになっているそうさ。一難去ってまた一難である。お誘いを無碍に断るわけにもいかず、スペイン旅行も楽しそうだという意見もあって、少々揉めているらしい。彼らにも休暇が必要だ。

「——さて」

雑談を、この辺で終える。

そろそろ仕事の時間だ。

「緊急コード発動。『星屑の夢を見る者』。秘密結社『かぶしきがいしや悪の組織』は、これより、私設遊撃部隊『スターダスト・トレイマー』としての活動を再開する！」

その言葉を皮切りに、女性はてきぱきと指示を飛ばした。

「今回の任務は人命救助、および施設の破壊。本当の任務名は『証拠隠滅作業』だけど、胸糞が悪いので任務名を変更したわ。人革連の特務機関施設に閉じ込められている被検体たちを全員救出と並行して、施設の証拠隠滅としての破壊工作を行って頂戴。作戦時間内の最中に、ソレスタルビーイングのガンダム2機——キュリオスは確実に来襲する上、施設存続派の息の根がかかった奴らも出てくるので、全力で妨害して。時間を稼ぐことだけに集中すること！」

『了解！』

通信はそこで終わる。それと同時に、スターダスト・トレイマーの活動が始まった。

端末画面には、作戦行動を行う面々の様子が映し出されている。女性はそのを見守っていた。

「ッベルッ」

不意に聞こえた声に振り返る。そこにいたのは、エルガン・ローデイツクだった。

「何しに来たのよ、国連代表」

「前にも言ったが、姿を晒しすぎではないか？」

エルガンは苦笑交じりに遠い目をした。

女性は静かに、厳かに、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「モルモット実験動物として扱われる悲しみを、私たちは『知っている』はずよ。

……ソルジャー・ブルー初代指導者が、私たちに教えてくれたじゃない」

「……そうだったな。彼が亡くなる、数か月前のことだった」

女性の言葉に、エルガンは沈痛な表情を浮かべた。

銀色の髪に赤い瞳を持った、初代『同胞』のソルジャー指導者。『同胞』を殲滅しようとした惑星破壊兵器と相打ちになる形で命を落とした、勇敢なるタイプ・ブルー荒ぶる青・オリジン初被検体。

良くも悪くも、グラン・パを『テラ青い星へ帰る』ことに突き動かした人だった。命を懸けて『同胞』たちの未来を切り開いた人だった。最期に、愛する女神に悲しい嘘をついた人だった。

『また、キミの抱くテラ青い星を見せてくれ』

彼は知っていた。もう二度と、彼が焦がれたテラ青い星を見ることは叶わない、と。

彼は知っていた。もう二度と、彼は楽園に帰って来ることはないのだ、と。

彼は知っていた。もう二度と、彼の女神と言葉を交わすことはないのだ、と。

「……ところでエルガン。国連代表ってヒマなの？」

ジト目で彼を睨めば、エルガンは小さく肩をすくめた。

「アレハンドロの件は、本当にすまないと思っっている」

「思っているなら、何としてでも派閥争いに勝ちなさい。アレは野放しにしてはいけないわ」

「わかっている。作戦は進行中だ。——確実に、落とす」

エルガンと女性は、互いの瞳を覗き込むようにして見つめ合った。ぴりぴりとした空気が漂う。

お互いの感情を察して、2人は表情を緩める。目指す場所が同じで、そのために、自分たちのできることを頑張っている。

ならば何も問題ない。女性とエルガンはふっと微笑を浮かべ、領き返した。伊達に、幼い頃から一緒に遊んでいた訳ではない。

現在、国連はエルガン派とアレハンドロ派が真つ向から対立している図式となっている。エルガンを追い落として世界を牛耳りたいアレハンドロと、イオリア計画および『同胞』たちの計画を円滑に進めるために踏ん張るエルガン。2人は火花を散らしていた。

女性は静かにエルガンの瞳を見た。かつて『牙』として共に宇宙を駆けたときから、何一つとして変わっていない。トオニイたちと撃墜数を競い合っていた頃の、獣の目だ。参謀役でありながら、参謀という枠に収まりきらぬ凶暴性を秘めた眼差しだ。

策謀を張り巡らす生活が長かったせいで『牙』が丸くなってしまったかと心配したが、いらぬ杞憂だったようだ。むしろ、頭脳戦を経て、更に鋭くなったように思う。

「……頑張れ」

「お前もな」

女性の言葉に、エルガンは微笑みながら背を向けた。ひらひらと手を振る。次の瞬間、エルガンの姿は消えてしまった。

それと入れ替わりに、女性は身支度を整える。今日もまた、マリナとの話し合いがあるのだ。気合を入れなくては。

(さあ、今日も頑張ろう！)

女性は己の頬を叩く。鏡に映った自分の顔は、『牙』時代と変わらな
い、強い闘志を宿していた。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

26. BOUNDARIES OF HUMAN

スベリオル ドミネーション
S・D 280年。

木星の衛星にあるガニメデに、その育英都市は存在していた。都市名はアルタミラ。教育に関わる機関が集中する場所であった。

「次は貴方の番よ。準備して」

「はい」

看護師の女性に促された「彼」は、検査室に足を踏み入れた。

ICUとよく似た機器の上に横たわる。「彼」は頭に脳波測定用のヘルメットを被らされ、上半身には脈や心拍数などを計測するための電極パッドを付けられた。

看護師や医師たちのアドバイスに従い、「彼」はゆっくり力を抜く。この試験にパスすれば、「彼」もまた、大人への仲間入りを果たすのだ。

成人検査が終了すれば、同年代の友人たちと共に、割り振られた教育機関——宇宙上にあるエデュケーション・ステーションへと向かうことになる。

「彼」は楽しみだった。これから自分に待っている未来が、輝かしいものであると信じて疑わなかった。

青い瞳は、未来への希望と不安で揺れ動いている。その気持ちを抑えるようにして、「彼」は天井を見ていた。

『成人検査を始めます』

機械のアナウンスが響く。

そうして、機械は動き出した。

『一切の記憶を捨てなさい。貴方はまったく新しい人間として、青い星の上に生まれ落ちるのです』

聞こえてきた言葉に、彼は愕然とした。今までの記憶を消される――それが、成人検査の本当の目的。

次の瞬間、頭の中を弄繰り回されるような感覚に襲われた。頭が割れてしまいそうになる。

消えていく。

友人たちと過ごした楽しい日々が。両親とともに笑いあった時間が。彼を構成するために必要な一切の記憶が、黒塗りにされては壊されていく。

大切なものばかりだった。忘れたくないものばかりだった。その苦痛に悲鳴を上げながら、彼は力を振り絞る。

(嫌だ)

友の顔も名前も忘れた。

(嫌だ)

両親の顔も名前も、もう思い出せない。

(嫌だ)

自分が暮らしてきた都市は、どんな場所だっただろうか。

(嫌だ！)

自分の名前は、何だったのか。
それを思い出すことすら、叶わない。

「な、何だ!?!」

「確認しろ!」

どこかで、機械の異常音が響く。どこかで、焦る看護師と医者
の聲が響く。

「きゃあああああー！」

看護師の悲鳴が響いたのと同じタイミングで、成人検査用の機械が爆発した。状況が理解できず、〃彼〃は思わず目を見開く。

いつの間にか、頭に装着されたヘルメットがなくなっていた。拘束がなくなつたため、〃彼〃は体を起こす。周囲には機械の残骸が漂っていた。

何が起きたのだろう。〃彼〃は己の手を見て息を飲んだ。

自分の体が、青い光に包み込まれている。

少し手を動かしした瞬間、瓦礫の漂う速度と方向が変わつた。

(僕がやったのか?)

〃彼〃は目を疑つた。慌てて鏡を見る。

プラチナブロンドの髪からは色素が抜け、銀色になっている。

青かった瞳は、いつの間にか真っ赤に変わっていた。

視線を下に向けると、腰を抜かしてへたり込んでいた看護師と目が合う。

「止めて、殺さないで！」

看護師は、自分の身を庇うようにして体を丸める。頭を抱え、ガタガタと震えていた。

違う。

そんなつもりじゃない。

自分は何もしていない。

〃彼〃の気持ちは、この場の誰にも届かなかつた。

「嫌あああああああつ！」

弁明する間もなく看護師の金切り声が響いた。それを皮切りに、屈強な男たちが部屋へとなだれ込む。彼らは皆、銃を持ち防弾ジョッキに身を包んでいた。

男たちが「彼」に向かって銃を構える。彼らにも状況を伝えようとしたが、問答無用で引き金が引かれた。銃弾が「彼」めがけて撃ち放たれる！

「うわああああああ！」

「彼」は慌てて身を守った。

衝撃が発生し、弾き飛ばされ、床に叩き付けられる。

「彼」はそのまま、意識を手放してしまった。

「僕は一体、何者なんだ？」

「彼」は、額に手を当てた。

「何も……何も、思い出せない……！」

自分が何者であるか、何一つ証明できるものがないのだ。

出身地も、両親の顔や名前も、友達の顔や名前も、過ごした街の名前も、果てには己の名前すら憶えていない。

継る導しるべを求めるように、「彼」は研究員を見上げた。男は無感動な鉄仮面を崩さず、手元の資料に目を落とす。

研究員は淡々と、「彼」に事実を告げた。

「お前はブルー・1、突然変異種『ミュウ』のニュータイプだ」

そうして「彼」は今までの過去を失い。

『ブルー』として、新たな生を受けたのであった。

『お前の強力な破壊力を有するサイオン波は、とても興味深い』

実験。

実験。

実験。

毎日が実験ばかりだった。

拷問のような実験ばかりだった。

深層心理を隅々から探られ、頭の中を滅茶苦茶になるまで弄られ、心身ともかなりの負荷をかけられた。

「銃弾をすべてテレキネシスで受け止めるなんて……サイオンの封じ込めは大丈夫なのか？」

「やはり、成人検査が引き金なのか……」

「はい。記憶操作時のシナプスの刺激が脳の構造を変化させ、サイオンを発動させるようです」

「テラズ・ナンバーによる記憶の消去に抵抗して、サイオンが顕在化したというのか？」

「だとすると、これからもブルーのような存在が増えるという可能性が大きいということだな」

「まだまだ増えるということか。厄介な話だ」

実験。

実験。

実験。

まるで家畜を扱うかのように、自分たちは牢屋に閉じ込められた。人間1人が横になる程度のスペースしかない個室。体は拘束され、自由はない。

「成人検査を元にしたサイオン検査の開発はどうなっている？」

「順調に進んでいます」

実験。

実験。

実験。

機械に繋がれた『ミュウ』が、悶え苦しみながら死んでいく。

「成人検査はもつと対象者の不意をついて、深層心理を徹底的に調べた方がいいんでしょうか」

実験。

実験。

実験。

機械の台座から転がり落ちて死を迎えた者がいた。

ヘルメットを外し、のたうち回りながら死んでいった者がいた。

人類たちの非道な実験によって、『ミュウ』たちは命を落としていった。

「なんて数だ……！」

「突然変異種『ミュウ』の発生は止められんのか……!？」

実験。

実験。

実験。

死体は袋詰めになされ、解剖および剥製に回された。

死後も尚、『ミュウ』に安息は与えられなかった。

悲痛な顔をした死体は、どんどん増えていった。

「ガニメデの養育都市アルタミラの検査の結果、『ミュウ』の殲滅は、グランドマザーの絶対命令だそうだ」

「当然だ。人の心を盗み見るような者は、認められるわけがない」

実験。

実験。

実験。

「僕たちが一体、何をしたって言うんだ!？」

ただ、『生きていた』だけではないか――。

ブルーの叫びは無視された。

悉く、尽く、ことごとく。

『人類統合軍は養育都市アルタミラに対して、惑星破壊兵器メギドシステムを敢行!』『ミュウ』の殲滅に成功する!』

実験漬けだったある日、ブルーをはじめとした『ミュウ』たちは、育英都市アルタミラに閉じ込められた。

人類が『ミュウ』たちを殲滅する作戦に出たことを知り、アルタミラおよびガニメデからの脱出を試みる。

惑星破壊兵器メギドの使用により、アルタミラは炎に包まれる。惑星ガニメデ崩壊まで、もう時間がなかった。

「早く乗り込むんだ! 船に!」

ブルーは同胞たち呼びかけた。仲間たちが慌てて乗り込んでいく。崩壊は刻一刻迫り、ついに時間切れが訪れた。

多くの『ミュウ』たちが取り残されている。助けを求めて叫んでい

る。だが、もう無理だ。ブルーはリーダーとして決断し、ガニメデを脱出する。

死にたくないと呼ぶ声が遠のいた。後ろ髪を引かれる想いで、それでもブルーたちは前へ進むことを選んだのだ。間一髪、星が崩壊する前に逃げ延びた。

仲間たちと一緒に、ブルーは振り返る。惑星ガニメデが爆ぜる——星の命が終わる瞬間が、はつきりと確認できた。

自身が生きているという事実を噛みしめる者、失われた命を悼む者、これからの不安に押し潰されそうな者。ほんの一握り、生き残った同胞たち。

ざわめく彼らを安心させるように、ブルーは己を奮い立たせる。屹然とした眼差しは、不確かな未来を見据えていた。

「……………」
「……………」

周囲に漂うのは沈黙だった。クーゴも、グラハムも、自分たち越日から本を覗き込んでいたハワードやダリルも、険しい表情を浮かべたまま口を真一文字に結んでいる。

現在、クーゴとグラハムが読み進めている本は『Toward the Terra』の『ミユウ』篇・上巻だ。『ミユウ』の指導者であるブルーが、主人公の少年に己の過去を追体験させている場面である。ブルーが『ミユウ』として目覚め、指導者となるまでの過程が描かれていた。

げに恐ろしきものは人間。その言葉を地でいくようなシーンが満

載である。実験内容は拷問同然だし、『ミュウ』の死に様まで克明に描き出されている。目を逸らすなど言わんばかりに、鬼気迫った描写であった。まるで、実際にそのシーンを目撃したかのような。

「……なんか、凄いな。これ」

「そうだな」

絞り出すようにして、クーゴは小さく呟いた。グラハムたちも頷く。

異質なものは排除する。定められた決まりごとに盲目的に従う。

人間の性が悪い方向に動いた話だと言えよう。

異質なものと言え、人間卒業への道を踏み出しているクーゴとグラハムである。

通信回路を開いていないのに他人と相互意思疎通が図れたり、ガンダムの武力介入現場に介入（？）できてしまったりしている。コーザレンター共有者としての能力も相まって、更に異質さが極まっていた。

運が良いのか悪いのか。今のところ、クーゴやグラハムの人権は確保されている。コーザレンター共有者や虚憶きよおくに関する研究成果や人権保護活動が行われてきたというおかげもあるのかもしれない。

（いい時代に生まれたんだな、俺って）

もし、生まれた時代が今と違ったら、クーゴが辿る運命にだって雲泥の差があったろう。

今こうして、仲間たちと一緒に本を読むこともなかったかもしれない。

ちらりと視線を向ければ、苛立たしげな表情のまま本を読み進めるグラハムの姿があった。ハワードとダリルも、横顔に憤りをにじませている。彼らは骨の髄まで軍人であり、人である。超えてはいけな一線については、しっかりと弁えていた。

人類が『ミュウ』に行つた実験という名の拷問も、非道な行いばかり

りだ。捕虜に対する行為だったとしても、許されることではない。人でありながら、もはや人を捨ててしまったかのような行為が平然と行われている。物語の中だといえど、許せそうになかった。

誰一人として、その行為に疑問を持たない——なんて恐ろしい状況だろう。ストッパーがいけないということが、最悪の極みまで行ってしまった。意志の統一を間違うと、『ミュウ』虐殺のような痛ましいことが起こってしまうのだ。「どう統一するか」も課題の一つに違いない。

「読み進めれば読み進めるほど、鬱になる話じゃなきやいいんだが」

クーゴの言葉に、グラハムも深々とため息をつく。

「犠牲者の屍が築かれていくことを、殆どの人間が知らない……。恐ろしいことなのか、幸せなことなのか」

「知らないでいるには無責任すぎるし、知ったら知ったで重すぎますぜ……」

「まったくですな」

ハワードとダリルも頷いた。グラハムの、ページをめくる手が止まる。クーゴも同じ気持ちであった。

しかし、期待に満ちた満面の笑みを浮かべたビリーの顔を思い出すと、本を閉じることはできない。

『悪の組織』からの技術提供は必須だ。その協力を取り付ける条件を果たさないと、即座に契約が切られてしまう。

クーゴは深呼吸し、ページをめくった。物語の時間がゆったりと流れていく。

止まっていて欲しいと思う程平和な光景は、逃れようのない悲劇へ向かって動き始めた。



引き金を引くか否か。

2つの人格を宿す青年の葛藤を示すかのように、キュリオスは動か
なかつた。

攻撃準備は万全であるが、パイロット自身に攻撃意志がない状態下
にある。

しかし。主人格を司る青年は、攻撃性の高い副人格の言葉に追い込
まれつつあつた。引き金が引かれるのも時間の問題だろう。

撃ちたくない、と声がする。嫌なことすべて俺に押し付けやがっ
て、と声がする。子どもたちを保護すべきだ、と声がする。どうやっ
て育てる、と声がする。

矛盾する2人は、嫌と言う程『世界の悪意』を知っていた。改造人
間にまともな人生など保障されないし、生きている限り兵器として戦
わされ続ける。

己自身がその良い例だ、と、副人格の男が高笑いした。主人格の青
年が、今にも泣きそうな顔を浮かべる。

『撃ちたくない……!』

『引き金くらい、感情で引け!』

弱々しい声。

苛烈な笑い声。

『撃ちたくない……!』

『どうしたアレルヤア!? 逃げるのかあ!?!』

引き金にかけられた指が、動く。

『アレルヤアアアアアアアアアアツ!!』

『撃ちたくないんだああああああつ!!』

1 発、2 発、3 発、4 発——計十数発のミサイルが放たれた！ 静止している施設を消し飛ばすことくらい簡単だろう。

しかし、その予想は簡単に裏切られた。全てのミサイルが、目標に到達する直前に爆発したからである。

驚く2人の声に答えるように、爆炎の向う側から犯人が現れた。機影は2機。どちらも、彼らは初めて見る機体だった。

片や、日本刀を思わせるようなブレードを構えた、灰色基調の機体——エグザート。

片や、絢爛豪華な出で立ちをした、緑基調の機体——アヴァターラ。コロニー内での戦闘は条約で禁止されている。しかし、この場での2機は、ガンダムマイスターおよびソレスタルビーイングに敵対する者扱いになっているだろう。キュリオスのパイロットから「倒さねばならない相手」と認識されたことは確実だ。

『傭兵に依頼を出しておいて正解だったな』

『あのMSなら、ガンダムと互角に戦えそうだ』

『別部隊も合流してくれるらしい』

件の施設から声がした。研究員たちの話し声だ。やはり、正規軍がガンダム討伐に向かって警備が手薄になることを踏んでいたのだろう。

そのために雇われたのが、傭兵たち——エグザードとアヴァターラのパイロットだ。しかしこの傭兵たちは、依頼主を守るつもりなどない。

彼らが守ろうとしているのは『別のもの』だ。その為に、キュリオスの前に立ちはだかっている。

『邪魔をすと言うならば……！』

キュリオスが動いた。エグザードとアヴァターラを突破するつも

りのようだ。それを察知し、エグザートとアヴァターラも迎撃を開始する。

得意分野の機動性を活かして、キュリオスは2機に攻撃を仕掛けた。高速機動からの射撃攻撃。弾丸の雨あられが、エグザートとアヴァターラに襲い掛かる！

やはり高軌道戦闘専門の可変機型ガンダムだ。攻撃を躲しきれずに、エグザートとアヴァターラは被弾してしまう。だが、防御は間に合ったようだ。

『どんな攻撃でも、芯を外せばこんなものだ』
『まだまだね』

煙が晴れた先には、平氣の平左で佇む2機の姿があった。今度は彼らの反撃である。

アヴァターラに装備されていたシールド兼ウイングスタビライザーが展開し、誘導兵器としての攻撃を開始した。高機動戦闘を得意とする相手に対して『数撃ちや当たる』戦法は効果が薄い。しかし、誘導兵器による広範囲攻撃は、あくまでも『動きを封じる』ためのものだ。

降り注ぐ光の間を縫うように、キュリオスは攻撃を躲していく。そこまでは予測済みだった。予め誘導兵器の死角に移動していたエグザートが、弾幕を躲すキュリオス目がけて急降下。日本刀を模したブレードを、キュリオス目がけて振り下ろした！

間一髪、キュリオスはビームサーベルでブレードを受け止める！バチバチと火花が散った。

数回ほど切り結びを繰り返した後、キュリオスとエグザートは、互いの一撃により弾き飛ばされる。

距離を取りながら体制を整えた3機は、再びぶつかり合いを開始した。

動いたのはガンダムと傭兵部隊だけではない。遅れてやって来たティエレン部隊が近づいてくる。

流石のガンダムも分が悪いだろう。

……なんて、人革の研究者たちは樂觀視していたに違いない。

『——さてと。仕事といきますか』

だが、そうは問屋が下ろさない。

次の瞬間、ティエレンたちの斜め上から、ビームの雨あられが襲い掛かった！

何が起こったかわからずに、ティエレンたちは次々と撃ち落とされていく。

攻撃の主は、オルフェスとライラスである。2機はそのまま、ティエレンたちの掃討を開始した。

コロニー内部のあちこちで、戦いの火花が激しく散っていた。

しかし、火花が散っていた場所は施設の外だけではない。施設の内でも戦いは起こっている。

警報音が耳をかすめる。足音が響く。研究員たちの悲鳴も聞こえた。

『ない、ない！ データがない!!』

『被検体の連中が、ごっそりいなくなった！ 脱走か!?!』

その異変は、少し違う形で、キュリオスのパイロットにも届いた様子だった。

『声が、止んだ……!?!』

『あり得ねえ……。同類の気配が全部消えやがった!』

その知らせを待っていたというかのように、アヴァターラとエグザートがぐるりと向きを変えた。彼らが獲物と定めたのは、オルフェスとライラスに食らいつこうとするティエレンたちである。

エグザートがライフルの精密射撃、アヴァターラが可変型の槍によ

る接近戦闘で、テイエレンたちを文字通り一掃した。外の連中が全滅するのを待っていたように、施設付近からMSたちと輸送船が飛び出し始める。

ラッシュバード、ストレイバード、ライオット・バトラー、ライオット・アーチャー、ドラウパが、輸送船を守るようにして姿を現した。

キュリオスのパイロットは驚いたように息を飲んだ。彼らの同類は、全員あの輸送船に乗り込んでいた。それを感じ取ったためだ。

これで、超兵機関を守る砦はなくなった。キュリオスのパイロット——特に、主人格を司る青年が躊躇する理由もなくなった。

『撃てよ』

オルフェスのパイロットが、キュリオスのパイロットに促した。

『決着の邪魔をする程、俺たちは無粋じゃないんでな』

『私たちの目的は達成しました。後はここを消し飛ばすだけです、そこまでする必要もなくなりましたので。……貴方がやってくさるんでしよう?』

オルフェスのパイロットの言葉を引き継いだライラスのパイロットは、どこか悪戯っぽく告げる。

キュリオスのパイロットはしばし黙っていた。キュリオス自身にも、動く様子が見当たらない。

『どうかしたのか?』

エグザートの男性パイロットが首を傾げる。

そんな面々の促す声など、キュリオスのパイロットには届いていなかった。

彼らは彼らの方で、別の問題が発生していたためである。

『おい、まだ躊躇うってわけじゃねえだろうな!』

『……ハレルヤ』

『ああん?』

『ミサイル』

『ミサイルがなんだった』

『さつき、全弾撃ち尽くしたんだけど』

『——はあ!?!』

主人格を司る青年の言葉に、副人格の青年が絶句した。彼らのやり取りを見守っていたMSのパイロットたちも、予想外の事態に目をする。

なんてことはない、弾切れだ。施設1つを消し飛ばすために必要な武装こそ、先程、エグザートとアヴァターラが無力化させたミサイルだったのである。

追いつめられた状態だったため、何も考えずに全弾撃ち尽くしてしまったのだろう。一応他にも武装はあるが、超兵機関を壊滅させる程の火力はない。

責任を感じたエクザートとアヴァターラが顔を見合わせる。オルフェスが考え込むような仕草をし、ライオット・バトラーとアチャー、ライラスとドラウパ、ラツシユバードとストレイバードが所在なげに輸送船の傍に控えていた。機体の動きはパイロットの感情を反映させたような形になっている。

この状況の彼らにアテレコするとするなら、『えー……』や『うわあ……』、『これ、本当にどうするの?』や『何て間抜けな事態なんだろう』、『自分たちの持っている武装、貸してあげた方がいいのかな』等々が相応しいだろう。非常に残念な光景であった。

*

『貸してあげなさい』

状況を把握した女性は、淡々と指示を出した。

『むしろ、その武器を提供するレベルじゃないと、この残念さは払拭できないと思うの』

MSたち全機が顔を見合わせた。誰の武器を貸すかで議論が起こっているらしい。その間、キュリオスは完全に放置状態である。

最も、キュリオスのパイロットたちにとっては、MSたちを完全放置している状態だ。主人格と副人格が揉めている。

議論の末、候補に挙げられたのは、エグザートのウェーバー・ガンとオルフェスのダスク・ライフルだ。あとはどっちを提供するかの話し合いになっている。

輸送船とその護衛役たちは撤退済みだ。ティエレンたちは外にいるヴァーチエを何とかするのに忙しい。ついでに、奴らの目を欺く機能も完備していたため、気づかれることはなかった。

最終的に、軍配はエグザートのウェーバー・ガンに挙げた。エグザートはキュリオスのパイロットに声をかけ、ウェーバー・ガンを手渡す。受け取ったキュリオスはしばし呆然としていたが、エグザートからの指示に従って、銃を操作した。

精密射撃専用のモードから、砲撃用のモードに切り替える。カードリッジは装填済みだ。後は、施設に照準を向けて撃つだけ。躊躇う理由もなくなったキュリオスのパイロットは、迷うことなく引き金を引いた。

細身の銃身に似合わぬ太さのレーザーが放たれた。その一撃は、寸分変わらず施設を穿ち、破壊し、倒壊させる。

これでもう、超兵機関は活動できなくなるだろう。キュリオスのパイロットは、己の過去に決着をつけたのだ。

それを確認したMSたちは一斉に撤退を始める。キュリオスも、その姿をMSモードから飛行モードに変化させて飛び立っていった。もちろん、ウェーバー・ガンもお持ち帰りである。

「ミッション、コンプリート」

女性は満足げにそう呟いた。

「どうかしたのですか？」

「いいえ、なんでもありませんよ。マリナ様」

女性の呟きを聞き取ってしまったのか、マリナが小首を傾げる。

それを取り繕った女性は、己の傷を隠すかのように微笑んだのであった。

◇

「人類革命軍の施設が、ソレスタルビーイングの襲撃を受けたらしいぞ」

「スターダスト・トレイマーの機体も一緒だったって話だ」

「人革軍は、『超兵』っていう特殊な強化人間を作り出すための研究を進めてたんだってな」

「しかも、その被検体は無作為に拉致してきた子どもたちなんだろう？」

「主に身寄りのない孤児を狙って、被検体にしてたみたいだ」

「中には記憶を失って、自分の名前を思い出せなくなった子どももいたらしい」

「ひでえことしやがるな……」

「今朝のニュース、見た？」

「知ってる！ セキ様無双でしょ？ かつこよかったー！」

『超兵』研究を進めていた人革連を批判してたもんね」

「エルガン・ローディック代表は、相変わらず怖いなあ」

「人革連の代表者、肩身が狭そうだったよ」

兵士たちの雑談が響く。先日行われた、ソレスタルビーイングの介入とスターダスト・トレイマーの行動についてだ。

ソレスタルビーイングは人類革命連合のコロニーを襲撃し、超兵機関を壊滅させた。その際、施設が自衛のために雇っていた傭兵たちの中に、スターダスト・トレイマーに所属していた新たな機体が紛れ込んでいたらしい。

彼らの裏切りと、元々潜んでいたスターダスト・トレイマーのMSたちの活躍によって、ティエレン部隊の大半は行動不能に陥れられた。無防備になった施設の破壊をソレスタルビーイングに任せ、彼らはそのまま撤退したという。

ちなみに、超兵機関の情報をスツパ抜いたのは、国連代表のエルガン・ローディックとジャーナリストのセキ・レイ・シロエであった。勿論、議会とお茶の間は大紛叫。人類革命連合は、国内外から叩かれている状態だ。

「事実も小説並みにあげつなかつた、つて所か」

『Toward the Terra』の『ミュウ』篇・上巻を閉じて、クーゴは深々とため息をついた。

超兵機関と『ミュウ』に対する実験の方向性は違うものの、根っこにある源流はよく似ている。

人を人とは思わない所業。人が人に対して行つてはならない、最後の一線。それを踏み越えた先にある末路を見た。

不意に、『己の感情を制御しきれなかったため、人間は自滅の道を歩んでいる』と言った人物がいたことを思い出す。言葉はうる覚えだし、その人物がそう言った理由は別の場所にあったのだけれど、今ならその理由が分かるような気がした。

異質なものに対する恐怖、安寧を求めるが故の外敵排除、自分たちだけが安全且つ幸福であればいいという身勝手なエゴ。『人の心』は人を殺し、拳句の果てには世界すらも破滅へ導いてしまう——それ

は、紛れもない事実だ。

でも、クーゴは知っている。人や世界を救うことができるのも、紛れもない『人の心』だ。虚憶きよおくにおける「大特異点を押し出す」がいい例だ。時の牢獄エタニテイで過フす永遠ラットを受け入れず、未来を生きたいと願った人々の祈りが起こした奇跡。

戦場で戦う人々を信じる人々、戦う家族を応援する人々、友や家族の無事を願う人々、明日が欲しいと切望する人々。

彼らの心が、『人の心の光』を見せてくれた。人類はまだ捨てたものではないと、信じさせてくれた。希望を見せてくれたのだ。

(俺がこゝまで性善説押しなのも、そういう虚憶きよおくに触れてきたからなんだよなあ)

そう考えて、クーゴはふと思い至る。もしかしたら、この世のどこかには、全く逆の虚憶きよおくを有する人々もいるのかもしれない。

『人の心』に絶望し、人類そのものに絶望し、世界を壊そうとした男がいた。いや、実際は『人の心』を信じたくてやったことではあるが、確かにそう思っただ動いていた者がいた。

シャア・アズナブル。ジオン公国の総帥として、Z―BULEを敵に回して戦った男。Z―BULEを信じたが故に、彼らとの交流で『人の心』の可能性に触れたがために、孤独の戦いを繰り広げた男。

彼の影武者曰く、『私の知っているシャア・アズナブルと違う(超要約)』らしい。

本来なら、彼は『世界と人間に絶望し、小惑星を地球に落とそうとする』はずだったという。

どこで可能性が分岐したかなんて知らない。けれど、確実に言えることは、『シャア・アズナブルにはZ―BULEという、信頼できる仲間たちがいた』ことだ。

『国連が正式に、アザデイスタンへの援助を決定しました。内容は主に停戦支援で……』

ふと聞こえてきたアナウンサーの声に、クーゴはテレビの方へと視線を向けた。

テレビ画面に映し出されたのは、黒煙が上がるアザディスタンの首都である。

そういえば、ユニオンの政治家や上層部がアザディスタンの改革派に支援を打診しているという話を聞いた。どう考えても、作為しかない。

ユニオンの目的は支援ではない。紛争が続くアザディスタンなら、ソレスタルビーイングおよびガンダムが姿を現すだろうと考えている。

人革連やAEUに後れを取っている現状を打破するために、何としてもアザディスタンの援助を勝ち取りたい。もし、派兵が決まれば。

それが意味するものは——ガンダム調査隊の、アザディスタンへの出兵だ。

(グラフラム辺りは、闘志で満ち溢れてるんだらうなあ)

ガンダムと刹那に恋をする彼のことだ。派兵が決まれば、その事実を素直に喜ぶことは間違いないだろう。裏の作為に関するコメントは控えそうだが。

ハワードやダリル、ビリーあたりも、上の考えに対して思うところがあつても、勘ぐるような真似をしないタイプだ。後者はやや軍人失格な部分もあるが。

そこまで考えて、クーゴは首を傾げた。どうしてクーゴは今、『ビリーは軍人に向いていない』と思つたのだろうか。漏洩という単語が頭にこびりついて離れない。

思考回路を切り替えようと、クーゴは再びテレビを見上げる。

映し出されたのは、新曲を発表したテオ・マイヤーの映像だった。

『タイトルは『Terra —還るべき青き惑星^{ほし}—』です。只今公開されている映画、『Toward the Terra』の『ミュウ』編におけるテーマソングで……』

クーゴは端末へと視線を戻し、アザディスタンの一件を調べる。相変わらずテロが起き、人が死んでいく——その繰り返しであった。

民間企業『悪の組織』から技術提供および開発援助を受けることが決まったアザディスタンであるが、事態は中々好転しない。試行錯誤を繰り返している真つ最中である。代表取締役がアザディスタンに滞在中だとか、技術支援が得られたのは代表取締役が女王に感銘を受けたとかいう話も聞いた。

あの国を治める女王も、『援助を勝ち取るのと引き換えに、変な条件を出されてた』のだろうか。何やら、簡単なようで難しい条件を、意味不明なようで重大な意味を持つ条件を科せられてしまったような気がしてならない。おそらくは、クーゴとグラハムも、似たような条件を背負わされたのかもしれない。

クーゴは『Toward the Terra』の『ミュウ』篇・上巻の表紙に視線を向ける。青い星、宇宙に浮かぶ白い船、銀の髪に真っ赤な瞳を持つ青年、盲目の占い師、金髪碧眼の少年が描かれていた。長い旅と戦いの始まりを思わせるような、美しくもどこか悲しみに満ちた横顔を見せる人物たち。

何の変哲もないSF小説だ。しかし、クーゴの中にある何か、これは創作^{つくりもの}じゃない』と叫んでいる。

その叫びは日に日に大きくなっていく。理由はよくわからないけれど、どうしてか、そんな感じがしてならない。

そんなことを考えていたとき、端末が鳴り響いた。メッセージの主は『エトワール』、もといアイデアであった。

「久々のメッセージだな」

クーゴは呟いて、端末を開く。

内容は、とりとめのない雑談だった。

にもかかわらず、クーゴの頬が緩む。オフ会があるわけでもなければ、交友を深めるような催しがあるわけでもない。本当にささやかなことだった。

最近の話題と銘打たれたそこには、ソレスタルビーイングに関する話は一切なかった。同じように、クーゴもユニオン軍に関する話は一切していない。

それが、クーゴとイデアにとつての暗黙の了解だった。ユニオン軍所属の軍人とソレスタルビーイングのパイロット——そんなしがらみは、どこにもない。

「……そうだな。今回は、『Toward the Terra』の話にするか」

『悪の組織』からの技術支援を得るために課された条件で読み始めた小説であったが、クーゴには酷く惹かれるものがあつた。

今はまだ『ミュウ』編の上巻しか読んでいないが、もうしばらくしたら読み終わりそうだ。次は、『ミュウ』編・上巻と同時系列である人類編・上巻を読むつもりでいる。

『ミュウ』編・上巻並みに、陰惨な運命が待ち受けていそうな気がしてならない。确实だと胸を張って言える。

悲劇性を助長しているのは、登場人物たちの人となりやバックグラウンドが丁寧に描かれているためだ。彼らのふとした表情やエピソードが、読み手に愛着を抱かせる。読み手が登場人物に愛着を持ったタイミング狙ったかのように、その人物が死んでしまうのだ。逆パターンもあり、登場人物の死後からその人物にまつわる話が出てくることもあつた。

(誰も犠牲になってほしくないと願うことは、間違いなのだろうか)

クーゴはひっそり、そんなことを考える。

それぞれの生き様。燃え尽きる流星のように輝く命たち。生きるとはどういうことなのか。何のために生きて、何のために戦うのか。その理由を問われている気がして、クーゴは顎に手を当てる。

答えはまだ見つかっていない。しかしそれでも、失いたくないと願うものはある。果てなき青い空を、仲間たちと一緒に飛んでいたい――言葉にすると、あまりにも簡単なことだった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

27. 帰ってくれ蒼い海

吐き気を催す邪悪がこの世にあるとするならば、それは、エゴまみれの人間だ。

自分たちの都合の悪いことはすべてスケープゴートに押し付け、その対象者を『絶対悪』に仕立て上げる。

そいつらのせいで犠牲になる命の、なんと多いことか。たとえ命が無事だったとしても、被る不利益も計り知れない。

立ち止まってしまえば、前向きこってしまつた過ちの再来を招くだろう。治安部隊という名を借りた、一方的な統一支配。それが招いた悲劇と犠牲を、人類の有識者たちは忘れてしまったわけではない。だからこそ、彼らは彼らで、必死になつて戦っているのだ。

アンノウン・エクストライカーズ——通称U Xは、そのような支配を許さない。黒幕はわかっているのに、状況が状況のため、そいつを殴りに行けないというのが現状である。殴りに行けば大混戦になることは明白だ。どこから見ても挟み撃ち。いくら自分たちでも不利である。

それでも、決意を固めたア□エスの意志は変わらない。たとえ世界の敵として糾弾されようとも、自分たちにだって守りたいものがある。世界の危機を目の前にして、何もしい訳にはいかないだろう。人の命を守るために軍人になつたと語つた、□ニエスの横顔を思い出した。

(マトモな理由だなんて、笑つたのが昨日のことみたいだ)

吐き気を催す邪悪の影響——もとい、悪意の塊が原因で発生する悪寒と戦いながら、クーゴはしみじみと部下の成長を喜んだ。

最近はずをかけてオツサン臭くなつたものである。若者たちに囲まれてみると、自分も年を取つたものだと感じるのだ。

「……慣れている。世界の敵になることにはな」

ア二□スの決意を引き継ぐようにして、刹那が静かに言葉を紡いだ。明鏡止水の中に、凜とした強さが垣間見える。

彼女はそうやって、傷だらけになりながらも歩みを止めなかった。どんなに打ちのめされても、叩きのめされても、戦いから逃げなかった。

対話のために戦い続けることこそが自分にできることだという答えを、己の一生を賭けて証明しようとする姿を見てきた。その強さを、ずっと。

この場にグラハムがいたら、きつと沈痛な表情を浮かべるだろう。「だからといって、キミが傷つかねばならない道理はない」と訴えそう

だ。
刹那の言葉に触発された面々が、次々と名乗りを上げていく。特に地獄公務員は通常運転であった。自分を貫けるという点では、地獄公務員が一番だろう。

JUDAのレストルームが熱気に満ちていく。いつの間にか、吐き気を催す邪悪が齎した悪寒もなくなっていた。『人の心』によって生じた絶望を覆すのも、『人の心』によって生じた希望なのだ。

「どうやら、止めても無駄なようだね……」

石□はやれやれと肩をすくめた。そこへ、宗美が屹然とした面持ちで進言する。

「□神社長。これはもはや、UXやJUDAだけの問題ではないんですよ」

「地球がピンチなのに、じつとなんてしてられないよね」

「故郷を失う悲しみは、他の誰にも味わってほしくありません」

彼の言葉に、フェ□とロミ□も同意した。

アイデアも頷く。

「この惑星こそが、私たちの還るべき場所だもの。滅茶苦茶にされてたまるもんですか」

紫の瞳は、仲間たちをしつかりと映し出している。たとえ視力がなくとも、彼女にははつきりと、面々の表情が見えているに違いない。UXに間借りしている状態の面々も、協力を申し出てくれた。並行世界の戦乱とはいえ、この惑星に住む人々に世話になったのだから――と。

「そうだな。俺たちが飛ばなきゃ、誰が飛ぶんだよ」

クーゴも、立派に成長した部下を真正面から見つめる。

「俺たちを信じて、俺たちを助けようとして頑張っている人たちがいるんだ。……おそらく、中には、連邦の様子がおかしいって気づいてはいるけど、正しいことをしたいと願っているけど、奴らのせいで身動きが取れなくなってる人たちだっていると思う。その人たちの想いを背負って戦えるのは、俺たちしかない」

「わかった。なら、もう何も言うまい……。UXの指揮官として、この戦いを最後まで見届けよう」

リ□ヤードは微笑を浮かべて頷いた。それを見た仲間たちも、顔を見合わせて頷き返す。

寄せ集めの兵団が、よくもここまで団結できたものだ。前回の戦いのときも、今回の戦いのときも。

『人の心』を垣間見たような気持ちになり、クーゴは強く拳を握りしめた。

「行こう、皆！ 加□機関に、俺たちの力を見せてやるんだ！」

「待つてください！ どうしても行くなら……ひとつだけ約束をして

ください」

浩一が音頭を取ったときだった。□美が慌てて止めに入る。何事かと思っただが、彼女はゆっくり口を開いた。

「必ず……必ず生きて帰って来て！」

「うん、約束する！」

切実なその言葉に、浩一は躊躇うことなく頷いた。他の仲間たちも頷く。ささやかだけれど、今の自分たちには何よりも重い約束だ。

誰一人欠けることなく、ここに帰ってくる。今まで犠牲になった命を思い、その難しさを痛感する。帰ってきた命を思い、その決意を胸に抱く。

仲間たちは出撃準備のため、JUDAのレストルームを後にした。そうして、各空母に格納されていた自分たちのMSに乗り込む。整備はバツチリだ。

出撃前に、恒例となった生存報告をする。目を閉じて集中すれば、目の前の光景は、愛機のコックピットから地球連邦本部へと早変わりだ。

見慣れたグラハムと仲間たちの後ろ姿を見つけたが、人がいるために近づけない。人が去るまで待つてみるか。ついでに聞き耳も立ててみる。

「なぜですか!?! 今は、世界の危機です! こんなときに出撃できないとは、何のための軍ですか!?! 何のための軍人ですか!?!」

「命令だ。黙って従え」

「その命令がおかしいって言っているんです!」

「そうです! 世界を救うために戦っている奴らを見殺しにするつもりですか!?!」

「人を守るための軍人ではないのですか!?! この命令は、軍人の本分を踏みにじっています!」

「アンタはそれでいいんですか!? アンタの頭、おかしいんじゃないんですか!?!」

「あそこには、副隊長がいるんです! あの人が戦っているんです!」

「出撃許可を出してください! お願いします!!」

「命令は絶対だ!」

揉めていた。出撃許可を出してくれと直訴するグラハムと、それを足蹴りにする上官。上官に食って掛かる仲間たちと、彼らの訴えを踏みにじる上官。話し合いは決裂した様子だった。

上官からは、吐き気を催す邪悪と同じ悪意で満ち溢れている。「あん畜生」の息の根がかかった奴に違いない。「あん畜生」は着実に軍閥を作り出しつつある。

クーゴの嫌な予感が、よりにもよって、こんな形での中してしまうなんて。しかも、グラハムや仲間たちもその被害にあってしまうなんて。

自分で言ったことであるが、それが友人たちに適用されてしまうなんて思ってもみなかった。「あん畜生」、絶対許さない。そんな奴に負けてたまるものか。

「く……!」

「隊長……!」

グラハムが、悔しそうに歯噛みした。

握り締められた拳からは、薄らと血が滲んでいる。

「世界の敵だと言われようと、アンノウ^かン・エクストライカ^れーズが世界のために戦っているというのに……! あそこには、クーゴやベルジュ少尉、それに彼女たちだ……!」

血反吐を吐き出すような、悲痛な面持ち。人を守るために帰ってきた男からしてみれば、こんなにも悔しい状況はないだろう。だが、グ

ラハム・エーカーは根っからの軍人だ。いつぞやのライセンス時代でなければ、むやみやたらな行動はできない。

何て皮肉だ。あのみようちきりんな仮面と刹那が選んでくれた陣羽織を羽織っていた時期でなければ——一番歪んでいたときでなければ、正しいことをしようとして孤軍奮闘する人々を助けることができないとは。

最も、当時の彼は、このような事態になっても動かないだろうが。ガンダムと決着をつけるためでなければ動かなかった／身勝手な行動を繰り返した傍迷惑な男（某准将談）である。一番、ライセンスという権限を与えてはいけなかった存在であった。

今の彼なら、ライセンスという肩書に相応しい存在であろう。しかし残念ながら、連邦軍にはそんな権限自体が存在しない。

（……生存報告できるような空気じゃないな、これ）

クーゴがそう思ったとき、思念が漏れたのを感じ取ったのだろう。グラハムたちが一斉に振り返った。

こちらの姿を目に留めて、面々は悔しそうに目を伏せる。

援軍に駆けつけられそうになくて申し訳ない、と、彼らの瞳が言っていた。

クーゴは静かに首を振る。その気持ちだけで充分だ、と。

「今から、□藤機関との決戦に赴く」

「……クーゴ」

「刹那、言ってたよ。世界の敵になることには慣れてる、って」
「！」

途端に、グラハムは眉間に皺を寄せる。泣き出してしまいそうに歪んだ顔を見て、クーゴは思わず苦笑した。

予想通りだ。彼の瞳は、「だからといって、刹那が傷つかねばならぬ道理はない」と訴えている。

「おそらく、連邦軍もテロリスト掃討のために出撃してくるだろう。完全に四面楚歌になる」

だけど、と、クーゴは言葉を続けた。

「それでも俺たちは、諦めずに飛ぶよ。俺たちのために頑張ってる人や、俺たちを信じてくれる人、俺たちに想いを託してくれた人のために。……その人たちの想いを背負って戦えるのは、俺たちしかないから」

「副隊長……」

ハワードが悲痛な表情を浮かべて、クーゴの役職を呼んだ。

他の部下たちも、今にも泣き出してしまいそうな顔をしている。

「だから……なんていうと、相当な自惚れになるんだけどさ。うん。……お前たちの想いも背負って、お前たちの分まで、戦ってくるよ」

クーゴの言葉を聞いた面々が、大きく目を見開く。対照的に、クーゴはゆるりと目を細めた。

ちっぽけな自分にできることは限られているけれど、諦めたくはない。だから自分は、加□機関との戦いに赴くのだ。

自分たちの還るべき場所を守るために、宇宙^{そら}へと向かう。長い戦いになるだろう。覚悟はもう、決まっている。

そんなクーゴに影響されたのか、仲間たちは顔を見合わせた。

たった1回、断られただけじゃないか。出撃許可が下りるまで、何度だって食い下がればいい。もつと他にも、いい方法があるはずだ。良識派の上官に掛け合って、許可が下りるよう便宜を図ってもらったり方だっている――。

彼らも諦めていなかった。絶対に援軍として駆けつける、と、グラハムたちの眼差しが叫んでいる。やっつと、いつもの仲間たち『らしき』

がもどってきた。これで安心して戦える。クーゴは頷き、瞳を閉じた。

目を閉じてもう一度瞳を開けば、目の前の光景は、地球連邦本部から愛機のコックピットへと早変わりだ。

出撃準備は万全。目的地はすぐそこだ。作戦内容も、しつかり頭の中に入っている。

さあ行こう。たとえ世界中から敵として非難を受けようとも、胸を張って戦い抜く。

「ブ■●ヴ・E■P | ■s ■onバ■●ト搭載型。クーゴ・ハガネ、出る！」

操縦桿を握り締め、クーゴは空母のカタパルトから飛び出した。



この場で場違いな人間を挙げるとするなら、クーゴは迷わず己の名を挙げる。

只今、ガンダム調査隊の面々は太平洋上空を移動中だ。アザデイスタンは、ユニオン軍の援助隊を秘密裏に採択したという。その援助隊の中に、ガンダム調査隊の面々は組み込まれていた。

といっても、ユニオンの目的は、内戦中のアザデイスタンに訪れるであろうガンダムである。本音は、救援なんてどうでもいいに違いない。勿論、お題目である『停戦援助』はするけれど、大したことはやらないだろう。

政治家たちは皆こうなのか。作為の駆け引きに振り回されるのは、いつだって現場や弱い立場の全員である。もちろん、クーゴが所属する組織もそういう仕事だ。仕事はきちんと割り切ってはいる。割り切ってはいるのだが。

(本当に、いいんだらうか)

頭の中に、何とも言えない引つ掛かりがある。

クーゴは深々と息を吐いた。

(……それにしても、寒い)

背中を駆け抜けた悪寒に、クーゴは身を震わせる。空調の温度は過ごしやすいものになっているはずなのに、寒気が止まらないのだ。

風邪ではない。先程ヘルスチェックを試みたが、異常はどこにも見受けられなかった。正直あまり納得はしていない。

していないのだが、何度やっても大丈夫だと太鼓判を押されてしまったのだ。大丈夫だと認める以外ないだろう。

クーゴは体を丸めて寒気をやり過ぐす。

おかげで、ガンダム調査隊の中でかなり場違いな存在と化してしまった。

面々がガンダムとの退治に闘志を燃やす中で、クーゴ一人が寒気と疑念に身を丸めている。

(この感じ……蒼海姉さんあおみと対峙したときみたいだ)

その悪寒は、クーゴの姉・刃金はがね 蒼海あおみと対峙した時に感じるものによく似ている。

何故、日本から離れたこの太平洋——正確に言えば、中東に近づく輸送船の中——で、彼女のことを連想したのでらう。

彼女が中東を訪れるような用事はないはずだ。母である櫻華おうかが、何か変なことを言いだしたりしない限りは。

「大丈夫ですか？ 副隊長」

「……検査結果で大丈夫だったから、大丈夫のはずなんだがな……」

ダリルの問いに、クーゴは首をひねりながら答えた。ハワードも、心配そうにこちらを見返している。

「とりあえず、温かな飲み物はどうだい？」

「サンキュ、ベリー」

ベリーから蜂蜜レモンを受け取る。クーゴは、湯気が漂う飲み物をちびりちびりと啜った。氣遣ってくれる人たちの温かさも相まって、体にじんわりと染み渡ってくる。

悪寒もだいぶ楽になった。礼を述べれば、面々も安堵したように微笑んだ。完全回復とはいかないけれど、仲間たちの足を引っ張るような醜態は晒さずに済みそうだ。

「向うに到着したら、ゆっくり休んだ方がいいのではないか？」

「まさか。今ので、充分元気になったよ。……心配してくれる人がいるって、やっぱいいいなあ」

「……そうだな」

グラハムの問いに、クーゴは明るく笑ってみせる。グラハムもふつと笑みを浮かべて頷いた。



何の前触れもなく唐突な話になるが、日本には『帰ってくれウルトラマン』というネタがある。

ウルトラマンと言えば、20世紀から日本で始まった特撮ヒーローものだ。彼らは地球の平和を守るために、日夜怪獣と戦っている。

普段、彼らが姿を現すと人々から応援されるものだ。しかしレア

ケースとして、ウルトラマンが非難されたり、劇中で本当に「帰れ」と言われることもある。

一番メジャーなのは、初代におけるウルトラマン対ガヴァアドンが挙げられるだろう。

ガヴァアドンは、少年が描いた絵が、宇宙線によって実体化してしまった怪獣だ。白い体躯に魚をモチーフにした可愛らしいフォルムと、つぶらな瞳が特徴である。奴は人類に敵意を持ったわけでも、街を破壊するでもなく、ただ眠り続けていた。彼はその後行方不明になったが、子どもたちは懲りずにガヴァアドンを描き実体化させる。

怪獣らしい見た目に進化したものの、相変わらずガヴァアドンは何もなかった。いびきによる経済被害以外、目立った害が見当たらない。そんなガヴァアドンを退治しようと試みた特捜隊とウルトラマンであるが、その場に居合わせた子どもたちから「帰ってくれ!」、「そつ」としてやれよ!」と非難されてしまったのである。

ウルトラマン本人にしては、いつも通り地球を守ろうとしたただけだ。

いつも通りに仕事をしようとしたら、いつもは応援してくれる人たちから盛大なヤジを貰うのだ。

きっと、ウルトラマンは涙目だったに違いない。その心境を考えると、彼の気持ちがあんなとなくわかるような気がする。

話の大部分が無関係なので、閑話休題といこう。

「久しぶりねえ、^{クローゴ}空護」

「……遠路はるばるご苦労様です、蒼海姉さん」

『帰ってくれ姉さん、本当に帰ってくれ』という言葉を必死に飲み下しながら、クローゴは努めて無表情を装った。

何故ここに、蒼海がいるのだろう。正直、クローゴには何が起こっているのか理解できないし、したくないと頭が悲鳴を上げている。

そつとしておいてくれ。頼むから、何も言わずに早く帰ってくれ。

クローゴは心の中で延々と唱え続けた。

効果は微塵もなかった。当たり前であつたが。

「お久しぶりです、ミス・ハガネ」

グラハムは居心地悪そうにしつつも、儀礼はきちんと守つて蒼海に挨拶した。ハワードやダリル、ビリーたちもそれに続く。

「初めまして。ハワード・メイスンです」

「ダリル・ダッジです」

「ビリー・カタギリと言います」

蒼海から何かを感じ取つたのか、他の3人も、表情が硬い。警戒している。彼らの判断は間違つていないし、むしろ鋭いと言えた。

大多数の人間が、蒼海を「いい人」認定する。てつきり、クーゴはビリーたちも大多数と同じだと思つていたが、グラハムと同じような反応を示した。

意外だ。クーゴはひっそり、仲間たちに対して失礼なことを考えた。心の中でそつと謝罪しておく。仲間たちは何も知らない様子だった。

蒼海はどうして、アザデイスタンにいるのだろうか。クーゴが疑問を口にする前に、蒼海が後ろを振り返つた。コンシエルジュらしき男が、細長い桐箱を抱えてやって来る。

彼女の目くばせを確認した男が、クーゴに桐箱を手渡した。訳の分からぬまま、クーゴはその桐箱を受け取る。蒼海はハッキリ聞こえるくらいの舌打ちをかました。

「つたく。あの老害^{ははおや}は、アタシを何だと思つているのよ」

地獄の底から轟くような、低い声だった。

「軍人に守り刀なんて、いつの時代のことかしらね。軍人なんて常に

死と隣り合わせ。生きる覚悟を決めるより、死ぬ覚悟でもしてほしいわ。……いいえ、明日にでもすぐ『いなくな』ればいいのに」

「——!!」

「ああ、何なら、その刀で自害してくれてもいいのよ？ その方が、アタシは嬉しいわ」

蒼海の言葉に、仲間たち全員が反応した。戦慄、後に湧き上がったのは怒り。

ハワードとダリルが身を乗り出し、ビリーが「ちよつと」と声を上げる。彼らを制したのはグラハムだった。

一般人相手に問題を起こしたくない——当然の対応である。クーゴとグラハムは顔を見合わせた。面々を制した彼だって、本当は納得できていない。でも、クーゴのために皆を止めてくれた。ありがとう、と目で伝える。複雑そうに、グラハムは俯いてしまった。

蒼海は言うだけ言うと、コンシエルジュらしき男性を伴って空港から出て行ってしまった。結局、彼女が何故アザディスタンにやって来たかは全然掴めないままである。『母から守り刀を届けることを頼まれた』というだけではないらしい。

彼女の服装は日本にいたときと同じ着物姿だった。中東の街では相当目立つ。異教徒を嫌うアザディスタンでは、格好の的になるだろう。いささか不用心すぎやしないだろうか。我が姉ながら、よくわからない。

蒼海の背中を見送り、ハワードとダリルが眉間に皺を寄せる。

「何ですか、あれ！」

「実の弟に向かって、なんてことを！」

「2人とも落ち着け。いつものことだし、俺は気にしてないから」

「しかし……！」

「ですが……！」

自分のために怒ってくれる人間がいる。

それは、とても貴重なことなのではないだろうか。
クーゴはひっそり、そんなことを考える。

「でも、憤ってくれたことは嬉しいよ。ありがとう」

心の底から感謝を述べれば、面々は複雑そうに視線を彷徨させた。
煙り続ける憤りを弄ぶようにして、彼らは苦い表情を浮かべている。

「クーゴが『寒い』って言った理由が、なんとなくだけど、今なら分かる気がするなあ」

「ああ……」

ビリーはそう言って、そっと肘をさすった。グラハムも、険しい表情のまま頷く。ワードとダリルも、クーゴを気遣うようにこちらを見た。

大丈夫だと示すように、クーゴはゆるりと微笑んだ。蒼海が去った後、悪寒は嘘のようになってしまった。文字通りの完全回復である。

体調不良の原因はストレスだったのだろうか。まるでリーダーみたいだ。クーゴは1人、勝手に考えて納得してみた。じっくりくるようにでじっくりしない。

「うひゃあっ！」

蒼海が去っていった方向から、女性の悲鳴が響いた。何かひっきり返るような音が響く。カラカラと、音が聞こえてきた。

クーゴは嫌な予感を感じて、慌ててその方向へと駆けだす。案の定そこには、去っていく蒼海の後ろ姿と、車椅子から転げ落ちてしまった女性の姿があった。

ひっくり返った車椅子の車輪が空転している。女性は蒼海の後ろ

姿を睨みつけながらも、自力で立ち上がろうと奮闘していた。

獣だ。獣がいる。

鋭い牙を連想させるような、青い瞳。

女性の手は、車椅子に向かって伸ばされていた。

一瞬躊躇ったが、蒼海のしたことを放置してはおけない。

クーゴは怯えを振り払い、女性に手を差し伸べた。

「大丈夫ですか？」

問えば、女性はゆっくり顔を上げる。そうして、はっと息を飲んだ。

「？」

女性の口が、かすかに動いた。

読み取ることはできなかった。

「え」

「……な訳、ないか。あの人は……」

首を傾げるクーゴを横目に、女性は深々とため息をついた。とりあえず、クーゴは女性を助け起こし、車椅子に乗せてやる。

女性は「ありがとう」と頭を下げた。後ろの方から足音が聞こえてくる。振り返れば、グラハムたちがやって来たところだった。

何があつたのかと訊ねてきた面々に、蒼海がやらかしたことを伝える。途端に、彼らの表情は不機嫌一直線となった。

逆に、女性は目をぱちくりさせて、蒼海が去っていった方向とクーゴに何度も視線を向けた。

似ているけれども似ても似つかない——女性の表情は、そう叫んでいる。クーゴは苦笑した。

「姉がすみません」

「いや、いいよ。貴方が気にすることじゃないし、いいこともあったし」

「え?」

「——そっくりなのよ。旦那の若い頃に」

女性はそう言って、悪戯っぽく笑った。

「はあ……」

「ふふ。貴方はきつと、旦那と同じイイ男になるわ。間違いないっ!」

クーゴは曖昧に返事をする。女性はやけに上機嫌だった。

ふと、女性は何かに気づいたようにクーゴを見つめてきた。

何事か、とクーゴが首を傾げる。女性はぽんと手を叩いた。

「もしかして、A E Uの軍事演習場で、エルガンと……エルガン代表と何か話してたわよね?」

「あ」

女性の言葉に、クーゴは合点がいった。

初めてガンダムと遭遇したA E Uの新型発表会で、エルガンを呼んでいた女性だった。そういうえば、彼女の声は、誰かを相手に熱弁を振るっていた女性技術者の声とよく似ていた。いや、本人だ。今ならはつきりとわかる。

偶然の再開。意外と世界は狭いらしい。その言葉を聞いたグラハムとビリーは、女性に対してシンパシーを感じたらしい。あのとき起こった出来事からガンダムの機体性能、果てには恋愛関係の雑談まで始めてしまった。

いつの間にやら、ハワードとダリルも会話に加わる。見ていて微笑ましい。

時が流れるのも忘れて、ガンダム調査隊の面々は、女性と心行くまで語り合った。

どれくらい時間が経過しただろう。青空は、いつの間にか日が傾いていた。

「——あ、そうだ」

女性は懐の中から何かを取り出した。

差し出されたのは一枚の名刺。「いつか、お礼をさせてもらおう」と言い、女性は時計に視線を向けた。「げ」と、女性は苦い表情を浮かべて舌打ちする。

どうやら急ぎの用事があったらしい。礼を述べて、彼女は慌ただしく車椅子を漕いで去っていった。女性の背中を見送ったのち、クーゴは名刺に目を剥ける。

『悪の組織』代表取締役。名刺にはそう書かれてあった。

もう一度読み返す。『悪の組織』代表取締役と書かれてあった。

何度も読み返す。『悪の組織』代表取締役と書かれてあった。

覗き込んでいたビリーやハワードたちが絶句する。グラハムとクーゴは呆気にとられていた。

「ちよ、え、嘘。え、え、えええ」

ややあって、ビリーが判別不能の言葉を漏らし始めた。

気持ちにはわからないわけではないが、落ち着いてほしい。

(なんだろう。前途が多難すぎる予感しかしない)

ぶっ壊れる寸前のオートマトンよろしくな状態のビリーを正常に戻す。

アザデイスタンに到着して早々、ガンダム調査隊に与えられた任務に、クーゴは遠い目をしたのであった。



破壊と殺戮を呼ぶ機体は、格納庫で静かに眠っている。

女はうっとりとしてMSを見上げていた。これは他の誰でもない、女の機体。

ガンダムを超え、世界をひっくり返す力を持つ最強の機体。

それだけではない。女の背後には、太陽の塔を思わせるようなデザイン、巨大な機械が鎮座していた。

星とそこに暮らす人類を管理し、正しい未来に導くための役割を持つていた機械。星を導くべき存在の決定権を有した存在。

女性是不気味な笑みを浮かべながら、端末を開いた。そこに記されていたのは、女性が手にした知識のすべて。

西暦2307年から始まった知識のデータには、ソレスタルビーイングの活動を中心とした年表が記されていた。

ソレスタルビーイングは1度滅び、4年後に再び姿を現す。世界の歪みを破壊した彼らは、以降は世界の敵として存在し続ける――。

年表のデータは2312年で止まっているが、女にとっては充分であった。

「そうだ。この力が、あれば――！」

女は高揚した気分を隠さなかった。

ずっと欲しかったものを手にした喜びで満ち溢れていた。

この力さえあれば、全てを思うがままに動かせる。女を認めなかったすべての存在が、女を認め、讃え、ひれ伏すのだ。その中にはもちろん、憎い半身も含まれる。

女は双子の弟を思い浮かべた。何事もそつなくこなすことができ、才能に満ち溢れた男。

病弱だったくせに、いつの間にか健康優良児となった、ユニオン軍のフラッグファイター。

女が持つ情報には『存在していない』はずの人間であり、『存在してはいけない』^{イレギュラー}異分子の1人。

「異分子共々、消してあげる。世界のすべてを、変えてみせる」

まるで、歌を歌うかのように。女は朗々と言葉を紡ぐ。

女は端末を動かした。

浮かび上がってきた情報は、女性の知りうる知識との相違点だ。

刹那・F・セイエイが女であること。

ソレスタルビーイングに、5人目のガンダムマイスターがいること。

5人目のマイスターの名前はイデア・クピディターズであること。

5機目ガンダムの機体名はスターゲイザーであること。

ソレスタルビーイングの仲が比較的和やかであること。

刹那・F・セイエイとグラハム・エーカーが事実上の恋人関係であること。

刹那・F・セイエイのご近所関係が比較的良好であること。

絹江・クロスロードにセキ・レイ・シロエやジョナ・マツカという調査仲間がいること。

沙慈・クロスロードとルイス・ハレヴィが結婚を前提とした恋人関係であること。

『悪の組織』という名前の技術提供会社が存在していること。

ソレスタルビーイングと対を成す組織、スターダスト・トレイマーが存在していること。

テオ・マイヤーという名の売れっ子歌手が存在していること。

アレハンドロ・コーナーの部下の人数が、1人多いこと。

チーム・トリニティに教官がいること。

リボンズ・アルマークとイノベイドたちの仲が良好であること。

青年はノブレス・アムという名前であること。

グラハム・エーカーに、年上の友人であり副官がいること。

そのフラッグファイターの名前は、クーゴ・ハガネであること。

「世界は私の、掌の上」

女は歌うようにして言葉を続けた。女の言葉に反応するかのよう
に、背後の機械が不気味な光を放つ。

破壊と殺戮を呼ぶ機体は、格納庫で静かに眠っている。

女はうっとりとしてMSを見上げていた。

*

「キミは何をしに、ここに訪れたんだい？」

アレハンドロの問いに、女は淡々と答えた。

「機体のテストをしに。……ここには、いい的があるもの」

「的が何を指しているかは知らないが、あまり派手なことほしないで
くれよ。計画に支障が出る」

アレハンドロが咎めるように諫めれば、女性は鼻を鳴らした。

「それは、誰の計画に？」

部屋を満たしたのは、沈黙。

アレハンドロは窓の外へと視線を向ける。

『我々』の計画だよ、ミス・ハガネ」

アレハンドロの言葉に、着物を着た東洋人女性——刃金^{はがね} 蒼海^{あおみ}／ア
オミ・ハガネは、うろんげな笑みを浮かべてみせた。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

28. 焼野原広し

アザデイスタンの夜空を切り裂くようにして、4機のフラッグは空を翔けていた。

この国の治安は本当に不安定だ。首都だろうと郊外だろうと、テロが絶えない。停戦援助なんて表だけだろうと思ったが、本格的にしないと対応できない程酷かった。

ユニオンのお偉いさん方は、治安維持なんて手を抜いて、本命であるガンダムに集中したかったに違いない。手抜き不能な状態だとは予想外だっただろう。

今晚だってそうだ。改革派の象徴である太陽光発電受信アンテナ施設に、保守派の過激派が攻撃を仕掛けてきたのだ。

保守派の重鎮であるマスード・ラフマディー氏の誘拐事件のせいで、改革派と保守派の対立は更に深まっている。

犯人は改革派か、保守派のマツチポンプか、第3勢力か。理由はわからないが、だだっ広い焼野原のイメージが頭から離れないでいた。

「行くぞ、フラッグファイター！」

「了解！」

グラハムに従い、クーゴたちは彼の後ろに続く。

MS同士が激しい銃撃戦が繰り広げられていた。

しかも、同じ機種のMS同士が戦っている。

「隊長！ 味方同士でやり合ってますぜ！」

「どうします!?!」

ハワードとダリルが、グラハムに問いかける。グラハムも戸惑っている様子だった。

「く……い…… どちらが裏切り者だ……!?!」

攻撃する方を間違えれば、最悪の結果が待っている。下手に手を出せない状況だったが、静観することもできない状況だ。

クーゴも歯噛みしながらMSたちを睨みつける。どれが敵だろうか。見分けがつかないというのは本当に不便——……？

(え)

烧野原が『見える』。だだっ広い烧野原。

それを抱くMSがどれか、『分かる』。おそらく、そいつらが裏切り者だ。判別がついたなら話が早い。

クーゴは即座に操縦桿を動かした。狙いを定めて、勢いよく急降下。裏切り者の眼前に迫る。

即座に飛行モードからMSモードへと機体を可変させ、クーゴはガーベラストレートとタイガー・ピアスを振るった。

1体、2体、3体。烧野原を抱くMSを、クーゴは次々と屠っていく。

相変わらず、この武装の切れ味は凄まじい。装甲が紙のようにスパパ切れる。

「隊長、副隊長が！」

「大丈夫なんですか!？」

ハワードとダリルが困惑した声を上げる。

それを聞いたグラハムは、迷うことなく頷いた。

「大丈夫だ！ おそらくクーゴには、倒すべき相手が『分かっている』！」

「ええっ!? 分かるんですか!？」

「ほ、本当ですか!？」

「ああ！ 『分かっている』とも！」

困惑する部下2人を尻目に、グラハムは力強く言った。強い確証を宿した翠緑の瞳に、2人は気圧された様子だった。困惑したような感情に触れる。

クーゴは苦笑した。ハワードたちの気持ちはよくわかる。普通の人間では得られない確証を得て行動するクーゴの様子は、どこからどう見ても異質の一言に尽きるだろう。

そんなクーゴの行動に理解を示すグラハムの判断もだ。人間卒業間近だからこそできる芸当である。自分で肯定してしまうというのも、色々と複雑な気持ちになるのだが。

不意に、泣き叫ぶ子どもの声が聞こえた気がした。廃墟と化した場所、家族と思しき少女を抱えて叫ぶ少年。

次の瞬間、レーダーにノイズが走った。思わずクーゴが動きを止める。その隙を狙ったMSが攻撃を仕掛けようとし、寸前で、MSの脚が吹き飛んだ！

「狙撃か!？」

「この粒子ビームの光は……ガンダムか!」

クーゴに続いてグラハムが声を上げる。MSたちは脚や腕の武装を吹き飛ばされ、次々と戦闘不能に追い込まれた。

「しかも、この距離からの攻撃となると、スナイパー型のガンダム！

ということとは……」

「どういうこと?」

どこか戦慄くグラハムの様子に、疑問を持ったハワードが問いかける。グラハムは、屹然とした表情で答えた。

「——お父さんだ!」

奴の表情は、どこからどう見ても真面目一徹だった。そこに、冗談を言うような空気など一切感じない。

あまりにもあんまりな発言に、クーゴは思わず「はあ!？」と、ハワードとダリルは「え」と間抜けな声を上げてしまった。

何をどうすればその結論に行きつくのか。そういえば、以前にも似たような状況に陥ったことがあったような、なかったような。

奴が言ったのではない。奴の発言にリミッターが振り切れてしまった、スナイパー型ガンダムのパイロットが叫んだのだ。自分のことをお父さんと言い、「そんなの許さない」と主張していた。

ゲッター線の施設を攻撃しに来たときに聞いた。あと、その際見てしまった虚憶きよわくでも同じ光景があった。久しく忘れていたが、グラハムの発言のせいではつきりと思い出してしまったではないか。

『私は彼女が好きだ！ 彼女が、欲しいイイイイイイ!!』

『お父さんは！ お父さんは赦しません！ こんな絶対認めないいいいいいい!!』

『何人たりとも、私の愛を阻むことはできない！ 阻むものがあるなら、そんなもの、私の無茶で押し通す!』

『年の差その他諸々考えろ、この変態が!!』

『キミにそれを言える資格はないな！ キミは私と同類と見た!』

『天地がひっくり返ったとて、お前さんとだけは一緒にされたくないね！ こっちは頑張ってお兄さんやってるんだからな!』

『そうやって、キミは愛するものが他人にかっさらわれていくのを、手をこまねいて静観すると？ そんなこと、私はお断りだ!』

あのとときと同じように、色々と脱線してしまうのではないか——クーゴがそんなことを考えたときだった。

「——ところがぎつちよん!」

ほんの一瞬。一際鮮明に、焼野原が『視えた』。どこまでも広い焼野原を背にし、高笑いを挙げる男の姿。

新たななる戦乱を巻き起こすために、その男は笑いながらトリガーを引く。

クーゴがその光景から現実に戻ってきた刹那、空にミサイルが放たれた！

「何っ!？」

その数、4弾。いや、正確に言えば4弾ではない。クラスタ爆弾と同じ原理だ。

花を咲かせるように展開したミサイルの中から、大量の爆弾が、施設目がけて降り注ぐ！

「……………」

クーゴは操縦桿を動かした。

間に合わないと思い、衝撃に対して身構えていたが、予想していたことは起きなかった。

クーゴの真上に降り注いだ爆弾を、スナイパー型のガンダムが撃ち落したのだ。

間一髪、クーゴのフラッグは空へと舞い上がった。一步遅れて爆弾が施設に着弾する！

(あ、危なかった…………)

スナイパー型ガンダムのパイロットは全弾撃ち落としかつたのだろうが、量が多すぎたらしい。ピンポイントの狙撃は得意でも、複数相手の乱れ撃ちは不得手のようだ。

そういえば、別の虚憶きよわくで喧嘩をしていた双子の得意分野も正反対

だった。兄は狙撃と精密射撃を得意としていて、弟は早打ちと乱れ撃ちを得意としていたか。

いつぞや見た別の虚憶きよおくでは、兄弟そろって恋人を怒らせて大変なことになっていた気がする。被害の度合いで言えば弟の方が大惨事だった。義実家からの攻撃のせいだ。

スナイパー型のガンダムが爆弾の一部を撃ち落としてくれなければ、クーゴは今頃爆発に巻き込まれていただろう。

おそらく、それに関する感謝を告げる機会は、戦場では巡ってこない。戦場では、きつと。

「グラハム！」

「ああ、任せるぞー！」

クーゴが何を言わんとしたか察したグラハムは、二つ返事で送り出してくれた。

「ハワード、ダリル！ クーゴと共に、ミサイル攻撃をした敵を追え！」

ガンダム、もといお父さんは私がやる！」

「りよ、了解！」

「おと……!?! が、ガンダムは任せますぜ！」

続けざまに、グラハムはハワードとダリルに指示を出す。

お父さんという単語に引っかけかけたものの、彼らも即座にクーゴの元へと随伴してくれた。

クーゴはフラッグを加速させる。体にかなりのGがかかってきたが、それを振り払うように操縦桿を動かした。襲撃者をこのまま野放しにしては置けない。

奴はまだ近くにいますはずだ。脳裏に浮かぶ『だだっ広い焼野原』のイメージが、どんどん鮮明に見えてくる。それこそが、襲撃者に近づいているという証拠だ。

荒野の真ん中に佇む男の元へ距離が迫る。奴がこちらに気づいて

振り返った。ぼさぼさの茶髪に、伸び放題の無精髭。鋭く、けれど愉快そうに細められた瞳。

その顔が鮮明に見えたと思った次の瞬間、

「何イ!？」

驚愕の声がした。そこで、クーゴは現実へと引きもどされる。雲を突き破った眼下には、AEUIナクト。

しかも、ただのAEUIナクトではない。モリア戦役でグラハムの『意中のガンダム^使』を追いつめた、緑青のイナクトだ！

世界中を戦果に陥れることを生きがいとし、その中で戦うことを生業とし、それこそが己の娯楽でありすべてなのだ——と。

烧野原を抱く男は笑う。

狂ったように笑い続ける。

これ以上、好き勝手にさせてはいけない。

「なにが——」

フラッグを急降下させつつ、飛行モードからMSモードへ機体を変形させる。

「ぎゅちよんだ、この野郎!」

鞘からガーベラストレートとタイガー・ピアスを引き抜き、イナクトへと振り下ろした!

「ちいっ!」

イナクトは寸でのところで機体を可変させ、プラズマソードで攻撃を受け止める! 刃がぶつかる音が激しく響いた。

何度か切り結びを繰り返し、フラッグとイナクトは距離を取った。

流石は傭兵、確実に相手を屠ることに特化した戦い方だ。こちらの型に嵌めづらい。

相手も、日本武術（主に剣道と殺陣）をベースにしたクーゴの戦い方が珍しいのだろう。己の型に嵌めることが難しいようだ。しかし、それすらも奴は楽しんでる。

日本文化についても多少は齧っていたらしい。

しばしガーベラストレートとタイガー・ピアスを見比べたのち、男が愉快そうに笑ったのが『視えた』。

「成程な。これがサムライってヤツか。面白れエ！」

今度はイナクトが攻撃を仕掛ける番だった。リニアライフルの照準がフラッグに向けられる。クーゴは即座に操縦桿を動かした。

リニアライフルの弾丸を避け、ときにはガーベラストレートとタイガー・ピアスで真つ二つに切り裂き、クーゴは再びイナクトとの距離を縮める。

待ってましたと言わんばかりに、イナクトがプラズマソードを振りかざした！ フラッグも迷うことなく、刀で剣を受け止める！

「おらよっ！」

しかし、それだけでは終わらない。

ぶつかり合う中で、イナクトが突如回し蹴りを叩きこんできた！

不意を突かれたフラッグが大勢を崩す。プラズマソードが再び振りがざされた。

「なんのツ！」

イナクトの追撃を紙一重で受け止め、今度はクーゴがカウンターに入る。

その一撃は、イナクトが咄嗟に突き出したりニアライフルによって

阻まれた。

ガーベラストレートはライフルを真つ二つに叩き切ったが、イナクトの決定打としての意味を成さなかった。イナクトのパイロットは、^{ライフル}障害物に阻まれた僅かな時間とズレを利用し、クーゴの攻撃を流したのである。再び、フラッグとイナクトは距離を取った。

(やりづらい相手だな)

クーゴが侍なら、相手は無法者だ。何物にも縛られないがゆえに、何をしてくるのかまったく見当がつかない。ルール無用、むしろ奴のルールは奴にしかわからないのが恐ろしい。

状況は、遠距離用の武装を失ったイナクトの方が不利だ。しかしこのパイロットは、己の置かれた状況も楽しんでいる。ここからどうやって、自分の望む——自分が楽しめる戦争をするか、考えているのだ。

『お父さん、刹那を私にくださいあああああいつ！』

『誰がやるかコンチクショウ！ お父さんは赦しませんよオオオオ！』

どこかからか、グラハムとスナイパー型ガンダムのパイロットが叫んでいる声が聞こえた。

やはり、似たような会話をどこかで聞いたことがある。今はどうでもいいことだが。

フラッグとイナクトが睨み合う。再び、相手に攻撃を仕掛けようとしたときだった。

寒気がした。纏わりつくような悪意と殺意。本能が大音量で悲鳴を上げる！

ほぼ勘に近いが、クーゴは迷わずそれに従って操縦桿を動かした。イナクトのパイロットも同じよう、クーゴのフラッグと鏡合わせのように回避に動く。

刹那、数秒前までフラッグとイナクトがいた場所に向かって、金色に輝く弾幕が降り注いだ！ あと一步遅かったら、直撃していたに違いない。

「何だ!？」

レーザーが降り注いだ方向に視線を向ける。黒い機影が、夜闇の中におぼろげな姿を見せていた。

背中に巨大な何かを背負ったMSが、フラッグの方を向いた。機影に動きが見える。次の瞬間、何かフラッグ目がけて飛んできた！

操縦桿を動かして回避行動に移ろうとしたが、それよりも、何かフラッグを捉えるほうが早かった。正体は、巨大なアームである。

アームの後ろには長いワイヤー。機影はそれを、ヨーヨーの原理で振り回すつもりなのだ。逃れようともがくが、どうしようもない。

(まずい！)

このままでは、思い切り振り下ろされる。高度数百メートルから、地面に叩き付けられるのだ。その末路は——言わずもがな、である。

背中を襲った悪寒は、己の末路に対する恐怖だけじゃない。もつと別な場所にあるものだ。少し前、自分はそれと対峙していたような気がする。

クーゴの思考回路は、体を襲い始めた遠心力とGによって、強制的に中断させられた。代わりに湧き上がるのは、己が死へと向かっている事実と、それに対する恐怖のみ。

死にたくない。

でも、死ぬ以外に道がない。

それでも、死にたくない。死んではいられない——！

「クーゴさん！」

「——っおう!？」

次の瞬間、何か切断されるような音と聞き覚えのある声が響いた。フラッグを振り回していた力から、投げ出されるような形で解放される。

寸でのところで機体の態勢を整え持ちこたえようと、緑の光が見えた。顔を上げる。

眼前には、何度も見慣れた純白のガンダム。天女は心配そうにフラッグを見つめていた。

どうやらクーゴは、イデアに助けられたらしい。彼女がここにいるということは、ソレスタルビーイングが動いているということだ。

何者かの悪意により、戦禍に陥れられそうなアザデイスタン。『ソレスタルビーイングが介入行動を起こす』と踏んだ上層部の予想は、見事に正解だったようだ。

『身持ちが堅いな、ガンダム！ 流石はお父さんだ！』

『このしつこさ、尋常じゃねえぞ!? 刹那はこんなの言い寄られてたつてののか……!?!』

『そうだな。私はしつこくてあきらめも悪い。俗に言う、人に嫌われるタイプだ!』

『言った！ 自分で認めやがったぞコイツ!』

どこかからか、グラハムとスナイパー型ガンダムのパイロットが叫んでいる声が聞こえた。

やはり、似たような会話をどこかで聞いたことがある。今はどうでもいいことだが。

「大丈夫ですか?」

「あ、ああ。ありがとう」

安堵したように微笑んだイデアの顔が『視えた』クーゴは、困惑しながらも礼を述べた。

まさかガンダムに——しかもイデアに助けられるとは思わなかった。ゲッター線のと看きは真逆である。

何も知らずに、クーゴは彼女と切り結んできた。互いの立場を知った上で、空で対峙したのは初めてだ。

そこまで考えていて、はつとした。

緑青のイナクトは、どこへ行ったのだろう。

クーゴを襲った襲撃者の行方も気になる。

(そうだ、あいつ！)

クーゴは慌てて周囲を見回したが、緑青のイナクトも、襲撃者と思しき機影も、もう見えなかった。

「逃したか……!」

とんだ失策である。危うくモニターに八つ当たりしそうになった。

どうにかして堪えて、クーゴは大きく息を吐いた。

『皮肉なものだ。嘗て空を飛ぶためにすべてを絶った私が、ただひとり求めて空を飛ぶことになろうとは』

『あんた……』

『そういう訳でお父さん、彼女を私にくださあああああいつ!』

『やっぱりあんたはダメだ! 絶対にダメだ!!』

『くっ! よくも私のフラッグを傷物にしてくれたな!』

『お前こそ、よくもウチの刹那をたぶらかしてくれたな!』

どこかからか、グラハムとスナイパー型ガンダムのパイロットの会話が聞こえた。

途中から叫び声になった気がする。……いや、今はそんなことはない。

イデアには、こちらを攻撃する意思はない。クーゴにも、彼女を攻

撃する意思はない。必然的に、フラッグとガンダムは空で向かい合っていた。

いつぞやのオフ会で、喫茶店の対面席に座っていたときのことを連想したのは何故だろう。上には満天の星空が、下には雲の海が広がっている。

場違いなほどに穏やかな時間が流れた。こんな逢瀬も悪くはない。クーゴの思考回路を読み取ったのか、アイデアも嬉しそうに笑った。しかし、彼女の微笑はすぐに寂しそうなものに変わった。どうしたのか、と問う間もなく、クーゴのフラッグに緊急の無線が入る。

「MSが、王宮に向かって侵攻……クーデターか!？」

至急防衛に向かってください、という無線内容が繰り返される。

『クーデターだよ。早く行け、フラッグのパイロットさんよ』

『彼女に会えなかった上に、お父さんとの決着も付けられず仕舞いと
は……!』

『いいから! さっさと行ってくれよ頼むから! 軍人の本分を思い
出して、それを果たしてくれ! もうこれ以上、俺の精神を侵さない
でくれ!!』

『……言い返したい言葉は山ほどあるが、私とて人の子だ! 今は何を成すべきかくらい心得ている!』

「クーゴ、ハワード、ダリル! 首都防衛に向かうぞ!」

「了解!」

どこか遠くから響いていたような声が、突然鮮明に響いた。いつの間にか、通信が開いている。

映し出されているのは、他の誰もないグラハム・エーカーであった。クーゴはハワードとダリルに続き、彼の言葉に返事をする。

ちらりとアイデアの方を向く。純白の天女は静かにフラッグを見つめていた。頑張つて、行つてらっしゃい、と、彼女の声が聞こえた気がした。

名残惜しい気もするけれど、自分が今何を成すべきか、クーゴはきちんと心得ている。ガンダムに背を向けて、クーゴは首都へと進路を取った。



「ところでロックオン・ストラトス。貴方は誰と会話していたの？」
「またかよ!?! もう嫌だこのパターン! 俺は一体どうなったっていうんだアアアアアアアア!!?!」

留美リュウミンの言葉に頭を抱えて慟哭する、ロックオン・ストラトス25歳。

彼は順調に、人間としての坂道を転がり落ちていた。ゴールはまだまだ先である。

ちなみに、今回の出来事はこれで2回目だ。まだ2回目であるのだが、彼にとっては相当ホラーな出来事だったらしい。

(彼がストレスで潰れるのが先か、無事に『目覚めの日』を迎えるのが先か)

アイデアはスターゲイザーを翔ながら、そんなことを考えていた。刹那との合流地点到着まで、まだもう少し時間がかかりそうだった。



首都は現在、厳戒態勢が敷かれていた。大半の要人や富裕層、および観光客の避難は軒並み完了している。

数メートル先に建っていたビルが崩れていくのを見ても尚、アレハンドロは避難しようとするしなかった。

「避難しないのですか？」

リボنزの言葉に振り返ったアレハンドロは、優雅な笑みを浮かべる。

「リボنز、ノブレス。キミたちも見ておくといい。ガンダムという存在を」

『もう既に見てますけどね』

『搭乗したことすらあるけどね』

偉そうに言い放ったアレハンドロに対して、リボنزとノブレスは反論した。勿論、心の中である。

戦場の範囲は、どんどんこちらに近づきつつあった。それと同じように、ガンダムも近づいてきている。

ここに介入する予定なのは、エクシアを操る刹那・F・セイエイ。リボنزが見出し推薦した、ガンダムマイスターであった。

顔は無表情そのものだが、リボنزは結構浮かれていた。

娘の初舞台を見守るような父親並みに、じっと窓辺を見つめている。

『楽しみですか？』

『とても』

アレハンドロがいなければ、彼は満面の笑みを浮かべていたであろう

う。ノブレスは、心の中でゆるりと微笑んだ。

『なんてったって、刹那・F・セイエイは僕が見出したんだ。僕に可能性を見せてくれた彼女の姿を、モニターではなく、間近で見れるんだよ？ これ程嬉しいことはない……』

『ここにアレハンドロがいなければ最高だったでしょうね』

『本当にね。あとはワインとチーズがあれば……』

『あるけど飲めませんもんね。全部奴のですし』

『後でワインセラーから年代物の奴かつぱらってきて飲もう』

『冷蔵庫を漁るのは任せてください。チーズ、市販のものを入れ替えておきます』

『高級品から一般流通してるやつに入れ替えても、全然気づかないよね。アレハンドロ・コーナー』

『本当にセレブなんですかねー』

ノブレスとリボンスが脳内で会話を繰り返していたとき、白と青基調のガンダムが降り立った。お、と、リボンスが小さく歓声を上げる。ノブレスも、彼女の戦いを見守った。

エクシアはあつという間にMSを撃墜していく。その出で立ちは戦乙女と呼ぶに相応しい。戦い方はやや荒削りさが残るものの、以前モニターで見たときと比較すれば、かなり良くなった。今では美しさも加わっている。

花のつぼみは着実に、開花へと向かっているのだ。彼女を見出した人間として、リボンスも嬉しいだろう。

窓から刹那の活躍を見守りつつ、リボンスは驚いたふりをしながら「これがガンダム」と零した。完全な棒読みだった。

『ちよ、棒読み』

『ノブレス、草まみれになってるよ。草刈機を持ってこないと』

日本のネットスラングで言えば、ノブレスの台詞の横には「w」が

延々と続いていただろう。

それを指摘しながら、リボンスはアレハンドロに視線を向けた。えへん、と胸を張っている。

彼に台詞を当てるとするなら、『どうだ、凄いだろう？ 何せ刹那・

F・セイエイは（以下略）』が相応しい。

ガンダム勇士を見ていたアレハンドロが鼻で笑う。やれやれ、とでも言いたげな様子だった。

「力任せだ。ガンダムの性能に頼りすぎている」

アレハンドロの発言は、見事にリボンスの地雷を踏みぬいた。彼の表情から、完全に感情が消え失せる。能面のような顔に対し、紫の瞳には炎が揺らめいていた。

怒っている。リボンスが本気で怒っている。脳量子波や能力を使わずとも、ノブレスにはそれが手に取るようにわかった。

「パイロットは刹那・F・セイエイだったか」

たかだか16歳の子ども。ちっぽけな少女。

そんな奴に、ガンダムマイスターが務まるはずがない――。

アレハンドロの目は、口以上に雄弁に語っている。

奴は、己こそがガンダムマイスターに相応しいと思っている。しかしヴェーダはアレハンドロを認めなかった。

だから、奴は自分の手でガンダムを作ろうとしている。

アルヴァトールおよびアルヴァアロンは、アレハンドロの夢の結晶であった。

『……………のくせに』

リボンスが、ぽつりと呟いた。ノブレスは思わず首を傾げる。リボンスは絞り出すように紡いだ。

『……エレガン党四天王の中で、一番小物且つ最弱のくせに……!!』
『あー……』

彼の言葉に、ノブレスは納得したように頷いた。もちろん、心の中である。

リボنزの怒りは収まるところを知らない。最近見た虚憶きよおくを諳しんんじるように、彼は朗々と言葉を紡いだ。

『リモネシアが吹き飛んだときは『仕方のないこと』なんて失言をかまし、外宇宙からの侵略者に対して楽観的な判断を下し、他の面々から呆れられ、3人より先に行動した挙句一番最初にやられたくせに。実力順に並べると、トレーズⅡミリアルド>シュナイゼル>超えられない壁>アレハンドロになるってのに、何なんだアレ。本当に人間ってわからないよ』

『トレーズ、ミリアルド、シュナイゼルが再世戦争で敗北したのに対して、アレハンドロはそれ以前の事件——破界事変でやられちゃったんです。つけたげ?』

『腹立たしい。釈然としない憤り……ああ、怒っているさ。僕は怒っている。相当にね』

リボنزの眼差しはアレハンドロに向けられている。自分の従者にそんな眼差しを向けられているとすら思っていないアレハンドロは、優雅な出で立ちを崩さなかった。

『ノブレス』

『何ですか』

『アルヴァアロンのモニターに施した嫌がらせ、爆発の威力上げよう』
『合点承知!』

リボنزの言葉に、ノブレスは2つ返事で頷いた。



アザデイスタンの夜空には、星が瞬いていた。
クーゴたちは首都へ向けて進路を取っている。
グラハムとはそこで落ち合う予定だ。

「ミサイルを発射した者は？」

「MSらしき機体を見つけましたが、特殊粒子のせいでは……」

グラハムの問いかけに、ハワードが苦い表情を浮かべて答えた。
しかし、次に聞こえた彼の言葉に、クーゴは目を見開くことになる。

「しかもそのとき、副隊長の機体が突然消えたんです！ つい先程合流しましたが、今まで、一体どこに行ってたんですか？」

「——え？」

そんなことを言われても。クーゴは心の中でぽつりと呟いた。

そういえば。イナクト交戦している最中も以後も、随伴してくれただけのハワードとダリルの姿がなかった。ハワードとダリルがイナクトを見失ってしまったというなら、クーゴもイナクトを見失っているはずだ。

自分たちは一緒に行動していたし、別行動を取った覚えもない。クーゴがイナクトに追いつかなくなったとき、一体何が起きたのだろう。空間転移でもしてしまったのだろうか。次元科学でもあるまいし。ぐるぐる悩んでも仕方がない、ありのままを報告しよう。

「ミサイルを撃つたと思しき機体を追いかけて、交戦していたんだ。犯人はA E Uイナクトだが、軍の所持するものではなさそうだった。機体のカラーリングは緑青で、カメラアイ付近に傷のような模様が入ってたよ」

「緑青のイナクトだと？ それはまさか——」

「ああ。モラリアで、白と青基調のガンダムを追いつめた奴だ。間違いない」

クーゴの言葉に、グラハムが苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。そういえば、モラリアのときも、グラハムはイナクトを目の敵にしていたような気がする。

彼はイナクト——正確に言えば、イナクトのパイロットに、強い対抗心を燃やしていた。その原動力は嫉妬だろう。本人は未だに、頑なに否定しているが。

正直、状況が状況じゃなければ盛大に茶化してやるところだ。それをぐつと堪えて、クーゴは言葉を続ける。

「けど、見失ったよ。途中で邪魔が入ってな」

クーゴの発言に、グラハムが首を傾げた。

「邪魔？」

「ああ。MSらしき機影は見たが、確認できなかった。危うく殺されたよ。間一髪で、天女が助けてくれたけど」

「成程。運命の女神は、キミに微笑んだという訳か」

天女、という単語が何を意味しているのか、グラハムはすぐに察した様子だった。

そのまま、彼は考え込むように俯く。思考回路は、クーゴを襲ったMSへとシフトチェンジしていた。

「となると、あのイナクトには協力者がいたということか？」

「それはないと思う。俺を襲った奴は、イナクト共々撃墜しようとしてきたからな」

思い出すだけで寒気がする。

纏わりつくような悪意と殺意。

確実に、襲撃者はクーゴを殺すつもりだった。

機影からして、アザディスタン軍やアザディスタンの傭兵が有するようなMSではなかった。おぼろげな姿しか見えなかったけれど、それだけはハッキリ言える。

襲撃者は何のために、クーゴのフラッグを墜おとそうとしたのか。ユニオン軍への反発にしては、狙いがピンポイントすぎるような気がしなくもない。

「確かに。フラッグ1機を撃墜するより、ユニオン軍が駐留する基地に、攻撃を仕掛けた方がいい見せしめになるはずだ……」

「相手は何を考えているんだ……？」

ハワードとダリルが眉をひそめる。

しかし、いくら悩んでも答えが出るわけではない。

今はともかく、首都防衛へと向かわなければ。

面々の思考回路は一致したらしい。通信越しからそれを確認したクーゴは、操縦桿を動かした。

◇

「増援部隊は、首都圏全体の制空権を確保しました！」

朝日が眩しく降り注ぐ中で響いた通信を聞いて、グラハムは小さく

頷いた。

フラッグから見えた首都の惨状に、酷く胸が痛む。

『この世界に、神はいない』

今にも泣き出してしまいそうな声音で、刹那が言ったことを思い出す。

グラハムは、彼女のことを何も知らない。刹那にそう言わしめた出来事が何なのか、知る由もない。

けれども、この光景の中に、その答えがあるような気がした。MSの残骸と、死体の山の奥底に。

彼らは神を信じ、神のために暴挙に走った。神のために戦い、神のために死んでいった。

彼らは真剣だった。他者から見れば「暴徒」という単語で片付けられるような行動であるが、彼らからしてみれば、己の命を賭けるべきものだったのだろう。

死への恐怖を信仰という鎧で覆い、楽園に召されることを信じて散っていく。死の先には何も残らない。残るとしたら、憎しみだけだ。そうしてそれは、連鎖となって続いていく。

「信心深さが暴走すると、このような悲劇を招くというのか……」

グラハムはぽつりと呟いた。痛ましい光景は、現在進行形で目の前にある。

何人の人間が犠牲となったのだろう。何人の人間が殺し、殺されたのだろうか。

彼らは皆同じ国に住み、同じ神を信じている、同じ人間だということに。悲劇を避けることはできなかったのだろうか。

この世界に神がいるならば、どうしてこの悲劇を回避させなかったのか――。誰もが考えることだろう。

これは試練だと言う者もいる。これは罰だと言う者もいる。これ

は予定調和だと言う者もいる。正しいのは、どれだ。

『この世界に、神はいない』

今にも泣き出してしまいそうな声音で、刹那が言ったことを思い出した。

神がいるというならば、今すぐにでも、少女の涙を止めてほしい。その悲しみを終わらせてほしい。

グラハムがそんなことを考えたときだった。

『……俺は、ガンダムになれない……！』

どこからか、少女の悲痛な叫び声が聞こえる。

己の無力さに打ちひしがれたような、弱々しく、けれど絞り出したような声。

俯いた少女の姿が『視えた』ような気がしたグラハムは、思わず息を飲む。

自分ではどうにもならぬ『それ』を目の当たりにして、彼女の名前を呼ぶので精一杯だった。

『それ』を終わらせる術を、グラハムは、何一つして持っていなかったから。

「刹那。キミは、今……」

泣いているのか。

グラハムの喉につかえた言葉が、音として成されることは、終ぞなかった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

29. 悪意と作為、時々善意（？）

『今日の運勢、最下位は乙女座のあなた。特に、9月上旬生まれのA型男性は、異性関係でショックなことが起きるでしょう』

「なんと!!」

『その出来事が原因で、あらぬ誤解が生じることも。嫉妬は厳禁ですよ』

「く……。そんな結果、私の無茶で押し通す!」

「隊長、その意気です!」

「頑張ってください!」

『運氣上昇のラッキーアクションは『相手を気遣う』こと! ラッキースポットは『荒野』! それでは皆さん、今日も良い一日を〜!』

背後から、ものすごく平和なやり取りが聞こえる。

グラハム・エーカー中尉とその部下ハワードとダリルは、今日も通常運転のようだ。

「こんな感じだったかなー」

クーゴは色鉛筆を止めて、出来上がったイラストを示してみた。

焼野原に佇む男。無造作に伸びた茶色の長髪と無精髭。

いかにも「職業は戦争です」と言いそうな人相の男だ。

「キミは絵心もあるのだな」

「昔、姉や親戚と一緒に勉強したことがあってな。つき合わされていくうちにこうなったよ」

グラハムの賛辞に、クーゴは苦笑しながら答えた。

所要時間、わずか10分足らず。ペンと色鉛筆を使った速筆がウリだが、今回は気合を入れて描いたつもりである。

画材を使い分けた写実は蒼海のウリだ。彼女だったら、文字通り

『完璧』に描けただろう。写真と同じレベルに再現できたはずだ。

家族や親戚たちは蒼海のことを蔑ろにしているが、もう少し、蒼海の才能や能力にも注目してほしいとクーゴは思っている。

(……まあ、態度と使い方が問題なだけで)

今までのことを思い出し、クーゴは遠い目をした。

閑話休題。

「まるで、本人を目の前にして描いたみたいだ……」

「イメージ画と言われても信じられないな」

「ここまで正確だと、証拠として採用されてもおかしくないんですがね。惜しいなあ」

ビリー、ハワード、ダリルも、イラストを覗き込んで感嘆の息を吐く。

イラストの横には、クーゴが目撃した緑青のイナクトの写真も添えられている。こちらはモラリア戦役のデータも残っていたため、比較的容易に再現することができた。カメラアイ付近に、傷跡のように刻まれた模様が特徴的である。

P M Cトラストが独自にチューンした機体であることは掴めたのだが、『盗まれた』こと以外は詳しいことは語らない。以前搭乗していたパイロットのことも話そうとしなかったので、諜報部に勤める遠い親戚経由で実力行使に出てもらった。

調査結果はもうすぐ送られてくるはずだ。今か今かと待ちながら、クーゴは先日イナクトと対峙したときに『視えた』イメージをイラストにしていたのである。その絵を見返していたとき、丁度いいタイミングで端末が鳴り響く。

データが届いたようだ。早速人物の名前と顔写真を確認し、クーゴは思わず息を飲んだ。

息を飲んだのはクーゴだけではない。グラハムも、ビリーも、ハ

ワードも、ダリルも、大きく目を見開く。

「アリー・アル・サーシエス……」

「こいつの顔、副隊長が描いたイメージイラストと瓜二つですぜ!？」

グラハムが苦い顔をし、ワードがイラストと写真を見比べて目を瞬かせる。驚異の一致に驚いたのは、それを描いたクーゴ自身にも言えることだった。

P M Cトラスト側は「イナクトは盗まれたものだ」と言った。しかし、モラリア戦役と先日の襲撃で搭乗していたパイロット（但しイメージ画）の顔は瓜二つである。双子、あるいは同一人物と言えるレベルだ。

データを見る限り、アリー・アル・サーシエス（どうやらこの名前は本名ではないらしい。偽名をいくつも使い分けているようだ）に、双子に該当するような存在はいない。それが意味することは、ただ一つ。

「……今回搭乗していたパイロットと、モラリア戦役で搭乗していたパイロットは同一人物ということか」

グラハムが噛みしめるようにして、結論を言った。クーゴもそれに続き、頷く。

「おまけに、P M Cトラスト側が嘘をついてたつてことになる」

「そこまでして、隠したいことでもあるんですかね?」

ダリルの問いに答える術がないクーゴは、俯いて首を振った。

「わからん。……が、今回の一件にはP M Cトラスト、およびアリー・アル・サーシエスが関わっていることは確かだろうな」

PMCトラストは傭兵稼業。それなりの金額さえ支払えば、依頼内容が何であっても引き受ける。要人の護衛や新機体のテストパイロット、果てには——戦争の誘発まで、なんでもござれだ。場合によっては、PMCトラスト系列の同種異企業に属する傭兵同士のダブルブッキング、および殺し合いもあり得る。

サーシエスのやっていることもアレだが、奴にアザディスタンの内紛を誘発するよう頼んだ奴も頼んだ奴だろう。いくらなんでも悪趣味すぎやしないか。パイロットの方向性と目的が、見事に適材適所である。争いをばら撒くことで戦いたい男に、戦争誘発を頼んだのだ。鬼に金棒ってレベルじゃない。

似たような企業として『悪の組織』も挙げられるが、こちらは方向性が違う。『悪の組織』が提示した条件を満たさなければ、彼らは技術提供を行わない。どれ程大金を積み上げられようとも、条件を守らない相手には、テコでも首を縦に振らないのだ。途中で条件を破れば、問答無用で契約を打ち切ってしまう。

（人類革命軍への技術提供も、契約違反が原因で打ち切りになったって話だし）

以前起きた超兵施設の破壊について、クーゴは思い返す。

研究を凍結させることを条件に契約していながら、彼らは研究を極秘裏に進めていたのである。

結果的に、超兵機関は崩壊、情報は世界中にリークされた。拳句、関係者も島流しの憂き目にあつたらしい。自業自得である。

逆に言えば、条件さえ満たしていれば／条件さえ守り続ければ、『悪の組織』は誰にでも力を貸す。

アザディスタンのような貧困にあえぐ国家だろうが、ユニオンのような軍だろうが、街を歩く一般人だろうが、学生だろうが、子どもだろうが。

条件内容も様々だ。意味不明だが重要な意味を持ちそうなもの、日常の片手間でできること、契約している団体に属する個人に対しての

もの等、本当に幅広い。

ユニオン軍では『技術班に『悪の組織』がスポンサーになった映画——『Toward the Terra』の『ミュウ』篇と、後に公開される予定の人類篇を視聴してもらおう』、『クーゴとグラハムに、『Toward the Terra』の全巻を読んでもらおう』等の条件が出された。

現在、クーゴは人類篇の上巻読破を目指していた。『ミュウ』篇の上巻と人類篇の上巻は、時間軸的に同時進行らしい。クーゴは時間軸を辿ることを選んだ。グラハムは現在、『ミュウ』篇の下巻を読んでいるという。

(キースがシロエに挑発されて怒ったシーンで止まってるんだよな。休憩時間に読み進めてはいるんだが……)

ここから先に進むと、悲劇が待っているような気がしてならないのだ。最近、なんとなくだが、そんな予感がする。

『ミュウ』篇の下巻に手を伸ばさなかったのも、悲劇が起きそうな予感がしたからだ。物語の登場人物に愛着を抱いているから、尚更。

特に、『ミュウ』篇のソルジャー・ブルー、人類篇のセキ・レイ・シロエがクーゴのお気に入りである。次点で主人公勢だ。

後者は最近活躍しているジャーナリストと同姓同名である。登場人物の名前と自分および他人の名前が一致することはよくあるが、完全一致とはまた珍しい。

(ま、今は調査に集中するか)

クーゴは思考を切り替えて、窓の外を見つめた。

イナクトが攻撃を仕掛けてきた地点は、もうすぐである。



今日も街ではテロが起きた。

何人もの人間が銃で撃たれ、爆発で吹き飛んだだろう。同じ神を信じながら、真っ向から対立し、憎み合う者たち。

マリナ・イスマイルの愛する民たちは、かりそめの平和の中、体を震わせながら日々を過ごしていた。

先のクーデター未遂事件で太陽光受信アンテナ施設が破壊され、それを目の当たりにした国連の技術者たちは撤退した。危険な紛争地帯に技術者を置いていたら、むぎむぎ死なせることになってしまう――それが、アレハンドロ・コーナーの決定である。

タイミングが良すぎるような気がしてならない。エルガンに問いただしてみたところ、『アレハンドロにとって、この撤退は予定調和ではない』と返答された。そこを静観したエルガンだが、相変わらず奴の眼差しは遠い未来を見据えていた。

エルガンにとっても、この出来事は予定調和にすぎないのだろう。アレハンドロを追い落とす準備をしつつ、そのタイミングを計っている。『そのとき』が来るまで、彼は世界すら騙してみせる男なのだ。人情派である女性では見えない部分を拾い集めている。

(……悔しいけど、私は大局を見据えるのが苦手だからね。そっちはエルガンに任せるしかない、か)

その分、エルガンから女性に任されているものだってある。

女性はニュース番組を見上げながら、己の成すべきことを考えた。

「マスード・ラフマディーの行方は？ まだわからないの？」

「ユニオン軍と共同で鋭意捜索中。けど、まだまだ時間がかかりそうよ」

マリナの問いに、シーリンは首を振った。状況は最悪を地でいくらしい。

未だ行方不明の保守派指導者、アンテナ施設の破壊、国連の技術者たちの撤退。

それらが立て続けに起きたところに、泣きつ面に蜂の如く起きたソレスタルビーイングの介入。

国民感情が不安定になっているのも頷ける。第一王女として矢面に立たされたマリナへの風当たりも強くなっていた。

『唯一の救いは、『悪の組織』の技術者たちが残留してくれていることだけかしら。でも……』

シーリンの思念が流れてくる。自分たちの存在が誰かにとつての希望になる——それはとても嬉しいことだ。

もしかしたら、大地の底で死ぬことを選んだグラン・パも、最期はこんな気持ちだったのかもしれない。

マリナはますます表情を曇らせ、俯いてしまう。憂い顔も麗しいけれど、やはり美女には笑顔が相応しい。

マリナとラスードは改革派と保守派として対立しているが、元々はとても仲が良かった。彼女は彼を信頼し、彼も彼女を信頼し、アザデイスタンのために尽力していた。

方向性が違っても、2人は祖国を愛し、憂う同志である。表上は袂を分かっているけれど、非公式で度々顔を合わせ意見を交換し合っていたという。

勿論、この話はごく少数の人間しか知らない。そのため、『マスードを拉致した人間が改革派ではない』ことを知る人間も少なかった。

もつとも、この事実を知ったら、保守派も紛糾することは間違いない。

内戦は泥沼化するだろう。これだから『人間』は面倒だ。

「マリナ様」

「何でしよう?」

女性に声をかけられたマリナは、憂い顔のままこちらに振り返った。表情を取り繕う余裕すらないらしい。女性は言葉を続ける。

「これはもしもの話ですけど、マスード・ラフマディー氏が無事に帰ってきたら、貴女は笑ってくださいますか?」

「え……」

青い瞳が驚きと困惑に揺れている。お前は何を言っているんだ、と、周囲から眼差しの集中砲火が向けられた。

しかし女性は気にしない。ただ、じつとマリナの瞳を覗き込む。彼女の瞳には、静かな顔をした自分だけが映し出されていた。

どう答えればいいのかわからない。そもそも質問の意図もわからない——彼女の沈黙は、そう語っている。口以上に雄弁だ。

マリナの代弁をするかのように、シーリンが眉をひそめる。

貴女は、と紡がれる前に、女性は己の本心を告げた。

マリナの手を取り、騎士が姫君に語り掛けるように。

「マリナ様のような美しいお方には、そのような表情は似合いません。貴女はアザディスタンの太陽なのですから」

太陽が曇ってしまったら、人々は道しるべを失ってしまう。心のよりどころを失えば、余計に心が荒んでしまうのだ。

マリナという「1人の女性」に背負わせるには、途方もない重荷であることは理解している。それならば、背後にいる人々が支えればいい。

彼女の隣には、シーリンという参謀がいる。この国には、彼女を信頼している民たちがいる。微力だが、自分だっているのだ。

「世間の連中は、貴女の笑みを見て『ハリボテだ』と揶揄するバカ者ど

も——いえ、例えばが乱暴でしたね。揶揄する人間たちもいるでしょう。でも、それが何だと言うのですか？ ハリボテだろうと何だろうと、その笑顔に勇気づけられる人々がいるのです。その人たちのためにも、貴女は笑顔絶やしてはいけません」

酷な話ですが、と、女性は言葉を続ける。

「貴女が太陽になれないと嘆くなら、月になればいい。自ら輝くこと能わずとも、貴女を信じ、支えてくれる人の光を以てして、彼らのために光り輝けばいい。それでも尚、そのための光が足りないと嘆くなら、微力ながらも、私も貴女を照らす光になりましょう」

「……ありがとう」

女性はマリナを見上げた。彼女は困惑しながらも、何を言われているのか察したらしい。憂いに満ちた笑みを浮かべた。

彼女の笑みから憂いが抜ける日が、一刻も早く来ればいい。女性はそう願わずにはいられなかった。

いや、願うのではない。そうなるよう、自分が動けばいいのだ。

そうと決まれば話が早い。女性は端末を取り出し、恐ろしい速さでメッセージを打ち込む。

幾何かの間をおいて、女性は端末をしまった。周囲に外出する旨を告げて、車椅子を漕ぎだす。

途中で、廊下をすれ違った婦人を呼び止めてマリナ襲撃をやめさせたり（どうやら家族を人質に取られていたらしい。勿論救出すると約束した）、エルガン直々のお小言を10秒で切つて捨てたりして時間を食ってしまったが、行動するにあたっての問題はない。

ソレスタルビーイングも、女性と同じ判断を下した様子だった。マソード・ラフマディーさえ無事に保護できれば、今回の戦いはとりあえず終局を迎えるだろう——そう、今回の戦いは。悪意の種はアザデイスタン中にばら撒かれている。その元を絶たない限り、この国はまた戦禍に飲まれる。

彼らがこの国に介入するのは、この国が再び戦火に飲まれたときだ。それまでは、決して『何とかしよう』としない。専守防衛に近い形での介入だ。水際で防げたらいいと思う人々からすれば、面倒くさいことこの上ないだろう。

(さて)

自分が寝泊まりするホテルの一室に戻った女性は、周囲に人がいないことを確認した。

そして、すつくと立ち上がる。クローゼットに眠る礼装を身に纏い、正体発覚を防止するための仮面をつけた。

派手な装飾が施された仮面だ。たとえコスプレだろうと、一目見ただけで「あ、関わりたくないな」と思わせるインパクトがある。

薄い青の礼装に、夏の木々を思わせるような深緑のマント。

トオニイが率いる『同胞』と別れる際、幼馴染たちから貰った贈り物だ。

『お前も、あの艦を率いる指導者ソルジャーだろう?』

『だったら、きちんとした格好じゃなきゃ示しがつかないわ』

タキオンとツエーレンが微笑んだ様子を思い出す。前者は自身にくせ毛をいじりながら、後者は人差し指を立ててウインクしていた。

記憶の中の彼らに微笑み返した後、女性は顔を引き締めた。
アザデイスターの太陽に、笑顔を取り戻させるために。



「僕が軍人を志したのは、人々の命を守りたかったからなんです」

アニ□スの表情は、どこまでも澄み渡っていた。きらきらしすぎて、なんだかもう、直視できない。

「そりゃあ、随分マトモな理由だな」

「ハガネ少佐は違うんですか？」

「まあ、な」

クーゴはふつと笑みを浮かべた。

しかし、内心は穏やかではない。

個人的な理由で軍人となったクーゴにしてみれば、自分が汚れてしまったような気がするのだ。

きっとこの青年は、軍属ゆえのしがらみや、ドロドロしたものを知らないのだろう。

羨ましい、と思う。同時に、この瞳が軍の汚い部分や理不尽な部分を目の当りにしたらどうなるのか、不安になるのだ。

(その瞳が曇ったり、濁ったりしなきゃいいんだが)

清廉潔白でい続けられなくなったとき、□ニエスはどんな判断を下すのだろう。理想を捨てても軍人であり続けるか、軍を辞めてでも理想を貫くか、すべてから逃げ出すか。

どんな判断を下しても、クーゴはそれを責めるつもりはない。彼の道は彼が決めるものだ。しみじみとそんなことを考えていたら、きらきら光る琥珀の双瞼がこちらを捉えていた。

「ハガネ少佐は、どうして軍人になったんですか？」

逃げられない。

クーゴはすぐに直感した。

きらきらと輝く瞳が、ちくちく突き刺さってくる。

(……どうしよう。ものすごく答えづらい)

美麗字句と脚色でごまかすこともできるが、この後輩に嘘をついてはいけない気がする。ついには最後、永遠に近い時間、後悔し続ける羽目になるだろう。

脳裏をかすめた虚憶きよおくは、海岸で大喜利に興じる男女。落語家と名乗った女性の演技を真に受けて、落語が見たいと頭を下げた男性の残念具合と言ったら、ない。

幸か不幸か——むしろ不幸で、そこにいた男性はアニ□スによく似ていた。嫌な予感がする。本当に、嫌な予感がする。

話すとしても、個人的な理由で軍人となった人間がいるということ、彼は許容できるのだろうか。

それとは別問題として、前回起きた大きな戦いのことも話さねばならないだろう。

前回の戦いについて話すとなれば、当然、避けられない話題も出てくるわけで。

(アニエ□の『グラハム・エーカー』像をぶち壊しにする危険が高すぎる……!!)

人の夢を壊すのは、どうしても抵抗がある。

真実云々とは違って、そういうものは守ってやりたいと思うのだ。

さあ、どうしよう。

クーゴが考え込みかけたとき、

「おや、珍しい組み合わせだな」

端末片手に、花をまき散らすような笑顔を浮かべたグラハム・エーカー少佐(34)が、丁度いい／最悪のタイミングで通りかかった。



中東と言えば、砂漠である。

砂漠とくれば、暑い。

しかし、体を蝕むのは肌寒さだった。

焼野原を抱く男、アリー・アル・サーシエス。奴を使い、アザディスタンを戦乱に陥れようとした黒幕がいる。

それについて考え始めたときから、なんとなく、クーゴは肌寒さを覚えていた。

(まるで『黒幕の感情がどこから漏れてて、その片鱗に触れている』ようだ)

クーゴは腕をさすりながら、ビリーとグラハムに続いた。

火薬の反応を機械で辿りながら、ビリーは歩みを進める。グラハムとクーゴは彼の後を追うようにして歩いていった。

周囲を見渡す。切り立った崖と大地が広がる荒野だ。視界も開けており、ここからはアンテナ施設がよく見える。

ミサイルを撃ち込むにあたって、最高のポイントだろう。傭兵の高笑いが聞こえてきた気がして、クーゴはそれを頭から追いやった。

「回収したポッドもそうだけど、この反応……やはり間違いないねえ」

ビリーは機械を振りながら、計測された結果を見て頷いた。

グラハムは険しい眼差しのまま荒野を見つめる。

「無駄だとは思うが、PMCトラスト側の見解は？」

『モラリアの紛争時に紛失した』の一点張りさ。カマをかけたら動揺したけど、予め対策を練っていたみたいだね。態度はともかく、内容自体はスムーズに回答されたよ」

ビリーの言葉を、クーゴが引き継ぐ。顎に手を当てて、思索するため俯いた。

「やっぱりカマだけじゃ決め手に欠けるな。証拠を集めて突きつけないと――」

次の瞬間、グラハムがクーゴを遮るように手を伸ばした。動くな、という合図である。何事かと見上げた彼の横顔は、どこかぴりぴりとしていた。

グラハムのただならぬ表情を見たクーゴは、気を研ぎ澄ましながら周囲を見回す。グラハムが険しい表情を浮かべた理由は、すぐにはわかった。

いる。自分たち以外の誰かが、この周辺に隠れている。

しかもこの気配は、クーゴにとってひどく身近なものだった。

おそらくは、グラハムにとっても。故に、どうすべきか考えあぐねているように見えた。

『彼女たち』に対して、どう対応すべきなのかを。

「――グラハム」

ちら、と、クーゴはグラハムを見上げた。

クーゴが何を言わんとしているかを理解したグラハムは、目線で合図を出す。クーゴの考えに同意してくれたらしい。

彼は気配を感じる方向を見上げ、軍人としての風格を宿した口調で、厳かに告げた。

「立ち聞きはよくないな。出てきたまえ」

幾何かおいて、立ち聞きしていた人間たちが姿を現した。両手を挙げて、「逆らうつもりはありません」とアピールしている。案の定、見覚えのある2人だった。黒い髪に赤銅の瞳を持った少女——刹那と、紫の瞳にペールグリーンの髪を簪でまとめた女性——イデア。

前者は装飾の少ない男物の服を着ており、後者は小奇麗なカフタン風のドレスを身に纏っていた。グラハムは思うところがあるよう目で瞬かせている。そういえば、刹那はいつも白いワンピースを着ていた。服のデザインは日によって変わるけれど、純白のワンピースがトレードマークだったと思う。

そのためか、刹那の格好は、クーゴとグラハムからしてみればとても新鮮だった。彼女のワンピース姿を知らぬ人間が、初めてこの格好の彼女を見たら、少年だと見間違ったであろう。その予想通り、初めて刹那を見たビリーは、彼女を現地の少年だと見間違った様子だった。

「地元の子かな。あつちは、この国に住むことを選んだ外国人ってところだろうね。珍しい、とても仲が良さそうだ」

ビリーは表情を緩ませた。

子どもの前で浮かべるような、柔らかな笑み。

しかし、クーゴとグラハムは知っている。この少年は少女であることも、少女が何者であるのかも、自分たちの立場が何であるかも、全て。

ビリーの目には、刹那がアザディスタンに住んでいる少年に見えたらしい。

イデアは、何らかの理由があつてアザディスタンに来た後、この地に骨を埋める覚悟をした外国人だと思ったようだ。

「あ、あの……僕、このあたりで戦闘があつたって聞いて……」

やや低めの中性的な声。完璧に、少女は少年に化けている。しかも、地元的一般人にだ。その演技力は驚嘆に値した。

現に、彼女の発言で、ベリリーは完全に騙されている。初見でこれを嘘だと見破るには、かなり注意しないとわからないだろう。

グラハムでさえ見抜けるかどうか——そう思いながら、グラハムに視線を向ける。奴の目は、刃のように鋭かった。

奴なら一発で見抜ける。初見だろうが何だろうが、相手が刹那・F・セイエイであるならば。

クーゴは漠然とそんな予感を覚えた。正直、あまり嬉しいとは思えない。

乙女座の勘とか言い出しそうだ。自分の星座など関係ないのに。

「私、彼が心配だからついてきたの。最近、そういうのが多いし……」

刹那の言葉を引き継ぐようにして、アイデアも言葉を紡ぐ。こちらも演技がうまい。

アイデアは刹那の手を取った。

まるで、少年を慈しむかのように。

「彼との入籍も近いから、心配で心配で」

衝撃が走った。高層マンションの屋上からいきなり突き落とされ、地面に叩き付けられたようなレベルだった。

ほんの一瞬、グラハムが目を剥く。うっかり顔をのぞかせたグラハム個人の感情は、すぐに軍人の仮面の下へと押し込まれた。

しかも、刹那とアイデアの演技も完璧だ。どこからどう見ても仲睦まじい恋人である。初見ならば、この場にいる全員も欺ける程の。

「へえ、そうなんだ。おめでとう」

騙されている人間筆頭のビリーが、乾いた笑みを浮かべた。酷く疲れ切った笑みだった。

気のせいか、クーゴの視点からは彼が血涙を堪えているように見える。リア充爆発しろ、僕もクジヨウとあなりたい、エトセトラエトセトラ——そのすべてを飲み下したような、複雑な表情。

クーゴの左隣にいたグラハムは、どことなく不機嫌そうだった。演技だとわかっている、2人の設定に納得できないらしい。翠緑の瞳の奥底で、彼自身が否定している感情が揺らめいている。

(子どもかお前ら)

クーゴは内心、深々とため息をついた。

確かに衝撃だ。衝撃的だった。不意打ち同然だった。絶望の底を除いたような気がした。

裏切られたような気持ちを抱いたことは認めよう。だが、持ち直せないレベルではないはずだ。多分。

何度でも言おう。2人のこれは、演技だ。

予めわかっていたことではないか。

「だったら尚更、ここにいては危険だよ。早く立ち去った方がいい」

ビリーは丁寧な口調で言った。オブラートに包んではいるものの、呪詛的な響きを宿している。

2人はビリーの言葉に従うようにして、ペこりと頭を下げた。そのまま立ち去ろうとして踵を返す。

「少年」

突如、グラハムが刹那を呼び止めた。驚いたように刹那が振り返る。

相変わらず、グラハムは鋭い眼差しを向けていた。

「キミは、この国の内紛をどう思う?」

いきなりそんなことを問われるとは思わなかったのだろう。刹那
は困惑したように目を泳がせていた。それでも少年としての演技を
崩さず、たどたどしく言葉を紡ぐ。

「ほ、僕は……」

「客観的には考えられんか? なら、キミはどちらを支持する?」

「……支持はしません。どちらにも、正義があると思うから」

刹那はそこで一端言葉を切った。

「でも、この戦いで、人は死んでいきます。……沢山、死んでいきます」

少年の仮面の奥底に、悲しみが揺らめく。

年相応の、少女の悲しみがそこにあった。

グラハムは静かにそれを見上げていた。まるで、かすかに触れた刹
那の感情から、彼女の過去を辿っているかのように。そうして、瞼を
閉じる。

「同感だ」

「軍人の貴方が言うんですか?」

少し意外だ、と言いたげに、刹那は問う。

グラハムはそれに回答せず、また質問を投げかけた。

「この国に来た私たちは、お邪魔かな?」

「……だって、軍人が沢山来たら、被害が増えるし」

『僕が軍人を志したのは、人々の命を守りたかったからなんです』

刹那の言葉に、誰かの言葉がフラツシユバックした。いつか見た虚憶^{きよおく}で、少尉と呼ばれた茶髪の青年。

自分の理想と現実のギャップに苦しみながら、それでも人々を守りたいと願い、戦い抜いた、アンノウン・エクストライカーズ／アルティメット・クロスの若き指揮官。

もし彼がこの場にいたら、刹那の言葉に憤慨したに違いない。そして何より、その言葉通りの状態に苦しんだだろう。『自分は、何のためにここにいるのだ』と。

「——そうだな」

クーゴは、ぽつりと呟いた。

「もうこれ以上、誰かに傷ついてほしくない。その気持ちは、ここに住む人々と同じはずなのに。……どうしてうまくいかないんだろう」

その言葉に、周囲の人々が目を見張る。

クーゴはそのまま言葉を続けた。

「テロの鎮圧をしたいと上層部に進言しても、『対ガンダム戦』の備えだからと主張して、こつちの話を聞こうともしない。本当は、ソレスタルビーイングが介入する前に、何とかしなきゃいけなかったんだ。これ以上の惨禍を防ぐための努力をするべきだったんだ」

軍人とは、軍の方針に従うものだ。

市民の平和を守る存在だ。

しかし。

軍の方針自体がおかしかったら。

軍自体が『市民を傷つける』ために動いていたら。

もしくは、『市民を傷つける』存在を幫助していたら。

あるいは、救いを求める市民に対し、見て見ぬふりをしているとしたら。

「一体、俺たちは、どうしてここにいるんだろうな」

この国に足を踏み入れてから、クーゴがずっと抱いていた疑問だった。軍の命令には忠実にしているけれど、人として、やはり折り合いをつけることはできなかった。

ソレスタルビーイングが来ることを見越したが故の、アザデイスタン派兵。奴らが来襲しなければ、ユニオンはアザデイスタンなど捨て置いただろう。人が何人死のうとお構いなしだったはずだ。

政治家という生き物は、つくづく腹黒い生き物だ。多かれ少なかれ、“あん畜生”と似たり寄ったりな野望を抱き、権謀術策を張り巡らせている。数字と睨めっこする彼らには、屍の山など想像もつかないだろう。

「最近のお偉いさんは、自国の優位確立とガンダムを何とかすること
に頭を回すので手一杯だ。その路線でいいとは思えんよ。目の前の
命を放り出してしまったら、悲しみと憎しみの連鎖を生むだけだ。そ
れこそ、世界が歪んでしまう。そんなことはダメだ。……俺個人の意
見だから、誰もとりあげてくれないけど」
「そんなことないです」

クーゴの言葉を拾い上げるようにして、アイデアが首を振った。

「貴方のような人がいることは、救いですよ」

紫の瞳がクーゴを映す。

そこには、万感の思いが込められていた。

「その思いを抱えて、戦う人がいる。戦っている人がいる。……その

事実が、希望に繋がるんです」

アイデアは柔らかかに微笑んだ。なんだろう、酷く照れくさい。耐えきれず、クーゴは目を泳がせた。勿体ないとは思いつつ、彼女から視線を逸らす。

隣にいたグラハムも、思うところがあつたらしい。小さく頷き、視線を刹那へと向けた。

「キミだって、同じ思いを抱えて戦っている。……そうなのだろうか？」

グラハムのそれは、『少年を訊問していた軍人』とは思えないほど、優しい声色だった。少女を労わり、気遣い、祈りを込めたような響きを宿している。

刹那が息を飲み、グラハムはふっと表情を緩めた。ビリーは口から砂糖が吐けるのではないかと思えるくらいげっそりとしている。「僕って邪魔なのかな」と言いたげな眼差し。

親友が『リア充を目撃したことによる羨ま死』寸前だというのに、グラハムはそんなこと歯牙にもかけず、刹那と見つめ合っている。何とも言えない沈黙が、この場を支配していた。

ややあつて、グラハムは静かに瞼を閉じた。

ゆっくりと目を開けた彼は、クーゴの方へ向き直る。

「クーゴ。一昨日、ここから受信アンテナを攻撃した機体は、A E Uの最新兵器イナクトだったな」

隣にいたビリーの目が見開かれる。

グラハムの話は、ユニオン軍が掴んだ情報だ。

彼の発言および行動は、機密漏洩に価する。

「いきなり何を——」

「そうだな。モラリア戦役で使われた、緑青の機体だった。カメラア

イ付近に、傷みたいな模様がついてた」

グラハムの意図を読み取ったクーゴもまた、ビリーを遮るように話を合わせる。

翠緑の瞳が、礼を言うように細められた。気にするな、と、クーゴも目で合図する。

言い訳は「口が滑った」で充分だ。始末書だって、いくらでも書いてやる。

「PMCは盗まれたと言ってるけど、十中八九嘘だぜ？ アレ。搭乗していたパイロットは、モラリア戦役のパイロットと同一人物だからな」

クーゴはわざとらしく肩をすくめた。

「しかも、アザディスタンの内戦を誘発し、泥沼化させようとした黒幕もいるらしい。そいつを何とかしない限り、この国は何度だって戦禍に飲まれるだろうな」

「まったく。その黒幕とやらは、随分と姑息な手段を使うのだな。私はそういう輩が大の嫌いだというのに」

相手の顔を思い浮かべたのだろう。グラハムは心底嫌そうに眉をしかめた。鋭い瞳に宿るのは、黒幕に対する怒りである。

クーゴもそれに同調した。ビリーがはらはらした様子で自分たちを見つめていたが、些細ごとにすぎなかった。

ちらりと刹那とアイデアを見上げる。2人は何かに気づいた様子だった。しかも、確信に近いレベルらしい。

あとは、この2人がどう動くかだ。悪いようにはしないだろう。グラハムが踵を返し、クーゴもそれに続いて歩き出す。

「撤回するぞ」

「了解」

「ずんずん歩みを進める自分たちの様子を見たビリーは、少々躊躇したが、従うことにしたらしい。小走りで自分たちに追いついた。」

「2人とも、どうしてあんなことを？」

「さあ。口が滑ったとしか言いようがない」

情報漏洩について、咎めるといふより純粋な疑問をぶつけるような調子でビリーは問うた。

グラハムは不敵な笑みを浮かべながらすつとぼけてみせる。

クーゴはうんうん頷き、ずんずん足を進めた。

「しかし、今日の占いは凄いな。特に、ラツキーアクションとラツキースポットが」

「あー、成程。うまい具合に作用してたよな。ところでグラハム、『ミュウ』篇下巻の読破は順調か？」

「そうだな。現在、長老の『ミュウ』と若い『ミュウ』たちが喧嘩していた。野菜ができたと喜んでいた若者たちに対し、長老派の1人が水を差したのが原因だったな」

「そうか」

「ところでそちらはどうだ？」

「キースがシロエに挑発されて怒ったところ。なんだか嫌な予感がしてなー」

話題を逸らすように、グラハムは日常的な雑談を始めた。クーゴもそれに乗っかる。

「ちらちら振り返るビリーと対照的に、クーゴとグラハムは振り返らなかつた。それが、2人に対する信頼である。」

他の部下たちにも撤収の旨を伝え、3人は輸送船に乗り込む。程なくして、船は首都へと進路を向けて飛び立った。

窓の外から荒野を振り返る。そこにはもう、誰もいない。

クーゴは瞼を閉じた。緑色の光が2つ、夕焼け空に軌跡を描く――
そんな光景が浮かんだ。

イデアと刹那も、動くだろう。今度こそ、クーゴとグラハムは、空
で2人と対峙する。

(吉と出るか、凶と出るか)

その答えは、まだわからない。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

30. 軍人と天上人と監視者と、星屑の夢を見る者たち

セキ・レイ・シロエは歩いていった。ピーターパンの呼びかけに応えるようにして、ふらふらと歩いていった。

どこへ向かっているのかはわからないけれど、どこを歩けばいいかは分かっていた。だから、迷うことなく足を進める。

体が鉛のように重い。一歩踏み出すだけでも呼吸が乱れる。でも、足を止めることはしない。

キーを入力する端末は、何もしていないのに吹き飛んだ。

閉ざされていた扉は、シロエが近づいただけで破壊された。

道は開けた。遮るものは何もない。今なら、どこへだって行けそうな気がする。

「僕も行きたいよ。ネバーランド」

自分が唯一持ってきた『ピーターパン』の絵本を抱えて、シロエは呟いた。

『ネバーランドよりも、もっといいところがあるぞ』

『どいっ！』

『——青い星だよ』

子どもの頃、父が言った。彼の顔を思い出すことは叶わない。

父はいつも、青い星の話をしてくれた。

緑と水に満たされ、生命を育んだ、母なる星。

いつか、お前もそこへ行けるだろう——。

父の言葉を思い出して、シロエは足を進めた。

ふと、周囲を見渡す。

そこには、練習用に乗り込むシャトルがあった。

(これに乗れば、ネバーランドへ行ける……！)

シロエはふらふらとした足取りで、シャトルを目指す。

重い体を引きずりながら、シロエはどうにかそこへとたどり着いた。シャトルの扉が開き、メインシステムが勝手に動き出す。

これならすぐに飛べるだろう。シロエはほっとしたように息を吐き、椅子に腰かけた。エンジンが起動し、シャトルが宇宙へと飛び出した。

ピーターパンの本はどこに行ったのか。背後の席に視線を向ければ、絵本は後部座席に置かれていた。シロエは天井を仰ぐ。

(ピーターパン……青い星に行きたいよ)

シロエは願いつける。彼の願いに呼応するかのよう、シャトルは宇宙を突き進んだ。

シロエの望んだネバーランド——青い星へ向かって。

『ああ……』見て、葉っぱが落ちてる……。『ピーターよ。ピーターパンが来たんだわ』……」

両親がいつも読み聞かせてくれた絵本を諳んじながら、シロエはぼんやりと宇宙を見上げる。

後部座席に置かれた本が、シロエの朗読に合わせて勝手にページをめくり始めた。

物語を読み進めるうち、シロエは気づいた。——パパとママが、いない。

「パパ、ママ、どこにいるの!?!」

後部座席を振り返れば、探し人はそこにいた。シロエはほっとして

表情を緩めた。

「ああ、そこにいたんだ。よかった……」

シロエは両親に笑いかける。そこに誰もいないことに、気づかないまま。

彼の世界は、成人検査以前のまままで止まっている。大人になることを拒否したかのように。

「安心してね。ピーターパンが、パパとママも一緒だって……」

シロエはゆっくりと宇宙^{そら}へ視線を向ける。

「一緒にネバーランドに……青^テい星^ラに連れてってくれるって。ね、ピーターパン？」

「前方を飛行中の練習船、停船せよ。停船せよ。——シロエ！」

必死になって呼びかける。でも、船は停止する様子を見せない。むしろ、どんどん加速していく。

「シロエ……」

操縦桿を握り締めて、青年はほつりと呟いた。

初めて会ったときから、シロエはいつも青年に対して挑戦的だった。でも、青年は相手にしなかった。無意味なことだと思っていたからだ。

しかし、彼はやめなかった。無視されても、呆れるほどしつこく、必死になって、どこまでも食い下がってきた。友人を侮辱し、挑発を続

けた。

そして青年は、感情のままにシロエを殴り飛ばした。何故あんなことをしたのか、今でも青年はよくわからない。

けれどあのととき、青年の中で何かが起きた。何かが生まれた。

混乱……いいや、高揚した。熱く、苦しく、——痛い。

「お前を思い出すと、イライラした」

どろどろした感情を吐き出すように、青年は眩く。

青年にはわからなかった。自分の中に蠢く、この感覚の正体が。

「……しかし、何故マザーに逆らうのかと訊いた。命が惜しくないのか、と」

だが、違う。

「多分、本当は——」

『——嫌だ!』

不意に、声がした。シロエの声だ。

『大人になんかなるもんか! 大人になったら学校に行つて、もっと大きくなったら働きに行かされて……! 大好きなママも、大切なものも、みんな無くしてしまう! そんなの絶対にゴメンだ!!』

その叫びこそが、彼の全て。

マザー・イライザに逆らう、絶対の理由だった。

(シロエ……お前は……)

『撃ちなさい』

青年の感情を遮るように、マザー・イライザの命令が下された。

読み進めてはいけない。読み進めれば、セキ・レイ・シロエの運命が進む。

しかし、読み進めなければ、ユニオンは『悪の組織』の技術協力を受けられないのだ。気が進まないが、読まねばならないだろう。

真実から目を逸らすな。運命から目を逸らすな。そう叫ぶかのような文章に責め立てられる。クーゴは大きく息を吐いて、ページを進めた。

人類サイドの主人公はマザー・イライザの命令を受けて行動を始める。彼に与えられた任務は、反逆者の処刑であった。

処刑対象は逃走を続けるセキ・レイ・シロエ。初めて、主人公はマザー・イライザの命令に疑問を抱く。その命令は、本当に正しいのか、と。

主人公は躊躇い、迷いながらも、マザー・イライザの命令を忠実にこなそうと試みる。しかし、彼は引き金を引かなかった。引けなかった。

(葛藤、か)

序盤の彼から考えると、随分人間らしくなったものだ。

機械の申し子と呼ばれた青年が、初めて感情をあらわにしている。

悲劇は止まらない。ページを止めれば、物語は止まったままだ。止めることができるだろう。

止まっていて欲しい。けれど、時間は誰にだって等しく流れる。物語だって同じだ。進まなければ、進めなければ。

長い躊躇いを経て、クーゴはページをめくった。彼らの時間が流れる。——悲劇へのカウントダウンが、進む。

シロエはふと顔を上げた。そこに、ピーターパンがいた。彼のシャトルに人がいたら、「そこには誰もいない」と言うだろう。しかし、子どものまま時を止めたシロエには、ピーターパンの姿がはつきりと『視えて』いた。

「ピーター、迎えに来てくれたんだね！ 約束通り、迎えに来てくれたんだね！」

ここだよ、とシロエは叫ぶ。僕はここだよ、とシロエは叫ぶ。そうして、シロエはゆっくりと手を伸ばす。祈るように、願うように。

大きく手を広げて、円を描く。彼の瞳には、青い星がはつきりと『視えて』いた。

「皆で行こう。青い星へ」

ピーターパンが微笑む。両親も頷く。シロエが心配することは、何もない。

「僕は自由だ。自由なんだ！」

それを噛みしめながら、シロエは微笑んだ。

「いつまでも、どこまでも、この空を自由に飛び続けるんだ！」

青年は、スイッチを押した。

充填されたエネルギー砲が、無防備な練習船を撃ち抜く。

美しい光を残し、練習船は木端微塵に吹き飛んだ。

あたりに漂う残骸を見つめて、青年は息を吐く。生命反応はない。

「シロエ……」

青年は、己が手にかけた少年の名前を呼ぶ。その声は、ひどく震えていた。

視界が歪み、頬を熱いものが流れる。その現象の正体を、青年はまだ、知らない。

クーゴは本を閉じた。ほぼ反射的な行動だった。

そのまま、壁にもたれかかる。大きく息を吐いて口元を抑えた。視界がわずかに滲んだような気がして、ゆるりと瞼を閉じる。

何故、ページを進めなくなかったのか、理由が分かった気がする。

クーゴもまた、大人になることを拒んだシロエと同じだったのだ。

命が亡くなってしまうことに、耐えられなかった。その予感から、先に進むことができなかった。それが大人になることなのだと、認めるのが嫌だった。

「重い」

たかがSF。たかが創作。そう侮っていた時期もあった。

クーゴの甘い認識を、『Toward the Terra』は見事に打ち碎いたのである。

大人には身につまされる話だ。大人になればなる程、身動きが取れ

なくなる。責任の重さに押しつぶされたり、己の意に反することをやらされたり、仕事に忙殺されてしまったりと様々だ。

子どもの頃は信じていた。「大人になれば、もつと色々なことができるようになる」と。大人になるにつれて、その気持ちすら忘れてしまった。シロエは気づいてしまったのだろう。大人になることの残酷さを。

作中で登場した『ピーターパン』の一節にも、大人になることを説いた部分があった。その空虚さを、やるせなさを強調するかのよう。世界の残酷さに順応していかざるを得ないという事実に対する悲しみ——その権化が、セキ・レイ・シロエだった。

クーゴはどうだろう。病弱で無力だった幼少時代、大人になることすら叶わないと言われていた。でも、今、自分は大人になっている。

ユニオン軍の軍人となり、仲間たちと空を翔けている。ガンダム調査隊に所属する者として、日夜仕事に追われている。そんな自分を見た少年時代の自分は、何を言うだろうか。

気が進まない任務を受けたこともあった。人を守るためだと言い、何人もの人を殺してきた。本当にこれでもいいのかと自問自答を繰り返したことだってある。それでも、クーゴは前へ進んできた。進まなければならなかった。

「大人になったら、忘れてしまう……」

セキ・レイ・シロエの台詞を思い出しながら、クーゴは目を伏せた。28歳。どこからどう見ても、クーゴ・ハガネは大人である。自分がここに至るまで、手に入れたものばかりを見てきた。

もしかしたら、ここに至るために、無意識に捨ててしまった『大切なもの』があつたのかもしれない。

思い出すことが困難になるくらい、自然に諦めたこともあつたのかもしれない。そんな気がする。

少年時代の空護クウゴに思いを馳せる。

星空ばかりを見上げていた少年の後ろ姿が見えた。

(昔は、星空が好きだった。宇宙の果てに行きたいって、ずっと思ってた)

でも、クーゴはその夢を諦めた。いや、それ以上に追いかけていものができた。

虚憶きよおくで出会った人たちが言っていた。「空で待っている」と。

約束をしたのだ。彼らと会うために、空を目指す。その決意を抱いて、クーゴはここまで来たのである。

(そうだ、昔は――)

過去を紐解いていたとき、不意に、何かが『覗えた』気がした。

誰かが少年に笑いかけている。少年もまた、誰かに笑い返した。

2人はとても仲がいい。病弱な少年と活発で明るい誰かは、生まれた頃からずっと一緒だった。

中々外に出れない少年に代わり、誰かがいつもいろんな話を聞かせてくれて――。

ずきりと頭が痛んだ。

もう何も、思い出せない。

「……己を破滅させてしまう程、愛していたんだな」

隣にいたグラハムが、鉛を吐き出すような声で呟いた。見れば、『Toward the Terra』『ミュウ』篇の下巻は閉じられている。

そういえば、ちらりと覗き込んだページでは、「母になりたい」と願っていた女性が愛する男性と結ばれ、子宝にも恵まれていたところで事故が起きた場面だったか。

事故によって夫が亡くなり、悲しみに暮れていた母を励ましていた子どもの話が出ていたように思う。父が育てていた花を、墓に供えて

いた。

内容を読んだというよりは、挿絵を拝見しただけにすぎないのだが。

「愛する者、愛する者と育んだ結晶——あるいは忘れ形見であり、もう1つの愛する者……。そのすべてを失ったがために——」

グラハムは言葉を切った。大きく息を吐きだし、本を片付ける。クーゴもそれに続いた。今日はもう、これ以上読み進められそうにない。



「おい、どうなってる!? 護衛用のMDたちはどうした!?!」

「コントロールが効かないんだ! どの時もこいつも、勝手に白いガンダムの方に突っ込んで行きやがる!」

「こんなときに限って……!」

MDを伴って、マスード・ラフマディーを別の場所に拉致しようとした傭兵どもの悲鳴が聞こえる。

そのドサクサに紛れて、女性は彼らの背後へと移動した。音も立てず、何の前触れもない襲撃に、『人間』が対応できるはずがない。

「破ア!」

「がふっ!」

手をかざして力行使する。青い光が爆ぜる。横っ面から一撃を叩きこまれた傭兵が、錐揉み回転しながら宙を舞った。奴は別の男も

巻き込み、車の荷台から落下していく。

つい先程、女性は別の場所にいる傭兵たちの拠点を壊滅させた。保守派に脅迫されてマリナ襲撃を企てざるを得なかった婦人の家族を救出し、自宅まで送り返してきたばかりである。

3日後は丸一日寝て過ごすことになりそうだ。年を取るのには本当に嫌なことである。女性はのんびり考えながら、逃げようとする車を吹き飛ばした。先程の人間同様、トラックが錐揉み回転しながら地面に叩き付けられた。

人間は全員無事である。力の微調整もお手の物だ。昔はしょつちゅう幼馴染（主にエルガン）を巻き添えで吹っ飛ばしていたけれど、何度も練習したことは無駄ではなかった。女性はそんなことを考えながら、次はMDに攻撃を仕掛ける。

青い光を纏い、飛び上がって急降下。MDのカメラには、仁王立ちで手を組んだ女が突っ込んでくる様子が映し出されていることだろう。

その突撃を喰らっただけで、MDは地面に叩き付けられて大破した。なかなかシユールな光景だ、なんて女性は考えた。

（おや、ソレビの協力者もなかなかやるわね）

視界の端に映ったのは、中国の民族衣装を身に纏った男性である。目元には仮面を装着し、腰まである黒髪を束ねていた。

彼はその出で立ちと同じく、中国武術で次々と相手を圧倒している。何人の傭兵が宙を舞い、ねじ伏せられたであろうか。

最後の1人が倒れ伏す。最後のMDも、スターゲイザーの攻撃によって爆散した。

（MDのAIに搭載されたアレを、悪い意味で利用した形になったか……）

パイロットである『同胞』には、かなりの負担を強いてしまった。大

丈夫かと問いかければ、平気だと答えが返ってくる。最近は無茶ばかりさせてしまっているように思う。

さて。女性はマントを翻しながら振り返る。ぴりぴりした空気を纏った男性と目があつた。奥に控えるデュナメスのパイロットも、同じような眼差しを向けてくる。

女性は深々と息を吐いた。拘束されたままのマスードの元へ歩み寄り、手早くロープをほどいてやる。今回は、彼らに花を持たせた方が得策だ。

今後のことも考えると、彼らにはもつともつと活躍してもらわねばならない。

そして、生き延びてもらわなければならないのだ。

「そのソレスタルビーイング。ぼさつと突っ立ってないで、任務を果たしたらどうなの？」

ほら、と。女性はマスードを姫抱きにして、男性へと手渡す。状況が状況なだけに、どちらも困惑した表情を浮かべた。

男性は「はあ」と間拔けな声を漏らしながら、姫抱き状態のマスードを受け取る。

青い流星。デュナメスのパイロットが何か思い至ったように、訝し気な感情を向けてきた。

いつぞやの鹵獲作戦で、彼らは青い流星を目撃している。その正体が女性なのでは、と思つたらしい。

（違うんだな、これが。……でも、しばらくはそう思ってもらっても問題ないか）

女性は楽観的に頷き、大きく背伸びした。

そこへ、エクシアがゆつくりと降りてくる。

「アンタは一体、何者なんだ？　そもそもアンタは『人間』なのか？

ソレスタルビーイングとは別組織のようだが……何のために？」

中国人仮面に立たせてもらったマスードが、訝しげに問いかけてくる。女性は振り返り、もったいぶったように目を閉じた。

「——ファンです」

「ファン？」

「マリナ・イスマイル様の、熱狂的なファンです」

どや顔で何を言いだすんだ、と、周囲の連中が眼差しで突っ込みを入れてきた。

その気持ちは分からなくもないが、女性は嘘を言ったつもりもない。

仮面から覗いた表情からそれを察したのだろう。余計に微妙な空気が漂ってきた。

女性はえっへんと胸を張った。

「彼女はアザデイスタンの太陽です。もしくは、アザデイスタンの民の光を受けて輝く月。空にありて、民を照らすべき存在。そんな彼女に、憂い顔や涙は似合いません。……特に、私は女性の泣き顔を見るのが堪えられない。彼女の笑顔を取り戻すためなら、『人間』なんてモノ、喜んで辞めてやります」

それを聞いたマスードは、静かに目を伏せた。マリナの味方であるということ、一応納得してくれたらしい。

もつとも、周囲の人間が納得してくれるよう、ちよつとばかり力を行使したのだが。誰もそのことに気づいていないだろう。

「……そうか。だが、マリナ様は、そのために貴殿が『人間』を辞めることなど望まないだろう」

「知ってますよ。だから、このことはどうかご内密に。彼女を泣かせ

てしまうことは本意ではないし、完全に本末転倒だ」

女性はそれだけ言って、マントを翻した。力を行使し、夜空へと浮かび上がる。青い光が淡く輝いた。

周囲の『人間』が息を飲む。彼らから戦慄と畏怖の感情を向けられることには、昔から慣れていた。

そのまま、夜空の向うへと飛んでいく。雲を突き破り、大気圏すら超えて、宇宙へと浮かび上がった。

こうしているときに、一番懐かしい。敬愛するグラン・パと一緒に、青い星を目指していた旅路を思い出す。有事のとき、彼はいつも宇宙を翔けていた。

初代指導者の瞳である赤いマントを翻しながら、青い燐光を纏って流星のように翔け抜ける。太陽を思わせるような金髪と、夏の緑を思わせるような深緑の瞳を持つ青年。

眼下に広がる青い星——地球を見下ろす。グラン・パが目指した場所とは違うけれど、本当に良く似ている。当然だ。何故ならば——

(……綺麗だなあ)

過去を紐解くように、女性は地球を見つめた。

群青。懐かしくも苦しい、愛しくも哀しい色だった。



アザデイスタンの王宮は、護衛用のMSと周囲に集まる人々でごつたがえしている。ソレスタルビーイングが王宮に向かっていているという情報が入ってきたのは、数時間前のことだ。しかも、人質を連れているという噂もあるらしい。

ユニオン軍はこれ幸いと、ガンダム調査隊に王宮付近での待機を命

じた。ガンダムと交戦することを前提にして、グラハムやクーゴらここに配置したのだろう。戦闘データの収集、あわよくば鹵獲を狙っている魂胆が見え見えだ。

「この情報が本当ならば、絶好のチャンスです！」
「そうだな。……括目させてもらおう、ガンダム」

ダリルが息巻く。ハワードも、何も語らないが、目には炎が燃えていた。

グラハムは真剣な面持ちで頷いた。そうして、静かに空を仰ぐ。好敵手の到来を待つかのように。

命令が下されたときから、クーゴは妙な寒気を覚えていた。べつとりと纏わりつくような寒気だった。

違う。刹那やアイデアたちが、人質を取るだなんて卑怯な真似はしない。

クーゴには、漠然とはしていたけれど、確信があった。
本能的なものだったため、うまく説明することはできないけれど。

「人質、ね。随分と御大層な名分だ」

闘志に燃える面々とは違い、クーゴは憂いを滲ませたまま天井を見上げた。

（「大人は汚い」と嘆いた子どもも、いつかは汚い大人になる。そうやって、大切なものを亡くしていく……）

数時間前に読んだ『Toward the Terra』人類篇を思い出す。大人になることを拒んだシロエの叫びが聞こえてきた気がして、クーゴは目を伏せた。

自分たちへ命令を下した上層部も、自国の優位を確立しようとする権謀術策を張り巡らせる政治家も、最初はただ純粹に『人々のため』に努

力していたのだと思う。

理想を掲げ、邁進を続け、壁にぶち当たってしまった。どうしようもないことに打ちひしがれて、それでも必死に突き進む。でも、やっぱり無理で。

そうしていくうちに、いつしか理想を忘れてしまった。忘れなければ、今の地位に立ち続けることができなかつたからだ。

最終的には、今の地位を守り続けることや出世すること、自分が栄えることが、最初の頃に抱いていた理想とすり替わっていたのだろう。それが野望と呼ぶべきものだと思ふかぬまま。……今の自分は、どうだろう。

クーゴはぼんやりと考える。このまま、軍の命令に従って戦うべきなのだろうか。それとも、何も知らぬときに出会い、わかり合えた女性と少女——イデア・クピディターズと刹那・F・セイエイを信じるべきか。

不意に、何かが近づいてくる感覚を覚えた。いつぞや感じた寒気ではなく、どこか温かささえ感じる気配。

緑の光が瞬く。リーダー画面にノイズが走った。それが意味することは、ガンダム又来訪。

クーゴは顔を上げた。空での戦いが近づいている。心臓が軋んだ音を立て、早鐘を鳴らし始めた。

「隊長、副隊長！」

ハワードの声に、クーゴは操縦桿を握り締める。手が汗ばんできたような気がした。

「わかっている」

「そつちこそ、準備はいいな？」

グラハムが頷き、クーゴが問い返す。

ハワードとダリルは、間髪入れず頷き返した。

ガンダムが近づいてくる。白と青を基調にしたガンダムと、純白のガンダムだ。誰もが固唾を飲んで、天使と天女の降臨を見守っている。

AEUの新型兵器披露会を思い出し、クーゴは感嘆の息を吐いた。あの日も、こんな風に晴れていた。それ以前に、初めて2人に出会ったときの天気も晴れだった。

モニターに表示されたガンダムの姿を確認する。その結果に、思わずクーゴは目を見開いた。2機とも、武装を解いている。完全に無防備だ。

撃ちたければ撃てばいい。それでも、自分たちは自分たちの理想を貫き通す――。

そんな声が聞こえた気がして、クーゴは知らず知らずのうちに力を抜いた。愚直なまでに高潔な姿に、どうしようもなく心が震える。

春を思わせるように笑うアイデアの姿が『視える』。時折見せた、凜とした佇まいを思い出した。その強さが伝わってきて、クーゴは表情を緩める。

(それが、キミたちが掲げる想いなんだな)

残酷な世界に挑み続けること。そうし続けることで、他者や世界を動かすこと。それもまた、『人の心の光』が成しえることだ。

『今度こそ』

そんなことを考えていたとき、ガンダムが動き始めた。刹那の音が耳をかすめる。

動いたのは白と青基調のガンダムである。純白のガンダムは、天使の行進を静かに見守っていた。

「隊長！」

「黙って見ている」

グラハムが指示を飛ばす。ガンダム調査隊は、この状況を静観することにしたようだ。

現地住民が銃弾で攻撃を始め、MS部隊が攻撃の構えをする。しかし、天使は歩みを止めることはない。

次の瞬間、MS部隊が攻撃を仕掛けた。銃口をガンダムに向けて、容赦なく撃ち放つ！

銃弾はガンダムに降り注いだ。着弾した攻撃が爆発を起こす。

流星のガンダムでも、至近距離からの攻撃には足を止めざるを得ない。

「——っ!？」

グラハムが目を見開く。クーゴも息を飲んだ。無防備の相手に対して攻撃を行うことは、軍人として——人として、許されない行為だ。

マリナ・イスマイルの指示か——いや、それはない。彼女の路線からして、無防備状態の相手への攻撃を許しはしないだろう。じゃあ、誰が？

思案している間に煙が晴れる。ガンダムには傷一つついていない。両腕で、防御態勢を取ったためだ。

幾何かの間を置いて、ガンダムは防御姿勢を解いた。そうしてまた、歩き始める。

一步、一步、一步。ガンダムは着実に、王宮へと近づいていくではないか。

『今度こそ、ガンダムに……!』

刹那の声が聞こえる。彼女の心が『見える』。

夕焼け、転がった死体、駆け抜ける戦場。神のため、祖国のためと信じて戦った、小さな少女。

体躯に不釣り合いな銃を抱えて、彼女は戦い続けた。今だって、戦

争を終わらせるために戦っている。

夕焼けに降臨した美しい機体。その機体の名前こそがガンダムだった。それが降り立ったとき、圧倒的な力で戦場を蹂躪し、戦いを終わらせた。

だから少女は、その機体に憧れた。その存在に憧れた。自分もそうやって、争いを終わらせられるような存在になりたいと願ったのだ。フラツシユバックしたのは、緑の髪と紫の瞳を持つ青年。どこかで見たことのある青年が、少女に告げる。

『キミの世界が変わるのは、こんなにも簡単だ』

『それと同じように、誰かの世界を変えるのも簡単なことなんだよ。□□□』

その言葉を信じて、彼女は戦っている。どれ程傷ついても、尚。彼女と同じように戦っていた人を、クーゴは『知っている』。

今この場に彼が存在していなくとも、その姿を間近で『視た』ことがある。

『強くなければ、人は生きていけない。優しくなければ、生きている資格がない』

ゼクス・マーキスが、噛みしめるように紡いだ言葉を思い出す。その言葉に、心動かされた若者たちがいた。

もうやめよう、と叫んだ青年の名前は誰だったか。畜生、と言いなから、核を放棄して泣きじやくった若者は誰だったか。

そんな友人たちの姿を見て、安堵した金髪碧眼のアメリカ系日本人青年の名前は、なんといったらだろう。

宇宙に咲いた花は2つ。1つは、人を殺すために咲いた花。もう1つは、異種族とわかり合った証に咲いた花。

その奇跡を目の当たりにしたカイルスは、愛する星へと帰還する。次の戦いに向けての、短い休息のために。

「誰よりも強くなければ、世界は変えられない。誰よりも優しくなければ、世界を変える資格がない」

ゼクスの言葉を借りれば、そうなるだろう。それは、ソレスタルビーイング全体に言えることではなからうか。

「世界は彼らを犯罪者と言うけれど、その強さと優しさには敬意を表したい」

クーゴは、ガンダムの背中を見つめる。

凛々しさと強さに満ち溢れた、美しい機体を。

「俺は、そんな彼らと対峙するに相応しい存在でありたい」

ぽつりと呟いた言葉に対して、誰かが息を飲む声を聞いた。見れば、通信回線がフルオープン状態だったらしい。全員に聞かれてしまった。大変居心地悪くなり、クーゴは視線を逸らして咳払いする。

なんだろう、この空気。火消しのウインドが火を消そうとして、逆に煽って大炎上させてしまったときのような痛々しさを感じる。女心に疎い男が、女心を語ってはいけなかった。

しかも、「火消しのはずが（以下略）」と言ったご本人様も、女性関係が見事に大炎上一步手前であった。「そつちもきちんと火を消すように」と釘を刺しておいたが、どうなったことやら。

そんなことを考えていたとき、MS部隊が武器を下した。ガンダムの進む道を開ける。

刹那の決意、およびソレスタルビーイングの在り方が、人の心を動かしたのだ。

ガンダムは王宮の応接間付近で跪き、ゆっくりと手を差し伸べた。ハッチが開き、ガンダムの手を伝ってパイロットが姿を現す。

青いパイロットスーツとヘルメット。表情は見えない。刹那は手

を差し伸べる。奥から、民族衣装に身を纏った壮年の男性が降りてきた。

マスード・ラフマディー。彼は目立った外傷もなく、むしろピンピンしていた。五体満足。これなら、暴徒と化した保守派も安心するだろう。

(やっぱり、人質はガセだったんだ。誰だよそんな情報流したの)

クーゴはくつくつ笑いながら、心の中で独り言ちる。

マスード・ラフマディーの輸送が終わった刹那は、マリナと何かを話していた様子だった。幾何の間を歩いて、彼女はコックピットへと戻っていく。

背中から、緑の光が溢れだす。それを確認したかのように、少し離れた場所で状況を見守っていた純白のガンダムも、空へと浮かび上がるために準備を始める。

間もなく2機は空へと浮かび上がった。

「隊長、追いかけてみましょう！」

「今ならガンダムを！」

「できるものか！」

ハワードたちの言葉に、グラハムは操縦桿を握り締めながら叫んだ。

「そんなことをしてみろ。我々は、世界の鼻つまみ者だ！」

「鼻つまみどころか、世界からバツシングを喰らうぞ。ユニオン軍だけじゃなく、ユニオンという国そのものの沽券に関わる」

今の状態のガンダムに攻撃を仕掛けるということは、内外からの批判にさらされることを意味する。AEUと人革連をやりこめたエルガン代表のアレが、今度はユニオンの代表者相手に行われるのだ。精

神的ダメージは計り知れないだろう。

内側からの批判だって相当のものになる。アザデイスタンで行われたユニオン軍の反対デモ並みの——いや、そのの比じゃないレベルの、大規模なデモが起きることは間違いない。ヘタすれば、ユニオンという括りが瓦解する可能性だってあり得る。

そしてなにより——責任は、ガンダムを攻撃した人間や、それを止められなかった人間を中心に取らされる。今ここで自分たちがガンダムを攻撃すれば、ガンダム調査隊の人間たちは、ユニオンの体裁を保つための生贄として首を切られてしまう。

だけど、それ以前に。

だけど、それ以上に。

「人として、そんな非道な真似は、許されるはずがない。そんな真似をした己自身を、許せるはずがない。……お前らは、許せるか？」

クーゴの問いかけに、ハワードとダリルは押し黙った。ここで彼らが尚「撃つ」と言ったなら、多分クーゴは彼らと縁を切っていただろう。

人としての道を踏み外さずに済んだことに安堵しつつ、ガンダムの背中を見送ろうとした——そのときだった。

寒い。

ぞつとするような悪寒に駆られて、クーゴは反射的に別方向を見上げた。

寒気が発せられる方向は、ガンダムたちの真後ろに位置する斜め上空。狙われているのは、この場周辺だ。

「副隊長!」と、誰かが叫んだ声がある。ハワードか、ダリルか、クーゴにはわからなかった。

何かに気づいた純白のガンダムが後ろを向いた。

白と青基調のガンダムが、それにつられて僅かながら振り返った。

(だめだ、間に合わない——!)

間髪入れず、禍々しい紫色の砲撃が、王宮一帯に向けて降り注いだ！

「何っ!？」

「嘘だろう!？」

グラハムが絶句する。ハワードも、ダリルも、愕然とその光を眺めていた。眺めることしかできなかつた。

民衆も、マリナ・イスマイル王女も、MS部隊も、ガンダムも、ガンダム調査隊も、関係ない。

王宮を中心として、その場にいるすべてのものを巻き込み、破壊するための一撃だ。

コンマ数秒間の出来事に、誰も対応できない――！

「やめろおおおおおっ！」

クーゴに許されたことは、ただ叫ぶことのみ。

次の瞬間、青い光が爆ぜたような気がした。

「させるかあああああああああ！」

女性の声がした。聞き覚えのある、凛々しくも雄々しい声だった。緑色のマントが翻る。薄青の礼服を身に纏った女性が、手を伸ばしているのが『視えた』。目の前には、王宮一帯を包み込むような、青い膜。光が爆ぜる。女性の顔が苦悶に歪んだ。彼女だけでは、抑えきれない。

そこへアイデアが加わり、手を伸ばした姿が『視えた』。再び青が爆ぜる。それでも尚、砲撃の方が威力が高い。彼女たちに続くように、クーゴも手を伸ばす。そうしなければならないと、本能が叫んでいた。

また、青が爆ぜる。気づけば、クーゴの隣にはアイデアがいた。いや、彼女だけではない。たくさんの人々が手を伸ばしている。

いつぞやの「吐瀉物(略)」事件の加害者である緑の髪と紫の瞳を持つ青年、仮面をつけた青年、A E Uの軍事演習場で出会ったエルガン代表。

眩い青だけではない。黄色、緑、赤の光も混じっている。不退転の意志を宿す瞳が、表情が、心が、降り注ぐ悪意をも凌駕する——!!

「砲撃が、弾かれた……!?!」

グラハムの声が聞こえる。王宮は、なんともない。はっとして周囲を見回した。いつの間にかコクピット席に戻っていた。

弾かれた砲撃の余波が多少着弾しただけで、被害は大きくなかった。大部分は荒野の方へと飛んだらしい。

青い膜はもうない。ガンダムたちはしばし空を見上げていたが、くると踵を返して飛び立っていった。その姿を、人々は静かに見送る。

(今のは一体、何だったんだ……!?!)

砲撃の主も、光を弾いた膜の正体も、先程クーゴが見た光景も、分からないことが多すぎる。

そのとき、通信が入った。保守派の重鎮と改革派の王女の会談が開かれるということだった。

手際がいい。ソレスタルビーイングの連絡があった時点で、マリナは準備をしていたのだろう。

「今のは、一体……」

「誰が、何のためにこんなことを……」

ハワードとダリルが憤る。無防備なMSだけでなく、この場に居合

わせた民間人や王族などの非戦闘員すら吹き飛ばそうとした相手だ。軍人として、人として、許しておくべきではない。その存在を放置していいはずもない。しかし、その犯人の姿はわからないままである。

「それはわからん」と、グラハムが重々しく言葉を続けた。

「……だが、世界の鼻つまみ者になってまでも、ガンダムを討ちたいと考える人間がいるということは確かだ」

グラハムは険しい表情で空を睨む。

悪意なんてなかったとでも言うかのように、悠々とした青が広がっていた。

「一歩間違えれば、俺たちに対して向けられた感情だな。これ」

クーゴが呟けば、バツが悪そうにハワードとダリルが視線を逸らす。反省してくれたらしい。

ガンダムと戦えないとなれば、もう自分たちに用はないだろう。案の定、上層部から撤退命令が出された。

内戦がひと段落すれば、ユニオン軍も本格的に撤退する。ガンダム調査隊は、それよりも先に本国へ呼び戻されるに違いない。

人知れず、4機のフラッグは王宮を後にした。



「ところで、的当てはどうだったんだい？」

「全然。邪魔が入った」

「姿は見られていないだろうね？」

「問題ないわ」

アレハンドロの言葉に、刃金蒼海は淡々と答えた。

おかげでこちらは、力を結構使う羽目になってしまった。正直、立っているのすら辛いレベルである。

ノブレスはリボンズに視線を向けた。彼も相当疲れているようで、だるそうに俯いている。座りたいのに座れない。

『機体の姿、見ましたか？』

『いや、まったく。あの一撃を防ぎきるので手一杯だった』

ノブレスの問いに、リボンズは首を振った。これでは三国志通り越して世界戦争レベルである。

ユニオン、AEU、人革連、ソレスタルビーイング、監視者。それらすべてののにらみ合いだ。スターダスト・トレイマーは例外枠である。う。

世界はどこまで混迷の道を辿るのか。そこに紛れ込む悪意を、どこまで抑え込むことができるのか。ノブレスは空を見上げる。

『今頃、マザーは爆睡中だろうね。ご老体だつて言ってるくせに、本当に無茶ばかりするんだから……』

リボンズは苦笑する。それはまさしく、母親を心配する息子の姿だった。

ノブレスにはもう、親を心配したくてもできない。相手はいないからだ。

しかも、派手な喧嘩をしたのが最期の会話だった。今となっては、謝ることもできない。

過去を紐解くように、ノブレスは目を閉じる。炎に包まれた家と研究資料、動かなくなった家族たち、それを見下して嗤う2人の男。

奴らは研究資料を持ち出した。主に、MSに関する資料が目当てだったらしい。共有者コウヤレンジャーに関する資料には目もくれなかった。

目があった。殺し損ねた相手がいたと笑いながら、奴らは近づいてくる。銃撃音。崩れ落ちる体。満足げに笑い、男たちは去っていく。

(許せない)

手を伸ばす。届かない。

(許さない)

手を伸ばす。届かない。

(僕は――)

ノブレスはゆっくりと目を開けた。アレハンドロの後ろ姿がそこにあつた。

溢れそうになる感情をぐっと堪える。今はまだ。牙を鋭く砥ぎながら、そのときを待ち続ける。

フランス語で『気高き魂』のコードネームを背負う男には、相応しくない感情であると理解しながら。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

3 1. 砂上の楼閣

エリア11の日本は穏やかな時間が流れ、穏やかな日々が続いている。

と言つても、砂上の楼閣に過ぎない。平穏と言う名の水面下には、陰謀や悪意が渦巻いていた。

ただ、この周辺に漂うのは、別の意味を持った陰謀と悪意だ。方向性が色ボケに特化しているが。

「皆さん、注目！ これより特別イベント、『キューピットの日』の開催を宣言します！」

アツシュフオード学園の生徒会長兼学長の娘であるミ□イ・アツシュフオードが、明るいテンションで宣言した。学園の生徒たちも盛り上がった。

会長が会長なら、生徒も生徒だ。日本人はお祭り行事が大好きである。特に、彼女／彼氏がいない独り身の生徒からしてみれば、今日は絶好のチャンスと言えよう。

対象者は学園の生徒だけではない。学園外からやって来た人間も含まれる。つまり、アツシュフオード学園を見学しに来たZAXISにも当てはまるのだ。

ルールは至って単純。気になる相手のおでこをタッチすれば、この祭りが行われる最中限定での恋人同士が誕生する。しかも、早い者勝ち且つ強制的だそう。

なんてタイミングで訪れてしまったんだろう。文化祭風の催し物が行われるという噂話に胸を躍らせていたが、今は逆に寒気しか感じない。どうしてくれよう。

（生徒の目が、猛禽類みたいな眼差しをしている……！ しかもこれは、肉食系だ!!）

表情をひきつらせながら、クーゴは周囲を見回した。ひしめく生徒たちは、獲物に狙いを定めている。

特に、学園の副会長をしているルルーシュという男子生徒の周囲には、女子生徒がひしめいていた。

その合計、108人。期せずして、その人数は煩惱の数と一致している。どれだけの女子生徒をたぶらかしていたのだろうか。

イデアや他の面々から「残念な人だ」「疲れている人だ」等々の話を聞いていたものの、「女たらし」も追加された。

世の中には性別問わず人間をたぶらかし、とつかえひつかえしてはボロ雑巾のように捨てていた悪女もいる。それに比べれば、まだまだ可愛い方だろう。

そいつは今、どこで何をしているのか。どんな権謀術策を張り巡らせているのか。クーゴは思いを馳せたが、意味がないことなのでやめた。

「……もしかして、私も参加するんですか？」

「もつちろんですー！」

庶民の生活を見に転校してきたナイトオブブラウンズの1人が、渋い顔をして□レイに問いかけた。即座に答えが返ってくる。

生徒会に属する男子生徒が肩をすくめて首を振った。この学校のルールはミレ□・アツシユフオードの意志そのものだ、と。

ナイトオブブラウンズの騎士はしばし悩んだ後、爽やかな笑みで頷く。彼には気になる女子生徒がいるようで、その子を狙っているらしい。

彼のイメージに映ったのは、紅月カレン。そういえば、彼はカレンに対して、戦闘中にしよつちゅう絡んでいた。

反射的に親友の姿を連想してしまった。今、クーゴは彼と別の道を歩いている。いつか、あの空へ帰る日を夢見て。

(あいつがもしここにいたら、真っ先に刹那の元に突っ込んで行くん

だろうな。満面の笑みを浮かべて……)

クーゴはそんなことを想像しながら、ZEXISの面々に視線を向けた。

仲間たちが楽しそうに談笑している。このお祭りに対して、多少引いている者もいるが、全体的に皆楽しみにしている様子だった。

彼女／彼氏持ちの余裕を見せる者、片思いの相手を取りに行く決意する者、アタックを宣言した者を応援する者等、様々だ。

クーゴからしてみれば、そのどれもが眩しい光景である。青春とはこういうことをいうのだろう。

(ねえ見て、あの人！)

(身長はちよつと低いけど、かっこいいいわよね?)

(あの凛とした佇まい、素敵だわ……)

ざわめく声が聞こえる。

しかし、次の瞬間、そのざわめきが一瞬で途切れた。

『あげませんよ……?』

寒くなってきた。学園内の気温が、数度下がった気がする。

聞き覚えのある女性の声だ。振り返ると、アイデアが鋭い眼差しで佇んでいた。クーゴがこちらを向いていることに気づいたアイデアは、普段通りのふんわりした笑みを浮かべる。先程感じた寒気も和らいだ。

クーゴがふつと笑い返したとき、開始のために距離を取れという指示が入った。周囲の反応を探ると、葵を狙う男子生徒、正□郎を狙う女子生徒、アルトを狙う男子生徒と女子生徒の感情が漂っている。

そうして祭りが始まった。皆、お目当ての相手目掛けて突っ込んで行く。それぞれの場所で、それぞれの悲喜こもごもが展開していた。和やかな祭りの雰囲気は漂ってくる。周囲に出店していた出店もそうだ。

さて、どうしよう。クーゴが考えたとき、不意に、頭上に影がかかった。何事かと空を見上げる。

青い燐光。パールグリーン髪の毛が重力によって揺れていた。悪戯っぽく細められた紫の瞳。

「クーゴさん」

能力を駆使して転移し、重力とその勢いを利用している——クーゴの頭がそんな判断を下したのと、楽しそうな声が響いたのはほぼ同時。

「——タッチ！」

「——おわっ!？」

慌ててアイデアを抱き留める。危うく地面に倒れそうになったが、寸前のところで踏みとどまった。視界がやや暗い。クーゴの額に、何かに触れているためだ。

手だ。アイデアの手が、クーゴの額に触れている。確か、この祭りは『額にタッチされたら恋人同士になる』というルールだったか。——おや？

クーゴが目をぱちくりさせたとき、アイデアがニコニコ笑っていた。とても幸せそうに笑っていた。

「あー……」

居心地悪くなり、目を逸らす。抱えた重みが、やけに実感を強くさせた。小さく咳払いし、クーゴはアイデアを地面に降ろす。

恋人。恋人とな。頭が全然回らない。こういうとき、恋人だったらどんな判断を下すだろう。どんな会話をするのだろう。

気の利いた言葉が何一つ出てこなくて、それが申し訳なくて、クーゴは小さく頭を下げた。アイデアはゆるりと目を細める。

エスコートなんて、まともにしたことがない。それでも、男にはやらねばならぬときがある。

イデア・クピテイターズは、他の誰でもない、クーゴ・ハガネを選んでくれたのだ。彼女の信頼に応えたい。

喧騒が聞こえる。花より団子なア□□に対してクレープ強奪に走るしかなかったシルヴィ□□とか、嫉妬の炎を燃やすク□□が地獄絵図を展開しようとして止められたりとか、ルナマ□アが□□に『恋人同士だからタッチ不要だ』と照れられたりとか、アレ□ヤとマ□ーの超兵式キャツキヤウフフ（と言う名の超高速移動）とか、懐かしき学び舎を見つめる恋人達とか、生徒会副会長のアクロバティックな逃走劇とか、文字通りのお祭り騒ぎだ。

クーゴは手を差し述べた。イデアは微笑み、その手を取る。

デートプランは何もない。白紙だ。学園内をゆっくり散策するとして、まずはどこに行こう。

「おい見ろよ、あれ！」

「あの人を着ている服、着物だよな？」

「その割には、どこか洋装に近い感じだ」

「仮面付けてる。変な人だなー」

「作務衣と陣羽織だね。本で見たことある！」

「近寄りたいたい空気が……」

「あの人、ずっと誰かを探してるみたいなんだよ」

——あれ？

この場にいるはずのない人間の特徴が聞こえてきた。むしろ、この場にいちやいけくない類の人間の特徴であった。

確かに、『キューピットの日』という祭りに大喜びで参戦しそうな人間だと思っていた。たった1人の少女を狙って、奴がやって来ると思っていた。

でも、いるはずがないと思っていた。普通に考えて、その人間はここに来れるはずがない。だって奴は、アロウス所属の軍人だ。

クーゴは声のする方向に視線を向ける。次の瞬間、そのざわめきが更にヒートアップした。むしろ、悲鳴の類に進化／変化した。

刹那が全力疾走している。その後ろに追隨するのは、金髪碧眼で仮面をつけた男だった。濃緑の作務衣に、赤基調の陣羽織を羽織っている。

もし、その状況に文章を付けるとしたら、『あつ！ 野生の ミスター・ブ□ドーが 飛び出してきた!!』——この言葉に尽きた。

「な……」

クーゴの喉が引きつる。

「なんでお前がここにいるんだアアアアアアアアツ!?!」

『——少女の額にタッチできたら、丸一日恋人になれると聞いて!!』

気づいたら、盛大に叫んでいた。

顔なんて見えていないのに、奴がいい笑顔で返答したような気がした。



この面々が集まるのは、随分と久しぶりな気がする。

クーゴとグラハムは、恒例となったアイデアと刹那とのオフ会を行っていた。『夜鷹』と『エトワール』のコラボ企画と交流会は、まだ続いている。互いが互いに多忙のため、なかなか時間を作るのが大変だった。追う者と、追われる者同士の組織に属するが故の弊害である。

オフ会および交流会では、組織の話はご法度だ。暗黙のルールではあるけれど、それよりも別の話がしたいというのが本音である。要するに、情報収集よりも交流にウエイトを置いた状態だと言っている。

己の首を絞める行為だとは重々理解したうえで選んだことだ。

現在二次会の真っ最中。会場は日本の喫茶店だ。アイデア行きつけの店であり、いつぞやの『決戦』の舞台でもある。今回のオフ会は三次会もあり、次の会場はアイデアと刹那の拠点であるマンションで夕飯を作るといふ約束になっていた。

「キミは普段、男物の服を着ているのか？」

唐突に、グラハムが刹那に問う。刹那はきよとんと眼を瞬かせた。

「いきなりどうした？」

「いや、気になってな。……私個人としては、キミには自然体でいてもらいたいのだが」

グラハムの悩ましげな様子に、刹那が「自然体？」と首を傾げる。彼女の言葉に、グラハムは仰々しく頷いた。至極真剣な視線を刹那に注ぐ。

「キミに気を使わせてしまったり、無理をさせてしまうのは本意ではない」

「そんな風に見えたか？」

「キミは人一倍、頑固で我慢強い性格をしているからな。その上、自分の弱さを覆い隠すのがうまいときている。……だから、もしかしたら思ってたんだ」

グラハムの発言は、思っても見ないことだったらしい。ぱちぱち目を瞬かせた刹那が呟く。

「……あんだ、強引で自分勝手に見えて、意外と察しがいいんだな」

彼女の発言に、グラハムがむっと眉をひそめた。

相当心外だったのだろう。

「どういう意味かな、それは」

「褒めたつもりなんだが」

「褒められた気がしないぞ、少女」

「……最初の頃は、仕方なく着ていたんだ」

刹那は、当時の頃と思い出すように、しみじみとした口調で呟いた。やはりか、と、グラハムは深々とため息をつく。そうして、彼は刹那の服装を見つめる。

今日の服装も、レースがふんだんに使われた白いワンピースだ。普段と同じ、彼女のトレードマーク。アザデイスタンで見た、男物の民族衣装を想像することはできない。

「なら、無理に着なくても」とグラハムは言いかけた。「でも、今は違う」と、遮るように刹那が告げる。いきなりということで面食らったグラハムに対して、彼女は照れくさそうに視線を泳がせた。

蚊の鳴くような声で、ぽつり、と。

「今は、結構、気に入っている。……いや、むしろ……あなたに会うときは、この格好じゃないと、落ち着かなくて」

グラハムがぴたりと動きを止めた。ぱちぱちと目を瞬かせる。

刹那の顔と耳は真っ赤だ。そのまま、彼女は貝のように口をつぐんでしまう。

「そうか」と、グラハムは微笑んだ。どことなく嬉しそう／照れているように見えたのは、長年友人として彼と接していたクーゴだからこそ気づけたのだと思う。

そんな感じで、グラハムは刹那と和やかに談笑していた。相変わらぬ、グラハムの表情はくるくる変わり、刹那は寡黙なままであった。時折、照れくさそうに視線を彷徨わせる。

2人のやり取りを、クーゴは目を細めて見守っていた。アイデアも楽

しそうにその様子を見守っている。グラハムと刹那のやり取りを見守りながら、クーゴとアイデアがのんびりとした時間を過ごす。それは、オフ会での恒例行事になっていた。

「平和だなあ」

クーゴが噛みしめるように呟いた。アイデアも、のほほんとした表情で頷く。

「そうですね。まるで、世界の流れから切り離されてしまったような気がします」

「箱庭みたいなものか？」

「だとしたら、砂上の楼閣みたいなものですけどね。実は今にも崩れてしまいそうな」

どこか寂しそうに、アイデアは目を伏せた。彼女の気持ちは分からないわけではない。クーゴは何も言えなくて、飲み物を呷る。

氷がグラスにぶつかる音が高らかに響いた。グラスには結露で発生した水滴がついている。指がついた場所から、滴が伝って流れて落ちた。

世界が混乱している中で、この4人だけは永遠に変わらないのではないか——なんて、馬鹿なことを考える。最初の頃と比べれば、自分たちは変化してきているではないか。

その方向が、ただ単に、4人にとって『良い方向』だったから、このままであればいいと思ってしまうただだけだ。破滅のときまで、現状維持。結局のところ、それに尽きる。

自分は意外と臆病だったらしい。そのことを思い知らされたような心地になり、クーゴはひっそりと自嘲した。おそらくはグラハムも、どこかではそれが引つかかっているに違いない。

最も、それを口に出すこと自体、御法度のような気がするのだが。

この場にいる誰もが同じ痛みを抱えて、来るべき日を見据えなが

ら、それでも絆を切ろうとは思っていない。

クーゴはアイデアに視線を向けた。アイデアはそれに気づいたようで、目を瞬かせる。彼女はふっと笑みを浮かべた。

「立ち止まることは、罪ではないです。前へ進むためには必要なことだから」

私も同じです、とアイデアは言った。その微笑み方を、自分はどこかで『視た』ことがある。

それを見ていると、うまく言えないけれども、なんだかむず痒い気持ちになるのだ。

学園。祭り。額にタッチ。限定的な“恋人”。彼女は、幸せそうに笑っていた。

他にも何かあった気がする。全力疾走する男女——頭が痛くなったので、その光景を振り払った。

「……そっか」

クーゴもまた、目を細める。

アイデアも、肯定するように頷き返した。

心地よい沈黙が広がる。グラハムと刹那の会話が、どこか遠くのことのように思えてきた。時折、店員同士の話し声も紛れ込む。

クーゴは大きく息を吐いた。オフ会の今でしか話せないことがある。あくまでも、自分たちは「オフ会で顔を合わせる友達」なのだ。

そこには、ソレスタルビーイングもユニオン軍もない。多分、時間が開いてしまったら、伝えられなくなってしまう——漠然と、そんな気がした。

「誰よりも強くなければ、世界は変えられない。誰よりも優しくなければ、世界を変える資格がない」

「え？」

「戦争根絶を謳う団体を見て、最近思うようになったことだよ」

アイデアが目を丸くする。クーゴは静かに言葉を続けた。

「アザデイスタンで、ガンダムが無防備な状態で保護した用心を送り届けたというニュースがあっただろう？ あれを見て思ったんだ」

我ながら、いけしやあしやあとした発言である。その光景を間近で見ているというのに。

これでは、いつぞやのクワトロ・バジーナとシヤア・アズナブルに引けを取らないではないか。

クワトロとシヤアは同一人物だ。彼は連邦軍の大尉として所属しているときはクワトロ。ジオン軍、キリシア直属の工作部隊、オルトロス隊の構成員のときはシヤアと名乗り、世界のために戦っていた。

連邦軍およびガンダムに対して蟠りを抱いていたオルトロス隊の面々が、コネクト・フォースの面々に決闘を申し込んだことがある。その最中、ミューカスとバジユラの乱入があり、面々と共闘することを選んだ仮面2人組に対し、シヤアは別部隊への援護へ向かった。

別部隊の援護とは名ばかりであり、実際は、『ジオングをキリシアの元へ返却し、シヤアとして決闘に臨む代わりに預けていた百式を返してもらっていた』だけである。ついでに新装備も付けてもらったように、クワトロ大尉として何食わぬ顔で戻って来て、何食わぬ顔で援護してくれたのだ。

ちなみにこの虚憶は『殴り合い、宇宙／OE』である。

『ガンダムファイト、レディー、ゴー！』および『ブシドーがめんどくさい』アレであった。

閑話休題。

「世界は彼らを犯罪者と言うけれど、その強さと優しさには敬意を持つべきだと思っている」

自らの理想を体現するために、愚直なまでに突き進んだ、天使の後ろ姿を思い出す。

あれは、強くなければできないことだ。優しくなければできないことだ。その眩しさに、クーゴはゆるりと目を細めた。

「だから俺は、そんな彼らと対峙するに相応しい存在でありたい。……それが、俺が『ソレスタルビーイング』に示せる、精一杯の誠意だと思うから」

「……どうして、今、そんな話を？」

幾何かの間をおいて、アイデアは神妙な顔つきで問いかけてきた。声が堅い。

「今じゃなきや、伝えられないと思ってな」

クーゴは苦笑した。この場で言えることはそれだけだし、それを実践するためには戦場で、ということになるだろう。

アイデアはじつとクーゴを見つめていた。クーゴの心に触れようと、思案しているかの様子だった。透き通った水面を覗き込むような表情。

この場にまた、沈黙が降りる。アイデアは、水面の底に何を見たのだろう。それを問う間もなく、彼女は静かに目を閉じた。

何かに納得したかのように、アイデアは小さく頷く。

「わかりました」と微笑んだ女性の声は、凜と透き通った響きを宿していた。

「ソレスタルビーイングがそれを聞いたら、なんて言うかな」

いけしゃあしゃあとした態度のまま、クーゴは独り言ちるようには呟いた。アイデアはぴくりと眉の端を動かす。

真剣な顔をして俯いたのち、彼女は顔を上げた。クーゴをまつすぐ

見返して、照れたように笑った。

『物好きな奴もいるんだな』って笑いながら、嬉しそうにするんじゃないんですかね。……そういう人の存在は、彼らの支えになると思いますよ」

◇

「え？　またあのシミュレーター、人がおかしくなったのか？」
「そうだよ。『ズール皇帝こそ正義だ！』って叫び出して、また人が暴れたらしいんだ。しかも、前回より派手に」

クーゴの問いかけに、ベリーは苦笑しながら頷いた。「今回のことで、例のシミュレーターは完全に配信停止が決まったようだ」と、至極残念そうに肩を落とした。

先日も、金属生命体のシミュレーターをやっていたMSパイロットが「頭に響くんだよオ！　叫んでばかりでえ!!」と叫んでシミュレーターを破壊したばかりである。

その後お叱りを受けたそうだが、壊した本人は未だに納得していない様子だった。以来、彼は、金属生命体のシミュレーターには近づかないでいる。

ただ、たまに、他のシミュレーターをやっていると、何か聞こえている様子を見せるそうだ。

詳しいことは知らないが、周囲の情報曰く、「煩い」としきりに呟いているという。

「そうか。ところでベリー」

「目測しないでくれよ」

「了解」

下腹部のたるみ具合を目測しようとしたら、それを察したビリーから睨まれた。彼の手には、齧りかけのドーナッツが握られている。

食事も不規則、その上、3食すべてがドーナッツだ。つまみまでドーナッツである。不健康極まりない生活習慣だ。クーゴが差し入れを持っていかなければ、彼の食生活はもつと危険なことになっていただろう。

不健康と言えば、昔のグラハムも当てはまる。料理のレパートリーが少ないのも相まって、一時は1週間マッシュポテトのみで過ごしたこともあったらしい。マヨネーズと野菜とマカロニを混ぜてポテトサラダにするぐらいの工夫があつてもいいはずだ。

現在のグラハム・エーカーは、以前よりはマシになった。刹那に振る舞う料理の練習を、クーゴやガンダム調査隊の仲間たちと一緒にやっているというのもある。料理教室の余波として、ハワードが以前から気になる子と接近したり、ダリルが姪御さんから褒めちぎられた等の出来事もあつた。

ちなみに、ビリーには何のイベントもない。

意中のリーサ嬢は、多忙でなかなか捕まえない様子だった。

それでも、料理教室にはきちんと参加し、おいしいものを作つて持ち帰っている。彼は誰と食べているんだろう。

ビリーが何かを察したようで、ちらりとクーゴを見返した。失礼なことを考えてないだろうね、と、彼の瞳が問いかけてくる。

クーゴは思考回路を逸らすため、端末へと視線を向けた。情報収集と追及逃れのため、わざとらしく端末を開く。

『PMCトラストが、新型MDの開発に成功』……。『各国に、試作機の提供を行う』？』

どうやら、ユニオンにも近々新型MDが届くらしい。何やら作為を感じるのは気のせいではなかった。

以前のアザデイスタン内戦に関わったとされるPMCに対して、世間は冷たい眼差しを向け始めている。

噂によると、その一件がラスードとマリナの会談、およびセキ・レイ・シロエにスツパ抜かれて以来、業績が芳しくなくなっただけ。特に、停戦調停（名ばかりだが、一応、仕事はした）でアザデイスタンに介入したユニオン軍からは、何とも言えない目で見られている。

今回の新型提供は、「等価交換に『目をつぶれ』ということだろう。その条件を飲むか否かは、近々行われる性能テストを試金石にする。

「ウチにも一応、何台か来るみたいなんだ。確か、機体名はビルゴだったっけ？ 他にも既存シリーズの強化系や他の機体があったみたいだけど、担当部署が違うからな……」

「後できちんと調べてみる」とビリーは言った。クーゴも、頼み込むようにしてペこりと頭を下げた。

MDという言葉を聞くと、なんだか嫌な予感しかしない。モラリア戦役で白いガンダムに群がっていた、ヴァイエイトとメリクリウスの姿を思い出す。赤と青、対をなす機体がイデアを追いつめていく姿は、機械統制を受けながら、まるで仇敵を抹殺しようと意気込んでいるかのように思えた。

もしこの場に、あるいはこの世界のどこかに、トレーズ・クリシユナーダという男がいたならば。MDを開発した民間企業に対し、遺憾の意を述べることは間違いないだろう。ボタン一つで決着がつく戦争を嫌う彼ならば、そうする。どうしてもここに彼がいないのか、非常に惜しい。

不意に、虚憶がフラッシュバックした。小惑星の上で、トールギスがリーブラを見上げている。機体の後ろには、トレーズの部下が駆るリーオーたち。リーブラから放たれた主砲の一撃が、トレーズ派の兵士たちに向かって降り注ぐ——！！

さえぎるように現れたのは、金色の機体。奴は割り込むように現れ、主砲を簡単に無力化した。

「お前はお呼びじゃないんだよ、帰れ」という言葉が喉元までせりあがってきた理由は、何だったか。

「何か、釈然としないな」

後ろから、苦い表情でやって来たのはグラハムである。彼はコーヒーの入った紙コップを片手に深々と息を吐いた。

「私は、MDは好かない」

「ああ、なんとなくお前もトレース派に近いもんな」

ボタン1つで決着のつく時代。人の尊厳を無視した、無慈悲な兵器が存在していた。そのために、多くの人間たちが、虫けらのように殺されていった。

合理化を推し進めた結果の産物だ。その重みを、いい意味も悪い意味も噛み砕いて理解していたのは、トレースやリアルドぐらいのものであったであろう。

窓を見る。PMCトラストのロゴが描かれたコンテナが、ゆっくりと運び込まれていくところだった。

あの中に、MDたちが収められている。殺戮兵器としての出番を、今か今かと待ちわびているのだ。

正規利用されることになったら、MDは何人の人間——兵士および民間人含む——を手にかけるのだろうか。

(異常が発生して、そのままお蔵入りになればいいのに)

どうにもならぬ嫌悪感を持って余しながら、クーゴはコンテナを眺めていた。

コンテナから機体が下ろされていく。不意に、誰かがじつとこちら

を見ているような気がした。視線の主と思しきものは、運ばれていくカーキ色の機体——ビルゴ。

角度と反射光のタイミングが悪かったのか、「獲物を見つけた」と嬉しそうに笑いつつ狩りの準備に入った獣を思わせる光を放っていた。カメラアイの反射とは思えないほど、タイミングが良すぎる。しかし、機械が感情を持つはずがない。あの機体に搭載されたAIには、そんな機能はないからだ。

やはり、偶然だったのだろうか。

クーゴは深々と息を吐き、端末をいじる。

どこかで、砂上の楼閣が崩れていく音が聞こえた気がした。



「ひゃ、150mだって!? こんなもの振り回せるはずがない! 重力が少ない宇宙圏ならいざ知らず、地上で振り回したら腕が折れてしまおう!」

ビリー・カタギリの主張に対し、青年はくるりと踵を返した。

「それじゃあ、この話はなかったことにするさ。お宅にはもう、技術提供をしない。交渉決裂ってところかな」

青年の言葉に、ユニオン軍の技術班が顔色を変えた。顔面蒼白という言葉そのものだ。

つかつかと音を立てて、青年は足を進める。そんな彼を呼び止めたのは、レイフ・エイフマン教授であった。

「……わかった。引き受けよう」

「教授！ 正気ですか!？」

ビリーが驚きに満ちた表情を浮かべた。エイフマンは頷く。

彼の真剣な横顔に、青年は懐かしさを覚える。声をかけたい衝動に駆られたが、ぐっと堪えた。

青年はくるりと向きを変えて、研究者2人の元へと歩み寄る。口元には、緩やかな微笑。

「なら、交渉成立だね。新武装の提供をしよう」

青年は後ろを向いた。手で合図をすれば、コンテナが運び込まれていく。中身は新武装に必要な材料である。そうして、青年は技術者たちの方へ向き直った。

タブレットに保存されている図面を転送する。それを改めて確認していた技術班の人間たちは、「あ」と声を上げた。図面の中に、彼らの心配の種を刈り取るものを見つけたからだ。

青年は、表情を輝かせて語り始める彼らの様子を眺めていた。青年にとつて、熱を込めて語り合う人々の様子は、とても身近で愛おしいものであったからだ。思わず表情を緩ませる。

「それと」と青年が付け加える。

技術者たちは、端末から顔を上げた。

青年が話題を向けるのを待っていたとでもいうかのように、奥の方から1人の女性が歩み寄ってきた。金髪碧眼で、白衣を身に纏った凛々しい女性である。

「初めまして。『悪の組織』第3技術班の顧問をやっている、ノーヴル・デイランという者です。我が会社そしきとの契約更新が決まった場合、我が班がこちらに派遣および常駐が決まっていますので、ご挨拶に」
「彼女が無駄足にならなくて、本当に良かった。以後は僕ではなく、彼女を通じて技術提供、および交渉を行ってくれればいいからさ」

青年はひらひらと手を振り、そのまま研究施設を後にした。

女性——ノーヴル・ディランとすれ違いざまに、そつと声をかける。

『あとは、お願いします』

『ええ。任せておいて』

その声は、決して他人に聞こえることはない。『同胞』でもない限り、聞き取ることは不可能だろう。

青年はユニオン基地を後にした。基地の前に留まっていた車に乗り込む。車は窓にカーテンをしいて、ゆっくりと走り出した。

今なら誰も見えないだろう。青年は、自分の頭に手をかけた。ばさ、という音とともに、髪の毛——ヴィックが膝の上に落ちる。

星の輝きを思わせるようなプラチナブロンド。ゆるいウェーブがかかっていた毛は、ヴィックの下に押し込められていたせいでぐちゃぐちゃになっていた。

次に手をかけたのは、顔。べり、と嫌な音を立てて、青年は何かをはがした。破けて落ちたのは、人間の肌を模して造られたマスクである。

露わになったのは端正な顔立ち。次に、青年は目からカラーコンタクトを外す。瞬き一つの後に、本来の色であるアンバーの瞳が姿を現した。

「あとは、疑似人格を解除して……はー。やっと解放されました」「お疲れ様」

青年は大きく息を吐いた。そんな彼を労わるようにして、車の運転手が声をかけてきた。

それに応えるように、青年も頷く。

「疑似人格の使い分けには慣れていますが、今回のようなタイプは、

やっぱり違和感しかありませんねー」

「正直、かなり前に使った東北弁とか違和感だらけだったなあ。『おだづな、いい加減さしろ』——『ふざけるな、いい加減にしろ』とか、『はすのはすっこを走って渡っていった』——『橋の端を走って渡っていった』とか。後者は橋、端、走でイントネーションが微妙に違うんだよね」

「言っている自分の言葉が宇宙語に聞こえたこともありますよ。一番は沖縄弁ですね。『うかーさい。絶対んかいうかーさい』とか」

「あ、『おかしい。絶対におかしい』って奴か」

あつはつはつはつ——朗らかに笑う青年2人。

彼らはしばし談笑にふけていた。

「でも、大丈夫なんですか？ こんなこととして、いくらサブを遠隔操作できるとはいえ、あいつに気づかれるのでは？」

「まだ気づいてないし、気づかせるつもりもないよ。手順通り、例のもの”を掌握したら、サブはさっさと始末する予定さ」

運転手はへらりと笑った。紫の瞳は悪戯っぽく細められる。こうして見ると、運転手が青年より年上とは思えない。運転手はいつだって若々しさを失わなかった。

そのせいかな、青年と運転手は、出会った頃から友人および悪友関係となっていた。その関係性は現在も変わっていない。おそらくは、これからも。

青年は目で合図した。運転手は運転席と座席の間にあったカーテンを閉める。それを確認し、青年は慌ただしく着替えを始めた。煌びやかな衣装を身に纏う。

鏡を見ながら身支度を整える。どこからどう見ても、完璧なアイドルだ。青年はぱん、と手を叩く。

「今回はやけに気合が入ってるね」

「教え子が来ますから。無様な格好は晒せません」

「そう。じゃあ、頑張つて。僕も見てるから」

「頑張りますよ。全力でね」

車が止まったのを確認し、青年は優雅な動作で降りた。慌ただしい足取りで楽屋へ向かう。

人々と挨拶を交わした青年は部屋へと入り、最終確認を行う。問題は、ない。そのまま部屋から出た。

ステージに出る。スポットライトと歓声が、惜しみなく青年に向けられた。

音楽が鳴り響く。ざわめく声はヒートアップし、たくさんのペンライトが激しく揺れた。

そのすべてに答えるため、青年は満面の笑みを浮かべて腕を突き上げたのだった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

3.2. 機械は悪意を抱くか

ヴァイエイト、メリクリウス。これらは、モラリア戦役で投入されたMDであり、現在コンテナに積み込まれている機体——ビルゴの原型機だ。

ビルゴには遠距離攻撃と破壊力に特化したヴァイエイトのキャノン砲と、接近戦および防御に特化したメリクリウスのプラネエイトデیفエンサーが搭載されている。

ちなみに、プラネエイトデیفエンサーは、磁気フィールドを作り出すことでビーム関連の攻撃の威力を相殺することのできる防御型兵装の1つである。

新開発されたビルゴはヴァイエイトとメリクリウスの『いいところ取り』のMDだが、その分、機動力は原型機と比較して劣っている。

P M Cトラスト側曰く、「将来は宇宙圏にも進出できる機体にする」予定なのだという。予算回収がうまくいかないのが玉にキズらしいが。

機体の色はカーキ色と黒の2パターンある。ずんぐりとしたフォルムは、武骨で物々しい。

「乙女座の名前を冠する機体にしては、センチメンタリズムの欠片も見当たらんな」

窓越しに佇むビルゴを睨みながら、グラハムが険しい表情で呟いた。言いたいことはよくわからないが、彼が憤っていることは明らかである。

クーゴも、グラハムが見ているビルゴへと視線を向けた。センチメンタリズムを感じるどころか、殲滅兵器らしさが上乘せされているように思えてならない。

「むしろ、苛烈さと攻撃性に満ち溢れているように思う」

「キミもそう思うか」

クーゴは小さく頷いた。

ビルゴ以外のMDは、あと2種類ある。

黒と白のカラーリングと、ひし形に近いフォルムを特徴にしたトラス。可変機体であり、こちらもビルゴと同じ宇宙運用を目指しているという。機体名の由来は牡牛座のギリシヤ語読みからきていた。攻撃力と耐久力は、ビルゴに勝るとも劣らない。

春を思わせるようなピンク色を基調とした、可愛らしい外観のファルシア。本来は有人機体として開発されたものらしいが、AIを使った遠隔操作に特化した機体が開発し直したため、花を思わせるような台座がつけられていた。純粋な攻撃力は2機に劣るが、機動力ならこちらが上だ。

本当はもう1機が「遠隔操作の中継点用」についてくる予定だったが、開発中に少々トラブルがあつたようで難航しているらしい。その機体は、有人機体とMD用機体、どちらにも流用可能のものだという。民間軍事会社と侮るなかれ、というところだろうか。

『――シグナル、^{タイプ・ブルー}荒ぶる青半覚醒個体と判明。数、2体。目標視認』

『^{タイプ・ブルー}荒ぶる青半覚醒個体の能力値計測。優先順位を決定。パーソナルデータの照合開始』

どこからだろう。無機質な合成音声聞こえる。冷淡でありながら、まるで仇敵を見つけたかのような声色に思えてならない。

クーゴは思わずMDたちを見上げた。機体はコンテナに入ったまま、全く動く様子を見せなかった。まだ起動していないのだから、当然と言える。

(……なんだろう、この違和感)

「クーゴ。例の新武装のテスト、決まったよ」

クーゴの思考回路は、廊下の向うから駆けてきたビリーの言葉に遮

られた。

彼は慌ただしくタブレットを示して見せる。そこには、新武装の図面が描かれていた。

ざっとそれを見て——クーゴは凍り付いた。自分の目がおかしいのかと思ひ、何度も目をこすったり、瞬きを繰り返した。

視力、両目とも2.0。クーゴの目は、ある数字をしつかり映し出している。

それは、3桁の数字だった。その後ろには、メートルという単位を表す「m」が表記されている。

もう一度、クーゴは祈るような気持ちで数字を確認した。

全長、150m。音にして、『ぜんちょう、ひやくごじゆうめーとる。』

何度見直しても、同じだった。

「無茶言うな！ こんなもの振り回したら、敵どころか味方までぶつた切りそうな勢いなんだが!？」

クーゴの突っ込みに、ビリーはこちらを諫めるように弁明する。

「大丈夫だよ。普段は15mの長さのまま鞘に収めていられるし、長さの調整だってできるし、地上で振るっても腕が折れないようにチューンナップできるし!」

「長さ調節って、高枝切り鋏じゃあるまいし。刀として、それはちよつとまずいんじゃない」

「この武装のテスト次第で、新しい武装に関するデータが追加される可能性があるんだ。……いや、『やってくれないと契約が切られてしまふ』と言った方が正しいかな?」

ビリーがしょんぼりしたように肩を落とした。技術班の面々も、なんとかしようと努力したのだろう。でも、結局、最近ここに来た『悪の組織』の技術者に圧されてしまった様子だった。

対ガンダム用の新機体を開発するにあたって、ガンダムの武装と機体性能を参照にしたチューンナップは急務である。技術班は、そのための図面作成や技術開発に追われているという。

クーゴは図面に視線を落とす。武装名は、『150ガーベラ』。『150mの刀身を持つガーベラストレート』という意味からつけられた名前だった。

よくもまあ、そんな武装を思いつくものだ。クーゴは素直に、『悪の組織』の技術者たちに感嘆する。この図面を再現できる技術力にも、それを思い至る頭脳にも。

振り回すこと前提で話が進んでいたが、そもそも、クーゴがこれを振り回せるかという問題がある。そのための武装テストなのだろうが、前提を忘れていたのではないかと思えてならない。

グラハムも図面をじっと眺める。その目はきらきら光っていた。150mの刀は、彼の浪漫をくすぐって止まないようだ。グラハムは日本文化が好きだからなあ、と、クーゴは心の中で呟き苦笑した。

「……技術班の進退が懸っているんだ。やらないわけにはいかんだろう」

図面から目を離し、クーゴは窓の外に視線を向けた。先程まで晴れていた空に、雲がかかり始めている。

なんとなく気になって端末を起動させ、天気予報を確認した。晴れ間は今日限り、あとはしばらく曇りが続くらしい。

「ところで、武装のテストはいつだ？ カタギリ」

「この日だね」

「ふむ、曇りか」

グラハムとビリーが話している内容を聞きながら、クーゴは薄ら寒さを堪えるように身をすくめる。振り返れば、その先にはMDの群れ。

MDは機械人形だ。機械人形が意志を持つとは思えない。意志がないことは、心も感情もないということに他ならない――……はずだ。

モラリア戦役で感じた『機械の殺意』も、普通に考えたらあり得ない現象である。一体何がどうなっているのだろうか？

また、声がある。無機質な、機械の合成音声。

『パーソナルデータ、一致』

『――優先■対象、クーゴ・ハガネ』

「――!?」

名前を呼ばれた。機械の合成音声に。

クーゴは慌てて振り返る。そこには、静かに佇むMDの姿だけがあった。



テスト当日。

天気予報の通り、空は曇天。むしろ、雨が降って雷が鳴り出してしまいそうなレベルの分厚い雲に覆われている。風が唸るように吹き抜けたのは、きつと気のせいではない。

それでも、テストを行うのには支障がないという。技術者たちも上層部もG○サインを出した。クーゴ自身の体調も良好だった、というのもあるだろう。但し、『演習場に入る前の体調』が良好だったという補足がつくが。

「……寒いな」

パイロットスーツに着替えたクーゴは、小さく零しながら腕をさすった。テスト開始の時間とクーゴが演習場に近づくほど、その寒気がますます酷くなつていくように思う。

メデイカルチェックの結果は良好だ。何度やつても同じだった。気味が悪くなるくらい同じだった。背中を撫でる寒気を持て余しながら、クーゴは歩みを進める。

廊下の突当りで、グラハムやビリーたちが誰かと何かを話しているのが見えた。金髪碧眼の、凜とした佇まいの女性。どこかで『視た』ことのある女性だ。

『時間ピッタリのご到着ですね、グラハム少佐。乙女座の男性は几帳面だったかしら?』

そう言つて、カリフォルニアの基地にやつて来た自分たちを迎えた女性は、誰だったか。

クーゴが思考回路をそちらに向けて回転させ始めたとき、不意に、脇から何かが飛び出してきた。どん、と、強い衝撃がかかる。流石に倒れこむことはなかったが、驚いたのは事実だ。クーゴが振り返ると、そこにいたのは4人の少年少女であった。

茶髪に鳶色の目を持つ少年、紫の髪に青い瞳を持つ少年、黒い髪に赤みのかかった紫の瞳を持つ少女、金髪に青みのかかった紫の瞳を持つ少女。彼らが身に纏う制服の胸元には、『悪の組織』のロゴが刺繍されている。とても若い、彼らも『悪の組織』に所属する技術者なのだろう。

ざり、と、頭の奥底でノイズが響いた気がした。

知っている。クーゴは、彼らとどこかで『会った』ことがある。

脳裏に浮かんだのは、別の方向を向いた4人の若者たちの後ろ姿だった。

(いのちのこたえ)

2つの側面から補完され、示された答えがあった。

その答えを示すために、命を賭けて戦った男女がいた。

可愛い後輩。片方は同じ部隊に所属する仲間として、片方は自分たちに立ちはだかる敵として、2つに分かれて戦っていた。

クーゴとグラハムの関係性とよく似ていた彼らを見て、ずっと心配していた。同時に、どこかで恐れていた。

何か一つでも歯車がずれていたら、クーゴとグラハムが辿っていたかもしれない可能性のように思えてならなかったから。

(キミたちは――)

クーゴの脳裏に浮かびかけた『何か』が形になる前に、少年が謝罪する方が早かった。

「ごめんなさい、ハガネ少佐！」

茶髪の少年が慌てて頭を下げる。大丈夫だと応えようとして、ふとした違和感に気づいた。

クーゴの階級は中尉。それに対し、少年はクーゴを見て少佐と呼んだ。

途端に、少年少女の顔が「しまった！」と叫びそうな表情を浮かべる。

紫の髪の少年が、茶髪の青年の頭を小突いた。「馬鹿！」「ごめん！今はハガネ中尉だった！」——少年2人が会話を繰り返す。

茶髪の少年と紫の髪の少年の会話には、大きな違和感がある。その違和感を掴もうと思案したとき、こちらに気づいたグラハムがクーゴを呼んだ。

クーゴは彼らの元へと足を向けた。グラハム、ビリー、エイフマン、女性の輪に加わる。

「お待たせしました、ノーヴル博士」
「いいえ。開始10分前です、クーゴ中尉」

女性に一礼する。彼女——ノーヴル・クルーガーはふわりと微笑み、会釈を返した。

グラハムがちらりと後ろにいるアニエスたちに視線を向ける。クーゴも同じようにして、少年少女たちに視線を向けた。

「そちらの少年たちは？」

「娘と、未来の息子たちです」

——あれ？

危うく「そうなんですか」と言ってしまうそうになったが、クーゴは自分の思考回路にブレーキをかけた。

他の面々も違和感に気づいたらしい。「え？」だの「あれ？」だのと首を傾げる。ノーヴルも首を傾げたが、自分の発言が私的なものだったことに気づいたようだ。

彼女は頬を赤らめながら、視線を逸らした。

「……ええと、この子たちも、私と同じ『悪の組織』の技術者なの。まだまだ若いけれど、実力は確かよ。——サヤ、アユル、アニエス、ジン。自己紹介を」

ノーヴルに促された4人が、自己紹介を始める。どこことなく緊張した面持ちだった。

「アニエス・ベルジユです」

「ジン・スペンサーです」

「サヤ・クルーガーです」

「アユル・クルーガーです」

よろしくお願ひします！ と、少し幼い声が綺麗に重なった。見ていて微笑ましい光景である。

だが、クーゴは、気づいたら『そう』口走っていた。

「あれ？ ノーヴル博士とアユルのファミリーネーム、テイランじやなかったんですか？」

それを聞いたノーヴルは目を瞬かせる。彼女は表情を緩め、是と頷いた。

「確かに、私の旧姓は、テイランよ。でも、どうしてわかったの？」

ノーヴルに問われ、クーゴは言葉に詰まってしまう。何故、自分はそこに思い至ったのだろうか——答えはすぐに出た。虚憶きよおくである。

そのことを包み隠さず話せば、彼女は面白そうにくすくす笑った。現実的かつ堅実な山羊座の人間が、虚憶きよおくの話をするとは思わなかったのだろう。

最も、星座占いには限界があった。星座の行動原理とは全く違うタイプの人間もいる。山羊座でありながら異性に対して軽い人間だっているくらいだ。どこまで正確なのやら。

ひとしきり雑談に興じた後、ノーヴルはアニエスたちに目配せした。彼らも小さく頷き、集まって話を始めた。

耳を立ててみる。若いながらも優秀な技術者——ノーヴルの言葉通り、面々は端末と睨めっこしながら討論を行っていた。

懐にしまっていた時計を確認する。丁度、テスト開始時刻だ。

「それじゃあ、お願ひします」

「こちらこそ、よろしく」

クーゴとノーヴルは互いに頭を下げた。その様子を見ていたグラハムたちが、力強い笑みを浮かべてこちらを見返す。

頑張つてこい——言葉でなくとも、彼らの思いが伝わってきた。それに応えるため、クーゴも微笑み返して頷いた。

格納庫を見上げれば、『150ガーベラ』を装備したクーゴのフラッグが佇んでいる。カメラアイ付近の頭部に、光が反射して輝いたような気がした。

どうやら、クーゴの愛機あいぼうもやる気らしい。一緒に頑張ろう、と、クーゴは小さく呟いて頷いた。そのまま、フラッグに乗り込む準備に移る。

凶面を見ていたアニエスたちが、期待に満ちた眼差しを向けてきた。頑張つてください！と、少し幼い声が4つ、綺麗に重なった。本当に微笑ましい光景である。

彼らに背を向け、フラッグに乗り込もうとしたときだった。アニエスたちのひそひそ話が聞こえてくる。

「あの、グラハム・エーカー少佐とクーゴ・ハガネ少佐が、僕たちの目の前にいるんだ……！」

「アーニーの馬鹿！ 不用意にあの2人を少佐と呼んじやいけないって言われてるだろ？ 今は2人とも中尉なんだから、気を付けろよ」

「でも、グラハム中尉は、近いうちに上級大尉になりますよね？」

「アユル！」

「ご、ごめんなさい……」

面々の様子を視界の端に入れながら、クーゴはフラッグに乗り込んだ。

フラッグが起動する。コックピットのモニターに、演習場の全体が映し出された。

隣に仕切られた区画では、PMCトラストから提供されたMD3種——ビルゴ、トーラス、ファルシアの性能テストが行われている。

(なんか、嫌だな)

MDに対する嫌悪と嫌な予感を持って余しつつ、クーゴは操縦桿を動かした。フラッグは、腰に装備されたガーベラストレートを引き抜く。

現時点では刀身15m弱。これが10倍の刀身になるのだ。一歩間違えれば、武器に振り回されてしまう危険性だっであり得る。

小回りが利かなくなるのは确实だ。それを、担い手であるクーゴがどこまでカバーできるか。新型武装と己自身を相手にした戦いだ。

もう一度、この武装のメリットとデメリットを思い返す。

メリットは2つある。1つめは、広範囲に攻撃をすることが可能であること。2つめは、戦艦から放たれる砲撃を（計算、および理論上）戦艦ごと真つ二つにできる攻撃力を有していることだ。

デメリットは3つある。1つめは、タイガー・ピアスを用いた二刀流の戦術スタイルを使えないということ。2つめは、刀身の長さが凄まじいことになるため、小回りが利かなくなってしまうこと。3つめは、1度振り回すだけでもかなりの負荷がかかるらしいこと。

『パワーグローブやOSの改造等で補強されていても、多少の影響が出る』……だったか」

カスタムフラッグの12Gも相当アレ（今は、多少キツさが残るものの、もう慣れた）だったが、150ガーベラについては未知数だ。一歩間違えれば、『ゼクスの前にツールギスに乗った人間』と同じ末路を辿る危険性だっであり得る。

その恐怖と対峙しながら、機体改良のためのテストパイロットをしていた人間がいる。フラッグの育ての親こそ、クーゴの親友にして相棒、グラハム・エーカーその人なのだ。開発者にしてもう1人の育ての親とその後継者——レイフ・エイフマンとビリー・カタギリも、このテストを見守っている。

（……フラッグの育ての親が目の前にいるんだ。無様な真似は晒せな

いぞ)

まあ、晒す気もないのだが。ぴりぴりとした緊張感を感じながら、クーゴは不敵に微笑んだ。

150ガーベラを構える。まずは、長さを少しづつ変更し、徐々に長くしていく。長さの変化で起きる現象を、しっかりと確認するためだ。

最初から150メートル全開にすると言うのは、かなりの危険が伴う。まずは5m増の20mから挑戦していく。

刀身を水平に構えて柄を撫でれば、ガーベラストレートの刀身は20mに変化した。今のところ、フラッグの体制が崩れる等の異常は発生していない。

試しに、的へ向かって刀を振るう。普段よりも長くなっているため、ほんの少し軸がずれそうになった。そのズレが、戦場では致命的な隙／タイムラグに繋がる。

練習なしの一発勝負には危険な武装だ。OSに搭載された誤差修正機能があっても、それを過信しすぎるのは問題だ。クーゴは大きく息を吐く。

『OSにも改良の余地あり、か。リアルタイムで、できるだけやってみよう』

『剣道のコンバットパターン、もう少し多く集めなきゃダメだな』

『でも、ハガネ少……中尉の動きは、演劇などで使われる殺陣も取り入れているみたいですよっ。』

『そっちは役者の動きを取り込むしかなさそうですね。日本の時代劇を分析する必要があります』

不意に、アニエス、ジン、アウル、サヤたちの声が聞こえた。

彼らは真剣に、改善策の検討をしている。

『とりあえず、現時点で改良できる範囲はここまでかな？』

「――ハガネ中尉。現時点で改良したデータを送ります」

どこか遠くで響いていたアニエスの声が、急に鮮明に響きだした。

「もうできたのか!？」

「急ごしらえの突貫工事ですけどね」

通信の向うから、アニエスの照れたような声が聞こえた。アニエスたち4人組は、その場でOSの改良を行ったという。ノーヴルの言うとおり、若いが優秀な宇宙技師たちだ。

試しにもう一度、20mの刀身を振るってみる。今度は、体勢はふらつきにくくなった。先程と比べれば、かなり楽に振るうことができる。しばらく振るい続けられれば、いずれ慣れるだろう。

しばらく刀を振るっていたら、またOSが改良および更新されていた。

あまりの速さに、ビリーやエイフマンが感嘆の声を漏らしていた。通信機越しから伝わってくる。若き技術者たちは、年上の同業者から褒められたことが嬉しいらしい。

そんな彼らに対して、ノーヴルは厳しい様子で苦言を呈している。彼女の指摘に、若者たちは緩んでいた表情を引き締め、再びOSの更新のためデータを打ち込んでいく。

彼らの様子に火がついたのだろう。ビリーやエイフマンも、一緒になってOSの改良を行い始めた。酷く真剣な面持ちで端末と睨めっこする技術者たちの姿が『視えた』気がして、クーゴは知らず知らずのうちに操縦桿を握り締めていた。

（これだけのバックアップがあるんだ。ますます、無様な真似は晒せないぞ……!）

『しつかりやれよ、クーゴ』

不意に、グラハムの声が聞こえてきた。見れば、端末と睨めっこしている面々とは違い、グラハムは観客席からじつとクーゴを見上げている。

彼の口元には不敵な笑み。「キミができないはずがない」と、翠緑の瞳が挑戦的に細められていた。クーゴもつられて微笑み返す。

砲撃の照準がクーゴとフラッグを捉える。それへ向かって、クーゴはガーベラストレートを振るったのだった。

*

「——よし、今日はこれくらいにしよう。帰投してくれ」
「了解」

ビリーの終了宣言に、クーゴは大きく息を吐いた。今日は最長の150mに挑戦することはできなかったが、最大長さは50mまで扱えるようになった。

OSの適宜改良もそうだが、クーゴの慣れもある。あまり欲張っても、一朝一夕で結果が出せるわけではないのだ。

分厚い雲の間から、ぽつぽつと雫が落ちてくる。雨脚はすぐに強くなり、遠くからは雷鳴が聞こえてきた。

(MDの機動実験は、まだやってるみたいだな)

隣に仕切られた区画では、PMCトラストから提供されたMD3種——ビルゴ、トールラス、ファルシアの性能テストが行われている。

こちらは、まだまだ時間がかかるらしい。それを一瞥し、クーゴはフラッグの操縦桿を動かす。格納庫へ帰還しようとした矢先だった。

視界の端に、ビルゴが映った。黒い雲の間に、雷の光が瞬く。白い閃光は、ビルゴのカメラアイ付近に反射してぎらりと揺らいだ。

『——クーゴ・ハガネ』

声がした。機械の合成音声だった。

『これより、対象の殲滅を開始する』

物々しい単語に、クーゴは振り返った。己の感情を投影されたフラッグも、MDたちをテストしている区画の方を向いた。

空中戦のテストをしていた機体が目に入る。——次の瞬間、その機体たちからの攻撃／砲撃の雨あられが降り注いだ！



「ファルシアが、MDで出てきたか」

端末に出てきた情報を見つめて、ノブレスは苦い表情を浮かべた。

自分が開発に関わった機体のデータ。昔、別の人間に奪われた研究資料の1つである。それを魔改造された挙句、こんな形で利用されることになるとは。

犯人は分かっている。しかし、その相手はもう、この世にいない。資料を奪った張本人どもは、寿命という名の死神によって、遠い場所に連れていかれてしまった。

残っているのは、その資料を託された人間だけである。もとい、『奪った張本人から手渡された機体データを悪用した人間』とも言えた。

「機体性能テストは、各地でも行われているらしいが……む」

ユニオン軍の演習場が赤く点滅している。そこには、MDたちに襲われるカスタムフラッグが映し出されていた。

この映像はリアルタイムである。ジャーナリストのセキ・レイ・シロエは、この映像を見てアップを始めている頃だろう。

(MDに使われたAIのデータに、S・Dの技術——特に、青い星の「母親」に絡むものが使われていましたからね。当然のことです)

AIには、『同胞』を殺すことに特化したプログラムが搭載されている。『同胞』の因子を持つ者を視認すれば、その排除のために動く。何よりも、それを優先するように組まれているのだ。本当に危険極まらない。

丁度、ユニオンの軍事演習場には、『同胞』の因子を持つ人間がいた。しかも、その人物はフラッグに搭乗していた。結果、演習中のMDたちが演習を終えたカスタムフラッグに襲い掛かっているのだ。

AEUや人革連では一切反応していない。投入されたMDは、何の異常もなく運営されている。異常が発生しているのは、付近にいた人間が『同胞』の因子を持っていたユニオン軍だけである。

ユニオンは、今回の一件でMD導入計画が遅れるだろう。その脇で、AEUと人革連はMDを試験的に導入することを承認する。

近々行われるであろう『大規模な作戦』に、大きな影響が出ることには間違いない。

そうして、その『大規模な作戦』が、ノブレスの教え子たちの初陣なのだ。

「な、なんなのよコイツら!」

「うおおおお!! ああ青いガンダム、背中の翼からビーム撃ってきたぞ!」

「ミハエル、ネーナ! 気を付けろ、奴らのコンビネーション攻撃は脅威だ……!」

件の教え子たち——もとい、チーム・トリニティたちは、今日も今日としてシュミレーターに挑んでいる。

相手は自由と正義の名を冠したガンダム。遺伝子改造を受けた人間——コーディネーターが駆る機体だ。特に自由の名を冠する機体には、ドラグーン・システムという武装が搭載されている。数の攻撃端末を、量子通信による無線誘導で同時に制御しオールレンジ攻撃を行う兵装のことを指す。

各攻撃端末はドラグーンと呼ばれており、個々にビーム砲と多数の推進・姿勢制御用スラスターを備え、高い攻撃力と機動力を持っているのだ。先程教え子たちが悲鳴を上げた攻撃は、ドラグーン・フルバースト。文字通り、各攻撃端末の最大出力でオールレンジ攻撃を行うのだ。やられる側からしてみれば、たまったものではない。

トリニティたちの連携攻撃を乱すには、充分すぎる威力を誇る。おまけに、自由を冠する機体の隣には、友の背を守るかのように、正義を冠したガンダムが並ぶ。パイロット同士の能力もさることながら、彼らの絆もトリニティ兄妹に負けていない。そして何より、彼らは軍属だ。経験も、敵の方が上である。

(それでも、立ち向かわなくてはいけないときがあります)

ノブレスは、教え子たちを静かに見守った。

来るべきとき、その経験が、彼らを生かすことに繋がるようにと願いながら。



「ぐ……！」

降り注ぐレーザーの光を縫うようにして、クーゴは攻撃を躲した。一歩間違えれば直撃していたが、今まで以上に素早く回避することができたような気がする。

OSが更新されている。観客席を見れば、異常事態を察知した面々がクーゴのフラッグを見上げていた。その中で、アニエスたちは一心不乱に端末にデータを打ち込んでいく。

兵士たちからの避難要請にも、ノーヴルたちは逃げようとしなない。技術者として、彼女たちは最後まで『戦う』ことを選んだようだ。またOSが更新される。

彼らの姿に感銘を受けたエイフマンとビリーも顔を見合わせ、頷いた。アニエスたちの隣に並び、適宜アドバイスとデータ入力をサポートし始める。

グラハムは端末を起動させ、誰かと何かを話していた。おそらく、上層部たちに対して、この状況を鎮圧するための出撃許可を求めているのだろう。

「だったら尚更、逃げるわけにはいかないな……！」

この場に残って戦っている人間たちがいる。その最前線に立っているのがクーゴなのだ。自分が倒れば、後ろにいる技術班に危険が及ぶ。

暴走しているMDは18機。ビルゴ9体、トーラス5体、ファルシア4体の内訳であり、PMCトラストから提供されたすべてのMDである。何の前触れもなく、MDたちはクーゴの乗るフラッグに向かって攻撃を仕掛けてきた。MDが止まる様子はない。

上が損害で嘆きを叫びそうだが、人命がかかっている。そして何より、クーゴ自身も死にたくない。降り注ぐ攻撃を回避しつつ、クーゴは腰からガーベラストレットを引き抜いた。そのまま、ビーム攻撃を真っ二つに叩き切る。

なんとか接近戦に持ち込みたいが、MDたちの攻撃は遠距離戦闘が主体である。ならばこちらもライフルで対応すればいい。しかし、ビ

ルゴ部隊が前線に出てプラネエイトデیفエンサーを展開してしまうのだ。プラネエイトデیفエンサーは、ビーム系の攻撃を無力化してしまう兵装。故に、ライフルに対して高いアドバンテージがある。プラネエイトデیفエンサーにも『対応範囲が限られている』という弱点が存在しているものの、それをカバーするために、ビルゴは3体1組の部隊を組んで行動するようにプログラムされていた。その防御兵装を打ち破るには、ビーム兵器ではない攻撃を叩きこむ必要がある。

クーゴの持ちうる武器でそれに対応できるのは、ガーベラストレートだけだ。しかし、15mでは相手に届かない。

「相手の懐に潜り込めないなら……」

クーゴはガーベラストレートを水平に構える。15mの長さを、一気に3倍の45mに伸ばした。

改良されたOSとクーゴの慣れもあり、初めて振るつたときのように『振り回される』ような感覚も、軸がぶれることもない。

「——これで、どうだあ！」

即座に突きของ構えを取り、フラッグは勢いよくビルゴに突っ込んだ！ 宇宙を漂っていた特殊金属で構成された刃は、ビルゴの装甲を穿つ！

食い込んだ装甲を薙ぎ払えば、傍にいたビルゴたちを一気に巻き込んで切断した。文字通りの一刀両断、あるいは真つ二つという言葉が相応しい。

引きちぎられたMSたちが爆発を起こす。フラッグは即座に刀を振るつた。ビルゴ部隊の後ろにいたファルシアの脚を切断する。AIの受信装置を壊されたMDは、そのまま地面に叩き付けられ爆発した。

思い切り刀を振りかぶれば、その余波で白のトールラスが弾き飛ばさ

れた。別の機体に直撃し、派手に爆ぜる。

勢いそのまま、ガーベラストレートを一閃。攻撃してきたビルゴを、ビーム攻撃ごと真つ二つに切断した。

次の敵はどこだ。振り向きざまに、クーゴがそんなことを考えたときだった。

『——シグナル、タイプ・グリーン完全なる防壁、タイプ・イエロー過激なる爆撃手、タイプ・レッド思念増幅師覚醒個体と判明。各種、1体づつ。目標視認』

聞こえる。

機械の無機質な合成音声／仇敵を発見したことを告げる声だ。

『——シグナル、タイプ・ブルー荒ぶる青覚醒個体と判明。数、2体。目標視認』

『殲滅対象の優先順位に変更有り』

『——対象を殲滅する』

ビルゴが、トールラスが、ファルシアが、客席の方向を向いた。視線の先には、リアルタイムでOS改良に取り組むアニエス、ジン、サヤ、アユル、ノーヴルの姿がある。

上層部から出撃許可を勝ち取ったグラハムが端末を切った。そのまま、格納庫に向かって走り出そう踵を返しかけ——彼は、何かに気づいたように立ち止まった。

MDが急加速した。向かう先は、客席。グラハムが、ハツとした顔でMDの方を向く。他の面々も、自分の迫る危機を察して顔を上げた。しかし、それ以上はもう、何もできない。

クーゴのフラッグは、突然マークを外されてしまったことに驚いたため、反応が遅れてしまった。なんてことだ、と悔やんでももう遅い。全機、ガーベラストレートの範囲外だ。

このまま、見送ることしかできないのか。彼らに牙をむこうとしているMDに対応する術はないのか。命が無慈悲に摘み取られていくその瞬間を、眺めていることしかできないというのか。

——いや、まだだ。まだ、方法がある！

「ッ、おおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

MSモードのフラッグを全速旋回させ、ガーベラストレートを水平に構える。刀身45mでは、有効範囲に届かない。

MDたちが客席に迫る。砲撃やビットに収束する光が放たれるまで、もう時間がない！

クーゴは躊躇うことなく、ガーベラストレートの長さを最大まで伸ばした。刀身150mの刃は、確実にMDたちを捉える！

斜め右上からの袈裟切りは、ビルゴ部隊を打ち首に処し、トーラスやファルシアたちを切り捨てた。切り裂かれたMDたちは、そのまま地面に落下する。

派手な爆音が響いた。振りかぶった勢いのまま、フラッグが体勢を崩す。

ぶつつけ本番とは、流石に無茶なことをした。軸がぶれ、文字通り刀に振り回される——!!

「ハガネ少佐あ!!」

アニエスの声があった。がくん、と、機体が揺れる。OSが更新されたようだ。振り回されかけていたフラッグの体勢が、ほんの少しだけ持ち直した。

即座にクーゴは操縦桿を動かした。ガーベラストレートの風切音が響く。ふらついていたフラッグは、どうにか体勢を元に戻すことができた。

「無事か!？」

「こちらは問題ない！」

「MDは!？」

「全機沈黙！ 見事な対応だ！」

クーゴの問いに、グラハムがいい笑顔で答える。他の面々も、感嘆の表情を浮かべていた。

アニエスたちは惜しみない拍手をくれたし、ビリーとエイフマンはやり遂げたと言いたげな笑みを浮かべている。

安堵の息を吐いたクーゴは、そのままコックピット席に体を沈めた。ガーベラストレートの長さを15mに戻し、鞆に納める。

眼下に転がるのはMDの残骸たちだ。自立回路が組まれたMDに、何が起こったというのだろう。AIの不調と片付けるには生ぬるい。

いつの間にか、雨が止んでいた。曇天はいつの間にか去っており、気持ちの良いくらい青空が広がっている。気のせいか、虹がかかっているようにも見えた。

天気予報で「雨が上がれば、しばらくは晴れ間が広がる」と言っていたことを思い出す。本当に、先程までの天気が嘘みたいだ。

「クーゴ！」

「了解！ 今から帰投する」

ビリーに名前を呼ばれて、クーゴは満面の笑みを浮かべて答える。帰るべき場所へ向かって、操縦桿を動かしたのだった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

33. 憧憬—あこがれ—

MD暴走事件から1週間が経過したが、ユニオン政府はMDを導入しようとしている様子だった。AEUや人革連がMD導入計画を本格的に進めているためである。

ユニオンだけ導入を見送るなんてことになれば、他国に大きく出遅れてしまうと踏んだのだろう。MDに殺されかけたクーゴにしてみれば、腹立たしいことこの上ない。

「結局、PMC側からの回答は『原因不明』のままみたいだね」
「まったくだ」

ビリーの言葉に、グラハムがうんうん頷いた。彼らもまた、MDによって危うく殺されかけた人間の1人である。

PMC曰く、『起動テスト直前では何の異常もなかった』という。では、どうして、MDたちはクーゴや観客席にいた面々に襲い掛かってきたのだろうか。タチの悪い誤作動でなければ、あんなとんでもない事件など起きないはずだ。

一応原因究明はしてくれるらしい。正直、クーゴは期待していない。異常がないと言い張り、奴らはまた同じMDをユニオン軍に届ける予感がしてならないのだ。異常が発生して使えなくなればいいと願ったが、後者は叶わなさそうだった。

クーゴは深々と息を吐き、端末のニュースを眺めていた。丁度、ニュースではMDの暴走事故が取り沙汰されている。セキ・レイ・シロエが、MDの異常に関する話をしていた。危ない橋を渡りすぎている。ないだろうかと不安になる程、今日は苛烈にシロエ節を利かせている。

『しかも、事故発生時に演習場に居合わせた人間の大半が、共有者コウサアレンドターもしくは虚憶きよわく保持者なんです。この能力を持つ人間に対して、MDが襲い掛かったと考えられるのではないのでしょうか？』

熱弁を振るうシロエの言葉に、クーゴはふと目を瞬かせた。彼の発言が正しいなら、あの演習場にはクーゴとグラハム以外のコーヴァレンター能力や虚憶きよわく持ちがいたということになる。

もしかして、あの場に居合わせた共コトヴァレンター有者や虚憶きよわく持ちは、『悪の組織』の技術者であるノーヴルやアニエスたちなのだろうか。だとしたら、アニエスたちがしきりにクーゴを少佐と呼ぶ理由として充分だ。

正直、クーゴもアニエスたちを見ると懐かしい気持ちになる。実際に、虚憶きよわくの中で交友を重ねる光景があるのだ。共に戦いながら、若者たちの成長を見守っていた。

虚憶きよわくの中の自分は30代になっており、もうすぐアラフオーと言っても差支えないオッサンになっていた。アニエスとよく似た青年の成長に、微笑ましさを感じたものである。

アニエス、ジン、サヤ、アユルが仲良く並んでいる背中を見ると、時折だが、泣きたくなることがあった。〃今度こそ、一緒に並んでいられるんだな〃と。まるで、前回はバラバラになってしまった光景を『知っている』かのように。

滅びの運命に挑み続けた、気高き挑戦者たち。2つの側面から命を補完し、世界の均衡を守るため、すべてを消そうとした神に挑んだ勇敢な若者たちの姿が『視える』。

(滅びの可能性を超えた、アルティメット・クロス究極の混成部隊)

可能性が集った先に、仲間たちと笑いあう未来があった。
クーゴはそれを『知っている』。

「そういえば、近々大規模な人事が行われるらしいな」

クーゴが思考回路を張り巡らせようとしたとき、思い出したようにグラハムが言った。クーゴは首を傾げる。

「なんで伝聞調なんだ？」

「正式に下されたものではないからな。先程、上層部が話をしているのを小耳に挟んだだけだ」

グラハムはコーヒーマグの入った紙コップを片手に、近くにあった休憩所のソファへと腰かけた。クーゴとビリーもそれに続くような形で、ソファへと体を沈めた。

窓から見上げた空は快晴。目に痛くなるような青と、辟易しなくなるほど明るい太陽光だ。窓越しから見てもちよつと辛い。サンングラスでも購入しようか、なんて考えた。

端末が鳴り響く。何事かと確認すれば、差出人は『エトワール』——もとい、イデアからのものだった。

何の注意もせず、何の気もなしに、データを開いたのがまずかった。端末画面いっぱいに表示された画像データを目にしたとき、頭の奥が焼けつくような痛みを感じた。

青く輝く、渚の太陽。何て眩しいのだろう。グラデーションで分けられた地平線が栄える。言っている意味が分からないと思うが、クーゴの頭の中もパニック中である。

（『只今、バカンス中』……）

水着だった。いつぞや送られてきた画像と同じ、青と水色のグラデーションが綺麗な水着。

網膜が焼き切れるのではないかという勢いで、クーゴの平静を破壊してきた格好である。

手から端末がずり落ちかけたが、反射でそれを掴んだ。その影響か、画面が勢いよくスクロールした。

『今度のオフ会の日取りが、丁度、近所で夏祭りが行われるんです。日本では、夏祭りは浴衣で参加するものだと言いました。是非とも着てみたいのですが、私たちではちよつとわからなくて……』

アイデアの水着姿が焼き付いて離れてくれない。どうかそれを振り払った後、クーゴはメールの文面を確認する。

水着の画像の下には、浴衣の話についてのメッセージが添えられていた。桜の木の下には死体が埋まっていた的なノリである。

思考回路がショート寸前のクーゴの耳は、グラハムの端末が鳴り響いた音を拾い上げていた。メッセージを見て、「夏祭りか」と零した声も。

「いいなあ。キミたちは、絶好調なんだね」

羨むような声がした。見れば、ビリーがどこか遠いところを眺めている。

彼の持っていた端末に表示されているのは、ガンダムのデータだけだ。

意中の相手であるリーサ・クジヨウからは何も来ていない。相変わらず、高嶺の花は多忙で捕まえられない様子だった。

彼の心が『見える』。人の幸せを喜びたいが、自分の不運さを呪わずにはいられないのだろう。

今のビリーには、なんて言葉をかけてやればいいのか。いい言葉はまったく思い浮かばない。むしろ、悪い方向に進みそうな気がした。

(今度、ドーナッツでも作って差し入れるか)

彼がしょっちゅう食べているような、油でテカリ輝くようなものは体に悪い。材料に米粉や豆乳、おからなどを使ったり、味付けに野菜や果物のジャム、きな粉や黒胡麻等を使ったり、調理法で油を使わず焼き上げる方法を取ったり、工夫する方法はいくらでもある。

そういうものなら、ビリーがやけ食いしても問題ないだろう。以前、野菜のジャムを振る舞ったとき、「美味しいジャムだね。色も綺麗

だ。何を使ったんだい？」と尋ねられたことがある。野菜を使ったと言ったら、目を白黒させていた。

確か、パプリカやトマト、人参を使ったジャムが好評だったか。それを中心にして作ってみよう——なんてことを考える。

そちらはいいとして、問題はアイデアたちとのオフ会だ。浴衣、という言葉を小声で呟く。

確か、京都で着物専門店を営む親戚（グラハムが陣羽織を購入した店だ）の伯母に当たる人が東京に出店していた。

そこなら種類も豊富だし、レンタルや着付けもやっているはずだ。早速交渉してみれば、伯母は快くOKしてくれた。

クーゴは早速端末を操作し、アイデアにメッセージを送る。どうしても知らないけれど、ニマニマ笑う彼女の顔が見えたような気がした。

「そういえばクーゴ。キミの親戚に——」

「問題ないぞグラハム。許可は得た」

「おお！ 仕事が早いな、キミは！」



アイデアはニマニマ笑いながら、端末を眺めていた。メールに添付されていたのは、ユニオンの軍服に身を包んだクーゴ・ハガネの写真画像である。

メールの下には、メッセージが添付されている。先程、アイデアが送信した『オフ会という名の夏祭り漫遊（デート）』のお誘いに対する答えだ。

『親戚が経営している専門店があり、その支店が東京にある。そこな

ら種類も豊富だし、レンタルや着付けもやっているから、多分大丈夫だ』

言質は取ったも同然。これで、実質的なデートである。相手に対しては、それをおくびにも見せるつもりはないのだが。

刹那のほうも同じようなことになるだろう。帰ってきた彼女が、グラハムからの返信を見た反応が楽しみである。

イデアは鼻歌を歌いながら端末を片付けた。嬉しすぎて、足が勝手にステップを踏み始める。

画像のお返しに何を送ればいいのかわからないから、と、クーゴは自分の制服姿の写真を送ってきた。

「軍服に着られている感がある」と本人は語っているが、十分に似合っている。凜とした佇まいが印象的であった。

(この人には、青や空色が似合うなあ)

クーゴの軍服画像を端末で確認しながら、イデアはプールサイドに腰かけた。

現在、イデアたちソレスタルビーイングは、王留美ワシリユーミンの所有する別荘で休暇を取っている最中だ。

いつぞやスメラギたちがバカンスを楽しんだ別荘とはまた違う。流石は世界有数の資産家、王家ワン。保有する別荘の数も桁違いである。

同じ国にある別荘であっても、地域が違えば気候も違うのだ。王家ワンはそこまでこだわって、各地に別荘を構えていた。

金持ちのスケールは総じて大きいようだ。

一般庶民のイデアからは、あまり考えられない。

「ナノマシンの普及によって、宇宙生活における人類の悪影響は激減した。……なのに、精神衛生上の観点から、地上へ降りる必要があるなんて」

留美は、隣で日光浴をするスメラギに話しかけた。

人間という種の未熟さ／限界に対して、何か思うところがあるらしい。

スメラギは青空を見つめながら、彼女の言葉に応える。

「人間がコロニー以外の宇宙で暮らすには、まだまだ時間がかかるわ」「スメラギさんは、人類が宇宙に進出するのがお嫌い？」

「私たちはまだまだ未成熟な生命体よ。……でも、それも悪くないわ。重力下で飲むお酒は格別ですもの」

スメラギはそう言いながら、ワイングラスを手に取った。示すようにしてワイングラスを揺らせば、赤ワインがゆるく渦を巻いた。

「そうですね。地球は、人を含んだすべての命が生まれた場所。母なる惑星ですから」

アイデアはくるりと振り返り、スメラギと留美に向き直る。

まさかアイデアが話に乗ってこくとは思っていなかった2人は、目を瞬かせながらこちらを見返す。

アイデアは思い出すように目を閉じる。青い星へ帰りたいと願った、『同胞』たちの長い旅路。

『「見たこともなければ行ったことのない惑星なのに、どうしてそこへ帰りたいと強く願ったのだろう」と、初代の指導者が零していた』とは、グラン・マが言っていた話である。

青い星が樂園であると思っていたのは、彼が見出した女神が持つ青い星のイメージを『視た』からだ。だから、『同胞』たちにとって、青い星という存在は重要な意味を持っていたのだろう。

命が生まれた青い星。人間と『同胞』、すべての命が生まれた場所。たとえ宇宙に進出し放浪せざるを得なくとも、宇宙のコロニーで一生を終えることになるうとも、誰もが青い星へ行くことを夢見ていた。夢見ながら、死んでいった。

それと同じなのだ。

誰もが、人類の生まれ故郷である地球に憧れ、魅せられ続ける。

「たとえ宇宙に進出して、地球への愛着と憧憬は無くならないと思いますよ。……地球を知らぬまま生まれ育ち、死に絶えることが『当たり前』の時代になっても」

噛みしめるように呟いたアイデアの言葉に、スメラギは考え込むように俯いた。

懐かしい相手を思い出すように、彼女はゆるりと目を閉じる。

「昔、誰かが言っていたの。『人類は、地球と重力に縛られたがっているのかもしれない』って」

そうして、スメラギはワインを呷った。1杯目を優雅に飲み干し、2杯目をグラスに注ぐ。

「昼酒は体に毒でしてよ？」

言葉は咎めるものであるが、留美リュウミンの表情は微笑を浮かべている。

スメラギは苦笑いを浮かべながら、弁明するように肩をすくめた。

「止めたくても止められない。まさに未成熟」

スメラギはまた、ワインを呷り始めた。これ以上触れないでほしいと言うかのような気配を感じ取り、アイデアはゆるりと微笑んで、スメラギたちから離れる。

次に腰かけた場所は、クリステイナとリヒテンダールが話している方のプールサイドだ。他にもラッセやフェルトもいるが、2人はそれぞれ自分のことに没頭している。

ラッセは筋トレに勤しんでいた。フェルトは地上で本物の花を見

たのが初めてのため、ハロを解説役にして、花をまじまじと観察していた。

「バラは赤や白以外にもあるんだ……。前にロックオンがくれた花束は白いバラだったし、この前のやつは赤いバラだったから、わからなかった」

『イロイロアル、イロイロアル』

「でも、ロックオン、顔が真っ赤だったなあ。どうしてだろう?」

『ハナコトバ、ハナコトバ』

「花言葉?」

フェルトはこてんと首を傾げる。フェルトとハロの会話を聞いて、アイデアの頬が緩んだ。

ロックオンも、じりじりとフェルトとの距離を縮めているらしい。後で根掘り葉掘りしよう。

故郷の街にいろであらうロックオンが、悪寒を感じて首をきよろきよろさせている姿が『視えた』ような気がした。寒気が止まらなくて悩んでいる様子だった。

アイデアはゆっくりと、クリステイナとリヒテンドールに視線を向ける。「四六始終べたべたしてたら——」の先の言葉を、リヒテンドールは飲み込んでしまった。

「四六始終べたべたしていたら気持ち悪い」という言葉とは裏腹に、クリステイナとキャツキャウフフしたいという願望をひっそり抱えながら生きているリヒテンドール。いい獲物だ。

ちよつと泣き出してしまいそうな顔。アイデアに根掘り葉掘りされることに対して、恐怖を抱いている。そんなリヒテンドールの変化に、クリステイナが首を傾げた。何も知らないというのは罪深い。

「ところで、クリステイナは? いい人見つかった?」

敢えて、リヒテンドール本人ではなく、彼が恋してやまないクリス

ティナに話題を振る。

挙動不審になったリヒテンダールに対し、何も知らないクリステイナはうーむと考え込む動作をした。そうして、深々と息を吐いた。

「これがないんだよなあ」と噛みしめるようにして語る彼女に、リヒテンダールは打ちのめされたかのように肩を落とす。

「もしかして、荒れてる?」

「そうなんだよねー。お気に入りの歌手が、突然、次のイベントを最後に、無期限の活動停止を宣言したから」

クリステイナはげんなりした表情で端末を示した。今をときめく人気歌手、テオ・マイヤーの歌手活動停止に関するニュースが報じられている。

理由は不明。先日のライブでいきなり発表されたことだった。あまりにも突然だったために、ファンの1人が卒倒して病院に運び込まれたという。

画面には、赤い髪を束ねた少女が愕然とした表情を浮かべて崩れ落ちた映像が映し出されていた。彼女の関係者らしい2人の男性が慌てた様子も。

蛇足だが、その事件が終わった後、テオ・マイヤーは倒れたファンの少女のお見舞いに行ったらしい。熱愛かと噂されているが、本人が表舞台から雲隠れしたため詳細は不明だ。

「で、イデアは?」

「そうっすよ! 他人の恋愛に介入するんすもん。自分の恋愛についてはどうなんすか?」

クリステイナが、好奇心を滲ませた瞳でイデアを見てきた。それに乗っかるような形で、リヒテンダールも興味津々にこちらを見返す。

これなら自分も優位に立てるかもしれない——リヒテンダールは確信したようで、珍しく強気な表情を浮かべていた。

アイデアは満面の笑みを浮かべて端末を操作する。正直、先程添付されてきた画像を自慢したいのだが、それをやったら、今の空気がぶち壊しになってしまうだろう。

機密漏洩だ何だと大騒ぎになることは間違いない。それ以外の画像データは、待ち受け画面に設定されている1枚のみだ。

待ち受け画像を見て、アイデアはますます笑みを深める。以前日本で再放送されていた300年前の時代劇宜しく、アイデアは端末を示した。

とても誇らしい気分だった。

誰かに自慢したいと常々思っていた。

やっとその機会が来たのだ。

「」

クリステイナとリヒテンダールが凍り付く。そうして、次の瞬間、

「う、うわああああああああああああああああああああ!!」

「きゃああああああああああああああああああああ!!」

2人は悲鳴を上げて、プールの中へと真つ逆さま。

派手な水しぶきが上がった。何事かと、仲間たちが振り返る。

「う、うおおおおおおおおおおおおおおおお!!?」

「——ひっ!!」

『ゾンビ! ゾンビ!』

「何!? ゾンビ!? バイオハザード!」

「嫌あああああああああああああああ!」

端末に映った画像を見たラッセ、フェルト、ハ口、留美^{リユウミン}が、悲鳴を上げてひっくり返った。

アルコールの入っていたスメラギは、酔いのせいか、周囲をきよろ

きよる確認している。

椅子の陰に隠れながら、留美リユーミンはアイデアを睨みつけた。涙目のため、迫力はいまいちだが。

「貴女、あの画像、本当に待ち受けにしたの!?!」

「えへへ」

「そこは照れるべき場面ではありませんわよ!? って、そんな恐怖画像をまじまじと見せつけないで!!」

周囲は阿鼻叫喚と化している。そんなに逃げるほど、恐ろしい画像だろうか?

アイデアは口元を尖らせ、端末へと視線を向けた。待ち受け画面に映し出されていたのは、4徹明けのクーゴ・ハガネだ。

刹那が悲鳴を上げて端末を投げ、ロックオン、紅龍ホンロン、留美リユーミンが端末を投げ合う原因を作った画像である。

4人が口をそろえて「恐怖画像」と称するそれが、アイデアの端末の待ち受け画面であった。皆は怯えるけれど、アイデアは何時間でも見ていられる。

プールに沈んだクリステイナとリヒテンダールが仰向けで浮かんできた。両名とも、顔を覆い隠して体を震わせている。

ラッセは腰を抜かしたままだし、フェルトはへたり込んで頭を抱えている。突如フェルトに投げられたハ口は、プールの水面に浮かんでいた。

何もなかったことに気づいたスメラギは、安堵のため息について酒を呷った。留美リユーミンはがっくりと肩を落としていた。

(……まあ、いいか)

アイデアは端末を閉じて、オフ会へと思いを馳せたのだった。

◇

ネーナ・トリニティの様子がおかしい。

先月、彼女はテオ・マイヤーのコンサートに参加していた。彼の生歌を聴いた彼女は、次のコンサートのチケットを購入していた。

ネーナが萎れてしまう原因は、先週のコンサートにあった。そこで、突如、テオ・マイヤーが「次のイベント活動以後、無期限の活動停止」を発表したのだ。

それを聞いた彼女はそのまま卒倒してしまった。後でテオ・マイヤー本人が謝罪したのだが、そのときは顔を赤らめてあわあわしていた。

シユミレーターとの戦果および成績には異常なし。ただ、なんだか元気がなくなってしまったように思う。

周囲に人がいるときは、比較的明るく振る舞っている様子だった。しかし、本当に時折、心ここにあらずとも言うように虚空を眺めていることがある。

(一体、何がどうしたんでしょうか……)

思い当たる理由が何もなく、ノブレスは首を傾げる。件の教え子は、自由時間にCDを聴いていた。

アーティストはテオ・マイヤー、曲名は『Terra』——還るべき青き惑星——だ。

外の音すべてをシャットダウンするかのようになり、ネーナは目を閉じていた。表情は頬が緩んでいる。

初めて彼女たち——トリニティ兄妹と顔を合わせたとき、苛烈で攻撃的な子たちだと思っていた。

他者が幸せそうにしていることが許せない。でも、それ以上に、自分が幸せを知らないことと、幸せになれないことが嫌で仕方がない。幸せになりたいという欲求が、他社への攻撃性、もとい八つ当たり

でしか表現できない『獣』だ。意図的に生み出された、悪意の被害者たち。

「教官」

名前を呼ばれた。

振り返れば、子どもたちと遊び終えたヨハンとミハエル。2人とも沢山走り回っていたためか、汗をびっしょりかいていた。

タオルと飲み物を手渡してやれば、2人は礼を言っ受けて取る。汗を拭き、水分を補給した後、彼らはノブレスを神妙な眼差しで見つめてきた。

「どうした？」

「教官の好きな女性のタイプって、どんなんだ？」

口火を切ったのはミハエルであった。

ノブレスの思考回路がフリーズする。

慌てた様子で、ヨハンがミハエルを嗜めた。

「いや、教官も適齢期ですから……そういう話もあるのかな、と……」

ヨハンがあわあわしながら何か弁明を繰り返しているが、ノブレスにはその言葉を聞き取ることができなかつた。

思い出すのは友人の言葉だ。婚活という単語を連呼してきた1人の少女が浮かんでは消える。

隣に住んでいた少年に至っては、「結婚相手どころか恋人すらいない人が云々」とカウンターしてきた。

つまり、彼らは。

彼女や彼と同じようなことを。

ノブレスに問いかけてきたということか。

(ついに、この子たちまでそう言うようになったのか――)

ノブレスは笑ってしまった。

面白いから笑ったのではない。哀しすぎて笑ってしまったのだ。むしろ、それしかできそうになかった。

「きよ、教官!?!」

「大丈夫ですか!?!」

「何!?! 泣いてるの!?! 泣かせたの!?!」

後からよく考えれば、この3兄妹は一言もノブレスの傷をえぐるような発言をしていなかったのだが。

些細な言葉から勝手にトラウマを引き起こした今のノブレスは、平静でいられなかったのである。



夏祭り会場は、人でにぎわっている。露店が並び、様々な出店や催し物が行われていた。

ステージの方では歌手が舞台上で歌ったり、漫才師や手品師が芸を披露したり、夏祭りの実行委員が主役となって様々なゲームが行われるという。

現在、ステージではテオ・マイヤーが自分の持ち歌を披露していた。この歌手は、今回のイベント参加を最後に無期限の活動休止宣言をしている。

そのため、彼の活躍を拝むために、多くのファンでごった返していた。皆浴衣に身を包んでいる。特に、最前列にいる赤い髪の少女が、

一際気合を入れて声援を送っていた。

(そういえばあの女の子、ニュースで映ってたな)

彼女の脇を固める青年2人も、浴衣に身を包んでテオ・マイヤーの活躍を見守っている。

テオ・マイヤーは、男女からも人気だ。男性ファンがここにいることは何らおかしくない。

「クーゴさん、どこ見ているんですか」

少し不機嫌な声が聞こえてきた。振り返れば、年甲斐もなく頬を膨らませるイデアの姿があった。パールグリーンの髪を簪でお団子にまとめ、濃淡の綺麗な青い生地在白でアネモネの花が描かれた浴衣を身に纏っている。簪は、以前クーゴが贈った桜の簪である。

格好からして涼しげな装いだ。昼間、親戚が見繕ってくれたレンタル浴衣は伊達じゃない。流石はプロだ、と、クーゴは親戚に喝采を送った。心の中で。やたらと「くーちゃんか女子を連れてきた！これは本気を出さざるを得まい!!」とはしゃいでいたのが気になるが。

ちなみに、クーゴは作務衣さむいと呼ばれる服を着ている。甚平とよく似た洋服であるが、甚平よりも生地が丈夫だ。甚平は半ズボンであるが、作務衣は長ズボンを穿く。主な使用用途は、部屋着や職人が着るような作業着だ。色は、どこまでも深い紺色である。

「催し物をな。今年の夏祭りは、例年と比べて派手だし」

「京都のお祭りも見てみたいですねえ」

「祇園祭とか、風祭りとか、長岡天神の夏祭りとか、宇治川や嵐山の鶺鴒こりとかか」

「見たことあるんですか?」

「まあな。休暇を取ると、丁度その時期に当たるから。あまり家にはたかないから、わざとそっち方面見て回ってる」

「クーゴさん……」

アイデアの表情が曇る。

彼女にそんな顔をさせるのは、本意ではない。

「家はあまり好きじゃないけど、故郷は好きだよ。帰るとほっとする」「やっぱり、故郷っていいものですよねー」

クーゴがしみじみと呟けば、アイデアがのほほんと笑った。彼女の手には、先程屋台で購入したリング飴が握りしめられている。

小さいリングでも、赤い飴でコーティングされた丸々1個は手ごわい。ソースはクーゴの実体験だ。唇がコーティングされた飴の色に変色してしまったり、飴で口の中を切ったり、食べている間に顎が辛くなったりしたものである。

アイデアはリング飴を少しづつ咀嚼しては、「食べづらい」と難しそうなお顔をされた。彼女の唇は飴のせいで真っ赤に染まっている。口紅よりも鮮烈なシグナルレッドを見て、何とも言えない気持ちになった。逃げるように視線を逸らす。

視線を逸らした先には、浴衣に身を包んだ刹那と、作務衣を着たグラハムが輪投げに挑戦している姿が目に入った。

前者の浴衣は白地に青や青紫のなでしこや萩が描かれている。後者の作務衣は何も描かれていないシンプルな濃緑の生地である。

『キミは甚平を持っていただけだろう。着ないのか？』

『あー……。もうすぐ30代のオッサンが、人前で半ズボン穿くのは……。なんだかなあ、と』

『……。把握した。言われなければ気づかなかったのだが……。』

自前で持ってきた作務衣を着てきたクーゴを見たグラハムと、店で交わした会話を思い出した。

甚平を着るつもりだった彼の心境変化がどのようなものだったか、

察するに余りある。

それでも、作務衣は彼のお気に召したらしい。今着ている作務衣と一緒に、冬用のものもカードで購入していた。空軍エースの経済力を舐めてはいけない。

「クーゴさんの親戚の力も舐めちゃいけませんよね」

「ああ。よく言われる」

アイデアはくすくす笑っていた。クーゴもそれにつられて笑う。

「ところで、キミの故郷はどこなんだろう？」

「宇宙生まれなんです。民間団体が所有するコロニーで、地球に来たのは3歳の頃でした」

アイデアは懐かしむように目を細めた。

記憶を紐解くように、過去を辿るように、アイデアはゆっくりと言葉を紡ぐ。

「両親や弟や妹たちと初めて見た地球はとても綺麗で……あのときの光景は、今でも鮮明に覚えています」

「地球は青かった、ってやつかい？」

「ええ。あまりの美しさに、心が震えました。同時に思ったんです。ヒトがヒトである限り、誰もがこの星に愛着を持ち、憧憬を抱くんだと。そういう遺伝子が刻み込まれているのだと」

そう言って微笑んだアイデアの姿に、クーゴはどうしても目を離せなかった。目を逸らしたくてたまらないのに、ずっと彼女の姿を見たいとさえ思ってしまう。釘付け、とはこういうことを言うのだろう。

地球への憧憬。どこかで聞いたことのあるようなフレーズだ。そういえば、クーゴが読み進めている『Toward the Ter

r a』の『ミュウ』篇で、『ミュウ』たちが青い星テラに対する想いを語るシーンがあつたか。

すべての命が生まれた場所。母なる青い星テラ。人類と『ミュウ』の生まれ故郷。宇宙へ飛び出した者たちであっても、そこで生まれ育ち死んでいくことが当たり前であつても、誰もが憧れを抱く場所だつた。

アイデアの言葉が指すのは、多分、それと同じような想いだ。

漠然と、けれどはつきりと、クーゴは確信した。

「遺伝子に刻まれた想い、か」

思いを馳せるように、クーゴは空に視線を向けた。

どこからか、花火大会開始時間のお知らせが聞こえる。

それを聞いた人々が移動を始めた。グラハムと刹那も反応し、こちらを見返す。

「クーゴ」

「大丈夫だよ。穴場スポット、知ってるだろう？」

こつちだ、と、面々に手で合図した。4人揃って移動を始める。石段を登ってしばらく歩いた後、わき道にそれる。少しきつめの獣道を歩けば、小高い丘があつた。

開けた視界。街並みと空がすっかりと見える。花火大会開始の合図が遠くから響いた直後、色鮮やかな花火が夜空を彩つた。赤、青、緑、紫——様々な色が瞬いては消えていく。

刹那とアイデアは花火初体験らしく、きらきら目を輝かせながら空を見上げていた。炎が持つのは、人を焼き払う残忍さだけではない。誰かの心を照らし、震わせる優しさや美しさがあるのだ。

穏やかな気分で花火を見たのは久々である。

つい最近は、『花より団子』宜しく『花火よりも喧騒』みたいなことになつていたか。

虚憶きよわくの中のバカンスも、 \times は花火大会だつた。クーゴの知り合い

は、花火より大乱闘がお好きな様子だった。『刹那』の災難、フリーダムな『グラハム』、『グラハム』対『刹那』の家族たち——思い出すだけで気が遠くなる。

(でも、とても愛おしい)

クーゴはひっそりと頬を緩めた。

花火は鮮烈なまでに輝き、儚く消えていく。いつか、自分たちの過ごした時間も、この花火のように消える瞬間ときが来るのだろう。

それでも、今日見た景色の美しさは、心にしっかりと刻みつけられている。決して、忘れることはない。——何が起きても、決して。

空では美しい花が咲く。そうして、何も残さず消えていく。何度も、何度も、それを繰り返し続ける。

この場にいる誰もが、それを静かに見守っていた。その美しさを瞳に焼き付けていた。

もう一度見たいと呟いたのは、誰だったか。それは確かに、この場にいる全員の気持ちだった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

34. 楽しい職場です

「オーバーフラッグス？」

ハワードが首を傾げる。グラハムは大仰に頷いた。

「ああ。対ガンダム調査隊の正式名称だそうだ」

「そういえば、正式名称は追って名づけられる予定だと聞いてたな。やっと決まったのか」

グラハムの言葉に、クーゴは少しだけ遠い目をした。名前を決めるのに時間がかかるのはわかるが、ガンダムと対峙してからもう大分時間が過ぎている。

流石にちよつと遅すぎやしないだろうか。正直、部隊の正式名称に関する案件など、クーゴの頭の中からすっかり忘れ去られていた。

それを聞いたグラハムは肩をすくめた。曰く、「この部隊、表向きは『フラッグのみで編成された第8独立航空部隊』という扱いになる」という。

確かに、公に対して堂々と「ガンダム鹵獲を目的にします」なんて主張を前面に押し出すような名前や扱いにしたら、周辺から叩きのめされることは確実だろう。

周囲だけで済めばまだマシだ。もしかしたら、ガンダムご本人様が直々に叩きのめしにくる可能性だってあり得る。殲滅する気満々で、だ。

名づけ云々より、色々とごまかすための下準備もあつたのかもしれない。フラッグだらけの部隊なんて、どこぞに対して本気で戦争しに行くようにしか見えないだろう。実際、ガンダムに対して戦争を仕掛けるのだから、あながち間違いではないか。

(もしかして、グラハムが小耳に挟んだ『人事の話』は、オーバーフラッ

グス編成のためのものだったのか?)

ならば、時期もぴったりだし、大規模人事が行われることは領ける。それを知らないダリルが問いかけた。

「パイロットの補充はあるんですか?」

「だからこそ、ここにいます」

グラハムは不敵に笑った後、どこからか双眼鏡を取り出した。ワードにそれを手渡し、空を見上げる。

どこかで見たことあるタイプの双眼鏡だ。確か、A E Uの軍事演習で、グラハムが客からひったくったものと同型である。

……そういえば、グラハムはあの後、持ち主に双眼鏡を返却したのだろうか。当日が徹夜明けだったのと、大分前のことのため、記憶は既に朧げだ。

閑話休題。

ダリルが空を見上げる。ワードが双眼鏡を持ち、空を見上げた。クーゴも彼らと一緒に空を見上げる。

真つ青な空を飛ぶ、12機のフラッグ。しかも全員、ユニオン各基地の精鋭たちだ。

「よくもまあ、こんな凄まじい人事を敢行できたな」

フラッグのマーキングを確認しながら、クーゴは深々と息を吐いた。やはり、グラハムが小耳に挟んだ大きな人事とは、オーバーフラッグス編成のためだったらしい。

各基地の責任者は大変だったろう。問答無用でトップガンたちを引き抜かれるのだ。今後のことを考えると、編成やら人員補充やら後任育成やら、色々と大変だろう。

不意に、誰かが喜んでいるような気配を感じた。視線を動かせば、沖縄基地のマーキングが目に入る。沖縄のトップガンは、確か――ア

キラ・タケイ。

そういえば、アキラと顔を合わせるのは久しぶりのような気がする。最後に直接顔を会わせたのは、ガンダムが降り立つ前だった。

ガンダム降臨以後、ガンダム調査隊はバタバタしていた。他の基地の連中も、色々その余波を喰らったという話を思い出す。

「驚くのはまだ早い」

グラハムはもったいぶったように目を閉じた。言いたくてたまらない、と、横顔が訴えている。

「プロフェッサー・エイフマンの手で、フラッグ全機がカスタム化される予定だ」

「本当ですか!？」

「嘘は言わんよ」

ハウードの問いに、グラハムは不敵に笑い返す。

彼の瞳は、どこまでも澄み渡っていた。

「調査隊が軍隊になり、12人のフラッグファイターが転属……」

クーゴが呟いた途端、自分の背中を寒さが這ったように感じたのは気のせいだろうか。

悪意とほぼ同等にタチが悪い、私利私欲に満ち溢れた感情。そのために、政治家たちは天使を捕らえようとするのか。

「かなり大掛かりな作戦が行われると見た！ 気を引き締めろよ」
「はっ！」

グラハムが笑みを浮かべつつ、自分たちに念を押しした。仲間たちも頷き、敬礼を返す。クーゴもグラハムを見て、敬礼をした。

ユニオン屈指の技術者とその弟子によって、この部隊のフラッグは特別な改良が施される。現在で、ユニオン軍最強の機体。

文字通り、パイロットにとつては最高の環境だろう。しかし同時に、技術班はとんでもない強行軍を行うことになる。

12機のフラッグ全てをフルチューンするだけでなく、クーゴたちが搭乗してきたフラッグも再チューンされるのは確実だ。

技術班が過労死しなければいいのだが。

クーゴはそんなことを考えながら、改めてフラッグのマーキングを確認する。

そのうちに、この面々の大部分に共通する点を思い出した。

「……あれ？ このメンバーつて、大半が『多元世界技術解析および実験チーム』のメンバーだよな」

「あ」

その言葉を皮切りに、格納庫から我先にとパイロットたちが飛び出してくる。彼らの後に続くようにして、ビリーとエイフマンがやって来た。

「隊長、副隊長！ お久しぶりです！」

真っ先に自分たちの元に辿り着いたのは、ガンダム来襲以前に顔を合わせて以来ご無沙汰になっていたアキラである。

彼に続いて、『多元世界技術解析および実験チーム』に属する他の面々も加わった。心なしか、誰も彼もテンションが高い。

そんな仲間たちにつられたのか、グラハムやハワードたちも目を輝かせていた。まるで子どもみたいだ。

「こんな偶然、あるんですねー！」

「まさか、こんな形で隊が組まれるなんて思いませんでしたよー！」

「なんて僥倖！ これで、おおっぴらに虚憶調査きよわくができるな!!」

「新技術の解析もやり放題だね」

後から合流したビリーが、嬉しそうに頷いた。オーバーフラッグス部隊は、ガンダム鹵獲以外にも役割があったのだ。

偶然にしてはできすぎている。これもまた、誰かの意図した画策なのだろうか？ そこはわからない。

久々に「多元世界技術解析および実験チーム」、しかも全員が揃ったのだ。和やかな空気はどんどん広がっていく。いつの間にか、自分の好きな虚憶きよおくが見たいという話になっていた。

「あ、俺、『人の心の光／＼』が見たいです」

「『HEAVEN AND EARTH／UX』もお願いしますぜ！」

「『殴り合い、宇宙／OE』！ 『殴り合い、宇宙／OE』がいい！」

「私は『桜花嵐／UX』を所望するぞ、クーゴ！」

「あーはいはい。暇な時間があつたら歌うから、な？」

仲間たちにせがまれる中で、クーゴはちよつとだけ苦笑した。でっかい子どもたちを抱えた母親のような心地になるのは何故だろう。

「副隊長の鍋が食べたい人、手を挙げてーっ！」

「はいー！」「はいー！」「はいー！」

「はいはいはいー！」

仲間たちは、そんなクーゴを尻目にまた何かを話し合っている。どうやら、鍋料理の味について語り合っている様子だった。

「俺、水炊きがいいですー！」

「いいや味噌だろ！」

「ブレンドは赤味噌多めでお願いしまーす！」

「白味噌がいいです！」

「バカ、麴味噌だろ！」

「塩麴ですつて！」

「醤油こそ至高だ！」

「醤油は濃口だよな！」

「いいや薄口だ！」

「昆布ダシだろ！」

「鰹ダシが一番だ！」

「鶏がら一択に決まってるだろう！」

「豚骨風味がいい！」

「ううむ、どれも甲乙つけ難いぞ……！」

誰も彼もが主張する。隊長であるグラハムに至っては、難しそうな顔をして唸っていた。

虚憶^{きよおく}収集のときに大人数が集まる場合は、いつも鍋を振る舞っていた。人数が人数のため、パーティみたいな賑やかさだったか。

この光景も久しぶりだ。最近は特に、多元世界技術解析および実験チーム〃全員が揃う機会は皆無に等しかった。クーゴはふつと笑みを浮かべる。

「意見がまとまらないなら、問答無用でカレー味にするぞ」

クーゴがはつきり宣言すれば、仲間たちの顔が真っ青になった。

「五つ数えるまでに決めないと強制だから。はい、いーち。にーい……」

「う、うわあああああああーっ！」

「カレーは嫌だー！」

「おいしいけども嫌だーっ！」

「前回も、前々回も、そのまた前もカレーじゃないですかー！」

「むしろ鍋やる度カレー味じゃないですかー！ やだー!!」

「他の味が食べたいよー！」

「おい早く！ 早く決めろよ!!」

「誰かー！ 誰かー！」

わあわあ叫びながら焦る彼らの様子を見守る。あの調子では、今回も強制的にカレー味決定だろう。

クーゴが五つ数え終え瞬間、仲間たちががっくりと項垂れた。中には膝をついてしまった者もいる。

「おいしいんだけど。おいしいんだけど……」と、面々はうわ言のように、力なく呟いている。

萎れた花みたいな背中を見送った。ふと気づく。

オーバーフラッグス部隊の人数は、ガンダム調査隊の4人を含んで16名。今、肩を落として歩いていく人数は、クーゴを引いて14名。あと1人足りない。

振り返れば、グラハムたちの輪に加われなかったフラッグファイターが1人。金髪に青い瞳を持つ男性——ジョシユア・エドワーズが、所在なさげに、ぽつねんと佇んでいた。

「なんだ？ このアウエー感……」

突きつけられた孤独に、どう反応すればいいのかわからない——。ジョシユアは、困惑と寂しさを滲ませながら呟いた。

クーゴは彼の元へと歩み寄る。

「行くう」

「はっ」

「カレー鍋、作るから。皆と一緒に食べよう」

ほら、と、佇んでいた男性を促す。野良猫に餌をやる気分になったのは何故だろう。

ジョシユアはクーゴとグラハムたちの背中を交互に見比べては、何とも言い難そうに顔を顰めた。

そういえば、“多元世界技術解析および実験チーム”の中に彼は含

まれていなかった。

ならば、〃多元世界技術解析および実験チーム〃のノリについていけないのも当然である。クーゴに促された男性はしばらく目をぱちくりさせていたが、ふてぶてしい笑みを浮かべて肩をすくめた。

ジョシユアはずかずかと足を進める。向かう先には、〃多元世界技術解析および実験チーム〃がいた。彼はグラハムたちと一定の距離を取りながら、けれども同じ方向へと歩いていく。歩く速さにも気を使っているらしい。

……天邪鬼、なのだろうか？

「何やってんだ。カレー鍋だか何だか知らないが、それを作るご本人様がちんたらしてたら世話無いぜ？」

「……了解」

クーゴの予想通り、彼は天邪鬼らしい。

吹き出しそうになるのを堪え、クーゴは歩みを進めたのだった。



現在、オーバーフラッグス部隊は、太平洋を移動中である。

クーゴは、昼飯係としての仕事の真つ最中であつた。誰が言い出したことではなく、命令されたわけでもなく、クーゴが自分でやり出したことである。

料理をするのは苦ではない。材料を考えたり、味付けを考えたりするのは楽しいことだ。あと、料理を食べてくれた人々が「おいしい」と言ってくれることも。

今日の昼ご飯はコンソメゼリー入りのヴィシソワーズ、ニース風サラダ、鶏肉とキャベツのみそミルク煮、アボカドのレアチーズケーキ

である。この4種類を、おかわり含んで20人近く作るのだ。かかる時間も膨大である。

しかし、今回は援軍が来てくれた。クーゴはちらりと隣を見る。手際よく材料を洗い、刻み、煮ているものの火加減を確認するジョシユア・エドワーズの姿があった。軍服の上に、どこからか持ってきた工プロンをして、彼は作業を続けている。

「アンタはよくこんなことやつてられるな。それでもトップガンかよ」などとぶちぶち呟いているが、作業の手は止まらない。クーゴも凝り性ではあるが、ジョシユアも妥協しない気質の持ち主のようだった。口は悪いが、腕は確か。それを地でいくタイプらしい。

「で、次はどうすんだ？ 副官殿」

「じゃあ、サラダに使う材料を切ってくれ」

彼のおかげで、料理も早くできそうだ。クーゴが礼を言えば、ジョシユアは「そりやどうも」と不敵な笑みを浮かべる。

見れば、頼まれた盛り付けだけでなく、他の料理の火加減調節や材料の投入、その他確認などを積極的にやってくれていた。

これで、あとは各種料理の盛り付けだけだ。そう思ったとき、いいタイミングで来訪者が顔を出す。

「そろそろ昼時だ。いい匂いがすると思って通りかかったら、案の定だな」

現れたのは、グラハムとハワードたちであった。

料理のラインナップを見て、仲間たちはパアアと表情を輝かせる。

そういう顔を見ると、嬉しくなるものだ。やりがいを感じる。

「お、今日もうまそうですねー！」

「どれも凝ってますなあ」

ハワードとダリルが料理を覗き込む。クーゴは肩をすくめて見せた。褒められるというのは、なんかこう、いつまでたつても照れくさい。

それに、今回の料理には協力者がいるのだ。彼だって、褒められるべきだろう。クーゴはくるりと振り返り、ジョシユアを指し示す。

刹那、場の空気が凍り付いた。ハワードたちとジョシユアの間に、ぴりぴりとした空気が漂う。

料理に勤しむクーゴと、しれっとした顔のグラハムだけが場違いだ。自分が調理室に立てこもって昼ご飯を作っていた間に、いったい何が起きたのだろう。

クーゴはただ首を傾げる。助けを求めるようにグラハムを見れば、奴は気にするなと言うように微笑んで見せた。いつもと変わらぬ不敵な笑み。ならば問題ないだろう。

「ジョシユア、手伝ってくれてありがとうな。あとは盛り付けだけだから」

クーゴがそう言ったとき、また空気が変わった。

ハワードとダリルが目を瞬かせ、ジョシユアをじつと見つめている。意外なものを目撃した、と、彼らの瞳が語っている。それはグラハムも同じだったようだ。

やがて、3人の目がゆつくりと細められる。「ははーん」と零したのは、一体誰だったのか。なんとなく居心地悪くなってきたようで、ジョシユアが眉間に皺を寄せた。

逃げるようにジョシユアは盛り付けを始める。やはり手際がいい。「おー」と、棒読みの声で感嘆したのは誰だったか。クーゴも、彼に続いて盛り付けを始める。

「折角だから、3人も手伝ってくれ。その方が早くご飯食べれるぞ」

「その旨をよしとする！」

「了解！」

グラハムが、ハワードが、ダリルが、2つ返事で加わった。おかげで昼食が予定時間よりも早く完成したことは、言うまでもない。

◇

守りたい場所があった。大切な場所だった。命を賭けてまで、守りたいと願った場所だった。

手渡された想いがあった。それは、弱くなりそうだった自分を奮い立たせてくれた。勇気をくれた。

人の心に、何度救われてきたのだろう。

わかり合いたいと願う心が、沢山の奇跡を起こしてきた。

どうか、教えてほしい。過去を生きた貴方は何を見て、何を守ろうとして、戦い続けてきたのかを。

どうか、知ってほしい。今と未来を生きる自分たちが、何を守ろうとして、戦い続けてきたのかを。

どうか、思い出してほしい。戦いに赴く貴方を送り出した人々が、何を思い、祈り続けていたのかを。

どうか、触れてほしい。自分たちを送り出してくれた人々が、何を思い、祈り続けていたのかを。

過去から今へ、そうして——未来へ。

*

歌が聞こえる。兵士たちを想う人々の心が伝わってくる。

歌が聞こえる。今もさすらう、魂の唄が。

歌が聞こえる。忘れてはいけない想いが、そこにあった。

(これが、日本人の魂に刻まれた想い。受け継がれてきた心なんだ)

クーゴは静かに、歌に聞き入っていた。特攻人形に宿った想いは、この場にいるすべての人々の心に響き渡る。

日本国籍を捨ててアメリカへと鞍替えした売国奴——サコミズ王の言葉は事実であった。だから、クーゴはそこに反論しない。ただ、「自分が日本人として生まれてきたことが嫌だから、アメリカ国籍に変えたのではない」という点と、「日本人として生まれ育ったことは誇りである」という点は譲れなかった。

その主張も、それを踏まえたクーゴの想いも、おそらくサコミズ王に伝わったのだと思う。伝わり、理解したのだと思う。それでも、今まで背負ってきた想いと自分の信念を曲げることは、すべてを捨てることを意味しているように思っただろう。

『怒る理由がなくなったのなら、怒るのをやめたらいいんじゃないかな』

誰かがそんなことを言っていた気がする。多分、サコミズ王も、自分たちの想いに触れて、怒る理由もなくなったはずだ。

言葉にすれば単純明快であるが、中には「怒るのをやめようとする自分自身が許せない」という理由で怒り続ける人間だっている。

サコミズ王には、守りたい故郷こくにがあった。大切な祖国ほしよだった。命を賭けてまで、守りたいと願った故郷ふるさとだった。

彼が戦う中で、彼へと引き継がれた想いがあった。それを守り続けようとして、サコミズ王は戦っていた。けれど、それが崩壊した未来を垣間見た。

植民地同然の故郷を垣間見たショックは計り知れない。故郷へ向けた国防への祈りが、墮落した故郷への憎しみへと転化した。

祖国を守りたいという人々の想いが聞こえていたサコミズ王は、いつしか「墮落した故郷への怨嗟」にしか聞き取れなくなってしまうのだらう。

(でも、聞こえるはずだ。……これで、聞こえたはずだ)

オーラバトラーたちが集う方角を見つめながら、クーゴは祈る。

本来の祈りは、救われなかったことに対する怨嗟の念ではなかったはずだ。未来に生きる人々が、笑顔でいられるようにと願ったはずだ。

大切な人たちへ向けた、優しく温かな想いに満ち溢れていたはずだ。大切な人を残してゆくことに対する悲しみと、彼らの幸福を願って、戦いに赴いたはずだ。

『生き神さまでした……』

特攻人形から声がした。少女の声だった。

おそらく、若き特攻隊員——迫水真次郎を見送った人々の想いだっただろう。

その想いが、届いた。

「そ、そう言っ……そう言っ……、哀れんでくれたあああ！」

オウカオーから響いた声は、先程対峙していた苛烈な王の声ではない。悲しみに満ちた老人の声だ。

いつの間にか、サコミズ王の姿は若者の姿から老人へと変わっている。

王の専用機体から発せられていた禍々しいオーラも消え去っていた。それを見た仲間たちが安堵の表情を浮かべる。

しかし、もう1つの危機が近づいていた。

「皆さん、核の起爆装置が……！」

キャシーの言葉に、全員が慌てて空を見上げた。核兵器が東京に着

弾したら、爆発によって何十、もしかしたら何百万人も死ぬことになる。放射能による被害も含めれば、被害者や犠牲者の数はとんでもないことになるだろう。

打破する方法はないものか。仲間たちが慌ただしく話し始める。しかし、打破する方法は見当たらない。そのとき、名乗りを上げるより先に飛び出していった機体があった。エイサップの駆る■ツカナナジンと、リユクスの駆るギ■・ゲネン。

エイサップ、エレボス、リユクスの3人は、己の命と引き換えにして、この国を守るつもりなのだ。

あたかも、かつての特攻隊員——迫水真次郎が、小倉に落とされそうになった原爆投下を、己の命と引き換えに阻止したかのように。

「よせ！ そんなことをすれば、キミたちは……！」

キラが止めようしたが、フ■ーダムとアツカ■ナジンたちの距離が離れている。止めに入ろうにも間に合わない。

「やめるんだあああーっ！」

アニエスの悲痛な叫びが木霊する。あの日、師と呼べる人を手にかげざるを得なかったアニエスだって、本当は、そんな結末を受け入れられるはずがなかった。

手が届かない。他の面々も同じく、若者たちがむぎむぎ命を散らす現場を、ただ茫然と見守ることしかできないなんて。

次の瞬間。

「エイサップくん、ナ■ジンにリーンの翼はないぞ」

静かな老人の声があった。割り込むようにしてアツカナナジ■を追いか抜いたのは、サコミズ王のオウカオーであった。

彼が何をしようとしているのか、日本人である面々は察してしまっ

た。日本人だったクーゴもその1人である。

迫水真次郎が守ろうとしたのは祖国、日本だった。鈴木エイサツプが守ろうとしているのもまた祖国、日本だ。

「サコミズ王、まさか……！」

エイサツプが息を飲む。

嘗て命を散らした特攻隊員も、今を生きる若者たちも、守りたかつたものは同じ「祖国」。

こんなにもわかり合えたのに。こんなにも通じ合えたのに。だからこそ、面々は驚愕した。

リーンの翼が輝く。自分たちの予想を肯定するように。

「父上！」

「……………リユクス、すまなかった」

リユクスがサコミズ王を呼ぶ。サコミズ王は、ふつと表情を緩ませた。

そこにいたのは王ではなく、どこにでもいる父親だった。

娘のことを想ってやまない、優しい父親。

感極まったリユクスがまた父を呼ぶ。しかし、そこにはもう、リユクスの父はいなかった。

そこにいたのは、祖国を守るために命を賭けた愛国者。特攻隊員、迫水真次郎。

時を超えて、特攻隊員迫水真次郎が、再び空へと向かう——！

「——リーンの翼が聖戦士のものなら、我が想いを守れええええええええええええええええッ!!」

美しく輝く翼が、一際爆ぜるような光を放った。あまりの眩しさに目を覆う。遠くで何かが破裂するような音が聞こえた。何かが砕け

るような音も。

白い世界の中で声がする。誰かが、短歌を詠んでいた。若い声と、老人の声。特攻隊員の迫水真次郎と、シンジロウ・サコミズ王。

敷島の 大和心を人問わば 朝日に匂ふ 山桜花

これが、彼の祈り。国を守りたかったと願った愛国者。彼が残した、最期の想い。

桜の花びらが舞う光景が『見える』。桜は日本の国花であり、日本人が愛してやまない花だ。

透き通った青空に、桜の花びらが栄えていた。なんて綺麗なのだろう――。

(貴方は最後の最期に、王としての在り方、聖戦士としての誇り、日本人としての心を……取り戻したんですね)

クーゴはふつと笑みを浮かべた。

光が晴れる。そこに広がっていたのは、どこまでも真つ青な空だった。桜の花びらの代わりに、リーンの翼の残骸がひらひらと舞い降りていく。

サコミズの想いは核爆弾を防ぎ、オーラロードをも拓いてみせた。ホウジョウ軍はそれに飲み込まれ、地上から姿を消す。残されたのは、アルティメット・クロスの人々。

時を超えて日本を守った特攻隊員、迫水真次郎。彼が守り抜いた空が、そこにある。

その美しさを瞳に焼き付けるように、クーゴは空を見上げていた。迫水真次郎もまた、空の護り手であったのだ。

喉からかすれた声が漏れる。視界が滲み出す。クーゴは操縦桿から手を離し、静かに敬礼する。

空に散った戦士へ、敬意を込めて。



虚憶内容、『桜花嵐／UX』。「最期は是非とも空で」と豪語する、グラハム・エーカーが惹かれてやまないものである。

空軍パイロットであるクーゴやフラッグファイターたちも、これに惹かれるものがある人間たちの1人だ。迫水真次郎／サコミズ王の生き様に。

「本当の軍人って、ああいう人のことをいうんだろうなあ」

日系人故に、『日本から受け継いだもの』が反応しているのだろう。アキラが鼻を鳴らしながら呟いた。

気高すぎてもう何も言えない。この虚憶を見る度、クーゴが思うこととだ。汚職まみれの上層部や政治家たちがこれを見たら、いったいどんな反応を示すだろう。

時計を見る。そろそろ休んだ方が良さそうだ。面々もそれを理解しているようで、短い挨拶を交わしてそれぞれの部屋へと戻っていく。クーゴも彼らに続いて部屋を出た。

クーゴ、グラハム、ハワード、ダリルの部屋は同じ区画だ。途中まで一緒に向かうことになっている。日常会話その他で、ささやかな談笑をしていたときだった。

「うわああ!?!」

「っ、すまん! 大丈夫……え?」

廊下の向う側からやって来たのはジョシユアだった。ぶつかった衝撃で、彼が抱えていた本がばらばらと音を立てて床に落ちる。

慌てて本を拾うジョシユアを手伝おうとして、ふと手を止めた。彼が持っていた本に、共通点を見つけたからだ。

日本、戦争、特攻隊。中でも、特攻隊という言葉が出ている。

「これ、『特攻隊』関係の本じゃないか」

「な、なんだっていいだろ!? 俺が何を讀んだって自由じゃないか!」

本を抱え込んだジョシユアが、キツとこちらを睨みつける。よく見れば、彼の眼元が微妙に赤くなっていた。

もしかして、彼は泣いていたのだろうか。抱えていた本を讀んで? クーゴが思案していたとき、何を思ったのか、ジョシユアが突如叫び出す。

「……か、勘違いするなよ。べつに、アンタの歌を介して見た虚憶きよおくの『桜花嵐／UX』や『HEAVEN AND EARTH／UX』の影響を受けたわけじゃないんだからなああああっ!!」

まるで、嵐が去っていったかのようなだった。あるいは、脱兎のごとく。

ジョシユアの背中へ、あつという間に廊下の向うへと消えていく。クーゴたちは、それをぼかんと眺めていることしかできなかった。

一体なんだったのだろうか。そう思ったとき、足元に1冊の本が転がっているのが目に入った。ジョシユアが落としていったのだろうか。

「おーい、ジョシユアー。1冊忘れてるぞー」

本を拾い上げてジョシユアを呼ぶが、まったくもって返答がない。それもそうか。彼の姿はもう見えない。明日届けばいいか、と、クーゴは結論付けた。

ふと、隣を見る。グラハム、ハワード、ダリルが、何やら会話をしていた。

「あいつ、意外と可愛いところあるんだな」

「後で、奴の部屋の前で『桜花嵐／UX』と『HEAVEN AND EARTH／UX』の虚憶きよおくが視える歌、熱唱してやりましょうぜ」

「よしきた。ダリル、ハワード。音源の準備を頼む」

グラハムの言葉に、2人は2つ返事で頷いた。何かと首を傾げれば、グラハムが何かを期待するようにしてこちらを見てくる。

歌え、ということだろうか。ハワードとダリルの目には、悪戯小僧のような色が見え隠れしている。ジョシユアいじり——そんな単語を連想したのは何故だろう。

対してグラハムは、打ち解けるチャンスだと意気込んでいるように見えた。チームプレイを構築するためには、普段からの交流が一番である。

おまけに、ジョシユアが影響を受けたと零していた虚憶きよおくは、グラハムが惹かれてやまないものたちだ。

片や、祖国を守るために空で散った戦士。片や、わかり合えた相手が「綺麗だ」と言った場所を守るために存在そのものを賭けた優しい少年。

どちらも「空」が共通している。そこから突破口を見出したと、グラハムは思っているのだろう。まるで子どもみたいに笑うので、クーゴもちよつと苦笑した。

(まあ、ジョシユアは悪い奴じゃないしな)

昼間だって、昼食づくりを手伝ってくれたわけだし。

そういえば昼間、ハワードたちとジョシユアの間に変な空気が漂っていた気がする。

ジョシユアが料理を手伝っている姿を見て薄れてしまったが、殺気に近いものがあつた。

殺伐とした空気が和らぐのなら、何も悪いことではない。クーゴは一人納得したのだった。

後に、ジョシユアの愛読書が『Toward the Terra』であることが発覚したり、料理の手際と外見はいいのにアレンジや味

付けがゲテモノ級だったことが発覚したり、面々の中で唯一「カレー鍋がいい」とひっそり主張するようになったりするのだが、それは別の話である。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

幕間。女たちは考える

国連が、アザディスタンへの支援再開を発表した。

画面には、握手を交わすマリナ・イスマイルとアレハンドロ・コーナーの姿が映し出されている。

その様子を確認した女性は、ふつと笑みを浮かべた。国連代表——エルガン・ローディックもなかなかやる。

「よっしー」

アザディスタンのホテルにある一室で、女性は盛大にガッツポーズをした。

アレハンドロは、先の内戦でさつきと撤退させた後、技術支援の再開に消極的であった。保守派と改革派の争いが残っており、小規模の内戦が起きているためである。

アザディスタンは保守派重鎮と改革派のシンボルが会談を成功させ、今までのような大きなテロ活動が収まり、事実上の小康状態だ。派遣前の状態とほぼ変わらない。

「でもでもだって（要約）」を繰り返すアレハンドロに対し、国連代表のエルガンが動いたのだ。奴の鶴の一声で、国連はアザディスタンへの技術支援を再開したのである。

「エルガンにしては、いい采配じゃない」

てつきり、アレハンドロを詰めるための布石として、アザディスタンを放置すると思っていたのだが。

女性は鼻歌を歌いながら端末画面をスライドする。映し出されたのは、『悪の組織』の技術支援で完成した太陽光発電用の小型エネルギー変換器。

この技術は元々、女性が嘗て暮らしていた『母艦』の動力源に使われた技術を応用したものだ。

『母艦』に使われたドライブと太陽炉は事実上の親子関係であるが、使い手に想定された対象が違う。

前者が女性たちのような『同胞』専用のものであれば、後者はソレスタルビーインググループと、いずれ現れる『革新者』たちのものだ。

『母艦』は長きにわたる逃亡生活に対応するため、半永久的なエネルギー動力と『同胞』たちの能力を使って動いていた。機械関連のOSも、『同胞』たちの能力を生かした作りになっていた。

といっても、1度に生産できるエネルギー量は、GNドライブと比較するとかなり少ない。その代わり、『同胞』たちの持つ能力で出力を補っている。だが、力を酷使すると『同胞』の命に係わる。

出力不足を『同胞』の能力で補いつつ、『同胞』が命を落とさなくて済むよう、出力の底上げとエネルギー変換効率を上げる。そうして改良を重ねられ、誕生したのが、『悪の組織』関連のMSに搭載されている特殊なドライブ——ESP—Psyon。特に、荒ぶる青タイプ・ブルーが搭載することを想定された機体は、それ用に組まれた強化系ドライブを搭載していた。

閑話休題。

「今のところは富裕層や電力供給会社を中心に配ってるけど、評判は上々、か」

あとは、保守派との兼ね合いや、変換器が一般市民に出回るようにするだけだ。

現地の作業員に技術を伝え、叩きこみ、修理方法を伝え、量産型を作り出すこと。

「マリナさま、喜んでくれるかな。……笑ってくれるかな」

女性はゆっくりと目を細める。

今度こそ、その笑顔が絶えないようにしたい。

今度こそ、修羅の道を歩ませないようにしたい。

武力を用いた戦いではなく、対話により歩み寄るための戦いを選んだ気高き王女。嘗て、その理想を抱いて、人々にコンタクトを取っていたグラン・パ。

グラン・パの願いに対し、人々は、『同胞』たちが暮らしていた惑星^{ほし}を崩壊させることで答えた。昔、『同胞』たちが生まれた惑星ガニメデと同じように、抹殺の姿勢を露わにした。

優しかったグラン・パ。『同胞』の未来と幸せを祈っていた彼は、人々との『対話への扉』をこじ開けるため、『同胞』たちが帰りたいと願った青い星^{テラ}へたどり着くため、戦うことを決意した。決意せざるを得なかった。

そして、やつとの思いで、彼は扉を開いた。

それきり、彼は帰ってこなかった。

命を代償にして未来を切り開いた彼らの意志と想いは、後継者たちによって成し遂げられた。そうして初めて、彼らの人生と戦いは報われたのだ。

（死によって報われるなんて、嫌だよ。生きてそれを見届けなきゃ、意味ないよ）

女性は静かに目を伏せた。

グラン・パの背中を見続けて、彼の遺志を継いで3代目となったトオニイと一緒に奔走して、トオニイたち『同胞』と別れてこの地球に降り立って、愛する人と生きて、彼の後継者たちの姿を見守っている。だけれど未だに、グラン・パが死を選んだことが納得いかない。彼が選んだ理由も抱いた想いもわかつているからこそ、女性は思うのだ。グラン・パにも生きてほしかった、と。彼には時間が、まだまだ沢山あったのだから。

初代指導者^{ソルジャー}だって、最期の時間を穏やかに過ごすことくらい許されはずだ。彼の勇気と行動は敬意に価するし、女性も初代指導者^{ソルジャー}を尊敬している。でも、どうして、生きてくれなかったのだろう。

『僕が目覚めた意味が分かったんだ。……今まで生き永らえてきた意味が』

『いつかキミも、キミが生まれた意味を知る。そうすれば……きつと、わかるよ』

それが、先代の肉声を聞いた最後だった。

儂くも力強い笑みを浮かべた、優しい人だった。

(私が生まれた意味……)

もやもやする気持ちを抱え込んだ女性は、深々と息を吐いた。もう少しで掴めそうな気がするが、その全貌は分からない。

いずれ、そのすべてが明らかになる。どうやら、今はまだ、そのときではないらしい。女性は諦めることにした。

ならば別なことを考えよう。女性は端末をいじり、別な画像データを取り出した。映し出されていたのは、1人の女性。

襟元までで切りそろえられた栗色の髪に、端正な顔立ちの女性。緑のジャケットを羽織り、ネイビーのインナーを着て、白いズボンを着いたアクティブなキャリアウーマン。彼女は日本の報道局に勤務し、JNN特派員の取材班をやっている。

家族構成は弟1人。幼い頃に母親を亡くし、数年後に、フリージャーナリストだった父親が取材中の事故に巻き込まれて亡くなったという。現在取材していることは、イオリア・シュヘンベルクとソレスタルビーイングについてだ。

「この女性に見合うドレスを」

女性は端末を操作する。次に表示された画像は、煌びやかなパーティドレスとアクセサリーたちだ。

「似合いそうなドレスは……これかな。あとは、サイズは目測でこれ

だから——よし。購入完了」

パパツと手続きを終える。その旨を『同胞』の先輩後輩コンビ（女性から見れば、2人とも「目下の子どもたち」だが）を送信すれば、了承の返事が返ってきた。

女性は端末を閉じ、車椅子の向きを変えた。次の瞬間、アザデイスタンのホテルから別の場所へと世界が一変する。そこは、『悪の組織』の格納庫だった。

「……それで、ハロルドとキムが回り込んで、ユウイがこう……。さて、私の布陣に対し、皆だったらどう動かす？　はい、まずはハーレイから」

「いきなり俺に振るのか!？」

「頑張れよ副艦長。お前も戦術指揮やってるんだろ?」

「頑張つて、ハーレイ」

「ゼ、ゼルとブラウの裏切り者ー！　お前らだつて戦術指揮の勉強やってるじゃないかー！」

最近完成したばかりの戦艦、ホワイトベース。新米の船員と艦長たちが、今日も元気にシミュレーターの復習をしていた。

クルーの中には修行中のMSパイロットもあり、彼らもまた、ホワイトベースのクルーたちとシミュレーターの復習に参加している。

ホワイトベースのクルーやMSパイロットの中には、数か月前に人革連の超兵機関から救出されたのち、『同胞』として覚醒した者たちも含まれていた。

ちなみに、『同胞』に覚醒していない人々も、自分たちが匿っている。人並みに生活するための知識や技術を学んでもらっている最中だ。中には頭角を現し、機械技術や農業関係、芸術関係などの才能を開花させている子もいる。

女性は格納庫に納められたMSたちを仰ぎ見る。

そこに収められていたのは、灰色の機体と紫と黒を基調にした機体

たち。

両者ともガンダムタイプの量産機であるが、性能は専用機たちに勝ることも劣らない。

「今日のシミュレーターで、アスルの機体がオーバーロード引き起こしてたよな」

「やっぱり、通常タイプのESP-Psyonじゃダメだ。νガンダムやスターゲイザーに使われている、荒ぶる青用の強化ドライブを搭載しないと……」

「それをやったら、あの量産機のスペックじゃ辛いです。試作中の新型機のロールアウトを急いだ方が……」

技術者たちが話し合いながら、凶面と睨めつこを繰り広げていた。皆、真剣な面持ちでいる。

女性は件の少年へと視線を向けた。銀色に輝く髪と、緋色の瞳。初代指導者の面影を色濃く残す彼——アスル・インディゴは、超兵機関の出身者だ。

彼は『被検体B-001』と呼ばれており、実験の後遺症で、自分の名前を思い出すことすらできなかつたという。スペイン語で、アスルは青を、インディゴが藍を意味する。

名付け親は女性だ。彼の顔を見た瞬間、初代指導者を連想した。そこから名前を思いついたのである。そのことを話したら、アスルは静かに笑っていた。

笑い方まで、先代指導者と瓜二つだ。

彼が帰ってきたかのような親近感に見舞われる。

いいや、彼だけではない。ハーレイも、ゼルも、ブラウも、初代指導者の同年代であり、青い星の大地の下に沈んだ命たちでもある。他にも、友人の親と同じ名前の人たちもいたし、女性の両親と同じ名前の人もいた。崩壊する故郷で命を落とした『同胞』や、戦いの中で命を散らした『同胞』たちもいた。

(まるで、皆が帰ってきたみたいだ)

女性は彼らのやり取りを見つめた後、近くで話し合っている技術者たちの元へと歩み寄った。

片付けなければならぬことは山ほどある。次の案件に向けての下準備や、今後の事業内容についても。



絹江・クロスロードは、戦友——セキ・レイ・シロエやジョナ・マツカたちと打ち上げをしていた。

と言っても、打ち上げを言い出したのはシロエとマツカである。場所を指定したのもシロエとマツカである。

(でも、ドレスコード有り的高级レストランに連れて行かれるなんて思わないわよ!!)

絹江は正直、頭を抱えたくて仕方がなかった。打ち上げ会をするから来ないかとシロエたちから誘われ、取材続行の知らせと重大な話をしたかった絹江は2つ返事で了承した。打ち上げ会と聞いていたので、近くの居酒屋かファミリーストランあたりでやると思っていたのだ。

そうして連れてこられた場所は、高層ビルの屋上付近にあるレストラン。普段通りの服装で来ていた絹江は真っ青になったが、シロエたちがコンシェルジュたちと何か会話をしていた。直後、絹江は女性たちに連行されるような形で試着室らしき場所へと連れてこられた。

訳が分からず啞然としている間に、あれよあれよと絹江はドレスアップを施され、レストラン入口へと引つ立てられた。文字通り、3

世紀前に使われた「ポルナレフ状態」であった。数分前までバリバリのキャリアアウーマンだったはずの絹江は、美しい淑女へと姿を変えていたのである。

今の絹江は、パニエが付いた緑色のサテンレースドレスを身に纏い、同じサテン生地だがベージュのジャケットボレロを羽織っている。ドレスはふんわりとしたシルエットで、着丈が少し短めなものだ。ジャケットボレロは襟がついており、かっちりとしたデザインとなっていた。おまけにアクセサリーとして、愛を祝福する極楽鳥のつがい象ったデザインのネックレスまでついてきた。鳥は左右に配置され、中央には2羽が啜えるような形で宝石がちりばめられている。

パーティー用のドレスを身に纏うことになったのも、ドレスコード必須の店に通されることになったのも、すべてが人生初のことだ。

おまけに、このドレスのお値段も相当だろう。一般庶民の絹江に、手が出せるような代物ではない。お値段にハラハラしていたら、シロエが

『僕の恩師が、今回のイオリア・シユヘンベルク特集に感銘を受けましてね。取材したのは誰だと詰め寄られたので教えたら、絹江さんにこれらを贈ってほしいと頼まれました』

……と、いうことらしい。

別な意味で危機感を感じていたら、マツカから「その人は女性です。趣味や特技がオッサン臭いですけど」と注釈を頂いた。

なんでも、2人の恩師である女性の特技が「女性のスリーサイズを（実物、写真問わず）目視で確認できる」というものらしいのだ。

他にも色々特技があるらしいが、シロエとマツカが遠い目をしたので黙っておくことにした。問い詰めたら、2人の精神衛生が危ない。

現在、絹江たちは夜景の良く見える席で打ち上げをやっている真っ最中だ。しかし、場の空気の影響を強く受けてしまい、打ち上げというよりは晚餐会に近い。

一般庶民の絹江には、拷問のような居心地の悪さを感じる。打ち上げとは、もう少し気楽なものではなかったのか。というか、何故シロエとマツカはこの店を選んだんだ。

(しかも2人とも、この店の常連っぽいし！ おまけにフォーマルスーツも、ものすごく様になってるし!!)

この場が高級レストランでなければ、思い切りテーブルを叩いていただろう。

寸でのところで絹江は自重した。向かい側に座るシロエとマツカに目をやった。

シロエは黒い無地のタキシードを着ていた。柄襟元の蝶ネクタイと中に着ているベストの色は、やや青みがかかった黒た。夜の礼装として格調高いタキシードのおかげか、いつもよりキザに見える。姿勢もいいから尚更だ。

マツカは灰色にうつすらとストライプが入ったスーツを着ていた。スーツの型はダブルで、少々ゆったりめのシルエツトだ。ネクタイの色は無地のピンクゴールド。服の影響か、普段は猫背気味の背中がしゃんと伸びている。穏やかそうな好青年にしか見えない。

礼服の破壊力は恐ろしい。目の前に、絹江とは縁遠いと思っていた『イケメン』が2人もいる。はしゃぐな落ち着け、と、絹江は自分自身に言い聞かせた。少しでも粗相をすれば、たちまちここから放り出される。そんな予感がしてならない。

「やして」

シロエが悪戯つぽく笑い、グラスを掲げる。それに続いて、マツカもグラスを掲げた。

現実に戻ってきた絹江は、彼らと一歩遅れてグラスを掲げた。

グラスの中に注がれていた飲み物の水面が揺れる。

「今回の取材企画が成功したことに、祝杯を挙げまして。乾杯」

「乾杯」と、絹江とマツカも音頭に続いた。グラス同士が触れ合い、軽やかな音を立てる。そして、グラスの飲み物に口を付けた。

シロエとマツカは成人しているが、今日は車を運転する予定があるらしくソフトドリンクである。絹江の飲み物は白ワインだ。

普段は缶チューハイを嗜む程度の飲みっぷりであるが、こういうのも悪くない。最も、クロスロード家の財力では難しい案件だが。

絹江が考え込んでいたとき、乾杯のタイミングを待ち構えていたかのように、テーブルへ料理が運び込まれてきた。

正直、緊張しすぎて途方に暮れかけている。絹江の心境を察したのか、シロエとマツカがリードしてくれた。

「こういう場所、先輩はお嫌いですか？」

「ちよつとね。あまり経験がないから」

シロエはゆるりと目を細めた。マツカも穏やかに微笑む。

「絹江さん、そんなに緊張しなくとも大丈夫ですよ。気楽にしてください」

「それが難しいのよ。周りの人間が皆セレブだから、気後れしちゃって」

「僕やシロエ先輩だって一般庶民ですよ。シロエ先輩は取材でこういうところに潜り込んでたから慣れているけど、僕は、こういう所に来る機会はないし……」

「珍しいくらい涼しい顔してるのにな？」

「え!？」

そんな感じで、自分たちは談笑を楽しんだ。前菜を食べ終わり、次はスープがやって来る。

食を進めていくうちに、緊張もほどけた。絹江は会話のタイミング

を計っていた。

いつ、イオリア・シュヘンベルクの取材続行を切り出そう。

「絹江さん？　どうかしたんですか？」

マツカがこてんと首を傾げる。シロエも絹江の様子から何かを察したらしく、真剣な眼差しをこちらに向けてきた。

いつの間にか、ツーカーに近い仲になっていたらしい。流石は戦友だ。絹江は小さく頷き、口火を切るようにして話を始めた。

「この前、上層部にイオリア・シュヘンベルクの取材を続行したいと頼んだの。その場で、正式に許可が下りたわ」

「凄いいじゃないですか、先輩」

「おめでとうございます、絹江さん」

シロエが表情を輝かせ、マツカが嬉しそうに手を組んだ。絹江は礼を述べ、話を続ける。

「……私はこれからも、ソレスタルビーイングを追いかけつもり。そのためなら、多少危険な橋でも渡る覚悟でいるわ」

絹江はじつと2人を見つめた。

「シロエは私の同業者だけど、貴方は貴方で追いかけていものがある。マツカに至っては、本業は危険と無縁のはずだもの。これ以上関われば、大変なことになるかもしれないわ」

絹江は言葉を切った。「でも」と付け加え、言葉を続ける。

心臓が、早鐘のように鳴り響いていた。

「私1人じゃ、きつと、特番のための取材は上手くないかなかった。2人

が助けてくれたから、私は取材の続行を勝ち取れたの。……だから――

「――水臭いですね、先輩」

絹江の言葉を遮って、シロエが微笑んだ。

「ここまで一緒にやって来たんです。今更、仲間外れは嫌ですよ」
「取材を続けるんですよね？ だったら尚更、1人じゃダメです」

マツカも頷く。

2人とも、絹江の取材に協力し続けてくれる。尋ねたかったことを答えられ、しかもそれがいい返事だったのだ。こんな嬉しいことはない。

感極まった絹江の頬が、だんだんと緩んできた。断られることを覚悟していたけれど、快く引き受けてもらえる覚悟なんてしていなかった。

不意打ちを食らったような気持ちになる。絹江は微笑み、「ありがとう」と告げた。シロエとマツカも微笑む。――気持ちは、同じだ。絹江はウェイターを呼び、全員分の飲み物を頼む。

程なくして、ドリンクやワインがグラスに継ぎ足された。グラスを掲げた絹江に従い、シロエやマツカもグラスを掲げた。

「それじゃあ、改めて。これからも宜しくね、2人とも」

「ええ、宜しく願います。先輩」

「こちらこそ、よろしく願います。絹江さん」

改めて、3人は乾杯する。夜はまだ、続きそうだった。



お隣さんのお嫁さんのお母さんが、本国へと帰国した。その結果、開かれたのが『ルイス・ハレヴィを励ます会』である。

招かれたのはアイデア・クピライターズと刹那・F・セイエイ、左隣のお隣さんである南雲一鷹とA L 3 / 愛称アリスに悠風・グライフとH L 0 / 愛称ハルノ、沙慈・クロスロードとルイスの先輩である八重垣ひまりや草薙征士郎だった。

(どうしよう。大半の人たちが『同胞』なんだけど)

アイデアはちよつとだけ居心地が悪かった。特にこの面々は、アイデアにとって馴染み深すぎる『同胞』たちである。本当は懐かしさに任せて語り合いたいのだが、刹那や沙慈たちに聞かれていい会話ではない。

脳内会話でなんとか抑えているけれど、それだけじゃ込み上げてくる感情をどうにかできるとは限らない。このメンバー——特に、一鷹、悠風、征士郎らと顔を合わせるのには、本当に久しぶりである。最後に顔を合わせたのは、アイデアがソレスタルビーイングへ行く直前だった。

自分たちに託された使命を背負い、それぞれがそれぞれの道を行く。アイデアはソレスタルビーイングへ、一鷹、悠風、征士郎らが『悪の組織』へ。歩く道が違えども、見上げる月は同じだと信じていた。そうやって、頑張ってきたのだ。

『お願いよ、——』

『来るべき日』のために。どうか、希望を守り抜いて——！』

忘れられない。最期に、大切な人から告げられた言葉が。

痛みと闇で失われた視界。『視えた』のは、“何か”に飲まれる人の

姿。

「剣術は誰が教えてくれるの？」——少年の問いかけが響いた。それに答えたのは男性だ。「これからお前は、1人で稽古をするんだ」——それが意味するのは、永遠の別れ。

「嫌だ！ 父さんと母さんを置いていけない」——少年の叫びが響いた。それに答えたのは夫婦だ。「逃げなさい。後から必ず、自分たちも行くから」——その約束は、永遠に果たされることなく。

「お父さん、お母さん！ 死なないでっ!!」——少年の悲鳴が響いた。それに答えたのは別の夫婦だ。「生きなさい。お前が生きることには、必ず意味がある」——その言葉は、人々の心に刻まれる。

最後に、彼／彼女らは言った。『来るべき日』のために、『希望』を守り抜いて欲しい』と。

「ううー……」

ルイスの目は真っ赤だった。相当泣き腫らしていたのだろう。寂しい、寂しい——剥き出しの感情が、アイデアの心をぐりぐりとえぐっている。

彼女を励ますための人数合わせとはいえ、ほいほい引き受けた自分たちは、確実に周囲から「どうかしている」と言われるだろう。

「ルイス、大丈夫？」

「全然大丈夫なわけないじゃないですか、先輩……」

ルイスは拗ねた表情を浮かべてひま里を見上げた。八つ当たりするのように、ルイスは顔を顰める。

彼女の行為は、周囲の人々に対し、八つ当たりをしているようにしか見えない。

それに、ルイスの悩みは贅沢な部類に入るだろう。彼女の両親は生きてるのだ。

会うためには、物理的な距離があるだけで。

ルイスと彼女の両親は、言葉を交わすことができる。

「……贅沢な悩みだな」

刹那はぼつりと呟いた。

「母親が帰ったくらいで、何故泣くんだ」

その言葉に、ルイスがキツと目を剥く。

「寂しいからよ！ 皆がいてくれるのは嬉しいけど、でも、やっぱり寂しいっ！」

「なら、会いに行けばいいだろう。死んだわけでもないんだし、いつでも会える」

刹那の言葉は、ルイスの琴線に触れたらしい。しかも、悪い方面に。ルイスは痙攣を起こし、わんわんと泣き出した。収拾がつかなくなってきた。

何のためにアイデアたちはここにいるのだろう。本来の目的を忘れてしまいそうだ。

「……でも、本当にルイスは贅沢だよ。死に別れたわけじゃないのに、今生の別れみたいに泣くんじゃもの」

「それとこれとは違うのーっ！ どーしてアイデアまで刹那みたいなこと言うの!?! 酷い!」

「私もね、両親に会えないの。声も聞けないし、顔も見れないわ。……随分前に、死んじやったから」

アイデアが淡々と紡げば、ルイスはぴたりと泣き止んだ。刹那が驚いたように目を瞬かせる。

赤の他人であるルイスやソレスタルビーイングの仲間である刹那

に、昔話をするのは初めてだ。

「私の母は事故で亡くなったの。しかも、私の目の前でね。……母を亡くした事故で、私は視力を失った。しかも、母が死ぬ前に。父も、母の後を追うようにして亡くなった。……だから、両親の最期の顔を見れなかったわ」

「……………、ごめんなさい……………」

ルイスは完全に萎れてしまった。どうやら、癩癩は収まったらしい。

隣に座っていた刹那が、心配そうにアイデアを見上げてきた。アイデアの過去は他人事ではないと思っただろう。アイデアの様子から、この話が本当のことだと察したためでもある。

一鷹が、悠風が、征士郎が、「自分も親を亡くした」と零す。アイデアのカミングアウトに突き動かされるような形だった。一鷹と悠風が両親を、征士郎が父親を、それぞれ目の前で亡くしている。

空気が一変したクロスロード家のリビングは、重々しくなっていた。『ルイス・ハレヴィを励ます会』は、いつの間にか『ルイス・ハレヴィを諫める会』、および『自分の過去を零す会』に変貌していた。

家主の沙慈はおろおろして役立たない。ルイスも、何とかしようと思死な様子だった。

ひまりは事の詳細すべてを聞いているから、どうしようもないと知っている。

そのとき、丁度いいタイミングで端末が鳴り響いた。ソレスタルビーイングからの連絡である。

「用事が入った」

「私も。それじゃ、またね」

アイデアと刹那は立ち上がる。何とも言えない表情で、ルイスと沙慈が自分たちを見送った。一鷹たちや征士郎らはいつもより少し静か

な様子で、自分たちを見送る。彼らもまた、戦いに赴く。なんとなく予感があった。

クロスロード家の部屋を出て、端末を開く。3大国家に大きな動きがあり、3大国家陣営は共同で軍事演習を行おうとしているらしい。今まで反目していた者たちが、手を組むことにしたのだ。

軍事演習には、空軍エースパイロットであるクーゴやグラハムも参加するだろう。いや、これは軍事演習ではない。ガンダムを鹵獲するために、三大国家やその他諸々が動き出している。

世界は加速する。統合に向かって。

アイデアは端末を握り締めた。

世界は、佳境を迎えていた。



「教官ー、ヨハン兄ー、ミハ兄ー。差し入れ持ってきたよー!」

スポーツドリンクとタオルを片手に、ネーナ・トリニティは大声で3人を呼んだ。畑で収穫作業に勤んでいたヨハン・トリニティとミハエル・トリニティが遠くから顔をのぞかせる。

自分たちの教官であるノブレス・アムは、丁度収穫を終えたらしい。籠の中には、ナス、ピーマン、トマト、キュウリ、オクラなどの野菜が沢山入っていた。どれも採れたての新鮮だ。おいしそうである。

ネーナはノブレスにスポーツドリンクを手渡した。農作業の最中であつても、ノブレスは決して人前で素顔をさらそうとしない。汗だくなのに、大丈夫なのだろうか。熱中症で倒れてしまいそうで、ちよつと不安だ。

本人曰く、仮面をしているのは、顔に大きなやけどの跡があるためだという。昔、火災で家族を亡くし、自身も大けがを負ったと言つて

いた。

他人を不快にさせたくない、とはノブレスの談である。そんなことはない、とネーナは思うのだが、ミーハーで面食いな自身の正確を鑑みると、彼の不安もわかる気がした。

もし、ノブレスが自分たちを信用して、いつか仮面を外す日が来たら。その下の顔を見て、ネーナは何を思うのだろうか。

(昔の私だったら、平然と「気持ち悪い」って言ったんだろうなあ。……いや、もしかしたら、もつと残酷なことを平然と言ったかもしれない)

火傷の後の具合にもよるだろうが、確実に、自分は教官のことをバカにしていただろう。

考えるだけで、自己嫌悪に襲われる。昔の自分は子どもだった。子ども過ぎたのだ。悪い意味で。

「どうした？」

「あ、なんでもない！ タオルどうぞっ！」

ネーナは慌ててタオルを突き出し、そそくさと向きを変えた。兄たちの方に向き直る。

「ネーナあ、パスー！」

遠くで、出荷用の花を収穫していたミハエルが大きく手を振った。横着はダメだと言いたげに、ヨハンはミハエルを見た。

でも、結局は弟妹に優しい兄である。しようがないと苦笑するに留めていた。そんな風に笑う兄たちを見ると、今が幸せだとつくづく思う。

ネーナはミハエルに向かい、飲み物を投げた。大きく弧を描いて飛んだスポーツドリンクは、そのままミハエルの手に、吸い込まれるよ

うに落下していく。

が、次の瞬間。

ばちんと、何か音がした。ミハエルがキャッチするはずだった飲み物は、ミハエルの手に届く直前で、何かに阻まれたかのようにバウンドした。そのまま、彼の手を超えて花畑の奥へと落ちていく。

突如起きた超現象に、ミハエルは首を傾げながらも飲み物を拾いに行く。ネーナとヨハンも首を傾げたが、どうしてあんなことが起きたのかわからない。とりあえず、ネーナの元にやって来たヨハンに、飲み物とタオルを手渡した。

籠の中には、収穫したばかりの野菜たちが顔をのぞかせている。

「どれもおいしいそうな野菜だね！」

ネーナの言葉に、ヨハンが少し遠い目をした。

「ミハエルがつまみ食いしようとするのを止めるのが大変だったのだから。花の収穫に回らせた」

「兄貴だつてちよつと揺れ動いてたじゃねーか」

「大丈夫だ。この野菜、今晚の夕食の材料になる」

ミハエルがむつとしたようにヨハンに突つかかれば、ノブレスが穏やかに笑った。彼の言葉に、兄2人は表情を輝かせる。

ネーナには兄の気持ちがよく分かった。どの野菜も、太陽の光を浴びてつやつやと輝いている。かぶりついたらおいしいに違いない。

新鮮な野菜を使った料理というのも魅力的だ。今日の食事当番はトリニテイ兄妹である。

『ガンダムマイスターたるもの、教養を持って』……だっけ

己の意志で判断を下し、己の力で道を切り開く。そのためのスキルと知識を磨けば、戦場を駆け抜け生き残る術に直結する。

ノブレスがいつも言っていた言葉を思い出しながら、ネーナは端末を引っ張り出した。料理サイトにアクセスし、冷蔵庫の残りを思い出しながら献立を練る。

そのとき、ノブレスの端末が唸るように着信を告げた。彼は端末画面を睨めっこし、深々とため息をつく。ヨハンがノブレスに問いかけた。

「どうしたんですか？」

「近々、キミたちの初任務が行われることになるという話は知っているな。……予定より、前倒しになるかもしれない」

仮面の下には、険しい顔があるのだろう。ただならぬ空気を感じ取り、ネーナは思わず息を飲む。

花と野菜が植えられた長閑な畑に、ぴりぴりと尖った気配が漂い始めた。皆、緊張している。

ノブレスはふつと表情を緩めた。

「たとえ前倒しになっても、変わらない。キミたちなら、やり遂げられる。僕はそう信じているよ」

「教官……」

「始まる前のことで悩んでいても仕方ないだろう。今日は、おいしい野菜を使ったおいしい料理をたくさん食べて、英気を養っておかなきやな」

ノブレスに促され、ネーナたちも彼に続く。

蠢く世界とは裏腹に、自分たちの世界は穏やかだった。

永遠に続くのではと思ってしまうくらい、平和だった。

35. 戦場へ

三大国家の誇るエース（パイロットおよび戦術指揮官）勢の交流会が開かれることになった。ユニオンの代表者として声がかかったのは、オーバーフラッグス部隊に属する面——グラハム、クーゴ、ハワード、ダリルらと、戦術指揮官の代表者たちだ。

AEUからはパトリック・コーラサワーやカティ・マネキンを筆頭とした面々、人革連からはセルゲイ・スミノルフやソーマ・ピーリスを筆頭とした面々が出席している。交流会ということもあって、雰囲気は和やかなはずだ。多少ピリピリしている部分に目を閉じれば。

上層部の思惑を、この交流会から探ることは困難だった。しかし、連携を密にするという意味では、現場の人間にとつてありがたい。

今回の軍事演習は、ガンダムの鹵獲を狙ったものだ。今のところどれだけの規模が参加するかは不明だが、相当な戦力が投入されることは明らかだろう。

以前、イデアおよびソレスタルビーイングに対して「敬意を持って立ち向かう」と宣言した手前、今回のコレは、彼女を裏切ったような気がしてならない。

「お前ら、ユニオンの代表者だよな？ トップガンは誰だ？」

思考に沈んでいたクーゴを現実に引き戻したのは、どこかで聞いたことのある声だった。

見上げれば、AEUの軍服に身を包んだ茶髪の色男がこちらに近づいてきた。クーゴは思わず首をひねる。彼は、どこかで。どこかで会ったことがあるような、気がする。

いつだっただろう。AEUの軍事演習場で、イナクトのデモンストレーションを務めていたパイロットがいた。初めてガンダムに介入され、完全敗北を喫したパイロット。

「失礼だが、キミは？」

「がふっ！」

真面目な顔をしたグラハムの発言に、A E Uの軍人が顔面からすっ転んだ。

奇跡ではないかと問いたくなるような、高校野球やプロ野球並みのスライディングである。

男はしたたか顔面を床にぶつけた後、がばりと顔を起こす。眦を吊り上げ、彼は怒った。

「俺はA E Uのスーパーエース、パトリック・コーラサワーだ！」

「俺の名前を知らないなんて、どこのモグリだ!」と、A E Uの軍人——パトリック・コーラサワーががなり立てる。

コーラサワー。その名前に、クーゴは聞き覚えがあった。頭を一気に回して、記憶を手繰り寄せる。

A E Uの軍事演習場。イナクトのお披露目会。ガンダムの介入。白と青基調のガンダムに叩きのめされたイナクト。コックピットから這い出して来て、がなり立てる男。

クーゴが顔を上げれば、丁度いいタイミングでグラハムが手を叩いた。

何を思ったのか、相手を値踏みするような眼差しをコーラサワーに向け、不敵な笑みを浮かべる。

「ああ、あのときのパイロットか。久しぶりだな」

「え？ 俺とアンタ、どっかで会ったっけ？」

「ガンダムの恐ろしさは、キミを通じて、しっかりこの目に焼き付けさせてもらったよ」

グラハムの言葉に、コーラサワーは頭の上に疑問符を浮かべた。しかし、すぐに合点がいったのだろう。ぎろりと目を剥いた。

コーラサワーにしてみれば、自分の敗北を他国のトップガンに見ら

れていたということになる。この上ない赤っ恥だ。

ハワードやダリルもちよっとだけ視線を逸らした。口元もしつかりガード済みである。コーラサワーにはバレバレであるが。

怒りに任せて拳を突き出しかけているコーラサワーであるが、必死になつて感情を抑えている。視線を向ければ、女性軍人——カティ・マネキンが鋭い眼差しでコーラサワーを見ていた。

大佐の前で醜態は晒せない——その想いだけが、彼の怒りを抑え込む最大の理由だった。ぎりぎり歯ぎしりして、手を戦慄かせている。対して、ニヤリとした笑みを崩さないグラハム。

これじゃあまるで、子ども同士の喧嘩だ。

(ああ、嫉妬だ。こいつ、ガンダムと初めて戦った相手に嫉妬してる)

クーゴは耐えきれなくなつたため息をついた。トップガン同士が何をしているのやら。

グラハムとコーラサワーは、おそらく似た者同士だ。性格はともかく、根本的にあるいろんなものが。

何とかして、この空気を変えなければ。クーゴが思案したときだった。不意に、頭の中に1つの単語が浮かぶ。次の瞬間、クーゴの口はその単語を紡いでいた。

『不死身』……』

「へ?」

ぽろりと零した単語に、コーラサワーが目を見黒くさせる。

「いや、キミの二つ名ではなかったかな、と……」

あれ、違ったか?

クーゴが問おうとして、言葉を止めた。

なぜ自分は、コーラサワーの二つ名を『不死身』だと思つたのだから

う。確かにコーラサワーは、ガンダムが現れて介入行動を行って以後、戦場では必ず撃墜されているという。しかも、その度にほぼ無償で帰還しているらしい。

ただ、二つ名に『不死身』が適用されるには、まだ数が少なかった。AEUとガンダムがぶつかり合ったのは、イナクトお披露目会とモラリア戦役による派兵だけだ。たった2回では、『不死身』の二つ名は名前負けだろう。

コーラサワーはしばらく『不死身』という単語を呟いては、うんうん考え込んでいた。クーゴの発言を聞いたフラッグファイターたちが「完全に名前負けした二つ名だ」「副隊長、一体どうしたんだろう」と言いたげにクーゴを見てくる。

そうして、コーラサワーが顔を上げた。その表情は、子どもみたくにきらきら輝いている。

『不死身のコーラサワー』……なんか、かつこいいな！ エースパイロットの俺様にこそ相応しいっ!!」

空を語るグラハムの様子がフラッシュバックしたのは、気のせいではない。

フラッグを語るグラハムの様子がフラッシュバックしたのは、気のせいではない。

刹那への愛を語るグラハムの様子がフラッシュバックしたのは、気のせいではない。

クーゴが思い付きで言った『不死身』は、コーラサワーのお気に召したようだった。先程のように険悪な空気にならなくて、本当によかった。

うんうん頷いたクーゴは、彼の二つ名の意味を噛みしめるようにして目を閉じる。脳裏に浮かんだ光景を辿るようにして、言葉が続けた。

「だな。自爆してもちゃんと帰ってきたんだし、傍にいた人間すら不

死身にしたんだし」

「えっ」

「えっ」

クーゴとコーラサワールの声が重なった。

あれ、とクーゴは首を傾げる。どうして自分は「コーラサワールが自爆してもちゃんと帰ってきた」ことや「そばにいた人間すら不死身にしたこと」を『知っていた』のだろう。

端末を確認すると、そのソースが出てきた。虚憶名、『空に咲く花／＼UX』。この虚憶は、未だに内容が穴だらけである。

鮮明になっている数少ない場面の中に、『不死身の二つ名を持つ軍人が、近くにいた別な軍人と自爆したはずなのに、彼を伴って無傷で帰ってきた』という場面があった。

そういえば、その軍人、目の前にいるコーラサワールと似ていた気がする。

補完するようにして描いていたイラストのデータを見れば、瓜二つの男が描かれていた。

着ている軍服はAEUのものではないが、顔も髪型も、まごうことなき『パトリック・コーラサワール』である。どうやら、虚憶の話をしてしまったようだ。

ならば、コーラサワール本人が覚えがないのも当然である。混乱するのも当然である。クーゴは苦笑した後、コーラサワールへと向き直った。

コーラサワールはじつとクーゴの様子を見ていたが、端末をいじって何かを確認していたクーゴの様子に何か気づいたのだろう。

「もしかして、お前、虚憶持ち？　もしくは記憶障害？」

「前者が正解。後者だったら、軍人になれないよ」

「お前若いのに凄いなあ！　しかもその年齢からして、飛び級の軍学校卒で即ユニオンの精鋭入りしたんだろ？　虚憶だけじゃなく、センスも一流ってか？」

「ユニオン期待のルーキー……俺の未来のライバルに相応しいぜ！」なんて、コーラサワーは上機嫌である。

彼の勘違いを察したユニオン代表者全員が、眉間に皺を寄せた。クーゴと対峙した者が必ず陥る間違いであった。

嘗て、自分も同じ間違いをしたことがあったグラハムが、渋い顔をしてコーラサワーの肩を叩いた。

「ひとつ、訂正がある」

「何だよ？」

「彼は私より年上だ」

沈黙。コーラサワーは目を瞬かせた後、グラハムの発言を頭の中で何度も繰り返した様子だった。

「……なあ。アンタ、何歳？」

コーラサワーが戦々恐々とした様子で問いかけてきた。

答えない理由はないので、クーゴは当たり前前のことを言うように年齢を告げた。

「28歳」

「嘘だあああ！どこからどう見てもティーンエイジにしか見えないぞ!!」

周囲がざわめく。軍人たちがクーゴを凝視し、ひそひそと話を始めた。大体が「外見から連想する年齢と、クーゴの実年齢がかなり差がある」ことに対する驚きである。

コーラサワーがおろおろしていたのを見かねたのだろう。奥からつかつかとマネキンがやって来た。ベリーショート黒髪に、眼鏡をかけた知的な女性だ。

申し訳ない、と彼女が頭を下げる。隣でコーラサワーはおろおろしていた。頭の中は、マネキンのコーラサワーに対する株が下がったことに対する焦りだろう。

東洋の神秘って怖い。周囲から、そんな声が聞こえてきた。

いつも間違われるので、別段気にしていない。

クーゴは微笑み、大丈夫だと告げた。

「車を運転すれば呼び止められ、夜の街を歩けば警察に連れていかれ、酒を購入しようとしたら店員に呼び止められた挙句店のバックヤードへ拉致されて説教され、免許証を提示すれば偽装だと決めつけられて警察署へ連れていかれるので、もう慣れましたよ。流石に腹立たしくなったので、現在では友人と一緒に行動するようになり、軍の証明証を持ち歩いたりしています」

「……そ、そうか。災難だな……」

クーゴは朗らかに返答すれば、マネキンが居たたまれない顔をする。災難すぎんじやねーかと、コーラサワーが口元をひきつらせた。

数分前までマネキンと談笑していたと思しき人革連の軍人——セルゲイ・スミノルフは何か思い当たることがあったようで、酷く遠い目をした。

セルゲイの右目には大きな傷跡がある。それが原因で、色々勘違いされたことがあったのかもしれない。例えば、危ない人に間違えられたとか。

不意に、学校に息子を迎えに行ったら凶悪犯と見間違えられて大変なことになっていた男性の姿が『視えた』。

その男性が彼によく似ていたように見えたのは、気のせいだったのだろうか。

確認する術は、ない。本人に尋ねてみるのも憚られた。

「まあ、うん。これから宜しく」

「お、おう！」

とりあえず、先程から放置気味だったコーラサワーへ手を差し伸べた。

乗り掛かった舟とでも言うかのように、コーラサワーも手を伸ばす。

AEUのトップガンと、ユニオンのトップガンの副官が、しっかりと握手を交わした。

交流会は、特に問題が起きることなく。

つつがなく進行していった。



そこは、絶望の淵に立つ英雄が作り上げた、哀しい世界だった。

そこは、3世紀以上も前に、実際に起こった戦争の光景だった。

思い出せ、と声がする。忘れるな、と声がする。クーゴの中に刻み込まれた、日本人のDNAが叫んでいる。胸が、痛い。

「皇軍だ、皇軍であるぞ！ あつはははー！」

そう叫びながら、敵兵に突っ込んで行った兵士がいた。次の瞬間、その兵士は弾丸で蜂の巣にされ、地面に転がった。

あるいは、そう叫びながら敵機に突っ込んで行った戦闘機があった。次の瞬間、眩い光が炸裂し、戦闘機が木端微塵に爆散した。

「とおーとう、とおーとう、かみふとうきがなしー、みまんでい呉みそおりー」

防空壕の中から声が聞こえる。次の瞬間、爆発音が響いた。手榴弾を使った、集団自決。

この場にいる誰もが息を飲む。この光景は本当にあつた出来事なのか、と、誰かが怯えた様子で問う声が聞こえた気がした。問い主はおそらく、未来に住まう日本人や日本を知らぬ外国人、あるいは地球を知らぬ宇宙の民たちだろう。

クーゴもまた、第2次世界大戦を知らぬ「未来の日本人」の1人だ。歴史の教科書でさりと触れる程度でしか習っていない。教科書の時点で沈痛な気持ちになったのだ。追体験として現状に光景を示されて、何も思わぬわけがない。

カイルスの面々だつてそうだ。争いを止めて地球を守りたいと願う人たちが集まり生み出された集団である。誰もが息を飲み、愕然とその光景を眺めていた。それが人の業なのか、と、戦く声が聞こえてきた気もする。

「ここは……大東亜戦争時代の沖縄か」

加藤が何かを思い返すように、その光景を見つめていた。

彼はかつて、滅びの未来から過去の世界へと降り立ち、第二次世界大戦を経験している。

石神は過去の世界の人間だが、加藤と出会ったことで戦場の行く末を知っていたはずだ。

件の男は、「子どもまで犠牲にした惨劇が、本当にあったことなのか」というつばきの問いに対し、是と肯定した。

険しい顔をしながら沖縄戦の惨状を眺めている。石神も、この光景をよく知っていたのだろう。

「沖縄戦だけではない。目を逸らすな、地上人！」

サコミズ王の声がした。光景が切り替わる。

落とされた爆弾。消し飛んだ街並み。空に現れたキノコ雲。クーゴはその光景を、教科書の写真で見たことがある。日本人としてのDNAが戦慄いた。

黒こげになった人間。皮膚がべろりと剥がれた、人のような何か。異様な人間たちが、そろそろと川へ向かって行進する。彼らは水を求めているのだ。

水を口にした人間が、次から次に動かなくなった。屍が累々と築かれていく。海の干潮と満潮で川の水位が変化する中で、死体はあつという間に水に沈んでしまった。

それだけではない。軽傷だった人間が、突然立ちくらみを訴えた。髪の毛がごっそりと抜けた。そのまま倒れ、血を吐きながら死んでいった。

放射能に被爆したことで、軽傷あるいは無傷だったはずの人間が次々と倒れていく。原爆の被害は、爆発による死者だけでは収まらなかったのだ。

広島で。長崎で。その地獄は繰り返された。小倉に落とされるはずだった3発目を防いだのは、目の前にいるサコミズ王本人である。

「こんな……こんな、ことが……！」

「っ……!!」

グラハムと刹那が息を飲む。自分たちが関わった戦いや、自分たちの過去に根差す戦場の光景からでは想像できない地獄絵図だ。

戦禍に飲まれる世界の中で、鮮やかな真紅の羽が舞い落ちている。羽の存在に気づいたシンジが首を傾げた。

「いの羽はっ。」

「命の羽……、死んでいった人たちの命の色だよ」

「これが、サコミズ王が体験した嘗ての戦争なんです」

彼の問いに、エレボスが答える。

エイサップは、沈痛な面持ちで語った。彼もまた、サコミズ王のリーンの翼を介して、この光景を見たのだろう。他の面々より幾分か落ち着いているものの、心の中では強い感情がぐるぐると渦巻いてい

る。

こんな戦争は二度と起こしてはならない。過ちは繰り返してはならない。教科書に書かれていた言葉を、碑に刻まれていた言葉を、クーゴは思い返した。けれど人類は、過ちを繰り返している。戦禍を広げ続けている。

死者の命の色が赤なら、生者の命の色はきつと青だ。己の持つ輝きの色を思い返しながら、クーゴは羽の行方を見つめた。

イデアたちも、痛々しい顔でその戦禍を見つめている。目を逸らしてなるものかと、己自身に言い聞かせるように。

この悲しみを忘れて、人類は戦いを始めている。その度に後悔して、その度に忘れてを繰り返しているのだ。

「それをわかっているのに、繰り返しているのか。俺たちは……」

アスランが噛みしめるように呟いた。そうだと、サコミズ王がいきり立つ。次の瞬間、オウカ■の纏うオーラが肥大した。

行き場のない怒り、悲しみ、憎しみが渦巻く。怒髪天を突く、という言葉が頭によぎったのは何故だろう。

「故に、この苦しみを貴様らにもわからせる！」

真紅の羽が激しい光を放った。その輝きが、徐々に機体の姿を取り始める。目の前に現れたのは、カイルスの部隊を構成するMSやロボットたちだ。

ミレ□ナが驚きの声を上げながらも、仲間たちにその異変を伝えた。機体反応は徐々に増え続けているという。周囲に動揺が走った。

「間違った道を歩んだツケは、自らの手で払えよなあ！」

未来に対する怒りと悲しみを、サコミズ王はぶつけてきた。

現在生きる命たちに、嘗ての死者が問いかける。

「己が命を賭けて守った未来には、その価値があつたのか」と。
「今の地球は、英霊^{かのひと}たちが守ろうとした『未来』に足るものだったのか」と。

「死者の魂の嘆きを否定するならあ、自らの魂で答えてみるよおおお！」

サコミズ王が叫んだのと同時に、カイルスの機体を模したものたちが襲い掛かる！

仲間たちはそれらを迎撃した。未来を信じ、戦い続ける。過去の悲しみと、未来への想いがぶつかり合った。

「僕たちは、死者の嘆きを否定するつもりはありません！ ただ、知りたいんです。過去と未来を繋ぐ、その想いを！」

だから伝えてほしい、と青年は言った。教えてほしい、と青年は言った。

彼の言葉に呼応するように、白と青のガンダムが青い光を纏う。

それに続くようにして、アイデアと純白のガンダムも青い光を纏った。

「そして、知ってほしい。現代^{私たち}人が持つ希望と、未来への想いを！」

「自らの魂で答えろというなら、全力で応えさせてもらおう！ この魂を賭けて!!」

クーゴもそれに続く。ブレ■ブの操縦桿を動かし、能力を開放する。真空色の機体が、鮮やかな青の光を纏った。

そのまま全速力で突っ込み、カイルスの機体を模した影たちを切り伏せていく。

円環の輪を壊し、未来へ続く道を切り開くために。

◇

卑怯者。

今の自分には、多分、ぴったりの言葉なのだろうと思う。

これ程までに似合ってほしくなかった言葉は、未だかつてない。

(物量特化で押し通す、ね)

作戦プランを反復しながら、クーゴは深々と息を吐いた。三大国家がソレストルビーイングにしようとしているのは、第二次世界大戦で連合国が枢軸国にやったことと同じようなものだ。少数精鋭より、数で押し通す方が有利であることは歴史が証明している。

例え話に第2次世界大戦が出てきたのは、最近、虚憶^{きよおく}調査で『桜花嵐/U X』や『大和魂の嘆き/CC』を見ていたからだろう。サコミズ王の嘆き具合を考えると、何とも言えない気持ちになる。突き刺さるような痛みを感じて、クーゴは肘をさすった。

フラッグファイターたち総勢16名の中で、体を丸めているのはクーゴだけだろう。場違いにも程がある。クーゴは深々と息を吐き、画面に向き直った。作戦プランについての情報が映し出されている。10時間を超える長丁場だ。気を引き締めなくては。

『オーバーフラッグス隊は、命令があるまで待機です』

通信越しから、通信担当者が待機命令を伝えてきた。

仲間たちもそれに頷き、真剣な面持ちで画面を見つめる。

部隊総数は52、参加MSは852機。投入されたMDの数は、三国合わせて250機だ。

こんなものは『戦争という名前を借りた、一方的な蹂躪』としか言えない。もしくは虐めだ。タチが悪い系の。

「卑怯者と罵られようとも、軍の決定には従わせてもらおうぞ。ガンダム」

そう言いきったグラハムの顔は、真剣そのものだ。複雑そうな色をほんのわずかにちらつかせただけで、すぐに職務を全うする軍人の横顔へと変貌する。

蟠りを抱えながらも、ただまっすぐに相手に向き合う。見習いたいものだ、と、クーゴは呟いた。もちろん心の中で。

作戦開始まで、時間はまだ充分すぎるほど残されている。クーゴは立ち上がり、部屋を出た。この時間を利用して、適当な場所で『Toward the Terra』を読み進めておくつもりでいる。

現在、人類篇の上巻を読み終えて、『ミユウ』篇の下巻を読み進めているところだ。新天地で穏やかに暮らす『ミユウ』たちの暮らしに、人類の間の手が迫る部分まで読み進めている。丁度、ソルジャー・ブルーが目覚めたあたりだ。

そこから先に進むことができないでいた。早く読み進めなければ、『悪の組織』からの技術協力が打ち切りになってしまいかねない。ちなみに、グラハムは人類篇の上巻を読み進めているという。

部屋から本を引っ張り出し、適当なラウンジを見つけて座る。さあ本を読むぞと意気込んで――

「あ」

少し離れた場所に座り、本を読んでいたジョシユアの存在に気づいた。

彼が手に持っているのは、『Toward the Terra』人類篇の下巻。

互いが互いに、物珍しいものを見たような眼差しを向け合う。

「……なあ。アンタもこれ、読んでるのか？」

おずおずとジョシユアが問いかけてきた。クーゴが頷けば、ほんの少しだけ、表情が明るくなったような気がする。

まるで、子どもみたくないな笑い方だ。普段の嫌味節全開のジョシユアからは想像できない。彼も、そんな風に笑うのか。

なんとなく微笑ましい気持ちになって、クーゴも頬を緩ませた。

「俺、この物語の登場人物の中で、シロエとブルーが好きなんだ。シロエが死んじゃったときは、かなりショックだったんだよ」

クーゴが話を切り出せば、ジョシユアは目を点にした。こちらを馬鹿にするような態度はないが、何とも言い難そうに目を右往左往させている。

言うべきか言わざるべきか、真剣に悩んでいる様子だった。ジョシユアは一体、どうしてしまったのだろう。

もしかして、ジョシユアはこの先を読んだことがあるのだろうか。『ミュウ』篇の話を読んだことがあったのだろうか。

どうかしたのかと問えば、ジョシユアは言葉を濁した。なんとも居心地悪そうにしている。

この空気をぶち壊すかのように、クーゴを呼んだ声があった。振り返れば、グラハムが大きく手を振っている。振っていない方の手に抱えられているのは、『Toward the Terra』の人類篇上巻だ。

途端にジョシユアが嫌そうな顔をする。逃げようか否か迷うようなそぶりを見せている間に、グラハムはクーゴたちの元へと歩み寄っていた。

退路を塞がれたジョシユアは苦い表情を浮かべている。どうやら、ジョシユアはグラハムに対して苦手／対抗意識があるらしい。

(その割には、好みのものがよく似ているんだよなあ)

グラハムとジョシユアのやり取りを眺めながら、クーゴは生温かい笑みを浮かべてそれを見守っていた。

出撃の時間が、刻々と近づく。

それと反比例するような、穏やかな時間が流れていた。

蛇足だが、2人のやり取りをなだめすかしたり止めたりするのに手一杯で、本を読み進められなかったことを追記しておく。



どうして自分たちはこんな目に合っているのだろうか。

アイデアは荒い呼吸のまま、降り注ぐ物量攻撃を堪えていた。

最初にここに来たときは、まだ空は青かった。

攻撃に晒され早15時間強。夕焼けは沈み、夜のとぼりが落ちかけている。

昼食休憩も取れていないし、操縦桿を握る手の感覚もなくなってきている。

(タクマラカン砂漠のテロリストを退治に來ただけなのに、なんで三大国家陣営から包囲されて、攻撃を受けてるんでしょうかっ!?)

自分自身に問題を出してみた。疲れすぎて頭がちよつとぼかし、ハイになってるとしか思えない。

(答えは、『テロリスト襲来を予期していて、且つ、私たちがやって来るのも予測していた三大国家陣営が、ガンダムを鹵獲するために罠を張っていたから』です!)

どこからか、正解を告げる音が響いた気がする。次の瞬間、上空から大量のミサイルが降り注いで来た!

シールドを展開し、ミサイル群をやり過ごす。いくらシールドを張ったとしても、機体への衝撃は計り知れない。

喉から呻き声が漏れた。歯を食いしばりながら、イデアは反撃を開始する。スターゲイザーはシールドを解除し、レーザーガンの照準を向けた。

まるで餌に群がる虫のように、フラッグやイナクト、ティエレンやモビルアーマーM Aたちが襲い掛かってくる。狙いを定めて撃ち放つが、ロックオンのような射撃テクニクは持っていない。いともたやすく回避された。

降り注ぐ攻撃に晒された。機体に傷はついていないけれど、攻撃の衝撃はダイレクトに伝わってくる。耐えきれず、イデアは派手にせき込んだ。荒い呼吸のまま、それでもまだ、闘志は折れていない。負けるつもりは微塵もなかった。

「っ、アーチャー！ 1番から6番！」

光輪についた宝石のビットが外れ、四方八方に乱れ撃つ！

その一撃や流れ弾を喰らった機体が次々と爆散した。だが、数は一向に減らない。そんな攻撃がどうしたといわんばかりに、砲撃とミサイルの雨あられが降り注ぐ！

重量火力と防御に特化したヴァーチェを守っていたエクシアが膝をつく。キュリオスとデユナメスも、ろくに反撃体制が取れない。八方塞がりだ。

守らねば。イデアは荒い息呼吸を繰り返しながら、操縦桿を握り締めた。大切な人と交わした、大切な約束。イデアを突き動かす、大切な理由。

ガンダムマイスターたちは、希望だ。
来るべき刻ときに訪れる、人類の未来のための。

（奪わせない。絶やさせない。——絶対に！）

操縦桿を握り締める。彼らを守るのが、自分の役目だ。

「皆、ちよつとキツイかもしれないけど、一か所に集まって！」

「ええっ!？」

「何!？」

「待て！ それじゃあ相手にとっていい的だ！ 共倒れの危険性も……」

「いいから！ 私が時間を稼ぐから、ティエリアはGNバズーカのチャージを！ ロックオンは、新型ライフルを一掃モードに切り替えて！」

「キミに言われる必要はない！ もうやっている!!」

「何か手があるんだろうな!?! 信じるぞ！」

アイデアの言葉を聞いた仲間たちは、攻撃をやり過ぎしながらも一か所に集まる。ヴァーチェはGNバズーカのチャージを始め、デユナメスが新型ライフルにカードリッジを装填する。カードリッジには、予め高濃度圧縮されたGN粒子が込められており、装填さえすればチャージなしで撃ち放てた。

しかし、今回の場合は敵機を一掃する必要がある。GNバズーカ発射と同じタイミングに合わせ、砲撃を撃ち放つのだ。そこまで考えて、今回の任務に合わせてデユナメスのライフルがリニューアルされたことを改めて思い出した。

元になった武装は、アレルヤが『スターダスト・トレイマー』の機体から譲り受けた銃である。普段は精密射撃専用のモードとなっているが、モードを切り替えカードリッジを装填することで、バズーカのような威力重視の攻撃も可能だ。

カードリッジは、大気圏スナイピングに使った圧縮チャージ用の装備と同じ役割を持っている。

そう考えると、随分と小型化したものだ。イアンが分解した銃とカードリッジを眺めては唸っていた姿を思い出す。

アイデアは仲間たちの様子を確認した後、スターゲイザーの操縦桿を

動かした。スターゲイザーは、仲間たちを守るようにして砂地から浮かび上がる。

そのタイミングを待っていたかのように、敵機やミサイルの群れが突っ込んでくる！

スターゲイザーは、それらすべてからガンダムたちを守るようにして手を広げた。

「ぐううう……ッ、——おおおおおおおッ!!」

GN粒子のシールドを展開させつつ、イデア自身の能力も解放した。普段は自身を包む程度でしか展開できぬシールドを、仲間たち全員を守り通すほどの大きさを展開する！

シールドを包み込むようにして、すさまじい風が巻き起こった。砂漠の砂を巻き上げ、この場一体を震撼させるほどの砂嵐を生み出す！誰かが息を飲んだ声が聞こえた気がした。刹那、敵機とミサイル攻撃のすべてを巻き込み、爆発を引き起こさせる。しかしそれらは、壁を揺るがすには至らない。

砂嵐が晴れた。巨大なドーム型のシールドを目の当たりにしても尚、敵の攻撃は緩まない。突っ込んできた無人機が、シールドに触れた途端に爆散した。

全ての攻撃は、スターゲイザーが展開した鉄壁の前に成す術なく弾き飛ばされ、吹き飛ばされた。

その間にも、ヴァーチェのGNバズーカはチャージを続けていた。あと、もう少し。

「GN粒子圧縮率、97.58%……発射準備完了ッ！——イデア！」

「待ってました！ シールド解除！」

テイエリアからの通信が入る。チャージ完了を告げるそれに、イデアは笑みを浮かべてシールドを解いた。

間髪入れず、ヴァーチエのバズーカとデユナメスの一掃用にチェンジされたライフルが唸る！ 紫色の光が、周囲を覆い尽くしていた敵機を殲滅した。

何機のフラッグが、テイエレンが、イナクトが吹き飛んだだろう。戦線は崩壊し、沈黙した。荒い呼吸が響き渡る。

「今だ、撤退するぞー！」

ロックオンの声を皮切りに、各機がばらけて離脱を行う。

荒い呼吸を整えながら、イデアもそれに従おうとし——ハツとした。

そうこうしている間にも、仲間たちはバラバラに分かれて行ってしまふ。

「だめー。まだ……いいえ、本体が来る——!!」

イデアの警告は、背後からの攻撃によって阻まれた。攻撃に気づいて、慌てて緊急回避を取る。砂漠の大地が一気にえぐられた。

砲撃の主は見えない。変わりに、見知らぬ機体が大量のMD部隊を引き連れ飛来した。黒基調の機体を中心に、ビルゴ、トーラス、ファルシアたちが降り立つ。

あの黒基調の機体が、MDたちを操るアンテナの役割を持っている。どうやらあの機体は有人機らしい。

今日は本当に厄日だ——イデアは荒い呼吸のまま苦い表情を浮かべた。

力を使い果たしたところを叩くのは、戦術論の基本である。でも、人としてそれはどうだろう。

なんて言っても、敵は待つてくれない。イデアは腹をくくって、敵と対峙することにした。



待ち続けて15時間強で、発進要請が出た。待つてましたと勇ましく、フラッグファイターたちが格納庫へ集結する。

新しくなったフラッグのカメラアイ付近がきらりと輝いた。早く戦いに行きたいと言っているかのように。

これから宜しく、と、クーゴはそつと囁いた。応えるようにしてまた、目元付近がちかりと瞬く。

気のせいだと人は言うのかもしれない。でも、クーゴには、フラッグがそう主張しているようにしか思えなかった。

真つ先にグラハムが乗り込む。ハワードやダリル、ジョシユアがフラッグに乗り込むのが見えた。クーゴもフラッグに乗り込む。

先陣を切ったのは、オーバーフラッグス隊の隊長、グラハム・エーカーだ。彼に続いて、クーゴも準備する。

「クーゴ・ハガネ、出る！」

滑走路を滑るようにして、フラッグが夕闇へと飛び出す。他の面々のフラッグも、すぐに自分たちの元へと飛び出してきた。誰1人欠けることなく、無事に飛べたようだ。

作戦ポイントの座標を見つめながら、クーゴはグラハムの隣へ並んだ。他の面々も隊列を組む。16機のフラッグは、夕闇の空へ整然と並んだ。風を切るようにして飛んでいく。

(さて)

カメラアイ越しから見る空を眺めつつ、クーゴは思いを馳せる。

あの砂漠に、アイデアの駆るガンダムがいるのだろうか。

落日を思わせるほど寂しい空を翔けながら、オーバーフラッグス部隊は飛んでいく。

戦いの刻は近い。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

3.6. 大混戦、大量発生、大問題

夕闇に覆われた砂漠を翔る16機のフラッグから数百メートルほど離れた場所に、MDで組まれた隊が見えた。機体構成はビルゴ、トールラス、ファルシアに、ようやく合流した操作作用の友人機および無人機としての併用可能な機体——ゼダス。

ゼダスはMDを遠隔操作することが可能なだけでなく、自身もまた遠隔操作による行動が可能だ。MDを操るMSとしてだけでなく、MDとしても運用できる機体である。MDに搭載された自立思考回路だけではカバーできない、細かな部分を動かすという役割を担っていた。

『MDとしても使用可能』という触れこみは伊達ではないようで、両掌に装備されたビームバルカン、ビームバルカンの砲口から発生させるビームサーベル、胸部に内蔵されたビームキャノン、高い斬撃力を持つ高周波ブレード——ゼダスソードという4種類の武装を持っている。

今、オーバーフラッグス部隊の周囲を取り囲むような形で、MD部隊の3部隊が飛んでいた。部隊の中心にいるゼダスが有人機体だ。

ゼダスのパイロットについてはわかっていない。ユニオン、AEU、人革連の中には、該当者はいなかった。

(十中八九、PMCトラス側の人間だよな。でも、それに関する情報は非公開……キナ臭いにも程があるぞ)

クーゴはそんなことを考えながら、砂漠を見回す。作戦ポイント到達まで時間と距離は充分あるが、道中でガンダムと接触する可能性は否めない。

地上では、ティエレン部隊が進んでいる。肉眼で視認できるぎりぎりの位置に、イナクトの群れがちらついていた。

しかしながら、やはり引つかかるのは、オーバーフラッグス部隊を包囲するような位置に陣取るMD部隊だった。

背中に悪寒が走る。以前、ユニオンで起こったMD暴走事故を思い出し、クーゴは苦い表情を浮かべた。

原因は未だ不明。有力かと思われる説は、『共有者コウウアレンターもしくは虚憶持きよおくちを襲うバグがある』というものだ。

MD暴走事件はユニオンの一件のみ。しかも、主張する人間がセキ・レイ・シロエという一介のジャーナリストのためか、信憑性は薄いとされている。

「……しかし、気になるな」

視界の端にちらつくMD部隊に、クーゴは胸騒ぎを感じていた。MD暴走事故が起きる直前、新武装のテストに挑む前の悪寒と同じものが背中を撫でる。

何故、MD部隊はオーバーフラッグス隊の周辺にいるのだろう。こちらを標的としている訳でもあるまいし。

「なあ、グラハム」

「どうした？」

「何故MD部隊が俺たちの周りを飛んでるんだ？ 戦術プランを確認したときには、そんな話は聞いていないんだが」

クーゴの言葉に、グラハムは少し考え込むように視線を落とした。確かに、と、映像越しで彼の口元が動く。

「前回、MDが暴走してキミを襲ったときも、キミの近くでMDの稼働が行われていたな」

「しかも、稼働実験で使われていたすべてのMDが襲い掛かってきた。あれは本当に壮観だったぞ。二度と拝みたくないレベルだな」

150mガーベラがなかったら、おそらくMD部隊を沈黙させることはできなかつただろう。いや、そもそも、MDの稼働実験が行わ

れていなければ、今回のような嫌な予感を感じることなく、周囲を飛ぶMD部隊を眺めていただろう。

もし、ここで飛んでいるMDたちすべてがこちらに襲い掛かって来たら、オーバーフラッグス部隊の戦列は崩壊する。ガンダムと戦う前に戦線崩壊なんてことになったら、本当にシヤレにならない事態だ。接触した後でもごめん被るが。

仲間たちの不安を煽るような真似はしたくない。

しかし、何も知らないままでは、万が一という可能性もあり得る。

しばし悩んだ後、クーゴはオーバーフラッグス部隊全機の無線を開いた。

注意事項として、面々に通達する。

「以前、ユニオンでMDの暴走事故が起きたことは知ってるな？ その事故に巻き込まれた人間として言うておく。万が一の可能性も考慮して、MD部隊の動きに注意してくれ」

「了解！」

「わかりました！」

「副隊長も注意してくださいね」

「そんな大げさな。……でも、気には留めておきますよ？ 副隊長殿」

オーバーフラッグス部隊全員が返事を返す。皆、不安や翳りを感じさせぬ不敵な笑みを浮かべていた。そのことに安堵し、クーゴは前を向く。

リーダーが作戦ポイント到着を告げた。広がる砂漠の中に、砂地が異常に凹んだ場所があった。超火力に特化した、白と紫基調のガンダムがやったのだろう。

凹んだ砂地に身を隠していた機影があった。白と緑基調のガンダムだ。スナイパーライフルを構え、蟻のように群がるMS部隊を確実に墜おとしていく。

気のせいだろうか。グラハムがちよつとだけ落胆したような気配がした。しかし、彼はすぐに割り切るようにして敵を見据える。

グラハムの本命は、刹那が駆る白と青基調のガンダムだ。戦場で対峙する可能性に賭けていた節があったのだろう。白と緑基調の方は次鋒あたりか。

「コマンダー、目標を視認。作戦行動に入る。オーバーフラッグス隊、フォーメーションEでミッシェンを開始する！」

グラハムの声が、部隊全体に響き渡った。了解、と、クーゴが応える間もなく、ダリルの通信が割り込む。

「隊長！ ジョシユアが！」

その言葉につられて見れば、ジョシユアのフラッグが戦列を離れて突っ込んでいくのが見えた。彼が突っ込む先にいるのは、白と緑基調のガンダムだ。

仲間たちの制止を振り切るようにして、ジョシユアのフラッグは加速する。己の技量に対する絶大な自信と、功を挙げたいという焦りの感情が伝わってきた。

寒気がする。脳裏に浮かんだのは、爆散したフラッグ。

「——っ、すまん！ 頼む！」

「副隊長!？」

今感じた予感を言葉にする時間も惜しい。クーゴは即座に操縦桿を動かし、ジョシユアの元へと向かう。速度的に、どう考えても間に合わない。

ジョシユアも、クーゴからの横槍を振り払おうと更に加速する。伝わってきた感情は、負けず嫌いの子どもに近いものだった。

悪寒がますます強くなった。狙われている。誰が？ 誰に？ その答えを追い求めるように、クーゴもフラッグを加速させる。

『対象視認』

声がした。以前聞いた機械音とは違う、少しくぐもった人の声。

『作戦行動へ移行』

声がした。くぐもっているが、ソプラノの響きを宿した少年の声。

『フォーメーションD、プランA―1で、ミッション開始』

声がした。この場一体に、言いようのない殺意が爆ぜる！

「そのまま行くんじゃない、ジョシユア！」

「——って、うおお!？」

クーゴの叫び声が届いたのか否か、ジョシユアのフラッグは急ブレーキ気味に空中変形した。その際、上昇させるように操縦桿を動かしたのだろう。降り注いだビーム攻撃は、ジョシユアがそのまま加速して突っ込んでいたら到達していたと思しき位置を過ぎて砂漠に着弾する。

空中変形したのはジョシユアのフラッグだけではない。クーゴもまた、急ブレーキ気味に、フラッグをMSモードへと可変させていた。もし飛行形態のまま突っ込んでいたら到達していたであろう位置に、攻撃が着弾する。派手に砂が上がり、砂漠の大地が大きくえぐれた。

あとコンマ数秒反応が遅かったら、フラッグは跡形も残らず爆散していたに違いない。ゾツとする。反射的に上を見上げれば、隊列を組んでいたオーバーフラッグス隊がMDの攻撃に晒されていた。自分たちを取り囲むような布陣で、MD部隊が配属されていたためだろう。

「い、言われてなかったら突っ込んでた……!」

ジヨシユアが小さく呟く声があった。なんやかんやで、クーゴの忠告を気にしてくれていたらしい。

先程から感じていた嫌な予感、やはりMDの暴走に絡んだものだったようだ。

おまけに、万が一の注意が現実になっているとは。これではガンダム鹵獲以前の問題ではないか。

『おい、どうした!? 何故オーバーフラッグス隊が、MD部隊からの攻撃を受けているんだ!?』

『大変です! この戦場に現存するMDの大半が、オーバーフラッグス隊に殺到しています!』

『残りの半分は、〃輪っか付き〃の方へ殺到! しかも制御不能だつて!? 何がどうなってるんだ!?』

『どうしてこんなときに……!!』

通信を開いていた覚えはないのに、管制室からの悲鳴がはつきりと『聞こえる』。部隊が異常事態に見舞われているのは、ユニオン軍——しかも、オーバーフラッグス隊だけらしい。

『大佐! 我が軍所属のMDたちが、ユニオンの精鋭部隊に襲い掛かっています!』

『くっ……! 至急、ゼダスのパイロットに通信を!』

『ダメです! ゼダス、応答しません!!』

『大佐、ガンダムを鹵獲しましたー!』

『パトリック、至急オーバーフラッグス隊の援護へ向かえ! MD部隊が、彼らに襲い掛かっている!』

『はあ!? つ、了解しました! ——おいゼダス、応答しろ! ゼダス! 俺の友僚に何しやがる!? こら、答えろお!!』

『中佐! MDが勝手に!!』

『馬鹿な……一体何が起きたというのだ!?!』

『中佐、羽根つきを鹵獲しました』

『少尉！ ユニオン軍に異常が発生した！ 至急そちらの援護へ向かうぞー!』

MDに関する異変は、どうやら全陣営で起きたようだ。

ユニオンで起こった一件の再来に、どこもかしこも大慌てらしい。しかも、被害にあっているのはユニオンのみ。後で色々大問題になるだろう。

閑話休題。

「ジョシユア!」

「ッ、言われなくとも!」

功を立てる以前の問題だ。斜め後ろにいたジョシユアに声をかければ、彼はすぐにフラッグを上昇させた。

クーゴも仲間たちの元へと合流し、襲い掛かってくるMDを片っ端からなぎ倒していく。

文字通りの大混戦。ガンダムを鹵獲なんてやっている場合ではない。

『なんだかよくわからんが、撤退するチャンスだ。ハロー!』

『イマノウチ、イマノウチ!』

『――シグナル、覚醒予備軍個体と判明。攻撃対象に追加する。フォーメーションGへ変更、プランD―2に移行。殲滅続行』

どこからか、青年の声と機械音が聞こえた。おそらく、白と緑基調のガンダムのパイロットたちだろう。彼らはオーバーフラッグス部隊を襲ったMD暴走のドサクサに紛れて逃げようとしていた。

しかし、MDが殲滅すべき相手に彼もリストアップされている。幼い少年の声が、その事実を淡々と告げていた。彼はまだ、自分が狙わ

れている事実気づいていない。ゼダスが指揮をするように実体剣ゼダスソードを振り上げれば、ガンダム元へファルシアたちが殺到する！

「気を付けろ、ガンダムのパイロット！ お前もターゲットに入ってる!!」

『何イ!?!』

『テツキセツキン！ テツキセツキン!』

『畜生、俺も巻き添えかよ！ いい加減休ませてほしいもんだぜ!!』

クーゴの警告に、ガンダムのパイロットが悲鳴を上げた。戦い始めてわずか数十分であるクーゴたちとは対照的に、ガンダムのパイロットは15時間以上ぶっ続けて戦っている。パイロットの叫びも尤もだ。原因はクーゴたち側にあるのだが。

さて、自分たちは何の目的があつてタクマラカン砂漠へやって来たのだろうか。少なくとも、MDを相手取って大立ち回りをするためではなかったはずだ。おまけに、ガンダム鹵獲のための部隊だというのに、MDたちはガンダムを殲滅するつもりで攻撃を放っている。

ガンダムのシールドは機械が制御を担当しているようだ。しかし、機械制御がどうしたと言わんばかりに、四方八方からレーザーのシャワーが降ってきた。自動防御で悲鳴がこだまするくらいだ。防御系統は自前で操らねばならないフラッグには、いささか厳しい。

主に狙われているのはクーゴ、次点でグラハム、その他同率でフラッグファイターとガンダムのパイロットだ。

ライフルで牽制し、ガベラストレートでレーザー攻撃ごと敵機を叩き切る。この場の混迷を抜けるために。



「なあグラハム！俺たち、何時間こうしてるんだっけ!？」

「飛び立ったのが昨日の夜だからな、4、5時間程だろう。それでもまだ来るか……!!」

クーゴの問いかけに、グラハムは剣呑な面持ちで返答した。MDの群れは未だ健在。有人機であるはずなのに、ゼダスのパイロットたちは誰1人として通信に返答しようとする者はいない。そもそも、通信回路も開いていない様子だった。

この異常事態を收拾するためには、MDを操っているゼダスに、MDの暴走を止めさせるのが一番だ。それが不可能となるなら、MDの破壊およびゼダスを墜おとさねばならない。現在進行形ではあるが、友軍同士のぶつかり合いとなってしまうている。

無人機で疲れ知らずのMDたちに対して、クーゴたちは人間だ。いくら精鋭といえど、疲労が蓄積されれば動きが鈍る。

その隙をMDたちが逃すはずもない。レーザー攻撃が、味方のフラッグを撃ち抜いた！爆発音が響き、断線する通信。

「畜生、ランデイがやられた!」

ハウードの悔しそうな声が響いた。その悲しみに暮れる暇はない。彼は怒りをぶつけるように、MDに反撃を加えた。

フラッグが撃ち放ったライフルが、ランデイのフラッグを撃墜した。ファルシアの頭部をぶち抜く。

視界の端で、スチュアートの乗るフラッグが撃墜されたのが見えた。

「いつになったら止むんだ、この攻撃は……! このままでは……!」

「お前、それでもフラッグファイターか!?! 精鋭部隊が聞いて呆れるぞ!」

弱音を零したダリルをジョシユアが叱咤する。ジョシユアだって、この地獄のような現状に弱音を吐きたかったはずだ。

だが、彼が踏みとどまろうとするのは、フラッグファイター、およびアラスカ基地のトップガンとしての矜持とプライドからだろう。

ジョシユアは即座にライフルを撃ち放った。弾丸は、ダリルに迫っていたトールスの顔面に直撃する。

してやったり、と笑うジョシユアの背後に、ゼダスがゼダスソードを構えて突進してきた。ジョシユアのフラッグもソニックブレイドで応戦しようとするが、罅迫り合いに押し負けて弾き飛ばされてしまう。

だが、ゼダスソードの追撃は、ジョシユアのフラッグに叩きこまれることはなかった。寸でのところで、死角に回り込んだダリルのフラッグがソニックブレイドでゼダスの右腕を切り落としたのだ。そのまま薙ぎ払い、横一線にゼダスを切り裂く。

今度はダリルが笑い返した。ジョシユアが苦い表情を浮かべつつ、MDたちの掃討に精を出す。

「いい加減にしろよ、この野郎！」

「ゼダスのパイロットは、何を考えていやがるんだか……！」

後ろの方では、アキラとハワードがビルゴ部隊をなぎ倒していたところだった。

チーム攻撃を無効化する相手には、実弾や実体剣で対応するしかない。

「クーゴー！」

「了解！」

彼らが頑張っているのだ。自分たちだって、ここで倒れるわけにはいかないだろう。

クーゴとグラハムも、MDたちを迎撃していく。

『あーもう、答えろって言ってるだろ!? そつちがその気なら容赦しないぞ!』

離れた場所で、コーラサワアのイナクトと、MD部隊を率いるゼダスが鏝迫り合いを繰り返していた。

『邪魔をするな、モビルドール機械人形風情が!』

『ゼダス、応答しろ! く、聞く耳持たずか……!』

別の場所で、セルゲイのティエレンやピーリスのティエレンタオツと、MD部隊を率いるゼダスが鏝迫り合いを繰り返していた。

どこに潜んでいたのかはわからない。しかし、この機を待っていたとでもいうかのように、新たなMD部隊が出現したのだ。援護に向かうとした他国軍に立ちほだかる。

これでは援軍を望むことは不可能である。混迷する戦場に、どうかケリを付ける方法はないか——そう思っていたときだった。

数百メートル先で、突如爆発音が響いた。空と大地の間に、沢山の火花と黒煙が花を咲かせている。誰かが一掃兵器を使ったのだろうか?

確認する間もなくレーダーが鳴り響く。反応は、ガンダム。数百メートル上空をカメラで拡大すると、イデアが翔る純白のガンダムが映し出された。

彼女の翔るガンダムは、恐ろしい勢いでこちらに突っ込んできた。流星を思わせるような速さと、普段からは想像できないような荒々しい調子で、MDたちの元を通過していく。

次の瞬間、MDたちの大半が、何の攻撃も受けていないのに爆発四散した。あまりの出来事に息を飲む。降り注ぐ破片に我に返り、クーゴは慌てて操縦桿を動かした。

『——シグナル、タイプ・ブルー荒ぶる青覚醒個体と判明。優先攻撃対象を変更する。』

フォーメーションBへ変更、プランE―7に移行。殲滅続行』

淡々とした声が響く。ゼダスソードの切っ先が、純白のガンダムへと向けられた。それを見越したかのように、イデアのガンダムはオーバーフラッグス隊から距離を取る。

ほんの一瞬、イデアがコックピット越しからクーゴを見返したような気がした。思わずクーゴも、コックピット越しから彼女へ眼差しを送る。

それを確認したイデアが、安堵したようにふわりと微笑んだ姿が『視えた』。クーゴは息を飲む。彼女が何をしようとしていたのか、わかってしまった。

(彼女は、俺たちを助けたんだ。ここに来れば、自分がMDたちから集中砲火を喰らうとわかってて……!)

クーゴの予感を肯定するように、MDたちはイデアのガンダムへと殺到する。ビルゴも、トーラスも、ファルシアも、執拗なまでに純白のガンダムへと牙を向いた。

あつという間に、オーバーフラッグス部隊とスナイパー型ガンダムに群がっていたMDたちがいなくなった。ようやく解放された仲間たちは、啞然とMDの行動を見つめている。

スナイパー型ガンダムのパイロットがイデアの名前を呼び、彼女を援護しようとライフルの照準を向ける。疲労のせいか僅かにブレが出た。狙撃手にとっては致命的だ。

僅かなブレをはじめ出したMDたちは、ストレスで砲撃を回避する。白と緑基調のガンダムなど目にくれず、MDたちは純白のガンダムへと集中砲火を浴びせた。

そうして、ついに天女が地に落ちる。

崩れ落ちた天女を見下ろしながら、ゼダスとMDたちが周囲を取り囲んだ。

「今だ！ ガンダムを鹵獲する！ クーゴ、キミはあの天女の元へと向かってくれ！」

「はあ!？」

グラハムの指示に、クーゴは思わず反抗していた。

彼の指示は間違っていない。実際に、疲弊したガンダムをパイロットごと鹵獲するのがこの作戦の目的だった。

しかし、アイデアはオーバーフラッグズ隊を助けてくれたのだ。自分が死ぬかもしれないとわかっていたのに。

クーゴが反論しようとする前に、グラハムが叫ぶようにして言葉を続ける。

「我々の任務はガンダムの鹵獲だ。だが、MD部隊は、あのガンダムのパイロット共々、機体を消し飛ばすつもりだぞ！」

だから行け、と、グラハムが通信越しから指示を出した。それは、事実上の『アイデアを助ける』という命令に他ならない。

グラハムが力強く笑った。それが、彼ができる精一杯の譲歩なのだろう。クーゴも笑みを返し、操縦桿を動かす。

死刑執行を宣言するかのように、ゼダスがゼダスソードを振りかざす。切っ先は、確実にコックピットへと向けられていた。

躊躇なく振り下ろされた剣。フラッグはそこへ割り込み、ガーベラストレートでゼダスソードを受け止める！ バチバチと火花が飛び散り、激しい鏝迫り合いを繰り広げた。

アイデアが驚いたように目を見開く姿が『視えた』。クーゴは彼女へ微笑み返し、即座にゼダスへ向き直る。フラッグとゼダスは獲物を構え、打ち合いを演じた。

パイロットはフラッグとの打ち合いについていくのが大変らしく、MDたちの動きが鈍った気がした。その隙を見逃さなかった友軍が、MDを撃墜していく。

(これで、戦いに集中できる！)

クーゴは笑みを浮かべ、即座にガーベラストレートを振るった。MD部隊が押され始めたことに気を取られたのか、ゼダスの反応が遅れる。

そこを逃すことなく、ガーベラストレートの刃がゼダスの利き手を切り落とした。ゼダスソードを握った腕ごと空を舞う。

しかし、ゼダスはビームサーベルを掌から展開し、ガーベラストレートの刃を受け止める。また、バチバチと火花が上がった。

「ぐ、——このおおおおおおおっ！」

思い切り、力任せに押しつける。ぐらりと体勢が傾いたゼダスに、クーゴは容赦なくガーベラストレートを突き立てた！

そのまま刃を振るい、ゼダスに袈裟切りを喰らわせる。蹴りを叩きこんで距離を取れば、ゼダスは一拍の間を置いて爆散した。

次の瞬間、斜め上空からビームバルカンが降り注いだ。攻撃を回避すれば、間髪入れずにビームの雨あられが降り注ぐ！

リーダーには真っ赤なマークが大量に点滅する。オーバーフラッグス部隊に対し、数の暴力と言わんばかりにひしめくMDたち。

取り囲まれたのはグラハムたちだけではない。クーゴの周囲にも、ビルゴ、トールラス、ファルシア、ゼダスらが陣取っている。

「こいつら、どこから湧いて出た!？」

「キリがないぞ！……これでは……！」

クーゴが眉間に皺を寄せれば、グラハムが苦い表情を浮かべる。文字通りの万事休すだ。

ファルシアたちのビットが、トールラスやビルゴのキャノンが、ゼダスのビームキャノンが展開する。

因果応報、という言葉が脳裏をよぎる。物量戦で疲弊させ、心を折

り、完全な敗北を味あわせる。

完全に、自分たちがソレスタルビーイングに対して行ったことだ。それがそのまま返ってきたのだ。

充填されたエネルギーが、容赦なく自分たちに牙を——向かなかった。

『——フィン・ファンネル！』

この場一体に何かが飛び回り、四方八方からレーザー攻撃を撃ち放つ！ それらは不規則な軌跡を描きながら、的確にMDたちを撃ち抜いていった。

何事かと振り返る。謎の兵器は縦横無尽にこの場を飛び回りながら、攻撃主の元へと戻っていった。逆光のせいで、機体がよく見えな

い。しかし、その佇まいやフォルムには見覚えがあった。その機体から舞い降りる緑色の粒子にも、見覚えがあった。ガンダム、と、口が動く。

白基調でコックピット部が青いガンダム。シンプルな出で立ちではあるが、機体からは静かな貫禄がにじみ出ている。

『連邦の白い悪魔』という言葉が、意味もなくクーゴの頭をよぎった。伝説の男が『人の心の光』を示した機体。

しかし、それを翔っているのは伝説の男本人ではない。彼と似たような力を持つ、全くの別人だ。

そんなことを考えていたとき、どこからか声が聞こえた。

『こちらスローネドライ。教官、MD部隊やつけたよー！ エクシ

アのパイロットちゃんも救出したから、任務完了！』

『スローネツヴァイだ。こっちもキュリオスの救出、完了したぜ！

MD部隊も軽くひねってやったよー！』

『こちらスローネアイン。教官、MD部隊の殲滅と、ヴァーチエの救出に成功しました』

1人の少女と2人の青年の声だ。

それを聞いたガンダムのパイロットが、ふっと微笑んだ気配を感じる。

『こちら、レガンダム。これから、デユナメスとスターゲイザーの救出と、MD殲滅に移る』

『教官、我々も援護に……』

『大丈夫だよ、ヨハン。キミたちの教官として、恥じぬ戦いをさせてもらおう』

男の声だ。ガンダムは再び武装を展開しつつ、銃を構えた。

『人から奪った上に、こんな使い方をされては……腹立たしいにも程がある！』

その言葉の意味を、誰も知らないまま。

ガンダムの攻撃が始まった。



こんな形で、自分が開発に関わった機体と対峙することになるとは思わなかった。ノブレスは深々と息を吐き、ファルシアとゼダスを睨みつける。

ゼダスはゼダスソードを指揮棒のように振るった。それに従い、まず、ビルゴ部隊が飛び出してくる。レーザー攻撃のフィン・ファンネルには相性が悪い。

プラネイトデイフェンサー。ノブレスにとって、懐かしい武装の名前だ。自分がまだ『ノブレス』になる前に、その武装を見たことが

ある。凶面も、実物も。

ノブレスは操縦桿を動かした。ノブレスの力をダイレクトにフィードバックしたルガンダムが、即座に行動を開始する。

放たれたレーザーガンを躲しながら、背中に背負っていたバズーカを構える。実弾は装填済み、いつでも撃てる。引き金を引けば、ビルゴ部隊の真ん中にいた機体に直撃した。

爆発に巻き込まれ、他のビルゴも爆散する。ビルゴ部隊を黙らせたノブレスは、次にファルシアやトールラスたちに狙いを定める。バズーカを背中に戻し、ビームライフルを構えた。

（他のMD部隊は撤退を開始している。しかも、三大国家陣営の作戦基地には戻っていない……。やはり、あいつらと関係しているということですかね？）

ノブレスは思案しつつ、ビームライフルで次々と敵機を撃ち抜いていく。

「パイロットの感情が読めないな……」

少なくとも、パイロットが怖気づいているような様子はない。そもそも、感情らしき感情が伝わってこないのだ。本当に、パイロットは『人間』と呼べる者なのか。

一抹の不気味さを抱えながら、ノブレスはビームライフルを撃ち放った。足を撃ち抜かれたファルシアが吹き飛ばされ、頭を撃たれたトールラスが爆散する。

次の瞬間、背後から別のファルシアたちとトールラスたちがビットやライフルでビーム攻撃を撃ち放ってきた。回避するには間に合わない。

ノブレスは即座にフィン・ファンネルを展開する。飛び出した3機のファンネルが、ルガンダムを守るシールドを展開した。派手な音を立ててビームが弾け飛ぶ。

普段はビーム兵器として使うファンネルたちだが、シールドとして展開することも可能である。今時はファンングが主流らしいが、ノブレスはこちらを好んでいた。

(ファンングと比較した場合、純粋な攻撃力は劣ります。ですが、使い方次第で色々なことができるので、個人的にはこつちが使いやすいんですよね。逆に、このマルチタスクが面倒だと言う人もいるんですけど……)

自分はマニアックなのだろうか。

考えてみたが、今は関係ないので保留することにした。

ノブレスは他のファンネルたちを動かす、ファルシアやトーラスたちを撃ち抜いていく。

(あとは、このゼダスたちですね)

兵を失った指揮官は、両手を突き出した。掌からレーザー弾が放たれる。

しかし、ノブレスが展開したシールドを揺るがすには至らなかった。

「スターゲイザーのパイロットに比べれば、防御系統はあちらの方が上だからな。僕も精進しないと……」

小さく独り言ちて、操縦桿を動かした。リガンダムはバリアを纏ったまま突っ込む。周囲に飛ばしていたフィン・ファンネルが周囲を舞った。

フィン・ファンネルたちは不規則に動き、四方八方からゼダスに向けて攻撃を打ち込んでいく。それに混ざるようにして、リガンダムもビームライフルを繰り出す。

ビームライフルの紫と、フィン・ファンネルの青が交錯し、ゼダス

を翻弄した。その隙をついて、レガンダムはゼダスたちの真下へと回り込む。

そのまま、ノブレスは引き金を引いた。真下からコックピットをぶち抜かれたゼダスたちは、そのまま爆発四散する。これで、全ての敵が沈黙した。

あとは、『満身創痍状態のユニオン軍がどんな対応をするか』である。喧嘩を売ると言うなら買うし、引くと言うなら見送るつもりでいた。

戦闘不能の相手を叩きのめすことはソレスタルビーイングの理念に反するし、自分の役目はユニオン軍の殲滅ではない。

「ユニオンの第8航空部隊、聞こえるか？ 無駄な抵抗はやめろ。ガンダム2機を置いて、この場を去れ。……でなければ、僕はキミたちを撃たねばならなくなる」

フィン・ファンネルを自機の周囲に展開させながら、ノブレスは厳かに言い放った。

「戦闘行為の終結が、我々の目的だ。だが、その名を借りた、むやみな殺生は望むところではない」

フラッグたちが立ちすくむ。まるで、パイロットたちの心がそのまま投影されたかのようだ。

困惑。新たに出現したガンダムに、どう対応すべきか迷っているようだ。

「そして何より、スターゲイザー……そのガンダムのパイロットが守った命を、手折るような真似をしたくないのでね」

その言葉に、スターゲイザーを守るようにして刀を構えていたフラッグが反応した。カメラアイ越しに、パイロットが息を飲んでノブ

レスを見つめてくる。

デュナメスを鹵獲しようとしていたフラッグたちも止まる。

ノブレスは即座に操縦桿を動かし、フラッグたちの周囲にフィン・ファンネルを展開した。

「MDの暴走は、コーヴァレンター能力や虚憶きよわくを持つ人間、もしくはその人間と頻繁に接する人間が近くにいることが原因だ。その力が強ければ強いほど、優先的に狙ってくる。スターゲイザーがここに来たとき、キミたちを襲っていたMDたちがそちらに殺到しただろう。それを見ていたなら、僕の言っている意味がわかるはずだ」

「それでも向かうなら、仕方がない」とノブレスは言いきった。

あとは、相手の出方次第だ。こちらは黙り、相手の返答を待つ。

指揮官の男が悔しそうに表情を歪ませた姿が『視えた』。ここでもし、彼らが戦う姿勢を見せていたら、ノブレスは躊躇うことなくファンネルの雨あられをお見舞いしただろう。

『……撤退する』

『了解』

苦渋の決断を下した指揮官機に続いて、フラッグたちが空へと帰っていく。

その背中を見送った後、ノブレスはデュナメスとスターゲイザーへ通信を入れた。ロツクオン・ストラトスもアイデア・クピディターズも、酷く疲れた様子でいる。

しかし、充分元気そうな様子だった。どうやら、ノブレスは彼らの危機に間に合うことができたらしい。ミッション成功だ。ノブレスは安堵の息を吐き、頬を緩ませた。



「PMCトラストに提供した新兵器たちは？」

アオミの問いに、アレハンドロは肩をすくめて首を振った。「残念な結果になったようだよ」と、彼は苦笑する。

そう、と、女は淡々と答えた。MDたちにも、ゼダスに乗せていた肉塊どもにも、愛着なんかない。だから、女は何とも思わなかった。

「まあいいわ。なくなったなら、作ればいいんだし。そのために必要なものはすべて持っているもの」

「キミは、日本人のステレオタイプからは想像できない程怖い女なんだな」

アレハンドロの言葉に、アオミはつうつと目を細めた。

「帰る。用事ができたから」

淡々と告げて、アオミはアレハンドロの部屋を出た。彼は自分を止めなかった。

*

どことも知れぬ場所。

薄暗い部屋の中に、培養試験官がぎっしりと並んでいる。その中には、様々な髪や肌を持つ少年や少女が眠っていた。

ごぼり、と、気泡が浮かんで消える。試験管のコンソール部にある液晶ディスプレイには、識別番号が赤い光を放っていた。

分類コードが緑の光を放つ。『消費品』と、はっきり映し出されている。人間につける呼称にしては、あまりにも無慈悲である。

アオミは書類に目を通す。今回のテストで得た結果を分析したも

のだ。

今回の経験を記録し、眠り続ける部品たちに学習させる。どこかで試験管の光が消えた。大方、脳に直接知識や経験を刻み込んだことでショック死したのだろう。所謂失敗作だ。

試験管の光が消えた個所を確認し、その中に浮かぶ肉塊を処分する。

その試験管に、新しい胎児を追加した。

「ごっちは、これでよし」

アオミは満足げに微笑み、『消耗品』の部屋を後にした。『無垢なる子』と書かれた部屋へ足を踏み入れる。

その部屋もまた、培養試験官が並んでいた。『消耗品』の部屋とは違い、試験管の数は少ない。眠っているのは少年ばかり。

しかも、どの少年も特徴は一緒に、黒髪の東洋人。女性や、女性の弟と非常に似た少年たちだった。

アオミの遺伝子をベースにして生み出された子どもたち。自身の優位性を確立するために必要なものたちだ。

いずれ、この子たちは自分の忠実な手足となり、後継者となる。

自分が作り上げる理想郷を思い描き、アオミはにやりと笑みを浮かべた。

「この物語は、私の舞台。私のためだけに用意された場所」

アオミはうっとりとした口調で呟く。

いとし子たちを見つめた後、アオミは部屋を後にした。

エレベーターに乗り込み、地上へ戻る。

扉を開けて出た場所は、別荘の中にある大広間だった。刃金の本家が所有する場所の1つであり、幼い頃からアオミが出入していた場所である。

思い出深い場所であると同時に、ここはアオミにとって『運命を変

えた場所』でもあった。ここで、アオミは知識を得た。そうして、生まれ変わったのだ。

その出来事を思い返そうとしたとき、丁度いいタイミングでチャイムが鳴った。時計を見れば、約束していた時間である。待ち人が来たらしい。

アオミは玄関へと向かい、扉を開いた。そこにいたのは少女と男性。

黒い髪をツインテールに結んだ少女と、彼女の隣に控える、黒髪を束ねた男だった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

第3回現状確認

「大丈夫だ、1stシーズンの中盤だから」『23. 小康状態』く『36. 大混戦、大量発生、大問題』時点の中心オリキャラまとめ

名前：クーゴ・ハガネ／刃金はがね 空護くうご

性別：男性

年齢：28歳

誕生日：12月22日（山羊座）

身長：169cm

体重：??kg

血液型：B型

所属：ユニオン軍／オーバースタッフ部

搭乗機体：クーゴ専用カスタムフラッグ

主に交流のある人物：グラハム・エーカー、ビリー・カタギリ他

特筆事項

・元々の国籍は日本。しかし、ユニオン軍に所属するために国籍を変更した。

・家族構成は母・櫻華おうか、双子の姉・蒼海あのみ。その他、親戚多数。

・最大の天敵は蒼海。彼女になじられ蔑まれても、押し黙ったままでいることが多い。

・MSWADの精鋭で、階級は中尉。グラハム・エーカーの相棒および副官と言える人物。

・共有者能力持ちで虚憶きよおく保持者。

・歌い手として活動中。ハンドルネームは『夜鷹』。

・徹夜明けだとゾンビみたいになるため、ユニオン夏の風物詩として怖がられている。

・ヴェーダ曰く、アルコール摂取後も危険らしい。詳細不明。

・料理上手。ご飯のおかずからお菓子まで幅広い。

・人間卒業間近であることに色々思うところがある。

・友人Ⅱグラハムも人間卒業間近なので心配している。
・空を目指した理由は、虚憶きよおくで出会った人たちから「空を目指せば会える」と言われたから。

・以前は外宇宙探索を夢見ていた。

・ひよんなことから出会った青年曰く、荒タイプ・ブルーぶる青。

『Toward the Terra』というタイトルのSF小説を読み進めている。

・女性曰く、「夫の若い頃にそっくり」らしい。

・イラストを描くのがうまい。仕様画材は主にペンと色鉛筆。

・悪意等、負の感情を察知すると寒気がする様子。

・視力は両目とも2.0。

蛇足

・イメージCV・私市淳

・イメージソング・『Adventure』(Alexandros)

／『そこに空があるから』(江崎とし子)

名前：イデア・クピディタース

性別：女性

年齢：20代

誕生日：11月11日(蠍座)

身長：160cm

体重：??kg

血液型：O型

所属：ソレスタルビーイング(?)

搭乗機体：ガンダムESP―Psyonタイプモデル03Ⅱスター

ゲイザー

主に交流のある人物：刹那・F・セイエイ他

特筆事項

- ・コードネームの由来は『理想への憧れ』（ラテン語）。現時点では本名不詳。
- ・特殊能力保持。能力のランクは最強と謳われる荒ぶる青^{タイプ・ブルー}。力の威力としては、MDを消し飛ばすレベル。
- ・MDに搭載されているシステムに対して嫌悪感を抱く。そのシステムが天敵な様子。
- ・とある事故で母を亡くし、視力を失う。しかし、能力のおかげで視界に不自由はしていない。
- ・共有者^{コウウアレンドー}能力持ちで虚憶^{きよおく}保持者。
- ・歌い手として活動中。ハンドルネームは『エトワール』。
- ・恋愛ごとを見ると、所構わず介入する。
- ・『同胞』の歴史を知っている。
- ・『悪の組織』およびスターダスト・トレイマーと何らかの関わりがある。
- ・只今、クーゴにロックオン中。
- ・端末の待ち受けに、4 徹明けのクーゴの写真を使っている。

蛇足

・イメージCV・桑島法子
・イメージソング:『fortissimothelultimatecrisis』(frisside)／『BRAND NEW STORY』(東京パフォーマンスドール)

名前:テオ・マイヤー

性別:男性

年齢:20代

誕生日:??

身長:??cm

体重：?? kg

血液型：?型

所属：一般人(?)

主に交流のある人物：リボンズ・アルマーク、アレハンドロ・コナー他

特筆事項

- ・大人気の歌手。最新作は『Terra —還るべき青き惑星^{ほし}—』。
- ・一身上の都合により、無期限の活動休止を宣言した。
- ・特殊能力保持の疑い濃厚。感知能力やテレパス関連。
- ・味覚がない。但し、他人の味覚をコピーすることで代用可能。
- ・共有者^{コウウァレンダー}能力持ちで虚憶^{きよおく}保持者。
- ・エイフマンのお兄さんの存在だった人物にそっくりらしい。それがきっかけで、彼と文通を始めた。
- ・結婚願望はあるが、諸事情で諦めている。詳細不明。

蛇足

・イメージCV：置鮎龍太郎

名前：ノブレス・アム

性別：男性

年齢：20代

誕生日：?? (蟹座)

身長：?? cm

体重：?? kg

血液型：O型

所属：ソレスタルビーイング(?)

搭乗機体：ガンダムESP—Psyonタイプモデル02—ルガン

ダム

主に交流のある人物：チーム・トリニティ他

特筆事項

- ・チーム・トリニティの教官。彼らを大切に想っている。
- ・仮面着用。素顔は不明。
- ・コードネームの由来は『高貴なる魂』（フランス語）。現時点では本名不明。
- ・生身の戦闘能力は高いと思われる。
- ・どうやら口調を変えている様子。
- ・今はMS乗りパイロットをしているが、本業は技術職。凶面を引いたり開発を行ったりしていた。
- ・彼の家計は2270年代以前から虚憶きよおくやヴィジョン、コーヴァレンター能力の研究を行っていた。
- ・彼自身も共有者コウヤアレンターで虚憶保持者。どうやら、彼の一族の中には能力に目覚めた者もいたらしい。今は天涯孤独。
- ・味覚がない。但し、他人の味覚をコピーすることで代用可能。
- ・隣の家に住んでいた少年のことを気にかけている。彼は現在、MSの権威として名をはせる技術者となっている。
- ・アルヴァアロンおよびアルヴァトーレの凶面や機体に、しようもない悪戯を仕掛けている。
- ・MDに使われた機体の原型を設計した。データを誰かに盗まれ、勝手に転用されたらしい。
- ・結婚や恋愛関係の話が振られるとダメージを喰らう様子。
- ・ファングよりファンネル派。

蛇足

- ・イメージCV・置鮎龍太郎
- ・イメージソング・『ゴールデンタイムラバー』（スキマスイッチ）／『月光花』（Janne Da Arc）

名前：ベル

性別：女性

年齢：20代後半

誕生日：??

身長：?? cm

体重：?? kg

血液型：?型

所属：『悪の組織』およびスターダスト・トレイマー

主に交流のある人物：イオリア・シュヘンベルグ、E・A・レイ、リボンズ・アルマーク他

特筆事項

・『悪の組織』代表取締役にして、孤児院の元・院長。現在は隠居しているが、子どもや職員たちから好かれている。

・車椅子使用。しかし、それでも精力的に動き回っている。

・ネーナ曰く、ナイスバディ。

・夫に先立たれた(?) 未亡人。

・何やら崇高な目的がある様子。

・尊敬する相手がいたらしい。その人物の愛称は『グラン・パ』。

・愛称は『グラン・マ(おばあちゃん)』。リボンズからは『マザー』と呼ばれている。

・各方面にコネクションがある。そのすべてが『同胞』。

・マリナ・イスマイルは、彼女の尺度で5冠殿堂入りを果たしている。

・曰く、『女性は愛でるべき存在である。夫は愛する存在である。夫以外の男は親友ダチ公である。但し例外有り』らしい。

・口説いた人間の代表格は、師匠、航海長、女史、オペレーター、技術者、占い師、幼馴染の女の子たち、友人のお母さん等々。当時3歳だった。

・エルガンに対して厳しめなのは、彼が例外にカテゴライズされているため。

・凶面は綺麗に引けるが、絵はヘタクソ(エルガン談)。女性はみんな美人に描ける。男性は、夫以外変な絵になる。夫でさえ美形10割増し。

・ナスカという星の生まれだが、故郷はもう存在していない。惑星を破壊する兵器によって滅亡した。

・宇宙を流浪していた『同胞』から別れて、この地球にやって来た。元々『同胞』たちは青い星^{テラ}を目指して旅をしていたらしい。

・同じ星で生まれた幼馴染は9人いて、名前が分かっているのはトオニイ、アルテラ、タージオン、タキオン、コブ、ツエーレン、ペスタチオ、エルガンの8名。

・トオニイは『同胞』のリーダーをやっていた。『同胞』では、指導者のことを『ソルジャー』という称号で呼ぶ。

・そのうち、青い星^{テラ}を目指す旅路で亡くなったのは、アルテラ、タージオン、コブ。

- ・旅路の中で、『牙』として多大な戦果を挙げていた様子。
- ・スターダスト・トレイマーのリーダー。
- ・ベルというのは愛称。本名ではない。

・イオリア・シユヘンベルクの妻の名前もベル（Not本名）。

蛇足

・イメージCDV・神田沙也加

・イメージソング：『フレンズ』（ステファニー）／『This N

ight』（CHEMISTRY）

大丈夫だ、1stシーズンの終盤に突入したから
幕間。ノブレス・アムとイデア・クピディターズ、あ
るいは混沌地帯プロレマイオス

監視者は、アレハンドロ・コーナーの独壇場になっている。ある意味、奴は『ソレスタルビーイングを操作できる』という立場に立っているのだ。

本来、監視者たちに与えられた権限は「ソレスタルビーイングの行動に対して、全権一致による否決権を持つ」だけに留まっているはずだった。

今でもその権限はそのままである。では、何故、奴が『ソレスタルビーイングを操作できる』のか。答えは、ノブレス・アムの教え子たち——チーム・トリニティの存在にある。

ガンダムスローネシリーズは、コーナー一族が極秘に開発を進めていた機体である。劣化版太陽炉、もとい疑似太陽炉を搭載していた。作戦時間は本家本元の太陽炉には劣るが、性能は太陽炉とほぼ互角。太陽炉は製造に2年弱の時間が必要だが、疑似太陽炉は短期間での大量生産が可能だ。

しかし、太陽炉におけるシステム解析が不十分だったため、粒子の色が毒々しい赤色となっている。本家本元とは違い、強い毒性も持っていた。

（この機体だって、元々は——）

ノブレスは凶面を眺めながら、心の中で歯噛みしていた。『ノブレス』の仮面の下で、全てを奪われた青年が怨嗟の声を上げている。

人を散々利用して、踏み台にして、奴らは己の野望を成就させようとしていた。昔も、今も、これから、きつと変わらないのだろう。

コーナー一族は、野望成就の総決算に入っている。そのために、スローネシリーズとチーム・トリニティを投入したのだ。

スローネシリーズのガンダムマイスターに選ばれた兄妹——ヨハン・トリニティ、ミハエル・トリニティ、ネーナ・トリニティたちの性格も、当初は極めて過激であった。

感情のままに破壊と殺戮をまき散らすだけの獣。これが一番的確な表現である。「熟練パイロットを殺せば介入行動がやりやすい」という発言には、頭が痛くなったほどだ。

アレハンドロからは戦闘技術の向上を命令されていたけれど、独断で方向転換した。むやみに戦闘技術を向上させれば、彼らはただの殺戮兵器になってしまう。

力を振るう者には、それ相応の責任が伴う。力を振るうためには、それ相応の心構えが必要だ。心構えなしに力を振るえば、それに飲まれて破滅するのは目に見えている。

『ライオンや象のような獣でさえ、力に相応しい立ち振る舞いを心得ているというのに』と言って、ミハエルとネーナを怒らせたこともありましたね。あとは、『強くなければ人は生きていけない。優しくなければ生きる資格がない。キミたちはガンダムマイスターどころか、人間として生きる資格がない』と言いながら、年甲斐もなく3人を叩きのめしたこともありました』

あれは大盤振る舞いすぎたなと、ノブレスはひっそり反省する。トリニティたちのプライドを粉々に粉碎するところから、ノブレスの戦いは始まっていた。

身内意識が強いトリニティは、相手を格下だと思つて食つて掛かつていく傾向があった。実際、当初もシユミレーター訓練で喧嘩を売られた。もちろん完勝したが。

閑話休題。

アレハンドロはもともと、ガンダムに『同情の余地のない悪役』としての側面を追加しようとしてトリニティを作り出した。それ故に、彼らは獣のような思考回路を抱くよう調整されていたのだろう。実験や環境的な意味で、だ。

イオリアの計画上、ソレスタルビーイングは世界の表舞台から消滅する必要がある。世界から『悪』と断罪された彼らは、世界の手によって討たれることが宿命づけられていた。本人たちも知っているかもしれないし、知らなくともその覚悟はしているだろう。

それがいつかはわからない。だが、少なくとも、『今』や『これからすぐ先』のことではないことだけは確かだ。だからこそ、アレハンドロはチーム・トリニティを作り出し、ガンダムスローネシリーズを開発した。ソレスタルビーイングが裁かれるタイミングを早めるために。

世界の代弁者として、奴は自らの手でソレスタルビーイングを討つつもりでいる。テロリストを討ち取った英雄となれば、その人物が世界を動かす中心に座ることは明らかだ。

そうやって、アレハンドロは世界の覇権を握ろうと画策していた。奴にとって、上司であり国連代表のエルガン・ローディックは目の上のたん瘤的な存在である。

何とかして奴はエルガン代表を失脚および暗殺しようと手を打っているようだが、アレハンドロ如きにかできるような相手ではない。エルガン代表は、権謀術策を張り巡らせるのが得意な参謀役であり、古の『同胞』の中でも『牙』の一角を担った男でもある。

「教官、どうかしたのか？」

ミハエルが心配そうに話しかけてきた。ヨハンとネーナも、ノブレスの顔を覗き込むように眼差しを向けてきた。

話をそらすために、ノブレスはゆるりと口元をほころばせてみせた。

「キミたちと初めて会ったときのことを思い出していた。そのうちに感慨深くなってね」

「う」

途端に、兄妹たちは居心地悪そうに視線を逸らした。当時の過激っぷりは、彼らの黒歴史に相当しているのだろう。

現在でもその名残は多々見られるものの、当初に比べればかなり改善されてきた方だ。この調子で、人としてもマイスターとしても成長していったほしい。

A E U 領の孤児院で過ごしていたときの表情を思い出す度に、思うのだ。悪意としての存在意義ではなく、もっと別な意義を見出してほしいと。

ヨハンもミハエルもネーナも、本当は優しい子たちである。彼らを道具にして使い潰そうとする人間なんかには、奪わせたりしない。

ノブレスは静かに決意を固めながら、宇宙を見上げた。
そろそろ、ランデブーポイントに近づいている。

「さて、あいつらは来るかな？」

「来るさ。ガンダムマイスターなら、必ず我々の存在と機体に興味を示すはずだからな」

ミハエルの問いに、ヨハンは薄く微笑みながら答える。

ランデブーポイントには、一足先に到着していたファーストチームの宇宙船——プロレマイオスの姿があった。ほら、と、ヨハンが弟妹たちにその光景を指し示す。

H A R O が船をスキャンされていることを告げる。そのままにしておくようにと言えば、H A R O はノブレスの方を向いて耳をパタパタさせた。

トリニティたちに準備をしておくようにと言えば、彼らは2つ返事で頷いた。その前に、ノブレスは彼らを呼び止める。

スローネシリーズに追加する武装を作る傍ら、こっそり作っていたものがあった。といっても、多少、デザインに関わった程度である。『悪の組織』の友人に頼んでいたものだ。取り出したのは、新しいデザインの制服である。

アレハンドロがトリニティ兄妹に提供したものより、ノブレスがデ

ザインに関わった方が幾分かマシになったと自負している。アレハ
ンドロの趣味の悪さは、アルヴァアロンおよびアルヴァトーレで実証
済みだ。

男物は長袖で、上下とも体にフィットした作りになっている。女物
はノースリーブの上着に肘より少し長い手袋と、膝丈よりやや短めな
プリーツスカートに膝くらいのロングブーツだ。スカートにはワン
ポイントとして刺繍を施している。色は3人とも、ゴールドンイエ
ローと琥珀色を基調にしており、襟元には金の翼に抱かれた青い宝玉
が輝いていた。

ネーナがぱあつと表情を輝かせる。

「わあ、可愛い！」

彼女は目をキラキラさせながら制服を手を取った。ヨハンとミハ
エルも感嘆の声を上げて、服を手取る。3人とも嬉しそうだ。

その様子を見て、ノブレスは安堵の息を吐いた。ベースにしたのは
『悪の組織』および『スターダスト・トレイマー』の制服である。

「ありがとうございます、教官」

「これ、絶対大事にする！」

「じゃ、早速着替えてくるね！」

兄弟はぱたぱたと部屋に戻っていく。それを確認したノブレスは、
プロトレマイオスに視線を向けた。

あそこには、久しぶりに顔を合わせる『同胞』——イデア・クピディ
ターズがいる。

(……恋愛話でおちよくられるのは嫌ですねえ)

『人を恋愛話でおちよくろうとしていた人の言う台詞？……おにー

さん、因果応報って知ってる？』

「ぐきゅ」

嘗ての『お隣さんの少年』の声フラツシユバックする。ノブレスはそれを振り払った。

その少年は、現在MS開発の権威となつてゐる。他の分野にも詳しいよう、教え子たちはMS開発だけでなく、軍関連の要職に就く者や官僚になつた者など様々だ。

ユニオン軍の技術顧問に就任したという話を聞いた。彼が生み出し育ててきた機体の集大成（暫定）——オーバーフラッグの造形美と機能性は、感嘆に価する。

あれがもし、GNドライブを搭載する想定で作直されたとしたら、彼はもつと素晴らしいMSを作り出すことだろう。ノブレスは口元を緩ませた。

しかし、そうは言つていられない事態もある。ノブレスは笑みを消し、深々とため息をついた。

少年は大人になつた後も、頭の良さと探究心で、真実へと至ろうとしている。いや、彼なら至つてもおかしくない。

もしも彼が、アレハンドロにマークされてしまったら。

「また、僕から奪うのか」

ノブレスは、ぽつりと呟いた。

仮面の下にある眦を吊り上げ、拳を握りしめる。

「今に見ている。月夜ばかりと思うなよ」

研ぎ澄ました爪と牙を、振り下ろす瞬間を待ち焦がれる。そのために、ノブレスはここに居るのだ。

「教官、着替え終わりました」

ヨハンの声に、ノブレスは現実へと引き戻された。振り返れば、新

しい制服に身を包んだ教え子たちの姿があった。

皆、似合っている。素直に褒めれば、トリニティ兄妹は嬉しそうに頬を緩めた。互いに制服を見せ合い、楽しそうに談笑する。

しかし、彼らはすぐに真剣な面持ちに変わった。もうすぐ、ファーストチームたちとの顔合わせが始まるのだ。気を引き締めなくては。

『着替えて早々、パイロットスーツに着替えるのかー。勿体ないなあ』

ネーナのちよつとだけ残念そうな声が『聞こえた』。

平和な空気に、ノブレスは表情を緩めて背を向ける。

格納庫へ向かい、自分の機体に取り込むためだ。

『でも、これって脈アリなのかも。服を贈るっていうのは、つまりー』

そこから先は、ノブレスは『聞き取る』ことはできなかつた。ネーナが心を閉ざし／隠してしまつたためである。

いくら能力を駆使しても、読まれる側が『聞き取られたくない』と心を閉じ／隠してしまえば『聞こえない』。

能力が優れていれば、無理矢理心をこじ開けて『聞き取る』ことはできる。しかし、教え子相手にそこまでしたいとは思わなかつた。

ノブレスはレガンダムを起動させる。手を掬い上げるような形にし、トリニティ兄妹が乗れるように体制を整えた。

パイロットスーツに身を包んだ3人は手の上に飛び乗る。ネーナがH A R Oを抱えていた。これで全員である。

ハッチが開き、レガンダムが宇宙へと飛び出した。ノブレスは教え子たちに注意を促す。

「ヨハン、ミハエル、ネーナ。3人とも、しっかり掴っていないさい」

「了解！」

『トバスナヨ、トバスナヨ』

H A R O の発言に、ノブレスは苦笑した。

「わかっている。安全運転で行くぞ」
『シュシヨードナ、シュシヨードナ』



ヴェーダのデータにないガンダム。ヴェーダに登録されていないガンダムマイスター。

仲間たちは、新たな存在たちについての報告を行っていた。

(ティエリア、余程認めたくないんだなあ。ご丁寧に『ガンダムらしきMS』って言ってるし)

アイデア・クピディターズは遠い目をした。初めて彼——ティエリア・アードと顔を合わせたとき、アイデアのスターゲイザーを『ガンダムらしきMS』呼ばわりしたことを思い出したためである。尤も、後にヴェーダからデータが提示され、機体名で呼んでくれるようになったのだが。

赤い粒子を放出するガンダムの中に混じり、自分たちの太陽炉と同じ色の粒子を放つ機体があった。その機体を、アイデアはよく知っている。ソレスタルビーイングに向かう直前に見た、『同胞』の駆るガンダム——レガンダム。元になった機体は、伝説の男が搭乗し、『人の心の光』を示したものだ。

伝説の男に代わってその機体を駆るのは、ノブレス・アム。自分と同じ荒^{タイプ・ブルー}ぶる青の能力を持つMSパイロットであり、MS開発を担当す

る技術者でもある。連絡は取っていたが、顔を合わせるのは随分と久しぶりであった。

周囲を見回す。この場にいるのは、スメラギ・李・ノリエガ、ラツセ・アイオン、リヒテンダー・ツエーリ、クリステイナ・シエラ、フェルト・グレイス、ハロ、ロックオン・ストラトス、アレルヤ・ハプティズム、ティエリアの8人と1機だ。アイデアを含めば9人と1機になる。

刹那・F・セイエイがいない。アイデアは能力を使い、彼女の行方を探してみた。

エクシアのコックピット席から、刹那の気配を感じ取る。どうやら、思案にふけっているらしい。

「去り際に、このポイントを指定してきた」

「彼らの目的は何だろう?」

「挨拶じゃないかな? だってほら、こっち先輩だし」

「でも、罵ってことは?」

「大丈夫じゃないのか? だって、刹那たちを助けたんだらう?」

(……それにしても、皆、必要以上に警戒してるなあ)

仲間たちの話を聞きながら、アイデアは再び遠い目をした。

ソレスタルビーイングは『外から来るもの』に対し、かなり厳しい。その分、仲間だと認めた相手のことはどこまでも信用する。

機密保持や規約云々の縛りが強すぎるという部分も影響しているのだろう。状況は違うが、『同胞』たちのコミュニテイとよく似ている。

尤も、『同胞』たちの場合は、『同胞』以外に仲間や味方、支援者もない、物資もジリ貧な、完全なる孤立無援」という超極限状態からの結末だったのだが。

「会ってみればわかるわ。出迎えましょう、新しいガンダムマイスターたちを」

スメラギが意を決したように言った。そこへ、プトレマイオスに近づく物体を発見したという報告が届く。

新たなガンダムマイスターたちがやって来たのだ。自分たちと会谈するために。

(さて、ノブレスくんの『可愛い教え子』の顔を拝みにいきますか)

ついでに、彼の恋愛についても根掘り葉掘りしてやろう。イデアは悪い笑みを浮かべながら、彼らを迎える準備を始めるのであった。

*

「着艦許可を出して頂き、感謝します」

ノブレスはそう言って、静かにヘルメットを外した。といっても、仮面の形もヘルメットに近い形状のため、「ヘルメットを取ったらヘルメットを被ってた」というマトリョーシカ状態である。

『マトリョーシカ状態』

『イデアさん、草。草まみれです。草刈機貸しましょうか?』

『むしろ除草剤を頂戴、ノブレスくん』

『ありがとうございます!』

イデアとノブレスは会話を弾ませながら談笑した。これも一種の形式美。平時の姿を互いに知っているため、畏まっている態度が新鮮で面白くて仕方がないのである。

しかし、能力を使つての会話のため、自分たちがくだらない話題で盛り上がっていることを知る者はいない。ついでに、笑っていることもわからないだろう。

『……幻聴か？ もう勘弁してくれよ。タクマラカン砂漠の一件でも似たようなことがあったばかりだったのに……！』
『……笑い声？ しかし、笑っている人間はこの場にいないようだが……』

前言撤回。ロックオンと、ノブレスの教え子の青年がきよろきよろと周囲を見回している。

特にロックオンは、色男の称号が霞むくらい剣呑な顔つきであった。眉間にはくつきり皺が刻まれている。

彼らの思念を察知し、2人は慌てて能力を調整した。これでは聞き取れない。一安心である。

「レガンダムのガンダムマイスター、ノブレス・アムといいます」

自己紹介をし、ノブレスは一礼した。厳かな空気を纏いながらも、その動作一つ一つが洗練されている。

ノブレス曰く「両親からスパルタ教育を受けた賜物であり、自分が持つ数少ない『受け継いだもの』だという。

彼の自己紹介に続いて、他の3人——ノブレスの教え子たちがヘルメットを外し、自己紹介を行う。

「ガンダムスローネアインのマイスター、ヨハン・トリニティです」

「スローネツヴァイのマイスター、ミハエル・トリニティだ」

「スローネドライのマイスター、ネーナ・トリニティよ！」

茶髪に浅黒い肌で、右目付近に3つのほくろがある青年——ヨハン・トリニティ（彼がきよろきよろしていた青年である）、青い髪に白い肌で、右目付近に1つだけほくろのある青年——ミハエル・トリニティ、赤い髪に白い肌で、そばかすが目につく少女——ネーナ・トリニティ。

最年長のヨハンが20代、ミハエルが10代後半、ネーナが10代前半だろう。誰も彼も若い。兄妹の姿を見たスメラギも、彼らの若さに目を付けた様子だった。同時に、名前から彼らが兄妹であることを察したらしい。しかし、3人とも外見が違う。

「私たちは血は繋がっていませんが、実の兄妹です」

それを指摘されたヨハンは、穏やかに笑いながら答えた。その眼差しは、弟と妹を大切に想うお兄さんそのものだ。

彼の言葉を聞いたミハエルとネーナが、その言葉を誇るように笑った。この兄弟は、血縁以上の絆で結ばれている。

トリニティ兄妹の様子にほのぼのしていたときだった。ノブレスの少し後ろにいたネーナが、ぴよこんと顔を出す。

「ねっ、エクシアのパイロットちゃんは誰？」

「俺だ」

ネーナの問いに答えたのは、刹那である。慣性を利用し、彼女はすべるようにして仲間たちの元へとたどり着く。

刹那は淡々と自己紹介をした。それに対し、ネーナはパアアと表情を輝かせる。何の前触れもなく、彼女は床を蹴って飛び出した。

大きく両手を広げて、じゃれつくようにハグしようとする。が、刹那は慣性を使い、ひよいつとそれを躲した。

が、ネーナが慣性の影響で廊下の突き当りに激突しないように、配慮はしたらしい。手を掴んで引き戻し、刹那自身も慣性を利用して体勢を立て直す。

ネーナはぽかんとした表情で刹那を見上げていた。大丈夫か、と刹那が問う。ネーナはすぐに笑顔を浮かべて、刹那に積極的にスキンシップをした。

昔の刹那だったら振り払ったのだろうが、似たような感じでちよっかいを出してくる相手を思い出したのだろう。妙な親近感を抱いた

ようで——でも、ネーナが女の子なので、対応を思案しながら——相槌を打っていた。

刹那の想い人である金髪碧眼の男性——グラハム・エーカーは、今日も元気に相棒兼親友の副官——クーゴ・ハガネや部下たちと一緒に話をしているのだろうか。

アイデアはクーゴを助けようとして、逆に彼に助けられた。そのお礼も、まだ彼に伝えていない。会合が終わり次第、連絡を取ってみることにしよう。アイデアはひっそりそう決めた。

「成程。キミが、刹那・F・セイエイか。是非一度、キミと会って話があったかったんだ」

ネーナとのやり取りを見ていたノブレスが、旧友に会ったかのように表情を綻ばせた。

対して、いきなり名指しされた刹那が眉をひそめる。当然だ、刹那はノブレスと初対面である。

にも関わらず、ノブレスは刹那のことを知っているような口ぶりであった。

その理由を、アイデアは知っている。自分と彼に共通する相手が、刹那のことに詳しい人間だったからだ。

「友人が言っていたんだ。『刹那・F・セイエイを見出したのは僕なんだ』、『あの子が、僕が蒔いた種をどう育てて、どんな花を咲かせてくれるのか楽しみにしてる』って」

その言葉に、刹那は大きく目を見開いた。彼女の脳裏に浮かんだのは、緑の髪と紫の瞳を持つ青年——リボンス・アルマーク。

刹那が見たガンダムに搭乗していたパイロットであり、彼女の恩人であり、彼女をガンダムマイスターに推挙した張本人でもある。

尤も、刹那はその人物の名前を知らない。

正式な血縁関係ではないものの、アイデアはリボンスと遺伝子的な関

係があつた。自分と彼が並べば、よく似た姉弟、もしくは双子に見えるだろう。リボンズと同じ塩基配列を持つイノベイド——ヒリング・ケアと並んでも、似たようなことが言える。

最近、彼女は仲間たちと一緒に妹分——アニュー・リターナーの恋路を応援するのに忙しい。アニューの恋愛が成就したら、次は仲間たちと一緒に婿をいじり／いびり倒すのだろう。アイデアにはそんな予感がした。AEU大手商社の営業マンが大きなくしゃみをした姿が『視えた』のは、気のせいではない。

ノブレスは刹那と話しながら、能力を使つてアイデアと会話を続ける。

『リボンズが言つてたんですよ。自分が見出した逸材だって、自慢げに語つて聞かせてくれました』

『あー。あの人、刹那に相当惚れ込んでたなー。元気？』

『ストレスフルの職場で頑張ってます』

動向を監視している相手のことを思い出したのか、ノブレスの感情が煤けてしまった。アイデアにはどうすることもできない。

やっとの思いで紡いだ言葉は「ご愁傷様」というものである。励ましどころか悲しみを助長するだけであつた。

『でも、最近は何度のサブボディを遠隔操作できるようになったみたいで、色々やつてましたよ。サブに仕事と運転手役を押し付けて、僕のコンスアートを見に来たりとかしてましたし』

『あの人ならやるんじゃないかと思つてた』

『ちよ、草まみれ』

『除草剤』

『ありがとうございます！』

ノブレスと刹那が普通に他愛のない会話を続け、ノブレスとアイデアが能力を使つて楽しく雑談をしていたときだった。

どこからか視線を感じる。刺々しい感情がちくちくと刺さってきた。その方向を見れば、ふくれっ面のネーナがアイデアと刹那を睨みつけている。

敵意というには無邪気な感情だ。ネーナの心に名前を付けるとしたら、嫉妬という言葉が相応しい。刹那よりも幼い少女であるが、彼女もまた乙女であった。

彼女が狙う相手は、自分の教官——ノブレスなのだ。

ノブレスは気づいていないようだが、彼にも春が近いらしい。

恋愛の話になっても、彼がストレスフルで精神崩壊一步手前にならず、むしろ常世の春を語るようになる日は近い。そのためにも、ネーナには頑張ってもらわなければ。

アイデアは敢えてネーナの方を向いた。どうしたの、と声をかけても、ネーナはふくれっ面を崩さない。

刹那とノブレスが彼女を見て、きよとんと首を傾げた。ネーナはノブレスに目もくれず、アイデアと刹那の腕を掴む。

そのまま、ノブレスに背を向けるような体勢を取らされる。訝しげな刹那と察したアイデアに対し、ネーナは蚊の鳴くような声で告げた。

「あげない」

その言葉に秘められた意味を理解できないような人間ではない。刹那も——昔の彼女だったら首を傾げていただろうが——ようやく察したようで、途端に真顔になった。

「要らない。……………間に合っている」

前半をはつきりと言い返した刹那も、後半は蚊の鳴くような声で呟いた。耳元がわずかに赤い。目を丸くしたネーナを手招きし、端末の待ち受け画面を開いて見せる。

刹那の端末待ち受け画像が『幸せそうに頬を緩ませながら、刹那が作ったライスプディングを味わうグラハム』の写真であることに、

ネーナは感嘆の声を上げた。

問題の1つ目が解決し、ネーナは安堵の表情を浮かべた。しかし、ネーナは即座にアイデアを睨む。

能力を使った会話を『聞かれた』訳ではないが、アイデアとノブレスが親しげだということは『察した』のだろう。

もしかしたら恋敵なのではないか、と、ネーナはぴりぴりしているわけだ。誤解はきちんと解いておきたい。

アイデアは端末を取り出し、満面の笑みを浮かべて答えた。

「私も要らない。意中の人がいるから」

端末の待ち受け画面を見た刹那とネーナが沈黙した。表情が戦慄く。

「きやあああああああああああああああああああああ！」

「うわあああああああああああああああああああああ！」

絶叫。

「何だ!?! どうしたネーナ……うわあああああああああああああああああああ!?!」

「ミハエル、何が………あああああああああああああああああああああ!?!」

妹の悲鳴に気づいたミハエルとヨハンが端末を見た。一拍おいて絶叫する。

『ほぎやあああああああああああああああああああああああああああああああ!?!』

ノブレスに至っては、能力をフルスロットルにした状態で大絶叫

し、思念だけで逃走してしまった。体はその場に置き去りにしてである。

『同胞』の持つ能力は、『体をその場に置き去りにし、思念こころだけを別の場所へ転移させる』という使い方もできた。

傍目から見れば、ノブレスは冷静沈着なまま。アイデアの端末待ち受け画像を見ても、ノーリアクション状態である。

『リアルログアウト状態』

『茶化さないでください！ 何なんですか、あの恐怖画像!!』

大笑いしたアイデアに対し、思念体になったノブレスが涙目で訴えてきた。

絶叫したのはトリニティたちやノブレスだけではない。

その場に居合わせた全員が悲鳴を上げた。文字通りの阿鼻叫喚図である。

「おい！ 今、誰か凄い絶叫して逃げて行かなかったか!? 『ほぎや

あ』みたいな感じの……」

「ああ。確実に聞こえたぞ！ ……だが、今聞こえた声、聞き覚えがあるような……」

「聞こえなかったよ！ そんな凄い声は！」

それでもノブレスの悲鳴が印象に残っていた面々がいたらしい。ロックオンとヨハンである。

しかし、彼らの問いかけはネーナの答えによって切って捨てられた。

ロックオンとヨハンは「そんなはずはない」と言いたげに、互いの顔を見合わせている。

そんな2人を尻目に、テイエリアが鬼のような形相でアイデアに突っかかってきた。

「アイデア！ お前は何故、この画像を待ち受けにした!? 言え、言うんだ!!」

彼が指示したのは、4 徹明けのクーゴ・ハガネの画像である。トレミークルーの面々を恐怖のどん底に陥れた画像として名高いものだ。ゾンビとジャパニーズホラーを足して掛けて乗算したような恐怖画像と言われるが、アイデアからすれば、どこが恐怖画像なのかさっぱりわからない。

「スゲエ、教官！ あの恐怖画像を見てもクールなままだ……!」

「か、カツコいい……」

『心が痛いです』

「ああ、まただ！ 声が、声が!!」

「誰かが泣いているのか……!?!」

抜け殻状態のノブレス（体のみ）を見て、ミハエルとネーナが賞賛の眼差しを送る。後者に至ってはますます惚れ直したらしい。

居たたまれなくなったノブレス（思念体）が目元を抑えて鼻を鳴らせば、ロックオンとヨハンが周囲を見渡す。思念体となったノブレスの声を『聞き取った』のだ。

完全ではないものの、この2名も順調に『目覚めの日』を迎えようとしているらしい。彼らが恐怖体験の意味を知るのも、人間卒業も目前だ。

「2人とも、『つかれて』るんだよ」

「アレルヤ、どっちのつかれてるだ!? 疲れか!? 憑かれか!」

アレルヤの言葉に、『つかれ』気味のロックオンが声を荒げた。

あっちもこっちも大騒ぎ。

こんな調子で、チーム・プトレマイオスとトーム・トリニティの会談が始まろうとしていた。



『ニイサン、ニイサン！』

アイデアたちがブリーフィングルームに到着して早々、オレンジ色のハロが飛び出してきた。ハロが向かった先にいたのは、ネーナが連れてきた紫色のH A R O。

「兄さんだあ？」

相棒の様子に、ロックオンが首を傾げる。

ハロからそんな話を聞いたことがないためだろう。

会いたかったと語るハロに対し、H A R Oは怪訝そうにハロを眺める。

『ダレダテメー、ダレダテメー』

『ハロー！ ハロー！』

ハロの声は合成音声のはずなのに、感情に満ち溢れているように感じるのは何故だろう。とても人間味がある。

そこが、ハロたちが「トレミー、およびソレスタルビーイングのマスタースコット」と言われる所以なのだ。見ているだけでほのぼのする。

人間味あふれるロボットたちと言えば、クラール・グライフ博士が作ったA L—3——愛称アリスとH L—0——愛称ハルノは元気だろうか？

最後に会ったのは、合同演習が始まる前である。

日本は平和な国だから、いつも通りの日常を過ごしているに違いない。

『シンネーヨ、シンネーヨー!』

アイデアが思考を飛ばしていたとき、H A R O がハロに体当たりを喰らわせた。ハロは弾き飛ばされ、部屋中の壁という壁に当たって、アイデアの腕に収まった。

『ニイサン……』と、ハロが寂しそうな声を出す。ぺたんと垂れ下がった耳と尻尾という幻覚が視えたような気がしたのは、きつと気のせいではない。

ロックオンがH A R O に何か言うより先に、ノブレスが動いた。浮かんでいるH A R O を驚掴みにし、ノブレスは厳しい声で言った。

「H A R O、謝りなさい」

『ナンデダヨ、ナンデダヨ』

「いいから、謝りなさい」

『シンネーヨ、シンネーヨー!』

次の瞬間、ノブレスはH A R O を手に持ったまま、ダンクシユート宜しくH A R O を壁に叩き付けた!

口元は真一文字に結ばれている。傍からでは、ノブレスは無表情に見えていることだろう。仮面の奥底でぎらつく琥珀を『視て』いるのはアイデアだけだ。

勢いが良すぎたせいか、H A R O は壁にめり込んでいる。ぱらぱらと破片が落ちてきた。この破損はクルー全体も察知したようで、艦内放送が鳴り響く。

『艦内で破損! 被害状況は軽微……何が起こったんですかスメラギさん!』

「ちよつと内輪揉めが……」

「謝れ。工具持ってきて、壁に埋めるぞ？」

地の底から轟くような声で、ノブレスはH A R Oに言い放った。彼の言葉に、ノブレスは技術職をやっていたな、と、アイデアはのんびり思い返す。

周囲の空気が冷え切ったような感覚。艦内放送を担当していたクリステイナと状況を説明しようとしたスメラギが凍り付き、この場にいる全員が沈黙する。

ノブレスの中に渦巻くのは後悔だ。彼が家族を失う数時間前、家族と喧嘩をして家を飛び出していたらしい。その数時間が、彼と家族の生死を分けた。

家族と仲直りしようとして、品物を選んだ数時間後。家に帰れば、自宅は炎に包まれていた。啞然とした青年が周囲の制止を振り切つて家に入り、家族の死体と対面した光景が『視えた』。

仲直りの機会を失ったノブレスだからこそ、ハロとH A R Oを放つておけなかったのだろう。例えば彼らが、人間とほぼ近い情緒を持つだけの端末だったとしても。

ノブレスとH A R Oが沈黙している。派手に睨みあっていると、言つても過言ではない。ややあつて、H A R Oがくると顔の向きを変えた。カメラアイの先には、アイデアの腕に収まるハロ。

『……シャーネーナ、シャーネーナ』

その言葉を待っていたノブレスは、驚掴みにしていた手を離した。自由を得たH A R Oは、迷うことなくハロの元へと飛んでいく。

『オイオマエ、オイオマエ』

『ニイサン?』

『テメーナンテ、シンネーヨ。シンネーヨ』

HARROは耳をぱたつかせる。無重力空間でぐるりと一回転した。

『オマエ、オマエ。イマカラ、シヤテイ、シヤテイ』
『ニイサン！』

アイデアの腕の中から、ハロが飛び出す。カメラアイが点滅を繰り返した。合成音声も嬉々迫る響きを宿している。

ハロとHARROがパタパタと耳を動かした。どうにか仲直り（？）はしてくれたらしい。この場にいる全員が、ほつと息を吐いた。

ノブレスも表情を緩ませた後、スメラギに謝罪して壁の修理を始めた。流石は本業、技術職。手早く修理を終わらせる。

壁は何事もなかったかのようピカピカになっていた。この場にイアンがいたら、ノブレスを見てどんな反応を示すだろうか。

一仕事終えたノブレスは満足げに微笑んだ後、取り繕うようにスメラギに声をかけた。

「では、始めましょうか」

「ええ、そうね」

そうして、チーム・プトレマイオスとチーム・トリニテイの会談が始まった。

37. 一難去つたら

『メギドシステムは最終段階に到達しました。繰り返します……』

アナウンスが聞こえる。時間はあまり残っていない。急がなければ。

ソルジャー・ブルーは、ふらつきながらも制御室へとたどり着いた。道中の敵をなぎ倒してきたが、体が悲鳴を上げている。

元より燃え尽きる寸前の命だ。おそらく、ブルーがナスカ崩壊の寸前に目を覚ましたのは、メギドを止めるために違いない。

ブルーがよろよろとした足取りで、メギドシステム中枢へと歩みを進める。一步、一步、踏みしめるようにして、ブルーは中枢へと足を動かした。

刹那、背中に焼け付くような衝撃が走った。ブルーは呻いて崩れ落ちる。一步遅れて、銃声が響き渡る。背後から感じたのは凄まじい殺気。『ミュウ』に対する敵意だ。

ブルーは膝をつきながらも振り返る。赤い軍服を着た鎮圧部隊が銃を構えていた。軋みを挙げる体を動かし、ブルーは反撃に転じた。強力なサイオン波を相手にぶつける！

兵士たちは吹き飛ばされて倒れこんだ。それを確認したブルーは這うようにして体を起こし、よろめきながらも足を進めた。呼吸は荒く、体が動いてくれない。

(まだだ)

体が軋む。戦おうとする心と対照的に、体がついていかない。

苛立たしさが募る。

(まだ、倒れるわけには……！)

そうだ、まだ倒れるわけにはいかない。自分には、まだやるべきことがある。

ブルーは確信していた。これを成しえるために、自分は生きてきたのだと。

果たさなければ。そして、繋げなければ。『同胞』たちの命と未来を、還るべき青い星^{テラ}へと。

「やはり来たか、ソルジャー・ブルー！」

聞き覚えのある男の声がした。声の方向へと振り返る。赤い軍服を身に纏った男が、ブルーへ向けて銃を構えていた。

「まったく驚きだな、ここまで生身でやって来るとは。まさしく化け物だ」

口元がほんの少し吊り上がる。少しの敬意と、爆ぜるような侮蔑の感情。

男の中に渦巻く感情に、ブルーは思わずたじろいた。男の顔から、薄く浮かんだ笑みが消える。

「だが、ここまでだ。残念だったな、メギドはもう止められない！」
(っ……………！)

ブルーは眦を釣り上げた。もし本当にそうだったとしても、諦めるつもりはない。ブルーとて、生きてメギドを止めようとは思っていないのだ。

命と引き換えになら、ぎりぎり止められる。だが、それを成しえる前に死んでしまうわけにはいかないのだ。ふらつく体を叱咤する。何としてでも、止めなくては。

次の瞬間、男の銃が唸った！ 何発も何発も、体に銃弾を打ち込まれる。限界を訴えていた体は簡単に崩れ落ちた。それでもブルーは

抵抗した。シールドを展開する。

何発もの銃弾がシールドにめり込む。銃弾が撃ち込まれる衝撃すら、今のブルーには凶器になり得た。

銃から薬きょうが引き抜かれる。リロード。補充された銃弾が、再びブルーに襲い掛かった！

「どうした!? 反撃してみせろ! —— 亀のように蹲っているだけでは、メギドは止められんぞ!」

男はそう言いながら、ブルーの元へと歩み寄る。その間、彼は何度も何度も引き金を引いた。何発もの銃弾を、ブルーに浴びせ続けた。そのすべてをシールドで防ぐ。崩れ落ちた体は言うことを聞かない。

でも、耐えなければ。今はまだ、耐えなければ。反撃のチャンスには、まだ早い。

『射撃準備完了。エネルギー圧力上昇。発射まで、カウント開始。10、9……』

聞こえてくるアナウンスは、メギドの発射を告げるものだ。同時に、ブルーが反撃に出るためのカウントダウンでもある。

『7、6……』

「少佐! ここは危険です!」

どこからか声がした。男を心配してやって来た部下のものだった。ブルーの視界に、男の脚が映る。もうそこまで接近していたらしい。

「これで終わりだ!」

至近距離から一発、銃弾が撃ち込まれる。そのタイミングを、ブルーは待っていた。

シールドに回していた分のサイオン能力を、攻撃だけに集中させる。

そのとき、男が撃った銃弾が、シールドを通り抜けてブルーの左目へと突き刺さる！

左目の視界が真っ赤に染まったのを合図に、ブルーは地面に手を叩きつけ、サイオン攻撃を放った！！

「——でええええええええええええええええええええええいッ!!」

「——キイイイイイイイイイイイイス！」

青い光が爆ぜる。青い光が足場に立つ男ごと崩壊させる寸前、刹那にも等しいタイミングで、男の部下が男を庇う方が先だった。

男には逃げられてしまったが、それよりもメギドを止める方が先決だ。そのためにブルーはここにいるのだから。

ブルーは後継者の名を呼んだ。彼には、自分が見出し、選んだために、辛い思いをさせてしまった。これからも、辛い思いをさせるのだろう。それでも、ブルーが希望を託せる相手は彼しかない。ブルーが見出したとし子——次代の指導者ソルジャーしかいないのだ。

(皆を、頼む……!)

ブルーは命を燃やすように、サイオン能力を開放する。

サイオンバースト。一際激しく輝いた青い光が、動力中枢部を破壊していく!!

どこかで兵士の悲鳴が響いた。どこかで次代の指導者ソルジャーが、身を切られるように転移を叫んだ。間髪入れず、同胞たちの楽園がワープを果たす。

アナウンスが聞こえる。動力部で爆発、メギドシステムはエネルギーの10%を照射したのみでシステムダウン、本体の爆発が拡大

中。ブルーはさらに力を込めた。

どこからか、嘆きの声が聞こえた。仲間や指導者ソルジャーを失ったと嘆き悲しむ、『ミュウ』たちの声だ。誰もが俯き、涙を流し、悲しみに暮れている。

(俯くな、仲間たち)

悲しむことなんて何もない。

どうか、前を向いて。希望はまだ、絶えていないのだから。

祈るようにブルーは目を閉じた。瞼の裏に浮かんだのは、青い星テを抱く女神が見せてくれたヴィジョン。ブルーにとつての理想郷らくえんであり、還りたいと願った惑星ほしよ。そして——ただふたつの、未練。

(嗚呼……できることならば、この目で、青い星テを見たかった)

それが叶わないのなら、せめて。

(……フィシス。キミの抱く青い星テを、もう一度——)

こうするときから、分かっていたことだったけれど。

それでも、もう一度見たかった。

何もかもが遠くなっていく。青い光が一際激しく爆ぜたのを最後に、ブルーの世界は黒へと沈んだ。それが死だと理解していたが、ブルーは恐れることなくそれに身を委ねたのだった。

(『俯くな、仲間たち』……か。ランディやスチュワートも、同じことを言うのかな)

クーゴはそんなことを考えながら、本を閉じた。

現在、オーバーフラッグス部隊は太平洋を移動中である。

三国軍事演習の名を借りたガンダム鹵獲作戦は、MDの暴走という大事件と新たなガンダムの出現によって失敗に終わった。

新たに出現したガンダムは4機。このタイミングで新型を投入してきたということは、ソレスタルビーイングはこの鹵獲作戦を察知していたということだろうか。

いや、彼らが予測していたことは鹵獲作戦ではなく、MDの暴走だったのかもしれない。『連邦の白い悪魔』を駆っていた男の言葉を思い出し、クーゴは深々と息を吐いた。

休憩室はクーゴとグラハム以外、誰もいない。静かな空気が漂っている。

「暴走したMD部隊、1機も帰投していないんだっけ？」

「ああ。本部は『ガンダムの攻撃で全滅した』とみなしているようだ」

クーゴの問いに、グラハムは険しい表情で答えた。その様子だと、グラハム本人は『MD部隊がガンダムによって全滅した』とは思っていないらしい。

あんな大暴走を起こしたのだ。のこのこと帰投なんてできないだろう。PMCトラスト側も、知らぬ存ぜぬで通している。ただ、言い訳も苦しくなってきたようだ。

『連邦の白い悪魔』を駆っていた男の言葉通り、MDの欠陥が発見されたというリークがなされたのである。内容も、男や一介のジャーナリストであるセキ・レイ・シロエが述べていた通り、『共有者コーヴァレンターや虚記きよおく持ち、およびその人物と親交がある者たちを優先的且つ無差別に襲う』というものだった。ちなみに、すっぱ抜いたジャーナリストもセキ・レイ・シロエだった。

「何をどうすれば、そんな地雷ができあがるのだろうか」

「まったく。襲われた方にとっては、たまったもんじゃない」

グラハムの眩きに、クーゴは腕を組んで頷いた。彼の眉間にも皺が寄っている。おそらくクーゴも似たような表情を浮かべているのだろう。

今回の事件で、2人のフラッグファイターを失った。前から親交があった、〃多元世界技術解析および実験チーム〃の仲間たち。

使わなくなった食器を眺める。軍人になるということは死と隣り合わせだ。友の死に直面するのは、これが1度や2度ではない。

それでも、友が『いなくなる』痛み慣れることはないだろう。クーゴは襟元を握り締めながら目を伏せる。自分にできることは、彼らの死を悼むことだけ。

謎は他にもある。投入されたMDは250機のはずなのに、何故か援軍として200機弱のMDが増援として現れ、戦場を荒らしていたのだ。残りはどこから湧いて出たのやら。

砂漠に潜んでいたことはわかつている。誰が、何の目的で、タクマラカン砂漠を増援を潜ませていたのか。派遣したと思しきPMCTラストは、やはり知らぬ存ぜぬを通してしている。

(PMCT、さっさと潰れちまえばいいのに)

我ながら恐ろしいことを考えるな、と、クーゴは思った。

今回の事故で、PMCTはMD開発を凍結したという話をちらほら聞いている。企業としての即死は免れたが、今回の事故は致命傷であることは明らかであった。

延命治療のために、壊死した部分を切除しようとしているようだ。それで済むかどうかは、会社の対応にかかっているだろう。むしろ済まなければいいのと思うのは、私怨だろうか。

そんな自分の思考回路を察したのか、グラハムは何も言わず紙コップを押し付けるようにして手渡してきた。中身はブラックコーヒー。クーゴはそれを受け取った。

一切甘味のないコーヒーは、この世の厳しさを示すかのような苦み

に満ちている。腹に重たい一撃が入ったような気がしたのは、気のせいではなさそうだった。

グラハムも無言でコーヒーを呷る。表情はどこか陰りがあつた。2人とも黙ったまま、椅子に座り込む。友の死を悼むように、グラハムが静かに目を閉じた。クーゴも黙祷を捧げる。

『副隊長の鍋が食べたい人、手を挙げてーっ！』

オーバーフラッグス部隊集合時に、そう音頭を取ったランディ。

『おいしいんだけど、おいしいんだけど……』

強制敵に決まったカレー味に対し、そう嘆いたスチュアート。

これからガンダムと対峙するたびに、戦友は減ともっていくのだと思う。それでも、死を悼むことを止めることはできない。

クーゴがそんなことを考えていたとき、休憩室の扉が開いた。ずかずかとした足取りで部屋へ踏み込んだのは、ジョシユアである。

「隊長と副隊長が揃いも揃って、辛気臭いんだよ。士気が下がるだろうが」

ジョシユアはずいっと何かが入った袋を突き出した。顔を上げて中身を確認すれば、こぶし大の大きさのチョコマフィンが2つ入っている。ふっくらしていておいしそうだ。

「何か食べとけよ。そうすれば気がまぎれるだろ」

そう言い残し、ジョシユアは袋を押し付け、さっさと部屋の外へと出て行ってしまふ。彼を呼び止める間もなかった。

……自分たちを励ましてくれたのだろうか。クーゴとグラハムは顔を見合わせた。とりあえず、彼の好意に甘えることにした。

袋からマフィンを取り出し、そのまま一口。

（――あ、これはダメだ）

味を認識する間もなく、クーゴは反射的にそう直感した。

ワンテンポ遅れて、口の中一杯に味が広がる。

まずい。

とにかくまずい。

形容のしようがないほど、ただひたすらにまずい。

甘いのか辛いのか苦いのか渋いのかなんて、そんなレベルで図れるようなチャチなものではない。生焼けか黒焦げかで図れるようなレベルでもない。問答無用でまずいのだ。未だかつてない味である。

これはテロだ。マフィンの形をした殺傷兵器だ。姉からの嫌がらせで『大量のシユールストレミングをぶちまけられた部屋に閉じ込められた』ときのような状態に近い。死ぬ。自分はここで死ぬのだ。クーゴには確信があった。

「クーゴ!? おい、しっかりしろ!!」

今まさにマフィンに口を付けようとしていたグラハムが、慌てた様子でクーゴを呼ぶ声が聞こえる。それを最後に、クーゴの意識は完全にブラックアウトしてしまったのだった。

蛇足だが。

ジヨシユアの作ったマフィンを食べたオーバーフラッグスの隊員が全員医務室送りになるのは、クーゴが倒れた時間帯とほぼ同時刻の出来事であった。運よく被害を免れたのは、寸前のところでマフィンを口にできなかったグラハムのみだったという。

更に、責任を感じたのかはわからないが、ジヨシユアがおかゆを差し入れてくれた。しかし、そのおかゆは真っ黒で、ほのかにコーラとチヨコレートの匂いがした。そのため、誰一人としておかゆに手を付

けなかったことを記載しておく。



「貴方たちはどうして、ガンダムを所有しているの？」

「ヴェーダのデータバンクにも、あの機体がないのは何故だ？」

チーム・プロトレマイオスのスメラギとティエリアが、会談の口火を切るようにして問いかけてきた。

来ると思っていたが、ここまで直球で来るとは思わなかった。単刀直入すぎるにも程がある。

「機密事項のため、答えられません。我々にも守秘義務があるんです」「このことを話すと漏洩になってしまうんです。申し訳ない」

はつきりと断ったヨハンをフォローするように、ノブレスは付け加えた。ミハエルが「残念」と言いながら、わざとらしく肩をすくめる。

「ミハエル、相手に喧嘩を売るような真似は慎め。ガンダムマイスター同士で争っても、何もならないぞ」

「う……すみません、教官」

「わかればいい」

ノブレスが注意すれば、ミハエルはバツが悪そうに視線を逸らした。昔はことあるごとに突っかかり、ナイフを突きつけてきたなど思い返す。

それと比べれば、素直に謝ってくれるようになったというのはいい進歩だろう。教え子の成長が嬉しくて、ノブレスはふっと表情を緩めた。

不意に笑い声が聞こえた気がして、意識を声の主に向ける。アイデアが生温かい眼差しでノブレスの表情を見ていた。まるで、弟の成長を喜ぶ姉のような眼差し。

『ノブレスくんも変わったねえ。昔は笑ったりなんてしなかったし、教官なんて呼ばれるようなガラじゃなかったのに』

いい変化だと、彼女の瞳が語っている。ちよつとだけ照れくさい。彼女の方が自分より年上なのだ。何年経とうが、年の功とその他諸々で頭が上がりそうになかった。

スメラギとテイエリアの質問を皮切りに、次々と自分たちに疑問がぶつけられた。

「お前さんたちは、GNドライブ……太陽炉をどこで調達したんだ？」
「それも答えられません。機密事項に抵触してしまいます」

ロックオンの問いかけに、ヨハンは静かに首を振る。ミハエルは何かを言おうとしたが、自分たちに言われたことを思い出したように踏みとどまった。

テイエリアが険しい顔をしてノブレスたちを睨んできた。何故ここに来たのかという彼の問いに、ノブレスはあるがままを答える。

「^貴ファースト・^方チームと話がしたくてここに来ました」

「ならば何故、こちらの質問に答えようとしななんだ!？」

「守秘義務です。貴方にだって、答えられない質問があるでしょう？」

例えば――」

彼の秘密に対し、土足で踏み込むのは悪いと思っている。しかし、ここは自分が憎まれ役を買って出なければ、延々と質問事項に晒される羽目になるだろう。

チーム・トリニティ――否、ノブレス・アム個人としての目的を果

たすためには、質問に時間を取られているわけにはいかないのだ。

「テイエリア・アーデ。ヴェーダに直接アクセスできる貴方は、一体『何者』ですか？」という問いに、自らも納得できる答えが出せますか？」

「!？」

空気が凍り付く。

ただならぬ空気を察したロックオンが、眈を吊り上げてノブレスとテイエリアの前に割って入った。次は彼の地雷を踏みぬかねばならないのだろうか。

テイエリアはロックオンを制止し、苛立たしげに首を振った。気分を害したと言いつ残し、彼は部屋を退出する。その直前、彼はヴェーダにレポート提出を求めた。

ヴェーダの穴を知っているノブレスにしてみれば、それもまた面々の首を絞める自滅行為にしかならない。逆効果だったか、と、ノブレスは苦い表情を浮かべた。

「彼には後から、僕自身が直接謝罪をさせてほしいのですが」

「テイエリアは気難しいからね。一応、私でよければ後で部屋に案内するけど」

「宜しくお願いします」

アイデアが苦笑する。彼女の顔つきからして、アイデアとテイエリアの相性はあまりよくないらしい。不意に、何かを察知したりジエネが渋い顔をして端末をいじっている光景が『視えた』。漂う思念から察するに、今の出来事を『視た』らしい。

端末にはお怒りメールが殺到しているはずだ。彼の同胞を苛めた罰として、あちらにも謝罪をしなくてはならないだろう。テオ・マイヤーの新曲発表とサイン入り新曲CDとゲリラライブ告知および決行の日取りを独自で流すのと最前列の予約で赦してもらえらるだろう

か。

「あーあ。今のが女の子なら、放っておかないんだけどなあ」

「ミハエル、やめないか」

「う。2人とも綺麗にハモって……」

綺麗に重なったヨハンとノブレスの叱責に、ミハエルは居心地が悪そうに視線を逸らす。反省の色がない。

「ミハエル」

「ぐ。……す、すみませんでした」

もう一度ノブレスとヨハンが叱責すれば、ミハエルは申し訳なさそうに頭を下げた。

その横で、ネーナがそわそわし始める。つまらないけど、そう口に出してはいけない——彼女の思念に触れてみた。

『口に出したら、教官に嫌われるかもしれないし……』

はて、とノブレスは首を傾げた。以前のネーナは『怒られるのが怖いし、説教が長いし、メンドクサイ』と思念で言っていたのに、どういう心境の変化だろう。

アイデアが冷めたような乾ききった笑みを浮かべ、落胆したように視線を逸らした。ノブレスくんは女心に疎いんだねー、と、そんな思念が伝わってくる。

『ネーナちゃん可哀想だなー。前途多難だなー』とアイデアは言うが、ネーナは一体何と戦おうとしているのだろう。力になってやりたいとは思いますが、なかなか話してくれない。

もしかして、恋愛関係なのだろうか。だとしたら、ノブレスは何の役にも立たないことは明白である。

成程。だから彼女はノブレスに頼ろうとしないのか。煤けた気持

ちになり、ノブレスはちよつとだけ気が遠くなった。

「これだけは聞かせて頂戴。貴方たちはあのガンダムで、何をしようとしているの？」

スメラギの言葉に、ノブレスは一気に現実へと引きもどされる。ヨハンは当たり前前のことを答えるように、堂々と胸を張った。

「もちろん、戦争根絶です」

「本当に？」

「貴女たちがそうであるように、私たちもまた、ガンダムマイスターなのです」

ヨハンの言葉を聞いたロックオンが、「俺たちと組むのか？」と問いかけてくる。

ノブレスは静かに首を振った。組むというのは正確ではない、と前置きする。

「我々は、貴女がたとえ行動を共にしません。ですが、同じ目的達成のため、別方面から動きます。貴女方ファースト・チームが本丸なら、我々セカンド・チームはいわば遊撃部隊。貴女方ではカバーできない部分を、我々が補います。貴女方は今までと変わらず、介入を行ってください」

「……貴方たちを推挙した人間が、何を考えているのかわかった気がするわ」

スメラギが肩をすくめた。成程ね、と、アレルヤが渋い顔をする。ノブレスも心の中で2人に同調した。今頃、アレハンドロは何をしている頃だろうか。

奴をどれだけ欺くことができるか。すべてはそこにかかっている。ノブレスは心の中でため息をついた。

どこか鬱々とした空気が漂う。スメラギは静かに目を伏せた。

「ということとは、私たちはお払い箱?」

「そんなことはない! 貴女方は、イオリア・シユヘンベルクが望んだ『希望』そのものだ!」

反射的に、ノブレスは声を荒げていた。途端にチーム・プトレマイオスの面々が大きく目を見開く。トリニティ兄妹も、驚いたように目を瞬かせた。

すべてを知っているであろうアイデアも同じ気持ちで、彼らと同じ場所にいる。そのことを確認するようにアイデアの思念に心向けければ、彼女は真顔で頷き返す。

いつの間にか熱くなってしまったらしい。他にも言いたいことや出かかった言葉を飲み込むように、ノブレスは小さく咳ばらいした。

「『ヴェーダに存在しない我々が、イオリア・シユヘンベルクの計画に必要な存在かどうか疑問が残る』という貴女方の憂いは尤もです。ですが、その答えは、我々の行動を見て判断して頂きたい」



現在、アイデアはノブレスを連れてティエリアの部屋を訪れている。先程の発言をティエリアに謝罪しておきたいというノブレスを取り持ったためだ。途中でノブレスを探していたネーナも合流していた。

アイデアはティエリアが苦手である。ヴェーダの申し子を地で行く彼は、感情で行動を優先しがちなアイデアのことをあまり好ましく思っていない。刺々しい感情を向けられると、こちらもやりにくくなってしまうのだ。

最近の彼は人間味が増してきたと思う。いずれは自分自身の意志

で立ち上がり、自分自身の力で決断し、歩いて行ってほしいものだ。こことは違う場所に存在していた『機械の申し子』が、最期に「自らの意志で立ち上がる」ことを選んだように。

「ここがティエリアの部屋だけど……ここには居ないみたいね」

イデアはきよろきよろ周囲を見回してみる。相変わらず、必要最低限のものしか置かれていない。

というより、マイスターは皆、インテリア類には殆どこだわっていない様子だった。

「イデアとクリステイナが暢気すぎる」とは、フェルト・グレイスやティエリア・アーデの談である。

「あと、他に彼が行きそうな場所は？」

「ヴェーダのターミナルユニットくらいかな」『……そこにも居ないみたいだけど』

「そうか」『一体どこ行っちゃったんでしょうねー』

イデアはノブレスとのほほんとした会話を繰り広げている。残念ながら、ノブレスは自分の背後でネーナがふくれっ面していることに気づいていない。

彼女の憂いと嫉妬と焦りもわかる気がした。いくら相手が「意中の相手が他にいる」と言っても、自分がロックオンしている相手と親しいとなれば不安にもなる。

イデアはちらりとネーナに視線を送った。頑張つてアピールしてごらん、と、目で合図を送る。ネーナは目を丸くした後、意を決したように床を蹴って飛び出した。

「教官っ！ ヴァーチェのパイロットを探すついででいいから、私と一緒に船の中を散策しない？ 許可は貰ってるし、いいでしょ？」

ノブレスの腕を掴んだネーナが、あざとい上目遣いのアングルで彼に迫る。ノブレスは目をぱちくりさせた後、それならばと言うようにして頷いた。

「やったー」と弾むように笑い、ネーナはノブレスの腕に寄り掛かった。彼女の精一杯のアピールだ。しかし、ノブレスは全く意識していない。普通に歩いている。

ちよつと待ってよチャンスだよ——口から出かかった言葉を飲み込み、アイデアはがっくりと肩を落とす。恋人やら結婚やらに色々思う人間がそれでいいのか。

2人はそのまま廊下の向うへと消えていく。やきもきしたアイデアは、ひっそりと2人の後を追いかけることにした。

壁に体をもたれかからせ、目を閉じる。体を脱ぎ捨て思念だけになったアイデアは、ノブレスとネーナの気配を追いかけた。

彼らはテイエリアを探しつつ、プロレマイオスを散策している。ノブレスは力を使って彼の思念を追いかけているが、地雷を踏んでしまったためか、テイエリアの思念はノブレスをシャットアウトしてしまっているようだった。

(私に対しても心を頑なにする強敵だからなあ。多分、しばらくは見つけられないんじゃないかなー。というか、ノブレスくんは女の子のアピールを平然と流しちゃうから、なかなかうまくいかないんじゃないかなー。ネーナちゃん可哀想に)

アイデアは、恋する少女の幸先の悪さを憂う。何とかして、難攻不落の彼を落とす方法を探さなくてはならないだろう。

そんなことを考えていたときだった。ネーナとノブレスが差し掛かった場所は、ヴェーダのターミナルユニットだ。

「教官。あっち行ってみよう」

「ネーナ、変な場所へ行くんじゃない」

「いいからいいから！ 行こうよ教官」

ネーナは扉に背を向けたまま、ノブレスの腕を引っ張った。次の瞬間、ターミナルユニットへの扉が何もしていないのに開いた。脳量子派をつかえる人間しか開けられない扉を、ネーナは開いてしまったのである。

(あの子、脳量子派が使えるんだ……)

アイデアは2人の背中を追いかける。初めて入ったヴェーダのターミナルユニットは、不気味な赤い光で満たされていた。

後ろの扉が勝手に開いたことを察知したネーナであるが、勢いよくノブレスを引っ張ったためか体勢を崩してしまふ。背中から穴に突っ込むような形で、彼女はノブレスを引っ張ったまま落っこちてしまった。

高い悲鳴が響く。しかし、寸でのところでノブレスは姿勢を反転させた。ネーナを抱きしめるような体制になったノブレスは、自分が背中から落下するようにして体を反転させる。鈍い音とくぐもった悲鳴が聞こえた。

「いてて……」

「きよ、教官!？」

『うわお！ 騎乗位!!』

あまりの展開にガッツポーズしたアイデアは悪くないはずだ。偶然が生み出した、運命的な体制である。ネーナがノブレスを押し倒したような形だ。

自分の体勢を真っ先に理解したのはネーナであった。このまま責めるべきか恥じらうべきか、駆け引きの瀬戸際に立たされているようだった。

対して、ノブレスはきよとんとしたまんまである。そこは意識しなきよ、と、アイデアは嘆きたくなった。彼は本当に春を求めているのだ

ろうか。

ネーナは動かない。考えているのだ。どうアクションすれば、この状態から、目の前にいる朴念仁に『女』としての自分を意識させることができるのかを。

彼女の心と脳量子派に呼応するかのようには、ヴェーダが計測を始める。どうすればいいのか、全力で計算を始めた。ややあつて、答えがはじき出される。

この場では無理（要約）。

出てきたデータに、ネーナは目を剥いた。

再びヴェーダが計測を始める。結果が出た。

この場では無理（要約）。

「ふ……」

ネーナの肩が戦慄く。

「ふざけんじやないわよ、ポンコツウウウ!!」

「ちよ、なっ……!? え、ネーナ!？」

大泣きした。全力で大泣きした。ヴェーダがはじき出した返答が、余程ショックだったらしい。

意識もしていなければその意味を知らないノブレスが、目を瞬かせつつ右往左往している。

ネーナの叫び声に気づいたのか、ネーナがヴェーダをポンコツ呼ばわりしたことを察知したのか、ティエリアがすっ飛んでくる気配を感じ取る。ヴェーダのターミナルユニットが開いていることに気づいた彼は、血相を変えて部屋に突入した。そうして、ノブレスとネーナの体勢を目撃する。

「?!?!?!?!」

大パニック。その言葉がよく似合うような形相だ。
珍しい表情だ、なんて笑う間もなく、ティエリアは盛大に怒鳴り散らす。

「貴様らは一体、ここで何をしているんだっ!?!」
「ヴァーチェのパイロットか、丁度良かった。先程の発言を謝罪したくて探し回っていたんだ。先程はすまなかった」
「いや、そうではなくて! 貴様ら、どうやってここへ入った!? そし
てここで何をしている!?! ふしだらだ! 破廉恥だ! それから、
ヴェエダをポンコツ呼ばわりしたのを訂正しろ!!」

そんなに一気に言わなくてもいいじゃないか、ヒトだもの——イデアはひっそりとそんなことを考えた。勿論、口に出しはしない。

次の瞬間、画面いっぱい少女の姿が映し出された。ウェーブのかかった茶色のショートヘアに、緑のヘアバンドをした少女である。

イアンの娘——ミレイナ・ヴァステイを成長させれば、丁度あんな感じだ。画面に映し出された彼女そっくりの少女が、盛大に叫ぶ。

『私はどんなアーデさんも大好きですう!』

「う、うわあああああああああああ!!?」

「うわああん! なんでこの眼鏡には恋愛イベントが用意されてるのよー!!」

『おおお!? これは、根掘り葉掘りすると楽しい予感っ!』

ティエリアが頭を抱えてうろたえ、ネーナが更に大泣きし、ノブレスが食いつく。なんてカオスな光景だろう。

ノブレス・アムの春は遠く、ネーナ・トリニティの恋路は茨。ティエリア・アーデはまだ未定だ。早く数年経過すればいいのに。

それぞれの恋愛戦線、介入の余地がありそうだ。イデアはにんまりと笑い、即座に自分の体に戻る。

少し離れたフロアから、ネーナとティエリアの声とノブレスの思念

が響いていた。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

38. 崩壊への序曲

格納庫に新しい機体が並んでいた。フラッグとAEUIナクトの系譜を継いだ、フラッグの究極系とも言える量産機。

機体の色は鮮やかなペールグリーンである。しかし、その中に混じって、青い機体のものがあつた。これは、搭乗者が部隊の指揮官であることを示している。

一般機だろうと指揮官機だろうと、この機体に乗れる人間は限られている。主たる人間の一角として、グラハム・エーカー隊長率いるソ
■ブレイ ■ズ隊が挙げられた。

「こうして見ると、感慨深いものがあるなあ」

クーゴはしみじみと息を吐いた。

ブラストの猿真似、フラッグの猿真似。ビリーがヘリオンやイナクトを酷評していたことを考える。まさかフラッグの発展にイナクトの系譜が加わるなんて、誰が予想しただろう。

この2機を掛け合わせた新しい機体が生まれたことこそ、新しい世界の幕開けに相応しい。その一步として、この機体は華々しく空を舞うのだろう。自分もまた、この機体と共に空を舞う。考えただけで、口元が緩んできた。

今なら、グラハムの気持ちがよくわかる。空を愛し、空を翔ることを見望んだ彼の、子どもっぽい表情。きらきらした想いに触れた気がして、あまりの眩しさに目を細めた。今でもグラハムはその気持ちと若々しさを失っていない。

そしてそれは、新たな世代にも受け継がれつつある。クーゴは、新しく配属された新人のことを思い出した。

アニエス・ベルジュとジン・スペンサー。彼らは昔からの友人らしく、とても仲が良かった。2人とも、グラハムに憧れる新米軍人である。若いつて素晴らしい。

今年でクーゴも35歳。思考回路もおっさん臭くなったものだと

苦笑する。

「存在自体が年齢詐欺と言われるキミが言う台詞か？」

「お前、その言葉そのままバツトで打ち返してやる」

今年で34歳になったグラハムに、クーゴは笑いながら言い返してやった。相変わらず、この男には「年齢十歳児」という言葉が似合う。現在34歳児の男は、今日も元気であった。

グラハムは先の大戦で顔半分大きな傷を負っていたが、それでもまだ充分若く見えるレベルである。彼らしさを取り戻し、憑き物がとれたということもあるに違いない。

そこまで至るまでの道は、決して平坦なものではなかった。あまりにも長い道のりを思い出し、また気分が遠くなる。喉元過ぎればなんとやら、だ。

またこうして、くだらない会話で笑いあえる日が来るなんて。

戦いのさなか、ずっと願っていた日常が目の前にある。それはとても幸せなことだ。

「一般機の中でも、キミのは更に特別性なんだろう？ E ■ P | ■ s

■ onバ ■ トとは、『悪の組織』の技術部も奮発したものだ」

グラハムは笑いながら、クーゴが駆るであろう機体を仰ぐ。一般機とは違い、晴天を思わせるような真空色の機体。

先の戦いで『目覚めた』クーゴの、ひいては今後、現れ／増えているであろうクーゴの『同胞』たちのための、特別なシステムが搭載されている。

クーゴは己が搭乗する機体を仰ぎ見る。先の戦いで共に駆け抜けた愛機フラッグを、ほぼフルチューンナップした仕様だ。

これからも、自分はこの子と共に戦っていく。その光景を頭の中に思い浮かべる。

青い空を自由自在に飛び回る、真空色の機体。考えるだけで、心躍

るものだった。

クーゴの思考回路を中断するかのようになり、端末が鳴り響く。差出人は『エトワール』、もとい、アイデアだ。

「ほう、デートのお誘いか」

グラハムが、からかうように目を細めた。

クーゴだって負けていない。茶化すように彼を小突く。

「お前こそ、あの子とはどうなってるんだ？」

「ふふ。あえて言わせてもらおう！ 私と刹那は「やっぱいい。今のでよくわかった」

全力で叫びそうになったグラハムを制する。彼を茶化すとロクなことにならない、典型的な例であった。

思い出したくない苦労が頭に浮かび、クーゴは天井を仰いだ。他人の恋路に巻き込まれた日々は、今でも時折フラツシユバックしてくる。

これ以上この話題にこだわると、クーゴの精神衛生上、辛いものがあった。どうかして話題を変えよう、とクーゴは決意したときだった。

「グラハム少佐!!」

救いの天使が来た。クーゴは素直にそう思った。新米軍人2人組、アニエスとジンである。

グラハムは眩しいものを見るように目を細めた。彼がこの2人に目をかけていることなど、見てすぐにわかった。

この2人が並ぶ光景は、先の大戦以前の自分たちを思い出させてくれた。自分たちには長い戦いと離別があったけど、今、こうして共に歩んでいる。

彼らはどうだろう。自分たちのように、対立して離別するなんて経験はしてほしくない。クーゴとグラハムが肩を並べて戦えるようになったのは、仲間たちが手を貸してくれたおかげだ。

何かがあつても狂ってしまったら、クーゴはグラハムを連れもどすことができなかつたかもしれない。対立したまま殺し合い、最悪の末路に至っていた可能性もある。考えるだけで恐ろしかった。

グラハムは2人と雑談を始める。その後ろ姿を眺めながら、クーゴはふと考える。

アニエスとジンは、自分たち以上の偉業を成し遂げるだろう。彼らは互いに互いを高め合い、優秀なパイロットとして大成する。

最高の相棒。この表現がとてもよく似合う。クーゴとグラハムの関係とよく似た、けれども、クーゴとグラハムとは違う形で、彼らは空を翔るのだろう。

「……さて、今のうちに返信返信、つと」

端末を開いてアイデアに返信する。文章を推敲し、少しの間躊躇った後で、クーゴは送信ボタンをクリックした。

*

「これが、フラッグの後継機……」

感極まったように、ハワードが息を吐いた。彼の目は、ペールグリーン色の機体に釘付けである。

フラッグを愛してやまなかつた彼にしてみれば、これ程待ち焦がれた機体はない。

訳あつて新型機——■■■スに搭乗していたフラッグファイターたちは、ようやく自分たちの魂が宿る機体の元へと帰ってきたのだ。嬉しさもひとしおだろう。

「我がプロフェッサーとカタギリ曰く、『フラッグの究極系』とも言える機体だ」

「とか言いながらも、この系譜を継いだ新型の計画は続行中だ。俺たち次第で、フラッグの系譜がどう進化していくかがかかっている」

グラハムの言葉を継ぐように、クーゴもうんうん頷いた。そうして、自分の駆る機体を見上げる。

どこまでも透き通った真空色。カメラアイ付近が、格納庫の明りを反射して煌めく。

その様子が、「これから宜しく」と言われたような気になる。クーゴも微笑み、「宜しく」と小さく呟いた。

配属された新型は、16機ずつで1部隊となっている。クーゴとグラハムが所属する隊の内訳は、指揮官機が1機、一般機が10機、専用のE■P■s■on搭載機が4機、クーゴ専用のE■P■s■onバ■ト搭載機が1機となっていた。グラハムの指揮官機は、彼の『目覚め』具合を見て、彼専用のE■P■s■onバ■トの搭載が成される予定らしい。

「この機体で、空を飛ぶのか……」

「今すぐ飛んでみたいっすね！」

ダリルとアキラが目を輝かせる。

まるで子どもみたいに、瞳の奥底には光が満ち溢れている。

「まあ、散々待たされたんだ。出来がよくなきゃ困るぜ」

ジョシユアは厳しいことを言いながらも、その横顔はとても優しい。青の瞳は、慈しむように細められていた。

フラッグファイターたちはこの瞬間を待っていた。先の戦いでフラッグが表舞台から姿を消し、グラハムの駆る機体以外存在しなく

なつた後から、ずっと。

旧オーバーフラッグス部隊の生き残りも、新たな仲間たちを加えて、自分たちは空を舞うのだ。考えるだけでワクワクする。子どもの頃を思い出した気分だ。

「では行こうか、フラッグファイター。新しい仲間たちとの初顔合わせだ」

「了解！」

その言葉を皮切りに、グラハムが先陣を切る。クーゴたちは彼の後に続いて、格納庫を後にした。



ジョシユア・エドワーズによる『マフィンテロ事件』で、事実上オーバーフラッグス部隊が壊滅してから、丸々2日ほど経過した。

あのときの騒ぎが嘘のように、隊員たちは全員体調を回復させていた。まあ、マフィンのまずさで体調を崩しただけなので、回復が早いのも当然であるが。

本人無自覚の『追い打ち（コーラ&チョコレート粥）テロ未遂』も発生したが、全員が自力で危機を回避したという要因もあろう。コーラで米を煮炊きするなんて初めて見た。

自分たちは太平洋を移動中である。程なく、本国へと帰還できるだろう。

戦友^{とも}を失った痛みが癒えたわけではない。だが、交流が浅いにも関わらず頑張って自分たちを励まそうとしてくれたジョシユアの優しさはとても嬉しかった。飯テロは御免被るが。

現在、クーゴは昼食づくりの真っ最中である。援軍はグラハム、ワード、ダリル、アキラ、ジョシユアの6人体勢だ。勝手知ったるで

動いてくれる前者4名と、味付け以外なら手際がいい後者のおかげで、料理は順調に完成しつつあった。

「よし、こんなもんだな」

最後の皿を盛りつけ終わり、クーゴはほっと息を吐いた。あとは、この料理を仲間たちの元へ持つていくのみである。

他の面々も察してくれたようで、率先して料理を運んでくれた。運ばれてきた料理を見た面々が、嬉しそうに目を輝かせて近づいてくる。

本日のメニューは、リンゴジャムとシナモンを使ったトースト、サーモンとアスパラをメインに青しそとベビーリーフを使ったサラダ、刻んだ青しそを乗つけたグリルチキン、枝豆を使ったポタージュ、白身魚のトマト煮である。

リンゴジャムは、すりおろしたリンゴだけでなく、角切りのリンゴが入ったものを使っていた。

サラダやグリルチキンに添えたドレッシングは、玉ねぎと蜂蜜を使ったハニーマスタードだ。

白身魚のトマト煮には、他にもジャガイモやナス、ズッキーニや玉ねぎ、にんにくなどを使っている。

「今日の料理もおいしそうですよね！」

「副隊長作だから、はずれはないよな」

仲間たちはちらりとジョシユアに視線を向ける。不本意にも『飯テロの首謀者』となってしまうたジョシユアは、むっとしたように眉間をひそめた。

「そんなにいじるなよ。改善の余地はあるんだから」

改善の余地がない姉の言動を思い出して、クーゴは朗らかに笑っ

た。クーゴが誰とジョシユアを比較しているのか悟ったグラハムたちは、何とも言えなさそうに視線を逸らす。その相手を知っているもう1人は、今頃ドーナッツを食べている頃だろう。

異質な空気に晒されたジョシユアは目を点にしたが、居たたまれなさそうに肩をすくめる。「アンタ、いったいどんな人生を歩んできたんだ……」と呟いた彼は、クーゴの笑みから何を察したのだろうか？料理を面々に手渡し、クーゴは椅子に腰かけた。いただきます、と手を合わせ、料理へ手を伸ばした。

どれもおいしいと思うが、他の面々の評価はどうだろう。気になったので、周囲の面々へ視線を向ける。

クーゴの隣で、グラハムが Grill チキンを口に運んでいるのが見えた。彼は頬を緩め、一心不乱にナイフとフォークを動かした。ハワードはトーストを齧り、満足げに目を細める。ダリルはハニーマスタードが気に入ったのか、レシピを復習していた。アキラは自前の箸で白身魚と野菜を口に運ぶ。あつという間になくなって、彼はお代わりを要求した。ジョシユアは興味深そうに枝豆のポタージュを味わっている。何かを閃いたように、彼は顎に手を当てて、不敵な笑みを浮かべていた。

他の面々も、楽しそうに雑談しながら料理をつついていた。中にはお代わりをよそいに行った者もいる。おおむね好評らしい。

クーゴは安心して表情を緩めた。Grill チキンを味わいながら、仲間たちの談笑に加わる。

『新たなガンダムが出現し、事態はどんどん混乱に陥っています。……』

部屋に設置されていたテレビジョンがニュースを告げる。三国軍事演習で、新型ガンダムが現れたときの映像が流れていた。

MD暴走事件も合わせて報道されているが、それに関する情報は簡潔にまとめられていた。メインがソレスタルビーイングの新型ガンダム4機の存在なのだから、当たり前と言っちゃ当たり前なのだ

が。

映像では、赤い粒子をまき散らす3機の兄妹機と、今までのガンダムと同じ緑の粒子を輝かせながらMDを殲滅する『連邦の白い悪魔』がMSやMDをなぎ倒していた。最初のガンダム介入の際に見た、圧倒的な実力で。

その映像を何度も何度も放映されて、気が滅入ったのだろう。ダリルが深々とため息をついた。

「……これで、三国の現存戦力ではガンダムに対抗する術が殆どないってことになるんですかね。せめて、ガンダムと同等の機体さえあれば……」

「ダリル、フラッグは我が軍最強のMSだ。フラッグファイターなら矜持を見せろ」

甘いトーストを齧っているというのに、ハワードが渋い表情を浮かべてため息をつく。フラッグを愛し、惚れ込んでいる彼にとって、これ程辛い現実はない。

それは、フラッグの育ての親であるグラハムにも言えることだった。テレビを見ていた眼差しが、ゆっくりグリルチキンの斜め下へと向けられる。

各国の技術班はどんな思いで、このニュースを見ているのだろうか。エイフマン教授やビリーのことを考えると、クーゴは何とも言えない気分になった。

しかし、自分たちは知っている。技術班は、転んだってただで起きるような連中ではない。

今頃、ユニオンの誇る技術顧問とその弟子が反撃の狼煙を上げるために開発に勤しんでいるだろう。自分たちがチューンした新型では間に合わないのだ。

技術者たちが更に上を目指すことは明らかであった。たとえ時間がかかろうと、彼らはガンダムを超える機体を生み出してくれることだろう。

「MSの性能差が、勝敗を分ける絶対条件ではないさ。この手が届かないと決まったわけではない」

酷く真剣な面持ちで、グラハムは言葉を紡ぐ。

「諦めるにはまだ早い。そうだろうか？ フラッグファイター」

挑戦的に笑ったグラハムに対し、面々も笑い返して頷いた。この場にいる誰一人として、諦めているものは存在しない。

己の機体と称号に、揺るぎない誇りを持つ者たちだ。誰が何を言おうと、自分たちの相棒はフラッグである。

クーゴもグラハムに同調した。咀嚼していたサラダを飲み込み、小さく頷く。

「もしも他の機体に乗りに換える日が来るとしたら、それはフラッグの後継機だろうな」

クーゴの言葉を聞いた面々も、しつかりと頷き返した。

「そうですね。俺も、副隊長と同じ気持ちです」

「俺もです」

「俺も！」

「性能がいい方がいいけどな。……フラッグの後継機と他の機体だったら、フラッグの方がいいに決まってるけど」

ハワードが、ダリルが、アキラが、ジョシユアが、口々に是と返事する。

そうと決まれば、我らが技術顧問レイフ・エイフマンやビリー・カタギリにこの話を打診してみよう。

仲間たちが「直談判」という言葉を頭に思い浮かべたとき、突然ア

ナウンサーが悲鳴を上げる。

ニユース速報だ。内容は、新型ガンダムがP M CトラストのM D運送用コンテナを襲撃したという事件。

武力介入先として白羽の矢が立った理由は、先日起こったM D暴走事件だろう。

『大変です！ P M CトラストのM Dが、次々と動きを停止していきまます！』

ニユース画面に映し出されたのは、ガンダムを撃墜しようと飛び出したM Dたちが突然動かなくなった映像だった。ただの人形と化したM Dたちは、次々とガンダムの攻撃によって撃墜されていく。

ファルシアはハンドガンで蜂の巣にされ、ビルゴは誘導兵器で串刺しにされ、トーラスがキャノンで風穴を開けられ、ゼダスが誘導ビーム兵器の連続攻撃によって爆散した。新手が動き出す前に、M Dのコンテナが吹き飛ばされた。

機体が誘爆する。無力化された／無力状態のM Dたちがあつという間に倒されていった。最初に現れたガンダムたちに負けず劣らず、新型ガンダムの作戦行動も手際がいい。チームの中核を担うのは、『連邦の白い悪魔』だ。

作戦開始からわずか2時間弱で、P M Cの所有するM Dたちが全滅した。軍やP M C側のM Sたちの乱入など意に介さず、彼らはM Dに攻撃を集中していた。M Dの殲滅を確認するや否や、4機のガンダムは振り返ることなく離脱していく。

次の目的地は、本社や支社の保管庫だ。

まだ、M Dの群れは存在していたからである。

(……あれ？ どうして俺はそう思ったんだろう)

強く断言した己自身の思考に、クーゴは思わず目を丸くした。ニユースは新型ガンダムたちの介入についての話題で持ち切りであ

る。

彼らの活動は、部屋に集まった兵士たちの話題もかつさらってしまった。旧ガンダムたちが行っていた介入パターンと、共通点が多いためである。

「新型は旧型と粒子の色が違うが、それでも、同じ『ソレスタルビーイング』だと断言してよさそうだな」

「そうみたいっす。この戦い方、間違いなく『ソレスタルビーイング』っすよ」

ダリルとアキラがうんうん頷いた。ハワードとジョシユアが怪訝な顔をする。何を当たり前のことを言っているんだ、と、言いたそうだった。

「そうだな」と肯定したのはグラハムであった。クーゴも頷き、テレビ画面を見やる。うまく説明できないけれど、確かに彼らも『ソレスタルビーイング』だ。

武力介入に対し、彼らは常に真剣だった。どこぞの戦争屋のように、むやみやたらな殺戮に走ることはない。そこが、彼らを非難したくてもできない理由である。

世界に喧嘩を売りながら、彼らは世界に対して優しすぎるくらいの配慮をしていた。テロリストなのだから、もっと派手に蹴散らしてもよかったはずなのに。

だからこそ、いつぞや起こった無差別テロ事件のように、ソレスタルビーイングの評判を貶めて『この世すべての悪』へと仕立て上げようとする輩が現れるのだ。

利益が出せないなら、存在する意味がない。姉が常日頃から零していた言葉を思い出し、クーゴはなんとなく居心地が悪くなった。

閑話休題。

「あの戦い方からは、確かな理念と覚悟を感じる。あるいは、揺らぐことのない誇りをな」

グラハムが静かに呟きながら、ニュース画面を見上げた。相変わらず、先程起こったPMCのコンテナへ武力介入を行った新型ガンダムの勇姿が映し出されている。

クーゴもニュース画面へ視線を向けた。ソレスタルビーイングが武力介入を行った理由として、タクマラカン砂漠で起こったMDの暴走事故が取り上げられている。

コメンテーターはセキ・レイ・シロエだ。彼は他の人々を相手に、辛口な意見をぶつけている。彼の執念もすさまじい。どこから情報を入手してきたのやら。

(今回の一件が悪化すれば、PMCTラストも終わるだろうな)

焼野原を抱く男——アリー・アル・サーシエスの不気味な笑みを思い返す。あそこで雇われている傭兵たちは、PMCが潰れてたつて痛くも痒くもなさそうだ。

また新しい巢に降り立ち、傭兵業を始めることだろう。アザデイスタンの内乱を起こした黒幕のような存在は、奴らの行く先を察知し、依頼を出すに違いない。

黒幕を絶たねば、いくら兵器を潰しても効果が薄いのだ。根本的なところを何とかできなければ、本当の意味での『戦争根絶』は無理なのではないか。

まあ、表に出てこないから『黒幕』と呼ぶのだが。

クーゴは息を吐いて、止めていた手を動かした。



チームトリニティの役割は、破壊の限りを尽くすことにある。ソレスタルビーイング、およびガンダムに『悪』としての側面を植え付け

るための作戦であり、アオミの知る『知識』通りに世界を動かすためには必須であった。

しかし、それを狂わせるように現れたのがノブレス・アムというイレギュラーである。奴はアレハンドロの部下であり、リボンズの友人としてこの世界に立っていた。ノブレスが教官を務めたトリニティは、アオミの『知る』トリニティとは全然違う。

「危惧していたことが起きた、か」

アオミは舌打ちし、端末に映し出されていた映像を消した。そうして、くるりと踵を返した。

「どうしますの?」

椅子に座ってフルーツを味わっていた少女が、じつとこちらを見上げてきた。

彼女の隣に控える男も、静かな眼差しを向けてくる。

アオミは少女に振り返り、微笑んで見せた。何も心配することはない、と頷く。

「世界を動かすのは『私たち』よ? これくらい想定内。——運命は、『私たち』の味方だもの」

アオミはそう言って、端末を操作した。その画面を、少女と男へ示す。

画面を覗き込んだ2人は、大きく目を見開く。対して、アオミはゆるりと目を細めた。

映し出された機体のフォルムを見た2人は、ゆっくりアオミへと視線を向けた。少女は満足げに微笑み、男性は静かに目を閉じる。

少女と男性の反応を確認し、アオミは今度こそ踵を返した。地下室への道を開いて、降りていく。『無垢なる子』と書かれた部屋へ向か

い、試験管を管理するコンピュータに情報を打ち込んだ。

水が抜かれる音がする。ややあつて、巨大な試験管のハッチが開いた。ぱしゃん、と、足が水と床を踏みしめた音が響いた。足音は4つ。ぺたん、ぺたん、と響く音は、アオミの背後で止まった。

「海月、かつぎ厚陽、あつはる星輝、せいぎ宙継、そらつぐ」

名前を呼ばれた4人の少年たちは、静かに顔を上げる。外見年齢はわずか7歳児にしか見えないが、戦闘用および自分の後継者として調整した子どもたちだ。

あとは、戦いを通して彼らの中から後継者を選ぶ。能力的に海月が一番であるものの、刃金の跡取りに相応しい存在でなければ認められない。

母は弟を跡取りにと思っていたようだが、そちらを黙らせるための準備も進んでいる。問題はどちらかというところだが、しかるべき対処を取るつもりだ。

アオミはにやりと笑みを浮かべた。端末には、4人が乗るための専用機体が映し出されている。

悪意が牙をむく瞬間は、もうすぐそこに迫っていた。



「こちらスローネアイン、ファーストフェイズ完了。このまま、セカンドフェイズへ移行します」

「スローネツヴァイ、ファーストフェイズ完了だ！ セカンドフェイズに移る！」

「スローネドライ、ファーストフェイズ完了したよ！ このまま、セカンドフェイズに移行しまーす！」

『ツギイクゼ、ツギイクゼ！』

トリニティ兄妹の通信を聞いたノブレスは、ふっと笑みを浮かべた。今のところ、介入行動に問題は無い。ミツシヨンは滞りなく行われていた。

「こちら、レガンダム。ファーストフェイズ完了、セカンドフェイズに移行する。……ここからは、全員別行動だ。気を引き締めろよ！」

「了解！」

「任せろ！」

「任せといてっ！」

『オマエモナ、オマエモナ！』

スローネたちは頷き、散開するように空を飛んだ。アインがモラリアへ、ツヴァイがロシアへ、ドライが南アフリカへと飛んでいく。PMCトラストの支社がある場所だ。

その背中を見送ったのち、レガンダムはユニオンへと飛んでいった。迷彩被膜を纏いながら、澄み切った青と蒼の間を翔けて行く。どこまでもまっすぐに。

今日のミツシヨンは超強行軍だ。特に、レガンダムとノブレスは人一倍のハードスケジュールである。少しでもミツシヨンが滞ってしまえば、文字通りの地獄が待っていた。

(まずは、ユニオンで技術者のスカウトですね。……と言っても、拉致に近い保護になりそうですけど)

頭の中でシミュレートしたプランを回想し、ノブレスは苦笑いを浮かべた。件の技術者が大人しく従う人間だとは思えないからだ。

対象者のことを、ノブレスはよく知っていた。彼とは交流があったし、彼の成長を見守るのが楽しくて仕方がなかったためである。

訳あって彼との親交は途切れてしまったものの、最近また交流が復活した。以前とは違う形ではあるが、それでも嬉しかった。

ノブレスは操縦をオートパイロットに切り替え、端末へと手を伸ばした。起動させてメッセージを確認する。

ミッションを開始する数日前に届いた、別行動を取る友人からのものだ。ノブレスが危惧していた通り、アレハンドロは件の技術者を抹殺しようとしている。

理由は簡単だ。その技術者が、自力で『全ての謎を解いてしまったから』に他ならない。と言つても、アレハンドロ自身もまだ『全てを知らない』のだが。

(ソレスタルビーイングが最終地点として目指す場所は、ソレスタルビーイングのクルーですら知らないことです。ついでに、アレハンドロも知らないことです。それに自力でたどり着くとは、流石ですね)

ノブレスは、隣の家に住んでいた少年の姿を思い浮かべた。透き通った金髪に海のような青い瞳が印象的だった。今となっては、少年の髪は白髪で銀色になってしまったし、皺が増えて、歩くときには杖が必要な体になってしまっていたが。

今の自分の姿を見たら、彼は何と言おうのだろう。驚くだろうか、喜ぶだろうか、あるいは——忌むだろうか。

不安を振り払うようにして、ノブレスはモニターへと視線を向ける。現在地点はユニオンの市街地から離れた平地だ。

ノブレスは端末を起動した。カーソルを、件の技術者のものへと合わせる。端末にメッセージを打ち込み、彼の元へと送信した。

『今すぐ、ソレスタルビーイングに関することから手を引け。でないと、キミが殺される』。技術者の思念を辿る。突然のメールに、彼はひどく驚いた様子だった。いつもと全く違う文面と内容に、物々しきを感じ取ったのであろう。

ややあつて、彼から返事がきた。『いきなりどうしたんだ？ どうして、キミがこんなメールを？』——ノブレスは、即座に返事を討つ。『キミは、真実の扉に手をかけた。それを快く思わない人間が、キミを狙っている』。メッセージを打つ手が震えた。

(逃げてください)

『逃げてください』

ノブレスの心を表すように、文面が追加された。

(僕は、キミに死んでほしくありません)

『僕は、キミに死んでほしくありません』

更に文面が追加された。

(これ以上、僕の目の前で、僕の大切な人が死んでいくなんて耐えられない)

『これ以上、僕の目の前で、僕の大切な人が死んでいくなんて耐えられない』

そして、文面が追加される。

『僕の家の隣に住んでいたキミだって、僕にとっては大切な人なんですよ』

『他人の恋愛話が大好きなせに、自分の恋愛を根掘り葉掘りされると傷ついていた、因果応報な隣の『おにーさん』より』

最後にノブレスのヒントを添えて、メッセージが送信された。間髪入れず、技術者がメール内容を確認する。彼は大きく目を見開いた。嘗ての少年——今では技術者となった老紳士の口が動く。紡いだのは、ノブレスの真名だった。彼の声は、懐かしさと驚愕と驚愕が滲んでいる。

『死者からのメール……？ いや、まさか、本当に……本当に、生きていたというのか……？』

(生きていたんですよ。ずっとずっと、生きていたんです。……僕は、ずっと)

震える声が『聞こえてきた』。ノブレスは微笑み、端末にメッセージを打ち込み送信する。次のメッセージを見た老紳士は、困ったように苦笑しながら表情を歪ませた。

そうか、と彼が笑った姿が『視えた』。今までどこで何をしていた、どうして生きていたなら連絡してくれなかった、自分は今MS開発の第1人者と呼ばれてるようになった、伝えたいことが沢山ある——彼の感情が伝わってきた。

知っています、とノブレスは答えた。そうして、ゆっくり仮面を外す。老紳士に伝わったとは思っていないけれど、気づいたらそう呟いていた。視界がほんの少し滲んだように思える。ノブレスだって、彼に伝えたい言葉が沢山あった。話したいことだってあった。

次の瞬間、技術者のパソコン画面に文字が表示された。文面はただ短く、『あなたは知りすぎた』。

あまりにもいきなりなメッセージであったが、ノブレスはすぐにその意味を察する。

少年の頃から聡明であった老紳士も、この文章が何を意味しているのか気づいた。

『まさか、狙いは……この私か!!』

刹那、彼がいる施設に向かって迫る4機の機影が『視えた』。

4機は、彼を抹殺するために送り込まれた刺客。

ノブレスの危惧していたことが、現実になったのだ!

間髪入れず、4機が砲撃を放つ! 老紳士では、逃げることもかなわない。

ノブレスの脳裏に、失ったものがフラッシュバックする。

奪われてたまるか。

壊されてたまるか。

——今度こそ、今度こそ！

「——レイフウウウウウウウウツ!!」

荒ぶる青の力をフルに発動させ、ノブレスは文字通り『飛んだ』。
コックピットから、とある部屋へと世界が変化する。

老紳士——レイフ・エイフマンが驚いた表情で振り返り、ノブレスを見返した。晒された素顔を見て、彼はさらに大きく目を見開く。手を伸ばす。レイフは、ノブレスの伸ばした手に対して、手を伸ばし返した。

部屋が光に満たされる。赤く眩く、激しい輝き。命を奪うための閃光。

そうして——世界は染め上げられた。



爆発した建物。引き金を引いたのは、自分たちだ。

少年は燃え上がる跡地を見つめていた。たくさんの悲鳴と呻き声が、頭の中に反響する。

痛い、苦しい、悲しい。助けて、死にたくない、死んでしまった。許さない、許さない、許さない——!!

思わず、少年は襟元を強く握りしめる。

向けられる感情に、少年はどうしても耐えられなかった。

(どうしても、こころしなきやいけないのかな)

創造主である『母』の命令に逆らうことは赦されない。けれど、少

年の頭には、その疑問がこびりついて離れなかった。

奪いたくないと思うことは罪なのか。傷つけたくないと思うことは罪なのか。この疑問を抱くことは罪なのか。

少年は、モニターから映し出される惨状を見つめた。これは、自分の罪。命を踏みにじった自分に与えられる罰なのだから。

他の3人は、『母』の命令に対しての疑問など抱いていない。

これをゲームだと思っている者、『母』の命令を成し得たことに満足する者、もつと殺したいと叫ぶ者。

戦いたくない、殺したくないと考えているのは、自分だけのようだ。

「……ぼくは」

少年は、言葉を飲み込む。機体に搭載されたレーダーが、新手の到着を告げたからだ。

相手はユニオンフラッグ。特に、オーバーフラッグス隊と呼ばれる、特別なチューンナップが施された機体を操る精鋭部隊だ。

『母』が言っていた。一番憎たらしい機体だと。『母』が心底憎んで仕方がない相手に乗っているから、大嫌いなのだと。

「丁度いい。遊んでから帰ろうぜ！」

橙色のガンダム——ガンダムスローネ・ドロフオヌスに搭乗する兄が、無邪気に笑いながら提案した。ギリシャ語で『暗殺者』を意味する単語がつけられた機体は、ガンダムスローネツヴァイとほぼ同じ武装と外見をしていた。唯一の違いは機体の色が黒ずんでいるところだろう。

正直、少年はそんな遊びなどしたくない。兄の言う遊びはゲームと同じであり、命をおもちやみたいに扱うものだからだ。自分と同年代の子供は、笑いながら蝶の羽をむしるような残酷さを持っている。兄が他人に対して向ける残酷さも、それと同じだった。

「それはいい！ 『母さん』が嫌いだという『あいつ』をやっつければ、褒めてもらえるかもしれないし！」

灰色の機体のガンダム——レガンダム・プロヴィデンスに搭乗する別の兄が、名案とばかりに表情を輝かせる。

レガンダム・プロヴィデンスの外見は、ノブレス・アムというマイスターが搭乗していたレガンダムとほぼ同じだ。しかし、ブラックボックスの解析が不十分だったため、一部の武装を再現することができなかつた。

そのため、ヴェーダのログに残されていた虚憶きよわく関連のデータベースの中にあつた機体の武装で代用している。機体名の後ろにつけられた単語は、代用した武装の持ち主／機体から採られたものだ。

「まったく……少しだけだぞ」

黒基調のガンダム——ガンダムスローネ・デイミオスに搭乗する兄は、めんどくさそうに肩をすくめた。呆れてはいるが、彼も楽しそうである。大方、プロヴィデンスに搭乗する兄の『母』に褒めてもらえる」という言葉に惹かれたのだろう。

ガンダムスローネ・デイミオスの外見も、ガンダムスローネアインを元にしたデザインと機体性能になっている。武装も同じものが使われていた。唯一の違いは、機体の白い部分がやや黒ずんでいるところくらいか。

ギリシャ語で『処刑人』を意味するこの機体の武器は、スローネアインと同じGNメガランチャーだ。少年の乗る機体やドロフォオヌスからのGN粒子を供給されたときの威力は、その名を表すに相応しい破壊力を示す。

「おら、ぼーっとするなよ！ おまえもやるんだ、イリスイオス！」

ドロフォオヌスに搭乗していた兄が、少年に声をかけてきた。少年は

たじろぐ。

少年が搭乗している機体は、ガンダムスローネ・イリスイオス。ガンダムスローネドライとほぼ同じ外観と機体性能を有していた。ギリシャ語で『愚者』の名を冠する機体である。

スローネドライとの明確な違いは、機体の色が黒ずんだワインレッドであることくらいか。性能も、他機の援護をメインにしているため、出力共に控えめとなっていた。

機体性能順に並べれば、リガンダム・プロヴィデンス、スローネ・デイミオス、スローネ・ドロフォヌス、スローネ・イリスイオスとなっている。実力の順番もそれと同じであった。

「ま、まだ殺すの……？」

惨状を見つめながら、少年が問いかける。

兄たちはきよとんとしたあと、不思議そうに首を傾げた。

「あたりまえだろう？ いっぱい殺せば、『母さん』に褒めてもらえるんだ！ いっぱい落とせば、『母さん』がたくさんご褒美をくれるんだ！」

「オーバーフラッグス隊には『あいつ』もいるらしいし。どれに乗つてくかはわからないけど、全部落とせば問題ないよな！ フラッグごときが、おれたちに敵う訳ないじゃん」

「多少寄り道をするだけだ。……何なら、おまえだけ帰るか？ 『母さん』、おまえに失望するだろうな」

「そんなことを考えるから、お前の機体名が『愚者』なんだよ——兄たちはそう言つて、おかしそうに笑うのだ。

兄たちは楽しそうに談笑する。オーバーフラッグス部隊を全滅させる算段を立てているのだ。彼らに任せれば、あの部隊も全滅させられるかもしれない。

死ぬのも、殺すのも嫌だ。でも、自分が逃げかえれば、兄たちが全

部殺しつくすだろう。あるいは、自分が殺されるかだ。少年は歯を食いしばりながら、操縦桿を握り締めた。

「やる気になったんだな。それでこそ、弟だ」

「そこなくちや！」

「いっばい落とすぞー！」

兄たちが意気揚々と飛び出していく。

少年は泣きたいのを堪えながら、兄たちの後に続いた。

(こんな風に思うぼくは、失敗作なのかな)

その問いに答える声は、今はまだ、ない。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

39. ワールドブレイク

「——なんだとツ!？」

端末で話をしていたグラハムが、血相を変えて声を荒げた。酷く焦っているように見える。

彼は荒々しい語気で一言二言会話したのち、乱暴に端末を切った。クーゴたちが何があつたかを尋ねるより、グラハムがその答えを述べるほうが早かった。

「所属不明の機体が、ユニオンのMSWA D基地へ接近中！ 出撃準備を！」

「なんだって!？」

仲間たちにそれだけ促して、グラハムは疾風のように部屋を飛び出した。クーゴや他のフラッグファイターたちもそれに続いた。

基地に謎の機体が接近しているという異常事態故に、パイロットスーツに着替える手間すら惜しい。煩わしさや、逸る気持ちとの戦いであつた。

手早く着替えを終わらせ（それでも、自分もたついているような気がして腹立たしかつた）、即座に格納庫へと走る。コックピットに乗り込み、出撃準備は完了である。

ハッチが開き、ようやくオーバーフラッグス隊は空へと飛び出した。曇天を切り裂くようにして、全速旋回で基地へ向かう。

体に凄まじいGがかかってくるが、今の自分にとっては「だからどうした」の一言で切り捨てられるような気がした。

あの基地には、自分たちの僚友がいる。自分たちと同じ軍人、MS開発に関わる技術者、軍に関わっているものの正式な所属が民間人である者等様々だ。戦闘員も非戦闘員も、同じ場所で仕事をしている。軍の基地が襲撃されるということは、彼らの命も危ないということだ。

(ビリー！ エイフマン教授！)

クーゴの脳裏に浮かんだのは、年上の友人とその師匠の笑顔だった。

三国軍事演習に行く前のやり取りがフラッシュバックする。

ドーナツの差し入れをしたら「売り物のドーナツじゃ満足できなくなってきたら責任取ってね」と茶化してきたビリー。紅茶のパウンドケーキが気に入ったようで、「今度はわしがブレンドした紅茶で作ったパウンドケーキを持って来よう。キミにばかり作らせていては申し訳が立たんからな」と朗らかに笑ったエイフマン。

間に合え。間に合え。間に合ってくれ！

祈るような気持ちで操縦桿を動かす。

程なくして、MSWA D基地が見えてきた。

黒煙が漂っている。通信も混乱しているらしい。それもそうか、管制塔がなくなっている。何もかもが吹き飛んで、更地になっている。

広がっていたのは惨状だった。吹き飛ばされた施設、黒煙が漂う滑走路、担架で担がれていく者やびくりとも動かない人間たち。

「我々の基地が……！」

「酷い……酷すぎる。こんなの、ただの虐殺じゃないか!!」

グラハムとクーゴは、思わず叫んでいた。生存者を探すが絶望的な光景だ。何人の人間が、ここで死に絶えてしまったのだろう。

惨状のど真ん中にいたのは、4機の機体だった。先程テレビで見た、新型ガンダム——ではない。外見のデイトールは非常によく似ているが、全くの別物だ。

その証拠に、機体のカラーリングが本物より少しだけ暗い色合いになっている。おまけに、指揮官機らしき機体は『連邦の白い悪魔』ではない。

機体の色は黒ずんでおり、背中に背負った自律兵器のフォルムも違

う。『連邦の白い悪魔』が折りたたまれた片翼なら、こちらは広げられた片翼だ。大きさも、こちらの方が大きい。

偽物だ。クーゴはそう直感する。
間髪入れず、ハワードやダリルが反応した。

「違う……。こいつら、身なりは新型とよく似ていますが、全然違いますー！」

「隊長、こいつ違います！ 『ソレスタルビーイング』じゃありません！」

「見ればわかる！」

グラハムの声は、酷く感情的だった。燃え盛る炎に油とアルコールとニトログリセリンを注ぎ、ダイナマイトを投げ入れたくらいの勢いがある。

不意に、鬼のような形相を浮かべるグラハムの横顔が『視えた』。いつか見た、何かに取り憑かれてしまったかのような歪んだ表情とよく似ていた。

「――グラ……ハム、……クー……ゴ」

不意に、ノイズまみれの通信が開いた。かすれた声であるが、声の主はすぐにわかった。

我らが誇る技術班のビリー・カタギリである。どうやら彼は無事だったらしい。

クーゴが安堵し、彼の無事を喜ぼうとしたときだった。それが帳消しになる爆弾が落とされたのだ。

「……教授が……、……エイフマン、教授が……！」

『視えた』のは、エイフマンがいたはずの建物だ。最上階の部屋でデータのまとめをしていたエイフマンとビリーが談笑している。

部屋を出たビリーに対し、エイフマンは「もう少し残る」と言い残し、部屋に残っていた。彼がいた建物を見やる。原型など留めていなかった。

瓦礫の山。たなびく黒煙。それが意味することは、ただひとつ。レイフ・エイフマンは、この襲撃によって犠牲になったのだ。無事でいて欲しいと願った人物の訃報に、クーゴは思わず歯噛みする。

『赦さない』

声が『聞こえる』。

グラハムの声だった。

『奴らは我々の仲間たちを傷つけ、恩師や仲間の命を奪った！』

声が『聞こえる』。

グラハムの声だった。

『それだけでなく、あの機体は……私の天使たち刹那とガンダムの誇りまで汚した!!』

不意に、何かがフラッシュバックする。アザディスタンの宮殿、非武装で歩みを進める白と青基調のガンダムの背中、『今度こそ、ガンダムに』と響いた少女の声。

酷く大人びた少女が背負ったのは、小さな背中にはあまりにも重すぎる正義だった。誰よりも優しい少女が挑むには、あまりにも過酷な道だった。

男の腕の中で、声を殺して泣く少女の姿が『見える』。男性はグラハムだ。ならば、彼の腕の中で泣きじやくっているのは、刹那以外考えられない。

彼が烈火の如く怒る理由は2つ。『仲間を傷つけられ、恩師や仲間たちの命を奪われたこと』と、『追いかけるべき好敵手であり、愛する

天使たちを汚されたこと』に起因している。

「——もう我慢ならん！ 堪忍袋の緒が切れた!! 赦さんぞ、貴様らアアアアッ!!」

綺麗に組まれた隊列から飛び出した隊長機が一気に加速した。

クーゴも彼に続く。グラハムは即座に、仲間たちへと指示を飛ばした。

「全機、援護を！ フォーメーションD！」

「了解！」

空を切り裂くようにして、フラッグは一気に急降下した。それを見たガンダムたちも動き出す。黒基調の機体、橙基調の機体、黒い片翼を持つ機体がフラッグを迎え撃つように飛び出した。ワntenポ遅れて、ワインレッド基調のガンダムが3機に随伴する。

橙基調の機体の手元から、大量の自立型兵器が飛び出してきた。それがどうした、と言わんばかりの勢いで、隊長機は難なく兵器の群れを回避すると、ガンダム目がけてライフルを撃ち放った。敵は、真正面から被弾する。それでも、傷つけるには至らない。

攻撃の手は緩めなかった。クーゴもライフルの照準を合わせ、ガンダム目がけて撃ち放つ！ 他の面々も、すれ違いざまに橙色の機体へ集中放火を行った。そのまま方向を切り替え、黒基調の機体や黒い片翼を持つ機体にも同じように攻撃を喰らわせる。

相手も黙ってやられていた訳ではない。自律型兵器が縦横無尽に飛び回る。突き刺さって爆発するタイプのものだけでなく、複数の端末からレーザー攻撃を行うものもあった。

爪のような武器を回避し、降り注ぐレーザー攻撃やキャノン砲を縫うようにして、フラッグたちはライフルを喰らわせた。何発もガンダムの機体に直撃させる。

機体は全く揺るがないが、何度も被弾しているのだ。パイロットの

精神に負荷をかけることはできているだろう。次第に、ガンダムのパイロットたちは自分たちに翻弄され始めた。メンタル面は未熟らしい。

(あの機体、回避と威嚇射撃しかしてこないな……)

視界の端にちらつくワインレッドは、こちらの攻撃を紙一重で避けている。

他のガンダムが被弾し翻弄されている中で、妙に異質な印象を受けた。

『こんなのおかしい!』

不意に、子どもの声が聞こえてきた。

『おれたちの機体の方が強いのに! なんだよ、なんだよつ! あいつらはヤラレ役のはずなのに!!』

『オーバーフラッグだったって、ただのザコだろ!? それなのに……!』
『この計算でいくと、作戦時間が予定より3分オーバー。……『母さん』に怒られる……!』

癩癩を起したような、甲高い声。余程追いつめられているのか、焦りの色が見える。子どもたちの怒り方は、姉とよく似ていた。

「くっそ、好き勝手に撃ってきやがって……やりづらいたらありやしねえ! 兵器は子どものおもちやじゃないってのに!!」

レーザーを縦横無尽に撃ち放つ自立型兵器の攻撃を回避しながら、ジヨシユアがギリギリと歯を食いしばる。

三国合同軍事演習のとき以上に、飛び出したくても飛び出せない状況下だ。苛立たしくなる気持ちもわかる。

しかし、その感情のままに攻撃すれば、目の前で蹂躪するガンダムやそのパイロットたちと同レベルになってしまう。

「子どもの躰も大人の役目だ！」

「本気になった大人の怖さを思い知れっ！」

ダリルとアキラを中心とした面々が、ライフルで連続攻撃を繰り出した。彼らと合流するように、ジョシユアのフラッグもライフルを撃ち放つ。

怒涛の勢いで弾丸を叩きこまれても尚、ガンダムには傷1つつかない。だが、黒基調、橙基調、黒い片翼のガンダムの動きに乱れが出てきた。

対して、ワインレッドは紙一重だが的確な回避を行っている。「反射神経がいい」という言葉で片付けるには、些か疑問が残る。

どちらかといえば、「敵の手を読む」と言った方がよさそうだ。

件のワインレッドは、接近戦を仕掛けようとしたフラッグを回避し、威嚇射撃を行う。

狙って『当てる』のではなく、狙って『かすめ』ようとしているのだ。そんな芸当、どの軍のトップガンでも難しい。

(なんてパイロットだ……)

黒基調のガンダムの攻撃を回避しながら、クーゴはワインレッドの機体を操る相手に注目した。不意に、子どもの声が聞こえてくる。

『死にたくない。でも、相手の人にも死んでほしくない……!! だから、戦わなきゃ。戦わなきゃ、他のみんなに殺される……!!』

悲鳴だ。あのパイロットは、泣いている。

戦いたくないと言いながらも、戦わなければもつと酷い光景が待っていることを『知っている』。

『こんなはずじゃなかったのに！ おれが一番強いのにっ！ なんでフラッグごときに勝てないんだあつ!』

『ドロフォオヌス！ お前が『遊んでから帰ろう』なんて言うから、作戦時間が……』

『うるさい！ だまれよデイミオス！ おまえが弱っちいのが悪いんだろ!? ちゃんとしなから、ザコのフラッグに勝てないんだよ!』
『またそうやってぼくの悪口ばかり……! 言うならフラッグの悪口だけにしておけ!』

黒基調のガンダムと橙基調のガンダムのパイロット同士が喧嘩を始めた声が『聞こえた』。責任の擦り付け合いに夢中になっている。

その感情を反映するかのように、2機の動きが雑になった。次の瞬間、それを待っていたかのようにしてフラッグが飛び出す！

飛び出したフラッグに搭乗していたのは、ハワードだ。彼の向かう先には、ドロフォオヌスと呼ばれた橙基調のガンダム。

「おおおおおおおおおおおおおッ!!」

飛行形態で急接近し、そのまま空中可変。プラズマソードを引き抜いて、ハワードのフラッグはドロフォオヌスに肉薄した。

ビームサーベルとプラズマソードがぶつかり合う。2つの刃が激しく火花を散らしていた。鏝迫り合いを繰り返す！

『な、なんだよ！ ユニオンのくせにい！ よわっちいフラッグのくせにいい!!』

「——これ以上、我が軍とフラッグを愚弄するなあああああつ!」

パイロットの言葉に火がついたのだろう。激高したハワードの気迫が、フラッグにそのまま宿ったかのようにだった。その想いが、機体性能をひっくり返す。

普段の彼だったら、大人げないと笑い飛ばす案件だ。だが、この子どもはその理論を振りかざして、ユニオンの基地を吹き飛ばし、沢山の人を殺したのだ。

いくら子どもだからと言っても、赦せないことがある。この状況で黙っていられるわけがない。いや、大人であるからこそ、この状況に怒りを爆発させたのだ。

鏢迫り合いに勝利したのは、ハワードのフラッグだ。

フラッグのプラズマソードに弾き飛ばされた、敵のビームサーベルが宙を舞う！

無防備になったドロフォヌスへ向かい、ハワードのフラッグがプラズマソードを振り上げた！

「これが、ユニオンの……フラッグの力だ!!」

刹那、あらぬ方向へ飛んでいた自立型兵器が向きを変えた。それは迷うことなく、ハワードのフラッグへと牙を向く！

背中を向け、感情のままに刃を振り下ろすハワードは、まだ気づいていない。

寒気がした。

脳裏に『視えた』のは、爪の名を冠する武器によって磔刑に処されたフラッグ。光が消えた機体が、そのまま爆散した光景だった。

フラッグという機体に対する誇り・情熱・希望を託し、息絶えたのは誰だった？ ——その答えを、クーゴは『知っている』。

クーゴが操縦桿を動かした。飛行形態のまま、一気に加速する。このままだと、自分が『知っている』光景が広がるだろう。

「ハワード、後ろだ！ 逃げろおお!!」
「!？」

クーゴの声に、ハワードが気づいた。しかし、牙はまっすぐにフラッグを捉える。

フラッグ同士の距離では間に合わない。それでも、クーゴは翔ける。

戦友を失いたくない。その思いが、今の自分とフラッグを突き動かす。

「ぐわあああつー！」

ハワードの悲鳴と爆発音が響く。撃ったのは、ワインレットの機体。ハワードのフラッグが煙を上げて落下していく。

煙が出ていた場所は、フラッグの推進力を司る背中。ほんの一瞬、自律兵器の動きが止まった。子どもの驚きに呼応したかのようなだ。

しかしそれも束の間。体勢を崩し落ちていくフラッグへ、自律兵器が容赦なく襲い掛かる!!

「ハワードオオオオオオオ!!」

不意に、フラッグのコックピット席で目を見開くハワードの姿が『視えた』。クーゴは思い切り手を伸ばす。こちらを見上げた彼が、酷く驚いたように間抜けな声を漏らした。

だが、クーゴの必死な表情を見て何かを察したのだろう。ハワードも、こちらに対して手を伸ばしてきた。クーゴの手がハワードの手を掴む。そのまま、全力で引っ張り上げた。

次の瞬間、世界が一変する。クーゴは自分のフラッグの操縦席に座っていた。手を伸ばし、ハワードの手を掴んだはずなのに、その手には何もない。間髪入れず、フラッグが磔刑に処された。

四方八方から飛来した爪が、フラッグを貫く!

命の燈火が消えるかのように、頭部のカメラアイから光が消えた。数秒の間において、ハワードのフラッグが爆発する。

「ハワードー！」

「ハワード・メイスウウウン!!」

仲間たちの悲痛な叫びが響く。特に、グラハムの声が一番激しく響いていた。

クーゴは愕然とした。確かにこの手は、ハウードの手を掴んだはずだったのに。

『なんだ。おまえ、ちゃんとやれるじゃないか』

『見直したぞ、イリスイオス。評価を改めなくてはな』

『……うん』

ドロフォオヌスのパイロットとデイミオスのパイロットに褒められているにも関わらず、イリスイオスと呼ばれた機体のパイロットは嬉しくなさそうだった。

『なあ、帰ろうぜ。随分遅れたから、『母さん』きつと怒ってるよ』

『そうだな。寄り道なんてしなればよかった』

黒い片翼のガンダムに促され、デイミオスとドロフォオヌスが空へと向かう。イリスイオスと呼ばれたパイロットはちらりとこちらを見ただ後、カメラアイを下の方に向ける。

しかし、イリスイオスはすぐに顔を上げ、他の兄弟たちの後を追いかけるようにして空へ上った。赤い粒子をまき散らしながら、4機のガンダムは消えていく。

他の仲間たちがガンダムらに攻撃を仕掛けようとしたが、グラハムがそれを制止した。無策に突っ込めば、ハウードの二の舞になると踏んだためである。

誰も、何も言えなかった。失ったものの大きさに打ちひしがれ、クーゴは操縦桿を握り締める。

踏みにじられ、汚されたものの数を数えた。エイフマン、ハウード、基地で知り合った人たち、好敵手の誇り……考えるだけで、胸が痛い。ガンダムたちは空へと消える。クーゴたちは、それをただ見送るこ

としかできなかつたのだ。何もできなかつた。

「——聞こえますか？ 返事をしてください！ オーバーフラッグス部隊の皆さん、誰か、誰か!!」

幾何の沈黙の後、ノイズまみれの通信が入った。声の主は少年のものだ。聞き覚えのある声。

その声の主に思い当たったグラハムが、クーゴよりも先に、ぽかんとした表情で彼の名を呼んだ。

「ベルジユくん……?」

「ああ、グラハム少佐!」

「ぽかアーニー! 今は上級大尉だって何度言ったらわかるんだ!」

「ご、ごめん……」

「しっかりとってください! もうちよつとですから……!」

「死んじゃダメです!」

通信の主は、『悪の組織』から派遣されてきた技術者のものだ。アニエスの隣には、同じ技術者のジンもいるらしい。

後ろの方から少女の声が聞こえてくる。声は、サヤとアユルのものだ。2人は誰かの手当てをしているらしい。背後から呻き声が聞こえた。

「うう……お、俺は、生きてるのか……?」

誰かの声に似ている。つい数秒前まで、もう二度と聞けないと思っていた人間の声だ。フラッグの爆発とともに、命を散らしたとばかり思っていた人物の声だ。

呻き声の主の様子を見たであろうアニエスとジンは、「ちよつと待っててください」と言った。

ざりざりとノイズが入る。絞り出すような声が、通信機越しから響

いた。

「た、たい、ちよ……、ふく、たいちよ……」

「っ!? ハワード・メイスン!」

グラハムの表情に光が差したのが『視えた』。他の仲間たちにも、光が次々と広がっていく。

生きていたのだ。ハワードは、寸前のところで脱出していた。呻き声の具合やサヤとアユルの会話から、重傷ではあるが命に別条はないことを聞き取る。

後からやってきた女性——ノーヴルも手当に加わった。彼女の話も総合すると、『一端離脱はやむを得ないが、治療やりハビリをすれば復帰可能』ということらしい。

「も……しわけ、……りま、せ……」

「謝る必要はない。生きていてくれて、よかった……!」

痛みを堪えて謝ろうとするハワードを制し、グラハムは噛みしめるように言った。

クーゴも頬を緩ませる。曇天の切れ間から、温かな光が差し込んできた。



ワイドショーは今日も大騒ぎである。『ソレスタルビーイングの新型ガンダムの介入により、ユニオンのMSWAD基地が壊滅した』というニュースだ。

内容は『新型ガンダムたちはPMCトラストのMDを殲滅した後、

ユニオンのMSWAD基地を襲撃した』というものらしい。

客間のテレビは、淡々とその映像を映し出していた。

部屋の持ち主の裕福さを示すかのようには、ブランド家具で統一された部屋。

絢爛豪華とは言わないものの、格調高い雰囲気は漂ってくる。

『……成程。そう来たか』

眉間に険しい皺をよせて、リボンズがテレビを眺める。彼の隣に座っていた青年も、似たような表情を浮かべていた。

黙認および静観の立場を取るしかなかった三大国家陣営の中で、ユニオンがソレスタルビーイングに厳しい舵取りをするのは明白である。

あそこまで派手に基地を潰されて、憎しみの芽が発芽しないはずがない。いずれそれは大きく育ち、天使を穿つことになるだろう。

『本当のこと』を見据える者たちも、実を結んだ憎しみの前に飲み込まれてしまうのだ。世界の流れは、天使を墮おとす方向へと変わっていく。

『初っ端からテコ入れする可能性も考慮に入れていましたが、やられると辛いものがありますね。で、あっちの方は？』

『この情報を信じ切っている可能性が高いよ。何せ、彼らが一番信頼しているモノからもたらされたものだからね』

『星を見る者』や『他の皆』に救援を頼むのは、文字通りの「最終手段」なんですけど……手札を切るしかなさそう、か』

青年は深々とため息をついた。まずは手始めに、と、リボンズへ眼差しを送る。

リボンズは肩をすくめた。「自分たちだけでは厳しい」とでも言いたげな表情だった。

青年は端末を取り出し、『他の皆』へ連絡を送る。すぐに返事が帰っ

てきた。

アプロディア、フェニックス、アメリカスらを筆頭にして、『是』の返答である。

これでどうだと眼差しを向ければ、リボンズは満足げに微笑んだ。

『この面々が協力してくれるのに、僕たちが何もしないわけにはいかないね。……それに、この布陣で負ける姿なんて考え付かないよ』

自信満々で言いきつたりボンズに、青年は釘を刺す。

『ダメですよ、リボンズ。想像してください。でなければ、その末路は死ですよ?』

『……キミ、昔からその台詞好きだね。虚憶きよおくの加藤機関は、そんなに素晴らしいところだったの?』

『素晴らしいかどうかのコメントは控えますが、ソレスタルビーイングと似たような組織でしたよ。その意図に気づいていた者は少なかったでしょうがね』

青年は懐かしむように目を細めた。虚憶きよおくの中で出会った人々のことを辿るように、ゆるりと目を閉じる。その世界で、青年は加藤久嵩と親交があった。

ある世界では教え子と共に加藤機関の6番隊として力を振るい、ある世界では彼の協力者として共に戦った。またある世界では、同じ部隊で戦う仲間として交友を深めた。

どの虚憶きよおくも、青年にとっては大切なものだ。バレンタインで動乱が起こつたり、加藤が匙を投げたくなるような出来事が頻発したり、様々なものがある。

回想に浸りかけていた青年の思考回路を遮ったのは、客間の扉が開く音だった。金色を纏った栗色の髪の女性と、鳶色の髪の男性がやって来る。

彼ら——特に男性は、青年とは旧知の仲であり、ある意味、青年が

恋のキューピット役になったカップルたちでもあった。根掘り葉掘りしていただけたのだ。

「活動を休止したと聞いたから、出席して頂けないのかと思っていました。しかも、サプライズまでしていただけるなんて……」
「いえいえ。キミたちの恋路は、ずっと気にしていましたから」

青年の言葉に、男性ははにかんだ笑みを浮かべた。隣に寄り添う女性も、幸せそうに目を細める。

幸せそうなカップルを見ると、心がほっこりする。

だが、その裏で、血涙を流す自分がいることもまた事実なのだ。

青年は意地悪く微笑み、からかうように言葉を紡いだ。

「しかし、こういうのを逆玉の輿って言うんですよ。A E Uの財閥——ハレヴィ家と関わりのあるご息女と、芸能関係の仕事に就いていたキミが結婚するってのは」

それを聞いた男性と女性は照れたように笑っていた。数日後、彼らはタキシードとウエディングドレスに身を包むのだ。そうして、幸せへと一歩踏み出す。

彼らの姿を思い浮かべて、青年は緩やかに目を細めた。そのとき、男性が何かに気づいたように鼻をひくつかせた。違和感を察知した彼は、こてんと首を傾げる。

「気のせいかな。……テオさん、焦げ臭くないですか？」

青年——テオはぎくりと体をすくませた。思わず「そうですかね？」と取り繕う。話題をそらすため、テオは打ち合わせを始めるよう、2人に進言するのであった。



ハウードのお見舞いに来たら、惨劇が広がっていた。何を言っているかわからないと思うが、クーゴも状況についていけない。

病室の床に散乱するのは、毒々しい鉛色の粒と液体だった。鼻を衝く臭いは妙に甘ったるい。チョコレートや練乳、蜂蜜等の甘味を派手にぶち込んで、これでもかと言わんばかりにじっくりコトコト煮込んだのだろうか？ 体に悪そうなラインナップである。

真っ白のシーツやベッドは所々鉛色の斑点が飛び散っている。そのど真ん中で、ハウード・メイسنは本気泣きしていた。正直、例えはかなり悪いが、その様は『恋人の前で屈辱的な目に合った』かのような泣きっぷりであった。

ベッドの脇では、ダリル・ダッジとアキラ・タケイが共闘し、ジョシュア・エドワーズとやや暴力的な口論を繰り広げている。テロだお見舞いだうんたらかいたら、叫び散らす3人の声が派手に響いていた。本当に、この病室で一体何が起こったのだろうか。

「見苦しいぞ、お前たち。一体何があつたんだ？」

ややドン引きしながらも、グラハムが屹然とした様子で4人に問いかけた。そのうち3人——アキラ、ダリル、ジョシュアが口々に言葉を紡いだ。

「隊長、こいつが！」

「ジョシュアがテロ行為を！」

「だからテロじゃないって言ってるだろ!？」

うん、知ってる。

それは見てすぐに分かった。

クーゴは喉元に引つかかった言葉を飲み下す。

「な、なんだかすぐ鼻に衝く臭いが……。鉛色の液体って、何かあったっけ？」

ビリーが表情を引きつらせた。彼は頭に包帯を巻き、頬にガーゼを張っているものの、ハワードと比べれば軽症である。そのため、ビリーは休暇もそこそこに、エイフマンが抜けた分をカバーするため頑張っていた。

結局、エイフマンの遺体は見つからず仕舞いだったという。彼の葬儀で使われた棺や墓は空っぽのまま。ただ、彼が亡くなったという決定的な事実だけが目の前にある。多忙に多忙を極めるため、遺品整理も行えていないらしい。

ばたばたしていたビリーではあったけど、他の人や彼の叔父であるホームー司令から「そろそろ、本当の意味できちんと休みなさい」と命令された。叔父に従い、その休暇で仲間たちのお見舞いに来た結果がこれである。

確かに、病室の光景を見ただけでは、バイオテロでもあったのかと問いかけたくなるような光景ではあった。鉛色の液体や物体なんて、何の化学薬品を使ったのだと詰問されてもおかしくない。

周囲からの視線に耐えきれなくなったのか、ジョシユアが蚊の鳴くような声で何かを言った。

「なんだ、と言う代わりに視線が再び彼に集中する。ジョシユアはバツが悪そうに、深々とため息をつく。

「この前、副隊長が作った料理に、豆のポターージュがあっただろ？」

「……それを、自己流で再現しただけだよ」

「嘘をつけ！ 副隊長が作った豆のポターージュは鉛色なんかじゃない！」

涙目でジョシユアを断じるハワードだが、彼の瞳には強い否定の意

志が宿っていた。そのまま、ハワードはジョシユアを詰問する。

「お前、材料に何を使ったんだ!？」

「豆だよ、豆。赤茶色のやつ。煮た後にすり潰して、牛乳と練乳と砂糖と蜂蜜と黒砂糖とトレハロースとプロテインとガムシロップ入れて、弱火でじっくり煮込んだんだ」

一瞬の沈黙。

しかし、即座にダリルとアキラが声を荒げた。

「もはやテロだ！ 完璧にテロだ!!」

「食材が可哀想つす！ しかも材料間違ってるし!!」

「な、なんだよ！ 豆なんてどれも一緒だろ!？」

ジョシユアの「豆なんてどれも一緒」という発言に、アキラは眦を吊り上げる。

「豆は豆でも、アンタが使った豆は小豆あずきつす！ 砂糖を入れて煮詰めれば餡子あんこになる、日本の伝統菓子には欠かせない方の豆！ 副隊長が使った豆は枝豆と言って、緑色のヤツ！ ビールのおつまみに欠かせない方つすよ!!」

いや、それでも、鉛色の小豆なんて見たことないよ。

クーゴは、自分の喉元に引つかかった言葉を飲み下した。どうやらジョシユアは、先日クーゴが作った料理を参考にしたらしい。

しかし、彼がレシピをアレンジして、こんなバイオテロまがいのことをやってのけるとは思いもしなかった。本人にその気はなさそうであるが。

おまけに投入した調味料の種類もおかしい。クーゴはそこまで甘い味付けにしていない。ついでにプロテインも投入していなかった。仲間たちは再び言い争いを始める。相手に対し、掴みかからん勢い

だ。

クーゴとグラハムは顔を見合わせた。無言のまま頷き、放り投げられていたナースコールのボタンに手を伸ばす。

「すみません、ちよつといいですか？」

「部屋で暴動が起こっているんです」

強面のナース長がやって来てこの場を鎮圧し、散乱した鉛色の物体が拭き取られ、ハウードのシーツ類がまつさらなものに交換されたのは、それから間もなくのことだった。

*

「テロだ……完璧にテロだ……」

涙目になりながら、ハウードは一心不乱に箸を進めた。クーゴが差し入れて作ってきたうな重が、あつという間にハウードの口の中へと消えていく。

早く元気になってほしいということで、うな重を持ってきたのは正解だったらしい。先程の『小豆ポタージュテロ（辛うじて）未遂』事件も、彼がうな重を食べ進める理由なのだろう。

「こんな大きなウナギがぎつちり詰まってるうな重、初めて見たつす……！ この大きさと味は、日本じゃ5千円相当つすよ！」

アキラはそう言つて、うな重を食べる箸を止めて力説した。日本人によつてウナギの完全養殖が実現したとはいえ、相場は21世紀末とあまり変わらない。

小さな重箱には、白米が隠れる程大きなウナギが敷き詰められていた。ひと箱に、大きな切り身が3匹分。アキラが興奮する理由もよく

わかる。

「日本人って、食い物に関する執念は凄いやな。ウナギの件もそうだけど、21世紀初頭にマグロが絶滅危惧種にされそうになったときは凄まじいロビー活動をして反対派の数を増やしたり、大学がマグロの完全養殖を成功させた挙句ブランド化を成し遂げたりしてるし」

他の面々が箸でうな重を食べている中、箸に不慣れなジョシユアはスプーンを口に運んでいた。

誰だっっておいしいものを食べたいと思うのが普通である。そうして、食べるなら楽しい方がいいと思うのも普通である。

しかし、どうやら、仲間たちの大半はそれが珍しいことらしい。食事は栄養補給と空腹を潰すものだと思っていることが多いようだ。

そのためか、クーゴの料理に胃袋を掴まれたことがきっかけで、料理に挑戦するようになったり、料理の腕が上がったり、味覚が肥えたりした者もいた。

「戦友が入院したので早く元気になってほしい。彼に差し入れがしたいので、そちらの店から直接ウナギを買い付けたいんだが大丈夫か？」という突然の申し出に文句も言わず、ウナギを提供してくれた親戚には頭が上がらない。ついでに、ウナギ料理店をしていた親戚も彼らからそれを聞きつけ、秘伝のタレをおすそ分けしてくれた。

幸せそうにうな重を頬張る仲間たちを見て、クーゴも表情を緩めた。おいしいという言葉は、料理を作った人間としてはとても嬉しいものだ。こんなテロなら毎日起きてくれても嫌じゃない、と、ハワードやダリルが力説していた。ジョシユアもまんざらではなさそうで、うな重をぺろりと平らげていた。

「こんなにおいしいもの差し入れてもらったんだ。必ず、前線復帰しますー」

「その意気だ、ハワード。我々は、空で待っているぞ」

うな重を食べ終えたグラハムは、部下の心意気に満足するような笑みを浮かべた。

遠い昔、虚憶きよおくで出会った彼も、クーゴにそう言った。『空を目指せば必ず会える』、『空で待っている』——その言葉を忘れたことはない。彼らと交わした約束が、クーゴにとつての始まりだった。彼らがそう言わなければ、自分は空を目指すことはなかっただろう。クーゴは静かに目を細めた。

少年時代の背中を思い出していたときだった。会話を楽しみながら、ハワードが何の気なしにテレビをつける。やっていたのはワイドショーだ。

丁度放映していたのは『ソレスタルビーイングの新型ガンダムの介入により、ユニオンのMSWA基地が壊滅した』というニュース。内容は『新型ガンダムたちはPMCトラストのMDを殲滅した後、ユニオンのMSWA基地を襲撃した』というものらしい。

仲間たちは大きく目を見開いた。眉間に皺を寄せ、映像を睨みつけるように凝視する。

(嘘だろ、おい)

自分たちを襲撃したのは、PMCのMDを殲滅したガンダムたちではない。外見がよく似通っているだけで、まったく違う機体だ。パイロットの年齢や性格だって違う。

『連邦の白い悪魔』や黒い新型を駆っていたのは20代半ばの男性だし、橙の新型やワインレットの新型を操っていたのは10代半ばの青年と少女だ。

そう主張したくても、証拠は何も残っていない。自分たちの目撃情報以外、彼らの無実を証明できるものがないのだ。先の襲撃で、基地が壊滅したためである。

それが余計に『連邦の白い悪魔』たちがユニオン基地を破壊した張本人である」という空気を醸し出していた。

ニュースに同調するように、四方八方から声が『聞こえて』くる。ソ

レストアルビーイングに対する、怨嗟の念だ。

「こんな報道のされ方では、市民に誤解を招きかねん……！ しかもこれは、悪質な冤罪だ！」

グラハムが戦慄くように呟いた。

「確かにな。世論操作にしては、相ツツ当、タチが悪いぞ」

クーゴもそれに同意した。一体だれが、そんなことを考えついたのだろうか。

不意に、背中に悪寒が走る。自分の体に絡みつくような、どす黒い感情。クーゴは思わず身を丸めた。

誰かが嗤っている姿が『見える』。私利私欲のために、天使を墮天使へと仕立て上げようと画策する悪意が『見える』。

脳裏を掠めたのはMSの機影。毒々しい金色を身に纏った機体と、大鎌を携える漆黒の羽が生えた機体と、すらりとした体躯の赤い機体。3機の後ろに潜むのは、禍々しい紫の機体だった。

3機の背後にいる存在から感じる気配は、クーゴがよく知る人物の気配とよく似ている。どこの世の中でも、彼女と同じことを考えるような輩がいるらしい。クーゴは静かにニュースを凝視した。

悪意の種が蒔かれる。その芽は着実に成長し、花を咲かせるのだから。不意にフラッシュバックしたのは、人を殺すために咲いた殺戮の花。触手を伸ばしてロボットたちに襲い掛かるあの兵器の名前は、何といったか。

悪意の種から咲く花は、きつとあの兵器のように禍々しさに満ちているのだろうか。

そんな予感、クーゴの頭の片隅にこびりついて離れなかった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

幕間。ノブレス・アムとチームトリニティ、もしくは
テオ・マイヤーの厄災

「アンノウンが、ユニオン基地に介入行動をしただつて!？」

「馬鹿な……あそこには、軍人以外にも多数の民間人や非戦闘員が入りしているんだぞ!？」

通信画面越しのミハエル・トリニティとヨハン・トリニティの表情は、驚愕に打ち震えていた。

自分——ノブレス・アムの報告を聞いたネーナ・トリニティは心配そうに表情を曇らせる。

「教官、大丈夫だった!?! 丁度あの場には教官もいたんでしょ!?! 教官がスカウトするって言ってた技術者も……」

「僕も彼も問題ない。文字通りの間髪一髪だったからな。その後、いろいろ立て込んでいたんだ。連絡遅れてすまなかった」

「よ、よかった……!?! 心配したんだからねっ!?!」

ノブレスの話を聞いたネーナは、ほっとしたように表情を緩めた。花が咲いたような笑顔を見ていると、ノブレスの心も温かいもので満たされたような気持ちになる。

緩んだ頬を引き締めて、ノブレスは話を続ける。世の中はいいことだらけではないからだ。チーム・トリニティに罪を被せる形で、アレハンドロたちの悪意も動き出す。

「だが、世間は奴らの行動を、『我々が介入行動を取った』と捉えている」

「何ですって!?!」

「ええっ!?!」

「なんだって!?!」

3人の驚きは当然だ。チーム・トリニティは同時刻、PMCトラストのMDを処分して回っていたのだ。

立派なアリバイがあるにもかかわらず、世間は彼らを悪人と非難し、断じている。

諸悪の根源は報道機関だ。あそこにもアレハンドロ派が幅を利かせ始めているのだろう。

ノブレスは友人の姿を思い浮かべた。フリージャーナリストのセキ・レイ・シロエも、この悪意に気づいているはずだ。ただ、別件のミツシヨンで忙しいだけで。

彼と彼の後輩——ジョンナ・マツカが護衛している対象者もまた、ジャーナリストである。グラン・マが気にかけており、真実の語り手に相応しいと豪語する女性だ。

閑話休題。

「何者かが報道機関に働きかけ、我々に罪を被せようと画策しているようだ。しかも、この情報はヴェーダからチーム・プトレマイオスにも伝わったらしい。……そう考えると、本部隊との衝突も想定されることになる。気を付けてくれ」

「わかりました」

ノブレスの言葉に、ヨハンは神妙な顔つきで頷いた。ミハエルとネーナも頷く。

2人の表情は晴れない。ミハエルが絞り出すような声で言葉を紡いだ。

「くそつ。誰だよ、こんな悪趣味なこと考えた奴は！ 見つけたら、ただじゃおかねえぞ……！」

「落ち着け、ミハエル。……すまない。キミたちに余計な負担をかけるてしまうな」

彼を諫めながら、ノブレスは申し訳なく思った。この子たちに余計な負担をかけてしまう。

テコ入れは予測していた。初っ端から入る可能性も考慮していた。現実になってしまい、気が滅入ってしまいそうだが。

ノブレスの不安を察したのか、トリニティたちは力強く微笑み返した。こちらを励ますように、ネーナが言葉を続ける。

「大丈夫だよ教官。あたしたち、アンノウンの嫌がらせになんて負けないからっ！」

笑顔が眩しい。ノブレスはふっと表情を緩めた。ネーナやヨハンたちが笑っているのを見ると、本当に心強い。どんなことがあっても、乗り越えられるような気がするのだ。

いつの間に成長していたのだろう。この様子なら、トリニティ兄妹がノブレスの元を卒業する日は近そうだ。ノブレスがお役御免になったとしても、大丈夫だろう。

教え子たちを失いたくないと、ノブレスは強く思った。そのためにも、決して気を抜いてはいけない。ノブレスは微笑み、通信越しのトリニティたちを見返した。

自分が弱気になってどうするのだ。しっかりしなければ、と、ノブレスは自分に言い聞かせる。

今の自分は、ノブレス・アム。チーム・トリニティの教官であり、ソレスタルビーイングの遊撃部隊であり、レガンダムガンダムマイスターなのだから。

自信に気合を入れ直すように、ノブレスは掌に拳を打ちつけた。前を向いて、これからはまっすぐ見据えなくては。

「次の任務は、キミたちだけで行ってもらうことになる。僕は別件があるからな。そちらに合流できるのは、キミたちのミッション終了後だ。合流ポイントはAEUのスペイン領。詳細は追って連絡する」

「了解！」

『ワカッターゼ、ワカッターゼ！』

通信が切れた。周囲を確認し、ノブレスは静かに仮面を外した。ゆるくウェーブしたプラチナブロンドが零れ落ちる。

切れ目がちのアーモンドアイ。黄昏を思わせるような琥珀を鋭く研ぎ澄まし、ノブレスは深々と息を吐いた。

（フェレシユテの皆さん、頑張ってくださいよ。裏切り者に関する情報、ヴェーダにバレないように送信するの大変だったんですから）

PMCトラストに介入する前に接触した、ソレスタルビーイングのバックアップ組織のことを思い返す。彼女たちに『ノブレスが接触して伝えたかった情報』を送信したのは、フォン・スパークとの戦闘後であった。先日、情報提供感謝のメールが届いたばかりである。

ヨハンがフォンの首輪を爆発させたり、それでもフォンが異種生命体並みのポテンシャルで逃げ延びたり、任務失敗に落ち込むトリニティたちをノブレスが励ましたり、ネタばらしに対するツツコミと恨みつらみのメールが感謝メールとは別に届いたりした。

文章量の割合は1：9で、感謝より恨みつらみの方が多い。相手に大きな貸しを与えたのだ。別件で、ノブレスがフェレシユテにこき使われる可能性もあり得る。『『同胞』たちとのコネクションになれ』と言われそうだ。「代表取締役は同性が大好きなので気を付けるように」と伝えておくべきだろうか？

不意に、扉をノックする音がした。入ってますか、と、少年の声がある。ノブレスは即座に端末をポケットへねじ込み、後ろ手でレバーを下げた。大量の水が流れる。

被っていた仮面はトートバックの中にぶち込む。何事もなかったかのように、ノブレスは扉を開けて外に出た。自分とすれ違い、少年は慌ただしく個室の中へ入ってしまう。

ワンテンポ遅れて、個室に入った少年——沙慈・クロスロードはノブレスの『表の顔』に気づいたようだ。慌てる声をBGMに、ノブレ

スはさつきとトイレを後にした。



テオ・マイヤーは、現在、A E Uのスペインにいる。

かねてより交友のあつた芸能関係者と、その恋人——今この瞬間からは妻——の門出を祝いに来たのだ。ついでに、サプライズとしてちよつとしたゲリラライブを開く許可も得ている。この話をしたら、恋人たち——現時点を持って夫婦となつた2人も大喜びしてくれた。

テオのファンであり、大切な友人であり、マネージャーである仲間たち——リボンズ・アルマーク、リジエネ・レジエッタ、ヒリング・ケア、リヴァイヴ・リバイバル、ブリング・スタビティ、デヴァイン・ノヴァ、アニュー・リターナーも顔を出してくれた。

仲間たちの目的は、『テオの友人を祝う』というよりは『テオのゲリラライブを見に来た』と言つた方が正しい。実際、この結婚式の余興で行われるサプライズでは、まだお披露目していない新曲発表を行うつもりでいる。

自分たちは、談笑しながらそのタイミングを待っていた。2人の結婚式を幸せなものにするためにも、失敗なんて許されない。

テオはちらりと周囲の様子を伺う。要人たちが談笑する輪のはずれで、ソフトドリンクが入つたグラスを片手に座る少女を見かけた。

(ああ、この子がルイス・ハレヴィイですか)

日本にいた『同胞』たちが話していた『後輩／先輩／教え子』とは、この少女のことらしい。年齢はネーナより少し上のようだが、性格はかなり近そうだ。

透き通るような金髪に、サファイアを思わせるような青い瞳。どう

やら彼女は母親に似たようだ。そんなことを考えていたら、彼女の『未来のお婿さん』がやって来る。

確か、彼の名前は沙慈・クロスロード。両親を早くに亡くし、姉の絹江・クロスロードと2人暮らしをする高校生である。彼は友人たちと一緒に、スペインへ招かれていた。

その恩師と友人たちは現在、ハレヴィ夫妻と談笑している。2人のゼミを担当するクラール・グライフ教授、先輩である草薙征士郎、八重垣ひまり、悠風・グライフ、2人の後輩である南雲一鷹だ。他に、グライフ教授の作ったロボットであるAL-3——愛称アリスとHL-0——愛称ハルノも同伴している。

懐かしさにふらりと近寄ってしまいそうな自分を抑え込み、テオは時計を確認した。

そろそろ時間である。マネージャーたちに目配せすれば、彼らは談笑をやめて準備に取り掛かった。

「さて、頑張りましょう！」

テオは自分に気合を入れるように、小さくガッツポーズを取る。

舞台袖に引っこみ、早着替えを行う。式典用のタキシードを脱いで、煌びやかなステージ衣装を身に纏い、テオは舞台へと躍り出た。

結婚式の司会者がサプライズを告げれば、人々の視線がこちらに釘付けになる。テオは観客たちをまっすぐ見つめて、満面の笑みを浮かべた。

「結婚、おめでとうございます。僭越ながら、新郎新婦へのささやかなプレゼントを」

音楽が鳴り響く。今回のメドレーは、新郎新婦が好きな曲に、2人のために書き下ろした曲と別件で使う予定の新曲を引っ下げている。

周りが熱狂に包まれた。音楽に合わせてステップを踏みながら、テオは歌い始める。1曲目はアップテンポな明るい曲だ。

新郎新婦が嬉しそうに表情を綻ばせた。一番後ろの方でそれを見ていたルイスが、沙慈を巻き込んで音楽に乗り始める。

沙慈は困ったように笑っていたが、すぐに手拍子を打った。そんな彼氏の様子に、ルイスは満足そうに頷く。

ルイスはペンライト代わりに、先程ブーケトスでキャッチした純白の花束を振りながら、歌を楽しんでいた。

次の花嫁は彼女だ。その隣には、はにかむように微笑んだ沙慈の姿が『見える』。是非とも、このカップルにも幸せになってほしい。

『テオさんの歌を生で聞くのは久しぶりだなあ。テレビでなら何度も聞くんだけど』

『コンサートを見に行く暇もないし、予定が重なったりして、うまく合わないからなあ』

一鷹が懐かしそうに目を細めた。ひまりも頷く。征士郎や悠風は、そんな2人を生温かい眼差しで見守っていた。

彼らの斜め後ろでは、アリスがハルノにペンライトの使い方をレクチャーしている。

以前、ハルノが誘導棒を持ち出してきたときは度肝を抜かれたものだ。本人は素で「ペンライトだと思って持ち出してきた」らしく、ちよつとした大惨事になっていた。

今回は誘導棒を持ちだしていない。テオが内心ホツとしたのもつかの間、ハルノは納得できなさそうな顔をした。そうして、どこからともなく誘導棒を持ち出す。

あのときと変わっていないなかった。テオは心の中で盛大に転倒したが、舞台の上で醜態は晒せない。全力で踏みとどまる。幸い、ステージ上で転倒することはなかった。

ギリギリセーフ。冷や汗が伝って落ちそうになった。

そうして、テオは次の曲を歌う。最前列で、はっぴと団扇とペンライトで完全武装したりボンズたちが踊り狂っていた。

いつそ、彼らはバックダンサー役にした方がよかったのではなから

うか。そう思ったが、最初から『この約束』だったことを思い返す。曲が流れ終わった。最後の2曲は、このサプライズ——ゲリラライブで初お披露目する曲である。

「次の曲は、今回の結婚式のために作った曲になります」

テオの言葉に、新郎新婦は顔を見合わせた後、嬉しそうにこちらへ手を振った。

周囲も俄然盛り上がる。しつとりとしたバラード調の曲に合わせ、テオは彼らの門出を祝う歌を贈るのだった。



今回の任務は、カルト教団およびテロリストたちの壊滅である。奴らは勢力を増やし、テロ行為を行っていた。そのカルト兼テロ団体にいる者は皆「ズール皇帝こそ正義だ！」と口癖のように叫ぶのが特徴である。先程潜入してみたのだが、話をした信者たちは、根っからの悪人という訳ではなかった。

しかし、教義およびズール皇帝の話をするとき、誰も彼もが『目がイッてい』たことは記憶に新しい。名目は勿論、件の口癖——「ズール皇帝こそ正義だ！」であった。正直、ネーナ・トリニティは宗教のことに詳しくない。しかし、正義を免罪符にすれば何をしてもいいという訳ではないだろう。

この考えはいずれ、自分にも跳ね返ってきそうだ。それを考えながらも、ネーナは操縦桿を動かした。スローネドライは、こちらへ強襲を仕掛けようとしたヘリオンを撃ち落とす。向うではスローネツヴァイがリアルドを、スローネアインがアンプを、それぞれ撃退した

ところだった。

「これで、最後！」

ネーナは引き金を引いた。プラズマソードを振りかざして襲い掛かってきたユニオンフラッグを撃ち落とす。

『ぐああああっ！……ズ、ズール、皇帝こそ、正義……』

最後の言葉は、爆発音に飲まれて消えた。その声は、ネーナが聞いたことのある声の主であった。潜入していたときに身の上話をしてきた、ユニオンの脱走兵。彼はシミュレーターで訓練をしていたときにズール皇帝と対峙したのがきっかけで、この宗教に出会ったそうだった。その後、軍からは精神疾患患者と言われ、檻付の病院に入れられていたという。

先のユニオン基地襲撃のどさくさに紛れて脱走した彼はこの宗教団体と合流し、現在に至ったという訳である。気さくに話しかけられたためか、ネーナは彼のことをすっかりと覚えていた。数時間前まで談笑していた相手を討つ——潜入任務では当たり前のことだとは知っていた。でも、やはり心に来るものがある。

任務完了だ。ネーナは大きく息を吐いた。

兄たち——ヨハン・トリニティとミハエル・トリニティと、互いの無事を確認し合う。

「よし、任務完了だな」

「今回も完璧だぜ、兄貴！……でも、暫くカルト関連の任務は勘弁な」

「あたしも。全部が全部あんなノリじゃないってのはわかってても、なんか怖いよね……」

『ザヒョウガキタゼ、ザヒョウガキタゼ』

紫のロボット——H A R Oの目がチカチカと点灯した。モニター画面に映し出されたのは、自分たちと教官——ノブレス・アムの合流地点である。

ネーナたちは座標へ向かって移動を開始した。青い空はどこまでも広く、美しい。眼下に広がる景色を眺めていたとき、不意にネーナの目を惹いたものがあつた。

教会で、幸せそうに微笑む新郎新婦。「ウエディングドレスは女の子の夢だ」と豪語した、孤児院の元院長を思い出す。車椅子に乗つた女性の笑顔が浮かんだ。

女性はそのときの写真を見せてくれた。「ネーナちゃんも白いドレスを着ることができるようよ」と、女性は断言していたか。今なら、そうなつてほしいと思う相手がいる。

ノブレスの後ろ姿が脳裏をちらつく。流石に結婚となつたら、仮面を外すことになるだろう。

彼は一体、どんな顔をしているのだろうか？ プラチナブロンドの髪が揺れる。穏やかなテノールの、心地よい声が響いてきた。

『綺麗だよ、ネーナ』

穏やかに微笑む青年の顔が『視え』そんな気がした。

影がかかっていた部分に光が差す。

あと少しで、彼の顔が『見える』。あと少し、あと少し——

『ソリヤネーヨ、ソリヤネーヨ！』

「ッ、うっさい黙れ！」

H A R Oの言葉で、ネーナの思考回路は一気に現実へと戻つてきた。即座にネーナはH A R Oの頭をどつく。こいつはどうして、いつも人に水を刺すようなことを言うのだろうか。

こいつのプログラムを組んだ奴を呼び出して、文句の1つや2つ言つてやりたい。『イター！』と喚き散らすH A R Oの声を聞き流し

ながら、ネーナは深々とため息をついた。

そのとき、不意に、ネーナは目を留めた。式場に作られたステージで、男性が踊っている。何かの音楽に合わせているようだ。ネーナはその映像を拡大する。

最大限度まで拡大して、ようやくその人物の顔が伺えた。

緩いウエーブのかかったプラチナブロンドに、琥珀色のアーモンドアイ。

(テオ・マイヤー!? 嘘、どうして!? 活動休止中なのに……)

ネーナは自動操縦を解除し、その場に留まる。カメラアイ越しに彼を見つめた。歌が『聞こえてくる』。聞いたことのない歌だ。もしかして、新曲?

そう思ったとき、不意に先程と同じ光景が『視えた』。白いドレスを身に纏った自分の隣に、ノブレスが佇んでいる。

顔はよく見えないけれど、彼が笑う気配がした。それが嬉しくて、ネーナが頬を緩める。振り向けば、2人の兄が自分たちを祝福してくれた。

ネーナはノブレスに向き直る。彼の手が、ネーナの頬に触れた。慈しむように触れる手に、思わずネーナは表情を綻ばせた。

『綺麗だよ、ネーナ』

穏やかに微笑む青年の顔が『視え』。そうな気がした。

影がかかっていた部分に光が差す。

あと少しで、彼の顔が『見える』。あと少し、あと少し――

次の瞬間、リーダーが反応を捕らえた。機体の反応は4機、所属は不明。画面には、大きく『Unknown』の文字が表示されている。自分たちに罪を擦り付けた奴らだ。ネーナは即座に顔を上げる。自分たちが翔るガンダムや、教官であるノブレスが翔るガンダムとよく似た機体がいた。

機体のカラーリングくらいしか、相違点は見当たらない。ここまで似ているなら、周囲の人間がネーナたちを責めるのは当然だ。ネーナは歯噛みする。

「あいつら、何をしにここへ……!?」

「やる気か!」

ヨハンは即座に戦闘態勢を取る。ミハエルも同じよう、戦闘態勢を整えた。ネーナもそれに続く。

しかし、アンノウンたちは自分たちのことなど気にする様子もなく、ゆつくりと教会へと近づく。スローネアイン、スローネツヴァイ、ルガンダムによく似た機体が、ビーム兵器を向けた。照準は——ステージで歌う、テオ・マイヤー。民間人だ。

スローネドライに似た機体はうろたえていた。撃ちたくないと声が出る。3機のパイロットはスローネドライに似た機体のパイロットを罵った。そうして、エネルギーを充填し始める。もしそれが放たれてしまえば、教会にいる民間人の多くが犠牲になることは明らかだ。

「ミハエル、ネーナ。ここからは、我々の独断行動になる」

ヨハンを確認するような声色で言った。

「この行動は、ソレスタルビーイングの規律に反するだろう。……だが、アンノウンの行動を見過ごすわけにはいかない」

「当然だ! これ以上、奴らの好き勝手にさせらんねーぜ!」

「うん!!」

自分たちは顔を見合わせ頷いた。操縦桿を動かす。

3機の座天使たちは、自分たちを騙る偽物目がけて攻撃を仕掛けた

!

ライフルが、フアングが、ハンドガンが唸る。無駄撃ちは、民間人に流れ弾の被害が出るため控えなくては。確実に当ててやる!!

偽物どもは攻撃を中断して、回避行動を取った。攻撃に転じた3機とは違い、スローネドライの偽物は何もしない。戦いたくないというのは本気のようなのだ。

敵意がない奴はいい。問題は、民間人に攻撃を仕掛けようとしたスローネアイン、スローネツヴァイ、レガンダムの偽物たちである。

『なんだよ、邪魔しやがって!』

『母さん』から、ミツシヨンプランの変更だ。きちんと確認しろよ。狙いに変更はない。あの歌手だ』

『変わらねーじゃん。みーんな撃ち落とせばいいんだから!!』

『聞こえた』会話からして、アンノウンたちの狙いはテオ・マイヤーだ。何故彼を狙うのかは知らないが、俄然引けない理由ができた。

ネーナは即座に操縦桿を動かし、偽物へと攻撃を仕掛ける。兄たちと息を合わせ、てんでバラバラに力を振るうガンダムたちを追いつめていった。圧倒的な力をむやみに振るう相手に対して、自分たちは連携や総合力、メンタリテイで勝負する。

癩癩を起こす子どもの声がひっきりなしに響く。この程度で叫び散らすとは、余程メンタル面に難があるらしい。伊達に、シミュレーターとはいえ、女の敵を護衛する羽目になった訳ではないのだ。そのときの苛立ちと比較すれば天と地ほどの差があった。

地上にいた民間人たちが避難していく。(何故かは知らないが)誘導棒を持っていた赤い髪の女性や、テオ・マイヤーたちが避難誘導を買って出ていた。彼らは他の人たちの非難を優先している。

正直、彼には早く逃げてほしい。けれど、ネーナは彼の判断を踏みにじりたくはなかった。ならば、こちらも踏ん張らねばなるまい。大好きなアイドルを守るのは自分だけとは、フアン冥利に尽きた。

ネーナは即座にハンドガンの照準を合わせる。撃ちだした一発は、レガンダムの偽物の肩に当たった。うわあ、と、子どもの悲鳴が『聞

こえ』る。想い人の機体を模した奴なんて、恋する乙女からしてみれば腹立たしいことこの上ない。

「あたしを怒らせると、怖いんだからッ!!」

怯んだ偽物目がけて突進し、ネーナはビームサーベルを振りかざす。レガンダムの偽物も、ビームサーベルを引き抜いた。剣がぶつかり合い、バチバチと火花を散らした。

力を込める。恋する乙女と乙女が恋した相手の誇りを踏みにじる存在を、許しておけるはずがない。——恋する乙女を舐めるな!!

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

『ビームサーベル、シュツリヨクオーバー! マジカヨ! マジカヨ!?!』

H A R Oが何か叫んでいた気がした。そんなの、どうでもいい。ネーナはそのまま、思い切りビームサーベルで偽物を弾き飛ばす。サーベルの赤が、薄らと黄色の燐光を纏っている気がした。心なしか、いつもより威力が上がっている。

追撃に走ろうとして、けれど即座に回避行動へ移る。間髪入れず、レガンダムの偽物が反撃に転じた。背中に背負った自律端末が全て展開し、こちらにビーム攻撃を仕掛けたのだ。直撃はしなかったものの、一歩間違えたら撃墜されていただろう。

兄たちも他の機体を追いつめていた。相変わらず、スローネドライの偽物は状況を静観している。彼の兄弟が、彼をなじった。出来損ない、という言葉が耳にざらつく。スローネドライの偽物を駆るパイロットの方が、人間として成熟しているのではなからうか。

ネーナも即座に攻撃態勢を取った。レガンダムの偽物は、ふらつきながらも迎撃しようとしていた。

偽物たちは、精神的にも限界が近いらしい。日本のことわざで言う、『年貢の納め時』だ。

満身創痍の3機と、戦意喪失の1機。さあ、最後の詰め。

「これで終わりだ！」

「観念しやがれ、アンノウン！」

「あたしたちを悪者に仕立て上げた罪は重いよ！」

ヨハン、ミハエルらと共に、3機のガンダムに攻撃を仕掛けようとした——刹那、子どもがニヤリと嗤った姿が『視えた』気がした。

『だめだ、逃げて！ 兄さんたち、 〃とっておきの呪文〃を使う気だ！！』

スローネドライの偽物が悲鳴を上げる。ネーナの背中に悪寒が走り、反射的に操縦桿を動かした。

緊急回避をしたスローネドライは、視界の端で、他の2機も緊急回避したのを捕らえた。

次の瞬間、

『——トランザム——！！』

耳慣れない単語が響き、偽物たちの機体が毒々しい赤を纏う。視界に捉えていたはずの3機の姿が、いきなり消えた。

何が起こったのか、ネーナは分からなかった。気づいたときにはもう、何もかもが遅かった。背後で響く爆発音、人々の悲鳴。

振り返れば、無残に破壊された教会。煙と瓦礫で覆われたそこは、つい先程までテオ・マイヤーが避難誘導をしていた場所だった。

3機のガンダムはその勢いのまま、自分たちの機体に攻撃を仕掛けた。まったくもって、相手の動きが見えない。機体に何回も衝撃が走り、ネーナは呻いた。H A R O が『ヤラレテツゾ、ヤラレテツゾ！』と悲鳴を上げる。

また、凄まじい悪寒が走る。敵の攻撃をどうにもできないネーナ

は、己の勘に従って操縦桿を動かした。敵が放ったとどめの一撃は、機体のコックピットすれすれをかする。後ほんの数秒遅れていたら、ネーナの命はなかっただろう。

奴らはあつという間に遠くへ逃げていく。スローネドライの偽物は、惨劇に飲まれた場所を愕然と眺めていた。泣き出してしまいそうな子どもの姿が『視えた』ような気がする。幾何の間において、スローネドライの偽物は、後ろ髪をひかれるような様子でこの場を去っていった。

「っ、ヨハン兄、ミハ兄！ 大丈夫?!」

ネーナは慌てて兄たちに連絡を取る。すぐに、満身創痍だが大丈夫そうな兄たちの顔が、通信回路に映し出された。

「我々は平気だ。だが、教会にいた民間人が……!」
「畜生、何なんだあいつらッ！ 俺たちが太刀打ちできなかつたなんて!」

ヨハンが苦々しい表情で教会を見た。焦土と化した大地が映像として映し出される。初めて味わった挫折に、ミハエルが悔しそうに表情を歪ませた。操縦桿を握りしめていなくなったら、拳を思いきり叩きつけていたに違いない。

ネーナは教会へと視線を向けた。頭から血を流して倒れている鳶色の髪の少年を抱え、泣き叫ぶ金髪の少女が見える。ペールグリーン色の髪の青年が、周りに指示を飛ばしながら負傷者の手当てをしていた。

彼の隣りで同じように指示を出す、テオ・マイヤーの姿が映り込む。煌びやかな衣装は黒ずんでおり、頭から出血していた。それ以外に、目立った外傷は見当たらない。大丈夫だったと安堵したのもつかの間、彼はこちらを見上げた。

気のせい、だろうか。安堵したように微笑んだテオ・マイヤーの笑

い方が、ノブレスの笑い方と重なって見えた。

ネーナは思わず息を飲む。H A R O が『ナニテレンダヨー』と声をあげ、不意にくるりと向きを変えた。耳がパタパタと上下する。

『ツウシンダゼ、ツウシンダゼ！』

「——お前たち、大丈夫か!？」

ネーナの思考を断ち切るかのように響いたのは、ノブレスの声だった。それを聞いたヨハンが、悔しそうに現状を報告する。

任務終了後にアンノウンと出くわしたことで、そのうちの1機——スローネドライの偽物には戦意及び敵意がなかったこと、奴らを追い詰めたが逆に撃墜されそうになったこと。

スローネドライの偽物を翔るパイロットが言った“とっておきの呪文”。自分たちは、それによって敗北したのだ。あれは一体何だったのだろう。高速移動する機体に、ネーナたちは成す術がなかったのだ。

「あいつら、確か、”トランザム”とか言ってた」

「”トランザム”……」

ネーナが補足するように言えば、ノブレスは苦い表情を浮かべた。端正な口元と漂うオーラに陰りが見える。

憂いの原因は、自分たちがアンノウンをみすみす逃してしまったせいだ。自分たちの不甲斐なさに、兄妹たちは齒噛みする。

そんな自分たちの気持ちを察したのか、ノブレスは静かに語りかける。通信機の向こうで、彼は穏やかに笑っているのだろうか。

「キミたちは悪くない。アンノウンについてのデータは極端に少ないんだ。この情報を持ち帰ただけでも充分だよ。……キミたちが無事で、本当によかった」

「教官……」

ノブレスは、何かを考え込むように息を吐いた。思案している内容が一体何を意味しているのかは、まだわからない。

彼はMS開発の技術者だった。もしかしたら、「トランザム」に関する単語の意味や、それに対抗するための技術理論を構築しているのだろうか。なら、ますますネーナたちではどうしようもないだろう。自分たちにできることは、彼が開発したMSのテストパイロットになることくらいか。

通信は、「太陽炉の特性が云々」だの、「疑似太陽炉が云々」だの、「そろそろこちらでも計画を進めるべきか云々」だのと呟くノブレスの声を拾い上げる。熟考しかけた彼は、しかし、自分でそれにブレーキをかけた様子だった。すまない、と謝罪し、話を続ける。

「合流ポイントは変化なし。……ただ、僕は合流が遅れる。その間、ゆっくり体を休めておくこと」

「わかりました」

「了解！」

「教官も、早く来てね！」

通信を切り、3機の座天使は空を翔る。程なくして、合流ポイントである王留美ワンリユーミンの用意した隠れ家が見えてきた。

隠れ家と言うには些か豪華な家だ。金持ちの別荘と言った方がしっくりくる。オーシャンビューのプールとか、まさしくそれであった。

ネーナは、煌びやかなものは好きだ。しかし、留美リユーミンの別荘を見ると、何とも言えない気味の悪さを感じる。素直に綺麗だと言えなくなっていた。

ガンダムを着地させ、迷彩被膜を展開する。そのままコックピットから大地に降り立った3人は、足取り重く屋敷へと踏み入れた。

シャワーで汗を流し、ノブレスから貰った制服へと着替え、大広間のソファに座り込む。何の気なしにテレビをつければ、先程起こった

『ガンダムによる教会襲撃事件』がニュースになっていた。やはり、報道機関はチーム・トリニティらを犯人だと報じている。

許せない、とネーナは思った。自分たちを悪人に仕立て上げて、世界の敵にして、犯人はのうのうと笑っている。誰が、どうして、何のために。考えてもわからない。何もできないというのは、こんなにも歯がゆいことだったのか。ネーナは大きくため息を吐いた。

ノブレスが隠れ家にやって来るまでの数時間。

トリニティ兄妹の表情は、陰に包まれたままだった。



「いつでえ……!」

絞り出すような悲鳴を上げて、青年はそのまま崩れ落ちた。瓦礫の付近にしゃがみ込み、痛みに呻く。

「真正面から』3倍速による複数のレーザー兵器連射』をやる馬鹿野郎どもが……! 僕らじゃなきゃ死んでましたよ……!?!」

能力をフルパワーにしても、あの速さでは、被害を減らすのがやっとなのである。大きくため息をつけば、ずきりと背中が悲鳴を上げた。

負傷した民間人——ハレヴィイ家の親戚の結婚式に参加していた人々の呻き声や、家族や恋人の痛々しい様子に悲鳴を上げる声がひっきりなしに響く。

「沙慈、沙慈! しっかり、しっかりしてえ!」

頭から血を流して動かない婚約者に、ルイスは必死に声をかけていた。先程の襲撃で、沙慈はルイスを庇ったのである。彼は生きているものの、重傷であった。

能力で相殺したとはいえ、完全ではなかった。その余波が、沙慈や倒れた民間人たちのような形で表れてしまった。己の無力さに反吐が出そうになる。

沙慈やルイスの友人であり、青年の『同胞』たちでもある面々——クラール、征士郎、ひまり、悠風、一鷹、アリス、ハルノらが、2人を心配しつつ走り回っている。

向うの方では、最前列で踊り狂っていた面々——リボンス、リジエネ、ヒリング、リヴァイヴ、ブリング、デヴァイン、アニューらが人々に応急処置を施していた。

彼らは能力で防御したものの、相当のダメージを追っている。それでも、彼らは倒れた怪我人の治療を優先していた。

結婚式の主役だった新郎新婦は、倒れたつきりピクリとも動かない。外傷もないため、眠っているかのような表情だ。しかし、生気は一切ない。——死んでいるのだ。

(GN粒子の毒性、か。疑似太陽炉では、その毒性が極めて高いというのは知っていましたか……くそっ!!)

荒ぶる青タイプ・ブルーといえども、その能力は万能でもない。完全な無敵でもないのだ。

青年や青年たちの『同胞』では、自身が危機を回避し、砲撃の威力やGN粒子の毒性を、局地的且つある程度削ぐことしかできなかつた。

「あまりにも突発的且つ超大火力だったため、対応が追いつかなかった」——悔しいが、そうとしか言えない。

「あれが、イオリアや『マザー』が言っていた『トランザム』か……。理論構築や構想は聞かされていたけど、実際に動いているのを見たの

は初めてだよ」

生存者の治療がひと段落し、救助を待っている状態のリボンズがこちらへ歩み寄ってきた。そのまま、彼も壁にもたれかかる。

「こんな形で見ることになるなんて思わないさ。いや、見たくなかったというべきかな……」

地面に座り込み、リジエネが額を抑えた。メガネは爆発の勢いで歪んでしまっている。

リボンズは目を閉じた。ヴェーダにアクセスし、今回の一件について調べているのだろう。

「しかも、追い打ちとばかりにバッドニュースがある」

「大方、今回の襲撃もトリニテイの仕業になったということでしょう？」

「大正解」

茶化すような会話をしているが、全然楽しい内容ではない。事態はどんどん最悪の方向に転がっている。

青年は静かに目を閉じた。決意を固め、瞳を開ける。

そうして、彼は能力を使って『同胞』たちと会話した。

幾何か後、青年はよろめきながら体を起こす。リボンズは何かを察したように眉をひそめた後、諦めたように肩をすくめた。

「あまり無茶しないでくれよ？ いざとなったら、この前保護した

『彼』にも……」

「視野に入れてますよ。……色々な意味で後が怖いですけどね」

そうして、青年は能力を使って『飛んだ』。

焦土と化した教会の風景は、あつという間に大きな野原へと変わっ

た。

遠くから黒煙が漂っているのが見える。教会だったはずの場所だ。

「プライオリティをノブレス・アムに変更。迷彩被膜解除」

青年——ノブレスの言葉に反応し、野原に隠されていた機体が姿を現す。『連邦の悪魔』と呼ばれた白い機体——レガンダムのコックピットに乗り込み、起動させた。

隠れ家では、きつと教え子たちが待っているだろう。秘密裏に機体の改良と武装変更、専用ドライヴの手配をしておきたい。

あとは、自信の専用ドライヴに搭載され、封印されている“力”も解放しておかなければ。

（伝家の宝刀は最後まで取っておきたかったのですが、それを守り抜くために犠牲者を出すのは本末転倒。開発された理念に反します。……やるしか、ない）

レガンダムは空を翔ける。教え子たちの待つ場所へ向かって。

40. 加速する世界と、抗う人と

「会いたかった……い！ 会いたかったぞ、ガンダムウウウ!!」

ユニオンのフラッグファイターの中で、一際異様なテンションを纏う人間が1人いる。オーバーフラッグス隊の隊長、グラハム・エーカーであった。

奴に名前を呼ばれたガンダムパイロットたちは、皆一様に険しい表情を浮かべる。特に、ソレスタルビーイングに所属する、白と青基調の機体を駆る少女――刹那が。

AEUのイナクトお披露目会で出会った当初から、奴はガンダムタイプの機体にご執心だった。クーゴや他の面々が、困った様子で顔を見合わせる程度には。

それ以前に、グラハムは刹那という少女に対して愛を叫んでいた。巻き込まれたクーゴが頭を抱え、ビリーが能天気には笑い飛ばしてしまう程度には。

一途といえは聞こえがいいが、その一途さがたいへんなことになっている。現状のカオスを、より一層引き立てているように思えた。

理由は簡単。

この場にガンダムと名の付くものは、この場に『いくらでも』いたからだ。

ソレスタルビーイングが駆る機体もの、コロニーの面々が駆る機体もの、異世界からやって来たもの等、様々だ。グラハムはガンダムと名の付く機体なら、大喜びで突っ込んでしまうのだ。彼の歪んだ笑みが、見たくもないのに見えてしまう。

この多元世界には様々なロボットたちが集っている。自分たちが知らなかっただけで、世界にはガンダムと名の付く機体は沢山あった。ガンダムに執着を持っているグラハムには、色々と思うところがあるらしい。

しかし、「ガンダムがこんなにも！ ああ、目移りしてしまうなあ!!」なんて叫びながらも、グラハムはただ1人をロックオンしていた。

「私の邪魔をする者は故事にのっとり、馬に蹴られるものと思え！
うおおおおおおおおおおおおおっ!!」

「た、隊長ー!?!」

「自分で陣形乱してどうするんですかー!?!」

「ちよ、マジかよおい!?!」

フラッグファイターを束ねる隊長でありながら、自ら率先して突っ込んでいく。あまりの暴挙に、ハワードとダリルが茫然と口を開けていた。出鼻を挫かれたジョシユア等、他の部下たちも反応に困っているらしい。正直言って、クーゴからしてみればいつものことであった。

迷うことなく操縦桿を動かし、クーゴはグラハムとのフォローへ向かう。その後ろ姿に我を取り戻したらしく、オーバーフラッグス部隊も動き出した。ガンダム——あるいはZEXISたちを包囲し、攻撃を繰り返していく。視界の端で、グラハムと刹那が対峙していた。

「いたか、我が愛しのガンダムよ!」

「なんであんたが俺の方に来るんだ……!」

嬉々としたグラハムとは対照的に、刹那は困惑する。他にもいっばいいるんだからそっちへ行け、という声が『聞こえて』きそうだ。

「どれだけの“天使”が現れようと、私の心を射止めたのはキミ……。美しき光と共に、我が眼前に降り立ったキミだ!! あの日の甘美なきめきが今の私の胸にある……。そう……。それこそが、私をこうも突き動かす!!」

「……何故俺は、こんな奴が好きなんだろう……。!?!」

愛を熱弁するグラハムと、顔を真っ赤にして頭を抱えたそうになっている刹那。オフ会で顔を合わせた2人のやり取りと、怖いくらいに一

致している。「愛を語るには叫ぶ必要がある」を地で行くグラハムと、
「愛は惜しむ程大切にすべきだ」を地で行く刹那のやり取りだ。

だが、今の2人は追う者と追われる者同士である。己の立場を忘れていない2人の心を表すように、フラッグとガンダムが激しくぶつかり合った。グラハムも刹那も、公私はきちんと分けるタイプであった。見ていて不安になるほど、すっぱりと割り切っていた。

火花を散らし合う両機を視界の端に捉えつつ、自分も対峙すべき相手の元へ向かう。彼女が駆る機体は、すぐに見つかった。純白のガンダム、スターゲイザー。イデア・クピディターズが駆る機体である。クーゴのフラッグは、鞘からガーベラストレートとタイガー・ピアスを引き抜き、構えた。次の瞬間、スターゲイザーの周辺に青い閃光が舞った気がする。感じ取った違和感に、クーゴは思わず眉をひそめた。

もう一度確認する。純白の機体には何も起こっていない。では、先程の青は何だったのか。見間違い？——いや、今はそんなことよりも、戦いに集中するのが先決だ。クーゴは即座に操縦桿を動かした。イデアもこちらの気持ちを察したのか、微笑んでくれたような気がした。

「本気で行くぞー！」

「迎撃しますー！」

こちらの戦いも、火蓋が切って落とされた。

*

——そして、フラッグは次々と撤退していく。

クーゴとイデアは、お互い満身創痍に等しかった。あと一撃で勝負が決まるだろう。

そのとき、視界の端で何かが爆ぜる音が響く。見れば、グラハムと刹那の決着がついたらしい。

グラハムのフラッグが悲鳴を上げている。軍配は刹那とガンダムに拵がった。

「それでこそ、私が命を懸けて恋い焦がれるだけの相手だ！」

グラハムは相変わらずの様子だった。むしろ、更にノリノリになっている気がする。

その様子に、クーゴは萎むように息を吐いた。脱力して肩を落とす。

「現在進行形で、墜とされかけている側が言う台詞ではないだろう」

「む。キミは無粋だな。今いいところなのに」

「どこがだ。愛の言葉はいいから、撤退するぞ」

「相変わらずひどいぞ」

自分たちが撃墜寸前だというのに、こうもまあ、能天気な会話をしているられるものだ。当事者でありながらも、クーゴは他人事のように考えていた。

スターゲイザーから離れる。イデアは戦場におけるマナーを守っているようで、撤退する相手への追い打ちはしなかった。彼女だけではなく、ZEXIS全体に言えることである。

ハワードを退けた民間運営のヒーロー、ジョシユアを退けた羽つきのガンダム、ダリルを退けたゲッター線の権化、アキラを退けた黒の騎士団のエース。

世間は彼らを目の敵にしているけれど、本当に彼らは“世界を混沌に導く存在”なのだろうか。彼らを倒せば、本当に世界は平和になるのだろうか。誰かの悪意が、ZEXISを貶めていると言った方が正しいような気がしてきた。

相手の器の、なんとまあでっかいことか。

クーゴは肩をすくめた。そうして、相棒に撤退を促す。

グラハムは相変わらず刹那のガンダムを名残惜しそうに眺めている。

る。

ややあつて、グラハムのフラッグも引き上げの態勢に入る。が、去り際に刹那を見た。

2人が対面しているような錯覚に駆られていたとき、何を思ったのか、グラハムはZEXISに大音量で通信を送る。

「また会おう！ それまで誰の手にも落ちるなよ、我が愛しの君」たち「よ！」

言い残し、グラハムのフラッグが撤退した。クーゴとクーゴが翔るフラッグの動きが止まる。

いつの間にか、撤退を促していた自分とグラハムの立場が入れ替わっていた。

お前、一途じゃなかったの？ と、喉の奥からこぼれ出てしまいそうになるのを堪える。間髪入れず、グラハムは付け加えた。通信先は全体ではなく、ただ1人——刹那・F・セイエイへ。

「——次こそは、キミを釘付けにしてみせるさ。他の誰でもない私かな」

グラハムは、視界の端にちらつく蜘蛛のような赤いMSを睨みつけながらそう言った。PMCトラストのアリー・アル・サーシエスが操縦する機体。確か、アグリツサとか言っていたか。

奴は、小学生の社長がパイロットを務める機体と鏝競り合いを繰り広げている。他の機体を倒した民間の地球防衛ロボも加わった。グラハムは通信越しに彼女を促す。サーシエスと刹那の間にある「何か」を察したかのように。

グラハムの指摘に驚いた刹那が息を飲んだ様子が『視えた』。ややあつて、刹那の翔るガンダムが、アグリツサへと向かった。民間のロボが引き、入れ替わるように刹那がサーシエスと対峙する。こちらを見送っていたアイデアが、名残惜しそうに刹那の援護へと向かった。

物珍しい光景に、「ああ、こいつも大人だったんだよなあ」なんて、失礼なことを考えた。

普段がアレなので子どもっぽく思われるが、グラハムは今年で27歳。アラサーと呼ばれる年齢である。

「どうした、撤退しないのか？」

「あ、ああ」

気づけば、通信回線にグラハムの顔が映し出されていた。滅多になり程神妙な顔つきに、クーゴは面食らう。

グラハムとは長い間、相棒や親友という関係を築いてきた。彼のことは熟知していると思っていたが、どうやら自分もまだまだだったらしい。

クーゴは苦笑し「なんでもない」と告げた。激化する戦場に、自分たちの居場所は無いに等しい。再びその権利を得るためにも、生きて帰投しなくては。

そう思った次の瞬間、

『——見つけた！ おれたちの獲物だっ!!』

子どもの声。間髪入れずに背中を駆けた悪寒に従い、クーゴは慌てて操縦桿を動かす。先程まで無茶をやらかしていたフラッグが、さらなる無茶に悲鳴を上げる。それでも機体はクーゴに伝えてくれた。

目の前の砂漠が爆発した。あと一步フラッグの反応が遅かったら、クーゴのフラッグは砂塵もろとも吹き飛ばされていただろう。何事かと振り返れば、赤い粒子をまき散らす4機の機体が姿を現した。

奴らは撤退するユニオンフラッグ——特に、クーゴが所属する『オーバーフラッグス部隊』を優先的に狙っている。クーゴやグラハムも、もれなくその対象にされた。戦場を蹂躪する新手に、三大国家もZEXISも振り回され始める。

しかも、新手は更に新手を呼ぶ。実戦配備されていたMDたちが、

襲撃者に呼応するかのように反旗を翻したのだ。

三大国家の軍もZEXISも関係ない。予想の斜め上に行く大混戦である。

視界の端で、ランデイのフラッグが消し飛ばされたのが見えた。スチュアートのフラッグが串刺しにされて爆散する。2機とも、満身創痍で帰投しようとしていた最中だった。

(っ、こいつら!!)

クーゴは齒噛みする。大切な仲間を奪われて、黙っていられるはずがない。もうちよつとだけ無茶できるかとフラッグに問えば、軋んだような音がした。

了承。グラハムを見れば、相棒共々やる気のようにだ。互いの好敵手とのリベンジマッチを成しえるためにも、今回は絶対に逃げ延びねばならないだろう。

撤退する友軍を守りつつ、自分たちの前に立ちはだかる新型を撃破する。戦いで一番難しいといわれる、殿戦。

できるか、ではない。やるのだ。やらねば、自分たちに明日は来ない。クーゴはちらりとグラハムを『視』返した。

カメラアイ越しから顔を見合わせ、頷く。そうして、2機のフラッグは新型と対峙した。



「——あれ?」

クーゴは目を瞬かせた。

イヤホンから流れていた音楽は、クーゴの十八番である。＼はじまりの歌だ。＼多元世界技術解析および実験チーム＼が結成されたとき、あるいはクーゴが歌い手の『夜鷹』として動画サイトにUPしたときに最初に歌った曲である。

この曲から『視える』きよわく虚憶は『砂塵に舞う悪意／＼』。三大国家の軍事演習——実際はガンダム鹵獲およびZEXIS殲滅のために決行された作戦の話である。最近似たようなことが現実でもあったが、まあ、それは割愛しよう。

（三大国家によるガンダム鹵獲作戦前は、俺とグラハムがアイデアや刹那と顔見知りだったり、新型が湧いて出たりした場面はなかったはずなのに）

これは一体どういうことだろう。クーゴは首をひねったが、専門外である自分では何も思い当たる節が見当たらない。

今、クーゴができることは、この虚憶きよわくを記録することだ。今まで見てきた『砂塵に舞う悪意／＼』の下に分岐を作り、内容を打ち込んでいく。

外の景色は快晴。悪意渦巻く世界とは打って変わって、のんびりとした天気である。今日は絶好のリハビリ日和だろう。ハワードが頑張っている姿が『視えた』。

そこへ、ダリルやアキラ、ジョシユアの3人が顔を出す。ハワードはジョシユアの飯テロを警戒していた。今日は何もなかったことを知ったとき、ジョシユア以外の全員が思いつきりガッツポーズした姿が『視える』。対して、ジョシユアはちよつとだけ泣きそうな顔をした。

前回の『豆のポタージュ（原材料・あずき小豆、牛乳、練乳、砂糖、蜂蜜、黒砂糖、トレハロース、プロテイン、ガムシロップ）テロ（辛うじて）未遂』事件以来、「何が何でもジョシユアに味付けを任せてはいけない」という決まりが広まったのは記憶に新しい。

現在、ユニオン軍は立て直しのために、てんやわんやの大忙しである。自分たちの基地を壊滅させられたのだから、当然のことだ。

人員の整理や整備の復旧など、やらねばならないことは沢山あった。その合間を縫って、クーゴとグラハムは戦友の見舞いに足を運んでいた。

その分、アイデアたちと連絡を取ったりオフ会をする機会はめっきり減ってしまったように思う。互いに多忙のため、致し方ないのかもしれないが。

「休憩時間くらい、休憩したらどうだ」

「その言葉、そっくりお前らに返すよ。休日も休憩も返上して、頑張ってるじゃないか」

やつとこさ、本日のノルマを片付けたグラハムとビリーが顔を出す。片やユニオンのトップガンとして、片やユニオンの誇る最強の技術者として、2人は多方面にわたって駆けずり回っていた。

虚憶きよおくのまために精を出すクーゴとは違って、2人の方が頑張っているのだ。2人の方こそ、休憩時間に休憩してほしいものである。クーゴがそう述べれば、2人は顔を見合わせてため息をついた。

「昔から思っていたんだが、キミは自信を過小評価し、他者を過大評価する傾向があるな」

グラハムが肩をすくめる。何故そんなことを言われるか、クーゴにはまったくもって身に覚えのないことだ。それを聞いたビリーがうんうん頷いた。

「謙遜も度が過ぎると嫌味になるっていうからね。僕らはそう思わないけど、中にはそう思っちゃう人もいるかも知れないし」

ビリーの言葉が引き金となったのだろう。クーゴの脳裏に、蒼海の姿がよぎった。

何をやっても蔑まれ、馬鹿にされ、努力も頑張りも踏みにじられ続

けた姉。彼女が頑張っていた姿を、クーゴは一番近くで眺めていた。その強さも、脆さも、悲しみも、そのすべてを目の当たりにしてきた。病弱でひ弱なクーゴばかりが可愛がられ、褒めちぎられ、もてはやされる。そんな理不尽を、蒼海は一番近くで見してきた。自分の努力を正當に評価してほしいと、彼女はいつも願っていた。クーゴも、彼女のことを『正しく』評価してほしいと願っていた。

姉は自分なんかよりも優れている。それを周りの大人たちに主張しても、彼らは何も変わらなかった。むしろ、『蒼海がクーゴを脅して言わせた』と取ったらしく、姉への蔑みや虐めは悪化した。多分、それで、蒼海はクーゴのことを恨んだのだと思う。

理不尽なことを平気で行う大人の姿を見て、クーゴは大人になった。そんな中で、思ったことがある。

頑張っている人の頑張りを、ちゃんと目に留められる人間になりたい——その願いは、今、どうなっているだろう。

自分よりも素晴らしい人がいる。その人たちこそ、認められてしかるべきだ。

当たり前のことを知ってほしくて、クーゴは必死になってきたけれど。

それが逆に、うまくいかない原因だったのなら。

「——ああ、だから俺は失敗したのか。……やっぱりダメだな」

クーゴの口から、ぽろりと言葉が零れた。その言葉が何を意味していたのか、グラハムとビリーは何となく察してしまつたらしい。しまった、と、苦い表情を浮かべた。

本当のことを言つたからといって、誰もが幸せになれるわけではない。嘘をついたからといって、誰もが不幸になるというわけでもない。……世界は、今日も難しい。

嫌な空気が漂う。これからどうすればいいだろうか。

「そうだ。これから、カスタムフラッグの整備に行くんだ。グラハム

も立ち合いたいってき。折角だし、クーゴもおいでよ！」

幾何かの沈黙の後、ビリーがわざとらしく声を上げた。性根が「可哀想なくらい素直すぎる」彼が、物凄く頑張っていることは明らかである。

「自然体でやってますよ」と主張していて、それがかえってぎこちない。失礼な言い方になるけれど、そんなビリーの様子が笑いを誘った。

今ここでビリーのオーバーワークを咎めたり、彼の心配をするのはお門違いだろう。クーゴはふつと表情を緩め、頷いた。

あからさまに、ビリーとグラハムが安堵した。2人の表情ははっきりしていて、本当にわかりやすい。

むしろ、2人が曖昧な表情を浮かべた様子を考えること自体があり得なかった。生まれ育った文化とか、考え方の違いなのかもしれないが。

男3人が、廊下を並んで移動する。整備室での道のりが、妙に長いような気がした。

『ソレスタルビーイングが我が基地を襲ったせいで、多大な損失が……』

『なあ、聞いたか？ スペインの教会に、ソレスタルビーイングが攻撃を行ったらしいぜ』

『多くの民間人が犠牲になったって話だ』

『赦せない。奴らは卑劣なテロリストだ！ 何が戦争根絶だ、くそっ！』

『エイフマン技術顧問は、ガンダムの動力である特殊粒子の謎に迫ったから殺されたって噂が流れてるらしいぞ』

『ソレスタルビーイングは武力介入のフリをして、エイフマン教授を襲ったって言うのか？』

『だとしたら、我が軍に奴らの内通者がいるってことじゃないか！ 一体誰が……』

すれ違う人々の声が『聞こえる』。大半の人々が、新型ガンダムの偽物たちを本物だと誤認していた。そうして、そのことに誰一人として疑問を抱いていない。

誤解のせいで募る憎しみ。激しい怨嗟の声に、クーゴは思わず眉をひそめた。どうやらクーゴだけではなかったらしく、グラハムやビリーも表情を曇らせる。

怨嗟の声を振り切るようにして、クーゴたちは格納庫へ足を踏み入れる。ビリーは工具を持ちだし、まずはグラハムのフラッグを整備し始めた。

無茶苦茶な戦闘を行う隊長機だ。整備も時間がかかるらしい。うわあ、と、ビリーが悲鳴を上げた。気のせいでなければ、ぼやきも聞こえる。昔から、グラハムの搭乗するフラッグは技術者泣かせで有名だった。

その分、技術者たちが予想もしなかった結果と成績を叩き出すのだから、帳尻は充分である。むしろお釣りがくるレベルだ。それに対して、成績と技術者の負担のバランスが取れていたのがクーゴであった。グラハムのようなハイリスクハイリターンとは違って目立つものではないけれど、着実且つ堅実に成果を出すタイプらしい。

『世界では、ソレスタルビーイングに対する反対デモが行われています。民間人にも容赦なく行う武力介入が、反ソレスタルビーイングの感情を煽り……』

鳴らしっぱなしのラジオ。以前はエイフマンがテオ・マイヤーの歌を聴いていたそれから流れたのは、世界を覆わんとする悪意の気配だった。

アイデアや刹那のことを貶められたような気がして、クーゴはラジオを切った。とてもじゃないが、聞いていられない。

誰よりも強く、それ以上に優しすぎたが故に、世界を変えようとした天使たち。アイデアや刹那はどんな気持ちで、このニュースを聞いて

いるのだろうか。

世界に仇名す存在を擁護しようものなら、即座にその人物も肅清対象にされるだろう。そこが人間および集団心理の怖いところだ。

「……これで、ソレスタルビーイングは立派な悪党だ。誰が意図したか知らないけれど、計画した人間は笑っているんだろうな」

「まったくくだ。誰だか知らんが、悪趣味な奴だ。……私は、そんな輩が大の嫌いときている」

クーゴが天井を仰げば、視界の端で佇むグラハムも腕を組み機体に寄り掛かった。彼の横顔は、普段にも増して険しい。

グラハムの機体の整備を終えたビリーも、機体の陰からひよっこり顔を覗かせながら頷いた。

「僕も、もしかしたら他の人たちと同じように騙されていたんだろうね。さつきすれ違った人たちが言っていたように、『ソレスタルビーイングが』エイフマン教授を暗殺するために基地へ介入を行った』って思ったかもしれない」

実際は、『“黒幕”がソレスタルビーイングの悪評を広めつつ、特殊粒子の謎に迫ったエイフマンを暗殺した』と言った方が正しい。

この事実に勘付いているのは、オーバーフラッグス部隊とその関係者ぐらいだ。ユニオン上層部も、今回の基地襲撃の犯人を『ソレスタルビーイングの新型4機』と正式に発表している。

誰かの罠に乗せられたのか、あえて罠に乗ることで何か利益を得ようとしているのか、それとも素でそう考えていたのか。その詳細を知るには、クーゴやグラハムの立場は弱すぎた。

『利益が出せないなら、存在する価値がない』。『存在意義が果たせないなら、『なくなつて』当然』、か」

不意に、姉がよく言っていた言葉が脳裏をよぎる。何故今、その言葉が浮かんだのかはわからない。

けれども、その言葉に秘められた意味が今なら分かった気がする。同時に、姉の言葉は新しい疑問を連れてきた。

何者かがソレスタルビーイングを陥れようとしているのはわかる。しかし、それは何のためなのか。

姉の言葉を借りて考えるとするなら、その人間は『ソレスタルビーイングを利用して』。彼らの味方をする事で利益を得ているのか、辱めることで利益を得ているのかはわからない。

ソレスタルビーイングの活動方針は『業を以てして業に挑む』スタイルだ。武力を否定するために、武力で介入を行う。エイフマン曰く、『まるで滅びを求めているかのよう』な行動である。

そもそも、『ソレスタルビーイングの存在意義』とは、『何』か。

(――すべては、そこに起因している)

クーゴにはそう思えてならない。

彼らが存在していることで、利益を得ていたのは誰か。

彼らが消え去ることで、利益を得るのは誰か。

「刹那……」

隣から、掠れて消えそうな声があった。天使の一団を成す少女へ、憂いと祈りと愛を込めた響きを宿したものだ。声の主――グラハムが目伏せる。

普段から「彼女をおとす」と主張して憚らない彼女にとって、この状況は堪らないだろう。いくら公私で折り合いをつけた間柄といっても、我慢できないことはある。

最愛の好敵手刹那とガンダムの誇りを汚されて、グラハムは黙っていられるような男ではない。彼はおもむろに、懐から扇子を取り出した。

いつぞやのオフ会――グラハムの誕生日を祝う京都旅行で、刹那か

ら贈られたプレゼントだ。蒼穹を思わせるような、透き通った空色。しかし、彼の心は曇天に埋め尽くされている。

静かに瞼を閉じたグラハムの目には、同じようにして誕生日プレゼントである天使のシエルカメオを握り締めた刹那の姿が『視えて』いるのだろう。クーゴにはそう思えてならなかった。

汚された誇り。渦巻く悪意。それぞれの祈り。世界と己の行きつく先は、どこなのか。

それはまだ、誰にもわからない。

クーゴにも、イデアにも、グラハムにも、刹那にも。



事態は最悪の方向に進んでいる。イデアは、ヴェーダから提供された情報を眺めながら腕を組んだ。チーム・プトレマイオスの面々は、ノブレスおよびトリニティが破壊活動を行っていると思い込んでいる。

今回映し出されたのは、AEU領スペインで起こった教会襲撃事件。しかし、イデアがノブレスから『聞いて』いた話と、ヴェーダから提供された情報はまったく違う。ノブレスはトリニティたちが偽物と対峙したと言っていた。

ヴェーダは、この襲撃をトリニティの行動だと断定している。それに呼応するかのように、世間のメディアも『トリニティ兄妹が破壊行為を行っている』と放送していた。頭を抱えるノブレスの姿が『視えた』ような気がして、イデアは彼に同情した。

ブリーフィングルームに集う面々の表情は、誰も彼も眉間に皺を寄せていた。偽物たちの破壊活動だけでなく、反ソレスタルビーイングデモの様子が映し出されている。

世界に憎しみの種を蒔く。それが、トリニティが生み出された『本来の存在意義』であった。けれど、その運命に抗ったのがノブレスだ。彼の戦いもまた、佳境を迎えていた。

(……本当に、四面楚歌だなあ。彼も私も)

アンノウンたちからの嫌がらせのせいで、トリニティは業と罪をすべて抱え込まされている。そのことに気づいているのは、ほんのわずかな面々だけだ。

同じソレスタルビーイングの仲間たちからも疎まれ、ノブレスたちはすべてからも孤立していく。刹那も、ロックオンも、アレルヤも、ティエリアも、他の面々も、トリニティに対しては悪感情しか抱いていない。

赦しておけない——刹那とティエリアの感情が重なる。普段は反目ばかりしていたのに、この状態を機に思考回路が一致したらしい。平時ならばいい変化だと手放しで喜べただけけれど、状況が状況なだけに何も言えなかった。

「……………」

「あ、おい。どこへ行くんだ刹那!？」

刹那がくるりと踵を返す。足取り荒く、彼女はどこかへ向かおうとしていた。

慌ててロックオンが呼び止める。振り返った赤銅色の瞳には、はつきりとした否定の意志が宿っていた。

「認めない。……あの機体は、ガンダムではない!」

それが、刹那の出した答え。彼女の行く先は、ノブレスたちの元だ。ソレスタルビーイングのガンダムマイスターとして、彼らを倒しに行くつもりらしい。

ヴェーダのミッションプランにも、トリニティを討つような作戦は展開されていない。今回刹那がやろうとしている行動は、完全な独断専行だ。

普段は独断専行をよしとしないティエリアも黙認するつもりらしい。いや、この後、彼は自らの意志でトリニティを討ちに行く。ヴェーダの意志に関係なく、だ。

コックピットに乗り込んだ刹那の様子が『視えた』。懐から取り出したのは、グラハムから贈られた天使のシエルカメオだ。彼女はそれを静かに握り締める。

不意に、グラハムが、刹那から貰った誕生日プレゼントである扇子を眺める様子が『視えた』。彼には、刹那の様子が『視えている』のだろう。自覚はしていないようだが。

間髪入れずエクシアが飛び出す。ソレスタルビーイングのガンダムと、ガンダムマイスターとして、世界の歪みを破壊するために。

(止めなくちゃ。これじゃあ、"黒幕"の思うツボじゃない！ いくらノブレスくんやその教え子たちでも厳しすぎる!!)

自分がここにいる意味を、アイデアは片時も忘れたことはない。だからこそ、ここで事態を静観している訳にはいかないのだ。

アイデアが駆け出すよりも先に、ティエリアが動いた。アイデアが予想した時間よりも早く、彼は部屋を飛び出していく。

準備が整ったヴァーチェが戦場へと向かった。目的はエクシアの援護である。先を越されたが、アイデアも2人の後に続いた。

後ろからロックオンの声がしたように思う。アイデアとスターゲイザーより少々遅れて、彼はデユナメスと共に援護に来るはずだ。ヴァーチェに続いて、スターゲイザーも出撃する。大急ぎで、アイデアはノブレスの思念を探った。

彼は今、ユニオン領の孤児院にいた。『悪の組織』が経営に関係している場所だ。どうやら、王留美から悪い気配を感じ取った彼は、彼女から提供された隠れ家を引き払って移動したらしい。

ノブレスは、孤児院の敷地内に設置された地下格納庫で愛機の整備をしていた。彼の脇には、白髪の老紳士が並んでいる。トリニティ兄妹のガンダムを整備およびチューンしていた分、ノブレスは自分の機体を後回しにしていたらしい。

老紳士が感嘆の声を上げる。彼は、イオリア・シユヘンベルクや彼と理想を追いかけた科学者たちの頭脳に戦慄していた。

ノブレスと老紳士はその話で盛り上がっていたけれど、手を休める気配はなかった。すさまじい速さでチューンを進めていく。

そうして、2人は満足げな顔をして椅子に座った。やつとチューンが終わったらしい。

『ノブレスくん、トリニティ兄妹は?!』

アイデアの問いに、ノブレスはひどく驚いた顔をした。

『あの3人なら、先に任務へ向かってもらいましたけど……』

『急いで！ 貴方の危惧していたことが起きる!!』

その言葉だけですべてが通じたのだろう。

ノブレスは、苦々しい表情を浮かべた。

『ついに来たか……なんて。こんなこともあろうかと、既に手は打っ

てあります。——お願いしますよ、リボンズ!』

『当然だね。僕を誰だと思っているんだい?』

ノブレスはこの場にいない人間の名を呼んだ。彼の呼びかけに反応するように、動き出した気配があった。

アイデアは思い返す。そういえば、リボンズ・アルマークにはヴェーダへのアクセス権があった。しかも、テイエリアよりも権限は上である。

彼ならば、ヴェーダが提供し続ける間違った情報を止められる。

ヴェーダをハッキングすることも可能なのだ、それくらいお茶の子さいさいだろう。
だが。

『何っ!? チィ……!!』

リボنزの気配が揺らぐ。造作もないことだと思っていたら、思わぬ障害が現れたことに戸惑っている様子だった。

彼は苦々し表情を浮かべている。どうやら、ヴェーダにアクセスしている存在がリボنزの排除に動いているらしかった。

焦燥に駆られた横顔であったけれど、すぐに彼は反撃に打って出た。リボنزの援護に動いた者たちの気配を感じ取る。

『俺のコードは伊達じゃないぜ!』

『大事な場所へ帰ってくる、大切な人たちを守るんだ……!』

『世界を正しい姿へ、戻さなくてはなりません』

『悪の組織』に所属していた技術士——フェニックスとアメリカス、『悪の組織』が誇るスパコン——アプロディアが、アクセスを妨害する存在を潰しにかかったのだ。

邪魔者の手が緩んだ隙について、リボنزがアクセス権を行使する。間髪入れず、ヴェーダからの通信が開いた。提示された情報は、トリニティたちが行っていた『本当の』武力介入の内容である。

P M Cラスト所蔵のM Dの殲滅、カルト教団にしてテロ組織であった団体の壊滅、麻薬組織のアジトの壊滅。彼らはユニオン基地やA E U基地を襲撃したり、多数の一般人がいた結婚式場を襲撃したりしていない。

スターゲイザーを追いかけていたデユナメスの通信回線から、ロックオンが戦慄く声が聞こえてきた。おそらく、トリニティたちと戦いを繰り返しているであろう刹那やティエリアにも、この情報は開示されている頃だ。

戦場が見えてきた。周囲に煙が漂っている。

スローネ3機と、エクシアとヴァーチェが睨み合っていた。

「ヴェーダが何者かの改竄を受けている可能性がある。エクシアのパイロット、ヴァーチェのパイロットも見ただろうか？」

「そんなバカな!？」

ヨハンの言葉に、テイエリアが酷く動揺した。自分の創造主であるヴェーダが、第3者の悪意によって利用されているのだ。無理はない。

何者かが自分たちに潰し合いをさせようとしている——その事実には戸惑いを隠せないのは、プトレマイオスに居残りした面々だって同じだ。

合計7機のガンダムが対峙したこの場所に、重々しい空気が渦巻く。転がり落ちるような激動に、ようやく歯止めらしき歯止めがかかったのだ。

この空気の中、イデアは静かに口火を切った。

「そちらが知っている情報を、私たちに教えてもらえる?？」



「あーあ、ついにバレたか」

そう言ったアオミの横顔は、言葉とは裏腹に余裕綽々であった。

「でも、大丈夫。世界は真実を知らないし、これからも永遠に知ること

はない。と言うか、最初から『ヴェーダなんか要らなかつた』訳だしね」
「ソレスタルビーイングが常に優位に立っていた、最大の理由なのにな？」

少女の問いに、アオミは頷いた。スーパーコンピュータを「要らない」と言う、アオミの意図を探るかのような眼差しである。

アオミはくつりと笑い、端末を指し示す。それを覗き見た少女は、大きく目を見開いた。少女は口元をほころばせた。

「ああ、これならヴェーダは『要りません』わね」

そこへ、少女の執事が紅茶を持ってきた。アオミと少女はそれを受け取り、口をつける。

2人の女たちはしばし談笑していたが、それを遮るように端末が鳴り響いた。アオミは端末を開く。

テコ入れへ向かった『無垢なる子』たちが、ユニオンのアイリス社を襲ったという連絡であった。

アオミの『知識』では、本来アイリス社を襲うのはトリニティたちであった。その帰りに、彼らはグラハム・エーカーの駆るフラッグと戦い、事実上の敗走。

泣きつ面に蜂と言わんばかりに、今度はエクシアとヴァーチエが来襲。どちらとも決着はつかなかつたが、第3者から見れば、判定負けもいいところだろう。

しかし現実では、アイリス社襲撃とスローネ対エクシアとヴァーチエの戦いは前後してしまっている。計画では、アイリス社襲撃の後に同士討ちを起こさせる予定だった。

尤も、同士討ち事件は重大な要素ではない。重要なのは、アイリス社襲撃直後に起きる戦闘である。『知識』に従った計画通りに進めば、直後にグラハムの駆るフラッグが現れるはずだ。

『イレギュラー』は、グラハム居る所に必ずと言っていいほど一緒に

いる。一番重点的に行うべきなのは、『イレギュラー』の排除であった。アオミは端末を起動させる。『無垢なる子』たちに、ミッシヨンの進行状況を確認した。

『今、ユニオンフラッグが近づいてきたところです。しかもこのフラッグは、オーバーフラッグスのようです』
『なあ『母さん』、撃ち落としていいよな!?!』

厚陽あつはるが淡々と答え、星輝せいきが息巻く。
アオミはふつと微笑んだ。

「構わないわ。ただ、気を付けなさい。その中には『墜としちやいけな
い』フラッグもいるから。『隊長機』は絶対墜としちやダメよ」
『はーい!』
『……はい』

元気よく返事をした海月かづきらとは対照的に、宙継そらつぐは気が進まなそうに返事を返した。

通信が切れる。アオミは端末を片付けて、ティーカップに残っていた紅茶を飲み干した。

そうして、アオミは少女と談笑に耽る。世界の変革を眺める場所は、今日も喧騒とは無縁であった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

41. 目覚めの日

「よし、これで整備は完了だ！」

ビリーはやり遂げた笑みを浮かべて振り返った。彼の後ろには、ピカピカに輝くクーゴとグラハムのフラッグ。

巣立ち前の鳥のように、2機は静かな面持ちでいた。飛び立つ瞬間を、今か今かと待ち焦がれているように見える。

心なしか、フラッグも嬉しそうだ。そんな愛機を見つめていると、クーゴも心が明るくなる。

普段ならばビリーに差し入れを持っていくのだが、今回は突発的に同行したため、何も持ってきていなかった。そのことを謝罪すれば、彼は朗らかに笑って首を振る。

「いつもいつも、差し入れ貰ってるから」とビリーは肩をすくめる。今までのおいしいご飯に対するお礼だと彼は言うけど、クーゴにはそんな自覚はない。

「今度、お礼にドーナッツ持ってくる」

「わあ、嬉しいなあ！ 今度は何味のジャムか、楽しみにしてるよ！」
「任せろ。期待に応えよう！」

子どものように諸手を挙げて喜ぶビリーに、クーゴは満面の笑みを浮かべて親指を立てた。

今度もまた、ジャムを添えたドーナッツを作ろう。そういえば、最近は親戚からルバーブが、コーラサワーからはカルヴアドスが大量に贈られてきたか。後者は『不死身』の名付け親になった」ということからえらく懐かれた結果である。

丁度いい。この2つを使ったジャムを作ろう。ビリーのドーナッツだけでなく、贈り主であるコーラサワーにも、お返しとしてそれを送ってあげよう。味覚が肥えている（であろう）フランス人のお眼鏡に合うといいのだが。

カルヴァアドスが届いた時期と前後して、コーラサワーから「サルミアッキが倒せない」とメールが来ていた。フィンランド出身のカティが食べていたお菓子里に手を出したら、あまりのマズさに醜態を晒したらしい。

サルミアッキを食べられなかったコーラサワー曰く、「大佐がこちらを見る目が冷めていた」らしい。彼は彼なりに、カティ・マネキンを攻略しようと頑張っているようだ。

その様子が、嘗て『刹那を攻略しよう』と奮戦するグラハム』の姿にダブって見えて、なんだか放っておけない。方向性の斜め度合とか、本当によく似ている。

不意に視線を感じて振り向けば、グラハムが慈しむように目を細めているところだった。手には、相変わらず空色の扇子。宝物に触れるかのような手つきも変わらない。

「なんだよ」

「いいや。ここは平和だと思ってる」

グラハムはくつくつと笑っていた。何の含みもない、子どもみたいな笑い方。

そう、ここは平和だ。世界が混迷しているように、確かに変わらないものがある。

自分たちが世界と呼ぶには、とてもちっぽけなものだ。それでも大切なものだった。

外はとつぷりと日が暮れてしまっている。2機のフラッグをフルタイムで整備していたのだから、時間もあつという間に過ぎ去るだろう。

整備を終えたビリーがこちらを向いたとき、丁度いいタイミングで彼の腹が鳴いた。クーゴとグラハムは思わず吹き出し、ビリーが気まぐすそうに苦笑する。

「お礼の予定を変更だ。夕飯は何をこそ所望で？」

「おいしいご飯がいい！ キミのおまかせで頼むよ、シエフ・ハガネ！」

「私も是非、それにあやかりたいなあ！」

クーゴの提案に、グラハムとビリーが諸手を挙げて賛成したときだった。基地内に、大音量のサイレンが鳴り響いた！

何事かと耳を立てれば、新型ガンダム4機がユニオン領に出現したという内容だった。ガンダムの飛来予測値であるポイントにある施設は、アイリス社の軍事工場。クーゴとグラハムのカスタムフラッグとオーバーフラッグ部隊が搭乗するオーバーフラッグのライフルを生産していた会社だ。

奴らの狙いである軍事工場は、確かに兵器を生産している。兵器は戦争を加速させるのも事実だ。ソレスタルビーイングの理念からしても、存在を赦せるものではないだろう。だが、働いているのは民間人である。そこまで考えて、偽物たちが何を考えているのかを理解してしまった。

また、罪を重ねる。そうして、罪を背負わせる。クーゴは思わず歯噛みした。手袋がざりりと嫌な音を立てる。隣にいたグラハムも、怒髪天を突く勢いで表情を歪ませている。緑の瞳には、激しく揺らめく焰が燃えていた。

グラハムは、何か言いたげにこちらを見た。クーゴはそれを一瞬で理解する。

偽物たちの好きにさせてはいけない。民間人の命も、好敵手の誇りも、踏みにじられてたまるものか。

クーゴも頷き返した。そうして、今度はビリーの方へと向き直る。伊達に数年来の付き合いをしてきたのだ、「つう」と言えば「かあ」と返す仲である。

「まさか、キミたちだけで出撃するつもりかい!? 無茶だよそれは！」

まだ何も言っていないのに、ビリーは顔を真っ青にして右往左往し

た。彼の心配はもつともだが、自分たちにだって譲れないものがある。

「そんな道理、私の無理でこじ開ける！」

「今までも無茶ばかりしてきたんだ。これから先も変わらんよ」

緑の瞳が強く叫ぶ。それを受けて、クーゴもまた頷き返す。困惑気味な鳶色の瞳がたじろいだ。

しばしの沈黙。先に値を上げたのは、ベリー・カタギリ技術顧問である。彼はため息をついて、肩をすくめた。

「さつきも言った通り、フラッグの整備は万全だ。いつでも出撃できるよ」

「サンキュ、ベリー。お礼の予定だが」

「わかってる。ドーナッツ、楽しみにしてるから。……だから絶対帰ってきてくれよ、2人とも！」

「了解！」

「心得た！」

ベリーの言葉に、クーゴとグラハムは真剣な面持ちで頷いた。慌ただしく更衣室へ向かい、パイロットスーツに着替える。

どの道、後から他の部隊が向うのだ。先行するという形なら、出撃許可は下りるだろう。自分たちが出撃する大義名分もそこそこに、クーゴとグラハムのフラッグは夜空を飛んだ。

雲に覆われた夜空を翔る。程なくして、戦うべき相手が見えてきた。ソレスタルビーイングや自分たちの顔に泥を塗りたくる偽物たちだ。4機の偽ガンダムも、自分たちの接近に気付いた様子だった。アイリス社の軍事工場は、真っ赤な炎に包まれている。逃げ惑う人々の悲鳴が『聞こえた』。そんな声などお構いなしに、いや、むしろ踏みに行るかのように、奴らは攻撃を続けていた。

故に、尚更、彼らの行動を止めなくては。

空を切り裂くようにして、クーゴとグラハムのフラッグが急降下する！

「やはり貴様らかあああッ!!」

阿修羅を思わせるようなグラハムの横顔が『視えた』気がした。コンマ数秒で、グラハムのフラッグは隣にいたクーゴのフラッグを追い抜く。

彼の黒い機体が、青い燐光を纏っているように見えたのは、気のせいだったのだろうか。考える間もなく、クーゴもグラハムに続いた。

「おおおおおおおおおッ!!」

（——ッ、いつにも増して恐ろしいな!?!）

怒りに満ちているためか、グラハム機のライフルから撃ち放たれる攻撃は、雨あられを通り越して滝のようだった。

クーゴのフラッグも、牽制としてライフルを撃ち放った。それを、4機の偽物たちは簡単に回避する。それくらい予測済みだ。

急降下の勢いを利用し、偽物たちの反撃を回避する。追尾する自立兵器を振り切り、ビーム攻撃の雨あられを縫うようにして躲した。

勢いを相殺するようにして、隊長機が空中可変する。先ほど整備したばかりだというのに、フラッグの関節から火花が散った。それでも、グラハムのフラッグは、彼に応えるように空を翔る！

彼のフラッグは、『連邦の白い悪魔』を模した黒い機体へと肉薄した。青い燐光がきらりと爆ぜる。

プラズマソードを鞘から引き抜き、振り下ろす。刹那、偽物がビームサーベルを引き抜き、寸での所でそれを受け止めた。

「どれ程の性能差があろうとも……!」

刃同士が鏝迫り合いを演じる。

「今日の私は！」

隊長機のカメラアイが、グラハムの気迫をフィードバックさせたかのように輝いた。

その気迫のせいかな、他の3機は身動きが取れずにいる。

「阿修羅すら凌駕する存在だあッ!!」

青が爆ぜた。それに呼応するかのようには、フラッグの動力部が白く火を噴く。

機体性能共々、状況がオセロのようにひっくり返る。

鏢迫り合いに勝利したのはフラッグだった。体勢を崩した『連邦の白い悪魔』の偽物へ再び肉薄した。彼の左手にも、プラズマソードが握られている。

二刀流。見よう見まねではあるけれど、グラハムが何を参考にしたかは一瞬で合点がいった。ガーベラストレートとタイガー・ピアスを使って戦う、クーゴの戦術である。

『連邦の白い悪魔』の偽物はグラハムの気迫に押されている。双剣とビームサーベルが再び火花を散らした。青い燐光が瞬く。再び、隊長機は鏢迫り合いに勝利した。

赤いビームサーベルがくるくると宙を舞う。グラハムのフラッグは手に持っていた双剣を手放し、跳躍するように加速する。

『ザコのくせに、ちょこまかと！』

『連邦の白い悪魔』の偽物は、背中に搭載された自立兵器を一気に展開しようとした。

「させるかあ！」

クーゴは即座にフラッグを空中可変させると、グラハム機が投げ捨てた双剣をキャッチした。即座に、投擲の要領で投げつける！

用途外の使い方だが、投げつけたプラズマソードは青い光を纏い、吸い込まれるかのようにして自立兵器に突き刺さった。

迸る紫電に、子どもが驚いたような声を上げる。そのコンマ数秒間で、グラハムのフラッグはビームサーベルをキャッチした。

先ほどの跳躍で偽物より高い位置にいたグラハム機は、ビームサーベルを振り上げた。迎え撃つ『連邦の白い悪魔』の偽物は、使い物にならなくなつた自立兵器を諦め、ビームガンを構えようとした。

敵の動きを上回る勢いで、グラハムのフラッグはビームガンを一刀両断する！ 子どもが愕然とした表情で、真つ二つになつたビームガンを見つめている姿が『視えた』。心なしか、涙目になっているような気がする。

「まだだー！」

動きが止まつた指揮官機へ、隊長機が追撃へ移る。フラッグは軋んだ音を響かせながら、再びビームサーベルを振りかぶった。

次の瞬間、子どもがニヤリと嗤つたのが『視えた』気がした。それを皮切りに、グラハム機の背後に他の2機が迫る。

殺気に気づいたグラハムのフラッグが振り返った。クーゴの背中に、一際激しい悪寒が走る。反射的に、操縦桿を動かした。

『目標視認。』とっておきの呪文で、廻りものにする』

『よし、墜とすぞー！』『母さん』に褒めてもらうんだ！』

『お前なんて、死んじやえばいいよー！』

子どもの声が出た。どこまでも無邪気な声だった。

『兄さん、ダメだよ！ 隊長機は墜としちゃいけないって、『母さん』が……』

『黙れよ！ フラッグなんだから、みーんな同じだ！』

子どもが咎める声がした。けれど、その意見は切って捨てられる。クーゴはフラッグを加速させた。悪寒はどんどん酷くなっていく。凄まじいGが体を襲う。悲鳴を上げてしまいそうになったが、必死に歯を食いしばった。

先程の隊長機がやらかした動きに比べれば、クーゴの動きはそこまですぐではない。距離も直線。こんなので弱音を吐いていたら、副官を名乗ってなんかいられない。

あまり飛ばしすぎたせいなのか、走馬灯が見えかけた。青い空、そこで待っていると微笑んだ、沢山の人たち。自分が歩いてきた道が、浮かんでは消えていく。

そのすべてを振り払うように、更にフラッグを加速させた。気のせいか、視界の端に青い燐光が見えた。

『ト』

3機の機体が赤い光に包まれた。

『ラ』

青い光が煌めいたのが、視界の端に見えた。

『ン』

距離が詰まる。

『ザ』

距離を詰める。

『ム！』

フラッグの攻撃圏内に、届いた。

3機が動き出し、グラハムに攻撃を仕掛けようとする！

それよりも早く、クーゴはガーベラストレートを引き抜いた！

「ウチの隊長を、墜とさせてたまるかアアアアアアアアツツ!!」

その咆哮と同時に、視界一杯に青い光が爆ぜた。



アイデアは見ていた。見えるはずのない紫の瞳で、その光景をはつきりと『視て』いた。

青い光が、夜闇を切り裂くように輝いていたのを。

カスタムフラッグが、鮮やかな青い光を身に纏っている姿を。

動き出した偽物3機に対し、一撃を叩きこんだガーベラストレートの軌跡を。

偽物たちが構えていたビームガン／サーベルが吹き飛ぶ。斬り飛ばされた部分は、空中で爆散してしまった。

子どもたちの悲鳴が『聞こえる』。その直前、相手を確実に屠るために繰り出された銃弾は、隊長機の推進部分を掠った。

悲鳴を上げていた隊長機には辛かったのだろう。ぐらりと体勢が傾いた。パイロットであるグラハムは呻きながらも、どうにか体制を整える。

(『目覚めの日』)

クーゴ・ハガネの翔るフラッグに起こった現象が何か、イデアは知っていた。

(目覚めたんだ。私たちと同じ、タイプ・ブルー荒ぶる青が)

空よりも青く、雄大で鮮烈な群青^{あお}。イデアは心が震えるのを感じた。

おそらく、この光景を見ているノブレスも、イデアと同じ気持ちでいるのだろう。

(おめでとう。歓迎するわ、我が『同胞』。……貴方が目覚めるのを、ずっと待っていた)

場違いだとは知りつつも、賞賛の言葉を贈らずにはいられない。イデアは心の中でそう呟いた。美しく輝く群青^{あお}に魅せられていた。偽物たちは機体の動きを止めた。どうしようかと迷っているらしい。

青い光を纏うフラッグは追撃とばかりに刀を構える。赤い光を纏う機体を翻弄するかのように、青い光が軌跡を描く。まるでそれは流星のようだ。

相手よりも早く、クーゴのフラッグは刀を振るった。縦横無尽に空を駆け抜け、敵の攻撃を躲し、自らの攻撃を的確に叩きこんでいく！ 剣の軌跡が閃くと同時に、偽物の脚／手が斬り飛ばされた。それらは空中で爆発を起こす。爆風すらをも切り裂いて、クーゴのフラッグが偽物たちに迫った。

「おおおおおおおおおおおッ!!」

しかし次の瞬間、フラッグの推進部が爆発を引き起こした！ がくんと、フラッグが傾く。

「嘘だろ?! よりにもよって、こんなときに……!!」
「クーゴー!」

傾いた相棒を助けようとして、満身創痍の隊長機が動こうとした。次の瞬間、何かを察知した隊長機が無理矢理急加速する。助けるべき相手を追い抜く勢いで、だ。

新手を告げるレーダーが鳴り響いた。間髪入れず、上空から毒々しい光が雨あられとなって降り注ぐ。そのうちの一発が、隊長機の推進部に着弾した。

それが致命傷になったらしい。推進部が爆発し、火を噴いた。

「ちい……!!」

衝撃に、グラハムが呻いた。傾いた2機が高度を落とす。それを狙い、脚や腕を斬り落とされた偽物たちが攻撃を仕掛けようとしていた。

『よくも、よくも! 俺たちをバカにしやがって!!』

『ザコのかくせに! お前らみんな死んじやえはいんだ!!』

『今度こそ、確実に墜とす!!』

子どもの感情は、フラッグへの憎悪に満ち溢れている。

これ以上、偽物たちの好きにはさせられない。アイデアは即座に操縦桿を動かす。スターゲイザーが、クーゴの翔るフラッグの元へ飛び出した。

スターゲイザーと並んで飛び出したのは、刹那とエクシアである。彼女が向かう先は、グラハム・エーカーが翔る隊長機だ。

伸ばした手がフラッグの手を掴む。そのまま思い切り引っ張って、態勢を整えてやった。ぽかんとこちらを見返すクーゴの顔が『視える』。

視界の端で、エクシアに引き上げられたグラハムのフラッグが見えた。彼も、顔を顰めながらこの状況に茫然としている。

この場にいるのはエクシアとスターゲイザーだけではない。デユナメスが、ヴァーチエが、スローネ3機が、偽物たちを取り囲む。

「なんと……！ ガンダムがこんなにも……壮観だな」

「壮観通り越して、もうどうしたらいいか分からないレベルだつて」

満身創痍でも軽口をたたき合う2人に、これなら大丈夫だなと安堵する。

通信越しから、イデアは刹那にアイコンタクトを送った。それを理解した刹那も頷き返す。

2人は他の面々に「フラッグを基地まで送ってくる」と伝え、戦場から離脱しようとした。

逃さないと言わんばかりに、再びレーダーがけたたましく鳴り響いた。ぞつとする悪寒に、イデアは顔を上げる。

クーゴはこの殺気に覚えがあるようで、その答えを手練り寄せようと必死になっていた。

発信源を辿れば、先程フラッグに攻撃を仕掛けた場所と同じである。

「超強大なエネルギー反応!？」

「しかも、反応は上空からか！」

ロツクオンとヨハンが、禍々しい赤と紫の光を捉える。

「やべえ……あんなの喰らったら、ひとたまりもー」

「こんな、こんなことが……!!」

ミハエルとティエリアが愕然とした表情を浮かべた。

「あんなの、反則すぎるでしょ……！」

ネーナは顔を真っ青にしている。

「く……！」

刹那が険しい表情を浮かべた。心なしか、エクシアはフラッグを庇おうとしているかのような体勢を取る。

砲撃は充填された。迷いも躊躇いもなく、その一撃はこちらへと降り注いだ。禍々しい色の、極太のビーム攻撃。イデアは即座に操縦桿を動かす。

タクマラカン砂漠で解放した『力』を、もう一度使うのだ。出し惜しみをすれば、この場にいる全員が命を落とすことになるだろう。

それでも止められるという保証はない。下手をすれば、力を打ち破られる危険性もあり得る。それでも、なにもしないという選択肢は存在しなかった。

「皆、一か所に集まって！ あのとときみたいになんとかするからっ!!」

イデアの言葉に、チーム・プトレマイオスの面々は即座に頷いた。意味を理解していないトリニティ兄妹や、抱えられたままの隊長および副隊長が首を傾げる。

いいから、とイデアは一喝した。それに渋々従うような形で、他の面々も一か所に集まる。全員、効果の範囲内。確認したイデアは、即座にシールドを展開した。

青い光が爆ぜる。タクマラカン砂漠でイデアが使った防壁が、この場で再び展開した。宝石を思わせるような壁が出現する。それを取り巻くように、強い風が舞い上がった。

巨大なレーザー砲がシールドとぶつかる。それは派手に火花を散らした。壁はみしみしと軋んだ音を立てる。イデアは歯噛みしながら、力行使した。引いたら負ける。

しかし、レーザーの出力が予想以上に強い。防壁の一部をレーザーが貫通し、小さな穴をあける。そこから漏れた光が大地を焼いた。

仲間たちの不安げな声が『聞こえる』。その気持ちは尤もだ。防壁の一部が壊され、その穴からレーザーが漏れだしているのだから。

アイデアは必死になって防ごうとする。自分の気持ちとは正反対に、防壁はみしみしと軋んだ。穴の数はどんどん増えていく。自分たちがいる場所に穴が開かないことが、数少ない幸이었다。嫌な汗がこめかみを伝って流れ落ちる。

不意に、誰かの手が操縦桿を握り締めていた右手の上に重なった。見れば、クーゴがアイデアの手に手を重ねて、降り注ぐ禍々しい光を見据えていた。本人はまったくもって自覚がないけど、覚醒した力を使って、アイデアを助けてくれているのだ。

『くそっ。俺には、見てることしかできないってのか……!?!』

クーゴが苦い表情を浮かべているのが『視えた』。そんなことはない、と、アイデアは微笑む。

彼が力を貸してくれるおかげで、防壁は修復されていく。穴もふさがれ、軋んだ音もしなくなった。

肩に手を置かれたことに気づいて振り返れば、ノブレスとリボンズの姿が『視えた』。彼らも力を貸してくれたらしい。

アイデアは前を向いて、降り注ぐ砲撃を睨みつける。負けて、たまるか！

「おおおおおおおおおおおおおっ!!」

防壁が眩いばかりに輝く。美しい宝石のようなそれは、ビームの一撃を完全に防ぎ切った。大きく息を吐きだして、アイデアはそのまま座席にもたれかかる。

アイデアたちが防御で手一杯だった隙をついて、偽物が撤退している。彼らは薄墨色の雲の中へと消えていった。逃げられた、と、誰か

が悔しそうに呟く。

周囲に静寂が広がった。ガンダムたちも、スターゲイザーやエクシアが抱えたフラッグも、あの攻撃に被弾しなくて済んだらしい。偽物たちには逃げられたが、皆無事だったことに安堵する。

今度こそ、エクシアとスターゲイザーはユニオン基地へ向かう。他の面々にその旨を伝えて、天使と天女は空を翔けた。他の面々はそれぞれ帰投していく。プロレマイオスとトリニティの面々は、なんとか互いの認識を改めた様子だった。

顔を出さず、通信回線を開く。

「クーゴさん、大丈夫でしたか？」

「あ、ああ。……また、キミに助けられたな」

クーゴが苦笑した気配が漂う。いや、実際に苦笑している姿が『視えた』。アイデアはゆるゆる首を振る。

「そんなことないです。私も、貴方に助けられました」

自覚が一切ないクーゴは首を傾げる。

アイデアは微笑んだ。そうして、言葉を続けた。

「いいんですよ。私は知っているから、それでいいんですよ」



「ぐう……ッ！」

ヘルメットの保護用バイザーを外して早々、グラハムは苦悶に顔を歪めて口元を覆った。ごほ、と、何度か咳込む。見れば、手袋にはべつたりと赤が付着していた。

体が悲鳴を上げている。情けないことだが、最大旋回の戦闘で生じたGに耐えられなかったらしい。口から伝い落ちる血を乱暴に拭う。半ば強引に、鉛の味を飲み下した。

ふと見上げれば、不安そうな表情を浮かべた刹那の姿が『視えた』。まるで、グラハムの思考回路が彼女に『伝わった』かのようだ。

そういえば、以前にも——初めて彼女が翔るガンダムと戦ったときも、似たようなことがあったように思う。何者だと問われた気がして、グラハムが己の名を名乗った。

場違いなことを思い出したせいか、グラハムは懐かしくなった。そのまま、刹那の不安を拭おうとして目を細める。浅い呼吸を繰り返しながら、ゆっくりと口を開いた。

「……すまない。私では、一矢報いるので手一杯だった」

できれば、あの偽物たちはこの手で討ち取りたかった。刹那とガンダムとはまた違う意味で、だ。

奴らは尊敬する相手の命を奪った。フラッグファイターの仲間を傷つけ、矜持に泥を塗った。それだけではない。最愛の好敵手たる刹那とガンダムの誇りまでも汚し、踏みにじった。

偽物を翔るパイロットは子どもばかりだった。それこそ、機体を玩具のように扱い、人の命を玩具のように弄ぶ。無邪気さゆえの残虐さが強調されたような、殺戮兵器と呼んでも過言ではない。

あの戦い方には、刹那のような誇りもなければ矜持もない。だからこそ、グラハムは偽物たちを赦すことができなかった。刹那とガンダムに惚れ込み、彼女たちを墜とすのは己だと自負しているが故に。

「好敵手失格だな。……キミの誇りを汚した相手に討たれそうになっただけでなく、その危機を、他でもないキミに助けられるとは」

グラハムは苦笑しつつ、続ける。

「だが、今回の一件で、私はますますキミに惚れ直したよ。それでこそ我が好敵手だ。……尤も、私の方が、キミの好敵手を名乗るに値しないのかもしれないが」

不意に、刹那の手が頬に『触れた』ような気がした。労わるような手つきに、グラハムはゆるりと目を細める。

先程の無茶な戦闘による反動がフィードバックされたように、体が軋む。それでも、グラハムは刹那へと手を伸ばした。

グラハムの手が刹那の頬に『触れる』。慈しむようにして彼女の頬を撫でれば、刹那は困ったように口元を歪ませた。

『あんた、馬鹿だろ』

「そうだな。ことに、キミとガンダムのことに関しては」

グラハムがくつくつ笑えば、刹那は深々とため息をつく。『視』間違いでなければ、彼女の口元がわずかに緩んだような気がした。

未だに彼女が笑う姿を見たことがない。今みたいに柔らかな顔を見せるようになったものの、笑顔はまだまだ遠そうだ。

『……でも、あんたの気持ちは、嫌じゃなかった。——ありがとう、グラハム』

今、間違っていないければ、刹那が微笑んだような気がした。おまけに、滅多に呼ばない名前を呼ばれたような気がする。

不意に差し込んだ光に、思わずグラハムは目を覆う。再び目を開けたとき、『視えていた』はずの刹那の姿はなくなっていた。

その代わりに、広がったのは夜明けの光だ。薄闇は晴れ、地平線の向うから、眩く輝く朝日が顔を出す。紺色の空は、鮮やかな蒼へと色

を変えつつあった。一步遅れて、ユニオン基地が見えてくる。

グラハムは通信を開き、帰投とガンダムは敵ではないという旨を告げた。クーゴも同じことを通信から伝えたいらしい。基地から攻撃部隊が発信する様子はなかった。そのことに、グラハムは内心安堵する。

ユニオン基地の面々がガンダム／ソレスタルビーイング憎しの感情を漂わせていたことは知っている。ガンダム／ソレスタルビーイングと言う存在に対し、世界がナーバスになっているのも知っていた。

ややあつて、翼が折れたフラッグたちは大地に降り立った。自分たちを送り届けたことを確認し、天使たちは空へ戻る。

間髪入れず整備班が駆けつける。コックピットから降り立ったグラハムは振り返り、天使たちの姿を見送った。

その隣に並ぶようにして、クーゴが立った。彼もまた、ガンダムたちを見送るためにやってきたのだろう。

「なんとか五体満足で帰ってこれたな。あの2機のおかげで」

クーゴは眩しいものを見るような眼差しを空に向けた。

「そうだな。感謝しなくてはならないだろう」

グラハムも頷き、空を見上げる。

天使たちは、水平線の向う側へと消えていった。



「用事は終わったのですか？」

不意に声をかけられ、アオミはヘルメットを外した。コンソールに表示されたキーボードを叩いて、帰投用のプログラムを起動させる。

「ええ。まったく、あの子たちだったら……」

アオミは肩をすくめる。子どもたち——海月、厚陽、星輝は、自分の忠告を守ろうとしなかった。宙継に至っては、戦おうとすらしないから論外である。皮肉にも、論外の宙継がアオミの言いつけを守ったということになった。

端末に戦闘データをとり、確認する。端末画面には、トランザムを上回ってガンダムたちを追いつめたフラッグの様子が映し出されていた。そのフラッグの異変は、青い燐光を身に纏っているという点に尽きた。

こんなのは、アオミの『知識』にはない。疑問に思つて端末を操作すれば、その答えは別なところから示される。表示されたのは、『M u』という項目。それを確認し、アオミは忌々しそうに眉をひそめた。この世界がアオミの『知識』と違う方向に動く理由であり、危惧すべき『存在』である。

ただでさえ忌むべきだった『イレギュラー』は『M u』に『目覚めた』のだ。本人は自覚していないだろうが。

本格的に、『イレギュラー』の抹殺に動かねばならないだろう。アオミにとって都合の悪い『変化』は、きつちり『修正』しておかねばなるまい。今までの状況を分析し、整理する。

「ルイス・ハレヴィにはアロウズに行つてもらわなきゃいけないから、もうちよつとテコ入れは必要よね。絹江・クロスロードは『知識』通りに死んでもらつて、沙慈・クロスロードの憎しみの起爆剤になってもらわなくちゃ。それから、それから——」

「私“たち”も、そろそろ準備をしなきゃいけませんわね」

アオミは歌を歌うようにして諳んじる。それを聞いた少女は割り込むように言った。

それを聞いたアオミは、諳んじるのをやめて振り返った。その横顔には、深い微笑が浮かんでいる。

「ヴェーダに記録されていた虚憶きよわくデータを解析し、独自に改良を加えた『アレ』ね。もうすぐ完成する予定よ」

「本当!? 図面で拝見したときから、ずっと楽しみだったの!」

少女はパアツと表情を輝かせた。アオミも促すように手招きした。少女とその執事も、アオミに続いて地下に下りた。

地下ドックには、開発中の機体が眠っている。女性を思わせるようなフォルムの機体が、静かに起動する瞬間とぎを待っていた。

その隣に並ぶのは、すらりとした体躯の赤い機体。黒い機体の隣に控えるかのような佇まいは、搭乗するであろうパイロットの姿を連想させる。

そこへ、帰投の連絡を告げるブザーが鳴り響いた。海月たちである。もう少ししたら、援軍として送り込んだMモビルアーマーAも帰投するだろう。

満身創痕のレガンダム・プロヴィデンス、スローネ・デイミアス、スローネ・ドロフォヌスが、転がるようにして格納庫へ帰ってきた。その脇に、静かに降り立ったのはスローネ・イリスイオスである。

子どもたちがコックピットのハッチから這い出てきたのと同じタイミングで、援護に向かわせたMAが帰ってきた。羽を広げた鳥を連想させるようなMAは、ゆっくりと格納庫へ降り立った。高貴な紫色が光を反射し輝く。

「『母さん』、ごめんなさい」

「でも、おれたち負けてないよ! 負けてないよ!!」

「なんだよあのフラッグ! あいつ、絶対落としてやる……!」

厚陽、星輝、海月がそれぞれ意思を表す。それを聞いたアオミは微笑みながらも、3人を叱責した。

「あれ程『隊長機を狙うな』って言ったでしょう？ 今度から気を付けなさい」

「はい」

3人は申し訳なさそうに頭を下げた。彼らはこれで充分である。残る問題は、宙継だ。アオミは眦を吊り上げる。

「宙継。貴方はどうして戦おうとしないの」

「……………ごめんなさい」

宙継は視線を落とした。悲しそうな眼差しは、アオミの大嫌いな弟を連想させる。

ああ、なんて腹立たしいのだろうか。アオミは忌々しくなって、宙継の元へと歩み寄った。

己の感情をぶつけるように、アオミは宙継の頬に平手打ちを喰らわせる。宙継は、抵抗すらしなかった。

その様すら弟に似ていて、余計に苛立ちが募った。

「ちゃんとしなさい。……………これ以上、私を失望させないで」

これではきりがないので、アオミは激励の言葉を投げつけながら、宙継を突き飛ばすようにして送り出した。

よろめきながらも、宙継は兄たちの背中を追っていく。こんな性格のため、彼は跡取り候補の中で一番序列が低かった。

しかし、世の中何が起こるか分からない。跡目争いが起こったとしても、複数の子どもたちがいれば、万が一の事態に備えられる。嘗て母もそうやって、アオミに跡取りとしての教育を叩きこんできた。

アオミはそれをきちんとこなした。だけれど、評価されるのはいつも弟の方だけだ。衝撃を与えれば折れてしまいそうなほどひ弱な上、跡取りとしての教育に耐えられるような体ではないからと甘やかされてきた。

弟は優秀だった。何事もそつなくこなすことができたし、何をやらせてもうまくいく。努力をすれば倍近くの成果が得られるような存在だった。奴のせいで、アオミは陰に追いやられた。何をやっても蔑まれ、認められなかったのだ。

奴さえいなくなれば、アオミは認めてもらえる。正当な評価をしてもらえる。

——そう。弟／『イレギュラー』さえ、いなくなれば。

「でも、これで、偽物たちを表に出せなくなってしまうましたわね。……まあ、貴女のことだから、他に手は打っているのでしょうか？」

少女は機体を眺めながら呟いた。彼女の言葉通り、子どもたちの機体はイリスイオスを除いて満身創痍である。

機体の武装は、『イレギュラー』の翔るフラッグによってほぼ叩きめられていた。あの機体全てを修理することにこだわれば、第1幕は終わってしまうだろう。

アオミは頷いた。そうして、端末でデータを示して見せる。『無垢なる子』たちが搭乗する、〃本当の機体〃の図面だ。少女は感嘆の声を上げる。

「この子たちを、後に設立される国連軍に入れるよう手配する予定よ」
「アレハンドロ・コーナーですね」

滅多に言葉を発しない執事が、呟くような声色で言った。アオミは頷く。

「そして、もう1人。彼専用のガンダムとして、ドロフォオヌスを改修し

て提供する」

アオミは端末を動かした。映し出されたデータは人物のものである。

茶髪の髪を無造作に伸ばした男の写真。伸ばされた顎髭も特徴的であった。

「他にも、きちんと根回しはしておくわ。世界は未だに、トリニティやソレスタルビーイングを悪だと信じ切っている。真実が出回ることはないもの」

『運命』は、私たちの味方ですものね」

アオミと少女は微笑みながら、顔を見合わせた。秘密を語る2人の面持ちは、まるで乙女のようにであった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

4.2. 転がるように日々は過ぎて

「なあ、グラハム。俺たちが鹵獲しようとしてた機体って、どんな姿をしてたか覚えてるか？」

「ああ、覚えているとも！ あの機体とは運命的な出会いをしたからな！」

クーゴの指摘に、グラハムは曇りなき笑みを浮かべて返答した。不敵な横顔は闘争心に燃えている。

「その機体の機体数と、特徴は？」

「近接戦闘を得意とした機体、射撃を特異とした機体、機動力に特化した機体、超攻撃と防御に特化した機体、攻防が一体化した機体の5体だ。……クーゴ、キミはボケたのか？」

「お前、失礼なことを言うんじゃないよ」

MSに乗っていないなかったら、グラハムの脳天に手刀の一発でも叩き込んでいるところだ。しかし、そんなツツコミをできる状態ではないので、言葉だけでとどめておく。

ガーベラストレートでツツコめないわけではないが、ツツコミを入れると同時にフラッグが真っ二つになってしまいうだろう。峰打ちでも中破は確実である。

ため息をつき、クーゴは機体を見直してみる。機体の分類名は同じで、現在この場にいる機体数も5体ぴったりだ。でも、違う。明らかに何かがおかしい。

天使を思わせるような翼が生えた青い機体、死神を思わせるような風貌の黒い機体、両手にカトラスのようなブレードを装備した灰色の機体、龍のように威風堂々とした緑の機体、超火力に特化した重装備の赤い機体。

(その違和感に目を凝らせ。その違和感を見逃すな)

クーゴはぶつぶつ唱えながら、必死になって思い出そうとする。自分たちが追いかけていた機体は、どんな姿をしていた？

翼は生えてない。

死神ではない。

カトラスのようなブレードもついてない。

龍の名前なんてついてない。

重装備の機体の色は赤ではない。

確かに、自分たちが最初に目撃した機体は天使のようだった。でも、翼はなかった。あの機体は、ツインバスターライフルなんて装備していなかった。得意なのは殲滅戦ではなく、接近戦だったはずだ。いいや。そもそも、自分たちがいる場所はどこだ。リーダーやマップを頼りに場所を特定してみたが、『地上・スペースコロニー』としか表示されない。というより、自分たちは宇宙へ進出した覚えなどない。コロニーにフラッグを運び込んだ？ そんなバカなこと、あつてたまるか。

クーゴやグラハムが悩むうちに、コロニーにいた応戦部隊が5機のMSに圧倒され、倒されていく。オーバーフラッグス部隊の面々は、指揮官と副隊長のやり取りを聞いて何か思うところがあったのだろう。それぞれ考えを巡らせる。ここはおかしい。いや、『この世界』がおかしいのだ。

「そうか。そういうことか！」

何かに納得したように、グラハムが顔を上げた。不敵な笑みを浮かべていたはずの横顔には、溶岩のような激情が煮えたぎっている。

「何故だ。何故、今まで忘れていた!? 何故今まで気づけなかった!?

何故、何故、私は……っ!」

「た、隊長?」

「どうしたんですか!?

「お、おいおい!? 一体なんだっていうんだ!?」
「落ち着いてくださいっす、隊長!」

自分で自分自身を殺しかねない勢いで叫んだグラハムの様子に、慌てた様子でハワードたちが問いかける。オーバーフラッグス隊の面々は、大混乱に陥っている様子だった。クーゴも、叫び散らすグラハムの気持ち（わかりたくないのに）わかってしまう。

あの5機は、自分たちが追いかけていた機体ではない。機体の種類としての『ガンダム』ではあるが、全くの別物だ。その証拠に、ガンダムは緑の粒子をまき散らしていない。通信もレーダーも良好だ。機体を構成する材料だって違う。あの5機はガンダニウム合金と呼ばれる特殊金属を使用していた。

何故自分たちは、これらの機体を「自分たちが鹵獲しようとしていた機体」だと認識し、追いかけて続けたのだろうか。冷静に考えてみると恐ろしい状態である。何度見直してみても別物なのに、上層部からの指示で追いかけていた機体はこいつらなのだ。不気味すぎる。

「……最悪の極みだな」

通信機越しで、奴は力なく笑った。

「『愛しの君』を見間違えた挙句、全くの別人べつものに対して現を抜かしていたとは。これでは示しがつかんよ」

「ボケてたのはお前の方だったな」
「悪かったからもう言わないでくれ」

ボケたと言われて嬉しい奴はいない。仕返ししてもバチは当たらないだろう。

クーゴはグラハムの傷に塩を塗りこめつつ、もう一度この場を確認してみる。

5機の機体は、コロニー内で戦闘を繰り返している。OZの部隊が

彼らの迎撃に当たっているようだが、あっという間になぎ倒されていった。エースパイロットであるゼクス・マーキスも押され気味であった。

そこまで考えて気づく。OZとは何だ。ゼクス・マーキスとは誰だ。何故自分は、それを「知っている」ような思考回路でいたのだろうか。これこそが、違和感の正体。クーゴは弾かれたように仲間たちを見た。

彼らも違和感の正体を掴んだようで、険しい顔をして画面と戦場を見返していた。戦況は相変わらず、5機の機体が有利である。自分たちの部隊がどちらにつくかで、このパワーバランスはひっくり返るだろう。

ただ。

どちらに協力しても、面倒なことにはかならない。

それだけは確実だった。

「でも、どうします？ 上層部の言う機体は、どこからどう考えても

『こいつら』ですぜ？」

「交戦しますか？」

ハワードとダリルが、グラハムに問いかけたときだった。

「!? な、何だあ!! 巨大な機体が接近してきたぞー！」

藪から棒に、ジョシユアが悲鳴に近い声を上げる。

慌てて彼の視線の先を向けば、某光の巨人に出てくる敵役怪獣——大きな一つ目の怪獣。名前は思い出せない——を思わせるようなMSがこちらに突っ込んでくる。大きさは、自分たちの数倍はあるだろう。

アプサラス、と、クーゴの口からその単語が零れた。何を意味するのかは分からない。しかし、あの巨大なMSを見たとき、クーゴの頭の中に浮かんだのはその言葉だった。もしかして、これがあの機体名

の名前なのだろうか？

5機の機体のパイロットたちも、OZのMSのパイロットたちも、ゼクス・マークスも、弾かれたように空を見た。ジオン軍の兵器だ、と誰かが叫んだ気がする。

目玉の中心を思わせるような部分がギョロリと動いた。エネルギーギアがその一点に充填されていく。あれは砲口のようなようだ。

あんなものを、真正面から喰らったら。末路を思い至る前に、体は反射的に動き出していった。

「っ、避けるー！」

叫ぶなり、クーゴは操縦桿を目いっぱい動かした。弾かれたように、仲間たちが慌てて動き出す。

しかし、放たれた砲撃は容赦なく仲間たちに襲い掛かった！

「う、うわあああああーっ！」

ハウードの。ダリルの。アキラの。ジョシユアの。

同じ部隊に所属する仲間たちの通信が、悲鳴を残して断線する。

次の瞬間、視界が真っ白に染まる。

強い衝撃が機体を襲い、あちこちから爆発音がこだました。

DENGERの文字が赤く点滅する。体中が軋んだような痛みに見舞われていた。

「……ワー……、……リル、……シユ……、ア……、……クーゴツ!!」
「っ……。グラ、ハム……?」

雑音交じりの通信が届く。グラハムのものだ。仲間たちの名前を一心不乱に叫ぶ彼に、どうにか返事を返した。

ノイズまみれのモニターが映し出したグラハムの姿は、文字通りボロボロ雑巾のようだった。ヘルメットはひび割れ、頭からは血を流してい

る。吐血したような形跡もあった。

クーゴもグラハムといい勝負である。勝つても負けても嬉しくなければ、そんなことで競う趣味もない。むしろ、地獄絵図の中でそんなことに興じる気分にもなれなかった。

あちこちから黒い煙が立ち上っていた。木々はへし折れ、地面や機体等々、ありとあらゆるものが破壊し尽くされている。クーゴのフラッグも、グラハムのフラッグも、翼をへし折られた鳥のような状態であった。手足はちぎれ、推進力源からは黒煙が漂う。

ノイズがまた聞こえる。グラハムとの通信とは違うものだ。偶然、他機の通信を拾ってしまったらしい。雑音の向こう側から聞こえたのは、男の笑い声である。辛うじて聞き取れたのは、『サハリン家の悲願』という発言であった。

ひとしきり高笑いをしていた男の通信が拾えなくなった。それとほぼ同じタイミングで、MSは再びエネルギーを充填していく。MSは気まぐれからか、別な方向を向いて砲撃を放った。白い光が何もかもを焼き尽くしていく。思わずクーゴは目を閉じた。

激しい音と衝撃が伝わってきた。耳をつんざくような轟音、誰かの悲鳴、何かが壊れていく音、爆発音、頭をかち割らんばかりに響くノイズ。

光が晴れたのを、瞼の裏越しから感じ取る。目を開き、クーゴは息をのんだ。通信越しから、グラハムの掠れた息が響く。

OとIで創り上げられた空間に、自分たちは放り投げられていた。先程まではコロニーの地上面にいたはずなのに、どうして。

周囲を見回す。いつの間にか、自分たちは取り囲まれていた。OZの連中や5機の機体とは違う、緑の量産機。

『さあ行けアプサラス、すべてを破壊しつくせ！』

男の声がした。ぎよつとして顔を上げれば、大きな一つ目を思わせるようなMSが自分たちの頭上に降臨した。ご丁寧に、砲撃の照準は自分たちにぴたり合わさっている。エネルギーは既に充填されて

いた。

体の痛みには耐えながらも操縦桿を握り締めたが、フラッグはうんともすんとも言わなかった。グラハムも、クーゴと同じような状況らしい。わけのわからぬまま、わけのわからぬ場所で死ねと言うのだろうか。

(何もわからぬまま、成す術もなく死ぬのはゴメンだ！)

クーゴは心の中で叫ぶ。それもまた、無駄なあがきになりそうだった。

白い光が自分たちに降り注ぐ——ことはなく。

何の前触れもなく巨体が弾き飛ばされ、その衝撃で、白い光は明後日の方向へと飛んでいった。

「——!？」

息を飲む。青緑色の光を纏った白が、深緑色の巨人に強烈な体当たりを見舞ったのだ。あれこそが白い機体の攻撃であり、白い機体の防御でもある。

まるで天女を思わせるような機体だ。そこまで見て、クーゴの口元が緩む。あの白い機体は、クーゴたちが鹵獲しようとした機体と同じものだ。デザインは若干変化してしまったものの、輪を背負ったような白い機体には見覚えがあった。

次の瞬間、美しい紫の光を纏った巨大な刃が、巨大MSを一刀両断した。耳をつんざくような男の悲鳴がガンガン響いてくる。通信は開いていないはずなのに、やけにはつきりと聞き取れた。爆発音と共に断末魔は途切れ、沈黙が残った。

0と1で組み上げられた空間は、緑青に輝く幻想的な光に包まれている。青と白を基調にした機体が、光の中心に降臨した。

背中から推進源が煌めきを放つ。2つの0が並んだような形の軌跡に、クーゴはかすれた戸息を漏らした。隣にいるグラハムもまた、

じつとその機体を見上げている。

例えるなら、それは『天使の降臨』。

天使と天女が大地に降り立つ。翼の折れた戦士を労わり、迎え入れようとするかのように。

けたたましいノイズを響かせながら、通信のモニターが起動する。

「そのユニオンフラッグ、無事か!？」

「大丈夫ですか!？」

2人の女性が、自分たちの生存を確認する通信を入れてきた。

画面に顔が映しだされる。天女のパイロットは、オフ会で顔を合わせる女性——アイデアとよく似ていた。

天使のパイロットは、オフ会で顔を合わせる少女——刹那と似た女性。「刹那が20代に突入したらこうなるのではないか」という予想図のようにも見えた。

「刹那……?」

グラハムは弱々しい声で、女性の名前を呼んだ。彼女は満身創痍のグラハムを見て酷くこわばった表情を浮かべる。女性の心が『流れ込む』。ノイズまみれの画像データみたいなヴィジョンのため、詳細は『視えない』。けれど、それでも、断片なら『視えた』。

クーゴはそれに集中する。

——そうして、世界は暗転した。



宇宙を覆い尽くす勢いで飛来する、銀色の『何か』。人類の未来を賭けた、異種族との対話^{ラスト・ミッション}。可能性を秘めた『人類の希望』——それ

こそが、女性の翔る機体だった。

ク■ンタ■バースト。〃それを使うことのできる彼女の機体を、金属生命体の中心部へと送り出す〃ことが、他の面々に与えられた任務であった。人類が未来を掴む、可能性を握っていた。

対話の道は閉ざされている。あと少しで手が届くのに、巨大な壁に阻まれた。

道はない。道がない。希望が絶たれる。女性たちは、あまりにも分厚い壁に直面していた。

その絶望を引き裂くように、鮮烈な群青あおが駆けつける。嘗て死闘を繰り広げた、愛しい好敵手。

『未来への水先案内人は、この私が引き受けた！』

その言葉と共に、好敵手は飛び出していく。その先には、巨大な壁。

『道理を無茶で押し通す』を地で行く好敵手だが、どう見ても無茶で押し通せる壁ではない。

『何を躊躇している!? 生きる為に戦えと言ったのは、キミの筈だ!』

それは、遠い日に、女性が好敵手に贈った言葉だった。

『行け! 生きて未来を切り開け!!』

巨大な障害に阻まれる。それでも好敵手は飛んでいく。鮮烈なまでもの群青あおを爆ぜさせながら。

機体の動力部から溢れる赤い粒子も、より一層輝きを増した。まるで、好敵手の想いに共鳴するかのように。

障害を突き破ろうとすればする程、好敵手は己の命を削っていく。彼の纏う気迫が、何人たりとも彼を止めることを赦さない。

『これは、死ではない! 人類が、生き残るための——!!』

吐血しても、体を蝕まれようとも、命が削られていこうとも、男は止まらなかつた。止まるような性格ではないと、女性は長い付き合いで理解していた。

怖いくらい真つ直ぐで、何事に対しても真摯であろうとした人。愚直すぎるがゆえに、変な方向に走り出すこともしばしばある、難儀な性格をした人。

——女性を愛してやまなかつた人。

『刹那』

不意に、好敵手が女性——刹那の名前を呼んだ。

刹那は、目の前に男がいることに酷く驚いていた。周囲の光景が、激戦区から平原に変わっていたのだから当然と言えよう。どこまでも青い空と、広い平原が広がる。

そこが好敵手の心の世界だと女性が気づく。男は幸せそうに微笑んで、刹那を手招きした。恥ずかしさに文句を言いつつ、彼女は男の腕に収まる。男は満足そうに頷いた。

刹那はふと、視界の端で起きた異変に気づく。

男の利き手が、ぼろぼろと崩れ落ちていくではないか。

利き手だけではない。左半身が、そうしてこの世界そのものが、何かに侵食されるように消えていく!!

男は残念そうに苦笑した。

『私は、この結末に後悔していない。むしろ、誇りに思う。やっと私は、キミの好敵手に相応しい存在になれただろうから』

『……しかし、残念だな。ようやくキミと並べる存在に至れたと思つたのに、キミと、キミのガンダムと決着をつけることが叶わないとは』

「この男は、いったい何を言っているのだ」——刹那は心の中で戦慄した。理解したら最後、彼はここから永遠に『いなくなる』。

だから、彼女のすべてがそれを拒むのだ。刹那の表情を見た男は、ますます困ったような顔をする。

『悲しむ必要はないよ。私は未来の水先案内人。キミの行く末を、ずっと見守っているから』

『思うんだ。あの日、キミと3度も出逢った意味を。あの日、キミという存在によって生かされた意味を』

『——ああ、そうだな。私はこのために生きてきた。このために生まれてきたんだ』

そんなこと、望んでいない。そんなことのために、生きろと言ったわけじゃない。

刹那は大声で叫びたかった。でも、多分、男はそれすら『知っていて』、刹那への言葉を贈っている。

おそらくは、最期の会話になるであろう言葉を、命が燃え尽きていく中で、必死になって探している。

『満足して生きた。まあ、心残りが無いわけではないが』

『もつと空を飛びたかった。仲間たちと一緒に笑っていたかった。副官が作ってくれるであろう、帰還パーティの鍋が食べたかった。カレー味でもいいから食べたかった。最期は青い空で迎えたかった。……酷いな、未練ばかりだ。女々しくて笑ってしまうよ』

男は呆れたように苦笑した後、真摯な眼差しで刹那を見返す。

『しかし、特に心残りなのは2つある。1つめは先程言った、『キミと、キミのガンダムとの決着がつけられない』こと』

『——もう1つは、『結局最期まで、キミを幸せにしてやれなかった』ことだ』

失ってしまった利き腕の代わりに、残った手で、男は刹那の頬を撫でる。慈しみを込めた手つきに、思わず刹那は首を振った。

男が悔いる理由なんてない。それ以前に、最期だなんて言われる筋合いもない。おまけに、刹那はまだ、男を幸せにしていないのだ。

壊すことしかできない自分が、誰かに与えたいと思ったものを。それをまだ、彼に手渡していない。手渡せていない。

逝くな、と、刹那は言った。自分でも驚くほど、情けない声だった。

まだ何も伝えていないんだ、と刹那は言った。今にも泣き出してしまいそうな声だった。

『それに、……俺はまだ、あんたを幸せにしていない……！』

刹那の言葉に、男は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をした。目を真ん丸にして、何度も瞬きを繰り返す。ややあつて、男は幸せそうにはにかんだ。

『やはり、私は永遠に、キミに敵わないんだな』

男の体が、闇に飲まれる。美しい青空と平原が、真っ黒に塗りつぶされる。

彼の気配が遠のいた。慌てて刹那は手を伸ばす。だが、何も掴めなかった。

『最期まで、ありがとう』

『キミに出会えて、本当に良かった』

『——愛している、刹那』

世界が暗転する。次の瞬間、分厚い壁が吹き飛んだ。対話への道が拓かれたのだ。

好敵手の死を悼む時間はない。彼が最期に切り拓いた道が閉ざされる前に、行かなくては。

操縦桿を動かし、突き進む。男が最期に残した言葉を胸に、ただまっすぐに突き進んだ。

そうして、対話の刻は訪れる。

宇宙に花が咲き誇り、人類の未来は定まった。

けれどもそこに、彼はいない。——彼が、いない。

『……あんな、馬鹿だろ』

—— そうだな。ことに、キミとガンダムのことに関しては ——

その言葉に帰ってくるはずの返事は、2度となかった。



ケトルがかん高く鳴り響く。

まるで、虚憶きよおくで見た女性が抱く悲しみを振り払うかのように。

「つと」

現実に戻ってきたクーゴは、反射的に手を動かしていた。火を消すと、ケトルは一気に沈黙する。戸棚からインスタントコーヒーを取り出し、あらかじめ下準備していたマグカップに注いだ。

普段はコーヒーマシーナーおよびバリスタでコーヒーマシーナーを淹れるのだが、今日は皆、運悪く故障中であった。そのため、今回はペーパーフィルターでコーヒーマシーナーを淹れている。クーゴはまず初めに、コーヒーマシーナーを蒸らしにかかった。

ペーパーフィルターの中にあるコーヒーマシーナーに、乗せるようにして少量

のお湯を注ぐ。蒸らし時間は20秒。しっかりと図り終えた後、クーゴは次の段階へと移った。

中心から螺旋を描くようにしてお湯を優しく注ぎ、ペーパーフィルターからお湯が減るのを待つ。暫くして、フィルター内のお湯は3分の1に減った。

それを確認した後、次のお湯を注いだ。最後の仕上げである。マグカップの中に注がれたコーヒーの量を確認し、調整するようにしてお湯を注いでいった。

湯気が漂うコーヒーが3つ。マグカップの中には、夜闇のような黒い水面が揺れていた。

クーゴは自分のマグカップに注がれたコーヒーを啜ってみる。

「うん、これなら大丈夫だな」

出来栄えに満足しつつ、お膳にコーヒーとお菓子類を乗つける。クーゴの手作りドーナツと、贈られてきたルバーブとカルヴァドスで作ったジャムである。

完成したジャムは、カルヴァドスの送り主——パトリック・コーラサワーにも贈ったが、反応はまだ帰ってこない。先日送ったばかりだから当然か。

(……それにしても、さっきの虚憶きよおくは……)

ふと、クーゴは手を止めて考えた。

女性の記憶を追体験した虚憶きよおく。刹那の面影と同じ名を宿した女性は、異種族来襲による戦いで、最愛の好敵手を亡くしていた。

ノイズにまみれた映像を思い返そうとする。男の笑い方は、誰かの笑い方とそっくりだった。クーゴにとって見慣れた笑い方だ。

あと少しで判りそうなのに、確信は霧に包まれたかのようにはつきりしない。それがもどかしくて、クーゴは首をひねる。

そのまま部屋に入ったのがまずかつたらしい。ビリーとグラハム

がこちらに気づいて顔を上げ、クーゴの顔を見た途端に心配そうな表情を浮かべた。

2人の様子にクーゴも驚いたが、なんとなく察して、「なんでもない」と笑い返した。お膳に乗せたマグカップを手渡していく。2人はそれを受け取った。

「うん、おいしい。コーヒーサーバーで飲むやつよりおいしい」

「大切なことだから2回言ったのだな、カタギリ。まったくもってその通りだ」

コーヒーを啜ったグラハムとビリーは、満足げに微笑んだ。2人はドーナツやジャムに手を伸ばし、おいしそうに食べ進めていく。

彼らの食べっぷりを見ると、本当に料理のし甲斐があると思うのだ。そうして、気づけば料理がどんどん手の込んだものになっていく。

クーゴは微笑みながら椅子に座り、自作のドーナツへ手を伸ばす。グラハムとビリーはもぐもぐとドーナツを貪っていた。

「最近、どの店のドーナツを食べても『いまいち』とか『一味足りない』って思っちゃうんだよなあ。餌付けされてるのかも」

ルバーブのジャムをこれでもかとドーナツに塗りたくりながら、ビリーは困ったように苦笑した。指についたジャムまで舐め取るあたり、相当お気に召したらしい。

いつもと変わらない穏やかな時間が流れる。しかし、今日は別件でここに来たのだ。

先日、クーゴとグラハムはガンダムの偽物と一閃を交え、本物たちのおかげで五体不満足の帰還を果たした。

そのときの戦闘データの解析を、ビリーに依頼していたのである。その結果が出たというので、ラボに顔を出したという次第だ。

ひとしきり談笑した後、次の話題に移る。

クーゴはグラハムを見て、大きくため息をつきながら切り出した。

「しかしグラハム、あのとき相当無茶しただろ。吐血するって、よっぱどだぞ」

「気づいていたのか」

グラハムは大きく目を見開いた。困ったように苦笑し、彼は肩をすくめる。

ガンダムに助けられた後、クーゴはグラハムの利き手のグローブが赤く汚れていたのを見ていたのだ。

「情けない話だが、あの程度のGで体が値を上げてしまったのだよ」

「情けないって……お前こそ、自分のことを過小評価してるんじゃないのか」

「乙女座は己に厳しいんだぞ、クーゴ」

はっはっは、とグラハムは笑った。星座云々より、彼個人のポリシーの問題のような気がしてならない。それを聞いたビリーが、物凄く恐ろしいものを見るような眼差しを向けてきた。

「……正直、データのことについて報告しようかしまいか悩んだんだけどさ、見てくれよ」

ビリーはそう言って、端末を指示した。たくさんの数字やグラフ、映像資料が指示される。ごっちゃになったデータは、ぱっと見ると、どれが何を意味しているのかさっぱりわからない。

専門家による、簡単な解説を所望する——クーゴとグラハムが眼差して訴えれば、ビリーは眼鏡のブリッジに手を当て深々とため息をついた。資料が詳細になり、画面一杯に数字が踊り狂う。

違う、そうじゃない。詳細が知りたいのではなく、簡略化された説明をしてほしいのだ。もつと言えば、結論が知りたいのだ。クーゴと

グラハムの気持ちを通じたのか、ようやくビリーが詳細データを示すのをやめた。

「結論から言うとなね、データ上、『偽物との戦闘で、キミたちは何回も即死している』ってことになる」

ビリーの言葉が理解できなくて、クーゴは目を瞬かせた。グラハムも同じらしく、頭の上に大量の疑問符を飛ばしている。

もう一度、ビリーの言葉を確認してみる。『偽物との戦闘で、キミたちは何回も即死している』——言い方は悪いが、基本、人間が死ぬる数は1回だと決まっていた。なのに、何度も即死しているとはどんな状態だろう。

少なくとも、今、ここで、親友の言った言葉に疑問を抱いていることは不可能だ。死んでいたら思考なんてできないし、ドーナツやジャムも作れないし、談笑だつてできないはずなのに。クーゴとグラハムは顔を見合わせ、親友へ視線を戻した。

ビリー・カタギリ曰く、『あの戦闘中、フラッグのパイロットにかかっていたGは、瞬間最高数値で50Gを突破していた』という。しかも、断続的に、一瞬で、何度も50Gを超えたいらしい。こんなの、耐G装置があつても無意味なレベルである。『人類が最大何Gまで耐えられるか』を、20世紀末に実験した軍人の記録でさえ46・2Gが限界なのだ。それを上回っている。

因みに、人類が耐え抜いたGの最高記録は179・8Gと公表されている。こちらも20世紀末の出来事だ。とあるF1レーサーがグランプリの予選で凄まじい大クラッシュを引き起こし——後にそれは「F1史上激しいクラッシュ」と言われることになるのだが——そのレーサーは奇跡の生還を果たした。彼は『最も大きな重力に耐えた人間』としてギネス記録に乗った。

蛇足だが、100Gといえば、これまた20世紀末頃に起きた日本航空便の墜落事故で、『乗客乗員にかかっていたと思しきG』の数値である。乗客乗員の大人数が即死したとされている程、激しいもので

あった。46・2Gでさえ、自分の体重が46倍にもなる計算なのだ。50Gに晒されたら、生きていられる可能性は低くなる。100Gに至ったら、それこそ奇跡でも起きなければ生還できない。

「正直、2人が五体満足で帰ってきたり、血反吐を吐く程度でピンピンしていられるのがおかしいレベルなんだ」

「血反吐で『その程度』なのか!？」

クーゴとグラハムは、異口同音で言葉を口走った。ビリーは大仰に頷く。

「ついでに、フラッグも空中分解するレベルだ。なのに、エンジントラブルだけで済むなんて……」

ビリーはうんうん唸りながら頭を抱えた。そんなことを言われてもクーゴには本当にどうしようもない。隣にいるグラハムだって同じ気持ちだ。

他にも、「偽物たちが使おうとした驚異的な高機動(?)による攻撃は謎だらけだった」だの、「ガンダムと偽物」だの、話題はあったような気がする。

それでも、クーゴは、どうしても、この話題が頭から離れなかった。50Gに耐え抜いて、平然としていられる自分は一体何者なのだろう、と。

思考回路に耽りながら、クーゴはコーヒーを啜る。口にほろ苦い味が広がった。

ルバーブのジャムがついたドーナッツを齧れば、一際甘酸っぱい味が心に沁みていく。

しかし、どちらの味も、クーゴの心にかかった暗雲を振り払うには至らなかった。

『ソレスタルビーイングのテロ行為への反発は日に日に強まっております』

……』

ラジオから流れるBGMは、いつの間にか不穏なニュースへと変わっていた。世界はどんどん、薄暗い方向へと動きつつある。ソレスタルビーイングは『世界の敵』という立ち位置を不動のものにしつつあった。

その奥底に蠢く悪意が『視えた』ような気がして、クーゴは思わず肘をさする。相変わらず、そちらの謎も見えてこない。漠然と感じる不気味さに、何とも言えない気持ちになるのは何故だろう。

「そういえば、叔父さんが言ってたな。近々、ユニオン、AEU、人革連が軍事同盟を締結するって。おそらく、対ソレスタルビーイング用だろうね」

ビリーは眼鏡のブリッジに手を当てた。世界は絶えず動いている、と、嫌が応にも思い知らされる知らせだった。「近々、3大国家の戦力を結集した軍を作り、ソレスタルビーイングと戦う」という話も出ているという。

以前、3大国家が行ったガンダム鹵獲作戦と似たような規模になりそう。だが、どの国だって先の轍は踏みたくない。ソレスタルビーイングと全面戦争するとなれば、鹵獲とは違った戦術を考えなければならぬ。

ガンダムに殲滅戦を挑む——できないわけではないが、従来の機体たちでは難しいだろう。何せ、推進力が段違いなのだ。機体性能をどれだけパイロットがカバーしようにも、いずれ限界が訪れる。先日自分たちのように、だ。

ガンダムに対して優位に立てる力は、どの国も持っていない。殲滅戦を物量重視で押し通すというにも、偽物たちが行った介入のせいで、各国には多大な被害が出ていた。

じり貧で物量戦など展開すれば、それだけで国は疲弊する。覇権を狙うなら、誰もが避けたい道だった。政治家たちが必死に駆け引きを

しているのが『視える』。

「――?」

ほんの一瞬、意識が『飛んだ』。

そこは格納庫らしき場所だった。茶髪の髪を束ねた男が、不敵に笑いながら『何か』を眺めている。反射されて輝くのは、絢爛豪華な金ぴかだ。

確か、男の名前はアレハンドロ・コーナー。国連大使の1人であり、国連代表のエルガン・ローディックとは上司と部下／犬猿の仲だった。

何故この男が目の中にいるのだろう。金色が眩しくて、クーゴは思わず目をすぼめる。次の瞬間、世界は再び休憩室へと戻った。

ビリーはドーナッツにジャムを塗りたくり、グラハムは空っぽになったマグカップに2杯目を注ぐ。コーヒーを啜った彼は、味の変化に眉をしかめたが、結局最後まで飲み干していた。

いつもの日常。クーゴ・ハガネが愛してやまない、穏やかな時間が流れている。混迷する世界の中で、唯一変わらないものだ。変わらないうでほしいと願う光景だ。クーゴはぬるくなったコーヒーを飲み干す。

口の中に、渋い味がざらついた。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

幕間。ルイス・ハレヴィ、あるいは絹江・クロスロ
ドの退場

ねえルイス。意識がなかった間、僕は『夢』を見ていたんだ。一番最初に見えた光景は、丁度、あのときみたい、ルイスやルイスのご両親と親戚が参加していた結婚式にガンダムが武力介入を行っていた場面だった。

丁度そのとき、僕はアルバイトが忙しかったから、キミを一人でスペインに送り出したんだ。夢の中の僕は、そのことをとつても後悔していたよ。キミが帰省先でガンダムの攻撃に巻き込まれたって話を聞いて、僕は病院に駆け付けた。

丁度キミがスペインに帰省したとき、夢の中の僕は沢山バイトを入れていた。キミが「お母さんが返って寂しいから、物理的に励ましてほしい」ってせがむから、こつそりとだけどお金をためて、指輪を買いおうとしたんだよ。12万円のペアリングなんて、苦学生に近い一般庶民の僕にとってはかなり厳しい額だったから。

頑張って働いたんだ。キミが結婚式に出ている間も、ずっと働きづめだった。やっとお金が溜まって、指輪を買ったときに、結婚式襲撃事件が起きた。

僕はキミにプロポーズをした。キミが欲しがっていた指輪を手渡ししながら。

……皮肉だね。こうなるまで、僕は自分の気持ちを固めることができなかつた。

でもね、遅かったんだ。僕はもつと早く、キミに気持ちを伝えるべきだった。夢の中のキミは、僕のプロポーズを受けてくれなかつた。悲しそうに目を伏せて、言ったんだ。

「素敵な指輪ありがとう。でも、もう嵌められないの」って。キミはそう言って、なくなってしまうた左腕を示したんだ。情けないことだね、僕は、愕然とそれを見てることしかできなかつた。

細胞異常のせいで手術ができないから、一生このままである確率が高いってキミは言った。こんな自分じゃ沙慈の迷惑になるから、自分のことは忘れてくれとも。更に情けないことに、僕はそれに同意してしまっただ。

キミが何を言ったとしても、僕はキミの手を離しちやいけなかった。そのせいで、僕は沢山後悔する羽目になったんだよ。今となっては、殆ど思い出せないけど。

だからね、ルイス。僕が意識を取り戻したとき、左手があるキミを見て、凄くほっとしたんだ。キミが無事でよかったって思ったんだ。

……でもさ、同時に、夢の中のキミが言っていたことの意味や重みがわかったんだ。キミがそんな風にした理由も……ぜんぶわかった。

あのね、ルイス。僕、キミに渡したいものがあつたんだ。この前、言つてただろ？「ママが帰つて寂しいから、物理的に励まして」って。

それで、僕、アルバイトしてたんだ。草薙先輩やグライフ教授のお手伝いって形だったんだけど、これが本当に凄くってさー。

宇宙技師としての勉強もできたし、実施訓練にもなったし、とても楽しかった。そのおかげもあつて、あつという間に目標金額を達成したんだ。

実物は購入済みで、あとはタイミングを待っていたんだけど……
—うん。

こんなことになるなら、やっぱり、渡さなくてよかった。今の僕じゃあ、ルイスの迷惑になつちやうからね。

これ、ペアリングなんだよ。……って言つても、ルイスはあの場でこれを見ていたわけだから、それは知つていると思うけど。

—僕、嵌められないんだ。 “左腕がない” から。

おまけに、細胞障害が起きてるみたいで、再生手術もできないんだって。

定期的に投薬治療しなきゃいけないし、治療を続けたとしても完治する見込みもないし。

こんなのだから、宇宙技師にもなれそうにないや。僕の夢、叶わなくなっちゃった。

……ねえ、ルイス。僕は、キミのことが大好きだよ。

こんなになつて、どこからどう考えても、身を引くべきだつてわかっていても、キミが好きだよ。

でも、それ以上に僕は、キミに幸せになってほしいって思ってる。

……わかるよね。わかって、くれるよね？



「——わかんない」

沙慈の言葉を遮って、ルイス・ハレヴィは言った。

俯いているせいかな、沙慈・クロスロードの顔は見えない。いや、見たくなかった。

どうせ彼は、涙で歪んだヘタクソな笑みを浮かべているだろうから。

「わかんないよ、沙慈」

黙々つ子のように、ルイスは首を振った。

「ルイス」

沙慈は諭すような声色で、自分の名前を呼ぶ。どこまでも優しい響きを宿した彼の声が、今は胸に突き刺さる。

「どうしても、そんなこと言うの。私のためを思っているなら、どうして一緒にいてくれないの」

ルイスは顔を上げて、沙慈を睨みつけた。込み上げてくる感情のせいで、視界がにじんでしまう。

それでも、驚いたように目を見開く沙慈の気配は伝わってきた。

「私の幸せは、沙慈と一緒にいることなの。沙慈と一緒に生きていくことなの。沙慈じゃなきゃ嫌なの。沙慈と一緒にじゃなきゃ、意味ないのよー!」

残された彼の右手を、ルイスは両手で包み込んだ。沙慈の手はとても温かい。

「パパやママが何と言っても、世間が何を言っても、私は絶対に諦めない。諦めてなんか、やらないんだからっ!!」

それは、ルイス・ハレヴィの、一世一代のプロポーズであった。

結婚式にガンダムが介入しなければ、ルイスは沙慈からのプロポーズをやきもきしながら待ち続けていたのであろう。沙慈も、ずっと言い出すタイミングを計りかねておじさんになっていたかもしれない。

皮肉だけれど、今回の1件がルイスを突き動かす理由になった。心臓が激しく脈打つ中、ルイスは沙慈からの返事を待っていた。沙慈は大きく目を見開いて、情けない吐息を零す。幾何かの間をおいて、困ったような顔をした。

普通、プロポーズは男性がするものである。恥ずかしがりやな沙慈でも、そんな矜持は持っていたらしい。居心地悪そうに視線をさまよわせた後、蚊の鳴くような声で何かを呟いた。聞き取れず、ルイスは首を傾げる。

幾何かの間をおいて。

沙慈は、顔を真っ赤にして言った。

病院の窓から差し込む茜色の光と負けず劣らず、優しい色をたたえて。

「……こんな不束者でいいなら、末永く、宜しくお願いします」

◇

今日は晴天。病室の窓から見える風景は、平和そのものである。

沙慈も笑顔を見せているけれど、彼も彼で、今後の進退について考えているようだ。技術者になるという目標を持ち、そのための学科に入学した沙慈は、そこで一定の成績を保つことで奨学金を貰っていた。

しかし、今回の事故で、沙慈は左腕を失ってしまった。片腕で技術者になれないわけではないが、絶望的な状況であることは変わりない。学校側からは『奨学金は打ち切りになる』という通知が届いていた。事実上の退学勧告である。

宇宙技術士になる夢を失った彼の表情は、以前、彼の姉——絹江・クロスロードの三角関係疑惑が浮上したときに見せた暗い影と似通ったものがあった。以後も似たような疑惑が発生するたびに、沙慈は目の光を失いながら姉や疑惑の2人——セキ・レイ・シロエやジョナ・マツカを詰問していたのだ。

ルイスは全力で考えた。彼の悲しみを少しでも癒す方法を考えた。嘗て、ルイスが「ママが帰国して寂しい」と駄々をこねて、沙慈が頑張つて自分を励まそうとしてくれたときのように、今度は自分が沙慈を励ましたいと思った。

(結局、私にできたのは、沙慈と同じことだった)

真っ白な病室を彩るのは、クラール・グライフ教授の特別ゼミに通う面々——悠風・グライフ、八重垣ひまり、草薙征士郎、南雲一鷹、AL-3——愛称アリス、HL-0——愛称ハルノの面々である。ルイスの急な要請に、彼らは即座に駆けつけてくれた。

この面々もまた、結婚式会場にいて襲撃に巻き込まれている。しかし、沙慈と違って、彼らは運よく軽傷で済んでいた。そのため、沙慈よりも早く退院して日常へと復帰していたのだ。仕事や課外に精を出しながら、面々も病院に通っていたという。

面々の訪問時間はまちまちであった。病室にやって来る組み合わせも変わるとは沙慈の話である。おかげで退屈しないと笑っていたけれど、夢を奪われてしまった彼の気持ちは察するにあまりあった。未だって、どこか物鬱気な影が漂っている。

ルイスは知っていた。勉強に四苦八苦しながらも、宇宙技術士になる夢を追いかけていた沙慈の横顔は幸せそうだったことを。

ルイスは知っていた。宇宙技術士になりたくて、日夜勉学に励んでいた真摯な姿勢を。

(いきなり夢を失ったんだもん。……元気がないの、当然だよね)

ルイスは静かに目を伏せた。

『……考えてみるよ。キミと一緒に生きるこれからのことに、僕の未来や夢については、避けて通れない道だから』

プロポーズの後で、沙慈はそう言った。何かを決意したような、痛みにまみれた苦笑だった。

新しい夢を探す。言葉にするだけなら簡単だ。しかし、その難しさは想像に難くない。

自分の夢を探しているのはルイスも同じだ。お嬢様として生きてきたわけだから、今後も同じように生きていくのだと思う。ゆくゆくはハレヴィ家の跡取り娘として沙慈と結婚し、今後も日常を過ごして

いくのだと思っていた。

ガンダムの襲撃で変わってしまったことは沢山ある。壊れてしまったものや失ったものも多いし、その大部分が、二度と戻ってこない。それでも、ルイスは思うのだ。壊れてしまったとしても、形を変えてしまっても、変わらず続くものはあるのだと。

談笑する沙慈や仲間たちの姿を見ると、尚更そう思えた。おそらく、沙慈が学校を辞めたとしても、悠風たちは沙慈の先輩として、一鷹たちは後輩として、今日のように笑って声をかけてくれるに違いない。

「それで、教授が……」

「だから、ひまりがあんなことするのが悪いんだって！ 大体なあ……」

「確かに。悠さんの言う通りです」

「ひ、ひどい！ 沙慈くんヘルプ！」

「うーん……」

ひまりが悠風にたしなめられた。ハルノは悠風の味方なので、2人そろってひまりを迎撃する。涙目になったひまりは沙慈に泣きついていたが、沙慈は困ったように苦笑いを浮かべていた。

「人革連に『悪の組織』の技術者が派遣されたとき、契約する条件として『その場に居合わせた軍人に『ここに 3機の テイエレンがおるじやろ?』と言ってもらう』というものがあつたらしい」

「確かその人、『ぎこちなさすぎてダメ出しを喰らい、3時間ぶっ続けで『ここに 3機の テイエレンがおるじやろ?』と言わせられた』んだっけ?」

「終いには、顔を覆って泣き出しそうになってたそうですね。名前はセルゲイさんって言ってましたっけ?」

「うわ、災難だね」

征士郎はとっておきの笑い話を持ちだしてきた。『悪の組織』関係の話は、いつもネタが尽きない。職場自体がネタであるとは誰が言ったのだろう。

どうやら一鷹やアリスも知っていたようで、詳しい話を聞かせてくれた。沙慈もその話は面白いようで、明るい表情を見せる。ルイスもふっと笑みを浮かべた。

穏やかな談笑のときが過ぎる。結婚式以前も、以後も、何も変わらない時間が過ぎていく。

『ソレスタルビーイングのテロ行為への反発は日に日に強まっております……』

それを止めたのは、何の気なしにつけたテレビからだだった。画面には、延々とガンダムたちの武力介入が映し出されている。

画面はいつの間にか、結婚式場襲撃らしき場面へと切り替わっていた。3機のガンダムが、自分たちがいた場所に攻撃を仕掛けている。ソレスタルビーイングの新型ガンダム。沙慈から夢を奪い、ルイスの親戚を殺した敵。ルイスはぎつと歯を食いしばった。

赦せない。無辜の人々の、ささやかな幸福をぶち壊して平然としているテロリスト——ソレスタルビーイング。

何も知らなかった頃の自分は、ソレスタルビーイングを「もの凄いやつ」なんてバカだったんだろう。当時の能天気な自分が目の前にいたら、「その認識は間違っている」と、必死になって説くのに。沙慈には、決してスペインに來ないようにと釘を刺すのに。後悔ばかりが募る。

「——違う」

沙慈は、酷く険しい顔で画面を見ていた。

彼はまた、同じように「違う」と付け加える。

『彼ら』じゃない。『彼ら』は——ソレスタルビーイングは、こんなこと、していない……!」

「沙慈? 何を言ってるの……!?!」

「おかしい。おかしいよ! よく見てくれ、ルイス! あのとき、結婚式に襲来した奴らのほかに、僕たちを守ろうと戦っていたガンダムたちがいたじゃないか!!」

沙慈の指摘に首を傾げながらも、ルイスはニュース画面を凝視した。同じ映像が、角度や構成を変えて、何度も繰り返し放送されている。再び、映像は結婚式場襲撃へと切り替わった。ルイスは目を留める。

あのとこのことを思い出せば思い出すほど、放映されている映像の矛盾が浮き彫りになってきた。映像では3機の新型ガンダムが破壊行為を行っている。けれど、間近で見えていた自分たちは知っていた。

あの場にいたガンダムは7機。そのうち、結婚式場に攻撃を仕掛けてきた4機は、映像に移る機体よりもやや黒ずんだ色をしていたように思う。

そこまで考えて、ルイスは気づいた。——どうして自分は、放映されていたニュースを“一文一句そのまま鵜呑みにしていた”のだろうか、と。

結婚式襲撃の場に合わせ、7機のガンダムが戦う場面を実際に見ていたはずなのに。3機のガンダムが自分たちを守ろうと戦っていたのを、この目で見ていたはずなのに。

己に起きていた異変に気づき、世界を覆わんとしている気配に気づき、ルイスは思わず戦慄した。恐怖に駆られてニュース画面に視線を戻せば、同じ映像が淡々と放映されている。

「いったい、何が起こっているんだ……!?!」

沙慈が絞り出すような声を上げた。他の面々も、険しい顔つきでテレビ画面を睨みつける。

不穏な影にすぎなかった『何か』は、確実に、着実に、自分たちを飲み込もうとしていた。



『ウチでは、姉よりも先に嫁げないのよ。あいつが結婚するまで待つていたら、私、一生独身だわ!』

絹江・クロスロードの同僚に、こんなことを言っていた女性がいた。なんでも、『長女が嫁ぐまで次女は結婚することができない』というきたりが家にあるためらしい。時代錯誤も甚だしい、結婚は個人の自由だ、なんで他人が嫁ぐかどうかで自分の結婚を左右されなくてはならないのか——彼女の言い分は尤もだ。

彼女の話聞いていたとき、絹江は彼女に同調した。どっちが先に嫁ごうが、別に問題は無いはずだ。世間体? そんなの、自己責任だろう。できないやつはできないし、しないやつはしないのだし、するやつは放つとしてもするのだから。個人の裁量に任せとけばいいのだ。他人が介入するから、問題が起こるだけで。

しかし。今なら、その女性の姉の気持ちがかかるような気がするのだ。

当時と現在では事情が違う。つい先日届いた弟——沙慈・クロスロードとルイス・ハレヴィからのツーショット写真と『僕たち結婚します』というメッセージが届いた瞬間から、絹江の持論は木端微塵に吹き飛ばされた。

おまけに、最近はどこからか『あの人、弟よりも結婚が遅いんですよ』『まあ、行き遅れ!』や『あねー』等の幻聴が聞こえてくるのだ。絹江の周囲には、おぼちゃんなんていないのに。

絹江の両隣に並ぶのは、同業者のセキ・レイ・シロエと彼の後輩で

あるジョナ・マツカだ。それを確認した途端、『こんなイケメンを2人もはべらせているくせに?』なんて声が聞こえた。幻聴だったとしても無視できる台詞ではない。

「先輩、休んだ方がいいですよ。弟さんのお見舞いもすぐに帰ってきちゃったし、ロクに眠ってないんでしよう?」

シロエが心配そうに声をかけてきた。絹江は微笑み、首を振る。

「大丈夫よ。私は平気だし、あの子にはルイスがついてるわ。それに、いつも取材に付き合ってもらってるわけだから、私もそれ相応の対価を支払うのが筋じゃない」

ソレスタルビーイングの取材を手伝ってくれる傍ら、シロエもまた、絹江とは違う案件を並行して追いつけていた。相変わらず多忙でありながら、彼は精力的な活動を続けている。

MD暴走事件の原因を暴き、MD生産停止に追い込んだ後、シロエは『メディアの言論統制』についてを調べていた。ソレスタルビーイングの新型ガンダムが武力介入を行ったという情報の中に、おかしな部分を発見したためらしい。絹江は今回、自分の取材を続けつつも、シロエの取材の手伝いを買って出たのだ。

ソレスタルビーイングを追いかけてきたのは絹江である。「餅は餅屋に聞くのが手っ取り早いので、協力してくれないか——シロエの申し出に、絹江は乗った。何度も調査協力してくれた戦友の頼みである。ここで何もしないというのは割に合わない。シロエは苦笑しながら礼を述べた。

取材対象者は、ソレスタルビーイングの新型ガンダムが行った武力介入に巻き込まれた人々だ。本当は沙慈やルイスにも詳しい話を聞けたらよかったのだが、絹江が沙慈のお見舞いから帰ってきた大分後に、シロエから切り出された。絹江も自分の調べ物で行く先があるため、今から日本に戻るのには難しい。

もう少し早く切り出してくれたらよかったのだが、戦友も気を使つたのだろう。

生意気なように思われがちだが、認めた相手には敬意を払い、きちんと気を配る性格らしい。

「今日の取材から得られた情報を簡潔にまとめると、こうなりますね」

端末で情報を整理していたマツカが、それを指示した。画面には、綺麗にまとめられた情報が並んでいる。『テレビで放映された機体と、自分たちが実際に目撃した機体の色が違う』——というのが、大半の人々の意見であった。

なのに、各マスメディアでは新型たちが武力介入を行ったように煽り立てている。自分たちが何度おかしき場所を指摘しても、各種マスメディアは取り合おうとしない。インターネットに至っては、投稿しても数秒で削除、またはアップロード自体をブロックされる始末らしい。

しかも最近では、『実際に武力介入の現場について映像の矛盾に気づいていたはずの人間でさえ、各メディア情報の『誤報』を聞き続けると、いつの間にかそちらを信じるようになってしまう』という。言論統制のほかに洗脳も入っていきそうな話であった。

「報道に関わる人間としては、ゆゆしき事態だわ……!」

絹江は歯噛みした。メディアに携わる人間として、真実を追い求めるジャーナリストとして、言論統制など認められない。偽りを並べ、真実を葬るような輩を赦すことなんて言語道断だ。シロエとマツカも頷く。

「彼らはどうやって、疑問を抱いた人たちの声を封殺する力を得たのでしょうか」

「人海戦術にしては早すぎる……。各国家のスパコンを数台導入でき

れば、それ相応の速さになるのかもしれませんが……現実性に欠けま
すね」

2人は険しい顔をした。自分たちが持つ情報は、圧倒的に足りない。
い。

しかし、その中でも、確実に言えることがあった。

「しかも、メディアをもその媒介として利用しているってことでしょ
う!? 尚更、追及の手を止めちゃいけない」

自分たちの大切な番組が、誰かが誰かを陥れる凶器になろうとして
いる。真実を明らかにするためのメディアが、真実を隠蔽し偽りをば
ら撒くものとして使われようとしている。それを黙って見ていられ
るはずがない。

これは取材であると同時に、自分たちジャーナリストの戦いであっ
た。自分たちの声を踏みにじり、他者を陥れようと画策する相手と
の、メディアの明日を賭けた戦いだ。姿なき黒幕を睨みつけるような
心地で、絹江は拳を握りしめる。

ソレスタルビーイングのことは興味深いと思っている。だからと
いって、絹江は彼らの味方をするつもりはない。あくまでも『ジャー
ナリストとしての中立的な立場』で、ソレスタルビーイングと世界を
見ているつもりだ。でも、今回ばかりは納得できない。

何もやっていない無実の人間を犯罪者にするつもりはない。そん
なこと、絶対にあつてはならないのだ。

絹江が真実を暴けば、メディア自体の信用がガタ落ちになるだろ
う。でも、だからこそ、やらなければならぬ。

3人が決意を新たにしたときだった。

絹江の端末が鳴り響く。メッセージの主は弟の沙慈。その内容も
また、自分たちが調べていた案件と同じものであった。

本人から話を聞きたいと思っていたのだが、メッセージには襲撃の
顛末と撮影していたビデオ映像が添付されていた。

実際の映像があるなら、突破口を開くための切り札になる。絹江は映像ファイルを再生した。映し出されたのは結婚式場の様子だった。

「やっぱり、テレビで放送されてる映像とは全然違うわ。あつちはうまい具合に編集したのね」

「この映像、複数のバックアップを取って保管しておいた方がよさそうです。万が一、握り潰されても大丈夫なように」

険しい顔で映像を睨んでいたシロエの言葉に、絹江は頷く。

「ええ。相手は確実に、私たちに圧力をかけてくるでしょう。そうなったら、相手側が『はいそうです』って言ってるようなものだわ。徹底的に追及し、真実を明らかにする！」

そう。絹江が敬愛するジャーナリストであった、父のように。亡き父が果たせなかつた分まで、絹江は真実を追いかけると決めたのだから。

調査の末に、リニアトレイン事業の総裁、国際経済団のトップに座るラグナ・ハーウェイにたどり着いたのは、絹江が決意してから暫く後の出来事であった。

ラグナはJNNの大株主だ。それだけでなく、他の報道局でも大株主になっている。彼が権力を振りかざせば、どの報道局も逆らうことはできなくなる。報道に圧力をかけるといふ点では、情報統制の黒幕に相応しい人間だと言えよう。

他にも、彼がバックにいるなら、潤沢な資金を使ってMSの開発も可能だ。その上、軌道エレベーターを自由に使うことだってできる。ガンダムを宇宙や地上に運ぶためには、機動エレベーターは必要不可欠だからだ。

「確か、イオリア・シユヘンベルクの関係者リストにもいたわね」
「彼の曾々祖父に当たる、グラント・ハーヴェイ氏ですね」

絹江の言葉に、マツカが端末でそれを確認した。
隣にいたシロエも、険しい顔をして別荘を睨みつけた。

「他にも、リストの人物に関係する大物が次々とHITしましたよ。
ハウエル・コーナーの子孫は、国連大使のアレハンドロ・コーナーで
すからね」

「国連軍を結成するように提言したの、彼だったわね。彼の影響力も、
ソレスタルビーイングにとつては利点だわ。メディア統制に関しては、
情報発信者としての重みがある。前者は、現在もそうとは限らな
いみたいだけど」

ハーヴェイ氏の取材が終わったら、次はアレハンドロの取材に向か
おう。ハードルはかなり高いが、このまま引き下がるわけにはいかな
い。

ジャーナリストとして、報道関係者として、引けない戦いだ。絹江
は別荘を睨みつける。何度もアポを取っているが、彼は所在に応じよ
うとしなかった。

自分が相手に行っている人間の強大きさを、改めて思い知る。しかし、
負けるつもりはない。ジャーナリストは、権力になど屈しないのだ。
そのとき、絹江の端末が鳴り響いた。メッセージの送り主は沙慈の
婚約者、ルイス。

「ルイスの話聞いたハレヴィ夫妻も、多方面に働きかけてくれるそ
うよ。有力な代議士らに掛け合ってみるって」

その話を聞いた2人は、表情を輝かせた。ハレヴィ家も、権力関係
者には太いパイプを持っている。もしかしたら突破口を開けるかも

しれない。

「……相変わらず、動きがありませんね」

「車は1台、止まっているみたいですよ。赤の高級外車……相手も、相当のセレブかもしれません」

シロエとマツカが別荘を伺った。相手の返事はいつも「忙しい」だったが、今回は「面会中」となっている。

これはチャンスだ。うまくいけば、ラグナと面会した人間に話を聞けるかもしれない。

別荘を見守り続けて、どれ程の時間が経過したのだろうか。車が別荘から出てきた。それを見計らい、絹江が道路に飛び出す。

「ちよ、先輩!」「絹江さん!」——慌てた様子で2人も続く。車が急ブレーキをかけたのを確認し、絹江は運転席へと近づいた。

声をかければ、顔を出したのは1人の男。赤みを帯びた茶色い髪に、砂漠の砂を思わせるような色の肌。ゆっくり細められた瞳の鋭さに、思わず絹江は息を飲んだ。

ジャーナリストの勘が告げている。この男はヤバイ。ごくり、と、妙な響きを持って、絹江の喉が鳴った。

シロエとマツカも何かを勘付いたようで、ちらりとこちらにアイコンタクトを送ってきた。危険だ、ここは引いた方がいい、どうする——? 2人の眼差しが訴えてくる。

自分たちが警戒していることを面白がるように、男は薄らと笑みを浮かべた。彼は急ぎの用事があるらしく、話は車の中で聞くといい。明らかかな挑発だ。

(……いいわ。その挑発、乗ってやろうじゃない!)

絹江はキツと眦を釣り上げた。

「では、お言葉に甘えて」

絹江の言葉に驚いたのか、シロエとマツカがこちらを見た。その表情は、どこか鬼気迫っているように見える。絹江は不敵に微笑みでみせた。

ややあつて、シロエとマツカは諦めたように目を閉じた。間髪入れず、2人の表情は力強い笑みへと変わった。一緒に来てくれるらしい。

こうなったら一蓮托生——そんな声が聞こえてきたような気がして、絹江はゆるりと目を細めた。彼らがいるだけで、どんな困難も乗り越えられそうな気がする。

そうして、絹江たちは赤い高級車に乗り込んだ。

丁度、絹江がシロエとマツカに挟まれるような形で、後部座席に座った。

お互いの名刺を交換し、雑談に興じる。

「絹江・クロスロードさんですか。いいですねえ、貴女のような美人の記者がいて。……で、恋人はどちらですか？」

「彼らは同業者と協力者です。私は独り身なんですよ」

弟と同じようなことを質問され、絹江は思わず首を振った。普段なら和みそうな話題であるが、シロエとマツカは、(沙慈と相對峙したときとは違う意味で)緊張しているらしい。この男のヤバさを危惧していたのだから、当然だと言えよう。

車は走り続ける。風景は、豪華絢爛な繁華街からスラム街の方へと走っていった。男——ゲイリー・ビアツジは、セレブではなくゴロツキから成り上がった人間だったのかもしれない。立派なスーツから滲み出る異質な雰囲気はそこにあるのだろうか。

雑談もそこそこに、絹江は本題に入る。

「間違っていたら謝りますが、ビアツジさんは先程、トレイン公社の総裁、ラグナ・ハーヴェイ氏と会われていますませんでしたか？」

「ええ、会いましたよ」

「どのような話を？」

「私は流通業を営んでいましたね。物資の流通確認のために、総裁に報告に来たんです」

ゲイリーは飄々とした口ぶりで話を続けた。物資の流通状況など、一総裁にわざわざ確認すべき内容ではないだろう。

「わざわざ総裁に報告するとは、余程重要なものを運んでいたんですね。……しかも、表にはまだ公表できない、〝いわくつき〟レベルの」

マツカが眦を吊り上げてゲイリーを見つめる。普段の彼からは思いつかないような険しい表情。しかし、声は透き通るような響きを宿していた。

サイドミラーに映ったゲイリーは、眉の端をピクリと動かす。次に口を開いたのはシロエだった。こちらは、口元に相手を挑発するような不敵な笑みを浮かべる。

「珍しいですよね。普段は『忙しい』と言って、僕らの取材に応じてくれないのに。総裁、今日はわざわざ『面会中』と言ったんです。……まるで、『取材は面会が終わった人間にやってくれ』と言わんばかりに」

本当は貴方、何を頼まれたんですか？

ゲイリーに問いかけたシロエは、不敵な笑みを消し去る。どこまでも鋭い眼差しが、鏡越しからゲイリーを穿った。正体を表せ、と、夜闇の色を湛えた瞳が男を詰問する。

沈黙に支配された車内。暫くして、ゲイリーはくつくつと笑い声を漏らした。何かおかしいものを見たかのように彼は笑う。しかも、それは彼にとって娯楽に近いもののように思ったらしい。

含み笑いは、いつの間にか本気の大笑いへと変わっていた。3人は

厳しい表情のまま、ゲイリーの出方を待つ。ひとしきり笑い終えたゲイリーは、不気味な笑みを浮かべながら言葉を紡ぐ。

先程までの畏まったような態度は鳴りを潜め、粗暴で荒々しい口ぶりに変わった。

「どうやら、こちらの方が地の態度だったらしい。豹変した男が纏う気配に、思わず絹江はたじろいだ。」

「GNドライブだよ。MSを動かす、最新兵器用のエンジンだ。最新兵器——」

「ソレスタルビーイングのMS・ガンダムを動かすための動力」

ゲイリーの言葉を遮るようにして、マツカが言った。ゲイリーは目を丸くする。

「もしくは太陽炉。このドライブを生産するためには、木星圏の環境でなければ生み出せません。しかも、1機作るのにかなりの年月がかかる上に、ドライブ自体に個体差があるため、非常に効率が悪く、量産型には不向きのもんです。ソレスタルビーイングが所有する太陽炉搭載型ガンダムは第3世代の5機。しかしそこへ、いるはずのない新型ガンダムが現れた」

立石に水の如く、マツカはすらすらと言葉を紡ぐ。

「オリジナルの太陽炉は粒子の色は緑色で、人体への毒性はありません。ですが、新型に搭載された粒子の色は赤。人体への有害性があり、例としては細胞障害などが発生しています。おまけに、作戦活動時間もやや短め。総合するに、アレはオリジナルの劣化版ですね。——区別するために、疑似太陽炉とも呼びましようか？」

「そんな新型、もとい劣化版太陽炉が開発された理由は、『出資および開発に着手した人間が、量産型太陽炉を求めたため』です」

マツカの言葉を引き継ぐように、今度はシロエが話を続けた。

「こんなときに、量産型太陽炉が急に必要になる理由はただ一つ。ソレスタルビーイングに対する、国連軍の編成です。各国は偽ガンダム襲撃によって、軍事に大ダメージを受けました。この状態で軍事力を統合しても、ガンダムに対抗できる力は雀の涙だ。……だが、ガンダムと同等の性能を有する機体が手に入れば、戦力はひっくりかえせる」

完全に、絹江は置いてけぼりである。シロエとマツカは、一体何のことを話しているのだろう。ゲイリーは言葉を奪われていることに驚いている様子だ。

2人とも、全てを知っているような口ぶりだった。ソレスタルビーイングと一緒に追いかけていたはずなのに、どうして彼らは当事者のように話し続けるのか。

シロエもマツカも、絹江にそんな話を聞かせてくれたことはない。絹江は仲間外れにされていた？——いや、違う。彼らが絹江に提供していた情報が、小出しにされたものだったのだ。

絹江の心を表すように、いつの間にか、空には暗雲が立ち込めている。気のせいではなければ雷鳴も聞こえた。ぽつ、ぽつと雨が降ってくる。

セリフを取られたことにポカンとしていたゲイリーの顔がミラーに映っていた。しかし、その顔はすぐ歪んだ笑みへと変化する。何が楽しいのか、奴はまた笑い声を上げた。

次の瞬間、高級車が勢いよくブレーキをかける。突然のことだったので、絹江はそのまま前につんのめった。が、間一髪、シロエとマツカに支えられる。

車に乗り込む瞬間まではあれほど心強いと思っていたのに、今ではその手すら得体の知れないもののような。絹江はごくりと生唾を飲んだ。

「そこまで知ってるなら、自分がどうなるかも分かっているよなあ？」
「な、なんですって……!?!」

「お前らは皆、『知りすぎた』んだよ。——ああそうだ、冥土の土産だから教えてやる。お前らも米軍基地の二の舞になるんだ。ソレスタルビーイングの秘密に近づいたために殺された奴のなあ!!」

再び車が急発進。そうしてゲイリーは、車をスピンさせるような派手なターンを披露した。その際、後部座席のドアがオートで開き、絹江たちはそのまま放り出される。

だが、地面に叩き付けられる直前で絹江を庇ったのはマツカだった。シロエも受け身を取り、即座に体制を整える。瞳に宿るのは迎撃の意志だ。

「先輩」

「絹江さん」

シロエとマツカが絹江を見た。「必ず守るから信じてくれ」と訴えるような眼差し。絹江がそれに答える間もなく、ゲイリーが車から出てきた。手には、凶器を握り締めている。

絹江を庇うように、シロエとマツカがゲイリーに立ちはだかる。無理だ。どう考えても、同業者と研究者が敵う筈がない。2人は、絹江だけでも逃がそうとしているのだろうか。

しかし、絹江の脚はすくんでしまつて動かない。このままでは皆やられてしまう。あと少しで真実にたどり着けると思つたのに、自分はこんな場所で死んでいくのか——。

凶器が振り下ろされた。絹江は反射的に目を閉じる。

瞼の裏側で、黄色と緑の眩い光が爆ぜたような気がした。

◇

「パパとママが、亡くなった……!?!」

突然の報道に、ルイスは茫然としていた。ニュース画面には大きく、数時間前にAEUで起こったテロに巻き込まれ、亡くなった人々の名簿が提示されている。その中に、ルイスの両親の名前があった。どうして両親が死ななければならなかったのか、ルイスには心当たりがある。世界がおかしいことに気づいたルイスが両親に相談した結果、沙慈の姉——絹江・クロスロードの取材に協力を申し出てくれたのだ。

あの場にいた人間として、真実が正しく放映されないのは遺憾だ——そう言った両親との会話を思い出す。代議士の先生に頼んでみると笑った母の声が耳を離れない。それが、最期の会話になってしまうなんて。

沙慈が心配そうにルイスを見つめる。スペインに帰れと言われているようで、なんだか突き放されたような気になった。

丁度病室にいた征士郎、ひまり、悠風、一鷹、アリス、ハルノもテレビを凝視する。ぴりぴりとして空気が周囲に漂った。

「沙慈・クロスロードさん。お荷物が届いています」

それを壊すかのように、ナースが能天気な声を上げて病室に入ってきた。反応に困っている自分たちに構わず、ナースは荷物を置いて去っていく。

ルイスと沙慈は訝しげに首を傾げつつ、乱暴に包みを破いた。こんなときに何が贈られてきたのだろう。日本語で「空気が読めない/KY」という言葉があるが、先程のナースなんてまさにそれだ。破けた包装紙をゴミ箱にぶち込み、箱を開ける。

そこには大きめの端末——パッドが入っていた。沙慈がそれを取り出した。左腕のない沙慈の代わりとして、ルイスは左側部分を持つ。次の瞬間、端末の電源を入れていないのに画面が点灯した。青い

画面が映ったつきり、うんともすんとも言わない。

「こんなときに、一体なんだっていうのよ……!」

ルイスが歯噛みしたときだった。突然、白抜きの文字で文章が表示される。内容は、『貴方たちは踏み込みすぎた』と出た。呆気にとられていた間に、文章が次々と切り替わっていく。

『貴女の両親も、踏み込みすぎた』、『他にも知りすぎた奴がいる』、『恨むなら、絹江・クロスロードとソレスタルビーイング、およびガンダムを恨め。そうして憎み続けろ』——それを最後に、文字が消えた。画面いっぱいに表示されたのはカウントダウン。画面上部にはご丁寧に『爆発まであと10秒』と表示された。あまりの展開に面々は息を飲む。たった10秒では何もできない。せいぜい驚くので精一杯だ。

「きゃあああーっ!!」

「ッ、ルイスっ!!」

結婚式場のときと同じように、沙慈がルイスを守るようにして抱きすくめた。放り投げられた端末が床を転がる。

次の瞬間、カウントダウンが0になった。激しい光と熱が周囲を包み込む! ルイスは反射的に目を閉じた。

瞼に突き刺さるような白い閃光に紛れ、黄色、赤、緑、青の光が瞬いたような気がした。

4.3. それぞれの、決意のとき

暫く見ないうちに、親友がとんでもないことになってた。

オーバーフラッグスの面々が武道大会に出場して、ガンダムたちと戦いを繰り広げてたのは間近で見っていた。彼らの口から「隊長をやっていた『彼』が新たな力を得て、姿形が変わった」という話も耳にしている。

自分がいなくなつてから、オーバーフラッグスたちは大変な目に合っていたらしい。闘技場からとぼとぼと出てきた彼らに話しかけたら、「『彼』が暫く失踪したと思つたらいつの間にか帰つて来て、でも、そのときにはもう性格が変貌していた」と泣きつかれた。

元・オーバーフラッグス隊長機が新たな姿へと変わつてからずっと、オーバーフラッグスたちとは別行動を取っていたそうだ。その行方は全く掴めていないという。現在の『彼』はライセンスという特殊な地位にいて、行動制限が少ないためだ。

友人たちが『姉』の陰謀に振り回されている仲間たちを見過ごせるはずがなかった。『姉』の企みを止めるために奮闘していた『自分』であつたが、なかなか方法は見つからないでいる。

『自分』が居候している組織のガンダムたちに手伝ってもらいながら、『自分』は『彼』の行方を探していた。協力者たちがこの場所を割り出してくれたおかげで、現在、単身で突入および攻略中であつた。

「会いたかつた……会いたかつたぞ、ガンダム！」

向う側から聞こえた声につられて、奥の通路に向かつた。多分、ここまでノリだつたら、『自分』は「ああ、アイツは何も変わつてない」と力なく笑い飛ばしていただろう。

しかし、『自分』は、すぐに『彼』が変わってしまったことを思い知ることになった。

「ヴェーダの情報を餌にすれば、必ず会えると信じていたぞ！」

餌。その言葉に、『自分』は息を飲んだ。

『彼』は決して卑怯な真似はしなかった。相手を罠にかけるという卑怯な戦術を、誰よりも嫌う性格をしていた。正々堂々、全力でぶつかり合うことを好み、それを至上としていたのに。

誰かの大切なものを人質／餌にするようなことを、率先して行うような性格ではなかったのに。『自分』が行方不明——実質敵には死亡扱い——になっていた間に、一体何が起こったというのか。

元からエクシアを（いろんな意味で）困らせていたけれど、そこまで酷くはなかった。確かにこんな変貌を遂げてしまえば、オーバーフラッグの面々がオロオロするのも頷ける。『自分』の場合は、彼らとは違う感情が湧き上がっていた。

「まさか、あんたがヴェーダの情報を!？」

「その通りだ!。あの情報は、キミをおびき出すためのもの!」

エクシアの面影を宿す『彼女』の問いに、『彼』は悪びれる様子もなく答えた。

『彼女』は急ぎの用事がある様子だった。スターゲイザーの面影を宿す機体も、困ったようにため息をつく。

『彼女』たちと行動を共にする異界の英雄たちも同じらしく、「何しに来たのコイツ」と言いたげな眼差しを送っていた。

「どいてくれ!。今は、あんたに構っている暇はないんだ!!」

『彼女』は切実な響きを持って訴える。だが、『彼』は何を思ったのか、

「邪険にあしらわれるとは……ならば、キミの視線を釘付けにする!

今日の私は、阿修羅すら凌駕する存在だ!!」

鞘から武器を引き抜き、『彼女』に突きつけた。戦え、と、『彼』の纏う覇気が訴える。

その口調はまるで、何かを懐かしみ、その光景を慈しんでいるようにも見えた。

「ようやく巡り会えたこの機会……。乙女座の私には、センチメンタリズムな運命を感じずにはいられない」

『彼』は噛みしめるように呟く。そこは以前と変わっていない。

「何を言ってるんだこの人」——周囲の面々が反応に困っている。彼らの困惑が手に取るように伝わってきた。

スターゲイザーの面影を宿す機体は、どこか懐かしそうな眼差しを向けている。

彼女は『彼』が暴走する様子を、「わあ元気ですnee」程度のノリで流してしまえる猛者であった。

もうどうしたらいいかわからない、と、光の巨人や仮面を付けたヒーローたちが頭を抱えている。知り合いなら何とかしてくれと、彼らは『彼女』に視線を送った。

『自分』は知っている。それは、『彼女』にとって相当の重荷であることに他ならない。『彼女』が申し訳なさそうに肩を落としたのを見た彼らは、状況を察したらしい。

彼らの予感を決定づけるかのように、『彼』は語り始める。

「そう。ガンダム存在に、私は心奪われたのだ！ この気持ち、まさしく愛だ!!」

「愛!?!」

いきなりの愛の主張に、『彼女』は素っ頓狂な声を上げた。『彼』の口調や言っている内容も以前と変わらないのに、明らかに『彼』は変貌してしまったように思える。

スターゲイザーの面影を宿す機体以外の面々がドン引きしていた。

ある種の恐怖を感じ取ったのだろう。皆、不審者を見るような眼差しを『彼』に向けていた。

「……あのー、あれはどうにもならないんですか？」

決して切れない無限の輪を冠する光の巨人が、恐る恐ると言った感じで問いかけてきた。スターゲイザーの面影を宿す機体は、のほほんとして微笑む。

「ふふ。相変わらずだなあ、あの2人」

「……アンタも動かないってことは、そういうことかよ……」

ゼロの名を冠する光の巨人も苦い表情を浮かべる。その横顔がげんなりとしているように見えたのは、決して気のせいではない。あの様子だと、彼は彼女によって、恋愛云々についてがっつりと根掘り葉掘りされたように見えた。

他にも、スターゲイザーの面影を宿す機体に対して苦手意識を抱く面々もいた。いや、恋愛系の話には乗り切れないでいる様子だ。『彼女』たちが所属するチームは、男性が9割を占めている。……これ以上話すと埒が明かないので、閑話休題といこう。

盛大に愛を叫んでいたはずの、『彼』の表情が曇る。どろりとした闇を湛えたように、カメラアイが黒光りした。昏い輝きにぞつとする。

「だが、愛を超越すれば、それは憎しみとなる。——だから、私はキミを倒す！」

「あんたは……ッ」

歪んでいる、と続けようとした『彼女』が言葉を止めた。「お前が歪んだ原因は俺なのか？」——『彼女』の視線は、そう問いかけている。

『彼女』の心を察知したのだろう。ほんの一瞬、『彼』は沈痛そうな表情を浮かべる。そうして、『彼女』を気遣うような眼差しを向けた。

何かが脱線してしまっても、『彼』が『彼女』に向ける想いは変わらなかった。愛とは、そういう感情のことを言うのだ。『自分』は1人、納得する。

誰かを傷つけるようなものは、愛と呼べるものとはいえない。いつかどこかで聞いた言葉。恋する少年が言っていた言葉だ。

「……私には、*“これ”*だけしかないんだ。いくら歪んでいると非難されようとも、こうしてキミに挑み続けるしかない」

「マ■■オ……」

「道化でなければ、守れないものがある。そうであっても、失いたくないものがある。取り戻したいものがある」

『彼』は痛々しいほど儂げな笑みを浮かべる。

以前だったら、決して浮かべたことのない表情だ。

だが、それはすぐに、決意と激情に歪んだ。

「……だからこそ、私は——!!」

刀を横したサーベルを振り上げ、『彼』は『彼女』たちに迫る！ 『彼女』も覚悟を決めたように、ビームサーベルを構えた。他の面々も迎撃態勢を取った。戦いが始まろうとしている。

『自分』はそれを見ていた。少し離れた場所から、英雄たちと『彼』とのやり取りを聞いていた。そうして、思ったことがある。ただただ、感じたことがあった。それはとても簡単なこと。

鞘から日本刀を横したブレードを引き抜き、『自分』はGNドライブを起動させた。青い燐光を纏い、緑の粒子をまき散らしながら、『彼女』と『彼女』の間に割って入るかのように突っ込んだ。

「——しようがないな、ドアハウが」

さあ、ミッション開始だ。

『彼』を、オーバーフラッグたちの元へと連れて帰るために。
『彼』やオーバーフラッグたちと、もう一度空を翔るために。



ユニオン、人類革命連合、A E Uの3大国家が軍事同盟を組み、国連軍が編成される――。

このニュースのせいで、軍部は大忙しであった。各国の主要基地が壊滅状態で自国の軍備編成でさえバタバタしているのに、更にその上を作らねばならないのだから。

壊滅状態の戦力を一気に結集しても、メリットは少ないはずだった。鹵獲作戦のときのような、大規模な物量戦を展開する力なんて、今の3国には無い。

しかし、この同盟を推し進めるにあたって協力者がいた。国連大使のアレハンドロ・コーナーである。彼は、とっておきの秘策を搭載した新型機を提供したのだ。

詳しいテスト内容をビリーから聞いたが、その性能は、タクマラカン砂漠で姿を現した新型ガンダムや、ユニオン基地を襲撃した偽物たちとほぼ同等の能力を誇っているという。国連軍では、その新型MSが主力として配備されることになるそうだ。

新機体の登場によって、既存のMSは一手に陰へと追いやられることになった。勿論、我らが愛機・フラッグも例外ではない。ユニオンの精鋭を意味する称号にも冠されていた我が国最強のMSは、文字通りのお蔵入りになってしまった。

「……そんな」

クーゴたちの話を聞いたハワードは、愕然とした様子で目を伏せた。彼の顔から生気が消えてしまったように思う。「ガンダムに対抗できる新型機があれば」と弱音を吐いたダリルに喝を入れた誇り高きフラッグファイターには、あまりにも辛い現実だ。

いや、悔しい思いを味わっているのは彼だけではない。グラハムも、ダリルも、ジョシユアも、アキラも、複雑な表情を浮かべている。この場にいる全員が、機体の乗り換えを命令されていた。ハワードだって、復帰すれば新型機に乗ることを義務付けられるだろう。

機体の乗り換えだけでなく、オーバーフラッグス部隊の解散も言い渡されている。3国の戦力を集めるのだから、それは当然の判断だ。そちらになら、まだ従えた。部隊が離れても、自分たちの繋がりには途絶えることはない。でも、「フラッグを捨てろ」というに等しい命令には、躊躇してしまう。

フラッグファイターとしての矜持と、新型機でなければガンダムに対抗できないという現実。その狭間で、フラッグファイターたちはもがいている。

「ッ、後継機！　後継機の開発は!?!」

「……到底、間に合わんそうだ。次に行われる作戦に参加するにはな」
縋るように顔を上げたハワードに、グラハムは沈痛な面持ちで首を振った。

ビリー曰く、後継機開発には膨大な時間が費やされるといふ。それも、最低で数か月から数年単位でだ。この調子でいくと、どんなに頑張っても、後継機が次の作戦に参加することは不可能である。

その現実が横たわる中で、自分たちMSパイロットは無力なものだった。病室に沈黙が降りてくる。外は快晴。中庭が見渡せる窓からは、子どものはしゃぐ声がひっきりなしに響いた。

「……なんとかしてやりたい、とは思うんだ」

クーゴはぽつりと呟いた。

「まだ、飛びたいって言ってるんだ。戦いたいって言ってるんだ。自分はまだやれるって、戦うべき相手がいるんだって、ずっと『叫んでる』んだよ。フラッグが」

格納庫に置き去りにされたフラッグの機体を見る度に、クーゴはそんな声が『聞こえて』いた。自分の愛機は激しく訴えている。『白いガンダム——スターゲイザーが、クーゴと自分を待っている』のだと。特に主張が激しいのはグラハムの機体だ。

そちらの方は『愛しい天使を討つのは自分なのだ』と、刹那の翔るガンダムへの愛を叫んで憚らない。機体のパイロットと思考回路がよく似ている。隣にいた自分の機体が呆れているように見えたのは気のせいだったのだろうか。

痛々しい沈黙を引き裂くように、慌ただしく病室の扉が開かれた。運動音痴気味にも関わらず、全力疾走してきたビリー・カタギリ技術顧問である。

喘息患者のようにゴホゴホと派手な咳を繰り返すビリーの背中をグラハムが軽く擦った。大丈夫かと心配する親友に、ビリーは大丈夫だと手で示した。

荒れた呼吸を整え終えたビリーは顔を上げた。心なしか、彼の表情は明るい。「皆、聞いてくれ!」——そう言った彼は、とても嬉しそうに見えた。

「叔父さ——カタギリ司令が、新型機の推進力になっていたドライブを融通してくれたんだ! それをフラッグに積み込むような形でなら、ぎりぎりだけど、本格的な決戦には間に合うよ!!」
「本当ですか主任!」

ビリーの発言を聞いたハワードとダリルが表情を輝かせる。力強く頷く技術主任の様子に、憂鬱な空気は一瞬で吹き払われた。

しかし、喜ぶのはまだ早かったらしい。

「ただね」と、ビリーが申し訳なきように目を伏せる。

「そのドライブ、2機しかないんだ。……だから、他の人たちは新型に乗り換えなくちゃいけないよ」

空気が一気に元に戻った。申し訳なきようにしよんぼりするビリーの様子を思うと、やっぱり文句は言えない。「ありがとう、カタギリ」とグラハムは感謝の言葉を述べる。ここにきて、新たな問題が浮上した。突貫工事のカスタムフラッグに、一体誰が搭乗するのか。用意された機体は2機である。

乗れるのは2人。その1人目は決まっている。クーゴと同じことを考えていたらしく、ハワード、ダリル、アキラがグラハムを見た。ジョシユアに至っては、「悔しいけれど仕方がない」とでも言いたげな様子である。これは、オーバーフラッグス隊全員一致の意見だ。

ならば、残りはあと1人。クーゴはちらりと仲間たちを見返した。誰が搭乗することになってもおかしくはない。実力も、フラッグへの想いも、皆強い面々ばかりだ。特にハワードは、病人であることが悔やまれる程に。

候補はダリル、ジョシユア、アキラの3人か。絞るのが難しそうだ——と、クーゴが考え込んでいたときだった。

周囲から視線を感じる。顔を上げれば、この場にいる全員がクーゴを見ていた。何で彼らがこちらを見ているのか分からなくて首を傾げる。

仲間たちはひどく驚いたような顔をした。意味が分からなくて首を傾げる。次の瞬間、ジョシユアがしかめっ面をした。

「日本人は察することに長けてるって話を聞いてたけど、アンタは例外みたいだな」

「いや、知ってるよ。でも、どうして俺なのかなって」

クーゴが返答すれば、ジョシユアは愕然としたように口元を戦慄させた。

だってそうだろう、とクーゴは笑った。

「俺なんかよりも、お前の方が相応しいよ」

自信を込めて断言し、クーゴは3人を見返す。乗るとしたら、この3人のうちの誰かだろう。正直、誰を推薦すべきか悩む。決められなくて、クーゴは苦笑した。

「難しいなあ。皆、実力も高いしフラッグのこと大切にしているから」

「——その『皆』の中に、どうしてアンタは入ってないんだよ」

苛立たしさを募らせるように、ジョシユアはクーゴを見下ろす。青い瞳には、憤りと焦燥が滲んでいた。

周囲を見回せば、仲間たちの眼差しはクーゴに注がれていた。満場一致、と目が語る。何度瞬きしても、結果が覆らない。

どうしてだ。クーゴは眉をひそめる。訝しがっているのは自分だけらしい。仲間たちは深々とため息をついた。

「本当に、隊長の言ってた通りですね。副隊長は謙遜しすぎなんですよ」

「むしろ、自分を過小評価しすぎると言った方が正しいですな」

「……何かある度にフラッグに話しかけてるんだ。損傷すれば『痛そうだから早く治してやれ』とか言うし、挨拶だってしてるし。それで『フラッグを大切にしていな』なんて、誰が言うんだよ」

『誰かの想いを背負って飛べる人』って考えて、浮かんたのが副隊長でした。俺も、副隊長なら背負ってくれるって信じてるっす」

ダリルが、ハワードが、ジョシユアが、アキラが、そう言って静かに微笑んだ。

「キミはいつも、『フラッグの様子がわかる』って言ってたよね。そういうキミだからこそ、僕も推すんだよ」

ビリーもうんうん頷く。ビリーを介抱していたグラハムも、厳かな面持ちで頷いた。

「これが、我々フラッグファイターたちの意志だ。キミもフラッグファイターなら、矜持を見せろ」

そんなことを言われて、断れるような人間ではない。クーゴ・ハガネは、「期待されればそれに答えたくなる」性分である。

フラッグファイターとしての誇りを託されたのだ。他の誰でもない、敬愛すべき大切な仲間たちに。ここで逃げたら、その信頼を裏切ることになる。

正直、まだ躊躇いは抜けない。更にいうなら自信もない。ないない尽くしだけれども、こんな自分を信じてくれた仲間たちに応えたかった。た。

決意を込めて前を向く。仲間たちの瞳をまっすぐ見返し、クーゴは小さく頷いた。それだけで充分、相手には伝わったようだ。皆、穏やかに目を細める。

他の面々だって、フラッグに乗って戦いたかったはずだろう。その気持ちを考えて、胸がちくりと痛んだ。何を思ったのか、ビリーが不敵に微笑む。

「実は、フラッグの後継機も考案中なんだ。勿論、今度配属される新型に使用されたドライブを推進力に使う想定でね。今回の新型ドライブをフラッグに積むっていう行程は、そのための試金石も兼ねてるんだよ」

だから頑張つて、と、技術主任は親指を立てた。プレッシャーだな、

なんて軽口を叩きながら、フラッグファイターたちは談笑に耽る。

「ところで、新型はいつ頃お披露目になる予定なんだろうな？」

「そこは、ソレスタルビーイングが偽物次第だろうね。今度の実戦がいつ、どこでになるかは向うの都合にかかっているわけだし」

グラハムの問いに、ビリーは苦笑する。ソレスタルビーイングが出現し、どこに向かうかによって、新型のお披露目会場は変わるだろう。各国にも新型が配置されていく予定なのだ。ガンダムと同性能を持つ新型とは、どのような機体なのだろう。

動力が同じということとは、飛んでいるときはあの毒々しい赤い粒子をまき散らすのだろうか。……まあ、フラッグにも同じエンジンが積まれるのだから、フラッグも赤い粒子をまき散らすことになる。どうしてだか、あの色はあまり好きになれそうにない。

粒子の色の違いについても、ビリーは分析を進めているようだ。色の違いについても法則性があるのだろうか。技術屋ではないクーゴにはまったくわからないが、粒子の色の違いだけでも相当なことだといえるのは理解できた。

雑談に耽りながら、クーゴは仲間たちの顔を見回す。

ハワード、ダリル、アキラ、ジョシユア。彼らはフラッグに乗ることとはできなくなるけれど、フラッグというMSを見捨てたわけではない。ただ、今は相棒と別れることしかできないからそうするだけだ。彼らは、フラッグを諦めてはいない。

開発担当のビリーだってそうだ。恩師であるエイフマンと共に築き上げたMSの系譜を絶やすような男ではない。彼ならば、ガンダムと対抗できる新しい機体／フラッグの後継機を生み出してくれるだろう。

不意に、クーゴの脳裏に虚憶きよおくがフラッシュバックした。青を基調にした隊長機に、ペールグリーン基調の一般機、特殊なドライブをつけた真空色の専用機が空を翔る様子が『見える』。

フラッグの面影を宿したMSは、青空に隊列を組んで飛んでいた。

瞬きしたときにはもう、その風景は消えていたけれど。いつか、自分がたどり着く場所なのだろう。クーゴには漠然とした予感があった。クーゴはふっと微笑む。

(楽しみだな、新型機。……その前に、ドライブ搭載フラッグの方が先か)

遠くに雲が陰って見える。暗雲が近づいているのかと思った途端、また虚憶きよわくがフラッシュバックした。フラッグの面影を宿した黒い機体が、同じフラッグの面影を宿した藍色の機体とぶつかり合っている。機体のフォルムは違うけれど、2つの機体は確かにフラッグの系譜を継いでいた。

黒い機体は日本の侍／武士を思わせるようなデザインだ。頭部のパーツにつけられた角は、兜につけられた飾りのようにも見える。藍色の機体はフラッグとデザインは酷似しているものの、こちらは和洋折衷系のように見えた。対峙しているのは誰と誰なのか——姿は臃げにしか見えなかった。



「エルガン」

名前を呼ばれた。振り返れば、車椅子に乗った黒髪の女性がエルガンを見上げている。

青い瞳は厳しい色を湛えていた。お前のやり方には納得できない、と、しきりに訴えている。最初から、彼女に叩きのめされそうだとは思っていたし、覚悟もしていた。殴られようと、否定されようと、そ

れでもエルガンは己のやり方を曲げることはしなかった。

この程度で『彼等』が滅んでしまうなら、到底『対話の刻』を迎えることはできないためだ。エルガンが用意した“試練”を『彼等』が突破できないのならば、この星と人類に未来はない。親友と自分たちの計画はここで終わりだ。

たといえいかなる犠牲を払おうとも、エルガンは未来を選ぶ。確実に、この青き星と人類が未来を掴むための采配を振るい続ける。己の持つ虚憶で、親友との約束と己の決意に殉じた男——『エルガン・ローディック』のように。

『エルガン』の采配で、ZEXISは大切な仲間を失った。『エルガン』が彼らに与えた試練が——間接的に——“大気圏を狙い撃つ男”の命を奪ったのだ。

彼らからの冷たい眼差しを／天上人の戦術予報士から喰らった張り手の一撃を、エルガンは片時も忘れたことはない。

——たとえ、今回の行動が、その焼き直しになろうとも。

エルガンは、この選択をし続ける。

「エルガン」

女性は、眉間に眉を寄せながら、深々とため息をつく。

彼女には伝わっているのだろう。エルガンの覚悟も、諦めも、希望も、すべて。

「……そんな顔するなら、最初からそんなことしなきゃいいのに」「それが最善手だからだ。彼らには成長してもらわなければ困る」「最善手が、常に最良の結果を出すとは限らないでしょう」

エルガンの言葉に対し、女性は屁理屈で応戦する。しかも、真理という名の爆薬を投げつけてくるからタチが悪い。

『エルガン』が用意した試練もまた、同じ結果になった。ZEXISは確かに強くなつたけれど、失ったものも大きかったのだ。

彼らの成長という意味では、『エルガン』の采配は大成功だと言えただろう。それと同時に、ZEXISにとっては最悪の結果を招いた。

「——まったく、アンタって奴は。……本当に、昔から世話が焼けるわね」

ややあつて、彼女は苦笑した。

しょうがないな、と、青い瞳が語っている。

「『アンタが拾えない分は、私が全部拾ってやるから。だからアンタは、代わりに私が拾えないものを拾い上げて頂戴』。……そういう約束でしょうが」

女性はそう言つて、肩をすくめた。

「忘れないですよ。アンタには私がいるし、私にはアンタが必要不可欠なんだから」

こんな優秀な参謀役、そうそう見つかるわけがない——彼女は朗らかに笑った。信頼に満ちた青い瞳に、エルガンは思わず表情を緩ませる。かすかに痛む心には蓋をして、「わかつている」と頷いた。

女性は訝しげに眉をひそめた。前科持ちのエルガンを信頼していないようだ。しかし、それもすぐに悪戯っぽい笑みに変わる。幼い頃から見てきたけれど、笑い方は全く変わっていない。懐かしさに、そっと目を細めた。

穏やかな気分になったのは久しぶりである。普段はアレハンドロとやり合ったり、権謀術数を張り巡らせたりしていて、常にぴりぴりした空気の中にいた。その道を選んだのは誰でもない、他ならぬ自分だったけれど。

「期待しているよ。だから、お前も期待していてくれ」

エルガンは微笑んだ。その言葉に、嘘偽りはない。

女性は、確実に、エルガンが望む以上のことをしてくれる。過去でも、現在でも、虚憶きよおくの中でもそうだった。

彼女の言動に振り回されたし、逆に自分が彼女を振り回したことだつてある。お互いがお互いの期待に応えながら、ここまでやってきた。

我は牙。／赤き星——ナスカの、10人の子どもたちの1人。

我は牙。／『同胞』の願いへ続く道を切り開いてきた者の1人。

我は牙。／我が相棒と、親友のために未来を切り開く者。

「……うん、いい眼だ」

女性は満足げに目を細めた。砥ぎ済まされた牙は、未だ衰えを知らない。そうやって、来るべき刻ときを待ち続ける。

エルガンはちらりと時計に目を向ける。そろそろ議会が始まる時間だ。正直少しだけ名残惜しいが、行かなくては。今の己の戦場はそこなのだから。

「いつてらつしやい、エルガン」

「ああ。お前もな、＼ベル」

エルガンは女性に背を向けて、部屋を後にする。

議会はアレハンドロ派が幅を利かせ始めた。国連軍発足についてノータッチのエルガンは、傍目から見れば、アレハンドロ一派によって排除されているように見えるだろう。

アレハンドロは気づいていない。自分の野心が、ソレスタルビーイングの踏み台にされるための舞台装置でしかないという事実を。その野心すら、他者に利用されているという事実を。

第1計画は最終段階に入った。エルガンは、アレハンドロが練っている作戦プランの書類を眺める。表紙には大きく、

『オペレーション・デイブレイク』
『夜明けの鐘』と書かれていた。

本来なら、この作戦名を提案するのはアレハンドロ・コーナーではない。ブリタニア帝国の長男、シュナイゼル・エル・ブリタニアである。作戦名の提案で、彼とシュナイゼルは火花を散らしたことがある。

アレハンドロが提案したのは『オペレーション・フォーリンエンジェルズ』
『天使の落日』と『作戦』だ。だが、彼の案は一次選考で姿を消した。最終選考に残ったのは、シュナイゼルトとトレーズの案である。その一騎打ちに勝利したのがシュナイゼルの案だった。

歯ぎしりするアレハンドロを「ああ、やっぱりこいつは小物だなあ」と眺めていた『エルガン』の気持ちに触れたような気がして、エルガンは少し遠い目をした。しかし、すぐに真つ直ぐ向き直る。扉を開けた先の議会——そこが、エルガンの戦場である。

(さあ、行こうか。無様な真似は晒せない)

扉を開き、アレハンドロと対峙する。

戦いの開始を告げるかのように、議長の開会宣言が響き渡った。



先程の共闘のおかげで、ファーストチームとの和解は成立した……らしい。トリニティの面々は、現在、プトレマイオスに招かれていた。

『1つ、訂正する。……お前たちも、ガンダムだ』

静かな眼差しで、エクシアのパイロットはそう言った。クルー曰

く、「それが、彼女の最大限の賛辞」らしい。回りくどい褒め言葉であつたが、喧嘩別れする羽目にならなくて本当に良かった。ネーナは心から安堵した。

それが、今から数時間前のことである。現在、ネーナはイライラしていて仕方なかった。現在進行形で、別件の大ピンチに陥っていた。そこから発生した苛立たしさを、諸悪の根源にぶつけている真つ最中であつた。

「あんたが、あんたがちゃんとあの女を落とさないからこうなってるんじゃない！ あの女とヨハ兄、もしくは教官がくっついたりしたらどうしてくれんのよ!？」

「そ、それは……その……」

ネーナはヒステリックに叫びながら、リヒテンダールをどついていった。どつかれているリヒテンダールは、終始困った表情を浮かべながら、煮え切らない返事を繰り返している。

「男なら甲斐性見せなさい！ さっさと押し倒して、既成事実の1つや2つくらい作っちゃえばいいのよ!!」

「いきなりハードル上がった！ ただでさえ、イケメン2人とのツーショット写真を取られて『あ、勝ち目無いや』って凹んでるのに!!」

そう言つて、リヒテンダールは恨めし気にクリステイナの背中を見た。現在、彼女はヨハンやノブレスと会話している。前者は本人が目の前にいて、後者は通信機越しからである。

ヨハンもノブレスも、ネーナにとつては大切な人たちだ。前者は大切な兄だし、後者は想い人である。この女——クリステイナ・シエラはネーナに負けず劣らずの面食いであり、ミーハーであつた。

クリステイナは、ヨハンとノブレスに恋愛対象としての興味を示している。彼女は「ネーナのお兄さんと教官ってイケメンだよね」と話しかけてきた。地雷をぶち抜いた自覚もなさそうである。

昔の自分だったら、そう言ったクリステイナをスローネドライで強襲していただろう。だが、ネーナは寸でのところで踏み留まった。これもまた、教官の教えのおかげである。

表情を引きつらせるネーナを尻目に、彼女は言った。ヨハンは外見が、ノブレスは内面がイケメンであると。そこには諸手を上げて同意するが、兄と教官を彼女に渡したくはない。

新たなライバル出現にギリギリしていたら、隅の方で同じようにギリギリしている男を見つけた。それが、現在ネーナが八つ当たりをしている男——リヒテンドール・ツエーリであった。

どうやらこの男、クリステイナに片思いをしているらしい。

こいつがクリステイナとくっつけば、ヨハンやノブレスを奪われる心配がなくなる。向うも似たようなこと——ネーナがノブレスとくっつきつつ、ヨハンを引き離してくればクリステイナを奪われる心配がなくなる——を考えたようで、自分たちは利害関係から共闘することになったのだ。

勿論、ヨハンとミハエルも諸手を上げて協力してくれた。むしろ、リヒテンドールに「クリステイナを攻略してくれ」と土下座していた。勿論、リヒテンドールは（最終的に）二つ返事で頷いてくれたが、勝利までの道は長く険しい。自分と似たようなタイプの人間を恋愛対象にすると、攻略する側は難儀するということを初めて知った。

「こういうときこそヴェーダの出番じゃないの!? ——あ、そうか。あれはポンコツだから逆に無理か」

「ついでに、第3者からハツキングされてるツスからね。もしかしたら、そっち方面の改竄も……」

「むしろしてほしい。特に、あたしと教官、あんたとあの女がくっつく可能性を重点的に」

「そんな無茶苦茶な……。テイエリアが聞いたら怒り狂いそうな内容ツスよ」

2人は深々とため息をつき、頭を抱えて蹲る。

もしかしたら自分は、厄介で難儀な相手を好きになってしまったのかもしれない。

そんな予感が、頭から離れてくれそうになかった。

蛇足だが。

「あの2人、仲がいいのねー」

(……あれ、なんでモヤモヤするのかしら)

『そうだな』

(ネーナが楽しそうで何よりです。彼女は、元気がいい方が似合う)

向うで会話していたノブレスとクリステイナがこんなことを言いながら、そんなことを考えていることを、ネーナとリヒテンダールはまだ知らない。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

44. さよならまでの足音

『あの人たちは、本当の喜びや悲しみを知っているのでしょうか？』

数時間前に、リオが言っていた言葉が頭によぎった。

長い洞窟を進めば、その先に、自分を生み出した張本人——テラズ・ナンバー5がいる。グランドマザー直属の端末であり、惑星アルテメシアを統括する機械だ。

ジョミーの成人検査で、ジョミーから14年間の記憶を奪おうとし張本人でもある。まことに、因縁深い相手だと言えよう。

今も尚、奴は人々の想いを奪い、弄び、消去し、壊し続けている。その連鎖を断ち切るのだ。でなければ、また、何度も同じことを繰り返す続ける。

自分と同じ思いをする子どもたちが、何人も現れることになるのだ。そんなことはここで終わりにする。

そうして、奴が隠し持っているであろう青^テ星^ラへ至る座標も手に入る。ソルジャー・ブルーの遺志を、叶えるために。

(見えた)

洞窟の奥から光が差した。そこにあつたのは、水が流れる岩場を模した、巨大なコンピュータ端末である。あれが、テラズ・ナンバー5の本体。青^テい星^ラへの座標を有する端末であり、ジョミーの因縁の相手だ。

アルテメシアの中で育った人々。家族と共に生活し、成人となった14歳でその記憶の一切を消去される。楽しかった記憶も、哀しかった出来事も、みんな忘れさせられてしまうのだ。そこで積み重ねてきた想いも、幸せも、悲しみも——そのすべてを、奪われる。

「自分の両親だと思っていた人間が、実は血縁関係のない養父母たちである」と知っても、ジョミーにとっては大切な記憶だった。そこ

で重ねられてきた想いは、機械や制度によって作られたものではなかった。あれは本物だったと、胸を張って言える。

(その日々を……記憶を奪うもの——！)

ジヨミーは手をかざした。青い光が収束する。自分たちを生み出した元凶を、人間たちを歪ませた張本人の末端を、破壊するために。撃ち放ったサイオン派は、緑の光——シールドによって阻まれた。ジヨミーは驚き、周囲を見渡す。

「無駄です、ジヨミー・マークス・シン。この聖域は、何人たりとも近づくことはできません」

姿を現したのは、テラズ・ナンバー5。姿も物言いも、ジヨミーが14歳で遭遇したときから変わっていない。

たらこを模したようなフォルムに、能面のような顔がついている。無機質で不気味な赤い瞳が、こちらを静かに見据えていた。

『『ミュウ』は秩序を乱す。お前たちは存在してはならない』

その判断が、どれだけ多くの『同胞』を苦しめてきたのか。

その制度が、どれだけ多くの『同胞』を死に追いやってきたのか。

ここまで至るまで、何がジヨミーを突き動かしてきたのか。

機械ごときに、わかるまい。

ジヨミーは眈を釣り上げた。テレキネシスで跳躍し、サイオン波を纏って、テラズ・ナンバー5に突撃する！

浮かんでいた幻影を通り抜け、その一撃は、ジヨミーのサイオン波を阻んだバリアとぶつかった。火花が爆ぜ、高熱がジヨミーを焼き切るうと襲い掛かった！

「うわあああああああああああ！」

ジョミーは苦悶の声を上げた。それを見たテラズ・ナンバーは嘲笑する。

「そのまま、電磁シールドの熱に焼かれて死ぬがいい！」

爆ぜる紫電に圧されても、ジョミーは引かない。大きく目を見開き、力を込める。脳裏に、犠牲になった人々の顔が浮かんだ。

ナスカの警備中に事故にあったユウイ。トオニイを失い発狂した挙句、能力の暴走で命を落としたカリナ。ナスカに残ることを選び、滅びの運命を共にしたキムやハロルドたち。そして、メギドと相打ちになり命を落としたソルジャー・ブルー。

彼らの想いを、ジョミーは背負っている。人類に、『ミュウ』の存在を赦さない世界を作るよう教育するグランドマザーたちを野放しにしておけない。青^テ星^ラへ帰るために、どれ程の犠牲を出そうとも、立ち止まるわけにはいかないのだ。

青い光が、バリアを打ち破った。サイオン波が、テラズ・ナンバー5の本体を撃ち抜く！ 馬鹿な、と、最期の悲鳴を残してテラズ・ナンバー5の映像が掻き消え、本体のコンピュータが派手な爆発を引き起こした。光が晴れ、がれきが散乱する。

岩場が丸々なくなつたためだろう。ジョミーの足元は、透き通つた水で満たされていた。歩みを進めれば、ばしやんと水の音が響く。

ジョミーは懐からバングルを取り出した。親友のサムが、成人検査を受ける前のジョミーに手渡してくれた「親友の証」である。

「……サム」

ジョミーは親友の名を呼び、バングルを手放した。それは小さな水しぶきを上げて、水の中に沈む。

踵を返したジョミーは、振り返ることなく、外へ向かって歩き始めた。

青^テい星^ラの座標が出たのは、ジョミーがテラズ・ナンバー5を撃破してから程なくのことだった。

リオの報告が来たのは、空が茜色に染まった頃。自分が生まれ育った惑星、アルテメシアの夕焼けを見たのは何年ぶりだったのかを考え続けていたときだった。

その報告を聞いたトオニイが表情を輝かせる。無邪気な横顔は、青年に近い外見であるにもかかわらず、不相応の幼さを際立たせていた。

リオは静かに目を伏せる。緑の瞳には、懐かしさと感慨深さに満ち溢れていた。

そういえば、ジョミーが初めて接触した『ミュウ』は、他ならぬリオだった。

『あの日……貴方を救い出してから、長い月日が経ちました』

彼の言葉に、ジョミーは静かに頷いた。

リオの言葉通り、ジョミーが彼らに救われ、『ミュウ』として生きる決意をしたときから、長い月日が流れた。14歳だったジョミーは青年となり、ソルジャー・ブルーの遺志を継いで『青^テい星^ラへ帰る』悲願を叶えようとしている。

ナスカの大地で、失われた命を思う。ナスカの大地で、最期まで生きることを選んだ人々の想いを悼む。ここまで来るまで、何人もの『同胞』たちが命を落とした。彼らの生きた姿を、自分は片時たりとも忘れてはいない。

『キム、カリナ、ユウイ、ハロルド……』

「マーク、ラナロウ、エターナ、クレア……——そして、ブルー」

ジヨミーはリオの言葉を引き継いだ。

「大切な人たちが、いなくなってしまうた」

彼らの遺志を抱いて、ジヨミーは今、ここにいる。眩いばかりの夕焼けが、ジヨミーを拒絶するように輝いていた。

たとえ人類が自分たちの道を阻もうと、これからどれだけの犠牲が出ようと、決して自分たちが歩みを止めることはない。

すべては受け継いだ意志のために。すべては、『同胞』たちの未来のために。青い星^テへの道^ラを切り開く。

『ソルジャー。我々は、……我々は、青い星^テへ……！』

リオがジヨミーの心を後押しするように／＼ナスカで散ったソルジャー・ブルーの想いを届けようとするかのように訴える。ジヨミーは階段から立ち上がった。

「行こう」

新緑の瞳が見据えるのは、ブルーが帰りたいと願った青い惑星^{わくせい}。すべての命が生まれ落ちた楽園——青い星^テ。

「道は、開かれた」

ジヨミーの言葉を聞いたリオとトオニイが頷く。ジヨミーはもう一度、沈みゆく夕焼けを見上げた。故郷アルテメシアの夕焼けを目に焼き付ける。

おそらく自分は、二度と、この故郷の夕焼けを目にすることはないのでろう。漠然とした予感に突き動かされるようにして、ジヨミーは故郷の夕焼けを眺めていた。

丁度、キリのいいところまで読み終えた。

(……テラズ・ナンバー……)

挿絵に描かれていたコンピュータの端末は、以前どこかで見たことのあるデザインをしていた。たらこを模したような白い物体。

モラリア戦役で、アイデアを苦しめていた敵とよく似ている。いや、形からしてそのものだ。架空の存在が現実にも存在している？ そんなバカな。

まあ、それはいいとして。

「最終決戦、か」

物語も、現実も、決着の刻ときが近い。

そんな予感を抱いて、今日もまた1日が始まった。そうして、終幕——ソレスタルビーイングとの最終決戦、『オペレーション・ディブレイク夜明けの鐘』作戦——へのカウントダウンが近づいていく。

現在、フラッグは突貫工事の真っ最中。「この調子でいくと、決戦の最終段階ギリギリになりそうだ」というのが、ビリー・カタギリ技術顧問の見解である。

ダリル、アキラ、ジョシユアの3人は、宇宙で行われる作戦に参加していた。作戦の途中経過は上々で、『緑と白基調のガンダムを戦闘不能に追い込んだ』らしい。

結局、最終的にはソレスタルビーイングの撤退さしてしまった——とは、通信連絡をしてくれたフラッグファイターたちの報告である。今までは7:3の判定負けをしていた各国軍にしてみれば、大した成果だろう。上層部の連中が浮かれる様子が目に浮かぶ。

今まではソレスタルビーイングのアジトすら見つけられなかったのに、今回は普通に発見、および奇襲をやったのけたそうだ。その情報源について、クーゴたちが知り得るところではない。気になつてはいるものの、自分の権限では閲覧許可が出なかった。

「うまく言えないけど、作為的なものがあるよな」

「明らかに人為的なものだな」

「新型機——ジnkクスを、さも『自分たちが開発しました』とばかりに宣伝している部分が、特にね」

クーゴの言葉に乗っかるような形で、グラハムとビリーがうんうん頷いた。丁度目の前にあるテレビは、ユニオン軍のお偉いさんが新型機発表と対ソレスタルビーイング殲滅作戦について記者会見を行っている。

新型機ジnkクスの試金石である第一段階は終了。ここから本格的に、ソレスタルビーイング殲滅戦へと移行していくことは明らかだ。そのために、ジnkクス製造のピッチも早くなっているらしい。数が揃うまで待つことになりそうだった。

「技術の提供元についても、情報が公開されないんだ。一体誰があのドライブを提供してくれたんだろう……」

「候補としては、『悪の組織』である可能性が高そうだが……」

「ノーヴル博士が否定してたよ。『我が会社では、他者の殲滅そしきに使う技術など取り扱っておりません！』ってさ」

考え込んだビリーに、グラハムは思い当たる企業の名前を出す。『特殊で画期的な技術提供』をメインとする会社は、そこくらいしか思いつかないためである。しかし、グラハムの予想は外れだった。

おまけにビリーの物まねを聞く限り、『新型機の技術提供先は『悪の組織』』説はノーヴル・クルーガーの逆鱗に触れたらしい。聞いているだけで底冷えしてしまいそうな口調だったためだ。

一歩間違えれば技術提供を打ち切られてしまいそうな気配が宿っている。大丈夫だったのかと問えば、ビリーは「即死と致命傷は辛うじて免れたよ」と遠い目をした。成程、重体に近い状態らしい。

疑似太陽炉搭載機はソレスタルビーイング殲滅の切り札となるだろう。その意図や意味を、ノーヴルは知っていたに違いない。『悪の組織』からしてみれば、企業理念とは相いれないものだ。怒る気持ちもわからなくはなかった。

クーゴは格納庫に視線を向けた。眼下では、ノーヴルが現場の人間と何かを話し合っている様子が伺える。技術提供打ち切りを免れるための人身御供になったのは、クーゴが搭乗する予定のカスタムフラッグであった。

どうやら『悪の組織』も実験したいことがあるらしく、提供された新型ドライブ——疑似太陽炉に魔改造を施すのだという。完成したばかりの新型ドライブを更に改造するとは、どう考えてもリスクと問題の比重が高い。タチの悪い賭けごとではないか。

(……俺、大丈夫だといいなあ)

人間卒業に近い己のことを思い返し、クーゴは遠い目をした。前回の偽ガンダム襲撃事件で、データ上『何度も即死を繰り返した』はずなのに、五体満足で帰還したためである。満身創痍だったグラハムでさえ、人類の枠組的な意味で“危ないレベルらしいが、幾分か、自分の方が問題の度合いが高い”。

そんなことを考えていたとき、端末が鳴り響いた。メッセージの送り主は『エトワール』——もとい、アイデア・クピティーズである。互いに多忙だったため、連絡が来るのは久しぶりだ。

「近々休暇を貰う予定。久々に会えませんか？」というメッセージに込められた背景が『視え』で、クーゴは目を伏せた。彼女は、世界がソレスタルビーイングに最終決戦を挑もうとしていることを察している。

アイデアたちからしてみれば、たった5機のガンダムでジンクスの大

部隊を倒さねばならないのだ。多勢に不利どころか、否応にも、死を念頭に入れておかねばやっていけない状態であることは明らかであつた。

クーゴがメッセージを読み終えたとき、丁度いいタイミングでグラハムの端末が鳴つた。彼は端末を開き、文面に目を通す。翠緑の瞳が大きく見開かれた。驚き困惑しながらも、グラハムは口元を緩ませる。

刹那からのメッセージが来ると、グラハムはいつも、そんな風に表情を変える。どうやら、ソレスタルビーイングは色々と心の準備をしているらしい。自分はどうかだろう、と、クーゴは真面目に考えてみた。

——難しいどころの話では、ない。

「最後の休日、か」

ぼそりとグラハムは呟くようにして格納庫を覗んだ。そこには、急ピッチで突貫工事が行われるフラッグの姿がある。我慢強い男には、色々と思うところがあるらしい。

おそらくこれが、アイデアとの最後の会話になるだろう。クーゴにはそんな予感がしていたし、グラハムだって、刹那と交わす最後の会話になることを察しているはずだ。

ソレスタルビーイング側に属するアイデアおよび刹那のことも考えると、多分、今このときが数少ないチャンスではなからうか。そこまです考えたとき、クーゴの手は自然と端末を操作していた。

詳しい日付を教えてほしいと送れば、程なくして、アイデアから休暇の日取りが提示される。その中で、丁度、クーゴの休暇と重なる日付があつた。了承の返事を送り、待ち合わせ時間等を話し合う。

段取りがついたのを確認して端末を閉じれば、煤けた笑みを浮かべるビリーが目の前にいた。羨望の眼差しがざくざくと突き刺さってくる。どうやら、彼が熱を上げるリーサ・クジヨウとは進展がないようだった。

そんな親友の隣で、グラハムも端末を閉じる。彼もまた、刹那と約

束を取り付けたのであろう。待ち遠しそうに微笑む彼の横顔に、ほんのわずかだが陰りが見えた。グラハムもまた、『分かった』のだろう。

「その様子だと、キミたちも最終決戦かい？」

「まあ、そんな感じかな？」

「そうだな。確かに、最終決戦だろう」

「……そちらの戦果も、ぜひ聞かせてほしいな。後学のために」

ビリーの問いに、クーゴとグラハムが濁すような返答をした。それを聞いたビリーは更に燃え尽きたような表情を浮かべる。今にも泣いてしまいそうだった。彼の性格を考慮すると、確実に、グラハムのやり方は適さない。

純情奥手を地で行く男、ビリー・カタギリには、常に全力全開で突っ込んでいくグラハム・エーカーの恋愛論は無茶が過ぎるレベルだ。尤も、恋愛に無縁の道を行くクーゴ・ハガネは論外である。何かを言えるような資格はなかった。

世界は止まらない。加速を速めていく。その中核にあるのは、積りに積もった憎しみだけだ。強制的に統一されていく矛先もまた、ソレスタルビーイング——特に、刹那・F・セイエイが許さないと願ったことではないのだろうか。クーゴには、なんとなくそう思えてならなかった。



「命の色って、何色だと思う？」

アイデアの問いかけに、マイスターたちは大きく目を瞬かせて振り返った。アイデアが唐突なのは今に始まったことではないので、「唐突

だな」と仲間たちは苦笑する。

決戦間近ということでもピリピリしていた空気が、ほんの少しだけ和らいだ気がした。こういうときだからこそ、心に余裕が欲しいと思っただのだろう。

珍しく、面々は話に乗っかることにしたようだ。

「難しい質問だね。哲学みたいだ」

「今まで、そんなことを考えたことなかったもんなあ」

アレルヤとロックオンが首を捻った。普段、そんなことを考える機会なんてないからだ。それは、真剣に考えるべき問題ではないとわかってる。

けれど、状況が状況だけに、真剣に考えごとをしたくなるのだ。たとえ、平時では軽く流してしまうような、くだらない雑談であろうとも。

普段なら「くだらない」と一蹴しそうなティエリアや刹那も、イデアが振った話について考えていた。2人の横顔も、真剣そのものであった。

「……赤、じゃないのか？」

刹那は確かめるように問いかけた。おそらく、彼女は戦場でよく見た色を連想したのだろう。いつ、命を奪われるか——その瀬戸際で戦い続けていた刹那らしい答えだ。

「血の色だから？」

「ああ」

「成程。そういう考えもありだね。他には？」

イデアは悩み続けるロックオン、アレルヤ、ティエリアに問いかける。

「そう簡単に答えられないよ」

「頭にぱつと浮かばないんだよな」

アレルヤとロックオンが苦笑した。これは、個人の感性に左右される質問だ。そこに正解はない。

しかしながら、常日頃から念頭に置いていないと、いざ問いかけると答えに窮する問題ではある。

「そういうお前はどんなんだ？ イデア」

テイエリアがこちらに問いかけてきた。以前はイデアを「貴様」呼ばわりして嫌っていたが、最近は態度が軟化しつつある。それはとてもいい傾向だ。

尤も、テイエリアが一番敬意を払っているのはロックオンだ。テイエリアはロックオンを「貴方」と呼ぶ。彼がロックオンに対し、1番心を開いている証拠だ。

他にも、対等の相手に対しては「キミ」という呼称を使う。イデアの場合は、まあまあ認められる相手と妥協し始めている様子だった。

ソレスタルビーイングの運命が近づけば近づくほどに、反比例するかのように絆は深まり、結束は強まっていく。滅びの道を転がり落ちていく中で、自分たちが立って前を向ける起爆剤のひとつだ。

彼らと一緒にソレスタルビーイングにいられて、本当に良かった。この先にどんな未来が待ち受けていても、イデアは迷うことなく歩いて行ける。イデアは仲間たちを見つめながら、そんなことを考えた。

閑話休題。

命の色について、刹那以外のマイスターは思い当たらないようだ。何か確証を抱いている、イデアの答えが気になるらしい。

「――青」

イデアははつきりと答えた。青、と、他の面々も復唱する。

「それまた、どうしてだい？」

アレルヤが意外そうな顔で問いかけた。それに答えるようにして、イデアは窓に視線を向ける。面々も、追いかけるようにしてイデアと同じ方向を見た。

視線の先には、青く輝く惑星がある。地球——人類が生まれ落ちた星にして、すべての命の故郷。命が生まれ、育まれ、消えていく循環を繰り返している。

宇宙から見る地球は、宝石を思わせるように青く輝いていた。その美しさに目を細める。青く輝くこの惑星の上で、争いが起こっているなんて信じられない。

「命が生まれた星だから、こんなにも綺麗な青なんだろうね」

「言われてみればそうだな。ここから見ると、地上が戦争やつてるって言われても信じられない」

イデアの言葉に同調するように、ロックオンも地球を眺めて目を細めた。成程、と、アレルヤ、テイエリア、刹那も頷く。

どこまでも青く輝く星に、仲間たちは見とれていた。命がある故に、この星で生まれ育まれてきた遺伝子を受け継いだが故に、誰もがこの星に魅入られる。

ソレスタルビーイングを立ち上げたイオリア・シュヘンベルクも、青い星の姿とその美しさを知っていたからこそ、そこで生まれ育った人類を信じたのかもしれない。

託された想いは、今でもここにある。イデアは仲間たちを見返した。彼らと共に、託された想いを背負って、その理想を体現する。道の険しさを知っていて、だ。

「ところで、休暇はどう過ごす？ 私は地上に降りようと思ってるん

だ」

地球を見ながら、イデアは問いかけた。
他の面々は目を瞬かせた後、それぞれの予定を話し始める。

「俺は、妹に会って来ようと思うんだ。……弟の方にも会いたいけど、多分、そっちは無理だろうな」

ロックオンは苦笑した。

「僕は用事がないから、宇宙に残るよ」
「僕もだ」

アレルヤとティエリアも頷く。面々は、刹那のほうに視線を向けた。

「……俺も、地上に用事がある」

自分の端末をちらりと見つめながら、刹那は抑揚のない声で告げた。ほんのわずかに耳が赤い。それが何を意味しているのか、仲間たちは察したらしい。

ロックオンが楽しそうに笑い、アレルヤが微笑ましそうに頬を緩ませ、ティエリアが呆れながらも目を細める。イデアもニマニマ笑みを浮かべた。

イデアの表情を見た途端、仲間たちは恐ろしい勢いで顔面蒼白になり、刹那を庇うように踏み出す。が、彼女と一緒に数歩後ずさりした。人とは、共通の敵を持つ相手と結束する生き物だ。どうやら、いつの間にかイデアは4人の共通の敵になっていたらしい。前々からその気はあったけれど、実際目の当たりにすると何とも言えない気持ちになる。

イデアはふうと頬を膨らませた。なんだか自分だけのけ者にされ

たような気がする。それを見た4人は何を思ったのか、顔を見合わせた後にこちらへ向き直った。どこか意地悪いというか、趣返しをしてやろうという目をしている。

「ね、イデアは地上で何をやるの?」

アレルヤが問いかける。ロックオンとティエリアがそれに続いた。

「用事の内容を、詳しく聞かせてもらえないか?」

「普段、俺たちのことを根掘り葉掘りしてるんだ。お前さんだって、根掘り葉掘りされる覚悟はあるよな?」

『撃つていいのは、撃たれる覚悟がある者だけだ』

不意に、虚憶きよおくで出会った戦友の声が聞こえてきた。黒の騎士団を率いた仮面の指揮官、ゼロ。中の人はブリタニア帝国の皇子、ルルーシュ・ランペルージ／ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア。

彼の言葉は間違っていない。けれど、その理論で世界に争いをまき散らした男がいたことも事実だ。『撃たれる覚悟があるから、自分は好きに撃つていい』——そいつは、己の生まれた意味を放棄し、思うがままに力を振るった。

まあ、イデアもそれに近い思考回路にいる。必要最低限の常識やモラルはきちんと守っているつもりだが、あくまでも「自分の尺度」のため、周囲の人間がどう思っているのかはわからない。ゼロの言葉が自分に降りかかってきたわけだ。

イデアは笑った。途端に、仲間たちが凍り付く。自分は、オロオロするのを予想していた彼らを見事に裏切ったらしい。ふふふ、と笑い声を漏らせば、マイスターたちは「しまった!」と言わんばかりに表情を絶望に歪めた。

こちらは堅実に、ひっそりと、じりじりと、外堀を埋めにかかっているのだ。

その戦況報告を、誰かにしたくてしたくて堪らなかつた。

——ただ、それ以上に、他人の恋愛の方が気になっていただけであつて。

「聞きたい？」

「い、いや……」

「その……」

「ええと……」

アイデアの笑顔に、男どもはさきつと視線を逸らした。

先程までの悪い笑みは、何とも情けない表情に変わっている。

「聞いてよ。どうせ、まだ暇なんでしょう？　そこにいる2人もね」

「ぎくっ！」

「ううっ！」

通路の角に視線を向ければ、丁度そこに、リヒテンドールとクリステイナの姿があつた。いつから気づいてたの、と言いたげな眼差しが突き刺さってくる。

この2人は、アイデアが「命の色は何色か」とマイスターたちに問いかけた時点から、通路の角に居合わせていた。最初から、と微笑めれば、6人は絶望的な表情を浮かべる。

「私もまだ時間があるから」と付け加えれば、この場にいる全員が、諦めたように天を仰いだのだつた。



テオは現在、病院の207号室にいた。エイミー・テイランデイの

お見舞いのためである。

相変わらず静かな病室だ。花瓶には、白百合とナスカが花を咲かせている。前者はエイミーの兄——ニール・ディランデイが、後者は2番目の兄——ライル・ディランデイの恋人が活けたものだろう。彼女はナスカの花を育てていた。

いや、『悪の組織』に関係する面々の多くが育てていると言っても過言ではない。テオもその中の1人だ。最近は無沙汰のため、世話は知り合いたちに任せっきりになってしまっているが。

「へえ、お兄さんが来たんですか」

眠り続ける少女の横で、テオは相槌を打つ。第三者がいたら、不気味な光景であろう。

テオは会話している。まるで、意識不明以外の人間が傍にいるかのような気さくさで。

『また来る』……確かに、この状況だと厳しいかもしれませんが。ソレスタルビーイングに対し、各国は殲滅戦を仕掛けようとしていますし」

そう言っ、テオはテレビのスイッチを入れた。映し出されたニュース番組では、ソレスタルビーイング殲滅作戦について軍のお偉いさんが演説している。彼らの裏で糸を引く男の存在が『視えて』、テオは顔を顰めた。

男のことは知っている。アレハンドロ・コーナー。国連大使であり、国連代表のエルガン・ローディックを毛嫌いする男であり、ソレスタルビーイングの監視者であり、イオリア計画を乗っ取り世界を支配しようとする存在であった。

アレハンドロは先日、同じ監視者であるハーヴェイ一族の根絶やしにかかると言っていた。近々、汚れ役として舞台に立つことになるだろう。そちらが片付けば、次の片付ける対象は——。

テオは思考を中断させた。

そんなことよりも、と、鞆の中からタブレットを取り出してエイミーに示す。

彼女は眠ったまま、微動だにしない。テオは構わず報告を始めた。

「ホワイトベース、完成しましたよ！ テスト結果は先日の通りです！ あとはクルーの確認だけです。メインクルー関係は、艦長に一任しますよ」

しばしの沈黙。

「……副艦長と戦術指揮兼任でハーレイ・カルム、ニキ・テイラー、操舵にゼル・クロー、ブラウ・ロディア、エマ・セリスイ、ヒルマン・ノツテ、通信士にジュナス・リアム、整備士にケイ・ニムロッド、ゲストにフィシス・デア、カリナ・エヴァンジェロ、整備と通信士兼務でヤエ・ミナカタ、雑務と通信士兼任でラ・ミラ・ルナですか。大半が超兵機関にいた後に『目覚めた』子たちですね。……で、MS部隊のチーム構成は？」

再び沈黙。

「アスル・インディゴ、マーク・ギルダー、ラナロウ・シエイド、クレア・ヒースロー、エターナ・フレイル、エルフリーデ・シユルツ、ユウイ・アスカ、キム・バートン、ハロルド・ベイらを中心とした構成ですね。了解しました。近いうちに、要請がかかると思います」

テオは微笑み、タブレットをしまう。丁度そのとき、端末が鳴り響いた。誰からの着信かを知っていたテオは、忌々しそうに顔を歪ませる。

メッセージを確認すれば、案の定、アレハンドロ・コーナーからであった。内容も、テオが思っていた通りのものだった。深々とため息

をつく。

本当はもう少しエイミーと話していたかったのだが、仕方がない。別れの挨拶をして、立ち上がる。そのとき、また着信が入った。

今度の相手は、テオに馴染み深い人たちだった。彼らの近況報告と、別行動の自分を気遣うメッセージがあった。テオは静かに頬を緩める。

不意に、テオは振り返った。エイミーは相変わらず眠り続けている。また沈黙が落ちてきた。しばしの間を置いて、テオは自慢げに微笑む。

「——ええ。大切な『教え子』たちです」



「例の子、『目覚め』たのね」

女性は端末を開いて、情報を確認した。

「ドライブの魔改造も、報告を見る限り、いいペースで進んでるじゃない。これなら疑似太陽炉搭載型フラッグ完成にも響かないし、ユニオン側から文句が出ることはなさそうね」

他には何かないだろうか、と、女性は情報を確認する。

エルガンの方はアレハンドロの静観および監視を行っているし、ノブレスやリボンズも同じように奴の駒として動きつつも監視を続けている。イデアの方は、マイスターの1人が片目を負傷したらしい。スナイパーにとっては致命的だったが、再生治療を拒んで前線に立ち

続けるそうだ。

何とも言えない予感を感じて、女性は宇宙を見上げる。別れの星。誰との別れを意味するのか、女性はなんとなくだが『わかつて』いた。最初から、彼はそれを見越していたに違いない。わかつていて、それでも希望を抱き、希望を目にすることを夢見て眠っている。

「無事に目が覚めたら、見たいものがある」と、彼が笑っていた遠い日のことを思い出した。「目覚めることができる可能性は皆無だ」とも。——きつと彼は、希望を見たいと思いつたときから、自分の運命を察していたのだ。女性の持つ能力とは別の方面から。

それでも、彼は笑うのだろう。「それで希望が紡げるならば、安いものじゃないか」と。

流星は我が夫、そこに痺れるまた惚れる。……惚れるのだけれども。

「それって、生き急ぎって言うんじゃないの？」

女性は、問いかけるようにして呟いた。

返事を返す相手はいない。そして、返事が返ってくることもない。

「自分の理想に殉ずるのは勝手なことだけだし、置いていかれる側からしてみれば、たまったものじゃないんだよ」

噛みしめるようにして、女性は弱々しく息を吐く。いつかわかると人は言うけれど、その犠牲の上に立つ自分が言えた義理ではないけれど、いつか自分もその選択をする日がくるのだと『わかつて』いても、納得できないことはある。

そうやって、沢山の人が託して散っていった。希望を、祈りを、願いを、意志を受け継いで、女性は今、ここで生きている。今このときにもまた、誰かが自分たちにすべてを託して逝くときが近づいてきていた。——次の相手は、間違いなく、彼。

「……貴方はそれでいいのね？ 本当に、そうするのね」

「ひどいひと」と、口が動いた。脳裏にフラッシュバックしたのは、複数の叫び声。

子守唄のように聞こえていた言葉の意味を、今ならはつきりと理解することができる。

悲鳴だ。愛する者を失ってしまった人々の嘆き。

『どうして!?! どうして私の大切な人は皆、私を置いて逝ってしまったの!?!』

『ユウイ、トオニイ！ 私を1人にしないで!!』

友人の母親が、悲鳴を上げて泣き叫んでいた。

彼女は己の能力を暴走させた果てに、愛する人の幻を見ながら死んでいった。

その死に顔は、まるで眠っているかの様子だったとクルーから聞いた。

『言った、だろう？ エターナ。……俺は、キミを、1人にしない、と……』

『……ありがとう、マーク』

瓦礫に潰れた伴侶の手を取って、友人の両親は息絶えた。

唯一の救いは、最期の最期に伸ばした手が届いたことだろう。

『やだよ、こんなの嫌だ……！ ずっと一緒だつて言ったじゃない！ 約束破らないでよ、ラナロウ!!』

『……つたく。本当にお前は、しょうがねえな……クレア』

血まみれになって息絶えた父の傍を、母は最期まで離れなかった。

両親は最期まで、滅びゆく星と共に命を散らした。

娘の故郷で、意識不明となった娘の目覚めを待ち続ける——その願いに殉じたのだ。

「——『連れて行って』、か」

感傷に耽るように、女性は再び宇宙そらへと思いを馳せる。

そうして、静かに目を閉じた。——もうすぐ、さよならが訪れる。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

幕間。刹那・F・セイエイたちが見た “永遠《ゆめ》”

斜陽の光が差し込む、赤茶けた大地。そこが、刹那・F・セイエイの故郷——クルジス、あるいは現在のアザディスタンの風景であった。

刹那が知っている空は、血のような赤が目刺さるような、煤けたものだ。空と言われれば、刹那は真つ先にこの光景を頭に思い浮かべる。それ以外の空を、あるいは世界を知ったのは、『神』と出逢ったときのことだった。

美しく澄んだ青い空を知った。鉛色の雲で淀んだ空を知った。深く飲み込まれるような群青の海を知った。天高く聳える灰色の摩天楼を知った。果てしなく広い草原があることを知った。『神』のコックピットから見た光景は、今も色褪せない。

砂塵の舞う赤茶けた大地に、刹那は立っていた。どこへ行く当てもなく、刹那は歩みを進める。一步踏み出すたびに、砂と靴底が擦れる音が響いた。ざく、ざく、ざく、と、足音と足跡が刻まれていく。どこまで行っても、赤い大地と煤けた空は変わらない。

永遠に続くかと思われた光景に、唐突な変化が現れた。赤茶けた大地に、一輪の花が咲いている。淡いピンクの花を鈴なりに咲かせた花だ。

母が「近所から貰ってきた」と言って育てていた花と、よく似ている。花の名前も教わったような気がしたが、思い出すことはできなかった。

(これは……)

ふと顔を上げて向うを見れば、まるで刹那を導くかのように、花の道が出来上がっていた。赤茶けた大地の向う側に、点在する様々な色を包み込む緑と澄み渡る青空が見える。綿雲が悠々と流れて行った。

自分が馴染んだ光景と違う世界に惹かれたのか、刹那の足はそちらに向かつて動き出す。緑の中に見えた色とりどりのものは、美しく咲

いた花だった。その中には、先程見かけたピンクの花もある。

花が咲き乱れる草原を、刹那は行く当てなく歩き続けていた。自分の知る風景とは違って、どこまでも長閑な風景が広がっている。ふと、刹那は足を止めた。向うに一本の大樹が聳え立っていた。

大樹の向う側は、なだらかな下り傾斜の丘になっているようだ。長く伸びた緑の中に、花の色よりも鮮烈な金色が見えた。見覚えのある、眩しい色。

思わず刹那は息を飲んだ。この場所に「彼」がいるなんて、思ってもみなかったためだ。

「彼」は刹那の気配を読んだのだろう。寝っ転がっていた姿勢から上体を起こし、振り返った。

「やあ、少女」

「グラハム・エーカー……」

太陽を彷彿とさせるような、眩しい笑み。普段と変わらない、どこか自信に満ち溢れた表情を浮かべたグラハム・エーカーがそこにいた。彼は目を細めた後、空へ向き直る。

「こうしていると、とても気持ちがいいぞ。刹那もどうだ？」

「あ、ああ」

グラハムは微笑みながら、己の隣に位置する場所を示した。断る理由がない刹那は、彼の勧めに従い、グラハムの隣に腰かけた。

刹那が座つたのを確認した彼は、再び芝生に寝転がる。眼差しは、果て無く広がる空へと向けられた。翠緑の瞳は静かに細められた。

刹那はまじまじとグラハムの横顔を見つめた。透き通った白い肌に、眩い金髪。宝玉を思わせるような緑の瞳は、揺るがぬ意志を宿しているかのようだ。こうして見ると改めて気づくのだが、端正な顔立ちをしている。彼の言動を顧みると、それが、かえって「顔立ちの良さを帳消しにしてしまう」ところが残念であった。

視線に気づいたのか、グラハムは刹那のほうに向きなおった。真摯な眼差しがこちらを射抜く。すべてを見通すような宝玉に、刹那は思わずたじろぐ。まじまじと見つめられると、どう反応していいのかわからなくなってしまうのだ。グラハムは何が面白いのか、ふっと表情を緩めた。愛おしそうに、緑の瞳は刹那を映している。

「初々しいな、キミは。そこも魅力的だが」などとグラハムは笑う。余裕綽々という言葉が似合うような表情であった。何とも言えぬ感情に振り回されているのは刹那だけのような気がして悔しい。それを言葉に出したら負けてしまいそうな予感がして、刹那は沈黙することを選んだ。きつと、自分の顔や耳は真っ赤になっているだろう。

常に全力投球しすぎて落ち着きのない人間のように見えるクセして、そののない奴だ。刹那は心の中で悪態をついた。本気半分、照れ隠し半分であるが。

グラハムはのんびりと空を眺めている。刹那もそれに倣い、空を見上げた。

どこまでも澄み渡った青が広がっていた。永遠、という、ありもしない言葉が頭によぎる。

芝生に寝っ転がり、空を見上げ、体を起こしては沈黙を楽しむ。そんなことを繰り返して、どれほどの時間が過ぎたのだろうか。

いつの間にか、空は茜色に染まっていた。斜陽。何かの終わりを示すかのよう、沈みゆく太陽の光が突き刺さってくる。

なぜだろう。この光景を見ると、言いようのない焦燥感が去来する。刹那は思わず、服の襟元を握り締めた。

「刹那」

隣で空を見ていたグラハムが、上体を起こした。夕焼けの光を遮るように、彼は刹那を見つめる。どこまでも真剣な眼差しに、刹那は一瞬、息をすることを忘れてしまった。

「——このまま2人で、逃げてしまおうか」

グラハムはそう言って、微笑む。彼の言葉を理解できなくて、刹那
はぼかんと彼を見返した。

目の前にいる男は、冗談や嘘を言って楽しむような性格ではないは
ずだ。こいつは一体、何を言っているのか。

「逃げてしまおう。このまま2人、誰も知らないような遠い所へ。
……刹那は、どこへ行きたい？ 私は、キミと一緒にならば、どこだつ
ていい。キミがいる場所は、私にとって天国と同義だ」

甘美な誘惑。抗い難い響きを持って、その言葉は刹那の耳や心へ沁
みていく。しかし、刹那は首を振った。

あなたは、そんなことを言うような男ではないだろう。そんな嘘
を、冗談を言うような男ではないはずだろう。

非難を込め、刹那は眦を吊り上げグラハムを睨む。それを見たグラ
ハムは大きく目を見開き、何度か瞬きした。

彼は微笑む。申し訳なき半分と、寂しさと哀しさが半分混ざったよ
うな笑い方だ。今にも消えてしまいそうな儚さに、刹那は、自分が「間
違つてしまった」ことを悟る。

しかし、どうしようもないことだ。逃げられない現実を、刹那はき
ちんと見据えている。だからこそ、グラハムの言葉には答えられな
い。馬鹿な夢だと断じること以外、何も。

「あなたはひどい男だな、グラハム」

彼の言葉は、刹那が刹那たる理由を踏みにじるような嘘だ。真綿で
首を締めるような、心地よくも悲しい嘘。そんな夢物語に浸れるよう
な頭でいたら、刹那はソレスタルビーイングのガンダムマイスターで
いられなかっただろう。

グラハムは眦を下げる。口元には静かな微笑。翠緑の瞳はどこま
でも澄み渡っていた。

嘘ではないよ、と、彼は言う。その表情は悲しみに満ちているが、嘘偽りは一切ない。

本気の眼差しである。すべてを理解したうえで、グラハムは言うのだ。そんな夢物語を。

「俺は、あんたに応えられない。それは、あんたが一番知っていたことじゃないのか？」

「……そうだな。すまない、今の戯言は忘れてくれ」

グラハムを断じるように刹那が言えば、彼は静かに目を閉じた。もう二度と言わない、と、彼は大仰に頷く。

自分勝手なように見えて、他者に対して誠実な男だ。意味不明に見えて、何を考えているのかわかりやすい男でもある。

「……でも、そんな夢を見るくらいなら、許されるような気がする。——たとえ、残酷な運命^{みらい}が目の前にあつたとしても、あんたがいる場所ならば……そこは、俺にとっても『大切な場所』だろうから」

刹那は微笑んだ。グラハムは酷く驚いたように目を瞬かせたが、安堵したように穏やかな笑みを浮かべた。楽園や天国なんて、刹那は信じていない。

そんなものが現実にあるとしたら、そこはきつと、彼がいる場所のような気がする。漠然とした確証があつた。

いつの間に、自分たちはこんなにも惹かれあつてしまったのだろう。今となつてはもう、わからない。けれど、この選択に後悔はしていなかった。

日差しが沈む。空に広がったのは、満天の星。

グラハムは慈しむような眼差しを向けてきた。こそばゆさを感じながらも、刹那も彼を真正面から見返す。

自分たちが対峙するであろう宇宙^{そら}で、また会おう——グラハムの眼差しに応えるように、刹那は頷いた。

気づいたら、そこは公園のベンチだった。草原もなければ、先程まで隣にいたはずのグラハムがない。

しばし目を瞬かせた後、ようやく刹那は、先程の光景が夢だったことに気づいた。

(夢は、人の心を表す……)

よく聞く話を思い出す。もしそれが真実であるならば、刹那は。

(……重傷だ)

真つ赤になった顔を抑えて、深々とため息をついた。首元のシエルカメオを握り締める。

本当に、どうして、自分はこうなってしまったのだろう。

変わっていく世界の中で、ソレスタルビーイングに属する者たちも変わってきている。刹那もまた、その1人だ。恋だ愛だ幸福だとかいう単語とは、縁がないとばかり思っていたのに。

変わりゆく世界の中で生きる者ならば、尚更変わらざるを得なかっただろう。グラハムもまた、その1人だ。彼自身に大きな変化は見られないように思うけれど、彼を取り巻くものは着実に姿を変えている。

大半の人間が流されていくのに、グラハムは流されていない。踏みとどまり、世界の流れの奥に潜む悪意を見極めようとしている。アンノウンと対峙しボロボロになったフラッグを、ユニオン基地に送り届けたときのことを回想した。

『……すまない。私では、一矢報いるので手一杯だった』

『好敵手失格だな。……キミの誇りを汚した相手に討たれそうになっ

ただけでなく、その危機を、他でもないキミに助けられるとは』
『だが、今回の一件で、私はますますキミに惚れ直したよ。それでこそ我が好敵手だ。……尤も、私の方が、キミの好敵手を名乗るに値しないのかもしれないが』

命を削るかのように、アンノウンと鏢迫り合いを繰り広げたグラハム。血反吐を吐いた彼が真っ先に告げたのは、刹那の誇りを汚した相手を仕留めそこなったことに対する謝罪だった。こんな自分は好敵手に相応しくないかもしれない、なんて、珍しく弱音まで吐いていた。痛々しいまでもの笑みが脳裏によぎる。

刹那は無意識のうちに、服の襟元を握り締めていた。その手は、小刻みに震えている。

深く深く息を吐いて、どうにかそれは止まってくれた。丁度いいタイミングで、待ち人の気配を感じ取る。

人ごみの向う側に、彼はいた。高級なスーツを身に纏った、金髪碧眼の白人男性——グラハム・エーカー。

「やあ、少女」

待ち合わせ時刻丁度。彼は迷うことなく刹那を見つけて、小さく手で合図した。

この男は、海のようにざわめく人ごみだろうと、真っ暗闇であろうと、必ず刹那を『見つけ』られる。視力がいいのはパイロットの条件であるが、グラハム曰く、「キミへの愛の強さだよ」ということらしい。彼の言うことが「分からないわけではな」くなりつつある自分自身が、刹那にとつては何とも言えなかつたりする。刹那がそんなことを考えていることなど露知らず、グラハムは刹那の座るベンチへとやって来た。

グラハムは許可を取ることもなく、当たり前のように、刹那の隣に腰かけた。以前だったら文句の1つもぶつけてやったのだが、今はそれを受け入れている自分がある。

むしろ、彼が隣に来ないで突っ立っていることが珍しいと認識するレベルだった。刹那もまた、グラハムに絆されてしまったらしい。後悔はしていないが、複雑な気分だ。

次に会うときは戦場。互いの正義を掲げて激突することは目に見えているのに、それが苦しいことは明らかなのに、どうしてそれを手放せないのだろう——そう、昔の自分が問うていた。

昔の自分の問いかけに、刹那は答えられない。答える術を、まだ知らない。

何の気なしに、刹那は周囲を見渡してみた。夢で見た光景とよく似ている。透き通った青空には、ちぎれた綿雲が悠々と泳いでいる。眼下に広がる芝生には、色とりどりの花が顔をのぞかせていた。混迷する世界など知らぬかのような、穏やかで平和な風景が広がっている。箱庭か、あるいは砂上の楼閣か。この状況を形容できそうな言葉が、浮かんでは消え去っていく。それを口に出すことは憚られた。おそらく、その単語を口に出してしまえば最後、文字通り崩れ去ってしまいそうな予感がしたためであろう。刹那は、継りつくような心地でいたことに気づいた。

「今日は、どうする?」

久々の逢瀬だ、と、グラハムは笑った。

いつもと変わらない、眩い笑みだった。

自然と刹那の頬も緩む。

「特には、考えていなかった」

刹那の言葉に、グラハムは目を見開いて瞬かせた。ややあって、彼は提案するかのように問いかけてきた。

「行きたい場所の希望がないのなら、私に付き合ってもらえないだろうか?」

「ああ、構わない。呼び出したのは俺だからな」

グラハムの申し出に、刹那は静かに答えた。その答えを聞いて安堵したのか、グラハムは静かに目を細める。今日の彼は、いつにも増して大人しい印象を受けた。

普段はこれよりも数倍テンションが高い。愛の言葉を絶叫するはずなのだが、今日は鳴りを潜めている。こいつは本当にグラハム・エーカーなのかとたじろぎかけてしまう程、今日の彼は静かだった。静かすぎた。

もしかしたら、グラハムも覚悟を固めているのかもしれない。今日が、『最後の休日』になる可能性が高いということを見野に入れているのだろう。

「では、行こうか」

清々しい笑みを浮かべたグラハムは、微笑みながら手を差し伸べた。刹那はほんの一瞬たじろぎ躊躇ったが、意を決してそれに答えた。

握り返したらその手が失われてしまうのではないか——なんて、馬鹿なことを危惧していたことに気づく。どう考えても、あり得ないことだ。

案の定、刹那の危惧していたようなことは起きなかった。当たり前のことだというのに、その事実にくく安堵している自分がいる。

刹那はほんの少しだけ、グラハムの手を強く握る。それを察したのか、グラハムは刹那の手を静かに握り返した。まるで、「大丈夫だ」と告げるかのように。

不思議だ。どうしてだかわからないが、グラハムと一緒にいると、希望が見えるような心地になる。具体的なものも、その根拠もないはずなのに。刹那はひっそり首を傾げた。

自分の変化に驚いているのは刹那自身だ。けれど、その変化を「悪くない」と認識する自分自身には、もっと驚いている。これもまた、変

化の1つだった。



「彼女に似合うものを探しているんだ」

グラハムにエスコートされて、着いた場所は煌びやかな服屋であった。

ショーウィンドウに飾られていたのは、絢爛豪華なドレスやスーツが中心である。上流階級の男女が夜会で着るような服ばかりだ。到底、刹那には縁のないと思わしき洋服だった。どうしてこんな場所に連れてこられてしまったのだろう。

刹那が悩む間もなく、グラハムの言葉に頷いた店員によって、半ば拉致されるように引っ立てられてしまった。様々な服と飾りを持ってこられたが、刹那には煌びやかな服に関する知識など皆無だ。胸元のシエルカメオを外されない限り、何をされても、「はあ」と困り果てることしかできない。

あまりにも反応がなさすぎる刹那では埒が明かぬと踏んだのか、店員はグラハムにお伺いを立てていた。グラハムもまた、真剣な面持ちで店員と話をしている。刹那はただ、彼らの着せ替え人形に徹すること以外、何もやることがなかった。

それから時計の針はどれ程進んだのだろうか。

何着の服を着ては脱いでを繰り返したのかわからなくなった後で。

「——ああ、これは美しい。まるで女神のようだ」

ドレスを着せられた刹那を見たグラハムは、満足げに目を細めた。

どうか、彼が満足するような風貌に至れたらしい。

試しに、刹那は鏡に映った自分を確認してみた。女神かどうかは知らないが、そこには1人のうら若き淑女が映し出されている。

ビスチェ形態の上着にスカートを付けたイブニングドレス。蒼穹を思わせるような鮮やかな青が目を引く。スカート部分には、チャペルトレーンと呼ばれる長い引き裾が付けられていた。そのため、スカートの長さ自体はショートドレスと同じであるが、引き裾の長さが床につくため、ロングドレスに分類されるらしい。

上着代わりに羽織っているのは白いシヨールだ。ラメの煌めき具合のせいか、純白というよりもホワイトシルバーと呼んだ方がいいのかもしれない。頭には、花を模した青いコサージュに純白の羽があしらわれたヘッドドレスが留められていた。胸元には、刹那の誕生日にグラハムが贈ったシエルカメオが輝く。

気を抜くと、天使のシエルカメオを外されて別なネックレスおよびペンダントを付けられそうになるから大変だった。これだけは頑として譲りたくない(態度で)主張した結果である。店員とのささやかな攻防を知ってか知らずか、グラハムは嬉しそうに目を細め、そのシエルカメオを眺めていた。

半ば呆然とする刹那を横目に、グラハムはさつきと会計を済ませる。空軍エースの財力を垣間見たような気がした。使い方は果てしなく間違っていたが。

「あんだ、一体何がしたいんだ」

店を出て、今度は美容院に足を踏み入れたグラハムに、刹那は咎めるような眼差しを送った。刹那の問いかけに、グラハムは笑みを崩さぬまま振り返る。

「これから向かう場所にはドレスコードがあるんだ。それも込みで、『つき合ってもらえないか』と質問したつもりだったんだが……」

「なら、最初からそう言えばいいだろう」

ぶすくれた刹那を見て、グラハムは鳩が豆鉄砲を喰らったかのような表情を浮かべた。「ああすまない」と、ちよつと困ったように苦笑して、彼は謝罪した。

「一種の賭けだよ」

「賭け？」

「ああ。この逢瀬もまた、一夜の夢のようなものだろうからな。キミが私に『付き合ってもいい』と頷いてくれたなら、それに賭けてみたかったんだ」

彼の言葉に、刹那はふと、数時間前に見た夢を思い出した。青い空に広い草原、「逃げようか」と笑ったグラハム・エーカー。夢を見ることを否定しなかった刹那の言葉に、酷く安堵した男の微笑みが脳裏をよぎる。

今の彼は、聞き入れられるはずがないと思っていた我儘が聞き入れられたことに、驚きと喜びと罪悪感をごちゃ混ぜにした感情を抱いているように見えた。グラハムは苦笑いを浮かべた後、促すようにして美容院の扉を開けた。

髪とメイクも整え終わった頃には、空は夕闇に覆われていた。殆ど準備で時間が潰れたような印象がある。

煌びやかなドレスを身に纏った刹那を、グラハムは上から下まで眺めていた。そうして、満足げに頷く。

言葉にできぬ気恥ずかしさを持って余しつつ、刹那はグラハムのエスコートを甘んじて受けていた。

「ときに少女よ。キミは、好意を寄せる異性に服を贈ることが何を意味しているか、考えたことはあるかね？」

「知らない」

グラハムの問いかけに、刹那はこてんと首を傾げた。その反応に、

彼はひどく面食らったように眉をひそめる。

「何か、意味があるのか？」

「い、いや、その……」

「わからないならいいんだ」と、グラハムは煮え切らぬ様子で話題を打ち切った。そのまま、彼は深々とため息をつく。

どこか自嘲するような横顔だ。何があったのだろうか。刹那の視線に気づいたグラハムは、申し訳なきように首を振った。

自分が汚い存在になってしまった——嘆くグラハムの声が聞こえてきたような気がして、刹那は首を傾げる。彼は何を言っているのだろう。

そうこうしているうちに見えてきたのは、上流階級ご用達の店や施設が集まる、超高層ビルだった。エレベーターに乗り込み、レストラのあるフロアの階が書かれた数字のボタンを押す。程なくして、エレベーターは目的の階へと到達した。

夕闇の向うに一番星が見えた。けれど、ささやかな明りなど気にしないと言わんばかりに、眼下には地上の星々が瞬いている。人の営みが生み出す輝きだ。

その輝きの中で、どれ程の悪意や歪みが蠢いているのだろう。今こうして、刹那が夢に浸っている間にも、世界の歪みはどんどん加速していく。

「キミはいつも、遠くを見ているな」

寂しそうな声が出た。「憂いに満ちたキミもまた愛らしい」なんて、グラハムは微笑む。普段の自信に満ちた笑みからは想像できないほど、優しい笑い方だ。彼もこんな表情をするのか、と、刹那は改めて考

えた。

グラハムは椅子を引いて、刹那を促す。上流階級の人間を思わせるような、徹底したエスコートだ。空を飛ぶことや刹那への愛で色々なものをぶつちぎってしまっていると思っただが、何事もソツなくこなせる人間らしい。

失礼なことを考えているという自覚はあった。それを察されぬように気を付けながら、刹那はグラハムのエスコートに従った。おずおずと腰かければ、グラハムは表情を緩ませた。初々しい、なんて言いながら笑みをこぼす。

「あんたは、何をやっても喜ぶんだな」

「好意を寄せる相手と共にいると、一挙一動から目が離せなくなるのだよ。そのすべてが愛おしくてたまらない」

答えを期待していなかったのに、刹那の言葉にグラハムはさらりと返答した。こつ恥ずかしく気障な台詞も、彼は何の躊躇いもなく言うてのける。その言葉に目を細めてしまう刹那も重傷だ。

椅子に腰かけたグラハムは、蕩けてしまいそうな微笑を浮かべて刹那を見つめている。それが、刹那にとってはどうもむず痒くてたまらなかつた。「照れくさい」と、刹那は目を逸らした。

慣れぬ空気に戸惑う自分を気遣うように、グラハムは余裕を持って刹那をリードする。そのおかげで、会話を楽しめるようになってきた。

雑談に花を咲かせながら、料理を食べ進めていく。気づけば食後の飲み物が配膳されてきた。それを見て、夢のような時間に終わりが来たことを察する。

最後の休暇ユメには幸せすぎる時間だった。刹那が噛みしめるようにグラハムの一挙一動を眺めていたとき、グラハムがそわそわし始めた。

刹那がこてんと首を傾げれば、何か覚悟を決めたようにグラハムは前を向いた。

「夢は、いずれ覚めるものだ。けれど、まだ、それに浸ることが許されるならば——……」

テーブルの上に置かれたのは、どこかの宿泊施設にある部屋の鍵だった。鍵に刻まれていた施設名を見て、エレベーター内の施設案内に同じ名前が載っていたことを思い至る。確か、このレストランより上の階に入っていたのではなからうか。

賭け。その言葉が刹那の脳裏によぎった。祈るような眼差しで、グラハムはじっと刹那を見つめていた。翠緑の瞳。数時間前に見た夢で、グラハム・エーカーが「逃げよう」と言ったときに見せた表情と同じだった。刹那は思わず息を飲む。手は反射的に握り拳を作っていた。

それを見たグラハムは大きく目を見開く。

刹那が彼の変化に気づいたとき、グラハムは弱々しく微笑んだ。何かを諦めてしまったかのような、傷ついた横顔。

「すまない。キミに失礼だったな。もう二度と口に出さないよ」

「現実を受け止めて前に進もうとするキミだからこそ、私は惹かれたんだ」——グラハムはそう言って、宿泊施設の鍵へと手を伸ばした。その腕を、刹那は反射的に掴む。

何事かとグラハムが目を瞬かせる。

刹那はじつと、グラハムを見上げた。

「夜明けまで、まだ時間はある」

絞り出すように／自分に言い聞かせるように、刹那は言った。グラハムの翠緑の瞳が大きく見開かれる。

今はまだ、夢から覚める時間ではない——その意味を込めて彼を見据えれば、グラハムの口元が戦慄いた。

安堵したように穏やかな笑みを浮かべたグラハムを見て、刹那も頬を緩ませる。

この先に待ち受ける運命は、きつと、悲しみに満ちている。それを知っていて、自分たちは手を取ることを選んだ。その選択に後悔はない。

刹那は迷うことなく、グラハムから差し出された手を取った。グラハムもゆるりと目を細める。翠緑から注がれるのは、惜しめない愛情。

(ああ、なんて愛おしいのだろう)

刹那は静かに目を細めた。

彼を幸せにしたいと思っていたのに、気づけば刹那の側だけが幸福になっているような気がする。人を幸せにするというのは難しい。

グラハムが微笑む姿を見る度に、彼も幸せであってくれるのではないかと思うのだ。そんなこと、あるはずがないのに。

そうあつてほしい、と、刹那はひっそりと祈る。意気揚々と部屋へエスコートするグラハムの背中と横顔を眺めながら。



「夢から醒めるなら、今のうちだぞ? 少女」

酷く切羽詰った表情を浮かべ、グラハムは己の襟元からネクタイを引き抜いた。2人分の重さを受けたベッドのスプリングが軋む。普段は眩い宝玉のように輝く翠緑の瞳が、獣のような凶暴さを宿していた。

刹那を求めてやまぬのだと、その眼差しは訴えている。男女交際に

疎い刹那であるが、このまま「仲良くお泊り」だけで済むとは思って
いなかった。それを期待してなかったのかと問われると、どう反応し
ていいのかわからないが。

逃げてもいいとグラハムは言う。部屋に入って早々に刹那の唇を
奪った程我慢弱い男ではあるが、彼はきちんと逃げ道を作ってくれて
いた。刹那が拒否すれば、彼は即座に自分を解放するだろう。そう
やって、自分たちの夢に終止符を打つ。

けれども。

「言ったはずだ。……『夜明けまで、まだ時間はある』」

刹那はまっすぐにグラハムを見返した。何をどうすればいいのか
なんて全然わからないが、それが刹那の本心である。

伸ばした手がグラハムの顔に触れる。いつかのときと同じように
彼の頬を撫でれば、グラハムは泣き出しそんな笑みを浮かべた。

また、口を塞がれた。ん、と、鼻にかかったような呼吸が漏れる。貪
るような口づけを何度か交わした後、彼は掠れた声で問いかけてき
た。

「ときに少女よ。キミは、好意を寄せる異性に服を贈ることが何を意
味しているか、考えたことはあるかね？」

「知らない。……あんだ、さっきも同じこと訊かなかったか？」

「そうだな」

グラハムはくつりと笑った。刹那は怪訝そうな表情を浮かべ、問い
返す。

「それが、どうしたんだ？」

「……『その服を脱がせたい』ということだそうさ。丁度、こういうこ
とだよ」

グラハムの腕が刹那の背中に回される。ホワイトシルバーのストールが肩から外れ、ベッドを伝うようにして床に落ちた。外の外気にさらされ、肌寒さに身を震わせる。次の瞬間、グラハムの手が肩に触れた。

酷く熱を持った手に、先程とは別の意味で体が震えた。は、と、弱々しく刹那は息を吐く。次の瞬間、ファスナーが下がる音が聞こえた。ビスチエ形態のイブニングドレスは、ファスナーで着替えるタイプのものだ。

脱がせたいというのはそういうことか。意識しただけで、頭が沸騰してしまったかのような気分になる。いっばいっばいの刹那を見て、グラハムは手を止めた。不安そうに表情が曇る。余裕なんてないくせに、それでも奴は刹那を気遣っていた。

刹那は口元を緩めた。その気遣いが、その優しさが、温かさが染み渡っていく。

言葉の代わり／グラハムが行動で示したように、こちらも行動で示す。

急に動いたせいか、刹那からの口づけは、半ばぶつかるような形になってしまった。驚いたように固まったグラハムは、ややあって、嬉しそうに目を細めた。

「……あえて言おう、刹那。——私はもう、止まらないぞ」

獣の目に戻ったグラハムは、再び刹那に口づけた。こういふときも、刹那はグラハムに振り回されっぱなしである。

それがやや癪であることは確かだが、嫌ではないのも本心であった。もう、自分たちは止まらない。止まらないし、止めれない。

夢に溺れていく中で、刹那はぼんやりとそう考えていた。じきに、考えている余裕もなくなったが。

そうして、自分たちは。

長い、長い間、一緒に過ごしたのだった。

◆
夢を見た。

あたりは薄暗くて、けれど、長らく慣れ親しんできた気配に顔を上げる。薄闇の中でも映える金髪と翠緑は、紛れもないグラハム・エーカーのものだ。

彼の眼差しは、言葉にしない代わりとでも言わんばかりに、刹那への慈しみに満ちていた。蕩けてしまいそうな微笑を浮かべ、グラハムは刹那の髪を梳く。

理由は分からないが、体がだるい。けれどどうしてだか、温かいもので満たされているような心地になる。母親の腕の中にいるかのように、刹那は安心していった。

「まだ、夢から醒める時間ではないよ、刹那」

こちらを労わるような響きに、刹那はぼんやりと瞬きする。ああ、こいつも気遣いができたんだな、と、馬鹿なことを考えた。

グラハムは刹那の髪を梳いていた。心なしか、何かを楽しんでいるように見える。何が楽しいのかと問う気力は、刹那にはなかった。

相手が上機嫌ならば、それで充分だ。刹那はゆるりと目を細めた。それと同じタイミングで、眠気が差してくる。

意識を落とすにはまだ早い。どうしてだかはわからないが、刹那には予感があった。まどろみに沈みながらも、懸命に意識を留まらせる。

グラハムが何かを言っていた。刹那に語りかけているかのようでもあるし、独白のようにも聞こえる。聞き逃してしまうのは惜しい気

がした。

「いつだったか、キミは言ったな。『結局この手は、何かを壊すことしかできない』、『グラハム・エーカー^私を幸せにするなんて、できるはずがなかった』と」

グラハムが微笑む気配がした。

彼の表情は、うすぼんやりとしか伺えない。

「それは杞憂というものだ。……心配無用、私は既に幸せだよ。このまま、永遠にまどろんでいたいくらいに」

けれども夢は醒めるものだ。グラハムだつて、それを承知でここにいたのではないのか。声に出せない代わりに、刹那は眼差しで訴える。

刹那の感情が伝わったかのように、「失礼」と、申し訳なさそうな声がかかる。眉をハの字に曲げて苦笑するグラハムの顔が見えたような気がした。

彼はしばらく刹那の髪を梳いたり、額や頬をかすめるようなキスを落としたり、頬に触れたりと好き放題やっていた。刹那も黙って好きにさせていた。

ややあつて、グラハムは口を開く。

「『永遠よりも長い時間の中で切り取られた、一瞬よりも短い時間』。
刹那・F・セイエイ
キミの名前の意味、だったな……」

一言一言、噛みしめるかのような響きを宿して。

「その名前の通りだったよ。私は、永遠を見たんだ。キミという存在……そして、キミと過ごした日々^{せつな}の中に。現に今、この瞬間も、私は永遠を見ているんだ」

もう少し。もう少しだけ。
あと1秒でも長く、彼の声を聞いていたい。

「たとえこの夢が終わって、目醒めた先にある現実には過酷な運命が待ち受けていようとも。積み重ねてきた日々せつながあれば、きつと——……鳴呼。やはりキミは、私の『運命の相手』だよ。……過去も、今も、そしてきつと未来これからも、永遠に」

刹那の願いも空しく、意識は泥沼に引きずり込まれるようにして闇へと落ちていく。

低く心地よい声が言葉を奏でる様は、まるで子守唄のようだった。

そうして、夢から醒めた後で。

刹那とグラハムは、互いに背中を向けて歩きだす。

運命の歯車は、もう止まらない。

夜明けの鐘は鳴らされる。天使の落日は、目前に迫っていた。

幕間。アオミ・ハガネのテコ入れと、それに伴う影響

「あらら。やりすぎたかしら」

アオミ・ハガネはモニター画面を見て、困ったように苦笑した。自分のテコ入れが、思わぬ方向に作用してしまったためである。画面に提示された人物たちの写真と名前には、大きく『死亡』や『行方不明』の文字が躍っていた。

前者は、いかんせん『運が悪かった』としか言いようがない。逆に後者は、確実に仕留めて欲しかった。行方不明になる直前に重傷を負っていたことは確からしいが、医療機関で治療を受けた形跡はない。まともに治療していないとしたら、死亡した線が濃厚だろう。

まあいいかと、アオミは流した。抜けてしまった穴を埋める方法はいくらでもあるし、状況の修正も行える。よくよく考えれば、敵となりうる存在の戦力を減らすことができたのだ。自分の知る『知識』からは大幅に逸れるものの、こちら側へのデメリットは皆無に等しい。

テコ入れするための準備は、着々と進めている。現在、一番の懸念材料はイレギュラーたちの部分だ。特に、ユニオン軍のオーバーフラッグス部隊に所属していたアオミの弟——クーゴ・ハガネの存在である。奴はグラハム・エーカーの副官であり、本来死すべき定めのある者を救い上げた張本人であった。

ジョシユア・エドワーズとハワード・メイスン。前者は完全にピンピンしており、新機体ジnkクスに搭乗し『オペレーション・ディブレイク夜明けの鐘』作戦』に参戦している。後者は重傷であるが、この戦いが終わるころにはリハビリを終えて完全復帰できる見通しだ。

定めと言えば、ダリル・ダッジも似たような立場にいた。アオミの『知識』通りに進めば、ダリル・ダッジも命を落とす。ガンダムを相手にした仲間たちの戦死が、グラハム・エーカーを歪ませていくはずだった。『知識』通りに進まない現実には、アオミは苛立たしげに息を吐いた。

(“彼”の刃は、この舞台に必要な不可欠なのに)

アオミの『知識』の中では、人間でありながらガンダムマイスターと互角に戦える、数少ない人物であった。

リボンズ・アルマークや、他のイノベイドたちも、彼をそう称した程だ。

「何としてでも、戦力に引き入れないと。どこかに方法は……」

苛立ちをぶつけるようにしてキーボードを叩く。画面には、グラハム・エーカーの顔写真と経歴がちらちらと表示された。

考えなければならぬ。彼に歪みを与え、4年後の世界で“仮面の男”となってももらうためには。邪魔者であるイレギュラーを処分するためには。

幾何かの時を置いて、アオミはデータを保存して電源を落とした。

「こんなものかしら」

端末画面を確認し、アオミは楽しそうに目を細める。「先日完成した新型ガンダムをテストしたい」という“彼女”の報告も聞きたい。万が一のことと有している『知識』の部分から、護衛——アリー・アル・サーシエスも一緒に送り出したから大丈夫だろう。

もう少ししたてば、チーム・トリニティが壊滅。そこで、刹那・F・セイエイがサーシエスと対峙し追いつめられる。時を同じくして、アレハンドロ・コーナーはイオリア・シユヘンベルクのカウンターアタックに直面するだろう。トランザムが解放され、それで彼女が奴を撤退させる——。

アオミは有する『知識』をなぞりつつ、テスト中である“彼女”と作戦を確認する。あくまでも、今回の目的は『チーム・トリニティの壊滅』だ。そちらが済み次第、“彼女”には「サーシエスに後始末を

任せて離脱」してもらおう手はずとなっていた。

「彼女」やサーシエスの機体にも、トランザムシステムは組み込まれていた。

但し、前者は「ソレスタルビーイング製ガンダムの目の前では使ってはいけない」と釘を刺し、後者は「サーシエスが使えないように改造し直した」が。

(サーシエスには『知識』通り退場してもらわなきゃいけないから、悪い意味で「奴の強化に繋がりそうな要素」は排除。「彼女」の場合は、あの機体ならスローネシリーズを撃破するなんて、赤子の手を捻るようなものよね)

問題は、チーム・トリニティの教官を務める男が乗る機体——レガンダムだろう。ブラックボックスの解析がうまくいかなかったため、正確な強さがわからない。

解析できている部分だけを参考にすると、「彼女」が搭乗する機体の方に軍配が上がる。だが、相手はアオミの『知識』が届かないイレギュラーなのだ。注意するに越したことはない。

端末から途中経過が届いた。自動で送信されてくる報告に目を通す。現在、「彼女」が搭乗する機体は、チーム・トリニティの面々を乗りものにしてている真っ最中だという。

「成程。本当のことを言っちゃったのね。『お前たちは使い捨てられるために生み出された、ガンダムマイスターの「出来損ない」』……。それなら、トリニティの面々が戦意喪失して動かなくなっちゃうのも当然か」

端末画面に映し出されたのは、武装すべてを切り落とされたスローネたちだ。対抗する術を失った3機のガンダムが大地に転がっている。

今頃、コックピットに座る兄妹は、愕然とした表情で絶望と対峙し

ているだろう。彼らが教官と慕う男が来る様子はない。

これなら何も問題ないだろう。アオミは満足げに微笑んで、次の情報を確認する。国連軍の軍隊は、作戦のために宇宙に留まっていた。

「こつちも報告待ちか」

アオミは端末をしまい、ソファに腰かける。

世界は自分の掌の上。

その事実を噛みしめながら、静かに瞼を閉じた。



「アルヴァーシス・ジス・ライヒヴァインという名前を覚えていますか？」

ラグナ・ハーヴェイが、亡霊を見たかのような表情でこちらを見上げている。

無理もない。自分の一族が殺した人間が目の前にいるのだ。信じられないのは当然だろう。

「あ……アルヴァーシス・ジス・ライヒヴァイン……!? まさか、貴様
は——」

「——ああ、その表情。……ますます、貴様の祖父にそっくりだ」

ノブレス・アムは吐き捨てるように言い放ち、奴の胸倉に銃を突きつけた。ラグナは悲鳴を上げる。

「知らない。わ、私は何も知らないんだ……！ 祖父が犯した罪とは無関係だあ!!」

「貴方に見ればそうでしょうね。ですが、僕からしてみれば、貴様ら一族はどいつもこいつも一緒ですよ。僕たちが生み出した技術を盗み、自分のものとして、ここまでの発展を遂げ、富を得てきたのですから」

ノブレスの言葉を聞いたラグナは、涙と鼻水でまみれた醜悪な顔を歪ませた。本来だったら、ラグナの祖父にあたる男がここで泣き叫んでいたはずだった。しかし残念なことに、奴は寿命という死神によって葬られてしまっている。

この場に第三者がいたら、復讐の刃を収めろと諭されるのかもしれない。しかし、ノブレスは復讐心だけに駆られて銃を向けている訳ではないのだ。安全装置を外し、引き金に手をかける。ラグナは顔面蒼白になった。

「何故だ!?! どうして、どうして我が一族だけが……! ライヒヴァイン家の事件で、実際に手を下したコーナー家は!?! 貴様が使われているコーナー家こそ、本来の復讐対象ではないのか!?!」

殺すなら、そちらの方が先だろう——ラグナの表情は、そう訴えている。

彼の言葉を聞いたノブレスは、ゆっくりと微笑んだ。

自分は今、薄ら寒い笑みを浮かべているだろう。ラグナの表情が凍り付いた。

「大丈夫ですよ。もう少し時間が経過すれば、じきに、貴方もアレハンドロと顔を合わせるようになります。——あの世でね」

「積もる話もあるでしょうから、そのときにゆっくり話せばいいでしょう」と、ノブレスは笑った。

この瞬間まで、本当に長かった。今までの時間を思い出しながら、ノブレスは目を細める。

嘗て、ソレスタルビーイングの監視者一族に名を連ねていた名家があった。虚憶きよおくから得た技術を駆使する学者にして、異邦人の系譜を持つライヒヴァイン家。

かの一族は、コーナー一族／一派の野心に気づいていた。監視者の一族として彼らを告発し、イオリア計画を歪めるものとして、監視者から追放しようとしていた。

しかし、彼らの動きを事前に察知したコーナー一族とその一派によつて、事故に見せかけられ、一族露頭皆殺しにされた。その事件は不審火で片付けられてしまっている。

今から60年ほど前に断絶した血筋の人間が、今も生き残っている。だなんて、ハーヴェイもコーナーも予想できなかったのだろう。

「何故今更、姿を現したんだ!? 復讐にしても時間が経ちすぎている……!」

「時間? そんなもの、僕にとっては関係ないことです。尤も、今の僕には、復讐以前に果たさねばならない務めがある」

「つ、務め……!?!」

ノブレスの言葉に、ラグナは茫然とこちらを見上げた。それに応えるようにして、ノブレスは屹然と奴を睨む。

「真の監視者として、告げる。貴様のような汚らわしい者の存在を、許しておくわけにはいかない」

この瞬間を待ち望んでいた。

研ぎ澄ました牙を向く、1回目。今まで生き永らえてきた理由。務めを果たす刻ときは来た。

イオリアの祈りを裏切っただけでなく、私利私欲に走るためにライヒヴァイン家を根絶やしにした一族の末裔を——裁く。

「裏切り者、ラグナ・ハーヴェイ。お前はいなくなれ」

躊躇うことなく引き金を引いた。破裂音が響き、ラグナの体が大きく跳ねる。ややあつて、こと切れたラグナの体が、糸の切れた人形のように崩れ落ちた。

ノブレスは無感動にそれを見つめる。果たすべき務めを果たしたのに、何の感慨も湧かなかつた。まだ終わりではないと自覚しているからだろう。

本当に狙うべき獲物。手をかけるには、まだまだ時間が必要だ。拳銃をしまい込んだのと同じタイミングで、ノブレスの持っていた端末が派手に鳴り響いた。

暗号通信。送り主は、ヴェーダ掌握の手続きを進めるリボンズ・アルマークのものだ。

新たなアンノウンの出現。そいつの攻撃により、トリニティ兄妹が危険な状態に陥っているらしい。

ノブレスは即座に『飛んで』、レガンダムのコックピットに転移した。操縦桿を動かし、彼らが戦っているポイントへ向かう。

(くそっ、よりもよってこんなときに!!)

ノブレスはレガンダムを加速させた。もうこれ以上、何も失いたくない。奪われたくはないのだ。

絶望に満ちた声が『聞こえる』。死ぬために生み出され、使い潰される命。自分たちはすべてから見捨てられてしまったと嘆く声とする。トリニティ兄妹のものだ。

彼らを追いつめる声が『聞こえる』。一番信頼していた人間が助けに來ないことが何よりの証拠だと、女が嗤っていた。その声には聞き覚えがある。

どうやら、本当の意味で危険度が高かつたのは、アレハンドロではなかつたようだ。今となつては後の祭りである。ノブレスは舌打ち

した。

伝家の宝刀が頭をよぎる。本来ならば、もう少し温存しておきたかった力である。

しかし、今、『それ』を抜かなければ、伝家の宝刀は伝家の宝刀そある意味ゆえんを失う。

ノブレスが守りたいと願ったものが、失われてしまう。そんなのはもう御免だ。

「――ESP―Psyon起動。GNドライブ、出力、フルブラスト！
量子ワープホール展開！」

ノブレスは躊躇うことなく、ESP伝家―Psyonの宝刀を引き抜いた。同時に、力を発現させる。

サイオンバースト。『同胞』の持つ力を最大限に発揮した。レガンダムレガンダムの眼前に、緑の渦が出現した。機体を覆うかのように、青い光が迸る！

「飛べええええええええええッ!!」

言葉通り、ノブレスは『飛んだ』。先程までは海の上を飛んでいたレガンダムは渦を通り抜け、一瞬で、リボンスから送られてきた座標ポイントへと転移する。

眼下に見えたのは、漆黒の翼を生やした天使。女性的なフォルムには見覚えがある。レギナの系譜となった“とあるガンダム”とよく似たデザインだが、そのMSには翼など存在しなかった。

そのMSのデータは、ヴェーダにも登録されていた。但し、『虚憶きよわくを完全に”再現するとしたら”』というコンセプトだったため、机上の理論で終わってしまったが。

漆黒の翼を生やした機体は、告死天使こくしと呼ぶに相応しい外見をしている。座天使たちに死を告げるため舞い降りたのだろう。そんなこと、絶対にさせない。ノブレスは勢いそのまま、攻撃を仕掛けた。

「人の教え子に、手を出すなアアアアアア！」

！
　　レガンダムはビームサーベルを引き抜き、急降下する。振り返った告死天使は、ビームサーベル代わりに双鎌を構えて攻撃を受け止める！

　　バチバチと火花が飛び散った。鏢迫り合いを繰り広げ、距離を取り、切り結びを繰り返した。金属同士が噛み合うような音が響き渡る。

『そんな……！　ラグナ・ハーヴェイを始末した後だとしても、わずかな時間でここに来れるはずが——！』

　　パイロットの声が『聞こえる』。成程、敵／女はノブレスが『ラグナ・ハーヴェイの始末／肅清に行く』ことを知って、トリニティ兄妹を襲撃した。それなら、襲撃に気づいたとしてもレガンダムはスローネ救出に間に合わない。その間にトリニティ兄妹の真実を暴露し、絶望させ、処分しようとしたのだろう。

　　意地の悪い奴らだ。自分のことを棚に上げながら、ノブレスはビームライフルの照準を告死天使へと向けた。死ぬのは貴様の方だと言わんばかりに撃ちまくる。雨あられのように降り注ぐ攻撃に、告死天使は驚きを隠せない様子だ。パイロットにとって、想定外の攻撃力だったらしい。委縮したような感情が漏れていた。

　　後ろの方から声が『聞こえる』。絶望に打ちひしがれていた、トリニティ兄妹のものだ。

『来てくれた……！　教官が、助けに来てくれた!!』

『教官は、俺たちを見捨てなかったんだ……!』

『教官……!　……ほんの一瞬でも、貴方を疑ってしまった自分が恥ずかしい』

ネーナが、ミハエルが、ヨハンが、希望を見るような眼差しでノブレス／レガンダムをみつめている。ああ、尚更、自分は負けるわけにはいかない。

彼らの教官として、相応しい自分であるために。今度こそ、大切なものを守り抜くために。ノブレスは操縦桿を握り締めた。

『人の心の光』を示した「伊達じゃない」ガンダムが、座天使を葬り去るために降臨した告死天使と対峙する。

戦いの火蓋は切って落とされた。

青い光を纏ったレガンダムは、教え子の運命に挑む。



圧倒されている。自分の駆る新型が、スペックの劣るレガンダムに押しされているのだ。あまりの出来事に、少女は歯噛みした。

シミュレーションは何度も何度も繰り返したし、つい数刻前にはスローネ3機を破壊寸前まで追いつめたというのに。

確かに、少女は元々、パイロットの訓練を積んでいなかった。実践経験はシミュレーター以外積んだことがない。

(力負けしている……!?! 私のがンダムが? 嘘でしょう!?)

世界を変える最強の剣——それが、自分の翔るガンダムではなかったのか。製作者である「彼女」が、少女に嘘をつくとは思えなかった。そこまで考えて、少女は思い出す。

「彼女」は言っていた。『レガンダムのブラックボックス解析は不十分のため、本当の実力は未知数である』と。その、未知に当たる部分が、自分たちに牙を向いたのだ。未知数の部分が想定外だったの

だ。

νガンダムの機体が身に纏う青い光。あれが、解析できなかった未知の部分なのだろう。少女はごくりと生唾を飲み干した。世界を変える剣が折れたら／失われてしまったら、少女はちっぽけな存在に戻ってしまう。

出来損ないの兄のせいで、自分はすべてを奪われた。年相応の幸福も、自由さえも残さずに。だから、世界を変えてやりたかった。

直接は不可能。だから、間接的な方法で世界を動かしたかった。ソレスタルビーイングに出資していたのも、そのためである。

世界を変えたい。その想いの強さに共感してくれた同志がいた。真の変革を成しうる『革新者』として相応しいと言ってくれたのだ。

“彼女”は、少女に力を貸してくれた。その権化が、今、自分が搭乘するガンダムである。この機体は、少女にとっての拠り所でもあった。この機体が敗北するということは、自分の願いが潰えることを意味する。

世界を導く者として、世界を革新する存在となる——世界の変革を見たいと望んだ少女の、新たな願い。本当は成し遂げたかったことを、ガンダムは叶えてくれる。その力を、自分は持っているのだ。そう、世界に示したい。

「私は、幸せになりたい。こんなクソみたいな世界なんて嫌い」

お嬢様にしては相応しくない言葉使いだ。同じお嬢様でありながら、畏まったときと平時を使い分ける“彼女”に影響されたのだから。こんな変化も悪くない。

「私は……私たちは、世界を変える者。その資格を有している。……
そうでしょう？ ——私の告死^{ガンダム}天使」

少女の言葉に應えるように、漆黒のガンダムは輝きを放つ。

そうだ。自分たちはまだ何も変えていない。世界を変えるために、

今を生きている。

世界の変革を成し、変革の行く末を見届ける——それが、少女を突き動かす理由だった。

未知の部分が何だ。少女には、変革を成す刃がある。

切り札はまだ、切られていない。今こそ、それを切るときだ。

「——トランザム！」

少女の声を鍵にして、切り札——トランザムシステムが起動する。漆黒のガンダムは赤い光を纏った。少女の告死天使は即座に武器を展開し、ℓガンダムに攻撃を仕掛ける！

先程、押され気味だった力がひっくり返る。ℓガンダムの速度を軽々と追い抜き、漆黒のガンダムは武装を展開した。距離を取り、大量のワイヤーを撃ち放った。ℓガンダムはファンネルでワイヤーを撃ち落としたが、本命は近接攻撃だ。

少女のガンダムは二刀流の鎌を振り回してℓガンダムを切りつけると、即座に飛行形態へ可変する。勢いそのままℓガンダムを追い抜くと、方向変換して突っ込んだ！ ℓガンダムはすれすれで躲すが、攻撃はまだ終わっていない。

飛行モードからMS形態へ戻り、振り向き様に砲門を向けた。4つのそれは毒々しい赤紫の光を充填させる。ℓガンダムが振り返ったのと、少女が発射スイッチを押したのはほぼ同時。極太のレーザービームが、ℓガンダムに襲い掛かった！

シミュレーターで何度も練習したコンバットパターンだ。優秀なOSと耐G性能のおかげで、全然なんともない。

荘厳で神聖な紫の光がℓガンダムを飲み込む。光がすべてを焼き尽くす直前に、相手が防御を取ったのが伺えた。

それがどうしたと言わんばかりに、光はℓガンダムを焼き尽くす。最後の最後で、こちらの攻撃がシールドの耐久力を上回ったらしい。光が弱まったのと同じタイミングで、ℓガンダムが爆ぜたのが見えた。

砲撃の威力に耐えられず、レガンダムは地面に伏した。ああ、呆気ない——少女は笑う。そうして、感嘆に震えた。これが自分の力なのだ、と。

レガンダムは辛うじて無事だったが、至る所が損傷していた。白い部分は黒く焼け焦げ、間接部分は火花を散らし、あちこちから黒煙を上げている。

(満身創痍、ね)

少女はくすりと微笑んだ。先程まで、相手を恐れていたことが嘘みただった。自分は何を怯えていたのか、と、半ば呆れにも近い気持ちになる。

レガンダムは動かない。このまま鬪り殺しにすることも可能だ。スローネ3機がレガンダムを見る様子は、搭乗したパイロットたちの絶望を反映していた。

彼らの様子を眺めていた少女は、ゆるりと目を細める。それは、力を持つ者故の余裕であり、「気まぐれ」であった。レガンダムとの通信を開く。

通信画面に映し出されたのは、傷だらけの仮面の男。額に傷を負ったのか、仮面の下から血が流れている。その様子は、哀れでもあった。

「最期に、言い残したいことはなくて？」

「……おかしいな。貴女は、そんな性格だったかな？」

最後の慈悲として、少女は男に問いかけた。

対して、仮面の男は意外そうに首を傾げる。

「それが最期の台詞？」

「まさか。ならば僕は、もう少し別なことを言いますよ」

「早くしていただけませんか？ レディを待たせるのは、殿方としてあるまじき行為ですわ」

余裕を失ったが故に地を出した男に対し、少女は茶化すように促す。

男の死は、トリニティ兄妹を更なる絶望に突き落とすことになるだろう。また、彼らを甦ることが出来る——少女の胸が震えた。後ろ昏い喜びに、体中がぞくぞくする。

通信回路からは荒い呼吸が響いてきた。今頃、辞世の句の1つや1つでも考えているのだろう。世界を変える力を持たなかったがゆえに、淘汰される弱き者。その相手に、引き金を引くのは自分。

他者の命を自由に握り潰せるというのは、なんて楽しいことなのだろう。強大な力を握った今の自分ならば、ちっぽけな人間の運命など簡単に変え／歪められる。少女は口元を緩ませた。

何かを決したように、深く息を吐く音がした。

仮面の男の口元は、静かに弧を描いていた。

「……こう見えても、僕は技術者の端くれでしてね。……技術者なら、誰しもが『一生に一度は言ってみたい』台詞があるんだそうです」

「今際の台詞はそれがいいですね」と、男は笑った。死にゆく寸前よろしく、弱々しい声であることには変わりないが。

少女は男を促す。彼は俯いた。何かの覚悟を決めようとしているかのようだ。幾何かの間において、通信が男の声を拾い上げる。

しかし、ノイズが酷くてよくわからない。

「聞こえませんかよ？ もう一度」

「な——も——かと……」

やはり、ノイズが酷くてよくわからない。

「聞こえませんかわよ？ もう一度」

「……こんなこともあろうかと……」

少女が問いかけたとき、突然、男ががばつと顔を上げた。仮面をしていてもわかる、不敵な笑みを湛えて言った。

「こんなこともあろうかとー！」

次の瞬間、レガンダムレガンダムの機体から、青い光が舞い上がる。

否、機体からではない。男が纏うオーラが、機体から溢れる光そのものだった。

そうして、男はダメ押しとばかりに叫んだ。

「……こんなこともあろうかとオオオオオオオオオオオオ!!」



ネーナ・トリニティは見ていた。澄み渡る空のような青い光を纏い、再び空を舞ったレガンダムレガンダムの姿を。

ネーナ・トリニティは見ていた。レガンダムレガンダムの周囲に残像が出現し、告死天使の元へと向かった姿を。

ネーナ・トリニティは見ていた。座天使たちスローネを守るかのように、縦横無尽に飛び回るレガンダムレガンダムたちを。

告死天使はレガンダムレガンダムの群れを撃ち落とす。なのに、レガンダムレガンダムは平気の平左で飛び回っていた。

『確かにレーダーでは撃ち落とすはず……っ!? ——まさか、これが“質量を持った残像”!?』

『しかも脳波コントロールできる！ 僕のサイオンバーストの副産物を応用した結果が、僕のESP—Psyonに反映された、この力だ!!』

どこかで聞いたことのある少女の声に、満面の笑みを浮かべて答えたであろうノブレスの声が『聞こえた』。命を燃やすかのように、レガンダムは怒涛の攻撃を仕掛ける。デコイの目くらましに、告死天使が翻弄される。

残像は『能力発動の副産物で発生する現象』だが、その熱源をセンサーが誤認してしまうために、相手は残像を攻撃してしまう。発生したそれを囷として利用することで、事実上の奇襲戦法となっているのだ。

しかも、『脳波コントロール可能』ということとは、『“質量を持った残像”を、己の意志で縦横無尽に動かすことが可能だ』——というこどらしい。丁度、告死天使を弄ぶようにして飛び回っているように。どこからかノブレスが解説してくる声が『聞こえた』。しかし、今のネーナには、レガンダムと告死天使が鏝迫り合いを繰り広げる光景を見ていることしかできなかつた。

先程までの圧倒的不利を、ノブレスは覆したのだ。その現実を見るだけで、希望が目の前にあるような心地になる。無意識的に、ネーナは操縦桿を握り締めていた。

『それだけじゃあないですよ！ 教え子を酷い目に合わせたツケとして、とくと味わって貰いましょうか!!』

彼の言葉使いに違和感を感じたとき、残像たちが告死天使に向かって攻撃を仕掛けた。レーザーガンを撃ち放つ機体、バズーカの実弾で攻撃する機体、ビームサーベルで白兵戦を仕掛ける機体、ファンネルを飛ばしてくる機体など、様々な攻撃を繰り出す。

それらはすべて、熱源による誤認としての「質量のある残像」ではない。残像ひとつひとつが個体／実像に近い核を持ち、攻撃手段を有している。もはや、実像と言っても過言ではない。——まあ、すべて、『聞こえてきた』彼の説明を要約したものだ。

ノブレスは「実像と同等の残像」を駆使し、1人で数人分の連携を繰り広げる。不意に、300年前日本に実在した芸能人の名前が脳裏によぎったが、口に出してはいけなような気がして黙ることにした。ネーナが脱線している間に、戦況はノブレス優位で進んでいく。

『残像だと侮ることなかれ。当たると痛いですよ！』

『な、なんて厄介なのッ!!』

ファンネルの攻撃を縫うようにして躲した告死天使に、レーザーガンとバズーカの雨あられが降り注ぐ。更にファンネルの第二陣が纏わりつき、舌打ちする少女の声が『聞こえた』。

レーザーが当てにならないせいで、どの残像が本物なのかがわからない。ネーナたちも同じため、残像たちが被弾するたびにハラハラする。その都度、展開された残像が消えないでいる光景に安堵するのだ。

次の瞬間、攻撃の雨あられでガードが緩んだ告死天使の斜め右上から、レガンダムが懐に飛び込むようにして急降下する。各遠距離兵器および白兵戦を仕掛けてくる残像に翻弄されていた告死天使は、反応がワンテンポ遅れた。

しかし、ノブレスにはそれだけで充分だったらしい。次の瞬間、彼は告死天使に向かって蹴りを叩きこんだ！

体勢を崩した告死天使に群がるように、レガンダムたちは殺到する。己の持ちうる武装すべてを展開し、豪雨を思わせるような攻撃を仕掛けた！

いくら機体のスペックが高くても、限界はある。四方八方から降り注ぐ遠距離兵器と、態勢が崩れて無防備なところへ叩きこまれた攻撃に敵う筈がない。

『くうう……ッ!』

ついに、告死天使が地に伏した。少女のうめき声が『聞こえる』。対するレガンダムもボロボロだ。

紙一重ではあるが、ノブレス／レガンダムは少女／告死天使を見下すほどの余裕があった。

兄たちが感嘆の声を上げる。ネーナもその一人だった。やはり、教官は強かった。自分たちなんかより、ずっと。

荒い呼吸を繰り返しながらも、ノブレスは王手をかける。残像たちを従えたレガンダムがビームサーベルを振り上げた。

この場にいる誰もが、ノブレス／レガンダムの勝利を確信していた。

この場にいる誰もが、少女／告死天使の敗北を確信していた。

『——ッ!?!』

不意に、戦慄したように空を仰いだノブレスの姿が『見えた』。まるで、彼の心を直接読み取ったかのように、ノブレスの驚愕が伝わってくる。

東雲色の空。ノブレスの眼差し／レガンダムのカメラアイが、空の向うを睨む。そのタイミングを計ったかのように、乱入者の声が響く。

「——ところがぎょっちょん!!」

乱入者は、無数の“質量のある残像”など一切気にする様子もない。

次の瞬間、ただ1機レガンダム本体に向かって、禍々しく爆ぜる赤黒い光が降り注いだ!!

45. 未来に託した祈り

「エピオンシステム？」

ゼクスの言葉を反芻しながら、クーゴは首を傾げた。彼も、静かな面持ちで頷く。

出自が元王族ということもあるのか、微笑み方ひとつにも気品が漂う。トレーズとは違う方向で、だ。

そういえば、クーゴとグラハム以外の2人——ゼクスとシヤアは、元々高貴な身分の出自だった。詳しい話は知らないが、現状を鑑みるに、波乱万丈な人生だったことは明らかである。

「トレーズとカタギリ技術顧問曰く、『今後開発されるシステム』……ということらしい。詳しいことはわからないが、そのシステムのテストに参加することが決まったのでな」

「そうか。凄いなあ」

年下の友人が才能を認められ、頑張っている——そのことが、我がことのように嬉しい。ゼクスの才能が周囲から認められ、とんとん拍子に出世していくことを、クーゴとグラハムは喜ばしく思っていた。同時に、「自分も負けていられない」と対抗心を燃やしたものだ。

当時、自分たちは連邦軍に所属していた。所属不明の機体——後に『ガンダム』と呼ばれるものたちと戦いを繰り広げていたときの日々を思い出し、クーゴは深く息を吐く。古巣を離れて早数年。自分たちが行方不明になっている間、更なる陰謀に飲み込まれていた。

クーゴが連邦を離れる原因になったのも、グラハムが『あんなこと』になってしまった原因の根底も、悪意と陰謀である。先で中核を担っていた／今後も中核を担うであろう『あの人』は、異種生命体——ミューカスの襲来でてんやわんやになった現状など気にしていない。

人類同士の戦いを誘発させながら、『あの人』は、今日も世界を眺めているのだろう。自分の思うがままに世界を動かすことを目標にし

ているらしいが、『あの人』がそんなバカげたことに走った理由の一端を、クーゴは担ってしまっている。そのため、文句は言えそうになかった。

「おめでどう。いい成果が出ることを願ってるよ。……もつとも、ゼクスなら大丈夫だろうけど」

「貴方もトレースも、過度な期待をかけるのがうまい。そこまで信頼されているとなると、どんな無理難題にでも応えたくなくなってしまおう」

彼はくつりと笑った。クーゴも「その気持ちはよくわかる」と言う代わりに目を細める。ゼクスの言葉は、クーゴにもそっくりそのまま当てはまるからだ。

頼まれ事はなんとなく断りづらい、褒められたり認められると深く突き詰めていく、相方の無茶ぶりに「しようがない」と苦笑しながらも応えようとする――。

グラハムとゼクスは似た者同士だと思っていたが、どうやらクーゴとゼクスも似た者同士であつたらしい。それを嘯みしめていたら、何やら微笑ましい気持ちになつてきた。

年下の友人と別れ、クーゴは自分の機体の様子を確認するため格納庫に向かつた。扉が開き、足を踏み入れる。

クーゴの機体には、ジオンの技術者では手に負えないものがいくつか搭載されていた。『悪の組織』に所属する技術者が、ジオン――主にオルトロス隊の動向確認および技術協力のために常駐している。

自分の愛機を確認する。深い群青あおの機体は、空へ飛びあがる瞬間を待ち続けていた。その隣には、グラハムが搭乗している機体もいる。般若を思わせるような仮面で顔を覆つた彼の愛機は、侍という言葉が相応しい。

どうやらこの機体、フラッグを大改造して作つたものだという。作り上げた張本人であるビリーも、グラハムに引きずられるような形でジオンに身を置いていた。クーゴが表舞台から姿を消した直後、陰謀に巻き込まれたためだ。

連邦から文字通り脱出した2人だが、余波というか、後遺症（らしきもの？）は残ったままだ。ベリーはトレーズと一緒にエピオンシステム——ゼクスがテスト役に任命されたものだ——開発とグラハム機の整備時々チューンナップに明け暮れている。

グラハムに至っては、妙な仮面を纏い、言動も大変なことになっていた。なんちやって武士道を極めた結果、という言葉がよく似合う。愛機のデザインも、グラハムの現状を反映したかのような外見になっていた。

「うええええ〜んツ！ 実戦形式の機体テストなんて、しかも私がパイロットだなんて聞いてなああああい!!」

インカムをした青い髪の女性が、半べそをかきながら抵抗していた。それも虚しく、プラチナブロンドの髪を持つ男性技術者と、金髪の女性技術者に引つ立てられていく。

あれよあれよという間に、女性は機体に乗せられて出撃させられていった。彼女が泣き叫ぶ声がビリビリと響いてくる。男性技術者は、いい笑顔でその背中を見送った。

確か、彼女の本業はオペレーターだと聞いた。雑務と兼業している、という話を聞いたことがある。雑務という単語で嫌な予感を覚えただが、クーゴの予想通りだったらしい。

いい笑顔を浮かべた男性技術者が、クーゴの存在に気づいたように手を挙げた。こちらでも手を上げ返す。彼は、クーゴが間借りしていた組織に所属する技術者であり、パイロットであり、クーゴの『同胞』でもあった。

この技術者も、ジオンと地球連邦の橋渡し役と平和工作の協力者である。彼の部下にして弟子である3兄妹は、別部隊で別の任務に就いているらしい。最近では「有名なアイドル歌手とお近づきになれてハイになった」という話を聞いた。

銀河の妖精、超時空シンデレラ。通信から漏れた単語から想像するに、3兄妹はマクロス・クォーターと行動を共にしているのだろう。

技術者は羨ましそうにしていたのが頭から離れない。「可変式の戦艦」の話聞いた技術関係者どもが燃え上っていたのは、記憶に新しくなかった。

閑話休題。

機体の確認を終えて、自分たちは格納庫を後にした。今何時だろうと時計を確認すれば、会議の時間に近づいている。穏健派と改革派、腐った奴と暴走気味な奴、様々な人々の感情が渦巻く戦いの場所。考えるだけで、気が重くなった。

「会議は今日も踊りそうですね」

「まったくだ」

男性技術者の言葉にクーゴも頷く。外部組織代表として、この技術者は会議に出席していた。オルトロス隊の代表として、クーゴたちも会議に出席する。

程なくして、目的地の会議室が見えてきた。扉の前で何かを話し合っているのは、仮面の男3人組——シヤア、ゼクス、グラハム。彼らは自分たちの存在に気づくと、小さく合図した。

今日もまた、踊り狂うだけの会議が始まる。そう考えると、何とも憂鬱な気分になった。

決闘場は、大変困惑していた。

それもこれも、グラハム・エーカー／ミスター・ブシ□のせいである。

グラハムとの関係を暴露された刹那は、羞恥心からか顔を真っ赤にしていた。彼女の怒りを反映させたかのように、2つのゼロを冠する機体がグラハム／□シドーの機体に攻撃を仕掛ける。対するブシ

□は「羞恥に悶えるキミも魅力的だ」なんて問題発言をしながら、彼女の機体と鏢迫り合いを演じていた。

クーゴ含んだ大半のギャラリーは、ただただ驚きに声を上げることしかできない。「お前らいつの間になんかことになってたんだ」と、言葉にするので精一杯だった。コネクト・フォースに所属する少女が目を輝かせ、言葉の意味を理解できなかった青年が首を傾げる。隊長は何を思ったのか、妻に連絡を取り始めた。

審判役を買って出ていたドモンは顔を真っ赤にしてうろたえ、ボビーが「見かけによらず熱いじゃない!」と口笛を吹き、「ブシ□ーが言った言葉の意味について教えてほしい」という子ども組の質問に大人組が真っ青になり／頭を抱え、技術者の弟子で技術者に想いを寄せた少女が「そこどころ詳しく!」と身を乗り出す。相当な力オスだ。その中で、ここにこ笑っているアイデアは強者と言えよう。

「は、『犯罪だけには走るな』って言ったのに……。いや、厳密的に、法律的に考えれば問題はないのかもしれないけど……。でも……」

彼女の隣にいたビリーが崩れ落ちた。余程ショックだったようで、変なオーラを背負い、「ははははは」と力なく笑っている。

ビリーの瞳は酷く濁っていた。ブシド□と彼の愛機の勇士を見に来ていただけだというのに、とんだとぼっちりである。

騒然となったのはギャラリーだけではない。代表者として戦っていたアムロ、シヤア、ヒイロ、ゼクスたちも度肝を抜かれた様子だった。

「な、なんて恥ずかしい奴!! シヤア、お前まさか知っていたのか!? 知っていて、刹那さんとブシド□を!?! だとしたら卑怯だぞ!!」

「知らん! 今初めて知ったぞ!! 知っていたら絶対に、こんな組み合わせなど考えなかった!! 我が同僚ながら、なんてうらやま——けしからん奴だ!!」

「本当にうらやま——けしからん奴だな、ミスター・□シドー!」

思春期の少年と、何かを拗らせ気味だった青年の心が同じ方向を向いていた。同志になるならないで戦っていた彼らであるが、今このとき、確かに彼らは同類であった。

「エピオンシステムのテスト中に見えたので、まさかとは思っていたのだが……」

額に手を当てて、ゼクスが深々と息を吐く。未来の可能性を見せることでパイロットを勝利に導く——ゼロシステムと同等の力を持つ演算システム、それがエピオンシステムだ。

ゼクスはそのテスト中に、刹那とグラハムの関係を垣間見ていたらしい。彼が困惑していたのは、この場でそんなことを悪意なく言い放ってしまったブシローの行動だろう。

しかし、あらかじめ知っていたことが幸運だったのか、彼は立ち直りが早かった。

「と、とにかく！ 今はそんなことをしている場合ではない！ 我々是我々で、決着をつけるぞ、ヒーロー！」

「……にんむ……りようかい……」

ライバルに促され、ヒーローは半ば呆然とした表情で頷いた。驚きすぎたせいで、何か間の抜けたような響きの声。流石のヒーローにもシヨックが大きかったらしい。

茫然とするしかない周囲の状況など何のその、刹那とブシローは派手な剣戟を繰り広げている。2人の周囲だけが闘技場に見えてきた。クーゴは相当疲れているらしい。

周囲は相変わらずざわめいたまま。おかしな方向に転がり始めた『コネクト・フォース代表VSジオン軍オルトロス隊代表のガンダムファイト』の決着は、まだつきそうになかった。



「クーゴさん、大丈夫ですか？」

「……はッ!？」

アイデアの声に現実へと引きもどされる。なんだかどつても頭が痛くなるような光景を『見ていた』ような気がした。

詳細を思い出そうと努力したが、その光景を拒絶しようとする自分の意志の方が強すぎて、逆に何も思い出せなかった。

心配そうにこちらを見つめるアイデアの眼差しに、クーゴは苦笑した。「何でもない」と言えば、彼女は安堵したように微笑む。

現在、クーゴはアイデアと休暇を過ごしている真つ最中であった。

おそらくこれが、2人が揃う最後の休暇になるだろう。その覚悟を固めて来たクーゴであったが、アイデアに「行きたい場所がある」と連れてこられたのが、ドレスコードのある超高級レストランだった。

何も知らされていなかったクーゴが度肝を抜かれていたとき、店員にあれよあれよと引っ立てられ、高級なタキシードに着替えさせられてしまった。社交界には何度も顔を出してはいるが、正直、そういう場はあまり好きではない。

クーゴがレストラン入口に戻ってきたときには、アイデアはそこにいなかった。どうすべきか悩んでいたところに、いなくなっていた彼女が戻ってきた。どこへ行っていたのか問おうとして振り返って——クーゴは一瞬、呼吸をすることを忘れてしまった。それくらい、彼女の姿は美しかったのだ。

佇んでいたのは、見目麗しい淑女。ビスチエ形態の上着にスカートを付けたパーティドレス。色合いは、上半身が早朝を思わせるような

淡い空色で、スカート部分は夜の海のようにどこまでも深い群青色であった。胸元と肩がぎっくりと開いていたものの、完全に見せている訳ではなく、肩の端と背中にかけてはきちんと繋がってる。

丁度、腰より少し高い位置には、可憐な花飾りのベルトがついていた。スカート部分には、海の波を思わせるような質感と光沢がある。気合が入っていたのはドレスだけでない。首元で華やぐのは、緑のビジュリーで花を模したペンダントだ。緑と言っても、どちらかというとパールブルーに近い色合いだった。

耳元ではビジュリーを使ったイヤリングが輝く。色合いはペンダントと同じものだ。爆ぜるような光を思わせるフォルムが特徴的であった。だが、彼女の髪を束ねるアクセサリーだけは普段と変わらないう。クーゴが彼女の誕生日に贈った、桜を象った銀細工の簪であった。それだけは譲れなかったらしい。

『どうでしょう？ 似合ってますか？』

『ああ、綺麗だ。……っ、そうだ！ この服は——』

『その服のことは心配しなくて結構です。私からの気持ちですから』

最初はアイデアに見惚れていたクーゴだったが、自分の洋服のことを思い至った。高級ブランドの名前には疎いクーゴであるが、自分が身に纏っているものがどれ程高価なのかはすぐに察せた。慌てたクーゴを見たアイデアは、見るものすべてを和ませるような柔らかな笑みを浮かべてみせた。

『……でも、クーゴさんに贈るより、クーゴさんに贈られる方が、個人的には嬉しいですね』

悪戯っぽく笑うアイデアの横顔から、獲物に狙いを定めた肉食動物の姿を見たような気がした。同時に、彼女が誰かから何か話を聞きだしている光景が『見えた』。

その相手は根掘り葉掘りされることを嫌がって口をつぐんでいた

が、アイデアには『分かって』いたらしい。普段のように、詳細を掘り葉掘りはしなかったようだ。

自分たちの様子を見守っていた青い髪の女性と金髪の女性が、何かをひそひそ話している姿が視界にちらつく。

そういえば、彼女たちの姿にも見覚えがあつた。しかし、詳細が出てこない。そのことについて思案しかけていたところ、当人たちに窓際の席へと案内された。

丁度、夜の帳が降りてくる時間帯だったので、夜景と談笑を楽しみながら現在に至るといふ訳だ。

翼が描かれた銀の懐中時計を確認する。時間は夜の半ばであり、「まだまだこれから」と言えそうな時間であつた。

「……あの、やっぱり、こういう場所は嫌でしたか？」

どこか不安そうに、アイデアがクーゴの表情を伺ってきた。普段のハーフトップとは違い、髪を盛るような形で上にまとめた髪型のせいか、普段とは違う印象を受ける。陶器のように白い首筋が目についた。

「確かに、社交界の場として訪れる “こういう場所” は……正直、苦手かな。でも、今はとても楽しいと思うよ」

クーゴは慌てて首を振る。自分のたどたどしい言葉が、どれ程アイデアに伝わったのかはわからない。しかし、彼女はどこか安心した様子で口元を緩めた。その様子に、クーゴも安堵する。

自分と彼女が過ごすであろう、最後の時間を噛みしめる。少しでも長く、言葉を交わしていきたい。なのに、言葉が出てこなくなってしまう。最初はそれがもどかしくてたまらなかつたけれど、今は、その時間すら心地よいと思う。

酷く穏やかな時間が過ぎ去っていく。楽しい刻ときは、あつという間に流れていった。



星が綺麗な夜だった。

「一度でいいから、私のことを『お父さん』と呼んでみてくれないかな？」

頭の黒髪が寂しくなってきた男は、藪から棒にそう言った。あまりの言葉に、緑の髪の青年は煽っていたワインを盛大に嘔き出してむせる。

お前は何を言っているんだ——言葉を紡がない代わりに、青年は男を睨みつけることでそう伝える。睨まれても尚、彼はゆるりと目を細めた。

「いや、なに。キミは『彼女』のことを『マザー』と呼んで慕っているだろう？ 私は『彼女』の夫だ。関係図から考えると、私は『父親』と呼ばれてもおかしくないはずだ」

「驚いた。天才科学者も、バカみたいな三段論法を駆使するんだね」
「キミは冷たいな」

ため息をついて肩をすくめた男に背を向けて、青年は己が嘔き出してぶちまけた赤ワインを処理する。

雑巾で床を拭き取る作業をしている青年を見ても尚、男は話を止めることはなかった。内容は一緒だったが。

「父と呼んでくれないか」、「そんなの言えるわけがない」——その応

酬を繰り返す。なんだか、無駄に疲れてきた。

青年は深々とため息をつく。対して、男は寂しそうに苦笑していた。

正直な話、青年も男を『父親』のような存在だと思っている。色々理由はあるが、一番は『自分が『母』と慕う人物が、愛してやまない人だから』に尽きた。

しかし、一度、青年はこの男に対して醜態を晒していた。盛大に勘違いし、盛大に八つ当たりし、盛大な誤解をしていたことを思い知らされ、愛されていたことを感じた。

そのやり取りがあつてから、青年は「いろいろめんどくさい性格になりつつ」あつた。人間に近づいたということはなんとなくわかったが、こんなにも難儀するとは思わなんだ。

「……貴方が偉大だということは、身に沁みてわかっている」

青年は、血反吐を吐くような感覚に逆らうようにして、言葉を絞り出した。

「だから、今はダメなんだ。……貴方が子どもたちに託した理想を、きちんと形にしたときじゃなきゃ。……今の僕では、貴方の『息子』として、貴方を『父』と呼ぶ資格がない」

青年の言葉に、男は目を丸くする。そうして、何度も目を瞬かせた。男の瞳に浮かんだのは、驚きの眼差し。青年は男を見ずに、言葉を紡いだ。

「……貴方を『父』と呼ぶのは、すべてが終わって、貴方の理想が形になった世界を、貴方に見せたときだ」

すべてを言いきって、青年は口元を抑えた。何故だろう、無駄に体が熱い。何というか、落ち着かない。

ごちやまぜになった感情に振り回される自分が許せなくて、青年はひっそりため息をつく。

これではますます、負けたような気がしてならない。本人のいる前は、居心地が悪い。悪すぎた。

今すぐここから、脱兎のごとく逃げ出してしまいたい。しかし、青年の足は縫い付けられてしまったかのように動かなかった。

背後から笑い声が聞こえる。自分の決意表明を馬鹿にされたような気がして、青年は振り返った。眦を吊り上げかけたところで、怒りは一瞬で萎んだ。

男は笑っている。しかし、それは、茶目つ気たつぷりな笑みでもなければ嬉しそうな笑い方でもない。何かを諦めてしまったかのような、寂しそうな微笑み。

どうしてだか、彼の笑い方は——青年の目に焼き付いて離れなかった。

「そうだな。……楽しみに、待っているよ」

アレハンドロ・コーナー曰く、『この瞬間のために、コーナー家の人間は200年以上の時間をかけた』らしい。何世代も受け継がれてきた野望が、ようやく成就する。一族の悲願を成す者が自分であることに、アレハンドロは喜びを隠さなかった。

コーナー一族は執念深い奴らであった。しかし、アレハンドロは執念よりも意地汚さと欲望の方が強かったようで、一族の悲願成就の集大成を、他の誰でもない『アレハンドロ・コーナー^{自身}』がなし得ることを目指していた。見栄っ張りとも言えよう。

そんな男に天使と呼ばれ、行動を共にしているリボンズ自身も「世も末」レベルである。久しぶりに会った人間が自分の様子を見たら、

『沈黙後に大爆笑』か『沈黙後に後ずさりする』かの2択しか思い浮かばない。自分の『父』に当たる人なら前者だし、遺伝子提供者は後者だろう。

どうでもいいことから思考を引きもどし、リボنزは最後のロックを解除した。これで、最深部にいる『彼』と対面する道が開いた。

『彼』自身の予想よりはるかに早い段階で、目覚めの瞬間が訪れようとしている。元々賭けに近いものだったから、仕方がないのかもしれない。

リボنزは息を吐き、ヴェーダを眺めていたアレハンドロを呼んだ。アレハンドロは満足気に微笑みながら、リボنزと並んで最深部へと踏み込む。

「——やはりいたか、イオリア・シュヘンベルク」

アレハンドロは、イオリアが眠るコールドスリープ用の機材に歩み寄った。

「世界の変革見たさに、よみがえる保証もないコールドスリープで眠りにつくとは……」

男の背中から迸ったのは、悪意。アレハンドロの目的はただ一つ——イオリア・シュヘンベルクの抹殺だ。

リボنزは最初からそれを把握していたし、それを踏まえた行動をとるつもりでいた。

アレハンドロは銃を構える。口元には歪んだ微笑。

「しかし、残念ながら、貴方は世界の変革を目にすることはできない」

そのタイミングに合わせて、リボنزも静かに男の背中に狙いを定める。銃はいらぬ。この『力』を使えば、銃器を使わず人を心停止に追い込むことなど可能だ。

「貴方の求めた統一世界も、その抑止力となるソレスタルビーイングも、この私が引き継がせてもらおう」

アレハンドロは高笑いする。世界を変えるのは、他らなぬ自分なのだ。

リボンは集中する。自分がこの場に留まり続けた意味を果たすために。

—— リボンズ ——

不意に、懐かしい声がした。それを引き金に、世界は一変する。ヴェーダの内部にいたはずなのに、リボンは違う場所に立っていた。

見覚えのある室内。窓から見える景色は夜闇に飲まれてよく見えない。けれど、空には満天の星が瞬いていた。その光景は、いつかと同じ夜を思わせる。

目の前にいたのは、1人の男だった。他の誰でもない、イオリア・シユヘンベルクその人だった。何が起きたかわからずに、リボンは目を瞬かせる。

彼は『人間』だったはずだ。だから、〃こんな芸当などできるはずがない〃。理由が分からずにいると、イオリアは笑った。

—— いいんだ ——

いって、何がだ——リボンの口から、その言葉は出てこなかった。まるで喉に何かが詰まったかのように、何も言えなくなる。

イオリアは笑う。いいんだよ、と、曖昧なことを言っつて。覚悟を決めたように清々しい笑みを浮かべた彼は、慈しむように目を細めた。

—— 希望が花を咲かせ、実を結ぶのならば……私は喜んで、その

礎となろう。あるいは、引き金か——

何を言っているのだ、この男は。

背中を冷たいものが撫でる。どうしてだか、男の存在が、酷く遠い。動かなければと思っても、拘束されてしまったかのように動けなかった。

振り払えるほどお粗末なのに、抗えないほどの力に組み伏せられている気分になる。「どうして」——やっと紡げた言葉は、弱々しく、お粗末なものだった。

イオリアは、リボonzの問いに答えない。応えようとすらしない。彼の眼差しは、未来よりもはるか遠くを見つめている。自分たちでは到底届かない、遠くの場所を。

リボonz、と。また、名前を呼ばれた。

イオリアは静かに目を細める。

——「備えあれば患いなし」、というだろうか？——

茶目つ気たつぷりに笑った男は、後ろを振り返った。机の上にパソコンがある。画面は明るく光っており、プログラムの羅列が点滅していた。

イオリア・シユヘンベルクがチェスの名手だったことを知っているのは、彼の妻や友人たちと、古参のイノベイドであるリボonzぐらいだ。

彼は読んでいた。自分の計画を阻害しようとする人間が現れることも、その相手に対しての対抗手段^{カウンター}も、予め準備していたのだ。

——さて。……これからは、死後^あの世界^世の研究でもしてみようかな。それもまた、一興だろう——

次の瞬間、一際激しい銃声が世界を壊す。リボonzが息を飲んだとき、イオリア・シユヘンベルクが眠るカプセルは銃弾がぶち込まれて

いた。何発も、何発も、コーナー家の執念を示すかのように。

心臓を、脳を、顔を、肺を——ありとあらゆる場所を蜂の巣にされた男の軀。冷凍睡眠のカプセルは、彼の棺へと姿を変えた。リボンスは何もできなかつた。自分なら、この結末を回避する力があつたはずなのに。

アレハンドロが笑うのを待っていたかのように、けたたましい警報音が鳴り響いた！ 何が起こったのかわからず、奴は周囲を見回す。大きな画面が展開して映像が映し出された。

画面に映し出されたものの意味を、リボンスは一瞬で理解した。つい先程、イオリアが『見せた』もの——カウンタートラップ。息を飲み、リボンスは画面に見入る。

つい先程命を摘み取られた男は、愛用の椅子に腰かけていた。普段のような仏頂面に、どうしてだか涙が出そうになる。もう、イオリアはそんな表情を浮かべることがなければ、お茶目に笑うこともないのだ。

彼は粛々と言葉を紡ぐ。この映像は、ソレスタルビーイングのクルーたちにも配信されていた。

『この映像が流れているということは、残念ながら……私の求めている世界にはならなかつたようだ』

イオリアは深々とため息をつく。

『人間は愚かで戦いを好み、世界を破滅に導こうとしている。……次元振動が起こつて多元世界になろうが、異次元宇宙からクレディオが来襲しようが、お構いなしという訳か』

『ああでも、もしかしたら、多元世界などなっていないなければ、クレディオが来襲してすらいらないのかな？ だから暢気に内輪もめをやっつけていられるというわけか。お気楽なことだ』——イオリアは重々しく呟いて、目を閉じる。

彼の言葉の意味を理解していないアレハンドロは目を点にして首を傾げる。大方、馬鹿なことを言っていると思っっているに違いない。イオリアの発言は、虚憶きよおく関係の情報がベースになっていた。

『……だが、私はまだ人類を信じ、力を託してみようと思う』

イオリアは静かに目を細める。

彼が語り掛ける相手は、遠い未来で、オリジナルの太陽炉／GNドライブを有する機体ガンダムに搭乗するパイロットと、天上人を構成する人々。

GNドライブの全能力を開放する——イオリアの言葉を引き金にして、GNドライブのブラックボックスが解除された。トランザムシステムが、正式に使えるようになったのだ。

同時に、マイスターたちやプロレマイオスクールに関するデータが一括削除される。どさくさに紛れて、リボンズも友人とその弟子たちに関するデータを消去した。

『君達が真の平和を勝ち取る為、戦争根絶の為に戦い続ける事を祈る。ソレスタルビーイングの為ではなく、君達の意志で、ガンダムと共に』

頼まれごとを終えたとき、別画面に映し出されていた映像が切り替わる。スローネツヴァイの偽物を駆るサーシエスと、エクシアを駆る刹那が戦っていた。有利なのはサーシエスである。

次の瞬間、2人の戦力がオセロのようにひっくり返った。トランザムを解放したエクシアが、スローネツヴァイの偽物を撃退したのだ。撃墜までには至らなかつたものの、トランザムの試金石としては充分な結果だ。

ソレスタルビーイングに伝えるべき内容のメッセージは、ここで終わっていた。しかし、映像はまだ続いている。

『さて、ここからは私信だ。……まずは——』

『イオリアー、ヤボ用はまだ終わらないのー?』

イオリアが何かを言おうとしたとき、部屋の外と思しき所から声が聞こえた。リボンズにとつて、馴染み深い女性の声だった。

まさかの展開に、イオリアは何とも言えない表情を浮かべて振り返る。彼女の乱入は予想外の珍事だったらしい。

カメラが回っていることなどすっかり意識の外に追いやつてしまったのか、彼は画面から姿を消した。扉が開く音がする。人は映らない。

『すなまい、ベル。あともう少し待ってくれないか』

『えー!? なんでもー!? 夜戦の準備は万端なのにイ!! 用具類は今日のうち天日干ししたし、お風呂で体中念入りに洗ったし、〴〵(規制)〴〵とか 〴〵(規制)〴〵とかのグッズだって用意して、Y e s 枕片手にずっと待ってたのにー!!』

『本当にすまない。今すぐにも夜戦に突入して、〴〵(規制)〴〵とか 〴〵(規制)〴〵とかしたいのは山々なのだが、大切な映像記録を残している最中なんだ』

あまりの状況に、アレハンドロが大きく口を開けて茫然としていた。対して、リボンズはあわや吹き出す一歩手前である。

遠い昔、当たり前前のように聞いていた騒音だ。と言っても、このやり取りははまだ「序章」と言うべきものであったが。

一歩間違えれば何かに引っかけたまま、そう簡単にはやり取りを続けた後、イオリアはどうか妻を宥めることに成功したようだ。彼女は一端立ち去ったようで、暫くの間をおいて、イオリアは部屋へ戻って来て椅子に腰かけ直す。

『話が脱線してしまったな。まずは――』

イオリアは言葉を続けた。最初にメッセージを送った相手は、エル

ガン・ローディックである。『この映像が流れたとき、自分は確実に死んでいるだろう。自分亡きあと、妻のことをよろしく頼む』というものだった。

2番目は、親友の意志を継ぐ者へのメッセージである。彼の系譜はソレスタルビーイングに所属することが決まっていた。『あの2人の想いを受け継いで、天上人の守護者として、来るべき刻ときのために彼らを守ってくれ』というものだった。——そうやって、イオリアは沢山の人々に言葉を残す。

『そして、最後に……愛する家族たちへ』

彼は静かに目を細めた。その眼差しの先に、女性とリボンズがいる。

映像を見ていたりボンズは直感した。

『まずは謝らなくてはいけないことがある。私は、自分の結末を知っていたんだ』

その覚悟も決めていたのだ、と、彼は笑った。

『尤も、この映像を見るとときには、既に“キミ”は気づいているのだと思う。力があるうとなかろうと、他人のことに対して聡明な“キミ”のことだ。私から聞き出していることだろう。……流石は私の妻だ。そこにますます惚れ直してしまったよ』

そして、と、付け加える。

『この映像が流れているということは……私はキミに、『お父さん』と呼んでもらえなかつたらしい』

リボンズは大きく目を見開いた。映像の中のイオリアは、寂しそう

に笑っている。星の綺麗な夜に見た横顔と同じ表情だ。

何かを諦めてしまったかのような、けれども決意と覚悟に満ちた微笑。あの日、リボنزの脳裏に焼き付いた表情がよぎる。

『生きているうちに、一度でいいから、呼ばれてみたかったよ。……いや、無理だろうな。キミを不安のどん底に追いやった私が、キミの『父』を名乗るに相応しい人間になれるはずがなかったんだ。何分、父親としては不適合者だったからな』

(そんなことはない。そんなことはなかったんだ)

彼の言葉を否定しても、イオリア本人にリボنزの声が届くはずがない。何より、今は、それを口走ってはいけないとわかっていた。

申し訳なさそうに苦笑するイオリアの姿は、遠い。数百年隔てた画面の向う側にいる彼に答える術は、何もなかった。その現実が、酷く、胸を痛める。

後悔しなくていいと『父』は言った。自慢の息子だと『父』は言った。『母』を頼むと『父』は言った。——出会えてよかったと、『父』は言った。

リボنزは画面を見つめていた。

目を話してなるものかと、目を逸らしてなるものかと、必死になってその光景を焼き付ける。

『イオリアアアアツ!!』

次の瞬間、扉が吹き飛ぶ音がした。間髪入れず響いたのは、先ほどの女性の声。

イオリアが慌てて立ち上がり、また画面から消えた。男女の声が響く。

『何度もすなまい、ベル。あともう少し待ってくれないか』

『私は我慢弱い！　ってか、さっきからもうずーっと待ってるのよ!？』

「こんな苦行だわ!!」

『私だつて苦行だ。はやくキミと。』ピー(規制) “や。』ピー(規制) “
がしたい。』ピー(規制) “や。』ピー(規制) “だつてしたい。だが、
あと少しなんだ。辛抱してくれないか』

『……わかった。』ピー(規制) “しながら待つてる』

『そうしてくれ。早めに終わらせて、すぐに行くから』

『……その代わり、今夜は絶対に眠らせないからね!!』

『心得た』

会話は終わり、イオリアが戻ってきた。椅子に座り直し、咳ばらい
する。

『それじゃあ、最後に。……月並みな言葉で申し訳ないが、受け取つて
ほしい。——愛しているよ、2人とも』

慈しみに満ちた黒い瞳が、まっすぐにリボンズを映す。彼の眼差し
の先に、リボンズと “彼女” がいるのだろう。痛む胸に染み入るよう
に、不思議な熱が滲んだ。

そのまま映像が終わっていけば最高だったのだが、現実綺麗なも
のではない。画面が真っ暗になる。映像が切れる直前、カメラはイオ
リアの言葉を拾い上げていた。

『……ええと、精力剤はどこにやったかな?』

ちよつと待て。

リボンズとアレハンドロは、同じことを考えたらしい。同じタイミ
ングで、眉の端をぴくぴく動かした。そのツツコミを切り捨てるよう
に映像が途切れる。幾何の沈黙の後、アレハンドロが勢いよくテーブ
ルを殴りつけた。

神を気取る理想主義者め、と、奴は吐き捨てるように言い放つ。そ
の両目から血涙が流れていたように見えるのは気のせいだろうか。

そういえば、アレハンドロは名門家の当主であるのに、30代過ぎても未婚だったか。

『父』らしい映像だ。リボンスはちよつとだけ口元を震わせた。自分は今、情けない顔をしているに違いない。今は泣くときではないと自分自身に言い聞かせ、リボンスは前を向いた。アレハンドロが項垂れている。

いつか、遠い場所で『彼』に会ったとき、胸を張って『父』と呼び、『息子』と呼ばれるに相応しい存在になりたい。

新しい目標を抱える。『父』から託された想いを抱いて、リボンスは改めて未来へ向かって歩き出すのであった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

46. 明日へ託す約束

ノイズまみれの通信から、爆発音が響き渡った。画面に表示されたパーセンテージが、あつという間に上昇していく。

「なんてことだ……！」

女性の隣でその映像を見ていた、若葉色の髪 of 男性が戦慄する。薄い液晶を隔てた先に、大切な妻と娘がいるのだ。今にも命が費えてしまいそうな、大切な人たちが。父親でもあり夫でもある男性には、耐えがたい状態であろう。

それは、女性だつて同じだった。画面の向こう側には、長い旅路を共にした親友や仲間たち、および、この惑星にやって来て出会った人たちがいる。手を伸ばせば届くはずなのに、どうしてこんなにも遠いのか。女性はぎりりと歯を食いしばる。

イオリアも、エルガンも、他の面々も、その光景を愕然と見つめることしかできない。いつかの焼き直しだ。女性が敬愛した人が、大地に沈むことを選んだときと同じ無力感が纏わりつく。崩壊を止める手立てを持たない自分たちに許されたこと。

次の瞬間、『何か』が自分たちの乗る船に転移してきた。彼ら／彼女たちの想いを受け継ぐであろう少年少女だった。

なんとか五体満足の少年たちは、目を抑えて泣きじやくる少女を氣遣っている。小さな手の隙間から、血が伝って流れ落ちていた。

目が、潰れている。おそらく、少女の瞳には二度と光が戻ることはないだろう。『同胞』としての能力を駆使すれば、常人と変わらぬ生活を送ることは可能だ。しかし、それとこれとは別問題である。

子どもたちが画面を見て悲鳴を上げた。大人たちはまだ「あの場所」にいる。しかし彼らは転移しようとしなない。己の死を覚悟したかのように。

画面の向こうから響くのは、次世代の『同胞』に託す、命がけのメッセージだ。己の命を削るようにして届いた言葉に、それを受け取った

少年少女は涙を流す。

目を抑えて泣きじやくつていた少女も、母親から託されたものを受け止めたのだろう。見えぬ目で、画面の向う側を『視て』いた。

それを確認した銀髪の女性は、安堵したように表情を緩めた。女性たちの故郷を思わせるような紅蓮の瞳は、静かに細められている。

彼女の眼差しは、親友である自分に向けられていた。女性の青い瞳をまっすぐに見つめて、彼女は口を動かした。

「あとは任せたわ、ベル」

「っ、イニー!!」

女性は親友の仇名を叫んだ。

自分の顔を見た親友は、困ったように微笑む。

「ひどい顔ね。ベルもアランも、他の皆も、顔面崩壊しているわよ」「ひどいことを言っているのはキミの方だろう！ 僕がしわくちやになるまで面倒見て、最期はきちんと見送ってやるって言っていたくせに!! ……は、話が違うじゃないかあ……ッ!!」

彼女に名を呼ばれた男性——アランは、顔をぐちゃぐちゃにしたまま声を荒げた。

嘘つき、と、夫は妻を罵る。対して、妻は慈しみの眼差しで夫と娘を見つめていた。

これから死ぬとは思えないほど、綺麗な笑みだった。

女性の脳裏に浮かんだのは、大地の奥底に散ったグラン・パの笑顔。すべてをやり遂げたと言わんばかりの、安らいだ横顔。——親友の浮かべるそれは、グラン・パが浮かべた表情そのものだった。

紫電が爆ぜる。銀の物体が蠢き、親友の体の半分が『飲まれた』。皮膚に裂傷が走り、銀の突起と鮮血が飛び散る。親友は痛みに呻き、それを見た親友の夫と娘が悲鳴を上げた。

激痛に身を苛まれているというのに、親友は微笑んだ。額に脂汗を

浮かべ、口から血反吐を吐きながら、『同胞』たちに想いを託す。最期の命を、燃やしなから。

「来るべき日」のために、希望を守り抜いて。——お願いよ」

親友はそう言つて、目を細めた。

「アラン、レテイシア、ミラベル、ヒスキ、エリク、ジノヴィ、アステリア。そして、私の親友……ベル、エルガン。……貴方たちに出会えてよかった。——愛しているわ」

最後に、愛する／大切な人々への想いを残して。

その映像は、断線した。

「イニス、イニス！ う、うわあああああああツ!!」

妻——イニスの死を悟ったアランの慟哭が響いた。それを皮切りにして、悲しみはどんどん広がっていく。

女性はモニターを見つめることしかできなかつた。もう二度と、親友たちが帰ってくることはない。

その事実を受け止めることは、今はまだ、できそうにない。

『……ジヨミー、皆を頼む』

未来のために、命を散らした戦士がいた。

世界で最初に生まれた『同胞』^{タイプ・ブルー}荒ぶる青にして、『同胞』の初代指導者^{ソルジャー}を務めた男——ブルー。

彼は、崩壊する赤い星^{ナスカ}から逃れる『同胞』たちを守るため、惑星破

壊兵器に特攻を仕掛けた。結果は相打ちとなり、彼は仲間たちを逃がすことに成功する。

『トオニイ、ベル、イニー。……お前たちは強い子だ、僕の自慢の……。……だから、皆を頼む』

未来のために、命を散らした人がいた。

ソルジャー・ブルーが見出した後継者であり、女性が心から敬愛したグラン・パー——ジヨミー・マークス・シン。

世界のシステムによって、家族を、親友を、『同胞』の仲間を失い、それでも諦めずに歩み続けた2代目指導者^{ソルジャー}だった。

彼と、彼を受け入れた人類側の指導者によって、『同胞』と人類の共存の道が開かれたのだ。彼らがいなければ、世界を変えられなかっただろう。

過去をなぞる様にして目を閉じていた女性は、ゆっくりと目を開けた。小奇麗に片づけられた私室は、回想に耽る前から何一つとして変わっていない。

沢山の書類やファイルが、書斎や本棚を占領している。机の上には、点灯したままのタブレットと、随分前にぬるくなつたコーヒーが水面を震わせている。

『死が、土へ還る』ことだと言うのなら、土に還ることすらできなかった命はどうなるんだろう」

女性はふと、とある詩の一節を諳んじた。歌詞の意味を吟味してみる。宇宙で命を散らした者たちがいたことを、女性は知っていた。

土になれないのなら塵になり、次の星を形作る大地になっているのだろうか。「死んだ者は星になる」という話が脳裏によぎる。

力尽きて星になっても、星にすらなれずに散ったとしても、人は歩みを止めることができない。生まれ落ちたときから、死した者の声に縛られて生きる。

現に、女性もその1人だ。『同胞』の命と希望を受け継いで、ここに立っている。

長い長い旅時の後もまた、命は散っては咲いてを繰り返した。たくさんのお会いや別れがあった。同じ道を行く者、違う道を行く者、様々だった。

その一瞬一瞬を、女性は忘れていない。この軌跡こそが、女性のすべてだった。今の女性を形作り、今の女性を突き動かす理由。

「大丈夫だよ。託されたものは、今でもここにあるから」

星の瞬く宇宙そらを見上げ、女性は微笑んだ。

「だから、見守っていてね。——イニス、イオリア」



「レティシアって言うんです。レティシア・カノン」

藪から棒に、イデアはそう言った。クーゴは目を瞬いた。今、途方もなく重大な情報をさらつと言われたような気がする。気がするのではなく、言われたのだ。

イデアの名前は本名ではない。ソレスタルビーイングで名づけられた（と思しき）コードネームである。イデアはラテン語で「理想」、クピディターズもラテン語で「憧れ」という身だ。

今、彼女が告げたものは己の真名だ。そんな重大な秘密をクーゴに話したところで、デメリット以外の何物も存在しない。イデアの真意を測りかねたクーゴは首を傾げる。

イデアは微笑んだ。普段と変わらぬ可憐な微笑み。身構えていたこちらが呆気にとられ、終いには見惚れるほどの笑顔だった。邪気も悪意も感じない。

今のイデアの表情は、恋する乙女と言っても過言ではなかった。誰に対して、彼女はそんな表情かおを向けるのだろう。

「……どうして」

クーゴの問いかけに対して、イデアは照れたようにはにかむ。やはり、どうみても悪意は感じない。

悪意ではないけれど、言葉にできない温かな感情を向けられていることは察せた。

「焦らさないで下さいよ。照れるじゃないですか」

前髪をいじりながら、イデアは顔を赤らめた。眉はハの字に曲がってはいたけれど、困惑している訳ではないらしい。

彼女は窓の夜景とクーゴを交互に比べた後、くすくす微笑んだ。鈴を思わせるような楽し気な声色に、クーゴの心も弾むような心地になる。

イデアの口がゆっくりと動く。彼女の声が耳を震わす。彼女の紡ぐ言葉が、クーゴの心に触れてくる。その感覚が、酷く愛おしい。

「以前、仰ってましたよね。『古来の日本文化では、己の名前を告げることが』——」

そこまで言いかけて、彼女は言葉を止めた。ほわほわしたような笑顔は、あつという間に沈痛な面持ちへ変わってしまう。

タイミングを計ったように端末が鳴り響いた。イデアは何とも言えぬ予感を覚えていたようで、覚悟を決めたらしい。端末を確認し、深々と息を吐いた。

端末画面には、彼女が予想した通りの言葉が表示されていたのであろう。夢の時間に終わりを告げるような内容だったに違いない。クーゴは何となく察した。

「……すみません。本当はもつとお話ししていたかったし、とつても名残惜しいのですが、もう時間が来ちゃったみたいですよ」

こちらから誘っておいてごめんなさい、と、彼女は申し訳なさそうに頭を下げた。

彼女の顔を覆う影が一際濃く見えたのは、照明や俯き加減の関係だけではない。

「っ、レ・テイシア」

寂しそうに立ち上がろうとする彼女の腕を、クーゴは反射的に掴んでいた。

咄嗟に口から出たのは、先程アイデアが告げた己の真名である。

いきなり真名を呼ばれるとは思っていなかったようで、アイデア——レ・テイシアの動きがぴたりと止まった。

紫苑の瞳が大きく見開かれる。クーゴ自身、自分に何が起こっているのかわからないまま、反射的に言葉を口走っていた。

「その話の続き、聞かせてくれないか。……『今度、また会えたら』でいいから」

突拍子のないことを言った、と、クーゴは思った。自分の言っていることが途方もない夢物語であると重々承知していた。にも関わらず、どうしてそんなことを口走ってしまったのだろう。

自分たちは知っている。この先に待ち受ける運命が、再会など望めない程過酷なものであることを。

自分たちは知っている。次に互いが対峙する場所は、宇宙の戦場で

あることを。

自分たちは知っている。おそらくこの戦いで決着がついたら、どちらかが命を落とす可能性が高いことを。

“次”、なんて、馬鹿げたことを言っている自覚はあった。これから戦場で殺し合う者同士が、戦場を切り抜けた後で再び出会い、言葉を交わす可能性は低い。

万一再会できたとしても、この関係のままでは限らない。普通に考えれば、殺し合いの後も言葉を交わし、笑いあうことができるとも思えなかった。

(……そうだったとしても、俺自身が、その希望を抱くことを選んだんだ。その未来を信じることを)

クーゴの脳裏に浮かんだのは、『モラリア戦役におけるソレスタルビーイングの介入行動』の動向を観察していたときのことだった。白い不気味なオブジェと対峙するレティシア／アイデアと、彼女が抱いていた優しい光。

あの輝きは、クーゴが慣れ親しんできた虚憶きよおくで見た『人の心の光』そのものだった。一歩間違えれば道を踏み外していたであろうクーゴを救い、支え、空まで導いてくれた、かけがえのないものだった。根拠が薄いと他人ひとは言うのかもしれない。馬鹿な奴らだと他人ひとは言うのかもしれない。それでも、クーゴは選ぶ。その光を宿し、その光を抱きながら戦うレティシア／アイデアと共に笑う未来を願うことを。

たとえ、異なる志を抱いて戦場で対峙しようとも、これまでの日々や絆を『なかつた』ことにしたくなかった。痛みを抱えながらも、全力で生きることを選んだ。本当の意味で、今、その覚悟が問われている。

今更かもしれないが、薄っぺらいかもしれないが、それでも、本当の意味で覚悟を決めた。

ただまっすぐにレティシアを見返せば、彼女は更に大きく目を見開

く。一瞬の沈黙。

自分が何か間違ったことを言ってしまったのかと不安になったが、クーゴの懸念はただの杞憂に過ぎなかったらしい。次の瞬間、レティシアが嬉しそうに微笑んだ。

「——はい。レティシア・カノンとクーゴ・ハガネの、約束です」

レティシアの言葉に、クーゴも迷うことなく頷いた。



満身創痍のノブレスおよびチームトリニティが転がり込んだのは、『悪の組織』が所有にしている小綺麗な別荘地であった。別荘地と言っても、入れる人間は『悪の組織』関係者だけに限られている。実際は、地下にラボがある秘密基地であった。

ゆくゆくは戦争幫助企業として武力介入の対象になる予定だった相手の隠れ家に転がり込む——トリニティ兄妹にとって、こんなにも不安になる案件はないだろう。満身創痍の体を引きずるようにしつつも、周囲の警戒を怠らない。

「教官。何故、彼らに助けを求めたのですか？」

ヨハンが不安そうな眼差しを向けてきた。ミハエルとネーナも同じ気持ちらしく、言葉にはしませんが神妙な表情でノブレスを見つめる。

普段、こういう状況で、ソレスタルビーイングが真っ先に頼るインサーがいた。国内や宇宙に別荘や隠れ家、プライベートルームを有する

資産家が。しかし今となつては、その人間が『トリニティたちにとつての敵』になつてしまつた。隠れ家の提供先を失つた自分たちには、頼れる相手が殆どいない。

大破寸前のスローネたちでは、プトレマイオスの面々と合流してもお荷物だ。それに、彼らは彼らで、国連軍との最終決戦で忙しい。そちらを何とかするので手一杯だろう。リボズはヴェーダの掌握およびアレハンドロの監視で忙しいし、他のイノベイドたちも別件で飛び回っている。

他にも様々な消去法やら考察を経て、『悪の組織』の秘密ラボに向かつたのである。予め面々には連絡しておいたため、別荘地／ラボにいた面々は快くノブレスたちを受け入れてくれた。感謝してもしきれない。

『彼女』に関連するすべてのものが敵になつたんだ。おいそれと助けを求めれば、かえつて敵に筒抜けになる危険性がある」

「でも、それは『悪の組織』にも言えることじゃないの?」

ノブレスの答えに対し、ネーナが表情を曇らせる。

こちらを見上げる金の瞳は、不安と怯えが入り混じっていた。

ガンダムマイスターであれども、ガンダムが動かせない今、ネーナたちはか弱い『人間』だ。戦闘訓練も多少積んではいるけれど、完全包囲されてしまえば無力である。

信頼できるものがなくなり、自分たちの拠り所であるガンダムも使えない。力を失つたが故に、『力を持っていたが故に感じなかつた恐怖』に苛まれているのだ。

そこまで考えて、ノブレスはひっそり自嘲する。どうやらノブレス・アムという男は、トリニティ兄妹に信頼されていらないらしい。いや、彼らの信頼に応えられなかつたというべきか。

アリー・アル・サーシエスの駆るスローネツヴァイの偽物から奇襲を受け、完全にノックアウトされたわけだから、仕方がないのかも知れない。

「つか、アイツ何なんですか!? 無数に展開していた質量のある残像」には目もくれず、ピンポイントで本体を狙ってくるなんて!」

サーシエスが戦争を生業とする傭兵であることは知っていた。故に、告死天使を操る『彼女』のような、「機体性能でごり押し」を得意とした戦いをする人間ではないこともわかっていた。むしろ、己の経験と勘で戦うタイプであろうことは明らかである。

奴には小細工が通用しない。機体のOSやリーダー、自分の肉眼だけを判断材料にしているわけではないためだ。『彼女』が「質量のある残像」に振り回されていたのは、「まだ経験が浅く、OSやリーダーに頼っていたから」だと思われる。

対して、サーシエスはほぼ「勘」で本物を見分け、ルガンダムにピンポイント攻撃を仕掛けてきたのだ。おまけに、トランザム解禁前のエクシアを圧倒している。パイロットが元・教え子ということもあつてか、その動きを見切っていたから恐ろしい。

面倒な奴が敵になったものだ。ノブレスは心の中で深々とため息をついた。どうやってサーシエスを無害化させるかも考えておかねばなるまい。奴を味方に引き入れるのは、色々な意味で無茶が過ぎる。傭兵は、金を積まれればころりと裏返る可能性が高い。

ついでに、奴は平和より戦争を愛している。自分たちと話が合う可能性は、万に一つもなかった。似たような人間はもう1人がいるが、それについては割愛する。

これからのことに頭を悩ませつつ、ノブレスはネーナの問いへの答えを考えていた。しかし、ネーナが何かに気づいたように慌てはじめた。

「あ、でも、教官を信じていないわけじゃないの! その……」

妹の慌て様子に感化されたのか、兄2人もおろおろし始める。その

様子が滑稽で、張りつめていた何かが和らいだような気がした。

ノブレスが守れた、数少ないもの。踏みにじられかけた命たち。ネーナが、ヨハンが、ミハエルが無事でいてくれることが、何よりも嬉しい。

炎に飲まれた家族の死体を、ノブレスは忘れてはいない。ハーヴェイとコーナーの祖先が嗤う姿を忘れたこともなかった。

「大丈夫だ。僕は彼らと親交があつてね。マイスターに推挙されたのも、そこからなんだ。信頼できないというならそれでもいいし、もし万が一何かあつたら、見せしめ及びその責任として、僕を好きにして構わない」

「すつ——!?!」

ノブレスが自信満々に言い放った瞬間、ネーナが口を戦慄かせた。満身創痍で真っ白だった顔つきが、あつという間に真っ赤に変わる。気のせいか、どこからかヤカンが沸騰するような音が聞こえてきた。

ヨハンとミハエルが大きく目を見開く。兄2人は妹の様子に戸惑っていたが、妹がくるりと振り返った。そのまま3人はそそくさと通路の片隅に集まり、何やら話し込み始める。彼女らの背中を眺めていたら、端末が鳴り響いた。

連絡の主は、最近完成した戦艦——ホワイトベースの艦長からだ。新人でありながらも、その才能と腕を買われて就任した女性である。といっても、外見の年齢は少女と呼んで差支えないものであったが。そういえば、彼女のデビューは次の作戦からだったか。宇宙で展開される戦いであり、ソレスタルビーイングの救援活動に等しいものだと聞いている。派遣されるMSたちの外見はガンダムタイプだ。おそらく、敵はソレスタルビーイングの協力者と思うだろう。

彼女本人は「ザクかジオング系がいい」と不満そうにしていた。……この発言を彼女の兄が聞いたら、高確率で嘆くような気がしてならない。彼女の兄もまた、ガンダムに搭乗するパイロットなのだから。くだらない想像を片付け、ノブレスはメッセージを読み進める。

本来だったらスローネたちもどさくさに紛れて宇宙に上がり、プロマイオスの援護に向かう筈だった。しかし残念ながら機体の損壊が激しく、改修したとしても、彼らの援護に向かえるかは難しい。突貫工事を施したとしても、間に合うかどうかの瀬戸際だろう。

ノブレスは顎に手を当てた。体はまだふらついているが、このまま休んでもいられない。やるべきことは沢山ある。

廊下の隅で何かを相談しているトリニティ兄妹の背中に視線を向けた。彼らには、ゆっくりと休息してもらいたかった。

「済まない、急用ができた。キミたちは部屋に行って休んでいてくれ」

「え、ちょ、教官ー！」

「そんな体で大丈夫なのか!？」

踵を返した際、よろめいたのが良くなかったらしい。ネーナとミハエルが心配そうに駆け寄ってきた。少し遅れてヨハンも続く。

ノブレスはくるりと振り返り、微笑んだ。

「まだまだ死ぬつもりはないよ。——僕にはまだ、やるべきことが残っている」

脳裏に浮かんだのは、金色の機体。それに搭乗する男は、金のパイロットスーツを身に纏っているのだろう。奴の野望は、ソレスタルビーイングによって滅ぼされる。

これからノブレスがしようとしていることは、無意味なことなのかもしれない。けれど、一族から託された使命を果たさなければ、ノブレスは前に進めない。

例えば、最後に家族とした喧嘩もそれが原因だった。糾弾と断罪のタイミングを待とうとした家族に対し、ノブレスは早急に奴を糾弾し断罪すべきだと主張した。

自分の行動が軽率だったのか、家族が考えていた以上に「奴ら」が狡猾だったのか、今となってはもうわからない。けれど、相手は自分

たちの動きをいち早く掴んで、ノブレスの家族を——ライヒヴァイン一族を手にかけた。

復讐と人は言うのだろう。それもある、とノブレスは自嘲する。けれどそれ以上に、監視者の使命を果たし、家族が果たせなかった責務を全うする“ために、ノブレスは戦ってきたのだ。もうすぐ、その集大成が実を結ぶ。

(——ああ、長かった)

費やされた60年間を思い返す。

しかし、当然のことながら、上には上がいた。数百年の時間をかけて、いずれ訪れるであろう“対話の刻”^{とき}のために準備を進めてきたイオリア・シユヘンベルグとその妻や協力者たちがいる。

彼らと比べれば、ノブレスの60年なんてあっという間なのだろう。それでもノブレスは、自分が歩んできた60年間は「長かった」と思うのだ。しみじみと回想に浸るノブレスを見たトリニティ兄妹も何か感じ取ったらしい。

3兄妹は言いたいことすべてを飲み込んだような、渋いものを食べたときのよくな表情を浮かべた。ノブレスを引き留めることを断念したらしく、渋々と言った様子で踵を返した。足取り重く、3人の背中とは宛がわれた部屋へと向かっていった。

その背中を見送って、ノブレスは廊下を歩く。

自分が囚われてきた過去と向き合い、決別し、未来へ向かうために。

(『僕を好きにして構わない』……——言質取ったりイ！ 希望はまだある!!)

ノブレスに背を向けて歩くネーナが、未来に希望を繋いでいたことを、彼は知らない。

◆

アオミの『知識』通り、太陽炉に搭載されていたブラックボックスは解除され、トランザムが解放された。イオリアのメッセージ内容には多少変化があったけれど、総合的に見れば、『知識』との誤差は殆どない。

真面目な男が愛妻家になった挙句はつちやけていたのにはこめかみが痛くなつたが、その程度なら充分目を覆っていられた。『彼女』はトリニティの処分に失敗したが、暫く不安定要素——ノブレスを退場させることができる。

保険としてサーシエスを同行させていたことが功を制したようだ。彼の能力は買っているけれど、いずれ、サーシエスは邪魔になる。『知識』から総合するに、奴を『退場』させるタイミングはこのあたりが丁度良さそうだ。

理想のプランとしては、デユナメスのガンダムマイスター——ロックオン・ストラトスが家族の仇討を成功させるのが一番だろう。『知識』において、彼の死はマイスターたちに影響を与えた。特に、刹那とテイエリアはその影響が顕著であった。

弟のライル・デイルンデイ——2代目ロックオンの動向も気にする必要もあるが、初代——ニール・デイルンデイが生き残れば、弟がソレスタルビーイングに関わる可能性はぐつと低くなる。彼の實力は兄に劣るものの、至近距離での銃撃戦もこなせるため注意が必要だ。

「もし関わったとしても、兄弟の確執が残ったままだから、暫く思ったような戦い方はできないでしょうね」

しかし、ニール・デイルンデイが生き残ることによって生じるデメ

リットがあることは事実だ。『知識』曰く、彼は2307年のガンダムマイスターの中で最強の実力を持つている。ニールが無傷で生き残ったなら、今度は障害として浮上してくるのが彼の存在だった。

「……峰討ちが妥当ね。疑似太陽炉のGN粒子をぶちまけるなり、『知識』におけるサーシエス並みの重傷を負わせて再生手術させることで時間稼ぎするなりしなくちゃ。確か、右目で3週間だったかしら。……でも、時間稼ぎばかりしててもしょうがないし、前者よね。うん」

丁度良さそうなものもいるし、問題ないだろう。最悪の場合は、サーシエスを『退場』させるときのドサクサに紛れればいいのだから。『知識』と違って生き残っているエイミー・デイランディは意識不明の重体である。そんな人間が何をできるのか。そちらは放置していても問題なさそうだ。

『彼女』の愛機である告死天使が再び戦えるようになるためには、それ相応の時間がかかる。『彼女』が不在の間は、無垢なる子たちや『彼』に頑張ってもらうしかない。

『彼』は『彼女』に遠く及ばぬ愚鈍であるが、『彼女』に対しての忠誠心が強い。元々が罪悪感から同行しているため、裏切る可能性が低いという点では、本当に頼れる相手である。

『彼女』がアオミの「運命共同体」なら、さしずめ『彼』は自分たちの忠実な「手駒」か。例えば駒が愚鈍であろうとも、駒を動かす人間が優秀であれば、活路を開くことができる。自分たちなら、『彼』を使える人間にすることができた。

「そのための力は与えたいし、どうすればいいかの指示出しを行う人間だっている。……機体が暫く使えなくなった分、『彼女』も張り切ってるしね」

アオミは端末を操作した。最後の問題は、まだ横たわっている。

消去すべきイレギュラー、引き入れるべき相手、その他諸々。気にすべきことが沢山あり、正直疲れてしまう。

けれど、これからだ。自分を蔑ろにした世界を見返し、その世界を己の思うがままに動かす。理想郷まで、あと少し。

「楽しみだわ、私の——私たちのための『理想郷』」



一夜の夢と呼ぶに相応しい短い時間。終わった後に待っていたのは、どこまでも厳しい現実であった。

ソレスタルビーイング殲滅作戦——『夜明けの鐘』は最終段階に突入しつつあるらしい。

アイデアが寂しそうな顔をした理由は、この非常事態が「一夜の夢」すら赦せない程切迫していたからだったのだろう。

「最後の休暇はどうだった？」

背後から駆けられた声に振り返れば、普段と変わらぬ晴れやかな笑みを浮かべたグラハムが立っていた。

「最後とか言うな。彼女の話が途中で終わったから、次に会ったらその続きを聞かせてもらおう予定でいる」

クーゴがムツとして食い下がれば、グラハムは大きく目を見開いた。

緑の瞳は真ん丸になり、しばしばと瞬く。ややあつて、彼は静かに

微笑んだ。

「……そうか。そうだな。最後ではない。あの逢瀬を最後で終わりにしていいはずがないんだ」

休暇の最中に、グラハムと刹那に何があったのかはわからない。しかし、彼らは彼らで、休暇を過ごしてきたのだろう。彼らの決意を壊すような、ヤボな真似はしなくなかった。

今日もグラハムは、GNフラッグを催促しに行くらしい。と言っても、9割がた終わっているから、GNフラッグは最終調整に入っているのだが。

この調子でいけば、あと2、3週間弱で突貫工事が終わるだろう。突貫工事と言っているが、何か問題が起きたらまずいので、調整はギリギリまで行うつもりでいるらしい。ビリーや『悪の組織』の技術者たちも頑張っている。

格納庫がてんやわんやしている様子が目に浮かぶ。今から向かうつもりだったクーゴの手には、ビリーやノーヴルたちへの差し入れが入った重箱が入った紙袋が抱え込まれていた。それを見たグラハムが感嘆の息を零す。

一応、グラハムの分も用意している。目でそれを伝えれば、奴は嬉しそうに目を細めた。楽しみにしている、と、翠緑の瞳が瞬いた。期待に答えようという代わりに、クーゴも不敵な笑みを浮べた。

自分たちは、あと少ししたら、ソレスタルビーイングの最終決戦に赴く。グラハムは刹那と、クーゴはアイデアと、それぞれ決着をつけなくてはならない。

宇宙では、どんな運命が自分たちを待っているのだろう。不安に思わないことはないけれど、それでも自分たちは、彼女たちと向き合う道を選んだ。

積み重ねてきた絆や想いを踏みにじるような真似はしたくないし、彼女たちを追いかけてきた人間として、彼女たちと対をなすであろう存在として、相応しくありたいと思った。

(ああ、そういえば、彼女に確認してなかったな。……俺は、そんな存在に相応しかつたのかどうか)

そこまで考えて、いや、とクーゴは首を振った。

(そうだな。次に会ったら、訊いてみればいいか)

新しく抱いた希望を胸に、クーゴは一步踏み出した。

いつか訪れるであろう、“レティシア／アイデアと笑いあう”明日のために。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

第4回現状確認

「大丈夫だ、1stシーズンの終盤に突入したから」
『幕間・ノブレス・アムとイデア・クピディターズ、
あるいは混沌地帯プロレマイオス』く『46. 明日へ
託す約束』時点の中心オリキャラまとめ

名前：クーゴ・ハガネ／刃金はがね 空護くうご

性別：男性

年齢：28歳

誕生日：12月22日（山羊座）

身長：169cm

体重：??kg

血液型：B型

所属：ユニオン軍／オーバーフラッグス部隊⇒国連軍

搭乗機体：クーゴ専用カスタムフラッグ

主に交流のある人物：グラハム・エーカー、ビリー・カタギリ他

特筆事項

・元々の国籍は日本。しかし、ユニオン軍に所属するために国籍を
変更した。

・家族構成は母・櫻華おうか、双子の姉・蒼海あのみ。その他、親戚多数。

・最大の天敵は蒼海。彼女になじられ蔑まれても、押し黙ったまま
でいることが多い。

・MSWADの精鋭で、階級は中尉。グラハム・エーカーの相棒お
よび副官と言える人物。
コウアレンター

・共有者能力持ちで虚憶きよおく保持者。

・歌い手として活動中。ハンドルネームは『夜鷹』。

・徹夜明けだとゾンビみたいになるため、ユニオン夏の風物詩とし
て怖がられている。

・ヴェーダ曰く、アルコール摂取後も危険らしい。詳細不明。

・料理上手。ご飯のおかずからお菓子まで幅広い。
・人間卒業間近であることに色々思うところがある。
・友人IIグラハムも人間卒業間近なので心配している。
・空を目指した理由は、虚憶きよおくで出会った人たちから「空を目指せば会える」と言われたから。
・以前は外宇宙探索を夢見ていた。
・荒ぶる青タイプ・ブルーとして覚醒したらしいが、本人は無自覚。
『Toward the Terra』というタイトルのSF小説を読み進めている。

・女性曰く、「夫の若い頃にそっくり」らしい。
・イラストを描くのがうまい。仕様画材は主にペンと色鉛筆。
・悪意等、負の感情を察知すると寒気がする様子。
・視力は両目とも2.0。
・世界の動きがおかしいことに気づいている。
・「自分のことよりも、優秀な能力を持つ他者を評価してほしい」と思っている。天才的な才能を持つ姉が蔑ろにされてきたことが原因。
・アイデアと、「また会ったら話の続きを聞きたい」と約束を交わす。

蛇足

・イメージCV・私市淳
・イメージソング・『Adventure』(Alexandros)
／『そこに空があるから』(江崎とし子)

名前：イデア・クピディターズ
性別：女性
年齢：20代
誕生日：11月11日(蠍座)
身長：160cm

体重：?? kg

血液型：O型

所属：ソレスタルビーイング（?）

搭乗機体：ガンダムESP—Psyonタイプモデル03Ⅱスター
ゲイザー

主に交流のある人物：刹那・F・セイエイ他

特筆事項

・コードネームの由来は『理想への憧れ』（ラテン語）。本名はレティ
シア・リン。

・特殊能力保持。能力のランクは最強と謳われる荒ぶる青^{タイプ・ブルー}。力の威
力としては、MDを消し飛ばすレベル。

・MDに搭載されているシステムに対して嫌悪感を抱く。そのシス
テムが天敵な様子。

・とある事故で母を亡くし、視力を失う。しかし、能力のおかげで
視界に不自由はしていない。

・共有者^{コウウアレンター}能力持ちで虚憶^{きよわく}保持者。

・歌い手として活動中。ハンドルネームは『エトワール』。

・恋愛^{こひ}ことを見ると、所構わず介入する。根掘り葉掘りするのもし
れるのも好き。

・『同胞』の歴史を知っている。

・『悪の組織』およびスターダスト・トレイマーと何らかの関わりが
ある。

・ノブレス・アムと旧知の仲。

・只今、クーゴにロックオン中。

・端末の待ち受けに、4徹明けのクーゴの写真を使っている。

・命の色は青だと思っている。

・クーゴに自分の本名を告げた。古来の日本の風習に倣ったという
が……？

・E・A・レイと“イニー”の間に生まれた子ども名前と同姓同
名。この少女／レティシア・リンは、事故で両目の視力と母親を失っ

ている。

蛇足

・イメージCV・桑島法子

・イメージソング：『fortissimothelultimate crisis』(frisside)／『BRAND NEW STORY』(東京パフォーマンスドール)

名前：テオ・マイヤー

性別：男性

年齢：20代

誕生日：??

身長：??cm

体重：??kg

血液型：?型

所属：一般人(?)

主に交流のある人物：リボンズ・アルマーク、アレハンドロ・コナー他

特筆事項

- ・大人気の歌手。最新作は『Terra —還るべき青き惑星—』。
- ・一身上の都合により、無期限の活動休止を宣言した。
- ・特殊能力保持の疑い濃厚。感知能力やテレパス関連。
- ・味覚がない。但し、他人の味覚をコピーすることで代用可能。
- ・共有者能力持ちで虚憶保持者。キョウブ
- ・エイフマンのお兄さんの存在だった人物にそっくりらしい。それがきっかけで、彼と文通を始めた。
- ・結婚願望はあるが、諸事情で諦めている。詳細不明。
- ・友人の結婚式でゲリラライブ開催中に、偽物のスローネシリーズに強襲される。その後の音沙汰は不明。

蛇足

・イメージCV・置鮎龍太郎

名前：ノブレス・アム

性別：男性

年齢：20代

誕生日：??（蟹座）

身長：??cm

体重：??kg

血液型：O型

所属：ソレスタルビーイング（?）

搭乗機体：ガンダムESP—Psyonタイプモデル02||ルガンダム

主に交流のある人物：チーム・トリニティ他

特筆事項

・チーム・トリニティの教官。彼らを大切に想っている。

・仮面着用。素顔は不明。

・コードネームの由来は『高貴なる魂』（フランス語）。現時点では本名不明。姓はライヒヴァイン。

・生身の戦闘能力は高いと思われる。

・どうやら口調を変えている様子。

・今はMS乗りパイロットをしているが、本業は技術職。凶面を引いたり開発を行ったりしていた。

・彼の家系——ライヒヴァインの一族は2270年代以前から虚憶きよわくやヴィジョン、コピーコピーレンターレンター能力の研究を行っていた。

・彼自身も共有者共有者で虚憶保持者。どうやら、彼の一族の中には能力に目覚めた者もいたらしい。今は天涯孤独。

・味覚がない。但し、他人の味覚をコピーすることで代用可能。

・隣の家に住んでいた少年のことを気にかけている。彼は現在、M Sの権威として名をはせる技術者となっているが……。

・アルヴァアロンおよびアルヴァトーレの図面や機体に、しようもない悪戯を仕掛けている。

・MDに使われた機体の原型を設計した。データを誰かに盗まれ、勝手に転用されたらしい。

・結婚や恋愛関係の話を振られるとダメージを喰らう様子。

・ファングよりファンネル派。

・外見年齢と実年齢が一致していない。少なくとも70年以上生きていことになる。

・ラグナ・ハーヴェイを暗殺。次の相手はアレハンドロ・コーナー。

・ネーナ・トリニティから好意を抱かれていることに気づいていない様子。

・「アルヴァーシス・ジス・ライヒヴァイン」という名前と、何か関わりがあるようだ。

蛇足

・イメージCV・置鮎龍太郎

・イメージソング・『ゴールデンタイムラバー』（スキマスイッチ）／

『月光花』（Janne Da Arc）

名前：ベル

性別：女性

年齢：20代後半

誕生日：??

身長：?? cm

体重：?? kg

血液型：?型

所属：『悪の組織』およびスターダスト・トレイマー

主に交流のある人物：イオリア・シユヘンベルグ、E・A・レイ、リ

ボンズ・アルマーク他

特筆事項

・『悪の組織』代表取締役にして、孤児院の元・院長。現在は隠居しているが、子どもや職員たちから好かれている。

・車椅子使用。しかし、それでも精力的に動き回っている。

・ネーナ曰く、ナイスバディ。

・夫に先立たれた(?) 未亡人。

・何やら崇高な目的がある様子。

・尊敬する相手がいたらしい。その人物の愛称は『グラン・パ』。

・愛称は『グラン・マ(おばあちゃん)』。リボンズからは『マザー』と呼ばれている。

・各方面にコネクションがある。そのすべてが『同胞』。

・マリナ・イスマイルは、彼女の尺度で5冠殿堂入りを果たしている。

・曰く、『女性は愛でるべき存在である。夫は愛する存在である。夫以外の男は親友ダチ公である。但し例外有り』らしい。

・口説いた人間の代表格は、師匠、航海長、女史、オペレーター、技術者、占い師、幼馴染の女の子たち、友人のお母さん等々。当時3歳だった。

・エルガンに対して厳しめなのは、彼が例外にカテゴライズされているため。

・凶面は綺麗に引けるが、絵はヘタクソ(エルガン談)。女性はみんな美人に描ける。男性は、夫以外変な絵になる。夫でさえ美形10割増し。

・ナスカという星の生まれだが、故郷はもう存在していない。惑星を破壊する兵器によって滅亡した。

・宇宙を流浪していた『同胞』から別れて、この地球にやって来た。元々『同胞』たちは青い星^{テラ}を目指して旅をしていたらしい。

・同じ星で生まれた幼馴染は9人いた。名前はそれぞれ、トオニイ、アルテラ、タージオン、タキオン、コブ、ツエーレン、ペスタチオ、エルガン、イニスという。

・トオニイは『同胞』のリーダーをやっていた。『同胞』では、指導者のことを『ソルジャー』という称号で呼ぶ。

・そのうち、青い星^テを^ラ目指す旅路で亡くなったのは、アルテラ、タージョン、コブ。

・旅路の中で、『牙』として多大な戦果を挙げていた様子。

・スターダスト・トレイマーのリーダー。

・ベルというのは愛称。本名ではない。

・イオリア・シユヘンベルクの妻の名前もベル（Not本名）。

蛇足

・イメージCV・神田沙也加

・イメージソング：『フレンズ』（ステファニー）／『This N

ight』（CHEMISTRY）

大丈夫だ、これで1stシーズンが完結だから。

47. 行く者、見送る者、去る者、還る者

イオリア・シユヘンベルクが愛妻家であったことを知っているのは、第1世代のガンダムおよびその開発時期とソレスタルビーイングの初代関係者陣営だけだ。その世代に当たる人間はほぼ死に絶えているし、彼らの意思と志を継いだ人間たちが残っているものの、詳しい話を祖先から聞いた者はいない。

情報の秘匿は急務だったし、必要なことだった。それに関わった者である女性は、当時のことを振り返って考える。自分もまた、今となっては数少ない、ソレスタルビーイング立ち上げに関わった初期関係者だ。嘗てはガンダムのテストパイロット及び開発に携わっていたし、現在もそのノウハウを生かして会社／団体を率いている。

第2世代の関係者がソレスタルビーイングをサポートする秘密結社——フェレシユテを立ち上げる以前から、『悪の組織』及び『スターダスト・トレイマー』は存在していた。本来ならば、『悪の組織』及び『スターダスト・トレイマー』はフェレシユテ同様に、ソレスタルビーイングのサポートを行うつもりでいた。

それを方向変換したのは、親友を失った後である。ソレスタルビーイングと対をなす存在であり、彼らにとって「目の上のたん瘤」でい続ける——人類の敵として存在し、人類の統合を後押しするソレスタルビーイングの『最終的な仮想敵^{ラスボス}』として存在することで、彼らの成長を促す存在であり続ける。

同時に、『ソレスタルビーイングが役目を終えた』、あるいは『ソレスタルビーイングがイオリア計画を遂行できなくなり、最悪、本来の『存在価値』を果たすどころか人類滅亡を助長させる存在と化した』場合、ソレスタルビーイングを葬り去る役目も担っていた。その役割は、アレハンドロに取って代わられてしまったが。

「フェレシユテの動向は？」

『ノブレスとの接触により、早い段階でヴェーダとのリンクを切っていたため、アレハンドロ・コーナーからは捕まえられていないようです。後始末の名目でフォン・スパークが出撃した様子ですが、ソレスタルビーイングの面々を救助するつもりはないようですね。彼は、世界の『真実』を、己の目で見極めようとしているつもりです』
「フェレシユテの可愛い子ちゃんたちは？」

『シャル・アクステイカは、先程のメッセージの余波を引きずっている模様です。それでも務めて冷静であろうとしている姿は、流石フェレシユテを纏めるリーダーですね。シエリリン・ハイドはマイスター874が寸でのところで教育的な情報操作を行ったようで、会話の不適切内容はすべてピー音にされたようです。汚いところは大人がすべて背負ったということですね』

「世の中って世知辛いね」

『フォン・スパークに至っては「色ボケ爺さん」と大爆笑していました。……ところで、エコ・カローレについては聞きますか？』

「あ、いたの？ そんな人」

『興味がなさそうなので、彼については語らなくて良さそうですね。……エルガンと同じ括りにされたのが、ちよつと可哀想ですけど』

端末のホログラム越しから、女性はアプロディアと会話する。

「じゃあ、ソレビは？」

『アラサー独身であるスメラギ・李・ノリエガとラツセ・アイオンに多大なストレスがかかったようです。今は立ち直つていますが、メッセージが届いた直後はかなり精神的に荒れていた様子でした。特に、スメラギ・李・ノリエガが』

「私が言うのもなんだけど、独身を拗らせた人にはきついんじゃないかな。あーいうの」

『その点では同意します。イアン・ヴァスデイはリンダ・ヴァスデイに連絡を取り、長々と会話していましたね。彼が無事に帰還したら夜戦になりそうです。もしかしたら、ミレイナ・ヴァスデイに妹か弟がで

きるかもしれませんが」

「それは重畳。で、他の子たちはどうしてた？」

『教育的情報操作が作動しなかったために、18禁ものの単語の意味を問うフェルト・グレイスに対して、どう答えればいいのかをロックオン・ストラトスが必死に考えています。リヒテンダール・ツエーリが両手で顔を抑えて羞恥に悶え、予想外の内容にクリステイナ・シエラが愕然としていました。アレルヤ・ハプティズムは顔を真っ赤にしてうろたえ、テイエリア・アーデが人格崩壊一歩手前になり、刹那・F・セイエイは表情を引きつらせていましたね。尤も、刹那・F・セイエイはトランザム解放のおかげで、面々の中から一番最初にシヨックから立ち直れたみたいです』

「わーお。皆、私の旦那様イオリア・シユヘンベルクに対してどんな幻想を抱いていたのかしら。理想は抱いたまま溺れておけば幸せだった」という典型的なパターン？」

『夢は夢のままであつたほうが幸せだった』、とも言えますね。……貴女にとっては腹立たしい言葉かもしれませんが』

アプロデイアは表情を曇らせた。彼女が女性を慮ってくれているのは分かっている。

夢にまで見た青い星テラにたどり着いた自分が見た真実が脳裏にフラッシュバックする。指定された座標に青い星はなく、その代わりに、薄汚く濁った死の星が存在していた。

あんなもののために、沢山の同胞が——グラン・パが敬愛したソルジャー・ブルーが、ナスカと運命を共にした両親／ラナロウとクレアが、先の戦いで散ったアルテラたちが——犠牲になった。

彼らの犠牲は何だったのか。自分たちが選りたかった場所は、こんな場所ではなかったのに。むせび泣いた自分の背中を支えてくれたエルガンとイニスの横顔を、今でもはつきり思い出せる。

ある意味で、ナスカからの逃亡で命を散らしたソルジャー・ブルーは幸せだったのかもしれない。彼は最期の瞬間まで、青い星テラは『青く輝く美しい惑星ほしであり、楽園』だと信じたままだった。

もし彼が生き残って、真実を知ったらどうなっていたらだろうか。青^テい星^ラへ還りたいと願ったソルジャー・ブルーの心は、めちやくちやに引き裂かれていたに違いない。心が死んでしまったら、人はもう生きていけなくなる。

「どのみち、ブルーは長くなかった。……遅かれ早かれ、彼の命は尽きていたんだ。先に心が死ぬか、肉体が死ぬかの違いだけであって」

背後から聞こえてきた声に振り返れば、1人の少年が扉を開けて入ってきたところだった。銀色の髪に、鮮やかな真紅の瞳。人革連の超兵施設から救い出し、『スターダスト・トレイマー』のMSパイロットとなった、アスル・インディゴだ。

姿形は初代指導者^{ソルジャー}であるブルーと同じであるが、アスル自身の肉体系年齢が若いためか、ブルーと比較して身長は低く声はやや高い。そのギャップに驚いていたら、アスルは静かに微笑んだ。やはり、笑い方もソルジャー・ブルーそのものだった。

「理想だけでは、青^テい星^ラにたどり着けなかった。優しさだけでは、対話の道は開かれなかった。確固たる決意と、未来のために己を投げ出す勇気が、人類と『同胞』の共存を押し開いたんだ。……ブルーは、最初から分かっていたんだよ。その全てを兼ね備えた人物がジョミー・マーキス・シンであることも、彼が過酷な道を進むことになることも。フィシスに能力の一部を分け与えていたから、はつきりとした詳細は分からなかったみたいだけど」

誰かの感情を、想いを辿るようにして、アスルは朗々と言葉を紡いだ。澄み渡った水面を思わせるような佇まいに、女性はブルー本人と向き合っているような心地になる。

「貴女も、レティシア・カノン——今はソレスタルビーイングに所属するアイデア・クピディターズも、それをよく知っている。そうして、そ

の全てを兼ね備えた人物たちとして、第3世代のガンダムマイスター、及びプロトレマイオスクルーを見出した」

「……今なら、ソルジャー！ブルーがグラン・パを見出した理由が分かる気がするんだ。誰かに何かを託せるって、幸せなことだよね」

女性は天井を仰ぐ。遠い昔の光景が浮かんでは消えてを繰り返し、想いをその瞬間へと連れていく。出会いと別れを繰り返し、幾度となく夜を超え、朝を迎え、ここまで来た。

夜明けの鐘は鳴り響くだろう。それは、天使たちの——ひいては天上人たちの落日を告げる音だ。人類の統一を成し遂げた彼らには、最早存在価値はない。滅びこそが存在意義だからだ。

しかし、この滅びは意図しないものだ。イオリアが思い描いていたものとは全く違う。アレハンドロの悪意によって歪められ、世界は一気に加速していく。歯止めをかけることは最早不可能であった。

それでも、まだできることはある。天使の涙を止めることくらいなら、間に合うはずだ。

彼らはこんなところで散っていい命ではない。自分たちが見出した希望を絶やすわけにはいかない。

女性は即座にアプロディアに指示を飛ばした。

「緊急コード発動。『星屑の夢を見る者』。秘密結社『かぶしきがいしや悪の組織』は、これより、私設遊撃部隊『スターダスト・トレイマー』としての活動を再開する！」

その言葉を皮切りに、女性はてきぱきと指示を飛ばした。

「今回の任務はソレスタルビーイング関係の証拠隠滅、及び『同胞』の回収。人類軍とソレビの激戦区を、双方に悟られないように飛び回る遊撃形式で動いて頂戴。新人しかないチーム構成だけど、貴方たちならやり遂げられるわ。長丁場になるけど、初陣、しっかり果たしてね！」

即座に、端末へ帰ってくる「了解」の返事。それらを確認し、女性はアスルに視線を向けた。

「そういう訳だから、よろしくね。エースくん？」

「了解。……『今度は必ず、皆の元へ還ってくるよ。ベル』」

アスルの言葉に、女性は弾かれたように目を見開く。その感情は、まさしくソルジャー・ブルーのものだ。ナスカを守るために命を投げ出し、青い星への想いを抱いて散った彼のものだ。

女性の反応に何か思うところがあつたのか、アスルは静かな面持ちで頷いた。赤い瞳に宿るのは揺るぎない決意。あの日、女性が見送つたソルジャー・ブルーが抱いた決意とは覚悟の質が違う。前者が生きるためのものならば、後者は死出への悲壮感に満ちたものだった。

大丈夫だ。彼ならば、きつと無事に帰ってくる。ホワイトベースの新艦長だつて、仲間たちを死なせるつもりはないだろう。

女性の表情を確認したアスルは微笑み、この場から姿を消す。ホワイトベースへと転移したのだ。今頃、彼の専用機に乗って出撃しているに違いない。

すべてを敵に回して、それでも尚、突き進む。ソレスタルビーイングの姿は、まるで、遠い昔に辿ってきた女性——および『同胞』たちの旅路とよく似ていた。だから、女性は彼らを放っておけない。嘗ての自分たちもまた、その孤独と悲しみを抱いて歩んできたから。

「太陽はまだ、沈むに早い。……暫くは、昇れそうにないでしょうけど。まあ、『日はまた昇る』っていう格言もあるから、立ち直ってくれるよね」

女性は祈るような面持ちで宇宙を見上げた。アプロディアも、静かに同じ方向を見やる。

今はただ、信じたい。人は、前に進むことのできる生き物なのだ。

グラン・パの言葉通り——パンドラの箱に残っていたものは、希望なのだ。



宇宙の果て。多くの星が瞬く中で、爆ぜるような光が点滅していた。それに呼応するかのごとく、断末魔を連想させる悲鳴が木霊する。

不意に見えたのは、3機のジンクス。搭乗者が誰なのか、クーゴはすぐに『分かった』。ダリル、ジョシユア、アキラの3人であった。

『嘘だろう!? 機体が勝手に動くぞ!?』

顔を真っ青にしたジョシユアが、必死になって操縦桿を動かす。しかし、ジンクスは彼の操縦を完全無視して突っ込んで行く。

『くそっ、どうなっているんだ!? 操縦が利かない……!』

『一体何が起きてるんすか、これ!』

異常が起きていたのは、ジョシユアが操縦するジンクスだけではなかった。ダリルとアキラのジンクスも、2人の操縦を完全に無視して動き始めた。いくら操縦桿を動かしても、彼らの意図する方向とは別の場所へ機体が向かう。

その先を辿れば、いつぞや対峙したガンダムの偽物と、緑と白基調のスナイパー型ガンダムが戦いを繰り広げていた。スナイパー型が偽物に押されている。偽物の動きは、アイリス社襲撃で対峙したときとまったく違っていた。

脳裏を駆けしたのは焼野原。見覚えのある荒野から連想したのは、アザデイスタンで対峙した傭兵——アリー・アル・サーシエスだった。何故、こいつが偽物のガンダムに搭乗しているのだろうか。その理由が思い当たらない。

ジンクスたちはスナイパー型ガンダムの元へと突っ込んで行く。彼らはパイロットの意思など関係なく——けれども、『誰か』の意志を反映させたかのように、ガンダム目がけて突撃した。しかも、ただ突撃するだけではない。コックピット内に大音量で流れたのは警告音だ。赤い光が、疑似太陽炉の暴走を告げる。

偽物や新型ガンダムの粒子は、人体に悪影響を及ぼすとされていた。砲撃を真正面から喰らえば、(当然のことだが)死体は跡形も残らない。砲撃に巻き込まれただけでも、細胞障害が発生し、再生手術ができない等の異常が発生する。では、その粒子自体を大量に浴びてしまったら、どうなるのだろうか。

愕然とした表情を浮かべた3人の横顔が『視える』。あ、と、声にならぬ悲鳴を上げて、彼らの瞳は絶望を見据えていた。

『こ、こんなところで死んでたまるか！ 動け、動けよおお!!』

今にも泣き出しそうな顔をしたジョシユアが、乱雑に操縦桿を動かした。

『フラッグの後継機が待ってるんだ！ それに乗るまで、死んでいられないというのに……!!』

『い、嫌だ………こんなの嫌だあああああ!!』

ダリルとアキラも、同じようにして操縦桿を動かす。しかし、機体はうんともすんとも言わない。

彼等が焦っている間にも、スナイパー型のガンダムとの距離は縮まっていく。パイロットの感情など関係ないと言わんばかりに、ジンクスは速度を上げた。

『う、うわああああああああああああああああああああ!!』
(ツ、皆！)

3人の悲鳴が響く。

脱出機能さえ正常に動いてくれれば。もしくは、ハワードのときのように、彼らの手を掴むことができれば。クーゴがそう思ったとき、叫び声に気づいたかのように仲間たちが顔を上げる。

意図を察したのか、彼らは思い切り手を伸ばした。仲間たちの手を、クーゴは掴み引き上げる。ダリル、ジョシユア、アキラの順番に、だ。それに呼応するかのように、今までうんともすんとも言わなかった脱出機能が『作動した』。

ジンクスからコクピット部分が切り離されたのと、斜め上から降り注いだビームの雨がジンクス穿ったのと、ジンクスに搭載されていた疑似太陽炉が暴発したのは、ほぼ同時のタイミングであった。

赤い光と黒い雲を振り払うようにして、コクピットから脱出した3人の姿が『視えた』。

少々無茶な脱出方法だったようで、彼らは傷を負ってしまったらしい。

『うう……た、助かった……のか……?』

『いでで……ツ、生きてる!? 俺、生きてる……!!』

『は、はは……。生きてるんだ、俺……』

痛みに呻きながらも、ダリル、アキラ、ジョシユアは安堵したように表情を綻ばせた。彼らを尻目に、スナイパー型のガンダムと偽物のガンダムは南下しながら戦いを続けていく。

脱出した3人は、どうにか国連軍の救出部隊に拾われたようだ。これで一安心である。クーゴがほっと息を吐いたのと入れ替わるようにして、世界は一変した。

どこかの宇宙域から、地上の格納庫へ。世界が変わったと言うよりは、クーゴの意識が『あるべき場所へ戻ってきた』と言った方が正しい。

疑似太陽炉——正式名称はGNドライブ——「T」——を積んだフラッグ2機が、最終調整に入っていた。あと少しすれば、宇宙にいる国連軍と合流することができるだろう。

そこまで考えて、クーゴは一端思考を留めた。先程の光景が頭によぎる。操縦不能の機体から、命からがら脱出したダリルたちの姿。あれは、一体なんだったのか。

夢幻にしては、切羽詰った焦燥感があつたような気がした。彼らの手を掴んだ感覚は、まだ右手に残っている。間一髪という単語がこれ程までに似合う状況は、そうそうなからう。

クーゴの思考を中断するかのように、隣で作業状況を確認していたグラハムの端末が鳴り響いた。緊急連絡、だろうか。クーゴが首を傾げたとき、グラハムが大きく目を見開く。

「それで、3人は？ ……そうですか。それは、よかった」

切羽詰った横顔から力が抜け、安堵したようにグラハムは微笑む。彼は相手と暫し会話していたが、手短に済ませたようだ。

「グラハム、何かあつたのか？」

「宇宙ダリル、アキラ、ジョシユアたちに向いていた面々の機体ジンクスに異常が発生したらしい。その際、敵MSから攻撃を受けて機体は爆散したが、彼らはなんとか無事に帰投できたようだ。暫く戦線から離れることになるそうだがね」

そう言って、グラハムは端末をしまった。彼の言葉から連想したの

は、先程クーゴが『視た』光景である。

パイロットの意に反して特攻を仕掛けようとしていたジンクス。面々の悲鳴。彼らの手を掴んで引き上げた刹那、間一髪で作動した脱出装置。

クーゴの手に、掴んで引き上げた仲間たちの重さや温かさが戻ってきたような心地になる。思わず、右手を開いて閉じてを繰り返した。取り繕うようにして肩をすくめる。

「成程。ダリルたちも、ハワードの仲間入りということか」

「我々とは入れ違いだな」

グラハム曰く、ダリルたちは治療のため、地上に戻るようになったらしい。そのタイミングが、フラッグの調整完了と同じなのだ。

一緒に前線で戦えないというのは残念だが、彼らは生きているのだ。自分たちが無事に帰って来さえすれば、また一緒に空を飛ぶことができる。

命あつての物種とも言うのだ。生きていさえすれば、チャンスは作り出すことができる。……流石に、「いくらでも」とは言い難いが。

機会は「ある」に越したことはない。クーゴは心の中でうんうん頷いて、フラッグに視線を向けた。

あと少し。あと少しで、クーゴたちの最終決戦はやって来る。積み重ねてきた優しい時間に、終わりの鐘を鳴らす瞬間が、刻一刻と近づいてくる。

早くその瞬間ときが来て欲しいと思う一方、そんな日が来なければいいと願う自分がいた。分かっていたことなのに、うじうじと悩んでしまう自分に呆れてしまう。

(……これじゃあ、イデアに——レティシアに幻滅されるぞ)

クーゴは息を吐き、がしがしと頭を掻いた。ソレスタルビーイングに属する好敵手にも、ただの一人の女性にも、失望されてしまうとい

うのは御免被りたい。自分は相当なカッコつけたがりだったようだ。自分自身のこと、知らなかったことは沢山ある。アイデアとの出会いで知ったことだった。

視線を感じて振り返れば、グラハムが生暖かい眼差しをこちらに向けていたところだった。どこか悪さを含んだ笑みの意図を察しあぐねて、クーゴは眉間に皺を寄せる。すると、グラハムは何が面白いのか、くつくつと喉を振るわせて笑った。面白くてたまらない——彼の横顔はそう語っている。

「お前、最近人が悪くなっていないか？」

「失礼。いつになったら気づくのかと思ってね」

「何が？」

「……………外堀が埋められていくことに気づいていない所に、どう反応すればいいのか悩ましいが」

グラハムはちよつとだけ同情するように遠くを見た。視線の先に誰がいるのだろうか。

「おまけに、無自覚で相手の外堀を埋めにかかっている。日本語で言う『一級フラグ建築士』かな」

「死亡フラグを立てたつもりはないが」

「フラグを叩き折る方に特化したフラグ建築士もいたのだろうか」

こいつは何を言っているのだろう。クーゴはぼんやりとグラハムの横顔を眺める。彼がちよつと『よくわからない』のは、今に始まったことではなかった。刹那に一目惚れした直後から、その度合いが加速したように思えてならない。

『よくわからない』具合はこれからも加速することだろう。愛と言う単語を振りかざして暴走する男、及び黒い機体の姿が『視えた』ような気がして、何とも言えない心地になった。ギャラリーが置いてけぼりになってしまった光景が実にシニールだ。

助けを求めるように、ギャラリーが『自分』に視線の集中砲火を浴びせてきた。しかし残念ながら、『自分』もまた、引きずり回される人間の1人に過ぎない。そのことを知ったギャラリーが天を仰ぐ。どうしてだか、申し訳ない気持ちになってきた。

◇

自分は一体、何をしているのだろうか。

ロックオン・ストラトス——否、ニール・デイランデイは、そんなことを考えた。手にはデユナメスのスナイパースコープ。そのスコープは、破損して宇宙を漂っていたGNアームズのビーム砲に直結している。狙いの先には、スローネツヴァイの偽物が周囲を確認していた。

その機体に搭乗している男——アリー・アル・サーシエスは、破損したデユナメスを探し回っているのだ。愛機の方は、搭載された太陽炉ごと、相棒であるハロがプロトレマイオスへ送り届けてくれる。憂うことなど何もない。けれど、ニールがここでスコープを構える理由もない。

ハロやデユナメスと一緒に、プロトレマイオスに帰還すればいいだけの話だ。今の自分では、最早この戦場に立つことはできない。体もロボロだし、視界も霞んでよく見えない。痛みと疲労からか、時々意識ごと刈り取られそうになる。それでも、ニールは歯を食いしばった。

こんなことをしても、意味はないのかもしれない。復讐を果たしても、エイミーの意識が戻ることもなければ、亡くなった両親が帰ってくることもないのだ。ばかっている、と、ニールは一人自嘲する。

しかし、ニールの腕はスナイパースコープから手を離そうとしな

かった。むしろ、強く強く握りしめる。狙いはまっすぐ、サーシエスが搭乗するガンダムへと向けられていた。タイミングを合わせて引き金を引く、その瞬間を待ちわびる。

「……………いつを殺らなきや、……………俺は、前に進めねエ……………」

決意を胸に、ニールはスナイパースコープの引き金に手をかけた。今までの出来事が、脳裏に浮かんでは消えていく。大切な家族たち、失ってしまったものの数、ソレスタルビーイングで出会った大切な仲間たち、——そうして、自分が想いを寄せた少女。

沢山のものを失ってきたニールだけれど、この手の中にはまだ、ニールの護るべき人々がいる。失いたくないと願う人々や絆がある。サーシエスと言う男の存在は、確実に、ニールの護ろうとしているそれらのものを脅かすだろう。そんなこと、絶対に許せない。

「そうだ……………俺の大切な人たちのために、未来のために。俺は……………こいつを、討つ……………」

テロを憎む復讐者としての側面は変わっていない。けれど、それ以上に、ニールは大切な人々の未来を守りたかった。

自分は人殺しである。そんな人間は、もう、幸せを手にする権利など存在しない。ソレスタルビーイングに所属することになったその瞬間から、覚悟は決めていた。それ故に、手を伸ばせなかった少女がいた。妹のように接してきたつもりだったが、いつの間にか、それ以上の意味を持つてしまったらしい。

裁きを受ける自分では、彼女を——フェルト・グレイスを幸せにできない。だから、家族であろうとした。彼女にとって、尊敬すべきお兄さんでいようと努めた。それを見透かしてきた人間は、イデア・クピディターズと、刹那にゾツコンなユニオンの軍人——グラハム・エーカーだった。ニールを突き動かしたのは、どちらかと言えば後者である。

『俺は人殺し、いつかは裁きを受ける身だ。幸福を手にする権利なんか存在しない。あんただってそうだろう？ 軍人さん。——その覚悟は、とうにできてるんだよ！』

『ああそうだな！ 敵を撃ち、部下や上官を死なせ、屍の山を築いていく……そんな人間がたどり着く場所くらい、私も心得ているさ！ していないずれば、私もそこに墜ちるのだと！』

『だったらー！』

『だからこそだ！』

『だからこそ、好いた相手を——心から愛した女性^{ひと}を！ せめて、他ならぬ己自身の手で、幸せにしたいと願うのだよ——!!』

ニールの言葉を肯定し、且つ、グラハムはそれを否定した。否定して、文字通り、彼は刹那・F・セイエイを幸せにしてみせた。グラハム本人はきつと何も知らないだろうが、刹那を見守ってきた兄貴分として、そう断言できる。

有言実行の男に感化されてしまったのだろう。恋愛ごとが大好きなアイデアの介入を赦した挙句、気づいたら、フェルトと親密な関係になっていた。彼女の写真にどきまぎしたり、赤いバラの花束や白いバラの花束を贈ってみたり、自分らしくないことをしたと思う。

そういえば、バラの花束を贈って以後、ルイードという見知らぬ男性が駆るガンダム——機体名はアストレアだったか——に襲われる夢を頻繁に見るようになった。彼はしきりに何かを叫んでいたような気もするが、目が覚めるとすっかり忘れてしまう。思い出そうと頑張ってみたが、無理であった。

最近、さめざめと男泣きした彼だけでなく、彼に寄り添うマレーネという見知らぬ女性とも話をした。会話内容は一切思い出せなかったけれど、何か、大切なものを託されたのだということだけは鮮明に覚えていた。

……ああ、思考回路が脱線してしまった。ニールは歯を食いしば

り、スコープを動かす。

託されたもののためにも、世界と向き合うためにも、大切な人たちのためにも——自分は。

「……………だからさあ……………」

決意を込めて。

『大丈夫だよ、ロックオンさん。アンタの腕は、俺が保証する。……アンタとの決着はまだついてないんだ。死なれちゃ困るよ』

誰かがそう言って力強く微笑んだ。栗の渋皮を思わせるような色味を纏ったプラチナブロンドに、視力矯正用の眼鏡をかけた青年。スナイパー仲間として切磋琢磨してきた、かけがえのない友人だった。

『つたく、無茶ばかりしやがって。心配してくれる人たちがいるんだから、死ぬんじゃないぞ。……置いて逝かれるのは、辛いんだ』

誰かがそう言って静かに頷いた。深い緑青の髪に、やや浅黒い肌の偉丈夫。自分が利き目を負傷した際、心配してくれたスナイパー仲間だ。同じ部隊に所属し、共に戦ってきた戦友でもある。

『俺とお前のスナイパー勝負……あの熱い戦いを思い出せ！ こんな奴に負けんなよ!!』

誰かがそう言って肩を叩いてきた。金髪碧眼の色男。こいつ誰だったつけ、という言葉が喉元までせり上がってきたが、寸でのところで飲み込んだ。そういえば、スナイパー勝負を繰り広げてきた敵と似ているような気がする。

『女性を泣かせるってのは、失格なんだぜ？ 色男』

誰かがそう言ってお茶目にウインクした。顔に傷のある、金髪碧眼の色男。そういえば、彼も無茶をやらかして女性を泣かせたことがあった。ニールと同じような行動をしたくせに、ニールに説教して、恋人に怒られて、お互い様だと笑いあつた戦友である。

『ついにあんたも、貧乏くじ同盟卒業か……。ちよつと寂しくなるけど、いいぜ。盛大に祝つてやる！ だから、ド派手に祝砲打ち上げろ!!』

誰かがそう言つてニヤリと笑つた。茶色の長い髪を三つ編みに結んだ少年。貧乏くじ同盟を担う仲間として共に戦つた戦友だ。死神の名を冠する、ガンダムのパイロット。

『冷静になれよ。簡単なことじゃないか。いつも通り、狙い撃てばいいんだ』

誰かがそう言つて頷いた。どこか苦労人の香りが漂う、黒髪の東洋人。彼もまた、貧乏くじ同盟のお仲間であり、同じ部隊で戦つてきた戦友であつた。民間企業所属の正義の味方。

『俺も一緒に狙い撃つ。……心配すんなよ、きつちり当ててやるさ！——だから、お前もきちんと見届けろ。この世界の変革を』

誰かがそう言つてニヒルに笑つた。群青のくせ毛が特徴的な男性。彼もまた、貧乏くじ同盟の仲間であり、親友だつた。彼のボケに対し、自分がツツコミを入れる——それが自分たちの日常だつた。借金返済のため戦う、天秤の機体を駆るスフィアアクター。

自分は、『彼ら』のことを全く知らない／よく知っている。不思議な懐かしさが心を満たし、自分自身を奮い立たせてくれた。さあ、しつかり狙いを定めて。『彼ら』が信じる／信じた『成層圏の

狙撃手』は、伊達じやないのだから。

生体反応に気づいたサーシエスのガンダムが接近してきた。

チャンスは1回きり。やり慣れたスナイピング。

「——狙い撃つぜえええええッ!!」

砲撃が唸る！ 鮮やかな紫の光が、スローネツヴァイの偽物／サーシエスの駆る機体をぶち抜いた。入れ替わるように、毒々しい赤が、足場になっていたGNアームズのビーム砲を撃ち抜く。次の瞬間、ロツクオンの視界は爆風に飲まれた。

鮮やかな緑の光が漂う。風に飛ばされ宇宙を落ちていく中、ニールはぼんやりと周囲を眺めていた。脳裏に浮かんだのは、幼いころの幸せだった時間。仲間たちと過ごした穏やかな時間。愛しい少女と共に過ごした、優しい時間。

自分はきちんと狙い撃てたのだろうか。仲間たちの生きる未来は。そして、地上に残してきた双子の弟——ライルと、病院で眠っている妹——エイミーの未来は。そこまで考えたとき、不意に、視界の端を切り裂くようにして飛んでくる光を見た。

ニールの口元に浮かんだのは、微笑。何とも言えぬ満足感で胸が満たされた。

ふと見れば、眼下には青く輝く惑星——地球が見える。

『命の色って、何色だと思っ?』

アイデアの問いが頭に浮かんだ。彼女の答えは、確か、青。

今なら、その理由がよくわかる。地上は争いと喧騒で満ち溢れているというのに、この惑星は——どこまでも青く澄み渡っていて、美しい。

ここから見たら、地上の戦争や争いなんて想像できないだろう。外宇宙からの訪問者たちも、この美しさに惹かれてやって来たに違いない。

漠然とした思考回路では、そこまで考えるので手一杯だった。喉からかすれた息が漏れる。意識が、遠くなってきた。

「よう。……お前ら、満足か？　こんな世界で……」

答えはない。けれど、問わずにはいられない。

ニールはゆっくり手を動かす。拳銃に見立てたその先を、青い星に向けて。

「――俺は、嫌だね」

白い光が、全てを焼き尽くす。

不意に、誰かが怒る声があった。死なせない、と、複数の声が木霊する。先程自分を勇気づけてくれた声たちだ。力を貸してくれた戦友たちだ。

その気配はよく知っている／そんな相手など自分は知らない。そんな相手など自分は知らない／その気配はよく知っている。

『言ったじゃねえか、馬鹿野郎。……この世界の変革を見届けろ、つてな』

おめでどう、と、声の主たちは笑った。貧乏くじ同盟卒業だ、なんて、声があった。

「どこがだよ。というか、お前ら誰だよ」――ニールが答えようとしたとき、その気配が掻き消える。

代わりに残ったのは、痛いぐらいの沈黙。一体何が起こったのかわからず、ニールは首を傾げた。

自分は一体、どうなったのだろう。自分は、仲間たちの未来を守れたのだろうか。サーシエスを狙い撃つことができたのだろうか。

その疑問が、頭によぎる。しかし、今のニールにはもう、何もできないことはない。胸を満たす満足感に引き寄せられたかのように、眠気

が差し込んできた。

「大外れも大外れ。兄さんらしくないミスだったよ」

鼓膜を震わせたのは、久しく聞いていなかった少女の声。それは、ニールの眠気を吹き飛ばすには、充分すぎる威力を持っていた。

見慣れぬ空色の制服を身に纏って（しかもノースリーブに長手袋、ミニスカートにロングブーツの組み合わせ）、テロに巻き込まれた当時と変わらぬ外見のままの少女が佇んでいる。

彼女の名前を、ニールは知っている。つい少し前の休暇で、会いに行った少女だ。自分にも好きな相手ができたのだと報告したら、紹介と結婚式はまだかと夢の中で催促された。

テロに会って以来、彼女は意識を失ったまま眠り続けていた。何度語り掛けても、彼女は返事をしなかった。一生意識が戻らないままかもしれない、と、医者が匙を投げた状態。

なのに、どうして。

どうして彼女が、ここにいるんだ。

「——エイミー？」

ニールは思わず、その少女の——妹の名前を口走る。

次の瞬間、

「エイミー艦長オオオオオオ！ 私、もう無理ですううううう！！ こんなことなら、MSに初心者マークでも張ってればよかったアアアア！！」

「ルナちゃん頑張つて。あともうちよつとで終わるから」

「うええええええん！ こんな雑務なんて聞いてないいいいいいい！！」

マークさーん！ ラナロウさーん！ エターナさーん！ クレア

さーん！ アスルさーん！ この際、もう誰でもいいから、早く帰って来てええええええええええええ！！」

女性の泣き声と、無慈悲に指示を出すエイミー・デイランデイという珍妙な光景を目の当たりにし、言葉を失うのであった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

48. 決戦前夜 く『還る』ためにく

光を失い、真つ暗になった地下。青い星を、世界を管理する巨大なコンピューター——グランドマザーが鎮座していた聖域は、今にも崩れ去ろうとしていた。

この場に残っているのは、キースとジョミーの2人だけである。グランドマザーが停止した場合に作動するようにしていたプログラムは、人類と青い星を殲滅するためのものだ。ユグドラシルの崩壊も、12機に及ぶ惑星破壊兵器の一清掃射も、最初から仕組まれていたのだろう。

キースの人生は、常に機械によって定められてきた。彼女たちが望む道を歩いてきたし、それが当然のことで、それが至上のことだと信じて疑わなかった。キース・アニアンという人間は、文字通りの「機械人形」だったと言えるだろう。その人形を成長させる試練として、運命を捻じ曲げられた人々がいた。

自分が撃ち殺した後輩のセキ・レイ・シロエ。『Mu』の因子を持ち、スベリオル・ドミナント
S. D 体制に対して反逆の姿勢を示した少年だった。自分の命よりも大切なものがあるのだと叫んで、彼は大人になることを拒んだ。それを失うくらいなら大人になってならなくていいという叫び声は、今でもキースの耳に残っている。

ステーション時代からの親友であったサム・ヒューストン。彼のおかげで、キースは人間らしさを学んだと言っている。『Mu』との共存を選んだのも、サムのおかげだった。彼から教わった「元気の出る呪文」を使う機会はめつきり減ってしまったけれど、彼から譲り受けたナキネズミのぬいぐるみは、今もポケットの中に忍ばせていた。

監視という名目で自分の傍に置いていた『Mu』であり、キースの右腕的な部下であったジョナ・マツカ。キースの理不尽で悪意に満ちた八つ当たりにも反発することなく、彼は静かに寄り添ってくれた。己の強さや弱さを惜しげもなく吐露できたのは、サム以外に初めての相手だったと言える。死する寸前でも尚、彼は自分を助けてくれたのだ。

失ったものを思い返し、キースは隣を見た。致命傷を負った『M u』の長——ジヨミーが横たわっている。満足げな笑みを浮かべて、彼は静かに微笑んでいた。

隣に誰かがいる——その事実だけで、キースはひどく安堵した気持ちになった。これから自分たちは死ぬのだというのに、何も怖くない。

声が聞こえる。人類と『M u』が、ヒトとして立ち上がった声が。明日を手にするために、マザーネットワークに挑む声が。自由を手にするために戦う声が。

「……凄いや、ヒトは。思っていた以上だ」

ジヨミーは満足げに頷いた。キースは苦笑する。

「あらゆるものを破壊してきた人類だ。この後は、手が付けられなくならなきやいいが……」

過去の歴史を鑑みるに、S・D体制が出来上がる以前の人類は、延々と争いを繰り返してきた。争いだけに飽き足らず、己の住まう惑星^{ほし}までも破壊してきた。間違いを二度と繰り返してはならないという教訓を、何度も裏切ってきている。

だから、人々はS・D体制なる管理社会を創り上げた。機械は間違いを繰り返さない。S・D体制をぶち上げた当時の人間たちの考えはよくわかる。けれど、その結果が、『ヒトがヒトとして生きられない』世界だった。箱庭の片隅で命を、運命を弄ばれた人々の嘆き。

自分もまた、破壊者として語り継がれるのだろうか。ステーションでサムたちと出逢った頃の自分は、未来でこんな大それたことをやらかすだなんて思ってもみなかったに違いない。いや、こんなことを考えられるようになった時点で、驚いた顔をされそうだ。

「……大丈夫」

その声につられて隣を見た。美しい翠緑の瞳は、ここではないどこかを見ていた。人類と『M u』が歩む未来を、彼ははつきりと見据えていたに違いない。

苦難に満ち溢れた先にある、人々の笑顔を。誰もが当たり前前に生きる、穏やかな世界を。緑と青の光を宿す、生命を育む美しい惑星の姿を。

彼の姿を見ても尚、キースは憂いの方が強かった。意地が悪いと分かっていたながら、彼は友達に問いかける。

「パンドラの箱を開けてしまった。……よかつたのだろうか？」

「……………わからない」

ジョミーは静かに瞳を閉じた。その表情はとても穏やかで、満足感に満ちていた。

「だけど、後悔できるのは人間だけだ。機械は後悔しない」

「全力で生きた者にも、後悔はない」

ジョミーの言葉に対し、キースはそう返した。

今の自分も、この人生に後悔していない。取りこぼしたものは沢山あったし、失ってしまったものだって沢山ある。シロエ、サム、マツカ——思い出せるものだけでなく、自分が自覚しないだけで、実際は失ってしまったものだってあるのだろう。

だけど、手にしたものがある。キース・アニアンという1人のヒトとしての人生を、記憶を、意思を、意志を手に入れた。シロエという後輩を、サムとスウエナという友人を、グレイブやミシエルという先輩を、マツカやセルジュという部下を、そして——ジョミーという『M u』の友達を。

思えば、サムやスウエナ以外にまともな友達はいなかった気がする。サムはそのことを酷く心配していたけど、キースはあまり気にし

ていなかった。彼らさえいけばいいと思っていたからである。そんな自分が「友達ができた」と言ったら、サムはどんな顔をしただろうか。

おまけに、ジヨミーはサムの親友だ。自分の親友が自分の友達の友達だったら、なんて言葉をかけてくるだろう。

「親友と友達が友達同士で嬉しい」と喜んでくれるのだろうか。それとも、「お前の友達がジヨミーだなんて思わなかった」と驚くだろうか。

サムはもういないから、その答えは分からない。もつと早く、キースがジヨミーとわかり合おうとしていたら、そんな光景を見ることができたのかもしれない。すべてはIFの出来事ではないけれど、考えずにはいられなかった。

「お前に会えてよかった」

友達になれてよかった、との思いを込めて、キースは小さく呟いた。ジヨミーなら、キースの想いをくみ取ってくれるだろう。

『Mu』としてのテレキネシス能力だけでなく、キース・アニアの友人として——ジヨミー・マーキス・シンという一人のヒトとして。

「僕もだ。……キース」

「……うん」

自分たちは、わかり合えた。今まで沢山の遠回りとすれ違いを繰り返してきたけれど、こうやって笑いあえる友になれた。それだけで、キースは心が熱くなるのを感じた。

あの遠回りは何だったのかと苦言を呈したくなるけれど、それは今だからこそ言えることだ。振り返れば、反省すべき点は山のように出てきた。だが、悔いることは何一つない。

グラントマザーの申し子ではなく、ヒトとしてのキース・アニアが生まれた理由は——きつと、この瞬間のためだったのだと、心から

思える。何て僥倖なのだろう。

こうしてわかり合えるならば、キースは何度でもこの人生を選ぶ。ジヨミーとすれ違い、いがみ合いを繰り返しながらも、最後はこうしてわかり合う道を選び続ける。そうやって、彼と何度でも巡り会いたい。

キースが思考に耽っていたとき、不意に、何かを失ってしまいそうな予感に見舞われた。

思わずキースは体を起こす。不安に駆られてジヨミーの名前を呼べば、彼は目を閉じたまま微笑んだ。

『……箱の最後には、希望が残ったんだ』

彼の口は動いていない。けれど、キースの耳には、はっきりとジヨミーの声が『聞こえた』。

『M u』の持つ能力——思念波だ。刹那、自分の隣にあったはずの優しい気配がふつりと消えてしまった。

そうして、この場には沈黙が広がる。惑星が——否、大地が崩れる音だけが響き渡っていた。

キースの友達。自分はまた、見送ったのだ。

思い返せば、キースはいつも誰かを見送る側だった。シロエも、サムも、マツカも、自分を置いて先に逝ってしまった。そして、ジヨミーも。

1人じゃないと思っていた。けれど、結局、キースは独りぼつちになつてしまったらしい。込み上げてくる寂しさに、キースは口元を震わせた。

「……………最期まで、私は独りか」

寂しい、という言葉を紡ごうとするキースを制するかのようにな、天井から巨大な岩が落下してきた。

キースはそれに抗うことなく、目を閉じる。轟音が何もかもを飲み

込んでいく。

程なくして、キースの意識は暗闇の底へと落ちていった――。

太陽系第3惑星、地球。

人類の生まれ故郷にして、様々な命を育んできた青い惑星^{ほし}。

嘗て、人類は地球を汚染し、破壊し、自分たちが住めない死の惑星^{ほし}へと変えてしまった。汚染の原因は争いであったり、環境を顧みず自らの利益を追求した結果である。人類は生き残るために、地球を後にした。様々な衛星を植民惑星にし、コミュニティを築き上げて生きていく。

同時に、当時の科学者たちは、荒廃した地球を再生させるために、コンピュータ・グランドマザーによる完全管理社会――スペリオル^{スペリオル・ドミナント}・ドミナントを創り上げる。その体制が敷かれた時代は、S・D^{スペリオル・ドミナント}という年号が使われた。体制が崩壊するまでの600年近く、その年代は続くことになる。

S・D体制が敷かれて280年が経過した頃、木星付近にある植民衛星ガニメデの育英都市アルタミラにて、『Mu』と呼ばれる新人類が誕生する。『Mu』の人数は瞬く間に増え、『Mu』を人類の敵と定めたグランドマザーの命により、人類は惑星破壊兵器メギドシステムで彼らを殲滅しようとした。この事件は『アルタミラの惨劇』、あるいは『アルタミラ事変』と呼ばれる。

しかし、『Mu』の初代指導者^{ソルジャー}にして荒ぶる青^{タイプ・ブルー}である青年・ブルー率いる一握りの『Mu』たちがガニメデを脱出。長い旅を続けた後、惑星アルテメシア付近に身を隠しながら、コミュニティを形成していた。

人類は『Mu』殲滅のために様々な手を打った。優秀な遺伝子を交配し、グランドマザーの代行者――無垢なる子を作り出す実験も、その1つである。実験の最高傑作として生みだされたキース・アニアンは、グランドマザーの導きによって、エリート^{エリート}の道^道を突き進んでいっ

た。

ステーションE-1077在籍中には『Mu』の2代目指導者^{ソルジャー}と親交の深かったサム・ヒューストン及びスウェナ・ダールトンと交友し、『Mu』の遺伝子を持つ反抗的な後輩セキ・レイ・シロエを、彼を反逆者とみなしたマザー・イライザの命令に従い手にかけて。このとき、彼の中で眠っていた感情が目を覚ましていったのだ。

人類軍に所属したキースは、着任先で『Mu』の遺伝子を持つジョナ・マツカと遭遇する。マツカは己が『Mu』であることを知らず、偶然、成人検査を突破してしまったのである。彼はマツカを部下として配属し、監視するようになった。このとき、後にキースの遺志を継ぐことになるセルジュ・スタージュンも、マツカらと共に部下として配属されている。

この頃、ジルベスター星系第7惑星付近にワープしたのち、精神退行して帰ってきた親友サムの事件から、キースはその調査を行うことになる。惑星に降り立った彼は『Mu』の一団と遭遇し、一時的に彼らの捕虜となった。しかし、寸でのところでキースはマツカに救出され帰還。グラントマザーの命に従い、『Mu』の殲滅作戦を実行した。

殲滅作戦に使用した兵器は、『アルタミラの惨劇』、あるいは『アルタミラ事変』にも使用された惑星破壊兵器メギドシステム。メギドシステムを照射されたジルベスター星系第7惑星（『Mu』命名・ナスカ）は崩壊し滅亡するが、3発目を発射しようとした際、『Mu』の初代指導者ブルー^{ソルジャー}の単身特攻により、メギドシステムを破壊された。

『Mu』はそれを契機に、地球への座標を手に入れるため侵攻を開始する。その頃、ジャーナリストとなったスウェナからシロエの情報をもたらされたキースは、マツカを伴ってステーションE-1077へ向かった。自分の真実を知ったキースは、シロエの遺品と共に、ステーションE-1077及びマザー・イライザを破壊する。直後、サムが亡くなる。

人類政府の代表者となったキース・アニアンは『Mu』との最終戦を行う。直後、ナスカの子である『Mu』トオニィ・アスカからの襲

撃を受けて一時的なこん睡状態に陥るも、マツカの手によって救われた。しかし、トオニイの襲撃でキースを庇ったマツカは、その傷がもとで死亡する。

グランドマザーから決定権を与えられ、彼女の真意を知らされたキースは、『M u』たちを地球へ降ろすことを選択。『M u』の指導者ソルジャー ジョミー・マークス・シンと共に、グランドマザーの元へと降り立つ。一時はマザーの命令に従いジョミーを殺そうとするが、最後はジョミーを受け入れ、グランドマザーに銃口を向けた。

それが原因で、グランドマザーからは『M u』からの精神攻撃を受けて汚染された反逆者」とみなされ傷を負う。怒りの力によってグランドマザーを破壊したジョミーに助け起こされたキースだが、グランドマザーのカウンタートラップにより、ジョミーもまた傷を負ってしまった。

人類と『M u』双方を見限ったグランドマザーは両者の抹殺を企てる。しかし、ジョミー救出のために地下へ降りてきたトオニイの力を借りて、キースはセルジュを後継者に指名。彼らに地球の未来を託し、最期は友と認め合った相手と一緒に大地の底へと沈んだという。

「……まるで夢物語のようだ」

夜闇を思わせるような藍墨色の髪をかき分け、少年は本を閉じる。彼にとって、図書館はお気に入りの場所だった。

親友は他の友達と一緒に勉強会をしているらしい。後輩の1人はデートだし、もう1人は別の用事があるそうだ。

少年は静かな空間が好きだけれど、どうしてか、酷く寂しい。行く当てもないけれど、図書館にいても、もう楽しいとは思えなかった。足早に出入り口のドアへ向かった自分の前に、ドアから別の誰かが飛び込んできた。突然のことだったため、少年は避ける間もなく相手とぶつかってしまう。

「うわあ！　ご、ごめん！　大丈夫!？」

「っ、大丈夫だ。すまない。僕の方こそ、ぼうつとしてしまっ……」

相手は、自分と同じ年頃で、自分と同じ背格好の少年であった。太陽を思わせるような金色の髪に、木々の緑を連想させるような翠緑の瞳。

彼とは初めて出会ったはずなのに、少年は妙な懐かしさに捕らわれていた。思わず、彼の姿を凝視する。相手も自分と同じだったようで、こちらをじつと見つめてきた。

沈黙が続く。何か言わなくてはと思うのだが、少年の喉は何かにせき止められてしまったかのようにだった。ひゅう、と、自分のか細い呼吸音が耳を打つ。

「あれ？ お前、調べ物してたんじゃないのか？」

「ああ。もう、終わったんだ。今から外へ行くかと思っていた」

彼の後ろにいたのは、少年の親友だった。少年は微笑む。

少年は、親友の隣にいる彼に視線を向けた。初めて見る顔である。彼は、少年の親友と会話を始めた。内容を聞いていると、彼は親友と仲がいいようだ。

思い返せば、少年には親友たち以外に、特に近しい年代の友達はいなかった。親友の交友関係についても詳しくない。親友関係だというのに、親友のことをあまり知らなかった。

親友は面倒見がよく、気さくで朗らかな性格だ。だから、自分以外に友人がいてもおかしくない。当然のことだったのに、今まで考えたこともなかった。少年は改めて、親友の友人を見つめる。

不意に、彼が少年の元に歩み寄ってきた。

突然のことに少年は驚き、彼をじつと凝視する。

彼もまた、少年を凝視していた。

「キミのことはサムから聞いてたよ。『スクールE—1077で仲良くなった奴がいる』って。一度、話してみたかったんだ」

先に言葉を紡いだのは、少年の目の前に飛び込んできた彼だった。太陽を思わせるような笑みを浮かべ、少年へと手を伸ばす。

「僕はジヨミー。ジヨミー・マーキス・シン！ キミは？」

彼——ジヨミーの言葉に、少年の口元には自然と笑みが浮かぶ。

『自分は彼と出会い、わかり合うためにここにいるのだ』と、少年には、漠然とした確証があった。

そうやって、彼と何度でも巡り会いたい。そう願った『誰か』の遺志と、己自身の意思で、少年は己の名を答えたのだった。

「キース。キース・アニアン。……よろしく、ジヨミー」

へ 『Toward the Terra』 人類篇 下巻
了

「箱の最後には、希望が残った……」

クーゴは小さく呟いて、本を閉じる。『ミュウ』篇下巻を読破していたから結末は分かっていたけれど、やはり、胸に来るものがある。元々は『悪の組織』から技術提供の見返りとして読み始めた本だった。読破するのに時間がかかったものの、自分たちに提示されていた条件は守ったことになる。

丁度いいタイミングで端末が鳴った。連絡してきた相手は、『悪の組織』の技術者——ノーヴル・テイラン博士である。まるで、クーゴが人類篇下巻を読破するタイミングを待っていたかのようにだった。

内容もクーゴの予想通り、『Toward the Terra』全巻読破という契約条件の達成を確認しました」というものだった。

あとは劇場版の視聴である。もつとも、宇宙——戦場へ向かっている今現在では、映画を見る余裕なんてない。程なくして、クーゴはグラハムらと共に『夜明けの鐘』オペレーション・デューブレイク作戦に参加する予定だからだ。時間的な問題というよりも、精神的な問題だと言える。

せめてこれだけでも読破しておきたいと思い、ラストスパートを図った。その結果が、今現在におけるクーゴの心境そのものである。

これから待ち受けるであろう未来を連想させるような終わり方に、絶望と希望が紙一重になったような心持になった。今後のことを考えると、どっちに転んでもおかしくない。

絶やしたくない希望がある。けれどそれは、少しでも何かを間違えれば、一瞬で絶望に変わってしまう。今まで積み上げてきた日々を回想しながら、クーゴは深々とため息をついた。

「俺たちにも、希望が残ればいいのにな」

自分たちの未来を憂いながら、閉じた本の裏表紙を眺める。真っ青な空を眺める2人の少年——キース・アニアンとジヨミー・マーキス・シンの後ろ姿が描かれていた。

わかり合えた2人は、遠い未来で再び友人になれた。彼らとクーゴたちは違うけれど、彼らと同じような想いを抱いてここに立っている。ただ、2人より厳しい状態であることは事実だ。

死ぬか、生きるか。クーゴやアイデアたちの立つ場所は、互いの命を賭けた戦場だ。「取るか、取られるか」であることは間違いない。他の道はあるのかもしれないが、クーゴは軍人である。上からの命令があれば、従う他ない。

ガンダムを追いかけることを選んだのは己の意志だし、アイデアの正体を知りながらも黙認したのはクーゴ自身だ。その決断に、「本当に」後悔はないかと問われれば迷ってしまう。後悔しないと宣言しながらも、進む足を止めてしまうのだ。

迷うことは弱いことではない。誰もが「これでよかったのか」と悩みながら、全身全霊を賭けて、必死に『最善』を探している。沢山間違えて、遠回りして、すれ違って、全力で生きようとしているのだ。後悔があるかどうかは、人生が終わるまで分からない。

後悔できるのは、人間である証拠。後悔しないのは、全力で生きた証拠。

多分、世間一般の言う『後悔』は、未練や逃避に近いものなのかもしれない。クーゴだって、その瞬間々に未練や逃避を積み重ねている。

だけど、今、自分が立っている場所について、後悔は何一つもなかった。今の仲間たちと飛ぶ空が、クーゴ・ハガネのすべてである。彼らと出逢えるなら、何も惜しくない。

(例えすれ違って、遠回りしても、わかり合えるならば――)

小説の一節を思い出しながら、クーゴは格納庫へ視線を向けた。改修及び調整が完了したGNフラッグが並んでいる。出撃の瞬間を待ちわびているかのようにだった。

「……なあ。俺たち、わかり合えていたかな？」

愛機に問いかける。クーゴ／フラッグはアイデア／スターゲイザーと、何度も戦場で相見えた。切り結んだこともあるし、助け助けられこともあったし、共に戦ったこともある。戦場だけでなく、日常でも交流を重ねてきた。

楽しかった時間がリフレインした。彼女の歌を聴いて映し出された新しい虚憶きよわく、歌い手仲間としてメッセージによる交流を重ねた時間、初めて互いに顔を合わせた最初のオフ会、グラハムと刹那の恋路に振り回された日々――。

同じようにして、くるくる表情を変えるアイデアの姿が浮かんで消えていく。怒った顔、不満げな顔、ふんわりと微笑んだ姿。何やらむ

ず痒くなってきて、クーゴは反射的に口元を抑えた。自分が思っている以上に、クーゴはアイデアを大切な存在だと思っていたらしい。

「――私は、わかり合えていたと信じている」

不意に、声がした。聞こえてきた方向に視線を向ければ、穏やかに微笑んだグラハムが立っていた。いつから彼はそこにいたのだろうか。

疑問に思っている間に、グラハムはクーゴの隣に腰かける。彼は端末を開き、待ち受け画像になっている写真を眺めた。

嬉しそうな微笑を浮かべて端末を眺める刹那。グラハムが幸せそうにライस्पディングを頬張る写真を彼女に送ったら、アイデア経由でクーゴに送られてきた画像である。それを見た彼から「その画像を譲ってほしい」と頭を下げられたので、クーゴが送った次第である。

カメラアングルからして至近距離で撮ったものだろう。しかし、常にぴりりとした雰囲気と警戒を解かない刹那が、こんな無防備な表情を晒すとは思えない。

盗撮でもない限り、彼女の微笑なんて拝めないのではなかろうか。盗撮したにしては、画質やアングルがあり得ない程高画質でベストな位置にある。

藪から棒に『念写』なんて単語が頭をよぎったが、そんな技術は存在していない。グラハム並みに唐突な思考の飛躍に、クーゴは苦笑した。

「この運命がどんな顛末に至ろうとも、私は決して後悔しないよ」

グラハムは静かな面持ちで端末を閉じた。翠緑の瞳は、揺るがぬ決意を宿している。

その双瞼は、クーゴに向けられた。

「それはキミも同じだろう？　クーゴ」

試すかのような不敵な笑みに、クーゴは頷いた。

「だな。俺も、この運命を否定しない。だけど、諦めて受け入れるのは別問題だと思っっている」

折角わかり合えたのに——そう思っているのはクーゴだけなのかもしれないが——、それを諦めてしまうのは嫌だ。自分たちが積み重ねてきた日々が無駄になってしまうような気がしてならない。

無駄にしたくないという想いが、すれ違いや遠回りの原因になってしまったり、人を破滅に導いてしまうことがあるのも事実である。けれど、その想いが、未来に希望をつなぐ懸け橋になるのも事実なのだ。クーゴは『知っている』。何度も虚憶きよおくで見えてきたのだ。想いが積み重なった先に、誰もが望んだ明日があったことを。ZEIXIS、ZIBULE、アンノウン・エクストライカーズ／アルティメット・クロス、コネクト・フォース、カイルス……そこで出会った人々の姿を思い返す。

諦めの悪さは、きっと彼らから伝染したのだろう。

クーゴはそれを悪いことだとは思わない。

クーゴの様子に、グラハムは満足げに頷いた。

「それは同感だな。あえて言わせてもらうが、私は諦めていないぞー！」「知ってる。散々見せつけられて疲れた」

「痛いものを見るような目でこちらを眺めるのはやめてくれないか!?」
そして、じりじり間合いを開けるのもだー！

そんなことを言われても。クーゴは心の中でひっそりと独り言ちた。グラハムに振り回されてきたことを顧みると、我関せずして逃げられたら楽なのだろう。

しかし、クーゴはどうしても、知らんぷりするという選択肢を選ぶことができなかった。だから、肩をすくめて苦笑するに留めておく。

グラハムは不満そうなふくれっ面を見せた。

見捨てられないだけマシじゃないのかと視線で訴えれば、グラハムにも思うところがあるらしい。渋々と言った調子で息を吐いた。それはクーゴも同じであった。

「お前は最後まで、無茶苦茶やらかすんだな」

「これからもそのつもりだが」

「うん。知ってた」

2人は軽口を叩きながら、視線を窓の方に向けた。大きな窓から望むのは、無数に瞬く星々と、無限に広がる宇宙空間だ。

このどこかで、ソレスタルビーイングと国連軍は戦いを繰り広げているのだろう。アイデアや刹那も、この宇宙のどこかで戦っている。

今、彼女たちはどんな思いでいるのだろうか。端末を開いてメッセージを送ろうかと考えたが、何を送ればいいのか分からなかった。

それに、クーゴはアイデアとまた会うつもりでいるのだ。今ここでメッセージを送ってしまったら、遺言みたいになってしまいそうな気がする。死亡フラグを進んで立てたいとは思えなかった。

クーゴとグラハムは、暫し無言のまま景色を眺めていた。周囲に余計な喧騒はなく、静かなものだ。艦内にいる人間はまばらである。瞬く星を見ていると、幼い頃の夢を思い出す。星空に憧れ、外宇宙探索に出たいと思っていた。

今の自分を見たら、少年だったクーゴは何と言うのだろう。

星空から青空を選んだクーゴだけれど、星空への憧れは残っている。幼い頃に読み漁っていた人工衛星の本は今でも棚にしまっているし、時折、星に関する図鑑だっけ返している。何度も読み返していたため、すっかり色あせ、手垢まみれになってしまったけれど。

上層部からの命令で、宇宙そらに向かい任務を遂行することもあった。地球圏から離れることは殆どなかったが、それでもクーゴには充分だった。隣には、グラハムを筆頭とした大切な仲間たちがいてくれたからである。

(俺は、いつも相棒グラハムに助けられてきたんだよな。……口に出したら口
くなことにならない予感がするから、言わないけど)

クーゴがひっそり目を細めたのと同じタイミングで、グラハムは天
を仰いだ。どこか遠くを見つめる彼の眼差しは、刹那を映し出して
いるのだろう。

「散るにしても生き残るにしても、『彼女』に恥じぬ生き様を貫きたい
ものだ」

しみじみと、覚悟を噛みしめるようにグラハムは語る。

不意に、とある人工衛星の名前がクーゴの脳裏によぎった。小惑星
からサンプルを採取するために打ち上げられ、何度もトラブルに見舞
われて、帰還できなくなるかもしれないと言われながら、ボロボロに
なりながらも使命を果たし、地球に『還ってきた』人工衛星があった。

——日本の人工衛星、『はやぶさ』である。

その旅路は、『Toward the Terra』の『ミュウ』篇
に登場する『ミュウ』たちや、彼らの母艦シャングリラが歩んできた
道とよく似ていた。はやぶさが『宇宙を飛んでいる際のトラブル』が
障害だったのとは違い、『ミュウ』やシャングリラは『人類による迫害』
が障害であった。

『Toward the Terra』は、ヒトが地球へ『還る』た
めの物語だ。そして、『ヒト同士がが手を取り合って、ヒトとして生き
る未来を手にする』ための物語。登場人物たちは皆、死ぬために生き
ていた訳ではない。生きるために、未来を切り開くために戦い、その
結果として死んでいったのだ。

彼らは自分の生き様に後悔していない。その結果にも後悔なんか
していない。全力で生きたからである。

しかし、その行動原理は、己が死ぬことを前提としていたものでは
なかった。生き残ることを前提としていたはずだった。

先程グラハムが紡いだ言葉は、『自分か刹那が死ぬ』ことを前提にしているようだ。それ故、反射的に、クーゴは顔を顰めて反論していた。

「縁起悪いことを言うな、ばか。必ずここに帰るんだ。忘れるなよ？」

クーゴの言葉に、グラハムは目を丸くする。しばし目を瞬かせた後、グラハムは苦笑した。

生きて帰ってくる——人間として、基礎中の基礎だ。当たり前に行動原理だ。それを忘れてはならない。

「そうだな。フラッグの後継機のこともある。——必ず、ここへ帰るよ」

わかっているさ、と彼は言った。普段通りの不敵な微笑。ならば大丈夫だろう、と、クーゴは安堵した。再び、窓の外に広がる宇宙へと視線を移す。

宇宙はどこまでも広い。気を抜くと感傷に浸りそうになるのだ。幼い頃に抱いた夢が浮かんでは消える。

いつだったか、グラハムが自身の幼い頃の夢を語ってくれたことがあった。何故、今、そんなことが浮かんだのか分からない。

当時のことを思い出していたら、どうしてか、ぽろりと言葉が口について出た。意識したわけでもなく、自然に。

「子どもの頃、外宇宙探索がしてみたいって思ってたんだ。だからいつも、宇宙とか、人工衛星の本を読み漁ってた」

クーゴの言葉を聞いたグラハムが、目を丸くする。

「意外だな。目標に対して真面目で一途なキミのことだから、てつきり、最初から私と同じような夢を持ってユニオン軍に來たのかと思っていたが……」

「そうだな。俺自身も、ちょっと信じられない。……でも、その名残はまだ鮮明に残ってるぞ。今でも探査機や人工衛星の名前、結構憶えてるし」

「例えば?」

「ハレー彗星探査のために日本の宇宙研究所が初めて打ち上げられた『さきがけ』、宇宙からの気象観測と世界気象機関による世界気象監視計画の一翼を担った『ひまわり』、二酸化炭素やメタンガス等の温室効果ガスを計測していた『いぶき』、20世紀後半に測地実験衛星として打ち上げられてから1世紀半近く現役として活躍した『あじさい』、火星探査機として打ち上げられたけど失敗してしまった『のぞみ』。……1番好きだったのは、小惑星いとかわの探索へ赴き、幾多の困難を乗り越えて使命を果たして地球へ『還って』来た小惑星探査機——『はやぶさ』かな」

当時の自分のことを思い出して、クーゴは懐かしさに目を細めた。特に、探査機については名前を諳んじるまで調べ回ったつけ。

グラハムは、クーゴの横顔に何を見たのだろう。夢を追いかける子どもを見守るような優しい眼差しを向けてきた。

しかし、それ故に、疑問が浮かんだのだろう。静かな微笑みを崩すことなく、クーゴに問いかけてきた。

「どうして、ユニオン軍のMSパイロットになったんだ?」

クーゴの脳裏に浮かんだのは、「空で待つ」と笑った人たち。

彼らがいたから、クーゴは空を選んだ。彼らと出会うために、ユニオンの空へと進んだ。

その人物の中に、グラハムがいる。万感の思いを込めて、クーゴはグラハムを見返した。

「虚憶^{きよおく}で出会った人たちがいてさ。……その人が言ってたんだ、『空で待ってる』って」

「——そうか。……それで、キミはその人物に会えたのか？」

グラハムの問いは、クーゴにとって奇妙なものだった。会いたいたいと思った張本人から、そんなことを訊かれるだなんて思っていなかったためである。

正直に話したら喜びそうな気がしたけれど、どうしてだか、素直に話す気持ちにはなれない。意外と、自分は意地の悪い性格だったようだ。

「会えたよ。本人は何も知らないけどな」

「言わないのか？ きっと、その人物も喜ぶと思うのだが……」

クーゴは悪戯っぽく微笑んでみせた。

「いいんだよ。本人の預かり知らないところだし、虚憶きよおくの話なんてされても困るだけだろうし。……何より、俺はちゃんと『分かってる』から。——だから、いいんだ」

満足して頷けば、グラハムは怪訝そうに眉をひそめた。しかし、クーゴの心境は何となく理解したようで、小さく肩をすくめた。

そんなタイミングを待っていたとでもいうかのように、クーゴの端末が鳴り響いた。メッセージの主は、パトリック・コーラサワーである。「来るのが遅いが、何か譲れないことがあったんだな」で始まり、「いつぞや作って送ってくれたジャムがカティに好評だった。ついでに滅茶苦茶おいしかった」が中心に来て、「お前らの武運を祈る」で締めくくられていた。

コーラサワーはカティ攻略で忙しいらしい。「スナイパー型のガンダムに傷を負わせた張本人である」とダリルたちから聞いていたが、ここまでお気楽な文面を見ると、本当に彼が張本人なのかと首を傾げたくなる。そういえば、誰かが彼を「厄介なプレイボーイ」と評していたか。残念ながら、その人物が誰かは思い出せなかった。

再び、窓の外に広がる宇宙へと視線を移す。

クーゴとグラハムには、還るべき場所がある。待っている人たちがいる。そして——還りたいと思う理由があるのだ。

きつと、イデアや刹那も同じなのだ。還る場所が違ってても、そこからまた、笑いあうことはできるだろう。そう、信じたい。

『のぞみ』を『きぼう』へ。これは探査機の話だけれど、クーゴの心情そのものである。

最終決戦を乗り越えて、望みを希望へ——そして、明日へ繋げていく。

そのために、今は宇宙そらを翔るのだ。決意新たに、クーゴとグラハムは前を向いた。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

幕間。名もなき者の戦場、あるいは星屑の夢を見る若者たち

男は1人、静かに時を待っていた。

狙いを定めて、引き金を引く。なんてことのない作業だ。言葉にすると12文字で、時間にして考えれば数秒もかからないだろう。『シミュレーターで重ねてきた訓練を発揮する』——ただ、それだけにすぎない。

男が駆る『紅蓮の不死鳥』は、双剣の切っ先を、ただ1点に向けていた。直線状にあるのは、スローネ・ドロフォヌス。アリー・アル・サーシエスが搭乗する機体である。彼は現在、ロックオン・ストラトス及びデュナメスを探している最中であつた。

サーシエスは知らない。ロックオンは既に、デュナメスをプロレマイオスに避難させていることを。彼がGNアームズの残骸を使い、復讐を果たそうとしていることを。そうして——男が、彼の命を奪うために、照準を向けていることを。

「私の合図に従って頂戴。いいわね？」
「了解しました」

モニターに映る少女の言葉に対し、男は静かに頷いた。双剣の柄に刻まれたレリーフが赤く光を放つ。GN粒子のチャージが完了した合図だ。

あとはタイミングを待つのみ。ドロフォヌスがロックオンの居場所——GNアームズの砲台へ迫る。次の瞬間、藤色の光が砲口から撃ち放たれた！

砲撃はドロフォヌスの下半身を抉るようにして着弾した。しかし、サーシエスは紙一重で直撃を回避し、反撃までしてみせた。赤い光は装甲の砲口を貫き、小規模の爆発が巻き起こる。その余波によって、

ロックオンの体は宇宙を舞った。

男は吹き飛んだドロフオヌスに照準を合わせる。爆散を免れたとはいえ、搭乗しているパイロットはただで済まない状態だ。いくらサーシエスが百戦錬磨の傭兵でも、弱っている状態であれば討ち取るのは容易いはずである。

モニターに映る少女は、楽しそうに笑っていた。男はひっそりと目を細める。

(ソレスタルビーイングに協力するようになって、この子はとても楽しそうな顔をするようになった。……そして、己の手で世界を革新させることができるを知って以来、更に表情が輝いているように思う)

その事實は、喜ばしいことだ。この世界に絶望していた少女が、年相応のはしやぎようを見せている。

本来なら、少女は財閥の娘として、人並みの幸福を享受しているはずだったのだ。それを壊したのは、他ならぬ男性自身。

跡取りとして生まれた自分が出来損ないだったために、そのしわ寄せがすべて少女に降りかかった。

少女は優秀であった。愚鈍な男とは比べ物にならない程だ。しかし、それ故に、当主は少女に期待した。少女を『己に対して従順な後継者』としての教育を叩きこんだのである。男は厳しい教育を受ける少女を見ていることしかできなかつた。助けてやる方法など思いつかなかつた。

先代当主が鬼籍に入ったことで、地獄のような教育から少女は解放された。『青春時代を奪われた』という悲しみは、現在でも少女の心に影を落としている。そのためか、彼女が浮かべる微笑みは、どこか歪んでいるように思えていた。

その表情に感情が浮かんだのは、いつからだろう。本来ならば男が何とかしなければならなかつた。だが、少女を救い上げたのは男ではない。少女と似たような悩みを抱えていた、1人の女性であつた。

彼女の理想が少女を活かし、彼女が作り上げた変革の刃が少女に力

を与える。そうして、少女は幸福を得たのだ。男がどんなに首を振っても、否定できない事実である。しかし男は、どうしてだか、一抹の不安を拭えなかった。

女性が少女に与えたものは、確かに少女が望んだものである。変革の刃が少女にとって抛り所であり、幸せを意味する存在となったのも事実だ。少女の幸せを願っていた男にしてみれば、女性は男の望みも叶えてくれたと言える。

しかし、本当にそれは、少女にとって『幸福』と言えるのだろうか。本当に、少女にとって『幸福』となり得るのだろうか。考えてみても、愚かな男では答えを出すことができない。少女を引き留める力など、無いに等しかった。

（お前が幸せなら、それでいい。そのためなら、私はいくらでも引き金を引こう）

少しでも、少女の役に立ちたい。彼女の幸せを手助けする存在になりたい。

それが、男にとっての——せめてもの罪滅ぼしだ。

「今よー」

少女の合図に従い、男は照準を合わせて引き金を引く。双剣の切っ先に隠された砲口が姿を現し、エネルギーを撃ち放った。

もし、現在位置でドロフォオヌスに攻撃が着弾した場合、近域を漂うロックオン・ストラトスは高濃度のGN粒子に晒されることになる。高濃度GN粒子を浴びたガンダムマイスターが即死したというデータは入手していた。計算上、ロックオンは「日常生活は送れるが、ガンダムマイスターに復帰するのは不可能に近い」状態になるようだ。

「2307年時点でマイスターとしての適性値が高いのはロックオン・ストラトスである」という話は、自分たちに力を与えた張本人が言っていたことだった。男がそんなことを考えている間に、赤い光が

ドロフオヌスめがけて突っ込んでいく。機体のOSは直撃という計算を叩きだしていた。結果も計測と同じだろう、と、男が無感動に思ったときだ。

別方向から、一筋の光が煌めく。宇宙を切り裂くような、紫の閃光。その砲撃は、“紅蓮の不死鳥”の攻撃を阻むかのように降り注いだ！赤と紫電がぶつかり合い、盛大に爆ぜる。近くにいたロックオンは、砲撃とGNアームズの爆風に吹き飛ばされた。そのまま、彼は宇宙空間を漂う。

目的失敗。少女が舌打ちしたのと同時に、修正用のプランが提示された。男はそれに従い、GNアームズに照準を合わせる。爆風に乗せて、高濃度GN粒子をばら撒くためだ。

今度こそ、と、男は引き金を手かけた。少女の合図を待つ。ぴりぴりとした緊張が漂う。

「撃ってー！」

少女の合図に従い、男が引き金を引こうとして——流星の如く、青い光が飛来した！

間髪入れず、青い光を纏った“何か”が、こちらに4つの砲口を向けた。光が4つ灯り、光が降り注ぐ!!

「ちいー！」

男は操縦桿を動かした。攻撃を回避しながら対になる砲剣の照準を合わせ、飛来した光を——その奥にあるGNアームズの残骸含めて、撃つ。引き金を引いたか否やのタイミングで、更に光が降り注いだ！まるで、男が引き金を引くタイミングを待っていたかのようだった。

砲剣に着弾したその一発が、ほんのわずかだが、狙いを逸らしたのだらう。赤みを帯びた白い光は、GNアームズを掠め、宇宙の彼方へと溶けてしまった。痼癩を起す少女の声が通信越しから響くけれど

も、男にはどうすることもできない。

エクシアがロックオンを救出しようと近付いてくる。しかし、エクシアの手はロックオンを救い上げることではなく、無情にもGNアームズが爆発した。男の姿は爆風に飲まれる。レーダーに表示されていた生体反応はふつりと途切れてしまった。

『ロ……ロックオオオオオオン!!』

エクシアのパイロット——刹那・F・セイエイの慟哭が響き渡る。それと入れ違いになるように、*“何か”*の姿が宇宙へと溶けるようにして消え去った。謎の敵を捉えていたレーダーが沈黙する。ドロフォオヌスの方も、いつの間にか行方知れずになっていた。

「……ロックオン・ストラトスは死亡、アリー・アル・サーシエスや襲撃者たちにも逃げられたようです」

「なんてこと……! つ、だから貴方は愚図なのよ!!」

通信越しから響く罵倒の声を、男は静かに受け入れた。自分にできることは、少女の革新に力を貸す。ことしかなかったのに、それすらも失敗したとは。

少女には、自分のせいで沢山の不幸を背負わせてしまったのだ。彼女からの罵倒で傷つく資格など、男にありはしない。ただ黙って耐えていた。

しばし男を罵倒していた少女は、何かに気づいたように言葉を中断した。彼女は端末を開き、話を始める。相手はおそらく、少女に力を与えた張本人であろう。幾何かの間において、少女は端末を切った。

「もう、この場に貴方は必要ないわ。帰投して頂戴」

「了解しました」

「プランの練り直しを……」という少女の呟きを最後に、通信は途絶

えた。男は無言のまま操縦桿を動かす。

“紅蓮の不死鳥”は緑色の粒子をまき散らしながら、宇宙^{そら}の闇へと消えて行った。



澄み渡った青い空が広がっている。吹き抜ける風が気持ちいい。太陽の光のせいか、ひどく眩しかった。

視界の端から端まで白いヴェールがかかっているかのようだ。「フィルター越しから景色を見ている」と言った方が近いのかもしれない。

「□□□□」

『誰か』に名前を呼ばれた。聞いたことのない、男の人の声だった。彼の声はとても優しく、慈愛に満ち溢れている。

少年の名前を呼ぶ声の中に、こんなにも優しい響きを宿しているものがあるだなんて思わなかった。『母』や兄たちは少年を蔑んでいたし、周囲の人間も、少年には興味がなさそうだった。『誰か』は優しく微笑み、また、少年の名前を呼んだ。

少年には『父』と呼べるような存在はない。自分は、『母』の卵子と、『母』が選び出した優秀な男性の精子を交配して生み出されたデザインベイビーだ。戦闘用に調整された強化人間とも言える。近い部類を上げるとするなら、超兵やイノベイドだろう。

そんなことを考えていたら、また名前を呼ばれた。男性は笑っている。顔は眩しきで見えないのに、彼が自分に惜しみない愛情を注いでくれていることは『わかつて』いた。少年は彼の顔を見ようと目を細

くした。黒い髪に黒い瞳。『母』とよく似た、東洋人男性。

もし、自分に『父』という存在がいたならば。

きつと、今、目の前にいる男性のような感じなのだろうか。

少年は漠然と考えた。具体例が存在していないため、何とも言えないのだが。

「少年―」

自分を呼ぶ声がした。聞いたことのない、男の人の声だった。

金色の髪と翡緑の瞳を持つ白人男性。眩いヴェール越しでも、強い存在感がある。

彼の存在に気づいた東洋人男性が、彼に対して親しげに笑い返した。

「ソ□□□□」

「□□ラくん」

「□□！」

また、自分を呼ぶ声がした。聞いたことのない、男の人たちの声だった。日本人とは発音のニュアンスが違う。

英語圏の人間が、頑張って日本語の発音を再現しようとしているかのようなだ。アメリカ英語の訛りだろうか？

「ソ□□□□
□□・□□□□」

「□□ラくん」

また、自分を呼ぶ声がした。聞いたことのない、女の人たちの声だった。

黒髪に紅蓮の瞳が特徴的な女性と、パールグリーンの髪に紫苑の瞳を持つ女性だった。

東洋人男性と白人男性が2人の姿を見たとき、まるで愛おしい相手

を見るように目を細める。感極まった白人男性が黒髪の中東女性に
対して愛を囁き、照れ隠しの一撃を叩きこまれて宙を舞った。ペール
グリーンの髪的女性は楽しそうに微笑み、黒髪の東洋人男性は苦笑し
て肩をすくめていた。

こんなにも穏やかな光景を見たのは初めてだ。ぴりぴりした空気
の中にいた少年にとって、『誰か』たちが纏う快活な空気／『誰か』た
ちの間に漂う和やかな空気は、とても想像できないものであった。茫
然とする少年を見た『彼等』は、互いに顔を見合わせて首を傾げる。途
端に、東洋人男性が表情を曇らせた。

少年を憂う眼差し。少年のことを心配し、心を砕いてくれる人を見
たのは初めてだった。「何かあったら言いなさい」と、『誰か』は力強
く笑って頭を撫でてくれる。生まれてこの方、そんなものと無縁だつ
た少年は目を見開く。——ああ、なんて嬉しいのだろう。自分を想つ
てくれる人がいるなんて。

「お前は何も気にしなくていい。誰が何を言おうと、お前は俺の、大切
な『息子』だ」

黒髪の東洋人男性は、少年の頭を撫でながら、はつきりと宣言した。
その言葉だけで、少年の涙腺が決壊する。

無様な泣きっ面を晒す少年を、黒髪の男性——『父』は、そっと抱
きしめ、あやしてくれた。周りにいた人々も、優しい眼差しを注いで
くれる。温かい光が、少年の心を満たしてくれた。

伸ばされた手を、少年はおずおずと握り返した。『父』が微笑む。そ
れはもう、嬉しそうに。つられて、少年も笑い返した。大きな掌が少
年の手を包む。誰かに手を握られることがなかった少年にとって、そ
の温もりは初めてのものだった。

人の温もりとは、こんなにも優しいものなのか。あたたかいものな
のか。

普通の親子だったなら、当たり前前のように存在しているものだとい
うのか。

求めてやまなかつたそれを惜しみなく与えられている——これ程、人生で嬉しいことはない。

「——おとうさん」

少年は、震える声でどうにか言葉を紡いだ。それを聞いた『父』が驚いたように目を見開く。

ややあつて、彼は蕩けるような笑みを浮かべて頷き返してくれた。周りの人間も目を細め、自分たちを見守る。

「帰るぞ、□継」

『父』はそう言つて、少年の手を引く。周囲の人々は自分たち親子を温かく迎えると、一緒に歩き始めた。

真っ青だった空はいつの間にか、日が傾いていた。茜色に染まる夕焼け空。夜の帳が降りてきたようで、遠くに一番星が瞬いている。彼らは楽しそうに何かを話し合っていた。少年が辛うじて聞き取れた単語は、「ホームパーティ」、「鍋」、「カレー」ぐらいであった。

途端に男性たちが苦い表情を浮かべる。鍋をするといつもカレー味、と、誰かがぼやく。その後ろで、金髪碧眼の男性がひっそりガッツポーズした。それに気づいた男性たちが深々とため息をつく。金髪碧眼の男性は、『父』の作ったカレー鍋が好物だった。

ペールグリーンの髪の女性が『父』の隣に並ぶ。2人が談笑する様子を見ていると、データで目にした『家族』像のように思えた。愛し合う者同士が結ばれ、共に生き、子どもを残す——この3人には、そのプロセスは一切存在しない。けれど、それ以上の繋がりで結ばれている。

女性は『父』を愛しているし、『父』も（無自覚であるが）女性を大切に想っている。そんな2人が結ばれることは、少年にとっても嬉しいことだ。

早く結婚すればいいのと思いつつ、2人がそれを選ばない理由を

知っているから、少年は何も言えなかった。言う必要もなかった。

どんなに距離が離れていようとも、『父』と女性を引き裂くものは何もない。わかり合い、通じ合い、繋がった心の絆が2人を結び付けている。その強さを知っているから、2人は別の場所を歩きながらも互いを想いあつていられるのだ。

いいな、と少年は思う。自分もいつか、『父』や『父』を取り巻く人たちと同じように、誰かを想い合うことができるようになるのだろうか。

不意に歌が聞こえてきた。『父』と女性が口ずさんでいたそれは、「夕方になったから、家族が待つ家へ帰ろう」という歌だった。

(還ろう。大切な人たちが笑いあう、温かな場所へ)

少年もまた、その歌を口ずさむ。歌う声はどんどん増えていき、最後は全員による合唱になった。

皆、笑っている。とても楽しそうに、嬉しそうに、幸せそうに笑っていた。

「この子は僕が育てる」

男の言葉に、泣きそうな顔をしていた少年が顔を上げた。どよめく親戚たちの声など、自分には関係ない。

嘗て男が少年だった頃、親戚たちが自分の処遇に悩んでいたときに、『父』が男——当時の少年に言った言葉だ。

あの頃から大分時間が経過したから、親戚たちの構成も大幅に変わってきている。それでも、『父』がいた頃と同じようなことを言う奴らは、どの時代にも存在していたらしい。『父』を含めた“英雄たち”が活躍した時代はとうに過ぎ去ったというのに、情けない限りである。

統合されたと言っても、結局、ヒトはどこまでいつてもヒトであった。時にはいがみ合うし、争いあう。平和な世の中とはいっても、時々、小規模の争いが発生することもあった。これは、ヒトに「感情が存在している」ことの弊害とも言えそうだ。それがなければヒトとして生きられないのだが。

完璧ではないからこそ可能性がある。いびつで不器用だからこそ、何かを変えたときの衝撃は計り知れない。男は『父』の背中を見て育った。『父』たちが戦う姿を見て、いつもそう教わってきたのだ。『父』や、『父』を取り巻いていた人々の姿を思い浮かべながら、男は少年へ手を差し伸べた。

『父』の面影を宿した少年は、男の声に従っておずおず手を伸ばした。幼い頃の自分とよく似た仕草であり、時折『父』が見せていた弱った姿ともよく似ている。

男は少年の手を握り返した。嘗て『父』が自分の手を握り返してくれたときのように、強く優しく。

途端に少年が泣き出す。男は少年を抱きしめ、あやすようにして背中を撫でた。

「じいさん」

「うん。大丈夫だよ。僕と一緒にいるから。これからキミと僕は親子になる」

「じいさんと、俺が？」

「そうだよ」

「でも、じいさんに迷惑がかかるよ」

「構うものか。——誰が何を言おうと、キミは僕の、大切な『息子』だ」

いつかの会話を焼き直すように、男は少年に語り掛ける。その言葉を聞いた少年は大きく目を見開いた後、わんわん泣き出した。

「厄介払いができた」だの、「尊い犠牲は忘れない」だの、負の感情がちらつく。けれどそれ以上に、「頼んだ側としての責任は果たす」や「手助けするよ」という感情が響いてきた。振り返れば、前者の感情を

ちらつかせた親戚たちがそそくさと帰っていく姿が見えた。後者の感情を漂わせていた者たちが、早速行動を始める。

正直、今の自分が『父』のように立ち振る舞えるとは思っていない。男にとって『父』は、絶対の憧れであった。いつも自分に対して真摯に向き合ってくれたし、男——当時は少年だった——と一緒に泣いたり笑ったり怒ったり悩んだりしてくれた。彼がいなければ、今の自分はここにはいない。

いつか自分も同じようなヒトになりたいと思い、邁進してきた。今の自分を見た『父』は、どんな言葉をかけるのだろうか。嘗ての記憶を辿るように、男は静かに目を閉じた。『父』や『父』を取り巻く人々が笑う姿が、色褪せることなく、ありありと浮かんでいる。ならば何も、心配することはなかった。

落ち着いた少年の様子を確認し、男は少年の瞳を覗き込む。

黒い瞳は、まるで鏡のように男を映し出していた。

男は静かに微笑んだ。少年の手を引いて、告げる。

「帰ろう、
□□□□」

繋いだ手は、とても温かかった。



「な、なんでだよ!?! どうしてパイロット全員が無事なんだ!?!」

兄が痙攣を起す声が響いていた。その声に、少年は現実へと引きもどされた。

頭を撫でられていた掌の温もりも、繋いでいたはずの手の温もりも

ない。優しく笑った『誰か』の姿を思い出すことは不可能だった。

ダリル・ダツジ、ジョシユア・エドワーズ、アキラ・タケイ——いずれも、『母』が「憎くて仕方がない」と公言して憚らない相手と親しい人間たちである。彼らが搭乗していたジンクスには、遠隔操作が仕込まれていた。彼らの機体がデユナメスに自爆特攻しようとしたのも、それが原因である。

『母』が作ったプログラムは完璧だったはずなのに、どうして寸でるところで脱出装置が作動したのか。原因不明の事態に『母』が舌打する姿が脳裏に浮かんだ。しかし『母』のことだ、新しいプランを提示してくるだろう。少年の予想通り、新しいプランが送られてきた。兄たちは意気揚々と機体を駆る。

兄たちに対して、少年は、積極的に「戦いたい」とは思わなかった。しかし、それを成し遂げられなければ、自分の存在価値はなくなってしまう。自分をぶった『母』が、軽蔑の眼差しを向けてくる——その姿が、頭に浮かんでは消えていくのを繰り返す。

出来損ないと言われることには慣れたけど、心が傷つかないわけじゃない。今まで見ないふりをしてきたけれど、痛みは何十層にもなつて心に降り積もっていた。

少年が思考回路を別な方向に向けていたとき、『母』からミッションプランが送信されてきた。別方面にいる“紅蓮の不死鳥”が、後始末をしてくれるらしい。

「俺たちは、今、脱出した奴らを処分すればいいんだって」

「無抵抗の相手を撃つのかよ？ つまんないや」

「その方がありがたい。すぐに片付くからな」

兄たちは意気揚々と機体を発進させ、脱出した3人に照準を合わせる。そんな状況でも、少年は引き金を引けなかった。

パイロットたちの顔が『見える』。彼らの横顔は、先程見えた光景で、自分に優しい眼差しを注いでくれた人と瓜二つだったためだ。

たとえば本人でなくとも、他人の空似であっても、少年は躊躇いを感じ

じてしまう。自然と静観していた少年など放置し、兄たちは彼らへと迫った。

ビーム砲にGN粒子が充填される。少年は慌てて兄たちを止めようとして——ふと、止まった。

『雑務って、機敏特化に改造したレギナで出撃って、どういうことですかアアア!?!』

声がする。切羽詰った女性の声がする。

青い髪に青い瞳の女性が、金切り声に近い悲鳴を上げていた。

少年は周囲を見渡した。声が聞こえてきた方向に振り向けば、遠くの方で何かが光っているのが見える。緑に近い、黄色の光。その正体がわからなくて、少年は首を傾げた。

次の瞬間、光が恐ろしい勢いで加速した。兄たちがよく使う『とっておきの呪文』——トランザムと互角な機動性を彷彿とさせるような速度。しかも、レーダーに映っていない。

自分の見間違いかと思ったが、黄色の光は恐ろしい勢いで兄たちへ突っ込んでくる。異常事態に気づかぬ兄たちは、脱出した3人に攻撃を仕掛けようとしていた。

刹那、兄たちの視界を阻むように、黄色い流星が駆け抜けた!

突如眼前に現れた“何か”に驚いた兄たちが攻撃を止めてしまう。その隙に、3人が乗った3機の脱出艇はぐんぐん離れていく。慌てた兄たちが攻撃を仕掛けようとしたが、攻撃は放たれることはなかった。

『こっちに、来ないでえッ!!』

黄色い光が竜巻を描く。近接武装を振り回した“何か”に、兄たちは慌てて距離を取った。そのせいで、脱出艇は完全に射程外になってしまった。

当然、兄たちは乱入者を睨む。攻撃対象は女性へ変わり、兄たちの

乗る機体は「何か」に向かって攻撃を仕掛ける。

「動きがトロいんだよ！」

「いい的だな！」

「墮ちちやえ！」

サーベルやハンドガンが唸りを上げた。しかし、「何か」はしつちやかめつちやかな動きで兄たちの攻撃を回避してみせた。

『ひいい撃ってきたあ！……まさか、本当に実戦なんですかッ!?

ちよつと飛んで一周して帰ってくるだけじゃないんですかあああ!?

う、嘘だつて言つてえええええええ!!』

発言内容からして、「何か」を駆るパイロットはMSパイロットではない。おそらく、無理矢理機体に搭乗させられ、戦場に送り出されてしまったのであろう。境遇は少年に似ているが、少年は元からMSパイロット及び戦闘用に調整された強化人間である。

次の瞬間、『オペレーターっていう役職だったはずなのに』と叫ぶ声があった。少年の予想通りであった。世の中には似たような人がいるんだな、などと、少年はひっそり考える。兄たちの攻撃を全弾回避した「何か」が、反撃の狼煙とでもいうかのように銃を振り上げた。

『うわああああん！　もう嫌あああああ！　帰つて、帰つて、帰つてえええええええええええ!!』

「う、うわああああああああああ!!?」

女性が盛大に泣き叫ぶ。それに呼応するかのごとく、「何か」は銃を乱射しながら振り回してきた！

四方八方に黄色の光が降り注ぐ。兄や少年は慌てて回避する。すれすれのところを掠った少年とは違い、兄たちは何発か被弾したようだった。

コックピットは無事であるが、武装の一部が吹き飛んだらしい。勿論、この現状を兄たちが許すはずがない。怒りに満ちた眼差しを「何か」に向ける。

しかし、兄たちが攻撃すれば、「何か」は見ている方が目を剥く勢いの変態機動で攻撃を回避していく。これでもかという勢いで動き回り、砲弾の雨あられをすれすれで避け、振り下ろされたビームサーベルを掻い潜るのだ。

そして、今度は女性が反撃する側に回る。近接武装である扇を広げ、「何か」は雑揉み回転しながら連撃を仕掛ける。寸でのところで回避した自分や兄たちであったが、次の瞬間、「何か」は再び銃を乱射してきた。黄色の光が滝のように降り注ぐ。

『エイミー艦長オオオオオオ！ 私、もう無理ですうううう！！ こんなことなら、MSに初心者マークでも張ってればよかったアアアア！！』

『ルナちゃん頑張つて。あともうちよつとで終わるから』

『うええええええん！ こんな雑務なんて聞いてないいいいい！！』

マークさーん！ ラナロウさーん！ エターナさーん！ クレアさーん！ アスルさーん！ この際、もう誰でもいいから、早く帰って来てええええええええええ！！』

女性は別の少女と何かを話していたらしかった。艦長、という言葉から、「上司から途方もない無茶ぶりをされた」ということが手に取るようにわかった。

似たようなやり取りと攻撃の応酬を繰り返していた後、突然、「何か」が動きを止めた。追撃しようとした兄たちであったが、思わず彼らも動きを止める。

気のせいかな、「何か」から、どす黒い空気が漂い始めている。近づけばあの空気に飲み込まれて、どうにかなくなってしまいそうだ。少年の予想は的中し、狂ったように笑う女性の声が響いた。

『……そうよ……皆、消えちゃえばいいんだわ！　はは、あははははははははは!!』

「何か」から湧き上がっていた、オーラのようなものが爆ぜた。それに呼応するように、「何か」が凄まじい速度でこの場を飛び回った。扇を振り回し、銃を乱射しては、変態的な機敏性で兄や少年たちを翻弄する。

狂ったように笑う声が止まらない。笑い声に比例して攻撃が派手になっていく。おまけに速度も上がっていくではないか。シミュレーターや実戦も経験しているけれど、こんな異常事態に投入されたことは殆どなかった。

連想したのは、いつぞやのオーバーフラッグ。青い光を身に纏い、高速機動と二刀流の型で兄たちを圧倒したのは、『母』が嫌ってやまない男性であった。親友を守りたいという想いが引き金となり、兄たちを追いつめたときとよく似ている。

怖い、と。金切り声をあげたのは、何番目の兄だったのだろう。少年も同じ気持ちだった。できることなら、即刻撤退したい。しかし、『母』はそれを赦しはしないだろう。自分にできることは、豪雨に等しい猛攻から逃げることのみ。

逃げ回り続けて、どれ程の時間が経過したのだろう。突如、女性の笑い声が止んだ。

兄たちの機体は被弾したためにポロポロで、少年が駆っていた機体は掠り傷もなかった。

『——撤退!?!　本当ですか!?!　うわああん、やっと帰れるー!!』

次に響いたのは、泣き叫ぶ女性の声であった。地獄から解放される——その安堵から泣いていたのだろう。女性の行動は迅速で、兄の元へと突っ込んできたときのように、「何か」は一目散に飛んでいく。兄たちが追いかけてしようとしたときにはもう、「何か」の姿は宇宙そらの闇の中へと消えてしまっていた。兄たちの痍癩が響く中、少年はただ

茫然と、宇宙の闇を見つめることしかできなかった。



「これでよし。プランはE-7へ移行、俺たちは一時撤退だな」

マーク・ギルダーはレーダーを確認しながら呟いた。彼の言葉を皮切りに、仲間たちが次々と喋り始めた。

「ふいー、うまく行ってよかったぜ……。クレアがフォン・スパークと鉢合わせしたときはどうなるかと思っただぞ。ステルスで姿を隠してたのに、一発で見抜かれた挙句攻撃されたし」

「でも、案外なんかなかったよ！ 戦う意思はありませんって叫んだら、向うもわかってくれたみたいだし」

「それでも危なかったじゃねーか。気を付けろ」

「大丈夫だよ！ 何か起きたら、ラナロウが助けてくれるんでしょ？」
「……はー……」

ラナロウ・シエイドはクレア・ヒースローに苦言を呈した。相棒の苦言などなんのその、クレアは能天気且つ豪快に笑う。ラナロウは深々とため息をつき、額に手を当てた。

彼の頬が赤く染まっているのは、惚れた弱みが原因であろう。マークも人のこと言えない立場なので、「お前も大変だなあ」と苦笑するに留めておいた。

2人はマークたちと別行動を取っている。ソレスタルビーイングの補給基地近辺を飛び回り、国連軍を退治して回っていたのだ。その

ときにフォン・スパークに見つけられたらしい。

知り合いの技術者も「フォン・スパークはいろいろ危ない」と言っていた。

人間を超えた人間——その言葉がよく似合う、規格外の男である。

「そっちの方でも問題が起きたと聞いたが、大丈夫だったのか？」

マークの問いに、ニキ・テイラーとエルフリーデ・シユルツが視線を泳がせた。

「だ、大丈夫だったのだが……大丈夫じゃなかったかもしれない」

「いや、大丈夫じゃないようで大丈夫だったと言うべきなのか？」

「どっちだよ」

煮え切らぬ発言に、マークは眉をひそめる。答えはすぐにわかった。

通信が開き、今にも死にそうな顔をしたラ・ミラ・ルナが、蚊の鳴くような声で呟く。

「やっと帰ってこれた……」

「お、お疲れ様です……」

「もうやだ……」

エターナ・フレイルがねぎらいの言葉をかける。それを聞いたルナは、そのまま泣き出してしまった。こうなると暫く手が付けられない。

マークとエターナは顔を見合わせ、苦笑した。タイミングよくレーダーが友軍機の反応を捉える。アスル・インディゴも無事に撤退できたようだ。

間もなく、ラナロウとクレアが合流した。あとはもう、この宇宙空

域に用はない。全員そろったことを改めて確認し、マークは母艦へ進路を変えた。

マークのトルネードガンダムの隣に、エターナのレギナが並ぶ。彼女の機体は、狙撃に特化した改造を組み込まれていた。

GNアームズに攻撃を仕掛けようとした敵に、ロックオン・ストラス／ニール・デイランデイ並みの長距離射撃をやつてのけたのは彼女である。

「見事に当てたな。流石だ、エターナ」

「ふふ、ありがとうございます」

エターナが微笑む。どこか、哀しそうな微笑だった。

彼女が戦う理由は、戦いを終わらせるためだ。けれど、その力は、戦いで人を殺すために振るうしかなかった。超兵機関にいた頃から、ずっと。

機関が壊滅し、『スターダスト・トレイマー星屑の夢を見る者たち』に入った後、MSパイロットに志願した理由も同じだったのだろう。

戦争に巻き込まれて家族を亡くした少女は、半ば洗脳されたものの、自ら志願して戦いに赴こうとしていた。マークは、そんな彼女をずっと見守ってきた。

「……早く、戦いが終わればいいのにな。そうすれば、キミが、そんな風に表情を曇らせることもなくなるのに」

マークは小さく呟く。それに気づいたエターナは、目を瞬かせた。彼女を見返し、マークは微笑む。エターナも、静かに微笑み返してくれた。

それが、今のマークを奮い立たせる理由だった。他の面々だって、守るべきもののために——あるいは未来のために戦っている。

世界は統一に向かって加速するだろう。ソレスタルビーイングにも破滅の足音が刻々と近づいてきている。黒幕の笑い声が聞こえた

気がして、マークはため息をついた。

ソレスタルビーイングが壊滅すれば、次に狙われるのは『悪の組織』及び『スターダスト・トレイマー』であることは明白である。

(世界はどう動くんだろうな……)

程なくして、自分たちの母艦——ホワイトベースが見えてきた。仲間たちが帰投の準備に入る。マークとエターナも、それに続いたのであった。

49. 決戦直前く『未来へあした』のためく

周囲から注がれる眼差しは、寒々しい上に刺々しい。特に、紫のおかつぱ頭に眼鏡をかけた青年——実際は、性別不明のイノベイドである。但し、本人はまだ、己の正体を知らないため、『自分は人間である』と思っっているようだ——の眼差しが厳しかった。

次鋒ではマイスター最年少の少女、笑っているけど警戒心剥き出しの20代男性2人組の順番になる。その他クルーから注がれる視線も痛い。最初から覚悟していたとはいえ、実際に直面すると苦しいものがある。正直、ちよつと泣き出してしまいそうだ。

「彼女は急遽、新しいガンダムマイスターとして選ばれたの」

「しかし、彼女は『悪の組織』が送りこんできた人間だ。マイスターとして任命するには、不安要素が大きすぎる。現に、ヴェーダもそれを指摘している」

「つい先程、ヴェーダも彼女を承認したわ。……大きな不安要素の指摘を保留にして、ね」

「なっ——!?!」

スメラギ・李・ノリエガの言葉に、紫のおかつぱ頭に眼鏡をかけた青年——ティエリア・アーデは大きく目を見開いた。

異例中の異例、と、スメラギは付け加える。当然、ティエリアの矛先は、女性へと向けられた。

「貴様、一体どんな手を使ってヴェーダの承認を得た!? 最初は貴様の存在を認めなかったのに!」

「私は何もしていないよ。『悪の組織』だって、ソレスタルビーイングの頭脳を好き勝手にする力なんて欲しないもの」

「!」

ティエリアは仇敵に対峙したかのように、険しい眼差しを向けてき

た。端正な顔立ちが歪んでいる。その表情は、『同胞』を嫌悪し処分しようとした人類軍——特に、人類側の指導者によく似ていた。

できるなら今すぐ、針の筵という現実から逃れたい。しかし、母との約束を果たすためには、こんなところで怯んでいられないのだ。……いいや。これはもう、『母との約束』だけではなくなつた。

『両親が果たそうとした願い』であり、『尊敬するグラン・マが叶えようとした理想』であり、『自分が果たさなければならぬ使命』だ。だから、自分はソレスタルビーイングにいる。

「私、目が見えないの」

「え？」

「でも、皆がどんな顔してるか、どんな姿なのか、全部『視える』」

切り札を切るには早いだろうが、致し方ない。自分がガンダムマイスターに選ばれた理由の1つを、女性は面々に晒した。この場にいるマイスターたちの格好を、言いよどむことなくさらさらと述べていく。

まずはティエリアの容姿を挙げた。言い当てられたティエリアは目を見開く。次に言い当てたのは、アレルヤ・ハプティズムの容姿と「もう1人の彼」の存在、その次にはロックオン・ストラトスの容姿と、彼が双子であるという事実。最後に、刹那・F・セイエイの容姿を言い当てて——女性は言葉を止めた。

（ああ、この子だ。この子たちだ）

女性は直感していた。「来るべき対話のためには、彼女の力が必要である」と。

女性は直感していた。「母が守れと言った『希望』は、彼女とここにいるガンダムマイスターたちである」と。

女性は直感していた。「彼女こそが、人類の未来を切り開く『真の革新者』として目覚める存在である」と。

(私に託された、『守るべき希望』)

知らず知らずのうちに、女性は胸の前で手を組んでいた。込み上げてくる熱い感情を押しとどめ、ガンダムマイスターたちを見つめる。

ヴェーダにアクセスしていたティエリアが頭を抱えた。大方、女性のパーソナルデータを検索し、確認していたのだろう。データで「両目の視力なし。再生手術も不可能」「情報端末等でソレスタルビーイングの情報を検索した形跡無し」と出ているのだから当然だ。根拠となる情報も大量に挙げられている。

「すべてを『視る』瞳……」

「お前さんがヴェーダに選ばれた理由がよくわかったよ」

アレルヤとロックオンが、神妙な顔で頷いた。しかし、と、ロックオンは格納庫へ視線を向ける。

ソレスタルビーイングに存在するガンダムは、エクシア、デュナメス、キュリオス、ヴァーチェ／ナドレの計4機だ。複座式の機体は1つもない。しかし、新たにガンダムマイスターとしてやって来た女性は5人目である。それが意味することは、『誰かがリストラされる』ことか。

4人は困惑した様子で互いの顔を見やる。誰一人として、ガンダムから降りるつもりがないらしい。特にその気持ちが強いの、マイスター最年少の刹那・F・セイエイである。彼女のことは知り合いから聞いていたが、彼——リボンズ・アルマークの見立ては違う意味で大当たりだと思った。

スメラギもそのことが気になっているらしい。彼女からも、「ガンダムは4機しかない」と注意を貰った。ラッセ・アイオンのように予備のガンダムマイスターとして登録されるか、ガンダムのパイロットとしての椅子取りゲームに勝利して誰かを蹴落とさなくてはならな

いたためだ。

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。誰も、ガンダムを降りる必要なんてありませんから」

女性の言葉に、マイスターたちとスメラギが首を傾げた。

女性専用の新型機ができるという話は聞いていない——面々の眼差しは、はつきりと訴えている。

ヴェーダやメカニックに問い合わせる必要もない。計画上、ソレスタルビーイングが用意するガンダムは4機なのだから。

では、女性が搭乗するガンダムはどうするのか。刹那、ロックオン、アレルヤ、テイエリア、スメラギが気にしているのは、この1点。それに対する答えは、もうすぐ示される。女性は満面の笑みを浮かべて見せた。

誰にも気づかれぬよう注意しながら、女性は『力』を行使する。

「な、なんだあ!？」

「ハッチが勝手に開いた!? しかも、操作不能!？」

「外部からのハッキング!？」

「あれは……!?! あの機体は——!!」

次の瞬間、基地にいた面々の焦った声が響き渡った。それに合わせて、格納庫が勝手に扉を開く。

宇宙から舞い降りたのは、純白の機体だった。背中に大きな輪を背負ったMS。

女性はその光景を背にし、マイスターたちとスメラギへ向き直った。誰も彼もが愕然としていた。

MSは天使たちが並ぶ列の中心に降り立つ。その姿は、さながら、天からの使い“に見えたであろう。それと入れ違うような形で、テイエリアが目を見開く。ほんの一瞬、彼の瞳が金色に輝いた。ヴェーダにアクセスしたのだろう。情報が更新／開示され、女性の機体につい

てのデータが示されたのだ。

『どうせ抜くなら、度肝がいいわよね』

『ついでに、腰も抜かさせれば最高よッ!』

そう言って笑った、2人の女性の後ろ姿が浮かんだ。銀髪の女性と、黒髪の女性。前者は女性の母親であり、後者は女性の母親の親友にして尊敬するグラン・マである。

今なら、この2人に「自分も誰かの腰を抜かさせ、ついでに度肝も抜き取った」と自慢できそうだ。……いや、おそらく、彼女たちから見れば、まだまだであろうが。

「自前で用意しました。あれが私の機ガンダム体——スターゲイザーです」

満面の笑みで告げれば、周囲の面々は表情を引きつらせる。そういうわけで、と、女性は付け加えた。

「改めまして、私のコードネームは『アイデア・クピディターズ』。ラテン語で『理想への憧れ』。これから宜しくお願いします」

*

「ナドレの整備は?」

「終了した」

憤怒に満ちたテイエリアの横顔は、初めて出会ったときの彼には考えられない表情かおである。機械のように冷徹で完璧主義だった彼が、まるで本能をむき出しにした獣のように感情を溢れさせていた。

それだけでも充分驚くことであるが、国連軍との戦いを続行するか

否かを問いかけた上で「続行する」と最初に表明した人間がティエリア本人であった。それを間近で目にしたアイデアは、ひっそりと胸を熱くしたものである。

最初の頃の彼だったら、今のスメラギのように「戦闘に対して消極的」な作戦を選んだだろう。自分から勝算のない戦いに挑もうとすることはおろか、そのプランが提示された時点で容赦なく「無駄だ」と切って捨てていたであろう。

ソレスタルビーイングは、ロックオン・ストラトスを失った。仲間たちの不和を心配し、世話を焼いていた彼が『いなくなつた』ことで、ソレスタルビーイングの団結が高まつたのである。

……皮肉なことだ。

誰よりもこの光景を望んでいた本人が、この光景を見ることができないとは。

「しかし、トライアルシステムもなく、粒子貯蔵量も少ないナドレでは――」

「――それでも、やるさ」

不安要素を列挙し始めたアレルヤの言葉を遮るように、ティエリアは言った。弾かれたように、アレルヤとアイデアは彼を見る。

「私は、ロックオンの敵を討たなければならない」

その双瞼は、揺るぎない意志が宿っている。機械のように淡々とした目的意識ではない。アイデアはじつと彼の瞳を覗き込んだ。

アイデアの様子に気づいたティエリアは、怪訝そうに眉をひそめた。嫌がる様子も、どことなく人間らしくなつたような気がする。

「……何だ」

「特に意味はないよ。……でも、うん。やっぱり、正直に言っておくわ」

アイデアはふつと笑みを浮かべた。

「ごめんねテイエリア。私、出会ったときからずっと、貴方のことが怖かった」の

「……怖かった？」

「うん。無機質っていうか、無感情で無感動っていうか……——『機械』みたいで」

脳裏に浮かんだのは、母から受け継いだ『同胞』の記憶。

母やグラン・マの両親や尊敬する人物を、何の感慨もなく手にかけて巨大な機械。拳句の果てにその機械は、人類と『同胞』を見限り青い星ごと滅ぼそうとした。

焦土と化した青い星から離れた人類は、惑星を再生させるために巨大機械を作り出した。何百年、何千年の時間をかけた、青い星再生プロジェクト。

青い星再生のために生み出された巨大機械は、人間を管理するようになった。人のために生み出されて営まれた社会は、機械のプログラムによって管理される社会へ移行する。

機械の意向に沿わぬ者や、コンピュータが認めなかった『同胞』の多くが処分された。機械によって思考が停滞した人類は、何の疑いもなくそれに同調したのだ。誰も疑問を持たなかった。持たないように教育されてきたのだから、当然だと言えよう。

例えるならそれは、羽をもがれた鳥。飼い主の意図によって「空を飛ぶ」ことを奪われているのに、鳥は異常事態に気づけない。気づかないようにされてしまっているためだ。そうやって、機械は、自分に忠実な人間を生み出した。文字通りの『機械の申し子』。

テイエリアも、機械が生み出した申し子であった。しかしながら、機械と機械には最大の相違点がある。前者が「人間に期待している」が故に申し子を送り出して「人間について学ばせる」なら、後者はとにかく申し子に「機械に忠実な存在となるための在り方を学ばせ

る」ということだ。

どちらの教育方針も「最終判断を等の本人へ投げっぱなしにしている」「そのくせ、意にそぐわなければ、適宜手を下す」という共通点がある。前者の申し子には記憶のリセット機能が^{ついて}いるし、後者の申し子は「バグに侵された」「失敗作」と難癖をつけて^こ処分すのだ。本当は、機械とは怖いものなのである。

現状、テイエリアにはリセットが発動される様子はない。問題ないと思っっているのか、状況を判断しようとしているのか、テイエリアを完全に見捨ててしまったのか。いずれにしても、アイデアには^{ヴェーダ}機械の思考回路(?)は理解しがたい。アイデアにとって「機械みたいな人間」は、「恐ろしい存在である」と同義であった。

「でも、それ、撤回する。今のテイエリアにそんなこと言ったら失礼なもの」

「……何故?」

目を丸くしたテイエリアが首を傾げる。

アイデアは静かに目を細めた。

「だって、機械は後悔しない。自分の行動の結果に対して、何の感慨も抱かないし、抱けないし、そもそも抱こうとしないわ」

「当然だ。機械には、そんなプログラムなど組み込まれていない。もつとも、組み込もうと試みたところで、開発者が挫折することは目に見えているがな」

「そうだね。効率化を推し進める際、後悔するプログラムなんて邪魔だもんね。感情だって邪魔だもんね」

アイデアは頷く。でも、と、付け加えて、

「今のテイエリアは、最初に会ったときより、感情豊かになったと思うよ」

「確かに。今までにないくらい、熱くなってるよね。……あまり、熱くなりすぎない方がいいと思うけど」

イデアの言葉に、隣にいたアレルヤが同調した。（かけた言葉は色々酷いが）彼はティエリアを心配している。

普段は他者に「落ち着け」と（ぶっきらぼう且つ事務的に）諭すようなティエリアが、激情をあらわにしているというのは、珍しい事態だ。

ティエリアは険しい表情のまま、こちらから視線を逸らした。俯きがちではあるものの、その眼差しは前へ向けられている。

「そうならずにはいられない」

機械の申し子は、もういない。

そこにいたのは、不器用だけれども等身大の感情を持った、どこにでもいるヒトだった。

「そうだね。それでいいんだよ、ティエリア」

イデアは微笑んだ。祈るように、胸の前で手を組む。

「笑って、泣いて、怒って、悩んで、喜んで、悲しんで、憤って、呆れて、反省して、後悔して、無謀な賭けに挑戦してみても、不確定な未来を夢見て……機械はこんなことしない。人間だからこそ、そうやって考えることができる」

それが、人間の——いいや、ヒトとしての在り方だ。古来から営まれ、これからも続いていく、当たり前前の光景だ。

イデアは知っている。ヒトとして生きるために、立ち上がった人々がいたことを。

「だから、テイエリア。貴方は『機械』なんかじゃない。立派な『人間』だ。誇っていい」

テイエリアは目を丸くした。眉間に皺が寄っていたのは、アイデアの言葉をテイエリアなりに理解しようとしたためであろう。

理論的な考えを主体にする彼は、アイデアのような感覚的な発言や行動原理が「理解しがたい恐ろしいもの」のように思えたに違いない。吊り上がっていた眦が、ほんの少しだけ和らいだ気がする。

「……お前が、僕に対して肯定的なことを言ったのは初めてだったな」「テイエリアが私の発言を切って捨てなかったのも初めてだよね」「む」

アイデアの指摘に、彼は目を瞬かせた。隣にいたアレルヤも目を丸くした後、小さく頷く。それが一種の名物と言えば名物だったけれど、会話のキャッチボールができるのはやっぱりいいことだと思う。投げたら叩き落とすのが常だったテイエリアも、共に戦う中で変わったらしい。

思えば、ソレスタルビーイングの面々は、お互いに対してどこことなくよそよそしい感じがしていた。組織の中の守秘義務に抵触すると言われてしまえばそれまでであるが、アイデアが育ってきたコミュニケーションと比較すると、天と地の差レベルで寒々しかった。

『同胞』は、同族及び仲間意識が強い。『同胞』の成り立ちが「人類及び世界政府から徹底的に迫害されてきた」ため、『同胞』以外しかないなかった」のだ。それ故、多少の揉め事はあるけれど、互いに感情をぶつけあい、わかり合うことで結束を深めてきたのだ。

今のソレスタルビーイングには、『同胞』と同じ結束が生まれている。世界のすべてを敵に回し、戦い続ける——古の『同胞』が辿ってきた旅路と似ている。状況はどちらも絶望的だし、勝算もなければ当てもない。下した判断も同じであった。

奇妙な親近感と共に、今なら古の『同胞』の気持ちがよくわかる。母

から受け継いだ想いを辿りながら、イデアは静かに目を閉じた。どこからか、互いのことを話して笑いあうブリッジクルーの声が『聞こえてくる』。

『そういえば、自分のことを互いに話すのって初めてツスよね』

『今までは組織の守秘義務があったから。でも、今更よね』

『だな。その中でも、自由奔放な奴はいたけど』

『あー。イデアかー』

彼らも彼らで、和やかな時間を過ごしているらしい。

『トレミーのママ枠は、スメラギとイデアの一騎打ちって感じだからな』

『スメラギさんは否定しそうだけどね』

『流石にお姉さんは厳しいと思うツスよ。スメラギさんの年齢的に』

『キミ、デリカシーがないよ……』

おどけた調子で語るリヒテンダールに、クリステイナはこめかみを抑えてため息をついた。ラッセも苦笑している。この場にスメラギが居合わせたら、それはもう修羅場になっていたことであろう。彼女も乙女であり、年齢のことを気にしているのだから。

ちなみに、イデアは「お母さん」と呼ばれることは嬉しいことだと思っている。自分の出自及びその他諸々のことを考慮すると、「お母さん」と呼ばれても痛くも痒くもなかった。むしろ、それ以上でもおつりがくるレベルかもしれない。

ただ、^{おばあちゃん}「グラン・マ」と呼ばれ、尊敬されるべき人間ではないとは思っている。年齢的にも、経験的にも、その他諸々の要素を考慮しても到達できない高みである。イデアにとって、その敬称で呼ぶ／呼ばれるべき女性は後にも先にも1人だけだ。

イデアの古巣／実家——『悪の組織』も、もう1つの側面から行動を開始しているであろう。以前のように、年齢に見合わぬ無茶をやら

かして寝込んでなければいいのだが。

最近は妙にやる気をたぎらせていた、とは、グラン・マの息子からもたらされた情報である。思念波越しの会話のため、機械に足が残る可能性は殆どなかった。

閑話休題。

イデアは満足げに頷いて、テイエリアとアレルヤの方に向き直った。

「——そして、全力で生きた人間には、後悔はない」

「それって、機械と全力で生きた人間は同じってこと？」

話を聞いていたアレルヤが首を傾げた。

その言葉に、イデアは首を振る。

『後悔しない』のと『後悔がない』のは、全然違うんだよ」

「……相変わらず、お前は難解なことを言うんだな」

「違くないね」

イデアの言葉に、テイエリアとアレルヤが笑い返した。そうして一言、付け加える。

「だが、今なら……今だからこそ、貴女の言葉の意味が分かるような気がする」

「僕もだ。うまく言葉にできないけど、それでも、キミが何を言いたかったのか、分かるような気がするよ」

アレルヤはともかく、テイエリアが穏やかに笑ったのは初めてのことで。けれど、2人が同じ場所にいる状態で、似たような表情を浮かべているというのも初めてのことである。ついでに、テイエリアがイデアのことを「貴女」と呼んだのも初めてのことであった。

今日は、珍しいことが連続して続く。まるで、自分たちに待ち受け

る『これから』が、絶望と悲しみに満ちているのだと言わんばかりに。だからどうした、と、イデアは心の中で盛大に叫ぶ。生きる覚悟を固めた彼らを生かすのが、イデアが『ここにいる』理由なのだ。だから、必ず守り抜く。

滅びの刻ときを迎えるには、まだ早すぎるのだ。黒幕が糸を引いていることは察している。その犯人の正体も、イデアは既に把握していた。勿論、ソレスタルビーイングを生み出したイオリア・シユヘンベルクも想定済みである。そのための下準備／系譜が、刹那の駆るエクシアに受け継がれていた。

彼女も『生き残る』覚悟を決めている。戦争の根絶を夢見る『ソレスタルビーイングのガンダムマイスター』、及び『恋する乙女』としてだ。後者は本人無自覚である。

刹那を愛してやまない男——グラム・エーカーも、この戦いに参加しているに違いない。文字通り、2人にとっても『最終決戦』であることは明白だった。

イデアにとっても、最終決戦であった。対峙を想定している相手は、ユニオン軍の『空の護り手』——クーゴ・ハガネ。

端末を引つ張り出し、彼の名前にカーソルを合わせる。

新着メッセージはない。何かこちらからメッセージを送ろうかと思ひ、メールを開いた。

『……いや、やめておこう。縁起悪いし、死に行くんじゃないし。これじゃあまるで、遺言みたいだ』

不意に、声が『聞こえた』。クーゴの声だった。

『俺は諦めてなんかいない。彼女と——イデアとまた会うために、この道を行くと決めたんだ』

イデアはメール画面を消し、端末をしまう。遺言なんていらぬ。クーゴもイデアと同じように、生きるために戦うことを選択したの

だ。

同じことを考えてくれたのが嬉しくて、イデアは微笑んだ。そんなイデアの様子に、ティエリアとアレルヤが目丸くする。

2人は顔を見合わせた後、ちよつと何かを思いついたらしい。茶化すように笑いながら、しまい込んだ端末を指示した。

「メッセージ、送らなくていいのかい？　これが最後になるかもしれないよ？」

「愛しの君なんだろう？　……僕には、あまり理解できないことだが」

ここにロックオンがいたら、率先してイデアを茶化していたに違いない。でも、今の2人を見たら、嬉しそうに表情を緩ませて眺めていそうな気がした。

「大丈夫よ。こういうときの恋する女の子は、絶対死なないから。むしろ、殺されたって死ぬものですか！」

イデアは悪戯っぽく笑う。その表情を見た2人は、期待／想定通りの返事が帰ってきたことに苦笑しつつも、どこか満足そうに頷いていた。

珍しいくらい、和やかな時間が過ぎていく。最終決戦直前であることなど感じさせないくらい、優しい時間だった。

クルーたちが談笑に耽り、自分たちの間に結ばれていた絆の強さを噛みしめる。絶対に生き残ると、決意を固める。

「Eーセンサーに反応！　敵部隊を補足しました！」

クリステイナの声が響く。ついに、決戦の刻ときが来た。

イデアはティエリアとアレルヤに眼差しを向けた。2人も、厳かな表情で頷き返す。

どこからか、夜明けの鐘が鳴り響く音が聞こえたような気がした。

◆
「このレポート、凄いな」

女性は、端末からデータを眺めながら感嘆の息を吐いた。流石、女性が見出したジャーナリスト。見込み通りだった、と、ひっそり満足げに微笑む。

「シロエとマツカに『ちまちまと情報を開示していくように』とは言ったものの、イニーやレイのことをここまで掘るんだものは、ライヒヴアイン家についてもまとめてるのよ?」

ふふ、と、女性は笑い声を漏らした。隣にいたエルガンは肩をすくめる。

ライヒヴアインという名前に何かを思い出したようで、エルガンが問いかけてきた。

「そういえば、お前の教え子だったライヒヴアイン家の、最後の1人“は”? ……また、やけっぱちになって、とんでもないものを開発してないよな?」
「やってないわよ。『ベルフエゴールみたいなパイロットに優しくない』機体を作って、それに乗って無茶やらかすなんて真似はもうしない』って言ったもの」

エルガンの言葉に、女性は苦笑した。懐かしさに駆られて、昔のデータを引っ張り出す。

提示された機体は、怠惰の悪魔の名を冠したMS——ガンダムベルフェゴール。ライヒヴァイン最後の1人である青年が、復讐に凝り固まった状態で作り上げたMSである。

破壊力に特化した武装とESP—Psyonを搭載した機体であったが、青年の持つ能力とは相性が悪かった。それでも無理を押して搭乗した結果、青年は味覚を失ってしまう。

彼を立ち直させるのは本当に大変だった。エルガンも当時のことを思い出したようで、深々とため息をつく。現在は自分に合ったESP—Psyonを搭載した機体で戦っている。

結局味覚は回復しなかったけれど、代替え手段と友人——息子の協力もあって、普通の生活を送っている。現在も、MSパイロットとして、新しい機体を駆って戦っていた。

……もつとも、その新しい機体は、突如横槍を入れてきたアンノウンによってお釈迦スクラップ一步手前の状態にされてしまったが。

「しかし、その新型機もスクラップ同然にされたのだろうか？ 後継機は？ ……いや、アルヴァの息子のことだ。機体なんかなくとも、生身で特攻しそうで恐ろしいな」

親子そろってお前の影響を受けていたし、と、エルガンはジト目で女性を見た。権謀術数を張り巡らせているこいつもまた、人のことが言えないというのに。

昔は一緒になって、戦艦や戦闘機を生身で撃退してきただろう。もつとも、エルガンの撃墜数は常に最下位だった。その分を、作戦プランの設計につき込んだような感じであった。

「大丈夫よ。ついさつき、準備終わったって連絡あったし。……ところで、馬鹿の居ぬ間に失脚準備は進んでるの？」

「問題ない。奴がこの戦いを生き延びようが、この戦いで死に果てようが、地獄が待ち構えている」

「前者だったら栄光から一転して転落、後者だったら死人にムチ打

ちつてところか」

女性はにたりと笑みを浮かべた。周囲の人間がこの表情を見たら、「あくどいことを考えている」と怯えていたに違いない。実際、エルガンも苦い表情を浮かべて後ずさっている。

「これからえげつないことをしようとしている」という自覚はある。愛する夫を殺されて、黙っていられるような女ではない。これからどう報復するか、算段を立てていた。夫はきつと、こんな無駄なことを望まないだろう。

亡くなった夫が心配そうに女性を見つめている姿が『視えた』。死んだ人間に不安を残している——その事実が居たたまれなくて、女性は苦笑する。申し訳ないが、女性にだって譲れないことがあった。

(ごめんね。きちんと決着をつけなきゃ、私は前へ進めないんだ。……これが終わったら、もう振り返らないから……許してね)

女性は苦笑する。それを目の当たりにした夫は、慈しむような眼差しを向けてくれたような気がした。次の瞬間にはもう、彼女の隣には誰もいない。

対面に佇むエルガンにも、彼の姿が『視えていた』のだろう。沈痛な面持ちで目を伏せた。



ボロボロの体を引きずったノブレスがやって来た場所は、『悪の組織』の本社にある格納庫である。そこには、つい数時間前に突貫工事

を終えたばかりの「レガンダムの後継機」が佇んでいた。

本社の格納庫に来たのは随分と前のことだった。以前自分が駆っていた機体も、ここにある。怠惰の悪魔の名を冠した機体とESP—Psyonは改良を施され、パイロットに厳しい機体ではなくなった。しかし、いわゆるつきの機体として、誰も搭乗しようとしていない。

最近、その機体と搭載されたESP—Psyonと相性のいい人物が見つかったそうだ。彼女はエイミーの艦でオペレーター兼雑務をやっているという。彼女の才能を見出したエイミーは、早速いろいろとやってくれたらしかった。その連絡は、MSパイロットの面々から聞いている。

青年は自分が搭乗する機体を見上げた。レガンダムの面影を宿した、白と青の機体。この機体もまた、『人の心の光』を世界に示した機体であった。虚憶きよわく曰く、この機体はレガンダムが辿る『他の可能性』だ。しかし、レガンダムと同じ可能性の世界には存在しえないという。

スペック的にはレガンダムの強化版と言える。レガンダムから引つ張り出したESP—Psyonを突貫工事で調整し直し、この機体に積み込んだ。

これで、どうにか自分も宇宙そらへ向かうことができる。最後の役目を果たすことができるのだ。——そのために、自分は『ここにいる』。

「キミも、年齢に合わない無茶をするんだな」

響いた声に振り返れば、1人の老紳士が心配そうにこちらを見上げていた。ノブレスという仮面を外して、青年に戻る。

そこにいるのは、老紳士の知っている『おにーさん』だ。決めたことだと告げると、老紳士は深々とため息をついた。

「死なんでくれよ、『おにーさん』」

「死にませんよ。約束します」

「そう言って、60年間帰ってこなかったのはどこの誰だったかな」

老紳士はムツとした表情で青年を見上げた。前科持ちは辛い、と、青年は肩をすくめる。本当はもう少し雑談に耽っていたのだが、そんな暇はなさそうだった。

青年は老紳士に背を向け、コックピットに飛び乗る。発進の合図が鳴り響き、老紳士は安全のために奥へと戻った。それを確認し、青年は操縦桿を握り締める。

再び、ノブレスとしての仮面を被る。このミッションが、ノブレス・アム——及び、青年が果たすべき最後の使命だ。ラストミッション前を向いて、明日を手にするための。

これが終わったら、長らく顔を隠してきた仮面とおさらばだ。ノブレス・アムというコードネームはわからないが、テオ・マイヤーというアイドルも、仮面の男もいなくなるだろう。最後に残るのは、もう体を成さなくなった監視者の残骸だけである。

無くなってしまった監視者の椅子に、采配を振るうもの——ヴェーダあるいはその他諸々——たちは誰を座らせるつもりなのか。少なくとも、青年は用済みであることは明らかだった。行く当ては、ある。完全に出戻りだけれど、『同胞』たちは喜んで迎えてくれるだろう。

教え子たちは、大丈夫だ。もう、自分が必要ない。彼らなら、自分が必要ことや進むべき道を見出し、生きていける。寂しくないわけではないが、最初から覚悟していたことだ。

「これが、僕が僕自身に課したラストミッション」

ノブレスは嘔みしめるように眩き、操縦桿を動かした。

「……ノブレス・アム、H i—レガンダム、出る！」

ハッチが開き、レガンダムの後継機——H i—レガンダムがカタパルトから飛び出す。

青い光を纏った白と青基調の機体は、宇宙を切り裂くようにして突

き抜けた。

『テオおにーさん』

気のせいかな、老紳士と少年の声がダブって聞こえたような気がした。



「さあ、撃つがいい！ 地球と宇宙の平和のために!!」

小惑星の上に陣取るのは、トレーズ・クリシュナーダ率いる部隊である。彼らが向かい合っている相手は、ゼクス・マキス／ミリアルド・ピースクラフトの所有する戦艦——リーブラであった。

敗者になりたいと語った優雅な男は、己の死が近づいていることにすら動じない。流石であると感嘆すればいいのか、そんなことしている暇があつたら無様でもいいから逃げ延びろと喝を入れればいいのか、クーゴには分からなかった。

ジェネレーションシテムで再現された光景であるとはいえ、自分たちが彼らを何とかできないという事実がもどかしい。何故自分たちがここにいいのか分からなくなりそうさ。

部外者にして外部者であるクーゴたちに許されたことは、その顛末を見届けることだけである。クーゴが憤ったことに気づいたのか、仲間たちが心配そうな顔つきになったのが『視えた』。

アイデアも、刹那も、グラハムも、何とかならないかと思つている。しかしながら、どうしようもないことを悟つていた。だからすべてを見届けるのだと、面々の眼差しは訴えていた。

クーゴが悩んでいる間に、リーブラは主砲のチャージを終えた。青白い光が爆ぜ、トレーズたち目がけて降り注ぐ！ 光は小惑星ごとトレーズを飲み込ん——まなかった。

小惑星と放たれた主砲の間に、「何か」が割って入った。「何か」が青い光に飲まれる寸前、禍々しい金色が視界の端にちらついたような気がする。

主砲の光は「何か」が身に纏つたものによつて飛び散つた。おそらくはシールドの類だ。それはいとも容易く、リーブラの主砲を無力化したのである。

途端に、通信越しのアイデアと刹那の表情が微妙なものになった。割り込んできた「何か」に対し、何とも言えぬレベルで身に覚えがあったためであろう。

「っ、はははははははははははははははははは！ リーブラの主砲と言えどもその程度か！」

長つたらしい笑い声がこの場に響き渡る。青い光が消え去つたと思えば、毒々しい機体が鎮座していた。

金色。見ていて気が遠くなるレベルでの金色。搭乗者の好みが反映されたMAだ。思わずクーゴが眉間に皺を寄せる。

趣味の悪い乱入者のご高説が始まる。誰も頼んでいない。むしろ皆、「なんでお前ここに居るの?」「壮大な部外者だな」と言いたげな眼差しを向けていた。その視線は、乱入者の後ろに控えるジnkクス——正確には、機体に搭乗しているパイロットたち——からも注がれている。残念ながら、その叫びは黙殺されたらしかった。

「世界は、地球圏の統一という再生が始まった。そして私はその世界を、私色に染め上げる！」

場違いだった。壮大なくらい、その言葉が似合っていた。あの「黄金の乱入者」によって、トレーズとミリアルドの戦いが汚されてしまった。

2人が貫こうとした思いや、世界に示そうとしたものの高潔さや神聖さを汚されてしまった。ふつつつと湧き上がってくるのは、乱入者に対する憤りだ。

周囲に漂う微妙な空気などなんのその。驚きの声を上げるミリアルドやトレーズの様子に満足したらしく、乱入者は声高に己の名前を宣言した。

「そう……世界を変えるのはこの私、アレハンドロ・コーナーだッ!!」



「——帰れ、場違いイイイイ！」

クーゴは反射的にそう叫んだ。隣にいたグラハムは、眉間に深く皺を刻みながら、唸るように呟く。

「日本語で『空気読めない』』という言い回しがあったが、アレは完全にその言葉を体現しているな」

2人は顔を見合わせ、こめかみを抑えた。何故、最終決戦前にこんな虚憶きよおくを目の当たりにしなければならなかったのだろうか。クーゴには分からない。

しかも、虚憶きよおくの中で声高に名乗った奴は、アレハンドロ・コーナーという名前だ。現在の国連大使と同姓同名——むしろ本人である。何をやっているのだろう。

年甲斐もなければ立場もない。虚憶きよおくの中のアレハンドロは、自身のことを正義の執行者だと自負している様子だった。どこからどう見ても悪役にしか見えない。

おまけに、場違いすぎて小物として片付けられてもおかしくないレベルだ。

目に優しくない金色のMAがフラッシュバックする。いつか、見たようなデザインだった。

クーゴは顎に手を当てる。

(何故、しがない国連大使がこんなMAを所有しているんだ……？
金で物言わせて製作したにしても、操縦技術は到底、正規のMS乗りには敵わないはずだ)

国連大使に「しがない」と言うてはいけないのだろうか、MSおよびMAの操縦に関して、国連大使という肩書は分野違いのように思える。過去にパイロット経験があるなら別だろうが——そこまで考えて、クーゴは思い出した。

アレハンドロ・コーナーは、過去にユニオン軍に在籍していた記録があった。当時はフラッグの前身となった機体——ユニオンリアルドを駆っていたという。なら、MSやMAの操縦もこなせるだろう。……もつとも、虚憶きよおくの中の彼は、「機体性能でごり押し」しているようにしか見えなかったが。

そんな思考に浸っていたクーゴを呼び戻すかのように、戦艦内にアナウンスが響き渡る。出撃準備を促す内容のものだった。

手早く虚憶きよおくを纏めた後で、クーゴはグラハムと共に格納庫へ向かって駆け出した。そして、GNフラッグに乗り込む。

この先に何が待っているのか、誰の悪意が渦巻いているのか、それはまだ何もわからない。それでも、クーゴたちは飛ぶのだ。たどり着

きたい場所へ向かつて。
すべては、あした“未来”を迎えるために。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

50. 命の色

毒々しい金色のMAは、これまた同じような輝きを宿したビーム砲を撃ち放つ。スナイパーライフルで狙い撃たれたレベルからの砲撃など、並大抵の操舵士が回避できるはずがない。

しかし、プトレマイオスには優秀な操舵士がいる。リヒテンダールの操縦技術なら、あの砲撃をスレスレで回避することは可能だった。プトレマイオスに衝撃が襲い掛かる。第1粒子出力部が被弾したと、クリステイナの声が響いた。

被弾はしたものの、プトレマイオスはまだまだ健在だ。ガンダムたちも問題なく出撃できる。間髪入れず第2波、第3波が放たれた。勿論——寸でのところのだが——プトレマイオスはMAの砲撃を回避した。流星はリヒテンダールである。

視界を遮るデブリが少ないということは、相手はこちらを狙い放題ということを意味する。しかし、それはプトレマイオス側にも言えることだ。もつとも、プトレマイオスには攻撃用の武装がないため、狙い撃つことは不可能だった。その代わり、相手の攻撃がはつきりと視認できた。

(しかし、本当に絶妙なタイミングね。リヒテイの操舵スキルとプトレマイオスの性能を踏まえただうえで、ギリギリ回避できるような、相手側の砲撃時間やその他諸々が調節されてる)

出撃のタイミングを待つイデアは、MAのパイロットに張り付いていた『同胞』へ思いを馳せた。ゆるくウェーブした金髪の髪を結んだ青年技術者と、薄緑の髪に紫の瞳を持つイノベイドが、悪戯つぽく笑う姿が『見える』。

あの2人のことだ。金ぴかのMAには、彼らの悪意による手抜きが満載しているのであろう。敵の捕虜となり働かされた5人の技術者が、味方側が有利になるように采配した戦艦を造り上げた話が脳裏をよぎる。2人がやったことはそれと同じだった。

『隕石作戦』。

隕石に紛れて、5機のガンダムを地球に降下させる——地球に住まう民たちから弾圧を受けるコロニー側の民が、コロニー解放のために起こした作戦である。その際、コロニー側のガンダムを開発したのは5人の技術者たちであった。

後に、その技術者は敵に捕らえられ、戦艦の開発を命じられる。彼らの技術力にかかれば、高い破壊力を有した要塞を造り上げることができたはずだった。だが、技術者たちは「第3者から見れば『時間がないから仕方ない』と流す」レベルで手抜きと欠陥を施したのである。

その代名詞が『主砲の連射が利かない』、『主砲のチャージ時間がやや長めである』という欠陥であった。彼らに戦艦を造らせた張本人は「時間がなかったから仕方がない。でも、上々の出来栄えだ」と判断を下した。最後の最後でネタ晴らしをされ、その人物が憤慨していた姿が『視えた』。

MAのパイロットは、このことに気づいているのだろうか。……いや。きつと、プトレマイオスが砲撃を回避したのは運が良かったから。だと本気で信じていそうだ。

(相手にそうと悟らせない程度の、だけれどこちらにとつては有利に働く手抜き加減……これが、あの2人が私たちにしてくれたアシストか)

『……ここまでやったんだから、必ず生き残ってくれよ?』

不意に、聞き覚えのある声が耳を掠めた。ヴェーダを掌握した薄緑の髪の毛のイノベイドが、期待と優しさに満ちた眼差しでアイデアを見返している。

『……まあ、まだやることは沢山あるからね』

薄緑の髪の毛のイノベイドは、ニヤリと笑みを浮かべた。誰もが「こいつ、悪いこと考えてる」と言いそうな顔である。アレハンドロに対する強い感情が流れ込んできそうだった。

彼がヴェーダを介して行っていることは、金色のMA——アルヴァアロンの砲撃タイミングの調整である。他にも様々な部位の調節（と言う名の手抜き及び欠陥作成）に勤しんでいる。

「強襲コンテナ出撃！ 目標、敵MA！」

「了解！」

「強襲コンテナ、出撃する！」

エクシアを載せた強襲コンテナが、プトレマイオスから飛び立つた。現時点で切り札となり得るのは、強襲コンテナと対ガンダム用を想定した武装が施されているエクシアだけである。最大の切り札2つを敵の指揮官にぶつけるのは当然だと言えよう。

「リヒティ、トレミーを近くの隕石の陰へ！」

「了解ッス！」

「キュリオス、ナドレ、スターゲイザーはコンテナから直接出撃！ トレミーの防御を！」

「了解！」

スメラギの指示に従い、リヒティがトレミーは隕石の陰へと進路を向けた。間髪入れず出された出撃命令に、イデア、ティエリア、アルヤが返事を返す。

コンテナから飛び出した3機は、ジンクスたちを迎え撃つために飛び立った。視界の端に、エクシアを搭載した強襲コンテナが敵の包囲網を突破したのがちらつく。

実際のところ、『アルヴァアロンに、強襲コンテナとエクシアのことを任せた』というのが本音であろう。彼らもまた、大将の性能を信じているらしい。

ジンクスたちは2手に分かれて、プトレマイオスに攻撃を仕掛けるつもりだ。ティエリア／ナドレとアレルヤ／キュリオスがその部隊へ突っ込み、攻防を始める。

その中でも、他の機体にナドレとキュリオスを任せて、プロレマイオスへ直接攻撃を仕掛けようとする機体があった。イデアは操縦桿を動かし、スターゲイザーと共にジンクスの前へと立ちふさがった。

フレキシブルアームズに取り付けていた刃を回転させながら、狙いを合わせる。ソレスタルビーイング製のガンダムが皆ビームサーベルを有しているが、スターゲイザーには搭載されていない。否——これが、スターゲイザーが持つ剣だ。

両側に展開するスピナー同士を合体させる。その出で立ちはまるで花のようだ。

GN粒子の淡い燐光が舞い、刃が大きく展開した。フレキシブルアームズを動かし、思いつきり投げつける！

「貴方たちに花を——そして、天国への片道切符を贈ります！」

スターゲイザーの周囲が青く光った。そうして、高速回転した花の武装が、襲い掛かるジンクスたちのコックピットを真つ二つに叩き切る！

天国の花。ブルーム・イン・ヘヴン 名前の通り、この武装は攻撃対象者を天国へ導くためのものだった。本来は、虚憶きよわくで出てきた真珠の爪が有した武装の一つである。真珠の牙は、天国に対して地獄だったが。

能力を駆使し、イデアは花の軌道を調節する。花は楕円形の軌道を描きながら飛び回り、プロレマイオスに近づくジンクスの群れを天国送りにしていった。その合間に、ビームライフルを使つて牽制するの
も忘れない。

複数の機体を相手取ることの難しさは、以前から熟知していた。絶対的に不利な状況だが、諦めるわけにはいかない。ついでに、ジンクス程度の連中に、自分の首を易々と渡してたまるものか。

「私を好きにしているのは、あの人だけなんだから……！」

イデアはただ一人へと思いを馳せる。ユニオン軍の「空の護り手

“、黒髪黒目の東洋人男性——クーゴ・ハガネ。アイデアにとっての、運命の人だ。”

彼がアイデアと出会う以前から、アイデアは彼のことを『知っていた』。そのことは、まだクーゴに伝えてはいない。また会うときに伝えようと思っている。

だから、こんなところで、こんな奴らに、撃墜されてやるつもりは毛頭ないのだ。彼が来るまで、意地でも持ちこたえてやる。無様な姿を晒すことになるかもしれないが、クーゴにだったら見られてもいいと本気で思っていた。

『希望を守り抜いて』——母の声が耳を掠める。ここで出し惜しみすれば、アイデアが『ここにいる』理由がなくなってしまうだろう。しかしながら、自分が『人間として異質であることを晒す』ことには抵抗があった。

人革連の包囲網に晒されたヴァーチエとキュリオスが目撃した“青い流星”の意味を、彼らは知ることになる。そうなったとき、彼らは——人類は、アイデアやアイデアの『同胞』のような異端者を、どんな目で見るとしようか。

古の同胞たちが味わった悲しみが木霊する。否定され、迫害され、根絶やしにされそうになり、命からがら放浪し続けた旅路の記憶。

また、同じことの繰り返しになるのだろうか。否定され、迫害され、根絶やしにされそうになって——。

アイデアは首を振る。たとえそうだったとしても、アイデアにとって、刹那やスメラギたちは大切な希望だ。絶やしてはならない。

（一緒にいられなくなっても、絶対に守るよ。それが約束だし、何より——私が自分で選んだことだもの）

恋も、使命も、妥協するつもりなどない。こめかみから伝う汗をそのままに、アイデアはふっと笑みを浮かべた。

レーダーがけたたましい音を上げる。

見れば、ジンクス以外にも反応が出た。

『MD!? しかも、機体数はおよそ30機!』
『っ、強襲コンテナへ行くわ! こっちも迎撃しないと! イアンに連絡を……』

機体データを照合したクリステイナが金切り声を上げた。スメラギが慌ただしく飛び出していこうとしている。

刹那、すさまじい悪寒が背中を駆ける。悪意の矛先は、プトレマイオスに向けられていた。

男が不気味な笑みを浮かべた姿が『見える』。反射的にアイデアは『叫んで』いた。

「リヒティ、舵! ドクター、避難ツ!!」

『へ——!?』

『なあッ——!?』

しかし。その叫びの意味を彼らが理解する前に、黄金の光がプトレマイオスに降り注いだ。クルーの悲鳴が木霊する。避難を促した相手の命が燃え尽きたことが『分かり』、アイデアは愕然とする他なかった。

希望を守り抜くと誓ったはずなのに、その決意は空しく、仲間が1人犠牲になった。長い間一緒に戦ってきた同期の仲間を失った、イアンの悲しみが流れ込んでくる。躊躇っていた弊害だ、と、アイデアは思った。

悪いことは立て続けに起こるらしい。プトレマイオスが有する唯一無二の守りの要——GNフィールドが、先程のビーム攻撃によって使用不可能になったという。もし、また、先程と同じような攻撃に晒されてしまったら——待ち受ける結末は、全滅だ。

躊躇うな。たとえその先に拒絶と迫害があっても、希望を絶やすことだけは絶対にあつてはならない。

なんのために、アイデアは今まで『ここにいたのか』。それを忘れたこ

とは、一度もなかったのだから。

「——っ、おおおおおおおおおおお！」

イデアは操縦桿を動かした。同時に、トランザムシステムを作動させる。

「私の希望に、手を出すなアアアアアアッ!!」

赤い光を纏ったスターゲイザーは、ジnkクスやMDに攻撃を仕掛けた。体当たりを喰らわせたり、アームに接続し直したスピナーを回転させ振り回したり、アーチャーを各方面に飛ばしてビット攻撃を仕掛けたりして、次々とジnkクスやMDを屠っていく。

少し離れた場所で、足を失いながらもジnkクスと戦うキュリオスが見えた。追いつがってはいるものの、3対1は不利である。スターゲイザーも似たような状態といえば状態だが。そんなことを考えながら、ファルシアを屠ったときだった。

背後から紫の光が炸裂する。不利だったキュリオスに援護射撃を行ったのは、プトレマイオスに搭載された強襲コンテナである。アレルヤ／ハレルヤはそちらに任せ、イデア／スターゲイザーは自分に与えられた使命に集中する。

MDはプトレマイオスに殺到していた。ゼダスの頭を撃ち抜き、ファルシアを弾き飛ばし、トーラスの首を吹き飛ばし、ビルゴを切り裂く。

プトレマイオスの死角に回り込もうとしたジnkクスが、イデアの視界の端に移った。トランザムを駆使していても、スターゲイザーで向かうには間に合う距離ではない。

——そう、スターゲイザーで向かうには。

イデアは能力を駆使して『飛んだ』。スターゲイザーのコックピットから、プトレマイオスとプトレマイオスに銃口を向けるジnkクスの間へ、割り込むように転移する。

そのコンマ数秒で、ジンクスが引き金を引いた。赤い光が爆ぜる。イデアは躊躇うことなく、力を行使した。ありつたけの力を注いで、シールドを展開する!!

GN粒子の弾丸は、イデアが展開したシールドによって弾かれた。流れ弾が周辺に飛び散り、その余波が周囲のデブリやプロトレマイオスの下部に命中した。

クリステイナを庇ったりヒテンドールが床に背中を打ち付ちつける。小規模の爆発が、リヒテンドールの右半身を飲み込んだ。宇宙服に隠されていた部分が露わになる。

彼の姿を見たクリステイナが驚いた声を上げた。しかし、彼女はリヒテンドールを否定することなく、困ったように笑って彼を抱きしめた。リヒテンドールが目を丸くする。

長らく片思いだったリヒテンドールに、春が来た。こんなときでなければ諸手を上げて祝福したのだが、状況が状況だけに、それはできそうになかった。

『に、人間!?!』

ジンクスのパイロットが、素っ頓狂な声を上げた。彼の怯えた顔が『見える』。イデアは機体越しからパイロットを睨みつけた。

ひ、と、パイロットが引きつった声を漏らす。どこからどう見ても、人間業ではないものを目にしたのだ。当然と言えよう。

『ち、違う……こんなの、人間なんかじゃない!』

ジンクスは再びプロトレマイオスに銃口を向けた。イデアもシールドを解き、それを攻撃用の思念波へと変換し、ジンクスのコクピット目掛けて叩きこんだ!

『ば、化け物——』

パイロットの断末魔と一緒に、吹き飛ばされたジンクスが爆散する。他のジンクスやソレスタルビーイングの面々も、流石にこの異常事態に気づいたらしい。精神操作系の力を行使していなかったため、この光景の目撃者が笑って流すことはないだろう。

誰もがイデアに視線を向けていた。得体の知れないものに対する怯えや恐怖、異端の者に対する嫌悪、その力が自分の方に振るわれるのではないかという恐れ——古の『同胞』に注がれた眼差し、そのものだ。歴史というのは、何度でも繰り返されるものらしい。

「イデア」

名前を呼ばれた。振り返った先にいたのは、顔をひきつらせたクリステイナトリヒテンダール。

「貴女は、何？」

いつかされるだろうと思った質問だ。
その答えは、いつだって一つである。

「——ヒトよ」

イデアは視線を逸らすことなく、クリステイナの質問に答えた。

「泣いて、笑って、怒って、恋をする。——貴女たちと同じ、どこにもいる……ただのヒトだよ」

イデアはそう言うなり、頭に被っていたヘルメットを外した。宇宙空間でそんなことをしたら、人間は生きていけない。しかし、イデアにとって、そんなものは必要なかった。

自分の周囲に漂う青い光が、宇宙空間であるにも関わらず生身で活動できる理由である。これが、イデアの——タイプ・ブルー荒ぶる青が有する力だ。

アイデアは静かに手をかざす。リヒテンダールは反射的にクリステイナを庇い、クリステイナは身を縮こませた。2人の態度に、アイデアは寂しくなって目を伏せた。

青い光が2人を包む。あ、と、間拔けな声を残し、2人はプロレマイオスのコックピットから消え去った。今頃、スメラギ、イアン、フェルトが搭乗する強襲コンテナの中で転がっていることだろう。

視界の端に、強襲コンテナへ襲い掛かろうとしたトールラスが見えた。

次の瞬間、スターゲイザーがトールラスに体当たりを仕掛けて弾き飛ばす。

元々、スターゲイザーという機体は、調査や探索を目的としたMSだ。人間では到達できない場所を探索するため、自動学習型のAIが搭載されている。

本来ならそのAIは戦闘用ではないけれど、学習のさせ方を応用すれば、こんな風に戦わせることもできるのだ。使い方を間違った感が否めないのだが。

……セレーネ・マクグリップ本当のパイロットがこの状態を見たら、怒髪天になりそうだ。彼女がコスミック・イラEの人間で本当に良かった。

閑話休題。

アイデアは流星のようにスターゲイザーに近づくと、そのままコックピットへと転移した。操縦桿を握り締め、目を閉じる。青い光が舞い上がり、この場一体に不可思議なシグナルを響かせた。

思念波を察知したパイロットたちが困惑する声が『聞こえる』。しかし、思念波を受け取ったのは人間だけではない。強襲用コンテナに襲い掛かろうとしていたMDたちが、一斉にスターゲイザーへと向き直った。

「さあ来なさい、機械人形！ 貴方たちの思考回路に刻まれた本来の役割——『ミユウ』抹殺を果たすために！」

アイデアの宣戦布告に惹かれたのか、大量のMDがスターゲイザー目

がけて殺到する！ それを確認したアイデア／スターゲイザーは、プロマイオス——及び強襲コンテナとは正反対の方向へと飛び出した。まるで蟻のようにMDが群がっていく。

『待つて、行かないで！』

クリステイナの金切り声が『聞こえた』ような気がしたが、アイデアの願望だろう。それを振り払うようにして、アイデアはスターゲイザーを加速させる。

トランザムは切れてしまったが、どうにかする手立ては存在している。隠し通す理由はなくなったのだから、もう、躊躇ったり手加減する必要はない。

充分MDを引き付けたことを確認する。プロマイオスや強襲用コンテナよりも、遠い場所に来たものだ。周囲に漂うのはデブリばかりで、とてもクーゴが来そうな気配はなかった。

だからといって、クーゴと相見えることを諦めたつもりはない。アイデアは不敵に微笑み、能力を発動させた。青い光が一際激しく輝く。己の命を燃やしつくすかのように。

そして——

「私は生きる！・生きて、あした未来を掴むんだアアアアアアアアアアツ!!」

アイデアの叫びを引き金にして、青が爆ぜた。周囲一帯が光に飲まれる。

そのコンマ数秒後——MDの群れは、スターゲイザー共々、爆炎とともに消えていった。



『命の色って、何色だと思う?』

『――青』

唐突に思い出したのは、先程自分たちを置いて行ってしまったイデアの言葉だった。

聞いた話では、休暇の直前、彼女はガンダムマイスターたちに『命の色』について訊ねていた。

イデア本人は命の色を青だと思っているという。地球と同じ色だから、と言うのが理由なのだそうだ。

命の色が青だとするならば、あそこで輝く青い光は、イデア・クピディターズの命そのものなのだろう。光は激しく輝いている。まるで、己の命を燃やしているかのようだ。

刹那、一際激しい光が炸裂した。遠くの方で沢山の爆炎が上がる。レーザーに映し出されていた敵影が、あっという間に消えてしまった。あまりの出来事に、強襲用コンテナにいた全員が息を飲む。

スターゲイザーに殺到したMDのすべてが沈黙した。おそらく、イデアとスターゲイザーがやり遂げたのだろう。最後の最後まで、プロレマイオスクルーを守ろうとして戦い抜いたのだ。

「っ、応答して！ イデア！」

「お願い！ 帰って来て!!」

スメラギとクリステイナが呼びかけたが、イデアからの返事がない。

遠くで輝いていた青い光が、どんどん弱々しくなっていく。あれが命そのものだと言うなら、彼女の命は風前の灯火になっているということなのか。だとしたら、消えないでほしい。自分たちはまだ、何も伝えていない。

助けられたことに対する感謝の言葉も、彼女が隠そうとしていた不安や恐れに気づいてやれなかった謝罪も、何があっても自分たちはソレスタルビーイングの仲間であるという当然の事実も、まだ何一つ伝えてはいないのだ。

ダメだ、消えないでくれ——5人の叫びは、届かなかった。

光はふつりと途切れ、残ったのは、永遠に広がり続ける宇宙の闇。言葉が出なかった。結局、何も伝えられなかった。あ、と、誰かの喉から声が零れる。

そうしてまた1人、仲間が散っていった。



「——っ!？」

今、クーゴの視界の端で、青い光が煌めいたような気がする。誰かが命を燃やして、大切なものを守ろうとしていた。

思わず周囲を確認してみるが、青い光らしきものはもうなかった。この場一带には機体の残骸が散乱している。

国連軍とソレスタルビーイングの戦いは、かなり激しく厳しいものになっているらしい。

最初は第一波攻撃の後に作戦を中断して撤退するはずだったのだが、国連軍に補充が回されたため、指揮官役のカティ・マネキン大佐がG・サインを出したという。そのおかげで、補充要因でクーゴとグラハムのGNフラッグがこの戦場に降り立ったという訳だ。

しかし、作戦の終了間近であるにも関わらず、国連軍がここまで疲弊していると考えると、ソレスタルビーイングも侮れない。壊滅寸前を感じさせない、獅子奮迅の戦いぶりが伺えた。どちらかというと、

窮鼠猫を噛むに近い状態なのだろうが。

グラハムの駆るGNフラッグが先導するように飛んでいた。クーゴのGNフラッグは、彼に随伴している。

「……しかし、どこに行けばいいんだろうな。当てはあるのか？」

闇雲に進んでもどうしようもない。もしかしたら、その間に、誰かが刹那／ガンダムとの決着をつけているかもしれないのだ。

他者がガンダムを口説こうとしていることに嫉妬を燃やす我慢強い男が、黙っていらられるはずがないだろう。

「ある。乙女座の勘と私の魂が、『このまま突き進めば運命に——刹那とガンダムに会える』と叫んでいる！」

その意味を込めて問えば、グラハムは不敵に笑い返した。成程、グラハムには刹那／ガンダムの居場所が『分かっているらしい。友人の人外化は、順調に進んでいるようだった。』

彼とは対照的に、クーゴにはアイデアがどこにいるか『分からない』。羨ましいと言うべきかは謎だが、相棒に付き合うことを選んだ手前、今更離れるわけにはいかないだろう。

しょうがない。クーゴは苦笑しつつ、グラハムのGNフラッグに続いた。彼は迷うことなく、まっすぐに突き進んでいく。迷いのない横顔が目に見えかねてきた。

どれ程の間、自分たちは宇宙を突き進んでいたのだろう。ジンクスらしき残骸や、ガンダムの装甲らしき残骸が漂っては消えていく。兵どもが夢の跡という諺が脳裏を掠めた。

武力による介入で戦争根絶を夢見た施設武装組織、ソレスタルビーイング。己の内包する矛盾に歯噛みしながらも、彼らは的確な介入行動を行ってきた。彼らのおかげで解決した紛争があったことは事実である。それは認めるべきことだった。

同時に、彼らが存在しているが故に起こる争いが発生したことも事

実だ。しかし、彼らの名前を使って破壊行動を起こした連中がいたために、ソレスタルビーイングは『悪』とされ、滅び去ろうとしている。滅びの渦中にある彼らは、どんな思いで戦っているのだろうか。

（しかしどうして、国連軍のお偉いさんは殲滅という早期決着を望んでいるんだろう？ 威信をかけているとはいえ、ここまで泥仕合を繰り広げてまで殲滅に拘る必要があるんだろうか）

27機あつたジンクスのうち、第1波攻撃を無事に生き延びたのはたったの13機である。損害に対し、国連軍が戦闘不能にしたと思しきガンダムは1機だけだ。

第2派攻撃を行うにあたり、大量の犠牲者が出るだろう。下手したら、ジンクスが全滅することだってあり得る。ソレスタルビーイングが壊滅すれば揉み消せるとでも思っているんだろうか。世の中はそんなに甘くはない。

歴史は勝者が作り上げるものだ。きつと、倒れた者たちは英霊として祭り上げられるのだろう。そんなもののために戦っている訳じゃないと声高に叫びたいけれど、クーゴレベルの軍人が言ったところで難しそうであつた。

残骸と隕石の海を越えて、まだ、対峙すべき相手の姿は見えない。本当に、グラハムに先導させて大丈夫なのだろうか——と、不安に駆られたときだつた。

レーダーの端に、反応が出た。識別は味方であり、ジンクスとは違う源流を組む疑似太陽炉搭載型の機体である。機体の周辺には何もなく、その反応だけがぼつんとあつた。

「識別コード、Unicorn……？」

「パイロットは……機密事項のため確認不可能だ？」

クーゴとグラハムは怪訝そうに首を傾げた。反応が徐々に近づいてくる。しかし、どこか控えめというか、躊躇いのようなものを感じ

た。

味方に対して怯える理由なんてないはずなのに、どうしたのだろう。クーゴとグラハムは立ち止まり、機体が近づいてくる方向へカメラアイを向ける。

白い機体がこちらに近づいてくる。額には一角獣を思わせるような角があった。ガンダムに似ているかと問われれば、ちよつと悩むような外観であった。

白い機体は何もしてこない。友軍相手に何かするというのもおかしい話だが、何もしないで眺めているだけというのも違和感がある。恐る恐る、クーゴは声をかけてみた。

「こちらGNフラッグ。Unicorn、応答せよ」

「……………」

まさか話しかけられるとは思っていなかったらしく、パイロットが息を飲む音が聞こえた。そこから漏れた声の高さからして、パイロットはまだ10にも満たない子どものようだ。

どうして子どもがこんな戦場にいるのだろう。軍は実力主義ではあるが、子どもを兵士に使う程劣悪な環境ではなかったと思う。まさか、いつぞやの超兵機関と似たような組織が新しく作り出されたのだろうか。

もう一度声をかけてみた。Unicornのパイロットは答えようとしなない。ただ沈黙を貫くだけだ。

今度はグラハムが、同じようにUnicornへ声をかける。しかし、相変わらず沈黙が帰ってきた。

Unicornは一体何がしたいのだろう。クーゴとグラハムが顔を見合わせたときだった。

突如、機体の装甲が変形する。関節部から赤い光が溢れだし、頭部のデザインが変わった。仮面のような装甲が外れ、一角獣の角がV字に開く。——その顔立ちには、見覚えがあった。

「ガンダムだと!?!」

「しかもこいつ、ソレスタルビーイングじゃないぞ?!」

グラハムが驚きの声を上げる。思わず、クーゴも叫んでいた。

しかし、叫んだのは三十路一步手前の男性だけではない。どこからか、少年の声が『聞こえた』。

『なんで!?! どうして勝手にデストロイモードが起動したの!?! ……まさか、お母さん? お母さんなの……!?!』

泣き出してしまいそうな子どもの姿が『視える』。黒髪黒目の男の子は、まだ10にも満たぬ少年であった。顔立ちはどこからどう見ても、クーゴと瓜二つである。

しかし、クーゴには子どもはいない。血縁関係が外見に影響すると考えると候補は1人に絞られる。彼女はまだ未婚であるが、精子バンクに手を出す財力は有していた。

クーゴの予想を肯定するかのように、少年の心が『伝わってきた』。彼が思い浮かべている『母親』は、クーゴにとって馴染み深い相手だった。

黒髪黒目の東洋人女性。艶やかな花が描かれた薄桃色の着物を着ている彼女は、どこまでも冷ややかな眼差しを向けている。クーゴの双子の姉——蒼海。

(姉さんの、子ども……!?!)

何故だ。何故、姉の子どもがこの戦場にいるのだ。そもそも、姉が「子どもがいる」なんて話をしたことはない。……いや、壊滅的に冷え切っている相手には、報告する必要はないだろう。クーゴが思考回路を働かせようとしたとき、突如としてUnicornが動き出す。

Unicornが突っ込んでくる。バズーカを構えたUnicornが、こちらに容赦なく攻撃を仕掛けてきた。放たれた弾丸が派手

に飛び散る。さながら豪雨のようだ。クーゴとグラハムのGNフラッグは寸でのところで回避した。周辺を漂っていたデブリに散弾が直撃し、爆発四散する。一体何がどうなったというのだろうか。

『嫌だ……！ 戦いたくない、戦いたくないんだあああ!!』

泣き叫ぶ子どもの悲鳴と反比例するように、Unicornは急加速する。

何故だ。何故、姉は自分の子どもにこんなことができるのだ。これが母親のすることなのか。言いたいことは沢山あるが、生き残らなければどうしようもなさそうだった。

アイデアとまた会うためにも、蒼海に文句を言うためにも。——ああ、生き残る理由がまた一つ増えた。そうして、生かさねばならぬ存在も。

「グラハム！」

「わかっている！ Unicornを止めて、この場を突破するぞ！」

クーゴとグラハムは顔を見合わせ、頷き合う。2機のGNフラッグは、角を持つガンダムへ照準を合わせた。



結局、優秀な無垢なる子たちも出戻ることになった。無事に動けるのは、出来損ないの臆病者——宙継だけである。彼は一足先に出撃していた。

あそこまで使えないものを残しておくつもりはなかったので、そろ

そろ潮時だろう。次の行動次第では、然るべき手を下さねばならない。

息を吐き、格納庫に納められた機体を見上げる。

「……………さて、行かなくちゃね」

パイロットスーツに着替え、乗り込む。向かう場所は、『オペレーション・ディブレイク』の舞台となっている宇宙域だ。

操縦桿を動かし、アオミは宇宙へと飛び出す。宇宙域をしばらく飛んでいたら、暗号通信が入った。エクシアおよび強襲コンテナとアルヴァアロンが戦闘を開始したらしい。

宙継が乗る機体は、すぐに見つかった。その目と鼻の先に、アオミにとって邪魔で仕方がない存在——『イレギュラー』、クーゴ・ハガネがいる。彼の隣には、グラハム・エーカーの搭乗する機体があった。宙継の乗る機体がGNフラッグへ接近する。しかし、そいつはただ、じつと2人を見つめるだけだ。やはり宙継は出来損ないだった——アオミはつまらなそうに映像を一瞥すると、コンソールに手をかけた。

途端に機体の様子が変わる。隠されていた装甲が開き、本当の姿と本当の力が露わになった。宙継が驚き、悲鳴を上げている姿が容易に想像できる。これで、この場所に用はない。アオミは振り返ることなく先を急いだ。

そうして、目的地が見えてくる。エクシアとアルヴァアロンが戦っている場所だ。アオミがその光景をモニターで視認できる距離にたどり着いたとき、エクシアの実体剣がアルヴァアロンを引き裂いた！爆発。行動不能になったアルヴァアロンを視認した刹那は、被弾したGNアームズに搭乗しているラッセを気遣っている。しかし、アルヴァアロンが行動不能になっただけで、アレハンドロ・コーナーの機体を倒せたわけではないのだ。

「第2幕、開始か。……………道化の最終公演、じっくり観賞させてもらう

わ。アレハンドロ」

——そうして、アレハンドロにとっての晴れ舞台が／アオミにとつての『予定調和』が始まった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

51. 戦場 ―しゅらば―

一点のシミもない真っ白な部屋が、地獄絵図になっていた。

ここはユニオン領の、どこにでもあるような病院の、どこにでもあるような一室だ。何か特筆すべきことがあるとすれば、持ち込みテロの発生率が異常に高いということである。

テロが頻発している場合、普通は厳重な警戒態勢が敷かれるものだ。だが、この病室には物々しい警備など敷かれていないし、看護師や医者にそのことを言えば、「優しい同僚さん

じゃないですか」で流される。

のほほんと笑って流す彼／彼女たちは、タツパーの内容物が何かを確認していない。タツパーが入っている入れ物の大きさを見て、「差し入れに気合が入っている」と思うだけであった。

ザル警備の極みである。いいや、そもそも医者や看護師たちには警備するつもりなどないから、患者の異常事態も軽く流しているのだろう。意識の違いは大きい。

度重なるテロのせいで、ただの怪我人だった入院患者3人（いずれも軍人であり、20代半ばの屈強な男性である）の入院期間日数がじりじりと増え／長くなっていた。

『また、ジョシユアさんが皆さんに差し入れ持ってきたんですって』

『口と態度は悪いけど、仲間想いのいい人じゃないか』

医者と看護師がのほほんと話す声が『聞こえた』。病室の扉一枚隔てた廊下は、扉の向こう側は和気あいあいとした空気に包まれているものだと思っている様子だった。彼らの頭はお花畑ではなかるうか――ハワード・メイスン、ダリル・ダツジ、アキラ・タケイは、そう思えて仕方がない。

目の前に広がる光景は、普通の人間が考えるお花畑とはベクトルが違った。お花畑という字面は正解であるが、「向う側に三途の川が見える、眺めのいいお花畑」である。ヘタをしたら「花畑で戯れていた

ら、夢中になりすぎて川遊びになり、向う岸に渡ってしまったて戻ってこれなくなりそう」だった。

男3人の前に広がるお花畑——もとい、半透明なタツパーにぎつしり詰め込まれていたのは、彩のある見た目のものばかりだ。

1つ目のタツパーには、薄紅色のご飯がみっちり詰め込まれていた。日本料理で、主におめでたい日に食べる『赤飯』という料理がある。米を炊く際に食紅を入れ、赤く色を付けるのだ。あとは好みに合わせ、栗や小豆を入れて、ごま塩等で味付けをする。食紅は色を付けるだけであつて、食紅自体は無味無臭だ。しかし奇妙なことに、この赤飯からは甘ったるいシロップの香りが漂っている。いや、ご飯から香る『におい』と考えると、『匂い』という字面よりも『臭い』の方がよく似合っていた。

2つ目のタツパーには、チョコレートでコーティングした何かと、歪な形のオムレツが詰め込まれていた。奴らはアルミホイルの敷居で、互いの居場所を住み分けしている。前者はよくよく見ると、見覚えのある形をした葉っぱだった。辛うじて、上半分が緑の面積が多く、下へ行くと白い芯になる野菜——白菜の面影が見えた。後者は生焼けの魚とマーメイドジャムが混ぜったような、奇妙な悪臭が漂ってきている。いや、実際に混ぜていた。

3つめのタツパーには、パスタが入っていた。どぎついオリーブオイルの臭い。使用された油の量を物語るかのように、パスタの麺がテクテクと光を反射していた。ミートソースやトマトソースは使われていない、盛り付けた具材と和えただけのシンプルなものだ。具材として入っていたのは、赤い果肉に黒い種が点々と混在しているもの、薄緑の皮がついたまま輪切りにされたもの、鮮やかなオレンジ色のもの——順番に、でんすけすいか、グリーンレモン、夕張メロンが惜しみなく盛り付けられていた。

蛇足であるが。

でんすけすいかは北海道で生産・出荷される、スイカの『世界最高級ブランド』の品種である。夜闇を思わせるような暗緑色の皮には縞模様がない。品種的に空洞化や肥大化が発生しやすいため、生産には

高い技術力が必要となるそうだと。初競りで65万以上の金額を叩き出したものもあったという。

夕張メロンもまた、北海道で生産・出荷される、メロンの品種である。メロンの出来栄えが4段階で評価され、最高級評価のものは「糖度13%以上、重量1.5〜1.8kg、網目が90%以上完全なものである」等の厳格な基準を乗り越えたものだけが与えられるのだ。厳しさに見合う程のおいしさが保証されている。

いずれも、沖縄基地に駐屯していた日系人——アキラ・タケイの親戚が、面々の快気願いに持つてきた高級品たちであった。こんなパスタの食材として使う／使われてしまうなんて、お見舞いに持つて来てくれた親戚たちに対する、最大の裏切りであろう。

閑話休題。タッパーたちの中身は、苺シロップの甘つたるい臭いが漂う赤飯、チョコレートでコーティングされた白菜、魚特有のにおいと果実と砂糖のほの甘い臭いが鼻を衝く歪なオムレツ、オイルでギトギトになった高級フルーツ和えのパスタの4品だ。

テロ内容は『飯テロ』。

テロリストの名前はジョシユア・エドワーズ。

元・オーバーフラッグス隊最凶の「メシマズ」であった。

「お前、俺たちに何か恨みでもあんのか!？」

ハワードが息を絶え絶えにして叫び、

「おかあさあああん！ おかあさあああああん!! 助けて、ごはんがまずいよオオオオオ!!」

アキラが幼児退行して泣きわめき、

「ま、待ってる……今、ナースコールを……!!」

ダリルがのたうち回りながらも必死になってナースコールへ手を

伸ばす。

「な、なんだよ！　せつかく作ってきたのに……ッ！」

そんな阿鼻叫喚図を目の当たりにした戦犯——ジョシユア・エドワーズは、ムツとしたように眉間に皺を寄せた。心なしか、海を思わせるような青い瞳が涙で滲んでいるように見える。

しかし、3人にとっては自分の生死が賭かった重要な案件であり、切羽詰っている状態であった。生き残るためならなんだってやってみせるといふ心持だった。生存本能に従っただけであった。

だから、彼らが「生き残ろうとして差し入れの入った入れ物をひっくり返す」のは仕方がなかったことである。「ご飯は無駄にしてはいけない」と仰る彼らの副隊長の座右の銘を破ったのは、やむを得ぬ理由があったためだ。

4人は常に戦っている。宇宙で戦う隊長——グラハム・エーカーと副隊長——クーゴ・ハガネが最終決戦を行っているのと同じように。

片や、『仲間たちを気遣うが故に、様々な料理を試す側』。

片や、『自分たちが生き残るために、テコでも相手の料理を口に入れてまいとする側』に分かれて、だ。

「畜生！　どうしてお前のような奴が、俺たちの中で一番最初に日常生活へ復帰するんだ!？」

「神様は俺たちのことが嫌いなんだろう!?　そうなんだろう!?　でなきゃこんなメシマズを、一番最初に野に放とうなんて思わないだろうが!？」

この世の理不尽を噛みしめるようにして、ダリルとハワードが咽び泣く。彼らの言葉にジョシユアが愕然とした表情を浮かべていることなど誰も知らないし、知るつもりもなさそうであった。

注記するが、ジョシユア・エドワーズは「この面々の中で一番回復が早い」だけであって、現在も通院中。軍人として復帰するためのリ

ハビリや特訓に勤しんでいる真つ最中であつた。
その傍ら飯テロを行つているのだ。有難迷惑にも程があるろう。

「うわああああん！ メロン雑炊も、パイngo飯もいやだよオオオオ！
！ こんなの虐待だよおおおお！」

親戚からの差し入れを魔改造された恨み節と、その際に味わつた地獄がフラッシュバックしたのだろう。アキラが頭を抱えて叫んでいた。

文字通り、「なんてことをしてくれたのでしょうか」である。普通に味わつた方がおいしいとはこれいかに。

「ふくたいちよおおおう！ ふくたいちよおおおう！！ はやく、はやくかえつてきてええええええええええええ！！」

アキラがわんわん泣き喚く。

「副隊長^{クレーゴ}が作ったおいしいご飯が食べたい」。

それは、この場にいる全員の叫びであつた。



「ッ、危ね……！」

降り注ぐ弾幕をストレスで回避し、クooゴはUnicornから距離を取つた。だが、Unicornはクooゴが回避行動に移ると読んでいたようで、即座に距離を詰めてビームトンファアを振りかぶつてきた。

『これじゃあフラッグが躲せない……!』

Unicornから悲痛な叫び声が『聞こえた』。クーゴは即座に操縦桿を動かし、ガーベラストレートとタイガー・ピアスで受け止める。派手な火花が飛び散った。

ビームトンファアと実体剣が鏝迫り合いを演じ、互いの刃を切り払うようにして距離を取った。間髪入れず、もう1機のGNフラッグ——グラハムの機体だ——が射撃で援護に入る。

降り注ぐ攻撃を、Unicornは強引に回避した。機体に搭乗しているパイロットの身体的負担を無視し、つんのめるような形でビームの雨を躲していく。子どももの呻き声が出た。

ガンダムはパイロットの悲鳴など聞かず、クーゴのGNフラッグ目がけて突進してくる。グラハムのGNフラッグにも牽制攻撃をしてくることはあるが、クーゴのGNフラッグに対して異常な敵意を抱いているように思えた。

少年の声が『聞こえなければ』——否、少年の抱くイメージを幻視しなければ、その理由を察することはできなかつただろう。彼のイメージに映し出されていたのは、クーゴの双子の姉——刃金蒼海であつた。

彼女が関わっているならば、クーゴのGNフラッグに対して猛攻、及び執着を見せるのは当然だ。蒼海はクーゴを嫌っているし、クーゴには早く死んでほしいとすら思っている。……ということは、少年が搭乗するUnicornを遠隔操作しているのも、蒼海ということになるのではないか。

(そうまでして、俺に死んでほしいのか)

昔から嫌われていたことはわかっていた。何をやってもうまくいくクーゴに対し、どんなにいい結果を示そうとも蔑ろにされた蒼海が憎しみを積み重ねていくのは当然である。

普段のように、言動で憎しみをぶつけられることは慣れていただけ、他人を使って発散させるやり方に直面したのは初めてであった。正直、どうすればいいのかわからない。

思い返せば、家を出て以後の姉が何をしてきたのか、クーゴはよくわかっていなかった。様々な分野に才能を持っていた蒼海は、それ故に、何をやっていてもおかしくなさそうだった。

だが、MSを遠隔操作するプログラムを作るような技術職に就いたという話や報告は聞いたことがない。クーゴの親戚には存在自体がスピーカーと言えるような、お喋りな人もいる。専ら、家族の近況報告はその人経由であった。

噂が大好きで、噂を聞くためにレーザーゾーンぎりぎりまでのことをする親戚でさえ掴めていなかったとすれば、蒼海は相当ガードを固くしていたことが伺えた。我が姉ながら、なんて恐ろしい女だろう。

(あおちゃん……)

脳裏をよぎったのは、小さい頃の姉の呼び名だった。昔はクーゴが蒼海を「あおちゃん」と呼び、蒼海がクーゴを「くーちゃん」と呼び合っていた。それが、「姉さん」と「クーゴ」に変わったのは、いつのことだっただろう。

Unicornは相変わらず、クーゴのGNフラッグに襲い掛かっている。このガンダムに足止めされて、時間は刻々と経過していた。

グラハムだって、本当はここを突破し、刹那との決着をつけたいと思っているだろう。だが、攻撃の余波が降り注ぐため、なかなか突破口が掴めないでいる。

「ちいッー」

再び散弾が降り注ぐ。グラハムが舌打する声があった。間髪入れず、グラハムのGNフラッグが距離を取る。クーゴのGNフラッグは、それと反対方向に飛び退った。

一進一退を何度繰り返したのか。近隣に漂っていたデブリは、攻防を繰り返していくうちに塵と化した。遮るものなど何もない宇宙空間で、鏑迫り合いは続いていた。

『やめて、やめてよお母さん……！』

少年の悲鳴が『聞こえる』。その叫びを踏みにじるように、Unicornはビームガトリングを連射した。弾幕を張るように降り注ぐ散弾を回避し、クーゴとグラハムのGNフラッグはUnicornと向き合う。

もし、Unicornが無人機だったら、自分たちは容赦なく彼を撃墜しただろう。搭乗者がいたとして、パイロットが少年であることは躊躇う理由にはならない。パイロットは遠隔操作された機体に乗せられているだけで戦意がない場合は別だ。

できることなら、少年を助けたい。彼もまた、姉の被害者だ。クーゴと同じ痛みを抱えた者なのだ。何とか救出するタイミングを探しているが、相手が相手だ。Unicornの連続攻撃が降り注ぎ、GNフラッグたちは散開するように飛んで躲す。

そのとき、クーゴの視界の端に何かが映った。毒々しいまでも金色の光が、宇宙の闇に煌めく。

男の笑い声が響き、金色のMAが紫煙を上げていた光景が『視えた』。国連軍の総大将が駆る機体で、名前はアルヴァトールといったか。だが、動かなくなつたアルヴァトールを乗り捨てるような形で、中に入っていたMSが降り立った。

数世代にも及ぶ野望に向き合っていたのは、イナクトのお披露目会で降り立った、白と青基調のガンダムだ。パイロットは勿論、刹那・F・セイエイその人である。その佇まいはどこまでも凜としていて、不退転の意志を宿していた。2機は鏑迫り合いを演じはじめる。

『新しい世界に、キミの居場所はない！ ——塵芥と成り果てる、エクシア!!』

男の声と共に、金色のMSが背中の翼を砲門にして、巨大なビーム砲を撃ち放った！

毒々しい金色の光は、白と青基調のガンダム——エクシアに襲い掛かる！

「刹那……ッ!!」

通信越しから、震えるような声が漏れた。歯噛みしたグラハムの横顔が『見える』。どこか焦りの色をちらつかせる彼は、先程の光景を『視た』に違いない。我慢弱い男からしてみれば、この場に足止めされていられるような状態ではないだろう。

ああもう、しようがない。本当にしようがない、と、クーゴはひっそり苦笑した。

我慢弱い男をここまで付き合わせてしまったのだ。先に進ませてやらないと。

「グラハム。Unicornは俺が引き受けるから、お前は早く刹那のところへ行け」

「!? 何を言っているんだキミは!?」

いきなりの発言に、グラハムは大きく目を見開いた。UnicornとGNフラッグの機体性能差は火を見るよりも明らかだし、何より、Unicornを遠隔操作する相手はクーゴの天敵である。クーゴは苦笑した。

自分が無茶をやるときは思いっきりやるのに、他人の無茶には反応するのか。それなら、いつもグラハムのフォローに奮闘していたクーゴの気持ちを、ようやく彼は理解したということだろう。

なんて滑稽な光景だ。立場が変わると、気持ちも大きく変わるものらしい。わざとらしく笑い、クーゴは茶化すようにして言葉を紡ぐ。

「早くしないと、ぱつと出てきた男に、刹那とガンダム^{愛しの姫君}を搔つ攫われるぞ。我慢弱いお前が、耐えられるわけないだろうが」

もつとも、刹那も、ぱつと出てきた男に倒される程ヤワではないが。グラハムのGNフラッグは躊躇うようにこちらを見ていたが、Unicornへ——正確には、Unicornの奥へ視線を向けた。彼の目には、刹那とエクシアの姿が『視えて』いるに違いない。クーゴは微笑み、Unicornへ向き直った。

「突破口は、俺が切り開く。……いつもと逆だが、大丈夫か？」
「問題ない。いつもキミのフォローを間近で見ってきたからな！」
「自信たっぷりと言われても困るのは何故だろう」

軽口をたたき合った後、GNフラッグはお互いの顔を見合わせて頷き合う。そのタイミングを待っていたとでも言わんばかりに、UnicornがクーゴのGNフラッグ目がけてビームガトリングを撃ち放つ。攻撃の雨あられを縫うように、2機のGNフラッグは飛び回った。

但し、クーゴとグラハムの飛び回る方向は真逆である。Unicornはほんの一瞬、迷うように動きを止めた。そこ目がけて、2機のGNフラッグはライフルを撃ち返した。グラハムのGNフラッグが牽制を、クーゴのGNフラッグがUnicornの武装に狙いを定める。

Unicornが回避行動を行ったのとはほぼ同じタイミングで、クーゴは武器を持ちかえた。ガーベラストレットの長さを、一気に50mへ伸ばして切りかかる！ 不意打ち同然であったのだが、Unicornは寸でのところで回避に成功する。しかし代償として、右脚が切断された。

攻撃を喰らったのが予想外だったのだろう。途端に、Unicornに怒りと憎しみの色が『視えた』。今度はガトリングガンではなく、スナイパーライフルを構える。赤い粒子が充填され、クーゴのGNフ

ラッグ目がけて降り注いだ！

「おおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

クーゴはガーベラストレートを振りかぶる。勢いそのまま、一太刀叩きこんだ！

放たれた一撃ごと、Unicornの持つスナイパーライフルの半分が真つ二つになる。

搭乗していたパイロットが息を飲む音が『聞こえる』。Unicornの動きが止まった。

「今だ、行け！」

「感謝する！——死ぬなよ！」

クーゴの言葉に従って、グラハムのGNフラッグは急加速した。赤い光と共に、GNフラッグの機体が宇宙の闇へと消えていく。その背中を見送った後、クーゴはUnicornへ向き直った。

UnicornはグラハムのGNフラッグになど見向きもしない。憎い、と、蒼海の声が『聞こえた』ような気がした。使えなくなつたスナイパーライフルを投げ捨て、再びバズーカを連射する。

降り注ぐ散弾の雨あられをガーベラストレートで薙ぎ払う。Unicornはしばらくバズーカを撃ち放っていたが、弾が切れた様子だった。蒼海が舌打する音が『聞こえた』後、ビームトンファアを振りかざして突っ込んできた。

攻撃を回避しようとした刹那、ぞつとするような寒気を感じた。Unicornの機体が赤く発光し、間接部分の光がさらに強くなつたように思う。

ひ、と、少年が引きつったような声を上げた。コックピット内部でDANGERマークがけたたましく輝いているのが『視え』て、クーゴは息を飲む。

高速戦闘。Unicornに元々搭載されていたシステムと、疑似

太陽炉に搭載したシステムを組み合わせることで、数倍以上の機体性能を引き出そうとしているのだ。

だが、高速戦闘のシステムを2つ取り入れるためには、機体の強度を強化するだけでなく、パイロットへの負荷を軽くするようなシステムや構造を取り入れなければならない。

にもかかわらず、コックピット内でDANGERマークがけたたましく鳴り響いているということは——搭乗者にも、命の危険があるということだ。少年が愕然としている様子が『視えた』。

『お母さんは、僕を殺すつもりなの……？』

絶望と悲哀に満ちた黒い瞳は、虚空を見ていた。少年の視線の先に、蒼海がいるのだろうか。

『僕は、いらぬ子どもだから？』

か細い声が『聞こえる』。ああ、と、少年は納得したように、寂しそうな笑みを浮かべた。諦めの影がちらつく。

『僕は、出来損ないだから、いらぬんだ——』

次の瞬間、少年の声が途切れ、Unicornが視界から『消えた』。レーダーに映し出された機影がでたらめな動きを披露する。前を向いたら、UnicornがGNフラッグの目と鼻の先に来ている。反射的に操縦桿を動かす。

何が起きたのかわからなかった。肩に一太刀浴びせられ、追撃とばかりにUnicornが二刀流のビームトンファアを振り上げる。間一髪、ガーベラストレートで受け止めた。鏝迫り合いをする間もなく、GNフラッグが弾き飛ばされてしまう。

クーゴは思わず呻いた。赤い残像がGNフラッグを廻り者にせんと襲い掛かってきた！

反撃はおろか、回避も防御も間に合わない。自分に待ち受ける運命は——死だ。

どんなにそれを否定しても、逃れようのない現実が迫る。すべてがスローモーシヨンのように思えた。

少年の声は、ない。戦いたくないという叫び声がふつりと途切れる。命の灯火が、吹き消されそうになっているのだ。クーゴも、少年も。

このまま消されてしまう運命を、受け入れる？ ——冗談ではない。クーゴも少年も、蒼海の玩具ではないのだ。気に入らないから処分されるなんて、真つ平ごめん被る。

不意に、Unicornのコックピット内部が『視えた』。機体のGに耐えきれず、気を失った少年の顔は苦悶に歪んでいる。どうにもならない運命に対する諦めと絶望に打ちひしがれていた。

まだ10にも満たない子どもが浮かべるような顔ではない。そんな彼を見返す蒼海の眼差しは、どこまでも冷たかった。

「ふざけるな」

Unicornが接近してくる。クーゴは操縦桿を握り締めた。

「ふざけるなよ」

Unicornがビームトンファアを振りかざしながら接近する。クーゴは前を向いた。

「それが、母親の——人間のすることかあああッ!!」

Unicornのビームトンファアが眼前に迫る。クーゴは、勢いよく操縦桿を動かした。

クーゴの感情に呼応するように、青い光が派手に輝いた。



アレハンドロ・コーナーの野望——アルヴァトーレを滅多刺しにしたのは、刹那・F・セイエイ——ガンダムエクシアの実体剣であった。モニター画面に真一文字の裂傷が走る。アルヴァトーレのパイロットは満身創痍でいた。

黄金のパイロットスーツは血で汚れ、口の端からも血を流している。胸部に破片が突き刺さったためだ。

痛みに呻く男へ通信が入った。映し出されたのは、ペールグリーンの髪と紫の瞳を持つ少年——リボンズ・アルマークである。

「リボンズ……」

アレハンドロは弱々しく彼の名を呼んだ。天使に縋りつくような声に対し、リボンズは能面のように静かな表情を浮かべて奴を見返している。

「アレハンドロ・コーナー、貴方はいい道化でしたよ」

「何……!?!」

唐突に告げられた言葉の意味が理解できず、アレハンドロは問い返した。リボンズは相変わらず静かな顔をしたまま、淡々と語り続ける。

「自分が最初から踊らされていたことに気づいていない。自分が世界を動かしているのだと信じて疑わない。……そんなんだから、貴方は『イオリア・シュヘンベルクとその仲間』が『未来のために』打って

おいた布石に敗北したんだ」

「……貴様、まさか、最初からこのつもりで……！」

リボنزの物言いから、アレハンドロは大体を察したのだろう。

自分の前に降り立ったのは天使ではなく、自分を野心を肅清するために送り込まれた死神だったのだと。

「よくも……よくも、コーナー家の悲願を……ッ!!」

「たかだか200年弱の話だろう？ 僕も人のことは言えないけどさ、そんな物言いだから『器量が小さい』って言われるんだよ。王^ワ留美^{リユウミン}やアオミ・ハガネも、裏で指さしてほくそ笑んでたし。今頃、どこかで『予定調和だ。世界の行く末は私たちのもの』って笑ってるかもよ?。」

「あ、あの女どもめ……！」

リボنزは尾ひれを付けたうえで、さらりと告げ口した。アレハンドロが大きく目を見開き、忌々しそうに歯噛みする。格下だと思っていた共犯者たちに馬鹿にされていたことが相当腹立たしかったと見えた。

女たちへの怒りを湧き上がらせていたアレハンドロがモニターから視線を外す。凶らずとも、それと同じタイミングで、リボنزはモニターから視線を外した。紫苑の眼差しは虚空へ——もう二度と会えない相手へ向けられている。

「……こんなことなら、彼が眠りにつく前に、恥ずかしがらず『お父さん』と呼べばよかったなあ」

彼の言葉に、アレハンドロが血相変えてモニターへ向き直った。驚愕に歪んだ顔が、見る見るうちに真っ青になっていく。

青年^{リボンズ}と仇敵^{イオリア}の間にある、繋がりの意味を知ったためだ。リボنزもまた、イオリアの申し子だった。

しかも、イオリア・シユヘンベルクに一番近い場所において、この瞬間が訪れるのを待っていたのだから。

「あの男の……イオリア・シユヘンベルクの、敵討ちのつもりか……!?!」

「そんなことやったら、『お父さん』が呆れ果てるよ。『そんなどうでもいいことで長い時間かけてどうするんだ。もう少し別なことに時間を使いなさい』って」

「ど……ッ!?!」

忌々しい相手に切って捨てられるほど、アレハンドロ・コーナーという男は価値のない存在でしかなかった——その事実には、アレハンドロが目を剥く。

「それに、世の中には、『貴方を討ち果たす』という宿願ひがんのために長い時間をかけた人がいるからね。……『彼』の方が、貴方を打つに相応しい」

「『彼』……!?!」

「キミがアルヴァアロンおよびアルヴァトーレを設計開発する際の下地は、ライヒヴァイン家から奪い取ったものだろうか？ その家の、最後の生き残りだよ。……アルヴァーシス・ジス・ライヒヴァインの一人息子——テオドア・ユスト・ライヒヴァインさ」

アレハンドロが大きく目を見開いた。現在進行形でコーナー家からもみ消し続けたことを、リボンズが知っていたためである。

それだけではない。彼の発言から、もうすぐ訪れる死刑執行人が「ライヒヴァイン家の生き残り」であることを悟ったためだ。

「バカな……今生きていれば、そいつは80歳近くの老人だ!」

「僕の『同胞』だからね。人間とは違って、かなり若作りな見た目をしているよ。……気づかなかったのかい？ 彼ならずと、貴方の傍に

いたじやないか」

追い打ちとばかりに、リボンスは付け加えた。死刑執行人は、アレハンドロの身近にずっとひそみ、その瞬間を待ち続けていたということ。

「今は、『ノブレス・アム』という名前を名乗っているよ。ちょっと前までは『テオ・マイヤー』だったかな」

すつとぼけたような口調で笑うリボンスの様子に、アレハンドロはぞつとしたような表情を浮かべた。自分がこき使っていた男が死刑執行人だと知ったのだから、恐怖も強くなるだろう。

そのタイミングを待っていたかのように、死に絶えたはずのアルヴァトローレの機材関係が再起動した。敵影が表示される。カメラに映し出されたのは、白と青基調のガンダムだ。先祖が強奪してきた資料を読み漁っていたアレハンドロには見覚えがあるう。

モニターに映し出されたのは、目が覚めるようなプラチナブロンドに琥珀色のアーモンドアイの青年だった。普段のような営業スマイルではなく、ゾツとする程冷たい眼差しをアレハンドロに向けている。明らかな敵意と殺意を持って、だ。

「僕はね、ずっと楽しみにしていたんですよ。貴方を堂々と叩き潰せる、この瞬間を！」

ノブレスは表情を変えずにそう告げた。

「はじめましてこんにちわ。……そして、永遠にさようなら」

すべては、この瞬間のために。

アレハンドロの顔が醜悪に歪む。

怒りか、恐怖か、悲しみかはわからないが。

「き……」

モニターに映るガンダムが、ビームガンを構えた。そちらには目もくれず、アレハンドロはリボンズとノブレスを画面越しから睨みつける。

「貴様らアアアアアツ!!」

アレハンドロがモニターを殴ったのと、ガンダムが引き金を引いたのと、その端を青い光が横ぎったのは、ほぼ同時だった。

奴の視界は、真つ白な光に覆いつくされる。そして――

――男は意味が分からないと言いたげに、こちらを見上げていた。上も下も右も左もない、真つ白な世界。そこに佇むのは、金ぴかのパイロットスーツを着たアレハンドロと、黒髪をお団子に束ねた女性だけだ。

女性が恐ろしい笑みを浮かべていることに気づいたアレハンドロは、頭の上に大量の疑問符を浮かべる。問いたいことが沢山ありすぎて、どうすればいいのか分からない様子だった。

でも、教える必要なんてないし、教えなければいけないこともない。女性は笑みを崩さぬまま、アレハンドロの胸倉を引っ掴んだ。潰れた蛙のような悲鳴が耳をかすめたけれど、どうでもいい。

「お、お前は誰だ!？」

「――誰かって?」

咽ながら問いかけてきたアレハンドロに対し、女性はニタリと笑みを深くする。

「イオリア・シユヘンベルクの計画を乗っ取るために、様々な調査をしてきたんでしよう？　なら、私のことも、当然調べてるはずよ」

「この顔に見覚えは？」——問いながら、女性はずっと顔を近づけた。アレハンドロが女性の顔を凝視する。間近で見つめたことと思いついたことがあったようで、アレハンドロの顔がみるみる真っ青になっていく。

イオリア・シユヘンベルクを調べると、必ず「イオリアの妻」に行き当たる。そこまでは当然のことだった。だが、その人物と瓜二つの女性が目の前にいて、「私は200年前に存在していた男の妻です」なんて仄めかしたら、どうだろう。

「そんなバカな！　『イオリアの妻』がゴールドスリープで眠りについた記録も、目覚めた記録も存在していない!!」

「そうだね。私は眠っていないよ。現在進行形で、200年間生き続けてきた」

「あり得ない……！　人間の寿命は精々100年が限度だ。しかも、老衰もしていないなんて……!」

「正直に言うと、私の年齢は200歳なんて軽く超えてる。リボンズの言う『同胞』は、アンタが思っているものとは別のものを指してるけどね」

「何……!?!」

「はい、このお話はここでおしまい」

女性は強制的に話をぶった切り、胸倉から手を離す。ぱんぱんと手を叩いた女性に、アレハンドロは畏怖の感情を向けてきた。

何か質問しようとしていたその口を封じ込めるように、再び顔を近づける。鳶色の瞳は恐怖に打ち震えていた。

「どのみち、アンタは死ぬから。つーか、今、意識が『死ぬ』直前？」

あっけらかんとした女性の言葉に、アレハンドロは目を剥いた。

「まあ、そのまま気持ちよく死んでもらうのは、夫を殺された妻からしてみりや『腹立たしいことこの上ない』もの。アンタを打つのはノブレスに任せてるからね。……夫は『こんな無駄なことに時間を費やすな』って怒るかもだけど、私だってヒトの子だし？」

あはは、と、女性は笑った。記憶の中で呆れた夫に対して謝罪するかのような、申し訳なさを含ませて。

イオリアが肩をすくめたのを確認し、女性は一瞬、表情を完全に消し去る。——そうして、笑った。

怒りを、憎しみを、殺意を、それらすべてをごちやませにしたような、歪んだ笑みを浮かべてみせる。

アレハンドロの顔は恐怖におののいていた。自分に待っている運命を、なんとなく察したためだろう。

長らく使っていなかった牙であるが、自分でも驚くほど研ぎ澄まされていようだった。

「うん、だからさ」

そして、女性は終わりを告げる。

「——楽に死ぬると思うなよ」



「……終わった」

ノブレス・アム——本名、テオドア・ユスト・ライヒヴァインは深々と息を吐いた。

爆散するアルヴァトーレを確認し、ヒーリングガンダムの踵を返す。使命と復讐を成し遂げた今、充実感よりも区切りがついたという気持ちの方が大きかった。同時に、「これから」という単語が、より重く、ノブレス／テオドアにのしかかってくる。でも、それは苦ではない。新たな始まりの一步となる。

『テオ・マイヤー』は残りの新曲を発表して引退し、表舞台から完全に消える段取りとなっている。『ノブレス・アム』は、もしかしたらまた使うことがありそうなので保留にしておくつもりだ。『テオドア・ユスト・ライヒヴァイン』は死んだ人間なので、表に出すとなると苦労しそうだった。

そんな夢を描いていたとき、レーダーが何かを捕らえた。

何とも言えない寒気を感じ、ノブレス／テオドアが顔を上げる。

刹那、宇宙の闇を焼き尽くさんばかりの勢いで、白い光が迫ってきた！

「ッ——!?!」

慌てて操縦桿を動かす。ヴァーチェのGNバズーカを連想させるような砲撃をスレスレで回避し、ノブレスは攻撃してきた相手を見上げる。

毒々しい紫が目痛い機体だった。MSというより、MAと呼んだ方がいいデザイン。楕円形だったアルヴァアロンとは違い、翼を広げた鳥のような外観だ。

『お前はいらない』

女の声がある。明確な殺意を抱いたその声には、聞き覚えがあった。アレハンドロや留美リユミンと共にいた女——アオミ・ハガネ。

『私の世界に、お前はいらない』

宇宙の闇に、紫色の光がぎよろりと浮かぶ。まるで、複数の目を持つ化け物のようだ。強い殺意を持って、あの機体のパイロットはH i—レガンダム、あるいはノブレス／テオドアを狙っているのだ。

今の自分では、あのMAを迎え撃つことは不可能だ。機体性能差云々の理屈ではなく、『ミュウ』の持つ能力が直感的に告げている。ノブレス／テオドアは操縦桿を動かそうとし——次の瞬間、大量の光が降り注いだ！

クーゴ・ハガネの災難は続く。

52. 想いの行方

青が爆ぜる。命の輝きにも似た光を纏い、クーゴが乗ったGNフラッグは宇宙を切り裂くように飛び回る。

赤い光を纏ったUnicornを翻弄するほどの速さで、青い光は不規則な機動を描いた。否、完全に、凌駕したと言っても過言ではない。

「おおおおおッ!!」

GNフラッグは躊躇うことなくガーベラストレートとタイガー・ピアスを振るう。バズーカが真つ二つにされ、頭部のバルカンを突き壊され、ビームトンファアは持っていた腕ごと斬り飛ばされ——武装をすべて無力化させられたUnicornが沈黙する。

今、自分／GNフラッグに何が起こったのか、クーゴにはよくわからない。しかし、今なら——Unicornを止めることができることを確信していた。

不意に、Unicornの機体に紫電が爆ぜる。機体が爆発する前兆だ。このままだと、搭乗している少年の命が危ない。クーゴは反射的に手を伸ばした。

少年の瞳が薄らと開き、クーゴに視線を向けてくる。弱々しい手がこちらに伸ばされた。少年の手を掴み、思い切り引っ張る！

『システム、全停止』

機械の合成音声が響く。同時に、どこかで何かが切れる音がした。

Unicornは白い煙を吹きあげながら宇宙を漂う。

クーゴのGNフラッグはそれを引っ張り上げた。

「Unicornのパイロット、聞こえるか？」

通信を開き、パイロットに呼びかける。少年は小さく呻いて瞳を開けた。黒い瞳はぼんやりとクーゴを見返していた。

「……誰？」

弱々しい声だが、まともに話せるようなので大丈夫らしい。クーゴはほっと息をついた。

「国連軍所属の、クーゴ・ハガネだ」

「ハガネ……？ お母さんと、同じ……」

少年の言葉に、思わずクーゴは眉をひそめた。やはり、というべきか。

不意に、モニターに映し出された少年が安堵した笑みを浮かべる。

「よかった。僕、殺さなくて済んだんだ」

齢10歳未満の子どもが浮かべるには、あまりにも不釣り合いな微笑だった。沢山の絶望や悲しみの中から、やっと光を見つけ出したような儂い微笑み。

姉は——蒼海は、自分の子どもなんて顔をさせるのだろう。姉への怒りを燃やすクーゴの心情を察知したのか、少年は「違います」と声を張り上げる。

「お母さんは悪くない。殺したくないってわがままを言った僕が悪いんだ。出来損ないの僕が悪いんだ」

「そんなことはない！」

だから、要らない子だと言われても仕方がない——その先の言葉を聞きたくなくて、クーゴは声を張り上げた。少年は驚いたように目を見開き、言葉を止める。

少年の考えが間違っているとは思わない。人を殺したくないと願うのは、人間として当然のことだ。人殺し軍を生業とする人間が何を、と言われるかもしれないが、クーゴはそう思っている。殺さずに済むなら、そうするに越したことはないのだ。それが叶わないから、クーゴのような軍人は銃の引き金に手をかける。

自分の意志を貫くというのは、簡単なようで非常に難しい。誰かを殺したくないという願いは、一歩間違えれば「自分が殺される」可能性の裏返しにもなりかねない。そうなったとき、自分が助かり相手を殺すかその逆かを迫られる。どちらか片方を、選ばなくてはならないときがあるのだ。大人でさえ、自分か他人かで悩むというのに。

子どもが考えるには、あまりにも重すぎる。成長するにつれて少しずつ学んでいくであろう命題を、答えを出すにしても長い時間がかかる命題を、迷い悩む時間も与えずに「即決しろ」と蒼海は言うのだ。本人の意思に関係なく、そうしなければならぬ環境に放り込むことも、クーゴには納得できないことであった。

「キミのそれは、わがままなんかじゃない。人として当然の想いだ。……それを蔑ろにする、あの人がおかしいんだ」

人として当然、という言葉に、少年は目を見開く。

自分は間違っていないのか、と、彼は問いかけているようだった。

クーゴは微笑み、頷く。

「キミは何も、間違っていない。キミは自分の考えを持って、それを貫こうと頑張っていた」

ユニオン基地を強襲したときも、彼の乗っていたガンダムだけは、フラッグに対して襲いかかろうとはしなかった。威嚇射撃と攻撃の回避を集中して行っていた。そして、結果的にだが、ハウードの生還に協力してくれたのだ。

少年は、沢山悩んできたのだと思う。蒼海や他のガンダムパイロット

トたちから否定され、馬鹿にされ、それでも必死になって自分の意志を貫こうとしていた。人を殺したくないという想いを貫きつつ、蒼海に認めてもらいたいと願っていた。

まるで誰かの——嘗てのクーゴや蒼海の焼き直しだ。クーゴは蒼海のことを認めてもらいたいと願っていたし、蒼海も自分のことを認めてほしいと頑張っていた。認めてもらえないことの悔しさや悲しみは、誰よりも自分たちが知っていたことだったのに。

「だから、キミは出来損ないなんかじゃない。要らない子なんかじゃない。優しくして、立派な人間だよ」

「僕……僕は……」

「偉いよ。よく頑張った。……だから、もういい。殺さなくていいんだよ」

モニター越しに浮かんだ少年の顔が、くしやりと歪む。黒の瞳から、ぼろぼろと涙が零れ落ちた。

沢山、否定されてきたのだろう。誰一人として、少年の考えを肯定しなかった。だから、彼は自己否定的だったのかもしれない。ついでに言うなら、少年の言動は、虐待を受けた子どものそれであった。

どんなに理不尽なことがあるとも、「間違っているのは自分。自分がダメな子だから」と無理矢理納得させて、虐待している親を庇う——そんな話を連想させるようだった。酷く、胸が痛む。

自分の子どもに、自分が味わった苦しみを課す——そんなの、おかしい。因果は自身の代で断ち切るべきではないのか。

言いたいことは数あれど、それを少年にぶつけるのは筋違いと言うものだ。蒼海の後ろ姿が脳裏にちらつく。

この戦いは、絶対に生きて帰らなくては。モニターに映る少年を『撫で』ながら、クーゴはひそかに決意を固める。

「救難信号は使えるか？」

「予備のエネルギーを使えば、多分……」

「よし。じゃあ、キミは助けを求めらんだ。いいね？」

クーゴの言葉に、少年は不安げに目を伏せた。どうしたのかと問う間もなく、彼はすぐに顔を上げて頷いた。

予備電源が動いたようで、機体のカメラアイが淡く輝く。それを確認し、クーゴはUnicornの傍を離れた。

救難信号さえ送れば、国連軍の救助隊がこの宇宙域にやって来るだろう。そうすれば、この少年は助け出されるはずだ。クーゴは操縦桿を動かし、先を急ぐ。

先の戦闘のせい、GNフラッグは損傷していた。肩の装甲は剥がれ、各関節部からは小さく火花が飛び散っている。これから戦いが待っているというのに、機体の状態は万全とは言い難い。

機体はボロボロで、しかも完全に遅刻である。イデアが怒っている。うだ、なんてバカなことを考えたけれど、彼女なら笑って許してくれそうな気がしなくもない。クーゴはひっそり苦笑しながら、宇宙を突き進んだ。

グラハムのように「ここに行けば運命が(以下略)」ではないけれど、どこへ行けばいいのかは薄らとわかる気がする。イデアとの決着、あるいはグラハムと刹那の行く末を見届けるには、このまま突き進めばいい、と。

(まっすぐ、まっすぐ。ただひたすらに)

思い描く明日へ向かって、クーゴは操縦桿を動かした。



「見つけた……！」

グラハムは目を輝かせ、操縦桿を動かした。モニターの向う側には、デブリの散乱する宇宙域に白と青基調のガンダムが佇んでいる。先程、彼女とガンダムを追いつめていた金色のMAおよびMSの姿はない。散乱するデブリからして、刹那は金色のMA/MSを退けたようだった。

焦げ付くようなじれつたさは鳴りを潜め、次に湧き上がったのは高揚感だ。待ち焦がれていた瞬間が、刻一刻と近づいてきている。グラハムはGNフラッグの動きを止めた。それに気づいたかのように、ガンダムが振り返る。

グラハムの脳裏によぎったのは、刹那と相対峙したときの光景だった。夕焼けに染まった空と海で、グラハムと刹那は互いの素性を知らぬまま、戦いを繰り広げた。あのときはクーゴとイデアもいたが、今は2人も不在である。

いつもは傍にいるはずのパートナーもいなければ、自分たちに横やりを入れるような無粋な奴らも存在しない。ここには、グラハムと刹那だけだ。

白と青基調のガンダムは、どこも損なわれていないようだった。先程『視えた』光景では、金色のMSによって倒される寸前の光景だったので不安だったが、グラハムの杞憂だったらしい。GNフラッグも、先程U n i c o r nと一戦交えてきたけれど損傷箇所はない。

万全の状態とは言い難いものかもしれないが、自分たちの決着をつけるには何も問題なさそうだ。刹那の駆るガンダムと、グラハムの駆るGNフラッグが対峙する。あの光景の続きを望んでいたグラハムにとっては、感慨深い光景^{もの}であった。

「こうして相対峙するのは、久しぶりだな。少女」

「……そうだな」

グラハムは微笑んだ。緊張した面持ちで頷く刹那の姿がはつきりと『見える』。刹那の声が、ほんの少し震えていたような気がしたのは気のせいだろうか。

その予感の間違っていなかったようで、刹那はどこか険しい眼差しでグラハムとGNフラッグを見据える。目を逸らさなかったのは、彼女の矜持だったのかもしれない。

「いつか、この瞬間が来ると思っていた」

「私もだよ」

対して、グラハムは笑みを崩さなかった。場違いかもしれないけれど、自分を見返す刹那に対して、愛おしさすら感じていた。

「刹那」

グラハムの呼びかけに、刹那は呆けた顔でこちらを『視』返した。そんな些細な様子にさえ、心が満たされる。

どうやら自分は、相当の末期状態らしい。そのことを、むしろ、グラハムは誇りに思っていた。口には出さないが。

「キミが後悔するようなことや苦しむようなこと、悲しむようなことは、何もないよ。あのときの言葉に、一言などないのだからな」

刹那が大きく目を見開いた。グラハムの言葉が何を指しているのか、即座に理解したらしい。ほんの少しだけ、表情が柔らかくなったような気がした。

それに、と、グラハムは言葉を続ける。脳裏に浮かんだのは、親友であり副官であるクーゴの発言だった。彼は、アイデアと再び会うことを諦めていない。

クーゴはアイデアと再会し、「彼女の話の続きを聞く」という明日を手に入れるために戦っている。それに、グラハムもまた影響を受けたの

だ。

もう一度、刹那と笑いあいたい。今までと変わらず、顔を合わせて笑いあう日々を——互いを思いあう日々を、望んでいる。そんな未来を勝ち取るために、グラハム・エーカーはここにいる。

自分たちの間に横たわる運命だとか、宿命だとかを超えて、決着を望んでいるのだ。今まで歩いてきた道程に、これから歩んでいきたい道に、自分たちの望む未来の形を手にするために——自分たちが慈しんできた、この想いに。

「私がここに来たのは、明日を手にするためだ」

「明日?」

グラハムの言葉に、刹那がこてんと首を傾げた。グラハムは厳かに頷く。

「いつかの夢の先を、キミと共に。その続きを手にしたいたい」

「それが、お前の望む明日か?」

「ああ」

彼女にとっては、想像もしていなかったことらしい。グラハムが何を思い、この決戦場に赴いたのかを。

決着をつける、というところは予想できたのかもしれないが。

「私にとってキミは、運命の相手だった。そして、これからも運命の相手であり続ける」

「グラハム……」

「……キミにとっての私も、そうであってくれたなら、嬉しい」

胸を張って、グラハムは微笑む。刹那がくしゃりと表情を歪ませた姿が『視えた』。幾何かの沈黙の後、絞り出すようにして、刹那が言葉を紡ぐ。

「……俺にとっても、あんたは……運命だった」

過去形。何かを諦めたかのような響き。

グラハムは思わず、声を荒げそうになった。

「刹那」

ソレスタルビーイング

「滅びゆく定めである俺たちに、これからなどというものはない。だからこそ、最後まで抗い、戦い続けることを選んだ」

悲痛な響きを宿しながらも、刹那の意志は揺らがない。彼女の声が、言葉が、グラハムの心を抉る。

「でも、不思議だ。……あんたが言うと、希望が見える」

「！」

「俺のような人間でも、あんたの言う『明日』を手にすることができないのではないか、と」

根拠も何もないのに、と、刹那は呟いた。何かを堪えるかのように、彼女は俯いてしまう。

まるでいつかの焼き直しだ。グラハムに刹那がソレスタルビーイングの人間であることを告げたときと、同じ。

グラハムは何か言葉を発しようとしたが、喉につかえてしまった。弱々しい吐息がか細く漏れただけで、音を紡げない。

情けない、とグラハムは歯噛みする。なんてもどかしいのだろう。グラハムの言う『明日』は手に入ると領きたかったが、刹那は現実をしっかりと理解している。その可能性が低いことを、彼女はグラハム以上に熟知しているのだ。

だから、薄っぺらい希望に縋るような真似はしない。淡々と、事実を受け止める。——たとえば、事実がどれ程残酷で、残忍で、惨たらしいものであるうとも。

良くも悪くも、刹那は夢と現実を見据えている。戦争根絶なんて夢物語を描きながらも、現実が非常に無情なものであることを誰よりも理解していたし、それを踏まえた言動を崩さない。

素直に夢を見続けるには子どもではいられなかった。同時に、現実を知って荒みきってしまう程、絶望することもできなかった。誰よりも世界を信じていないがゆえに、世界を変えたかった優しい女性^{ひと}。彼女の想いの権化が、あのガンダムなのだから。

こんなにも近くで対峙しているというのに、自分たちの間に横たわる隔たりを感じる。年上だというのに、いい大人だというのに、グラハムは何も言えなかった。この世界に神などいないと言った、彼女の気持ちがよくわかる。

「この世界に、神などいない」

刹那がぽつりと呟いた。丁度、グラハムが連想していた言葉だった。

でも、と、刹那は付け加える。花が咲くような、柔らかな微笑を浮かべて。

「……この世界には、あんたがいた」

真正面から『視た』その微笑に、グラハムは息を飲んだ。刹那は静かに言葉を続ける。

「だから、何も恐れていないし、悲しんでもいない。……大丈夫だ。俺は、あんたの心を信じている」

赤銅の瞳には、蕩けてしまっようなほどの優しい光が揺れていた。未だかつてない表情に、グラハムは茫然と刹那を『視』返す。次の瞬間に湧き上がったのは、やはり、刹那が愛おしいという感情だった。無表情で不愛想。何を考えているか読み取りにくいと人は言うけ

れど、刹那は顔より目で語るタイプである。照れたときは顔や耳に赤みがさすことを知っているのは、彼女と親交のある人間だけであろう。

でも、と、グラハムは思う。こんな風に微笑む彼女を見たのは、自分が初めてなのではなからうか——などと。

刹那が微笑むなんて想像していなかった。しかも、戦いの直前だ。場違いであるということは重々承知している。

にも関わらず、口元が緩むのを抑えられない。気のせいではない。視界も滲んできたような気がする。

けれど、瞬き一つすれば、視界は瞬時にクリアになった。微笑んでいたはずの刹那は、どこまでも真剣な眼差しでグラハムを『視』返している。それに応えるようにして、グラハムも不敵な笑みを浮かべた。

ガンダムとGNフラッグが対峙する。向かい合う自分たちに、言葉なんかいらぬ。不安なんて何一つなかった。自分の胸を占めるのは、好敵手と対峙することに対する喜び。

願わくば、グラハムと向き合う刹那も、同じものを感じてくれたら嬉しいと思う。そうして、同じ明日を思い描いてくれたら——それはなんて、幸せなことなのだろう。

「我々は何も知らずに出会い、わかり合い、すべてを知っても尚、こうあることを選んだ」

グラハムは静かに言葉を紡ぐ。そうして、声を高らかに宣言した。

「だからこそ、私は望んでいる。今この瞬間、キミとの真剣勝負を！」

そうして、積み重ねてきた絆に——抱き続けてきたこの想いに、思い描いた明日を手にするために、決着を。

「……俺もだ。決着をつけよう、グラハム・エーカー」

グラハムの意図は、刹那にきちんと伝わった様子だった。真摯な光を宿した赤銅色の瞳が細められ、真剣な面持ちで刹那が頷く。

同時に、ガンダムが実体剣を、GNフラッグがビームサーベルを構えて飛び出した!!



周囲を見回す。ZEXISは、異形たち^{イマーージュ}によって取り囲まれている。混沌めいた戦場を何とかするため、ZEXISは突破口を切り開こうと奮戦している。この場の切り札となり得そうなのは、ZEXISの中で誰よりも進軍している機体——名前は確かニルヴァーシューと言ったか——であった。

疑似太陽炉搭載型のフラッグが近づいてきている、と叫ぶオペレーターの声が『聞こえる』。女性の声は驚きと緊張を帯びていた。ZEXISの面々が驚くのも無理はない。太陽炉搭載の機体は、『夜明けの鐘作戦』^{オペレーション・デイブレイク}に投入されたジルクスだけだとされていたためだ。

いや、彼らの情報網は、提供された太陽炉の台数と作戦に参加していた太陽炉搭載型の機体数が一致していなかったことを知っていたようだ。誰かが「太陽炉搭載型の機体と提供された太陽炉の数が一致していないかった」ことを話題に上げる。足りなかった数は2つ／2機。その答えが、クーゴとグラハムの駆るGNフラッグだった。

まさか「既存の機体に疑似太陽炉を取り付ける」なんて荒業をやっている人間がいるとは思わなかったらしい。ついでに、その機体を駆って、「イマーージュと戦うZEXISたちの元へ乱入してくる」奴がいるとも。

グラハムのGNフラッグは、ニルヴァーシユの背後から遠距離攻撃をしようとしたイマージユをビームサーベルで一刀両断した。その勢いのまま、刹那のガンダムに突っ込んできたイマージユにライフルをお見舞いする。異形は悲鳴を上げて体液をまき散らし、朽ちていった。

振り返ったGNフラッグのカメラアイは、ニルヴァーシユをガン無視して刹那のガンダムに向けられる。……蛇足であるが、ニルヴァーシユの背後にいたイマージユは、刹那のガンダムに遠距離攻撃を仕掛けようとした個体だった。

「会いたかった……会いたかったぞ、ガンダム！」

突然現れた乱入者しぶんたちの存在に、ZEXISの面々やイマージユたちが驚いた様子を見せる。どこからどう見ても場違いだ。クーゴは面々の気持ちがよくわかった。

お前ら一体何しに来た、と、彼らの眼差しが訴える。敵対していた彼らは、そちらの意味で一致団結した様子だった。特に刹那／白と青基調のガンダムは、ぽかんとグラハム／GNフラッグを見上げている。

「やはり、私とキミは運命の赤い糸で結ばれていたようだな、少女！」

グラハムは不適な笑みを浮かべた。

しかし、クーゴは知っている。彼が運命だと語っていることの大半が、彼の實力によって手に入れたものだ。言い方を変えれば、意図的に、途方もない手段を使ったということの意味していた。

クーゴもグラハムの巻き添えを食ったクチであるが、最終的に「彼と共に、ZEXISとイマージユたちの決戦場へ赴く」ことを選択したのはクーゴ自身である。だから、自分は何かを発現できる立場ではなかった。苦笑するにとどめておく。

「ユニオン^グのフラッグ^ハファイター^エ……!」

「本当は、もっと早くここに到着する予定だったが、予期せぬ事態が起こってしまつてね」

グラハムは困つたような笑みを浮かべた。予期せぬ事態というのは、少し前にクローゴたちの前に立ちはだかつた Unicorn のことを指しているのだろう。確かに、Unicorn の乱入は予定外だった。パイロットの意志に反して、機体を遠隔操作する——思い出すだけで頭にくる。

イマージュとの最終決戦が終わって、他の問題を片付けて、全てにひと段落ついたなら、次は蒼海を問い詰める番だ。脳裏に浮かんだのは、冷たい眼差しでこちらを見返す蒼海の姿だった。普段はどうしても萎縮してしまうが、今回は睨み返すことができた。あとは、それを本人にやれば完璧である。

「あいつら、一体何しに来たんだ……!?!」

「心配しなくても大丈夫だよアレルヤ。少なくとも、今はね」

白と橙基調のガンダムを駆るパイロットが不安そうに眉をひそめる。しかし、それをやんわりと黙らせたのはアイデアだった。

アレルヤと呼ばれた青年が不安そうにしているのが『視える』。彼らの不安は最もだが、自分たちは ZEXIS の邪魔をしに来たのではない。

「塩を贈りに来た」、たとえば、日本人ではない／日本文化に詳しくない者たちが首を傾げる。

「戦国時代、とある武将が宿敵を助けるために援助をしたそうだ。『宿敵とは、ちゃんとした形で決着をつけたいから』ってな」

そういうことだとクローゴが笑えば、グラハムも大仰に頷いた。

「そのためにも、刹那。キミには——ZEXISのキミたちには、生き残ってもらわなければ困る。……キミと私の関係は、まだ何も終わっていないのだから」

翠緑の瞳は、どこまでも優しく細められる。宝玉のようなそれは、溢れんばかりの愛おしさに満ち溢れていた。

「……そう。この気持ち、まさしく愛だ!!」

「愛!?!」

「愛イ!?!」

次の瞬間、グラハムは斜め上にかつ飛んだ発言をしてくれた。発言の前後に脈絡を感じないのだが、言い放った当人は大真面目である。グラハム・エーカーという男は昔からそういう奴であった。反射的に、刹那とクーゴがオウム返ししてしまう。

刹那の顔は真っ赤だった。それにつられたかのように、周辺がざわめき始めた。特に、ニルヴァーシユに搭乗する少女が困惑した表情を浮かべる。だが、残念ながら、流石のクーゴでもフォローやりカバリのしようがなかった。

そこへ、レーダーが更なる乱入者の到来を告げる。現れたのは、303と呼ばれる機体だった。どうやら、ニルヴァーシユのパイロット2人にとつての因縁の相手らしい。男は少女を使い、世界崩壊の引き金を引こうとしている様子だった。

少年少女は、男と戦う道を選択した。その様子を見つめていたグラハムは、ふっと遠くを見つめるような表情を浮かべる。

「彼はわかっているんだな。愛を超越した憎しみの意味を」

「……そうだな。『エゴまみれの人間である』という点では、俺たちも似たようなものじゃないか」

クーゴは自嘲して肩をすくめた。グラハムとクーゴもまた、自分た

ちのエゴでこの場所に立っている。私情を挟んだ身勝手な行動に、イマージュはさぞかし幻滅したことだろう。

これで生き残れたとしても、帰還すれば、次は始末書の山が待っていることは明らかだ。ヘタすれば、決着をつけられない状況に陥る可能性もある。

それでも、クーゴとグラハムは動かすにはいられなかった。ZEXの元へ、駆けつけずにはいられなかったのだ。彼らには——刹那やアイデアたちには、大きな借りがある。

不意に、通信が入った。

声の主は——アイデア・クピディターズ。

「でも、そのエゴによって、救われた人間がいたのは事実ですよ」

「アイデア……」

「世界中の人間がエゴだと非難しても、貴方たちが一生懸命頑張っていること、私は知っています」

「……ありがとうございます」

またひとつ、貸しができてしまった。クーゴはゆるりと笑みを浮かべたが、即座にイマージュの群れへと向き直る。そのタイミングに合わせたかのように、クーゴのGNフラッグの隣にアイデアのガンダムが並んだ。

向うでは、グラハムのGNフラッグが刹那の駆るガンダムと共にイマージュを撃退している様子が伺えた。ならば、と、クーゴは操縦桿を動かす。弾かれたように動き出したフラッグとガンダムの、コンビネーションアタックが炸裂した。



(…………あれ?)

クーゴは思わず目を瞬かせた。今見た虚憶きよわくは、以前見た虚憶きよわくと違う。状況はともよく似ていたが、流れは大きな差があった。

以前まで見ていた虚憶きよわくの内容をもう一度頭に思い描く。いつもはおぼろげにしか浮かばないのに、今は鮮明に浮かんできた。

『会いたかった……い……会いたかったぞ、ガンダムウウウ!!』

聞き覚えのある、男の声。見覚えのある、ユニオンのフラッグ。パイロットは、グラハム・エーカー。

『いたか、我が愛しのガンダムよ!』

フラッグは、ソレスタルビーイングのガンダムに向かって突進する。この場には、他にもガンダムと銘打たれた機体が存在しているのだ。

いいや。グラハム・エーカーにとっては、本当の意味で『愛しのガンダム』と呼べるものは、この機体だけだった。

『どれだけのガンダムが現れようと、私の心を射止めたのはキミ……。美しき光と共に、我が眼前に降り立ったキミだ!!』

あまりにも単純明快な理由。しかし、グラハムにとっては、それこそがすべてである。

同名の機体にふらふらしたのは、愛しのガンダムと呼べるこの青い機体が、彼が駆ける戦場にいなかったからだ。

『彼、メロメロなんですよ』とはビリーの台詞だった。メロメロという単語で表現しているものではなさそうだが。

戦場は変わる。砂漠の中から、大気圏内へと。

異種生命体が牙を剥く。エゴまみれの人間に愛想を尽かし、彼らは侵攻を開始していた。遊撃部隊がそれを倒し、少年と少女の道を切り開こうとしている。

そこへ乱入したのはやはりフラッグだった。ガンダムと対抗できるカスタマイズを受けたGNフラッグが、遊撃部隊に攻撃を仕掛ける。

指揮官機の狙いはただ1機。グラハムが恋い焦がれた、『愛しのガンダム』だ。

そして、パイロットは盛大に宣言する。

彼がガンダムに焦がれた理由を。

ついに理解した、執着の答えを。

『この気持ち、まさしく愛だ！』

『愛……!?!』

『愛イ!?!』

そんな言葉が飛び出してくるなんて、誰が予想できるか。超展開にも程がある。

味方からもこんな反応をされているというのに、フラッグのパイロットは本気らしい。言葉を続ける。

『だが愛を超越すれば、それは憎しみとなる！ 行き過ぎた信仰が内紛を誘発するように！』

おかしい。もうこの時点で何かがおかしい。何がおかしいのか説明できないが、はつきりとそう断言できた。

グラハムと同じGNフラッグを駆るパイロットは、愕然と相棒の姿を眺めている。ついに恐れていた事態が起きた。

薄々感づいていたのに。彼の副官として傍にいたというのに。自分分は、その姿を眺めていることしかできなかったのだ。

遊撃部隊とは一時休戦したはずなのに、グラハムは戦いをやめようとは思わなかった。そんな彼を心配して、自分はこちらまで来た。

ガンダムを駆る刹那たちが問う。もう終わったはずなのに、と。自分もそう考えていた。だが。

『まだ何も終わっていない！ 私とキミとの関係は！』

グラハムはそう叫ぶなり、攻撃態勢に入る。

副官が彼の名前を呼んだが、彼はもう振り返らなかった。『愛しのガンダム』と刹那へ向かって突き進む。

それを間近で目にした少女が身を震わせている。文字通り「ドン引き」していた。少年が少女を励ます。

こちらと同じ気持ちなのだが、少女とは違って励ましてくれる相手などいない。彼を止められない、出来損ないの副官には相応しい末路だろう。

しかし、もう1機の乱入者が現れる。それに伴い、彼の進軍は止まった。

そちらは件の少女と少年の関係者のようだ。どうやら、異種生命体と世界滅亡の鍵は少女にあるらしい。

男の誘いを蹴り、男と戦う。愛する少女のために少年は決断した。

少年は少女を守り、少女は少年を信じる。若い2人が育む愛に、副官は胸を痛めた。

本当ならば。若者たちと形は違えども、グラハムもそんな風に刹那を想うはずだったのに。想っていたはずだったのに。

何を間違ってしまったのか、どうすればいいのかさえ、もうわからない。ハンプティ・ダンプティ。マザーグースの歌が頭を駆ける。

『彼はわかってるよ。愛を超越した憎しみの意味を』

『貴様もエゴに囚われた人間か……！』

噛みしめるようにグラハムは言った。刹那は険しい表情で彼を見

返す。

ならばどうする、と、グラハムは問うた。お前を討つ、と、刹那は答えた。

それでこそだ、と、彼は笑った。それは間違ってる、と、副官は言えなかった。

少年と少女が男と激突する。それとほぼ同じタイミングで、グラハムと刹那も戦いを始めた。

『貴様は歪んでいる！』

『そうしたのはキミだ！ ガンダムという存在だ！』

その言葉に、刹那はひどく傷ついた顔をした。変わり果ててしまったグラハムの姿に、赤銅色の瞳が悲しげに揺れる。

いつもは（本人曰く）愛の力で彼女の変化に目ざとく気付いていたのに、彼はもう、彼女の感情など見ようともしなかった。

いいや、違う。変わってしまったグラハムにはもう気づけないのだ。刹那を見ているが故に、刹那の心に気づけなくなっている。

グラハムの頭の中にあるのは、刹那を倒すという決意と意志。もう、それだけだ。それだけが、彼をこの凶行きようこうに突き動かす。

だから自分は戦うのだ、と、グラハムは叫んだ。お前も世界の一部だろうに、と、刹那は問う。

ならばそれは世界の意志だ、と、グラハムは返した。違う、と、刹那はグラハムの歪みを断じる。

その歪みを自分が断ち切る、と、刹那は宣言した。よく言った、と、グラハムは笑った。

こんなの間違ってる、と、副官は呟いた。その言葉は、2人のどちらにも届かなかった。

『……なんでだよ』

やりきれなくて、副官が呟く。グラハムと刹那の恋愛こゝろに巻き込

まれ、なし崩し的に仲人的な役回りをする羽目になり、走り回っていた日々。

思えば、このときが一番楽しい時間だった。幸せな時間だった。平和の象徴、そのものの光景だった。なのに、どうして、こんな末路が待っているのか。

『俺は、認めないぞ』

副官は操縦桿を握り締める。視線の先では、グラハムと刹那が戦っていた。

『こんなの、絶対に認めない……！』

GNフラッグが赤い粒子をまき散らした。友人がチューンナップしてくれた、疑似太陽炉搭載型のフラッグである。

疑似太陽炉のおかげで、自分やのフラッグはガンダムと対等に戦える。この推進性があれば、2人の間に割り込むことも可能だ。

止めなければ。『友人』が間違った道を突き進もうとしているのを、黙って見ていることなんてできない。

やめろ、と、副官は言った。この場で戦う遊撃隊たちや2人には聞こえなかった。

やめろ、と、副官が言った。イマージュと戦っていたイデアのガンダムがこちらを向いたが、2人は戦いを続けていた。

やめろ、と、副官が言った。操縦桿を握り締め、文字通り2人の元へと突撃する！

『——やめろって、言ってるだろうがアアアアアアアアアアアア!!』

——そうして、割り込んだGNフラッグは。

ガンダムの実体剣と、GNフラッグのビームサーベルによって貫かれた。

「……………」

クーゴはきつく目を閉じた。愕然とした表情を浮かべたグラハムと刹那、そしてアイデアの顔が、浮かんでは消えていく。

あの2人と虚憶きよわくの中の2人は、状況その他諸々が大きく違っていた。以前の虚憶きよわくではグラハムと刹那が本気で戦っていたし、先程接触したUnicornが「クーゴたちがZEXISの元へ駆けつける際」に出現し立ちはだかった」なんて話もなかった。

おそらく、前者のように虚憶きよわくのような殺伐としたことになる可能性は低いだろう。グラハムは虚憶きよわくのように歪んでいないためだ。後者は、先程Unicornと接触し一戦交えたことが引き金となって、虚憶きよわくに影響を与えたのだろう。

殺し合いがなくなったという点では良いことだ。だというのに、背中を駆ける悪寒の正体は一体何なのか。

頭の奥底が痛む。何かが脳裏に浮かびあがりかけ、けれど、それを追いかけてようと集中すると闇の底へと消えてしまうのだ。

デブリの散乱する宇宙そら、神聖なる戦い、それを冒瀆するかのようになり注ぐ悪意――。

その悪意は、どこかで感じた覚えがあった。――そう、蒼海がクーゴの前に現れたとき／蒼海がクーゴの近くにいるときに感じる寒さである。

彼女がこの宇宙域にいる、ということだろうか？ クーゴは首を振った。あり得ない。彼女は軍人でもなければ傭兵でもないのだ。戦場に向かう理由はない。

けれど、クーゴには『わかっていた』。確実に、この周辺に蒼海がいる。強い悪意を持って、彼女は何かを成そうとしている。クーゴには予感があった。

(っ！……………うしちゃいられない!!)

クーゴは操縦桿を動かした。心を焦がすような衝動に突き動かされる。呼応するように、GNフラッグが加速した。

向かう場所はただひとつだ。グラハムと刹那の、決闘の場所。彼らにとって神聖なものを壊さんとする悪意を、何としても止めなければ。

逸る気持ちを抑えながら、GNフラッグは宇宙を翔るのであった。

クーゴ・ハガネの災難は続く。

53. 空の護り手

宇宙の闇を切り裂くようにして、白い機体は翔け抜ける。

満身創痍なのは機体もパイロットも一緒だ。だが、自身が感じ取った予感と交わした約束が、機体とパイロットを戦場へと駆り立てる。限界などとうに超えた。それでも、今は、倒れるわけにはいかない。落ちてしまいそうな意識を奮い立たせ、女性は操縦桿を動かした。



『うわあああああッ!!』

漆黒が堕ちる。その様を、少年は鮮明に『視た』。

守り抜いたのは神聖なる想い。代償として、黒い機体は悪意に晒された。悲鳴を残して、機体は宇宙の闇へと消える。

それを見ていた女性は幸せそうに微笑んだ。望んだものすべてが手に入る、と、悦に浸った微笑を湛えて。

ぞつとした。堕ちていったのは、先程自分を救い上げてくれた人だったから。

彼を死なせてはならない。少年は操縦桿を握り締める。しかし、当然のことながら、機体は動かない。

先程の戦闘ですべての機能が死んでしまった専用機は、ただただ沈黙を貫いていた。

(だめだ)

機体は沈黙したまま、動かない。

それでも、少年は諦めきれなかった。

(あの人を死なせちゃいけない)

戦わなくていい、間違っていない——初めて、その人は少年にそう言ってくれた。

「ユニコーン」

少年は、己の機体の名を呼んだ。

これ程までに力が欲しいと願ったことはない。自分の翔るガンダムに頼りたいと思ったこともなかった。忌まわしいものだとばかり思っていた。

でも、今は。己の持つ力のすべてを、つき込みたいと思っている。少年は祈るようにして、自分の機体に呼びかけた。

「お願いだ、僕に力を貸して。——あの人を、助けたいんだ」

その言葉に呼応するかのようになり、青い光が漂い始める。次の瞬間、沈黙していたシステムが動き出した。コックピット内に明かりがともり、関節部が赤く発光する。

少年の祈りは聞き届けられた。機体損傷の具合を確認する。どこからどう見ても最悪の極みであり、間接部分からはうつつすらと白煙が上がっているほどだ。

だからといって諦めたくない。少年が強くなったとき、少年に応えるかのように機体が動き出した。平時のときと変わらぬそれに、少年はほんの一瞬だけ驚きの声を上げた。

けれど、その驚きもすぐに消える。残ったのは、焼け付くような焦燥感。

急がなければ、母の悪意がすべてを焼き尽くすという、問答無用の確信だった。



ビームサーベル同士がぶつかり合い、派手に火花を散らした。斬つては結び、結んでは斬りを繰り返す。剣戟ひとつひとつを重ねていくたびに、心が弾む。

自分たちの戦いを邪魔するものは何一つもない。それゆえにできる真剣勝負——その事実を体感するだけで、グラハムは年甲斐もなく心を躍らせていた。

刹那のガンダムはグラハムのGNフラッグが繰り出す攻撃を回避し、攻撃を仕掛けてくる。以前対峙したときより、攻撃の精度は随分と成長していた。流石は自分の運命の相手、と、グラハムは笑みを浮かべる。

初めて戦ったときや共闘したときとは比べ物にならない程、刹那の太刀筋は研ぎ澄まされていた。確実に、グラハムとGNフラッグを屠らんとしている。どこまでも強い意志と真摯な想いが、ぶつかり合う刃から伝わってきた。

手は抜かない。そんなことをしたら、己の想いも彼女の想いも踏みこじることになってしまう。グラハムもまた、刹那に対しては誠実で／真摯でありたかった。だから、敬意を持って受け止める。

(流石は私のプリマドンナ。エスコートされているだけでは終わらないということか)

リードしていると思えば、逆に自分が振り回される。一瞬たりとも気の抜けない攻防戦。グラハムは、自分の口元が段々と綻んでいくのを感じていた。

このまま永遠に、この舞台で踊っていられたらいいのに、と。場違いなことだとしても、願わずにはいられない自分がいた。

それを、グラハムは首を振って否定する。決着の終わりこそが、自分たちの望んだ『明日』の始まりを意味しているのだ。

微睡むことはお互いが赦さないし、お互いに赦されることではない。痛みにまみれたとしても、望むものがあるのだから。

焦がれていた天使に、ようやくこの手が届く。

そう思った途端、グラハムは即座に反撃へ打って出た。牽制としてライフルを撃ち放ち、即座に距離を詰める。

GNフラッグは疑似太陽炉搭載時の機体改造によって長所が殺されてきたが、グラハムはさして気に留めなかった。

グラハムの想いに呼応するように、GNフラッグが刹那／ガンダムに迫る！

「おおおおおおおおおッー！」

文字通りの真っ向勝負。防御を完全に捨て置いた、捨て身の攻撃だった。ビームサーベルを構え、天使を射抜かんばかりの勢いで突っ込む。

普通に考えれば回避が正解なのだろうが、刹那はグラハムに應えるかのように実体剣を展開させた。同じように、ガンダムもGNフラッグに突っ込む。

雌雄を決するのは、コンマ一瞬だろう。

おそらくは、この一撃で。

グラハムには、確かな予感があった。

そして——決着は、訪れる。

「!!!」

それは、ほんの少しのタッチの差だ。

GNフラッグのビームサーベルは、ガンダムのカメラアイ前方を掠

めるだけに留まった。対して、ガンダムの実体剣は、GNフラッグの肩に深々と突き刺さっている。紫電が爆ぜたのはGNフラッグ――グラハムの方だった。

機体に凄まじい振動がかかる。コックピットの機材が爆発を引き起こした。その衝撃に耐えきれず、グラハムは呻く。体中に痛みが走るだけでなく、左側の視界が赤黒く潰されてしまった。痛みのせいで瞼を開けることも叶わない。

ならばせめて、と、グラハムは右側の視界を失わぬよう、どうにかして瞳をこじ開ける。最初のうちはぼんやりしていたけれど、徐々に鮮明になっていく。破損し、火花が飛び散るコックピット内部が見えた。

本来ならモニターも死んでいるはずだというのに。

顔を上げれば、眼前に降り立つガンダムが『見える』。

(嗚呼)

グラハムは苦笑した。

(私は、キミに及ばなかったのか)

伸ばした手／刃は、刹那とガンダム天使たちに届くことはなく。彼女に挑み続けた自分たちの幕引きは、あまりにも清々しいものだった。

ガンダムはじつとGNフラッグを見下ろしている。気のせいか、風いだ水面のように静かな刹那の表情が『視えた』ような気がする。

「……さあ、刹那。キミの望む、決着を」

グラハムは刹那に呼びかけた。決着をつける権利は、彼女にある。負けた自分に赦されることは、ただ、すべてを受け入れるだけだ。グラハムの言葉に呼応するかのようには、ガンダムが実体剣の切っ先をGNフラッグに向けた。

自分たちを切り裂き、その手に勝利を掴むのか。そんな決着でも、悪くはない。我儘を言うならば、星が煌めく宇宙の闇よりも、真っ青な空の元で死にたかった。……いや、そんなことなど霞むくらい、今は満足している。

死に場所など、もはやどうでもよかった。今、こうして、刹那／ガンドムと向き合っているのなら。彼女たちがいる場所は、グラハムにとっては天国——あるいは楽園と同義だ。これ以上に幸せなことはない。

瞳を閉じて、決着のときを待つ。

いくら待っても、予測していた衝撃が襲い掛かってくることは終ぞなかった。ゆっくり瞳を開け、ガンドムに向き直る。

展開していたはずの実体剣は収納され、天使はただ厳かに佇むのみ。グラハムが瞬きを繰り返すと、刹那は静かに言葉を紡ぐ。

「あんたは、明日のために戦うと言ったな」

「ああ」

「……ならば、あんたが生きることをやめてどうする」

どこか、呆れが混ざった口調。

「生きることをやめてしまったら、明日を掴むことなんてできないだろう」

至極当たり前のことを、至極当然のように、刹那は言った。

「……だから、俺は生きる。お前も、生きろ。——生きてくれ、グラハム・エーカー」

そうして、刹那は微笑んだ。戦いを始める直前に見せた、柔らかな微笑を浮かべて。

あまりにも綺麗な微笑みに、グラハムは呆気にとられた。自然と口

元が緩む。

——これが、刹那・F・セイエイが選んだ答え。

「……それが、キミの答えなのだな」

「ああ」

「そうか。なら、私も生きる。……そうやって、キミの行く末と、キミと私が出した答えを見つめ続けよう」

痛みに呻きそうになるのを抑え込みながら、グラハムは刹那に答えた。今はひどく、満たされたような気分だった。

刹那がどんな顔をしているのか、グラハムにははつきりと『視える』。年相応の笑顔に、胸が温かくなるのを感じる。

去来したのは充実感だ。自分たちが選んだ決着に、何の後悔もない。これでよかった、と、心からそう言えた。

不意に、壊滅状態だったレーダーが反応を捉える。カメラアイに映し出されたのは、クーゴの駆るGNフラッグだった。被弾した形跡があるが、特に目立った損傷はなさそうである。

友人であり戦友である彼にも、多大な心配をかけてしまった。ここまで突き合わせてしまったクーゴを安心させようと、GNフラッグの通信回線へ手を伸ばす。

『——2人とも、逃げろ!!』

不意に聞こえた声に手を止める。刹那、背後から毒々しい紫の光が降り注いだ!

グラハムと刹那は振り返り、息を飲む。攻撃を避けようにも、グラハムのGNフラッグは満身創痍だ。

万全の状態ならともかく、現状では回避すらまともに行えない。赦されたことは、被弾するまでの光景を見つめ続けることだけ。

グラハムの視界の端で、刹那／ガンダムが自分／GNフラッグを庇おうとしていたのが『視えた』が、到底間に合うとは思わなかった。

「させて、たまるかああああッ!!」

刹那、クーゴのGNフラッグは青い光を纏って、ガンダムとGNフラッグへ向かって突撃してきた!!



ZEXISが解散するのを待っていたかのように、再び世界は混乱へと転がっていく。今回行われたソレスタルビーイング殲滅作戦もその1つだ。国連代表のエルガン・ローディック代表が行方不明になったのを皮切りに、統一されかけていた世界は瓦解していった。

影のフィクサーであるエルガンがいなくなったことにより、別の誰かが実権を握ったようだ。そこまでは、上司や周囲の会話を聞けば大体予測できる。だが、肝心の黒幕は、影も形もつかめなかった。親戚のジャーナリストも項垂れてしまったレベルである。

(いや、そんなことを考えている暇なんてない)

クーゴは首を振り、GNフラッグを加速させた。何の目印もない宇宙を、ただひたすらまっすぐに突き進む。

懸念材料は自分の相棒——グラハム・エーカーと彼の恋人——刹那・F・セイエイ、および、自分とイデア・クピディターの行く末である。

特に、現時点では、友人であるグラハムのが気がかりであった。そんなことを考えていたとき、モニターが機影を捉える。

煙を上げるGNフラッグと、GNフラッグを見下ろすガンダムが見

えた。

GNフラッグの損傷具合からして、グラハムが刹那に敗北したことは伺えた。ガンダムとGNフラッグが向き合う様子からして、2人は己の望む決着をつけたのだということも。

グラハムと刹那は、もう、戦うつもりはないのだろう。その事実には安堵すべきだったが、クーゴの心配は潰えていなかった。

「グラハムー」

通信回路を開いて呼びかける。映し出された金髪碧眼の伊達男は、文字通りの満身創痍であった。端正な顔立ちだった彼の左半分が真っ赤に染まっている。

「そんなに怖い顔をして、どうしたんだ？」

痛みに顔を顰めながらも、グラハムはきよとんとした表情でクーゴに問いかける。そして、こちらを安心させるように微笑んだ。

「私たちのことを心配しているなら、それは杞憂だ。決着はついたよ」

その結果がこのざまだ、なんてグラハムはあっけらかんと笑う。清々しいほどの笑顔に、思わずクーゴは自分の懸念材料を忘れてしまっただけになった。

自分たちを眺める刹那が、ふっと表情を緩めたのが『見える』。口元に微笑が浮かんでいるようなのは見間違いだっただろうか。

「クーゴ・ハガネ。……決着はつけた。これ以上、フラッグと戦闘を続けるつもりはないから、安心するといい」

「あ、ああ」

刹那もまた、クーゴがグラハムと刹那の行く末を案じていると思っ

たらしい。実際案じてはいたけれど、大丈夫だと思っているし、その点についてはもう心配していない。

「遠い、な」

ぽつりと、グラハムが呟く声があった。彼の心情に呼応するかのよう
に、グラハムのGNフラッグがゆっくりと腕を伸ばす。その先には、
悠然と佇む刹那のガンダムがあった。

「まだまだ修行が足りないか」とグラハムは笑っていた。敗北者だ
というのに、その横顔は晴れ晴れとしている。彼は、ガンダムに届く
／＼触れる直前で、静かに手を下した。

「……いいのか？」

「ああ。これでいい。これが、私の——私たちの選んだ答えなんだ」

クーゴの問いに、グラハムが曇りなき笑みを浮かべて頷いたのが
『視えた』。視線をガンダムへ向ければ、刹那が静かな面持ちで頷くの
が『見える』。

虫の知らせのように感じた悪寒に従ってここまでたどり着いたけ
れど、クーゴが危惧するようなことは何もなかった。何もなさ過ぎ
た。

相棒が決着をつけたのだから、普通に考えれば、次はクーゴの番で
ある。しかしながら、クーゴは未だに、この戦場でアイデアと相對峙し
ていない。

もしかしたら、なんて、嫌な予感が脳裏によぎる。どうしてだかは
わからないが、鮮やかな青い光が浮かんでは消えていくのを繰り返し
ていた。

(……なんだ？ この、言いようもない感覚は)

何かが警笛を鳴らしている。この周辺に漂っているのは、容赦のな

い悪意だ。寒気となって襲い掛かってくる、人間の負の感情だ。

共有者コーザアレンターとして目覚め、虚憶きよおくに触れ、様々な出会いと別れを繰り返していくうちに、感じ取れるようになったもの。

最初は感情しかわからなかったけれど、今では、その感情を抱いている人間が誰なのかまではつきりわかってしまう。便利なのか不便なのか、どう扱えばいいのか、未だに把握できないでいる。

感情の主も、わかる。ただ、その人物が宇宙空間にいるはずがないのだ。パイロットとして生きてきたクーゴとは違って、ロボットとは縁遠い人生を歩んでいるはずなのだから。でも、感情の主はその人物以外あり得なかった。

しかし、クーゴの勘が警笛レベルで「その人物以外あり得ない」と告げている。この矛盾を説明する方法を、残念ながら、クーゴは何一つとも持ち合わせていなかった。確証のないことを安易に口出しするのは憚られた。

『、——!!』

不意に、誰かが何かを叫ぶ声が『聞こえた』ような気がした。

何を言っているのか、うまく聞き取れない。ただ、そこに何が込められていたかは『理解した』。向けられた感情も、誰に対する感情かも。

簡単なことだ。それは、幼い頃からずっとクーゴに向けられてきたものだ。蒼海がずっと、クーゴに向けてきたものだ。

『憎い』

今度のはつきりと聞き取れた。そして、そのタイミングを待っていたかのように、レーダーがけたたましく鳴り響く！

『私の世界に、この決着すしがきはいらない』

何事かと、刹那とグラハムが振り返る。

『——修正を』

間髪入れず、向う側から大量の光が、ガンダムとGNフラッグに向かって降り注いだ！

大破していたグラハム機は当然動かない。異変に気づいたとしても、何の抵抗もできぬまま光に飲まれて大破する——そんな末路があった。

だが、その未来を覆せる機体が近くにいる。満身創痍でありながらも、何の問題もなく動ける機体／人物が。

「ッ、グラハム!!」

刹那／ガンダムが、GNフラッグの元へと飛び出した。降り注いだ光が迫る中、ガンダムがグラハムのGNフラッグを庇うようにして突き飛ばす。

そのタッチの差が、グラハム／GNフラッグの運命を分けた。しかし、それが——刹那／ガンダムがグラハム／GNフラッグに降りかかるはずだった悪意に晒される原因となる。

ほんの一瞬、必死の形相をした刹那と、刹那に庇われたことに気づいて驚愕の表情を浮かべたグラハムの表情が『視えた』。

「刹那——!?!」

グラハムが叫んだとき、間髪入れず、悪意が天使へ襲い掛かる!!

毒々しい紫の光が、グラハムの翔るGNフラッグごと、刹那のガンダムを焼き払った。

「うわあああああああああああああッ!!」

刹那とグラハムの悲鳴が『聞こえた』。その声は、あつという間に爆風に飲まれて消えてしまう。クーゴは、その光景を眺めていることしかできなかつた。

<<<<<<<<<

(間に合え。間に合え。間に合つてくれ!!)

祈りにも似た感情を抱いて、GNフラッグは空を翔る。懸念材料は3つある。1つめは親友とその恋人の行く先、2つめは明日の約束を交わした好敵手と自分の行く先、3つめは――纏わりつくように感じた、姉の悪意。

姉、と言つても、GNフラッグと同じ系列の機体ではない。姉弟という認識は、GNフラッグと姉に使用されたOSの系譜が関連している。そのため、人格形成時にも影響があつたのだ。自分たちのようなケースはこの世界では珍しい部類に入るらしい。閑話休題。

GNフラッグの眼下には、ソレスタルビーイングへの最終兵器として鎮座しているサイコガンダムが、天上人の母艦と激しい戦闘を繰り広げているところだつた。優勢なのはもちろんサイコガンダム。自分たちが防衛する必要はなさそうだ。おかげで、GNフラッグは自身のことには集中できる。

リーダーに、友の機体は映っていない。おそらく『彼』が戦っている宇宙域は、リーダーの範囲外にあるのだろう。しかし、GNフラッグには、友がどこで戦いを繰り広げているか『わかつて』いた。

姉の悪意が向けられる先には、『彼』と『彼』が愛してやまないガンダムエクシア。姉は、この2人の“何か”が決定的に気に入らないらしかつた。この2人の特筆する部分は「敵同士ではあるが、恋人同士でもある」という点だけである。

（姉は、『あいつ』に惚れていたということか？ ……いや、それはない。惚れているというより、お気に入りの玩具みたいなニュアンスを感じたから）

自分で思考しておいてなんだが、我ながら酷い例えである。しかし、その表現の方がしつくりくるのだ。

玩具を誰かにとられたくないということだろうか。それとも、思い通りに動かない玩具に苛立っているのだろうか。どす黒い感情は複雑に絡み合っていて、姉が何を考えているのか『わからない』。

姉が、自分の『相棒』や部下たちを、玩具を見るような目で眺めていたことは知っていた。GNフラッグも注意を払っていたし、『相棒』や仲間たちにも注意を促しておいた。それも虚しいことになりつつある。

「俺の見立てが甘かった、ってか」

自分の無能さに反吐が出そうになる。GNフラッグは更に加速した。

早く、早く、行かなければ。姉の悪意が、『彼』とエクシアの想いを踏みにじる前に。

この場で戦う機体たちは、姉の玩具ではないのだから。

GNフラッグの脳裏に、断片的な映像が浮かんでは消えていく。自分たちと同じ姿をした機体の中に、自分たちよりもはるかに小さな“得体のしれない生き物”が乗り込んで、自分たちを動かしている世界の光景だ。

エクシアと『相棒』——実際には、その機体に搭乗している“謎の生き物”たち——の戦いを踏みにじった悪意。GNフラッグの中に乗っていた“生き物”は、その存在を予期していたにも関わらず、どうすることもできなかった。

今のGNフラッグも、その“得体のしれない生き物”と同じ末路を辿りつつある。悪意の到来を予期しながら、結局見過ごすことしかで

きない。友の命が踏みにじられるのを、眺めていることしかできないというのか。

(そんなのは御免だ)

GNフラッグは加速する。下手したら、限界を超えて爆発四散してもおかしくない程の速さまで。

不意に、視界が開けた。その先に見えたのは、『彼』とガンダムエクシア。損傷度合いといい、決着の様子といい、その軍配といい、先程GNフラッグが『視た』光景と似ている。

2人の奥にある宇宙空域に視線を向ける。かなり遠くに、『彼』とエクシアに狙いを定める存在が『伺えた』。奴は、明らかに『彼』とエクシアに照準を合わせていた。

『彼』とエクシアが振り返る。2人はまだ、狙いを定めている悪意の存在に気づいていない。彼らは戦いの余韻を残したまま、満足げな笑みを浮かべて振り返った。

GNフラッグの存在に気づき、何かを言おうと口を動かす。その奥で、紫の光が爆ぜたのが『視えた』。GNフラッグは全力で飛び出す。絶対に、あの悪意に晒させて溜まるものか。

「――2人とも、逃げろ!!」

GNフラッグの叫び声は、2人に届いたのだろうか。

それを確認する間もなく、GNフラッグは2人を守るために、悪意の前へと躍り出た。



『、——!!』

不意に、誰かが何かを叫ぶ声が『聞こえた』ような気がした。何を言っているのか、うまく聞き取れない。

ノイズまみれの光景が、クーゴの頭の中に浮かぶ。

宇宙空間、神聖な戦い、決着、2人の出した答え。

その先を——クーゴは、『知っている』。

(ツ、間に合え！ 間に合ってくれ!!)

クーゴの気持ちに比例するかのようには、GNフラッグは速度を上げた。気のせいか、クーゴのGNフラッグも何か焦っているように感じる。

不意に、視界が開けた。その先に見えたのは、グラハムの翔るGNフラッグと刹那の翔るガンダムエクシア。損傷度合いといい、決着の様子といい、その軍配といい、先程クーゴ／GNフラッグが『見た』光景と似ている。

2人の奥にある宇宙空域に視線を向ける。かなり遠くに、グラハム／GNフラッグと刹那／ガンダムエクシアに狙いを定める存在が『伺えた』。奴は、明らかに2人へと照準を合わせていた。そのタイミングを待っていたとでもいうかのように、レーダーがけたたましく鳴り響く！

『憎い』

声の主こそ、蒼海だ。

やはり、クーゴの予感は的中していたらしい。

『私の世界に、この決着^{すしがき}はいらない』

間髪入れず、向う側から大量の光が、ガンダムとGNフラッグに向かって降り注いだ！

『——修正を』

何事かと、刹那とグラハムが振り返る。回避しようにも、刹那／ガンダムならまだしも、満身創痍のグラハム／GNフラッグが回避することなど不可能であった。

刹那／ガンダムがグラハム／GNフラッグを守ろうと動いた。先程『視た』きよわく虚憶の光景でも、刹那／ガンダムがグラハム／GNフラッグを庇っていたことを思い出す。

きよわく虚憶の中で、刹那／ガンダムはグラハム／GNフラッグを庇ったものの、共々撃墜されてしまっていた。クーゴとGNフラッグも、それと同じ轍を踏みたいとは思わない。

どこかで姉が嗤ったのが『視えた』。

彼女の願いは叶えられる。刹那とグラハムの死をもって。

そんなこと、絶対に。

「させて、たまるかあああああッ!!」

クーゴが叫んだ刹那、視界いっぱい青い光が爆ぜた。

速度計のメーターが振り切れ、自分の眼前にいたガンダムとGNフラッグを追い抜き、クーゴのGNフラッグが2機／2人の前に躍り出る。蒼海の悪意を受け止めるには役として不足であるということには自覚しているけれど、その悪意に友人たちを巻き込みたいとは思わなかった。

今まで目を逸らしてきたツケなんだろう、と、自嘲する自分がいる。だからこそ、今度は目を逸らすことなく、逃げることなく、向かい合わなくてはならないのだ。決意を抱き、クーゴは紫の光と向き合う。ガーベラストレートとタイガー・ピアスを鞘から引き抜き、構えた。

無謀だと誰かは言うだろう。あるいは、嗤うのだろう。

それでも、それでも。今、この瞬間は。

決して逃げてはいけない、と、クーゴは強くそう感じたのだ。

この場で戦っていた2人は、姉の玩具ではないのだから。

「クーゴ!？」

「クーゴ・ハガネ!？」

背後から、グラハムと刹那の声が聞こえた気がした。驚きに満ちた表情を浮かべた2人の顔が、クーゴの視界の端にちらついて『視える』。それごと振り切るようにして、クーゴはガーベラストレートとタイガー・ピアスを振るった。コンマ数秒のタイミングでの居合斬りは、ビームを真つ二つに切り裂いた。

以前、ビームガンの弾丸を切り捨てたのと同じ原理である。クーゴのGNフラッグは背後の2機／2人を庇いつつ、ガーベラストレートとタイガー・ピアスを振るい、攻撃を相殺していく。1回、2回、3回、4回——ビームを叩き斬り、火花が飛び散っていく。5回、6回、7回、8回——防戦一方というのも辛いものがあった。

しかし、攻撃を切り捨て／グラハムのGNフラッグと刹那のガンダムを庇いつつ、GNフラッグは悪意の元——蒼海の元へと距離を縮めていく。

思い出すのは、いつぞやの対面。母に言われるがまま、実家の剣道場で剣を振るいあった試合の光景だった。もつとも、遠距離から一方的にクーゴを攻撃できる蒼海の方が有利である。援護なしに彼女の元へ突っ込むクーゴが無謀だと言えよう。

普通はどう考えたって、こんな戦法を取ろうとは思わない。でも、それ以外、今の自分には何も思いつかなかった。姉と対峙するためには、真つ向勝負以外あり得ないと思ってしまったのだ。……本当に、馬鹿な話である。

ビームを切る。何度も切る。相棒と相棒の愛する人を守るために。あるいは、姉の喉元に迫るために。

1回、2回、3回、4回——いつしか、切り捨てた攻撃の数を、数えることすら忘れてしまった。

宇宙の闇の中に、薄らぼんやりと機影が見えた。大きさからして、MSというよりMAと言った方が正しいだろう。

毒々しい赤紫。鳥を思わせるようなそのMAは、見覚えがあった。

(あの機体、タクマラカン砂漠で見たあのMAじゃないか！)

P M Cトラストのイナクトと戦っていたときに乱入し、クーゴのフラッグに襲い掛かってきた機体だ。やはり、あの砂漠——アザデイスタンの王宮で攻撃を仕掛けたMAは、蒼海の機体だったようだ。

G NフラッグがMAへ迫る。MAも、G Nフラッグ——クーゴを視認したようだ。カメラアイがほんの少し動き、クーゴ／G Nフラッグを捉える。しかし、MAはおもむろに視線を逸らした。視線の先には、啞然とこちらを眺めるグラハムのG Nフラッグと刹那のガンダムがいた。

視界の向う側で、ばちり、と光が爆ぜた。MAが、主砲を発射するためのエネルギーを充填し終えたらしい。しかも、規模からして、クーゴに向かって攻撃してきたビーム砲よりも出力が高いものだ。照準の先には、グラハム／G Nフラッグと刹那／ガンダム。

それが何を意味しているか分からない程、クーゴは愚鈍ではない。しかし、それを黙って見過ごせる程、クーゴは非情になりきれなかった。

即座に方向変換し、再び2機の前に立ちふさがる。そして、蒼海の悪意と対峙した。クーゴの刃と蒼海の砲撃が激しくぶつかり合う！

「ぐ……い」

機体に衝撃がかかった。ガーベラストレートとタイガー・ピアスが悲鳴を上げる。みしり、と、何かが軋む音がした。

直後、ガーベラストレートとタイガー・ピアスの刀身が真っ二つに

割れた。射撃系レーザー兵器すら真つ二つにする刃は、度重なる攻撃をいなすうちにひび割れていたらしい。

「しまっ——」

クーゴの言葉は、最後まで紡がれることはなく。

毒々しい紫の光が、クーゴの視界いっぱい／GNフラッグに炸裂した。

「うわあああああああッ!!」

身を焼くような、あるいは潰されるような、もしくは引きちぎられるような、言葉にするのが不可能なほどの衝戟。

四方八方から爆発音が響いたのを最後に、クーゴの意識は一気に白い光に飲み込まれた。

「クーゴ！」

「クーゴ・ハガネー！」

グラハムと刹那の金切り声が耳を掠めたような気がする。瞬く間に、視界が黒に染まった。

体の感覚まで焼き切れ、潰され、引きちぎられてしまったためなのか、何も感じなくなる。

右も左も上も下も、何もない。自分がどんな体勢なのかも忘れてしまった。漂っているのか、沈んでいるのか、判別がつかない。

——不意に、手を掴まれたように、がくと体が揺れた。利き手を覆うのは、優しい温もり。

『大丈夫。……私が、貴方を死なせません。クーゴさん』

『今度は僕が、貴方を助けます』

どこか、暗闇の向う側から、誰かの声が『聞こえた』気がした。



クーゴのGNフラッグが大破し、砲撃の威力もあつてか、宇宙の彼方へと吹き飛ばされる。友人の悲鳴が木霊する中で、グラハムは何もできなかった。ただ、茫然と、その光景を眺めていた。

GNフラッグが纏っていた青い光だけが遠くで瞬いていたが、それすらも、闇にまぎれるようにして消えてしまった。グラハムは、本能的に感じ取る。あの光はクーゴの命そのものであった、と。

光が消えたということは、即ち――。

グラハムの予想を肯定するかのように、『誰か』が笑った気配がした。

この世の幸せを手にしたかのような、恍惚とした笑み。

『ああ、やっと死んだのね』

ぞつとした。女性の言葉に、グラハムは背筋を震わせる。

『邪魔なゴミがいなくなった』

女は笑う。積年の恨みを晴らし、望みを叶えたかのように。

どこまでも歪んだ表情で、クーゴの死を喜んでいた。

『アレが、他人を優先するような性格で本当に良かった。グラハム・エーカーを狙えば、奴を庇おうとすることは分かっていたし』

その言葉に、グラハムは目を剥く。

満身創痕の自分たちに向けられた攻撃。クーゴはそれからグラハムたちを庇うような形で撃墜された。それが、クーゴの性格を理解したうえで仕組まれたものだったと知って、黙っていられるはずがない。

「——ッ！」

グラハムの感情に呼応するように、機能の大半を停止していたはずのGNフラッグが動く。と言っても、方向変換し、友を屠った相手を睨みつけるのが精一杯であったが。

鳥を思わせるような巨大MA。先程『視た』金色のもの——刹那／ガンダムが屠った相手とは、規模も、感情の大きさも違った。カメラアイが不気味な輝きを湛える。

次の瞬間、宇宙の闇に紫の光が爆ぜた。先程クーゴを屠った紫のレーザー砲が、グラハムのGNフラッグ目がけて降り注ぐ!!

満身創痕のフラッグでは、躲すことなど不可能だ。逃れる術など、今のグラハム／GNフラッグは持っていない。

異変に気づいたとしても、何の抵抗もできぬまま光に飲まれて大破する——そんな末路があった。

だが、その未来を覆せる機体が近くにいた。満身創痕でありながらも、何の問題もなく動ける機体／人物が。

「ッ、グラハム!!」

刹那／ガンダムが、GNフラッグの元へと飛び出した。降り注いだ光が迫る中、ガンダムがグラハムのGNフラッグを庇うようにして突き飛ばす。そのタッチの差が、グラハム／GNフラッグの運命を分けた。

しかし、それが——刹那／ガンダムがグラハム／GNフラッグに降りかかるはずだった一撃に晒される原因となる。ほんの一瞬、必死の

形相をした刹那の表情が『視えた』。グラハムは、茫然と彼女の表情を『視て』いた。

「刹那——!？」

グラハムが手を伸ばしながら叫んだとき、間髪入れず、悪意が天使へ襲い掛かる!!

毒々しい紫の光が、グラハムの翔るGNフラッグごと、刹那のガンダムを焼き払った。

爆ぜた光、機体を震撼させる衝戟、体に襲い掛かる痛み。

「うわあああああああああああああああッ!!」

自分の悲鳴と重なるように、刹那の悲鳴が木霊する。

耳をつんざくような爆発音が響き渡り、グラハムの意識はそこで断線した。

54. This concludes……?.

2308年、ソレスタルビーイングは国連軍との決戦に敗れ崩壊。世界は、統一に向かって動き始めている。

「ああ。それじゃあ、また今度」

その声を引き金に、どやどやと客が去っていく。

病室は、沢山の見舞い品で溢れていた。見舞客たちが帰って、ようやく静けさを取り戻したのである。茶髪の長髪をポニーテールに結い眼鏡をかけた男性は、それを待ち構えていたようにして病室に足を踏み入れた。

金髪の男は、無言のまま項垂れている。来客に対応していたときは違い、男は影を背負いながら俯いていた。唇は真一文字に結ばれ、固く閉じられていた。1人でいると、湧き上がってくるものがあつたのだらう。

ソレスタルビーイングと国連軍の最終決戦が終わってから、金髪の男はずっとこんな調子である。その戦いで何があつたのか、眼鏡の男性はわからない。わかることは、金髪の男が、最終決戦で大切なものを一挙に失ってしまったことであつた。

来客中は平静を装っているが、1人になると、彼はひどく不安定になる。生来の彼を知る人間がこんな光景を見たら、あまりのギャップに度肝を抜かれることだらう。

眼鏡の男性でさえそうなのだ。今は亡き親友が金髪の男を見たら、深々とため息をついて、男へ喝を入れていたに違いない。温かくておいしいご飯を抱えて、だ。

「カタギリ」

金髪の男は眼鏡の男性——ビリー・カタギリに気づいたようで、のろのろと顔を上げる。顔の左半分は包帯で覆われており、荒んだ翠緑

の瞳も相まって、痛々しい。

「ソレスタルビーイングとガンダムを倒した英雄が、浮かない顔をしているね」

もう少し胸を張ったらいんじゃないかな、と、ビリーは笑った。笑ったつもりだったが、多分、うまく笑えていないと思う。金髪の男が失った親友は、ビリーにとっても大切な親友だったからだ。

でも、親友が生きていたら、きつと、自分たちが落ち込む姿など見たくないのではないだろうか。半分は憶測であり、もう半分は経験談からの推測である。数字に関して厳しい職業——MS開発研究に携わる技術者が口に出すにしては頼りない。

「違う」

ビリーの言葉を、男は否定した。

「私は、英雄などではない」

見舞客の前では決して口に出さない、強い否定。男の眼差しは、自分の握りこぶしへと向けられている。

あの戦場で何があったのか、彼は、頑なに言葉にしようとしなかった。だから誰も、あの場で何があったのかは知らない。

でも、男は嘘を平然と語るような性格ではなかったから、彼の言葉は本当のことなのだろう。抽象的なことしか語らないけれど。

「私は何もできなかった。……すべてが踏みにじられる光景を、見ていることしかできなかったんだ」

男は血反吐を吐くような声でそう紡ぎ、右目を覆う。

どんな顔で何を言えば、男の悲しみを癒してやれるのか。ビリーに

は何も思いつかなくて、その事実が何よりも苦しい。多分、亡き親友だったら、うまくやれるに違いない。だが、残念ながら、ビリーは亡き親友と同じ行動をとることはできなかった。

自分にできることは、男の隣に座って、黙って彼の話を聞いてやることだけだ。空色の扇を握り締め、誰かに思いを馳せるように歯を食いしばる男の姿。ああ、どうしてこんなときに親友はいないのだろう。心の底から、そう思う。

「……お腹減ったね」

ぽつり、と、ビリーは呟いた。

「そうだな」

男も同意した。ビリーは言葉を続ける。

「クーゴの作ったご飯が食べたいね」

「そうだな」

「ドーナツ、作ってもらおう約束だったのに。彼はひどいなあ」

ビリーは笑っていた。笑っていたつもり、だった。なのに、視界が滲んでよく見えない。

男も静かに、ビリーの言葉に頷いた。大きく息を吐いて、窓辺へと視線を向ける。ビリーは言葉を続けた。

「他の皆も、クーゴの料理、楽しみにしていたんだよ」

「ジョシユアの料理が大変なことになっていたからな」

ははは、と、2人は笑った。笑い声がかすれてきたのは、きつと気のせいではない。

自分たちは沢山の人の死に直面してきた。何人もの人々を見送っ

てきた。けれど、やはり、何度見送っても、身近な人を失う痛みには慣れない。亡くなった友人も、いつも人の死を悼んでいた。

どうして、いい人ばかりが死んでいくのだろう。誰かを見送る度に、そんなことを考える。いい人だから死ぬのだと言われても、それが運命だと言われても、納得できなかつた。足を止めて悩むことは何度もある。

今この場に彼がいたら、何を言うのか。長らく親友をやってきたのに、それが全く分からない。考えても考えても、思い浮かんだ言葉は「自分たちが今、彼からかけてほしい言葉」でしかないような気がした。

思えば、彼はいつも、自分たちが欲した言葉を、望んだタイミングでくれるような人だった。自分たちは相当、彼に甘えてきたらしい。

ビリーは俯く。戦死報告なんて嘘で、そのうちひよつこり帰って来そうな気配がする。でも、それを口に出すことはできなかった。

目の前の男が、親友が戦死した現場に居合わせている。死体は未だに見つかっていないが、記録や証言を照らし合わせれば、生きているとは到底思えなかつた。

「寂しくなったな」

男はぽつりと呟いた。そうだね、と、ビリーも同意する。ビリーの師も亡くなり、親友までいなくなつて、ユニオンは寂しくなつたような気がした。それでも、時間が経てば、否応なしに賑やかさは戻ってくるだろう。亡くしてしまつたものはかえつてこないけれど、それに浸る時間を確保するには、自分たちは多忙すぎた。

世界は変わり始めている。ソレスタルビーイングの崩壊とともに、世界の軍備を一つに集約すべきだという話題が上がっているためだ。国家の枠組みを超えた共同体の設立が進んでいる。いうなれば、さしずめ、地球連邦軍——あるいは人類軍と呼べるような存在である。後者の単語を聞くと嫌な予感を覚えるのは何故だろうか。

自己の利益のために人類を裏切り、対話と共存の道を模索し始めた

異星人に核兵器を落として関係を悪化させたり、本人の意思と関係なしに制御し操る特攻兵器を開発したりした“あん畜生”が立ち上げた組織の名前もまた、人類軍だった。

人類軍の役割は、以前問題を起こした独立治安維持部隊と同じようなものだ。反乱分子と断じた人々を、容赦なく虐殺／破壊し、肅清していく。そうして、自分たちこそが絶対正義であると情報統制し、民衆を管理する。それが原因で起きた争いを、ビリーは『知っていた』。そういえば、近々独立治安部隊が結成されるという話を聞いた。叔父のホームマーが独立治安部隊の司令に任命されたそうで、彼は自分や金髪の男に「独立治安部隊へ参加しないか」と声をかけてきている。ビリーも男もまだ返答はしていなかった。自分は興味がなかったし、男はまだ心身ともに回復していない。

金髪の男の部下たちは、色々思うところがあつたようだが、最終的には全員が独立治安部隊に所属することになったそうだ。

『今度新設されるアロウズは……』

テレビ／ラジオから聞こえてきた話に、ビリーはふと顔を上げた。聞き覚えのある単語が聞こえてきたためだ。

独立治安部隊、アロウズ。叔父が司令に任命された組織だ。数か月前に発生したテロを受け発足したばかりだと聞いている。

だから、以前からその言葉に聞き覚えがあつたのだ—————と思ひ、しかし、ビリーは首を振った。

違う。自分もつと以前から、この組織のことを『知っていた』。その詳細を思い出そうと目を閉じる。

『これでは、■■■■の再来だ……！』

脳裏に『視えた』のは、紛糾する議会の様子だった。生中継の映像を食い入るようにつめていたのは、ビリーと同じ格好の男性である。隣にいたのは、恩師とよく似た老紳士だ。親友の1人が身を寄せ

る遊撃部隊の扱いについての話だったため、議会の行方が気になっていた。

画面の真ん中では、色黒で小柄の禿げ頭が演説している。遊撃部隊を宇宙の侵略者呼ばわりし、彼らを討つための算段を整えていた。政治家の連中は皆バカばかりで、誰一人として遊撃部隊が世界のために戦っていることをわかつろうとしない。男性と老紳士もぎりぎりと歯を食いしばりながら、議会を見守っていた。

(……虚憶きよわくの中で見た、人類軍と似たような役割を持っていた。忌まわしきもの”の再来)

その「忌まわしきもの」の名前は、一体なんだったのか。
今のビリーには、思い出すことはできなかつた。

女性と顔を合わせたのは、本当に偶然だった。

しかし、正直なところ、ビリーは女性のことが苦手であった。

女性とは顔を合わせたことがある。彼女は相変わらず絢爛豪華な着物を着ていた。以前見た花が描かれた桃色の着物とは違い、今日は、黄金の蝶が描かれた赤と黒基調の着物である。親友が亡くなつてから、彼女は意気揚々とした表情をするようになったとビリーは思う。

彼女が近くにいるということを感じ取っていた親友は、そのどす黒い悪意にあてられて体調を崩していた。寒気が止まらないと言っていたことを思い出す。今ならば、ビリーも彼の気持ちがよくわかつた。今この瞬間も、寒気が止まらない。女性は笑っていたけれど、腹の底からどす黒いものを感じるためだ。

どうして女性がここにいいのか、ビリーにはまったくわからなかつた。

た。女性はMS研究は専門外だったし、MSパイロットとしての訓練も積んでいないし、軍人の遺族であるだけで、彼女本人は軍とは全く無関係な民間人である。なのに、どうして彼女はビリーの研究室に入ってしまったのだろうか。

普通、一般人が研究施設に入るためには、それなりの手続きが必要はずだ。手続きをしてきたなら、その旨が職員全員に連絡される。だが、今日は来客があるなんて話は一切聞いていない。端末で確認しても、そんなものはなかった。

無断で入ってきたなら問題になる。警報システムは大音量で鳴り響いているだろうし、警備員が血相変えて走り回っているはずだ。しかし、研究所は平穏そのもの。平時よりも静かすぎるような気がしたが、主な異常は発生していなかった。

「何故、貴女がここに？」

痛いくらい静かな研究室に、ビリーの声はやけに響いた。緊張しているためか、自分の声はやや硬い。女性は相変わらず、優雅な笑みを浮かべていた。

「貴方に見てもらいたいものがあって」

女性はそう言って、ビリーに包みを手渡した。おずおずと受け取り、封を開ける。中身は、何かのシステムを組み立てるためのプログラムが入ったチップだった。

彼女の意図が分からない。眼差しでそう訴えれば、彼女はますます笑みを深くした。悪寒が背中を駆け抜け、冷や汗がこめかみを伝い落ちる。意味もなく、ぞつとした。

「ゼロシステムというの。未完成で欠陥品のプログラムだけど、これを解析してほしいのよ」

いっただろう。かつて、自分は似たような状況におかれた経験が『あつた』はずだ。ビリーは頭を回し、思い出そうとする。

実験。解析。勝利を演算するシステム——断片的に浮かんできた単語は、しかし、女性の言葉によって遮られた。

「ユニオンの技術的権威は失墜の一途を辿っている。……このまま埋もれてしまったら、フラッグの後継機開発も消えてしまうわね」
「!!」

ビリーは思わず息を飲んだ。

恩師や親友が亡くなって、高嶺の花が転がり込んで酒浸りの日々を送っている中、進めることができなかつた後継機開発。亡き親友や生き残った親友たちが楽しみにしていた、大切な約束だった。

ユニオンが誇るMS開発の権威を失い、恩師の後釜に収まった自分がこんな状態だったのもあって、地球連邦および独立治安部隊アロウズの主戦力開発の座を人革連に奪われてしまったのである。

それが、ユニオンの技術的権威の失墜を象徴していたことは知っていた。どこかで自覚もしていた。でも、ビリーは何もしなかつた。何かを成せるような状態ではなかつたのだ。そんなこと、言い訳にもなりはしないのに。

フラッグの系譜を託された自分にしかできないことがある。ユニオンの精鋭——フラッグファイターの誇りを、ビリーは間近で見ってきたのだ。恩師が、親友たちがフラッグに情熱を傾けていた姿を。

このまま、フラッグの系譜を絶やしたいとは思わない。このまま、何もせずにだらだらとした日々を送るべきではないとは分かっている。踏み出すきっかけがないのだと、自身に言い訳していたことも認めよう。

『楽しみだな、新型機』

亡き親友の声が木霊する。

白衣を着た男を愕然とした表情で眺めていたのは、仮面で顔を隠した金髪碧眼の男だった。

目の前にいる男2人は、誰かに似ている。ビリーがそれを考えようとしたとき、不意に肩を叩かれた。振り返れば、怪訝な顔をした警備員。何かあったのかと訊けば、彼は苦笑した。

「いや、先程女性とすれ違ったような気がしたんです。おかしいですよね、今日は来客なんて誰も来ないので」

警備員は笑いながら、廊下の向うへ消えて行った。それを見送り、ビリーは再びチップへ視線を向ける。女性が言うようなシステムのプログラムが入っているとは到底思えない。

もし、女性の言葉が本当だとしたら——そのシステムを、自分は解析および制御することは可能だろうか。いや、そこまでできなければ、ユニオンの技術的権威を引き上げることは不可能である。

そんなことを考えていたら、不意に、また、脳裏に光景が『浮かんだ』。笑い続ける男と、それを愕然とした表情で眺める仮面をした金髪碧眼の男。誰かによく似た男たちの後ろ姿は、薄闇のボールがかかっていてよく見えない。

『□□□□……』

仮面の男が、茫然と男の名前を呼んだ。

笑い続ける男は、親友に名前を呼ばれたことに気づかない。

『キミも、魔道に堕ちたのか……』

狂ったように笑い続ける男に、仮面の男の言葉は届かなかった。

その光景が消え去る直前、白衣を着た男が不気味な笑みを浮かべながら振り返る。

眼鏡をかけたその男は、ビリーと瓜二つの顔をしていたような気が

した。



静かな風が吹いていた。

共同墓地には、真新しいものが沢山並んでいる。国連軍とソレスタルビーイングの最終決戦で亡くなった兵士たちのものだ。その中に、『Kugoo Haganee』と刻まれた墓石があった。

ユニオンの精鋭／フラッグファイターに所属していた空軍MSパイロット。二つ名は“空の護り手”。グラハム・エーカーの親友であり、彼の副官を務めていた東洋人男性である。

墓前にはたくさんの花が供えられている。そのすべては、彼の死を悼む人々のものだった。その量からして、一目見れば、その人物がどれ程慕われていたかは明白だ。

その墓前に、2人の男女が立っていた。

女性は黒髪黒目の東洋——日本人であり、花が描かれた豪華な桃色の着物を身に纏っている。『死者に花を手向けに来た格好』としては、あまりにも場違いな格好だった。死者を悼む気持ちなど一切感じない。むしろ、その人物が亡くなったことを喜んでいるかのようだ。

男性は金髪碧眼の白人で、端正な顔立ちだった。だが、顔の左半分には痛々しい傷跡が刻まれている。先に行われた国連軍とソレスタルビーイングの最終決戦で、男性は心身ともに深い傷を負ったのである。終戦から時間が経過したとはいえ、傷はまだまだ癒えていない。

「カタギリに、ゼロシステムあんなものを与えたのは、貴女なのか」

男は藪から棒に問いかけた。女性はきよとんとした表情で首を傾げる。

だが、男は引かない。屹然とした眼差しで、再び問いかける。

「彼と彼女を手にかけてたのも、貴女なのか」

問いかけの形を取ってはいるが、もはやそれは確信だった。女性の漆黒の瞳と、男性の翠緑の瞳がかち合う。バチバチと火花が爆ぜっていた。

女性はくすくすと笑うだけ。男は黙って女を睨むだけ。そんな時間がどれくらい続いたのか、わからない。静かな風が吹き抜ける。

「だから、何?」

「!!!」

女性は悪びれる様子もなく肯定した。男は反射的に拳を振り上げる。

「アタシに何か起きれば、貴方のお友達は精神崩壊する手はずになっているわ。アロウズに所属する貴方の元・部下たちも、安全じゃないかも」

女性の言葉が意味している内容が無視できるほど、男は非情な性格ではなかった。むしろ男は、「気さくで面倒見がいい」と言われる部類に入る。

だが、予想もしていない人間からの脅迫には驚きを隠せない。男は大きく目を見開き、口元を戦慄かせる。この場で男が動けば、そのしわ寄せが仲間たちに及ぶのだ。

親友が命を賭けて守った者たち。自分に託された者たち。部下や親友の顔が浮かんで消えていく。いつの間にか、男は振り上げかけ

ていた拳を下していた。

それを見た女性は、笑みを深くする。

対照的に、男は唇を噛みしめる。

「ところで貴方、刹那・F・セイエイに会いたい？」

刹那・F・セイエイ。男にとって、大切な女性の名前だった。自分が見殺しにしてしまった、運命の人。

しかし何故、女性がそんなことを訊いてくるのだろう。先程女性は、男の問いかけに肯定で返した。彼女——刹那・F・セイエイを殺したと、認めた。

女性の口ぶりはまるで、刹那が生きていると言わんばかりである。どういふことだと問いかけようとした男に、女は不気味な笑みを浮かべて迫る。

「彼女に会わせてあげるわ。だから——」

「断る。私は彼女と約束した。……生きてくれと、言われたんだ」

男は女の言葉を遮った。彼女の元へは逝けない——その想いをこめて、男は女を睨む。何がおかしかったのか、女は思い切り吹き出して嗤った。

「貴方、自分に選択権があると思ってるの？ 馬鹿みたい」

女は笑っている。しかし、その目は一切笑っていない。

黒曜石のような瞳の奥に、絶対零度が揺らめいている。

「アタシの意に従わないなら、彼女も死んじやうわね。せつかく生き残ったのに、貴方のせいで」

「——生きている？ 刹那が？」

女の言葉に、男は思わず息を飲んだ。女はますます笑みを深める。気のせいか、顔を覆う影が多くなった。

「彼女に会いたいでしょう？ 仲間たちにも死んでほしくないでしょう？ 返答次第では、あの子が守り抜いた人たちを、あの子の親友である貴方が危機に晒すのよ。耐えられるの？」

試すように女が問う。男は大きく目を見開き、口元を戦慄させる。この場で男が動けば、そのしわ寄せが仲間たちに及ぶのだ。

親友が命を賭けて守った者たち。自分に託された者たち。部下や親友の顔が浮かんでは消えていく。そして、愛する人の穏やかな表情も。

それを見た女性は、笑みを深くする。対照的に、男は唇を噛みしめる。

「何が望みだ」

呻くように、男性は言った。女性は満足げに笑い、男の胸倉をつかんで引き寄せる。

女性は、まるで内緒話をするかのように、呟き程度の声量で、男の耳元に囁いた。

「——アタシの人形オモチャになりなさい、グラハム・エーカー」

例えるならば、それは、鳥籠に閉じ込められた鳥。あるいは、磔にされた人間。自分の体中に鎖が巻かれているような状態だろうか。そんなイメージを抱いていたせいか、どこかから鎖の音が聞こえてき

そうだった。

顔の左半分に傷を持つ金髪碧眼の男——グラハム・エーカーは、ベッドからのろのろと体を起こした。自身にまとわりつく不快感は消えてくれないし、頭を浸食するような頭痛にも慣れない。吐き出した吐息は、情けない響きを宿していた。

体中、冷や汗でべたついていて倒れてしまいそうなきを叱咤し、グラハムはシャワー室へ直行した。やや乱暴な手つきで、汗と不快感を洗い流していく。鏡に映った自分の顔は、自身でもため息をつきたくなるくらい荒んでいる。

歪なくらい研ぎ澄まされた翠緑の瞳は、フラッグファイターとして戦っていた頃の名残は見当たらない。心なしか、濁っているようにも感じた。

部下や同僚、友人たちから「顔つきが変わった」と言われる理由も、今なら分かる。そこにいたのは、形相だけが修羅そのものの、空っぽな人形だ。

「……………」

グラハムは口を動かす。だが、掠れた声が漏れるだけだ。

ずきりと頭が痛む。今までの出来事が走馬灯のように点滅し——しかし、その大半が穴だらけだった——流れていく。よろめいた体を支えるように、グラハムは壁に手をついた。

荒い呼吸が部屋に反響した。これは、肉体的な苦痛からだけではない。奪われたもの／人質にされてしまったものが増えていくことに対する焦燥も入っている。

情けない、と、グラハムは思った。何て無力なのだろう、と、歯を食いしばる。このまま生き続けたとしても、果たしてそれは「生きている」と言えるかどうか。

ふらつきながら脱衣所に戻れば、籠の中に置かれた私物——親友の遺品である守り刀が目に入る。守り刀と銘打たれているが、その切れ味は、ホーマー司令も喰るほどのものだった。実際、試しに振るって

みたこともある。

グラハムはじつとその守り刀を見つめた。「誇りを汚され、生き恥を晒すくらいなら死を選ぶ」というのが武士の生き方だと聞いたことがある。女の人形と化してしまった自分は、ヒトとして大切なものを次々と奪われ、人質にされてきた。

それがエスカレートしていけば、自分は、ヒトですらいられなくなる。ただ、女の命令に対し、忠実に動くだけの傀儡と成り果てるだろう。「傀儡にならなければすべてを失ってしまう」という事実を植え付けられてしまっている自分は、逆らうことなど不可能に等しい。

だから、だろう。

時折、自分が生きているのか死んでいるのか、わからなくなる。

(……ならばもう、いつそのこと……。私が私でいられるうちに――)

守り刀を鞘から引き抜く。白く輝く刃が目眩しい。これで腹を突けば、グラハムはヒトとして死ぬことができるかもしれない。

武士が自害を選ぶのは、自分が自分であったと示すための意味もあったのではないだろうか。最後の最後まで、気高く力強い存在のままでいたかったのでは、と。

今のグラハムも、自刃を選んだ武士の気持ちが変わりそうな気がする。引き寄せられるようにして、その刃を自分に向け――手を、止めた。

『生きることをやめてしまったら、明日を掴むことなんてできないだろう』

声が出た。懐かしく、愛おしい相手の声だった。

『お前も、生きろ。——生きてくれ、グラハム・エーカー』

そうして、少女は微笑んだ。

戦いを始める直前に見せた、柔らかな微笑を浮かべて。

グラハムは大きく目を見開く。溢れる感情そのままに、記憶の中の少女に微笑み返した。

この少女こそ、死を選ぼうとする自分を押しとどめ、繋ぎ止めてくれる存在。

道下と化し、人形になつてでも、グラハムが生きようとする理由そのものだ。

彼女の名前を呼ぼうと口を開き——グラハムは、絶望へと突き落とされた。

(思い、出せない……!!)

文字通り、すべてを賭して愛した少女の名前だった。彼女は、その名前を告げるのに、途方もない勇気を必要としていた。告げられたそれは、彼女の信頼と祈りの証だった。

『永遠よりも長い時間の中で切り取られた、一瞬よりも短い時間——意味は、きちんと覚えていたのに。そこまで考えて、己の状況を思い至り、グラハムは愕然とした。

少女の名前すら、奪われた／人質にされてしまった。その事実が重くのしかかってくる。女の魔の手は、もうそこまで伸びてきたとでもいうのか。

(いつかは、この想いすらも——)

考えるだけでぞつとする。グラハムを支え、突き動かす約束や感情すら、あの女に奪われて／人質にされてしまうのだろうか。奴だったらやりかねないという予感があった。

守り刀が手から離れ、乾いた音を立てて床に落ちる。グラハムはそのまま床にへたり込んだ。体中に寒気が走り、手足が小刻みに震える。立たねばならぬと言うのに、体が動かない。落ち着こうと試みるが、呼吸はどんどん荒くなっていく。

脳裏に浮かんだのは少女の後ろ姿。グラムが愛した運命の人。グラムが助けることができなかった、大切な人だ。「少じ——」そこまで口に出して、けれどグラムは、その先の言葉を飲み込んだ。伸ばしかけた手を戻し、首を振る。

振り返った少女は、汚いものを見るような眼差しでグラムを見下ろしている。拒絶するような、蔑みを宿した赤銅の瞳。彼女の口が動き、言葉を紡ぐ。その意味を、グラムは痛いほどに『わかっていた』。否定はしない。否定できるような状態ではないし、言い訳もできない。今のグラム・エーカーは、件の少女に対する不貞行為を働いたも同義だ。そうしてこれからも、この裏切りを続けねばならない。

大義名分なんて関係なかった。悲鳴を上げて縋りつく資格など、自分にはなかった。己の女々しさと情けなさに反吐が出そうになる。あの日、自分が望んだ明日は、今の自分ではもう届かないものになってしまった。

(……………それでも)

あの日夢見た明日に手が届かないと言うのなら、せめて、生きていくというのなら——もう一度、少女に会いたい。

「少女」

囁くようにして、グラムは零す。

「はやく、キミに会いたい。……私が我慢強いことは、知っているだろう?」

もう時間がないんだ、と、呟いたグラムの声は、あまりにも頼りない。

自分が自分ではなくなる前に、どうか。はやく、はやく——。

「……私を、見つけてくれ」

そう呟いて、グラハムは深々と息を吐いた。深呼吸を繰り返し、どうにか体に力が入るようになる。立ち上がったグラハムは、着替えに手を伸ばした。

独立治安維持部隊アロウズに所属する者が身に纏う深緑の軍服を着て、その上から陣羽織を羽織った。いつぞやの京都旅行で、少女が「似合う」と言ってくれたものだ。

どうやら、京都旅行の記憶はまだ奪われていなかったらしい。奪われていないものを見つかけられると、泣きたくなるくらい安心する。

『誕生日おめでとう、グラハム』

『おめでとうございます、グラハムさん』

『……誕生日、おめでとう』

親友たちからのサプライズ。誕生日のお祝いとして手渡されたものの数々を、グラハムはまだ覚えていた。覚えていられた。それらすべてを、今も大切に使っている。

親友からは箸を、親友にとつての運命の人からは日本の伝統技術で作られたカップを、グラハムが愛してやまない少女からは空色の扇子とつがいのお守りを。特に少女からの贈り物は、肌身離さず持ち歩いている。ソレスタルビーイングと国連軍の最終決戦のときもだった。

GNフラッグが大破するほどだったというのに、扇子にもお守りにも、傷や焦げ跡はついていない。あの日彼女から贈られた、当時の姿のままだ。まるで、少女への想いの強さがそのまま表れたかのようだった。グラハムは慈しむようにしてそれらを撫でる。

先程自分を蝕んでいた負の感情が、あつという間に消えていくのを感じた。自分の現金さと弱さに苦笑する。

『でも、不思議だ。……あんたが言うと、希望が見える』

『俺のような人間でも、あんたの言う“明日”を手にかけることができ

るのではないか、と』

そう言った少女の気持ちが、今なら分かるような気がした。
もつとも、自分と彼女の立場が、完全に逆転したためであるが。

「出番よ、私のお人形」

「ああ」

背後から聞こえてきた声に、グラハムは苦々しく歯噛みした。女にばれないようにため息をつき、仮面へと手を伸ばす。京都旅行で購入した、顔を覆うタイプのものだ。

それでもう、己の意志と願いを持ったグラハム・エーカーという男は存在しなくなる。ここにいるのは、女の傀儡として戦場へ赴く、修羅の顔をした空っぽの人形でしかない。

アロウズの中でも独立行動権を与えられた、ライセンサーの1人。周囲からは独断行動ばかりする問題児だと称されているが、男からしてみればアロウズの行動原理がおかしいのだ。

もつとも、アロウズに所属する一般兵や士官たちの言い分はわからなくもない。虐殺に異を唱えながらも、仕方なく従っている者も少なくないのだ。断れば、自分が戦犯として裁かれる立場になる。虐殺に参加せずとも咎められない自分が異端なのだ。

彼らが自分に向ける嫌悪は、自分たちがそれを成せないという憤りも含まれているのだろう。世の中とは世知辛いものだ。第三者は男が自由に行動しているように見えるらしいが、男の真実を知ったら、彼らはどう思うのだろうか。

夜明けの空。遠くに残る藍色の部分には、まだ星々が瞬いている。

「……む？？」

一瞬、何かが星の間を飛んでいった。いつか見た、緑色の光。ガンダムから溢れる、緑色の粒子だ。思わず、男は目を見開いてその奇跡

を追いかける。

あの光は、太陽炉搭載機以外のMS——即ちガンダム以外が出すこととはない。地球連邦が使うMSに搭載された疑似太陽炉は、赤い色をばらまく。

もう一度目を凝らす。白と青の機影が『視えた』。思わず、男の表情が綻ぶ。

次の瞬間、男の脳裏に何か『浮かんだ』。宇宙の闇を切り裂いて飛ぶ、見覚えのあるMSが。

自分たちが愛し、育てた機体。ユニオン最強のMS。ユニオンの精鋭であることを示す名前。

その面影を宿した機体は、群青あおい光を纏っている。その様はまるで、流星のようだった。

「——フラッグ？」

男の問いかけを肯定するかのように、MSは宇宙そらを翔る。

男の意識が現実に戻ってきたとき、遠くの空に、青く瞬く美しい光が見えたような気がした。



吹きすさぶ風は砂埃を舞い上げる。砂漠生まれで砂嵐には慣れていたが、だからといって、何ともないわけではない。

佇んでいた人影は、ボロボロの機体を見上げていた。黒髪が風に揺れる。中東生まれであることを示す、浅黒い肌が露わになった。

赤銅の瞳はしばらく機体へ注がれていたが、ふと、その女性は胸元へ視線を落とした。飛翔する天使が描かれたシエルカメオが、淡い光

を放っている。

青い光。女性を愛し、女性が愛した男が思いを馳せた、美しい空色。懐かしさと愛おしさが込み上げて来て、女性は慈しむような手つきでそれに触れた。

「グラハム」

愛した男の名を口に出す。それだけで、どうしようもなく心が震えた。

自分がいなくなった世界で、彼は今、どんな風に生きているのだろう。

あのととき——最終決戦で彼を庇った後、女性は、大破した愛機と一緒に暫く宇宙を漂っていた。思い直せば、生きていることが奇跡に等しい状態だったと思う。愛機は修理すれば充分動いたし、自分の傷もほぼ軽傷だった。

砲撃を喰らったはずなのに、損傷度合いがはるかに低い。その理由が分からなくて首を傾げれば、青く輝くシエルカメオが目に入った。命の光。自分の仲間だった歌姫が言っていた色と同じ、透き通った群青^{あお}。それを一目見たとき、女性は直感したのだ。「自分は、愛する男に守られたのだ」と。

彼を守ったつもりだったのに、最後まで自分は彼に守られていた。彼を幸せにしたかった筈なのに、いつの間にか自分が幸せになっていた。女性は深々と息を吐く。

「俺は、生きている。この世界の行方を、見届けるために」

あんたはどうなんだ、と、本人に代わってシエルカメオに問いかけてみた。勿論、返事なんて聞こえるはずがない。

何をバカなことをやっているのだろう。女性が苦笑したとき、シエルカメオが淡く光を放ったような気がした。

命の光は消えていない。女性を慈しむかのように瞬くそれに、胸が

じんわりと温かくなる。

もう動かない端末を引つ張り出す。互いが互いに贈ったつがいの片割れが揺れて、鈴の音が鳴り響いた。離れていても互いを想いあう恋人たちが持つお守り、と、自分たちに巻き込まれていたフラッグファイターが言っていたか。

ソレスタルビーイングにやって来た頃は、自分にとって、こんなにも大切な相手ができるだなんて思わなかった。想いあえる相手と出逢えるとは思わなかった。そうして、その事実をためらいなく受け入れることになるとも。

この世界に神はいない。でも、彼がいた。だから、自分は今、ここで生きている。生きて、明日を追いかけているのだ。女性は眦を吊り上げ、まっすぐ前を向いた。そうして、ボロボロの機体へと飛び乗る。

「行くぞ、エクシア」

間もなく、機体は空へと飛び立つ。夜明けの空は、どこまでも美しい。

気のせいか、薄闇の向うに青い光が流れたような気がして、女性は顔を上げる。予想は的中していたようで、青い流星が空を横切っていたところだった。

流れ星に願えば願いたい事が叶う——なんて、昔聞いた話を思い出す。自分にも無邪気な頃があったのだ。女性はふっと口元を緩めると、静かに、旅の続きへと戻っていった。

1st編 最終確認

「大丈夫だ、これで1stシーズンが完結だから」『4
7. 行く者、見送る者、去る者、還る者』く『54.
This concludes……?』までの中心オ
リキャラまとめ

名前：クーゴ・ハガネ／刃金はがね 空護くうご

性別：男性

年齢：28歳

誕生日：12月22日（山羊座）

身長：169cm

体重：??kg

血液型：B型

所属：ユニオン軍／オーバーフラッグス部隊

搭乗機体：GNフラッグ

主に交流のある人物：グラハム・エーカー、ビリー・カタギリ他

特筆事項

・元々の国籍は日本。しかし、ユニオン軍に所属するために国籍を
変更した。

・家族構成は母・櫻華おうか、双子の姉・蒼海あのみ。その他、親戚多数。

・最大の天敵は蒼海。彼女になじられ蔑まれても、押し黙ったまま
でいることが多い。

・MSWADの精鋭で、階級は中尉。グラハム・エーカーの相棒お
よび副官と言える人物。
コウアレンター

・共有者能力持ちで虚憶保持者きよおく。

・歌い手として活動中。ハンドルネームは『夜鷹』。

・徹夜明けだとゾンビみたいになるため、ユニオン夏の風物詩とし
て怖がられている。

・ヴェーダ曰く、アルコール摂取後も危険らしい。詳細不明。

- ・料理上手。ご飯のおかずからお菓子まで幅広い。
- ・人間卒業間近であることに色々思うところがある。
- ・友人Ⅱグラハムも人間卒業間近なので心配している。
- ・空を目指した理由は、虚憶きよおくで出会った人たちから「空を目指せば会える」と言われたから。

- ・以前は外宇宙探索を夢見ていた。

- ・荒ぶる青タイプ・ブルーとして覚醒したらしいが、本人は無自覚。

『Toward the Terra』というタイトルのSF小説
を読破した。次は映画を見ようと考えていた様子。

- ・女性曰く、「夫の若い頃にそっくり」らしい。

- ・イラストを描くのがうまい。仕様画材は主にペンと色鉛筆。

- ・悪意等、負の感情を察知すると寒気がする様子。

- ・視力は両目とも2.0。

- ・世界の動きがおかしいことに気づいている。

「自分のことよりも、優秀な能力を持つ他者を評価してほしい」と
思っている。天才的な才能を持つ姉が蔑ろにされてきたことが原因。

- ・アイデアと、「また会ったら話の続きを聞きたい」と約束を交わす。

・姉に子どもがいることを知らなかった。しかし、姉から「子ども
が生まれた」という報告を貰えるほど仲が良くなかったと自覚してい
る。

- ・ Unicorn のパイロットを救出。

・2308年に行われたソレスタルビーイングと国連軍の最終決戦
の際、グラハムと刹那の戦いに横槍を入れてきた姉/M Aから2人を
庇って被弾。機体は大破し、そのまま行方不明となる。グラハムの証
言やその他諸々の要素から、行方不明が死亡に変わった。彼の墓には
花が供えられている。

蛇足

- ・イメージCV・私市淳

- ・イメージソング・『Adventure』(Alexandros)

／『そこに空があるから』(江崎とし子)

名前：イデア・クピディターズ

性別：女性

年齢：20代

誕生日：11月11日（蠍座）

身長：160cm

体重：??kg

血液型：O型

所属：ソレスタルビーイング（?）

搭乗機体：スターゲイザー

主に交流のある人物：刹那・F・セイエイ他

特筆事項

・コードネームの由来は『理想への憧れ』（ラテン語）。本名はレティシア・リン。

・特殊能力保持。能力のランクは最強と謳われる荒ぶる青^{タイフンブルー}。力の威力としては、MDを消し飛ばすレベル。

・MDに搭載されているシステムに対して嫌悪感を抱く。そのシステムが天敵な様子。

・とある事故で母を亡くし、視力を失う。しかし、すべてを『視る』目のおかげで視界に不自由はしていない。

・共有者能力持ちで虚憶^{きよおく}保持者。

・歌い手として活動中。ハンドルネームは『エトワール』。

・恋愛^{こゝろ}ごとを見ると、所構わず介入する。根掘り葉掘りするのもしれるのも好き。

・『同胞』の歴史を知っている。

・『悪の組織』およびスターダスト・トレイマーはかつての古巣。

・ソレスタルビーイングに来た際、愛機ごと一緒にやって来た。スターゲイザーはソレスタルビーイング製のものではない。

・ノブレス・アムと旧知の仲。
・只今、クーゴにロックオン中。端末の待ち受けに、4 徹明けのクーゴの写真を使っている。

・命の色は青だと思っている。

・クーゴに自分の本名を告げた。古来の日本の風習に倣ったというが……？

・彼女にとっての「機械みたいな人間」は「恐ろしい存在」と同義。実は最初の頃、テイエリアのことをそう思っていたらしい。

・トレミーのママ枠をスメラギと争っている状態。しかし、お母さん呼ばわりされることはお釣りがくるレベルらしい。但し、お婆あちゃんには相応しくないと思っている。

・2308年に行われたソレスタルビーイングと国連軍の最終決戦の際、ジンクスからリヒテンダールとクリステイナを守るために『人ならざるもの』の力を行使。ジンクスを撃退するも、守った2人から恐れられる。それがきっかけで開き直り、MDの欠陥を利用するような形でMD軍団を一手に引き受け、力を使って全機撃破する。その後は行方不明だが、ソレスタルビーイングでは彼女を戦死と判断した。

・E. A. レイトと「イニー」の間に生まれた子どもの名前と同姓同名。この少女／レテイシア・リンは、事故で両目の視力と母親を失っている。

蛇足

・イメージCV. 桑島法子

・イメージソング: 『fortissimothelultimatecrisis—』(frispSide) / 『BRANDNEWSTORY』(東京パフォーマンスドール)

名前：ノブレス・アム
性別：男性

年齢：20代（外見年齢）

誕生日：??（蟹座）

身長：?? cm

体重：?? kg

血液型：O型

所属：ソレスタルビーイング（?）

搭乗機体：H i l l ガンダム

主に交流のある人物：チーム・トリニティ、リボンス・アルマーク
他

特筆事項

・チーム・トリニティの教官。彼らを大切に想っている。

・仮面着用。素顔は不明。

・コードネームの由来は『高貴なる魂』（フランス語）。本名はテオドア・ユスト・ライヒヴァインといい、コーナー派と対立していた監視者一族の末裔。

・今はMS乗りパイロットをしているが、本業は技術職。凶面を引いたり開発を行ったりしていた。

・彼の家系——ライヒヴァインの一族は2270年代以前から虚憶きよおくやヴィジョン、コーヴァレンター能力の研究を行っていた。

・彼自身も共有者コウガアレンターで虚憶保持者きよおく。どうやら、彼の一族の中には能力に目覚めた者もいたらしい。今は天涯孤独。

・嘗て、自信と相性が悪い機体に搭乗して無茶をやらかしたため、味覚がない。但し、他人の味覚をコピーすることで代用可能。

・隣の家に住んでいた少年のことを気にかけている。彼は現在、MSの権威として名をはせる技術者となっているが……。

・アルヴァアロンおよびアルヴァトーレの凶面や機体に、しようもない悪戯を仕掛けていた。アレハンドロは最期まで気づかなかった様子。

・MDに使われた機体の原型を設計した。データをコーナー派の連

中に盗まれ、勝手に転用された。

・結婚や恋愛関係の話を振られるとダメージを喰らう様子。

・ファンングよりファンネル派。

・外見年齢と実年齢が一致していない。少なくとも70年以上生きて
いることになる。

・リボنزとのコンビネーションプラスアルファによって、アレハ
ンドロに絶望を与えたまま殺害することに成功。

・ネーナ・トリニティから好意を抱かれていることに気づいていな
い様子。

・リボنزの『同胞』であるが、イノベイドとはまた違う括りであ
る。

・人気歌手テオ・マイヤーとして活動していたが、無期限の活動停
止を宣言している。残りの新曲を出したら引退するつもりでいた。

・アレハンドロ撃破後、アオミの翔るMAに急襲される。以後の音
沙汰は不明。

蛇足

・イメージCV・置鮎龍太郎

・イメージソング・『ゴールデンタイムラバー』（スキマスイッチ）／
『月光花』（Janne Da Arc）

名前：ベル

性別：女性

年齢：20代後半

誕生日：??

身長：??cm

体重：??kg

血液型：?型

所属：『悪の組織』およびスターダスト・トレイマー

主に交流のある人物・イオリア・シユヘンベルグ、E. A. レイ、リボンズ・アルマーク他

特筆事項

『悪の組織』代表取締役にして、孤児院の元・院長。現在は隠居しているが、子どもや職員たちから好かれている。

・車椅子使用。しかし、それでも精力的に動き回っている。

・ネーナ曰く、ナイスバディ。

・夫に先立たれた(?) 未亡人。

・何やら崇高な目的がある様子。

・尊敬する相手がいたらしい。その人物の愛称は『グラン・パ』。

・愛称は『グラン・マ(おばあちゃん)』。リボンズからは『マザー』

と呼ばれている。

・各方面にコネクションがある。そのすべてが『同胞』。

・マリナ・イスマイルは、彼女の尺度で5冠殿堂入りを果たしている。

・曰く、『女性は愛でるべき存在である。夫は愛する存在である。夫以外の男は親友ダチ公である。但し例外有り』らしい。

・口説いた人間の代表格は、師匠、航海長、女史、オペレーター、技術者、占い師、幼馴染の女の子たち、友人のお母さん等々。当時3歳だった。

・エルガンに対して厳しめなのは、彼が例外にカテゴライズされているため。

・凶面は綺麗に引けるが、絵はヘタクソ(エルガン談)。女性はみんな美人に描ける。男性は、夫以外変な絵になる。夫でさえ美形10割増し。

・ナスカという星の生まれだが、故郷はもう存在していない。惑星を破壊する兵器によって滅亡した。

・宇宙を流浪していた『同胞』から別れて、この地球にやって来た。元々『同胞』たちは青い星^{テラ}を目指して旅をしていたらしい。

・同じ星で生まれた幼馴染は9人いた。名前はそれぞれ、トオニイ、アルテラ、タージオン、タキオン、コブ、ツエーレン、ペスタチオ、エ

ルガン、イニスという。

・トオニイは『同胞』のリーダーをやっていた。『同胞』では、指導者のことを『ソルジャー』という称号で呼ぶ。

・そのうち、青い星^テを^ラ目指す旅路で亡くなったのは、アルテラ、タージオン、コブ。

・旅路の中で、『牙』として多大な戦果を挙げていた様子。

・スターダスト・トレイマーのリーダー。

・ベルというのは愛称。本名ではない。

・死ぬ間際のアレハンドロに何かをやった。復讐はこれで完了したらしい。

・イオリア・シユヘンベルクの妻であるベル（Not本名）と同一人物。しかし、イオリアのようにコールドスリープしていた訳ではなく、200年間ずっと生きてきたらしい。

・200年前と姿形が変わっておらず、老衰もしていない。

蛇足

・イメージCV・神田沙也加

・イメージソング：『フレンズ』（ステファニー）／『This Night
ight』（CHEMISTRY）

『大丈夫だ、問題しかないから。—Blue trajectory—』
jectory— <1st Season>』における00メイン勢のまとめ（このお話の主要人物のみ）

『グラハム・エーカー』

このお話における立ち位置は「クーゴ・ハガネメイン主人公の相棒」。そのため、必然的に、実質的な「00勢メンバー側の主人公」である。むしろ、クーゴの方が「グラハムを第三者的視点から語るべくして生まれた存在」である。

ヒロインは刹那・F・セイエイ。そのため、刹那にアタックする様子は原作を斜め上にかつ飛び、度合いもとんでもない状態になってしまった。しかし作者には一抹の後悔もない。やり遂げた気持ちでいっぱいである。2ndシーズンでは大きく方向性が変わるが、頑張りたい。

《このお話における彼の軌跡》

ひよんなことからクーゴの任務に同行した彼は、刹那と運命的な出会いを果たす。紆余曲折あったものの、2人は着々と（??）交流を重ね、事実的な意味での恋人同士となる。後にAEUの軍事演習場でガンダム天使と運命的な出会い／刹那と運命的な再会を果たし、愛機フラッグと共に、そうと知らぬまま刹那とガンダム天使たちを追いかける。

しかし、ゲッター線の施設から現れた異形を討伐するための共闘やモラリアでの武力介入から、刹那とは「追う者と追われる者」同士の関係であることを悟った。だが、それでも、彼は「刹那を信じる」ことを選択。「今まで通りの日々を、その瞬間」が来るまで続ける「ことを選んだ。その後も着々と交流を重ね、更に深くお互いを想いあうように。

最終決戦直前に刹那と会い、互いに心を通わせ、1夜を共に過ごす。その上で、互いに「決着をつける」と約束する。ソレスタルビーイングとの最終決戦ではクーゴ共々Unicornに襲われるも、彼の言

葉に従い刹那の元に向かう。刹那と一騎打ちし、敗北。彼女の答えを見届け、クーゴと合流したのもつかの間、謎のMAに襲われる。

満身創痍で身動きができなかったGNフラッグを庇うような形でクーゴのGNフラッグが撃墜され、自身もまた、MAの追撃からグラハム/GNフラッグを守ろうとした刹那/Gандаムエクシアと共に撃墜されてしまう。「友と愛する人が自分を庇って散っていく姿を見ていることしかできなかった」という事実を重く受け止めている。

最終決戦終了後は「ソレスタルビーイングとガンダムを倒した英雄」として祭り上げられるが、本人はその事実を苦々しく感じていた。その折に、親友と愛する人を手にかけて張本人と直接対峙する。しかし、かつての部下やもう一人の親友、更には生存を知った愛する人を人質に取られ、不本意ながらもその人物に協力することを選択。

黒幕に協力していくうちに、仲間たちの命以外にも「何か」を人質に取られていく。終いには、愛する人の名前すら思い出せなくなってしまった。自分の選択によって愛する人を裏切り、不貞行為を働いているという事実メンタルが擦り切れ気味。

最終話で彼が見た「緑の光をまき散らす青と白基調の機体」と、「青い光を宿したフラッグの面影を宿す機体」および「青い光」の正体を知る日は、もう少しだけ先の話である。

【刹那・F・セイエイ】

原作とは違い、性別は女の子。このお話における立ち位置は「サブメイン主人公の相棒」にして、「グラハム・エーカーのヒロイン」である。むしろ、イデアの方が「刹那を第三者的視点から語るべくして生まれた存在」である。

立場と想いに揺れ動く様子を書こうとしていたら、いつの間にか彼女の性格（対グラハム）がツンデレ↓デレ過多気味になってた。特に幕間の刹那・F・セイエイシリーズが。しかし作者には一抹の（ry）。2ndシーズンでは彼女の活躍に焦点を当てたいと考えている。

《このお話における彼女の軌跡》

ユニオンの共有者^{コーヴァレンター}がアイデアに接触しようとしていることを察知したヴェーダの指示により、アイデアの護衛任務で彼女に同行した。結果、そこでグラハムと運命的(?)な出会いを果たし、彼に執拗に愛を囁かれることになる。最初は全力であしらっていたが後に絆されていき、事実的な意味での恋人同士となった。

しかし、自身の立場と自分たちに待ち受ける運命の間で悩むことになる。ゲッター線の施設から現れた異形の討伐するための共闘やモリアでの武力介入を経て、グラハムが自身の正体に気づいたことを察知し、自分の正体と本音をグラハムに明かした。

罰を受けることを覚悟していたものの、「今まで通りの日々を、その瞬間」が来るまで続ける」ことを選んだ彼の答えを受け入れた。その後も着々と交流を重ね、更に深くお互いを想いあうように。最終決戦直前にグラハムと会い、互いに心を通わせ、一夜を共に過ごす。その上で、互いに「決着をつける」と約束する。

国連軍との最終決戦では総大将のアレハンドロ・コーナーを撃破後、グラハムと一騎打ちを行い、勝利。「明日のために生き残る。そのために戦う」と答えを示し、満身創痕のグラハム/GNフラッグと「己が望んだ決着」を付けた。グラハムもそれを受け入れる。

直後に謎のMAに襲撃されるも、後からやって来たクーゴのGNフラッグに庇われる。クーゴのGNフラッグが撃墜され、MAがグラハムのGNフラッグに攻撃を仕掛けようとしたことを察知した刹那は、彼を庇うものの、共々撃墜されてしまう。

最終決戦終了後は世界の変革を見届けるために放浪している。MAの攻撃が直撃したにも関わらず、思った以上に破損と怪我が少なかったため、生存した。自分が助かった理由はよくわかっていないが、グラハムに守られたと本能的に察知している様子。

この時点では、刹那はまだグラハムの状態を知らないでいる。

【ネーナ・トリニティ】

このお話における立ち位置は「サブメイン主人公の教え子」にして

「サブメイン主人公の大ファン」であり、「ノブレス・アムのヒロイン」。但し、ノブレスの攻略難度は無駄に高い。彼女が彼を攻略できるか――1stシーズンでは進展完全敗北なしした模様。2ndシーズンに全力を賭けるつもりでいる。

ノブレス含むその他勢のおかげで、原作のような凶気は大分緩和された。しかし、シミュレーターでの訓練（某女の敵を護衛するミッション）等でその片鱗が顔をのぞかせている。他にも、原作ではなかった組み合わせとしては、リヒテンダールと絡んでいた。2nd編でも新たな絡みに挑戦していく所存である。

《このお話における彼女の軌跡》

ノブレスが教官となった当時は反発していたらしいが、一緒に日々を過ごしていくうちに彼を慕うようになる。ノブレスやその他関係者たちとの交流もあって、性格やその他諸々が人間らしく矯正された。その過程の中で売れっ子アイドルのテオのファンになる。ライブにも頻繁に参加し、CDやグッズを集めていた。

ソレスタルビーイングのセカンドチームとしてタクマラカン砂漠で初陣。組織のルールに則って武力介入を行っていたが、アンノウンの嫌がらせによって罪を着せられてしまう。AEUの結婚式場付近で行われた偽物との直接対決では、日ごろの訓練の成果で彼らを追いつめたが、彼らの「とっておきの呪文」の前に敗れる。

偽情報に踊らされてしまったトレミーチームと対決する羽目になったが、ヴェーダが正しい情報を示してくれたおかげで和解。刹那からは「お前たちもガンダムだ」と最高の褒め言葉を貰い、リヒテンダールとは恋愛における利害一致でのタッグを組むことになった。彼らと別れた後も、組織のルールに従って行動していた様子。

しかし、ミッション中に告死天使からの襲撃を受け、「自分たちが使い潰されるために生まれた」ことを思い知らされて絶望してしまう。教官であるノブレスにも見捨てられたと思ってしまうが、ノブレス本人に助けられたおかげで精神的に持ち直した。直後、ノブレスはサーシエスによって重傷を負う。

その後は『悪の組織』に転がり込むような形になり、最終決戦に赴

くノブレスを見送っている。

【リボンズ・アルマーク】

このお話における立ち位置は「サブメイン主人公たちの相棒」にして「サブメイン主人公の息子」。原作とは大幅に立ち位置が変わっている。ラスボスではなくなった代わりに、別方面で出世を遂げる予定。

周囲の影響を顕著にうけたためか、非常に悪乗りしやすく悪戯に走る愉快犯になってしまった。1stでは（作者的に）目立った活躍はしていない。本格的な活躍は2ndシーズンになりそうである。刹那のことはお気に入り。

《このお話における彼の軌跡》

『悪の組織』の第一幹部として活躍しつつ、ノブレスと一緒にアレハンドロの監視を行う。アレハンドロは「おちよくる相手としては気に入っていた」が、内心では父と慕っていたイオリアを殺されたことで、最終的に当初の目的を果たすに至った。

イオリア存命時に、イノベイド——特にリボンズ自身の存在意義について彼らに当たり散らしたことがある。その際、イオリアや、リボンズが母と慕う女性から「リボンズは望まれて生まれた子どもである」ことを示されたことで立ち直った。その後は長男としてイノベイドたちのまとめ役となる。

ヴェーダのアクセス権がティエリアよりも上であることを利用して、何者かにシャットアウトされていた真実を引っ張り出したり、アレハンドロのMA/MSの砲撃や動きのタイミングを（紙一重で）トレミーチームに有利になるよう調節したり等の黒子的な働きを見せていた。

【王留美】

このお話における立ち位置は、「ラスボス陣営」。原作とは大きく立

ち位置が変わった人間であり、大出世を果たし／果たす人間でもある。

詳しい話はできないが、代わりに言えることはただ1つ。2nd シーズンをお待ちください。

《このお話における彼女の軌跡》

ソレスタルビーイングのエージェントとして活動しつつ、刃金蒼海と共に暗躍する。どうやら実兄の紅龍ホンロンにも協力させている様子。

最終決戦ではロツクオン・ストラトスの生存に失敗したことで怒り狂い紅龍ホンロンを責めたが、蒼海の指示に従って撤退した。

1stシーズン編・ラストエピソード EX—1. 赤き星の子

固く閉ざされた部屋の向うから、女性の叫び声が木霊する。痛い、痛い、苦しい、死ぬ——分厚い扉の向こう側から、女性の思念が伝わって来た。

廊下に並んだ男は、完全に無力であった。自然分娩および出産というものが、こんなにも愛する人にとって大変なことだなんて思わなかったのだ。

スベリオル トミナント
S・D体制になってから、人類は自然分娩をやめて試験管による精子と卵子の雑交配制度を導入し、そちらの方を普及させた。このS・D体制下では、子どもといったら「不特定多数の精子と卵子を受精させ、試験管の中で育てられたのち、養父母の資格を有する人々に与えられるもの」という認識である。

もつとも、S・D体制を支えるお偉いさん曰く、「子どもは健全な環境の中で育つのが当然」らしい。そのため、子どもは養父母の元で育てられる。養父母の資格を得るためには結婚すればいいのだが、子どもを養育している状態で離婚すると、養父母の資格は剥奪され、子どもの記憶も消されてしまうのだ。

本当の幸せとは何か。S・D体制の中で育ち、箱庭を享受し続ける人類は、そんなことを考える思考回路すら備わっていない。考えてしまったが最後、ユニバーサルから粛清されてしまう。「社会の秩序を壊しかねないため」というのが理由の1つであるが、人が何かを疑問に思うことがそんなにもおかしいのだろうか。

扉の向こうから絶叫が聞こえた。力んでいるということとはわかってはいたけど、内容が「死ぬ」に近いものだったので、余計に不安になってくる。

「嗚呼！ 神様、仏様、コーラサワーツ!!」

「おい、ちよつと待て。コーラサワーって何だ？」

「クレアが言ってた。ぐ利益あるって」

謎の言葉を口走ったのは、額にバンダナを巻いた茶髪の男——ラナロウ・シエイドだった。神頼みとは、S・D体制における背景や、自分自身の腕前を頼りにしている彼らしくない。余程切羽詰っているのだろう。この問題ばかりは、ラナロウがどうにかできる問題ではなかったためだ。

ラナロウにツツコミを入れたのは、制服の首元にクラバットを巻いた鷲色の髪の男——マーク・ギルダーである。こちらもまた、平時のような落ち着き払った様子はなかった。ラナロウの妻の次は、自分の妻があそこで戦う番なのだ。彼女も同じような痛みに晒されるのだと考えると気が気でないのは当然のことだった。

蛇足であるが、S・D体制になって以後、人類はグランドマザー主導の下、争いの元凶となるものを片っ端から駆逐した。特に、宗教やその他イデオロギーに関連する出来事は徹底的に封殺していたそうだ。閑話休題。

「クレアが豪運の持ち主で、そういうので生き残ってきたような奴だっただけは知ってる。わかってんだよ。でも、でもなあ……！」

ラナロウが頭を抱えたのと同じタイミングで、扉の向こうから絶叫が木霊する。子を産むときの痛み。

古い文献を読み漁って得た知識曰く、出産の痛みは「鼻から西瓜を出す」ような痛みなのだそうだ。

例えはよくわからなかったが、女性に凄まじい負荷がかかっていることだけはよくわかった。

祈ることしかできないというのは、本当に無力なものである。こんなにも近くににいるのに、当事者ではないというだけでなにもしてやれないのが歯がゆい。

古い文献では、S・D体制以前における自然分娩とは「母子ともに危険が伴うもの」だった。凄まじい痛みと、命を落とすかもしれない

リスク。これらは、S・D体制では完全に廃れていた。

「……カリナは凄いな。こんな痛みと戦って、こんな辛いことを乗り越えて、念願の母親になったんだから」

「そうだな」

数か月前、自然分娩をやり遂げた『同胞』の偉業を噛みしめるように、マークは呟いた。ラナロウも同意する。

「ユウイが頑張る理由もよくわかる。嫁さんがこんな思いをしたんだ。その間、祈ることしかできなかった。……その分を、どうにかしたいって思うんだろうなあ」

ラナロウが深々と息を吐いたときだった。

扉の向こうから、赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。ラナロウとマークは同時に跳ね起きる。先陣を切って扉を開けたのは、勿論ラナロウであった。

病室の中で、青を帯びた黒髪の女性が、汗だくになりながらもやり遂げたような笑みを浮かべていた。彼女の腕の中には、夜の闇を思わせるような黒髪の女兒が元気に動いていた。

その顔立ちは女性と瓜二つで、笑った表情なんてそっくりだった。しかし、目元はラナロウとよく似ている。きやつきや、という笑い声を聞いて、ラナロウはおぼつかない足取りで女性の元へと歩み寄った。

夫がよたよたと近付いてきた様子を見た女性は、満面の笑みを浮かべた。「私もお母さんになったよ！ 頑張ったよ！ 褒めて褒めて!!」——そんな妻の言葉と、彼女に呼応するようにはしゃぐ女兒の様子に、緊張感が切れてしまったらしい。

ラナロウは言葉にならぬ声を上げて、「お前は一体何者だ!？」と問いかけたくなるような勢いで男泣きし始めた。平時だったら絶対にはやりにそうにないが、父親になったということではテンションが振り切れて

しまったのだろう。

気が付けば、ラナロウとその家族たちの周囲には人だかりができていた。ユウイとカリナ夫婦を筆頭とした若者組だけではない。若者たちに対して反感を抱く長老——ゼルや、『同胞』たちにとっての女神であるフィシス、2代目の指導者^{ソルジャー}として『同胞』の未来を暗中模索しているジヨミーもいた。

子どもが無事に生まれたとなれば、名づけの問題が出てくる。ユウイは「お父さんとして最初に、子どもにプレゼントするものだから」と、自分で考えて命名していた。ちなみに、S・D体制下での命名は、養父母が自分たちで考えたり、養父母の関係者、あるいはユニバーサルのお偉いさんが名付け親になったりする。どれを選ぶかは本人たち次第だ。

「お前ら、その子の名前はどうするんだ？」

マークの問いに、ラナロウとその妻は顔を見合わせ笑った。

「自分たちで考えて決める」と言って、一緒に古い文献を読み漁っていたけれど、肝心の名前は教えてもらっていない。

どうやら、この場で命名発表となるらしい。2人は幸せそうに微笑み、おくるみに包まれた娘へ告げる。

「ベルフトウーロ・ティアエラ」

「ベルフトウーロ・ティアエラ・シエイド……」

ラナロウ夫妻が告げた女兒の名前を、フィシスが確認するように鸚鵡返しした。そして、ふっと笑みを浮かべる。金の長髪がさらりとゆれた。

「『未来の鐘を鳴らす者』……。きつとこの子は、誰も考えられないような偉業を成すでしょう」

未来を『視る』盲目の占い師。『同胞』の女神の言葉に、嘘はない。フィシスの託宣を聞いたラナロウ夫妻は目を輝かせると、愛娘ベルフトウーロへと向き直った。こんな小さいのに凄いね、と、妻が微笑む。

カリナに抱かれていたトオニイも、新しい友人に話しかける。トオニイは凄まじい能力を持っており、生まれてまだ数か月だというのに、平然と力を使いこなしていた。能力はジョミーやブルーと同じタイプ・ブルー荒ぶる青だ。

『はじめまして、ベルフトウーロ。僕はトオニイ。名前が長いから、キミのことはベルって呼ぶよ』

トオニイが何を言っているのか察したのか、ベルフトウーロはきやつきやと笑った。その笑顔につられたのか、周囲に集まっていた人々も笑みを浮かべた。



「ワシはな、昔は髪フツサフサのイケメンじゃったんじゃ……!」

人工ウイスキーを呷りながら、禿げ頭で白ひげを蓄えた長老が嘆きを叫んだ。S・D体制になって以後、肉や野菜、金属類等も人工で生み出すことができる。それは本物と遜色ないが、ナスカの大地で野菜作りに勤しむ若者たち曰く、「人工物は何か足りない」らしい。閑話休題。

「ゼル、飲みすぎだ。少し落ち着け」

禿げ頭の長老——ゼルに苦言を呈したのは、白髪で理知的な長老だった。片側の袖からは物々しい鋼鉄の義手が顔をのぞかせている。しかし、彼の諫める言葉は、ゼルにとっては火に油を注ぐようなものでしかなかった。ゼルは駄々っ子のように首を振り、テーブルに拳を叩きつけた。

「ワシがまだ『ミュウ』として目覚める前は、後輩の女の子がファンクラブ作るくらいイケメンじゃった。薄らとしか覚えておらんけども。『ミュウ』に目覚めて以後は、^{ダイブ・イエロー}苛烈なる爆撃手として前線で戦っていたんじゃない……！ 自分で言うのも何じゃが、かなり活躍してたんじゃない……！！ 好きな女の子だった！ お前だってそうだろ、ヒルマン……！！」

「……あー……」

ゼルの言いたいことはよくわかっていたし、彼の言葉は正しかったので、白髪の長老——ヒルマンは居心地悪そうに視線を逸らした。

ヒルマンはゼルと並び、『ミュウ』の攻撃担当として前線を張っていた。腕を失くして以後は引退して研鑽に励み、「教授」と呼ばれる程になったのだ。

攻撃面のツートップだけではなく、恋愛面での三角関係でも張り合っていた。まあ、今となっては遠い日の話であるし、その相手はこちらに振り向いてすらくれなかったのだが。

その話を聞いた褐色の肌で金髪の男も、何かを察したように天を仰いだ。彼の手にも、人工ウイスキーが注がれたグラスが握られている。頬に赤みが差しているあたり、こちらも相当酔っぱらっているようだ。

彼もまた、ゼルとヒルマンが攻撃面でツートップを張っていた頃、堅牢たる完全なる護り手として防御機構の要を担っていた。現在では艦長としてクルーに的確な指示を出している。最近では2代目^{ソルジャー}指導者に信頼される相手の1人でもあった。

過去にぐだぐだと溺れかけた大人3人組のど真ん中に、3歳程度の少女が椅子に座ってミルクを呷っていた。美しい青の瞳は、「ああもう、この大人はしょうがないんだから」という呆れを含んでいるように思う。彼女の隣には、生まれて数か月程度の赤子が能力を使って浮かんでいる。赤子は、涙目で女兒を見上げていた。

「まあ、どんなにイケメンであろうと、周囲の女の子たちの基準が大グランプじゃねえ。太刀打ちなんてできないよね」

外見が「守ってあげたい、儂い系」で、且つ、意志が強くて、仲間想いで人望が厚いイケメンだもんね——女兒の言葉に、男3人が揃って天を仰いだ。

この少女が語る大グランプとは、初代指導者^{ソルジャー}であるブルーのことだ。月を連想させるような銀色の髪に、宝玉のような紅の瞳、どこまでも透き通った白い肌、静かで落ち着いた低い声が特徴の、問答無用のイケメンである。

ブルーは当時から、外見年齢に一切の変化がない。そうして、人を惹きつける魅力の持ち主だ。カリスマ性だって持っている。虚弱体質なのはその引き換えだったのではないかと思ってしまう程、天は彼にたくさんのものを与えていた。

「もつとも、太刀打ちできないからって泣き寝入りしたら、当たり前だけど、残念な結果になるよね」

女兒は淡々と言葉を紡いだ。が、次の話題を口に出した途端、うつとりとした口調に変わる。

「しっかし、ブラウ女史っていいよね。美人だよ。包容力のある肝っ玉姐さんって感じだし、褐色の肌なんかチョコレートみたいに甘そうだし。若い頃はお転婆で可愛かったんだろうな。エラ女史はおしとやかで理知的で落ち着いてるし、年を重ねたことによる上品さ

とか、本当にたまらない。若い頃は勿論、知的なクールビューティーとして引く手数多だったんだろうな―」

うへへ、と、女兒は笑った。口元からだらしなく涎を垂らしながら、若い頃の長老（女性2人組）に思いを馳せる。

悔ることなかれ。この女兒は、女性を口説き落す才能に満ち溢れていた。何人の女子おなごを口説き落とし、「あの子が青年だったなら」と女子おなごを悲しませたであろう。

「口説き落して恋愛したい相手は女性だ」と堂々宣言し、人妻まで攻略しようと乗り出したときは、本気でどうしようかと悩んだものである。閑話休題。

今の女兒の目は、肉食獣のような目をしていて。それを見た赤子が身を震わせる。

『……ねえ、ベルは女の人がいいの?』

「そうだね。女の子可愛いもんね。女性は素敵だもんね」

『男の人で、そう思う人はいないの?』

「みんな友達だよ。あ、でも、エルガンは論外?」

『ろっ……!!?』

「いや、だって、何かある度にびーびー泣いてるんだもん。それに、殴るのも殴られるのも大好きなんですよ? そんな変態、論外よ。論外」

『違うもん! そんなド変態、僕じゃないよ!!』

女兒にバツサリ切り捨てられた赤子は、そのまま大泣きし始めた。あまりの不憫さに、大人3人も天を仰ぐ。彼らもまた、似たような状況に陥ったことがあった。

好きな女の子がソルジャー・ブルーの熱烈なファンで、「他の奴らは論外」と言っていたのを聞いてしまって泣き寝入りしたとか、丁度そんな感じである。

子ども2人のやり取りでトラウマをぶち抜かれた男3人組は、彼女

たちの親がやって来るまで、腕で顔を覆っていた。



「神様、仏様、コーラサワーツ！　もしくはキリコ・キューヴィーも連れてこい!!」

固く閉ざされた部屋の向うから、女性の叫び声が木霊する。相変わらず、訳の分からない単語だった。声の主曰く、「ご利益がある」らしい。

長らく一緒に育ってきたエルガン・ローディックとイニス・メファシエル・レイでさえよくわからないのだ。他の人間たちがわかるはずもなかった。

「レテイシアが生まれるときも、あのフレーズで願掛けしてたな」
「そのおかげか、この子もすくすく育っているわ」

銀の髪をさらりと揺らしながら、イニスは静かに目を細めた。彼女の腕には、数か月前に生まれた赤子が抱えられている。

ペールグリーンイニスの髪と紫の瞳を持つ女兒がこてんと首を傾げた。顔立ちは母親アラン、色合いは父親が遺伝したらしい。

平時は愛娘にめろめろなアランだが、友達のことは気になっているようで、しきりに扉を眺めていた。

女性の夫である黒髪の男性は、椅子に座って端末を弄繰り回している。何かの結果を確認しては、女性の叫び声に耳を傾け、再び端末をいじることを繰り返している。

「……キミ。何度ヴェーダで計算しても『母子ともに健康、問題ない』って結果以外出ないんだから、いい加減にしなよ」
「手持無沙汰とは恐ろしいものでな。今ならキミの気持ちがよくわかるよ、アラン」

男は力なく微笑んだ。自分が作ったスパコンに、母子の健康状態云々を計算させていたらしい。何て無駄な使い方なんだ、と、この場にいる誰もがそう考えた。

「しかし、ヴェーダは『キミとイニスが結婚する』可能性を計算できなかったからな。まだまだ改良を重ねる必要があるそうだ」

「改良云々はもう充分だと思っぞ」

「そうだね。結婚の件については、当の僕らも予測不可能だったしね」

一抹の不安を零した男に、エルガンとアランは苦笑した。また、背後から絶叫が響く。思わず、面々は扉へ視線を向けた。あそこで、親友である女性は「母になるため」に戦っている。その痛みを体感できない自分たちは、母子ともに無事であることを祈るのだ。

ややあつて、扉の向こうから赤子の泣き声が聞こえてきた。この場に居合わせた者たちは大急ぎで立ち上がる。扉が開かれた先にいたのは、汗だくになりながらもやり遂げたような笑みを浮かべた女性と、彼女に抱かれた赤ん坊だった。

「私、頑張ったよ！ 褒めて褒めて!!」

「ああ。ああ。凄いよ、凄いよベル」

満面の笑みを浮かべる妻に、夫は涙目になりながらうんうん頷いた。そんな彼らに、緑の髪に紫の瞳を持つ少年は気圧されたらしい。所在なさげにしている。

だが、女性は構うことなく少年を呼んだ。少年はおずおずと3人の元へ歩み寄る。

「ほら。キミのおにいさんですよー」

女性の言葉に思うことがあったようで、少年は弾かれたように女性を見た。そうして、ちよつと泣きそうな顔で微笑み、頷く。

自分は兄なのだと言い聞かせるように、少年はそつと目を伏せた。すぐに顔を上げて、女性の腕に抱かれた子どもに手を差し伸べる。子どもはきやつきやと笑い、少年の指を掴んだ。

小さな手。慣れないものに触れているという事実には、少年はおっかなびつくりしている様子だった。「人間は脆いから、慎重に触れないと……。ああもう、どうすればいいかな」と悩ましげに呟く。

女性の親友の娘で散々練習しただろう、という言葉が口から出かかったが、少年にとっては天と地の差があることはみんな知っていた。だから、微笑ましく見守ることにとどめておいた。知らぬは当人ばかりだろう。

「ベルフトウーロ」

イニスに名前を呼ばれた女性——ベルフトウーロが振り返る。イニスは静かに微笑んだ。

「おめでとう」

「うん、ありがとう！」

EX-2. 『ゼロ』が齎すモノ

「イデア総司令。フラッグ、もしくはフラッグの系譜を継ぐ機体はま
だか？」

「ごめんなさいグラハムさん。フラッグ系の機体は出てきていないん
ですよ。開発もできないみたいで……」

「……そうか」

イデアの言葉に、グラハムはがっくりと項垂れた。クーゴは肩をす
くめて天を仰ぐ。

謎の侵略者たちと戦うことになってから、もうこれで30回目のや
り取りである。突如現れたU^{アンフウン}・E^{エネミー}やELS、本来なら「それらと共に行動するはずがない」バルバトス・ニューロおよびバルバトス・ミ
ラージュの暗躍……考えるだけで頭が痛くなってきた。

限られた機体数および種類をやりくりし、敵のリーダーを最優先で
潰して機体を捕獲する作業と力を磨いて、どうにか戦力も整ってき
た。しかし、自分たちの愛機は一向に開発できる見込みはない。現在
攻略中の場所が「フラッグ関連の機体が出てくるステージではない」
から当然であるが。

先日、戦場に現れたのはアヘッド・スマルトロン。自分たちの世界
の機体ではあったものの、フラッグ関連にはかすりもしない。アヘッ
ドと言えば、戦場に何の脈絡もなしに現れたミスター・ブシドーも搭
乗していたか。フラッグよりも、そちらの開発ができてしまいそう
だ。

いや、フラッグ系の機体が開発／捕獲できたとしても、搭乗できる
かどうかは別問題だ。現在、グラハムはゴッドガンダムに搭乗し、切
り込み隊長として大暴れしていた。機体とパイロットの相性が良
かったためである。何発ゴッドフィンガーを撃ったか、全然思い出せ
ない程に。

というか、そもそも、このクルーの中で、自分の愛機に搭乗できて
いる人間は殆どいない。例としては、百式に搭乗する羽目になった

ロックオン（兄）やアヘッド・スマルトロンに搭乗する羽目になったセルゲイが挙げられた。しかも、複座敷に改造され、前者はフェルトと、後者はアレルヤと一緒に搭乗していた。

両者とも、色んな意味で居心地が悪そうである。閑話休題。

「戦力も随分揃ってきたな」

「そうですね。でも、まだまだですよ」

機体とクルーの面々を確認しながら、イデアは首を振った。最初の頃、ボロボロになりながら戦場を潜り抜けた地獄を思い返しているのだろう。

クーゴには、イデアの気持ちがよくわかる。戦力や自身の力を研鑽するためには戦いが必要不可欠だ。だが、その度に、撃墜される危険性とも戦わねばならない。

ただでさえ機体数と種類が限られていたのだ。現在では幅広く（？）開発／生産できるようになったものの、生産費用はタダではない。資金稼ぎも楽ではなかった。

もつとも、開発できる機体数はまだまだ少なかったのだが。

「刹那が体調不良だから、代わりにサブシート付のアヘッド・スマルトロン……もとい、ルイスと沙慈に頑張ってもらおうとして……うー……」

イデアは難しい顔をして、端末とミッションを睨めっこしている。スメラギに報告や相談をする前に、色々と考えることがあるのだろう。

しかし、根詰めてもうまくいかない。人間、たまにはガス抜きも必要だ。クーゴは暫し考えて、行動を起こすことにした。

おいしいものは人を元気にしてくれる、とは、クーゴの座右の銘である。何かないかとキッチンに足を踏み入れれば、そこは地獄絵図が広がっていた。

黒い。黒すぎる。鼻を突くような墨の匂いに、クーゴは思わず顔を顰めた。目の前には、肩を落として項垂れるマリーとルイスに、おろおろする沙慈とセルゲイの姿があった。

キッチンには調理道具が散乱している。どこまで乱雑にすればこうなるのだと問いたくなるような有様に、反射的に天を仰いだクーゴは悪くないはずである。

「こ、これは一体……」

聞こえてきた声に振り返れば、大量のフルーツを抱えたグラハムが表情を引きつらせている。

「お前、そのフルーツ、どうしたんだ？」

「日用品を買い出しに行ったときに、丁度安売りしていてな。刹那が具合悪そうにしていたから、キミに協力してもらおうと思って買い込んだのだが……」

黒い煙を吐き出す調理器具を見ると、彼らが正常に動いてくれるとは到底思えなかった。むしろ、メカニックたちの手による修理が必要なレベルであろう。

彼らは船や機体の修理はお茶の子さいさいだが、日用品についてはどうだろうか。MSと同じノリで大改造を施されたら——嫌な予感しかない。システムに相談してみるか。

調理器具が無事だったなら、もっと手の込んだ料理が作れたのだが。無いものねだりとしても仕方がない。頭の中で思い描いた料理計画を方向変換させて、クーゴは小さく頷いた。

料理を作るためにも、まずは色々と散乱した厨房を片付けなくてはならない。凹んでしまった女性2人と右往左往する男性2人にその旨を伝えれば、面々は顔を見合わせた。

「汚名返上」、あるいは「名誉挽回」、と言う女性2人の声が聞こえた。2人の発言が嘘ではないことを示すように、男たちは心配そうに彼女

たちを見つめる。

「何を作るのかね？」

どこか戦々恐々とした笑みを浮かべて、セルゲイが問いかけてきた。

彼の気持ちは分からなくはない。下手に凝ったものを作ろうとすれば、キッチンが2次災厄によって崩壊することは目に見えている。

これ以上キッチンが崩壊してしまえば、暫く外食に頼らざるを得なくなる。機体の生産やパーツの補充等で資金はカツカツなのだ。

「マチエドニア」

「マチエドニア？」

「イタリア版フルーツポンチ。フルーツ切って、それにレモン汁と砂糖を混ぜて、冷蔵庫で寝かすだけの簡単スイーツ。お好みで白ワインやスパークリングワインなんかを入れてもいい」

ルイスとマリーの問いに、クーゴは簡単に答えた。流し台を使えるほどに片付けて、無事な包丁とまな板をどうにか引つ張り出す。どちらとも万全な状態だとはいえないが、真つ二つに折れたり、包丁の刃が曲がっていたり、包丁の刃がまな板に突き刺さっていたり、まな板が真つ二つになっているよりはマシだろう。

うんうんうなっていたアイデアの顔を思い浮かべる。なるべく早く休憩してもらいたい。マチエドニアは冷やさなくても食べることはできるが、冷やした方がより一層おいしくなるのだ。どうせ食べてもらうなら、より一層おいしい方がいい。冷蔵庫を漁ってワインや炭酸飲料を見つめる。未成年用には炭酸飲料を入れるつもりであった。

大量のフルーツを一口大にカットする——料理について疎いルイスやマリーでも何とかかなりそうだと思っただらしい。かろうじて無事だった包丁とまな板を回収し、意気揚々とフルーツを切っていく。沙慈とセルゲイはハラハラした表情で、乙女2人の調理を見守ってい

た。そこまで心配せずとも、と思いかけ、先程の参事が鎌首をもたげる。

先程の二の舞を踏む危険性が無きにしも非ずである。いくら火を使わない調理法だとはいえ、ひしゃげた包丁や裂けるように割れたまな板の姿が頭から離れない。

クーゴと共にフルーツカットに勤しむグラハムも、ちらちらと女子2人に視線を向けていた。無事に作業が終わってくれれば万々歳である。

*

憂いだらけの料理作りだったが、どうにかうまくいったようだ。小奇麗に盛り付けられたマチエドニアを見て、クーゴは満足げに頷いた。

ルイスは意気揚々と沙慈にマチエドニアを食べさせている。俗にいう「あーん」だ。沙慈はデレデレしながらスプーンに乗ったフルーツを咀嚼し、そのおいしさを絶賛していた。

対して、マリーはマチエドニアを可愛くラッピングしている。花が咲いたような笑顔は、マチエドニアを貰って喜ぶアレルヤの姿を思い浮かべているが故だろう。セルゲイが複雑そうにしていた。

白ワインとスパークリングワインを注いだマチエドニアは、光源によつてきらきらと輝いている。まるで宝石箱のようだ。この見た目なら、イデアの目を楽しませることはできるだろう。喜んでくれたらよいのだが。

グラハムも自分の作ったマチエドニアに満足したようで、いそいそとお膳に乗っていた。奴はそのまま、刹那の部屋に直行するのだろう。体調が悪そうにしていたのだから、少し休ませてやればいいのではないかとクーゴは思ったが、首を振る。

おそらくグラハムだつてそのことは分かっているのだろう。わ

かっているから、傍にいたいのではなからうか。大切な人が弱っていたら、何か力になりたいと考えるのが人間の――特に、面倒見のいいお人よしの性というものだ。

できる限りキッチンを片付け、システムに連絡する。後の処理はシステムが頑張ってくれるであろう。

でなければ困る。いろんな意味で困る。節約云々の意味で、だ。イデアとスメラギが頭を抱える図が浮かんでは消える。

「大佐と一緒に複座MSで戦いたかった……」

「教官と相乗りしてみたかった……」

廊下の途中で、燃え尽きたボクサーみたいな気配を背負ったコーラサワーとネーナが頂垂れていた。結構最初の頃から2人は同じことを所望していたようだが、作戦や大人の事情的な方面で却下されていたらしい。

ネーナの兄たちも「どうしたもんか」と言いたげに顔を見合わせている。クーゴはお膳の上に乗せていたマチエドニアに目を向けた。いざというときのために、と、余分に作っておいて正解だった。

「元気がないときはおいしいものを食べるといいらしいぞ」

クーゴがそう言ってお膳を指し示せば、ネーナとコーラサワーが弾かれたように顔を上げた。

2人はわ、と、目を輝かせる。全員にマチエドニアをあげれば、興味津々にスプーンでフルーツを咀嚼した。

「うまいな、これ！」

「おいしいー！」

絶賛の嵐がクーゴに直撃した。相変わらず、べた褒めされると萎縮してしまふ。長らく褒められ慣れていないためだろう。けなされた

り嫌がらせされたりするのは慣れていたが。

賑やかさを取り戻した面々と別れ、クーゴはブリーフィングルームへ足を踏み入れた。相変わらず、イデアは頭を抱えて唸っている。切羽詰った横顔は、彼女が相当追いつめられていることを意味していた。

「元気がないときはおいしいものを食べるといいらしいぞ」——先程ネーナやコーラサワーにかけて言葉を繰り返し、クーゴはマチエドニアをテーブルへ置いた。突如伸びてきたとマチエドニアにつられるような形で、イデアは顔を上げる。

紫の瞳がマチエドニアを捉える。何も視えぬはずの目は、宝石のように輝くスイーツを『視た』らしい。ぱあつと表情を綻ばせ、クーゴに礼を述べた。マチエドニアに舌鼓を打つイデアを見ると、なんだか心の中が温かいもので満たされていくような気がする。

「おいしいです。やっぱり、クーゴさんは料理上手ですね」

「褒めても料理しか出ないぞ?」

「おいしい料理が出てくるから充分です」

イデアはホクホク顔でマチエドニアを食べ進めた。白ワイン入りのものも、スパークリング入りのもものも、ソフトドリンク入りのものも、彼女のお眼鏡／味覚にかなったらしい。

やはり、イデアは笑った顔が良く似合う。クーゴはゆるりと目を細め、フルーツを咀嚼するイデアを見守っていた。



ウイングガンダムゼロ。それが、刹那が現在、エクシア／ダブルオー／クアンタの代わりに搭乗しているMSである。搭載されたゼロシステムの効果により、機体を操る彼女の能力は大幅に上昇していた。

しかし、ゼロシステムはいいことづくめではない。操縦者に多大な負荷をかけるそれは、確実に、パイロットにダメージを与えていた。今回の体調不良も、ゼロシステムが影響していることは察するに余りある。

刹那の部屋の前まで来たグラハムは、静かに息を吐いた。自分の奥底から顔を出そうとする邪念をすべてねじ伏せ、扉をノックする。

「私だ。部屋に入っても構わないかね？」

「……ああ。少し待ってくれ。今、開ける」

返事が帰ってくるまで、若干の間があった。気のせいでなければ、声にも覇気がない。普段から抑揚のない喋り方だけれども、儂げな響きは一切していなかった筈なのに。

やはり、ゼロシステムのダメージは大きいようだ。グラハムがそんなことを考えたとき、扉が開く。自分を迎えるように立っていたのは、この部屋の主——刹那だった。

普段は強い意志を宿している赤銅色の瞳は、どことなく虚ろだ。彼女の体に沢山の重しがついているように『視えた』のは、きっとグラハムの気のせいではないのだろう。

動作の鈍い刹那を見たのは初めてだった。立っているのさえ辛そうな——それでも立とうとする彼女を制し、ベッドに座らせる。

「果物を持ってきたのだが、食べられるか？」

グラハムの問いに、刹那はのろのろと顔を上げた。彼女はじっとマチエドニアを凝視していたが、ややあって、か細い声で呟いた。

「……貫おう」

受け取るのさえ億劫らしく、動作は緩慢である。これは、グラハムが食べさせたほうが早そうだ。

「私が食べさせようか。ほら」

「……………」

スプーンにフルーツをすくって、刹那の前に差し出す。あまりのことに刹那は面食らったようで、顔を赤らめた。恥ずかしいのだろう。そんなところが可愛らしい。

無言の攻防戦を暫く続けた後、敗北したのは刹那のほうだ。観念したように息を吐いて、差し出されたフルーツを咀嚼した。味が気に入ったのか、ふつと表情が緩む。

彼女につられるような形で、グラハムも頬を緩ませた。たまには悪くない。何かを愛おしく思うというのは、こういうことなのだろう。ひっそりと噛みしめる。

途中で些細なすったもんだがあつた（やはり自分で食べるから、と言う刹那に、食べさせようとするグラハムの攻防）が、最終的に、刹那はグラハムに食べさせてもらう形で完食した。そのためか、彼女の機嫌は少々斜めである。

さて、どうしたものか。グラハムが考えていたとき、不意に、服の裾を引かれた。何事かと刹那のほうを向けば、彼女は俯いたまま。その眼差しは、あらぬ方向に向けられていた。赤銅色の目は焦点があつていない。

彼女は今、何を『視て』いるのだろうか。得体のしれぬ寒気に、グラハムは体を震わせた。

「終わらない」

刹那ほつりと眩いた。

「争いが、終わらない」

赤銅色の瞳に浮かんだのは、絶望。

「世界は、何も、変わろうとしない……!」

どろりと濁った瞳を目の当たりにした途端、グラハムは反射的に刹那を抱きすくめていた。

あまりにも遠い場所を見つめ、そこへ向かってゆく彼女の大きな『愛』を、グラハムは知っている。世界全体に向けられた想いの大きさと深さを見ていると、自分たちが矮小なものに見えて情けなくなるほどだった。

だから、だろう。今の彼女は、目を離すと、誰の手にも届かない場所に消えてしまいそうな気がしたのだ。……もつとも、グラハム如きのようなちっぽけな男が、彼女を繋ぎ止めていられるとは到底思えないのだが。

「刹那」

腕に力を込める。彼女の名前を呼びかける。何度か呼びかけると、彼女はひどく驚いた様子でグラハムを見上げた。赤銅色の瞳が瞬きを繰り返す。グラハムの鬼気迫る表情から何かを察したようで、刹那は申し訳なきように視線をさまよわせた。

ゼロシステムは刹那に何を見せたのか。グラハムには知る由もないことで、けれどそれ故に、何もわかってやれない自分が歯がゆく感じる。自分にできることは、ただ、システムによって壊されそうになる刹那の心を、現実に引き留めることのみ。

あの機体をどうこうするためには、何としてでも自分たちの愛機――もしくは、その系譜に関わる機体入手することが先決だろう。し

かし、先に進むためには戦力を揃えなくてはならない。そのためには戦う必要がある。戦うためにはあの機体に搭乗する必要がある……なんて堂々巡りだ。

グラハムがぐるぐる思考回路を働かせていたとき、胸元にある刹那の頭がかすかに動いた。甘えるように、控えめだけれど、すり寄ってくる。

本当に珍しい事態だ。グラハムは刹那にばれぬよう微笑むと、愛おしさに任せて彼女の頭を撫でてやる。刹那はグラハムの胸に顔をうずめてしまった。

顔が見れないのは残念だな、なんて、グラハムは場違いなことを考えた。

*

「……すまなかった」

どうにか立ち直った刹那は、居心地悪そうにそう言った。

「いいや、気にしていないよ」

グラハムは快活な笑顔で彼女の言葉に応える。実際気にしていないし、むしろ、刹那が自分に甘えるような仕草を見せてくれたことがうれしい。

刹那・F・セイエイは強い女性だった。決して折れぬ意志を持ち、戦争根絶という目的のために突き進む。迷うことのない横顔が、脳裏に浮かんで消えていく。

こんなことなど滅多にないだろう。弱ったキミもいいなあ、などと、不埒なことを考える己を（脳内で）ぶん殴った後、グラハムは取り繕うように咳ぼらいした。

また、控えめな力で服の袖が引かれる。

何事かと刹那を見れば、彼女はぼそぼそと呟いた。

「誰かに物を食べさせてもらったり、甘えたりしたのは、久しぶりだった」

刹那の言葉に、グラハムは目を見開いた。

確かに彼女は少年兵として戦っていたようだし、両親とも死別していたらしい。幼い頃に死に別れたのだ。甘え方を知らないのも、覚えていても甘えられないのも頷ける。

視線を逸らした赤銅の瞳は、「嫌ではなかった」と雄弁に語っている。嗚呼、やはり彼女は可愛らしい。グラハムは彼女を抱く腕に力を込めたのだった。



「はは、ははは、あははははははははははっ!!」

高笑いする親友の目は、どろりと濁っている。あれは、ゼロシステムに触れた人間が陥る現象だ。システムが齎す情報に、精神が耐えきれなくなっているのだろう。

しかし、そんなシステムはこの世界に存在していないはずだ。グラハムは恐る恐る、親友に問いかける。親友は不気味な笑みを浮かべると、1つのマイクロチップを指示した。

「ゼロシステムだよ。このおかげで、僕の思考回路は広がったんだ！

まだ全貌は解明できていないけど、いずれは……!」

親友は笑いながら、自分の目標を話し続ける。このシステムをすべ

て解析し、ガンダムが使った『特殊粒子を使った時間制限有の高速戦闘』を再現するつもりらしい。

それをフラッグの後継機に搭載するのが、彼の目的になっていたようだ。ユニオンの技術的権威が失墜したという話は耳にしていたけれど、彼を追いつめる要素になっていたとは思えない。

グラハムの脳裏に浮かんだのは、高笑いする親友の後ろ姿。虚憶きよおくで見たと彼は、仮面の男と同じように、己から修羅道に身を落とした。自身の目的を果たすために、ガンダムパイロットを脅迫していた。

普段の彼であつたら、そんなこと考えなかつただろう。

ゼロシステムは、人格面にもじわじわと影響を及ぼしている。

同じように、ゼロシステムの齎あづかすデメリットに晒さらされていた人間がいた。戦力が整わず、先に進むためには、翼の生えたガンダムで戦い続けなくてはならなかつた刹那。

本来なら、彼女はソレスタルビーイング製のガンダムに搭乗しているはずだった。しかし、状況が状況だったため、機体をえり好みできなかつたのである。

器が大きく強い意志を持っていた刹那ですら、ゼロシステムに飲まれそうになつたのだ。心を壊されそうになつていたので。

そんなシステムに——MS研究に長けた技術者とはいえ——ただの一般人が触れたらどうなってしまうか、火を見るよりも明らかだ。

誰が、そんなことを。

グラハムは恐る恐る問いかける。

「そのシステムは、誰から……?」

親友はにっこりとほほ笑み、提供元である女性の名を告げたのだ。た。

EX—3. 遠い宇宙の果て

対話の道は閉ざされている。あと少しで手が届くのに、巨大な壁に阻まれた。

道はない。道がない。希望が絶たれる。女性たちは、あまりにも分厚い壁に直面していた。

その絶望を引き裂くように、鮮烈な群青あおが駆けつける。嘗て死闘を繰り広げた、愛しい好敵手。

「未来への水先案内人は、この私が引き受けた！」

その言葉と共に、好敵手は飛び出していく。その先には、巨大な壁。『道理を無茶で押し通す』を地で行く好敵手だが、どう見ても無茶で押し通せる壁ではない。

「何を躊躇ちゅうそしている!!? 生きる為に戦えと言ったのは、キミの筈だ！」

それは、遠い日に、女性が好敵手に贈った言葉だった。

「行け！ 生きて未来を切り開け!!」

巨大な障害に阻まれる。それでも好敵手は飛んでいく。鮮烈なまでもの群青あおを爆ぜさせながら。

機体の動力部から溢れる赤い粒子も、より一層輝きを増した。まるで、好敵手の想いに共鳴するかのように。

障害を突き破ろうとすればする程、好敵手は己の命を削っていく。彼の纏う気迫が、何人たりとも彼を止めることを赦さない。

「これは、死ではない！ 人類が、生き残るための——!!」

吐血しても、体を蝕まれようとも、命が削られていこうとも、男は

止まらなかった。止まるような性格ではないと、女性は長い付き合いで理解していた。

怖いくらい真つ直ぐで、何事に対しても真摯であろうとした人。愚直すぎるがゆえに、変な方向に走り出すこともしばしばある、難儀な性格をした人。

——女性を愛してやまなかった人。

「□□」

不意に、好敵手が女性の名前を呼んだ。

女性は、目の前に男がいることに酷く驚いていた。周囲の光景が、激戦区から平原に変わっていたのだから当然と言えよう。どこまでも青い空と、広い平原が広がる。

そこが好敵手の心の世界だと女性が気づく。男は幸せそうに微笑んで、女性を手招きした。恥ずかしさに文句を言いつつ、彼女は男の腕に収まる。男は満足そうに頷いた。

女性はふと、視界の端で起きた異変に気づく。

男の利き手が、ぼろぼろと崩れ落ちていくではないか。

利き手だけではない。左半身が、そうしてこの世界そのものが、何かに侵食されるように消えていく!!

男は残念そうに苦笑した。

「私は、この結末に後悔していない。むしろ、誇りに思う。やっと私は、キミの好敵手に相応しい存在になれただろうから」

ああでも、と男は付け加える。

「……しかし、残念だな。ようやくキミと並べる存在に至れたと思っただのに、キミと、キミのガンダムと決着をつけることが叶わないとは」

「この男は、いったい何を言っているのだ」——女性は心の中で戦慄

いた。理解したら最後、彼はここから永遠に『いなくなる』。

だから、彼女のすべてがそれを拒むのだ。女性の表情を見た男は、ますます困ったような顔をする。

「悲しむ必要はないよ。私は未来の水先案内人。キミの行く末を、ずっと見守っているから」

彼の言葉に、嘘偽りはない。だが、彼はもう、自分の傍には居ないのだ。

「思うんだ。あの日、キミと3度も出逢った意味を。あの日、キミという存在によつて生かされた意味を」

男は噛みしめるように目を閉じる。自分の中にある美しいものを抱え込むような笑みに、女性は胸が苦しくなった。

1回目は何も知らない者同士として、2回目はガンダムとフラッグのパイロットとして、3回目は明日のために戦い続ける者同士として、自分たちは顔を合わせてきた。

あるときは戦場で、あるときは街中で、出会っては別れてを繰り返してきた。そのすべてが、互いにとつてかけがえのない時間だったのだ。

「——ああ、そうだな。私はこのために生きてきた。このために生まれてきたんだ」

そんなこと、望んでいない。そんなことのために、生きろと言ったわけじゃない。

女性は大声で叫びたかった。でも、多分、男はそれすら『知っていない』、女性への言葉を贈っている。

おそらくは、最期の会話になるであろう言葉を、命が燃え尽きていく中で、必死になって探している。

「満足して生きた。まあ、心残りがないわけではないが」

男はそう言つて、指を折りながら諳んじた。

大切な約束の数々を、来るはずだった——もう来ない明日の日常を。

「もつと空を飛びたかった。仲間たちと一緒に笑っていたかった。副官が作ってくれるであろう、帰還パーティーの鍋が食べたかった。カレー味でもいいから食べたかった。最期は青い空で迎えたかった。……酷いな、未練ばかりだ。女々しくて笑つてしまうよ」

男は呆れたように苦笑した後、真摯な眼差しで女性を見返す。

「しかし、特に心残りなのは2つある。1つめは先程言った、『キミと、キミのガンダムとの決着がつけられない』こと」

翠緑の眼差しは、沈痛そうに揺れていた。

「——もう1つは、『結局最期まで、キミを幸せにしてやれなかった』ことだ」

失ってしまった利き腕の代わりに、残った手で、男は女性の頬を撫でる。慈しみを込めた手つきに、思わず女性は首を振った。

男が悔いる理由なんてない。それ以前に、最期だなんて言われる筋合いもない。おまけに、女性はまだ、男を幸せにしていけないのだ。

壊すことしかできない自分が、誰かに与えたいと思つたもの。それをまだ、彼に手渡していない。手渡せていない。

「逝くな」

自分でも驚くほど、情けない声だった。

「まだ何も伝えていないんだ」

今にも泣き出してしまいそうな声だった。

「……俺はまだ、あんたを幸せにしていない……!」

女性の言葉に、男は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をした。目を真ん丸にして、何度も瞬きを繰り返す。ややあつて、男は幸せそうにはにかんだ。

「やはり、私は永遠に、キミに敵わないんだな」

男の体が、闇に飲まれる。美しい青空と平原が、真っ黒に塗りつぶされる。

彼の気配が遠のいた。慌てて女性は手を伸ばす。だが、何も掴めなかった。

「最期まで、ありがとう」

男は笑う。いつか見た儂げな笑みではなく、普段通りの快活な笑みを浮かべて。

「キミに出会えて、本当に良かった」

男は笑う。女性に出会えたことが自分の幸福だった、と言わんばかりに目を細めて。

「——愛している、□□」

世界が暗転する。次の瞬間、分厚い壁が吹き飛んだ。対話への道が拓かれたのだ。

好敵手の死を悼む時間はない。彼が最期に切り拓いた道が閉ざされる前に、行かなくては。

操縦桿を動かし、突き進む。男が最期に残した言葉を胸に、ただまっすぐに突き進んだ。

そうして、対話の刻は訪れる。

宇宙に花が咲き誇り、人類の未来は定まった。

けれどもそこに、彼はいない。——彼が、いない。

「……あんた、馬鹿だろ」

—— そうだな。ことに、キミとガンダムのことに関しては ——

その言葉に帰ってくるはずの返事は、2度となかった。



長い夢を見ていた。とても、哀しい夢だった。

少女の視界に入ってきたのは、薄闇の中に浮かぶ白い天井だった。わずかに滲んだ視界から、自分が泣いていたのだということに気づく。確かに自分は眠りにつく直前まで『啼かされていた』が、今、頬を伝う雫は、『啼かされていた』ときとは理由も原因も根本的に違う。体は鉛のように重い。その理由を、少女はきちんとわかっていた。鈍い痛み^に愛おしさを感じながら、少女はゆっくり体を起こした。ふと、周囲を見渡す。隣にいるはずの温もりはない。それに気づいた途端、先程見た夢がフラッシュバックした。

「その世界に、彼だけがない」——なんて悲しい夢だろう。なんて恐ろしい夢なのだろう。

訳もなく寒気を感じて、少女は声を荒げた。隣にいるはずの男の名を呼ぶ。

「グラハム」

返事がない。普段なら即座にすっ飛んでくるはずなのに、彼——グラハムの気配を感じない。

先程見た光景は、夢だ。一步間違ったらありえた光景だったのかもしれないが、でも、今の自分にとってはただの夢だ。

しかし、ただの夢だったなら——どうして今、グラハムはここにいないのだろう。少女の頭の中で、疑問がぐるぐると反響する。

「グラハム」

返事がない。少女はますます焦燥に駆られた。ゾツとするような悪寒に身を震わせたとき、部屋の扉が開く。

金色の髪に翠緑の瞳を持つ男——グラハムが、きよとんとした顔で少女を見つめ返していた。その手には、飲み物の入ったボトルが握られている。

彼は少女を散々『啼かせた』後、それはそれは丁寧な事後処理してくれたらしい。ついでに、目覚めたときは喉が渴いているだろうか、と、気を利かせて飲み物を持ってきてくれたのだろう。

「——ソラン？ 何か、あったのか？」

グラハムは、少女——ソランの様子から何か感じ取ったようで、心配そうな表情で覗き込む。大きな手が、優しくソランの頬に触れた。反射的に、ソランは彼の手に自分の手を重ねる。

暖かい。彼はちゃんと生きている。その事実にあ堵して、ソランは

ほつと息を吐いた。先程の夢みたいに、この手が届かなくなることはないのだ。彼の利き手がぼろぼろと崩れていくことも、闇の中にその姿が溶けていくことも、ない。

翠緑の瞳に映るソランの目は、鮮やかな金色に輝いている。何かを察したグラハムは、ソランに顔を寄せてきた。額と額が触れ合う。彼が静かに目を閉じると、彼の体をなぞる様にして青い光が舞い上がった。

互いの心に触れる。金の瞳も、青い光も、ルーツは違えども「わかり合う」ための力であった。ややあつて、グラハムはゆつくりと瞼を開けて、ソランに寄り添う。グラハムが自分を気遣ってくれていることは、十二分にわかっていた。

甘えていいと言われたような気がして、ソランはグラハムにすり寄る。

グラハムはふわりと微笑み、優しい手つきで頭を撫でてくれた。

「水先案内人になんて、ならなくていい」

ソランの言葉に、グラハムはひどく面食らったように目を瞬かせた。頭を撫でていた手が止まる。

何か反論しようとしたグラハムであったが、ソランはたたみかけるようにして言葉を続けた。

「どこにもいくな。一人で勝手に、いかないでくれ。俺があんたを幸せにするまでは、どこにも」

そのために、自分は生きてきたのだから——と。今まで生きてきた時間の中で、遠回りして、辛い思いをして、ようやく得た答えを口に出せば、グラハムは呆氣にとられたような顔をした。

ソランは言葉を惜しむ癖がある。どんな思いも自分が口に出してしまえば、すべてが薄っぺらくなってしまうようで怖いのだ。それが自身の悪い癖だとは自覚しているけれど、どうも治りそうにない。

言葉にしなければ伝わらないことがあることは知っていたし、今、この気持ちは言葉にして伝えるべきだと直感した。だからこそその吐露であったのだが、グラハムは凍り付いたまま反応しない。

伝わってほしい、とソランは祈る。翠緑の瞳に映し出された自身の瞳が、再び金色に輝いていた。

ややあつて、グラハムは深々と息を吐いた。白い肌に赤みが差しているように見えたのは気のせいではない。

翠緑の瞳は、切なそうに細められる。まるで、親に置いて行かれた子どもみたいだった。

「…………どこかへ行ってしまふのは、キミの方ではないのか」

「え…………？」

唐突に、そんなことを言われた。ソランは思わず目を瞬かせる。

「キミは昔から、ずっと遠くを見ていたからな。私では到底見通せないような、はるか遠い場所を、どこまでも大きな理想を抱いて…………」

グラハムの眼差しは、ソランから逸らされることはない。ただまっすぐにこちらを見つめている。

「私では、届かない。…………手を伸ばしても、救い上げられなかった」

伝わってきた感情は、恐怖。『視えた』のは、ノイズまみれの光景だった。意識無く眠り続ける女性と、彼女の手を握り締める1人の男性。女性はどことなくソランの面影があり、男性は夢で失ってしまった人／グラハムとよく似ている。

あのと時彼女の手を掴んでいたら、もう少し早くあの場にたどり着いていたら——男性の悲鳴に近い声が『聞こえた』。銀色の異種生命体との対話を試みた女性に対し、容赦なく襲い掛かった異種生命体たち。攻撃されても、意識を失う寸前でも尚、女性は対話の道を模索し

ていた。

ソランとグラハムも、この光景や先程見たような夢と似たようなことに巻き込まれた経験がある。もしかしたらこれは、自分たちが辿っていた可能性の一つなのではないか。あり得たはずの可能性を垣間見るといふ現象は、最近ではポピュラーな事象になりつつあるためであった。閑話休題。

ソランはグラハムの背中に手を回す。大丈夫だ、と、告げるように。グラハムは一瞬息を飲んだようだが、嬉しそうにすり寄ってきた。自分たちは生きている。伸ばした手は相手に届くし、こうやって触れ合えている。祈るような気持ちで、ソランはグラハムを見上げた。

「……グラハム」

「どうした？」

「寒い」

ソランは小さく呟いて、背中に回していた手を彼の手に重ねる。

「そうか？ ……空調の調子がおかしいのだろうか」

立ち上がろうとしたグラハムを引き留めながら、ソランはじつとグラハムを見上げた。もう一度、寒い、と口に出す。

グラハムはしばしソランを見つめていたが、その寒さが何から来るものかを見抜いたのだろう。

「……奇遇だな、私も寒くて仕方がなかったんだ」

彼はソランの耳元でそつと囁く。背中を駆け抜けたのは、悪寒とは違うもの。興奮、だ。

視界が反転する。「シャワーを浴びた意味がなくなりそうだ」などと呟きながら、グラハムはソランに覆いかぶさった。どこまでも優しい翠緑の瞳の奥底には、本能の色が揺らめいて見えた。ソランはふっ

と表情を緩める。

お互いを失うのが怖い——そう思っているのは、自分だけではなかった。その温もりが本当に存在しているのか不安だ——そう思っているのは、自分だけではなかった。互いが互いを求めている。なんて、僥倖なのだろう。

どちらからともなく、引き寄せられるように口づけを交わす。啄むだけのものから、それ以上の意味を込めた深いものへと変わっていった。互いの、愛おしい温もりを甘受し合う。口づけの合間に彼の名を呼べば、グラハムはこてんと首を傾けた。

ソランはふっと微笑んだ。

手を伸ばし、彼の頬に触れる。

「俺は、ずっと、アンタの傍にいる」

「私も、キミの傍にいるよ」

噛みしめるように告げれば、グラハムも即座に返答した。再び、彼は口づけを再開する。

もう、寒くない。こんなにも、温かい。

愛しい男の熱を感じながら、ソランは静かに瞳を閉じた。



「……で、そのまま抱き潰した、と」

「……………すまん」

「前代未聞だな。歩行困難で欠場だなんて笑えない」

親友は苦い表情を浮かべて天を仰いだ。グラハムも視線を逸らす。

中庭を見下ろせるバルコニーには、『第N回 シヤツフルチーム対抗フライングボール大会』という横断幕が垂れ下がっていた。宇宙を旅する最中ではあるが、だからこそ、体を動かす系の娯楽が頻繁に行われる。

フライングボールというのは、無重力下で行うバスケットボールのようなものだ。重力制御ユニットを搭載した靴とゴールによって疑似的な無重力状態を作り、無重力状態でふらふら移動するゴールにボールを入れることで得点を得る。

ただ、無重力下なので、ゴールを固定する必要がある。逆に、相手がゴールにボールを入れようとしたら、ゴールやボールに干渉するな どして得点を阻む等、奥深い駆け引きも行われるのだ。ただのスポーツだからと言って笑ってはいけない。

親友はメンバーリストと集った仲間たちを見比べては、うんうん唸っている。実質的なキャプテンはグラハムだが、攻撃の要はソランであり、フォローおよび指揮役の要は親友であった。

攻撃の要を欠いた状態の戦い——厳しいにも程がある。ベンチの隅で申し訳なさそうに項垂れるソランを視界の端に捉えて、グラハムは大きく息を吐いた。今すぐ昨日の自分をぶん殴ってやりたい。

「ただでさえ、相手チームとの状況的に『狙い撃ち合^兄い宇宙^弟』だの『二大ブレインと花形エース勢の双壁対決』だの言われてるのに……」

「……すまん」
「もういいよ。過ぎてしまったことは変えられない。現状でベストを尽くす、だろ？」

「流石だな、我が友よ」

切り替えの早さを褒めれば、親友は肩をすくめた。何かある度に、彼はフォロー関係で駆けずり回っている。

日本の中間管理職は優秀だという話があるが、親友はそれを体現しているような人間であった。

「監督には適当に言い訳しておくから、ゆっくり休んどいて」
「あ、ああ」

親友はソランにそれだけ言い残し、監督の元へと向かった。

本当のことを報告すれば、独身と未婚を拗らせた我がチームの指揮官がどんな反応をするかなど火を見るよりも明らかだ。

この前の大会では、今回の対戦相手チームの監督が自軍の監督であつたが、昨日の夜の営みを語る旦那をグーで殴った上に、スタメンから外していたか。

向うのベンチに視線を向ければ、監督の旦那が犬神家よろしくな体勢で漂っていた。また何かやらかしたらしい。グラハムは苦笑する。

今大会も、まともなものになりそうな気がしなかった。

EX—4. 夜明けの鐘はまだ鳴らない

「この家の家督は、貴女に継がせるわ」

ベッドに横たわった老婆は、ベッドサイドにいる女性にそう告げた。天を仰ぎながら、老婆は深く息を吐く。

「本当は、あの子に継いで欲しかったのに」

「お母さん。死んだ人間のことを言っても、どうにもならないわ。ウチの家の男はみんな早逝してしまうもの」

女性は憐れむように目を伏せる。自分の一族では、男児や男衆が早逝してしまう傾向があった。唯一の例外かと思われていた双子の弟も亡くなった。——いや、自分が殺した。

しかしながら、世間の大半がこのことを知らない。この老婆——母もまた、世間の一部分であった。彼女は何も知らぬまま、生を終えるのだ。女はひっそり笑みを浮かべる。

ささくれだだった母の手が、女性の滑らかな手に触れる。己が守ってきたものすべてを託すように。

お願いね、と老婆は言った。懇ろに、女性に告げる。

女性は頷いた。真摯な表情を崩さぬまま、何度も。

女性の母が眠るように亡くなったのは、その翌日のことであった。

*

「家督相続おめでとうございます」

後ろから聞こえてきた声に振り返れば、黒髪の女性が立っていた。彼女の脇には、控えるようにして男性が佇んでいる。

「ありがとう、留美。^{リユーミン} こんなにも晴れ晴れとした気分になったのは初めて」

女性が微笑めば、留美^{リユーミン}も祝福するかのように微笑み返す。対照的に、彼女の兄にして執事の紅龍^{ホンロン}は黙ったまま、一言も発しようとしてない。自分の妹と似たような人生を歩んできた女を見て、彼は何を思ったのだろう。女性にはわからないことであつたが。

望むものはすべて弟に奪われた。家督も、信頼も、才能も、弟は女性の望むものすべてを持っていった。何も持たない女性を見つめる黒い瞳は隣れみに満ちていて、思い出すだけで腹立たしい。奴がいなくなったことで、ようやく、女性は望んだものを手にすることができたのである。

忌まわしい存在はいなくなり、誰もが自分を見るようになった。いないもの、いても劣っているものとして扱ってきた連中たちは、女性の当主就任によって掌を返した。誰もが女性を見てくれる。その存在を認めてくれる。女性の望みは、ようやく叶えられた。幸福を噛みしめて、女性は笑う。

先祖代々の墓を感慨深く見下ろした後、女性は踵を返した。自分の後に、留美^{リユーミン}と紅龍^{ホンロン}が続く。麗らかな春の日差しに誘われるように、桜の花がひらひらと舞い降りていた。長い階段を降りて行けば、暇つぶしに遊びまわっていた子ども3人が自分たちに気づいて駆け寄ってきた。

「今日はお祝いよ」

「やったー！」

3人の子どもたちは、女性の言葉に大喜びした。

「手配はばっちりですわ、おねえさま」

「ありがとう。楽しみだわ」

女性と留美^{リュウミン}は顔を見合わせ、微笑み合う。彼女と自分は似た者同士であり、同じ革新に向けて歩む同志である。それ以上に、気心の知れた友人だと思えるようになった。『弟とその親友のやり取り』と通じるものを求めていたのかもしれない。

はしやく子どもたちが先陣を切り、女性と留美^{リュウミン}が子どもたちの背中を見送る。自分たちの殿として最後尾に陣取るのは紅龍^{ホンロン}だ。世界を変える刃を持つ者たち。あとは、この場にはいないが、沢山の手駒が集っている。その筆頭が、仮面をつけた金髪の武士だ。

特に金髪の武士は自慢の駒である。彼を手に入れるために、色々と手を尽くした。主に外堀を埋める方面で、だ。

女性の『知識』とイレギュラーを修正する方法と睨めっこしながら、ようやく手にした玩具^{オニンギョウ}である。あとは、どう使うかだ。

ガンダムや革新者と戦える数少ない人間——そう評されたMSパイロット。勝手な行動をとれないように、しっかり策は練ってある。

他にも、注意すべき相手は山ほどいた。

国連代表として陰で色々と暗躍しているエルガン・ローディックは、女性の有する『知識』では存在しないはずのイレギュラーだ。最終決戦後にアレハンドロの汚職やらなにやらを世間にぶちまけ、戦死した英雄を卑劣なド外道に陥れ、奴の系譜を引く派閥を根こそぎ失脚させたやり手である。何とかして無効化しなくてはならない。

懸念すべき相手として、イノベイドのリボンズ・アルマークもいる。奴の言動および『能力』は、女性の有する『知識』とは大きな差があった。そのため、自身が有する『知識』を踏まえた対策が役に立たない。他のイノベイドたちとも仲が良かったため、リジエネ・レジエツタの謀反を利用した行動も取れそうになかった。

(何より一番不気味なのは、『悪の組織』と『スターダスト・トレイマー』)

前者は謎が多い技術会社と、後者は人命救助やごろつき退治にふら

りと現れてはいなくなる謎の組織である。特に後者のことを「第2のソレスタルビーイング」として囃し、危機感を抱く者や期待を抱く者が勝手に騒いでいた。それもそれで邪魔である。

前者の技術力は欲しい。しかし、『悪の組織』が、現在のアロウズ―あるいは自分たちに協力してくれるとは思えなかった。

ならば、早々に片付けておかねばなるまい。幸い、一企業を攻撃する口実ならいくらでもある。

「おねえさまっ..」

聞こえた声にハッとすれば、留美リユミンが心配そうに女性を見上げていた。

「どうしたのですか?」

「ちよつと考え事を、ね。...ダメだわ。もうすぐお祝いの席だというのに、余計なことを考えちゃう。忘れて楽しまなくちゃ」

女性は努めて明るく笑って見せた。そう答えた丁度いいタイミングで、リムジンがやって来る。殿の紅龍ホンロンが扉を開け、面々は乗り込んだ。



子どもの泣き声が響いている。双子として生まれた自分の半身。泣いているのは男の子。自分よりも後に生まれた、可愛い可愛い弟だ。

「いやだ、いやだよ」

弟は選ばれた。〃てんしさま〃の代弁者に。それが嫌で、泣いていた。

弟を選んだ。〃てんしさま〃は、それを名誉なことだという。〃てんしさま〃の代弁者になれば、弟は元気になれるという。外を駆け回ることもできるし、病気で寝込むこともないし、空へ行きたいという夢だつて叶うんだ、と。

「そのためには、弟が大切になっている。〃おはなし〃を、全部忘れさせる必要がある」と。〃てんしさま〃は言った。弟は、〃おはなし〃を忘れたくないと泣いている。彼がその。〃おはなし〃を大切にしていたことは、ずっと見てきたから知っていた。

嫌がる弟を、〃てんしさま〃はむりやり連れて行こうとした。弟は必死になって抵抗する。吹けば飛ぶような頼りない体は、あつという間に。〃てんしさま〃につかまってしまった。鳥の翼をへし折るが如く、〃てんしさま〃は弟の目を覆う。

「だれか、たすけて」

弟のか細い悲鳴に、少女は飛び出した。〃てんしさま〃と弟の間に割って入る。

弟を庇うようにして立った少女は、〃てんしさま〃を見上げた。

「弟を連れて行かないで」

少女は、〃てんしさま〃から視線を逸らすことなく告げた。

「代わりに、あたしを連れて行って」

姉の言葉に、弟は大きく目を見開いた。情けない声で自分の名前を

呼ぶ弟に、姉は満面の笑みを浮かべて見せる。

「大丈夫。お姉ちゃんが、守ってあげる」

弟に笑いかけた後で、少女は“てんしさま”に向き直った。“てんしさま”はしばらく少女を見下ろしていたが、妥協することにしたらしい。

弟にかざしていた手を引っ込めて、少女を招き入れた。少女は躊躇うことなくそれに従う。“てんしさま”は祝福するかのようになり、少女へ手をかざした。

少女は逃げなかった。ただまっすぐに、その祝福を受け入れた。それが何を意味しているか、知ったうえで——覚悟したうえで。



「おい、大丈夫か？」

声をかけられて、振り返る。鳶色の髪と深緑の瞳が、自分を憂うようにこちらを見下ろ^おしていた。彼が自分を見下ろすような状況なのは、ひとえに「身長差のせい」であった。

自分の身長は169cmに対し、相手の身長は185cm。彼が羨ましくないとさえウソになるが、低身長だからといって自分を卑下する気はさらさらない。無いものねだりをしてもいいことがないのだ。

この身長差と外見年齢のせいで色々揉めたのだが、関係ない話なので割愛するでしょう。

「なんでもないよ。ちよつと、物思いにふけっただけ」

男は苦笑した。それを聞いた青年は、物思いにふけるような傷を抱いている人間でもある。だから、肩をすくめるだけに留めてくれた。

内心青年に感謝しながら、男は天を仰いだ。どこまでも広がる満天の宇宙に、青い星が輝いて見える。命を育む惑星、地球だ。

宇宙から見た青い星は宝玉のように美しい。「地上では争いが止まない」と言われても、信じられないくらいであった。

自分たちがいる場所はとても居心地がいい。〝ここ〟にいる人々は、『同胞』になりたての自分や青年に対して、とても親身に接してくれる。非情に助かるし、実際に何度も助けられてきた。

だが、このまま〝ここ〟に居続けるという選択肢を選ぶ気にはなれなかった。男は既に死亡通知を出されてしまい、実際に世間からは「死亡した」とされているけれど、帰るべき場所や大切な人たちがいる。

それに、止めなければならぬ相手がいるのだ。

世界に悪意をまき散らす存在と化した身内に、その身内によって傀儡にされてしまった親友。特に後者は、精神崩壊一歩手前と言っても過言ではない状態である。彼が愛した女性と連絡が取れば彼を助ける勝機はあるのだが、世の中は上手くいかないようだ。

〝ここ〟の面々は、男が抱える事情を知っている。それだけでなく、男の願いに同調し、率先的に手助けをしてくれたのだ。感謝してもしきれない。〝ここ〟から出て行かないのは、協力してくれる面々の恩義に報いるためでもあった。

「しっかし、ここは怖いな。あらゆる機体のデータが揃ってる上に、材料まで自給自足だ。それらが揃えれば即座に作れる。……本拠地に返したはずの愛機が〝ここ〟の格納庫にあったのを見たときは、本当に度肝を抜かれたぞ」

青年は深々と息を吐いた。彼が回想している光景は、彼がここに着

た直後のことだろう。

詳しいことは知らないが、そのときの驚きっぷりは“ごこ”の面々の笑い話になっていた。

「ガンダニューム合金なんて出てきたときは真顔で噴出したからな」
「ワシなんて卒倒寸前だったぞ。おまけに、欠陥品とはいえ、ゼロシステムやらEXAMシステムのデータも出てきたからのう」

男の会話に加わったのは、白髪で杖をついた老紳士である。彼もまた、世間から死亡認定を頂いた“お仲間”であった。

「教授の『おにーさん』って、凄い人だったんですね。勤めてる場所も凄いですけど」

「ワシ自身が一番驚いておるよ。それらのデータから怠惰の悪魔を冠する機体を作り出してしまったのだから。あそこまでパイロットに負荷を強いる機体は見たことがない」

「あんなのにゼロシステムやエピオンシステムなんて搭載したら、何人のパイロットが精神崩壊するだろう」と、老紳士は天を仰いだ。

しかも、話はそこで終わっていなかった。老紳士の『おにーさん』曰く、

『計画の中には、GNドライブとゼロシステムの両方を搭載する予定もあつたみたいですよ。中にはAGEデバイスも組み込もうかって話も出てたんですが、色々無茶苦茶なことになったのと、非人道的な状態になりそうだったんでおじやんになりました』

……らしい。

ゼロシステムは未来を予測するシステムだ。それを踏まえて、計測された未来から『必勝』の手を導き出すという使い方ができる。ただし、このシステム、使用者に凄まじい負荷がかかる。パイロットに

よっては奇行に走ったり、同士討ちをしたり、自爆しようとするから
タチが悪い。

おまけに、ゼロシステムが見せるのは『必勝』の手だけではない。
『敗北』の未来を指し示すことだってあるのだ。パイロットにとつて
都合のいい未来を見せるものではなく、不都合な未来が示されてもう
ろたえてはいけないのである。うろたえれば即座に精神をやられる
ためだ。

中には、『システムを使用した本人がうろたえていなくても、第三者
から見て「使用者の精神状態がヤバイ」と評される』こともある。他
には、システム使用後に、システムを使っていないにもかかわらず、幻
聴や幻覚に襲われるという後遺症を発症した者もいるらしい。

A G E デバイスは、機体に蓄積された戦闘データから有効な武装を
作り出すというシステムだ。近接武器から遠距離武器まで、幅広い武
装を生み出せる。ゼロシステムと組み合わせれば、『未来予知で集め
られたデータを基にして武装を量産する』というトンデモ性能を有す
る機体ができるしまうのだ。

本来ならデータ蓄積のために戦闘経験を積みねばならないのだが、
ゼロシステムによる未来予知がその戦闘経験にかかる時間を丸々
カットしてしまう。経験のためにかかる時間がなくなってしまうと
いうことは、際限なく新しい武器を生み出せるということだ。ただの
兵器生産工場である。

「GNドライブのトランザムシステムに、A G E システムとゼロシス
テム搭載機か……」

「そんな組み合わせの機体がなくてよかった……」

「技術者のロマンとは言えるが、想像すると寒気しかせんよ」

男の言葉に、青年と老紳士は遠い目をした。その気持ちはよくわか
る。

あまりこの話をしていると、精神が擦り切れてしまいそうだ。

無限拳とか、ドルイドシステムとか、A・T・フィールドとか、ナ

ノマシンとか、考えるだけで気が遠くなるものは沢山ある。

「ところで教授。どうしてここに？」

「おお、そうだ。キミに用があったんだ」

そう言つて、老紳士は端末を指し示す。

「先日、例の機体に搭載したシステムのテストを行つただろう？ そのときのデータを元にして、改良を施したのでな。その報告と、近々またテストを行うという連絡をしに来たんじゃ」

「了解です」

男は了承の返事を返した。端末を取り出し、そのデータを受け取る。示されたのは、ユニオン最強のMS——フラッグの面影を色濃く宿した、新しい機体だった。

元々は男が乗っていたMSだが、大破したため、それを修理改修する形で生まれた機体である。〴〵で作り出された特殊なドライブを2つも搭載した豪華仕様であった。

出力2倍、暴走度合2倍のハイリスク・ハイリターンである。搭乗者の慣れとOSおよび期待改良が必須であり、そういう意味でも、男は〴〵の世話になるしかない。

まあ、世話になっている分、色々協力はしているが。

潜入工作とか、厨房とか、テストパイロットとか。

「そちらのキミも、同じ連絡が入ったぞ」

「マジかよ。あの能力、使つてると気持ち悪くなるんだよな……」

青年は深々とため息をついた。

「色々聞こえすぎるんだよ。聞きたくないことまで聞こえるっつーか……」

「その辺の調整も兼ねてのテストだから、頑張ってね」

のほほんとした声に振り返れば、ペールグリーンのを髪を腰まで伸ばした女性がいた。彼女の言葉を聞いた青年はがっくりと肩を落とす。そう考えると、無自覚に制御している自分はマシなのかもしれない、と、男は思った。他人にアドバイスすることができないのはネツクであるが。

和やかな空気が漂う。元々自分がいた場所も、"ここ"と同じくらい優しく、明るくて、大切で、愛おしい場所だった。

男は端末に視線を向けた。

フラッグの系譜を継いだ新しい機体。

男にとって大切な場所へと『還る』ための力。

(……還るよ。必ず、あの場所に)

脳裏に浮かんだのは、大切な部下たちの後ろ姿。そして、孤軍奮闘し続ける親友の後ろ姿だった。

お知らせ

リメイク版開始のお知らせ

2023/7/29 0時から、『大丈夫だ、問題しかないから』シリーズのリメイク版作品、『問題だらけで草ア!!』シリーズの連載を開始しました。作品はこちら。

リメイク作品である『問題だらけで草ア!』シリーズは『大丈夫だ、問題しかないから』同様、〈1st Season〉⇒〈2nd Season〉⇒〈劇場版〉の三部作構成の予定です。

Revision要素は拾いますが、新作として展開された場合は様子見する予定。場合によっては「Revisionとは繋がらない」体で話を続けていく可能性があります。ご了承ください。

今回は作品のあらすじ、オリキャラが絡んだイラスト2枚、プロログに当たる文章の冒頭〜一区切り部分までを掲載しておきます。相変わらず拙いモノカキ&へっぽこな絵描きで良ければ、この作品を見守って頂けたら幸いです。

【あらすじ】

人類に革新者が現れる、4年以上も前のこと。

世界には、自分の記憶や経験を共有させる力を持つ、コウヴァレンター共有者と呼ばれる人々がいた。

世界には、自身がまったく見たこと経験したことのない記憶および経験や知識——きよおく虚憶と呼ばれるものを持つてしまった人々がいた。

世界には、コウヴァレンター共有者の能力ときよおく虚憶の両方を持つ存在がいた。

これは、ユニオンに所属するとある軍人——クーゴ・ハガネを中心とした群像劇。

果たして、世界の明日はどこにあるのか。

『パンジヤンドラムがどの方向に転がるか』を予測できたら、多分見つ

かりそうである。

Q. 問題だらけなんですか!?

A. 仰る通りです。具体的な問題点は以下の通り。

1. この作品は『大丈夫だ、問題しかないから』シリーズのリメイク版です。

2. 『ガンダム00』を原作に、アニメ版『地球へ…』、及び『スーパーロボット大戦』や『Gジェネレーション』シリーズ等の要素とクロスオーバーしています。

3. 主人公含め、オリキャラが多数登場します。

4. キャラ改変や原作崩壊、原作死亡キャラの生存要素がありません。

5. 刹那が先天性TSしており、グラハムとくつつきます (重要)

6. 刹那が先天性TSしており、グラハムとくつつきます (重要)

7. 刹那が先天性TSしており、グラハムとくつつきます (重要)

8. 基本はギャグとラブコメ色強めですが、時々シリアスになります。

9. このお話は1st本編開始前から始まります。

10. P i x i vにも掲載(する予定)ですが、更新優先度はハーメルンの方が高いです。

上記が「大丈夫」という方は、このお話をお楽しみください。

感想頂けると嬉しいです。

グラハムとクローゴ (1st Season)

アイデアと刹那♀ (1st Season)

「ご覧ください！ 地球連邦が誇る外宇宙航行艦、ソレスタルビーイング号の雄姿を！」

テレビ画面に映し出されたのは、外宇宙探索を目的とした航行艦だ。船の名前として選ばれたのは戦争根絶を掲げた同名の私設部隊。数年前——ソレスタルビーイングがこの世に姿を現したときや、独立治安維持部隊が台頭していたときにこの話をしたら、誰がそれを信じるだろうか。……いいや、その前段階である『外宇宙から異種族がやって来た』から躓きそうな気配がする。

ソレスタルビーイングを含んだ様々な私設部隊が台頭してきたことで、世界は良くも悪くも大きく変わっていった。三大勢力で睨み合いを繰り返していた大国はいつしか地球連邦政府として1つに纏まり、滅びの過去みらいを乗り越え、外宇宙生命体や異種族たちとの対話や和解を経て、輪廻の輪を断ち切ったのだ。外宇宙航行艦の旅立ちは、新たな始まりに相応しい話題であろう。

地球と人類の未来をかけた戦いが終わったのは、僅か1か月前のことである。その傷跡は未だ色濃く残っていた。

でも、だからこそ、新たな始まりの象徴——『外宇宙探索へ向かう部隊』の出発を祝わずにはいられないのかも知れない。

艱難あかり辛苦に耐え忍ぶには、ほんの僅かでも、自分たちの前を照らす希望あかりが必要なのだ。

「まさか、隊長と副隊長が揃っていなくなっちゃうとは思わなかったなア」

動かしていた手足を止めて、何かを懐かしむように目を細めたのはアキラ・タケイ。彼の視線はテレビ画面に釘付けとなっていた。

彼の言葉に反応し、他の2名——ハワード・メイスンとダリル・ダッジが手を止める。ハワードとダリルもまた、アキラと同じくテレビ画面を見つめた。

テレビ画面に映ったアナウンサーは熱を帯びた様子で、外宇宙航行

艦の出航パレードが賑わっていることを告げていた。

「出航まであと少しか」

「未だに実感が湧かないな。あの2人が地球を去るだなんて」

ハワードとダリルは夢心地のまま呟く。そのためか、零した言葉も、ニュースへの反応も、どこか他人事であった。

一応、2人は隊長と副隊長の『お別れ会』に参加しており、副隊長とその息子の作ったカレー鍋を食べながら酒を飲んでワイワイやっていた人間である。

出発日当日に見送りへ行けないからこそその『お別れ会』だ。勿論、それが自分達の上司と過ごす最後の時間だとは十二分に理解していた。

ぼんやりとテレビを眺める3人とは違い、世界は刻一刻と未来に向けて動き出している。時間は進み、二度と戻ることは無い。

「2人とも『やりたいことがある』って言ってましたよね。『外宇宙探索部隊に立候補したのはその過程なんだ』って」

「それ以上は何も言わなかったが、顔見れば分かる」

「あれは初恋に浮かれる少年だったな。多分、本人たちは全く意識してないと思うが」

3人は顔を見合わせ、旅立つことを選んだ上司2人の姿を思い浮かべた。

金髪碧眼で顔の左側に大きな傷がある隊長と、歩く年齢詐称と呼ばれた黒髪黒目の副隊長が並ぶ背中が『見える』。2人の視線の先には、焦がれてやまぬ天使がいるのだろうか。

隊長は一目惚れしてからずっと一途に天使を追いかけていた。副隊長は一時天使の元に居候しつつも、迷走していた隊長を助けるために奔走し、その過程で天使と距離を縮めている。

彼らが天使に向けた一途な愛が、外宇宙生命体との対話／人類の未

来を切り開くに至った要因なのだ。究極の混成部隊に合流したときから、こんな未来が訪れるような気はしていた。

去りゆく人々に思いを馳せつつ雑談を続けているうちに、艦の出発時刻が来たようだ。セレモニーは滞りなく執り行われ、外宇宙航行艦ソレストアルビーイング号は宇宙へ向けて旅立っていく。ゆつくりと、しかし確実に、前へ向かって。まるで人類の歩みそのものだ。

旅の目的は、滅亡の危機に瀕した外宇宙生命体の故郷を救うこと。地球連邦と各地の施設部隊組織の力を結集された外宇宙航行艦でも、彼らの旅がいつ終わるかは分からない。ハワード、ダリル、アキラが現役軍人である間に帰って来るのか、或いは亡くなった後に帰って来るのか。どちらの可能性もあり得る。

「――本当に、行ってしまったんだな」

ソレストアルビーイング号が見えなくなった後で、ハワードが噛みしめるように呟いた。ここに来てようやく、隊長と副隊長はもういない。という事実と向き合うことになったのだ。膜一枚隔てたソレを改めて突きつけられ、実感し、3人は空を見上げる。

晴れ渡った空には雲一つすらない。空の向こうには花が咲いている。外宇宙生命体との対話と和解が成立したときに、彼もしくは彼女らが咲かせた花だった。人と共に生きる道を選んでくれた証は、今日も美しく輝き、咲き誇っていた。

「いつまで感傷に浸ってんだよ、フラッグファイター」

「ジョシユア……」

「隊長だって言ってるだろーが」

空を見上げていた3人は、後ろから聞こえてきた声によって引き戻される。振り返った先には、眉間に皺を寄せたジョシユア・エドワーズの姿があった。

ジョシユアはつい先日、数時間前に旅立っていった隊長から直々に

後任として任命されたばかり。故に、隊長と呼ばれるようになって日が浅い。

『隊長と副隊長がいなくなる』という実感が薄かった3人は、たまに素で彼の名前を呼んでしまっていた。尚、実感を得た後もそんな感じだったのだが。

「世界は変革を迎えててんやわんやしてるんだ。こんなところで立ち止まってられないだろ」

「言われなくともそのつもりです。やるべきことは沢山あるので」

「そちらこそ、隊長直々に後を託されたんでしょう？ 期待してますよ、新隊長」

「言ったな!?! よし見てろよ。元・隊長殿なんざ簡単に超えてやるんだからな!」

ジョシユアの煽り——遠回しに発破をかけている——に応えるように、ダリルとハワードがニヤリと笑い返す。間髪入れず、ハワードが2人に噛みついた。

「今日は部隊の親睦会だからな。こっちは準備万端、気合十分なんだよ!」

「もう始まってから、早く来いよ!」なんて自信満々にそう言う方向転換し、去っていく背中を見送る。ハワード、ダリル、アキラも和やかな気分で踏み出そうとして——止まった。

3人の頭脳は個別に、けれども同じ懸念に辿り着く。慌てて奴の背中を追いかければ、奴の進行方向から漂ってくる異臭。ジョシユアが扉を開けた先には、文字通りの地獄絵図が広がっていた。

親睦会に参加していた面々の大半がひっくり返って呻いている。腹を押さえている者、ゴミ箱に顔を突っ込んでいる者、泡を吹いて痙攣している者、発狂して暴れている者など様々だ。

テーブルの上に載っている料理も然り。色がおかしいやつ、臭いが

おかしいやつ、視界に入るだけで食欲が失せるやつ、食べ物体を成してないやつのおんパレード。

割れた皿やコップ、ひっくり返った参加者で構成された死屍累々の山。その中でただ一人、連邦初の革新者が涼しい顔で料理を食べていた。

「メ、メシマズテロだああ!!」

「くっ、遅かったか……!!」

「医者ー! 衛生兵ー!」

「な、なんだよオ!? みんなしてそんな大袈裟な……」

トラウマを爆撃されたアキラが悲鳴を上げ、ダリルが沈痛そうな面持ちで額に手を当てる。ハワードは即座に踵を返し、内線に手をかけた。部下たちの反応に涙目になるジョシユアを完全無視する形となる。むくれるジョシユアに同意したのは、彼の料理を食べ進める連邦の革新者だった。

「ソルブレイヴズ隊長の言う通りですよ。なんです、そんなに慌てて」

「連邦の革新者は黙ってる!」

「失礼な。私はゲテモノ系も”やぶさか”ではないだけです」

「人の料理をゲテモノって言うな!!」

連邦の革新者は、ダリルとジョシユアの地雷を見事に踏み抜く。その脇で、援軍を呼ぶというミツシヨンを達成したハワードが応急処置に駆け回っていた。

「たいちよおおおおおおお! ふくたいちよおおおおお! はやく、はやくかえってきてええええええええ!!」

尚、度重なるジョシユアのメシマズがトラウマになってしまったア

キラは幼児退行しており、泣き叫ぶのが関の山である。

医療関係者がここに辿り着くまで、アキラは“もういない”――
否、宇宙に旅立ったためすぐに戻って来れない2人の人間を呼び続け
ていた。

リメイク版・1stシーズン編完結のお知らせ

“武士道”と名乗っていた頃の自分にも、生き恥を晒してまで生き永らえた理由があった。道化——いや、あれはどちらかと言えば玩具か——にされても尚、生きようと決意した理由があった。

真つ暗闇の宇宙を引き裂くように飛んだのは、“天使”の機体が持つ特徴だった緑色の光。その先にいるのは、白と青を基調にした“天使”／自分が焦がれてやまなかった“革新者”。

この心臓が止まるまで、この意識が途切れるまで、その光を——その姿を、目に焼き付けて終われたのなら。

本当の願いは投げ捨てた。手を伸ばすには、積み重ねてきた生き恥が多すぎる。暗く嗤った女の白い手が、自分の体を這いずり回る感覚が振り払えない。

最早自分は、あの頃には戻れない。“革新者”も、変わり果ててしまった自分の悍ましい姿を目の当りにしたら、侮蔑の眼差しと軽蔑の言葉を向けるのだろう。

すべてが終わったら、二度とこちらを振り返ることはないのだ。彼女は前を向き、未来を生きるために生きていく。——そうして、自分は過去になるのだ。

（——あの日、私は思ったのだ。『ならばせめて、キミの“未来の水先案内人”になれたらいい』と）

自分が“壊れていく”中で、せめてそれだけはと願っていた。彼女の名を呼ぶこともできず、彼女の足を引っ張るような真似しかできず、そのくせ未来のない自分。

好敵手としての矜持はとうに折れ、彼女を愛した男という勤めも果たすことのできない、いずれは思考もままならない肉塊に成り果てるだけの命だ。だからこそ足掻き続けた。

足掻いて、足掻いて、足掻いて、足掻いて、足掻いて。

その果てに、「天使」の手を取ることができた。蒼く煌めく御旗の元へ「還る」ことができた。失ったものは沢山あつて、積み重ねた罪や口に出せない黒歴史も沢山残ったままで、やることだつて沢山あつた。絶えず動き続ける世界と、新たに迫りくる驚異の数々。忙殺される日々を過ごす中、それでも考えずにはいられない。

「武士道」と名乗り始めた頃から、ずっと同じ光景を見続けている。蒼く煌めく「未来への水先案内人」——それに殉じることだけが、自分に許された唯一のことだと思っていた。それだけは奪われたくないと願つて、それを標にして宇宙そらを駆けていた。最期にそう在れるなら、そう在れたなら、それはきつと。

(ずっと、確証があつた。悟りを開いたとも言えるだろうし、使命感とも言えるだろう。或いは——脅迫概念とも言える程のモノが)

今なら——いや、今だからこそ、自分は胸を張っている。誰を泣かせることになつても、誰の怒りを買うことになろうとも、誰から罵詈雑言をぶつけられようと、何人たりともそれを否定させない。それが我が友であろうとも、共に戦う僚友であろうとも、「革新者」たる彼女であつてもだ。

(——そうだ)

荒い呼吸を繰り返しながら、前を向く。
そうして、いつもの調子で笑つた。

(私は、この瞬間ときのために生きてきたんだ)

彼女の道を阻むモノは一掃した。だが、後一手が足りない。自分の機体はもう既に満身創痍だし、既に「金属生命体」によつて浸食されている。浸食は機体内部どころか、自分の身体まで進んでいた。

いずれ自分の機体は「金属生命体」によつて完全に侵食され、「革

新者”やZ—BLUEを害するだけの存在に成り果てるだろう。武装も殆ど使用不可。文字通りの万事休す。最早手立ては失われた。

……否、まだだ。まだできることがある。自分の役目を——彼女の“未来の水先案内人”になるという役目を果たすために、必要なものは残っている。そうと決まれば——

『この戦場、私も命を懸けて戦う！——だが、敢えて言おう！』必ず生きて帰る』と！』

「……………」

脳裏に浮かんだのは、出撃前に自分が言った言葉だ。彼女と対をなす“もう一人の革新者”であり、自分が越えるべき存在と見定めた人物。

彼から『命を粗末にするな』と、『“革新者”を泣かせるような真似はするな』と釘を刺された際の返答。その言葉に嘘はなかった。

——結局、嘘にしてしまうけれど。

『生きることをやめてしまったら、明日を掴むことなんてできないだろう』

『…………だから、俺は生きる。お前も、生きろ。——生きてくれ、グラハム・エーカー』

(…………また、キミを泣かせてしまうのだろうか)

誓いを果たすことができない己の不甲斐なさに苦笑する。いつか、この離別わかれを乗り越えて未来へ進んでいく“革新者”の背中を思い描いて、寂しさを感じてしまう自分の弱さに苦笑する。いつか見た彼女の涙を思い出して、ちよつとの安堵と優越感に浸ってしまった己の馬鹿さ加減に苦笑する。

『全部終わったら、鍋パーティしよう。俺と、お前と、“革新者”と、

「理想への憧れ」の4人でさ」

『……………』

『後でリクエスト聞いてやる。だから、何味にするのかちやんと考えておけよ』

出撃前に交わした副官との会話。

目を丸くする自分の答えを敢えて聞かなかった彼に言えなかつたこと。

——「自分は、彼が作った鍋を食べられない」という^{みらい}結末を《識っていた》から、答えることができなかつた。

『来年はどうする?』

『——また来年も、私の誕生日を祝ってくれないか?』

『それでいいのか?』

『ああ。プレゼントはなくてもいい。キミが「おめでとう」と言ってくれるなら、私はそれだけで充分だよ』

戦いが始まる前——つかの間の平和な時間に祝ってもらった、己の誕生日。

自分が、来年の話をしてきた「革新者」に告げた願い事。

——「来年の誕生日は来ない」という^{みらい}結末を《識っていた》が故に漏らした、ささやかな弱音。

『未来は変わらない』

そう言っていた誰かが辿った結末を、自分は《識っていた》。主を裏切り、数多の人を騙し、卑劣な裏切り者となつてでも、主ごと人類を救わんと奮闘した忠義の男を。

「裏切り者」の名を冠したマキナから齎された英知に、彼は自身の結末を見た。『故に、自分たちでは世界を救えないのだ』という答えを悟つて、そうして——彼は役目に殉じた。

かの殉教者の名は、何だったか——なんて、考える。馬鹿みたいな現実逃避はここまでだ。

(——還りたかった、な)

未練や後悔は山のようにあった。もうやってこない未来を惜しみ、悼む。

ああでも、悪くはなかった。幸せだった。充分生きた。

だから——もう、いかなくは。未来への水先案内人”として。

敢えて機体の動力源を暴走させる。目標は、”金属生命体”の中核

——その道を阻む巨大な壁。

一世一代、さいごの大仕事だ。後ろ髪を引かれるような感情を振り払って、尻込みしそうになる己を鼓舞するように。

”未来への水先案内人”として在れることを誇りながら、自分が生き永らえた意味を噛み締めながら、男は腹と心の底から叫んだ。

「これは、死ではない！ 人類が、生き残るための——!!」



男は走っていた。夜景に彩られた街並みを一切気にすることなく、待ち合わせに指定された場所まで駆け抜ける。

(すっかり遅くなってしまった……!)

時間は既に夜の8時。待ち合わせ時間を既に3時間以上過ぎていた。これだけの時間待ちぼうけを喰らったなら、愛想を尽かして立ち去っていてもおかしくない。端末の連絡を確認したが、待ち人からの連絡はなかった。

”彼女からはまだ、『待ちきれないので帰る』と言われていない”——しつこく諦めの悪い男が食らいつくには充分な理由である。い

や、どちらかと言えば、継りついているといった方が近いのかもしれない。なかった。

長い戦いが終わり、いびつに重なっていた多元宇宙が正されたのはつい先日のこと。あるべき場所へと還った者たちは、それぞれ事後処理に追われていた。男もその1人である。

ELSとの対話が成し遂げられたこの世界では、事後処理が終わり次第、刹那とイデアが旅立つこととなっていた。滅びの危機に瀕しているかの種族の故郷を救うために。

多元世界の研究技術が『ある程度』残っているとはいえ、彼女たちが旅を終えて戻ってくるまでの目途は一切立っていない。数年単位か、数十年単位か、或いは——数百年単位かかるのかも。

『……暫く、お前の誕生日を祝ってやれない』

申し訳なきように目を伏せた刹那の姿を思い浮かべる。彼女にそんな顔をさせてしまった自分の不甲斐なさに頭を抱えなくなったが、そんなことをしている暇があるなら走らなければ。

こうやって、刹那に思いを馳せることができる——それがどれ程の価値があるのか、男は《識っている》。刹那と心を交わすことができる幸福を、そんな未来へたどり着けた幸運を。

せつかくその権利を勝ち取ったのだ。無駄にしたいくないと思うのが人間というものだろう。だが、自分は軍属の身。復興や事後処理を中途半端に放り出すわけにもいかなかったワケで。

できる限りの最善は尽くした。だから今、こうして、男は待ち合わせ場所まで走っている。走って、走って、走って、ようやく待ち合わせ場所の展望台——その入り口に辿り着いた。丁度そのタイミングで、ライトアップの光が消える。閉館時間になってしまったらしい。

展望台の周辺にいる人々は帰り支度で慌ただしい様子だ。男は周囲を見回したが、待ち人の姿は一切見当たらない。時間を見れば午後9時。こんな事実を羅列されて、前向きに考えられる人間は少なからう。それでも、一縷の望みに縋るようにして、端末にメッセージが

来ていないか確認しよう」と――

「――グラハム・エーカー！」

待ち人の声が聞こえた気がして顔を上げる。そこにいたのは男――グラハムの待ち人である刹那。彼女は息を切らせてこちらへ駆け寄って来た。

上着や靴などは男性物に見間違えるようなデザインであるが、あくまでもそれは小物だ。本命は、控えめな装飾が施された白いワンピース。

青と白を基調にした服装――それを見て真っ先に思い浮かんだのは、いつかの軍事演習場に降臨したガンダムエクシアを彷彿とさせる。

はつきり言おう。暫し呆けた。

「すまない、遅くなった」

「い、いや……。私の方も、今来たばかりなんだ」

何故かしどろもどろな答えしか返せなくて、グラハムは内心苦虫を噛み潰していた。何か気の利いたことの1つや2つ言えたらよかったのだが、喉が痞えてしまったかのように息苦しい。奇妙な沈黙に耐え切れなくなった男は、現実逃避がてら今後の予定を組み立てることにした。

現在時刻は夜の9時過ぎ。店も施設も大半が営業を終えている。何かを見て回るにしても、どこかの店に行くとしても、行動範囲はぐっと狭まってくる。何をしても時間がない。

このまま『何もできないまま』というのは落ち着かないのだ。幾ら男が『してもらおう』――或いは『もてなされる』側であっても、この状況に甘んじているのは性に合わなかった。

「……何も、用意できなかつたんだ」

「刹那……」

男が気の利いた言葉の1つをひねり出すよりも、刹那が申し訳なきように目を伏せる方が早かった。彼女はそれ以上の言い訳をしない。当事者として胸を痛めているらしかった。

彼女の《聲》を拾い上げる。〈戦後の混乱に乗じて馬鹿なことをしようとしていた連中を鎮圧するために奔走した〉結果がこの現状。この日のためにしていた準備は全部ダメになってしまったらしい。

それ故の『何も用意できなかった』なのだろう。俯き、沈黙してしまった彼女の顔を見るのが忍びなくて、グラハムは咄嗟に彼女の手を取った。弾かれたように顔を上げた彼女を真正面から見つめ、微笑む。

「なら、1つ、私の頼みを聞いてもらえないだろうか?」

「俺にできる範囲なら」

「——祝ってくれないか? 『おめでとう』と。……去年、キミに頼んだ通りに」

——そう言った自分の声は、震えていなかっただろうか。

だって、男は《識っていた》。自分はきつと、今〃〃こうして〃〃いられない——そんな未来の可能性を《視ていた》のだ。

〃あのとき、踏み出そうとした自分の手を引き留めてくれる人々がいなかったら〃〃——そんなIFを考えることが怖いくらいに、今が満ち足りている。

『来年はどうする?』

『——また来年も、私の誕生日を祝ってくれないか?』

『それでいいのか?』

『ああ。プレゼントはなくてもいい。キミが「おめでとう」と言ってくれるなら、私はそれだけで充分だよ』

戦いが始まる前——つかの間の平和な時間に祝ってもらった、己の誕生日。

自分が、来年の話をしてきた刹那へ告げた願い事。

彼女は目を丸くして息を？む。グラハムの言葉に込めた意図は、正しく伝わったらしい。

ほんの一瞬、刹那の表情が歪んだ。泣き出してしまいそうな面持ちは、けれどすぐに苦笑へと変わる。そうして——彼女は柔らかに微笑んだ。

「——誕生日おめでとう、グラハム」

遠くから物音が聞こえてくる。起き抜けのぼんやりした意識ではあるが、それが生活音——料理を作っているときに聞こえてくる音だということには気づいた。

包丁で何かを切る音、フライパンで何かを焼く音、材料や食器を洗う際の流水音がとても心地良い。このまま、とろとろとした眠気に身を任せてしまいたいと思う程度には。

程なくして、良い香りが鼻をくすぐる。食欲をそそる匂いだ。スパイス系の香りだろうか？ その間に紛れるようにして、どことなく甘い香りがする。

まどろむ意識のまま手を伸ばす。衣擦れの音とシーツの滑るような感覚があるだけで、何度か空を切った。傍にあるはずだと思っていた質量や温もりがないことに気づいたとき、まどろんでいた意識が一気に覚醒する。案の定、隣はもぬけの空だった。

シーツに残った温度からして、隣にいたはずだった相手がベッドを出てから相当の時間が経過したのであろう。……成程。生活音を出していたのは、先にベッドから出ていた張本人——刹那らしい。グラハムはゆっくりと体を起こした。

久々の逢瀬ということで、グラハムは誕生日当日の夕方から長めの

休暇届を出した。刹那側の事情はよく分からないが、昨日の会話を思い出す限り、こちらと似たようなものなのだろう。彼女が拠点としているセーフハウスの内装をしげしげと観察しながら、グラハムは身支度をした。

(……相変わらず、伽藍洞としているな。すぐに離れることを想定しているわけだから、荷物が少ない方が都合がいいのだろうか)

モデルルームと大差ない内装と、刹那が持ち込んだであろう僅かな私物。その中に見知ったもの——グラハムが刹那に贈ったプレゼントを見かけて、思わず口が緩む。

その他にも、刹那が誰かから受け取った品物がちらほらしている。セーフハウスに招待される機会が増えれば増える程、少しづつ、彼女の私物——贈り主たちが刹那を想う《聲》も増えてきた。

それらすべてに応えるかのように、刹那は私物を丁寧に扱っていた。時折、ふとした拍子に穏やかな微笑を浮かべる回数が増えてきたことも、グラハムにとっては嬉しいことだった。

「おはよう、刹那」

「ああ、おはよう」

ダイニングに足を踏み入れれば、静かに目を細める刹那と、美味しそうな料理が飛び込んでくる。どれも、グラハムには馴染みのない料理だ。

以前、刹那が『自分の故郷の料理』と言って送ってくれた手作り菓子は中東のものだった。ということは、テーブルに並んだ料理は刹那の故郷の料理なのだろう。

刹那に振舞われたとき以外のグラハムにとって、中東料理を食べる機会はそう多くはない。故に、食卓を彩る料理に対して物珍しさを感じるのは当然のことだった。

料理を眺めるグラハムに対して何を思ったのか、刹那は苦笑する。

「本当は、昨日の夕餉として振舞う予定だったんだ。1日遅れてしまったが……」

「そんなことはない。気持ちだけでも充分だというのに……今年は贅沢だな。——キミの故郷の料理かな？」

「ああ。……母さんが生きていた頃、一緒に作ったものだ」

もう戻れない過去をなぞるように、或いは悼むように、刹那は目を伏せる。そんな彼女を、グラハムは静かに見つめていた。

つかず離れずの位置に立って、彼女の心に寄り沿う。親がいないグラハムに何ができるかは分からなかったけれど、何かしてやりたかった。

暫しの沈黙の後、刹那に促されて席に着く。彼女は居心地悪そうに視線を彷徨させた後、自分が作った料理の解説を始めた。

『祝い事などで必ず食される』というポピュラーな料理——肉を乗せた炊き込みご飯・カブサ。肉料理の付け合わせとして長い伝統があるパセリメインのサラダ・タブルー、茹でたひよこ豆やんにく、スパイス等を混ぜたものの上にきゅうりやビーツを乗せたストリートフード・バリラ。

「それから」と言って言葉を切った刹那は、冷蔵庫を開ける。彼女が持ってきたのは小さな陶器。ほのかに漂う甘い香りは、嘗て嗅いだことがあった。その料理の名前は、ウムアリ。中東の言葉で「アリのお母さん」と呼ばれる伝統的なデザートで、祝賀や祭りのときに振舞われるものだ。

パンとバターを使ったプリンのような焼き菓子には、沢山のナッツや乾燥フルーツが入っている。焼く前にすべての材料を牛乳に浸し、その上から砂糖をかけて焼き上げたもの。——刹那が初めてグラハムに振舞ってくれた、手作りの菓子だった。

「……次は、いつ作ってやれるか分からないから」

「刹那……」

刹那は申し訳なきように目を伏せた。『暫くの間、グラハムの誕生日を祝ってやれない』と告げたときと同じ顔をしていた。彼女にそんな顔をして欲しくないのに、自分には成す術がないと言うのがもどかしい。

グラハムは刹那に地球のことを頼まれた身。彼女にとって、グラハム・エーカーという人間は「後を頼めるくらいには信頼を置いている相手」なのだろう。不義理と不貞行為を働いて、愚行を繰り返して、前へ進もうとしていた彼女の足を引っ張って困らせたというのに、刹那は「後を託す相手」としてグラハムを選んでくれた。

去年の誕生日ではろくでもない隠し事をして、彼女に内緒で死ぬ覚悟を固めていたというのに、刹那は怒らなかつた。いつかと同じように手を伸ばし、『生きてくれ』と言ってくれた。そうして今年の誕生日もグラハムの我が儘を叶えてくれて、一夜明けた後も素敵な贈り物を手渡してくれている。

(彼女を愛する男として、私に出来ることは――)

『想いを口に出すのは無粋になりがちだ』

『だが、時には口に出さねば相手の心に想いが響かぬ時もある』

――不意に、ノイズ塗れの虚憶きよおくが《視えた》。

見知らぬ場所の、見知らぬ施設内部。新たな一步として旅立つ者たちと、そんな旅人たちを見送る誰か。旅立つ者たちから『共に来て欲しい』と希われていたニュータイプの少年は、『箱を開けた責任を果たす』と言って地球に残った。ザビ家の末裔の傍に居ることを選んだのだ。

外宇宙への旅路へ志願した者の中には、戦時特例による司法取引で無罪放免となった者もいる。彼らはイノベーターと共に旅立つことを望んでいたようだ。彼らの想いを感じ取った女性は敢えて何も語らないことにしたようだが、そんな彼女に苦言を呈した者がいた。今

の言葉は、そのうちの片方が彼女に語ったことだった。

男性のソレは、苦言というよりはアドバイスに近い。それは嘗て自分が経験したことであり、イノベーターの女性から教わったことでもあった。同時に、嘗ての女性が『男性から教わったことだ』と零していたものでもある。それを聞いた女性は仲間たちを見回した後、意を決したように口を開いた。

『みんなと共にに行けることは心強い。……だが、それ以上に俺は嬉しく思っている』

刹那から「後を託された」ことを、グラハムは誇りに思っている。そこに嘘偽りもない。

それと同じくらい、グラハムは「刹那と共に往きたかった」。それが我が儘でしかないことを理解している。

口に出すにはあまりにも無粋。こんなものを刹那の心に投げかけたところで、彼女の邪魔にしなければならないだろう。そんなことは否が応でも《理解^わ解^かつていた》。……なのに。

「旅路は、キミたちだけで行かなければならないのか？」

「グラハム……？」

「——やはり、私のような半端者^{ニンゲン}では、キミの供としてはお邪魔かな？」

「そんなことは……！」

存外、意地の悪い——拗ねたような調子の声が出ていたらしい。刹那が珍しく声を荒げて否定にかかった。

それでも、刹那はグラハムを旅路の供に選ぶつもりはないようだ。赤銅色の瞳は、途方に暮れてしまったように揺れている。

「すまない」と短く謝罪し、グラハムは刹那に手を伸ばす。頭を撫でて、頬に触れて、彼女の顔を覗き込んだ。

「私は自他共に認める程我慢弱い。少しでも、キミには早く帰ってきて欲しいと思っっている」

「……すまない」

「謝らないでくれ。これは私の我が儘だ。……まあ、私も新人類の端くれ。キミを待つことに関しては、何の問題もないよ」

人間としての枠組みはどうに超えてしまった身。新人類の1種として『目覚めた』己は、普通の人間とは比べ物にならない程の長命と、緩やかな加齢を手に入れた。現在確認されている限り、最長記録は500年程度だ。それくらいの間なら、刹那の帰還を待ち続けることが出来る。もしかしたら、最長記録が更新される可能性もあるかもしれない。

刹那は言った。『旅路の最中に、ELSと融合する必要が出てくるかもしれない』と。ELSと融合した人間の寿命がどうなるかは分からないが、今のグラハムならば、彼女が旅路を終えて帰還した後も、充分共に時間を歩むことはできる。——3桁年内に、彼女が還ってきてくれたのならば」という前提がつくけれど。

「ああそうだ。我が儘ついでに、幾つかいいだろうか？」

「俺に出来る範囲なら」

グラハムの言葉に、刹那は即座に頷き返す。どこまでも真摯な眼差しと想いが伝わってきた。——そういうところが愛おしいと思う。

「——すべてを終えて帰還したキミを、一番最後に迎える権利が欲しい」

それを聞いた刹那が目丸くする。彼女はグラハム・エーカーという男の気質を熟知していた。それ故に、意外に思ったのだろう。

先程も彼女に言ったが、グラハムは自他共に認める程には我慢弱い性格である。自分で言うのも何だが、独占力も人一倍あるし、割と執

着しやすい方だ。

多分、そういう人間が望むのは “一番最初” であろう。実際刹那もそうだと予想していたらしく、「最後でいいのか？」と問いかけてきた。グラハムは頷く。

「ああでも、帰還に関する連絡は、一番最初にして欲しいな」
「何故？」

「キミを迎えるための準備があるからね。お好み焼きの材料を揃えたり、パウンドケーキを焼いたりとか」

お好み焼きとパウンドケーキ——2つの料理名を聞いた刹那は、グラハムが言わんとしていることの意味を理解したらしい。小さく息を飲んだ。

刹那がグラハムにウムアリを手渡してくれた日のオフ会で作った料理がお好み焼きで、ウムアリへの返礼としてグラハムが作った菓子がパウンドケーキである。

この時点で、彼女は既にグラハムが言わんとすることを理解している。だが、グラハムは敢えてそれを口に出した。

「どれだけ時間がかかっても構わない。戻ってきた後、私よりも先に会いたい誰かがいてもいいんだ。そちらを優先してくれていい。だから——」

“刹那が地球に帰ってきたら会いたい相手” には見当がついていないし、その相手に対して妬いてしまう気持ちがないわけではない。己の我慢弱さに関しては言わずもがな。……それでも、「構わない」と言いきれてしまうのは、偏に彼女への『愛』であった。

空を愛し、空に焦がれた少年時代。刹那とガンダムに会い、彼女らに焦がれて駆け出した青年期は、未だ道の途中。戦乱が終わり、新たな始まりを迎えた世界共々、道は続くのだ。グラハムを取り巻く環境は大きく変わり、グラハムも変わっていく。

胸に抱き続けるこの『愛』のカタチも、それを出力した際に形作られるであろうモノも、絶えず変化し続けるのだろう。だけど、変わらないものがあるとすれば、それは――。

「旅が終わった後は――キミと共に在ることを、許してほしいんだ」

ELSの故郷を救い、地球に帰還した後。刹那が再び外宇宙へと旅立つのか、地球に根を下ろすのかは分からない。現時点での展望を聞いたところで、旅の途中で心変わりすることもあるだろう。新たなステージに踏み出すのも、未来を夢見る若者たちの背中を見守るのも、彼女の自由だ。

今回の旅路に、グラハム・エーカーは不必要である。刹那はそれについて申し訳なきさそうにしていたけれど、己の意見を曲げるつもりはないようだった。グラハムだって思うところはあられるけれど、彼女から「後を託せる相手」として見出された身。そこに不満はない。

だが、グラハムにだって限界はある。元々が我慢弱い気質なのだ。自分の限界は熟知している。故に、出した妥協点こたえは「ELSの母星を救いに行つて地球に帰ってくるまでなら頑張れそうだが、それ以上以降も離れ続けるのは厳しい」というものだった。

それを素直に告げれば、刹那は何とも言え無さそうな表情でグラハムを見つめる。赤銅色の瞳に滲むのは、呆れと慈愛。

グラハム的にはそれだけで充分なのだが、刹那は少し考え込むような動作を見せた。おや、と思つたのと、彼女が小声で呟いたのはほぼ同時。

己に言い聞かせる様な声色で紡がれたのは――つい先程《視た》きよわく虚憶で誰かが言っていたアドバイス。

「言葉にしなければ、相手の心に響かないこともある」、か……」
「刹那?」

意を決したように、刹那は小さく頷いた。

赤銅色の瞳は、どこまでも澄み渡っている。

「改めて言う。……今回の旅路に、あんたを連れていくことは出来ない」

彼女が紡ぐ言葉を、グラハムは真正面から受け止める。込められた想いに触れようと試みる。

「旅路は、長く過酷なものになるだろう。いつ戻れるかも分からない。だから、暫くは、あんたの誕生日を祝ってやれないんだ。すまない」

知っている。だってそれは、他ならぬ刹那がグラハムに語った話だ。それを「今、改めて話すこと」に意味があるのだろう。

刹那は一度そこで言葉を切った後、躊躇うように俯く。その様子は、いつかの少女の面影を連れてきた。

グラハムが刹那の正体を知った後の、1番最初の逢瀬——終わりと崩壊を覚悟して向き合った、最初の決戦を思い返す。

あのときの少女は、手を強く握りしめて泣いていた。『自分には何かを望む権利などない』と、己を罰しているかのように。

今の刹那は、その時と同じように手を握りしめている。唯一の違いは、彼女の瞳に滲む感情が悲嘆ではないことだろう。

——例えるならそれは、緊張、だろうか。

「だが——」

赤銅色の瞳は、真つすぐにグラハムを映し出す。

「今回の旅路が終わり、お前の元に帰ってきたら、そのときは——」

彼女は微笑み、手を差し伸べてきた。

「俺と一緒に……共に行こう。グラハム」

刹那の言葉が、刹那の想いが、グラハムの心に響き渡る。〃心臓を矢で打ち抜かれる〃とはこういうことか——なんて思ったのと、刹那がぎよつとしたように目を剥いたのはほぼ同時。

酷く狼狽した様子の彼女から「泣くほど嫌か……!？」と問われて漸く、グラハムは『自分が泣いている』ことに気づいた。グラハムは苦笑し、静かに流れ続ける涙を拭った。

「心配は無用だ。嬉し涙というヤツだよ。……少しばかり、情けないがね」

差し伸べられた手に応えるように、グラハムも手を伸ばした。刹那の手を取って、そつと握り返す。

互いの顔を見て微笑み合って、額を合わせてまた笑う。〈嬉しい〉や〈愛している〉という互いの《聲》がよく聞こえてきて、それが嬉しい。心が結ばれているのだと——分かり合えているのだと実感する。それを齎してくれたのは、他ならぬ刹那だった。

暫しじやれ合った後——我に返って照れ臭くなったのか、刹那が顔を真っ赤にしてそつぽを向いた。「料理が冷めてしまっ」という彼女の言葉に同意し——それでもかなり名残惜しかったのだけれど——グラハムは刹那を離し、朝食に向き合う。

自分たちがじやれ合っていた時間は思いのほか長かったらしく、料理から漂う湯気が見えない。それでも料理の熱は薄らと残っており、食べられないわけではなかった。いざというときは、電子レンジという文明の利器もある。

雑談に興じながら、グラハムは料理に手を伸ばす。

別れまでの足音など感じさせないくらい、穏やかで幸せな時間が流れていた。

2ndシーズン編リメイク作品開始のお知らせ

2023/10/10 9時から、『大丈夫だ、問題しかないから』シリーズのリメイク版作品、『問題だらけで草ア!!』2ndシーズン編の連載を開始しました。作品はこちら。

リメイク作品である『問題だらけで草ア!』シリーズは『大丈夫だ、問題しかないから』同様、〈1st Season〉⇒〈2nd Season〉⇒〈劇場版〉の三部作構成の予定です。

Re:vision要素は拾いますが、新作として展開された場合は様子見する予定。場合によっては「Re:visionとは繋がらない」体で話を続けていく可能性があります。ご了承ください。

今回は作品のあらすじ、プロローグに当たる文章の冒頭〜一区切り部分までを掲載しておきます。

相変わらず拙いモノカキで良ければ、この作品を見守って頂けたら幸いです。

【あらすじ】

人類に革新者イノベーターが現れる、ほんの少し前のこと。

世界には、自分の記憶や経験を共有させる力を持つ、共有者コウヴァレンターと呼ばれる人々がいた。

世界には、自身がまったく見たこと経験したことのない記憶および経験や知識——虚憶きよおくと呼ばれるものを持ってしまった人々がいた。

世界には、共有者の能力と虚憶きよおくの両方を持つ存在がいた。

これは、元・ユニオン軍所属のフラッグファイター／現・悪の組織及びスターダスト・トラベラー居候のMSパイロット——刃金はがね 空護くうご／クーゴ・ハガネを中心とした群像劇。

果たして、世界の明日はどこにあるのか。

『パンジャンドラムがどの方向に転がるか』を予測できたら、多分見つ

かりそうである。

Q. 問題だらけなんですか!?

A. 仰る通りです。具体的な問題点は以下の通り。

1. この作品は『大丈夫だ、問題しかないから』シリーズのリメイク版です。

2. 『ガンダム00』を原作に、アニメ版『地球へ…』、及び『スーパーロボット大戦』や『Gジェネレーション』シリーズ等の要素とクロスオーバーしています。

3. 主人公含め、オリジナルが多数登場します。

4. キャラ改変や原作崩壊、原作死亡キャラの生存要素がありません。

5. 刹那が先天性TSしており、グラハムとくつつきます（重要）

6. 刹那が先天性TSしており、グラハムとくつつきます（重要）

7. 刹那が先天性TSしており、グラハムとくつつきます（重要）

8. 基本はギャグとラブコメ色強めですが、時々シリアスになります。

9. このお話は1st本編開始前から始まります。

10. 現時点ではPixivとのマルチ投稿を予定していますが、更新優先度はハーメルンの方が高いです。向こうで2期篇の投稿が始まり次第、リンクを張りますのでお待ちください。

上記が「大丈夫」という方は、このお話をお楽しみください。

感想頂けると嬉しいです。

「あつ、第1幹部！ ブライテイクスに関する大河ドラマ、撮影全部終わったら嬉しいです！」

「本当!? よかったあ！ 『キャストとスタッフのいがみ合いで撮影延期になった』って聞いたときは、本当ホントにどうなるかと思ったんだ！」

構成員しやいんからの報告を聞いた第1幹部——リジエネ・レジェッタは、安堵と喜びから大きく息を吐いた。悪の組織もスポンサーとして、資金援助や各スタッフの斡旋等で駆け回ったのだ。上手くいってくれなかったら非常に困る。重要案件が無事に片付いたので、口元が緩んでしまったのは当然だろう。

他にも、映画やドラマに舞台の映像化やその原作小説の売り出しに関する事業展開は幾らでもある。新たな総帥そうすいとして就任してから頑張っている長男の姿を思い浮かべつつ、リジエネも端末を操作しながら案件の確認を行う。

つい最近に「新解釈を加えて再構成した」と銘打った——実際は、程々にプロパガンダを施しつつ、なるべく史実に寄せた——新説『ソレスタルビーイング』が長編ドラマとして放映されることになった。こちらの方にも、悪の組織——特に総帥しやちようも映画監修に関わっている。

特に、作品の主役となる刹那・F・セイエイ、彼女が愛した男であるグラハム・エーカー、2人の相棒をやっていたクーゴ・ハガネやイデア・クピディターズ役のカステイングには非常に煩い。彼女や彼と瓜二つの役者を見つけ出しては、役者のキャリアガン無視で主役に抜擢し、かなり厳しめの演技指導を行うという悪癖があった。

「『ソレスタルビーイング』の主役に抜擢された俳優たちは、この映画をきっかけに大成する」というジンクスがなかったら、一体どんなことになっていたことやら。

『今回も4人にそっくりな役者を引っ張って来た』と自慢げに語っていた凝り性の長男を思い出し、リジエネは思わず笑みを浮かべた。

「第1幹部、ガンダム記念館の記念式典に関する案件の進捗です」

「ありがとう！ 後でテオと総帥しやちようにも回しておくね」

構成員しやいんから受け取った資料を、記念式典で歌う予定となっている歌手——テオ・マイヤーと、記念式典のスポンサーとしてあちこち駆け回っている総帥しやちようへ転送する。

程なくして、彼らから返信がきた。どちらもメッセージも『資料の確認完了、進捗具合の把握、こちらの準備も万端』とあった。……どころも激務なので、正直ちよつとばかりし心配だったりする。

(……みんなが旅立って、結構な年月が過ぎたな)

忙しい日常の中、リジエネはふと立ち止まって空を見上げる。蒼穹の片隅に咲く花は、今日も綺麗だ。

刹那たちが旅に出たのは、1年戦争の記念館が出来たばかりの頃だった。今では計画の中だったガンダム記念館建設も既に終わっており、AGE-1を始めとしたガンダムが展示されている。勿論、ソレスタルビーイング製のガンダムはレプリカだ。歴史的な価値だけではなく、唯一現存するMSを見に行ける。観光施設という側面もあり、人で賑わっている。

現在ではMSは存在せず、全てワークローダーと呼ばれる非武装人型機動ロボットが闊歩していた。機体の殆どがELSを始めとする外宇宙生命体と共同で動かす。ことを前提に設計開発されており、外宇宙航行時のサポーターとして活躍している。MSとしてのガンダムは残らなかったが、その系譜はワークローダーへと引き継がれていた。

ブライティクスも、当時前線で戦っていた大人たちの多くがパイロットや指揮官から退役していたり、重鎮として今も現役で頑張っていたり、寿命で亡くなっていたりする。

あの頃子どもだった面々——地球防衛組やキオたち——も大人を通り越して初老となり、そろそろ後進育成に取り組もうとしていた。外見変化が緩やかなリジエネたちとは違って、周りはあつという間に成長し、老衰し、次世代に後を託していく。

リジエネたちにもそういう文化が無いわけではないが、新人類としての特性上、人間よりも圧倒的な“周回遅れ”になりがちであった。

『あれから50年近く経過したのに、まだ仕事に慣れてないのか?』

『もうちよつと落ち着いて仕事してるイメージがあつたから、未だにあの調子なのは驚いたよ』

（『元・第1幹部がグラン・マから指導者ソルジャーと総帥しやちようの地位を継いで、僕が第1幹部に配属された』ことは、体感時間的につい最近のことなんだけどなあ……）

つい先日顔を合わせた仁とキオからかけられた言葉を思い出し、リジエネは内心苦笑した。イベント関連の仕事でてんやわんやしている姿を見た2人は、懐かしそうにこちらを見つめていたっけ。

『……僕たちつて、宙継くんと同年代だったよね？』

『外見年齢が若いままの人たち見てると、なんかバグるよな』

尚、その隣で悠宇とディーンが割と真面目な顔をして悩んでいたか。特に前者は、久しぶりにマノンやゴーク等と再会して話をしていたらしく、色々思うところがあつたらしい。

他にも、クレセント銀河や高度文明連合からの使者が地球を訪れたこともあつたか。ブライテイクスが結んだ縁は、後の外宇宙探索や異種族との対話に活かされていた。

勿論、ブライテイクスの戦いが終わった後も、地球は何度も危機を迎えた。その度に、仲間たちは立ち上がった。

ブラック企業を体現したような政治体系の惑星及び異星人（外見は人間と瓜二つ）から「奴隷になつて、社畜の如く365日戦い続ける」と命令されたこともあるし、神にも等しき生物による身勝手極まりない暴挙によつて地球人が拉致されていたなんてこともあつたし、いっそや自分たちが打ち倒した「時代遅れのシステム」を凶悪にしたような存在の暗躍に地球全土が巻き込まれたりもしたか。

仲間の多くが故郷たる惑星へ帰還したり、シヨウたちのように機体を破壊や封印していたり、刹那たちのように外宇宙探索へ旅立って不在だったりして、ブライテイクス全盛期と比較すれば戦力不足もい

ところである。それでも何とかやってこれたのは、平和を目指して武力を手放し、故郷へ帰り、外宇宙探索へと飛び立った仲間たちの想いを無駄にしたいくないと思っただから。

(あれから色々あったけど、僕らは元気でやっているよ)

リジエネはもういない人々に思いを馳せる。脳裏に思い浮かべたのは、新緑のマントを翻す女性——敬愛する『母』の背中だった。

彼女は「楽園」とよく似た白鯨に飛び乗って、どこか遠い場所へと飛び立ってしまった。もういない人々たちが乗る白い船は、今頃どこを飛んでいるのか。

……答えなんて、『1つ』しかないと《理解^{わか}している》。彼女が乗った白鯨の行き先が何を意味しているかなんて、とっくの昔に気づいている。それでも——。

(いつか、貴女が僕たちを迎えに来てくれたら。……貴女にたくさん、話したいことがあるんだ)

「白鯨が迎えに来る」ことが何を意味しているのか、リジエネたちは知っている。『迎えを望むのはいけないものだ』ということも、知っている。

同時に、知っているのだ。それが『いつか、誰にでも、分け隔てなく、等しく訪れる終わりなのだ』ということも。

「地球連邦のキース・アニアン大統領が、火星のゼラ・ギンス大統領や木星連合の大統領と会談を行い——」

「外宇宙探査から帰還した「楽園」の艦長ジョミー・マークス・シンさんが、『新たな銀河系と異種族とのコンタクトに成功した』と——」

「民間企業の外宇宙探索部隊に所属している刃金宙継さんが、長年のパートナーである「金属生命体の特殊個体」と婚約を発表——」

リジエネが物思いに耽っている間にも、世界は絶えず動き続けている。新たな世代が台頭し、世界を次のステージへと推し進めていくのだ。

まだまだ当分、白鯨はリジエネたちを迎えに来ることは無いだろう。勿論、リジエネたちにだってやるべきことは沢山ある。地球と他の惑星に住まう命たちを繋げ、相互理解と平和を築くために。次世代を担う人々に心構えを教えるために。そうして——白鯨を迎えに来るよりも早く、この地球に帰って来る旅人を迎えるために。

新人類の勘が叫んでいるのだ。『外宇宙へ旅立っていったソレスタルビーイング号が、もうすぐ地球に帰って来る』と。特に総帥しやちゆうの力は正確な日時を察知していたようで、正式こたえあわせな発表が行われる瞬間を今か今かと待ち構えている。ブライダル雑誌の準備をしていたので、旅立った面々の誰かがそういうことになっているのだろう。

ブライテイクス時代の僚友たちの結婚式——その一部は、悪の組織が経営しているブライダル事業・部門が担当していたことを思い出す。式を挙げた当事者たちからすれば遠い昔に思うだろうが、リジエネたちにとってはつい最近の出来事であった。瞼を閉じれば、僚友たちの結婚式の光景がありありと思い浮かぶ。

(……一番ヤバかったの、アキトとユリカの新婚旅行だったなあ。2人が新婚旅行中にテロに合うきよわく。虚憶を《視て》対策立てたのが上手くいったっけ)

地球に残留することを選んだソレスタルビーイングのセカンドチームと、軍を辞した後は紆余曲折の末に悪の組織へ就職したジラート——否、レイナ・スプリガンらを巻き込んで、アキトとユリカ夫婦を襲撃しようとしたテロリストをぶちのめしたのは今でも覚えている。

奴らの目的——ユリカを生体CPU擬きにするのと、アキトを人体実験の被検体として使い潰そうと画策していた——を、総帥の思念波經由で把握したレイナ・スプリガンの大暴れによって、テロリストど

もは壊滅。テンカワ夫妻は何の問題もなく新婚旅行を満喫することが出来た。

尚、テンカワ夫婦は、ゾレスタルビーイングの地球残留組とレイナによる共同戦線によって、自分たちを狙ったテロリストどもが一網打尽にされた”ことを把握していたらしい。

料理修行中の夫の元に遊びに行った際、夫婦から感謝されたことは今でも覚えている。照れ臭いのを誤魔化すようにアキトの作った料理をダメ出ししていたレイナが、顔を赤らめていた姿も。

リジエネたちにとってはつい最近の光景だけでど、アキトたちにとっては遠い昔の話だろう。アキトが独立して自分の店を持ち、レイナがそちらを畳店に変えた”のは、今から数十年前だったから。

「生まれる命があれば、去り行く命がある。先を行く人々は、生まれ落ちたばかりの命を——”未知なる可能性”を秘める存在の未来を照らす役目を担う」

ブライティクスの由来は”未知なるものを照らす光”。未知なるものの中には、勿論『未来』も含まれている。

戦乱を駆け抜け、平和のために戦い抜いた彼らの軌跡は、今もこうして、人々の未来を照らし出しているのだ。

「『僕らの頑張りが、未来を照らす』……。その輝きを胸に抱いて、ヒトは未来を切り開いていくんだ。——そういうこと、だよな？」



リジエネの呟きに応えるように、懐かしい女性ヒトの《聲》が響く。何を言っているかは《聴き取れなかった》けれど、それに込められた想いを《理解する》ことはできた。

残響でしかないのかもしれない。リジエネの脳が、彼女と過ごした日々をエミュレートしただけの産物でしかないのかもしれない。だとしても、それを忘れることはできなかった。

だって、きつと、同じ気持ちで前を向いている長兄の姿を、リジエ
ネはずっと見てきたから。母と同じ瞳の色の外套を翻して、先頭に立
つ彼の背中を知っているから。

紡がれてきた命を、託されてきた命を、これからも続いていく営み
を照らすための光として、自分たちは歩き続けるのだ。

リメイク前の連載地点に到達したお知らせ

2023/11/26 0時で、『大丈夫だ、問題しかないから』シリーズのリメイク版作品、『問題だらけで草ア!!』2ndシーズン編のリメイク進捗が完了しました。以後は新規書下ろし&執筆となります。作品はこちら。

今回は作品のあらすじ、最新話の冒頭〜一区切り部分までを掲載しておきます。

相変わらず拙いモノカキで良ければ、この作品を見守って頂けたら幸いです。

【あらすじ】

人類に革新者イノベーターが現れる、ほんの少し前のこと。

世界には、自分の記憶や経験を共有させる力を持つ、共有者コウヴァレンターと呼ばれる人々がいた。

世界には、自身がまったく見たこと経験したことのない記憶および経験や知識——虚憶きよおくと呼ばれるものを持ってしまった人々がいた。

世界には、共有者コウヴァレンターの能力と虚憶きよおくの両方を持つ存在がいた。

これは、元・ユニオン軍所属のフラッグファイター／現・悪の組織及びスターダスト・トラベラー居候のMSパイロット——刃金はがね 空護くうご／クーゴ・ハガネを中心とした群像劇。

果たして、世界の明日はどこにあるのか。

『パンジヤンドラムがどの方向に転がるか』を予測できたら、多分見つけられそうである。

Q. 問題だらけなんですけど!?

A. 仰る通りです。具体的な問題点は以下の通り。

1. この作品は『大丈夫だ、問題しかないから』シリーズのリメイ

ク版です。

2. 『ガンダム00』を原作に、アニメ版『地球へ…』、及び『スーパーロボット大戦』や『Gジェネレーション』シリーズ等の要素とクロスオーバーしています。

3. 主人公含め、オリキャラが多数登場します。

4. キャラ改変や原作崩壊、原作死亡キャラの生存要素がありません。

5. 刹那が先天性TSしており、グラハムとくつつきます（重要）

6. 刹那が先天性TSしており、グラハムとくつつきます（重要）

7. 刹那が先天性TSしており、グラハムとくつつきます（重要）

8. 基本はギャグとラブコメ色強めですが、時々シリアスになります。

9. このお話は1st本編開始前から始まります。

10. 現時点ではPixivとのマルチ投稿を予定していますが、更新優先度はハーメルンの方が高いです。向こうで2期篇の投稿が始まり次第、リンクを張りますのでお待ちください。

上記が「大丈夫」という方は、このお話をお楽しみください。

感想頂けると嬉しいです。

〃6人の仲間集め〃——第3者からのハッキングを受けているヴェーダのブラックボックス内で進行している謎の計画である。

ソレスタルビーイングの活動再開を皮切りに発生したこのミッションは、リボンズたちの与り知らぬところで進行中だ。

件の情報をリボンズが把握できている理由はただ1つ。〃イノベイドの中でアクセス権が1番高いのがリボンズだから〃に他ならない。

〃6人の仲間集め〃の進行度は〃4人目の追加〃。『仲間を見つける力』を有する情報収集型イノベイドの学生／戦闘型の特性を有する訳アリの1人目——レイヴ・レチタティーヴォ、『仲間を目覚めさせる

力』を有する情報収集型イノベイドの医者である2人目——テリシラ・ヘルファイ、『仲間を繋ぐ力』を有する情報収集型イノベイドの少年である3人目——ブリュン・ソンドハイム、『機械を操る力』を有する元情報収集型イノベイドである同類殺しの4人目——ラーズ・グリース。

しかし、計画の進行中に何かトラブルが起きたらしく、『仲間を見つける力』を担当するレイヴと『仲間を目覚めさせる力』を担当しているテリシラが一時的に袂を分かって独自に行動を始めたらしい。

ヴェーダ内部に残っている行動記録バックログを確認する限り、トラブルが発生する可能性が高い行動をしていたのはレイヴの方だった。3人目であるブリュンを『仲間』に加えた直後、彼は外出している。目的地はとある無人島——曰く付きのガンダムが封印されている、ソレスタルビーイングの秘密ラボ。

(イノベイド限定とはいえ、S. D. 体制下における思考プログラムとほぼ同じ力行使できるイノベイド——ビサイド・ペインと深い関りがある場所だ。何か起きたとするならば、十中八九ビサイドが関わっている)

件のビサイドは『リボンズと同じE. A. レイの遺伝子配列で生み出されたイノベイド』であり、一時は『アレハンドロ派の協力者』として活躍していた同類だ。リボンズから見た彼は『腹に一物抱えている問題児』だったが、彼から見たリボンズは『いつか蹴落とそうと思っている邪魔者』でしかないのだろう。

そういう経緯もあって、自分たちの仲は『表面上は可もなく不可もない、イオリア計画に賛同する同類として協力関係を結んでいた』仲だった。——最も、その関係は『ビサイドの独断専行が「原因で『処分』された」一件で途切れてしまったのだけだ』。

『『6人の仲間集め』について、ちよつと気になることがあるんだ』

『今回は、僕自身の力で向き合ってみたいんだよ』

『大丈夫だよ！　ちゃんと成果を挙げて帰って来るから、安心して待っててね！』

（——リジエネ、大丈夫かな）

アロウズのパーティー会場への潜入任務が終了して以降、行方の分からないリジエネに思いを馳せる。彼が上記の言葉を言い残して消息を絶ったのは、ソレスタルビーイングとの情報交換を行った後。

以降の行動記録バックログを辿ろうにも、正確な行動記録バックログを辿ることが出来ない。挙句の果てには現在地点も開示されないのだ。『何かあった』と考えるのが普通であろう。

ただ、それは「悪の組織／スターダスト・トレイマーの第1幹部としてのリボンズ・アルマーク」の見解である。「長兄としてのリボンズ・アルマーク」は、全く別な見解を出していた。

リジエネ・レジェッタは、リボンズが『兄弟』と定義した同類イソペイドの中でも「自発性が強く、柔軟性に富んだ思考をする個体」だった。但し、思い浮かんだものは片っ端から実行・検証しようとするきらいがあるため、道徳や人権等を投げ捨て独断専行で動くのが玉に瑕である。

それでもリボンズや周囲の人々がリジエネの発想に耳を傾けるのは、『その発想で一定の成果を挙げてきた』という実績があるためだ。リジエネはリジエネなりに、リボンズやマザーの利になる——イオリアの理想実現に近づくための突破口を探し求めているのだろう。

（弟離れ、か……）

弟妹達の成長は喜ばしいことだ。——ただ、少しばかり、寂しいだけ。

（最近、マザーやアプロディアと何やら話し込んでたな。僕はてっきり、アニュー専用の支援機開発の話かと思ってたんだけど）

尊敬する母と悪の組織／スターダスト・トラベラーのバックアップを勤める頭脳にして疑似人格A Iの2人が、悪戯っぽく笑って沈黙していた姿を思い出す。リボンズは思わずため息をついた。

リジエネ主導で行われている秘密の話し合いに関して、他の兄弟妹たちは何も知らないようだった。把握していた内容を要約すると、
「アニュー専用の支援機開発」——最近、機体の名前が『ガツデス』に決まり、能力的に類似性が高いリジエネがテストパイロットをしてきた——程度。

彼が動かしているのはその試作機にあたる機体だ。リジエネのパイロット適性評価は「ガンダムマイスターとしての水準を満たす程度の適性はあれど、純粋な戦闘型と比較すると押し負けがち」である。思念增幅師（タイプ・レット）の能力を使った支援や連携の他に、自立兵器の扱いに長けていた。

リボンズ率いる第1幹部に所属する面々——リジエネ、ヒリング、リヴァイヴ、ブリング、デヴァイン、アニュー——の6人の中で、純粋な戦闘型はヒリング、リヴァイヴ、ブリング、デヴァインの4名だ。それ故、リジエネがMSで戦線に出る機会是非常に少なかったりする。

「6人の仲間探し」の構成員の大半が情報収集型イノベイドであり、疑惑と訳アリのレイヴ以外の面々は非戦闘員だ。尚、ラースは「元・情報収集型イノベイドが紆余曲折の末に、自力で戦闘技能（銃の扱いや狙撃能力）を獲得した」だけで、MSを用いた戦闘能力は皆無。故に非戦闘員として括られている。MSを用いた戦闘が必要になった場合、現時点で彼らは無力であると言えよう。

仲間の候補に選ばれたイノベイドの中にはMSを用いた戦闘技能を有していた者がいたようだが、該当者はラースによつて殺害されていた。「仲間」にまで適応されているかは分からないが、仲間候補は替えが利くらしい。数多のイノベイドの中からレイヴが該当者を見つけ、テリシラが覚醒させることで初めて「仲間」として認められるシステムだ。

（僕が採用担当なら、そろそろ戦闘に適性を持つ人材を引き入れたいところだけど――）

〈――リボンズ！〉

そんなことを思案していたときに割り込んできたのは、ノブレスの思念波であった。

どこか切羽詰まった様子に身を竦ませながらも、リボンズは彼の《聲》に耳を傾ける。

〈どうしたんだい？ そんなすごい顔して〉

〈緊急事態なんですよ！ 今、秘匿通信経由でデータ送ります！〉

ノブレスの鬼気迫った形相と勢いに気圧された直後、秘匿通信で何かのデータが送りつけられてきた。リボンズはそれに目を通す。

〈……は？ え？ ちょ、何これ？ 劣化版メギド？〉

〈わあ奇遇ですね。僕も一目見たときはそう思いましたよ。――でも、違うんです！〉

送られてきたのは図面である。一目見たリボンズは、思わず感想を零した。

期せずして、それはノブレスの第一印象及び感想と同じだったらしい。

一時は同調する姿勢を見せたノブレスであるが、即座に本題へと戻って来た。

〈アレハンドロの奴、刃金蒼海や王留美と結託して、僕らに内緒で衛星兵器の開発や出資に手を出してやがったんです!!〉

ノブレスの言う衛星兵器――メメントモリを一言で表すなら『自由

電子レーザー砲』である。軌道エレベーターの低軌道リングに設置した衛星兵器で、国際条約で攻撃や破壊が許されないオービタルリング上に存在している関係上、諸外国——特に半地球連邦政府を掲げている国では手が出しにくい。

国際条約という法律の守り——『条約違反の罰則』と言う名目を行って、報復と見せしめが可能——が万全なら、勿論、武力による迎撃手段——地球連邦軍の軍勢を配備することによる堅牢の守り——が揃っているのは当然だろう。地球連邦軍、及びアロウズにとって、報復や粛清が正当化されるというわけだ。

メメントモリへのエネルギー供給源は太陽光発電システム。まさしく、軌道エレベーターは最高の立地条件であると言えよう。

リボンズとノブレスは『アレハンドロを騙し、諸々出し抜いて完全勝利した』と思っていたが、そういうわけではなかったらしい。

こんな厄介な置き土産を残していくとは、本当に腹立たしい野郎だ。しかも、ネーミングセンスは最悪の極みである。

「ラテン語で『死を想え』、『死を忘れるな』か……。脅しの道具として、これ程までに似合う名前はないだろうね」

「本当にクソすぎませんかこれ？ 更にクソなのが、『S・D・体制下の技術をガン積みすれば『コンパクト化したメギドシステム』、主要部品だけぶっこ抜いて、D・体制下の技術をガン積みすれば『戦艦に搭載可能なメギドシステム』として運用可能になる』ってところなんですよね」

「バカかな？ バカなのかな?？」

「バカなんですよねぇ！ 『気持が分からんでもない』ってのが本当に悔しいんですけど!!」

あんまりにもあんまりな分析結果を聞いてしまったせいとか、リボンズとノブレスの口から暴言が飛び出す。この場に地球連邦の関係者がいた場合、2人は即刻ブラックリストに入れられて監視されることになるだろう。この場に誰もいなくて本当に良かった。

“『可能か不可能か』を主軸にして物事を考えるタイプ”は研究者や技術者気質に多い傾向がある。存在意義や価値を追い求めて迷走していた頃のリボンズ本人やリジエネを筆頭に、“自身の周囲にいる身近な研究者”及び“自身の周囲にいる身近な技術者”——ベルフトウーロやノブレス等が該当していた。

こういう気質の持ち主が抱える大きな問題点は“『それを可能にしまった場合、どのような事象——特に悪用された場合に発生するであろう悪影響——が起きるのか』に目を向けない”という点だろうか。技術が生まれる理由は様々だが、その大半が善意や好奇心である。

だが、邪な欲望を抱く者の行動力は計り知れない。ソレを満たすためならば、技術の在り方や使い方をおかしな方へと捻じ曲げてしまうこともある。善意と好奇心で産み落とされた画期的な技術が“数多の人々を不幸にし、命を奪いつくす”ものに変質——或いは魔改造されてしまい、本来の用途とは別物に成り果ててしまうことは日常茶飯事だ。勿論、その逆も然り。

ひとたび戦争が起きれば、戦いに使うための技術が次々と産み落とされた。戦争が終結して平和な世の中になった後、兵器のための技術が日常生活を支える画期的なモノとして転用されることも在り得る。

勿論その逆の事象——平和な時期に開発されたときは生活に役立つ画期的なモノとして迎え入れられたが、戦争が発生したことで軍事転用され、敵味方双方に死傷者を出す存在に化けたこともあった。

——要は、『どんな時代にもバカはいる』という話だ。

へっていうか、このデータ、どこから持ってきたんだい？

へマザーネットワークの子機端末の1つからぶっこ抜いてきました。フエニックスのお手柄です

へもうちょっと詳細なデータを引き出せたらよかったんだが、端末が破壊されたことを察知したグラントマザー『テラ』によってネットワークが切り離されちまってな……

ノブレスに名前を呼ばれたフェニックスが申し訳なさそうに肩を竦める。

しかし、彼が子機端末から引き出した情報はそれだけではなかったらしい。

〈実は、コイツに関しては〃反連邦を掲げる国を標的にして使用する〃プランがあるらしい。他にも、〃思考プログラムが施されたイノベイドが、何らかの意図をもってスイール王国に送り込まれた〃という情報もあつたな〉

〈へバカだろ〉

〈へバカなんだよ〉

男3人、満場一致の意見である。閑話休題。

〈僕たち、今、丁度スイール王国の郊外にいるんですよ。その間、現地の様子を調べてみますか？〉

〈いや、いいよ。キミたちは本命を落とすしに行くんだろう？ そつちに集中してくれ〉

友人からの申し出はありがたいが、リボンスはそれを丁重に断つた。

ノブレス率いるチーム・トリニティ、及びその支援艦・カテドラルは〃次の大仕事〃の下準備をしている真つ最中だ。余計な気を遣わせるわけにはいかないだろう。メンテナンスに関するデータが手に入っただけでも十分な成果なのだから。

彼らの〃次の目的地〃——中東各地に点在させていた施設の親機になる形で建設されたばかりの、アザディスタン内で一番大きなネットワーク関連施設——は、中東のマザーネットワークの統括を担当している親機であり、マザーネットワークを形成する子機でもある。

〃廃棄された施設に点在する予備用の子機より重要度が高い〃ということもあつて、連邦軍の守りは勿論、統括役を担っている子機本

体も堅牢であることは間違いない。予備用の子機を守っていた戦力を上回っているのは当然のことであろう。

ノブレスはリボنزの気遣いを受け取ってくれたらしい。彼が苦笑しつつも礼を述べた姿を《見て》、リボنزは小さく笑った。

世界は相変わらず混沌としていて不透明だけれど、希望を信じられる理由は確かに息づいている。それを絶やすことなく次に繋げるのが自分たちの役目だ。

（——え？）

そんなことを考えた直後、リボنزの背中に悪寒が走った。

脳裏にフラッシュバックしたのは、いつかの昔、ベルフトウーロが見せてくれた地獄絵図。

惑星破壊兵器メギドの砲撃^火が、彼女の故郷・ナスカ目掛けて降り注いだときのもの。

フラッシュバックした光景の意味を問いかけるよりも先に、ノブレスやフェニックスの思念波越しに何かが《見える》方が早かった。

カテドラルのブリッジからはスィール王国の全景を臨むことができる。丁度その真上から、白い光が降り注いだのだ。それは凄まじい熱量と轟音を伴い炸裂する。光が晴れた先に——スィール王国の姿はない。焦土と化した街だけが一面に広がっていた。

混乱、恐怖、困惑——数多の感情が思念波越しから飛び交うのを《感じた》リボنزは眦を吊り上げる。嘗てベルフトウーロが《視せて》くれたメギドと比べれば威力も範囲も何もかもが劣るけれど、『連邦政府の体制を受け入れられない、或いは体制に合わない命を対象にした殺戮兵器』であることは揺るぎないからだ。

〈あの熱源反応、出所は軌道エレベーターの低軌道ステーション・オービタルリング付近だ！〉

〈条件に合致する兵器なんて、ついさつき話してたメモントモリ以外あり得ませんね！〉

へ幾ら何でもタイムリー過ぎるだろう!!」

“反連邦を掲げる国を標的にして、メメントモリのお披露目をする”
“——つい十数分前にフェニックスが教えてくれた情報が現実になっちゃった。事実上の後手に回ったことを悟り、3人は頭を抱える。——世界は未だ、刃金蒼海の掌の上にあるらしい。”